戦国異伝

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦国異伝

【Ｎコード】
Ｎ３９４４Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
うつけと呼ばれながらも周囲にその恐ろしいまでの才覚を知られていく織田信長。その彼の天下布武の前に立ちはだかる武田信玄、上杉謙信等強敵達との戦い、そして彼を闇から葬らんとする者達は誰なのか。織田信長を主人公とした戦国戦記ものです。

第一話　うつけ生まれるその一

天文三年にだ。生まれた。
「おお、遂に生まれたか」
「はい、左様です」
厳しい顔の大柄の男に対してだ。その前に控える草色の服を着て冠を丁寧に被った口髭の男が上奏していた。
「お世継ぎです」
「ふむ、それはいい」
大柄な男はだ。世継ぎと聞いてさらに喜ぶのだった。
「最初の子が正室の子でしかも世継ぎとはな」
「まことにいいことですね」
「うむ、そしてだが」
「そして？」
「まずはその子を見よう」
彼は言うのだった。見れば着ている服は質素で今にも鎧を着そうである。大柄な身体に厳しい顔にそれは実に似合いそうである。
「わしの最初の子をな」
「殿御自らですね」
「この信秀自ら見ようぞ」
彼は豪快に笑って言った。その口髭が大きく揺れ動く。
「それではな」
「はい、それでは」
「そして政秀」
信秀という男はここで前に控えるその口髭の男の名も呼んだ。
「それでだが」

「はい、それで」
「その世継ぎの教育役は御主がせよ」
「私がですか」
「そうだ、御主がだ」
こう政秀に言うのである。
「よいな」
「は、はい」
政秀は主君信秀の言葉を受けてだ。まずは畏まって述べた。
「その役目謹んで御受けします」
「しかと育てあげてくれ。そうじゃ」
「はい」
「名前も決めよう」
その名のことも考えるのだった。
「まずは顔を見てな」
「ではその様に」
こう話してだった。信秀はその我が子の顔を見た。それはどちらかというと母に似て細面の顔であった。そして名前を吉法師としたのだった。
この吉法師は生まれてからだ。早速騒ぎを起こした。
「それはまことか」
「はい」
政秀は信秀に報告していた。
「乳母の乳を噛み切ります」
「まだ生えたばかりだというのにか」
「それでもでございます」
「いや、そんな赤子は聞いたことがない」
信秀もそれを聞いて驚きを隠せなかった。
「生まれてすぐに。しかも歯が生えたばかりでか」
「しかもかなりの」
「暴れん坊か」

「御言葉ですが」
それもあるというのだ。
「抱いてもその傍から動かれます」
「ふむ、それはまたかなり元気がいいな」
「それでどう致しましょうか」
「乳母を捜せ」
信秀は命じた。
「心根の優しい乳母をじゃ。すぐに捜せ」
「はい、それでは」
「必ず誰かいる筈じゃ」
信秀はまた言った。
「あれを任せられる乳母がな」
「それでは」
こうしてであった。摂津かの豪族池田恒利の妻に白羽の矢が立てられたのだった。信秀はここで一つの断を下したのであった。

第一話　うつけ生まれるその二

「その池田氏を尾張に招け」
「我等の下にですか」
「そうだ、家臣に迎えるのだ」
そうせよというのである。
「今は少しでも人が必要だ。だからじゃ」
「はい、それでは」
「まずは御主がおる」
信秀はここでもまず政秀を見て述べた。
「しかしまだ人は必要じゃ」
「吉法師様の為にも」
「今からこれだけ暴れておるのじゃ」
このことも話すのだった。
「若しかすると大物になるかも知れん」
「この尾張を統一ですか」
「いや、上じゃ」
信秀は笑って言った。
「さらに上じゃ」
「上といいますと」
「尾張一国よりさらに上にいくかも知れん」
吉法師をこう評したのである。
「若しかしたらな」
「そしてその為にですね」
「うむ、人が必要じゃ」
これが信秀の考えであった。
「わかったな。さすればじゃ」
「はい、それでは」
こうしてだった。その池田氏は一族単位で信秀の家臣となった。

またその妻は心の優しい者で信長を確かに育てた。そうしてであった。

信秀は織田氏の中で頭角を表していき勢力を次々と拡げていった。やがて尾張のかなりの部分を領有し領土も人材も尾張では傑出したものになっていた。

そしてだ。それと共にだ。

吉法師には弟や妹達が次々とできた。そして彼も成長していった。だがその日頃の行いはだ。守役の政秀をして困惑させるものであった。

「また馬ですか」

「うむ、悪いか」

「馬も宜しいですが」

その吉法師に対して困惑した顔で言うのであった。

「乗り方があまりにも」

「悪いというのか？」

「あまりにも無作法に速く駆け過ぎです」

これが彼の言葉だ。

「それでは。将来殿として立たれるには」

「爺、馬は何の為にある」

しかしここで彼は言うのだった。その甲高い声でだ。

「何の為にある」

「当然戦場で乗る為です」

「戦場で敵から逃げる時に最も大事なものだな」

「はい」

「ならば速く駆けなくてどうする」

彼は厳しい顔で政秀に問う。

「そうであろう。馬をのろのろと駆けさせても何にもならん」

「だからですか」

「そうじゃ。馬は速く駆けてこそじゃ」

こう言うのであった。

「それでこそじゃ」
「それはそうですが」
「水練も同じじゃ」
吉法師は水練についても言った。彼は馬だけでなくそれも毎日していたのだ。
「逃げる時は常に一人ぞ」
「一人だからですか」
「だからじゃ。速く長く進めなくてどうするのじゃ」
さらに言葉を続けてきた。
「だからじゃ。わしはこのやり方を変えぬぞ」
「怪我をされたら大変です」
「怪我？馬鹿を言え」
この注意には笑って返すのであった。
「怪我をして死ねばそれまでじゃ」
「またその様なことを」
「人は必ず死ぬものぞ」
子供でありながらだ。笑ってこう言ってみせたのである。

第一話　うつけ生まれるその三

「必ずな。さすればじゃ」
「死なれてもいいのですか」
「必死に生きる。しかしそれでも死ねばわしはそれまでの者ということではないか」
「ではそれでもですか」
「わしは生きる為に無茶をやるのじゃ」
「吉法師様、それはです」
まだ幼い主の言葉を聞いてだ。政秀の顔が強張った。そのうえで言うのだった。
「あまりにも愚かです」
「わしを愚かというか」
「はい、生きるならば慎重にならなければなりません」
これは彼の考えでもある。それを主に言うのである。
「何があろうともです」
「慎重であっても時としてそれが穴になる」
しかしだ。吉法師はこう返す。
「それならば無茶をして横紙破りにして生きる」
「そうされるというのですか」
「そうだ」
吉法師も言い切る。
「わしはそうして生きる」
「ですからそれはなりません」
「では爺、聞くぞ」
「はい」
「天下を制するのに何が必要か」
まだ幼い。しかしそれを問うのであった。
「それは何か」

「それはでございますか」
「そうだ、それは何だ」
政秀を見据えてだ。そのうえでの問いであった。
「それは何だ」
「決まっています。慎重さです」
政秀はあくまでこう主張する。天下という言葉に何を言っているのかと思いながら。何しろ信秀もまた尾張一国すら統一していないからだ。
「それです」
「つまり定石を守れというのだな」
「その通りです。基本を忘れてはなりません」
「それでは精々尾張一国だな」
吉法師はこう言って政秀の言葉を否定したのだった。
「新しい政と武器が必要だ」
「新しい、ですか。では見せてもらいましょうか」
半ば売り言葉に買い言葉になっていた。だがそれでも政秀は言った。
「是非共」
「言ったな。ではわしは見せるぞ」
「ええ、どうぞ見せてもらいましょう」
「わしは天下を制する、必ずな」
それを幼い時に言ったのだった。赤い紐を使った乱暴な茶筅髷の姿でだ。湯帷子の袖は片方をわざと外しそのうえで引っ掛け半袴である。しかも腰には火打石の袋に草履をぶら下げ朱色の鞘の太刀を持っている。それは最早大名の息子、しかも跡継ぎの服ではなかった。
彼は学問を習う為に寺に通った。しかしそこでもだ。
字を習うのはなおざりで悪さばかりしていた。これには寺の僧達も驚いた。
「何と、あれが弾正様の御子か」

「何という悪童か」
「全くだ」
こう言ってそれぞれ言うのだった。
「歩きながら餅や柿を食うわ」
「それに鮒を釣ってそれを膾にして食う」
自ら作ってである。
「しかも皿は蕗の葉ぞ」
「葉を皿にするなぞ大名の跡継ぎではないぞ」
「しかも寺の子の飯を取って食う」
「馬の乗り方も乱暴だ」
「何かというと泳いでばかりじゃ」
こんな有様であった。
「いや、とんでもないうつけ殿じゃ」
「全くじゃ」
「何処の悪党じゃ」
「ふむ、悪党か」
しかしそれを聞いた住職はだ。静かに言うのであった。
「そうじゃな。ばさらじゃな」
「ばさらですね」
「全くです」
「そうじゃ、ばさらじゃ」
他の僧達は否定的だった。しかし住職だけは違っていた。

第一話　うつけ生まれるその四

それでだ。こう言うのであった。
「姿形ではわからん。むしろ」
「むしろ？」
「どうだというのですか？」
「字はよいではないか」
住職は今その吉法師が書いた字を見ていた。それはかなり大きく太い。そして何処か細いものも見せる、そんな文字であった。
「吉法師様の文字はな」
「そういえば字は碌に習われていないのに」
「随分と慣れておられますね」
「確かに」
僧達もその文字を見て言う。
「一体何処で習っているのでしょうか」
「しかも多くの字を知っておられますな」
「これは何故」
「あの方にはもう字を覚えるということは当然のことかも知れん」
住職はその字を見ながら話す。
「そしてじゃ」
「そして」
「どうだというのですか」
「それからじゃな。あの方は」
目が自然に温かいものになっていた。そうしてであった。
「少し見させてもらうか」
「吉法師様をですね」
「まだ結論を出すのは早い。うつけ殿ではないかも知れん」
そう話していた。しかし他国にもだ。吉法師の評判は伝わっていた。

「それはまた酷いものだな」
「全くだ」
「織田信秀も世継ぎがそれではな」
「気の毒なことだ」
「これでは後はどうとでもなるな」
中には狸の皮算用もあった。
それは信秀の耳にも入っていた。そうしてだった。
大柄な身体に厳しい、髭で覆われた顔の男に白い眉と髪の皺の深い顔の男がだ。その信秀に対して意見をするのであった。
「殿、吉法師様ですが」
「あれで宜しいのでしょうか」
やはり彼のことであった。
「あの様なご乱行を続けられて」
「それで」
「あれ位でいいのだ」
しかしであった。信秀はこう言うのであった。
「むしろな」
「いえ、それはまさか」
「そこまでは」
「長尾影虎を見よ」
信秀はここで彼の名前を出した。
「あれも子供の頃はどうしようもない悪童だったそうではないか」
「はい、それはそうですが」
「しかし」
「権六」
だがここで信秀は髭の男、柴田勝家の名前を呼んだ。
そしてもう一人、林通勝の名も。
「新五郎」
「はい」
「何でしょうか」

「その方等、吉法師をよく見ておくのだ」
こう二人に告げるのだった。
「その為にその方等を吉法師の家老とする」
「家老ですか」
「我々が」
「そうだ、平手に次ぎ牛助と並ぶのだ」
佐久間信盛のことである。今はこの二人が吉法師の家老であった。
どちらも忠義一徹の者達だ。だが信秀は彼に今時分の目の前にいる
二人も家老とするというのだ。
「よいな」
「それはいいのですが」
「しかし吉法師様は」
「だからまたわかる」
信秀はこう言う。今は。

第一話　うつけ生まれるその五

「またな」
「またとは」
「しかしその前に織田家は」
「むしろあれは織田家を恐ろしい場所に高めるぞ」
信秀は今度は不敵な笑みを浮かべて述べた。
そうしてだ。信秀は二人もこうも言った。
「その方等勘十郎の方がいいと思うておるな」
「いえ、それは」
「その様なことは」
「よい。わかっておる」
二人は本音を必死に隠そうとした。しかしそれは既に見抜かれていた。だが信秀は今はそれを咎めずにだ。また言ってきたのだった。
「それはな」
「・・・・・・・・・」
二人は沈黙してしまった。だがここで信秀はその吉法師以外の子のことも話した。
「あれは出来物だが主の器ではないのだ」
「主の器ではない」
「左様ですか」
「宰相の器だ」
それだというのである。
「主ではない」
「そうなのですか」
「勘十郎様は」
「そうだ、しかし吉法師は主の器」
また吉法師について話した。
「それもやがてわかる」

「だといいのですが」
「それも」
「やがてあれの周りには人が集まって来る」
信秀は笑っていた。不敵なまでの笑みを浮かべている。
「そして天下を制するであろう。少なくとも甲斐の武田や越後の長尾を超えるな」
「あの二人をですか」
「虎に龍を」
二人も武田晴信、そして先の長尾影虎のことはよく聞いていた。今急激に勢力を伸ばし戦に勝ち続けている。その者達を超えると言われたのだ。
しかもそれがあのうつけと言われる吉法師だ。驚くのも無理はなかった。
「超えますか」
「まことに」
「駿河の今川や美濃の斉藤なぞものともせぬだろう」
今信秀が実際に干戈を交えている相手だ。どちらも厄介な相手だ。
「必ずそうなる」
「ではそれを見よと」
「我等に」
「そうだ、見る」
信秀はまた言った。
「それは言っておこう」
「ではその言葉しかと受けました」
「それでは」
柴田も林もだった。遂に主の言葉に頷いた。
そうしてだった。また言った。
「是非見させてもらいます」
「吉法師様を」
「うむ、癇の強い者だがそれも見るのだ」

既に信長の癇の強さも知られていた。気の短さにおいてもよく知られるようになっていたのである。その極端な性格もである。

「わかったな」

「では我等は今より」

「吉法師様の家老となりましょう」

こうして二人は吉法師の家老となったのだった。

だが吉法師の格好も行いも全く変わらない。相変わらず無作法極まりない仕草で町を練り歩き乱暴に馬を乗り水練を行う。その中でだ。

まずは柴田が気付いたのだった。それを老練な、深い皺の顔の男に言うのだった。佐久間信盛である。

「吉法師様だが」

「うむ、どうなのだ？」

「どの様な馬でも乗られ水練も見事だ」

まずはこの二つを話すのだった。

「どちらも速くしかも上手い」

「乱暴であってもか」

「確かに戦場ではそうそう穏やかにやっていられぬ」

柴田はこれまで多くの戦いを経てきた。それでそうしたことはすぐにわかるようになっていたのだ。

第一話　うつけ生まれるその六

「それを考えればあれで正解だ」
「左様か」
「うむ、そして」
「そして？」
「よく弓に槍をやっておられるな」
柴田が次に指摘したのはこのことだった。
「どちらも刀よりも好まれているな」
「そういえば刀もやられるがその二つの方がずっと多いな」
「そうだ、実践では槍や弓の方がいい」
これも戦場で知ったことである。
「刀なぞあまり使わぬ」
「その通りだな。では吉法師様は正しいのか」
「戦のことをよくわかっておられるようだ」
また話すのだった。
「どうやらな」
「それではこれからは期待できるか」
「少なくともうつけ殿などではない」
それがわかった。実によくだ。
「それは確かだ」
「ではこれからは」
「吉法師様にお仕えする。心よりな」
柴田は今こう誓ったのだった。信長の忠臣がまた一人生まれた。
そして林もだ。ふと信長の部屋を入ってだ。
「ううむ、これは」
「如何した？」
そこに彼の弟である林通具が来た。そのうえで唸る林に問うた。
「兄上、何かおありか」

「これは驚いた」
林は袖の中で腕を組んでだ。こうその弟に告げた。
そしてだ。部屋の中にある書を指差すのだった。そこには無数の書があった。
「これは」
「吉法師様の書だな」
「そうとしか思えぬな」
通具も真剣な顔で応える。
「ここは吉法師様のお部屋だからな」
「そうじゃな。しかし」
林はここであらためてその多くの書を見た。そこには様々な中国の古典や本朝の書があった。孫子や呉氏等兵法書だけではなくだ。
論語や孟子、荀子、それに老子や荘子もあった。他には韓非子に春秋といったものもある。史記や漢書もある。そして本朝の書もである。
「平家物語があるな」
「これは日本書紀だな」
「こうした書を読まれているのか」
「うむ、間違いない」
林は確かな顔で頷いた。
「そうでなければここに置かれてはいない」
「では吉法師様は学ばれているのか」
「その通りだ。どうやらあの方は只のうつけではない」
「ではうつけというのは」
「行いだけでわかるものではないな」
このことを林自身も今ようやくわかったのである。
「信秀様はそこまで御存知だったか」
「ではどうするのだ？兄者は」
「吉法師様と共に歩む」
そうするというのだった。

「あの方はうつけなどではない。将来間違いなく大器となられる」
「そうだな。それではだ」
「我等はあの方に生涯誠心誠意を以てお仕えするぞ」
「うむ、わかった」
二人も今それを決意したのだった。吉法師の周りに既に彼に心から忠義を誓う有能な臣下達が集まろうとしていた。しかし当の吉法師はそのことに気付く素振りも見せなかった。
相変わらず馬や水練に興じている。そればかりであった。たまりかねた政秀が諫言をしても聞く耳なぞ持たない、まさにそんな有様であった。
「全く。信長様は」
「平手殿は気付いておらぬのか」
「あれで頑固な方だからな」
「しかもじゃ」
柴田に佐久間、それに林はそんな政秀を見て言うのだった。
「どうも吉法師様は平手殿には頑なじゃな」
「確かにな」
「殊更にな」
吉法師のその行動に気付いたのである。
「どうも平手殿にはとりわけ御自身を見せようとされぬ」
「それが何故かわからぬがのう」
「何故じゃ？」
三人は話をしながらそれぞれ首を傾げさせる。
「何故平手殿にはとりわけ」
「そうじゃな。平手殿は決して裏切らぬ方」
「忠義では誰にも負けぬ」
政秀はそうした男だった。織田家への忠義はまさに鋼の如しでありそれが揺らぐことはない。戦よりも政の方に向いている男だがそれだけに普段は誰よりも頼りになる。

第一話　うつけ生まれるその七

しかし吉法師はだ。その彼にはとりわけ頑なであったのだ。
「平手殿がお嫌いなのか？」
「いや、どうもそうではないらしい」
「それは違うのだな」
三人はここで吉法師の政秀への感情も推察した。
「どうやら」
「違うな」
「そうなのか」
「うむ、どうやらだ」
林だった。彼が他の二人に述べていた。
「吉法師様はとかく癇の強い方だな」
「ご気性はかなり荒いな」
「刀を振るわれることも多い」
まだ幼いというのにだ。吉法師のその気性の荒さはよく知られるようになっていたのだ。実際に刀を振るってそれで罪人を成敗したことすらあった。
「嫌いな者には声さえかけぬ」
「悪者を手打ちにしたことすらあった」
「さすれば」
「しかし平手殿には違う」
林はまたこのことを指摘したのだった。
「政のことでも問うことがあるな」
「そして戦では信秀様だな」
「どちらかだな」
「左様、吉法師様はとかく難しい方」
指摘されるのはこのこともだった。
「その様な方があそこまで問われる」

「御父上であられる信秀様に対してと同じ」
「さすれば」
「そうじゃ、信じておられる」
これは間違いないというのである。
「平手殿をな」
「それであの御様子というのは解せぬな」
「全くだ」
柴田も佐久間もこのことには首を傾げるばかりだった。
「わからぬところの多い方だが」
「何を考えておられるのか」
「しかし平手殿を頼りにされているのは確かだ」
林はそれは間違いないというのだった。
「それはだ」
「ううむ、我等とて吉法師様はまだわからぬところの多い方」
「さすればここは」
「見させてもらおう」
これが林の出した結論だった。
「今はな。そうするしかあるまい」
「そうだな、今はな」
「時もあるしな」
こう話してだった。三人は今は様子を見ることになった。そして吉法師は寺で学んだ後は戦の真似事をして遊ぶようになった。その時であった。
ここには彼の弟である勘十郎も来ていた。彼は常に身なりを正しくしていて穏やかだった。まるで夜盗の如き身なりの兄と違いその評判はよかった。
「いや、見事な方じゃ」
「うむ、よく学ばれるしのう」
「しかも馬の乗り方もよい」
「字もよく書かれる」

民はこう言ってむしろ彼の方を敬愛していた。しかし当の勘十郎はある時兄にふと声をかけられたのであった。

「勘十郎、そなた戦を学んだことはあるか」

「兵法の書なら幾冊か」

彼はこう兄に答えた。

「読んでおりますが」

「それはいいとしよう」

吉法師は兵法の書を読んでいることはいいとした。しかしここでこうも言うのであった。

「しかしだ」

「しかし？」

「それだけでは駄目だ」

こう言うのであった。

「それだけでは基礎を固めただけじゃ。土台に過ぎぬ」

「土台ですか」

「土台からさらに城を築く」

「城をというと」

「来るのじゃ」

また弟に告げた。

第一話　うつけ生まれるその八

「今からのう」
「？兄上、一体」
「いいから来るのだ」
吉法師はあくまで弟に対して言う。
「よいな」
「来いと言われれば参りますが」
勘十郎は素直だった。だからこそ兄の言葉にも頷くのだった。
「では」
「勘十郎、一つ言っておく」
吉法師はその素直な弟にまた継げたのだった。
「御主の素直なことはよいことだ」
「有り難き御言葉」
「しかしそれでも疑うべき相手は疑え」
「疑うべき相手はですか」
「戦国の世じゃ。どういった輩がおるかわからん」
こう言うのだった。
「そうでなくとも世の中には様々な者がおるのだからな」
「それは承知していますが」
「承知しているなら気をつけることじゃ。よいか」
言葉が少しきつくなった。そのうえでさらに告げるのだった。
「権六や新五郎の様な相手を認めればそれで忠義一徹できてくれる者ばかりではないのだぞ」
「そして政秀や牛助の様にひたすら忠義を示してくれる者もですか」
「世の中そうした者ばかりではない」
まだ幼いというのにだ。吉法師はこのことを本能的に理解していたのである。そうしてそのうえで弟に対して話すのである。
「そなたはわしが尾張の主となりさらにあがっていくのにわしの補

佐になるのだぞ」
「兄上の補佐に」
「時としてわしの名代になってもらう」
こうしたことも告げるのだった。
「その御主がよからぬ者に騙されては困る」
「はい」
「人はよく見よ」
あらためて勘十郎に告げる。
「よいな」
「その言葉肝に命じておきます」
「しかとな。さすれば来い」
「そこにですね」
こうしたやり取りの後で兄に連れて来られた場所はというとだった。そこは広場であり周りにはススキの草が生い茂っている。そして子供達が大勢集まっていた。
「この者達は」
「これから戦遊びをやる」
吉法師はその子供達を見ていぶかしむ弟に話した。
「ここでだ」
「ここでなのですか」
「そうだ、ここでだ」
信長はまた話した。
「わかったな」
「戦遊びとは」
「そなたは見ておくのだ」
「戦わずともいいのですか」
「今は見ておれ」
また弟に告げた。
「よいな」
「それだけでよいのですか」

「今はだ。それだけでよい」
「左様ですか。それでは」
「うむ、よくな」
こうして勘十郎の目の前でその戦遊びがはじまった。吉法師は一方の大将になった。その時にまずは力の強そうな者を何人か己の前に呼んだ。
そのうえでだ。銭を出してだ。それを彼等にやった。
「これは」
「吉法師様、いいのですか？」
「勝ったらまたやる」
吉法師は驚く彼等にこう告げた。
「勝てばだ」
「勝てばまたくれるんですか」
「本当ですね」
「嘘は言わん」
それも保障するのだった。
「そういうことじゃ。わかったな」
「はい、それじゃあ」
「勝ちますから」
「ではな。かかるぞ」
こうしてその強そうな子供達に銭をやってからだった。そのうえで戦遊びをはじめるのだった。そして吉法師はまた動いたのだった。

第一話　うつけ生まれるその九

「御前等はススキの中に隠れろ」
何人かにこう命じたのだった。
「よいな」
「ススキの中にですか」
「そこに」
「そうだ、そこに隠れろ」
前で主力が長い棒の槍を振るっている後ろで命じていた。
「よいな。そしてわしが合図をすればじゃ」
「その時はどうされよというのですか」
「一体」
「敵の横から出て襲え」
そうせよというのだった。
「わかったな」
「はい、それじゃあ」
「そうします」
「そうするがいい。それではじゃ」
こうしてだった。その者達を隠れさせたのだった。そして戦の場ではだった。既に先に銭をやった子供達が力を奮って暴れていた。
「勝てばまた貰えるからな」
「ここは頑張るか」
「ああ！」
こう話してだった。果敢に戦う。その者達の活躍が吉法師の側を優勢にしていた
そのまま向かう時にだった。信長はさらに命じた。
「今だ！」
「むっ！？」
見ている勘十郎が声をあげたその時だった。ススキの中からだ。

何人か出て来てだ。そのうえで敵に横から襲い掛かったのである。
「な、何だ!?」
「伏兵か!」
「急に出て来たぞ!」
「よし、勝ちじゃ!」
吉法師はその伏兵が襲い掛かったところで叫んだ。
「皆の衆、突撃じゃ!勝てば褒美があるぞ!」
「何っ、褒美!?」
「それが!?」
「そうじゃ、それがあるぞ!」
自ら棒の槍を手に敵に向かいながらの言葉だった。
「それが欲しくば戦うがいい!」
「わかりました!」
「それならば!」
こうしてだった。戦いは吉法師達の勝利に終わったのだった。
そうして吉法師は己の軍全員にだ。約束通り銭をやったのだった。
「皆の衆よくやったな」
「はい、有り難うございます」
「褒美まで貰えるとは」
「勝てば褒美があるのは当然のことじゃ」
吉法師は平然と話した。
「だからじゃ」
「勝てば貰えるんですか」
「褒美が」
「これからも同じぞ」
吉法師は銭をやりながらまた話す。
「わかったな」
「勝ったら褒美か」
「これはいい」
「絶対に次も勝つぞ」

「ああ、そうだよな」
子供達は喜んでこう話すのだった。彼等は吉法師の褒美を心から喜んでいた。そして勘十郎はそのはじまりから終わりまで全て見て言うのだった。
「お見事です」
「こうでなくてはいかんのだ」
「人に褒美をやることですか」
「人はただやれというだけでは動かんものだ」
吉法師は帰る時に話していた。二人共馬に乗りそのうえで話している。
「ああしてだ。褒美をやってこそだ」
「そのうえで動くのですか」
「それが結果として人をついてこさせる」
こうも話した。

第一話　うつけ生まれるその十

「わかったな」
「わかりました。とはいっても」
「とはいっても？」
「難しいものでございますな」
勘十郎は少し俯いて考える顔になって述べた。
「これはまた実に」
「うむ、難しい」
吉法師は前を向いていた。そしてそのうえで弟に告げた。
「このことは確かに難しいことだ」
「はい」
「こうして褒美をやっても些細な落ち度で人は離れるものだ」
「些細な、ですか」
「褒美で動かん者もおる」
吉法師はこのこともはなした。
「そうした者もおるのだ」
「褒美をやってもですか」
「それは人それぞれじゃ。それならばじゃ」
「それならば？」
「その者の欲しいものをやり見たいものを見せてやるのじゃ」
「見たいものをですか」
「それを見抜くことも大事なのじゃ」
吉法師はまた弟に話した。
「そのこともじゃ」
「人をですか」
「勘十郎、人を疑うことも覚えよ」
先程の話になっていた。それをあえてまたしてみせたのだ。
「怪しい者は断じて近付けるな」

「断じて、ですか」
「そなたは織田の家が欲しいか」
このこともまた問うた。
「織田の家は。どうじゃ」
「織田の家をですか」
「欲しいのなら手に入れろ。わしを倒してな」
「欲しいとは思いませぬ」
素直にありのまま答えた言葉だった。
「それは別に」
「欲しゅうないか」
「私は主に向いていないでしょう」
これは自分でもおおよそわかっていた。だからこその言葉だった。
「ですから」
「織田の家は欲しくないか」
「私は主よりもその傍にいるべきなのでしょう」
「そうじゃな。御主はその方がしっくりと来る」
「はい、ですから」
「それでも人を見る目は持っておけ」
再度弟に対して告げた。
「わしの傍らにおるのなら余計にだ」
「左様ですか」
「わかれば今はしかと磨くのじゃ」
「人を見る目をですね」
「そうじゃ、磨け」
また弟に対して話す。彼にあくまでそうしてもらう為に。
「それを見極めるのじゃ。よいな」
「わかりました、ではよく」
「人の欲するものを与え見せる」
このことも再び話した。
「よいな、よくじゃ」

「銭ばかりとは限らないのですね」
「銭の他にも色々なものがある。見極めるのじゃ」
「ではその様に」
「天下を目指すぞ」
吉法師は今は上を見ていた。そうしてそのうえで話した。
「尾張だけではないぞ」
「天下をですか」
「そなたも共に来るのだ、よいな」
「天下と言われましても」
「ははは、大きいか？」
弟に顔を向けてきた。そうして話したのだ。
「それは」
「はい、大き過ぎて私にはどうも」
「しかしまことじゃ。尾張だけではないぞ」
彼はまた言ってみせた。

第一話　うつけ生まれるその十一

「天下をわしのものにしこの世に平安楽土を築くぞ」
「平安楽土を」
「民が安心して明るく過ごせる国を築く。よいな」
「それでしたら」
「そなたは民が好きじゃな」
「むしろ戦より民の笑顔の方が好きです」
この言葉にも偽りがなかった。それを隠さなかった。
「ですから」
「わしもじゃ」
それは彼もだというのだ。吉法師もだ。
「わしは戦う。しかしそれ以上に民に対して政を行うぞ」
「そちらの方がお好きなのですね」
「戦の後に政がある。そういうことじゃ」
こう話してそのうえで先に進む。彼はまだ幼いながらもそれでも遥かな先を見据えていたのである。
そしてその頃。三河では。
一人の子供がだ。何処かへと連れて行かれていた。
「このまま駿河へ行くのだな」
「いえ、尾張です」
かごの外からだ。こう告げられた。
「そこにです」
「何っ、話が違うではないか」
「はい、突如として変わりました」
外から聞こえる声はあくまでこう話す。
「ですから」
「馬鹿な、それでは今川はどうなる」
子供にもわかることだった。咎める声で外に問う。

「義元殿が怒られるぞ」
「そのことについてはお気遣いなく」
しかし外の声は落ち着き払ってこう述べてきた。
「既に手は打ってあります」
「その言葉、信じよというのか」
「是非」
こう答えてきた。
「御願いします」
「ではそうしよう。それではじゃ」
「はい、尾張の織田信秀殿のところへ」
「参るとしよう」
こう言ってであった。子供は尾張に向かった。幼い顔に小さな身体、そしてあどけない顔をしている。松平竹千代、今運命の中に身を置くことになった。
美濃は尾張の北にある。その中心である稲葉山城においてだ。その頭を剃髪した鋭い目を持ち険阻と言っていい顔をした男が南を見て呟いていた。
「尾張におおうつけがおるらしいの」
「はい、織田弾正忠の嫡男です」
「名を吉法師といいます」
こう家臣達に告げられる。
「何でも出鱈目な格好をしていてしかもその行いも酷いものだとか」
「ふむ。そこまでか」
「はい、酷いものだそうです」
また話す彼等だった。
「まことのおおうつけだとか」
「家臣達も手がつけられないとか」
「ふむ、そうか」
そこまで聞いてだ。道三は言った。
「さすればそのうつけに一度会ってみたいものだな」

「会われるというのですか？」
「またどうして」
「わしもまた若い頃は色々とやったものじゃ」
一介の油売りから国を奪い今に至る。戦国の梟雄として有名な男だ。
「さすればだ」
「会ってそのうえで」
「始末されると」
「それも考えている」
そうだというのだった。
「それでどうだ」
「わかりました、それでは」
「一度会われるのもいいかと」
「そうだな。それではだ」
「はい、それでは」
「手配しておきますか」
「いや」
しかしであった。ここで道三は言った。

第一話　うつけ生まれるその十二

「それよりもだ」
「それよりもといいますと」
「一体何を」
「帰蝶を呼べ」
道三は今度はこう命じたのである。
「よいな、帰蝶をだ」
「帰蝶様をですか」
「呼ばれるというのですか」
「そうだ、呼ぶのだ」
彼はまた言った。
「わかったな」
「はい、それでは」
「すぐに」
こうしてであった。すぐに白地に濃い青と紫の蝶を飾った服を着た黒髪の少女が連れて来られた。細面に透き通るような白い肌、黒く美しい髪は膝のところまであり切れ長の目からは強く奇麗な光が放たれている。眉は所謂柳眉であり整っている。小さな唇は紅の色をしている。その彼女が連れて来られたのだ。
そのうえで道三に対して一礼する。そうして言うのだった。
「父上、帰蝶只今参りました」
「うむ」
道三は娘に対して頷いた。
「よくぞ来た」
「そして何の御用でしょうか」
「そなたにこれをやろう」
こう言ってだ。娘にあるものを出してきた。
見ればそれは刀だった。それを娘に差し出して言うのである。

「これを持っておれ」
「身を守る為でしょうか」
「いや、違う」
そうではないというのだ。
「この刀で夫を守れ。そして」
「そして？」
「守るに値しないならば斬れ」
こう告げたのだ。
「よいな、斬れ」
「我が夫となる者をですか」
「そうだ。その時は斬れ」
道三はまた娘に告げた。
「わかったな」
「わかりました。しかし」
「しかし？何だ？」
「この刀、我が夫を守る為だけではなく」
こう前置きしてからの言葉だった。
「父上を斬るやも知れません」
「わしをか」
「はい、父上をです」
こう言うのである。
「我が夫が父上と戦うのならばです」
「面白いことを言う」
道三はそれを聞いてだ。何と不敵に笑ってみせたのである。
「それはまた」
「面白いというのですか」
「流石はわしの娘だ」
その顔で娘を見ながらの言葉だった。
「では。その時はだ」
「はい、その時は」

「やってみせるがいい」
叱らなかった。逆に認めていた。
「それではな」
「はい、それではその時は」
「どうやらうつけは美濃にもおったわ」
道三は楽しそうに言う。
「うつけにうつけか。面白い組み合わせじゃな」
「そういえば尾張には大層なうつけ殿がいるとか」
「そなたと同じよ。天下屈指のうつけじゃ」
「屈指のですか」
「それだけに合うやもな。それにじゃ」
道三は今度はこんなことも言ってみせた。
「わしもうつけよ。うつけにはうつけが集まるのじゃろうな」
「では私はやがて」
「嫁ぎ先は決めておる」
また娘を見ての言葉だった。
「もうじゃ」
「では尾張に」
「ほう、わかるか」
「御言葉ですが」
わかるというのだった。
「それはもう」
「鋭いのう。どうやらわしに一番似たようじゃな」
また娘を見ての言葉だった。
「末の子で娘じゃというのに」
「ですが父上の娘でございます」
「言いよる。しかしそれでいいのじゃ」
いいと言ってであった。そうしてであった。
「それでな。では尾張に行け」
「はい」

「そしてその刀を持つのじゃ」
「畏まりました」
「この歳になって面白いものを見られる」
さらに笑っていた。面白げに。
「どうやらな」
「それでは。その時に」
「天下が動くか」
道三はまたふと言った。
「もしや、な」
蒼天は今は穏やかだった。だがそれが何時までも続くものではないのは誰もが知っているものだった。そしてその変わる時が来ようとしていた。

第一話　完

２０１０・６・１９

第二話　群星集まるその一

第二話　群星集まる

駿河に一人の高僧がいた。

見事な法衣に袈裟を身に着け厳しいが決して卑しい顔をしてはいない。その僧侶の名を太源雪斎という。駿河を治める今川家に仕える僧侶であるがそれと共に政治を司り軍師でもある。また戦においては自ら法衣の上に鎧を着てそのうえで戦う。今川家の主義元の無二の腹心にして頼りになる相談役だ。政治や軍事だけでなく教養もかなりのものだが仏典や古典だけでなく昨今伝わりだしている茶道にも通じている。その彼が満天の夜空を見上げていた。

その彼にだ。弟子の僧が問うた。

「お師匠様、どうされたのですか？」

「ふむ、天じゃが」

「天ですか？」

「一際大きな星が出て来ておる」

夜空を見上げながらこう言うのである。

「大きなな」

「星がですか」

「うむ、それが出て来ておる」

また弟子に対して述べた。

「今な」

「それは一体どういった星ですか？」

「将星じゃ」

それだというのだ。

「そしてその星の周りに多くの星が集まってきておる」

「その星だけではありませんか」

「あの様に大きく、しかも強く輝く星を見たことがない」

雪斎は無意識のうちにその言葉を震わせていた。

「そしてあれだけ多くの星が集まるものじゃ」
「何かが動きますか」
「間違いない」
彼は断言した。
「ただ、あの星はじゃ」
「あの星は？」
「今川のものかどうか」
彼がここで危惧するのはこのことだった。
「それが問題じゃが」
「今川の星かどうかですか」
「それが問題なのじゃがな」
それについてはだった。彼も言葉が鈍くなっていた。
そしてその鈍くなった言葉でだ。彼はそれでも言うのだった。
「ただしじゃ」
「ただし？」
「天下は間違いなく大きく動く」
このことは間違いないというのだ。
「それは間違いない」
「左様ですか」
「戦の世が終わるな」
雪斎の今の言葉には期待が込められていた。
「どうやらな」
「この戦の世がですか」
「そうじゃ、終わる」
彼は言った。
「間も無くじゃ」
「左様なのですか」
「今は信じられずともよい」
弟子の声からその考えは読み取っていた。そのうえでの言葉である。

「それはじゃ」
「左様ですか」
「そうじゃ、それでもよい。しかしじゃ」
「しかし？」
「やがてわかる」
そうだというのだった。
「やがてじゃ」
「ううむ、天下が平和になればいいのですが」
「なる。安心せよ」
雪斎は弟子のその不安は打ち消してみせた。
「それはじゃ」
「左様ですか、それでは」
「星は嘘は吐かぬ」
まだ上を見上げている。そのうえでの言葉だった。
「それもやがてわかる」
今はこう言うのだった。星も動きだしていた。そして織田家でもまた。
髷にして耳の前を伸ばした男だった。彼が今城内の己の座にいる吉法師の前にいた。政秀がその彼の名前を信長に告げた。
「滝川一益です」
「滝川というのか」
「はい」
その男からも声がしてきた。
「甲賀の出であります」
「ふむ。甲賀というとじゃ」
それを聞いてだ。吉法師はまた言った。

第二話　群星集まるその二

「忍の出じゃな」
「如何にも」
男はその通りだと答える。
「幼名は久助といいます」
「左様か」
「この度ある知り合いに言われてこちらに参りました」
「知り合いとな」
「伊勢の者でして」
滝川はここから話すのだった。
「名を九鬼嘉隆といいます」
「ふむ。九鬼というのか」
「尾張の織田家に行くべしと言われまして。何やら面白い若殿がいるとか」
「ははは、世辞はよいぞ」
吉法師は笑ってそれはいいと返した。
しかしだった。ここでまた言うのだった。
「しかしじゃ」
「しかしでございますか」
「その九鬼という者にも会っておこう」
彼は言った。
「是非にじゃ。政秀」
「はい」
「その者も呼ぶがいい」
楽しげな笑みを浮かべて政秀に告げた。
「よいな、すぐにじゃ」
「畏まりました。それでは」
「優れた者はどんどん呼べ」

吉法師はまた言った。
「そうしてじゃ。わしの下に集めるのじゃ」
「それでは今より」
「うむ。さて、それではじゃ」
吉法師は滝川をあらためて見てだ。彼に告げた。
「滝川一益よ」
「はい」
「これからは久助と呼ぶ」
笑みを浮かべて彼に言ったのである。
「それでよいな」
「はい、それでは」
「そなたは今日よりわしの家臣じゃ」
信長は微笑んで彼に告げた。
「わかったな」
「よく」
「そしてじゃ」
吉法師はその滝川にさらに言ってきた。
「その九鬼という者も連れて来るのじゃ」
「はい、それではすぐに」
「志摩ということは水軍が使える筈」
吉法師はすぐにこの結論に至っていた。
「その力思う存分使わせてもらおう」
「殿、お待ち下さい」
ここでそれまで控えていた柴田が彼に対して問うてきた。
「今水軍と仰いましたが」
「その通りだが」
吉法師は彼の言葉に平然として返してみせた。
「それがどうかしたか」
「海に出られるのですか？」
柴田は怪訝な声になっていた。

「まさかと思いますが」
「そうじゃな。海は大事なものじゃ」
信長はまずはこう述べてみせたのだった。
「それは事実じゃ」
「では伊勢でも攻められるのですか？」
「いや、それはない」
それは否定した。しかしここでは多くは語らなかった。
そのうえでだ。また言ってみせたのである。
「しかし海だけではあるまい」
「といいますと」
「一体」
柴田だけではなかった。佐久間と痩せた顔の初老の男も問うてきた。
「何を御考えでしょうか」
「よければこの森可成にお教え願いたいのですが」
「川じゃ」
それだというのだ。

第二話　群星集まるその三

「川を見るのじゃ」
「川、ですか」
「この尾張は川が多い」
それはこの通りだった。尾張はとかく川の多い国であるのだ。
「そして美濃もまた然りだな」
「といいますと」
「まさか」
「そのまさかよ。尾張の川を制しそのうえで他の織田家の者に睨みを利かす」
そこから先は言うまでもなかった。睨みを利かすだけではだ。
「そしてだ」
「そして、ですか」
「さらになのですね」
「美濃じゃ」
そこも見ていた。
「美濃を制するのにも川は必要になってくる。だからこそじゃ」
「ふむ。見事ですな」
林はそれを聞いてまずは頷いてみせた。
「川は考えませんでした。それはよいことかと」
「そして堤もじゃ」
吉法師はさらに言った。
「川の堤を築くのに水を知る者がいては好都合ではないか」
「言われてみれば確かに」
「その通りです」
林だけでなく森も答えた。
「ではそれも兼ねてですか」
「政もですか」

「堤をしかとせずして田は成り立たぬ」
それについても言ってみせた吉法師だった。
「はい、それでは」
「是非」
「ふむ。確かによいですな」
政秀も主のその考えは認めた。
「しかしですな」
「何だ、爺」
吉法師は政秀のその言葉を受けて顔を向けた。
「言いたいことがあるのか」
「はい、思いつきでそれをされたのならばまことではありません」
こう厳しい顔で言うのである。
「しかと基礎を固めたうえでなくては何でもありません」
「やれやれ、厳しいのう」
吉法師は傍らに控える彼の言葉に苦笑いで返した。
「わしとしてはいい考えだと思うのだがな」
「いいお考えではあります」
政秀もそれは認めた。しかしそれで褒める彼ではなかった。
「ですが。この後どうされるおつもりですか？」
「知れたこと、少し馬に乗って来る」
それをするというのである。
「今からな」
「それがいけませぬ。そのお姿にしても」
見れば吉法師の姿は相変わらずだった。髷は茶筅髷で紐は紅だ。
しかも豹のそれを思わせる柄の上着に半袴である。相変わらずの格好である。
「それが一国の主のお姿ですか」
「そうだが何かあるか」
「あり申す。それで主とは」
「いいではないか。とにかく政の話はこれで終わりだ」

吉法師は言い切ってみせた。
「馬に乗って来るぞ」
「いけません、まずは学問を」
「学問なぞ何時でもできる」
これを聞いて林達は内心頷いた。しかし政秀は違っていた。
その主にだ。さらに言うのである。
「それがいけません」
「やれやれ、厳しいのう」
「厳しくともです。殿はまだまだ学問が」
「ああ、わかったわかった」
右手を横に振っての言葉だった。
「ではもういいではないか」
「またその様に仰って」
「では行って来るぞ。それではな」
吉法師は話を強引に切ってだった。そのうえで今は席を立ちそのうえで馬に乗りに行くのだった。政秀はただ一人苦々しい顔をするだけだった。
滝川はここでだ。その九鬼嘉隆の所に行っていた。精悍な顔に荒々しい薄い髭を生やした男であった。
滝川は吉法師が話していたことを全て彼に話した。すると九鬼はすぐにその精悍な顔をにやりとさせてそのうえで言ったのである。

第二話　群星集まるその四

「ふむ、わかっている殿様の様だな」
「まだ元服もされていないがな」
「しかしわかっているな」
彼は満足した顔で滝川に告げた。
「よくな」
「水軍のことがか」
「それだけではない」
九鬼はこうも言ってみせた。
「水のことがよくわかっている」
「水をか」
「水軍はただ海で戦をするだけではない」
九鬼はこう滝川に放す。
「川、そして水全体を見てその中で生きるものだ」
「水全体か」
「それをわかっているとはな」
声にだ。笑みも宿っていた。
「吉法師殿、うつけではないな」
「そうじゃな、噂に聞くうつけではない」
「これは凄い方になられる」
九鬼はその笑みのまま語った。
「どうやら。わしの主に相応しいらしいな」
「では来てくれるな」
「うむ」１４
友の言葉に対して頷いてみせた。
「そうさせてもらおう」
「そうか、ではこれからも共にな」
「戦おうぞ」

二人は今度は不敵な笑みを浮かべ合った。そのうえで交えさせた言葉だった。

そうしてだ。吉法師の周りにはさらに人が集まってきていた。今度は何処か色白で頼りない顔のひょろりとした男が来たのだった。

その彼を見てだ。柴田が言った。

「五郎左ではないか」

「これは勝家殿」

「いや、権六でよい」

柴田は己の幼名を出してその男に言った。

「御主も吉法師様のところにか」

「はい、信秀様に言われまして」

吉法師の父の名を出しての言葉だった。

「それで、です」

「ふむ。信秀様にか」

「是非吉法師様にお仕えしろと。そう言われました」

柴田に五郎左と呼ばれた男はこう答えた。

「それでなのですが」

「わかった。それにしても」

「それにしても？」

「御主が来るとはな」

柴田は彼を見てこう言うのだった。

「いや、吉法師様の下には人が集まる」

「左様ですか」

「先程も二人来たばかりだ」

柴田はこんなことも話した。

「二人な」

「どういった方々ですか？」

「松井友閑殿と武井夕庵殿だ」

その二人の名前が出された。

「どちらも知っているな」

「尾張きっての知恵者の方々ですね」
「その二人が来た」
そしてだった。前からだ。佐久間によく似たいささか年長の者も来た。柴田は彼の姿を認めて満足した顔で言った。
「重盛殿もおられる」
「あの方まで、ですか」
「林殿の弟君もおられるしな。さながら梁山泊になってきたな」
「ああ、あの明の書ですね」
「そうじゃ、あれみたいになってきおったわこの那古野も」
今彼等がいるその城のことだ。吉法師は今その那古野を拠点としているのだ。
「面白くなってきおったわ」
「左様ですか、そこまで」
「うむ、では今から吉法師殿のところに参ろうぞ」
「はい、それでは」
こうしてだった。彼、丹羽長秀もまた吉法師の家臣となったのである。

第二話　群星集まるその五

多くの家臣が集まりだしていた。しかし吉法師はそのことに満足した面持ちは見せていなかった。今日もまた政の話をしていた。

「さすればです」

「ここはです」

右にいるのは白髪の太った男、左にいるのは老僧だった。吉法師は彼等の話を聞いていた。

「市に金を注ぎ込みましょう」

「そして道をよくするべきかと」

「ふむ。そうだな」

吉法師は二人の言葉に頷いていた。そうしてだった。

まずは右を見てだ。次に左を見た。そのうえで彼等に告げた。

「松井友閑」

「はい」

まずは太った男が応えた。

「武井夕庵」

「はい」

次に僧侶がだった。それぞれ応えたのであった。

「市のことはそなた達に任せた」

「わかりました」

「それでは」

「思う存分手腕を振るうがいい。そして」

これで終わりではなかった。彼は今度は頬髯の男を見てだ。また命じた。

「村井貞勝」

「はい」

「そなたは田を栄えさせるのだ」

そうしろというのだった。

「よいな」
「それがしは田をですか」
「田も市も共に欠かせぬもの」
彼は言った。
「さすればどちらも金を注ぎ込むべきだ」
「しかしです」
またここで政秀が言ってきた。
「殿、金がかかり過ぎではありませんか」
「金か」
「はい、そうです」
彼がここで言うのはこのことであった。吉法師の傍らの場所から厳かに言う。
「それがかかり過ぎるかと」
「市と田を共にしてはか」
「左様です、それでも宜しいのですか」
「よい」
しかしだった。彼はそれをよしとしたのであった。
「それでよいのじゃ」
「宜しいというのですか」
「そうじゃ、よいのじゃ」
彼はまた言ってみせた。
「それでな」
「そこまで仰るのはどうしてですか」
「池田勝正」
「はい」
ここでだ。一人の名前が呼ばれたのだった。見れば鋭利な顔をした男であった。
「そなた、金についてどう思うか」
「充分なものが出せるかと」
その男池田はこう答えたのだった。

「何も気にせず」
「いけると見るか」
「はい、しかも金が余ります」
池田はこうも述べた。
「その余った分はどうされますか」
「坂井大膳政尚」
「はい」
また一人いた。今度は何処か穏やかな面持ちの男であった。
「そなたに城壁の修復を任せた」
「この那古屋のですね」
「そうじゃ、ここのじゃ」
こう彼に命じるのであった。
「よいな、大膳」
「畏まりました」
坂井もこう答えた。

第二話　群星集まるその六

「それでは。城壁を」
「そうしてくれ。これでよいな」
「ううむ、金もあり申すか」
政秀は暫し沈黙して話を聞いていた。だがここでまた口を開いて言った。
「前まで苦労していたというのに」
「いやいや、今もないぞ」
吉法師はここでこう言うのだった。
「ある筈がなかろう」
「ないとはいいましてよ」
「要は使い方よ」
それだというのである。
「それなのじゃ」
「使い方ですか」
「爺の見たところ田と市だけで手が一杯だったな」
「むしろ大丈夫ではと思いましたが」
「そこをじゃ。この者に任せてみたのじゃ」
その池田を見ての言葉であった。
「そのうえでなのじゃ」
「池田勝政にですか」
「左様、財政ではかなり立派な者じゃ」
「恐縮です」
池田もこう述べてきた。
「吉法師様に任せて頂きまして」
「それでこうしてじゃ。城壁まで工面できた」
「しかしそれでも後はどうされるのですか？」
「安心せい、政での金は戻って来る」

心配無用というのだった。
「それも注ぎ込んだものよりずっと多くじゃ」
「だからこそ金を注ぎ込まれるのですね」
「戦をするのにもまずは金がいるな」
吉法師は既にある。このことをわかっていたのだ。
「そうだな」
「はい」
政秀は主のその言葉に頷いた。まさにその通りである。
「左様でございます」
「ならばじゃ。その金を作るものに金を注ぐのは当然じゃ」
「政あってのことだと仰るのですね」
「如何にも。それで間違っておるか」
「その通りでございます」
政秀は珍しく主のその言葉に頷いた。
「ではまずは田と市をですか」
「それと城壁じゃ」
この三つをだというのだ。そしてそれで終わりではなかった。
吉法師はさらにだ。こうも言うのであった。
「そして二郎よ」
「はっ」
九鬼だった。彼が応えた。政秀はここで彼が二郎と呼ばれたことに少し怪訝な顔になった。
「二郎といいますと」
「うむ、この者は九鬼家の次男でな。それでなのじゃ」
「それで二郎なのですか」
「左様じゃ。それでわしは二郎と呼んでおる」
そうだというのである。
「嘉隆と呼ぶよりそちらの方がしっくりきてな。それでなのじゃ」
「綽名というわけですか」
「別にそれでもよかろう」

「そこまで言いはしませぬが」
政秀もそこまで言うつもりはなかった。吉法師は家臣を幼名や綽名で呼ぶことが殆どである。しかし政秀もそこまでは言わないのだ。
そしてだ。あらためて主とその九鬼のやり取りを見る。するとだった。
「そなたは次には五郎左を助け堤を整えよ」
「堤をですね」
「左様、領地の堤を全て整えよ」
こう彼に命じたのである。
「五郎左を主としそなたを従とする」
「わかしました」
「そなたは水に詳しい。それで五郎左を助けよ」
「はっ、それでは」
「堤も整えなくてはな」
吉法師は九鬼に命じ終えた後に腕を組んで述べた。そしてまだあった。
最後にだ。政秀に顔を向けて告げた。
「政秀よ」
「はい」
「そなたは勘十郎を連れて教えてやれ。法により国の治安を整えよ」
「あの法によってですね」
「罪人は何処までも追いそのうえで始末せよ」
その言葉が厳しいものになっていた。顔もである。

第二話　群星集まるその七

「よいな、決して許すな」
「絶対にですね」
「左様、そして成敗するのだ」
そうせよというのであった。
「わかったな」
「はっ、それでは」
「さて、話はこれで終わりじゃ」
ここまで話してだ。吉法師は満足した顔で笑った。そのうえで席を立った。
政秀はその主を呼び止めた。
「お待ち下さい」
「何処に行くかか」
「左様です。どちらに行かれますか」
「人質のところに行く」
そこだというのである。
「少しな」
「竹千代殿ですか」
「三河からのひょっ子、少し会って来る」
こう満足そうに言うのである。
「今からな」
「殿は随分とあの方をお気に入りのようですな」
「ふふふ、何か面白い奴じゃ」
吉法師は実際に今度は楽しそうに笑っていた。その笑みと共に言うのである。
「生真面目じゃがそれでいてな」
「面白いと仰るのですね」
「何処かな。あれは人質で終わる男ではないな」

不意にこんな評も述べてみせた。
「それではな」
「終わらぬというのですか」
「三河。今は小さい」
三河は今織田と今川の争いの地になっていた。かつて松平広忠という男がいたが若くして家臣に殺されてしまった。他ならぬその竹千代の祖父である。
「しかしあ奴が長じた時にはわからぬな」
「そう思われますか」
「もっともわしはそれより大きくなる」
自分自身のことも述べてみせた。
「さらにじゃ」
「だとよいのですが」
政秀の最後の言葉は溜息だった。しかし吉法師はそれは聞かずその竹千代のところに向かった。
竹千代は今は自分の部屋にいた。そこに五人の者もいた。吉法師は部屋に入るとまず彼等を見た。そのうえでの言葉であった。
「いつも大儀だな」
「これは吉法師様」
「こちらに来られたのですか」
「うむ、そなた達の主に会いに来た」
にやりと笑ってだ。こう彼等に告げたのだ・
「竹千代にだ」
「殿にですか」
「ではまたですか」
「馬にですか」
「それに泳ぎじゃ」
それもだというのだ。
「馬に泳ぎじゃ。それに連れて行く」
「吉法師様は毎日それをされますな」

「何があろうとも」
「当然じゃ。その二つがあってこそ生きられるのだからな」
今度は不敵な笑みを浮かべての言葉だった。
「まずは馬と泳ぎじゃ」
「その二つを」
「槍や弓ではなくですか」
「そういったものは後でよい」
彼は竹千代の家臣達にこう話した。
「まずは馬と泳ぎじゃ」
「その二つですか」
「それからですか」
「うむ、それでじゃ。竹千代」
「はい」
竹千代は立って彼の話を聞いていた。そのうえで今その言葉に応えたのである。
「今からですね」
「そうじゃ。行くぞ」
「では我等も」
「お供させて頂きます」
五人の家臣達がだ。それぞれ言ってきた。
「是非共」
「宜しいですね」
「駄目だと言っても意地でもついて来よう」
吉法師は必死の顔で願い出てきた彼等に対して笑顔で応えた。

第二話　群星集まるその八

「そうだな」
「御言葉ですがその通りです」
「我等三河武士」
「竹千代様の為には火の中水の中」
「地獄までも御供致します」
畏まってだ。真剣な顔で述べてきたのである。
「ですからここは」
「何があろうとも」
「止めはせぬ」
吉法師は彼等のその言葉を受けて述べた。
「止めたところでついて来る様な連中ではな」
「有り難き御言葉、それでは」
「我等もまた」
「三河武士は格別じゃな」
吉法師はその彼等を評してこんなことを言ってみせた。
「主への忠義、まさに鋼の如きじゃ」
「誰もが私を見捨てようとはしません」
竹千代はその彼等を見て微笑んでいた。
「私には過ぎた者達です」
「さて、それはどうかな」
「違うのですか？」
「人は家だけ、主従だけでついては来ないものだ」
吉法師はこう竹千代に話すのだった。
「その人も見るのだぞ」
「人をですか」
「竹千代、己を知れ」
また竹千代に対して継げた。

「よくな。その為にも行くぞ」
「はい、それでは」
「では我等も」
「竹千代様、御供致します」
こうして五人が共に来てだ。吉法師と竹千代は馬で駆けた。
吉法師はかなり荒く速く馬を駆った。だがそれでも幼い竹千代は満足についてきた。
そして泳ぎもだ。吉法師のその泳ぎについて来る。最後まで離れることはなかった。
大の大人である五人も肩で息をしている。竹千代も死にそうになっている。しかしそれでもだ。彼は最後までついてきたのである。
「ついて来たな」
「はい」
吉法師の言葉にこくりと頷く。今は服を着て馬をつないでいる木のすぐ傍に向かい合って座りそのうえで柿を食べながら話していた。
吉法師が採った柿である。
「何とか」
「いつもついて来るな」
「やるからにはと思いまして」
竹千代は柿を食べながら応えた。それは渋さが微かにある甘さに満ちたものだった。
「それで」
「やるからにはじゃな」
「はい、何があってもやり遂げたいと思っていますから」
「それは馬に泳ぎだけではないな」
吉法師はここでこう問うた。
「そうじゃな」
「おそらくは」
そうであるというのだった。
「剣も学問も」

「馬と泳ぎ、それに学問はしかとしておくのじゃな」
「この三つはですね」
「身体を動かした後で書を読むと実にいい」
吉法師もまたその甘さの中に渋みを含ませている柿を食べている。
そうしてそのうえで話すのだった。
「頭によく入るぞ」
「左様ですか」
「学ぶのじゃな。何でもな」
「わかりました」
「どうも御主はうつけではないようじゃが」
おおうつけと呼ばれている自分自身も語ってみせた。
「それでも。そのやり遂げるということはよいことじゃな」
「そうでないと気が済みませぬ」
「よい、その為には何でも我慢できるな」
「余程のことでも」
「では人質の今を耐えよ」
何故ここにいるかは最早愚問である。竹千代は他ならぬ織田家への人質なのだ。彼の家松平家は嫡男をそれに出さなければならない程弱い立場なのだ。
「わかったな」
「わかりました、では今は」
「やがてわしはこの尾張を統一する」
吉法師は笑ってこう言ってみせた。

第二話　群星集まるその九

「そして御主はじゃ」
「私は」
「三河を統一するのじゃ」
そうせよと。竹千代に笑って告げた。
「それから遠江でも駿河でも好きな場所を手に入れよ」
「まさか。私にはそこまでのことは」
「できる。わしとて尾張だけで終わりではない」
「といいますと」
「美濃も伊勢も。そして天下を手に入れてみせる」
自信に満ちた言葉であった。
「そうしてみせるからな」
「それはまことですか」
「まことじゃ。わしはやるぞ」
顔は笑っていた。しかし目は真剣だった。
「天下を手に入れるぞ」
「では私はその家臣として」
「家臣？違うな」
吉法師は竹千代の今の言葉には大きく笑って返した。
そのうえでだ。こう告げたのである。
「竹千代、御主はだ」
「はい、私は」
「弟だ」
こう言ったのである。
「わしの弟になるのだ。よいな」
「弟ですか」
「左様」
にやりと笑ってだ。こう告げたのである。

「わしの弟になれ。よいな」
「それはまた風変わりな」
「変わっていると思うか」
「はい、私の兄になられるとは」
「変わっていてよい。しかし本気じゃ」
「はあ」
「御主はわしの弟になるのじゃ」
大きく笑っての言葉だった。
「よいな、そのうえで天下を共に歩もうぞ」
「ううむ。何と言えばいいのか」
「わからぬか」
「そう言われたことははじめてでしたので」
だからだというのだった。
「この場合はどうしても」
「わからぬのならそれでよい」
吉法師はこうも言ってみせた。
「今はな」
「左様ですか」
「それでも覚えておくのじゃ」
吉法師はまた竹千代に対して述べた。
「そなたがわしの弟となるということはな」
「血がつながっていなくともですか」
「左様、それでも兄弟にはなれるのじゃ」
やはり不敵な笑みを浮かべている。
「そういうことじゃ」
「我等にもそれはわかりませぬが」
「一体どういった御言葉でありましょうか」
五人もこのことには首を捻る。
「そもそもどういったものか」
「わかりませんが」

「そなた達も同じじゃ。わからずともよい」
吉法師は彼等にも同じ言葉を告げた。
「しかし。さすればじゃ」
「その時になってわかる」
「我等にもそう仰るのですか」
「竹千代様に対するのと同じく」
「そうじゃ。わしはわしが認めた者は決して見捨てぬ」
こうも言うのだった。
「認めてから何かするよりは最初から近付けぬ」
「では吉法師様が今集めている方々は」
「認めておられるのですか」
「当然じゃ。認めたからこそ用いておるのじゃ」
そうだというのである。
「そうしておる」
「では竹千代様も同じく」
「認められたのですね」
「織田家におれば家臣にするところだった」
その竹千代を見ての言葉である。

第二話　群星集まるその十

「そうしておった。それは残念じゃ」
「私は松平の者です」
竹千代は吉法師の今の言葉に生真面目な顔で返した。
「申し訳ありませんが吉法師様にお仕えすることはできません」
「だから弟なのじゃ」
そうだというのである。
「そういうことじゃ」
「左様ですか」
「わかったな。そなたを弟とする」
その目は真剣そのものだった。
「よいな」
「ではその御言葉受けさせてもらいます」
竹千代も遂に頷いた。
「その様に」
「それではな。では御主は今日これからどうする」
「今日ですか」
「これから帰って休むか。それとも」
「そうですね。吉法師殿の言われた通り」
温厚な笑みを浮かべてだ。こう言ってみせた。
「学問をします」
「そうするとよい。普通にやるより頭に入るぞ」
「身体を動かしたからですか」
「身体を動かさず学問をしても思ったより頭に入らぬ」
吉法師はこう話す。
「だからじゃ。身体をよく動かしてじゃ」
「雨の日もですか」
「雨の日でも戦はある」

はっきりと答えた言葉だった。
「こう言えばわかるな」
「よくわかりました。では雨の日であっても」
「そうせよ。わしもこの柿を食ったら帰る」
見れば何個かあった柿がもうなくなっていた。二人がそれぞれ食べているもので最後であった。そしてよく見ればであった。
吉法師は十個程竹千代の家臣達の前にも置いていたのであった。
「あの、これは」
「まさかと思いますが」
「食せよとのことでしょうか」
「柿は食うものぞ」
これが吉法師の返答だった。
「遠慮することはない。食うがいい」
「しかしです。我等は臣下です」
「その我等に今食えというのは」
「そうじゃな。竹千代」
「はい」
「そなたからも言ってやれ」
また笑って彼に告げたのだった。
「よくな」
「そうですね。それでは」
「家臣には気遣いを忘れぬことだ」
吉法師が竹千代に教えたのはこのこともだった。
「よいな」
「気遣いですか」
「こうした時には食わせるもの。真面目なのもいいが気遣いも忘れぬことだ」
「わかりました」
「では言ってやれ」
「それでは」

家臣達に顔を向けてだ。そのうえで告げたのだった。
「一人二個ずつじゃな。食せよ」
「はっ、それでは」
「有り難き御言葉」
彼等も主のその言葉を受けて食べるのだった。吉法師はその彼等と竹千代を交互に見ながらだ。また言ってみせたのだった。
「まことに三河はまとまっておる。よいことじゃ」
松平のその結束の強さを見ているのである。そのうえでの言葉だった。
そしてこの時にだった。尾張に一人の小柄な若者が入った。見れば猿にそっくりである。痩せていて背中も少し曲がっている。お世辞にも外見はいいとは言えない。その男が尾張に入ったのである。
「ううむ、これが尾張か」
那古屋の街並みを見回してまず言うのだった。

第二話　群星集まるその十一

「かなりのものじゃな」
「そうか？」
彼の隣にいた彼によく似た、だが温厚そうで背は彼より高い少年が応えてきた。
「駿河とかと比べたら」
「全然違うか」
「駿河は凄かったじゃないか」
彼はこう若者に言うのだった。
「もうこんなものじゃなくてさ」
「まあ確かにそうじゃな」
それは若者も認めた。
「まだな」
「まだなのかい」
「駿河、特に駿府はかなり凄かった」
「ほらな、あっちの方が凄かったじゃないか」
「まさに小京都」
この頃応仁の乱の戦乱から逃れた公家達が各地に落ち延びていた。今川家の本拠地である駿府もそれは同じで義元は彼等の影響を受けて駿府を京風の街並みにしていたのである。それは見事な街並みである義元の誇りでもあった。
二人はその駿府を見ていたのだ。そのうえでの話だった。
「それと比べたらとてもさ」
「確かに駿府は凄いさ」
若者はまた言った。
「けれどあれが限度だろうな」
「限度か」
「あれ以上は大きくならん。今川様もな」

「ああ、そうだよな」
このことには少年も頷いた。
「今川様は駿河に遠江、そして三河も手に入れられようとしているけれど」
「三河で終わりじゃ」
若者は言い切った。
「それで終わりじゃ」
「そうだよな。それ以上は伸びないよな」
「しかしこの街を見ているとじゃ」
「違うんだな」
「ああ、もっともっと大きくなる」
そうだというのだった。
「こんなものでなくな」
「そして尾張もか」
「ここの殿様は大きくなるぞ」
「おおうつけって評判だよ」
吉法師のことは既に知られていた。
「それでもなんだ」
「うつけだから余計にいいんだよ」
「余計に？」
「ああ、この世の中の常識に捉われないからな」
だからいいというのだ。
「それだから。うつけであればあるだけいいんだよ」
「そんなものかな」
「それを言ったら武田や長尾の殿様はどうなるんだ？」
若者が話に出したのは今天下に名を轟かせんとするその二人だった。
「あの殿様達は」
「ああ、どちらも相当厄介な御人だったらしいな」
少年はこのことも知っていた。晴信にしても影虎にしてもだ。実

は子供の頃は癖がありそれで父に嫌われていたり寺で悪小僧だったのである。
「そういうことか」
「そういうことだよ。うつけならうつけであるだけ器が大きいものなんだよ」
「そういうものかな」
「そういうものだよ。わかったな」
「わからないな」
だが少年はこう言うのだった。
「そりゃあの人達は素質が凄かったけれどさ」
「ここの殿様だってそうさ」
「だといいけれどさ」
「街を見ればわかる。かなりいい街だよ」
若者はいぶかしむ少年に対して今度は街を見て述べた。
「治安はいいし活気もあるだろ」
「ものも多いね」
「いい街だろ？いい殿様かどうかは街に田を見ればわかるからな」
「そういえばここまで来る中で田も」
「この殿様の国はよかっただろ？」
「ああ」
その通りだと答えた。

第二話　群星集まるその十二

「じゃあやっぱり」
「ここの殿様はいける、凄い殿様になるぞ」
「じゃあおいら達はその殿様に」
「仕えるぞ、いいな」
「いいのかね、本当に」
「いいんだよ。今川様よりもずっといいぞ」
こう話してであった。彼は弟を連れて吉法師の家臣の末席に加わるのだった。木下藤吉郎、運命の主に出会ったのであった。
そして京の都でも。気品のある穏やかな顔立ちの若者が鋭利で涼しげな顔の若者と会っていた。どちらも折り目正しい服装をしている。
その二人が見合っていた。まずは気品のある若者が言った。武家の姿をしているがその顔立ちは公家の様に整っている。
「光秀殿、御聞きになられたか」
「尾張のことですか」
声をかけられた若者は白面で切れ長のいささか鋭い目をしている。細い顔に流麗な顔をしている。その彼が細川藤孝の言葉に応えたのである。
「まだ元服もしていないとか」
「それでもう名を知られていますな」
「おおうつけだそうですね」
明智光秀はこう述べた。
「そうですね」
「はい、そう聞いています」
「しかし。聞いたところによりますと」
明智はこう細川に返してきた。
「その田も街も見事なものだとか」

「見事なのですか」
「御存知の通り私は元々美濃の者です」
「はい」
「今は縁あってこうして将軍家におりますが」
「そうでしたね。明智家は下は美濃の家でしたね」
こう明智のことも話される。
「ではその御縁で」
「尾張は隣の国なのでよく聞いております」
そうだというのだった。
「それを聞くところ」
「如何ですか、その吉法師殿は」
「私にはうつけとは思えません」
これが光秀の評価だった。
「これは甲斐の武田殿も越後の上杉殿も同じですが」
「そういえば土佐の方にも何かどうにもならない御嫡男がおられるそうですね」
「それは薩摩も同じです」
二人の話には他の国のことがぽんぽんと出る。
「しかし武田殿、長尾殿はあの通りですし」
「薩摩の島津殿は今や飛ぶ鳥を落とす勢いですね」
「うつけと言われる方程実は違うものです」
明智はこう述べた。
「ですから。織田の吉法師殿も」
「わかりませんか」
「私はそう思います」
明智はこう話した。
「違うかも知れませんが」
「いえ、どうやら」
「細川殿もその通りだと思われるのですね」
「はい、残念なことに今将軍家の力は衰える一方です」

これはもう如何ともし難かった。二人もこれはよくわかっていた。
「これをどうかしたくもあり」
「天下を平穏にしたくもあります」
「幕府も大事ですがとにかく今の天下の有様は何とかしなければなりません」
「まさにその通りです」
「管領の細川様も」
細川の言葉に残念なものが宿った。
「家臣であられる三好殿との争いにかまけておられます」
「あのことですが」
明智はその細川管領家について極めて冷静に述べた。
「先が見えています」
「明智殿はそう仰いますか」
「細川様は破れます」
そうなるというのである。
「残られるのは三好長慶殿です」
「あの方がですか」
「政が得意ですが戦もまた見事なものです」
「いささか謀略に頼るところがあるにしろですね」
「はい、三好家の結束もあります」
それもだというのだ。

第二話　群星集まるその十三

「ですから三好殿が勝たれるでしょう」
「左様ですか」
「しかしです」
ところがだった。明智はここでさらに言うのであった。
「それだけではありません」
「それだけではないというのですか」
「三好殿の家臣の松永久秀という御仁は御存知でしょうか」
こう話すのだった。
「その方を」
「確かあれですね」
ここで細川は言った。
「大和の方にいる。その出自はわかりませんが」
「はい、出自はわかりません」
明智もであった。それは知らなかった。
「ですがそれでもです」
「かなりの人物ですか」
「これは気のせいでしょうか」
不意にだ。明智の顔が暗くなった。そのうえでの言葉だった。
「その松永殿には魔性を感じます」
「魔性をですか」
「はい、それをです」
感じるとだ。こう話すのであった。
「不気味なものを感じます。ただ秀でているだけではないでしょう」
「そもそも素性が全くわからないというのは」
「戦国の世とはいえおかしなことです」
明智は腕を組んで述べた。
「何者なのでしょうか、まことに」

「明智殿がそう言われるとは」
「おかしいですか」
「明智殿は今まで全て的確に見抜かれました」
明智のその知恵を見ての言葉である。
「そして情報を集めるのはとりわけ得意とされています」
「有り難き御言葉」
「しかし。その明智殿が御存知ないとは」
細川の言葉がさらに怪訝なものになる。
「面妖なことこのうえありません」
「この松永殿、注意して見るべきかと」
「わかりました、それでは」
「それではですが」
「それでは？」
「これから如何されますか？」
穏やかな口調で細川に対して問うたのである。
「これからですが」
「そうですな。まずはです」
細川は明智の言わんとしていることを察していた。そのうえで答えたのだった。
「茶でも飲みますか」
「茶をですね」
「茶道ですな。あれを楽しみましょう」
この頃とみに広まっているものであった。次第に大名やその家臣達にも伝わってきている。中には高価な茶器を手に入れている者もいる。
「これから」
「はい、それでは」
「そしてです」
細川はさらに言ってきた。
「それからですが」

「どうされますか」
「暫く見させてもらいましょう」
細川は思わせぶりに笑ってこう述べた。
「今は」
「そうされるというのですね」
「はい、それから決めても遅くありません」
これが細川の考えであった。
「どうするべきか」
「わかりました、それでは私も」
「明智殿もそうされますか」
「そう考えています」
これは明智も同じだった。彼もそう考えていたのである。
そのうえでだ。彼はまた話した。
「ただ。織田家ですが」
「その尾張ですね」
「雄飛するかも知れません」
またこう言うのだった。
「その可能性は秘めています」
「そうですね。しかし武田に長尾」
「はい」
「北条に伊達、毛利に長宗我部もいますし」
「島津にと。群雄に大きな力を持つ者が出て来ました」
語る明智の目が鋭く光る。
「動きますね」
「動きますか」
「天下は大きく動きます」
彼は見ていた。そこまで。
「ただ。それを動かすのが誰かということですが」
「そうですね。都に一番近いとなるとその細川様ですが」
「細川様は敗れます」

このことが再び話される。
「これは最早です」
「決まりですな」
「そして三好殿がわかりませんので」
「近畿が最も流れがわかりませぬか」
「そうなります。本願寺の勢力もありますし」
「読みぬくいですな」
細川は思わず言ってしまった。
「今は」
「はい、どうなるかわかりません」
明智も細川のその言葉に応えて述べる。
「しかしそれでもです。やがて一人の下に星達が集うでしょう」
「星達がですか」
「日輪の下に」
そこにだというのである。
「集うことになります」
「では光秀殿はそれが織田殿だと思われているのです」
「一度見極めたいと思っています」
その考えを隠さなかった。
「是非共」
「ではその時は私も」
「御一緒して頂けますか」
「是非。その時は大和の筒井殿もお誘いしましょう」
「はい、それでは」
こう話をするのだった。今は彼等は吉法師という人物を見ているだけだった。しかしそれでも感じ取ってはいた。戦国の世に日輪が生まれようとしていた。

第二話　　完

2010・6・27

第三話　元服その一

第三話　元服

「いや、全く叔父御はな」
「何だというのだ？」
「甥に対する愛情がないのう」
大柄な男が二人それぞれ立派な馬に乗りそのうえで轡を並べて進んでいた。その時に片方にいる赤に黄色ににとやたら派手な服の男が言ってきた。
見れば飄々としながらも引き締まり陽気な顔をしている。端整な目元に立派な眉に微笑んだ口元である。髷は茶筅髷でその紐は金色である。そしてその右手には途方もなく大きな朱槍がある。
「実にな」
「御前に愛情がないというのか」
「そうじゃ。わしの些細な悪戯に全力で殴ってくるではないか」
こう相手に言うのだった。見れば相手の男も青の服に銀の光を入れて赤い袴にも派手な模様を入れている。眉は一本であり目の光は強い。やはり引き締まった顔つきをしており右手には槍がある。そして相手の言葉に顔を向けていた。
「そう言うのか、わしに」
「そうじゃ、昨日も思いきり殴ってくれたな」
「当たり前だ」
叔父と呼ばれている男は平然とした顔で言葉を返した。
「では聞くがだ」
「うむ、何だ」
「起きて顔に落書きがあればどうする」
こう問うのだった。
「その場合どうする」
「決まっている。書いた奴をぶん殴る」

派手な男の彼はきっぱりと言い切ってみせた。
「思いきりな」
「そういうことだ。ならわかるな」
「それでなのか」
「それでだ。そもそも五発殴っただけで済んで有り難いと思え」
「五発ではないぞ。二十発だったぞ」
「御前は十五発殴り返してきたな」
見ればだ。二人の顔にも身体のあちこちにも青い痣が見られる。
どうやら相当な喧嘩をしたらしい。
「それで五発だ」
「甥の些細な悪戯で五発も殴るとはやはり大人気ないぞ」
「叔父が寝ている間に悪戯書きをする方が大人気ないとは思わないのか？」
「愛今日ある悪戯ではないか」
「その悪戯に五発で済ませてやったのは叔父の愛情だ」
「やれやれ、厳しい愛情じゃのう」
派手な服の男はそこまで聞いて呆れた顔になってみせた。
「前田家の棟梁槍の又左利家の愛情は実に」
「では前田家きっての傾奇者の慶次郎利益の悪戯は天下無双だな」
「うむ、わしは悪戯も徹底的にやる主義だ」
その男慶次は笑ってその前田に返した。
「そういうことだからな」
「ではわしも徹底的に返そう」
前田も負けていない。
「それでいいな」
「ではこっちも徹底的に拳を返すぞ」
「おう、返り討ちにしてやるわ」
こんな話をしながらだ。二人は吉法師のいるその那古屋城に来た。
その城に入るとだった。慶次は叔父に対してこう言ったのだった。
「ではわしはここでな」

「何だ？一緒に来ないのか」
「赤母衣衆には叔父御がなれ」
笑って前田にこう言うのだった。
「わしは別にいい」
「何を言う、貴様程の腕があれば赤母衣衆でも黒母衣衆でもなれるだろう」
「だからそういうものには興味がないのだ」
こうも言うのであった。
「そうした殿の御傍とかにはな」
「ではどうしたいのだ？」
「戦場で真っ先に突き進みたい」
これが彼の願いであった。
「そうしたいのだがな」
「一番槍か」
「戦場に真っ先に突っ込んで暴れたいのだ」
慶次はまた言ってみせた。
「それこそがわしの望みだ」
「戦場で暴れたいのはわしも同じだがな」
「しかし叔父御は将の素質もある」
叔父のその素養は既に見抜いているのである。

第三話　元服その二

「それならばだ」
「赤母衣衆として殿の御傍にありか」
「そうして学ぶとよい。わしは可児殿と同じだ」
「武辺者で通すか」
「ははは、武辺者か」
叔父の今の言葉には顔を崩して笑ってみせた。
「それよりもじゃ。わしはじゃ」
「何だというのだ？」
「不便者じゃ」
それだというのである。
「槍でしか暴れられぬ。不便者じゃ」
「何を言う、茶に書も歌も見事なものではないか」
「あれはほんの余興。わしは政には興味がない」
割り切っていた。その言葉には何の迷いもない。
「あの鬼の柴田殿も政は中々のもの。しかしわしはそういったものにはとんと興味がわかぬのでのう」
「だから槍だけでよいのか」
「戦場で暴れるだけでいい。そういうことじゃ」
「勿体ないのう。御前程の男が」
「そう思うのなら小遣いをあげてくれ」
茶目っ気のある顔になっての言葉だった。
「それだけでいい」
「馬鹿を言え」
前田の甥の申し出に対する返答は一言だった。
「誰がそんなことを聞くものか」
「何じゃ！？随分とケチじゃのう」
「貴様の言う通り金を出していたら前田家は破産してしまうわ」

「少し遊郭に行くだけではないか」
「それで豪遊するのだろうが。誰が出すか」
前田の言葉は喧嘩について話すよりもさらに厳しかった。
「全く。冗談も休み休み言え」
「難儀だのう」
「難儀なのは貴様の性格だ」
前田はさらに言い返す。
「どうやったらそんなことを言える」
「可愛い甥ではないか」
「歳は然程変わらぬぞ」
「まあそうだがな」
慶次もそれは認めた。確かに二人の年齢は近い。
「しかし甥ではないか」
「全く。こんな大きな甥がいるとはな」
「ははは、では奥村も呼ぶか？」
「呼ぶとややこしくなるから止めろ。そういえばあ奴はだ」
「どうも吉法師様がお気に入りだな」
「あの方は常に優れた人材を探しておられるからな」
前田はその主のこともここで話した。
「だからな」
「それで叔父御も呼ばれたということだ」
「それはいい。貴様についてもな」
「わしは前線で暴れればそれでいいがな」
それに尽きるというのだった。この考えは変わらない。
そして彼はそのまま城の中で槍の稽古をしながら過ごすのだった。
前田は城の中を進みそのうえで吉法師の前に来たのだった。
するとだ。柴田が大声で言ってきたのだった。
「又左、よく来たな」
「はい、前田利家只今参上しました」
「前田利家でございます」

柴田が主の座にいる吉法師に対して告げた。
「赤母衣衆筆頭でございます」
「そうであるな」
吉法師は彼のその言葉を受けて頷いた。
そのうえで居並ぶ家臣達を見る。そうして言った。
「さて、それではだ」
「はい」
「それでは？」
「赤母衣衆と黒母衣衆をここに集めよ」
言うのはこのことだった。
「わかったな」
「双方をですか」
「ここにですか」
「そうだ、集めよ」
彼はまた告げた。
「よいな、すぐにだ」
「はい、それでは」
「すぐにここに」
居並ぶ家臣達がそれに頷いた。そのうえですぐにその赤母衣衆及び黒母衣衆の者達が集められた。見れば誰もが見事な武者達であった。

第三話　元服その三

「ほほう」
「これはまた」
「見事な者達ですな」
平手だけではなかった。柴田と丹羽も言う。
「これだけの者達が織田家に揃っているとは思っていませんでした」
「又左だけではなかったのですか」
「探せばいる」
これが吉法師の言葉である。
「そういうものだ」
「探せばですか」
「これだけの者達がいるのですか」
「そうだ。それでだが」
ここでだ。吉法師は前田の他にもだ。赤母衣衆の面々を見て言った。
「槍の又左だけではなくだ」
「金森長近もいますな」
「それに原田直政も」
「そなた達の力、期待している」
鋭い目をした筋骨隆々の大男に中肉中背で大きな口を持った男達を見て話す。
「よいな」
「はい、有り難き御言葉」
「それでは」
その金森と原田が頷いてみせた。
「赤母衣衆の力、是非共」
「御覧に入れてみせましょう」
「頼んだぞ。そうだな」

ここで吉法師はさらに言った。
「又左はもうこの名で呼んでいる」
「名前ですか」
「それでは」
「長近、そなたの幼名は五郎八といったな」
まずは金森に対して告げたのだった。
「そうだったな」
「はい、そうです」
「ならばそなたは五郎八と呼ぶ」
そう呼ぶというのだった。
「それでよいな」
「はい、それでは」
「そして直政、かつては壇だったな」
原田の姓が変わったことは既に知っているのである。
「そして幼名は九郎左衛門だった」
「その通りです」
「では九郎だ」
こう呼ぶというのだった。
「それで呼ぶぞ」
「では御願いします」
「赤母衣の者達はわしに仕える間幼名で呼ぶこととする」
家臣を幼名で呼ぶことを好む吉法師らしかった。
「無論黒母衣の者達もだ」
「黒母衣の者達も」
「その様に」
「当然だ。赤母衣の者達もそなた達もそうではないか」
居並ぶ家臣達も見る。ここでは林を見て言った。
「新五郎、そうではないか」
「はい、確かに」
「まあ爺だけは別だがな」

うっすらと笑ってみせて平手も見るのだった。
「どうも幼名で呼ぶ気がせんがな」
「それは何故でございますかな」
「何か幼い時のことが想像できん」
だからだというのだ。
「池田恒興ならばのう」
四角い顔をしたやや小柄な男を見ての言葉だ。
「普通に勝三郎と呼べるし森可成も同じこと」
今度は髪が白くなり顔に深い皺のある老人を見る。
「与三と呼べる」
「我々はですか」
「しかし平手殿はですか」
「どうもそうは呼べぬな」
こう言い続ける。

第三話　元服その四

「わしも何故かはわからんが」
「殿が遠慮されているのでは、それは」
「やはり。平手殿ですから」
「ふむ、そうなのかのう」
吉法師もその政秀を見ながら述べる。
「わしにはそのつもりはないのだがな」
「遠慮されたことは全くありませんがな」
当の平手もそれは言う。
「今まで一度たりとも」
「そうであろうな。わしもそのつもりはない」
吉法師自身もこう返す。
「生まれてから一度もな」
「その通りです。殿は話を聞きませぬ故」
平手の言葉は自然と小言になっている。
「困ったことです」
「わしはそれ以上に爺の小言に困っておるぞ」
吉法師はここでも負けてはいない。
「全く。どうしたものじゃ」
「まあそれはいいとしてです」
「殿、それでですが」
佐久間と林がここで吉法師に声をかけてきた。
「黒母衣衆ですが」
「宜しいでしょうか」
「うむ、まずは筆頭の」
「川尻秀隆でございます」
日に焼けた精悍な顔をした男だった。射抜く様な目に薄い唇をしている。

「宜しく御願いします」
「そなたは鎮吉と申したな」
「はい、そうです」
それが彼の幼名であった。
「その通りです」
「そうだったな。ではそなたは鎮吉という」
「宜しく御願いします」
「そしてだ」
次にはだった。黒母衣衆の中で最も身体が大きく鋭い眉をした男を見た。そのまま素手でも虎を倒せるような猛々しさがそこにはある。
「佐々成攻です」
彼は自ら名乗ってきたのだった。
「宜しく御願いします」
「その幼名は内茂助だったな」
「そうです」
佐々は吉法師のその言葉に応えて頷いてみせた。
「宜しく御願いします」
「そなたもまたその力頼りにさせてもらう」
「有り難き御言葉」
「中川重政」
丸い顔に大きな目の若武者であった。
「幼名は八郎」
「はい」
その若武者中川の返事だった。
「左様です」
「ではそなたをこれから八郎と呼ぶ」
「それでは」
こう話すのだった。そして次にいたのはだ。
「蜂屋頼隆」

「左様です」
佐々程ではないが大きい。彼もまた大柄であった。
「以後お見知りおきを」
「そなたは般若介だったな」
吉法師は蜂屋の幼名も知っていた。
「般若と呼ぶぞ」
「わかりました」
「浅井政澄、織田薩摩守、伊藤長久、山口飛騨、佐脇藤八、毛利長秀、飯尾茂助、長谷川橋助、福島秀勝、渥美刑部丞、猪子一時、織田越前守、加藤弥三郎、黒田次右衛門」
赤母衣衆の他の者達の名が呼ばれる。
「津田隼人正、毛利良勝、伊藤武、水野忠光、松岡九郎次郎。生駒正ノ助、野々村正成、中島主水」
続いて黒母衣衆の者達の名前も呼ばれた。

第三話　元服その五

「宜しく頼むぞ」
「この者達が殿の近辺を守る者達ですね」
「まさに」
「その通りだ。そしてその方等もいる」
あらためて平手達を見回しての言葉だった。
「頼んだぞ」
「はい、それでは」
「戦にも政にも」
「そうだな。戦だな」
森の言葉にだった。吉法師は反応を見せた。
「間も無く元服しそのうえでだったな」
「左様です」
その森が応えてきた。
「元服されたらすぐにです」
「わかった。それでは初陣はだ」
「おそらく今川になります」
今度は滝川が言ってきた。
「近頃尾張にしきりに攻めてきておりますし」
「今川か。どうやら尾張を手中に収めたいらしいな」
「それは間違いありませんな」
平手も今川のことにはその目を鋭くさせる。
「今側は上洛を目指しています。ですからこの尾張は必ず必要です」
「今川のう」
ここで吉法師は少し考える顔になった。そのうえでまた言ったのであった。
「将軍にもなれたな」
「左様です」

林が応えてきた。
「今川家は源氏の名門、将軍の継承権も持っております」
「足利、吉良」
吉法師は林の言葉を受けて二つの姓を出してきた。
「その二つの家と共にだったな」
「その通りでございます。ですから都に上がれば将軍になることも可能です」
「今川家だけはそれができるな」
吉法師は林の言葉を聞きながら冷静に述べた。
「そうだな」
「ですから尚更ですな」
「奴等はこの尾張を狙う」
「そのうえでさらに都に向かうかと」
「尾張から美濃、そして近江じゃな」
吉法師は居並ぶその家臣達の言葉を聞きながら述べた。
「そう来るな」
「美濃の斉藤や近江の六角も倒してそのうえで」
「都にですか」
「まあできるかどうかはわからんがだ」
吉法師は冷めた目で述べた。今度はそうしためになっていた。
「それを望んでいることは確かだ」
「上洛を」
「そして将軍になることを」
「そうだ、それは間違いない」
それはだというのだ。
「そしてそれを考えていることがここでは問題だ」
「それがですか」
「それこそがですか」
「それならば尾張に攻め入って来る」
吉法師の言葉はここでも冷静だった。

「それが問題なのだ」
「今川は兵が多いですし」
「それも厄介ですな」
「確かに兵は多い」
吉法師もそれは認めた。
「しかし今川には太源雪斎以外に将はいるか」
「むっ！？」
「将ですか」
「そうだ、いるか」
このことを家臣達に問うのである。
「戦ができる将はいるか、今川には」
「いえ、雪斎以外にはです」
「これといっていません」
「一人たりともです」
「今川は元々駿河、そして遠江をまとめていてそれでやってきた」
「それは武によってではないと」
坂井がそれに問うた。

第三話　元服その六

「そう仰るのですか」
「今川は元よりその二国を治めている守護大名だった」
吉法師はこのことも指摘した。
「さすればそれなりの兵があり家臣をまとめれば済むことだった」
「甲斐ではいささか乱がありましたが」
「駿河はそうではありませんでしたし」
「跡目争いはあったが今川を主にすることに異を唱えるものではありませんでした」
そうした意味で今川の統治は磐石であり続けているのである。このことは他の大名達とは趣を異にするものであると言ってよかった。
「では武はそれ程ではないと」
「殿はそう見ているのですか」
「兵のことについては我等も偉そうなことは言えぬ」
吉法師は兵については言葉が弱かった。織田、即ち尾張の兵は弱兵として知られていた。このことは吉法師もよくわかっていた。
「だがそれ程ではない」
「そして将もですか」
「太源以外にはいませんか」
「左様、主の今川義元にしても政はよい」
それはいいとした。
「公家衆から雅を知り教養もある」
「そういえば自身で戦場に立ったことはほぼありません」
「今川は戦をすること自体が少ないですが」
「それで兵が強いとは思えぬ。密偵を使って他国を調べることもどうやら三河に対して以外は然程してはいないようだしな」
吉法師はこのことも見ていた。
「尾張にはまだそれ程送ってはいない」

「殿、さすれば」
滝川が進み出て言ってきた。
「一つ策がありますが」
「何じゃ、申してみよ」
「今川の手の者が今後尾張に来ましたならば」
「全て消せというのか」
滝川を見据えて問い返した言葉だった。
「そうせよというのか？」
「いえ、そうではありません」
滝川はそれは否定した。
「それとは違います」
「ふむ。消さぬのか」
「消せばそこでかえって怪しまれます。ですからそれはするべきではありません」
「しかし久助よ」
柴田がすぐにその滝川に幼名を言って問うてきた。
「それでは今川にこちらの情報を知られ過ぎるぞ」
「そうだな、確かに」
「それは」
柴田の今の言葉に林と佐久間も頷く。
「そうなっては何にもならぬぞ」
「我等のことを全て知られては」
「ある程度は消します」
滝川はある程度と述べた。
「全てではなくある程度はです」
「では残った者はどうするのですかな」
武井がそれを問うた。
「残った今川の手の者には」
「その者には偽の情報を渡します」
「偽のか」

「はい、そうです」
そうするというのである。
「そうして今川に我々の真のことを知られないようにするのです」
「ふむ、それならばだ」
平手はここまで聞いて腕を組んで述べた。
「その忍の者のことは全て掴んでおかなくてはな」
「それはお気遣いなく」
滝川はそれについてはその目をさらに鋭くさせて述べてきた。
「それがしは元々忍の者。抜かりはありません」
「左様か」
「はい、甲賀の者もかなり連れて来ていますので」
彼だけが織田家に仕えているのではなかったのだ。彼は己の一族である多くの者もまた織田家に引き入れているのである。
「ですから」
「甲賀か」
甲賀と聞いてだ。吉法師の目が光った。
「伊賀や風魔と並ぶ忍だな」
「はい、そう言われております」
「根来や雑賀も聞いているがな」
この時は多くの忍の者達がいてそれぞれの大名に仕えているのである。
「しかし。甲賀といえばじゃ」
「何か」
「伊賀の者とは仇敵だったな」
「その通りです」
吉法師の言葉に応える滝川の顔はさらに険しくなる。伊賀と聞いてである。

第三話　元服その七

「服部家に連なる者達はいいのですが」
「伊賀者は別れているのか」
「そうだったのか」
これを聞いて周りの者が一斉に怪訝な顔になった。それは彼等の全く知らないことであったからだ。だから驚くのも当然のことだった。
「はじめて聞いたが」
「そんなことになっていたのか」
「服部家とは別に百地家があります」
滝川は服部とは別の家を話に出してみせた。
「この家の主である百地三太夫という者がどうにも怪しく」
「怪しいとは」
「またどういうことだ」
「得体の知れない忍術を使いそのうえ何か京にあがることも多く」
「京とな」
吉法師がその言葉に眉を動かした。
「ではあの地の者と関わりがあるのか」
「そう思われます。どうやら」
「どうやら？」
「松永弾正久秀とです」
あらたな名前がここで出された。
「どうやら関わりがあります」
「松永弾正とな」
それを聞いた平手の目が動いた。
「阿波の者とも西岡の者とも言われているが」
「その出自ははっきりしませぬ」
「そうだったな。妙な男だ」

平手は滝川の言葉にさらに述べた。
「摂津とも言われているが。わからぬ男だ」
「その者と会っているようです」
「伊賀か」
平手はここであらためて考える顔になって述べた。
「この尾張とも近いな」
「はい。ですが今はです」
「わかっている。知っておくことは大事だが」
それでもだというのだ。平手の顔は真剣なものだった。
「手出しをすることはできんな」
「はい」
「ふむ。面白い話だな」
吉法師は二人の話を聞いていた。それが一段落したところでまた述べたのである。彼もまた真剣そのものの顔になっていた。
「それは」
「伊賀は六角の領土であります」
林がこのことを言い加えてきた。
「あの家は昔よりあの地と近江の南に力を持っています」
「それも聞いている。だが近江の北は違ってきているな」
「浅井ですか」
「そうだ。あの家が力を伸ばしてきているな」
林に対して浅井の家のことを話してみせるのだった。
「あの家は今は大人しいが後ろにいるのは」
「朝倉ですな」
今度は柴田であった。実に面白くなさそうな顔をして朝倉という名前を出してみせてそのうえで主にも他の家臣達にも話すのであった。
「全く以って面白くない相手です」
「確かに。その通りです」
「まことに」

「それがしもそう思います」
柴田だけでなかった。他の家臣達も大なり小なり朝倉という家に対しては不愉快なものを見せる。奇しくも誰もがそうなっていた。
当の吉法師もだ。彼もまた不愉快な顔で話すのだった。
「同じ斯波氏の家臣筋であるがな」
「何かと織田を侮蔑しております故」
「我等の方が下だと」
「向こうの方が位は上だった」
吉法師は家臣達に話した。
「そのせいで今も織田を侮蔑しておるわ」
「美濃の斉藤を叩くという目的は一致しております」
佐久間が不愉快な顔をそのままにこう話してきた。
「それはです」
「そうだな。しかしいけ好かないことは変わりがない」
吉法師は佐久間のその言葉に応えた。

第三話　元服その八

「美濃を攻めるのも結局のところあの国が欲しいのだ」
「はい、その通りです」
今話したのは林美作であった。彼は兄の傍に控えている。
「美濃は豊かであります。ですから」
「ふん、しかしだ」
だが、という口調だった。信長は侮蔑したようにして話した。
「朝倉は所詮一人でもっている家だ」
「朝倉宗滴」
「あの老人ですか」
「そうだ、あの男だけだ」
吉法師はここでもばっさりと言い捨てていた。
「当主の朝倉義景なぞ恐れることはない」
「では斉藤道三を倒すことはできませんな」
「今の朝倉では」
「出来る筈がない。しかし浅井の後ろにいるのは確かだ」
それはだというのだ。吉法師は朝倉を大して強くは見ていなかったがそれでもこのことははっきりと認識して述べていた。
「浅井の家は何かと興味深いな」
「浅井はですか」
「あの家は」
「そして武田と長尾だ」
吉法師の顔がさらに険しくなった。
「あの両家、いや武田晴信と長尾影虎は恐ろしい男だ」
「はい、どちらも今恐ろしいまでに勝ちを重ねています」
丹羽が告げてきた。
「武田は信濃を手中に収め長尾は越後を完全に掌握しました」
「そして双方共川中島で戦っているな」

吉法師は両者の戦いのことも知っていた。
「激しい戦いになっているな。しかもその間にも両者は力をつけている」
「政が見事です」
村井が厳かな口調で述べてきた。
「特に武田は戦で攻めたその土地もよく治めています」
「ただ戦ができるだけではないというのですね」
池田がその村井に対して問うた。
「つまりは」
「左様、武田も長尾も多くの人を備えている」
彼等もだというのだ。
「武田と長尾、恐ろしい家だ」
「それと北条に毛利だな」
吉法師の言葉だ。
「近畿の三好も気になるがこの二つの家も強くなるだろうな」
「相模の北条と安芸の毛利」
「その二つもですか」
「そうだ、天下は今まで小さく乱れていたがそれが変わる」
ここでだった。居並ぶ者達に対して告げた。
「大きな力を持つ家が幾つか出て来るぞ」
「そうなりますか」
「これからは」
「そうだ。そしてそれに対して我が家はだ」
織田家はというのだ。
「まずは国を治める。よいな」
「はい」
「そうしてですか」
「戦に勝っていく。そうするぞ」
「さし当たってですが」
坂井が言ってきた。

「殿、いよいよです」
「大膳、元服だな」
「はい、そうです」
まさにそれだというのだった。
「それです」
「わしもいよいよ元服か」
吉法師の顔は妙に楽しそうであった。まるで待ちに待ったものを手に入れるかの様であった。
「面白いな」
「織田家の多くの者が来るでしょう」
「あの織田信友の手の者もまた」
「ほう、あそこからもか」
織田信友と聞くとだった。吉法師はまたしても面白そうな声をあげた。そうしてそのうえで坂井に向かいなおしてそのうえで彼に言った。
「そういえばだ。あの家にも坂井がいたな」
「はい、しかも大膳という名も同じです」
「ややこしいものよのう。それは」
「それがしは元々美濃にいたので血はつながっていません」
坂井は忌々しげな顔でそれは否定した。

第三話　元服その九

「ですが名が同じというのはです」
「嫌か」
「あの男は好きになれませぬ故」
だからと。その忌々しげな顔で話す。
「ですから」
「左様か。それではだ」
「それでは？」
「名前を変えてはどうか」
こう坂井に言うのだった。
「御主の名前をな」
「大膳ではなく、ですか」
「そうだ。あの男が好かぬのはわしも同じ」
また顔を歪ませる信長だった。
「ああした陰険な者は好かぬ」
「ではどういった名前がいいでしょうか」
「あの男は陰険で悪辣だ。それならば逆でよかろう」
坂井に話すのはこうしたものであった。
「そうだな。膳に対して善だ」
「善、ですか」
「善、そして大には太だ」
読み方は同じだ。しかし意味は違っていた。
「それでどうだ」
「太善ですね」
「大きな膳よりもいいではないか？」
不敵な笑みを浮かべて坂井に対して問う。
「あの男は小器、大膳なぞはったりに過ぎぬしな」
「それに対してそれがしはというと」

「太い善だ。それでどうだ」
「はい、それでは」
坂井は微笑んでいた。そのうえで頷いてみせたのだ。
「その様に」
「何、あの男にしろ信友にしてもだ」
「造作もないと」
「そう仰るのですね」
「何度も言うが大膳は小器」
彼についてはあくまで辛辣であった。
「そしてその主である信友もだ」
「小器だというのですね」
「その通りだ。取るに足らぬ」
こう堀に言葉を返す。
「戦になれば一蹴できる。それに信友にはあの男しかいないな」
「はい、確かに」
「清洲にいる名の知られた者はあの者だけです」
「大膳だけです」
織田信友の居城は清洲である。だからこう言われるのだ。
「では所詮は、ですか」
「あの者一人に過ぎないと」
「だからこそ恐れる必要はないのですね」
「それに対してわしには御主達がいる」
吉法師はあらためて家臣達を見回してから言ってみせた。その目には悠然とした笑みさえある。口元にもそれは自然と出ていた。
「武田であろうが北条であろうがだ」
「臆することはないと」
「そこまで仰って頂けますか」
「わしは人を選ぶ」
吉法師は家臣達にこうも話してみせた。
「優れた者しか使わぬ。しかしだ」

「しかし」
「といいますと」
「目に狂いはない。使う者は何があろうと使う」
そうするというのである。
「決して離すことはない。それは言っておこう」
「では我等は」
「このままですか」
「御主達の誰も決して捨てぬ」
目には偽りはない。事実そのものだった。

第三話　元服その十

「一度持ちいればな」
「左様ですか」
「決して、ですか」
「そうだ、それでいく」
これは吉法師の信念をそのまま言っていた。
「わかったな」
「わかりました、それでは」
「我等もまた」
吉法師の心を受ければだった。彼等もまた自然と己の心を見せるのであった。
「吉法師様を決して」
「裏切りはしませぬ」
「例え何があろうとも」
「頼むぞ。わしが目指すものは大きい」
彼は言うのであった。
「その目指すものを手に入れる為にもだ」
「我等の力」
「是非お使い下さい」
こうそれぞれ言い合うのであった。吉法師は今己の股肱の臣を手に入れていた。
そしてある日のこと。彼は弟の勘十郎、そして竹千代を連れて城の外を歩いていた。後ろの二人は折り目正しい服だが彼の服装は相変わらずだった。
茶筅髷に赤い紐、それに派手な上着に半袴、大きな刀の鞘は赤や青で彩られている。その服で城の外を練り歩いているのである。
その彼を見てだ。竹千代が思わず問うた。
「あの」

「何だ？」
「その服装でいいのですか？」
戸惑いながら吉法師に問うていた。
「その様な派手な格好で」
「何、いつものことだ」
「いつものことですか」
「わしの格好はいつも見ているのではないのか？」
戸惑いを隠せない竹千代に対して平然とした顔で返してみせる。
「違うか？」
「それはそうですが」
「ならどうして驚く」
口調もまた平然としている。
「それならだ」
「しかし。吉法師殿はやがて信秀様の跡を継がれるのですね」
「その通りだ」
「なら余計にそうした格好は」
「ははは、真面目一辺倒をする者は既におるからな」
「既にとは？」
「まずは私です」
いぶかしむ竹千代の横から勘十郎が言ってきた。
「私はこうしたことしかできぬので」
「勘十郎殿がですか」
「左様、それに対して兄上はです」
「ああした格好をですか」
「格好だけではなく、です」
彼もまた落ち着いていた。それどころか微笑んでさえいる。そのうえでの言葉だった。
「何をされるにしても破天荒でよいのです」
「破天荒でよいとは」
「竹千代、学ぶことは大事だ」

吉法師は今度は首を傾げさせた竹千代に対して言ってみせた。
「しかしそれだけでは駄目なのだ」
「それだけではですか」
「そこから己で色々としてみるのだ」
それが重要だというのである。
「そうしていいものを見出すのだ」
「いいものをですか」
「わしにとってはこれだ」
今の格好だと。こう話すのだった。
「近頃傾奇者という連中がいるな」
「聞いたことはあります」
竹千代は吉法師のその言葉に応えて述べた。
「堺等栄えている場所をたむろしている奇矯な服装の者達ですね」
「そうだ、それだ。そしてわしもじゃ」
「傾奇者だというのですか」
「その通り、わしは傾くぞ」
二人に対して笑いながら話す。

第三話　元服その十一

「このままずっとな」
「ずっとですか」
「若い時だけ傾いてどうする」
明るい笑顔である。その笑顔はそのままだ。
「生きる間ずっと傾いてこそじゃ」
「生きている間ずっとですか」
「そうじゃ、ずっとじゃ」
今度は勘十郎への言葉だ。
「傾くぞ、よいな」
「それはいいのですが」
勘十郎は兄の話を聞いてそれはよしとした。
「私にしろ竹千代殿にしろ」
「うむ」
「そして家臣達にしろです」
つまり吉法師の周りにいる者達はというのである。彼等はいいというのだ。
「兄上の周りにいる者達はいいのですが」
「その者達はだな」
「はい」
勘十郎は折り目正しい口調で兄に告げる。
「兄上がわかっているからです」
「それはいいのじゃな」
「ただ。民達はどうでしょうか」
彼がここで危惧するのは彼等のことだった。その民達のことだ。
「兄上の行いを見てよく思わないのではないのでしょうか」
「それは気にすることはない」
だが吉法師はそれをいいとした。

「民達はな」
「よいのですか？」
「そうだ、よい」
弟に対して落ち着いた顔で述べる。まるで何ともないといった様子だ。
「それはな」
「何故よいのですか？」
「わしの政を見ればわかるからだ」
だからだというのである。
「それを見ればだ。わかるからだ」
「兄上の政をですか」
「兵も同じだ。わしの戦を見ればわかる」
兵達もだという。彼は民も兵も見ていた。
「わしがどういった者かな。だからよいのだ」
「兄上の政や戦をですか」
「政を上手く行い戦に勝つ」
彼が言う言葉は簡潔だった。しかしそこには絶対の自信がありしかもその言葉には困難かつ複雑な現実もまた含まれていた。
しかしだ。彼はそれをあえて絶対の自信と共に簡潔に言ってみせた。何でもないといった調子でだ。
「それでよいのだ」
「とりわけ政ですか」
「政では抜からぬ」
明らかに戦より政を見ていた。それは間違いなかった。
「だからだ」
「そしてそれより民の心を掴まれるのですね」
「左様、そうする」
まさにそうだというのだった。
「わかったな」
「民達のことはわかりました」

勘十郎はこのこともよしとした。兄の言葉を受けて確かな顔で頷く。

「兵達のことも」

「わかればいい」

「ですが。外はどうでしょうか」

勘十郎は今度は外だというのだった。

「他の国は」

「わしを侮るというのか」

「はい」

まさにそれだというのだ。

「そうなれば何かとまずいのでは」

「侮ればそれでいいではないか」

吉法師はここでも落ち着いていた。本当に何でもないといった態度である。

「それでな」

「いいのですか」

「兵法の基本だ。相手を侮ればだ」

「それだけで敗れる」

今言ったのは竹千代であった。彼は今は吉法師と勘十郎の話を静かに聞いていた。今度は聞き役に徹していたというわけである。

第三話　元服その十二

「敵を見誤り」
「敵が何をしようが侮ってはならん」
吉法師の言葉はここでは鋭いものになった。その表情もだ。見れば端整な顔であるがそれは鋭さの実に合う顔でもあった。
「その行いや振る舞いからでだ」
「要はその本質を見ろというのですね」
「そうだ」
まさにそうだというのだ。
「わしの服や振る舞いで侮るならばそれでいいではないか」
「それにより吉法師殿を見誤るならばですか」
「そうだ、いいのだ」
また言った。
「そう見るのなら見させておけ」
「成程」
「もっともわしはこの格好も振舞いも好きでしているのだがな」
「平手が怒りますね」
勘十郎は織田家きっての頑固者の話もした。
「それでは」
「ううむ、爺には勝てぬ」
さしもの吉法師も彼の名前を聞いては弱った顔になった。
「ちとな」
「他の者はともかく平手はそうしたことはどうしても許しませんから」
「爺には茶道も学んでおるがだ」
今度は茶道の話も出て来た。
「しかし。傾奇を解せぬからのう」
「私も最初は戸惑いましたし」

「申し訳ありませんが私もです」
二人もだった。傾奇には抵抗があった。そのことを当の吉法師に言う。
「その格好は私には合わないかと」
「私にも」
「まあそうじゃろうな」
吉法師は己の後ろにいるその二人をちらりと見てから話した。今三人は道を歩き続けている。共の者達も後ろや周りに控えてはいるがその三人が中心だった。
「二人には真面目がいいじゃろうな」
「ですから。このままいかせてもらいます」
「私もまた」
「そうせよ。それでいい」
吉法師は二人はそれでいいとした。そしてだった。
ふと道の脇にある柿を取ってだ。その周りの者にも話した。
「御主達も食え」
「我々もですか」
「宜しいのですか？」
「そうだ、食え」
あらためてこう告げるのだった。
「遠慮することはない」
「殿がそこまで仰るのなら」
「それでは」
彼等もそれに従う。そうしてその柿をそれぞれ食う。
当然勘十郎と竹千代もだ。彼等も柿を手にしていた。そのうえでそれを食べながら前にいる吉法師に対して尋ねたのであった。
「あの」
「何故我等や家臣達にも」
「では聞くがだ」
当然吉法師も柿を食べている。そうしながら答えるのだった。

「あの木には柿がこれでもかと実っていたな」
「はい」
勘十郎が頷く。それはその通りだった。
「かなりの数が」
「それだけの数をわし一人で食えるか」
吉法師はこう問い返した。
「わし一人でだ。食えるか」
「いえ、それは」
「そうだな。食えぬな」
「それで我等にですか」
「独り占めすることは趣味ではない」
柿を食べながらの言葉だった。
「ましてやそなた達も腹を空かしていたな」
「それは」
「別に」
「隠すことはない」
今度は家臣達への言葉だった。彼等が弁明するより先に言葉を出したのである。
「それはな」
「左様ですか」
「それは」
「そうだ。それならばだ」
「食っていいと」
「そう仰るのですね」
「その通りだ。だから食え」
これが吉法師の彼等への言葉だった。

第三話　元服その十三

「わかったな。わしは少なくとも食い物は独り占めはせぬ」
「だからこそ我等にもこうして」
「そうだったのですか」
「わかったら遠慮することはない」
そしてだった。また柿の木の脇を通る。ここでだった。
「さて、もう一個食うか」
「この木の柿もですか」
「それもですか」
「そうだ、食え」
実際にだった。吉法師は手にしているその柿を食べ終えた。そうして今横を通った木の柿を一個もぎ取った。そのうえで食べてみせてだった。
「こうしてな」
「もう一個ですか」
「我等も」
「思う存分食え。よいな」
「はい、それでは」
「御言葉に甘えまして」
「柿はいいものだ」
吉法師は笑いながらその柿を食べている。
「甘いものはいい」
「甘いものはお好きですか」
「大好きだな」
竹千代の問いに答えてみせる。
「柿だけでなく他の果物や菓子もだ」
「西瓜もですな」
勘十郎は西瓜も話に出してきた。

「それも」
「うむ、いいのう」
「それは意外ですね」
竹千代はそんな彼の好みを聞いてやはり驚いていた。目を丸くさえさせていた。
「吉法師殿が甘いものをお好きだとは」
「そこまで意外か」
「ううむ、想像できません」
「だから言っておるのだ。人はそうそうわからん」
またこう言うのであった。
「中々わかりはしないぞ」
「そのこと、よくわかりました」
「さて、それではだ」
ここまで話してだった。吉法師達は川のところに来た。
そうしてその前に来て。彼は勘十郎と竹千代に対して述べた。
「泳ぐぞ」
「はい、それでは」
「そうしましょう」
もう寒くなろうとしているがそれでも泳ぐ彼等だった。そしてこの時から暫くしてだ。吉法師は父信秀からこう告げられたのだった。
「そなたもそろそろだ」
「そろそろとは」
「元服してもらおう」
こう告げられたのである。
「それでよいな」
「元服ですか」
「左様、名前はそうだな」
ここでだ。信秀は我が子にまずこう告げた。
「織田家ではまず信という文字をつける」
「はい」

「まずはこの文字を使う」
織田家の文字をだ。使うと告げた。
そしてそのうえでだ。また吉法師に対して告げた。
「そしてだ」
「その次には」
「沢彦和尚から聞いた。名前は信長がいいとな」
「信長ですか」
「そうだ、織田信長」
この名前がだ。今吉法師に告げられた。
「それがそなたの名前だ」
「織田信長ですか」
「どうだ。気に入ったか？」
信秀はその厳しい顔を微笑まさせていた。そのうえで我が子に問うた。
「この名前は」
「いい名です。この名前ならばです」
「この名前なら。どうなのだ？」
「天下に轟かせるに相応しい」
これが信長としてのはじめての言葉だった。
「天下に名前を轟かせるには」
「ではいいのだな」
「はい」
満足した笑みでの返事だった。
「ではこれよりは」
「そうだ、織田信長だ」
「この名前を必ず天下に轟かせましょう」
こう父に答えるのだった。彼は本気で言っていた。
そうしてそのうえで。周りにも告げた。
「我が名はこれより織田信長だ」
「信長様ですか」

「それが御名前なのですね」
「そうだ、覚えておくことだ」
こう家臣達にも話す。
「この名前をな」
「わかりました。それでは」
「これからも宜しく御願いします」
「ではだ。まずはこの尾張だ」
今彼等がいるその国のことだった。
「そしてそれからだ」
「それから、ですか」
「この尾張だけではなく、ですか」
「そうだ、見ておくのだ」
信長となってだ。彼は何かを背負っていた。人の目では見ることはできないものだがそれでもだ。そこには確かに背負うものがあった。
「わしのこれからをな」
「それでは」
「我等も共に」
吉法師は織田信長となった。この時彼は十四歳であった。そうしてこれが。彼のはじまりであった。

第三話　完

２０１０・７・２８

第四話　元康と秀吉その一

第四話　　元康と秀吉

元服して信長となった。それからすぐにだった。

信秀は三河にも勢力を拡げていた。そうしてそこに進出している今川氏と激しい戦いを繰り広げていたのである。彼の敵は実に多かった。

この今川には一人の傑物がいた。彼の名を太源雪斎という。

僧侶でありながら主である義元の師でもあり僧としての仏教に対する素養だけでなくその他の教養も豊かであり政はおろか軍略にも秀でていた。まさに今川の柱である。

その彼がだ。主義元に対して告げていた。

「三河から織田の勢力を取り除くべきです」

「そして三河を完全に麿のものにするのじゃな」

「はい」

まさにその通りというのだった。こう眉を丸くしてお歯黒を塗り髭も公家風にしている白面の男に告げていた。見ればその服も公家風であり烏帽子もだ。やや太めであるが気品のある面持ちもありやはり公家に見える。

その彼にだ。雪斎は告げていたのだ。

「その通りです」

「元より織田の進出は好むところではなかった」

ここで義元のその公家そのものの顔が歪んだ。

「それはな」

「さすればです。早速」

「して何処を攻めるのじゃ？」

「安祥です」

そこだというのである。

「あの城を攻めましょう」

「弾正の小倅の一人が入っておったな」
織田信秀のことである。
「そうじゃったな」
「左様です。先程元服して織田信広と名乗っております」
「あの大うつけの弟か」
「母親こそ違いますがその通りです」
「うつけの弟はうつけであろうな」
義元は頭から馬鹿にした調子であった。
「所詮のう」
「それはわかりませんが少なくとも若輩であります」
雪斎はそれは間違いないという。
「さすれば」
「兵を動かすか」
「そしてその先陣はです」
「朝比奈にでもさせようぞ」
義元は特に深く考えることなく重臣の名前を一つ出した。
「それか関口か」
「いえ、それがしです」
ところが、であった。雪斎はここでこう言うのだった。
「それがしが行きましょう」
「何っ、和上がか」
義元は彼のその言葉を聞いてだ。すぐに驚きの声をあげた。
「自ら先陣を務めるというのか」
「幾度もしておりますが」
「いや、しかしだ」
義元はいささか狼狽を見せながら彼に問い返す。
「和上は今川の軍師であり執権ぞ。しかも僧ではないか」
「僧が戦うのも今の世ですが」
「だからか」
「それがしに思うところがあります故」

顔立ちは整い温和なものがある。それを見ると決して戦を好む男ではないのがわかる。しかしその目には強い光が宿っていた。
「ですから」
「自ら向かうと申すのか」
「全ては今川の御為」
彼は静かにこう述べた。
「さすれば。宜しいでしょうか」
「ふむ」
義元は彼の言葉を受けて一旦瞑目した。そのうえで再び目を開きそのうえでまた言うのだった。
「わかった」
「宜しいですか」
「行くがいい。そしてその目的を果たすのだ」
「まずあの城を攻略し織田信広を虜とします」
それからさらに話す。
「そして、です。織田信広を人質としてです」
「どうするのじゃ？」
「今尾張にいる松平竹千代を取り戻します」
「交換だというのじゃな」
「はい。松平氏はやはり三河の主です」
このことは義元も雪斎も嫌になる程わかっていた。三河の者は結束が強い。そしてその中心にいる者こそ主である松平氏であるのだ。

第四話　元康と秀吉その二

その主である竹千代を手に入れることはそのまま三河を手に入れることになる。戦によらずして国を一つ手に入れることは実に大きかった。

「さすればこそ」

「わかった」

義元もここで頷いた。

「では和上に任そう。三河のことはな」

「お任せあれ。さすれば」

こうして雪斎は自ら軍を率いてその安祥城を攻めた。彼の軍略は老練にして精巧なものであり城は忽ちのうちに陥落した。そして信広は捕らえられてしまった。

このことはすぐに信秀にも伝わった。彼はそれを聞いてまずは驚いた。

「信広がか」

「はい、今川に捕らえられてしまいました」

平手が主に対して述べていた。

「お命は無事です」

「左様か」

「しかしそれによってです」

「何かあったか」

「今川から信広様をお返しするとのことですが」

「それだけではあるまい」

条件がないとは考えなかった。信秀はこのことはすぐに察した。

「そうだな」

「はい、今川もまた人質を返すように言っております」

「あれか」

信秀はそれを聞いて忌々しげに述べた。

「三河のあれか」
「竹千代殿です。如何しましょうか」
「止むを得ん」
苦い言葉だった。しかしそれと共に決断の言葉であった。
「さすればじゃ。応じよ」
「はっ、それでは」
「これで三河への足掛かりが消えたな」
「無念ですが」
「それで済むとは思えぬしな」
信秀はここでこうも言うのであった。実に忌々しげな顔で。
「おそらく今川に寝返る者が出るぞ」
「刈谷の水野や鳴海の山口が危ないですな」
「その通りじゃ。また戦をせねばならんかもな」
反乱を抑えるかその反乱を起こした者にだというのだ。
「ここはな」
「左様ですな。今川はこれから傘にかかって攻めるでしょう」
「今川の兵は多い」
信秀は今川のことをよくわかっていた。伊達に幾度も戦ってきたわけではない。その兵の多さのことは実によくわかっていたのである。
「その相手だけで一杯になるな」
「左様です、ましてやです」
「斉藤の相手をしている余裕はなくなる」
信秀の目が光った。
「清洲の方も気になるしな」
「それで考えがあるのですが」
平手の態度があらたまってきた。
「宜しいでしょうか」
「手を結ぶのだな」
信秀はすぐに彼が何を言いたいのか察した。

「どの者とだ」
「斉藤はどうでしょうか」
平手はそのあらたまった態度で述べた。
「美濃の斉藤は」
「美濃か」
「はい、斉藤もまた多くの敵を抱えております」
ここで平手の分析が述べられた。その斉藤氏について述べるのだった。
「まずかつての土岐に与する者達がまだ美濃におりますし」
「それに外だな」
「まずは近江の六角」
この家であった。近江に勢力を張る古豪である。

第四話　元康と秀吉その三

「そして越前の朝倉です」
「斉藤も悩みはあるか」
「朝倉はあの朝倉宗滴が頑張っております」
「あの老人は老いてさらに盛んだな」
「名将です」
まさにそれだというのである。
「あの者が盛んに美濃を脅かしていますので」
「油断できぬというのだな」
「少なくとも尾張に目を向けている余裕はありません」
平手はそう読んでいた。
「ですから。ここはです」
「斉藤か」
「都合のいいことにまずこちらには信長様がおられます」
自身が今直接仕えているその若き主である。
「そして斉藤にはです」
「蝮の娘か」
「帰蝶でしたか」
「確かそんな名前だったな。何でもかなり気が強い娘だそうだな」
信秀の顔がここで微妙に歪んだ。そのうえでさらに言うのだった。
「娘ながら武芸にも秀でているというがな」
「左様ですか」
「蝮の子は蝮か」
信秀は少し吐き捨てるようにして言った。
「尋常ではないようだな」
「しかしです。道三の正室の娘でしたな」
「うむ」
「さすれば問題はないかと。信長様も嫡流であります故」

「まずは結ばせるということか」
「はい、そして気の強い娘ならばです」
ここから先は平手の願望だった。だが彼はそれをあえて言うのであった。
「信長様を上手く制せられるでしょう」
「それも望んでおるのだな」
「信長様は奇矯に過ぎます」
平手の顔が困ったものになった。
「あれでは。この先」
「それはいいと思うがな」
ところが彼の父である信秀の意見はこうしたものだった。
「別にな」
「よいというのですか」
「そうだ。あの武田にしても長尾にしても幼い頃はかなりの悪童だったというではないか」
武田晴信と長尾景虎のことである。
「特に長尾はな」
「それは聞いておりますが」
「うつけと言われておるがわしはそうは思わん」
顔も目も笑ってはいない。真剣そのものの言葉だった。
「若しうつけならばだ」
「どうだと」
「権六にしろ新五郎にしろ牛助にしろ仕えてはおらん」
彼等の気性は信秀が最もよくわかっていた。自身に仕えるに相応しい者でなければそ仕えはしない、そうした気性を知っているのだ。
「それにだ。今信長の下には多くの者が集まってきておるな」
「それはそうですが」
「わしも見たがどれも見事な者達ばかりだ」
信秀はこう語る。
「あれだけの者達が仕えるとなれば尋常な者ではない」

「さすれば安心してよいというのですね」
「これはわしの贔屓目ではない」
それは断じてだという。
「信長は決してうつけなどではない」
「では何でしょうか」
「大うつけは大うつけでも天下を動かす大うつけだ」
「天下をですか」
「あの者はやる。わしより大きなことをな」
ここでだ。信秀はこの場ではじめて笑ってみせた。
「やるぞ。政秀よ」
「はい」
「それを見届けよ」
こう平手に告げるのだった。

第四話　元康と秀吉その四

「よいな。見届けるのだ」
「それがしがですか」
「信長を支えよ」
今度は命じた。
「そしてあ奴を見届けるのだ」
「この命がある限りですか」
「そうだ、ある限りだ」
まさにそうだというのだ。
「信行もおる。あ奴はどうも野心がない故な」
「はい、信行様は確かに」
勘十郎のことだ。彼も元服しているのだ。
「殿の跡を継がれようという野心やそういったものは」
「ないな。信長に仕えることでよいと思うておる」
「それは弟様方皆そうですな」
「幸いなことにな。信長には優れた弟も多くおる」
この時代一族の者もまた武将となり政に携わった。その代表が武田氏であり彼は弟達の補佐を受けてもいたのである。これは全ての家がそうだ。
「そなた達だけでなくな」
「さすれば信長様は」
「必ずや大きく羽ばたく」
また笑顔で言う信秀だった。
「そしてその為にもだ」
「美濃との御婚因を」
「しようぞ。その話進めておけ」
「はっ」
こんな話が為されていた。そうして程なくして竹千代は信長の弟

信広との交換で今川の下に行くことになった。信長とは別れである。
尾張と三河の国境でだ。竹千代は泣きそうな顔になっていた。しかしその彼に対して見送りに来ていた信長はこう告げるのだった。
「泣くな」
「しかしこれで信長殿とは」
「また会う」
こう竹千代に告げた。
「まただ」
「御会いできるでしょうか」
「わしは尾張を一つにする」
まずは自分のことから述べた。
「そして御前はだ。三河だ」
「三河ですか」
「三河は御前のものではないのか」
ここでだ。竹千代に叱責めいた口調を送った。
「そうではないのか」
「それは」
「いいか、御前はわしの弟だ」
前に彼に言ったことをここでも言った。
「その御前はだ。三河を取れ」
「そこまで言われますか、私に」
「そして三河だけではない」
そこだけではないと。信長の言うことは今の竹千代にはかなり大きなものだった。しかしそれでも彼はあえて言うのであった。
「遠江も駿河もだ」
「駿河まで」
「手に入れるのだ」
これが信長が今の竹千代に告げることだった。
「御前には三国を任せる」
「その三国を」

「わしは西に出る。まずは尾張を一つにしてだ」
そのこともだ。彼にとっては一歩に過ぎなかった。
そしてだ。さらに言うのだった。
「美濃、そして京だ」
「都まで、ですか」
「全てを手に入れるるつもりだ。わしはその御前の弟だ」
「ならばその私はですか」
「三国を手に入れわしと共に天下を歩め」
「その天下を」
「わしには多くの家臣がいる」
今集ってきている者達だ。それに他ならない。
「それに多くの弟達もいるがだ」
「信行殿達ですね」
「もう一人、いや二人か」
信長は考える顔になっていた。
「二人欲しいのだ」
「二人といいますと」
「まずは御前だ」
最初は彼だった。

第四話　元康と秀吉その五

「もう一人はまた見つける」
「それに相応しい御仁をですね」
「しかしだ。わしは御前をその一人にしている」
「弟にですね」
「その御前は三国だ。その三国を任せる」
「果たして私にできるでしょうか」
今の竹千代にはである。何度聞いても夢のような話だった。その三国は今は今川義元が治めている。東海一の弓取りと言われている彼がだ。
「今川殿にとって代わるようなことが」
「今川か」
信長はその名を聞いてもだ。どうという顔も見せなかった。
「確かに勢力は大きいがどうということはない」
「どうという、ですか」
「そうだ、大したことはない」
また言ってみせたのだった。
「あの太源雪斎だけだ」
「あの方だけだと」
「兵も大して強くはない。それよりもだ」
信長の目が鋭くなった。強い光を放ちながら語る。
「武田だ、そして長尾だ」
「その二つですか」
「それに北条、毛利だ」
合わせて四つだった。どれも今勢力を大きく伸ばしている家だ。
「この四つの家がだ」
「信長殿にとっての敵ですか」
「大きな、な。わしはあの四つの家を全て倒さなくてはならぬだろ

う」

今信長は天を見ていた。その大きなものをだ。そこには彼にだけ大きなものが映っていた。そうしてそのうえで家康に語るのである。

「天下を制する為には」

「天下を」

「わしはやる」

彼はまた言った。

「わかったな。その為に御前の力が必要だ」

「私の力が」

「無論統一してからもだ」

それからもだと。信長の言葉は続く。

「今わしの下に集っている者達と同じくだ。御前の力を借りたい」

「統一してからも」

「統一は何の為にあるか」

信長が語るのは野心だけではなかった。

「それは何の為だ」

「民でしょうか」

竹千代は信長の言葉を聞いてだ。すぐにこの言葉を口に出した。

「それでしょうか」

「そう言えるな」

「はい、民があってこその全てです」

それはよくわかっていた。彼もである。

「ですから」

「そうだ、戦乱では民は完全に幸せにはなれぬ」

「太平になってこそ」

「天下太平になってこそ民は真の幸福を手に入れられる」

これが信長の考えだった。

「だからこそだ。わしは天下を手に入れる」

「民の為ですか」

「その為に私は天下を手に入れる」

何処までもだ。彼は天下を目指すというのだ。
「わかったな」
「わかりました。それでは」
「大きくなれ」
その竹千代への言葉である。
「駿河でもな」
「人質であろうともですね」
「悪いようにはされぬ筈だ」
信長はここでこうしたことも告げた。
「決してな」
「それは何故ですか？」
「御前の資質はわかる者にはわかる」
これは既にわかっている者の言葉だ。それに他ならない。
「雪斎はそれを見抜く筈だ」
「あの方がですか」
「あの男の下で学べ」
また竹千代に告げた。
「いいな、そのうえでわしのところに戻れ」
「では。また」
「会おう、よいな」
こうしてだった。信長と竹千代は別れた。そうしてであった。

第四話　元康と秀吉その六

竹千代は己の忠臣達と共に駿河の駿府城に入った。そうしてまずは義元に会った。その面会はつつがなく終わった。
その後でだ。彼に親しく声をかける者がいた。それは。
「なっ、貴方は」
「まさか」
まずは竹千代の周りの者達が驚いた。そこにはどう見ても公達にしか見えない若者がいた。その彼が竹千代に親しく声をかけてきたのだ。
「氏真様」
「まさか」
「ははは、何を驚く」
だがその若者氏真は明るく笑って驚く彼等に告げた。
「麿がこの者に声をかけてはいかんのか？」
「ですが我等はです」
「その。この今川の」
「よいよい」
氏家はここでも明るく笑って話す。
「そんなことはどうでもよい。竹千代じゃったな」
「はい」
「これから楽しくやろうぞ」
実に気さくに声をかけてきていた。
「よいな」
「ですが私は」
「だから人質とかそういうことはよいのじゃ」
「はあ」
「麿は麿、そなたはそなたじゃ。卑屈になってはいかん」
「それは駄目ですか」

「何故卑屈になる必要がある」
笑って竹千代に問うてきた。
「ないではないか」
「そうなのですか」
「うむ、ない」
また彼に告げた。
「そうしなければならぬ理由は全くないぞ」
「人質であっても」
「それ程人質にこだわるか」
氏真はそんな竹千代の態度にいい加減思うところができたのか。
まずは一旦考えた。そうしてそのうえでこう彼に告げるのであった。
「さすれば今から麿とそなたはじゃ」
「氏真様と私は」
「友じゃ」
それだというのである。
「友じゃ。これでよいな」
「あの、しかしそれは」
「だからじゃ。堅苦しくなる必要も卑屈になる必要もないのじゃ」
このことは強く言う彼だった。
「例えばじゃ。麿は戦は嫌いじゃ」
「はあ」
「血を見るのは好きではない」
戦国の世に生きる者としてはどうかと思う言葉だ。ましてや大名の嫡子である。しかし彼は今そのことを竹千代に対して話した。
「太平の世が来ればいいと思うておる」
「そうなのですか」
「戦は嫌いじゃがそれで誰にも引け目は感じぬぞ」
こう竹千代に話す。
「何故そう感じることがある」
「戦が嫌いであってもですか」

「和歌や蹴鞠は好きじゃ」
どちらも公家の遊びである。
「政はそうじゃな。民の笑顔はやっぱり好きじゃ」
「それは私もです」
「これを嫌うてはどうしようもない。民を苦しめる大名なぞいらぬ」
このことについては強い言葉を出す氏真だった。このことはどうしても引けぬといった面持ちでさえある。
「そうであろう。まあとにかくじゃ」
「はい、とにかく」
「今より麿とそなたは友じゃ」
またこのことを竹千代に告げた。
「それでよいな」
「それでは」
「ではこれより和上のところに参ろうぞ」
「和上といいますと？」
「太源雪斎殿じゃ」
氏真は楽しそうに笑ってそのお歯黒を見せながら竹千代に話した。
「我が今川の軍師殿じゃよ」
「あの方ですか」
「ふむ、知っておるな」
竹千代の顔を見てすぐにそれを察したのだった。

第四話　元康と秀吉その七

「やはり。その名は尾張にも響いて折るか」
「話には聞いております」
いささか畏まって氏真に答えたのだった。
「何でもその教養、軍略、知識は天下に比類なきものとか」
「その通りじゃ。いや、凄い方であってな」
「そこまでなのですか」
「父上の師でもあったし麿の師でもある」
こうも竹千代に話す。
「そしてそなたもじゃ」
「私もですか」
「麿と共に和上に学ぼうぞ」
竹千代を誘うのだった。
「それでどうじゃ」
「そこまで仰るのなら」
「それではな」
こうしてだった。竹千代は雪斎に学ぶこととなった。雪斎は竹千代を教えるうちにだ。やがて彼に対してこんなことを言うようになった。
「どうやらそなたはだ」
「何でしょうか」
「今川の臣に止まる者ではないな」
その彼を前にしての言葉である。
「それ以上の器だ」
「それ以上ですか」
「天下を統べることができるやも知れん」
「いえ、それは」
「いや、そうじゃ」

謙遜しようとする竹千代をここでは制した。
「そこまでの才があるな」
「だといいのですが」
「だがそなたより先に進む者がおるな」
雪斎はこんなことも言ったのだった。
「その者を立てずにはいられぬな」
「その方をですか」
「立てよ」
今竹千代に告げた言葉は一言だった。
「さすればじゃ。立てよ」
「そして私はどうなるのでしょうか」
「その者と共に大きなことをするな」
竹千代のその相を見つつ。述べた言葉だった。
「天下にとってな」
「天下を太平にできるでしょうか」
「できる。必ずや」
「左様ですか。では私は」
「そなたの様な相の者ははじめて見た」
雪斎の今の言葉はまじまじとしたものであった。
「よもやそこまでとはな」
「和上は相がおわかりになられるのですね」
「相を見るのも学問のうちじゃ」
そうだというのである。
「だからじゃ。知っておる」
「それでなのですか」
「竹千代よ」
あらためて彼の名前を呼んでみせたのであった。
「よいか」
「何でしょうか」
「そなたにはわしの全てを教えよう」

厳かな声であった。
「わしの知っていることを全てじゃ」
「全てですか」
「左様、そしてじゃ」
「そして」
「それを活かすのじゃ」
こうも彼に告げた。
「天下の為にじゃ」
「天下の為に」
「それが今川の為になるならばそうせよ」
雪斎の言葉は深かった。まるで底知れぬ何かを既に見ているように。
「よいな。今川の為にじゃ」
「はい、それでは」
「しかし今川よりも天下の民が大事だと思えばじゃ」
「その時はどうされよと」
「そなたが望むようにせよ」
竹千代にだ。任せるというのである。
「その時はだ」
「天下の民の為ですか」
「それが最も大事なのじゃ」
雪斎は竹千代を見ていた。そうしてそのうえで語っていた。

第四話　元康と秀吉その八

「そしてじゃ」
「そして？」
「そなたは一人ではないな」
「といいますと」
「人を惹き付けるものも持っておるな」
そのこともだった。彼は見抜いたのである。
「それもかなりな」
「持っていますか」
「そなたには多くの三河の者達がおるな」
「あの者達ですか」
「あの者達はそなたにとって大きな力になるだろう」
「三河の者達もまた」
「果報者よ。そなただけでなく多くの者達も集う」
雪斎の今度の顔は笑っていた。そうしてそのうえで話すのだった。
「大きく羽ばたかぬ筈がない」
「この世にですね」
「羽ばたけ。そして大きくなれ」
竹千代にだ。しかと告げたのだった。
「そしてそなたが天下に出る為にわしは全てを授けよう」
「有り難うございます」
「では。はじめるぞ」
やはり竹千代を見ている。そのうえでまた告げた。
「これからな」
「それでは。今から」
こうしてであった。雪斎は竹千代にその全てを教えはじめた。そうしてそのうえでだ。彼が元服するその時にだ。
義元はだ。彼に対して告げた。

「そなたの名前はもう決めてある」
「私の名前ですか」
「松平元康」
この名を言うのだった。
「それが元服してからのそなたの名じゃ」
「松平元康ですか」
「麿の名を一字授ける」
義元は微笑んでそのうえで竹千代に対して話した。
「和上がそうするべきだというのでな」
「和上がですか」
竹千代、元服した元康はだ。義元の今の言葉を聞いて雪斎を見た。彼は義元のすぐ傍に控えている。そうしてそこから元康を見ていたのだ。
「私に」
「左様。この意味がわかるな」
「はい」
すぐに答えた。主の名を一字与えられることはどういうことなのか。戦国においてはもう言うまでもないことであるからだ。
この上ない名誉だ。雪斎はその名誉をあえて彼に授けたのだ。
「では元康よ」
「はい」
「これからも励め」
義元はこう彼に告げた。
「よいな。励めよ」
「わかりました。それでは」
「うむ、元康か」
そしてだ。義元の隣にいる氏真はだ。元康の元服を心から喜んでいた。そうしてそのうえで前に控えている彼に対して言うのであった。
「よい名じゃのう」

「氏真様もそう思われますか」
「思うぞ、よい名じゃ」
にこにことした顔で元康に告げる。
「そなたによく似合っておる」
「左様ですか」
「若しかしたら他にも似合う名前があるかも知れぬがのう」
「となるとじゃ」
「どの様な名でしょうか」
今の氏真の言葉にはだ。彼の父と師が同時に問うた。
「そうなればじゃ」
「あったのでしょうか」
「いやいや、言っただけでございます」
氏真は二人の問いにはすぐに打ち消しの言葉で返した。
「ですから深い考えは」
「ないというのか」
「左様ですか」
「はい、軽い言葉でありますので」
だからもうこれでと。また二人に話した。

第四話　元康と秀吉その九

「そういうことで」
「ならよいのだがのう」
「それでは」
「そしてじゃ」
義元は我が子との話を終えてだ。また元康に顔を向けてきた。そうしてまたしても彼に対して声をかけるのだった。
「まず御主はじゃ」
「一体何をすればいいのでしょうか」
「政にあたれ」
こう告げるのだった。
「川に堤を築くのも田畑を開くのも。そして町を栄えさせるのもじゃ」
「そういったことをしてからなのですね」
「そうじゃ。まずは政じゃ」
義元はこのことについて話す時にだ。元康だけでなく氏真も見ていた。つまり二人に対して話してみせているのである。
「それからじゃ」
「国を栄えさせてからですか」
「武田も北条もじゃ。国を見事に栄えさせておるぞ」
「左様、どちらもその政はいいものじゃ」
雪斎も語る。
「だから元康よ。今はじゃ」
「政ですか」
「戦はその後でよい」
穏やかな声で元康に告げたのである。
「よいな。その後じゃ」
「さすれば今は、ですか」

「政じゃ」
何につけてもまずはそれだというのだ。
「まずはそれなのじゃ」
「政、やはりそれですか」
「ほう」
雪斎は元康の今の言葉に面白げな声をあげた。
「御主、もうわかっておったか」
「前にある方から聞きましたので」
「ある方か」
それを聞いてだ。雪斎は察した。しかしそれに気付いたのは彼だけだった。義元も氏真もである。それが誰かさえ考えもつかなかった。
「その者、誰か知らぬが」
「凄い者なのかもな」１０
こう言うだけだった。
「そなたにそんなことを言うとはな」
「確かに見事じゃ」
「はい、全くです」
雪斎は二人にこう述べただけだった。多くは語らなかった。
だがだ。その者の名を心の中で呟いてだ。こう思うのだった。
「容易ならざる相手やもな」
「政をするのは麿も好きじゃしな」
「麿もまた」
義元と氏真は政については乗り気だった。しかしである。
「戦はのう。馬に乗るのはどうも苦手じゃからな」
「戦そのものがどうも」
見れば義元は胴が長かった。そして手足が短い。そうした体形を見る限り彼は馬に乗ることが苦手なのは明らかであった。
「馬より輿じゃな」
「義元様、できればです」

雪斎がその義元に対して上奏気味に述べる。
「馬に乗られることは熱心にです」
「わかっておるのだがのう」
義元は浮かない顔で言葉を返した。
「しかしどうもじゃ」
「何かあればお逃げになられるのは御一人ですから」
「じゃから馬術と水術はじゃな」
「左様です、どちらもです」
「麿はどちらも苦手じゃ」
水練もだというのだ。
「じゃからな」
「ううむ、何かあれば」
「その時は和上がいるではないか」
雪斎を見て微笑んだ言葉だった。
「そうではないのか」
「それはそうですが」
「これからも頼むぞ」
穏やかに笑って彼への絶対の信頼を見せる。
「よいな」
「この雪斎何があろうともです」
畏まって義元に告げる。
「義元様、そして今川の御為に」
「和上がいる限り今川は安泰じゃ」
義元は心から信じてこう述べた。
「三州はこれからも今川のものじゃ」
「はい」
こんな話をしていた。元康は今は政にかかっていた。彼は今川の下で雪斎にその全てを授けられていた。そのうえで大きく羽ばたこうとしていた。

第四話　元康と秀吉その十

そしてその時だ。織田にまた新たな者が加わっていた。
「木下藤吉郎か」
「随分小さいな」
「しかも猿みたいだな」
「そんな顔だな」
足軽の者達がその彼を見て口々に言っていた。見ればその藤吉郎も足軽である。つまりは彼等の中の新入りなのだ。
「そんな小さな身体で戦の場に出るのか？」
「また無謀だな」
「命は惜しくないのか？」
「ははは、命があればこそですが」
藤吉郎はその彼等の言葉にまずは笑って返す。何処か人懐っこい笑いである。
「しかしです」
「しかし」
「何だというんだ？それで」
「身を立てるには命を賭けなければなりませんね」
「まあそうだな」
「それはな」
足軽達も彼のその言葉には頷いた。
「それでわし等もここにいるしな」
「足軽をやってるしな」
「そうだな」
「そういうことですよ」
藤吉郎はその笑いのまま再度述べた。
「命を賭けますが命は捨てません」
「その言葉矛盾していないか」

「そうだな」
足軽達は今の言葉にはこう述べた。
「命は捨てないとは」
「賭けるというのに」
「それでは違うではないか」
「そうだな」
「いえ、違いません」
ところが藤吉郎自身はこう話す。足軽の粗末な鎧と陣笠姿のままだが彼だけは何かが違う感じだった。
「それが違わないのです」
「そう言われてもな」
「この稼業は生きるか死ぬかだからな」
「だからな」
それが足軽なのだ。まさに命を担保にして生きているのだ。
「それでそんなことを言ってもな」
「死なない？」
「戦の場でか」
「ここを使って」
ここでだった。藤吉郎は自分の頭を右の人差し指でこんこんと叩いてみせた。陣笠の上であるがそれでもだ。叩いてみせたのである。
「生きるんですよ」
「頭か？」
「腕ではなくか」
「頭でか」
「はい、頭でなのですよ」
またこう話すのだった。
「私は身体が小さいですし」
「確かにな。小さいな」
「そうだな」
誰がどう見てもだった。彼は小柄だ。しかもその顔は本当に猿に

そっくりだ。お世辞にも立派な外見とは言えなかった。見栄えのしないものである。
「それでは力もな」
「弱いな」
「違うか？」
「それもその通りでして」
やはりその通りだった。
「ですから余計に頭を使ってです」
「結局は力だぞ」
「そして腕だ」
「頭が必要あるか？」
「ないだろ」
「なあ」
彼等は口々にこう言う。しかしであった。

第四話　元康と秀吉その十一

藤吉郎だけがだ。言うのであった。
「それでも私は頭を使いますので」
「まあ好きにしろ」
「御前がそれで生き延びるっていうんならな」
「俺達はそれでいいしな」
「仲間は多い方が助かるからな」
そしてこんなことも言うのだった。
「生きている奴が多い方が楽しいしな」
「戦争だって勝てるしな」
「生きていてこそだからな」
だからだというのだ。下っ端である足軽達にとってみればそんなものだった。まず生きるかどうかなのだ。まさにそれが問題なのである。
それで彼等もこんな話をする。そうしてだった。
「それじゃあ御前も生きろよ」
「いいか、死ぬなよ」
「生きてこそだからな」
「わかっています。それにです」
「それに？」
「今度は何だ？」
彼のその言葉に問い返す。
「まだ何かあるのか」
「聞いてやるから言ってみろ」
「それで何だ？」
「実はわしの弟も仕官することになりまして」
こう仲間達に話すのだった。
「この織田家にです」

「というとあれか。足軽か」
「御前みたいにか」
「城の雑用に雇われることになりました」
それだというのである。
「そちらにです」
「兄貴は足軽で弟は雑用か」
「まあそんなところだな」
「百姓だとな」
「そうですね。百姓ですしね」
彼は一介の百姓の出だ。それはどうしようもない事実だ。その小柄な身体と共にだ。彼にとってはどうしようもない現実であった。
そしてそれについて思うところもある。だが、であった。
「けれどこのままじゃ終わりませんから」
「のし上がるか」
「そうするんだな」
「のし上がりますよ。ゆくゆくは武将になりますよ」
こんなことまで言うのだった。
「織田家の家老にまで」
「じゃあれか。柴田様みたいになるのか」
「それか林様みたいに」
「それはまた随分大きく出たな」
「全くだ」
皆今の彼の言葉には顔を崩して笑った。
「足軽から家老になるなんてな」
「そんなことできるか？」
「できたら凄いぞ」
「そうだよな」
「夢は大きくといいますからね。ですから」
まだ言うのだった。
「それを目指します」

「まあ頑張れ」
「平手様の横にいられたらびっくりだ」
「そうなったらな」
「はい、そういうことで御願いします」
こうしてだった。木下藤吉郎もまた織田家に入った。織田家にまたあらたな人材が加わった。しかしこのことにはまだ誰も気付いていなかった。
信長はふとだ。こんなことを前田に対して言った。
「又左、足軽はどうなっておる」
「足軽達ですか」
「そうだ、どうなっておる」
こう彼に問うたのである。
「稽古はつけておるか」
「つけてはおりますが」
ここでだ。前田の言葉は今一つはっきりとしないものになった。
「それでも。どうも」
「弱いか」
「はい、弱いです」
今度ははっきりと言ったのだった。

第四話　元康と秀吉その十二

「織田の兵、いえ尾張の兵はです」
「それは変わらぬか」
「残念ですが如何ともし難いです」
こうまで言うのだった。
「鍛えようとしてもちょっと厳しくすればへばってしまいますし」
「ううむ、本当に変わらぬな」
信長も自分の兵が弱いのはよくわかっていた。織田といえば弱兵というのはだ。最早天下に轟いてさえいた。そこまで弱いのだ。
「それはまた」
「それでどうされますか」
前田の言葉が実直なものになった。
「兵達を。どうされますか」
「殿、ここはです」
信長の家臣達で最も血の気の多い者が出て来た。柴田である。
「軟弱な兵達を叱り飛ばしそのうえでびしびしと」
「権六、御主がやるというのか」
「御言葉とあらば」
主のその言葉を待っていたかのような口調である。
「そうさせてもらいます」
「止めておけ」
即座の否定だった。
「御主の怒鳴り声は敵だけでなくあの連中も震えさせるわ」
「しかしです」
「そこまでせずともよい」
柴田に対してこうも話す。
「そこまではな。よいな」
「ではどうされるのですか」

「結局あれじゃな。百姓の次男や三男を引っ張ってきても所詮は百姓」
信長が言うのはこのことだった。
「やはり田畑で働かせるのが一番じゃ」
「では百姓に戻しますか」
「戻りたい者はそうさせよ」
信長は実際にこう言った。
「そしてじゃ。残った者をまず鍛えよ」
「残った者をですね」
「百姓に戻らずに足軽にいたいというのなら遠慮はいらぬ」
その場合はというのだった。
「そうした者はじゃ。遠慮なく鍛えるのじゃ」
「はい、それでは」
「そしてその兵を戦の場に出す。これからはそうしておくぞ」
「ですが殿」
今度は丹羽だった。
「強い兵を作るのはいいのですが」
「それをしたら兵が減るな」
「間違いなく」
丹羽は厳かに告げた。彼はこのことを気にかけていた。
「兵が少なくては。それでは」
「何、兵は雇え」
信長は素っ気無く答えた。
「なりたい者をな」
「といいますと浪人を多くですか」
林がそれを聞いて述べた。
「そうなると見受けられますが」
「その通りだ。浪人でも誰でも兵になりたい者を雇いそのうえで強兵とする」
「ふむ、左様ですか」

それを聞いて最初に頷いたのは河尻だった。
「成程」
「どう思う？」
信長はあらためて家臣達に己の考えの是非を問うた。
「それはじゃ」
「わしはいいと思います」
河尻はまた言った。
「それで」
「そうか。鎮吉はよしというのじゃな」
「強兵が集まればそれに越したことはありません」
「そうですな、確かに」
次に頷いたのは金森だった。
「弱兵なぞ。幾らいても仕方がありませぬ故」
「確かに。ただ」
ここで異論めいたことを述べたのは村井だった。
「一つ問題があります」
「人が集まるかどうかだな」
「そのことにも考えが及んでいましたか」
「無論。人が来てこそじゃ」
やはりそれは充分にわかっている信長だった。既にという声と目だった。

第四話　元康と秀吉その十三

「こうしたことをやって上手くいくのはじゃ」
「では殿」
坂井がその信長に問う。
「人を集める手は」
「ある。これまで通りにしていればよいのじゃ」
「これまで通りですか」
それを聞いていぶかしんだのは堀だった。
「それはどういうことでしょうか」
「言ったまでだ。今わしは座を治める城下にしておらんな」
「はい、それは」
「その通りですが」
家臣達は信長のその言葉に頷いた。
「楽市楽座」
「それですね」
「誰でも商いをするようにする。そうすれば人が来る」
これは信長が自分が治めている領内で行っていることである。それによって今彼の治める領内では確かに人が集まり栄えようとしているのだ。
「そうだな」
「そこでは商いをする者だけでなくですか」
「兵になりたい者も来ると」
「人は色々じゃ」
また言う信長だった。
「商いをしたい者だけではないじゃろ」
「成程、楽市楽座は商いを栄えさせるだけでなくですか」
「そうした者も集めますか」
「左様じゃ。その雇った兵の給与は栄えた街から入る金や年貢で充

分に賄える。いや、賄えるだけの兵を雇うのじゃ」
「それだけですか」
「それだけでよい」
佐久間にも述べた。
「あまり多く雇ってもそれはそれで金も米も食う。無理はするものではない」
「確かに。その通りです」
佐久間は主の言葉を成程とした。
「養える兵だけを持てばいいですからな」
「その兵を鍛え法を守らせよ」
法もだというのだ。
「わしの領内と同じじゃ。悪さは絶対に許さぬぞ」
「では一銭でも盗めば」
「斬れ」
池田への返答は一言だった。
「そうした不埒者は斬れ、容赦なくな」
「わかりました」
「ではそうした輩は」
「では今よりそれを行うのじゃ」
ここでも動きの早い信長だった。こうして忽ちのうちに足軽はなりたい者だけがなることになった。それを受けて足軽から百姓に戻る者もいた。しかし中には残る者もいた。
「何だ、猿。御前は残るのか」
「足軽のままか」
「ええ、そうします」
藤吉郎は笑って仲間達に応える。彼等はもう足軽を止めて百姓に戻るというのである。
「考えましたけれど」
「そうか。わし等は信長様が開墾して下さった田に入る」
「そこで田を植えて畑を耕す」

「元のようにな」
「では私はこのまま」
あらためて百姓のままでいるというのだ。
「足軽から部将を目指します」
「そうしろ」
「頑張れよ」
「そういえばな」
仲間の一人がここでまた彼に言った。
「御前元服したんだったな」
「名前変わったらしいな」
「はい、秀吉です」
その名前になったというのである。
「木下秀吉です。そうなりました」
「そうか、秀吉か」
「いい名前だな」
「猿よりもずっとな」
「この名前は気に入りました」
笑いながらまた言う彼だった。
「これからは秀吉と呼んで下さい」
「あまりにも立派過ぎて言いにくいのう」
「そうじゃな」
「どうもな」
しかし仲間達は彼のその言葉にいぶかしむ顔になるのだった。そうしてそのうえで彼に対してこんなことを言うのであった。
「これまで通り藤吉郎でいいか」
「それか猿で」
「そういったものでよいか？」
「ううむ、まあいいです」
秀吉は腕を組んで難しい顔になったがそれでもよしとした。
「それじゃあそれで」

「ではこれからもそう呼ばせてもらうな」
「それでな」
「じゃあな、猿」
呼び名はこれであった。
「元気でな」
「頑張れよ」
「はい、頑張ります」
秀吉はこれまで以上に明るい顔で返す。
「この名前天下に轟かせますから」
こう胸を張って言うのだった。木下秀吉も今歩みはじめた。織田家に多くの者が集まってきていた。

第四話　完

２０１０・８・５

第五話　初陣その一

第五話　初陣

尾張の状況はだ。大きく変わろうとしていた。
「今川だな」
「はい」
平手が主信秀の言葉に頷いていた。
「一度叩いておきましょう」
「そうだな。そしてだ」
「信長様ですか」
「頃合いだな」
こう平手に告げた。
「そう思うのだがな」
「確かに」
平手も主のその言葉に頷いてみせる。
「そう思います」
「ならばじゃ。伝えておけ」
信秀の言葉はすぐだった。
「このことをな」
「わかりました」
こうしてであった。平手は信長のいる那古屋に戻った。そうしてそのうえで主と居並ぶ家臣達に対してこのことを告げたのであった。
「ふむ、確かに」
「頃合いですな」
まずは柴田と林が頷いた。
「そろそろと思っていたが」
「絶好の機会ですな」
二人はそれぞれ言う。
「殿の初陣にはです」

「いい時です」
「他の者はどう思うか」
平手は二人以外の家臣達に問うた。
「殿の初陣。よしと思うか」
「望むところですな」
前田は大きく笑って述べた。
「一番槍はわしが果たしましょうぞ」
「いや、このわしが」
「それはわしぞ」
佐々と河尻も名乗り出る。彼等の意気は盛んであった。
そして主の信長はというとだ。まずはその座で静かに聞いていた。
しかし家臣達は一通り話し終えてからだ。こう言ってみせたのである。
「では出陣じゃ」
「出られるのですね」
「相手は今川だな」
平手に対してこのことを問うた。
「そうであろう」
「はい、左様です」
平手もその通りだと答える。
「三河の安祥城の件以降尾張に迫る今川に対してです」
「そうであろうな。今は今川しかない」
信長は全てがわかったかの様な口調であった。
「我等が戦う相手はな」
「さすれば殿」
「ここは」
「皆も用意せい」
その家臣達にも告げた。
「全員じゃ。よいな」
「はい、それでは」

「今より」
「出陣は三日後とする」
その日まで告げた。
「先陣は権六、御主が務めよ」
「それがしがですか」
「そうじゃ、それに久助もじゃ」
滝川にも顔を向けて告げた。
「御主も先陣じゃ」
「それがしもまた」
「しかし御主は権六とはちと違う」
その滝川を見てからだ。さらに話した。
「そなたのやりたいようにせよ」
「それがしの」
「敵陣を荒らせ」
そうせよというのである。
「そして事前に敵のことを調べておけ。よいな」
「はっ、それでは」
「赤母衣、黒母衣の者はわしの傍におれ」
前田や中川といった面々を見ての言葉である。
「新五郎に牛助達もじゃ。じゃが五郎左はじゃ」
「はい」
ここで丹羽にだ。声をかけるとすぐに彼から言葉が返ってきた。

第五話　初陣その二

「兵糧や槍、弓の手筈をせよ。よいな」
「畏まりました、それでは」
「鉄砲もじゃ」
これについて言うのも忘れなかった。
「それもあるだけ持って行くぞ」
「あれもですか」
今言ったのは平手である。
「鉄砲もまた」
「そうじゃ。あるだけじゃ」
またこう言うのであった。
「持って行く。わかったな」
「あれを使うとは」
「まだ碌に撃ってもいないが」
「それでもですか」
家臣達は今の信長の言葉には多少であるが動揺を見せた。７６
「持って行かれると」
「しかもあるだけですか」
「そうじゃ。まあ見ておれ」
信長は不敵に笑って述べた。
「あれは必ず役に立つからな」
「では殿」
平手がここでまた告げてきた。
「三日後に」
「出陣とするぞ」
「はい」
こうしてであった。信長は初陣に出た。家臣達を全て連れてだ。
濃青の鎧に赤い陣羽織を身に着け。青備えの兵達を連れて出陣した

のであった。
その青い鎧に陣笠の兵達を見てだ。領民達は驚きを隠せなかった。
「何とまあ目立つことよ」
「青い鎧とな」
「しかも兜も陣笠も青とな」
「これはまた派手なことよ」
「あの殿様の考えることはわからんわ」
「全くじゃ」
こう言ってであった。驚くことしきりであった。
だが信長はだ。平然とこう言うのであった。
「目立つ為にしておるからいいのじゃ」
「それで青なのですか」
「武田は赤、長尾は黒」
ここで佐久間に応えて言った。
「北条は白、毛利は緑じゃな」
「はい」
「ならば我等は青じゃ」
こう言うのである。
「青じゃ。織田は青じゃ」
「それで青なのですか」
「まずは尾張を青くする」
そして言った。
「それからじゃ。尾張の青を天下に知らしめるのじゃ」
「尾張だけではなくですな」
平手が言った。
「そうされると」
「そうじゃ。わかったらまずはじゃ」
「この初陣を飾られるのですね」
「この戦い、当然の如く勝つ」
信長は前を見据えて話した。

「わしの初陣に相応しくじゃ」
「それでは我等も」
「共に」
家臣達も応える。そのうえで今川の軍がいる尾張の境に向かうのだった。
そこに着くとだ。滝川の者達から報告が上がった。
「そうか、あの場所にか」
「はい、あの場所にです」
「今川の主力がおります」
報告する忍の者はこう告げるのだった。
「どうされますか、ここは」
「休まれますか、それとも」
「知れたこと、攻める」
信長は一言でその者に告げた。
「すぐにじゃ。では皆の者、行くぞ」
「しかし殿」
ここでだった。平手が彼に言ってきた。

第五話　初陣その三

「敵の主力がいるのはわかりましたが」
「何じゃ、爺」
「しかし敵将がおりませぬ」
彼が言うのはこのことだった。
「この戦い太源雪斎が出陣しています」
「あの老僧がか」
「はい、左様です」
言わずと知れた今川を支えるその高僧だ。
「あの者を討てば。これからは」
「そうじゃな。今川はかなり弱まる」
信長もこのことはわかっていた。
「討てればな」
「さすれば。ここは」
「討てるに越したことはない」
信長はこうも話すのだった。
「討てればな。さすれば三河位は楽に手に入るな」
「その通りです、安祥でのことが返ってきます」
「三河か。爺はあの国が欲しいか」
信長はこんなことも言うのだった。
「あの国がまことに」
「といいますと」
「まあよい。とにかく今はじゃ」
多くを語ろうとするのを止めた感じでだ。話を変えてきた。
「敵の主力を叩く」
「ですから太源雪斎は」
「とにかく攻めるぞ。よいな」
また多くは言わなかった。そのうえでだ。その報告に来ていた忍

の者に対してあらためて告げるのだった。その告げることとは。
「よいか、権六と久助に伝えよ」
「はっ」
「何とでしょうか」
「まず権六はそのまま敵陣に突き進め」
柴田についてはそうせよというのだった。
「そして久助はだ」
「どうされよと」
「敵軍を乱せ」
滝川に対して伝えることはこれだった。
「よいな、乱せとじゃ」
「そうされよというのですね」
「すぐにわしも他の者も行く」
実際にだ。信長は今にも馬を進めようとしてた。手綱を握るその手が何よりの証であった。
「だからじゃ。わかったな」
「わかりました。それではすぐに」
「伝えよ」
信長はまた伝令の忍に告げた。
「すぐに全軍で攻めるぞ」
「畏まりました」
「五郎左にも伝えよ」
次は丹羽にであった。
「その役目はまずは終わりじゃ。共に攻めるぞ」
「五郎左も加えるのですか」
「あの者も必要じゃ」
だからだと。また平手に答えたのである。
「だからじゃ。よいな」
「ううむ、しかしあの者は」
「戦ではどうかというのじゃな」

「政や兵糧のことは見事です」
平手もそれはわかっていた。彼のこれまでの働きを見てだ。
「しかし戦については」
「あの者も初陣だからか」
「力がわかりませぬ。それでもですか」
「何、案ずることはない」
信長はここでは楽観した言葉を出したのだった。
「役に立たぬ者は最初から用いぬ。あの者もやってくれるぞ」
「では。やはり五郎左も」
「加えよ」
信長はまた告げた。
「よいな。そうせよ」
「わかりました」
平手も遂に頷いた。そうしてであった。
信長も馬を駆けさせた。赤母衣、黒母衣の面々がその周りを固める。そして家臣達も共にいる。そこには丹羽の姿もあった。
既に前線では柴田と滝川がそれぞれの働きをしていた。信長はまずは彼等に合流しなかった。

第五話　初陣その四

「殿、何故ここで合流されないのですか」
「柴田殿の軍と」
林兄弟が主に対して問う。
「右に迂回されていますが」
「これは一体」
彼等は今盆地の中に入ろうとしていた。敵の主力はそこにいるのだ。だが信長はその盆地にすぐに入らずにだ。まずは右に迂回したのである。
「何を御考えですか」
「ここでは」
「鉄砲だ」
信長はそれだというのだった。
「鉄砲を使うぞ」
「鉄砲を」
「ここで、なのですか」
「そうだ、使う」
信長はまた林兄弟に答えた。
「敵の側面を撃て、よいな」
「成程、そうされるのですか」
森がそれを聞いて納得した顔で頷いた。
「その鉄砲で敵を倒し音で驚かせ」
「そうだ、鉄砲は敵を倒すだけではない」
信長は鉄砲のことをわかっていた。だからこその言葉だった。
「音も使える。いきなりあの轟音を聞けばじゃ」
「左様ですな」
「そうすれば」
「敵は臆する」

「そこを」
「そうだ、一気に突っ込む」
こう加神達に話す。
「前から攻める権六達とは別に横から攻める。そうするぞ」
「畏まりました」
「それでは」
織田軍の主力は迂回を続ける。敵はそれに気付くことはなかった。
山の木々に軍が隠れていたからだ。そしてそれだけではなかった。
「かかれ、かかれ！」
「はっ！」
「このままですね！」
「そうだ、かかれ！」
柴田がだ。激しい攻撃を敵に対して浴びせ続けていた。その激しさはまさに炎の如くであった。
「我等だけで倒してしまえ、よいな！」
「はっ、それでは！」
「我等だけで！」
「殿の御手をわずらわせることはない」
こうまで言う柴田だった。実際に彼の軍は少数ながら今川の兵を押してさえいた。
「我等だけでだ」
「はい、勝ちましょう」
「我等だけで」
「それはできます」
「そうだ、できる」
その確信があった。
「わしだけではないからな」
「滝川様もまた」
「見事です」
「久助、忍の出なのは知っていた」

もうこのことは信長の配下で知らない者はいなかった。
「しかし。それと共にだ」
「戦も見事ですな」
「充分以上に戦っておられます」
柴田に仕える者達が言ってきた。彼等もまた果敢に戦っている。
「まさか戦の場でもあそこまでされるとは」
「お見事です」
「全くだ。見事という他ない」
柴田はその滝川の戦いを見ていた。彼は自ら采配を執り果敢に攻撃を繰り返していた。その剣でもかなりの敵を倒している。
「殿が先陣に選んだだけはある」
「そうですな、ということはです」
「やはり我等の殿は」
「恐ろしい方よのう」
柴田は不敵に笑ってこう言った。

第五話　初陣その五

「政も見事だが。人を選ぶ目もだ」
「素晴しいものです」
「ではこの戦は」
「間違いなく勝てる」
柴田は多くの戦場を生き抜いてきた勘から述べた。
「よいか、この戦勝つぞ！」
「はっ、それでは！」
「少しでも多くの敵の首を！」
「挙げよ、勝って織田の名を知らしめるのだ！」
柴田も自ら大刀を抜いた。そのうえで戦場を荒れ狂う。そしてそこにだ。
柴田と滝川の軍に押される今川勢の横にだ。突如として鉄砲が撃ち込まれた。
「なっ、何だ！？」
「いきなり。どの軍だ！」
彼等はそれに動揺した。そこにだ。
山からだった。信長率いる主力が一斉に駆け降りてきたのである。青い軍勢が緑の山から出てだ。そのうえで襲い掛かってきたのである。
「それ、一気に踏み潰せ！」
信長はその軍勢の先頭に立ち叱咤を飛ばした。
「青い鎧と兜の者は味方ぞ、わかるな！」
「はっ、無論です！」
「よくわかります！」
すぐに前田と佐々から声が返ってきた。
「作用ですか、この為にですか」
「青い鎧と兜に」

「それもある」
信長は不敵に笑って二人の言葉に答えた。
「戦場で同士討ち程詰まらぬものはないな」
「はい、まことに」
「その通りです」
今度は河尻と前野が答えた。
「ではその為にもはっきりとわかる色にですか」
「統一されたのですね」
「青は織田じゃ」
信長は言い切った。
「これから織田の色になるのじゃ」
「そしてその青が今川の軍勢を倒す」
「今より」
「左様、ではかかれ！」
また命じる信長だった。
「敵は権六と久助の攻撃を受けて怯んでいるうえに今の鉄砲で浮き足立っておる！」
「はい、では殿今より」
「全軍で」
「そうじゃ、わし等も行くぞ」
傍らに来た林兄弟にも告げた。
「この戦い貰った！」
法螺貝も高らかに吹かれ今織田の総攻撃がはじまった。これにより今川は総崩れになった。彼等は為す術もなく倒されていく。
その中で黒母衣衆の者達も赤母衣衆の者達も暴れ回る。そしてこの男もだ。
「行くぞ松風！」
前田慶次であった。彼は黒い見事な馬に乗り巨大な朱色の大槍を操りだ。今川の兵を次から次へと薙ぎ倒していた。
「この武辺の戦いを見せてやるのじゃ！」

「大きく出たな慶次！」
前田がその暴れ回る彼に対して言ってきた。彼もまた巨大な槍を縦横無尽に振り回し敵を右に左にと吹き飛ばしている。
「武辺とな！」
「おお、叔父御まだ生きておるか」
慶次はその叔父に顔を向けて笑って言葉を返した。
「それは何よりじゃ」
「抜かせ、この程度の戦で死ぬものか」
言いながらまた敵兵を一人倒す前田だった。
「それよりもじゃ。武辺とな」
「うむ、『ふべん』じゃ」
ここで慶次は笑ってこんなことを言った。
「わしはふべん者じゃ」
「ふべんとな」
「戦のない場所では何もすることがない。だからふべんじゃ」
「何を言うか、戦のない時は悪戯ばかりしておるではないか」
すぐにこう突っ込みを入れる叔父であった。

第五話　初陣その六

「この前もじゃ。柴田殿のお茶に何を入れた」
「ははは、塩を少しばかりな」
「少しか？」
「いや、多めにじゃ」
「それで柴田殿にぶん殴られたではないか」
慶次は戦がない時は大抵そんなことばかりしている。それで柴田なり平手なりにだ。いつも叱られているというわけである。
「折角の茶の場を台無しにされたとな」
「何、軽い冗談だ」
彼にとってはである。
「柴田殿も茶目っ気がないのう」
「相手を見てやれ」
流石の前田もこう言うばかりだった。
「柴田殿だぞ、あの」
「うむ、やはり戦の鬼と言われただけはある」
慶次はここで右手で自分の顎をさすった。
「効いたのう、あの一撃は」
「普通の者ならばあれで終わりだぞ」
かなり本気でこう告げる前田だった。
「柴田殿の拳はな」
「その後しこたま殴られたしのう。平手殿よりまだおっかないわ」
「だから相手を見てやれ」
またこう言うのだった。
「柴田殿の様な生真面目な御仁には御前の茶目っ気も通じんわ」
「自業自得だ」
「そう言うのじゃな」
「言うぞ。それでじゃ」

「うむ」
「慶次、御主もここで死ぬな」
こんなことも言ってきたのである。
「わかったな。死ぬな」
「わしがここで死ぬというのか？」
「それはわからんがとにかく死ぬな」
彼が言いたいのはこのことだった。
「わかったな。死ぬな」
「わかったわかった。それではじゃ」
叔父の言葉を受けてだ。槍を振るった。そうして。
敵をまた薙ぎ倒していく。彼等の活躍もあり最早織田の勝利は確実だった。
だがここでだ。信長は言った。
「よし、ここまでだ」
「ここまでとは？」
「全軍退くぞ」
こう平手達にも返すのだった。
「わかったな」
「何を言われますか」
平手は主のその言葉にすぐにくってかかった。
「まだ敵将の首を取ってはおりませぬ」
「太源雪斎か」
「左様です、今ここに迫っておりますな」
「そうだな」
信長もそれはわかっている。冷静に言葉を返す。
「どうやらな」
「それならばです。余計にです」
平手の言葉は強くなっていた。
「ここは。あの者を討ちましょう」
「言ったな。そうできればよいが今はそれは無理じゃ」

「無理だと言われるのですか」
「そうじゃ。我等も疲れた」
まずはこのことを理由にした。
「派手に暴れたからのう。これ以上の戦は無理があるぞ」
「しかしです」
だが平手も伊達に信長の筆頭家老にして御意見番ではない。主に対して引き下がることなく尚も言う。
「ここで雪斎を倒せばです」
「三河も夢ではないか」
「左様、失った領地を取り戻すだけではなく。さらなる領地もまた」
「それでもじゃ。今はこれで帰る」
信長の言葉は変わらなかった。彼に言われてもだった。
そうしてだ。彼は退く用意をはじめた。その時にだ。佐久間に声をかけたのだった。
「牛助」
「はっ」
「殿軍を務めよ」
後詰は彼だというのである。
「よいな」
「畏まりました」
「先陣は権六で後詰は牛助ですか」
林がそれを見て述べた。
「そうされるのですか」
「そうじゃ。後詰はやはり牛助じゃ」
信長はその林の問いに落ち着いて返した。
「異論はあるまい」
「はい、牛助は若き頃より何かと退く軍の後詰におりました故」
このことは林もよく知っていた。彼にしても織田家に代々仕えている。佐久間が戦場でどの様な働きをしてきたかよく知っているのである。

第五話　初陣その七

「そして権六は先陣でした」
「さすればこれでよかろう」
信長は今度は不敵な笑みを浮かべていた。
「ではじゃ。全軍撤退じゃ」
「はっ、それでは」
「今より」
こうしてであった。信長の青い軍は速やかに兵を退いた。後詰の佐久間は後ろをよく守り敵を寄せ付けない。そうして軍を無事退かせたのである。
信長はすぐに那古屋城に入った。軍の損害は微々たるもので倒した敵は多かった。そのうえ尾張の要地を守り敵を退けた。実によい戦いだった。
それでも平手はである。まだ愚痴を零していた。
「あそこで雪斎を討てば。これからが楽になったであろうに」
「そうであろうな」
これは信秀も認めるところであった。
「もしやすると雪斎を討てたかもな」
「大殿もそう思われますか」
「やはり」
「もしやするとだ。しかしだ」
しかしここで信秀はだ。周りの己の家臣達に対してこうも話した。
「それで雪斎を討ち今川の勢いを弱める」
「そして三河を再び」
「我等の領地に」
「だがそれはだ」
信秀の目が光るのだった。
「どうなのだ」

「どうなのだといいますと」
「それは一体」
「それでよいのか」
考える顔でだ。言ったのである。
「わしはまだ尾張を統一しておらんな」
「残念ですが。それは」
「まだです」
信秀の悲願の一つであるのだ。尾張を統一しその主となる。だがそれには多くの難関があったのである。
「清洲が頑張っております」
「そして他にも」
「わしの望みはまず尾張だ」
またこう言ったのだった。
「三河ではないな」
「では三河に出るのは」
「愚策であると」
「そうじゃ。まずは尾張じゃ」
信秀はまた言った。
「そしてそのうえでじゃ。さらに力を蓄え」
「都へ」
「上洛ですね」
「そうすべきだ。今まで思い違いをしておった」
信秀は今はだ。難しい顔になっていた。
「だからじゃ。今川は退けるだけでよい」
「それよりもまずは尾張ですね」
「この国をまとめると」
「信長、あ奴はわかっておる」
そしてだった。我が子の名も出した。
「あの歳で。初陣で既にじゃ」
「では信長様はうつけではないと」

「余で言われているような」
「うむ、それは間違いない」
父としてである。このことは確信していた。
「若しうつけなら既に権六も新五郎も離れておるな」
「はい、信行様もおられますし」
「そしてその信行様もです」
兄である信長に仕え忠実な弟として家臣として傍にある。彼等はこのことも知っていた。
「信長様にお仕えしております」
「二心なく」
「そういうことじゃ。仕えるに値しなければ」
信秀はここでまた言った。
「誰も仕えぬわ」
「さすれば信長様は」
「うつけではありませんな」
「左様、それどころかじゃ」
さらにだというのであった。

第五話　初陣その八

「信長は傑物よ。わし以上のな」
「何と、殿以上のですか」
「信長様は」
「やってくれるぞ」
自信を持って発した言葉だった。
「必ずな。この度の戦いでそれを確信した」
「では次の織田家の主は」
「信長様ですね」
「最初から決めておったがな。あ奴しかいない」
信秀の自信はここでも同じだった。
「そういうことじゃ。よいな」
「あの方ならこの尾張をですか」
「一つにできますか」
「いや、それ以上だ」
ここでも信秀の言うことは大きかった。
「それ以上だ。尾張だけではないぞ」
「尾張一国に止まらないと」
「では。美濃や伊勢までもが」
「それ以上やもな。さて、それを見られるかどうか」
顔は自然に笑っていた。期待する笑みだった。
「楽しみよのう」
父として我が子の雄飛を確信して笑っていた。少なくとも彼はそうしていられた。
そして駿河では。義元が己の下に戻ってきた雪斎に対してだ。まずは少し残念な顔になってこう話すのであった。
「敗れてしまったのう」
「はい、織田信長に」

「親父の方にはこれまでも度々負けておった」
織田信秀のことである。彼がこれまで戦ってきた言うならば宿敵である。
「しかし今度は息子にか」
「左様です」
「そういう時もある」
義元はこの敗戦をこれで終わらせた。
「あのおおうつけのまぐれじゃ。気にすることはない」
「まぐれですか」
「そうじゃ、あれの話は聞いておる」
「奇矯な格好で町を歩き馬を荒く乗り水練や喧嘩に明け暮れているという」
「それが跡継ぎか」
義元は馬鹿にしたようにして言った。
「その様な話は聞いたことがない。うつけでなくて何じゃ」
「それは」
「和上も思うじゃろう。うつけじゃ」
義元はまた馬鹿にしたようにして言った。
「それ以外の何でもないわ」
「しかしそれがしは敗れました」
雪斎はこの現実を正面から受け止めていた。現にその顔は硬い。
「それは事実です」
「して尾張へは攻め入ることはできなんだな」
「ですから。それは」
「だからまぐれじゃ。気にすることはない」
義元はそのお歯黒で染めた歯を見せて言い切った。
「和上でもそういうことはある。気にすることはない」
「左様ですか」
「それよりもじゃ。武田と北条じゃな」
今川はこの両家と境を接していた。どちらも油断ならない相手で

ある。だから彼も両家には並々ならぬ注意を払っているのである。
「この二つをどうするかじゃが」
「それですが」
雪斎はそのことにはすぐに歯切れよく述べ返した。
「拙僧にお任せ下さい」
「考えがあるのじゃな」
「はい、実はです」
（この両家とは結ぶべきだ）
雪斎は心の中でこう考えていた。何故ならばだ。
（そして織田に専念せねば。あの男、間違いなく今川にとって命取りになる）
信長のことを考えていたのである。彼は信長のことをわかったのだ。敵として実に容易ならざる相手であると。今川では彼と元康だけが見抜いていることだった。
だが義元にはそれを隠していた。己の中だけに留めてそのうえで信長への策を練ろうとしていた。彼を恐ろしい男だと思うからこそだ。
そして同じことが越前でも起こっていた。痩せて瓢箪に似た顔の男がだ。笑いながら主の座に座ってこんなことを言うのであった。
「那古屋の織田の若造はやはりうつけよのう」
「全くですな」
「いや、実に」
周りの者がその瓢箪の男の言葉に応える。この男の名を朝倉義景という。越前を治める朝倉家の主である。主としての評判はともかくとして越前を治めている。

第五話　初陣その九

その彼がだ。信長の話を聞いて嘲笑っていたのである。
「あそこで太源雪斎を討てば三河は取り戻せたぞ」
「討てましたか」
「殿はそう思われますか」
「あそこで一気に攻めて討つべきじゃ」
こう言う義景だった。
「わしならそうするぞ」
「拙者もです」
「それがしもです」
家臣達は彼に続いておべんちゃらめいたことを言う。
「やはりそうしていました」
「無理をしてでも」
「しかし何じゃ？帰ったぞ」
義景はこのことを聞いて馬鹿にしているのである。
「戦も知らんおおうつけじゃったな」
「いやはや、その通りで」
「やはりうつけはうつけ」
「どうということはありませんか」
「あ奴はじきに終わるわ」
義景は信長の行く末をそうなると確信していた。彼はである。
「間違いなくな」
「所詮織田家は成り上がり」
「我が朝倉家とは違いますしな」
「ふん、我が家と同格と思ってもらっては困るわ」
実は織田家と朝倉家は同じ斯波家の家臣筋であった。だがその家柄は朝倉家の方が上であるのだ。だから義景もその家臣達も信長だけでなく織田家全体を馬鹿にしているのである。

「その様な家のうつけなぞな」
「滅びてしまえばよいのです」
「今川にでもやられて」
「全くじゃ。そうなってしまえばいいのじゃ」
最後に忌々しげに言う義景だった。そしてその後で酒を飲みながら能を観て楽しむのであった。政よりもそちらに興があるようですらあった。
だが、だ。信長の話を耳にして越前の者でも目を瞠る者がいた。
一人の白髪の老人がだ。信長の初陣の話を聞きすぐに彼について細かく調べさせた。それは彼のほぼ全てを知る程のものだった。
忍、それもかなりの手だれに、この老人だけに仕え老人だけが使いこなせる者に調べさせたそれは信長のほぼ全てを調べたものだった。老人はそれを見て言うのであった。
「織田信長、恐ろしい男だ」
「まだ若いというのにですか」
「少なくともうつけなどではない」
老人は断言してた。
「それは間違いない」
「では殿は」
「わかっておられるのだ」
言葉に悲しいものが宿った。
「あの男のことをな」
「そうなのですか」
「これではのう」
老人の言葉にある悲しみがさらに増した。
「朝倉もどうなるか」
「わかりませんか」
「わしももう長くはいられぬ」
老人は目を閉じて述べた。
「だが。わしの後は」

「どなたがおられるでしょうか」
「誰か出てくれねばならんのだ」
彼は言った。
「わしの、朝倉宗滴の後にもだ」
「必ずや出ます」
忍は彼を励ますようにして言ってきた。
「そして朝倉はこれからも」
「だといいがな。織田はもしやすると」
「織田は」
「我が朝倉を脅かす存在になるやも知れぬ」
宗滴は心から憂いていた。朝倉のその未来をである。
「あの者がこのまま大きくなるとだ」
「織田信長ですか」
「武田は虎、長尾は龍」
彼等がそれぞれ言われている仇名である。
「北条が獅子ならば織田はじゃ」
「何でしょうか、織田は」
「蛟龍じゃな」
それだというのである。

第五話　初陣その十

「さしづめな。それじゃ」
「蛟龍ですか」
「今は潜んでおる。だがやがてはじゃ」
「水から出て天に届くのですね」
「それが織田じゃ。見誤ってはならん」
朝倉では彼だけがそう見ていた。信長の力は見る者は既に見抜いていた。そしてそれは表にいる者達だけとは限らないのであった。
何処であろうか。闇の中でだ。彼等が蠢いていた。そしてその蠢きの中で話をしていた。
「ふむ、尾張か」
「はい、織田です」
「那古屋のです」
彼等はこう話をしていくのだった。
「あのこの前元服したばかりのです」
「織田信長といったな」
「はい、その者です」
「その者ですが」
「あの者、どうやら」
ここでだ。彼等は言うのだった。
「尋常なものではないな」
「武田や長尾と同じなのか」
「若しくは北条、そして毛利」
「戦国に大きく出るか」
「いや」
闇の中で一人が言った。
「どうやらそれ以上かも知れぬな」
「それ以上だというのか」

「他の大名達とは違うのか」
「あの者達以上なのか」
「もしかするとだ」
その一人がこう話すのだった。
「我等も脅かすかも知れぬな」
「ふむ。それではだ」
「今のうちに仕掛けるか」
「そうするか」
闇の中にいる者達はその言葉を受けてだ。次々に話すのだった。
「芽は摘んでおかねばな」
「摘めぬにしても仕掛けておけばな」
「それで何かあるかも知れぬ」
「そうするか」
「それでは決まりだな」
真ん中から声がした。
「織田信長に対していずれは仕掛けるか」
「はい、そうしましょう」
「それでは今すぐに」
「そうしますか」
「いや、まだだ」
中央の声はそれは止めたのだった。
「まだだ。まだ仕掛けるな」
「仕掛けないのですか」
「それはまだなのですか」
「まだしないのですか」
「少し後だ」
そうだというのである。少なくとも今ではないことは間違いなかった。
「今すぐでは。あまり効きはせぬな」
「だからなのですか」

「今ではない」
「では何時でしょうか」
「あの者、見た通りの力があるならば」
信長を見ていた。ここにいなくともだ。彼等は間違いなく信長を見ていた。そうしてそのうえで闇の中で話をしていくのであった。
「おそらく尾張一国はだ」
「統一しますか」
「容易に」
「放っておけば尾張だけには止まらぬだろう」
中央の声はこうも言うのだった。
「さすれば。尾張を手に入れんとするその時にだ」
「仕掛けると」
「そうされるのですね」
「その時でよい。今はよい」
また言うその声だった。

第五話　初陣その十一

「わかったな」
「さすれば。今は」
「あの三好に入らせたあ奴をですね」
「さらに動かせる」
「そうしますか」
「そうだな。それがよい」
中央の声は周りの声に返した。
「今のところはだ」
「都だけでなくその周辺も手中に収めている三好をです」
「好き勝手に食い荒らしそのうえで」
「天下をさらに乱れさせる」
「実によいことですな」
乱を喜んでいた。闇の中でそれを楽しむものをだ。確かに見せてそのうえで話すのであった。
「では。尾張は後程」
「美濃の蝮も気になりますし」
「若しや我等のことを察したのでしょうか」
「蝮か」
また中央から声がした。
「あ奴は尋常な男ではない」
「善か悪かと言えば悪です」
「それは間違いありません」
「しかしです」
その蝮についても話されていくのだった。
「その野心はおそらく天下です」
「天下を望むのならばです」
「必然的に我等の敵となります」

「そして我等に気付いたならば」
「その時は」
「そうだな」
また声がした。
「消すとしよう」
「幸いなことにです」
一人がここでまた言ってきた。
「美濃には弱みがあります」
「家か」
「はい、道三は守護の土岐氏を追放して国の主になっています」
「そうだったな。そしてその妾は」
「かつては主の妾だった」
「その産んだ子こそが次の美濃の主」
このことが話されていくのだった。
「斉藤義龍だったな」
「あれは道三の子なのかどうか今一つわからないとされている」
「さすればあの男を使うと」
「その時は」
「そうだな」
また言う中央の者だった。
「その時はその男を使おう」
「はっ、それでは」
言い出した声が応えたのだった。
「その時はその様に」
「そして織田についてですが」
「時が来ればとのことですが」
「この場合は誰を使いますか」
「織田では誰を」
「うむ、それだが」
中央の声もそれに応えてきた。

「弟を使ってはどうか」
「弟をですか」
「ではいつもの様にですね」
「操りそして」
「内輪から崩すと」
「そうするとしよう」
中央の声はここでまた述べた。
「その時はな」
「はい、それではその時は」
また別の一人が言うのだった。
「私にお任せ下さい」
「できるか」
「その時が来れば尾張に入りそのうえで」
声はさらに述べるのであった。

第五話　初陣その十二

「織田信長を害するとします」
「そうしてもらうぞ。ではだ」
「はい、それでは」
「今は」
「散るとしよう」
中央から周囲に告げた言葉だった。
「わかったな。そうするぞ」
「はい、それでは」
「今は散りそして」
「集まるとしましょう」
「またの時に」
こう話をしてだった。闇の中に消えていく彼等だった。闇の中でも何かしら蠢いていた。戦国の世はただ表での戦だけではなかった。だが信長はそれをまだ知らない。戦の後でだ。足軽達に互いに槍を持たせ競わせてだ。こんなことを言っていたのであった。
「やはり槍はだ」
「どうだというのですか？」
そこに黒々とした髪を髷にした鋭い顔の男が来て問うた。
「足軽達を使って何かを見ておられるようですが」
「所之助か」
「はい」
この男の名を島田秀満という。彼もまた信長に仕えているのだ。信長の下では村井等と共に主に政においてその手腕を発揮している。
「開墾のことでお伺いに来たのですか」
「左様か。そちらはどうじゃ」
「堤を作り水を通しましたので」
島田はそこから話すのだった。

「よい田ができています」
「左様か」
「はい、これでかなりの収穫が期待できます」
「それはよいことだ。よいか」
「何でしょうか」
「まずは田畑と街じゃ」
その二つだというのである。
「政があってから戦じゃ。わかるな」
「殿がいつも言っておられることですね」
「左様。民も戦よりも田や町の方がずっとよいものじゃ」
信長は今度は民の立場から述べた。
「だからじゃ。まずは政じゃ」
「わかっております。それでなのですが」
「槍のことか」
「何を見ておられるのですか」
島田はあらためて主に問うた。今信長は城の廊下にいる。そこから庭で何やら二手に別れそのうえで槍を競わせている足軽達を見ていた。島田はその主に問うたのだ。
「槍と仰いますが」
「短い槍と長い槍を競わせておったのじゃ」
信長はこう島田に述べた。
「どちらが上かとな」
「そして長い方でしたら」
「そうじゃ。やはり長い方が先に敵に当たるし威力もある」
見れば槍の先は丸くなっていて刃はない。だが長い方が短い方を叩き突いてだ。そのうえで退けていたのである。信長は今もそれを見ていた。
「だからじゃ。これからの槍はじゃ」
「長くされるのですね」
「うむ、そうする」

断言であった。
「それでどうじゃ」
「はい、それで宜しいかと」
島田もこう答えるのだった。
「それがしからも見ましたところ」
「長い槍じゃな」
「その方がいいかと」
「よし、それではこれからの我が軍は槍を長くする」
信長は意を決した声で言った。
「それでよいな」
「畏まりました」
こうしてだった。信長の兵はこれ以降長い槍を持つことになった、その槍はというとだ。
「これはまた」
「うむ、異様だな」
「ここまで大きな槍を作るとは」
「幾ら何でもやり過ぎではないのか？」
「ははは、そう思える方がいいのだ」
驚きを隠せぬ家臣達にだ。信長は笑いながら語るのだった。
「そこまでな」
「やり過ぎ、とですか」
「そうなのですか」
「『やり』だけにだ」
ここで信長は笑ってこんなことも言った。
「その方がいいのだ」
「またその様なふざけられたことを」
平手が最初にその駄洒落に返した。やはりその顔は顰められている。
「ここまで長い槍なぞ使いにくいではありませぬか？」
「一人が使うにはな」

信長はその平手に素っ気無く答えた。
「しかしだ。それでもだ。大勢が使うとだ」
「違うと仰るのですか」
「そうだ。まあ見ているがいい」
ここでまた笑う信長だった。
「この槍と鉄砲でだ。わしは勝ち進むぞ」
「だといいのですが」
何はともあれその長い槍を使うことにした信長だった。そのことだけは確かだった。

第五話　完

２０１０・８・１４

第六話　帰蝶その一

第六話　帰蝶

初陣を飾った信長だったがあちこちの国でだ。それぞれの大名が大きく動いていた。

「そうか、北条がか」

「左様です」

松井が信長の前に控えて述べていた。

「河越の戦に勝ちました」

「それも大勝利だそうだな」

「八万の両上杉、そしてその他の関東の大名達の軍をです」

「僅か八千の兵で破ったか」

「まずは講和を結ぶふりをして」

松井は信長に対してだけでなく彼の周りにいる他の家臣達にも話していた。彼等もまた松井のその話を耳を離すことなくしかと聞いているのだ。

「油断させそのうえで夜襲を仕掛けました」

「そうか。十倍の敵をそれで破ったか」

「北条氏康はそれにより関東を手に入れました」

松井はこうまで言った。

「扇谷上杉は滅亡、山内上杉も最早適わず越後の長尾を頼るようです」

「長尾をか」

「左様です。長尾も越後を統一しておりますが」

「その長尾だが」

信長は長尾について話をはじめた。

「どうやら信濃の豪族達を迎え入れたようだな」

「はい、村上に小笠原です」

今度言ってきたのは武井だった。

「武田に敗れたあの者達が長尾を頼っております」
「さすればだ」
信長はここまで話を聞いてからまた述べた。
「長尾は北条、そして武田を相手にすることになるな」
「だとすればです」
それを聞いてだ。金森が言った。
「長尾は両家により潰されてしまいますな」
「確かに。関東を制する北条と信濃を制した武田に」
「揉み潰されますな」
「長尾もこれで終わりでしょうか」
「いや、そうはならん」
だが、だった。信長はここで言うのだった。
「長尾は強い。これまで一度も敗れたことがない」
「越後の龍長尾景虎」
「その男はですか」
「武田も北条も確かに強い」
信長はこのことも認めた。
「しかしだ。こと戦においては長尾はさらに強い」
「越後の龍はですか」
「まさに軍神だと」
「そう仰るのですか」
「この三つの家は容易ではない」
信長の目が光った。
「おそらく。このまま力を蓄える。傷を受けて暫しの間動けなくなることはあってもだ」
「左様ですか、この三つの家は」
「そこまでなのですか」
「強いというのですね」
「その通りだ。しかしその河越の戦だが」
信長はそこに話を戻してきた。

「やはりあの白がものを言ったな」
「はい、その通りです」
松井もその通りだと述べた。
「夜の中にです。その白い鎧も兜も旗もよく見栄えたそうです」
「それでは同士討ちの心配はないな」
信長はそれを聞いて述べた。
「戦が終わり目的を果たしたと浮かれ酒を飲み寝ている兵なぞ。どうということはない」
「北条の白、まさか夜戦においても目立つとは」
「そうしたことにも使えましたか」
「そこまでは考えませんでした」
「そしてだが」
信長は今度はだ。池田に顔を向けた。そのうえで彼に問うのだった。
「勝三郎」
「はい」
池田は主の言葉に応えた。
「毛利のことでござるな」
「そうだ、毛利も勝ったそうだな」
「はい、厳島の戦に勝ちました」
こう主に述べるのであった。
「陶晴賢は敗れました」
「五千で二万の兵が敗れたか」
「まさかとは思ったが」
「陶もまた」
他の家臣達は池田のその話を聞いて述べた。

第六話　帰蝶その二

「敗れたというのか」
「それでは。山陽は毛利のものになるのか」
「いよいよ」
「おそらくこれから尼子との戦になるだろうな」
また言う信長だった。
「毛利元就は謀により強くなった者。尼子はそれにどう対するか」
「尼子は武に頼る者が多いですが」
「それで毛利の智に対する」
「これは見物ですな」
「四国でも動きがあったな」
今度は堀に問う信長だった。
「菊千代よ。そちらはどうだ」
「あの姫若子ですが」
堀はまずこの名前を出した。
「初陣で恐るべき働きを見せました」
「姫若子というと」
「あの長宗我部の」
「あの者か」
「はい、長宗我部元親」
まさにその彼だというのである。
「その者です」
「話は聞いていた」
信長は考える顔で堀に返した。
「あの者がのう」
「殿もやはり姫若子だと思っていましたか」
「話を聞く限りではな」
「左様ですか」

「やはり見ねばわからんな」
信長は考える顔のままこうも述べたのであった。
「人にしても何にしてもな」
「全くです」
堀も主のその言葉に頷いた。
「この度心よりそう思いました」
「そしてだ」
信長はさらに言ってきた。
「長宗我部の勢いはどうじゃ」
「はい、まさに破竹の勢いです」
堀は真摯な顔で主に再び述べた。
「おそらくこのままでは土佐は」
「長宗我部のものになるか」
「土佐にはこれといって確かな勢力はありませぬ故」
織田家は、そして信長はこうしたところまで調べさせていたのである。遠く離れた国に対してもその情報収集に抜かりはなかったのである。
「ですから」
「そおうか、土佐は鬼若子のものか」
ここで信長は元親をこう評したのであった。
「鬼若子のにのう」
「鬼若子ですか」
「長宗我部は」
「これまでは姫若子だったな」
信長は元親のその元の呼び名をあえて再び言ってみせた。
「そうじゃな」
「はい、その通りです」
「使いものにならぬと言われていました」
「それが初陣でだったのです」
「だからだ。鬼だ」

また言う信長だった。
「あの者は鬼になったのだ」
「初陣でそれからですか」
「思えば恐ろしいことですな」
「全くです」
「面白い奴のようだな」
こんなことも言う信長だった。
「長宗我部元親、その者の名も覚えておこう」
「やがて無視できない力になるかと」
「わかった。では他にも聞こう」
堀の元親の話から他に移るのであった。
「東北や九州はどうだ」
「九州ですが」
今度は丹羽である。

第六話　帰蝶その三

「大友、龍造寺も強いですが」
「島津だな」
信長の目がここで光った。
「薩摩の島津だな」
「その通りです」
丹羽もまた鋭い目で主に答えた。
「まさに破竹の勢いで薩摩、大隈、日向を制圧しました」
「破竹か」
「ただ兵が強いだけではありません」
島津の兵の強さは天下屈指とさえ言われていた。このことは天下に鳴り響いているものの一つだったのである。そこまで島津の兵は強いのだ。
「その将、島津四兄弟も恐ろしいですが」
「他にもあるのか」
「鉄砲です」
丹羽はこの武器も話に出してきた。
「鉄砲をかなり多く使っています」
「あれだな。種子島からだな」
「はい」
丹羽は主の言葉に頷いて答えた。
「そこから。銃を多量に造っております」
「それも使って買っているか」
「ただ普通に兵が強いだけではありません」
「将に鉄砲か」
「その二つもです。島津の強さは尋常ではありません」
丹羽の言葉もまた真剣そのものであった。
「おそらくは。九州も」

「大友等も敗れるか」
「油断したならば」
そうなると。丹羽はそこまで話すのだった。
「そうなるかと」
「わかった。九州は島津だな」
信長は他の勢力を置いてもまずはそこだと言ったのだった。
「そこか」
「そうなるかと」
「島津もまた覚えておく」
信長はその強い光を放つ目で述べた。
「そして東北は何処だ」
「伊達です」
島田が名乗り出たのであった。
「あの家が大きくなるかと」
「伊達か。そういえばだが」
「はい」
「あそこは世継ぎで揉めていたな」
信長はこのことを話すのだった。
「そうだったな」
「はい、嫡男の政宗殿と弟君の小太郎殿との間で」
「母の言葉が強いらしいな」
信長の顔がここで微妙な色を含んだ。
「確か。そうだな」
「はい、あの家の性質は最上義光の妹君」
島田はこのことから語った。政略結婚という訳である。この時代では実に多いことで普通にあることである。
「兄譲り、いえ兄以上の凄まじい気性でして」
「それで世継ぎ争いを起こしているか」
「政宗殿は病で片目を失っています」
島田はここでのこの事実も主に話した。

「母親であるその方はそれを嫌っておられるとか」
「難儀な話だな。片目を失ったのは政宗の責任ではあるまい」
信長は話を聞いてこう述べたのだった。
「大事なのはだ。力があるかどうかだ」
「それだけですか」
「そうだ、それだけだ」
こう話す信長だった。
「それで騒動が起こるとはな。因果なものだ」
「全くです」
ここで言ったのは信行だった。
「私も信広兄上も。兄上に対して謀反を起こすことは」
「ないか」
「私はそうしたことに興味はありません」
まずは心から話した。
「そして器でもありません」
「だからか」
「ですから。謀反なぞは」
「かえって面白くないのう」
信長は弟のそんな言葉を聞いて笑ってみせたのだった。
「男は少しはそうしたものがあってもいいのだぞ」
「野心ですか」
「勘十郎、御主は昔から生真面目に過ぎる」
このことも告げるのだった。

第六話　帰蝶その四

「もっと余裕が欲しいところだ」
「申し訳ありません」
「しかし。わしがこんな人間じゃ」
己のことも言う信長だった。
「それを考えれば丁度いいのかもな」
「宜しいですか」
「わしはこうした人間じゃ。そしてそなたや信広が真面目な者だとそれで丁度よかろう」
「そういうものでしょうか」
信行は兄のその言葉に今は首を捻るばかりであった。
「兄上のことは承知しているつもりですが。それでも私が真面目でよいとは」
「そなたにそれに」
平手をちらりと見てだ。少し笑ってから述べた。
「爺もおるからのう。それでよいのじゃ」
「殿は少し勝手が過ぎますぞ」
その平手の言葉が来た。
「茶を嗜まれるのはよいのですが」
「茶はいいものじゃな」
ここで信長は平手の話に合わせてきた。自然とその顔が綻んできている。
「あれは心が落ち着く」
「左様、何も常に槍や弓ばかりを持つわけではありますまい」
「そうじゃな。それにわしは」
信長はここで己のことも話すのであった。
「酒が駄目じゃからな」
「そういえば殿は」

「確かに」
「酒を飲まれませぬな」
「駄目なのでしたか」
「うむ、飲めん」
居並ぶ家臣達の声にも頷いて返した。
「どうも身体が受け付けん。甘いものの方がよい」
「そういえば兄上は昔から果物がお好きでしたな」
信行もこのことを覚えていた。流石に幼い頃から供にいただけはある。
「それでなのですか」
「柿も好きじゃし蜜柑も西瓜も好きじゃ」
まずはこうしたものを挙げていくのであった。
「そうした甘いものをふんだんに食えるようにもしたい」
「さすればです」
林がそれを聞いて述べてきた。
「民にそれを作らせ売らせればいいのです」
「そういうことじゃな。何も米だけ作らせればいいというものではない」
信長も林のその言葉を受けて頷いた。
「それではじゃ。これからは民に様々なものも作らせる」
「はっ」
「胡麻でも胡瓜でもじゃ。とにかく作れるものを作らせよ」
こう命じた。話は何時しか政のものになっていた。
「そして民には年貢よりもじゃ」
「年貢よりも」
「どうされるのですか？」
「こちらに納めさせる分は低くさせよ」
これがそうしたものへの信長の言葉だった。
「よいな。民には多く取らせよ」
「多くですか」

「米よりも多くですか」
「そうじゃ。それでさらに多く作らせるのじゃ」
信長は自然に笑っていた。そのうえでさらに言うのであった。
「さすればそこからさらに豊かになるからな」
「民でなく国も」
「全てがですね」
「そういうことよ。それに」
ここでまたふとした感じの言葉を出してきた。
「先程柿の話をしたな」
「はい、確かに」
「それをしましたが」
「それで思いついたのだがな」
そしてだ。その己の考えを家臣達に告げるのだった。
「道を整備する。そしてじゃ」
「道を整備するだけではなくですか」
「さらにですか」
「一里ごとに目印として木を植えよ」
これがその信長の考えだった。

第六話　帰蝶その五

「よいな、道に一里ずつじゃ」
「目印にですか」
「それでなのですか」
「そうじゃ。目印があると兵の移動にも民の行き来にも便利じゃ」
だからだと家臣達に話すのだった。
「それでじゃ。どうじゃ」
「ふむ、いい御考えですな」
最初に賛成の言葉を述べたのは佐久間だった。
「どれだけ進んだのかわかれば、そして目印があれば民百姓も助かります」
「それに兵の移動ですが」
このことを言ったのは前田であった。
「やはり目印があると有り難いです」
「だからじゃ。それではよいな」
二人の意見を受けてあらためて他の者に問うた。
「これで」
「是非そうしましょう」
「それでは」
「さて、道もこれで整える」
信長は田畑や町だけを見ていなかった。他のものも見ていた。そのうえで政を行っているのだった。そのことがよくわかることであった。
そしてさらにだ。こうも言うのであった。
「あと。爺」
「はい」
平手に顔を向けての言葉だった。平手もそれに応じる。
「父上のことだが」

「大殿ですか」
「何か美濃と話をしておるそうだな」
己のすぐ左手に控える平手を見ながら問う。これは彼が信長の臣下で首座であることの証であった。
「それは何故じゃ」
「はい、婚礼のことで」
「何っ、婚礼とな」
その言葉を聞いてだ。信長は雷が傍に落ちたかの如く驚いた。そしてその驚きのままた平手に対して問うのであった。
「ではその婚礼とは」
「そうです、殿のことです」
平手は己の若い主の顔を見ながら答えた。白面で細く整った顔なのは間違いない。
「殿の御婚礼のことで」
「それでだったのか」
「はい、それでなのです」
「美濃か」
信長はそこにも注目した。
「そういえば美濃は近頃何かと困っておったな」
「御存知でしたか」
「知らぬ筈がなかろう」
信長は落ち着いた調子で平手に対して述べた。
「隣の国のこと位は自分でわかっておらなければな」
「だからですか」
「知っておるわ。国人だけでなく越前の朝倉もおるしな」
「斉藤道三もその立場は万全ではありません」
「最近は特にだな。織田とばかり戦っているわけにもいかん」
信長はさらに言ってきた。
「そして織田もだ」
「はい、斉藤とこれ以上の戦いは何の利もありません」

平手は織田のその事情も話した。つまり双方に問題があるのである。

「ですからここはです」

「わしとその美濃の姫が婚姻を結ぶのだな」

「左様です。ですから」

「相手は帰蝶だな」

また自分から言う信長だった。

「道三の一番上の娘だったな」

「このことも御存知でしたか」

「無論だ。知っておる」

信長は実にはっきりと述べた。

「気は強いが顔はいいというな」

「そこまでは知りませんが」

「わしは気の強い女は好きだ」

信長の顔がここでにやりとしたものになった。

「ましてやあの蝮の娘。面白いのう」

「蝮の娘でもですか」

「だからよい。わしの嫁に相応しいのかもな」

「ではこの度の婚礼は」

「よい」

返答は一言であった。

第六話　帰蝶その六

「では受けさせてもらおう」
「左様ですか。それではです」
「さて。向こうはどう言うかじゃな」
信長はこのことについても話した。
「美濃の姫の方はじゃ」
信長は悠然と笑ってこの話を受けた。そしてその美濃ではだ。道三が娘である帰蝶に対して言っていた。二人の他には僅かな者だけが周りにいる。
そこでだ。道三は言うのであった。
「聞いてはいるな」
「尾張にですね」
「相手はおおうつけよ」
道三はまずは笑った。
「尾張、いや東海一のな」
「そのうつけのところに嫁ぎますか」
「それでじゃ」
そしてであった。道三は懐から何かを出してきた。それは。
「これを持って行くのじゃ」
「小柄ですか」
「うつけだと思えば刺せ」
こう娘に告げる。
「よいな、そして刺せばその隙にわしが尾張に攻め入る」
「乗っ取るというのですね、尾張を」
「時が許せばそうする」
剣呑な目である。野心を隠すこともしない。
「国人や越前が気になってもじゃ」
「左様ですか」

「だからじゃ。隙があらば刺せ」
道三はまた言った。
「そして尾張を乗っ取るのじゃ」
「わかりました」
帰蝶は父の言葉をまずは受けた。
「それではこの小柄受け取ります」
「うむ」
「ただ」
ここでだ。帰蝶のその言葉が変わってきた。
「この小柄ですが」
「どうしたのじゃ」
「信長殿を刺すばかりとは限りません」
小柄を両手に持ってそのうえでの言葉であった。
「父上を刺すかも知れません」
「わしをか」
「そうです」
父を見据えてだ。そのうえで告げるのであった。
「信長殿が美濃に攻め入りそのうえで、です。父上をです」
「ふふふ、面白いことを言う」
道三は娘にそう言われて怒りはしなかった。むしろ笑みを作ってだ。そのうえでこう返してみせたのである。
「あのうつけがわしを倒すか」
「父上を越えるかも知れません」
「どうかな。それはわからんぞ」
「そうですね。ですがうつけかどうかもです」
帰蝶はここでまた言うのであった。
「わかりはしません」
「見ていないからか」
「見てもそう容易にはわからないかも知れません。ただ」
「ただ、か」

「噂はあてにはなりませぬ」
流麗だが鋭いその切れ長の目での言葉だ。睫毛が実に長い。
「人はそうおいそれとわかるものではありません」
「ではそれを見極めるか」
「嫁ぎそのうえで信長殿を」
「面白い、ならば行け」
娘のその言葉を受けた。
「そしてうつけかどうか見極めてくるのじゃ」
「はい、それでは」
こうして帰蝶は尾張に嫁ぎ信長の正室となった。嫁いでその初夜にだ。信長が彼女に対してこんなことを言ってきたのである。
「ふむ、見事なものじゃ」
「見事とは」
「いい面構えをしておる」
帰蝶のその顔を見ながらの言葉だ。二人は今寝室の布団の上にいる。そこで灯りを頼りに向かい合ったまま座って話しているのだ。

第六話　帰蝶その七

「流石蝮の娘よ。肝も座っておるな」
「それが何故おわかりで？」
「目を見ればわかる。それに」
そしてだ。信長はこのことを言ってみせた。
「持っておるな」
「何をというのでしょうか」
「小柄じゃ。蝮に貰ってきたな」
このことを言ったのである。
「そうだな」
「さて」
帰蝶はまずはとぼけてみせた。
「何のことでしょうか」
「隠すことはない。懐だな」
また言ってみせた信長であった。
「そこにあるな」
「いえ、ありませぬ」
「しかしそこにある」
信長は帰蝶のその目を見ながら言ってみせるのだった。
「確かにな。そしてだ」
「あるとあくまで仰るのですね」
「そんなことは一目瞭然だ。服に隠していてもだ」
それでもだと。信長はさらに言葉を続ける。
「心に持っていると書いてあるからな」
「心に」
「そう、心にだ」
「まさか人の心が読めるとでもいうのですか」
「仕草に出なくともだ。そして顔には出ているものだ」

「顔に、まさか」
「目にじゃ」
信長はここで笑ってみせたのであった。帰蝶のその目を見てである。
「しかと書いてあるぞ」
「私の目に、そこまで見ておられるのですか」
「孟子にあるではないか。人は目を見ればわかると」
さらりと古典の話を出してみせた。
「違うか？書いてあるな」
「孟子を読まれているのですか」
「他にも読んでおるがな。孟子にあるな」
「確かに。書いてはあります」
「そなたも孟子を読むか。中々見事なものじゃ」
「まさか。その様な本を読まれておるとは」
「他にも読んでおる。今も言ったがな」
信長は悠然とした態度になってきた。そこには明らかに余裕があった。
「まあそのことはおいおいと話そう。そしてじゃ」
「そして、ですか」
「その小柄のことじゃ」
そこに話を戻してきたのであった。話は完全に信長のペースになっていた。帰蝶は既にその時点で敗れていると言ってよかった。
「蝮に言われたな。わしがうつけならば刺せ、と」
「はい」
帰蝶も観念した。そのうえで頷いて答えたのであった。
「その通りです」
「初夜の後で隙があればそのつもりじゃったな」
「服に隠してありますので」
このことを白状した。遂にであった。
「それで。寝静まった時にでも」

「ははは、ならばそうするがよい」
信長は帰蝶の話を最後まで聞いてから笑ってみせたのであった。
「若しわしが噂通りのうつけならばな」
「うつけならばですか」
「そうせよ。わしはそれまでの男じゃ」
またしても悠然とした笑みが戻っていた。
「所詮はな。しかしじゃ」
「しかし？」
「わしがうつけでなければそれは効かぬな」
今度はこう言うのであった。
「その程度でやられはせんな」
「では貴方はうつけではないのですね」
「只のうつけのつもりはない」
「では何だというのでしょうか」
「おおうつけよ。傾いておるわ」
「傾いてですか」
「傾奇者よ。知っておろう」
信長は己がそれだと言うのである。傾奇だとだ。

第六話　帰蝶その八

「傾くからには只のうつけでは済まぬわ。おおうつけでなければのう」
「では傾いて何をされるのですか」
「天下よ」
一言であった。
「天下を手に入れる。そうしてくれるわ」
「この尾張だけではなくですか」
「尾張か。小さいな」
まだ尾張の半分程度しか勢力圏に収めていない。しかも跡も継いではいない。しかし信長はその悠然とした顔で帰蝶にこう言ってみせたのである。
「その程度では終わらぬわ」
「それで天下なのですか」
「天下を治めてみせる」
また言う信長であった。
「どうじゃ？わしの治めるその天下を見てみるか」
「それはまずはです」
「まずはか」
「殿を見させてもらいます」
その切れ長の流麗な目で見据えての言葉である。
「それからとさせてもらいます」
「ではそこまでしかと見るがいい」
信長もまたその目を受けたのであった。
「わしをな。ではじゃ」
「では、ですか」
「夜は長い。共に過ごそうと」
「左様ですか。それでは」

「知っておろう、夜のことは」
「はい」
それについてはもう言うまでもなかった。この時代の姫というものは輿入れの時にそうした書を読み学んでいた。帰蝶もまたそれは同じであった。
「一応は」
「では共に過ごすとしよう」
こうしてであった。二人は夜を共に過ごした。こうした日が何日か続いた。そしてその数日の間にだ。帰蝶はあることに気付いたのであった。
信長の朝は早い。彼女が目覚めればもう床にはいない。夜も遅く彼の眠りが短いことに気付いたのである。
夜のことはわかる。しかしであった。何故朝が早いのか。それがどうしても気になったのだ。
それで小姓や女中達に尋ねる。するとこうした言葉が返ってきた。
「馬に乗られています」
「そこから泳ぎに行かれます」
「馬に泳ぎに」
帰蝶はそれを聞いてまずは首を傾げた。
「この様な朝早くからとは」
「殿は昔から朝が早くて」
「大体こんなものですよ」
女中や小姓達はもうわかっているという口調であった。
「雨でもそれでも馬に乗られますし」
「あと弓や刀もよくやられます」
「槍もですね」
「身体を動かすというのですね」
帰蝶はそれを聞いてふと考える顔になった。
「そうなのですか」
「変わってますよね、雨にも馬に乗られて」

「とにかく馬と泳ぎはいつもです」
彼等は苦笑いと共にこう話すのであった。
「流石に冬は泳ぎませんが」
「とにかく馬は朝と夕にはですね」
「成程、馬を」
帰蝶はこのことには納得した面持ちを見せた。
「それはまた」
「お陰で馬に乗るのは見事です」
「泳ぐのもです」
「弓もかなり」
「鉄砲もお好きですし」
「鉄砲も」
鉄砲と聞くとさらにであった。
帰蝶の顔が変わる。今度は晴れやかなものになった。
「それはまた」
「とにかく新しいものがお好きで」
「その鉄砲は戦にも随分と使われています」
「あとは長い槍を使いたがりますし」
「色々と変わった方です」
とにかくその奇矯と思われる一面が話される。

第六話　帰蝶その九

「しかしまあ。あれで明るくて生活は規則正しい方ですし」
「お酒も飲まれないし賭けごともされない」
「そうした方です」
「そうですか。殿は毎朝」
帰蝶は彼等にはこう言うのであった。そしてである。
その次の日の朝だ。信長が起きようとする。そこでだ。
「お待ち下さい」
「何じゃ、濃」
信長は彼女をこの名で呼んだ。
「何か用か」
「馬に乗られるのですか。それとも槍ですか」
「まず馬に乗る」
信長は造作もないといった調子で帰蝶に返した。
「そうするつもりじゃ」
「左様ですか」
「何じゃ？ついて来るとでもいうのか？」
「はい」
帰蝶の返答には微笑みが入っていた。
「そうしても宜しいでしょうか」
「姫とは思えぬのう」
信長は彼女のその言葉にまた笑った。屈託のない笑いであった。
「わしと共に馬に乗るか」
「いけませぬか」
「乗せてもらいたいのではなくて自分で乗るのじゃな」
信長はここでは先読みをしてみせた。
「そう言うのじゃな」
「私も馬は好きですので」

「姫なのにか」
「蝮の娘です」
言葉に入っている笑みがさらに深いものになっていた。
「さすればそれもまた」
「そうか。蝮の娘か」
「そして貴方様の妻です」
こうも言ってみせたのであった。
「さすれば」
「そうか。ならば来い」
信長は笑ったまま己の妻に告げた。
「しかし服はどうするのじゃ」
「御心配無用」
こう言うとであった。すぐに着替えるのであった。信長が振り向いたその時には紫の上着に白い袴の麗しい姿でそこに立っていた。
「服はこれで」
「着るのが早いのう」
「戦の場で敵は待ってはくれませぬ故」
こう言葉を返すのであった。
「さすれば。服もまた」
「ははは、やはりわしの妻じゃな」
それを見てまた笑ってみせる信長だった。夫婦の寝室の中で顔を崩して笑う。いつもの非常によく笑う信長であった。
「わしも着替えるのは早いがのう」
「そうなのですか」
「戦の場では敵は待ってはくれぬ」
妻のその言葉をそのまま返してみせたのだった。
「さすればじゃ。服を着るのも早くせねばな」
「左様ですね。では」
「行くか。馬を一頭用意させよう」
「さすれば」

「その後は槍じゃ」
馬の後にすることも話す。
「それをするつもりじゃ」
「槍ですか」
「刀と槍、どちらが得意じゃ」
「どちらかというと刀が」
そちらだと返す帰蝶だった。
「それと薙刀を」
「ふむ。薙刀か」
「あれはいいものです。使えば使う程強くなります」
「そうじゃな。あれはいいものじゃ」
薙刀については信長も述べた。
「そうじゃな。市にでも覚えさせるか」
「市殿にですか」
「あれは美しくなるぞ。薙刀を覚えさせれば映える」
妹の一人である。信長はその妹のこともまた明るく話すのであった。

第六話　帰蝶その十

「舞を舞わせるのもよいがな」
「随分と市殿を愛されているのですね」
「おなごはまずそなたじゃ」
さりげなくこんなことも言ってみせる信長だった。
「おのこは多い」
「多いのですか」
「弟達も家臣達もおるからな。皆わしにとってはかけがえのない者達よ」
「皆ですか」
「そうじゃ、皆じゃ」
己にとって欠かせない者達であるというのである。
「おなごはそなたの次は多いわ。妹も多いからのう」
「妹殿達もまたですか」
「皆わしの妹じゃ。大切に思わない筈があろうか」
信長は妻に対してこう話すのであった。
「そうであろう」
「その中でもやはり」
「うむ、市は特別じゃな」
信長の語るその顔が真剣なものになった。
「顔がよいだけではない。心根も優しい」
「そうですね。市殿はまだ幼いですが」
「しかも頭もよいわ。あれはきっと天下一のおなごになる」
「だからこそですか」
「あれは必ず幸せになってもらう」
信長は立った。そして部屋の障子を開けた。するとそこからようやく昇ったばかりの日の光が部屋の中に入って来た。白い光である。
「そうするのはわしじゃ」

「殿がなのですね」
「兄だからのう。では行くか」
「はい、それでは」
「わしの馬の乗り方は荒いぞ」
また妻の方を振り向いて言う。
「それでもよいのじゃな」
「礼儀正しい乗り方なぞ戦の場では役に立ちませぬ」
またこう言う帰蝶だった。
「さすればです」
「ついて来れるな」
「そうでなければ何の意味もないかと」
その言葉には自信も含まれていた。
「おおうつけ殿の妻としては」
「よし、よくぞ言った」
信長は今の言葉にさらに笑った。
「それではじゃ。共に来い」
「喜んで」
こうしてであった。帰蝶は信長と行動を共にすることになった。
彼女もまた信長に魅了されていくのであった。多くの者達と同じく。
信長の周りに人が集っていた。そしてであった。
ある日彼はふと兵の訓練を見ていた。その中でだ。
一際小柄で猿に似た顔の者を見つけた。それでふと傍らにいる前田に問うた。
「又左、あの者は何じゃ」
「あの者といいますと」
「あの猿に似た奴じゃ」
その足軽を指し示しての言葉である。
「あれを知っておるか」
「確か木下秀吉といいました」
前田はこう信長に答えた。

「前は藤吉郎といったのですか」
「ふむ。秀吉というのか」
「左様です。弟も当家に仕えております」
「弟もとな」
「弟の方は秀長といいます」
彼はその名も信長に述べた。
「この城で雑用をしていますが」
「ふむ。そういえばだ」
前田の話を聞いてだ。信長はある者を思い出した。それこそがであった。
「おったな、雑用の者の中にあれによく似た小さいのが」
「はい、お世辞にもどちらも容姿はよくはありませぬが」
「小さいがよく働く奴だ」
信長は今は秀長のことを話した。
「それにあの猿もじゃ」
「如何でしょうか」
「背は低いが動きは速いな」
このことはすぐに見抜いたのであった。

第六話　帰蝶その十一

「あれはあれでよいな」
「左様ですか」
「足軽のままでは勿体やも知れぬな」
そしてこんなことも言うのであった。
「これはじゃ」
「ではどうされるというのでしょうか」
「あの者、足軽から城の用をさせる」
こう前田に告げるのだった。
「そのうえで見てみよう。それでよいか」
「はっ、それではです」
前田も信長のその言葉に頷いた。これでおおよそのことが決まった。
こうして木下は信長の城に入った。最初に与えられた仕事は厩の掃除であった。
これがだ。彼が厩に入るとだ。厩が見違えんばかりになった。
「これはまた」
「見事なものですな」
その厩を見た丹羽と村井が思わず唸った。厩とは思えないまでに奇麗になっていたのだ。馬糞なぞはもう何処にもなかった。
「あれをあの者がやったとは」
「これはまた」
「あの猿、これだけのことをどれだけでやったのだ」
その場には信長もいた。彼は二人に問うた。
「この厩をここまで奇麗にするとは」
「実はそれがしあの者に先程用を言いつけました」
ここで村井が信長に話す。
「草履の手入れをです」

「わしの草履のか」
「朝起きて今ですから」
まだ朝早い。朝食を食べて少ししか経っていない。
「それ程は」
「それだけの時でここまでしたというのか」
信長は再びその厩を見回しながら言った。
「左様か」
「はい、間違いありません」
村井はまた答えた。
「そうしたようです」
「この様にするには丸一日かかりますが」
丹羽もまた厩の中を見回しながら述べた。
「それを僅かな間で、ですか」
「いや、あの猿は若しかすると」
村井の言葉はここでは唸っているものだった。
「掘り出しものかも知れませぬな」
「ふむ。一つ聞いてみるぞ」
信長は考える顔になって述べた。
「あの猿にじゃ」
「聞かれるといいますと」
「この厩のことをですか」
「そうじゃ。ここまではそうおいそれとはできん」
信長もまたこのことはよくわかっていた。非常にである。
「どうしてここまでできたのかをな」
「寝床の草は取り替えてありますし」
「壁も奇麗です」
「何故ここまで瞬く間にできたのか」
「確かに不思議ですな」
「それを問うてからまた決める」
信長はまた話した。

「あの猿についてはな」
「はい、それでは」
用事を言いつけた村井がここで信長に述べた。
「すぐに呼んで参ります」
「そうせよ、よいな」
「はっ、それでは」
こう話をしてであった。木下は信長の前に連れて来られた。そうしてそのうえで厩をどの様にして掃除したのかを聞かれるのであった。
「あの厩ですか」
「そうじゃ。あれはどうした」
信長はその猿を思わせる顔の小柄な男に対して問うた。
「一体じゃ。あそこまでのことを僅かな間にじゃ」
「馬を外に出しました」
「外にとな」
「はい、馬に朝の馬草を与える時にです」
その時にだというのである。

第六話　帰蝶その十二

「馬草を外に出しました」
「まず馬を外に出したのか」
「そしてそれがしはその間にです」
それからだと。さらに話すのであった。
「馬の寝床の草を一気に引き出しました。大きなゴミごとです」
「ゴミごとか」
「その後で昨夜に用意しておいた新しい寝床の草を入れました。ああ、勿論小さいゴミはそれを入れる前に箒で履いておきました」
「その様にしてか」
「ゴミを引き出すのはこれを使いまして」
言いながらであった。鉄の大きな熊手を出してきたのだった。見ればその熊手にはまだ草がついていた。使ったのは明らかであった。
「それでなのです」
「それでと申すか」
「左様です、それで早いうちに済ませました」
「わかった」
信長はここまで聞いてまずは頷いたのであった。
「そういうことか」
「駄目でしょうか」
「駄目とは言うておらぬ」
信長はそれは否定した。
「むしろじゃ」
「むしろ？」
「よい」
ここ笑ってみせた信長だった。
「こうしたやり方があるか。実に面白い」
「はあ」

「木下秀吉といったな」
あらためて彼のその名も問うた。
「そうだったな」
「左様ですが」
「貴様はこれから侍大将だ」
名前を聞いてからまた告げた言葉はこれであった。
「よいな、もう足軽ではないぞ」
「えっ、私がですか」
「弟も立場を上げる」
「秀長もですか」
「あれは見させてもらってからだがな」
そのうえでだと言ってもだ。約束はしたのであった。
「そうさせてもらうぞ」
「私が侍大将にですか」
「さらに功を挙げればさらにあがる」
信長はさらに言ってみせた。
「よいな、それではだ」
「はあ。何か信じられませんが」
「信じればよいのだ。貴様のその力でなったのだからな」
秀吉のそのきょとんとなった顔を見てだ。そうして語るのであった。
「存分に信じよ」
「左様ですか」
「さて、それではこの厩にじゃ」
信長は秀吉に告げ終えてから。あらためて厩を見てだ。そうしてそのうえで村井と丹羽に対して話すのであった。
「馬を入れるがこれからは厩の掃除の仕方は決まったな」
「そうですね、確かに」
「それは」
二人も信長のその言葉に頷いた。

「それでは。これからは」
「そう致しましょう」
「うむ、その様にな」
また言う信長であった。
「それでは馬に乗るか」
「何と、朝乗られたばかりですぞ」
「それでもですか」
「ははは、わかっておる」
二人の家臣の言葉にはだ。顔をあげて笑ってみせて返すのであった。
「今はそれはせん。夕刻じゃ」
「それで御願いします」
「政があります故」
「そうじゃな。それもたんまりとあるからのう」
「堤に田畑です」
「それと町もです」
「楽市楽座は全ての町でせよ」
信長はその中でこう言った。
「よいな、それはな」
「それは今まで通りしておりまする」
「道についても」
「それでよいのじゃ。田畑と町があってこそじゃ」
その二つをとりわけ見ていることがはっきりわかる言葉だった。

第六話　帰蝶その十三

「そして兵もですね」
「兵になりたい者だけを集めていく」
「報酬を弾んでな。そういうことじゃ」
こう話してであった。彼は政も行っていた。それにより尾張の彼の治める場所はどんどんよくなっていた。だがそれはよく知られていなかった。
雪斎はその中でだ。駿河においてあることを考えそれを実行に移そうとしていた。
「北条だけでなく武田ともか」
「はい」
こう主である義元に告げるのであった。
「同盟を結ぶべきです」
「北条とは既に誼を通じておるがな」
「そして武田ともです」
その家の名前を出すのであった。
「あの甲斐の武田ともです」
「武田は今は越後の長尾と対しておるのう」
「その通りです」
義元の問いにそのまま答えた。
「川中島において既に何度か激しい戦を繰り広げています」
「そうじゃな。長尾も相当な強さじゃな」
「武田にしても長尾との戦に専念したいところです」
雪斎はこのことを述べた。
「そして北条もまた」
「河越の戦の後で関東に勢力を拡げんとしています」
「残った上杉の残党や里見を倒さんとしておるのじゃな」
「従って後ろを何とかしたいところです」

北条のその事情を話す。
「そしてその後ろとはです」
「我が今川とそして武田じゃな」
「武田にとっての後ろとは」
「やはり我等、そして北条じゃ」
義元はすぐに述べた。
「して。我等の後ろはじゃ」
「北条と武田です」
「ふむ。そういうことか」
義元はここで納得した顔になった。そうしてであった。
「三国がそれぞれ互いに誼を結ぶべきか」
「それで如何でしょうか」
「そして後ろに憂いをなくした我々はじゃ」
義元の目がだ。ここで楽しそうに光った。そのうえでまた言うのであった。
「上洛じゃな」
「そうです。いよいよ」
「我が今川は足利将軍家、吉良家に次ぐ家柄」
このことがそのまま義元の誇りになっていた。彼には名門としての自負があった。
「将軍になろうとも不思議ではない」
「将軍にもなれます」
雪斎もこのことを話す。
「殿が望まれればそれで」
「そうじゃな。それではじゃ」
ここでまた笑って言う義元であった。
「決まりじゃ。武田とも誼を結ぶ」
「はい」
「そして三国が互いに誼を通じ合うとしよう」
「その手筈は拙僧が」

ここですぐに名乗り出た雪斎であった。
「一滴の血も流さずに務めてみせましょうぞ」
「一滴もじゃな」
「血は出来るだけ流さないに限ります」
僧侶としての考えもあったがそれ以上に今川の政を預かる者としての言葉であった。彼は政を第一とし血は好まないところがあった。
「ですからここは」
「左様か、それではじゃ」
「お任せ願いますか」
「和上のたっての願いじゃからのう」
こう言って顔を崩して笑う義元だった。
「わかった、それではじゃ」
「はい、有り難き幸せ」
「見事三国同盟を成立させよ」
こう雪斎に告げた。
「よいな」
「はい、それでは」
「そしてじゃ」
義元はさらに話す。

第六話　帰蝶その十四

「織田との戦いに専念するとするかのう」
「ひいては斉藤とも」
「織田信秀には今まで痛い目にも遭ってきたわ」
義元はその公家そのものの顔に嫌悪を漂わせて話す。
「それをまとめて返してやるわ」
「そしてその息子も」
「ああ、あれか」
だが義元の言葉はここで色を変えたのだった。
「あのおおうつけか」
「左様です」
「あんなものはどうということはなかろう」
まるで相手にしていない調子であった。
「おおうつけではないか」
「噂によればですね」
「あ奴の代になればどうということはない」
義元は笑って話すのだった。
「織田は終わりじゃ。その時に攻めるとしようぞ」
「ですが殿」
雪斎の言葉は真剣そのものだった。
「それでもです」
「どうしたのじゃ？」
「織田を侮ってはなりませぬ」
信長のことを言ってもわかってもらえぬと見てだ。家の名前を出したのである。そうしてそのうえで主に対して話をするのだった。
「若し尾張を統一すればその時は」
「尾張一国で六十万石はあるな」
「はい」

「一万五千の兵を出せるか」
義元はすぐに己の頭の中で計算した。石高から出せる兵力はおおよそ決まっていた。彼はそこから尾張の兵を出してみせたのである。
「それに対して我が今川はじゃ」
「二万五千です」
雪斎が述べた。
「駿河、遠江、そして三河で百万石です」
「それで一気に攻めよというのじゃな」
「若し尾張が統一されていれば」
その場合について話す。だがこれは雪斎の頭の中では仮定ではなかった。彼は信長が信秀の跡を継いだならばすぐさま尾張を統一すると確信していたのだ。
「その時は」
「今川の全ての兵でじゃな」
「攻めるが宜しいかと」
「そうじゃな」
義元もこのことには頷くのだった。
「それはそうじゃな」
「はい、ではその時は是非拙僧が先陣を」
「そこまでするというのか」
「一万五千の兵、決して少なくはありませぬ」
兵に話を置いて話す。やはり信長は話には出さなかった。
「ですからここは」
「よし、ではその時は和上に先陣を任せよう」
「はっ」
「そしてじゃが」
義元はここでさらに言うのであった。
「もう一人先陣を任せたい者がおるが」
「松平ですね」
「竹千代じゃ。どうじゃ？あれは」

義元の顔がここで少し崩れた。
「あれはよいとは思わぬか。馬も刀も泳ぎも見事じゃ」
「確かに。どれを取っても素晴しいものです」
「おまけに頭もいいのじゃな」
「教えたことはすぐさま覚えます」
雪斎は主に問いにその通りだと返した。
「学問なら何でもです」
「それはよいのう。氏真は歌や政のことはすぐ覚えるのじゃがな」
「兵法についてはどうも弱く」
「わしもそういうところはあるが」
義元の顔が暗いものになった。
「あれはわしに似たのか」
「殿、そういうことは言われぬべきかと」
「左様か」
「しかしその時はです」

第六話　帰蝶その十五

また言う雪斎であった。
「拙僧が先陣を務めさせて頂くということで」
「頼んだぞ。それではじゃ」
「まずは北条と武田です」
この二つは忘れてはいなかった。
「誼を通じそのうえで」
「織田じゃな」
「では。そういうことで」
「わかった、それではじゃ」
こう話してであった。今川は雪斎の方針に従い戦略を進めることになった。その中でだ。雪斎は己の屋敷に元康を入れてだ。彼から話を聞くのであった。
茶を入れる。自分自身で茶を淹れてそのうえで元康に出してだ。そうしてまずは茶のことから話すのであった。
「茶にも慣れたか」
「いいものだと思います」
元康は素直な声で雪斎の問いに答えた。
「まことに」
「そう思うのだな」
「気が落ち着きます。茶を飲んでいると」
「だから茶はよいのじゃ」
「それでなのですか」
「それでじゃ」
雪斎はここでだ。あらためて元康に問うた。
「尾張にいたことがあったな」
「はい」
「その時はどうじゃった」

元康に顔を向けて直接問うていた。
「織田信長は」
「吉法師、いえ信長様ですか」
「そうじゃ、どういった男じゃった」
「掴みどころのない方です」
まずはこう話す元康だった。
「何を考えているのか、何をされるのかわかりません」
「行動が読めぬか」
「そう言えるでしょうか」
「まあそうかも知れぬ」
雪斎はここでは言葉を濁した。元康に己の考えを悟らせぬ為だ。
「そしてじゃ。そなたから見たあの男はどうじゃった」
「私がどう思われるかですか」
「そうじゃ、素直に申してみよ」
穏やかな口調で元康に告げる。
「ありのままな」
「傑物です」
こう答えた元康だった。
「尾張一国はおろか天下に名を轟かせる方になるでしょう」
「そう見るか」
「はい、今川にとっては恐ろしい相手になるでしょう」
「わかった。それではじゃ」
ここまで聞いて頷いた雪斎だった。そのうえでこう言うのだった。
「そなたの言葉よく覚えておこう」
「そうされますか」
「うむ。尾張の織田、やはりそうか」
元康の言葉を聞いてさらに確信したことであった。そうしてであった。雪斎は今川の為にだ。織田との戦いの用意を必死に進めることになった。

第六話　完

2010・8・23

第七話　位牌その一

第七話　位牌

帰蝶、即ち濃との婚礼の後暫くは平穏な尾張であった。だが信秀はその中でも戦に備えていた。

「次は清洲ですか」

「うむ、そのつもりじゃ」

こう平手に述べていた。

「それでじゃが。信長は今随分と兵を鍛えておるそうじゃな」

「はっ、鉄砲に長柄の槍を揃えております」

「鉄砲に長い槍か」

「それに兵は金で雇い常に戦えるようにしております」

平手は今信長がしていることをありのまま信秀に話した。

「どうもそれがしにはわかりかねます」

「鉄砲も槍もか」

「鉄砲はまだわかりますがあまりにも長い槍は」

「それはか」

「使いにくいと思います。また兵は減っておりますし」

「そうじゃな。金で雇う足軽ばかりではな」

信秀は平手の話を聞いて述べた。誰もが農家の次男や三男を足軽に使っていたのだ。それで戦は田畑の仕事が忙しくない時期に限られていたのだ。この時代の戦は行われる時期が決まっていたのである。

「それでは少なくなるじゃろう」

「信長様は何を考えておられるのでしょうか」

「そうじゃな。呼べ」

ここで信秀は言った。

「信長をじゃ。この古渡に呼ぶのじゃ」

「古渡にですか」

「一度じっくりと話をしたいとも思っていた」
こうも話すのだった。
「それでじゃ。呼ぶのじゃ」
「わかりました」
平手は信秀のその言葉に頷いてだ。そのうえで信長を彼の下に呼んだ。案内役は当然平手が務めそうして古渡に至ったのだった。
「ふむ、そういえばだ」
「何でしょうか」
古渡に行く途中である。信長は気付いたように案内役の平手に対して述べた。信長と平手の他には護衛の者達がいるだけである。それだけで古渡に向かっているのである。
「近頃父上とは話をしておらなかったな」
「はい、殿は相変わらずですから」
「相変わらずか」
「そうです。全く結婚されて少しは落ち着かれるかと思えば」
呆れた口調であった。
「それがなのですから。全く」
「ははは、わしは相変わらずだ」
「大殿の跡を継がれるのです。もう少し主としての確かなものをです」
「ふむ、そうだな」
「では今より。宜しいですな」
「何故そうなる」
何としても自分を型にはめようとする平手にいささか以上辟易していた。そうしてそのうえでだ。平手に対して言葉を返すのだった。
「わしは別にそんなことを言うつもりではないのだ」
「ではどう言われるおつもりだったのですか？」
「この国のことだ」
こう平手に言うのであった。
「尾張のことをな」

「どうされるというのですか？」
「父上に話をしよう。もうそろそろよい頃じゃ」
考える顔であった。信長は馬上でその顔になっていた。無論平手も馬に乗っている。そうしてそのうえで話をしているのであった。
「そう思っておったら今こうして行くとはのう」
「好都合と思われていますか」
「その通りじゃ。では行くとしよう」
「はい、それでは」
「那古屋に戻ればまた茶を飲むか」
信長は笑いながら述べた。
「またな。それでどうじゃ」
「茶は好きなのはいいのですが」
また溜息をつく平手であった。
「しかし。それ以外は」
「全く。爺は口煩いのう」
「ではもう少しです。しっかりとしたことをです」
「やれやれ、爺には適わぬな」
困った苦笑いさえ浮かべていた。そのうえで父のいるその城に向かう。そうして信秀と会う。父はその場で信長に対して告げた。
「話は聞いておるぞ」
「わしのことをですか」
「うむ、面白いことをしておるな」
我が子を見ながらこう告げて笑う信秀だった。

第七話　位牌その二

「鉄砲に長槍か」
「それに兵はです」
「常に戦えるようにしておるな」
「はい、常にです」
父と対して確かな声で話していた。
「戦をできるようにしております」
「しかし兵の数は大丈夫か」
信秀は平手に聞いたことをそのまま我が子に問うた。
「それはどうなのじゃ」
「それも抜かりはありません」
父に対して不敵な笑みと共に話してみせた。
「今楽市楽座をやっております」
「城下で誰でも商いをできるようにしておるそうだな」
「はい、それで人が集まってきております」
「そこに来るのは商人だけではないか」
信秀も話を聞いてわかった。このことがだ。
「浪人達もじゃな」
「その者達を兵に雇っています」
そうしているというのである。信長はそうしたことも考えて楽市楽座を行っている。信秀もこのことがよくわかったのである。
「ですから。その数もです」
「大丈夫じゃな」
「もう既に尾張で一番の兵の数ですが」
「減ったと聞いたが」
また平手から聞いたことをそのまま返した。
「それは違うのか」
「今来ようとしている者がかなりおりますので」

「ふむ、左様か」
「はい、これからはそうして兵を集めますので」
「よし、わかった」
ここまで聞いて頷いた信秀だった。
「それではだ」
「いいのですね、それで」
「そうするといい」
また笑ってもみせた。
「そなたのそのやり方でな」
「左様ですか。それでは」
「しかしのう」
信秀の口調がここでしみじみとしたものになった。
そのうえでだ。また我が子に話すのであった。
「うつけだと言われておるがな」
「それがどうかしましたか」
「人の噂は気にせぬか」
「噂は噂です」
不敵な雰囲気は全く崩れていない。
「事実だけを見ればいいのです」
「そうか。それでか」
「はい。言いたい者には言わせておけばいいではありませんか」
「そしてそれでそなたを見誤れば」
「相手が倒れるだけです」
このことについては実に素っ気無い口調であった。
「それだけです」
「わしはそなたをうつけと思ったことはない」
信秀はそのうつけと言われている我が子を見てだ。そうして告げたのである。
「一度もな」
「一度もですか」

「おおうつけとは思っておる」
ここでにやりと笑ってみせる父であった。
「天下一のな」
「天下一のおおうつけですか」
「そうでなければ何ができようか。おおうつけと呼ばれるまでになければ尾張一国はどうにかなろうとも天下まではどうにもならんわ」
「では。わしは」
「そなたの目指すものを目指せ」
今己の子に告げた言葉はこれであった。
「よいな、そなたのだ」
「それをですか」
「天下か」
「無論です」
確信と共にだ。そこには轟然たるものまであった。

第七話　位牌その三

「男ならばそれを目指すべきではありませぬか」
「そうだな。そしてそれ以上にか」
「わしはこの国の民を栄えさせてみせます」
このことをだ。己の天下以上に見据えているのである。
「その為に天下をその手に治めるつもりです」
「民をか」
「戦ばかりでは栄えませぬ。やはり太平でなければ」
「天下を統一し太平にしてか」
「それは駄目でしょうか」
「いや、天下を望むのは誰でもできる」
それはだというのだ。誰でもだというのである。
「しかしそれからを見据えている者は多くはないからのう」
「わしはその辺りの小者とは違います。天下を手中にするならばです」
「この国も民もか」
「栄えさせてみせましょう」
「楽しみだな、そなたのこれからが」
信秀は我が子の話を聞いているうちにその笑顔をさらに深いものにさせていた。そうしてそのうえでさらに話をするのであった。
「見ていくことにするか」
「ではわしに」
「家督を譲ることになるな」
深い笑みのまま我が子に告げた。
「家臣達もそれで異存はあるまい」
「爺だけは色々と言いますが」
「ははは、あ奴は昔からああだからのう」
平手のことはだ。信秀も大きな声で笑って済ませた。彼のことを

よく知っているからこそだ。その言葉に対して笑ってみせたのである。

「ああして小言が多いのじゃ」

「権六や新五郎より遥かに多いです」

「あの二人もかなり口煩いのだがな」

「爺はそれ以上です」

「そうだな。しかしじゃ」

ここで信秀はこんなことも話した。

「権六や新五郎もそうだがな」

「はい」

「あ奴は見所のある者しか叱らぬ」

そういう男だというのだ。

「そなたの家臣には色々と若い者もいるな」

「又左や五郎八や内蔵助達ですか」

「その者達にも怒るな」

「慶次に至っては殴られています」

「おお、あの武辺者か」

「御存知ですか」

「尾張一の傾奇者で悪戯者だったな」

信秀は慶次のことを悪戯のところからも知っているのだった。

「あ奴にも悪戯をしおるか」

「茶に塩を入れたりしております。それを爺が飲み」

「それは怒るであろうな」

「わしが止める程です。困ったものです」

「しかし慶次はどうじゃ。見事か」

「戦の場ではあそこまで強い者はおりませぬ」

信長はその慶次について述べた。

「己の武勇では権六や又左よりも上でありましょう」

「左様か」

「そしてあれで学問も好みます」

それにも秀でているという。
「教養もあります」
「中々の優れ者か」
「ですが政や戦で兵を指揮することには興味がありません」
信長は慶次のそういうところも見ているのであった。そのうえで信秀に対して述べる。
「他の者はどちらもできるか戦か政のどちらかで指揮もできますが」
「慶次だけはそうしたことには興味はないか」
「あれは風来坊です。そこが又左と違います」
「同じ前田の者であってもか」
「家督にも興味はありませぬ。欲のない男です」
「ただ傾奇を通すだけか」
「それが余りにも過ぎるので爺に怒られている次第で」
それでだというのである。
「爺に言わせれば。もっと政や戦での兵の操りを覚えろとのことですが」
「しかし言っても聞かぬか」
「そういうのを見れば慶次には素養があります」
「そういうことじゃ、平手は見所のある者しか怒らぬ」
ここまで話してだ。信秀は信長に対して平手についてこう述べたのであった。

第七話　位牌その四

「あの者は失うな」
「決してですか」
「あの者は魏徴よ」
「それですか」
「そうよ、それよ」
こう話すのであった。
「これでわかるな」
「如何にも」
「わかっていればよい」
信秀は今の我が子の返答にも満足した顔で頷いたのだった。
「あの者はそなたにとって大事ぞ」
「まさに鏡ですな」
「左様、魏徴がそうだったようにじゃ」
魏徴とは唐の太宗の臣である。主に対する諫言で有名である。それにより太宗を名君としていた人物だ。詩人としても名高い人物だ。
「必要なのじゃ」
「わしだけでなく家臣全体にですか」
「だからだ。失うな」
このことを強く言う。
「あれがいるのといないのとで全く違うぞ」
「左様ですな。それではです」
「うむ」
「爺はこれからもわしの傍で筆頭家老として働いてもらいましょう」
「そうせよ。わしがおらずともあ奴がいる」
まずは平手であった。
「そして他の者もな。その者達を使えば尾張なぞ手に入れるのは容易い」

「左様ですな。尾張は」
「すぐに手に入れよ」
信秀は告げた。
「よいな」
「はい、それでは尾張は」
「そしてそれからもだ」
信秀もまた。今は尾張より先も見ていた。そのうえで信長と話をしていた。
「よいな」
「天下を」
こう話してであった。今は別れる父子であった。信長はその父子の話の後もうつけでありそして城下も田畑も治めていた。その中で、であった。
「殿、大変です」
「どうした、久助」
丁度書を読んでいた。そこに飛んで入って来た滝川に応えるのだった。滝川の動きは忍らしく音もなくかつ尋常な素早さではなかった。
「何があった」
「大殿が亡くなられました」
「何っ、父上がか」
「はい」
そうであると。信長に対して述べたのであった。
「その通りです」
「そうか。それであの時」
信長はその話を聞いてだ。先日の父との話を思い出していた。
そのうえでだ。滝川に対して問い返した。
「それでだが」
「何でございましょうか」
「葬儀はすぐだな」

問うたのはこのことだった。
「そうだな」
「はい、そうです」
滝川はまさにその通りだと述べた。
「既にその用意に取り掛かっております」
「わかった。それではだ」
「すぐに古渡に向かわれるのですね」
「いや、まずはそなた等が行け」
信長はここでこう滝川に告げた。
「濃と勘十郎もじゃ。無論爺もじゃ」
「殿はどうされるのですか？」
「無論わしも行く」
信長は行くとは答えた。
「だが」
「だが？」
「後でじゃ。まあ見ておれ」
「何かお考えがあるのですか」
「さてな。それではな」
「はい、それでは」
滝川はここでは多くを問わなかった。そうしてであった。
今はそのうえで平手や帰蝶、それに信行達を先に古渡に向かわせる。彼等は程なくしてその城に辿り着いた。しかしであった。
「殿はどうされたのじゃ？」
「遅れて来られるそうだな」
信行は苛立つ平手に冷静に返した。

第七話　位牌その五

「そうらしいな」
「大殿の御葬儀にですか」
「何かされておるらしい」
「お父上の御葬儀以上に大事な用があるのですか」
「それは私にもわからぬ」
平手とは好対象に落ち着いている信行だった。
「しかしまだ来られぬ」
「奥方様も来られているというのに」
平手は今度は帰蝶を見て言った。
「何を考えておられるのか」
「まあまあ平手殿」
「まずは落ち着かれてはどうですか？」
その彼に声をかけたのは坂井と金森だった。
「殿の気まぐれはいつものことです」
「かりかりされても仕方あるまい」
「御主等がそう言って殿を甘やかすからじゃ」
平手は彼等に対しては少し怒って返した。
「全く。殿がああいうふうになられてじゃ」
「しかし焦っても仕方ありませぬぞ」
「そう思いますが」
今平手に言ったのは武井と島田である。
「落ち着かれてです」
「そうすれば問題はありますまい」
「茶でも如何ですかな」
林も実に落ち着いたものである。
「何なら淹れまするぞ」
「ええい、新五郎そなたまで」

平手はその林に対しても矛先を向けた。
「そなたといい権六といいじゃ。殿に対して言わぬから」
「言う必要がないのではないですかな」
「左様、慶次などとは違って」
林に続いてその柴田も参戦してきた。折り目正しい服に濃い髭という格好でだ。顔を崩して笑ってみせたうえでの今の言葉だった。
「あの悪戯者は何度ぶん殴っても聞きませぬ故」
「ええい、そういえばあの悪戯小僧はじゃ」
平手から見れば織田家随一の武辺者も小僧であった。
「朝わしの馬の尻尾を厩の柱に括りつけておった。とんでもない奴じゃ」
「おやおや、それはまた慶次らしいですな」
佐久間盛重も至って落ち着いたものだった。
「相変わらずですな」
「笑って済む話か。そういえば慶次は何処じゃ」
「城の外におります」
彼の叔父の前田が答えた。
「それが何か」
「何処に行ったかと思えば」
「よいのではありませぬか？」
眉の白い男が言うのだった。
「別に」
「喜太郎か」
「はい」
前野長康、彼もまた信長の家臣であった。
「それでよいと思いますが」
「これでよいのか」
「殿らしいではありませぬか」
実に落ち着いたものであった。彼もだ。
「ここぞという時に来られて」

「そうされるというのか」
「そしてここぞということをされます」
前野はこうも言った。
「それでいいではありませんか」
「そういうものか」
「はい、そうです」
「しかしそれでもだ」
平手の心配は尽きない。この辺り実に平手である。やきもきとさえしている。
「殿だぞ」
「はい、殿です」
「何をされるか心配だ」
「どうしてもですか」
「まさか。またしても突拍子もないことをされるか」
このことも心から心配しているのであった。

第七話　位牌その六

「それが心配でならん」
「まあ平手殿落ち着かれよ」
佐久間がその平手に見かねたように告げてきた。
「今ここであれこれ話しても仕方ありませぬぞ」
「牛助、そう言うがじゃ」
「殿は必ず来られますぞ」
平手にこうも告げる佐久間だった。
「来られない筈がありません」
「そう言えるのか」
「来られるして何をされます？ここで来られるして」
「ううむ、そう言われると」
「ここは言うならば戦の場です」
佐久間はまた言ってみせた。
「それならば殿が来られなければ話になりませぬぞ」
「そうだな。まずわし等がいる」
柴田もここで再び口を開いた。
「では殿が来られない筈がない」
「何なら殿を務めましょうか」
佐久間は冗談めかしてこんなことも言ってきた。
「よければ」
「ではわしが先陣じゃ」
柴田も佐久間に合わせて言う。
「さて、どれだけ暴れようか」
「おお、お二人が動かれるとなると」
何といつもは静かな丹羽もここで出て来た。
「それがしは兵糧や武具の用意をせねばなりませんな」
「政の場ですと銭ですな」

「そうですな」
村井と松井の言葉だ。
「戦にはそれも必要ですが」
「ではこの大殿の葬儀にもそれ以上に」
「よし、早速大暴れの準備だ」
「うむ」
前田と佐々がここで立ってみせる。
「槍の又左の力見せようぞ」
「さて、わしも縦横に暴れるか」
「全く。御主等はどれもこれも」
そんな彼等にもだ。平手は愚痴るばかりであった。
「どうしたのじゃ、殿に影響されてばかりではないか」
「しかしですぞ、平手殿」
これまで黙っていた池田も彼に言ってきた。
「殿といるとこれが何かと面白くて」
「左様、見るものが違いますから」
九鬼もここでようやく出て来た。
「面白いではないですか」
「わしも戦だけでなく政もやらされるからのう」
「わしもじゃ」
原田と川尻である。
「それもまた楽しいしのう」
「色々とためになるわ」
「まあ多くの家臣がいるのはよい」
平手はとりあえずそれはよしとした。しかしここでさらに言うのが彼である。
「だが。あれだけ無作法では」
「爺、そろそろだぞ」
その彼に信行が言って来た。
「いいな」

「あっ、もうですか」
「そうだ、時だ」
信行はこう彼に言うのだった。
「皆の者もだ。行くぞ」
「はっ、わかりました」
「それでは」
「兄上は葬儀の場でお待ちしよう」
信行が最も冷静であった。
「弟や妹達も揃っておるな」
「はい、それはです」
林通具が彼に答えた。
「どなたも来られております」
「市はどうじゃ」
信行は彼女のことも問うた。
「来ておるな」
「無論です。ただ大殿が亡くなられ今は」
「涙が止まらぬか」
「左様です」
「あれは心優しい」
信行の言葉がここで曇った。表情は何とか平静を保ってはいるがだ。

第七話　位牌その七

「芯は強いようだが。それでもこうしたことにはまだ弱いか」
「どうされますか、それで」
「気持ちはわかるが連れて来ぬ訳にもいくまい」
信行は少し苦い言葉で述べた。
「だからここはだ」
「わかりました、それでは」
「兄上が来られたら変わるだろう」
信行はこうも言うのであった。
「あれは兄上に一番懐いておるからな」
「ははは、兄上はもてますな」
ここで笑ったのは信広であった。
「よいことで」
「それが殿のいいところですな」
今言ったのは金森であった。
「おなごに慕われるのはいいことです」
「しかも市様とはこれまた」
森長可も言う。
「お美しい方に慕われるものよ」
「市様は必ず大層なおなごになられるぞ」
池田勝正もいる。
「天下に轟くまでのな」
「そうだな。そこまで美しい方になられるぞ」
坂井もそのことを認める。
「ご兄弟姉妹の中でも一番やもな」
「そうだな。その市だが」
また言う信行だった。
「兄上が来られるまでは私の傍に置いておこう」

「そうして頂けますか」
「市さまは」
「うむ、それではだ」
信行も家臣達の言葉に頷いてみせた。
「では行こう」
「さて。誰がいるか」
「織田信友めがいるでしょうな」
「まずあ奴が」
「坂井太膳も」
この者の名前も出た。
「いるでしょうが」
「我々としてはこのままですな」
「動ずることなく」
「その必要はない」
平手の今度の言葉は強かった。
「何も動じることはない」
「そうですね、我等の方が上です」
「ですから」
「負けると思うか」
平手は彼等にこうも問うてみせた。
「清洲の織田に。そしてその他の織田に」
「まさか」
「そんな筈がありません」
「どうして負けましょうか」
これが彼等の返答であった。
「坂井がいても一人です」
「しかし我等はその坂井よりも上です」
「それがこれだけいればです」
「負ける筈がありません」
「そういうことじゃ。負ける筈がない」

平手はまた話してみせた。
「殿にしてもな」
「織田信友にはです」
「負ける筈がないと思いますが」
「それは如何でしょうか」
「さてな」
しかしであった。平手は主のことになると首を捻るのであった。
「そうであればいいのだがのう」
「まあそれは平手殿の心配性ということで」
「それではです」
「参りましょう」
何はともあれ葬儀の場に入る一同だった。そこにはその清洲の織田信友やその腹心である坂井太膳もいた。そして他の織田の者達もだ。多くは信秀の敵でありこれから信長の敵となる者達であった。

第七話　位牌その八

その中の太った男が信行のところに来た。これが織田信友である。後ろの小さいずるそうな男こそがだ。その腹心の太膳であった。

彼は信行のところに来てだ。まずはこう告げてきた。

「父君のことは不幸だったな」

「はい」

信行はまだ小さい市の手を握ったまま彼に返す。

「かたじけない御言葉」

「しかし勘十郎」

信友はわざと笑顔になって彼に言ってきた。

「そなたの兄の姿が見えぬな」

「左様ですか」

「ここには来るのだな」

「無論です」

信行は信友に素っ気無く返した。

「兄上は間も無く来られます」

「だといいのだがな」

「全くです」

ここで太膳が愚弄した笑みと共に言ってきた。

「来られればいいのですが」

「貴殿が案ずることはない」

彼に返したのは坂井であった。

「別にな」

「ほう、ないのか」

「ない。落ち着いておれ」

坂井は彼への敵愾心を隠そうともしていなかった。そのうえでの言葉だ。刀を持っていればどうなるかわからないまでの殺気がそこにはあった。

「よいな」
「ふん、まあいいわ」
太膳もここで一旦は引いた。
「とにかく。待たせてもらおう」
「そうじゃな。では太膳」
「はい」
「座るとしよう」
信友はこう太膳に告げた。
「ゆうるりとな」
「そうしましょうぞ」
「では我等も座るとしよう」
信行が己と共にいる者達に告げた。
「よいな」
「はい、それでは」
「我等も」
「市、そなたもだ」
信行は市には優しく声をかけた。
「座るのだ」
「はい、信行兄様」
市は澄んだ奇麗な声で兄に返した。
「それでは」
「もうすぐ兄上が来られるからな」
信行は二人一緒に座りだ。また優しい声をかけた。
「待っているのだぞ」
「信長兄様なら」
しかしだ。ここで市は言うのだった。
「もう少しで来られる」
「わかるのか」
「もう少しで。ちょっとしたら来られる」
こう言うのである。

「今馬に乗っておられる」
「まさかと思うが」
妹のこの言葉を聞いてだ。信行はいぶかしまざるを得なかった。
「市の勘は」
「信長様と同じ程のものはありますね」
帰蝶はその市の言葉を聞いて述べた。
「市殿はどうやら御兄弟の中で信長様に最も近いのでしょう」
「そうなのか。この娘がか」
「末恐ろしい娘ですね」
帰蝶はその市を見ながらまた述べた。
「これは」
「どうなるのかな」
信行はその妹を見てだ。ふと思うのだった。
「我等より兄上に近いか」
「おそらくは」
そんな話をしている間に葬儀がはじまった。それから暫くしてだ。
葬儀の場にその男が遂に姿を現したのであった。

第七話　位牌その九

「なっ・・・・・・」
「あの姿は」
「何と・・・・・・」
信長の縁者や家臣以外の者達が驚きを隠せなかった。
何とだ。信長は茶筅髷に赤い紐、それに帯の代わりに注連縄である。墓も穿かず粗末なはきものである。そして腰には長柄の大刀と脇差である。
「あれで葬儀の姿か」
「しかも喪主だぞ」
「あれで」
信長の周りにいる者達が驚きを隠せない。そうしてであった。
信長はその姿で仏前につかつかと進み出てだ。
位牌を睨みつけそのうえで抹香を掴んでだ。位牌に投げ付けたのであった。
「また何と」
「これが弾正の嫡子か」
「噂以上じゃ」
「うつけにも程があるぞ」
誰もが驚いているその中でだ。
信長はあっという間に葬儀の場を去ったのであった。
後に残った信友や信清といった面々はだ。こぞって信長を愚弄した。
「やれやれ、これではじゃ」
「弾正も気の毒な」
「うつけと聞いていたがそれ以上じゃ」
「全くよのう」
信長を完全に侮った。しかしであった。

信行達は全く動じない。そして皆が愚弄するその中で僅かな者達だけがだ。威儀を正し何も言わなかった。そうしてであった。
「終わったな」
「はい」
柴田が信行の言葉に頷いたのだった。
「これで」
「よし、では帰るとしよう」
「それでは」
これだけで終わりであった。信行達は去った。しかし平手はその中でだ。落胆しきった顔になっていた。
「最早。これでは」
「どうされました、平手殿」
帰る途中でその落胆しきった彼を見てだ。帰蝶が声をかけたのだ。彼女は男が着る青紫の上着に青い袴という格好である。
「殿のことですか」
「何じゃ、あれは」
葬儀のことを言っているのは言うまでもない。
「あれでは。最早」
「やはりそのことですか」
「しかし何じゃ。誰も驚いてはおらんではないか」
平手はここで周りを見た。見れば誰も驚いてはいない。平然とさえしている。
「あの猿ですらもじゃ」
「あれは木下殿ですね」
「最近侍大将になったな。あの猿も平気な顔をしているのう」
「わかっているからでしょう」
帰蝶はここでこう言った。
「だからなのでしょう」
「わかっていると」
「殿がです」

「馬鹿な。あれでは最早」
平手は首を横に振ってだ。暗澹たる顔で述べた。
「何を申し上げても無駄じゃ。かくなる上は」
「そう思われるのでしたら」
しかし帰蝶はまだ彼に言う。
「一週間後の朝ですが」
「一週間後の朝ですとな」
「城に行かれてはどうでしょうか」
こう彼に言うのである。
「翌朝にです」
「何かあるというのですか」
「はい、その時に考えられてはどうでしょうか」
これが帰蝶の言葉である。
「それでどうでしょうか」
「そうじゃな。わしも今日という今日は覚悟を決めた」
実際に平手の顔はそうしたものになっていた。
「さすれば。一週間後に」
「城において下さればです」
「しかし奥方も信行様も」
「何でしょうか」
「何故殿に何も言われぬのか、全く」
「あら、その話ですか」
「左様です、殿を少しは」
だが帰蝶はまた平手に言うのであった。

第七話　位牌その十

「一週間後です」
「その時まで待てと仰るのですか」
「はい、そうです」
「わかりました」
平手は苦い顔だったがそれでも頷いたのだった。
「さすれば一週間後にです」
「城においで下さい」
こうしてこの場は何とか収まった。一週間はすぐだった。平手は白いしに装束で城に来た。まさに覚悟を決めてである。
「殿、こうなれば死を以て」
本気であった。葬儀のそれに絶望してだ。彼はそれで最後の諫めにしようとしていたのである。
そのうえで城に行くとだ。やけに騒がしい。
「何じゃ、朝から」
それにいぶかしみ中に入るとだ。そこは。
「よし、それはそこじゃ！」
「そこに置け！」
「槍は持ったな！」
「鉄砲はそこじゃ！」
「全員集まったか！」
平手が知る者達の声が次々と聞こえてきた。それでその声がする方に向かうとだ。そこは。
「何と、これは」
「おう、爺」
何と兵達が集まりだ。陣笠を被り槍や鉄砲を持ってだ。今まさに出陣せんとしていた。家臣達も皆鎧兜に陣羽織を羽織って兵達を見ている。

それを見て驚く彼の後ろからだ。さらに聞き慣れた声がしてきたのだ。
「遅いぞ、年寄りは朝が早いのではないのか」
「殿、これは一体」
後ろを振り向くとだ。そこに主がいた。彼もまた既に鎧と陣羽織を身に着けていた。
「どういうことでございますか」
「見ればわかるだろう。戦に行くのだ」
「戦ですか」
「うむ、実は清洲で変が起こった」
「変とは」
「守護の斯波様が殺されたのだ」
一応尾張の守護は斯波氏となっていた。それで尾張にもいたのだ。この時の主は斯波義銀である。織田氏は彼に仕え守護代を務めているということになっているのだ。
「信友めと坂井太膳達によってな」
「何と、あの男がですか」
「そうだ。守護様が清洲を留守にされていたその隙を見計らい城を完全に己のものとしたうえでな」
「また大層なことを」
「それでわしはそれを名分に清洲に向かう」
不敵に笑ってこう言ってみせた。
「守護様の敵討ちだ。清洲を手に入れるぞ」
「ではこれは」
「無論その為の兵だ」
「そうだったのですか」
「そして爺」
信長はあらためて平手に声をかけてきた。
「そなたも当然出陣じゃ」
「それがしもですか」

「当然じゃ。それとも留守を守るか？」
「何を言われますか、この政秀まだまだ」
「では来るがいい」
優しい微笑みでの言葉だった。
「わかったな。清洲に向かうぞ」
「そしてそこにいる信友を成敗するぞ」
「わかりました、それでは今より」
「皆の者！」
信長の大音声が轟く。
「これより清洲に向かう」
「はっ！」
「そしてですね」
「左様、守護様を殺めた逆賊共を成敗する」
最高の大義名分であった。
「わかったな」
「では今より清洲に向かい」
「賊達を」
「あの者達は賊よ」
敵をだ。完全に定義付けていた。
「賊を討つのは何だ」
「はっ、義です」
「正義です」
前田と佐々がすぐに答える。
「さすればです」
「大義は我等にこそですね」
「そうだ、では行くぞ」
また言う信長であった。

第七話　位牌その十一

「いざ、清洲へ」
「おおーーーーーーーーーっ！！」
青い旗と鎧が一斉に動く。平手はその有様をだ。まるで夢を見ているかの様に恍惚として見ていた。そのうえで信長に従い出陣した。
この信秀の葬儀の話は尾張中に広まっていた。やはり織田家で信長と対立する立場にある者は彼のその行動を馬鹿にし嘲笑った。
しかしだ。その中で異変が起きていた。
彼等に仕える者達の何人かが信長のところに向かったのだ。そうして清洲に向かう途中の彼の軍に馳せ参じたのである。
「我等も是非」
「信長様の家臣の末席にお仕え下さい」
「御願いします」
「おお、よいぞ」
信長は本陣で彼等と会いそのうえでこう返すのだった。
「それではじゃ。これから宜しく頼むぞ」
「はい、それでは」
「御願いします」
「そなた等もまたわしの家臣じゃ」
その彼等に告げる信長だった。
「共に武の道を進もうぞ」
「はい」
「では」
こうした者達も出ていた。そうしてである。
朝倉宗滴はだ。その話を聞いてまた言うのであった。
「それで織田信長の家臣で見限った者はおるか」
「あの男から離れた者ですか」
「そうだ。それはいるか」

このことをだ。忍の者に尋ねるのであった。
「どうなのだ」
「いません」
その忍の者は彼が見たものをそのまま主に話した。
「一人もです」
「そうか、一人もか」
「弟の勘十郎信行を筆頭として弟達もです。誰も離れてはおりません」
「そのうえでかえって彼の下に馳せ参じる者がいるのだな」
「そうです。国人にもそれは出ています」
「国人にもか」
「蜂須賀でしたか」
この名前が出て来た。
「そうした者もあの男の下に馳せ参じたそうです」
「離れた者はおらず逆に馳せ参じる者が出て来ておる」
宗滴はこの現実を話した。
「それだけであの男の勝ちだ」
「それだけでなのですか」
「家臣が増えておるのだ。しかも敵の家臣は減っておる」
「そう考えれば確かに」
「それにじゃ」
宗滴の話は続く。
「殆どの者がそれからあの男を侮っておるな」
「それは元からでしたが」
「尚更じゃな。これは大きい」
宗滴は今度はこのことを指摘した。
「相手を侮ればそれだけで首が危うくなるものだからのう」
「では此度のことはそれを狙ってのことなのですか」
「だからこそ元からの家臣や弟達は誰一人として離れなかったのだ」
「わかっていたからですか」

「そうじゃ。主のこともそのすることもじゃ」
そうしたことまでだというのである。
「それでなのじゃ」
「そうだったのですか」
「さて、それでじゃ」
「はい」
「織田信長、間違いなく尾張を統一する」
宗滴は最早それは確信していた。
「そしてそれからじゃ」
「それからですか」
「蛟龍の如く世に出るだろう」
こうも話すのであった。
「尾張の他の国も手中に治め。それを考えると」
「何でしょうか」
「朝倉は幸いにして都に近い」
不意にここで自身の家のことを話すのだった。
「そして北近江の浅井とは盟友だな」
「それが何か」
「南近江の六角を退け都に入るべきか」
こう言うのであった。
「やはり」
「都にですか」
「一向一揆のこともあるがそれでも都を目指すべきではなかろうか」
これが今宗滴が考えていることだった。

第七話　位牌その十二

「それはどうだろうか」
「そうですね。それは」
忍の者も考える声を出す。そのうえで主に話す。
「悪くはありませんね」
「そう思うな」
「はい、思います」
まさにその通りだというのだった。
「やはり。都に」
「三好がいるがな」
「三好長慶ですね」
「近頃あの男は勢いがないそうだな」
「その執権の松永久秀が実験を握ろうとしています」
「ふむ、左様か」
宗滴は忍の話を聞いてまずは頷いた。
「主細川から実験を奪った男が今度は己がか」
「これも因果でしょうか」
「さてな。だがその松永という男」
「かなり危険な男のようです」
「そうであろう。あの男には気をつけておくべきか」
「若し三好長慶が死ねばどうなるでしょうか」
忍の者はその場合のことも問うてきた。
「その場合は」
「分裂だな」
そうなるというのである。
「その松永と三好の家の者達でだ」
「分裂して互いにですか」
「争う。近畿はそれでまた大きく乱れるであろう」

「そしてそれにより三好は力を失いますか」
「三好長慶は優れた者だった」8
宗滴の長慶への言葉は既に過去形であった。その言葉で語るのだった。
「だが。衰えたな」
「確かに。それも思ったよりも早く」
「しかも酷いものだ」
衰え方にも色々とある。長慶の衰えはその中でもかなり酷いものだというのである。
「最早昔日の面影はない」
「だからこそ松永に付け入れられるのですね」
「結果としてそうだ。弟達も失ったしな」
長慶のその弟達の話にもなる。
「中には松永の讒言で殺してしまった者もいるな。早くに死んだその弟達もどうも松永の陰謀めいているが」
「恐れながらそれで間違いないかと」
忍の者はまさにそれだというのだ。
「確かなことは掴んでいませんが」
「そうか、やはりな」
「松永弾正久秀、その出自も確かではありません」
「どの者かわかってはおらぬのか」
「はい、まだ美濃の斉藤道三の方がよくわかっています」
その美濃の蝮の方がだというのである。その彼である。
「あの男はかつては寺の小僧であり油売りでありましたから」
「それであそこまでなった男だ」
「しかしその斉藤と比べてもです。松永の出自ははっきりとはしておりません」
「よからぬものを感じる」
「感じられますか」
「どうもな。しかしそれはわからぬな」

宗滴は曇った顔で言葉を出した。
「そうだな」
「調べようとした者は多いです」
それはだというのである。
「まず三好の家の者達がそうしております」
「しかし何もわからなかったのだな」
「何故か。調べようとした者はです」
忍の者の言葉にもである。不吉なものが宿った。顔は忍装束の覆面の中に隠れている。だから声だけがわかるのだった。
「一人として長く生きてはおりません」
「消されたな、松永に」
「そうでしょう、やはり」
「ふむ。天下には怪しい者もいる」
宗滴はこのことにあらためて実感するものを感じていた。
「他にもおるのやもな」
「左様でしょう。一向一揆といい」
「あの者達もだ。妙だ」
「確かに。殺しても殺しても出て来ます」
「あれだけ殺してもじゃ。越前の民が減った気配がどうにもせぬ」
「しませぬか」
「わしの気のせいであろうか」
こう考えていた。彼はこのことで確かなものを掴んでいなかった。だから考えてそれで止めるしかなかったのである。確かなものを見ることはできていなかったのである。
「加賀を何とかしておきたいが」
「しかし我等の力はそこまで至っておりません」
「朝倉、もう少しの力が必要じゃ」
宗滴は無念そうに語る。

第七話　位牌その十三

「そして都に向かいじゃ」
「天下をですね」
「この越前と近江を手に入れればそれでかなりの力になる。都に入りそのうえで今の三好とも戦えるのじゃ」
「そうしたいものですが」
「一向一揆との戦いで傷を受け過ぎた」
まずはこの問題があった。
「政をせねばならん」
「はい、それもじっくりと」
「しかしのう」
今度は嘆息する宗滴だった。そのうえでの言葉だ。
「義景様は」
「無念です」
「今もか」
「はい、また茶に和歌に蹴鞠にです」
「今川の義元殿や氏真殿と同じか」
ここではこの二人の名前を出した。
「駿河のあの二人は政は忘れてはおらぬようだが」
「戦はお世辞にも達者ではないようです」
「しかし民を忘れてはおらぬな」
「その氏真殿にしてもです」
忍の者も彼について話す。
「民を愛し常に気にかけておられます。家臣にも慈しみを忘れぬそうです」
「戦の世でなければさらによかったのう」
「おそらくは」
「しかし。義景様は」

ここでまた嘆息した宗滴だった。そうしてまた話すのであった。
「あの様な方じゃ。戦についてもじゃ」
「自ら出られることもありませぬし」
「朝倉はどうなる」
今度は暗澹とした言葉になっていた。
「一体」
「気懸かりなのはそれがしもです」
「そなたに告げておく」
宗滴は今の忍の者の言葉を受けて彼に告げた。
「わしが死ねばこの家から離れるつもりか」
「それは」
「隠さずともよい」
今度はこう返した。
「わしに仕えているのであって朝倉家には仕えておらぬ。それはわかっておった」
「左様でしたか」
「ならばじゃ。新しい主のところに向かえ」
「してその主は」
「そなたが認めた者にじゃ。必ずいる筈じゃ」
「だといいうのですが」
「少なくともそなたは義景様に仕えてはならぬ」
このことは絶対に駄目だというのであった。
「何があろうともじゃ」
「そうなのですか」
「あの方は人がわからぬ。明智もそれで去ってしまった」
「今は足利将軍家におります」
「あの男は傑物じゃった。必ずやわしを超えたであろう」
「確かに。明智はそこまでの者でした」
「しかし義景様にはわからなかった。去ってもそれでもわからなかった」

また無念の言葉を出す宗滴だった。
「どうにもならぬ」
「ではそれがしは」
「信濃にでも行くといい」
その国だというのだ。
「そこで主を探すのだな」
「信濃ですか」
「真田だったか」
この名前が出て来た。
「そこの次男だったか。真田幸村といったな」
「真田幸村ですか」
「確かそうした名前だった。まだ若いがだ」
それでもだというのだ。
「かなりの傑物らしい」
「そうなのですか」
「そうじゃ。その者に仕えてはどうか」
「わかりました。それでは」
「何はともあれ一度信濃に行ってみよ」
何につけまずはそれをという宗滴だった。
「よいな」
「わかりました」
「霧隠才蔵よ」
その名をはじめて呼んでみせた。
「そなたはわしで終わるには惜しい」
「それで次の主の下へと」
「そうだ、飛べ」
飛べとさえ告げる。
「そしてそのうえで大きなことを果たすのじゃ」
「さすれば」
ここでだ。その才蔵は覆面を取った。するとそこからだ。流麗な

美男子の顔が出て来た。誰もが見た途端に息を飲む美貌であった。
「その時までは宗滴様に」
「仕えてくれるか」
「お許し願いますか」
「言うのはわしの方じゃ」
こう返す宗滴だった。
「それではその時まで頼むぞ」
「では」
「朝倉の天下は望めぬとしても」
空を見上げての言葉だった。
「しかし。天下は大きく動くか」
「その様ですな」
今空には蒼天と白日があるだけである。そしてその白日がだ。これ以上はないまでに強く明るく輝いていた。まるでこの世を変えんとする様に。

第七話　　完

２０１０・８・３１

第八話　清洲攻めその一

第八話　清洲攻め

清洲城に向けて進撃する織田信長の軍勢のところにだ。一人の随分と身体が大きく毛深い男が向かっていた。顔も濃い髭があり髷は総髷である。

その彼がだ。周りの者達の声を受けていた。

「あの、家攻様」

「本当にいいのですか？」

「あのうつけ殿に仕えるとは」

「宜しいのですか、それで」

「本気ですか？」

「無論本気じゃ」

その男蜂須賀正勝は堂々とした大きな声でこう周りに返した。

「さもなければここまで来るか」

「どうしたんですか、一体」

「そうですよ。これまでは中立を守ってきたというのに」

「国人として力もありますし」

「それでもいけたのに」

「それもこれで終わりじゃ」

また周りに言う蜂須賀だった。彼は黒い大きな馬に乗っている。その大きさは周りの者達のそれと比べて二周りは大きい。

その彼がだ。大きな声で言うのであった。

「わしはこれからそのうつけ殿に仕えるぞ」

「どうしてもですか」

「本気なんですか」

「やっぱり」

「本気も本気じゃ」

こう言って憚らない蜂須賀であった。

「よいな、間も無く那古屋じゃ」
「ううん、何か未来が怖いな」
「これからが」
「一体どうなるか」
「これで蜂須賀家も終わりかな」
「遂に」
「何が終わるものか」
それは全力で否定する蜂須賀だった。やはり声が大きい。
「これから蜂須賀家はじゃ」
「滅亡ですね」
「うつけ殿と一緒に」
「ふん、うつけはうつけでもじゃ」
蜂須賀はさらに話すのであった。
「あの御仁はおおうつけじゃ」
「やっぱりうつけじゃないですか」
「それも上に言葉がつくみたいな」
「洒落になりませんね」
「そんな人に仕えるって」
「一体全体何を考えておられるんだか」
周りの者はこうは言ってもである。一人も離れようとはしない。
不思議と蜂須賀の周りに集まってだ。彼を慕っているのであった。
「まあそれでもですね」
「蜂須賀様が言われるならです」
「わし等は行きますよ」
「そのうつけ殿のところへ」
「何じゃ、来るのか」
蜂須賀本人も彼等のその言葉を聞いて思わず笑い声を出した。
「あれこれ言ってもか」
「ですから。わし等は蜂須賀様に惚れてますから」
「それならですよ」

「例え火の中水の中」
「行きますよ」
「最初からそう言え。むっ」
ここで彼等は前にあるものを見たのだった。それは。
「ふむ、兵達じゃな」
「青い鎧に青い旗に青い陣笠ですね」
「あれは確か」
「そのうつけ殿の軍じゃな」
蜂須賀が言った。
「あのうつけ殿は軍を青でまとめておるそうじゃからな」
「武田が赤、上杉が黒で北条が白」
「毛利が緑であの御仁は青ですか」
「色だけは見事ですな」
「全く」
「いやいや、これはじゃ」
しかしここで蜂須賀は笑って言うのであった。
「面白いのう」
「確かに色は面白いですね」
「それは」
「それだけですが」
周りの声が冷めていた。

第八話　清洲攻めその二

「全く。織田家といっても色々あるのに」
「伊勢守家とかならともかく」
「一番訳のわからない場所に入るとは」
「酔狂なことだ」
「酔狂で結構」
蜂須賀はまた笑いながら言った。
「それでこそ戦国よ」
「まあとにかくですね」
「その織田信長様の軍ですね」
「何処に行く気なんだか」
「おおい、そこの一行」
ここでだ。彼等に声がかかってきた。
「何処に行くつもりだ？」
「んっ、何だあれは」
「随分小さな奴が出て来たな」
「猿か？あれは」
「うむ、そっくりだな」
そのやたら小さく猿に似た男が来てだ。彼等に声をかけてきたのだ。
「悪いが少し道を開けてくれ。今から軍が通るからな」
「開けるわけにはいかぬわ」
蜂須賀がその男に返した。
「悪いがのう」
「何故じゃ？それは」
「御主等織田信長殿の軍勢だな」
「如何にも」
男はこう蜂須賀の言葉に返した。

「その通りじゃ」
「わし等はその信長殿の軍勢に入りに来たのだ」
「おお、ではわし等と共に先に進むというのか」
「その通りじゃ。だからどく訳にはいかぬ」
こう男に告げる。
「わかったな」
「うむ、よくわかった」
男は蜂須賀の言葉にまずは腕を組んだ。そうしてそのうえでしきりに頷いてみせる。随分とひょうきんな姿をそこに見せていた。
「御主等それではじゃ」
「信長殿のところに案内してくれるか」
「よいぞ、では来てくれ」
「うむ。しかし軍の数はこれだけか」
蜂須賀はその青い軍勢を見た。数百人程度だ。
「随分と少ないのう」
「当たり前だ。わし等は只の斥候だ」
「何っ、斥候か」
「先に出て調べているだけだ。それで多い筈がなかろう」
「そうだったのか」
「後で柴田様や滝川殿の軍勢が来られる」
男は身振り手振りを交えながら蜂須賀達に話す。
「そうだな、軍は全部で五千か」
「五千とな」
蜂須賀はその数を聞いて大いに驚いた。
「多いな、それはまた」
「多いか？」
「多いぞ。あのうつけ殿そこまでの兵を持っていたか」
「ははは、御主も殿をうつけと言うか」
男は蜂須賀の今の言葉に笑いながら述べた。
「そう言うか」

「しかしそれが五千か」
「そうじゃ。こんな数ではないぞ」
「その兵で攻めるというのか」
「その通りじゃ。それで信長様のところじゃが」
「うむ、はよう案内せい」
こう男に言う。
「わしはせっかちじゃ。早いうちにな」
「わかっておる。それで御主の名前じゃが」
男はここで蜂須賀の名前を問うのであった。
「何というのじゃ？一体」
「蜂須賀じゃ」
彼はまずはその姓を名乗った。

第八話　清洲攻めその三

「蜂須賀正勝じゃ」
「ふむ、蜂須賀か」
「小六とでも呼べ」
己の幼名を男に話した。
「よいな」
「わかった。では小六よ」
「うむ」
「わしの名前は木下秀吉じゃ」
男も自分の名前を返して述べた。
「藤吉郎とでも呼んでくれ」
「ふん、御主は猿じゃ」
しかし蜂須賀は笑って木下をこう呼ぶのだった。
「猿じゃ。どう見ても猿そっくりじゃからのう」
「何と、御主までそう呼ぶのか」
「何じゃ？この呼び名で不服か？」
「誰からもそう呼ばれておるのでなあ。弱ったことにじゃ」
「当たり前じゃ。どう見ても猿ではないか」
木下のその顔を見れば見る程だった。まさに猿であった。しかも小柄で身振り手振りも多い。誰がどう見ても彼は猿であった。それで蜂須賀も彼をこう呼んだのだ。
「全く以てな」
「やれやれじゃな。まあいい」
「よいのか」
「まずは信長様のところへ行こうぞ」
猿と呼ばれてもあまり気にしていない感じであった。
「今からのう」
「うむ、それではな」

こうして蜂須賀は木下に連れられ信長の前に来た。信長は馬に乗ったまままずは下馬して己の前にきた蜂須賀を見た。そのうえで言うのであった。

「わかった」

「わかったとは」

「猿と共に斥候をせよ」

こう蜂須賀に告げた。

「よいな、斥候じゃ」

「いきなりですか」

「それで功を立てるがいい」

蜂須賀に対して有無を言わせぬ口調であった。

「よいな、それでじゃ」

「左様ですか。では」

「小六よ」

信長は彼を幼名で呼んできた。

「期待しておるぞ」

「いえ、そうではなくです」

蜂須賀はあまりにもあっさりと軍勢に入ることを認められてだ。いささか拍子抜けしながら信長に対して問うのであった。

「わしを怪しいとか思ったりは」

「怪しければこの場で斬っておる」

信長の返答はこれであった。

「それだけじゃ」

「それだけですか」

「そうじゃ。では行くがいい」

信長の今度の言葉は素っ気無い。

「斥候にな」

「わかりました、それでは」

蜂須賀とその一党は青い鎧や兜を与えられそのうえで先に向かう。そうして斥候のところに入ってあらためて木下と話すのであった。

「のう、猿よ」
「何じゃ？」
「信長様だがな」
「うむ。信長様がどうされた？」
「変わった方だのう」
こう木下に話すのだった。
「どうにもこうにもな」
「そう思うか」
「わしは新参者だぞ」
いぶかしむ顔でこのことを話すのだった。
「そのわしにいきなりこんな仕事を任せてくれるか」
「あの方はそういう方なのじゃ」
木下は特に動じることなくこう蜂須賀に返した。
「だから特に思う必要はないぞ」
「だからか」
「そうじゃ。わしにしろあれじゃぞ。最初は足軽で入ったのだぞ」
「それで今は何じゃ？」
「足軽大将じゃ」
それだというのである。

第八話　清洲攻めその四

「あの方は見込まれれば誰であろうとも重く用いられる方らしくてのう」
「そういえば周りに若い者が多かったな」
蜂須賀は信長の周りにいる面々の顔を思い出した。そういえばそうであった。
「確かにな」
「まあ筆頭家老は平手様でな」
「ああ、あの口煩いと評判の」
「ははは、それは知っておったか」
「有名だぞ。尾張一の頑固爺じゃ」
平手が何で有名かというとその口煩さのせいであった。そして頑固なことでも知られているのである。
「そういえば信長様の家臣だったな」
「それと柴田様がおってな」
「掛かれ柴田じゃな」
「うむ、それと退く際の佐久間様」
「退き佐久間じゃな」
「いつもおられる家老で林様がおられる」
まずはこの四人が話される。しかしそれで終わりではなかった。
「そこに最近二人伸びてきておってのう」
「ほう、二人か」
「今柴田様と共に先陣を務めておられる滝川様に奉行の丹羽様じゃ」
「二人共どういう者達じゃ？」
「まだ随分と若いぞ。わしと同じ位じゃ」
「何と、御前とか」
「左様、左様」
木下は持ち前のひょうきんな素振りで驚く蜂須賀に話す。

「二人共間も無く家老かものう」
「御前かわし位の若さで家老とな」
「だから信長様は優れた者しか周りに置かれずじゃ」
「うむ」
「優れた者はどんどん取り立てられるのじゃ」
「ううむ、それでわしもか」
「わしと共に斥候になったのじゃ」
それでだというのだ。秀吉はしかと話す。
「さて、わしもじゃ」
「どうするのじゃ？」
「ここで武勲を挙げてさらに位をあげるぞ」
「偉くなりたいのか」
「偉くなれば俸禄があがるな」
「うむ、その通りじゃ」
「そうすれば母ちゃんにも楽をさせられるからじゃ」
それでだというのだ。木下はその手に持っている槍を今にも振るわんかの調子で蜂須賀に話す。
「やるぞ、わしは」
「その小さな身体でか？力もなかろうに」
「身体が小さくとも力がなくともやれることはやれるのじゃ」
ここで少しムキになって蜂須賀に返す。
「ちゃんとな。やれるぞ」
「まあ頑張れ」
まずはこう返す蜂須賀だった。
「死ぬなよ。絶対にな」
「うむ、わしは絶対に生き残るぞ」
「その心意気よいのう。よし、猿」
蜂須賀はここでにやりと笑ってだ。そのうえで木下に告げた。
「わしは御前が気に入ったぞ」
「それはよいが一つ勘弁して欲しいことがある」

蜂須賀のその笑顔に見下ろされてだ。木下は怯えたような顔を作って見せてきた。
「それはよいな」
「よいがとは何がじゃ」
「わしはあっちの趣味はないぞ」
今度は槍を持っていない方の手で自分の尻を押さえて隠しての言葉だった。
「おなごだけじゃ。だから勘弁してくれ」
「馬鹿を言え」
これには蜂須賀も少し口を尖らせて返した。
「誰が御前みたいな小汚い奴を相手にするか」
「むう、そうなのか」
「そういう意味で言ったのではないわ」
そしてこうも告げた。
「御前のその心意気が気に入ったのだ」
「それはわかっておったのだがな」
「誰が貴様の尻なぞ欲しがるか」
また言う蜂須賀だった。
「全く。冗談も休み休み言え」
「いや、それを聞いて安心したぞ」
「買ってに安心せよ。しかし清洲か」
「うむ」
「あの城は堅固だがな」
蜂須賀はここでその顔を深刻なものにさせた。

第八話　清洲攻めその五

「守る兵も多い。大丈夫なのか」
「そうだな。敵は強いがじゃ」
「では危ないであろう」
「しかし我等は勝つぞ」
木下は明るい声で話した。
「何があろうともじゃ」
「勝てるか」
「うむ、勝てる」
意気揚々とした足取りで話す。
「まあそこで殿の戦を見るがよかろう」
「ではそうさせてもらうぞ」
蜂須賀も木下のその言葉に返した。
「わしとても見たいしな、信長様の戦」
「そうであろう。そして勝ってだな」
「そういうことじゃ。しかし」
ここでだ。蜂須賀は自分達が持っている槍を見た。そして周りもだ。
「この槍じゃが」
「何じゃ？」
「随分と長いのう」
見上げてみる。見上げれば見上げる程わかるその長さだった。
「わしの身体の二倍以上はあるぞ」
「そうじゃな」
「御前なぞ三倍はあるではないか」
「わし等の槍は長いのじゃよ」
「それに鉄砲も多いな」
次に目についたのはこのことだった。

「かなりあるのう」
「全部で五百はあるらしいな」
「五百か」
「軍勢全体でじゃぞ」
「多いな、そこまであるのか」
「そうじゃ。槍と鉄砲はそうしたところじゃ」
このことも蜂須賀に話した。
「弓もあるがのう」
「刀は然程か」
「うむ、殆ど使わん」
また述べたのであった。
「それはな」
「そうか。まあ槍は戦の基本じゃからな」
蜂須賀は一旦は納得した言葉を出した。しかしであった。あらためてその長い槍を見上げてだ。また言わずにはいられなかった。
「しかし。本当に長いのう」
「その長い槍をこれから使うのじゃ」
「ここまで長くて使えるのか？」
「それが使えるらしい。まあ戦になればわかることじゃ」
「生きていられればよいがのう」
蜂須賀は木下の言葉を受けていぶかしむようにして述べた。そうしてそのうえで先に進む。するとであった。
やがて目の前にだ。その織田信友の兵が来たのだった。
「来たな」
「うむ、数にしてじゃ」
木下は兜越しに目を凝らした。そこに上から右手を添えて見ている。
「四千じゃな」
「流石に多いのう」
「何、それでもじゃ」

「勝てるというのか」
「そうじゃ。では下がろうぞ」
木下はこう蜂須賀に述べた。
「ではな」
「待て、下がるのか」
「そうじゃがそれがどうかしたのか？」
「敵を見て戦わぬのか」
蜂須賀はその前にいる敵を指差す。見れば騎馬はいない。足軽ばかりの兵が四千ばかりだ。彼等から少し離れた場所にいるのである。
その彼等を指差してだ。蜂須賀は木下に問う。
「あの敵とじゃ」
「この数で勝てるというのか？」
しかし木下は目をぱちくりとさせて蜂須賀に返す。
「わし等は全部で二百しかおらんのだぞ。相手は四千じゃ」
「それで下がるというのか」
「わし等は斥候じゃ」
木下がここで言うことはこのことだった。

第八話　清洲攻めその六

「そうなのじゃぞ」
「斥候だからか」
「敵の場所を見て確かめればそれでよい。では帰ろうぞ」
「そして本隊と合流するのか」
「うむ。わし等の今の仕事はこれで終わりじゃ」
飄々として蜂須賀に返す。
「では。帰るぞ」
「ううむ、それでよいのか」
「よいのじゃよいのじゃ、戦に勝てばな」
「敵は四千でこちらは五千か」
蜂須賀は腕を組んで頭の中で算数をした。その結果は。
「数では勝てるのう」
「数だけではないぞ」
「他のものでもか」
「まあ見るのじゃ。あの程度の軍勢なぞどうとでもないわ」
「その数信じてもよいな」
「信じなければわしの首があの連中に取られるだけじゃ」
笑って言う。その顔がこれまた猿そのままであった。
「それを詫びとしようぞ」
「馬鹿を言え、御前は死ぬなと言っておろうが」
蜂須賀はひょうきんな仕草で笑う木下に対して真面目な顔で返した。
「ではその言葉信じるとしよう」
「うむ、それではじゃ」
「下がるのじゃな」
「そうじゃ。ではな」
「うむ、わかった」

こうしてであった。木下と蜂須賀が率いる斥候は退き本隊と合流した。そして斥候からの連絡を受けた信長はだ。すぐに全軍に指示を下すのであった。

「敵の布陣は魚鱗、ならばじゃ」

「どうされますか」

「ここは」

「戦の常道に則る」

まずはこう家臣達に告げる。

「鶴翼じゃ、よいな」

「はっ、それでは」

「すぐに」

「右は権六」

柴田に告げる。

「そして左は五郎左じゃ」

「それがしがですか」

「そうだ、五郎左そなたじゃ」

驚く丹羽に鋭い目で告げる。

「そなたは権六が追いやる敵を左で受けよ」

「それがしの軍で、ですか」

「左様。そうして敵を逃すな」

そうせよというのである。

「そして右の軍には久助と赤母衣じゃ」

滝川と赤母衣衆の面々を見据えて告げる。

「又左、五郎八、九郎」

「ははっ」

彼等がそれぞれ主の言葉に応える。

「よいな」

「畏まりました」

「慶次もじゃ」

彼の名前も出した。

「右に入れ。そしてじゃ」
「左もですね」
「そちらには」
「菊千代、勝三郎、与三」
まずはこの三人であった。
「その方等がつけ」
「わかりました」
「それでは」
「与三よ」
ここで特別に森に声をかける。年配の彼にだ。
「そなた、五郎左をよく助けよ」
「承知しております」
森はすぐにこう主に返した。
「それでは」
「新五郎、牛助、そして黒母衣の者はわしと共に中軍にいよ」
最後には中央であった。
「敵の攻撃をわし等で受けるぞ」
「わかりました」
「それでは」
「では全軍先に進め」
ここまで告げてであった。信長はあらためて進撃を命じたのであった。

第八話　清洲攻めその七

その中でだ。蜂須賀は木下と共に左の軍にいた。そこでまた彼に尋ねるのであった。

「のう猿」

「今度は何じゃ？」

「わし等の軍の大将は丹羽様か」

「そうじゃ。その五郎左殿じゃ」

「まだ若いがいきなり軍を任されたのう」

「殿がそう考えておられるな」

「大丈夫なのか？」

怪訝な顔で木下に問う。

「あれだけの若い大将で」

「安心せよ。五郎左様はじゃ」

「うむ」

「柴田様と同じだけ凄い方じゃぞ」

こう言うのである。

「あの鬼の柴田様と同じだけじゃ」

「尾張で最も恐ろしいあの御仁よりもか」

「左様、中々やるぞ」

「そうなのか？どうもな」

「そうは見えんか」

「柴田様は見える」

彼はだというのだ。

「あの顔を見ればな」

「実際にあの御仁は怖い顔だからのう」

「鬼の様にな。しかし丹羽様は」

「痩せてあまりそうは見えぬな」

「それで柴田様と同じ程度と言われてもな」

「まあ見ておれ」
しかし木下はまだ蜂須賀に話す。
「丹羽様はかなりやってくれるからのう」
「それ程までか」
「攻めるは柴田様で退きは佐久間様。見るは林様じゃ」
またこう話される。
「守るはじゃ」
「丹羽様か」
「左様、凄い守りじゃからな」
「守りか」
「さて、そろそろはじまるぞ」
陣が動いていた。織田信友の軍は信長の軍勢の鶴翼の陣に囲まれだしていた。そうしてであった。
その中でだ。木下は己の槍を握り締めてだ。気合を入れた顔で蜂須賀に言ってきた。
「戦がな」
「うむ、それではだ」
「小六、御主も死ぬな」
「ぬかせ猿、御前こそじゃ」
二人は横に並んで互いに言い合う。
「そして戦の後で酒でも飲もうぞ」
「勝利の美酒をな」
こう話してそのうえで戦に向かう。まずはであった。
織田信友の軍勢が動いたのだった。前に来た。
「殿」
「うむ」
信長は林のその言葉に頷いた。
「わし等のところに来たな」
「はい、殿がここにおられることを察しています」
「ははは、それも当然じゃ」

信長はここで大きく笑ってみせた。そうしてであった。
己の軍勢を見る。見れば青の旗以外にだ。白地に黒で永楽通貨が描かれた旗もある。その旗を見てそのうえでの言葉だった。
「あの旗はわしの旗じゃ」
「あえて見せておられるのですね」
「うつけ組みやすしよ」
そしてこうも言ってみせた。
「そう思ってじゃ。わしに攻め寄せるのじゃ」
「しかしここで」
「うむ、まずはじゃ」
林の言葉に悠然と答えてだった。
「鉄砲じゃ」
「はっ」
「中軍の全ての鉄砲をあ奴等に放て」
こう命じた。
「それからじゃ」
「そのうえで、ですね」
「それを合図としてはじめる」
余裕に満ちた態度は変わらない。

第八話　清洲攻めその八

「よいな、それで」
「では」
こうしてその迫る敵軍を見据えてであった。
今その動きを見る。敵は敢然と中軍に向かって突き進む。
そして間合いに入った。そこでだった。
信長はその目をかっと見開き。采配を大きく上から振り下ろした。
「撃て！」
「撃て！」
命令が復唱された。そうして。
中軍が持つ全ての鉄砲が火を噴いた。それと共に轟音が轟く。
「なっ、鉄砲か！」
「何だあの数は！」
「三百はあるぞ」
その三百の鉄砲の一斉射撃を受けていきなり多くの兵が倒れた。
そしてだ。彼等はここで動きを止めてしまった。
「馬鹿な、うつけめあれだけの鉄砲を持っていたのか」
「しかもあの槍は」
「何だ、あの長さは」
「ええい、怯むな」
しかしである。ここで敵の総大将である信友が叫んだ。
「ええい、何をしておるか！」
「殿！？」
「相手はうつけじゃぞ！」
こう敵軍を見据えながら叫ぶのだった。
「一気に突き崩せ！どうということはない！」
「は、はい！」
「それでは！」

「太膳！」
ここで腹心を呼んだ。
「おるな」
「はっ、ここに」
その太膳がすぐに彼の傍に来た。
「そなたも行け」
「そしてそのうえで、ですね」
「そうじゃ。うつけの首を取れ」
こう命じるのであった。
「よいな」
「はっ、それでは主力を率いそのうえで」
「後詰も全て注ぎ込め」
信友は太膳にこうも言った。
「我等の軍全てを注ぎ込んで攻めればうつけが防げるものではない」
「その通りです。所詮はうつけです」
この男もであった。信長をこう見ていたのだ。
「ここで一気に攻めれば」
「鉄砲なぞ所詮は一撃で終わるもの」
信友は鉄砲も甘く見ていた。
「所詮はあれで終わりよ」
「では。今こそ」
「突き進みそれで崩せ」
そうせよというのであった。
「よいな」
「御意」
こうして太膳が率いた主力が信長の中軍に突き進んできた。一度止まった態勢を再び整えてだ。そのうえで、であった。
だがその間にだ。信長の軍勢は既に次の動きの備えをしていた。
そうしてであった。
敵が再び来る。それを見計らってだ。

前線で指揮を執る坂井が命じたのであった。
「よいか、もう一度放つぞ」
「はい」
「鉄砲を」
「そうじゃ。いけるな」
己の率いる兵達を見据えてそのうえで問う。
「もう一撃じゃ」
「そのもう一撃奴等を撃ち」
「それで」
「さらにじゃ」
ここでまた言う坂井であった。
「次はわかるな」
「ええ、それは」
「訓練通りですね」
「そうする。よいな」
「わかりました。それでは」
「敵を引き付けて」
敵軍はその間にも来ていた。そうしてであった。

第八話　清洲攻めその九

彼等は一気にだ。また銃を放った。
「撃て！」
「撃て！」
その鉄砲が再び火を噴くのだった。それでまた信友の軍の動きが止まった。
「何、またか！」
「また鉄砲を放ってきただと！？」
「速い！」
それで動きを止めてしまった。しかもだ。
今度は至近である。それだけに威力が凄かった。鉄砲を受けた足軽達は文字通り吹き飛ばされてしまった。そしてそれだけではなくだ。
「よし、次はだ！」
「はい！」
「あれですね」
「そうだ、突け！」
林の命令であった。今度は彼が指示を出したのだ。
するとだ。途方もなく青く長い槍が突き出されてだ。それで敵を突き刺した。
「くっ、今度は槍だと・・・・・・」
「何という長さだ」
「我等の槍より遥かに長い」
「これは近寄れんぞ」
彼等はそれで動きを止められてしまった。近寄ろうにもそのあまりにも長い槍に止められてしまう。どうにもならなかった。
それで攻めあぐねる。太膳もこれはどうしようもなかった。
「おのれ、再び鉄砲を放つだけではなくか」

「あの槍はです」
「途方もない長さです」
「ですから」
「そうだな、近寄ることができぬ」
太膳は忌々しげに足軽達に返した。
「これではな」
「弓も来ました」
「このままでは」
「くっ、こちらも鉄砲を出せ！」
太膳は忌々しげにこう命じた。
「そして弓もだ。急げ！」
「は、はい！」
「それでは！」
彼等は何とか反撃を仕掛けようとする。だがそこでだった。
彼等から見て左側にだ。法螺貝の声があがったのだ。
「何っ、まさか」
「また敵か！？」
「織田信長の軍か！」
「来たというのか！？」
驚いてみるとだった。その通りだった。
柴田は軍勢の先頭に立ってだ。こう命じるのであった。
「よいか、一気に突き崩す！」
「はい、そのうえで」
「敵を左に追いやるのですね」
これは信長の軍から見てである。
「それで勝てますね、この戦」
「間違いなく」
「そうだ。勝つぞ！」
柴田は槍を手に叫ぶ。
「この戦い、我等が貰った！」

「行くぞ、勝ちはわし等のものだ！」
「清洲はもらった！」
柴田が率いる軍勢は突き進みそうしてだ。慌てふためく信友の軍勢の側面を突き崩した。それで信友の軍は総崩れになってしまった。
「ここで側面から衝くか」
「そう来るというのか」
「これがうつけの戦だというのか！？」
信友の家臣達は総崩れになる己の軍勢を見て愕然となっていた、
「戦上手だというのか」
「あのおおうつけがか」
「ええい、怯むな！」
その中でだ。信友だけは諦めてはいなかった。
「まだ戦える。踏ん張るのだ！」
「で、ですが殿」
「兵達は最早」
「どうなっておるのだ」
「右に流れています」
「そちらに押されています」
そうなっているというのだ。実際にその通りだった。
信友の軍は信長の軍に正面での攻撃を防がれそして彼等から見て左翼を攻撃されてだ。成す術もなく右に流れていたのだ。

第八話　清洲攻めその十

そこしか逃げ場所がなかったからだ。しかしである。そこにも敵がいた。

「来ました」

「こちらに」

「うむ、そうだな」

丹羽だった。彼は周りにいる者達の言葉に頷いていた。彼はいささか不安げな顔である。

そしてだ。その中でこう言うのだった。

「殿はわしに左軍を任せて下さったが」

「それへ殿が五郎左殿を見込まれてでしょう」

「喜ぶべきことですぞ」

その彼に川尻と佐々が話す。

「ですからここは」

「思う存分戦いましょうぞ」

「そうだな。それしかないな」

丹羽も二人の言葉を受けてそれで頷いたのだった。それでだ。

総崩れになっている敵が来るのを見てだ。まずはこう命じたのだった。

「よし、撃て」

「鉄砲ですね」

「まずは」

「そうだ、撃て」

こう川尻と佐々に命じる。

「まずはだ」

「わかりました、それでは」

「その様に」

「そしてそれで動きを止めてだ」

それからであった。
「槍だ」
「槍兵をどうしますか」
「それで」
「前に出る」
そうするというのである。
「それで一気に突く。そうしよう」
「はい、その通りです」
「それでは」
「まずは撃つ」
また撃つと話してであった。それでだ。
実際に鉄砲を放ちその総崩れの軍勢をさらに打ち。そして槍で突くとであった。
最早信友の軍は何もできなかった。三方から攻められてだ。それでもう後方に逃げ去ることしかできなくなってしまったのである。
その中でだ。太膳は主の傍に来て言う。
「殿、最早こうなっては」
「退くしかないか」
「はい、それしかありません」
こう主に話す。
「殿軍はそれがしが」
「してくれるか」
「それで清洲まで退きましょう」
「そうだな。そしてそれからは」
「篭城です」
また主に話した。
「そして他の城と連携を取りです」
「信長の奴に仕返しをしようぞ」
「ではここは」
「退け、退け！」

信友は自分からこの命令を出した。
「清洲まで退くぞ！」
「は、はい！」
「それでは！」
総崩れになった信友の軍勢はこれで撤退に入った。太膳が殿軍に入る。
しかし信長の軍勢は今度は三つの軍を一つに合わせてだ。そのうえでその退こうとする信友の軍勢に対して殺到するのであった。
「追え！追え！」
「清洲まで帰すな！」
「ここで叩いておけ！」
主だった将達が口々に叫ぶ。
「総大将の首を取れ！」
「取った者への褒美は思いのままぞ！」
「よし来た！」
木下がその言葉を聞いて前に出る。

第八話　清洲攻めその十一

「その首おいらが！」
「待て猿」
横にいる蜂須賀がその彼に声をかけた。
「ここで前に出るのか」
「ああ、そうだよ。悪いか？」
「御主もう首を取っているのだぞ」
見ればだ。既に彼の腰には首が一個あった。敵の足軽の首だ。
「それで満足せぬのか」
「満足してなるかってんだ」
これが木下の返事だった。
「聞いたろ？話」
「敵の総大将の首か」
「そうじゃ。わしが取るのじゃ」
槍をしごいて言う。
「家老も夢ではないぞ」
「しかしな、猿よ」
「無理だというのだな」
「何じゃ、わかっておるではないか」
「うむ、実はわかっておる」
ここでまた言う木下であった。
「それはじゃ」
「それでは何でそんなことを言うのじゃ」
「気合よ、気合」
「気合だというのか」
「自分に気合を入れてそれで敵軍に飛び込んでじゃ」
「ふむ、敵の首をさらに取るのか」
「まあ誰か取れればよいのう」

木下の言葉が急に無欲なものになった。
「一つでもな」
「ではそこにおる足軽の首でも取れ」
「そうじゃな。そうするか」
「そうせよ。わしも三つ取っておるぞ」
蜂須賀はここで自分から誇らしげに笑ってみせた。見るとその母衣にだ。ごろごろとしたものが三つばかりあるのが見えていた。
「この通りな」
「そなた何時の間に」
「これでも忍の心得もあってのう」
「ほう、そうなのか」
「意外じゃろ。しかしそちらには自信があるぞ」
「そうじゃったのか」
「さて、猿よそれではじゃ」
蜂須賀はあらためて木下に対して声をかけてきた。その間も信長の軍勢は敵を追っている。その速さも勢いもかなりのものである。
「貴様もさらに首を取ってじゃ」
「うむ、武勲にするぞ」
「何でも又左殿は一度の戦に幾つも取るそうだな」
「あの御仁と慶次殿はまた格別じゃ」
木下は前田のことはこう評した。
「槍の又左の通り名は伊達ではないぞ」
「そこまで強いのか」
「うむ、強い」
その通りだというのである。
「わしなぞとは比べ物にならん」
「しかしじゃ。猿よ」
「それでも武勲を挙げねばな」
こう話してであった。彼等は逃げる敵に突き進む。その中で坂井太膳は討ち死にしてしまった。その彼を討ち取った者はというと。

「ほう、九右衛門がか」
「はい」
細い目に浅黒い肌の男であった。
「菅屋長頼でございます」
「見事なものよ」
信長は己の前に差し出されている太膳の首を見ながら満足した声を出した。その首は実に無念そうな顔をしてその場にある。
「これで後は信友だけよ」
「その信友は清洲に逃れましたが」
「それは宜しいのですか」
「よい」
信長は家臣達のその言葉に鷹揚に返した。そのうえで、であった。
「九右衛門よ」
「はっ」
「その武勲、見事」
あらためて彼のその武勲を褒めるのであった。

第八話　清洲攻めその十二

「さすれば何が望みか」
「御言葉ですが」
菅屋はすぐにだ。主に対してこう述べてきた。
「殿のお側にいとうございます」
「わしの側にか」
「はい、そのうえで殿をお守りしたいと思います」
これが彼の願いであった。
「それえ宜しいでしょうか」
「ふむ、それではじゃ」
それを聞いてだ。それぞれ左右にいる二人を見た。そうしてだった。
「新助」
「はい」
「小平太」
「はっ」
「そなた等と同じとする」
こうその二人に告げてであった。
「これからは三人でわしの馬廻衆となれ」
「有り難き御言葉」
「これより馬廻衆は毛利秀高、服部一忠と菅屋長頼の三人とする」
こう周囲にも話す。
「それでよいな」
「はっ、それでは」
「これより」
「さて、それではじゃ」
菅屋の話が終わって後だった。信長はさらに話した。今は夕刻で既に陣を敷いている。彼は己の家臣達と共に本陣にいる。白い幕に

織田のその家紋がある。
「坂井太膳は討ち取ったな」
「その他にもです」
「信友の主だった家臣の多くを」
「そうじゃな。これだけ倒せばじゃ」
見ればそこにあるのは太膳だけではなかった。他の信友の主だった家臣達もだ。多くいた。
「かなり楽じゃ。あ奴は手足をもがれたも同じよ」
「さすればです」
「これからはどうされますか」
「無論清洲に進む」
信長はまずはこう言った。
「そしてじゃ」
「そしてですか」
「さらにですね」
「城を取り囲む。その際やることがある」
その言葉は早かった。
「朝早くに城の周りに進みそこにある田を全部刈れ」
「全てですか」
「青田刈りですね」
「稲は全てそこの百姓達にやるがいい」
その稲の使い方も忘れていなかった。
「無論米もじゃ。しかし清洲には一粒も入れるな」
「そうして清洲を取り囲み」
「そのうえで、ですか」
「そうじゃ。攻めはせぬ」
ここで意外なことを言う信長であった。そしてだ。ここでまた人の名を呼んだ。
「吉兵衛、助直、所之助」
村井、武井、島田の名が呼ばれた。

「それに与三もじゃ」
「清洲の周りの城にですね」
「今から迎えと」
「そう仰るのですね」
「そうじゃ。それぞれ行って下して来るのじゃ」
こう彼等に命じるのだった。
「よいな」
「はっ、それでは」
「すぐに」
「それともう一人必要じゃな」
ここで家臣達の中にいる一人の若者を見た。見れば森に似ているが彼よりも背のある。その彼に対して声をかけるのであった。見れば中々見栄えのいい男だ。
「勝三」
「はっ」
「そなたも行け」
「わかりました。ではこの森長可」
「うむ」
「城を一兵も使わず下して参ります」
「そうせよ。では他の者はわしと共に明日の朝早くじゃ」
こう話してであった。早速朝早くに各城に人をやりそのうえで清洲城を取り囲む。そして次の日の朝であった。

第八話　清洲攻めその十三

信友はだ。まずは愕然となった。朝起きると既にであったのだ。
「何と、もう完全に取り囲まれておるのか」
「はい、それにです」
「城の周りの田もです」
あの戦いを生き残った家臣達が彼に話してきた。多くは何処かに傷を負っている。6
「全て刈り取られています」
「そして米はです」
「どうなったのじゃ」
信友は強張った顔で彼等に問い返した。
「それで米はじゃ」
「はい、その田を耕している百姓達にです」
「全て渡してしまっています」
「何っ、それではじゃ」
信友はその話を聞いてさらに驚いた顔になった。
「わし等に入る米はないぞ」
「しかもです」
「その百姓達はです」
家臣達はその米を与えられた百姓達についても話した。
「この城にいる者達の家族の者が多いです」
「それもあります」
「つまりじゃ」
信友は話をしていけばしていく程度だ。顔を強張らせていく。そうしてそのうえでだ。声を恐る恐るといったものにしてだ。家臣達にまた問うのであった。
「城の者達もあのうつけにか」
「心を寄せるでしょう」

「家族にそこまでの施しをしたならば」
「ううむ、まずいぞ」
そこまで聞いてさらに顔を暗くさせる信友だった。
「ただでさえ取り囲まれておるというのにだ」
「米も手に入れられません」
「そしてそのうえ城の者達までとなると」
「いや、まだじゃ」
それでもだった。信友はまだ諦めない。
「まだ戦うぞ」
「降伏はされませんか」
「まだ」
「清洲の周りには多くの城がある」
その殆どが信友の城である。所謂出城である。
「そこから援軍を出させよ」
「はい、昨日のうちに使いを出しております」
「それぞれの城から」
「さすればまだ勝てる」
彼は言った。
「援軍があればのう」
「ではこのままですね」
「篭城ですか」
「あのうつけは所詮うつけよ」
まだ信長を認めていなかった。それははっきりとしていた。
「待っていれば勝てる」
「だといいのですが」
「果たして」
しかし家臣達は思いはじめていた。信長は実は容易ならざる相手ではと。今更になってそう思いはじめながら主の言葉を聞いていた。
やがて二日程するとだ。信長の軍勢にだ。
その清洲の周囲の城からだ。続々と兵達が馳せ参じて来た。

「ふむ、来たな」
「はい」
「説得が終わりました」
ここで村井や島田達も戻って来た。
「清洲の周りの城は全てです」
「全て説得し殿の兵となりました」
「よい、上出来じゃ」
信長は彼等の言葉を受けて満足した笑みを浮かべた。そうしてであった。

第八話　清洲攻めその十四

そのうえで信友がまだ篭城する清洲城を見てだ。言うのであった。
「これは信友も見ておるな」
「間違いなく」
「今頃焦りに焦っているでしょう」
「さすれば最後の一手じゃ」
信長は素っ気無く述べた。
「清洲の城に弓を放て」
「弓をですか」
「それをなのですか」
「そうじゃ。そこに文を添えてじゃ」
そのうえで放てというのである。
「城内の者は全て助命するとな」
「しかし信友は」
「あの者はどうされますか」
「何、あ奴もこれで終わりじゃ」
もう気にもかけていないという言葉だった。
「清洲がなくなったのじゃからな。尾張追放でよい」
「それではですか」
「文矢を城の中に」
「放て。それで終わりじゃ」
こうしてであった。その文を見た信友はがっくりと肩を落としてその場に崩れ落ちた。だが彼は命は助けられ清洲の城、そして尾張を出てそれで終わりであった。
信友を追った信長はそのまま清洲に入った。そしてその主の座に座り家臣達に対して告げるのであった。
「これよりじゃ」
「はい」

「この清洲をですね」
「殿の城にされるのですね」
「左様、他の織田家中の者にも伝えよ」
信長は胸を張って家臣達に告げる。
「これより尾張はこの信長のもの」
「はっ」
「それではすぐに」
「逆らうなら容赦せぬ。しかし従うならばじゃ」
ここからだった。彼は言った。
「その全てを安堵するとな」
こう宣言するのであった。かくして信長は父信秀の死後間も無くでありながら清洲を手に入れた。そしてその勢いをそのままに尾張の中の他の織田家の者達に使者を出してだ。彼等を次々に傘下に収めていくのであった。
最早だ。尾張の中で彼をうつけと見る者は少なくなっていた。
「いや、政も見事」
「清洲での件は鮮やかだしな」
「どうやらあの方は」
「ひょっとすると」
誰もがだ。信長をうつけではなく英傑だと見るようになってきていた。彼は清洲入城から瞬く間にだ。尾張一国をその手中に収めんとするまでになっていた。
その信長の動きをだ。闇の中から見ている者達がいた。
「蛟龍、やはりか」
「その様です、尾張の統一は時間の問題かと」
「このままでは」
彼等はこう話していた。
「しかしこのまま統一されてはです」
「我等にとって不都合です」
「ここは手を打つべきですな」

「確かに」」
こんな話になっていた。そしてだ。
「よし、それではだ」
「はい」
「どうされますか」
「一人行ってもらおう」
中心からの言葉だった。
「それではな」
「それでは私が」
闇の中から一人名乗り出た。
「私が」
「行くのだな」
「はい、行きます」
その声はこう返してきた。
「是非共」
「わかった。では行くがいい」
「おそらく織田信長自身はです」
この声はここでこうも言ってきたのであった。
「操ることは無理かと」
「そうであろうな」
中心の声もそれはわかっているという返答だった。
「しかしだ」
「はい、しかしですね」
「他の者は違うな」
「そうです。狙うべきはです」
その声はさらに言ってみせてきた。自信に満ちた言葉である。
「その周りにいる者達で」
「出来るだけ織田信長に近い者を選べ」
「そしてまさかと思う者をですね」
「その通りだ。そうするがいい」

中央の声は告げた。
「それではな」
「はい、それでは」
「行くがいい」
こうしてであった。一人が姿を消したのだった。だがそれはあくまで闇の中である。闇の中では何も見えはしなかったのだった。誰にも。

第八話　完

２０１０・９・８

第九話　浮野の戦いその一

第九話　浮野の戦い

清洲に入った信長の下にはだ。国人達も織田家所縁の者達も次々に馳せ参じてきていた。最早彼は尾張において揺ぎ無い地位を築きつつあった。

しかしだ。彼は清洲城において安穏としていたわけではなかった。むしろその入って来る者達を迎え入れてそのうえで。政を進めていた。

「清洲をはじめあらたに領土とした場所もだ」

「はい」

「どうされるのですか」

「これまで通り兵と百姓は分ける」

まずは家臣達にこう言うのだった。家臣達の数も増えてきている。

「そしてその分百姓の数を増やす」

「それで働き手を確保する」

「それはこれまで通りですね」

「左様だ」

そうなのであるというのだ。

「開墾と新田開発を進めだ」

「治水もですね」

「そちらも」

「尾張は川が多い」

その尾張にいるからこそわかっていることであった。信長は尾張の者だ。だからこそよくわかっていることだったのである。

「だからこそ余計にだ」

「はい、それはよいことです」

ここで言ったのは九鬼だった。

「そして水のことはです」

「二郎、これまで通りじゃ」
信長はその九鬼に対して言葉を返した。
「水のことは任せる」
「お任せあれ」
九鬼も確かな面持ちで頷く。それからまた述べるのであった。
「それがしが水を調べ」
「そして治水をするのじゃ」
これが信長の治水だった。その様にして着々と進めているのである。
そしてであった。信長の政の話はまだ続いた。
「そして街じゃ」
「楽市楽座ですね」
「そして関も」
「銭は取らぬ」
そうするというのであった。
「わかったな」
「はい、それでは」
「街はその様に」
「そしてじゃ」
信長の話はさらに続く。
「鉄砲もさらに増えるな」
「そして兵もです」
「清洲を手に入れ兵はかなりのものになりました」
「国人やあらたに加わった者達も入れるとです」
そうするとであった。今の信長の兵力は。
「八千です」
「兵と百姓を分けた結果それだけになりますが」
「それでもよいですね」
「うむ、よい」
信長は平然として頷いてみせた。

「八千もあれば充分じゃ」
「して殿」
柴田が険しい顔で己の座から申し出てきた。彼は平手のすぐ左だった。そこに彼の家老としての地位の高さが出ていた。
「次の敵はです」
「織田信賢ですね」
「そうじゃ、あ奴じゃ」
まさに彼だというのであった。
「あ奴だけはじゃったな」
「その通りです」
「既に兵を集めているそうです」
「おそらく。このまま」
「あ奴と織田信清じゃな」
信長はもう一人の名前も出した。

第九話　浮野の戦いその二

「犬山のな」
「あの二人はあくまで、です」
「殿に従おうとしません」
「特に。やはり織田信賢です」
「あの男は」
「わしは大和守の家」
織田家には二つの流れがあった。まずは信長がいる大和守家であった。
「まあ今ではわしがその主じゃな」
「主である織田信友が殿に敗れ尾張を去りましたから」
「そうなります」
「そうだ。しかしだ」
信長は家臣達の話を受けながらさらに話す。
「伊勢守家はあの信賢が主じゃ」
「父である信安殿を追い出し自ら伊勢守家の主となっていますし」
「大義名分も手に入れています」
「それでは」
「兵を集めよ」
信長は言った。
「よいな、すぐにじゃ」
「そして信賢のいつ岩倉城にですね」
「攻め寄せますか」
「そうする。留守はじゃ」
ここでだった。信長は傍らにいる信行を見てだ。彼に告げた。
「勘十郎」
「はっ」
「そなたが務めよ」

「畏まりました」
「わしは少し岩倉を陥としてくる」
造作もない言葉であった。
「その間留守を頼む」
「畏まりました」
「さて、岩倉を陥とせば尾張のほぼ全てが手に入ることになる」
信長はこのことについて考え笑みになっていた。
「それからのことも考えておかねばな」
「して殿」
ここで林が主に言ってきた。
「それで尾張をほぼ手中に収めたならば」
「うむ」
「やはり他の国に、ですか」
「そのつもりじゃ。伊勢がよいな」
信長の目が光った。
「あの国がじゃ」
「成程、あの国でしたら」
ここで出て来たのは滝川であった。
「それがしと二郎ですな」
「うむ久助、わかっておるな」
「はっ、既にあの国の内情は知っております」
そうだという滝川であった。
「そして手の者を忍び込ませることも」
「できるな」
「お任せあれ」
「ではその時になれば詳しく動いてもらう」
信長はこう滝川に告げてだ。そのうえで林に顔を向けた。そうして彼に対して言うのであった。
「して新五郎」
「はっ」

「伊勢にはさして兵を送るつもりはない」
「それでは、ですか」
「謀じゃ」
今言うのはこれであった。
「わかったな」
「お任せあれ」
「無論そなただけではない」
見たのは林だけではなかった。他の者達もだった。
「伊勢は多くの家があるのう」
「はい」
「北畠に神戸、長野を代表として」
「多くの家があります」
家臣達もこのことは知っていたのだった。

第九話　浮野の戦いその三

「しかしこの三つの家が重要ですね」
「やはり」
「しかもじゃ」
信長はここでさらに言うのであった。
「この三つの家は何処もお家騒動を抱えておる」
「ではそこに付け込み」
「そのうえで」
「ここは安芸の毛利に習うとしよう」
涼しげに述べる信長だった。
「その時が来ればのう」
「毛利にですか」
「あの男に」
「しかしわしはどうもあの男程徹底はできんな」
信長は首も傾げさせもした。
「あの男は平気で暗殺だの謀殺だのをするがじゃ」
「殿はそこまではですか」
「考えておられませんか」
「そこまではできん」
実際にそうだというのであった。
「三つの家の主はまあ命までは取らぬ」
「ではその様に」
「その時は」
「まあ先の話じゃがな」
それでもであった。ここで信長が言うには理由があったのだった。
「しかし今から種を撒いておく」
「種をといいますと」
「今から」

「そうだ、仕掛けておく」
既にだというのであった。
「尾張を統一すればまずは伊勢だ」
「伊勢街道を押さえますか」
佐久間盛重がこう指摘した。
「そこをですね」
「左様。さて、その時問題となるのは」
信長は己の横の正妻を見た。帰蝶はたまたま同席していたのである。
「そなたの親父殿じゃな」
「父上が、ですか」
「どう出るかのう。もしやわしと」
「その時は思う存分戦われませ」
帰蝶は落ち着いた声で信長に告げた。
「殿の思われるままに」
「ほう、それでいいのか」
「はい。帰蝶はです」
そして言うのであった。あのことをだ。
「殿の妻でありますから」
「言うたな。その時が楽しみぞ」
「尾張の蛟龍と美濃の蝮」
帰蝶の言葉には思わせぶりな笑みが宿っていた。
「どちらが龍になるでしょうか」
「ははは、龍か」
龍という言葉を聞くとだ。信長は急に顔を崩して笑った。そうしてそのうえでだ。こう言ってみせたのであった。
「龍は既におるわ」
「といいますと」
「越後にのう。上杉がじゃ」
「上杉？長尾だったのでは？」

「今日話が入った。長尾から関東管領の職を譲り受け上杉となった」
「上杉家を継がれたというのですね」
帰蝶も何故姓が変わったのかはすぐにわかった。戦国の世では常にあることだからだ。
「それでなのですか」
「左様じゃ。そして名前もじゃ」
信長はそれについても話した。
「公方様から一字貰い受け輝虎となった」
「輝虎ですか」
「今の龍の名前は上杉輝虎よ」
それが今の彼の名前だというのだ。
「わかったな」
「わかりました。それが龍ですね」
「わしは龍にはならん」
信長はさらに言ってみせた。

第九話　浮野の戦いその四

「その龍も。そして虎も」
「虎もですか」
「飼い慣らす。そうした男になってみせよう」
「では蝮もまた」
「無論必要とあらばそうする」
不敵な笑みと共の言葉であった。
「そなたはそれを見ておけ」
「さすれば」
「さて、そしてじゃ」
ここまで話してであった。信長はまた家臣達に顔を向けた。そしてその中にいる一人に声をかけるのであった。
「甚助よ」
「はっ」
強い目をした頭を剃った髭の男であった。生駒親正である。
「そなたこの辺りや岩倉の地理に明るいな」
「そう自負しております」
「さすればこの度の信賢との戦いじゃ」
信長が言うのはこのことだった。
「何か策があるか」
「あり申す」
これが生駒の返答であった。
「それなくしてここには参りませぬ」
「左様か」
彼は清洲入城から信長の配下になっている。その彼の言葉であるのだ。
「では。どうするのじゃ」
「はい、まずはこのまま出陣します」

こうして己の策を話していく。そうしてであった。信長は彼の話を聞き終えてから出陣の命を下しだ。再び青い軍勢を出陣させるのであった。

「それでは」

「わかった。では皆の者」

「はっ」

「それでは我等も」

「出陣の用意じゃ」

こう告げる信長だった。

「そしてじゃ」

「はい」

信行は兄の視線を受けてすぐに応える。

「留守はそれがしで」

「頼んだぞ」

「わかりました。それでは」

「岩倉を陥とし尾張をわしのものとする」

信長は既にそのことを見据えていた。

「それではじゃ。行くぞ」

こうしてだった。信長は清洲に入りすぐにまた出陣するのであった。そうして向かうのはだ。織田信賢のいるその岩倉城であった。

信長来るとの報はすぐにその岩倉の信賢のところにも届いた。彼はそれを受けてすぐに主だった家臣達を集めて軍議を開くのであった。

「さて、どうするかじゃな」

「はい、ここはです」

「篭城よりもです」

「出陣すべきかと」

家臣の多くはこう進言した。

「信長めはどうやら城攻めが得意なようです」

「清洲を何なく手に入れていますし」

「周りの出城や砦を全て誘降させています」
「それを考えますと」
「そうじゃな」
信賢は大柄で眉が釣り上がっている。その目立つ顔をやたらと動かして話している。
「ここはそうするべきじゃな」
「では殿、今よりですね」
「出陣ですね」
「そうするとしようぞ」
「殿、それでなのですが」
「出陣の際ですが」
ここで彼のすぐ傍にいる者達が言ってきた。それぞれ左右に座している。
「織田弾正めの軍勢にはです」
「用心すべきこともあります」
右にいる男は痩せて大きな目をしている。左にいる男はやたらと大柄で丸い。そして頬も張っている。
その二人がだ。それぞれ信賢に言うのであった。
「鉄砲と槍です」
「それには御用心を」
「そうじゃな、どうやらあの男」
ここで右にいる山内一豊に左の堀尾吉晴を見て言う。

第九話　浮野の戦いその五

「うつけではないかも知れぬな」
「あの戦ぶり、尋常なものではありません」
「戦上手かと」
「それで清洲は奪われたのう」
信賢も鋭い目になっている。
「そうじゃな」
「はい、そう思います」
「だからこそです」
「鉄砲に槍じゃな」
また言う信賢だった。
「そうじゃな」
「はい、それです」
「ですからここはです」
「慎重に進むとしよう」
こう決めたのであった。
「それでよいな」
「では我が軍全軍で」
「出陣しましょう」
「我が軍は六千」
信賢は己の軍の数を述べた。
「対する弾正めは八千じゃ」
「数はあちらが有利」
「しかしです」
山内と堀尾はここでまた言うのであった。
「地の利は我等にあります」
「ですからここは」
「そうじゃな。それを考えれば互角じゃ」

数だけでなく地の利も考慮しての言葉である。
「では。後は戦い方次第じゃ」
「はい、それでは」
「今より」
こうして信賢も出陣した。彼の家老である山内と堀尾も共に出陣する。しかしここで、であった。
「何っ、それはまことか」
「はい」
「美濃が動きました」
家臣達がこうその出陣する信賢に話すのだった。
「道三自ら軍を率いてです」
「稲葉山を出たそうです」
「尾張に来るというのか」
信賢はすぐにこう考えた。
「だとするとまずいな」
「殿、すぐに備えをです」
「備えをしておきましょう」
山内と堀尾が主に上奏する。
「兵を置きです」
「そのうえで」
「そうじゃな。それで斉藤の兵は」
「二千です」
報告に来ていた家臣の一人がその数をここで述べる。
「二千で、です。織田信清のいる犬山に向かっております」
「犬山か」
「あの織田信清も動きが定かではありませんし」
「斉藤と誼があるとも言われています」
ここでまた言う山内と堀尾だった。皆既に鎧を着ている。陣羽織もだ。
「ですからここはやはり」

「備えを」
「そうじゃな。それではじゃ」
信賢は暫し考えてだ。二人を見て言った。
「辰之助、そして小太郎」
「はっ」
「犬山にですね」
「兵は千」
兵の数も言う。
「それだけ率いて備えとせよ」
「わかりました、それでは」
「我等が」
「弾正も気になるが信清も気になる」
彼にとってはまさにどちらも敵であった。

第九話　浮野の戦いその六

「しかもじゃ」
「斉藤も出ているとなれば」
「尚更ですね」
「ここは弾正に全力を向けたかったがのう」
悔しさもここで見せる。
「しかし言ってもはじまらぬ。それでは頼んだぞ」
「はっ、わかりました」
「それでは」
こうして山内と堀尾は千の兵を率いて尾張北東の犬山方面に向かいそこの砦の一つに入った。そうしてである。信賢は五千の兵を率いて信長の元へ向かうのだった。
両軍はぶつかったのは。浮野であった。
まずはだ。信長が言った。
「伊勢守よ！」
「何じゃ！」
「あくまでわしに従わぬか」
「笑止！」
こう返す信賢だった。
「何故貴様なぞに従わねばならん。わしは尾張守護代ぞ」
「だからだというのか」
「そうよ。弾正、貴様は所詮大和守の家の者」
その対立する立場を会えて強調する言葉であった。
「その貴様に何故わしが従うか」
「わしは今や守護様亡き今尾張を治める座にあるからよ」
「それはわしの立場。今それを教えてやろうぞ」
「どうしても従わぬというのか」
「如何にも」

引かない。彼もまただ。
「それではじゃ。弾正、今から貴様のその首を取る」
「抜かせ、ならば来い！」
こうしたやり取りの後で攻撃に出る信賢の軍だった。六千の軍は一斉に向かって来た。そしてこの時にだ。信賢はあることに気付いたのである。
「ふむ」
「殿、どうなされました」
「一体」
「弾正の兵思ったより少ないのう」
気付いたのはこのことだった。
「どうじゃ。そう思わぬか」
「確かに。八千はあると聞いていましたが」
「思ったより少ないですな」
「六千程度かと」
家臣達もその信長の青い軍勢を見て言う。
「あとの二千は一体」
「どちらへ」
「今川への備えか」
ここでこう考えた信賢だった。
「それでなのかのう」
「成程、それならばです」
「説明がつきますな」
「確かに」
家臣達は主のその言葉に頷いた。
「さすればこのままですね」
「数は互角です」
「そのうえ地の利があります」
「では」
「よし、一気に攻めるぞ」

信賢は好機と見た。それで、であった。
そのまま攻める。それに対して信長はだ。
「敵の勢い、凄いものだな」
「はい」
傍らにいる平手が彼の言葉に応える。
「まさに火ですな」
「それに対して我が軍はじゃ」
「何というのですかな」
「木じゃな」
笑ってこう言ってみせたのである。
「それじゃな」
「木、ですか」
「そうじゃ。木じゃ」
彼はまた言ってみせた。

第九話　浮野の戦いその七

「それじゃな」
「青は木、だからですか」
「うむ、それで我が軍は木じゃ」
「それはいけませぬな。木は火に弱いものです」
平手は信長の今の言葉に顔を曇らせて返した。
「それではです」
「やれやれ、ここでも爺は手厳しいのう」
「しかしです。殿」
「うむ」
ここで顔を引き締める信長であった。そのうえで平手の話を聞く。
「これで終わりではありませぬぞ」
「そうじゃ。まずはじゃ」
「はい」
「一戦交えて下がる」
こう言うのであった。
「よいな」
「はい、そしてそのうえで」
「それからじゃな」
こんな話をしてだ。まずは槍を交えた。しかしここで。
「むっ、鉄砲が少ないぞ」
「そうじゃな。確かにな」
信賢の兵達もこのことに気付いたのである。
「清洲の時は大層持っていたというが」
「それはないのか？」
「どういうことじゃ、これは」
「それにじゃ」
信長の軍勢は鉄砲を撃たないだけではなかった。しかもだ。

これといって戦うことなくだ。兵を退きだしたのである。
「それに何じゃ、もう逃げたのか」
「随分と早いな」
「うむ、何を考えておるのじゃ」
「これは一体」
いぶかしむ彼等だったがここで、だった。
信長の軍勢はさらに退いていく。脱兎の如き速さだ。それを見て信賢は信長の軍が自分達の勢いを恐れて逃げ出していると考えた。
「よし、今じゃ！」
「ここでさらにですな」
「追撃を」
「そうじゃ、追え追え！」
こう命じてだった。兵をさらに進ませるのであった。
兵を進ませそのうえでだ。逃げる信長の軍勢をさらに追う。
そうして追いつき追い詰めたと思った。その時だった。
「よし、今ぞ！」
「はっ！」
「それでは！」
「撃て！」
信長自ら命じたのであった。
その瞬間にだ。鉄砲の轟音が戦場に鳴り響いた。
そしてその無数の弾丸がだ。今まさに迫らんとする信賢の軍を撃ち据えた。
「なっ、ここでか！」
「やはり持っていたか！」
「おのれ！」
信賢の軍勢から驚きと呪詛の声がする。そうしてだった。
「攻めよ！」
信長が再び命じた。するとであった。
長槍が出て来てだ。信賢の軍勢を叩く。

「な、何て長さだ」
「あんな長い槍だったのか」
「あれが弾正の軍の槍か」
「何という・・・・・」
唖然とする彼等を打ち近寄らせない。そうしてだった。
信長の軍勢は信賢の軍勢を寄せ付けない。信長はそれを見て傍らにいる林に言うのだった。
「さて、それではだ」
「はい」
林も彼のその言葉に応える。
「まずはですね」
「最初じゃ。火矢を放て」
こう命じた。
「よいな」
「はっ、それでは」
林はすぐに己が直接率いる者に火矢を放たたせる。するとであった。
「よし、合図だ！」
「行くぞ！」
左右からそれぞれ軍勢が出て来た。どちらも青い陣笠に鎧に旗の軍勢だ。
「なっ、伏兵だと！？」
「まさか、ここでか！」
「潜んでいたというのか！？」
信賢の軍勢はその軍勢を見て驚きの声をあげる。その軍勢の先頭にいたのは。

第九話　浮野の戦いその八

「よし、このまま一気に突き進め！」
「抜かるでないぞ！」
前田と佐々である。信長の家臣の中で最近名をあげている猛者達である。
彼等の軍が突き進みだ。そのうえで信賢の兵に襲い掛かる。
その攻撃を受けてだ。信賢の軍勢は浮き足立った。
「ま、まずいぞ！」
「このままでは！」
その伏兵達だけでなく信長が率いる本軍も攻撃を続けている。このままではだった。
「殿、このままでは！」
「全滅します！」
「どうされますか！」
家臣達が血相を変えて信賢に対して問う。
「戦いますか、それとも」
「どうされますか？」
「止むを得ん」
信賢は彼等のその問いにだ。苦い顔で応えるのだった。
「ここは一時退く」
「そうしてですね」
「軍を立て直しそのうえで」
「そうだ、再び戦う」
そうするつもりだった。そのうえで下がろうとする。
その退くのを見てだ。信長は言うのだった。
「ふむ、又左も内蔵助もわかっておるな」
「あの二人がですか」
「そうじゃ。ここで敵をわざと逃がさせる」

林に応える。彼が見ていたのは敵ではなく自身の軍勢とそれを率いる将達だった。
「甚助の策をよくわかっておるようだな」
「確かに。最初は心配だったのですが」
「しかし上手くやってくれている」
彼はまた言った。
「それではだ」
「はい、それでは」
「ここは一時退かせる」
これが信長の見方だった。
「いいな」
「はい、それでは」
林は彼のその言葉に頷く。そのうえで信賢の軍勢を下がらせる。
しかしであった。
その下がった軍勢にだ。彼等が来たのだった。
「何っ、またか！」
「また敵が来たというのか！」
信賢の兵達は下がりながら驚いたのだった。
また左右から青い軍勢が出て来た。その軍はだ。
「行け！進め！」
「手柄を立てるは今ぞ！」
川尻と金森だった。彼等が率いる兵達だった。
彼等はそのまま突き進みだ。信賢の兵を打つ。その攻撃はかなりのものだった。
「くっ、この連中強いぞ！」
「駄目だ、かなわん！」
「逃げろ！逃げろ！」
信賢の軍勢は最早統制も何もなかった。ただ逃げ惑うばかりだった。
逃げる先は敵のいない場所だ。それしかなかった。

「あっちだ！」
「ああ、逃げろ！」
「あっちだ！」
彼等は一目散に逃げて行く。しかしだった。
そこにだった。また出て来たのだった。
「よし、今だ！」
「突き進め！」
今度は右に坂井、左に森だった。彼等の兵が襲い掛かってだった。
信賢の兵をさらに打つ。その攻撃はかなりのものだった。
「こ、この連中も強いぞ！」
「弾正の兵はこんなに強いのか！？」
その強さにさらに混乱する信賢の軍勢だった。そしてさらに逃げるのだった。
だがまたしてもだ。左右から青い軍勢が出て来たのだった。
「よし、手柄だ！」
「今こそ手柄を立てよ！」
右から佐久間、左から滝川の兵が来て攻勢を仕掛ける。信賢はその最早逃げ惑うだけの己の軍勢を見てだ。呆然とさえなっていた。

第九話　浮野の戦いその九

「馬鹿な、こうまで容易に敗れるとは」
「と、殿。最早戦どころではありませぬ」
「一刻も早く岩倉の城に戻るべきです」
「そして篭城を」
「そうじゃな」
信賢は青くなった顔で彼等の言葉に頷いた。
「それではな」
「はい、それでは」
「何とかここを下がりましょう」
「岩倉の城まで退け！」
その逃げ惑うばかりの己の軍勢に告げた。
「よいな！」
「は、はい！」
「わかりました！」
兵達も彼の言葉は聞いた。そのうえで城の方角を目指し逃げる。
だがまたしてもだった。
「鬼柴田ここにあり！行くぞ！」
「権六殿に遅れるな！進め！」
右から柴田の軍勢が出て左から丹羽の軍勢が出てだ。彼等を攻めるのだった。
合わせて十の軍と信長の軍勢が同時に攻める。信賢の軍は最早どうにもならなくなっていた。
それでも何とか岩倉まで逃げ延びた。だが城はすぐに信長の軍勢に囲まれてしまった。
それを見てだ。信賢はあらためて家臣達に問うのであった。
「辰之助と小太郎は」
「まだです」

「まだ城に戻られてません」
こう答える家臣達だった。
「そして城は完全に囲まれております」
「このままでは」
「城を枕に切り死にか」
信賢は嘆息と共にこう言った。
「止むを得ぬか」
「では我等もまた」
「共に」
家臣達も主の覚悟に続こうとした。しかしここで、であった。
その城を取り囲む信長の軍勢からだ。こう言ってきたのである。
「何っ、城を明け渡しわしが尾張を出て出家すればか」
「左様です」
「我が殿はそう仰っています」
使者に来た佐久間重盛と林通具が彼に話す。
「ですからここはです」
「どうか御判断を」
「腹を切るつもりだが」
ここで信賢はあえてこう言ってみせた。
「主としての責を受けてな」
「いえ、それには及びません」
「それだけでよいとのことです」
そうだというのである。二人の言葉ではそうだった。
「尾張から出られ出家にされればです」
「御家族も城内の兵達もです」
「全て助けるというのか」
「はい、左様です」
「それが我等の殿の御考えです」
そうだというのであった。それを聞くとであった。
信賢は一旦目を閉じた。そしてそれからだ。再び目を開いてその

うえで言うのであった。
「わかった」
「おわかりになられましたか」
「それでは」
「では城内の者達と家族は頼んだ」
このことはくれぐれもというのだった。
「それでは。わしはじゃ」
「はい、それでは」
「その様に」
こうして信賢はすぐに頭を剃り尾張を出た。これにより岩倉城は信長のものになった。城に入った彼はだ。戻って来た山内と堀尾と話していた。
話しながらだ。彼等に声をかけた。
「さて」
「はい」
「何でしょうか」
「そなた等がいれば伊勢守もここまで容易には敗れなかったであろう」
まずはこう言ってみせたのである。二人は平伏していたがだ。信長はその彼等に対してさらに言うのであった。

第九話　浮野の戦いその十

信長の言葉を受けて二人は顔をあげた。そのうえで話をするのであった。

「山内一豊に堀尾吉晴だったな」

「その通りです」

「それが我が名です」

二人は信長に呼ばれた名にも頷いてみせた。

「それでお話とは」

「何でしょうか」

「何故敗れたかよ」

信長はこのことを二人に言ってみせた。

「御主等がだ。それを知りたくはないか」

「勝敗は戦の常です」

山内は信長のその言葉に臆することなく返した。

「されどです」

「次は遅れを取らぬ為に」

堀尾も言う。

「知りたくあるのは確かです」

「まずは御主等を伊勢守から離した」

信長が言うのはここからだった。

「美濃の斉藤が動いたと偽の話を流してな」

「ではあれは」

「偽りの」

「そうじゃ。そのうえで御主等を犬山への備えとさせ」

そうしてだった。さらに話すのであった。

「伊勢守だけを我等に向かわせてだ」
「そこからは聞いております」
「十手の伏兵ですね」
「十面埋伏の計よ」
ここで信長の顔が楽しげに笑った。
「この計は知っておるか」
「確か三国演義にある」
「あれですか」
「そうだ、あれを仕掛けたのだ」
まさにそれだというのだ。信長は楽しげな顔のままでさらに話すのであった。
「敵をあえて周りを見させぬようにしたならばあれだけ強い計はない」
「それによって勝たれるとは」
「そして我等が敗れるとは」
「全てはこの者の策よ」
ここまで話してから生駒を見て述べてみせた。
「この度の戦いはのう」
「確か生駒殿でしたな」
「貴殿がでしたか」
「はい」
生駒は穏やかな顔で山内と堀尾に対して答えた。
「左様です」
「ううむ、弾正殿にはそこまでの軍師がいたとは」
「清洲でもこの度も戦ぶりは見事でしたが」
「それでじゃ」
信長の顔がふと変わった。
「そなた等もじゃ」
「我等も」
「といいますと」

「わしのところに来るのだ」
実に率直な誘いであった。
「わしは尾張を統一する」
「それは間近ですな」
「この岩倉を手に入れたことにより」
信長の誘いにまずはこう冷めた口調で返す彼等だった。
「しかしです」
「それでは我等は」
「尾張だけではない」
だが、だった。信長はここでこうも言ってみせたのである。
「わしは尾張一国だけを望まぬ」
「では。まさかと思いますが」
「美濃や伊勢もでしょうか」
「まだ上よ」
それだけではないというのである。
「それだけではないわ」
「では天下を」
「天下を望まれるというのですか」
「そうじゃ。そして天下を手に入れる為にはじゃ」
あらためて二人を見て。そしてだった。

第九話　浮野の戦いその十一

「優れた者達が必要ということだ。御主等の力天下に役立ててみよ」
「我等の力を」
「天下に」
「御主等の力はそれに足る。足るからこそ声をかけておるのじゃ」
世辞ではなかった。その証拠にだ。信長の目は今は笑ってはいない。二人をにこりともせずに見てだ。そのうえで声をかけているのであった。
「そういうことじゃ」
「では」
「我等の力を」
「そうじゃ。どうじゃ」
「ううむ」
「では我等はこれより」
信長に対してだ。こう問うのであった。
「信長様の家臣ですか」
「首を討たれるのではなく」
「首？ははは、馬鹿を申せ」
信長は今の堀尾の言葉にだ。破顔して笑ってみせたのだった。
そのうえでだ。こう言ってみせた。
「それ位なら最初からここには呼ばぬ」
「左様ですか」
「ではやはり」
「それでどうじゃ」
信長はまた彼等に問うた。
「わしの配下になるか」
「はい、それではです」
「ただ。一つ御願いがあります」

二人は畏まった態度になって信長に言ってきたのであった。
その言葉にだ。信長も目の光を強くさせたのだった。
そのうえでだ。少し考えてから二人に対して言葉を返した。
「伊勢守の家族と。そして岩倉にいる他の者達もか」
「左様です」
「是非御助命を」
二人が信長に頼むのはこのことであった。
「それをお聞き取り下されば」
「我等。信長様の下に参ります」
「安心せい」
まずはこう返した信長だった。
「既に伊勢守は尾張を出て剃髪することになった」
「では」
「御家族も岩倉の他の者達も」
「そうじゃ。最初から何の興味もない」
まさにそうだというのであった。
「そういうことじゃ」
「左様ですか、それなら」
「我等喜んで信長様にお仕えします」
「天下は広い」
その二人の言葉を受けてだ。信長はまずは笑ってみせた。
「御主等の力、頼りにさせてもらうぞ」
「はっ、それでは」
「是非共」
こうして山内と堀尾があらたに家臣に加わった。そして他の伊勢守の家臣達も足軽達もだ。ことごとく信長の下に入ったのであった。
信長はそれを受けてだ。家臣達に対して告げた。
「では、じゃ」
「はい」
「さすれば」

「次は犬山よ」４０
鋭い声で周りに居並ぶ家臣達に話した。もうそこには山内と堀尾もいる。
「よいな」
「はい、では今すぐに」
「向かうとしましょう」
家臣達は一斉に言う。しかしだった。
その中にいる山内と堀尾はだ。驚きを隠せずに信長に対して問う。
「今からですか」
「もうですか」
「そうじゃ。明日出陣じゃ」
こう何でもないように返す信長だった。
「休憩の後でな」
「一日休んでもうとは」
「これまた早い」
「兵はまだ疲れてはおらぬ」
まずはこのことを指摘する信長だった。

第九話　浮野の戦いその十二

「それに兵糧もあるからのう」
「だからですか」
「今のうちに、ですか」
「そうじゃ。勢いのあるうちに攻める」
信長の考えはこれに尽きた。今は特にそうであった。
「だからじゃ。明日にもう行くのじゃ」
「これで犬山を陥とせば」
「尾張は統一ですな」
山内と堀尾以外の家臣達がそれぞれ述べた。
「いよいよですな」
「いや、これはほんの小手調べなのですかな」
「尾張の統一なぞはじまりに過ぎぬ」
信長の言葉は素っ気無いものだった。
「むしろそれからぞ」
「そうですな。それでは」
「一日休みそのうえで」
「犬山よ」
信長はその場所をまた話した。
「そしてじゃ。尾張を一つにするぞ」
「はっ」
「では」
「さて、今日はこれで終わりじゃ」
信長はここまで話したところで軍議を終わりとした。
「では皆の者それぞれ休め」
「そして明日ですな」
平手が信長に問うた。
「明朝早くに」

「うむ、行くぞ」
「それでは」
「ではな。わしも休む」
信長自身もそうするというのだった。
「酒はいらぬぞ」
「殿は相変わらず酒は駄目なのですな」
柴田が今の主の言葉に対して言った。
「それだけはですな」
「酒はのう」
信長も柴田のその言葉に応えて難しい顔を見せた。
「あれを飲むと頭が痛くなるわ」
「では今宵はです」
「どうされますか」
「宴はまだじゃ」
信長はそれは止めた。
「軽くするだけにしておけ」
「犬山を陥としたその時にですね」
「いよいよ」
「そうじゃ。それまでは軽くにしておけ」
少なくとも今ではないというのである。
「よいな」
「はっ、それでは」
「今宵は」
「わしは一杯でよい」
信長はそれだけだというのだ。
「いつも通りな」
「では殿」
今度は平手であった。
「犬山を陥とせばですな」
「宴を好きなだけ派手にやってよい」

それを許すというのである。
「しかし今は程々にしておけ」
「ではそうしましょうぞ」
佐久間盛重が応えてだった。彼等は宴をはじめた。そして信長の言葉通りそれはすぐに終わらせて。明朝早くに犬山に向けて出陣した。
そしてその頃。清洲の信行はだ。戦勝報告を受けていた。
「そうか、もうか」
「はい、岩倉を陥とされました」
「流石兄上だ」
信行はその報告を聞いて微笑んでみせた。
「やはりな」
「はい、そしてです」
「うむ、今度は何だ」
「信行様に御会いしたい者がいますが」
「私にか」
「はい」
そうだとだ。居残りの家臣のうちの一人が答えた。
「そう仰っていますが」
「さて、面妖な」
その言葉を聞いてだった。信行はまずは首を捻るのだった。
「兄上ではなく私にとは」
「確かに」
「仕官されるなら殿にですが」
「何故勘十郎様なのでしょうか」
「わかりませぬ」
「私は人を用いる用事はしておらぬ」
実際にそうしたことは信長のすることだった。信行は信長の名代として彼の下におり助言はするがだった。直接用いることはしていなかった。

第九話　浮野の戦いその十三

それは尾張なら多くの者が知っていることだった。しかしなのだった。

「それで私にか」

「左様です」

「それでどうされますか」

「その者が何を考えておるのかわからぬ」

信行はここでまた首を捻る。

「しかしその者の名は聞いておるか」

「はい、津々木という者です」

その家臣がこう述べた。

「津々木蔵人といいます」

「誰か知っておるか」

その名を聞いてだ。信行は怪訝な顔になり家臣達に問うた。

「津々木蔵人という者を」

「いえ、聞いたことはありません」

「拙者もです」

「それがしもです」

誰もがだ。いぶかしむ顔でこう信行の問いに答えた。

「その様な者は尾張にはいたでしょうか」

「他の国の者でしょうか」

「しかし。その様な者」

彼等も伊達に信長に仕えているのではない。他の国の情報は集めている。しかしそれでもだった。その名前を聞いても誰も、であった。

「知りませぬ」

「聞いたこともありませぬ」

「一体どういった者でしょうか」

「その方等もか」
信行は彼等のいぶかしむその声を聞いて述べた。
「私もだ」
「勘十郎様もですか」
「御存知ありませんか」
「今川にも斉藤にもそういった者はおらぬ」
そうだというのである。
「一体どういった素性の者だ」
「ではここは会われませぬか」
「そうされますか」
「いや、待て」
しかしだった。信行はここで言うのだった。
「しかし優れた者ならばだ」
「御会いして用い後で殿にですか」
「あらためてと」
「そうするとしよう。それが兄上の為にもなる」
信行は素直に兄のことを考えていた。そしてさらにであった。
「そして織田家の為にもなる」
「わかりました。さすれば」
「その様にですね」
「うむ、そうするとしよう」
こうしてだった。信行はその津々木という男と会うことになった。
そうして連れて来られたその男はだ。
黒い着物を着ていた。しかしそれは僧衣ではない。武士の着る服だった。
それを見てだ。信行も家臣達もいぶかしまずにはいられなかった。
「何だあの黒い着物は」
「確か長尾、いや上杉が黒い鎧兜だが」
「さすれば上杉の者か？」
「いや、上杉の黒はあの黒ではない」

こういう者がいた。見れば信行と同じく信長の弟である信広である。

「あの黒は純粋な黒だ」

「左様ですか」

「そうなのですか」

家臣達は彼のその言葉を聞いて頷いたのだった。彼は信行と同じく信長の補佐役として家中でかなりの信頼を得ている人物なのだ。その政、そして戦への才はよく知られている。信長は政はできるが戦には今一つ慣れていない信行のことを考えて彼も残したのである。

それでだ。家臣達も彼の言葉に頷くのであった。

「そういえばあの黒は」

「何か違いますな」

「純粋な黒ではなく。何か」

「闇」

ここでこの言葉が出て来た。

第九話　浮野の戦いその十四

「闇の黒ですな」
「確かに。あの黒は」
「妙な黒でござる」
「兄上」
信広はいぶかしみながら次兄に告げた。
「やはり。ここは」
「いや」
しかしだった。信行は言うのであった。
「よい」
「？しかしです」
信広はいぶかしむ顔のままた彼に言った。
「この黒は」
「よいではないか」
信行はまた言った。
「津々木だな」
「はい」
そしてだ。彼を見て問い男も言葉を返してきた。
「左様でございます」
「そなた、用いるとしよう」
男の目を見たまま言うのであった。その闇の着物を着てだ。髪も目も何もかもが黒くだ。そのうえ肌まで何か黒い。そうした男を見ながら言うのであった。
「これからな」
「有り難き御言葉」
「では兄上が戻られたならばだ」
信行は完全に自分で話を進めていた。
「その時にそなたをあらためて紹介しようぞ」

「御願いします」
「皆の者もそれでいいな」
信行はここで家臣達に尋ねた。
「それで」
「勘十郎様がそう仰るのなら」
「我等は」
家臣達はいぶかしむ顔であった。だがそれでも信行のその問いに答えるのだった。
「それで異存はありません」
「ではこの者用いられるのですね」
「どうやらかなりの者だな」
信行はその津々木を見ながら満足した面持ちであった。
「頼りにしているぞ」
「では」
「おかしい」
しかしであった。その信行を見て誰もが異様なものを感じていた。
そのうえでだ。この議の後で彼等は信広を中心にして集まりだ。
こう話をするのであった。
「あの津々木という者ですが」
「あまりにも妙です」
「それがしもそう思います」
「拙者もです」
口々にこう信広に対して話すのだった。
「それに信行様もです」
「普段とは明らかに違います」
「あの者の目を見た途端に何かに魅入られたようにです」
「急に御様子が変わられました」
「そうだな」
信広も怪しむ顔で家臣達の言葉に応える。
「あの者、どうにかして遠ざけたいがな」

「ですが信行様のあの御様子ですと」
「それは難しいかと」
「やはりここは」
「兄上に伝えておこう」
信広はこう決断を下した。
「それがいいな」
「そうですね、それではです」
「これから殿に」
「そうする。よいな」
「はっ、それでは」
「その様に」
家臣達は信広のその断に頷いた。こうしてその津々木のことが信長の下に伝えられるのであった。
しかしそれが伝わるのはまだ先だった。その間にも信行の異変はだ。次第に深いものになろうとしていた。

第九話　完

２０１０・９・１７

第十話　信行の異変その一

第十話　信行の異変

信長は犬山城に達していた。そこに着くとだった。
城の方はまだ何の用意もしていなかった。信長の大軍を見て驚く始末であった。
「何だと!?弾正の軍勢がか」
「来たというのか」
「まさか、そんな筈がない」
その襲来を信じない者すらいた。
「岩倉の伊勢守の軍勢と戦っていたのではないのか?」
「よしんば勝ったとしてももう来るとは」
「そんなことは有り得ぬ」
「あまりにも早過ぎる」
「そうだ、その通りだ」
「しかしだ」
ところがだった。彼等とて現実は認めなければならなかった。現実というものは何よりも説得力のあるものだ。だからこそであった。
既に白は信長の軍勢に取り囲まれている。青い旗に槍、それに鎧が城の周りを染め上げていた。
それを見てだ。顔に深い傷のある男が言った。
「まさか弾正めはだ」
「はい、おそらくは」
「岩倉は既にです」
「そしてそのうえで、です」
「そうだな、間違いないな」
その傷の男織田信清は苦い顔で答えた。
「だからこそこの犬山まで来たという訳か」
「弾正、どうやらです」

「うつけではないようですな」
「そのようだな」
信清もだ。こととここに至ってはそのことを認めるしかなかった。
そしてであった。取り囲まれた己の城とその取り囲む城を見てだ。
周りにいる家臣達に対してこう問うのであった。
「最早外にうって出るのは無理だな」
「残念ですが」
「それは適わぬかと」
家臣達の返答はどれもこうしたものだった。
「弾正の兵は八千はいます」
「それに対して我等はです」
「千もおりませぬ」
まだ戦の用意は充分ではなかった。これから集めるところだったのだ。
「それに支城との連携もこれでは」
「おぼつきません」
「美濃に連絡はできるか」
信清の今度の問いはこれであった。
「それはどうか」
「いえ、美濃はです」
「確かに我等とはつながりがあります」
信清は信長以外にも美濃の斉藤と縁の深い男だったのだ。それで援軍も期待できた。しかし今はそれも、なのであった。
「弾正はあの蝮の娘婿です」
「それを考えるとです」
「美濃もです」
「無理か」
信清もこのことを認めるしかなかった。
「左様か」
「無念ですが」

「その通りです」
家臣達もこう答えるしかなかった。
そしてだ。今度は自分達から信清に対して問うのであった。
「それで殿」
「ここはどうされますか」
「一体」
そしてであった。現実も話した。
「我等の兵は千にも足りません」
「それに対して弾正は八千です」
「しかも完全に取り囲まれています」
信清にとって悪いことばかりであった。
「弾正は戦においてはかなり苛烈な様です」
「必要とあらばこの城もまた」
「一気に」
「左様か」
ここに至ってはだ。信清も決断を下すしかなかった。
そしてだ。家臣達にこう告げるのであった。
「よいか」
「はっ」
「下る」
彼は言った。
「よいな、そしてだ」
「殿は、ですか」
「そうされると」
「これが務めだ」
覚悟を決めた言葉であった。

第十話　信行の異変その二

「ならば当然のことではないのか」
「はい、それは」
「城の主として」
「ではよい」
その言葉でまた言った。
「その用意をせよ」
「・・・・・・わかりました」
「それでは」
家臣達は無念を押し殺した声で応えた。そうしてだった。
早速その用意が為されようとしていた。しかしであった。
ここでだ。伝令が来たのであった。
「殿、宜しいでしょうか」
「何用じゃ」
「弾正殿からです」
こう言ってきたのである。
「使者が来ておりますが」
「使者だと」
「はい、島田殿です」
彼だというのだ。
「あの方が来ております」
「島田か」
信清も彼のことは知っていた。信長の家臣の中で主に内外の政にあたっている者の一人である。それでふとその名前に顔を向けたのである。
「あの者が来るというのか」
「はい、どうされますか」
「言われることはわかっておる」

既に覚悟を決めているからこそだ。こう述べる彼であった。
「さすればじゃ。向こうからも話を聞くとしよう」
「それでは」
「うむ、会おう」
その伝令の言葉に頷くのだった。
「さすればな」
「それでは」
こうしてだった。信清は島田と会った。島田は彼の前に座して礼をしてからだ。そうしてそのうえで彼に対してこう言ってきたのである。
「何、城を出よというのか」
「はい、そして尾張からもです」
「出よというのか」
「そのうえで山城の寺にでも入られれば」
つまり出家を薦めているのである。
「それが我が殿の御考えです」
「清洲の時と同じくか」
「そして岩倉とです」
その城ともというのだった。
「同じです」
「では伊勢守もか」
「既に剃髪され尾張を出ようとされる頃かと」
「速いな」
「その場合御家族に危害は及びません」
島田はここで一つ餌を出してきた。
「そして城内の家臣団は全て信長様が召抱えられ」
「足軽達もだな」
「無論です。一切命は奪わぬとのことです」
「わし一人が出家すればか」
「それで済みます」

そうだというのである。
「それでどうされますか」
「わかった」
それを聞いてだ。頷く信清らであった。
「切腹せずともそれで済むのならばな」
「それでは」
「うむ、わしは出家する」
信清は島田の言葉を正式に受けた。
「そして尾張を出る」
「さすればその様に」
こうしてだった。信清は出家し尾張を出ることになったのであった。そうしてそのうえでだった。信長は遂に信清の勢力も下しだった。果たしたことは。
「殿、これでです」
「尾張は統一されました」
「殿の手で」
家臣達が口々に彼に話す。

第十話　信行の異変その三

「清洲、岩倉、そして犬山を征しです」
「大殿以来の悲願が果たされましたな」
「まるで夢の様です」
「ははは、夢か」
今言ったのは川尻であった。その彼の言葉にだ。信長は顔を崩して笑ってだ。こう言うのであった。
「夢ではないぞ」
「しかし。まさかこうも瞬く間にです」
「確かに。この前清洲に向けて兵を出したばかりだというのに」
「もう尾張統一とはです」
「信じられません」
「しかし事実だ」
信長は確かな顔で家臣達に話した。
「今それが果たされたのだ」
「清洲も岩倉も犬山もひとかたならぬ勢力でしたが」
「その三つを瞬く間に併呑しましたから」
「そのうえは」
「まずは政に専念する」
信長はここでもそれを第一に考えていた。
「尾張の水を治めることも大事だ。それには」
「はい」
「それには」
「まずは二郎」
九鬼の名を呼んだ。当然彼もそこにいる。
「そなたと。そして」
「そして」
「小六」

彼の名前も呼んだのだった。
「そなたの川側衆も役立ってもらうぞ」
「川を治めるのですか」
「この尾張、古来より水には悩まされてきた」
川が多いのが尾張の特徴だ。それによって豊かな土壌が与えられてきた。しかしそれと共にだ。水害にも悩まされてきてきたのだ。
信長はそれを治めようと考えていた。それで水に強い二人に声をかけたのだ。
「そなた等はそれぞれ水を知りそこに住んでいる者達を下に置いている」
「さすれば。我等の技をですか」
「川を治めることに」
「使わせてもらう。よいな」
「はっ、それでは」
「喜んで」
「川を治めそして」
信長はさらに言う。
「やはり開墾は進める」
「それもですね」
「田畑を開墾しそれまであるものはさらに豊かにし」
「そうじゃ。街もさらに栄えさせる」
そちらも忘れてはいなかった。
「よいな。尾張は治めれば治める程豊かになる」
「だからこそですか」
「政に力を入れられると」
「そうなのですか」
「そしてじゃ」
信長はまた言った。
「この尾張を」
「どうされますか」

「無論尾張だけで終わるつもりはない」
これは信長自身がいつも言っている通りであった。それはもう言うまでもないとだ。言葉の間にあえて入れてそれで言葉に出さずに言ってみせたのである。
そしてだ。彼は言うのであった。
「尾張を拠点にしてだ」
「天下を」
「そうされますか」
「そこから天下を一つにしてだ」
そしてだ。信長の夢を語ってみせた。
「この国に再び平和を取り戻すのだ」
「民も戦を恐れずに済みますね」
「それによって」
「まずは尾張の民からになるな」
その彼等であった。
「富ますぞ」
「はい、では」
「我等も及ばずながら」
「そうするぞ。武田信玄に遅れを取るつもりはない」
ふとだ。信長はこの人物の名前を出したのであった。武田晴信、出家し今は信玄という呼び名で知られるようになっているのである。
「あの男、攻めて荒れた地もよく治めるそうだな」
「どうやら武田の関心はそちらにあるようです」
「領地を治めることの方にです」
「わしと同じじゃ」
信玄と己はだ。そういう意味で同じだというのである。

第十話　信行の異変その四

「戦に勝ちその地を手に入れる」
「その地をどう治めるか」
「それが肝心というのですね」
「何の為に勝つか」
ここから話すのだった。
「それは天下を統一する為だ」
「そして手に入れた地はその都度」
「治めていくと」
「そうする。そういえば毛利も北条もかなり政は見事と聞く」
これはその通りだった。毛利にしろ北条にしろだ。その領地を治めることについてもだ。他の大名達と大きく違っていたのである。
信長はそれを聞いていた。そのうえで今言うのであった。
「戦の為に政があるのではない。政の為に戦があるのじゃ」
「さすれば。尾張はこれより」
「殿の手で」
「無事治める。そしてじゃ」
内の話はこれで終わりであった。しかし話はまだ終わりではなかった。
信長はさらにこんな話もするのだった。
「伊勢のことだが」
「はい、それについてはです」
林が信長に対して身体を向けて述べてきた。
「今からはじめます」
「頼んだぞ」
「はっ、伊勢の国人達や有力な豪族をですね」
「国人はわしの下に入れる」
彼等はそうするというのである。

「そして豪族達はだ」
「家中を分裂させそのうえで、ですね」
「織田に組み入れていくぞ。よいな」
「畏まりました。それでは」
林は謹んだ態度で応えた。
「伊勢の調略にかかります」
「種は早めに蒔くものよ」
「そして麦や豆ができたならば」
「それを刈り取るのですな」
「その通りだ。種は今から蒔いておく」
信長はまた言ってみせた。
「そういうことだ」
「では今は」
最後に平手であった。
「犬山も陥としましたし」
「うむ、清洲に戻るぞ」
信長も彼のその言葉に応えた。
「よいな」
「はっ、では」
「今より」
こうしてであった。尾張を統一した信長との家臣達、軍勢は意気揚々と清洲に戻った。そしてそこで留守役だった信行の出迎えを受ける。その時だった。
「津々木だと？」
「はい」
信行はいつもの礼儀正しい動作で兄に応えた。
「その者を召抱えました」
「で、あるか」
「兄上に事前に断りを入れるべきでしたが」
「よい」

それはいいという信長だった。
「優れた者ならば先に用いそれからわしの前に連れて来てもよい」
「左様ですか」
「それでじゃ。その津々木蔵人という者は何処じゃ」
「こちらにいます」
信行が後ろにいる一人の男を指し示した。そこにはだ。浅黒い肌に漆黒の髪と目、それに闇色の着物を着た男がいたのだった。

第十話　信行の異変その五

信長はその男を見てだ。彼に直接問うた。
「津々木と申すのだな」
「はい」
男は信長の問いに対して一言で答えた。低い、地の底から響き渡る様な声であった。
その声で答えてだ。また口を止めるのであった。
信長はその口をつぐんだ男にだ。自分からさらに問うた。
「国は何処だ」
「山城です」
「京か」
「はい、都に生まれました」
そうだというのであった。
「そして尾張に流れ着いてきました」
「そういえばだ」
信長はその持ち前の鋭さを見せてだ。男のあることに気付いたのだった。
「その喋り方はだ」
「何かあるでしょうか」
「都の訛りがあるな」
それをすぐに見抜いたのである。男の無口な言葉からもうそれだけのことをだ。
「少しな」
「おわかりになられますか」
「京の者も尾張に来ることがあるからな」
だからだという信長だった。
「それでだ」
「拙者だけではありませぬか」

「そういうことだ。それにしても」
信長はまた言った。
「その訛りはあまりないな」
「都を離れることも多かったので」
「仕官の為に歩いておったか」
「左様です」
「ふむ、左様か」
ここまで聞いてまた頷く信長だった。そのうえでだ。
津々木に対してさらに問うた。
「では、だ」
「はい」
「御主は何を得意としておる」
次に問うたのはこのことだった。
「一体何をだ」
「刀を」
それをだというのだ。
「それと軍略を少々」
「ふむ、戦は得意か」
「これまで何度も戦の場で首を挙げております」
「ではだ。その剣の腕見せてもらおう」
信長は己の目で見てそのうえで決断を下す男だ。だからこそだ。
ここで津々木に対してだ。実際にその剣の腕を見せよと命じた。
早速試し斬りの為の藁束が持って来られる。それに対してだ。
津々木の剣が一閃してだ。太い藁束を真っ二つにしたのだった。
その剣の腕はだ。信長の家臣において個人的な武勇を謡われる慶次や森長可をしてだ。唸らせるに足るものであった。
「これは本物だな」
「わしの剣の腕に匹敵するな」
二人共こう言うのだった。そしてだ。
信長もだ。納得した顔で述べた。

「見事」
「では。宜しいでしょうか」
「そなたを用いよう」
こう津々木に告げた。
「よいな」
「有り難き幸せ。それでは」
「勘十郎の身を護れ」
信行のだというのだった。
「勘十郎が見出したのだからな」
「それがしのですか」
「そなたもこれから戦場に出ることが多い」
これはその通りだった。信行も乱世に生きている。実際に信長の下にいてだ。彼もまた戦の場に出ることがこれまでにもあった。

第十話　信行の異変その六

それを考えるとだ。信長の決断は妥当だった。
それで彼につくように命じたのだった。こうして信行の下にだ。
その津々木がついたのだった。
しかしだった。この男のことはだ。後になって家臣達がそれぞれ信長に言うのだった。
まずは柴田がだ。剣呑な顔で彼に告げた。清洲に戻ってすぐにだ。城内は不穏な空気を感じさせる場になってしまっていた。
柴田がだ。こう彼に話した。
「殿、あの男ですが」
「津々木か」
「どうも怪しいものを感じてなりません」
「それがしもです」
次に林が出て来て言う。
「あの男用いたのは誤りでは」
「そう思うか」
信長は二人の重臣達の言葉にその目を鋭くさせた。
「御主達も」
「我等もとは」
「まさか」
「あの男、おそらく只者ではあるまい」
こう彼等に告げる。
「尋常な者ではな」
「では何故なのですか」
「あの男を用いたのは」
「左様です」
松井も彼に言ってきた。
「怪しいと思われるのなら何故用いられたのですか」

「何かお考えがあるのですか？」
今言ったのは管屋である。
「それでなのですか」
「信行の目よ」
信長がここで言ったのはこれだった。
「あの目、普段の信行と全く違っていた」
「むっ、そういえば」
ここで言ったのは佐久間重盛だった。
「信行様の目は普段は澄んでおられるのにあの時は」
「大学、気付いたな」
「はい」
佐久間重盛は主の言葉に頷いてみせた。そのうえでまた語る。
「何か濁り。そして囚われているような」
「あの様な目の勘十郎は見たことがない」
信長の顔もここで剣呑なものになる。
「間違いなくあの男と会ったことが原因だ」
「では殿」
池田が言ってきた。
「あの男、除きますか」
「幾ら剣の腕があろうとも」
前田は今にもいきり立たんばかりである。
「わしの槍があれば」
「いや、叔父御それはだ」
その彼を慶次が止めるようにして言ってきた。
「わしがやる」
「何っ、慶次わしの手柄を横取りするのか」
「ははは、その通り」
わざとこう言ってみせた慶次だった。笑ってまでみせてだ。
「そうさせてもらいたい」
「ふざけるな、あの男どうにもいけ好かぬ」

前田は目を怒らせて自分とそれ程歳の離れていない甥に言い返した。
「成敗するというのならわしがだ」
「二人共よさぬか」
いいあらそ二人を池田勝正が止めた。
「殿の御前ぞ」
「むっ、済まぬ」
「これは失敬」
「それはよい。しかしだ」
信長は前田家の叔父と甥の喧嘩はいいとしてさらに話した。
「ではあの男は除くべきと思わぬ者はおらぬか」
「はい」
「一刻も早くです」
「斬るなり追放としましょう」
「それが宜しいかと」
「確かにな」
信長は家臣達の言葉に袖の奥で腕を組んでまずは応えた。

第十話　信行の異変その七

「それが一番よい。しかしだ」
「しかし」
「何かありますか」
「あの男、素性がまるでわからぬ」
信長が今言うのはこのことだった。
「不気味なまでにな」
「ではやはり」
「斬られますか」
「いや、少し泳がせておく」
これが信長の判断だった。
「だからこそ勘十郎につけたのだ」
「そうだったのですか」
「それで」
「しかし目付は付けておく」
このことも忘れていなかった。そうしてだった。
柴田と林兄弟の三人を見てであった。
「権六、新五郎、六郎」
「はっ」
「それがし達がですね」
「そうじゃ。勘十郎の目付けとなれ」
選んだのはこの三人であった。
「その方等は幼い頃よりわしに仕えてきた」
「そして信行様もです」
「見てきているからこそですね」
「その通りよ。そなた達三人に任せた」
こう告げてであった。信長はさらに言うのであった。
「若しあ奴が兵をおこせばその時はだ」

「止めよと」
「我等が」
「いや、おこさせよ」
信長の言葉は思いも寄らぬものだった。これには家臣一同が唖然となった。
「なっ、殿それでは」
「何にもなりませぬぞ」
まずはその柴田と林が言った。
「兵をおこさせぬ為ではないのですか」
「我等を勘十郎様につけるのは」
「いや、おこさせねば話ははじまらぬ」
しかしであった。信長の言葉は強い。決して戯言やそういったことで言っていないことはだ。このことからも明らかなことだった。
だからこそだ。家臣達はその彼の言葉を聞くのであった。
「無論兵も置く」
「そのうえで、ですか」
「わざと兵をおこさせてですか」
「それからよ」
信長はまた言ってみせた。
「実際に兵を率いるのは御主等になる」
「はい、確かに」
「勘十郎様は戦はあまり」
これは信長と比べてである。信行は明らかに文、そして政に向いている人物である。その為信長も彼を一門衆の筆頭に置きそのうえで頼りとしているのである。
「そして柴田殿は織田家きっての武勇の持ち主」
「それに林殿とくれば」
林はだ。その調略で知られている。戦の場においては信長を補佐し常に本陣にいる。
「勘十郎様が率いられるのはあくまで名目だけ」

「そうなりますな」
「だからだ。そなた等を付ける」
また三人に告げた。
「それでじゃ。わしの軍と対峙したその時にだ」
「動く」
「そうすると」
「よいな、その時が来ればじゃ」
「はっ、畏まりました」
「ではその時に」
「動きます」
三人は信長の言葉に頷いてみせた。そうしてであった。
信長はだ。このことを強調してきたのであった。
「勘十郎が平素ならば謀反を起こすと思う者はいるか」
「いえ、まさか」
「それはありますまい」
「決して」
家臣達の誰もその危険は感じてはいなかった。やはりこれも信行の人となりを知っているからこそだ。だからこそ言えることであった。

第十話　信行の異変その八

無論信長もだ。こう考えていた。
「そうよ、あ奴はそうした者ではない」
「だからこそですか」
「何かあればその時は」
「あの津々木という者、間違いなく怪しむべき者よ」
信長の目が再び鋭くなった。
「間違っても油断してはならぬぞ」
「ではことがあれば」
「あの男は」
「そうだ、その時が来ればだ」
信長の言葉はだ。ここでは一言であった。
「切れ」
「はっ、それでは」
「その時は」
「それで信行の目が覚めれば間違いない」
信行についてはこうであった。
「若しあ奴に万が一叛意があれば止むを得ぬが」
「そうでない場合はですか」
「その時は」
「命は取らぬ」
これが信長の考えだった。
「決してな」
「では追放ですか」
「そうされますか」
「いや、それもない」
信長はそれも否定したのだった。そしてその理由も話した。
「勘十郎はわしにとっても織田家にとっても必要な者だ。それを追

い出しては他の国の利になるだけ。それもまた決してせぬ」
「では一度処罰されたうえで、です」
ここで平手が言ってきた。
「それから御赦しになられては」
「うむ、実はそう考えていた」
信長も平手のその考えに頷いてみせる。
「用いるとすればそれが妥当だな」
「はい。ですが」
「わかっておる。この件あまりにも謎が多い」
信長はいぶかしみ続けている。言葉にもそれが出ていた。
そしてだ。腕を組みながら述べた。
「そもそも。信行があの様になったのはあの男と会ったからというが」
「術でしょうか」
「何かの術を」
「わしはそういうものは信じぬがな」
これは信長の考えだった。彼はそうしたこの世の摂理から外れていると思われるものにはだ。あくまで冷淡であり続けているのである。
だからこそこう言ったのだ。しかしである。
「だが。実際にそうしたものであ奴が操られているならば」
「謎を突き止めるべきかと」
「さもなければ真の解決にはなりませぬ」
「そうだな。それではじゃ」
信長はまた考える顔になってだ。そうしてである。
「その後であ奴と直接会うのも考えておくか」
「その時ですが」
川尻が進み出てきて申し出てきた。
「それがしが御護りしますので」
「それがしもです」

「是非共」
黒母衣や赤母衣の面々がここで申し出るのであった。
その彼等の言葉を受けてだ。信長は満足した顔になった。
そのうえでだ。こう言うのであった。
「いざという時はだ。頼んだぞ」
「無論です」
「殿の御身体には何も起こさせませぬ」
「それは御安心を」
「それはこれまで気にかけたことはないが」
信長は話の中でこのことに気付いた。
「そういえばのう」
「殿、それはいけませぬぞ」
また平手がぴしゃりと言ってきた。
「万が一ということもあります。それに」
「刺客か」
「左様です、殿のお命を狙う者なぞ幾らでもおります」
「それ程多いのか」
「多いです。隣にはあの蝮もいるのですから」
「わしの義親父殿じゃな」
この名前が出て来た。
「美濃の斉藤道三か」
「あの男はです」
「絶対に信用できませぬな」
「確かに」
「この辺りで最も危険な男です」
家臣達も道三については厳しい。いや、彼等にしてみれば妥当な言葉だった。

第十話　信行の異変その九

「何しろ讒言と暗殺を繰り返し土岐氏に近付きです」
「その主さえ追放して国を追い出した男です」
「恐るべき男ですから」
「現にです。我々もです」
自分達にもまつわることだっただけにだ。道三への評価は辛辣だった。
「稲葉山を攻めた時は散々に敗れましたし」
「大殿も攻めあぐねたあの時のことはです」
「忘れられるものではありませんぞ」
こう柴田に佐久間、それに森が話す。
「だからこそです。殿」
「ああした男もいますので」
「御用心を」
「そうだな。馬廻衆の数を増やすとしよう」
具体的にそうするというのだった。
「それでよいな」
「我等も御護りします」
「どうかその様に」
「わかった。さもないとまた爺に怒られるわ」
「怒っているのではありません」
本人はこう返す。
「あくまで殿のことを思えばです」
「わかったわかった。しかし勘十郎のことはくれぐれも気をつけることじゃ」
信長は家臣達にまた信行のことを話した。
「よいな」
「はっ、それでは」

「その様に」
「何はともあれ尾張は統一した」
信長はこのことを再び話した。
「しかし。他の家も力をつけてきておるぞ」
「北条、武田、上杉、今川、そして毛利ですね」
「近畿では三好がいますし」
「そして四国でも」
「わし等も遅れを取るわけにはいかぬ」
信長の言葉は強いものであった。
「それはよくわかっておくことじゃ」
「はっ、それでは」
「尾張で満足することなく」
「さらに力をつける。よいな」
こう話してだった。信長は尾張を統一しただけでは止まらなかった。だがここで内憂もまた置いてしまった。彼の覇業はまだはじまったばかりだった。

第十話　完

２０１０・９・２２

第十一話　激戦川中島その一

第十一話　激戦川中島

厳しい顔で濃い口髭を生やした男が本陣にいた。
大柄で逞しい身体をしている。強い光を放つ目は男らしい形をしている。顔立ちもだ。雄々しく風格を漂わせている。その男がいた。
全身を赤い鎧と陣羽織で包んでいる。兜は狐を思わせる白い毛で覆われていた。
その彼がだ。言うのであった。
「鶴翼十二段よ！」
「鶴翼ですか」
「ここは」
「そうだ、それで守れ！」
こう周囲に命じる。
「よいな、妻女山に向かっている軍は必ず帰って来る」
「ではそれまで」
「ここで耐えると」
「左様、わしも自ら戦おう」
男もだというのだ。
「この武田信玄、敵に遅れを取ることは決してない」
「はっ、それでは」
「我等も」
周りにいる赤い鎧の者達もその男信玄の言葉に応えた。見ればだ。
赤い鎧に赤い槍、赤い陣笠に兜、それに赤い旗である。何もかもが赤で統一されている。その軍が今だ。台風の如く動き襲い掛かる黒い軍勢と戦っていた。
「くっ、上杉め！」
「まさか我等を一気に攻めるとは！」
「何という男だ！」

「怯むな！」
信玄によく似ている。だが彼よりいささか若い男がここで全軍を叱咤した。
「ここで踏み止まり逆にだ！」
「逆に」
「どうされると」
「越後の龍を討て！」
こう叫ぶだった。
「よいな、越後の龍をだ」
「あの謙信をですか」
「ここで」
「そして越後を逆に手に入れる」
こうも言うのだった。
「我が武田のものにする。よいな」
「は、はい！」
「では！」
「生きるか死ぬか、ここで決まると思え！」
男は言いながら自らも剣を抜いた。そしてだ。
「武田信繁の戦い見せてくれる！」
「では我等も！」
「ここで！」
「敵の首を取れ！そして一兵でも多く倒せ！」
武田信繁の言葉は続く。
「世に聞こえた武田の力見せてやろうぞ！」
「おおーーーーーっ！！」
武田の士気は高い。まだ朝もやの残る戦場においてだ。彼等は戦い続けている。
その中でだ。一人の精悍な若武者がだ。一人の傷ついた男を助けていた。
「勘助殿、御無事ですか！」

「むっ、御主は」
色の黒い片目の小男を両手で担ぐ彼はだ。
「真田の」
「左様。真田幸村でござる！」
こう彼に答えた。
「山本勘助殿、お助けに参りました」
「何故御主が来た」
山本は苦い顔になり若武者に問い返した。
「わしはここで死ぬつもりだったのだぞ。それを何故だ」
「御館様の御命令です」
「御館様のか」
「はい」
そうだというのであった。
「だからこそです。参りました」
「馬鹿な、この度の戦いはだ」
山本は苦い顔になったまま言うのであった。
「軍師であるこのわしが。見誤ったうえでこうなっておるのだぞ」
「いえ、それは」
「そのわしが。何故助からなければならぬのだ」
これが彼の言葉だった。
「死して。最後まで戦い御館様に詫びるのだ」
「山本殿！」
その彼にだ。幸村の怒った声が響いた。
「命を捨てることなぞ何時でもできますぞ！」
「むっ！？」
「御館様が目指されているのは何でありますか！」
「御館様が」
「それは天下ではありませぬか」
それだというのである。
「そしてその天下を手に入れる為にはです」

「どうだというのじゃ」
「山本殿の御力が必要なのです」
幸村の顔がここでだ。優しいものになった。戦場には相応しくないまでにだ。

第十一話　激戦川中島その二

「何があろうともです」
「だから。わしに生きよと」
「はい、死ぬのは今ではありません」
幸村はまた言った。
「宜しいですな、では」
「・・・・・そうだな」
そしてだった。山本も遂に頷いたのであった。
そのうえでだ。彼は幸村に対して言った。
「幸村よ」
「はい」
「そなたも生きよ」
「それがしもですか」
「そなた、高坂殿と並ぶ武田の宝となる」
今武田二十四将の中で最も若い一人として辣腕を振るう美貌の男である。その彼とであるというのだ。
「だからこそだ。生きよ」
「そう仰って頂けますか」
「そなたならば日之本一の男にもなれるかもな」
「ははは、それがしはその様なものは望んでおられませぬ」
幸村は顔を崩して笑って山本に返した。
「それがしが望まれるのはです」
「何だというのじゃ？」
「御館様の治められる天下です」
それだというのである。
「御館様によって治められ。平安となった天下をです」
「左様か」
「はい、その為にそれがしは戦います」

一点の曇りもない、何処までも純粋な笑顔であった。
「この戦場に」
「わかった。それではだ」
「はい、こちらへ」
こうして山本は幸村に救われたのであった。そしてである。
武田信繁の部隊にだ。今一人の男が向かっていた。
これまた精悍で若々しい顔をした男だ、引き締まった眉に口元、そして澄んだ目には一途な光がある。顔には贅肉が一片もない。そしてその身体もだ。引き締まりやや高い背にだ。実に合っていた。
上杉の黒い鎧兜にそれに馬、兜には愛の文字がある。その彼が今武田信繁こと吉田信繁に迫っていた。
彼はだ。今叫んだ。
「そこにいるのは吉田典厩殿であられるか！」
「だとすればどうするか！」
自ら刀を振るい左右の上杉兵を切り捨てていく吉田信繁が彼に返した。
「若武者よ、そなたの名を聞こう！」
「直江兼続！」
その若武者は名乗った。両手にそれぞれ剣を持ち黒馬に乗っている。二本の白刃だけが輝いている。その姿で向かってきているのだった。
「それがそれがしの名でござる！」
「そうか、御主がか」
吉田もその名前を聞いて頷いた。返り血は赤い鎧と陣羽織によって見えはしない。だがその刀は既に血に深く塗れてしまっている。
その刀を手にだ。吉田は馬上からだ。直江に向かおうとする。直江がその彼に言ってきた。
「武田晴信様の第一の弟殿の首、頂きに参りました」
「面白い、わしの首そうは安くはないぞ」
「元より承知のうえ」

直江も言葉を返す。
「それでは」
「参る！」
「いざ！」
二人は刃を交えようとした。しかしその時だった。
一騎の若武者がだ。そこに姿を現したのであった。
それはだ。幸村だった。彼はここにも姿を現したのであった。
「なっ、貴殿は」
「幸村か！」
「吉田様、お助けに参りました！」
二人の間に入って言うのであった。
「ここはお下がり下さい」
「馬鹿を言えわしはまだ」
「いえ、吉田様は既に多くの傷を受けておられます」
その吉田には背を向けて馬上にいる。だがそれでもわかるというのだ。
「それではこれ以上の戦は無理です」
「だからだというのか」
「はい、お下がり下さい」
また彼に告げた。

第十一話　激戦川中島その三

「宜しいでしょうか」
「むう・・・・・・」
「そして」
幸村は今度は直江に対して言うのだった。
「直江兼続殿であられますな」
「如何にも」
「貴殿も傷ついた者と戦われるのは好きではありますまい」
「それがしが欲しいのは」
直江はその彼の言葉を受けて己の言葉を返したのだった。
「大丈夫な強き者の首でござる」
「それはここはです」
「宜しいでしょう。ただ」
「はい」
「その手にある二本の槍」
幸村が両手に持っているそのそれぞれの十字槍を見てであった。
「貴殿が真田幸村殿であられますな」
「その通りでござる」
幸村は清々しい笑みで直江の言葉に頷いてみせた。
「それがしがです。真田幸村でござる」
「一度貴殿と手合わせしたいと思っておりました」
そうだというのであった。
「宜しいでしょうか」
「それがしもです」
幸村も応える。
「上杉家に名を馳せる直江殿とです」
「左様ですか、それは」
「はい、いざ」

「参ります！」
「覇っ！！」
二人の若武者の戦いもまたはじまったのだった。
武田と上杉の死力を尽くした戦いは続く。その中でだ。
黒い、車懸かりの本陣の中にだ。いた。
女に、しかも絶世の美女にしか見えない。涼しげな顔立ちに流麗な面立ち、鼻も目も実に整いいい形をしている。白い雪の如き顔に紅の小さな唇、黒い鎧と服に白い陣羽織に頭巾をしている。その者こそがだ。
上杉謙信。戦国のこの世に現れた軍神である。その女にしか見えぬまでの流麗な美貌を見せる者がだ。今戦場を見据えてそこにいた。
そしてだ。こう周りの者に問うた。
「直江はどうしていますか」
「はっ、直江殿は」
黒い鎧の男達のうち一人がその問いに答えた。
「今真田幸村と一騎打ちの最中です」
「真田とですか」
「はい、武田の若き虎とです」
「わかりました」
謙信はその言葉を聞くとまずは納得して頷いた。その声もだ。女のものにしか聞こえはしない。そしてその姿形もだ。実に整いさながら男装の麗人である。
その美しき者がだ。今言った。
「時は来ました」
「では」
「行かれるのですね」
「甲斐の虎、決着の時です」
言うとだ。謙信の前にだ。
馬が来た。漆黒の馬がだ。
それは謙信の前で止まりだ。今主を呼んだ。

「わかっています。我が愛馬よ」
謙信も馬の声を聞いた。そうしてであった。
風の如き素早さで馬に乗り。すぐに前に駆けた。
「参ります、甲斐の虎！」
何とだ。ただ一騎で駆けはじめたのだ。
そしてだ。死闘の続く戦場を駆ける。
武田の者達がだ。その姿を見つけ口々に言う。
「まさかあれは！？」
「そうだ、間違いない」
「上杉だ」
「上杉謙信だ！」
その姿を見て驚きを隠せない。精強を謳われた武田軍がだ。
思わず道を開ける。その姿を見てだ。
「くっ、一騎でだと！」
「大将自ら来るか！」
「と、止めろ！」
こういう声もあることにはあった。
「上杉謙信を止めろ！」
「し、しかし！」
「速い！」
謙信はあまりにも速かった。その速さはまさに疾風であった。誰もが追いつけるものではなくだ。謙信は一直線に進んできていた。

第十一話　激戦川中島その四

それはだ。本陣にいる信玄にも報告が届いていた。
彼はだ。己の座に座ったままそれを聞いていた。
そのうえでだ。鷹揚に言うのであった。
「面白い」
「面白い？」
「御館様、そう仰るのですか」
「そうよ、面白い」
不敵な言葉であった。
「そしてここに向かって来ておるのか」
「はい、恐ろしい速さです」
「まさにここに」
「ですから御館様、ここはお下がり下さい」
「後は我々が」
「そして影武者を立てるか」
信玄は進言する家臣達に問い返した。
「そうするというのだな」
「その通りです」
「ですからここは」
「並の者なら影武者で騙される」
しかしだった。信玄はここでこう言ったのだった。
「それでな」
「では。違うと」
「上杉謙信は」
「越後の龍ぞ」
謙信のその呼ばれ名である。これに対して信玄は甲斐の虎となっている。まさに龍と虎、相打つ存在同士というわけなのである。
「影武者なぞに騙される男ではない」

「ではここは」
「どうされますか」
「知れたこと、わしが直々に相手をする」
そうするというのだった。
「この武田信玄自らがな」７６
「し、しかしそれは」
「幾ら何でも」
「無謀だというか」
また家臣達に問うた。
「そう言うのだな」
「はい、その通りです」
「恐れながら」
「恐れることはない」
恐縮する家臣達への言葉である。それはいいというのである。
「無論上杉謙信に対してもだ」
「では御館様」
「やはりここは」
「越後の龍と対することができるのは甲斐の虎のみ」
すなわち自分自身のことである。
「あの相模の獅子ですら正面から戦うことを避けた相手ぞ」
「まさにその武勇は軍神です」
「噂では毘沙門天の化身だとか」
「毘沙門天か」
仏教における四天王の一人多聞天のことでもある。仏の教えを守る戦う存在である、謙信はこの毘沙門天を崇拝しているのである。
「そういえばそうだな」
「その強さ、まさにです」
「戦をする為に生まれたものです」
「だからこそ相応しい」
信玄は座ったまま。また笑ってみせた。

「わしの相手にな」
「では。やはり」
「上杉謙信の相手をですか」
「わしがする。見ておれ」
こうしてであった。謙信が来るのを待つのだった。
そしてだ。本陣に黒い風が来た。
「き、来ました！」
「上杉謙信！」
「一気で！」
「我が名は上杉謙信！」
実際にこの声が響いた。
「武田信玄殿は何処！」
「ここに！」
自ら立ち上がった。その身体はだ。馬に乗った謙信と比べても全く遜色ないまでにだ。巨大な姿であった。

第十一話　激戦川中島その五

雄々しくあくまで逞しい。その巨体を見せながら言うのであった。
「わしが武田信玄だ」
「左様ですか、では信玄殿」
「うむ」
「今ここで貴殿を見せて頂く」
右手で持つその剣で彼を指し示しながらの言葉だった。
「よいですね」
「うむ、それではだ」
「参る！」
「いざ！」
謙信はその剣を手に馬を駆る。そして信玄は。
右手に軍配を出してだ。それでだった。
謙信のその剣を受けたのだった。
「その軍配は」
「左様、鉄だ」
それでできているというのである。
「わしの軍配は鉄でできているのだ」
「そうですか、流石は甲斐の虎」
「どの様なものでも受け止めてみせる」
実際にだ。今謙信の剣を受け止めている。そうしてそのうえでまた言うのであった。
「では謙信殿」
「はい」
「それで終わりではあるまい」
こう謙信に問い返していた。
「そうだな」
「無論。では」

「むっ！」
「これならば！」
居合の要領でだった。剣を横から繰り出したのだった。
右から左へ。まさに疾風であった。だがその疾風もだ。
信玄は受けてみせた。その軍配で。鋼と鋼が打ち合う鋭い音がした。
「これでもですか」
「見事」
信玄は受けながら敵を褒めていた。
「これだけの剣は見たことがない」
「私もです」
「貴殿もだというのか」
「はい、私の剣を今まで受けた者はいません」
謙信はその流麗な顔で信玄を馬上から見据えていた。そのうえでの言葉だ。
「貴方がはじめてです」
「そうだったのか」
「貴方は私の敵に相応しい」
「わしもだ」
ここで信玄も言った。
「貴殿程の相手に会えたこと、幸福に思う」
「左様ですか」
「ここで勝敗を決するもよし」
信玄の言葉だ。
「だが」
「だが、ですか」
「それはできぬな」
「確かに」
謙信はだ。微かに笑ってだった。そしてであった。
上杉軍の後ろからだ。ときの声があがった。

その先頭にはだ。思わず見惚れてしまうまでの。恐ろしいまでに美しい男が武田の赤い甲冑と馬に乗り突き進んでいた。

「高坂殿！」

「間に合いましたな！」

「うむ！」

その美貌の男が後ろの者達の言葉に応えた。

「どうやらな」

「我が軍劣勢なれど！」

「持ちこたえています！」

報告が次々と届く。彼等はその間も駆けている。

そしてだ。上杉軍と戦闘に入った。

「この戦いやらせはせん！」

「武田の意地ここで見せようぞ！」

「いざ！」

そしてだ。上杉軍もだった。

第十一話　激戦川中島その六

「やらせるか！」
「毘沙門天の力今ここで！」
「御主等に見せようぞ！」
黒い軍勢もだ。果敢に戦う。兵力では劣勢になってもだ。それでも彼等は果敢に戦いだ。互角の勝負を見せているのだった。
謙信は信玄と対峙しながらもだ。このことを悟った。そしてだった。
「この勝負、預けることになりますね」
「うむ、そうだな」
「甲斐の虎、我が強敵よ」
信玄をだ。見据えての言葉である。
「また会いましょう」
「そうだな、また会おう」
信玄も言った。
「そしてその時にはまた」
「剣を交えるとしましょう」
「最後に勝利を治めるのは」
「はい、それは」
二人同時にだった。言った。
「わしだ」
「私です」
言葉が重なったのを見てだ。お互いに笑い合い。そうしてであった。
「ではまた」
「会おうぞ」
謙信は信玄に別れを告げて本陣から去ったのだった。
そしてだ。己の軍に戻りだった。

「殿！」
「帰って来られましたか」
「そして信玄めは」
「見事な者です」
微笑んでだ。そのうえで家臣達に告げたのだった。
「まさにです。私の相手にです」
「相応しいと」
「そうした者ですか」
「はい」
その通りだというのであった。
「ですから。再び会ったその時にです」
「雌雄を決する」
「そうされますか」
「はい、それではです」
ここで、であった。謙信は全軍を見据えた。するとであった。
二十五人の男達がだ。彼の前に集った。彼等こそはだ。
「上杉二十五将、ここに」
「参りました」
「はい」
まずはだ。ここで彼等を見渡す。
いずれも只者ではないことを窺わせる顔である。しかしその全ての目がだ。一途に謙信を見ていた。主と同じ純粋な目でだ。
謙信はその彼等を見てだ。告げた。
「この戦いはこれまでとします」
「はい、それでは」
「後詰は」
「直江」
あの若武者に声をかけたのであった。
「それは貴方にお任せします」
「有り難き幸せ。それでは」

「甲斐の若武者と剣を交えたそうですね」
謙信は直江に対してこのことを尋ねた。
「如何でした、彼は」
「見事です」
直江は幸村をしてこう評した。
「あれだけの若武者がいるとは。武田は侮れません」
「そうですか。では貴方もですね」
「私も」
「はい、己に相応しい敵を見つけたのです」
そうだというのだった。
「己に相応しい敵は出会うことが非常に難しいもの」
「そうなのですか」
「そう、それは友と同じ」
「友とですか」
「その通りです、貴方は今そのかけがえのない相手と出会えたのです」
こう直江に話すのだった。

第十一話　激戦川中島その七

「私と同じく」
「殿のお相手はやはり」
「そうです、甲斐の虎です」
彼に他ならなかった。信玄である。
「その彼と出会えた私は今このうえない喜びの中にいます。貴方もそうですね」
「確かに。真田殿とまた剣を交えたいと思っています」
「ならば。今はです」
「後詰を」
「この戦いの後詰は困難」
天下で最強とまで言われる武田軍の攻撃を防いでそのうえで軍を退かせるのだ。このことが困難でない筈がないことだった。
謙信はその困難な戦にだ。あえて彼を向けた。そしてその理由も話した。
「その若武者に相応しい男になる為に」
「では」
「任せました。それでは全軍」
黒い鎧の軍勢が謙信の言葉に応える。一万を超える大軍が彼の言葉の下に集まりそのうえで動いていた。
「越後に戻ります」
「はっ！」
「では！」
こうしてだった。上杉軍は退きに向かった。後詰は謙信の言葉通り直江が務める。その彼に武田の名だたる将達が向かう。
「我こそは馬場信房！」
「秋山信友！」
「飯富虎昌！」

それぞれ名乗ってだ。直江に向かう。
しかしだった。直江はその彼等の前に槍ぶすまを作りそのうえで徐々に下がっていく。弓矢を放つもことも忘れはしない。
その退く軍の最後尾にいてだ。彼は指示を出していた。
「よいか、誰も死んではならぬ！」
「死ぬなと」
「戦の場においてもですか」
「そうだ、死ぬな！」
これが直江の指示だった。
「そして越後に帰るのだ」
「戦場で死ぬなとは」
「それはまた面妖な」
「死ぬ場所ではないのですか、戦の場とは」
「いや、そうではない」
戦場に残って戦う彼等に対してだ。こう返す直江だった。
自ら剣を振るいそのうえで。指示を出していた。
「それはだ」
「では何だというのですか」
「戦の場は」
「生きる場所だ」
そうだというのだった。
「漢が生き、その己を見せる場所だ」
「そうだというのですか」
「この場所は」
「そうだ、だからこそだ」
「生きよと」
「そう仰るのですか」
「私もまた然り」
実際にだ。彼は武田二十四将の者達と果敢に戦う。その武勇は幸村と大した時と全く同じであった。両手に持つ二本の刀を縦横に振

るう。
そのうえで戦いだ。彼は上杉軍の主力を見た。
見ればだ。彼等は既に戦場を離脱していた。それを見てだった。
直江はだ。己が率いる兵達に告げた。
「傷を負っている者を担げ！」
「はい！」
「では！」
「そしてだ。最後に弓矢を一斉に放て。鉄砲もだ」
「そのうえで、ですか」
「我等も」
「戦場を退く」
そうするというのだ。
「わかったな」
「はい、では」
「今より」
「放て！」
まずは弓矢を放たせる。そしてだ。
鉄砲も撃たせた。数は僅かだがそれでも撃たせた。
そうして一斉に戦場を離脱した。最後に直江もまた。
無事川中島を後にした。残ったのは武田の軍勢だけだった。

第十一話　激戦川中島その八

黒い軍勢は整然と越後に帰る。赤い軍勢はその彼等を見送る。
信玄もだ。こう言うのであった。
「敵の後詰は直江か」
「はい」
彼の傍に来ていた真田幸村が答える。主の傍に控え片膝をついている。
「左様です」
「見事。この戦いはだ」
「はい、この戦いは」
「そなたと直江の戦いだったな」
そうだったというのである。
「まさにな」
「それがしと直江殿のですか」
「そうだ、勘助を助けたそうだな」
「御館様の御言葉通り」
「そして信繁も」
彼もだというのだ。
「救ってくれたか」
「信繁様は武田にとってかけがえのない方。御館様の御言葉通り」
こう話す幸村だった。
「ですから」
「信繁は無理だと思っていた」
「そうだったのですか」
「しかし。よくぞ助けてくれた」
幸村の方は見ていない。しかし確かに言った。
「礼を言う」
「礼！？」

「そうだ、礼を言う」
信玄はまた言った。
「あの二人を救ったこと。礼を言う」
「御館様、勿体なきお言葉」
幸村は主のその言葉に思わず平伏した。そしてそのうえで言うのだった。
「それがしの様な者にそこまで」
「そなた、いい将になるな」
信玄はその幸村にこうも話した。
「そしていい侍にもなる」
「侍にも」
「目指せ、いい将、そして侍をだ」
そうせよというのであった。
「よいな」
「はっ、それではこの真田源次郎幸村」
「うむ」
「天下一の漢を目指しましょう」
「そなたならばなれるな」
「はっ、まことにい有り難き御言葉」
「そしてだ」
ここでだ。信玄の口調がやや変わった。
「そなたの名だが」
「名でございますか」
「源次郎というのか」
この場ではじめて幸村に顔を向けてだった。そのうえで言ったのだった。
「そうだったのか」
「はい、左様です」
その通りだと返す幸村だった。
「それがそれがしの名でございます」

「わかった。では源次郎」
その名前で呼んでみせたのだった。
「これからもだ。頼んだぞ」
「では。この幸村の全てを」
幸村は顔を上げてだ。毅然として信玄に言った。
「御館様、そして武田家の為に捧げます」
「わしは幸せ者よ」
信玄は腕を組んでいた。そしてそのうえで顔を正面に戻す。その正面にはだ。彼が絶対の信頼を寄せる歴戦の二十四人の将達が来ていた。
そこには武田信繁もいれば山本もいる。嫡男である武田義信がその穏やかで流麗な顔を見せて来ている。誰もが赤い、炎を思わせる鎧兜にそれぞれの陣羽織を羽織っている
信玄はその彼等を見ながらだ。また言ったのだった。
「これだけの将達がいて天下最強の兵達を持っているだけでなく」
「それだけでなくですか」
「今ここに天下一の漢を手に入れた」
また幸村を見ての言葉だった。

第十一話　激戦川中島その九

「そなたをな」
「御館様・・・・・・」
「源次郎、そして皆の者よ」
「はっ」
「御館様、これからは」
二十四人の中でもだ。とりわけ精悍な凄みのある顔の男がいた。整っている顔だ。しかしその顔にはまさに炎の如き、凄まじいまでの烈気を見せていた。
その彼の名前は山県昌、兄である稲富虎昌と共に武田家の中でも屈指の猛将として知られている。その男が信玄に対して問うたのである。
「どうされますか」
「既に上杉軍は退いた」
「はい」
「では我等はもうここに残っている理由はない」
そうだというのであった。
「甲斐に戻る」
「畏まりました」
「海津の備えにはだ」
流石は信玄であった。戦いが終わってもだ。それでも備えを残しておくことは忘れていなかった。そうして高坂を見て彼に告げた。
「源助」
「はっ」
「これまで通りそなたが残れ」
こう告げるのだった。
「よいな」
「それでは」

「さて、甲斐に戻ればだ」
信玄は指示を出したうえでまた話した。
「来ておるな」
「といいますと」
「何が」
「今川からよ。人が来る筈じゃ」
こうその二十四人の名臣達と幸村に話した。
「面白い話を持って来てな」
「面白いですか」
「そうした話を」
「うむ、来る」
信玄はまた言った。
「間違いなくな」
「ふむ。といいますと」
初老の男が言った。穴山信君である。
「この戦のことだけではありますまい」
「そうでござるな。おそらくは」
「今川は我等とだけでなく相模の北条とも手を結んでいる」
「となれば」
「次は」
他の将達も次々と言っていく。その様子は信長の家臣達と比べても全く遜色がないまでに活気がありそして聡明なものであった。
「我等と北条をか」
「手を結ばさせるつもりでござるな」
「どうやら」
「よいことだ」
そして信玄も言うのだった。
「今回の戦で和議がなったとしてもこの戦だけのこと」
「はい、この度の戦だけのこと」
「また上杉とは、ですから」

「戦うことになるでしょう」
「それでは」
「上杉は強い」
信玄は家臣達に対してあえてこのことを話した。
「今他の家の相手をしている余裕がないまでにな」
「では。今は主な敵を上杉に絞りそのうえで領土をさらに拡げる為にも」
「今はでござるな」
「北条とも手を」
「そうする。よいな」
「はっ」
「それでは」
家臣達は信玄のその言葉に頷いた。これで決まりだった。
武田軍は信玄の指揮の下甲斐に戻った。戦場に残った遺品や亡骸の類は高坂が供養しそのうえで越後に送った。謙信もそれを居城である春日山城で受けた。
今は鎧兜を脱ぎ平時の服に僧侶の頭巾を着けている。その姿で白髪の口髭の男、宇佐美定満の報告を聞きだ。女性の様な華麗な物腰で言うのであった。

第十一話　激戦川中島その十

「どうやら甲斐の虎は」
「はい」
「噂通り家臣にも恵まれていますね」
そうだというのであった。
「私と同じく」
「殿、有り難きお言葉」
「礼を言う必要はありません」
その礼はいいというのであった。
「何故なら事実だからです」
「だからですか」
「事実に対して礼を言う必要はありません」
戦の時とは違い穏やかな口調でだ。こう宇佐美に話すのだった。
「ですから」
「左様ですか」
「はい、それでは」
そしてだ。謙信はこうも言うのであった。
「その若武者ですが」
「真田幸村ですね」
「見事です。間違いなく天下一の者になるでしょう」
「天下一ですか」
「我が家の直江と並ぶ」
その彼と共にだと。こう話すのだった。
「傑物になるでしょう」
「そうなるというのですね」
「そうです。これからが楽しみです」
微笑んでいた。それは敵を語る言葉でも笑みでもなかった。
「その者のことが」

「そして直江もですね」
「あの者もまた同じです」
「天下一となれますか」
「必ずなります。そして」
「そして」
「天下にその名を永遠に残すでしょう」
今だけでなくだ。これからもだというのであった。
「間違いなく」
「よくぞ我が家に生まれたものですな」
「全くです。さて、これからですが」
話が変わった。謙信は今後の方針について話すのであった。
「先の軍議でも言いましたが」
「はい」
「武田とはこのまま戦います」
そうするというのだった。しかしそれだけではなかった。
「そしてです」
「北条ともですね」
「相模の獅子、許しておくことはできません」
謙信のその声に強いものが入った。氷の様でいてそれでいて熱い、そうしたものが今謙信の言葉の中に入ったのであった。
「関東管領である上杉様を放逐した罪は必ず知らしめます」
「その通りです。そしてなのですが」
「一向一揆もですね」
「あいも変わらず越後を脅かしております」
謙信の敵は一つではなかったのだ。彼もまた多くの敵を抱えていた。
「それにつきましては」
「同じです」
返答は一言だった。
「軍議で述べた通りです」

「左様ですか」
「敵は正面から戦い、そして倒す」
それこそがといわんばかりの口調であった。
「それが毘沙門天の戦い方ですから」
「わかりました。さすれば」
「どの勢力と戦い、そして勝利を収めます」
そこに二つのものはなかった。ひたすらまでに純粋なものしかなかった。
そのうえでだ。謙信はまた話題を変えてきたのであった。
「そしてです」
「上洛ですね」
「それはどうなっていますか」
「それについてはです」
宇佐美の言葉はだ。ここで曇った。そのうえで主に対して言うのであった。
「一向一揆がいる為に」
「容易にいきませんか」
「今少しの時が必要かと」
こう話すのであった。

第十一話　激戦川中島その十一

「それには」
「できるだけ早く都に行きたいものです」
そしてだ。謙信はさらに言った。
「関東管領に任命して頂いた御礼を述べねばなりませんから」
「その通りですね。他家ではこのことを笑ってもいますが」
「笑いたい者には笑わせていればいいのです」
それには構わないというのであった。
「一行に」
「そうされますか」
「今この世が乱れているのはです」
「秩序がなくなったが為」
「足利将軍家の秩序を回復し、です」
「そして誰もが神仏を敬えば」
「それで世は穏やかさを取り戻すのです」
こう考えるのが謙信であった。彼は己の秩序の中に常に幕府を置き神仏があった。そしてとりわけこの仏を念頭に置いているのであった。
「毘沙門天の御力で」
「そして我が上杉の軍勢は」
「そうです、毘沙門天の軍です」
まさにそうだというのであった。確信している言葉だった。
「この世の魔を降す軍なのです」
「では。まずは」
「幕府のご威光をないがしろにする北条を罰し」
「はい」
「甲斐の守護でありながら信濃を我がものとし上野にも進出し専横の限りを尽くす武田を討ち」

そしてであった。
「御仏の心を履き違えている一向宗を懲らしめなければなりません」
「では信濃から来られている村上様や上杉殿が言っておられる」
「所領回復の折には私にも領土をというあれですか」
「あれについては」
「何度も申し上げた通りです」
まさにそうだというのだった。己の場に正座したままで毅然として語る。
「領土なぞ。いりはしません」
「村上様も小笠原様もそれではと仰っていますが」
「よいのです。この世には領土よりさらに大事なものがあります」
「ではそれこそが」
「はい、義です」
それだというのであった。
「私はこの世に義をもたらす為に生き、そして戦っているのですから」
「その通りですね。それでは」
「よいですね、これからも我々はです」
「義の為に」
宇佐美もまた言った。
「戦い続ける」
「そうです。ではこれで」
謙信は話を終わらせた。そしてであった。
「剣と馬の稽古に入ります」
「わかりました」
「この世は常に戦の中にあります」
立ち上がってだ。こう語るのだった。
「そして義、義こそがです」
「我等の存在する意義」
「見せてやりましょう、義を知らぬ者達に」

「では」
「はい、この戦国にです」
謙信が見ているものはそれだった。戦国であってもだ。人はそれぞれ見ているものが違っていた。それは信長にしてもである。
彼はだ。清洲において帰蝶に言っていた。
「尾張は一つになった」
「はい」
「そしてだ」
そのことを置いてその上での言葉だった。
「濃よ、そなたの父上のことだが」
「父上ですか」
「そうよ、美濃の蝮よ」
二人で櫓のところに出て夕刻の赤い空を見ながら話していた。信長はその夕焼けの中で気さくに笑ってみせたのである。明るい屈託のない笑顔である。

第十一話　激戦川中島その十二

その笑顔でだ。また妻に言った。
「一度会ってみたいものよな」
「それは何故ですか？」
「うむ、わしも尾張を統一した」
またこのことを話に出してきた。
「そして美濃を治める蝮とだ。会ってみたくなったのだ」
「それでなのですか」
「それにだ」
信長はまた妻に言った。
「義父と会っておかなくてはな。一度位は」
「殿、御言葉ですが」
明るい信長と違ってだ。帰蝶の表情は鋭いものになっていた。そしてその顔で信長に対してこう言うのだった。声も鋭くなっている。
「父上はです」
「うむ」
「一筋縄ではいかぬ方です」
こう夫に告げるのである。
「それは御存知ですか」
「ははは、勿論だ」
当然だというのであった。
「それはな」
「では何故」
「興味が湧いたからだ」
だからだというのであった。
「いや、湧いたのではなく」
「それとは違いですか」
「実は前から会いたいと思っていた」

「そうだったのですか」
「しかし。どうにも忙しくてな」
話ながら首を捻ってもみせた。
「その機会がなかった。しかし尾張も統一し政も軌道に乗ってきたな」
「はい」
「ならば今じゃ」
目の光を輝かせての言葉だった。
「今こそ蝮に会う時よ」
「では美濃に行かれて」
「いや、それはせぬ」
信長自ら美濃に行くことはないというのである。
「それはだ。せぬぞ」
「では父上がですか」
「左様、尾張に来てもらう」
「そうされますか」
「うむ。そこで義父上に御会いしたい」
こう妻に話すのだった。
「それでどうじゃ」
「よいかと」
帰蝶は信長にすぐに答えた。
「それで」
「そなたは賛成じゃな」
「若し殿が美濃に行かれればです」
「そこで殺されるやも知れぬか」
「その危険は否定できません」
こうはっきりと言った。娘である彼女の口からは言いにくいことであるがここはあえて、であった。信長に対して言ったのである。
「ですから」
「それでか」

「父上のことは既に御存知の筈です」
「一代で一国の主となったな」
「他の者を蹴落とし、そして主を追い出す」
また言う帰蝶だった。
「そういう方ですので」
「娘だというのに随分と辛辣だのう」
「事実だからです」
鋭い表情も言葉もそのままだった。
「そういう方ですから。とてもお勧めできません」
「左様か」
「しかし尾張ならばです」
「いいのだな」
「ここは殿の国です」
まさにその通りだった。尾張はだ。最早完全に彼の国になっていた。信長は今この国全体を彼の手によって見事に治めているのだ。
それをわかってだ。帰蝶は夫に話すのだった。
「ですから。大事はありませぬ」
「何しろ周りは全てわしの兵に民達だからのう」
「その通りです。ですから尾張で会われるべきです」
「うむ、わかった」
信長は妻のその言葉に頷いた。

第十一話　激戦川中島その十三

「ではそうするとしよう」
「そうして頂ければ私も安心できます」
「そうだな。後で家臣達とも話すが」
「どなたも同じことを言われます」
「やはりそうだな」
それはもうわかっているというのだった。
「あの者達は。誰もがな」
「美濃に行かれることなぞ誰も勧めませぬ」
「死にに行くようなものだからな」
「ですから。是非尾張に」
「しかし逆に言えばば」
「逆に？」
「向こうはどうだろうな」
道三の側に立ってそのうえで妻に話してみせるのだった。
「向こうにしてみれば敵の地に入るのだがな」
「それは御安心下さい」
「安心していいのか」
「父上はその様なことで動じる方ではありませぬ」
「左様か」
「ですから。謀で国を手に入れたのです」
このことを強調して言う帰蝶だった。
「それに。戦もまた」
「無類の強さだしな」
「ですから。尾張に入られてもです」
「動ずることはないか」
「その様なことでは」
「まあわしも同じだがな」

信長は笑ってこうも言ってみせた。
「それはな」
「ですがそれは決してです」
「ああ、わかっておる」
「わかっておられればいいのですが」
「どうもわしは信用がないのう」
苦笑いがここでも出た。
「何故じゃ？」
「殿は突拍子もない方ですから」
「よく言われるわ」
「全くです。平手様達が言われるのも当然です」
「爺は特に五月蝿いのう」
平手に関しては信長もこうだった。
「全くのう。昔から」
「それでも突拍子がないのはなおされませんか」
「これでも気をつけておるのだがな」
「そうは見えませんが。ただ」
「ただ？」
「似ていますね」
不意に帰蝶の言葉の調子が変わった。
「そうしたところは」
「似ている？蝮とか」
「おわかりになられましたか」
「大体わかった」
そうだったというのである。
「何となくだがな」
「勘がお鋭いところもです」
「ははは、わしと蝮は似た者同士か」
「そう思います」
あらためて夫に話す。

「私の目から見れば」
「ふむ。ではわしも梟雄になるのか」
「いえ、そこは違います」
「梟雄にはならぬか」
「英雄になるとは思いますが」
そちらだというのである。
「殿は梟雄にはです」
「ならぬか」
「父上はそうなるしかありませんでしたから」
「梟雄にか」
「はい、そうなるしかです」
こう話すのである。
「状況がそうでしたので」
「何かを手に入れる為には時として悪名を受けねばならぬ」
「ですから」
「しかしわしは、か」
「殿は最初から殿でした」
信長を見ながらの言葉であった。
「そう、最初からです」
「蝮とは違ってじゃな」
「ですから。そうはなられないかと」
「ふむ。そして英雄になるか」
「尾張一国では終わられませんね」
「何度も言うがそれがはじまりじゃ」
このことは妻に言う時も変わらなかった。信長はそこにだ。確かなものを見ていたしそれを隠すこともしなかったのである。だから言葉も強かった。

第十一話　激戦川中島その十四

「尾張統一がじゃ」
「では。英雄です」
「わしはそうなるか」
「そしてその殿が創られるものをです」
「見たいのじゃな」
「是非」
帰蝶はこの場ではじめて笑ってみせてきた。
「見たいと思っています」
「ではじゃ」
「はい」
「言おう。わしは天下を目指す」
「天下をですね」
「上洛しそのうえでじゃ」
彼もまただ。妻を見てそのうえで話すのだった。
夕暮れの中でもだ。二人はそこに確かな光を見てそのうえで語っていた。そこには一切の邪なものはなかった。絆と、そして志と愛があった。
「天下を手に入れるぞ」
「そしてそれからは」
「この国を豊かな国にする」
「泰平だけでなく」
「富ももたらす。明や南蛮のどの国よりもじゃ」
「目指されますね」
「目指すのではない」
それは違うというのだった。
「そうするのだ、必ずな」
「必ずですか」

「そうじゃ、必ずじゃ」
こう妻に話すのだった。
「わしはやるぞ」
「では」
「美濃のことか」
「手に入れられるおつもりですか？」
聞きにくいことだがだ。あえて問うたのだった。
「父上の国も」
「だとすればどうする？」
これが信長の返答だった。
「その時は」
「では、です」
「うむ」
「取られるがいいでしょう」
帰蝶ははっきりと言った。
「それならば」
「よいのだな」
「はい」
また夫に告げた。
「殿がそう思われるならばです」
「ではじゃ」
妻のその言葉を聞いて。信長もあえて言いにくいことを尋ね返したのだった。
「わしと蝮が戦えばじゃ。その時そなたはどうする」
「私は、ですか」
「そうじゃ。その時はどうするのじゃ？」
「もう決まっております」
毅然とした返事だった。
「その時は」
「決まっておるか」

「私は貴方の妻です」
また強い顔に戻っていた。そのうえでの返答である。
「ですから」
「言ったな」
「はい、申し上げました」
確かにだというのだった。
「今ここで」
「そうだな。それでいいのだな」
「二言はありません」
ぶれはなかった。全くだ。
「ですから。私は何があろうと殿と共に」
「その言葉聞いたぞ」
「それでは」
「蝮に会うことに何の躊躇いもなくなった」
「そうなのですね」
「うむ、なくなった」
晴れ渡った顔であった。その顔での言葉だった。
「完全にな」
「それでは」
「わしの敵になるやも知れぬ男」
ここでもだった。あえて言ってみせたのである。
「是非会おう」
「それでは殿のその背中をです」
「護ってくれるか」
「妻は夫の背を護るのが役目」
これが帰蝶の考えだった。あくまで強い。
「ですから」
「蝮の娘である以上に」
「蛟龍の妻です」
そうであるというのであった。

「ですから」
「蛟龍か。わしは最近そう言われておるな」
「甲斐の虎、越後の龍。そして相模の獅子と並んで」
「そうじゃな。わしも知られてきたのか」
「おそらくは。では」
「うむ、蝮に会おうぞ」
こう話してであった。二人で夕焼けを見るのだった。日は落ちようとしている。だがそれは新しい夜明けのはじまりでもあった。信長はその夕焼けの中にそれを見ていたのだ。

第十一話　完

２０１０・１０・１

第十二話　三国の盟約その一

第十二話　三国の盟約

雪斎は何時になくせわしなく動いていた。その彼を見てだ。氏真が言うのであった。

「和上、やはりここはか」

「はい、甲斐の武田ともです」

「手を結ぶのじゃな」

「左様、結ぶ手は一つだけとは限りませぬ」

「二つでもよいか」

「より多くともいいのです」

こうも言うのだった。

「ですから」

「これで相模の北条と三国か」

「そうです。そしてです」

雪斎から氏真に話していく。

「我等はその同盟を後ろ盾にしてです」

「上洛か」

「その通りです。それを目指します」

「ふむ。さすればじゃ」

上洛と聞いてだった。氏真のその公家そのままの細面が綻んだ。そうしてそのうえで雪斎に対してこう語ったのであった。おっとりとした感じの声でだ。

「この駿府にいる公家の方々も都に帰られるな」

「その通りです」

「よいことじゃ。そしてあの方々にも屋敷を建てられるし。それにじゃ」

「それに？」

「都ではとりわけ戦乱に喘いでいると聞く」

氏真の顔がここで暗いものになった。
「それを終わらせ民に泰平をもたらすことができるな」
「あの、氏真様」
「何じゃ？」
「もしやと思いますが」
氏真のそのおっとりとした言葉に危惧を感じてだ。それで彼に問い返したのである。
「都にあがれば将軍になることも夢ではありません」
「そうじゃな。我が今川はな」
「はい、そのことは」
「当然わかっておる」
氏真はからからと笑ってそれはと答えた。しかしであった。
彼はここでだ。こうも言うのだった。
「しかしそれは民に泰平をもたらす為であろう」
「はい、左様です」
「その為の座にしか過ぎぬ。まずは民よ」
氏真の考えはここにはじまっていた。
「この駿河や遠江の様にじゃ。泰平にしなければならぬからのう」
「それがおわかりであればいいのですが」
「のう竹千代」
氏真はここでだ。共にいる元康に声をかけた。
「そなたもそう思うな」
「はい、確かに」
元康は畏まって氏真のその言葉に頷いた。そうしてそのうえであった。謹厳な口調でこう話すのだった。何処か堅苦しいものがそこにあった。
「そうでなければ。将軍となってもです」
「何の意味もない。麿もそう考える」
「そうであればよいのですが」
雪斎は己の若い主の言葉にだ。いささか不安を覚えていた。この

主は戦を好まない。戦国に向かぬこの気性にそれを感じていたのだ。
それで言ったのである。だが今の彼はだ。
若い主のことだけではなかった。家全体の為に動いていた。そうしてであった。
武田と上杉の間に入ってである。和議を結ばせることに成功したのだ。
その時に謙信とも信玄とも会っている。この時だった。
謙信はその彼に対してだ。こう言ったのである。
「専横を極める信玄を放っておけというのですか」
「いえ、そうではありません」
それは違うというのである。
「ここはです。民の為です」
「民の」
「左様、戦があり困るのは民です」
その彼等だというのである。
「民をあまり困らせてはなりません。そして」
「そして？」
「上杉殿は何の為に戦われていますか」
このことを彼に問うたのである。
「それは何の為でありますか」
「無論義の為です」
謙信の問いはそれしかなかった。
「その為にです」
「その義は民の為ですね」
「むっ」
その言葉にだ。謙信は止まった。

第十二話　三国の盟約その二

そしてだ。あらためて彼を見て言うのだった。
「雪斎殿、それでは」
「時としてです。剣を収めるべき時もあります」
「それが今だというのですね」
「その通りであります」
軍神を前にしても臆することはない。胸を張って言うのであった。
「ですから。ここはです」
「いいでしょう」
謙信はここで頷いてみせた。
「では和上よ」
「はい」
「貴方は民の為に動かれるのです」
「では上杉殿は」
「私もまた同じです」
彼もだというのだった。そして言うのだった。
「私の剣は武器を持たぬ者に向ける為にあるのではありません」
「その武器を持たぬ者の為にですね」
「それが義です」
まさにそれがだと。彼は言った。
「だからこそです」
「有り難きお言葉。それでは」
「上杉謙信、生まれた時より義に生きております」
「義にですか」
「そして忠に」
この言葉も出してきた。
「その二つ、それこそが私なのですから」
「私はです」

雪斎の言葉がだ。ここで少し変わった。
そうしてだ。彼は言うのであった。
「どうやら果報者の様ですな」
「何故そう言うのですか？」
「この時代に生まれ義元様と御会いし」
まずは主のことがあった。
「そして貴方とも御会いできたのですから」
「だからだというのですね」
「その他にも多くの英傑を見ております」
彼だけではないと。さらに話す。
「このこと、果報と言わずして何と言いましょう」
「左様ですか。そういえば」
「そういえば？」
「貴方の国の隣にもいますね」
ここでこう言う謙信であった。
「英傑が」
「あの男ですか」
「そう、尾張の蛟龍」
まずはこの呼び名からだった。
「織田信長です」
「お気付きでしたか」
「あの者、断じてうつけではありません」
真剣そのものの顔での言葉だった。謙信は今確信していた。
「それどころかです」
「この国でも指折りの者ですな」
「いや、若しかすると」
「若しかすると」
「天下第一の者やも知れませぬ」
やはり嘘を言ってはいなかった。今の謙信は心からそう感じて語っていた。その言葉には真摯な鋭ささえ見られる、そこにこそ真実

があった。
「私や甲斐の虎以上の」
「いえ、ですが我が殿は」
「今川殿のことは御聞きしています」
謙信もそれは知っていた。
「そして貴方のことも」
「左様ですか」
「しかし人は一人では動けはしないもの」
謙信は雪斎にこのことも語った。
「それは承知しておいて下さい」
「一人では、ですか」
「それは私とて同じこと」
己もだと。謙信は言った。
「一人で果たせることは限られています」
「さすれば今川も」
「今川殿だけでなく貴方も必要なのです」
そうだというのである。

第十二話　三国の盟約その三

「そのこと。御承知下さい」
「畏まりました」
「では行かれるのです」
謙信のその声に穏やかさが戻った。
「貴方の果たされるべきことに」
「はっ、それでは」
謙信の言葉を受けてであった。雪斎は越後を経ちそのうえで甲斐、そして相模を回った。その結果彼の最初の望みは果たされたのだった。
駿河の善徳寺にだ。彼等はいた。
信玄はそこにいた。そして左右にいる穴山と高坂に言うのだった。
「この寺がだったな」
「はい、今川殿が育たれ」
「雪斎殿が住職をされているその寺であります」
「そうだったな」
信玄は二人のそのことばに頷いた。そうしてであった。
あらためてだ。こう言うのだった。
「その義元殿の所縁の寺でだ」
「我等は盟約を結ぶのですね」
「北条殿とも」
「この盟約は我等の為の盟約である」
信玄もこのことは認めた。
「しかしだ」
「それ以上にですね」
「北条殿の為以上に」
「今川殿の為」
「その為のものであるかと」

「その通りだ。この盟約は義元殿の為にあるもの」
信玄はこのことを既に看破していた。そうしてであった。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「そして西に向かうつもりだ」
「尾張ですな」
「さすれば」
「そうじゃ。尾張よ」
そしてそこに誰がいるのか、このことも言う信玄だった。
「尾張の織田だ」
「うつけとの評判ですが」
「それもかなりの」
「いや、わからんぞ」
ここで、だった。信玄は二人に背を向けたまま笑ってみせた。背を向けた形になっているので表情はわからない。だが笑ってみせたのである。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「それはな」
「といいますと」
「まさか」
「話に聞くとその政は見事なもの」
彼は既にこのことを知っていた。伊達に戦国でも屈指の英傑ではない。
「そしてその戦もだ」
「そういえば尾張を瞬く間にですね」
「統一しました」
「そのうえで伊勢に調略を進めているという」
「ではあの者は」
「まさか」
「わしはそう見ておる」
信玄は言った。確かにだ。

「うつけなぞではないぞ」
「ではあの男もまた」
「やがては我等の前に」
「今川殿次第であろうな」
信長についてはこう言うのであった。
「やはりな」
「今川殿が尾張を取られればですな」
「それで」
「そうだ、それであの男は消える」
そうなってしまうというのである。
「そういた意味で今川殿次第だ」
「では殿」
高坂が信玄に問うた。
「今川殿は無事尾張を手に入れられるでしょうか」
「それは難しいだろう」
これが信玄の返答だった。
「織田は今一万五千の兵がある」
「はい」
「今川殿は二万五千だ」
「兵力では一万も優勢ですが」
「兵ではな」
それはだというのだ。

第十二話　三国の盟約その四

「それにそれぞれの兵の強さはだ」
「尾張兵と言えば弱兵で有名ですが」
穴山がこのことを指摘した。
「それを知らぬ者はおりますまい」
「しかし駿河の兵も同じだ」
信玄はこのことも指摘した。
「今川殿の兵もだ。兵の強さではどちらもどちらだ」
「では何故でしょうか」
「今川殿が尾張を手に入れられるのが難しい理由は」
「将よ」
信玄はそれだというのだ。
「それのせいよ」
「将ですか」
「それですか」
「織田の将の質は我が武田や上杉のそれに比する」
「そうです、それは事実です」
「確かに」
穴山と高坂だけではない。信長の戦のことは既におおよそ知っていたのだ。武田の目は広くあらゆるものを見ているのだ。
だからこそだ。彼等は信長を侮ることなく見てそのうえで話しているのだ。そうした意味で彼等は義元よりも上であるといえた。
そしてだ。信玄がまた言った。
「だからよ。今川殿も厳しい戦いになるだろう」
「だからですか」
「それで」
「そうだ、下手をすると敗れる」
信玄は最悪の事態も想定していた。

「織田信長、侮れる男ではない」
「わかりました。して殿」
高坂が話を変えてきた。
「そろそろです」
「そうだな。行くとするか」
「はい、それでは」
こうしてであった。信玄は二人を連れて会見の場に向かった。そしてもう一方の雄もだ。その会見の場に向かおうとしていたのだった。
細面の引き締まった顔をしている。細く長い口髭が端正でである。目元も口元も引き締まり鼻も立派である。誰が見ても認めるまでの美男子である。
その端正な顔に向こう傷がある。それが彼の端正さに精悍さも加えていた。
この男こそ北条氏康である。相模の獅子と呼ばれ関東を掌握せんとしている男である。彼は己の傍に控える法衣の老人に尋ねた。
「叔父上」
「何ですかな」
「ここまでは宜しいな」
「はい」
その老人は氏康の言葉に応えて頷いた。
「そう思います」
「左様ですか。して今川殿だけでなく武田との盟約ですが」
「甲斐の虎は強うございます」
老人はまずこのことから話した。
「越後の龍だけでなく虎まで相手にするのはです」
「我が北条にとって不利」
「左様です。幸い武田は上杉とことを構えております」
「確かに」
「さすればです」

この前提から話すのだった。
「ここは盟約を結ぶことこそが両家にとって得策」
「だからこそですな」
「今川殿との盟約は既にあります」
「確かに」
両家の結びつきは深く長いものだった。北条家の始祖である北条早雲はそもそも今川家の家臣であった。その縁から北条家は今も今川家と婚姻を結んでいるのだ。
その縁もあり今彼等はここにいるのだ。老人はここでまた言った。
「この北条幻庵」
「はい」
「殿に間違ったことは言っておらぬつもりです」
そうだというのである。

第十二話　三国の盟約その五

「ですからここはです」
「それはわかっております」
氏康も彼の言葉を否定しなかった。その通りだというのである。
「だからこそです。それがしもです」
「ここに来られましたな」
「この盟約で背を安全なものとし」
氏康も伊達に獅子とまで言われているわけではない。この盟約が北条に何をもたらすか、そのことは熟知しているのである。
だからこそだ。ここで言うのであった。
「そのうえで関東を」
「我が北条のものに」
「既に二つの上杉は倒しております」
河越の夜戦においてだ。氏康はここでもう一人の、精悍で逞しい男を見たのだった。
「孫九郎の力もあり」
「確かに」
幻庵もその男北条綱成の顔を見て言う。
「孫九郎のあの時の働きは見事でありました」
「その通りでございます。あの働きは実に大きかった」
「勿体なきお言葉」
その綱成の言葉だ。
「そう言って頂けるとは」
「だが事実だ」
「そうであるぞ」
氏康と幻庵は彼にこう言う。
「そしてこの度はだ」
「三つの家の盟約だが」

「はい」
「そなたにも見てもらう」
氏康が言った。
「よいな、それで」
「政を学ぶ為ですか」
「そうだ。戦ばかりではないのだ」
この氏康もただ戦だけの男ではない。その政も見事である。彼の領内もまた豊かになっており民は笑顔でいるのである。そうした意味では信長や信玄と同じである。
それでだ。北条綱成に対して言ったのである。
「わかったな、これで」
「はい、それでは」
北条綱成も主のその言葉に頷いた。そうして言うのであった。
「有り難く。いさせてもらいます」
「これから天下は大きく動く」
氏康もまた言うのだった。
「だからこそだ。力をつけておかねばならん」
「その通りでございます」
幻庵は主のその言葉に頷いた。
「そして今はです」
「参るとしよう」
氏康はこう言って立ち上がった。
「そろそろ刻だ」
「はい、それでは」
「今より」
後の二人も主に従った。そうしてであった。彼等もその部屋に向かうのであった。
三人の英傑達がそれぞれ対する。信玄も氏康もそれぞれの腹心達を二人ずつ連れている。その高坂や幻庵達である。義元もまた同じだった。

一人は雪斎である。そしてもう一人は。
ここに来る前にだ。義元は雪斎に言っていたのだ。
「朝比奈や岡部ではなくか」
「あの者達でもいいのですか」
「あ奴にすべきか」
「はい」
雪斎はこう主に述べた。
「ここは竹千代です」
「ううむ、確かに竹千代は筋がいい」
義元もこのことは認めた。元康の成長は彼をしても目を瞠らせるものであった。しかしであった。それでも彼は躊躇いを見せるのであった。
「家柄も申し分ないかのう」
「三河を治めていた松平家。新しいですがそれでも」
「左様じゃな。しかし」
「しかしですか」
「あまりにも若いであろう」
義元の躊躇いの原因はここにあった。元康の若さだ。

第十二話　三国の盟約その六

「あの者は」
「いえ、竹千代はそれでもです」
「入れる価値はあるのか」
「あの者の武芸は知っておりますな」
「うむ」
義元は雪斎野今の言葉に頷いた。元康は既に剣術に水練、それに馬術にだ。どれにおいても極めて優れたものを見せているのだ。
それは義元も知っている。だからこそ言うのであった。
「あれは見事じゃな」
「しかも軍学の書もほぼ全て読んでおります」
「和上の持っているものを全てか」
「努力して少しずつですが確実に身に着けます」
そうであるというのだ。
「今ではかなりのものです」
「そうなのか」
「そして政に関する書も多く読んでおります故」
「ここの出すのもよいか」
「あの者、このままいけば必ず今川の柱の一本となります」
ここまで言う雪斎だった。
「そして」
「そして？」
「拙僧を超えるでしょう」
「まさか。和上まで」
「竹千代を入れるべきです」
あらためて彼を推挙してきた。
「どうか御願いします」
「ふむ、わかった」

ここでだった。義元も遂に頷いたのだった。
そのうえでだ。雪斎にこう話した。
「そなたの言葉受けようぞ」
「有り難きお言葉。さすれば」
「しかし。そこまでの者か」
義元は袖の下で腕を組み考える顔になって述べた。
「竹千代は」
「左様です。拙僧はそう見ております」
「和上が言うのならば問題はあるまい」
雪斎は義元にとって師である。彼が出家していた頃何もかもを教えてもらったのだ。だからこそだ。彼への信頼は絶対であった。
それがわかっているからだ。彼はその言葉を認めたのだった。そうしてだった。
義元も連れてだ。そのうえで会談に向かった。そしてそこでだ。両家の者達を見るのだった。
義元は己の席に座ってだ。他の二人に言った。
「ようこそ来られた」
「うむ」
「義元殿もお元気そうで何より」
信玄と氏康がそれぞれ言葉を返した。
「ではここは」
「話をするといたそう」
「さすれば」
義元が軸となって話を進める。そうしてであった。
三つの家はそれぞれ婚姻を結ぶことで決まった。既に氏真と氏康の娘が婚姻を結んでおりそこに義元の娘が信玄の嫡子義信の妻となった。そして信玄の娘が氏康の嫡子氏政の妻となった。これで三国の盟約がなったのだ。
それができてからだ。雪斎は元康に言うのであった。
「これがじゃ」

「政ですか」
「左様じゃ、これがじゃ」
こう元康に話すのだった。
「政というものじゃ」
「そうなのですか」
「ただ家と家を結びつけるだけではない」
雪斎は言った。
「それにより憂いをなくしてじゃ」
「主な敵と戦うのですね」
「そういうことじゃ。そのことわかったな」
「はい」
元康は素直な顔で雪斎のその言葉に頷いた。そうしてであった。
こう雪斎に対して言うのであった。
「それでなのですが」
「うむ」
「三国の盟約は成立しました」
それはだというのだ。

第十二話　三国の盟約その七

「してこれからは」
「知れたこと。織田じゃ」
こう元康に告げる雪斎だった。
「織田を攻めるのじゃ」
「左様ですか」
それを聞いた元康の顔が曇った。ここで信長との幼き日々を思い出したからだ。
雪斎もそれは察した。だがそれはお互い隠してだ。そのうえで話をするのであった。
「そうするぞ。してじゃ」
「して」
「そなたはわしと共に先陣を務めてもらう」
「それがしがですか」
「そなた以外におらん」
こう義元に言うのであった。
「尾張の織田に対することができるのはじゃ」
「しかし信長殿は」
「たわけか」
「その様に言われていますが」
「あれは大きな間違いじゃ」
雪斎はその言葉をこれで退けたのだった。
「あの者、うつけではない」
「和上もそう思われていますか」
「尾張は今開墾が進み田畑が多くなっておるそうだ」
雪斎もこのことを知っていた。
「そして治水もじゃ」
「信長殿の政が上手くいっているというのですね」

「左様じゃ。しかもじゃ」
「はい」
「兵を挙げてすぐじゃった」
こう言うのであった。
「尾張を一つにしてしもうた」
「敵は多かったのですが」
「しかし瞬く間じゃった」
雪斎はこのことも指摘した。
「今では伊勢にも何か手を伸ばさんとしておると聞く」
「そういうことを御覧になられてですね」
「あの者、尋常な者ではない」
雪斎は信長をこう看破した。
「今川家に仕えていなければ」
「どうされていましたか？」
「傍でゆうるりと見たいものじゃ」
思わず本音も出してしまっていた。だが自分自身も元康もこのことには気付いていなかった。それだけ真剣に話をするようになっていたのだ。
そうしてだ。雪斎はさらに言うのであった。
「是非共な」
「信長殿はそこまでの方なのですね」
「だからこそわしとそなたで行く」
強い目になってだった。また元康に告げた。
「あの者を降す為に」
「その為にですか」
「時が来れば兵を起こす」
それはもう決まっているというのであった。
「して上洛する。その時にだ」
「まず信長殿を」
「わしとそなたじゃ」

また自分と元康のことを話に出した。
「わしだけでも、そなただけでも」
「信長殿には勝てはしないのですね」
「あの男だけではないようじゃしな」
雪斎は今度は信長以外の者についても話した。
「あの者の下には多くの人材が集まってきておるわ」
「それだけのですか」
「柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益といった者達だけでなく」
「それ以外にも」
「佐久間信盛や林道勝は知っておった。平手政秀もな」
そうした者達はというのであった。
「柴田もそうじゃったがどの者も尾張で随一の者達よ」
「その者達が全て信長殿の下に」
「森可成もおれば若い者達も集まってきておる。それではわし一人では到底無理よ」
「和上でもですか」
「そこまでいればわし一人では敵わぬ」
決して謙遜ではなかった。その証拠に彼は今笑ってはいなかった。
真剣な顔になってだ。そのうえで元康に対して話をしていた。

第十二話　三国の盟約その八

そしてだ。また彼に告げた。
「よいな、竹千代よ」
「だからこそそれがしに」
「その時はわしと共に先陣を務めてもらう」
「そして殿を都に」
「お送りするのじゃ。よいな」
「はい、それでは」
「してじゃ」
ここでだ雪斎の言葉が変わった。急に穏やかな調子になった。
優しい声にもなった。その声で元康に言ってきた。
「竹千代よ」
「今度は何でしょうか」
「そなたももういい頃じゃな」
微笑みさえ浮かべて彼に話す。
「そろそろ嫁を迎えるのじゃ」
「妻をですか」
「まさか生涯一人でいるつもりではあるまい」
「はい、それは」
「さすればじゃ」
こう言ってであった。
「そなた、嫁を迎えよ」
「相手は」
「既に考えてある」
彼に優しい目を向けて話す。
「よい相手をな」
「そうでございますか」
「そなたには是非幸せになってもらいたいのじゃ」

「幸せに、ですか」
「そなたはわしの弟子じゃ」
これは紛れもないことであった。駿河に来たその時から全てのことを手塩にかけて教えてきた。雪斎にとって元康はまさに愛弟子であったのだ。
そしてだ。こんなことも話した。
「義元様、氏真様と同じじゃ」
「御二人と」
「左様、同じじゃ」
そうだというのであった。
「わしにとってはまことに大事な愛弟子じゃ」
「和上・・・・・・」
「そのそなたには幸せになってもらう」
また彼に話す。
「大きくなってもらうと共にな」
「大きくですか」
「左様、大きくじゃ」
このことも話したのだった。
「なってもらうからな」
「それがしの様な者にそこまで」
「いや、実際にじゃ」
「実際にとは」
「そなたは日増しに大きくなっておる」
その元康を見ての言葉だ。
「わしは名馬を得たと思っていたがじゃ」
「違うというのですか」
「麒麟じゃった」
元康を見続けていた。
「そなたはな」
「それがしは麒麟ですか」

「うむ、やがてこの国を駆け回ることになろうな」
「流石にそれはないかと」
「いや、ある」
元康のその謙遜は許さなかった。そうした言葉だった。
「人は己の才に導かれる時もある」
「その時もですか」
「そうなるかは多分に運もある」
そうした世の無常もだ。元康に対して語っていた。全ては彼に教える為である。
「だがそなたはだ」
「運があるというのですね」
「その顔の相を見る限りはな」
そうだというのであった。
「ある。そのことも安心してよい」
「左様ですか」
「そなたは麒麟じゃ。そして天下を駆けるであろう」
「して何ができるでしょうか」
「おそらく。この世に泰平をもらす者の一人になる」
そうなると。元康自身に語った。
「必ずな」
「そうであればいいのですが」
「何、なれる。ただ」
「ただ？」
「そうした意味でも織田の下には多くの者が集まっておるな」
「左様ですか」
「降せなければ倒されるのは我等よ」
雪斎はその危険を現実のものとして考えていた。そこには何の楽観もなかった。現実を見てそれを厳しいものと断じている声であった。
「それはわかっておくことじゃ」

「はい」
「ではじゃ」
ここまで話してまた話を変えてきた。
「茶でも飲むとするか」
「茶ですか」
「そなたには茶も教えておきたいのでな」
また微笑みになっての言葉だった。

第十二話　三国の盟約その九

「だからじゃ。どうじゃ」
「茶は好きです」
元康は素直な微笑と共に師の言葉に応えた。
「殿も氏真様もそうだと聞いてますが」
「うむ、御二人共好まれる」
実際にそうだというのだった。
「さすればじゃ。よいな」
「それでは今より」
「作法は難しいが色々と教えておくのでな」
「御願いします」
こうして雪斎は元康に茶も教えたのであった。そしてその茶はだ。
清洲において信長も行っていた。彼は平手と共に茶室の中にいた。
その狭い畳の部屋の中で三人でいた。もう一人はだ。
年老いた僧侶であった。信長は彼の顔を見て言うのであった。
「ふむ、和尚よ」
「何でしょうか」
「和尚の茶も見事じゃな」
碗を自分の前に置いてそのうえでその僧侶に告げた信長だった。
「爺の茶も見事じゃが」
「有り難き御言葉」
「いや、茶はいいものじゃ」
信長はその僧侶沢彦和尚を見ながら話した。
「落ち着く。それに心がすっきりするわ」
「左様、茶は眠気も覚まします」
ここで平手がこのことを信長に話した。
「そしてです。侍もこれからはです」
「こうした素養も身に着けねばならんな」

「そうです。殿は昔から茶や能といったものが好きですが」
「うむ、好きだぞ」
信長は笑って平手のその言葉に頷いてみせた。
「踊りは見るのもするのもじゃ。好きじゃ」
「そうですな。昔から茶を親しまれているのは爺も非常に有り難く思っております」
「殿は書もよく読まれますしな」
和尚はこのことを言ってきた。
「いや、何でも読まれておるようで」
「とりあえずある書は読むようにしておる」
こう答える信長だった。
「それが必ずわしの中に備わるからな」
「はい、その通りです」
「しかし爺はそれだけでは駄目だと言うからのう」
「当然でござる」
平手は主に対してぴしゃりと告げた。
「殿のことを思えばこそ。だからこそです」
「わかっておる。全く爺は厳しいのう」
「わかっておられればです。殿はもう少し行儀というものを」
「備えろというのか。勘十郎の様にじゃな」
「そうです。最近は又左といい小六といい殿に影響されたのか派手な風体の者が家中に多いので爺も気が気でなりませぬ」
「それでか」
信長は笑ったまま平手に話した。
「この前慶次を叱ったそうじゃな」
「左様です。特にあの者はです」
「あれと勝三は特にじゃな」
「目に余ります。服だけでなく普段の行いも」
「まさか爺にもやったのか」
「やられましたわ」

平手は憮然とした顔で主に答えた。
「この前茶に呼んだのですが」
「ふむ。あ奴はあれでも風流が好きだからのう」
「それがしに茶を淹れてくれたまではよかったのですが」
「その茶にか」
「まず何時の間にか既にあ奴が飲んでおり」
そこからであった。
「そしてその碗の中にです」
「何があった」
「何と紙が入っておりました」
そうだったというのである。
「そしてそこにです」
「何か書いておったか」
「はい、ご馳走様と」
こう書いてあったというのだ。その紙には。
「そして目の前には童の様に腹を抱えて笑うあの男がおりました」
「して怒ったのか」
「この手で何発も殴ってやりました」
そうしたと。怒りを抑えながら語る。
「そうしてやりました」
「ははは、爺は相変わらずだのう」
「相変わらずなのはあの男です」
「慶次がか」
「左様です、ああした悪戯をするなどとは」
「叔父である又左を水風呂に入れて大喧嘩になってもおるしな」
「どうしてああなのか。殿が行儀というものを身に着けられぬから下の者も乱れるのです」
平手が怒るとであった。信長は笑いながら返す。これはいつも通りであった。

第十二話　三国の盟約その十

「まあ慶次はあれでいいではないか」
「よくはありませぬ」
「殴る程度で許してやれ」
「実際にそうしておりますが」
「いや、そうではなくだ」
「まだ何か？」
「ううむ、爺は変わらぬのう」
信長はそんな平手に困った顔になりながら話した。
「頑固だのう」
「頑固でございますか」
「全くじゃ。そういえばじゃ」
「そういえば？」
「美濃にも随分と頑固な者がおるらしいのう」
信長はふと思いついた顔になってだ。美濃の話をしだした。
「美濃三人衆のうちの一人の」
「稲葉ですな」
「左様、あの者じゃ」
和尚の言葉に答えて声を出した。
「あの者も随分と頑固だというな」
「その様ですな。美濃三人衆はどの者も癖がありますが」
「並大抵の者では使いこなせぬようだな」
「蝮ならばこそですな」
「ふむ、蝮ならばか」
それを聞いた信長の顔がここで笑った。そうしてであった。
そのうえでだ。その和尚だけでなく平手に対しても告げた。
「その蝮との会見だが」
「はい、話は進めております」

平手が信長の今の言葉に答えてきた。
「それは既に」
「早いな、相変わらず」
「ことは迅速にかつ慎重に」
平手はその相反しかねないものをさらりと言葉に出してみせた。
彼はこと政と守りにおいてはこの二つを常に共にできる人物でもあるのだ。だから信長も彼には中々逆らえない。
「そうでありますから」
「ふむ、それでか」
「はい、左様でございます」
「うむ、それで話は順調なのか」
「美濃の方も乗り気でございます」
平手はこう信長に話した。
「その道三殿がです。それに」
「それに？」
「来るとなればその美濃三人衆も来るようです」
このことも話すのだった。
「どうやら」
「そうなのか、あの三人もか」
「それに」
平手の言葉は続く。
「今丁度幕府から美濃に人が来ておりますが」
「ふむ、誰じゃ？」
「細川藤考殿と明智光秀殿です。それに和田惟攻殿です」
その三人だというのである。
「この方々も来ております」
「細川というのは聞いたことがあるな」
信長はまずはその名前に眉をぴくりと動かした。流麗な形のその眉が動いたのである。
「何でも公方様のご落胤だそうだが」

「そしてかなりの多芸者です」
「多芸か」
「戦もできますが政に様々な風流にも通じているとか」
「面白そうな者だな」
信長はそこまで聞いて楽しげに笑ってみせた。そうしてであった。
こう言うのだった。
「その者を見たいな。それに」
「それにといいますと」
「和田という者も気になるがじゃ」
「明智殿ですか」
「名前からして美濃の縁者だな」
明智という名前はかつての美濃の主土岐氏に近い家の名前である。
信長はそこから察したのである。
「そうではないのか」
「はい、左様です」
平手はその明智のことも信長に伝えた。
「美濃から越前の朝倉に仕えそこから将軍家に仕えているようです」
「そうした者か。朝倉にもいたのか」
「ですが義景殿と折り合いが悪かったらしくて」
「ははは、そうであろう」
信長は朝倉義景の名前が出るとすぐに笑ったのだった。
「あの者ではな」
「ですから」
織田家と朝倉家は元々斯波家の被官同士である。だが家柄は朝倉の方が上でありその為朝倉は織田を下に見ていた。織田は織田でその朝倉を嫌っていた。これは家臣の間にも及び両家はまさに犬猿の仲であるのだ。当然信長も平手もそれは同じである。

第十二話　三国の盟約その十一

ただしそれを抜いてもだ。朝倉義景という男は評判になる程の暗愚な男であった。信長と平手はこのこともわかって話をするのだった。

「朝倉家を出たのです」

「そして将軍家にか」

「左様でございます」

「してどうした者だ」

「よくはわかりませんが幕府に入ってまだ日が浅いというのにです」

「うむ」

「公方様の信任を得ているとか」

そうだというのである。

「それから察するに」

「その者も切れ者だな」

信長は明智の話を聞いてこう看破した。

「へつらう者なら朝倉にいていられる」

「はい」

「しかしその朝倉から出て幕府に入りそれだとするとだ」

「やはりかなりの者でありますか」

「おそらく和田もそうであろうが」

信長は和田のことも忘れてはいなかった。彼のこともだ。

「しかしその明智はだ」

「その中でもですね」

「とりわけ秀でているやもな。その三人も」

「その三人も」

「いや、美濃三人衆も入れるか」

信長は不敵な笑みになって述べた。

「その者達もな」

「何と」
「六人もですか」
「人は多ければ多い程よい」
笑ったまま平手と和尚に話す。
「だからよ。ここは六人をじゃ」
「いえ、六人では済みますまい」
和尚は穏やかな笑みで主の笑みに言ってきた。
「そうでございますな。優れた者ならば誰であろうとも」
「むっ、わかるか」
「殿は昔からそうでございますから」
「人を見ればというのじゃな」
「今で既に尾張中の優れた者を全て集めております」
その人の質で尾張を一つにしたと言っても過言ではない。しかもその人を政にも使ってだ。尾張を飛躍的なまでに豊かにもしているのだ。それが今の信長であるのだ。
「ですから」
「わしは見られておるようじゃな」
「殿だけでなく尾張も見ております故」
「尾張もか」
「はい、左様です」
こう信長に言うのであった。
「ですからある程度はわかっているつもりです」
「手強いのう、和尚も」
「いえ、それは拙僧だけではありませんぞ」
微笑んでそのうえでの言葉だった。
「これは」
「爺もか」
「平手殿もですし。他の方々もです」
「確かにのう。あの者達も見ておるわ」
信長は袖の下で腕を組んだ。そうしてそのうえでまた述べるのだ

った・
「わしのことも尾張のことも」
「あえてそうした方ばかり選んでいるのでは？」
平手の言葉です。
「若しくはそこまで高めるか」
「まあそうじゃ。わしは確かに人を求める」
それは信長も充分に認めることだった。
「見込みのある者もな」
「そしてそれがですな」
「前田殿や佐々殿達ですね」
「あの者達もやるぞ」
信長は自信のある声で話した。
「やがては一国を任せられるまでになる」
「そうですな。それは確かに」
平手は信長の今の言葉に納得した顔で頷いて述べた。
「あの者達ならば必ず」
「今は権六に牛助か」
柴田に佐久間であった。その二人を出したのだった。
「それと五郎左じゃな」
「五郎左もでござるか」
「あの者、わしの見込んだ通りよ。米じゃな」
丹羽はそれだというのである。
「それじゃな」
「米ですか」
「そうじゃ、米じゃ」
丹羽についてさらに話す。
「権六は掛かれよ」
「いつも掛かれ掛かれと仰ってるからですな」
「左様、だから掛かれよ」
こう和尚に返す。

「そして牛助は退きじゃな」
「殿軍が優れているからですな」
「その通りじゃ。戦の主はやはりこの二人じゃな」
そしてだった。もう一人の名前を出してきた。
「久助もじゃな。あの者もよいな」
「久助ですか」
「そうじゃ。わしの家臣達の中でもこの四人はやはり大きいな。しかしじゃ」
「しかし？」
「やはり筆頭は爺じゃ」
ここまで話したうえで平手を見て笑ってみせたのだった。
「爺しかおらぬわ」
「それがしがですか」
「爺は服じゃな。それじゃな」
「それがしは服ですか」
「水でもよい」
それにも例えるのだった。
「絶対になくてはならぬものよ」
「小言ばかり言ってもですかな」
「それは嫌じゃがな」
さしもの信長もこればかりは苦手だった。実際に今の平手の言葉には苦笑いになった。そうしてそのうえで言ったのだった。
「しかしやはり爺は欠かせぬ」
「左様ですか」
「新五郎は常に傍に置いておきたい」
林のことだった。
「しかし留守役になるとじゃ」
「それがしでござるか」
「御主か勘十郎じゃな。宜しく頼むぞ」
「有り難き御言葉。それでは」

平手は主に礼を述べながらまた茶を淹れはじめた。そうしてだった。

信長と和尚はその茶を飲んだ。そのうえでさらに話をするのだった。今はだ。そうして道三との会見の用意をしていくのであった。

第十二話　完

２０１０・１０・８

第十三話　家臣達その一

第十三話　家臣達

信玄はだ。まずは幸村を呼んでいた。そうして彼に対して問うのであった。

「何でも最近のそなたにはだ」

「何でしょうか」

主に対して畏まった態度で返していた。

「それがしに何か不備でも」

「不備はない」

信玄はそれはないと言った。

「むしろ見事だと言いたい」

「といいますと」

「家臣を手に入れたらしいな」

こうその幸村に対して告げた。

「そうだな」

「あの者達のことですか」

「そうだ、十人だったな」

「はい、どの者も素晴しき男達です」

幸村はこう主に話した。

「それがしには勿体なき者達です」

「いや、それは違うぞ」

「といいますと」

「御主はそこまでの男なのだ」

そうだというのである。

「それだけの者達を召抱えられるだけのだ。そこまでの男なのだ」

「そうなのですか」

「十人か。全て名付けてだ」

「名付けて？」

「真田十勇士か」
信玄はこの名前を言ってみせた。
「まさにそれだな」
「真田十勇士ですか」
「そうだ、この名前はどうだ」
「有り難き幸せ」
幸村は一旦目を閉じて主に礼を述べた。
「御館様につけて頂いたその御名前」
「気に入ったか」
「あの者達に相応しきもの。さすればそれがしは」
「うむ」
「あの者達が来ただけはあるような。そうした男になってみせましょう」
「そうだ、それでこそだ」
信玄は今度は幸村の言葉に感心してだ。こう言ったのであった。
「それこそ天下一となれる者だ」
「天下一の男にですか」
「わしは天下を治める」
これが信玄の望みだった。彼は東の甲斐にあってもそこからだ。遠くにある京の都を見据えているのだ。それが甲斐の虎なのだ。
「そしてそなたは天下一を目指すのだ」
「はっ、それでは」
「目指せ、よいな」
「そうします。では御館様」
「うむ」
「それがしはこれで」
「兵達の鍛錬だな」
武田軍の精強さはその鍛錬の徹底にもあった。規律を厳正に守らせることにその鍛錬、そして信玄をはじめとした将の資質がだ。武田を恐るべき軍にしているのである。

「それだな」
「はい、それがしも鍛えて参ります」
「励め、存分な」
「有り難き御言葉、それでは」
幸村はこれでその場から姿を消した。するとだった。
信玄の前に男達が現れた。彼等はそれぞれ名乗るのだった。
「武田信繁」
「武田信廉」
「武田勝頼」
「秋山信友」
「穴山信君」
「甘利虎泰」
「板垣信方」
「一条信龍」
「小幡虎盛」
「小幡昌盛」
「飯富虎昌」
「高坂昌信」
「三枝守友」
「真田信綱」
「真田幸隆」
「多田満頼」
「土屋昌次」
「内藤昌豊」
「馬場信春」
「原虎胤」
「原昌胤」
「山県昌景」
「山本勘助」
「横田高松」

この者達が出て来てだ。信玄の前に座し一礼をしたうえで控える。無論嫡男の義信もいる。彼等が揃ったのを見てだ。信玄はあらためて言うのであった。

第十三話　家臣達その二

「皆の者、川中島は御苦労だった」
「はい」
「有り難き御言葉」
「それぞれ傷は癒しているな」
「有り難き御言葉、無論であります」
彼等を代表して武田信繁が言ってきた。
「我等、全て湯の場で傷を癒しております」
「それは何よりだ。それではだ」
「はい、今は」
「何をするかですな」
「そうだ、戦はまずは終わった」
その上杉との川中島はというのだ。
「だが。これは一つの戦が終わったに過ぎぬ」
「はい、次は上野ですな」
「そこに兵を向けるのござるな」
「その通りだ。だがその前にやるべきことがある」
信玄の目が光った。戦の場にあるかその時よりさらにだ。その目が光ってそのうえで言うのだった。それはまさに虎の目であった。
「信濃をだ」
「信濃を治める」
「そうされますか」
「そうだ、信濃を治め豊かにする」
これが信玄の今の目標だった。彼は戦ばかりを見ているわけではないのだ。
「まずはこの甲斐より道を通しだ」
「信濃の全土にですな」
「その道を」

「そうだ、通す」
まずは道であった。
「無論治水に田畑もじゃ」
「治めていかれますか」
「甲斐と同じく」
「豊かにする」
信玄は断言さえしてみせた。
「よいな、戦で拡げた国はだ」
「豊かにする」
「だからこそ拡げる」
「豊かにせぬ土地なぞ手に入れても何の意味もない」
信玄独自の考えだった。実は彼は戦よりも政を好む。本国甲斐は彼が主になってから見違えるまでに豊かになった。堤が築かれ田畑は開墾され様々なものが植えられだ。街は整備されしかも金山まで見つかっている。信玄は金山の資金で政を行い国を豊かにしているのだ。
そして今信濃もだ。豊かにするというのである。
「何度も言うが信濃はただ手に入れたのではない」
「それは豊かにする為」
「だからこそ」
「手に入れたと」
「領地を拡げてそれで満足するのは二流よ」
信玄から見ればそうであった。
「その拡げた領地をどう治めるかがだ」
「御館様の見られているもの」
「そしてそれでさらに豊かになり」
「そのうえで」
「都だ」
幸村に話したことをここでも話してみせた。二十四将にもだ。
「都を目指すぞ」

「はい、それはわかっております」
「都に入りそのうえで」
「天下を」
「この乱れた国をだ」
信玄は己が治める天下についても考えていた。そこまで考えてそのうえで動いているこがだ。この武田信玄という男なのである。
その彼がだ。今言った。
「全て豊かにしようぞ」
「泰平をもたらしそのうえで」
「豊かに」
「今の戦は泰平をもたらす戦と心得よ」
信玄の言葉だ。
「よいな、そのうえだ」
「はっ、我等一同御館様に」
「この命を捧げ」
二十四将だけでなくだ。義信も見て言うのだった。

第十三話　家臣達その三

「そしてそのうえで」
「この国に泰平をもたらします」
「では今よりだ」
信玄の言葉がここで戻った。
「信濃を治める。よいな」
「御意」
「それでは」
こうしてだった。武田の者達は信濃を本格的に治めにかかった。
信玄はただ戦に強いだけではなかった。政もだ。恐ろしいまでに卓越していた。
「今より信濃を治めましょう」
「そしてあの地もまた」
「民達を喜ばせるのだ」
信玄はこうも告げた。
「よいな」
「はっ」
こうしてだった。武田の者達は今信濃も本格的に治めるのだった。
武田は決して戦だけを見ているのではなかった。政もだ。それと同じだけ、いやそれ以上に見ているのであった。
そしてだ。謙信の前にもだ。彼等がいた。
「長尾政景」
「長尾景秋」
「宇佐美定満」
「新津勝資」
「金津義旧」
「北条景広」
「色部長真」

「本庄慶秀」
「本庄繁長」
「甘糟景継」
「杉原親憲」
「斎藤朝信」
「安田能元」
「高梨頼包」
「柿崎景家」
「千坂景親」
「直江景綱」
「竹股慶綱」
「岩井信能」
「中条藤資」
「山本寺孝長」
「吉江定仲」
「志田義秀」
「大国頼久」
「加地春綱」
この二十五人が謙信の前に揃いだ。そのうえで言うのだった。
「以上上杉二十五将」
「只今参りました」
「よくぞ来ました」
謙信はその彼等にまずはこう告げた。そうしてであった。
「それではです」
「はい」
「これからのことですね」
「甲斐の虎との戦いはまずは休息の時を迎えました」
謙信はその透き通った声で話した。まるで女のものの様な、そこまで澄んだ美しい声である。
その声でだ。謙信は言うのである。

「そしてその間です」
「兵を鍛錬し」
「そしてこの越後を」
「越後の民のこと、決して忘れてはなりません」
謙信もだ。民のことを忘れてはいなかった。そのうえで言うのであった。
「我が上杉の軍は何の為にいるのか」
「この世に」
「この日本にですね」
「そうです。何の為にいますか」
二十五将全員への問い掛けであった。
「それは。何の為ですか」
「はっ、それはです」
彼等の中でも一際賢明そうな、白い髭の男が言ってきた。
「民を護る為です」
「そうです。それこそが義なのです」
「義、毘沙門天の義」
「だからこそですね」
「民を苦しませてはなりません」
謙信は強い言葉になっていた。
「その為にです」
「今はこの越後を治める」
「そうされるというのですね」
「川を治め田畑を耕します」
まずはそこからだった。

第十三話　家臣達その四

「そして佐渡です」
「佐渡の金山を」
「そこからも」
「金山からの金で越後をさらに豊かにします。よいですね」
「そしてでしょうか」
宇佐美がその精悍な主に問うてきた。
「次の戦に」
「そうです。一向宗に北条です」
今の敵は二つであった。
「彼等を成敗します」
「殿、北条は今は静かです」
「ではまずは」
「そう、一向宗です」
謙信が今第一に見ているのは彼等だった。その彼等を見据えての言葉だった。
「既に越中まで来ていますね」
「加賀から。能登の一部を侵してです」
「そのうえで、です」
「最早越中は」
「ならばです。一向宗です」
やはり彼等だというのである。
「彼等を成敗します」
「そして何時かは」
「加賀をも陥としですね」
「都に」
「私は関東管領です」
幕府でのその官職はだ。謙信の誇りでありそれ以上に彼に義務を

与えていた。その官職から得られる権限や名誉、大義名分といったものはだ。謙信の目には入っていなかった。

そのうえでだ。謙信は語るのだった。

「関東管領として。都の将軍を御護りせねばなりません」

「そしてこの国も民も」

「戦の炎から」

「護ることこそが私の使命」

謙信はまた言った。

「だからこそです」

「ではその為にも」

「今は越後を治め」

「そうしてですね」

「次の戦です」

それを既に見ていたのだった。

「よいですね」

「はい、それでは」

「我等は今より」

「鎧は今はいいです」

つまり戦はというのである。謙信にしろ今は鎧ではない。軍神といえど常に鎧を着ているわけではない。そういうことであるのだ。

「民の為に。汗をかくのです」

「畏まりました」

「では」

こうしてだった。上杉の者達もそれぞれ政にあたったのであった。

謙信は彼等との話を終えるとふと己の館の庭に出た。そこには月がある。白い満月が輝きだ。濃い、黒に近いが確かに青い空を照らしていた。

その月を見てだ。この名を呼んだ。

「直江」

「はい」
すぐにだ。その直江兼続が来てだ。謙信に応えたのだった。
「殿、何か」
「いい月ですね」
謙信の声が微笑んでいた。
「美しく、そして」
「そして」
「澄んでいます」
その月を見ての言葉であった。
「こうした月のようにありたいものです」
「それが殿の望まれることですね」
「そうです。一点の曇りもなく」
実際にこう話していく謙信だった。
「そしてその光で世を照らし」
「闇の中にいる全てを照らし出す」
「そのうえで導きます」
謙信は尚もその夜空の月を見上げていた。
「私はそうなりたいものです」
「日輪ではなくですか」
「日輪ですか」
「はい、それではないのですか」
「日輪は既にあります」
これが謙信の返答であった。
「それはです」
「といいますとそれは」
「それは都におられます」
こう言うのである。

第十三話　家臣達その五

「足利将軍家こそがそれです」
「幕府がですか」
「今日輪は曇っています」
幕府の今の散々な状況を嘆いてもいた。関東管領になった謙信はあらためて将軍家、そして幕府の権威の復興を強く意識するようになっていたのだ。
そうしたことがあってだ。今謙信はこう言うのであった。
「その曇りを取り払いそのうえで」
「闇を照らすのですが」
「それこそが私の役目です」
謙信の言葉が強くなった。
「上杉謙信のです」
「では謙信様」
「はい」
直江に顔を向けた。そのうえでの言葉だった。
「及ばずながら私も」
「力を貸してくれますか、この私に」
「無論です。私の全てを捧げましょう」
こう謙信に言った。
「この直江兼続の全てを」
「頼みますよ。既に私は二十五人の素晴しき者達の命を預かっています」
その二十五将である。謙信にとっては彼等こそが最高の剣であり友であるのだ。そう感じている、謙信はそういう男であった。
「そしてここで貴方も」
「それがしはかつて二十五将にしてもらいましたが」
「それは何故退いたのですか？」

「あの真田幸村ですが」
この男の名前を出すのだった。
「あの者は武田二十四将には入っておらぬのです」
「そうですね。あの若き虎は」
謙信もこのことは知っていた。既にだ。
「あの二十四の星達の中には入っていません」
「さすれば私もです」
「貴方もですか」
「あえて二十五将とはならず。そのうえで」
「あの男と戦いますか」
「運命を感じます」
直江はこうまで言った。
「あの男と川中島で会いそして剣を交えたことは」
「そうかも知れませんね。私達と同じです」
「私達とは」
「甲斐の虎です」
即ち信玄だというのだ。
「あの者と私もです」
「運命に導かれてですか」
「互いに戦う運命にあるのでしょう。さすればです」
「武田信玄と戦われますか」
「あれだけの強き者と出会えたこと、神々に感謝しています」
ここで神々と言ったのにも訳がある。日本の神々を見ているのだ。
謙信はこの古来の神々のことも深く信じ敬っているのである。
その謙信がだ。神々に礼を述べつつさらに言うのであった。
「甲斐の虎と私は互いに全てを出し合い戦います」
「川中島において」
「そしてそのうえで虎を倒します」
そうするというのである。
「それが今の私の宿願の一つです」

「そうであるのですか」
「関東の相模の獅子もありやがて尾張の蛟龍とも剣を交えるでしょう」
「織田信長ですか」
「あの者、必ず天に昇ります」
龍としてというのだ。蛟は龍のまだ若い姿だとも言われている。それが長じればだ。龍になると言われている。信長はそれであるというのである。
「そうしてです」
「謙信様と剣を交えると」
「二匹の龍。私を黒き龍とすれば」
「織田は青き龍ですか」
「そのどちらの龍が生き残るか。それを見極めます」
こう言うのであった。そうしてだ。
「では直江」
「はい」
「貴方のその剣、確かに預かりました」
「有り難き御言葉」
「この天下に義を立てましょう」
「それが我が上杉ですね」
「そうです。ではその為にも」
月夜の下で直江を見て語っていく。そうして彼のその純粋な目を見ていた。そのうえで語るのであった。

第十三話　家臣達その六

「私はより強くなります」
「謙信様もまた」
「天には果てがありません」
何処までもあるというのである。上がだ。
「ですから。私は何処までも昇りましょう」
「そして天下に」
「義を」
これが謙信の願いだった。ここまで話して直江を下がらせだった。
一人になると酒と梅を出しだ。この二つで楽しむのであった。
信濃でも越後でも今は政に専念していた。幸村もその中にいた。
彼は今は鍬で畑を耕している。服も百姓のものだ。その彼のところにだ。十人の男達が来たのだった。
「幸村様」
「ここにおられましたか」
「うむ、いい汗をかいている」
実際に額に汗を流してだ。そのうえで彼等に言葉を返した。今空は青く雲一つない。日輪が照り実に素晴しい景色となっている。
幸村はその中で畑を耕してだ。その彼等と話すのだった。
「御主等もか」
「はい、そうさせてもらっています」
「今は」
「うむ、よいぞ」
幸村は彼等の言葉を聞いて笑顔になった。実に爽やかな笑顔である。
「ただ戦をしているだけでいいわけではないからな」
「畑仕事もですか」
「それもなのですか」

「いやいや、政だ」
幸村は笑ってこう訂正させた。
「これは政なのだ」
「いや、これは畑仕事では」
「そうとしか思えませんが」
「確かに」
「拙者はまだ政についてよくは知らない」
幸村はここでこうも話したのだった。
「だからこうして畑を耕しているのだ」
「そうだったのですか」
「それでなのですか」
「そうだ。そういうことだ」
こう話すのであった。そうしてであった。
「そしてだ。御主達もやってくれているな」
「まあ我等はです」
「幸村様にお仕えしていますし」
「ですから」
彼等にしてはだ。そうだというのであった。そしてその彼等にだ。
幸村は言うのだった。
「拙者に仕えてくれるか」
「我等の主は幸村様です」
「そして信玄様ですね」
「ですから」
「有り難い。そう言ってくれるか」
幸村はここであらためて彼等を見た。そうしてだった。
まずはだ。緑の忍装束に茶色の総髪を髷にした男に言った。精悍な顔立ちでしかもその背中には大きなマントと銃があった。
「穴山小助」
「はい」
次はだ。ざんばら髪に灰色の忍装束の男であった。鋭い目をして

いる。その腰には鎖鎌がある。それを持つことはないが鋭い輝きを放っている。

「由利鎌之助」

「はい」

三番目はだ。大柄で岩の様な顔をした男だった。両腕の筋肉が凄まじい。まるで全てを破壊できるかのようである。服は黒い忍装束である。

「望月六郎」

「はい」

四番目は鉢巻をして大きな目を持つ髪を立たせた男だった。手が長い以外は普通の外見だ。そして彼は藍色の忍装束だった。

「海野六郎」

「はい」

五番目はだ。覆面をした白い忍装束の男であった。雰囲気はかなり静かだがだ。そこには恐ろしいまでの気迫も感じられるものがあった。

「根津甚八」

「はい」

六番目はだ。茶の忍装束である。髪は薄く細長い顔をしている。目は何かを悟ったようなものである。その両手に複雑な紋章が描かれている。

「筧十蔵」

「はい」

七番目は僧侶だった。大柄であり思慮深そうな顔をしている。目も穏やかである。その彼は手に杖を持っていた。鋼の杖であった。

「三好伊三入道」

「はい」

八番目も僧侶だった。豪快な黒い髭を生やし先の僧侶よりもまだ大柄である。その彼の手にあるものはだ。まさしく鬼が持つ金棒だった。

「三好清海入道」
「はい」
九番目は青い忍装束の涼しげな顔立ちの青年だった。長い髪を後ろで束ねている。そしてその背にはだ。長い刀があった。
「霧隠才蔵」
「はい」
最後はだ。赤い忍装束の子供だった。黒い髪にまだ幼い顔をしている。小柄だがそれでもだ。身のこなしが尋常なものではない。細かい動き一つ一つがそうだった。
「猿飛佐助」
「はい」
「そなた等真田十勇士」
幸村は彼等を一つにしても言ってみせた。

第十三話　家臣達その七

「拙者にとってかけがえのない者達だ」
「そう言って頂けますか」
「我等を」
「御館様は天下を目指されている」
信玄のことも話した。
「そして拙者にだ」
「何と仰ったのですか」
「信玄様は」
「天下一の男になれと言われた」
このことも話した。
「拙者にな」
「何と。幸村様にですか」
「それ程のことですか」
「言って下さった。拙者はそうなれるかどうかはわからぬ」
こうは言った。しかしすぐにこうも言うのだった。
「だが、だ」
「だが」
「どう思われてますか」
「拙者はまず御館様、そして真田の為に全てを捧げる」
そうするというのである。
「そうするつもりだ」
「そのうえで天下をですか」
「信玄様にですね」
「そうする、よいな」
また言う彼だった。そうしてであった。
「拙者はその為に生きるつもりだ」
「では我等はです」

「その幸村様に」
「全てを捧げましょう」
こう言って彼の前に片膝をついてだ。幸村に告げた。
「真田十勇士」
「生きるも死ぬも幸村様と共にです」
「例え何があろうとも」
「その言葉確かに受け取った」
幸村もだった。彼等の心を受け取った。そのうえでだった。
「では天下に参るとしよう」
「はい、それでは」
「今より」
こうしてだった。彼等は幸村の下に集うのであった。その中でだった。ふと霧隠がこう言うのであった。
「やはりです」
「どうした才蔵」
「何かあったのか」
「うむ、拙者は以前朝倉宗滴様にお仕えしていた」
こう同志達に言うのだった。
「その時。幸村様にお仕えするように言われたのだ」
「そうらしいな」
「それでここに来た」
「そうだったな」
「そうだ。そしてその言葉はだ」
「間違いではなかった」
「そうだな」
彼等の言葉にだ。こう答えたのだった。
「拙者、幸村様に」
「うむ」
その幸村が微笑みで応えた。
「この命を捧げましょう」

「さすれば拙者もだ」
幸村も彼に応えて言う。
「その命引き受けた」
「有り難き御言葉」
「そのうえでだ。御主達と共に生き共に死ぬ」
これが幸村の言葉であった。１０
「それでよいな」
「では我等ここにです」
「一つの絆を作りたいのですが」
「宜しいでしょうか」
十勇士達がだ。幸村に言ってきた。
「我等十勇士生まれた場所も時も違います」
「しかし幸村様に絶対の忠誠を誓った今」
「我等は同じ」
「全ては同じなのです」
「さすれば」
こうそれぞれ言ってそうしてであった。
「今ここで義兄弟となり」
「そうしてそのうえで」
「幸村様と死ぬ場所を同じと誓います」
「それで宜しいでしょうか」
「御主達の心は必ず受ける」
幸村はここでも微笑んで応えた。
「それではだ」
「そうですか」
「では我等は」
「そうして宜しいのですね」
「拙者は幸せ者だ」
また微笑んで言った幸村だった。

第十三話　家臣達その八

「これ程の者達が拙者に集ってくれたのだからな」
「幸村様だからこそ」
「だからなのですが」
「それではいけませんか」
「だからだ。拙者は幸せ者だ」
感涙せんばかりだった。十勇士達の言葉にだ。
「では拙者も同じ誓いをしよう」
「はい、では我等」
「死す場所は同じです」
「主従として永遠に」
「何があろうともお仕えします」
「この命にかけて」
「うむ！」
幸村は大きな声で頷いたのだった。そうしてだった。
彼等は今誓い合った。それは主従の誓いであったがそれ以上のものがあった。漢と漢のだ、真の信義がそこにあったのである。
真田幸村は漢だった。そして信長はだ。また家臣達を集めていた。
そのうえで、であった。
「またわしの下に人が来ておるのだな」
「はい」
「その通りでございます」
林兄弟がその主の言葉に答えた。
「この度もです」
「殿のことを聞いてです」
「よいことじゃ。わしの下には人が集うか」
「当然でありましょう」
柴田が豪快な笑みと共に言った。

「優れた者ならば誰であろうと用いられるならばです。人が集まるのはです」
「しかしじゃ。権六よ」
信長はその柴田に顔を向けて言った。
「わしの目は厳しいぞ」
「確かな者でなければですか」
「絶対に用いぬ」
これは断言であった。
「決してじゃ。しかも」
「しかもでござるか」
「己の為すべきことに励まぬと上にはあげぬぞ」
このことも言い加えたのだった。
「しかとな。励むがよい」
「厳しい殿でござるな」
「これでも爺よりは優しいぞ」
信長はここでは冗談を言ってみせた。
「爺なぞじゃ。わしなぞ比べものにならん程じゃろうが」
「いやはや、全くでござる」
ここで信長の言葉に大きく頷いたのは慶次であった。
「おかげでわしは頭はたんこぶだらけでござる」
「慶次、御主今度は何をやったのじゃ」
佐々が呆れた顔で慶次に問うた。
「また氷風呂を馳走したのか？」
「いや、今度は食事をな」
「それを馳走したのか」
「南蛮から来た唐辛子をこれでもかと入れたらのう」
そうしたと聞いてだ。周りは呆れてそれぞれ言った。
「いや、それはだ」
「そなたが悪いぞ」
「全くだ」

「あの様な辛いものをふんだんに入れて食わすとな」
「流石に誰でも怒るぞ」
「いや、平手殿まずは口から火を噴いたみたいになってのう」
まずはそれだというのであった。
「そしてそれからじゃ」
「それからか」
「怒ったのじゃな」
「そっちも火の様じゃった」
そうだったというのである。
「怒って怒ってのう。わしの頭をこれでもかとじゃ」
「そんなことをすれば殴られて当然じゃ」
前田は甥にこう言い捨てた。
「よくもまあ手打ちにならなかったものだ」
「ううむ、刀は抜かなかったのう」
「そういえば平手殿は決して刀は抜かれぬのう」
「確かに」
「それはないな」
「一度もな」
「遊んでおるのではないですかな」
島田はそれではないかと述べた。

第十三話　家臣達その九

「慶次と。遊んでいるのではないかと」
「わしとですか」
「そうじゃ。悪戯っ子の相手をしておられるのじゃ」
「わしは子供じゃったか」
「何処が大人だ」
また叔父に言われた慶次だった。
「人にそんなことばかりする奴の何処が大人なのじゃ」
「叔父御も厳しいのう」
「何なら冬に氷の風呂に入ってみるか」
前田も容赦がない。
「よくわかるぞ」
「わしは冬でも川で泳ぐぞ」
「そのまま凍ってしまえ」
また言う前田だった。
「そして反省しておれ」
「そこまで言われることか」
「言われることじゃ」
「ううむ。平手殿も叔父御も冗談がわからぬ」
挙句にはこんなことを言う慶次だった。
「わしは悲しいぞ」
「そんなに悲しければ一人で悲しがっておれ」
「いや、そういう趣味はないのだが」
「全く。仕方のない奴だ」
「ははは、二人共その位にしておけ」
二人の間に森が入った。
「よいな、これ位でだ」
「ううむ、わかりました」

前田は森のその言葉には素直に応えた。
「それでは」
「そういうことでな」
「そうですな。ではそれがしも」
慶次も森が出て来ると大人しくなった。
「これで慎みましょう」
「流石は森殿よのう」
「出られただけで前田の二人が大人しくなるとは」
「いや、全く」
「ははは、どんな者も与三が出れば静かになるわ」
信長もその彼を見て笑って言った。
「これも人間故かのう」
「これが平手殿ならばまず叱り飛ばされますからな」
「それで静かにされるのがあの御仁ですが」
「さてさて、与三殿は一言だけでそれをされる」
「お見事であります」
「いや、そういうことはない」
だがだ。当人はそう言われてもだ。落ち着いた言葉で返すだけであった。
そうしてだ。こう言うのであった。
「それがしは。何もしておらぬ」
「いやいや、そこにいて一言言うだけで充分なのじゃ」
主の言葉だった。
「そなたの場合はな」
「左様でございますか」
「爺ものう。あの口やかましさが武器なのだがどうにも厳し過ぎるからのう」
「全くです。平手殿は相変わらずですな」
「幾つになられても」
「ははは、爺がこの場におらんで何よりだ」

主自らこんなことを言う始末だった。
「全くのう」
「おりますぞ」
しかしだった。ここで平手の声がしたのであった。
そしてだ。部屋にだ。彼が一礼と共に入って来たのであった。これには織田家の家臣一同もどう反応していいかわからず呆然となった。
「うっ、まさかここで出て来られるとは」
「もう少し後ならよかったのに」
「まさか全て聞かれていたのか」
「だとすれば」
「それがし。歳は取っても幸いにして目も歯もようござる」
その平手の言葉である。
「とりわけ耳は」
「つまり全て聞こえておったか」
「はい」
主に対しても臆面もなく返す。
「その通りでございます」
「左様か」
「厳しくて結構」
平手はその臆面もない調子で信長に返す。
「厳しいことを言うのがそれがしの役目ですから」
「それでももう少し手柔らかにして欲しいものだ」
「何を仰いますか」
しかしだった。平手の言葉は変わらない。

第十三話　家臣達その十

「それでは何の意味もありませぬ。そもそも殿も一同も誰も何かと軽いですから」
「わかった、ではじゃ」
「はい」
「連れて参ったな」
信長はそこに話をやった。
「そうじゃな」
「今ここにおります」
こう信長に返す平手だった。
「既に」
「そうか。それならすぐに中に入れよ」
「はい、それでは」
こうしてだった。六人の男達がそれぞれ平手によって信長の前に引き出された。彼等は一礼してからだ。それぞれ名乗ったのであった。
まずはだ。口髭を奇麗に整えた男であった。
「矢部善七郎家定」
続いては月代の若者である。
「長谷川藤五郎秀一」
三人目はやけに細い男だった。
「福富平左衛門秀勝」
次はだ。鋭い黒目がちの男だった。
「野々村さん十郎正成」
五人目は大柄な男だった。
「大津伝十郎長昌」
最後は。女にも見える美しい若者だった。
「万見仙千代重元」

「この者達でございます」
信長の前で深々と頭を下げるこの者達をだ。平手が紹介した。
「この度殿に仕官して参った者達です」
「ふむ」
信長はまず彼等をその目で見回した。そのうえで言うのだった。
「どの者も政に長けておるな」
「はい、どの者もかなり」
「よい。政ができる者は幾らいても多過ぎるということはない」
信長は満足した声で述べた。
「喜んで使おうぞ」
「有り難き御言葉」
「それでは」
「そなた等の働きを期待する」
信長は明朗な声で彼等に告げた。
「その力思う存分振るうがよいぞ」
「では今より」
「我等もまた」
「これでよし、じゃな」
信長は満足した様子であった。そうしてであった。
滝川と池田勝正を見た。そのうえでだった。
「久助、八郎三郎」
「はい」
「伊勢のことでありますか」
「そうじゃ。久助にはより働いてもらうと共にだ」
とりわけ滝川に告げたうえでだった。
「この者達も入れるがいい。伊勢の国人や守護の家にじゃ」
「謀をですな」
「これまで以上にするがよい」
こう話すのだった。
「それにこの者達も使ってじゃ」

「わかりました」
滝川は一礼して主の言葉に応えた。
「ではすぐに」
「言っておくが尾張の政も怠らぬことじゃ」
信長は滝川にこのことも言い含めた。
「それもよいな」
「承知しております」
「八郎三郎もじゃ」
池田勝正にも声をかけることを忘れなかった。
「よいな」
「承知しております」
「ならばよい。まずは尾張よ」
彼の本拠地であるそこをというのだった。
「全ては尾張からはじまるのよ」
「終わりから尾張がですな」
慶次がここでおどけてこう言った。

第十三話　家臣達その十一

「いや、これは中々面白いことでござる」
「これ、慶次」
平手が顔を怒らせてその彼を叱ってきた。
「御主はまたそんなことを言ってじゃ」
「ははは、冗談でござる」
「冗談か。ここでそれを言うのがいかんのじゃ」
「殿の御前だからですか」
「わかっておればもう少し慎め。全く御主という者は」
「ああ、よいよい」
信長が二人の間に入った。慶次の鷹揚に笑う顔を見ながらだ。
「その話はそこまでじゃ」
「全く。殿は甘過ぎますよ」
「きりがないわ。爺の小言だけは」
「怒らなくてどうしますか、全く」
「よくもまあ同じことを何度も何度も怒るものだ」
信長はこのことには感心していた。それを言葉に出しながら話すのだった。
「普通いい加減馬鹿馬鹿しくなってくるものだがのう」
「そこが平手殿のご意見番たるところですな」
「いや、全く」
「その通りですな」
他の家臣達はその平手を見て顔を崩して笑ってそれぞれ述べた。
「我等だけでなく殿にも容赦がない」
「恐ろしい方でござるよ」
「そうじゃな。それで爺よ」
「はい」
信長は平手に顔を向けて声をかけた。平手も彼に応える。

「何でしょうか」
「あの者だが」
家臣達の末席にいるやけに小柄で猿そっくりの痩せた男をその右手に持つ閉じられた扇で指し示してだ。平手に対して言うのだった。
「どう思うか」
「木下ですな」
「そうじゃ、猿じゃ」
信長は彼をここでもこう呼んだ。
「あの者をどう思うか」
「ふむ。戦の場においては役立ちそうにありませんな」
平手は彼のその小柄で貧相な身体を見てまず述べた。
「少なくとも槍や弓は不得手でありましょう」
「そうじゃな。では戦の場では役立たずじゃな」
「そう思います」
木下を鋭い目で見ながらの言葉だった。
「それにつきましては」
「では他の場所ではどうじゃ」
「他でございますか」
「そなたならどう使うか」
平手にこのことを問うのだった。
「さて、どうするのじゃ」
「そうですな。政でしょうか」
平手は考える顔になって述べた。
「それならば。一度使ってみて見てもよいかと」
「そう思うのだな」
「はい」
主に対してはっきりとした声で答えた。
「それがしはそう思います」
「そうじゃな。では兵糧の記録付けやそうしたことをさせていくか」
「それがようございますな。どうやらこの者」

平手はまだ木下を見ていた。そのうえでさらに話すのだった。
「頭はいいようでござるな」
「それはわかるか」
「他の者に比べて出自はよくないと聞いております」
「ほう、そのこと知っておったか」
「しがない百姓の出でしたな」
その通りだった。平手はこのことまで知っていたのだ。
「確か」
「うむ、その通りじゃ」
「文字は得意ではありますまい」
「我等程な」
「ですが帳簿やそうしたことは得意とみます」
それはというのである。
「その目、実によく動いております。それを見れば」
「では政に使うべきだな」
「そう思います。それで如何でしょうか」
「よし、わかった」
信長は平手の言葉を受けてだ。木下に対してあらためて言ったのであった。

第十三話　家臣達その十二

「では猿よ」
「は、はい」
木下はその主に幾分戸惑いながらも応えた。
「ではそれがしに」
「仕事をやろう」
早速言う信長だった。
「それでよいな」
「仕事をですか」
「まずは清洲の兵糧の帳簿を付けよ」
信長が最初に命じたのはこれであった。
「そしてそれが終わり次第だ」
「次は」
「また清洲じゃ」
こう言ってからであった。
「清洲の城壁を修復せよ。よいな」
「その二つをでござるか」
「確か御主には弟がいたな」
「秀長のことでございますか」
「その者だ。その者も使ってよい」
弟を助けにせよというのだった。
「そうせよ、よいな」
「はい、それでは」
「いえ、殿。ここはです」
木下が信長の方を向き畏まって一礼したところでだ。蜂須賀も言ってきたのであった。
「猿一人、弟がいたとしても二つの仕事はすぐにはできませぬ」
「小六、ではどうだというのじゃ？」

「わしも手伝ってよいでしょうか」
笑いながらこう名乗り出たのだった。
「それは駄目でしょうか」
「御主もか」
「左様です」
こう申し出るのだった。
「猿の手伝いをです」
「そういえば御主は」
「今は手の者達である川並の者達と治水にあたっています」
それがだった。彼が今信長に与えられた役目だった。信長は元々川とつながりのある彼を見てだ。そのうえで治水をさせているのである。
「ですがそれが一段落しますので」
「もう終わるのか」
「検分を御願いします」
「そしてそれでよしとなればか」
「はい、その時はです」
また信長に告げるのだった。
「御願いします」
「そこまで猿の手伝いをしたいのか」
「この猿、確かに小そうございます」
まずは彼のその小柄さを指し示す。これはもう誰が見ても明らかなことである。
「それに力もなくおまけに顔も不細工でございます」
「全く褒めておらんではないか」
「しかしそれがです」
「それがか」
「どうしてか。憎めませぬ」
その木下を見ながらだ。蜂須賀は話していく。
「だからこそです。ここはどうかわしも」

「ふむ。確かにな」
信長もだ。彼の申し出を受けてだ。少し考える顔になってそれからまた述べるのだった。
「一人では限度があるな」
「左様でございます」
「例え弟がいたとしてもじゃ」
「ですからわしもです」
「よし、わかった」
信長はここまで聞いて納得した顔で頷いた。そうしてだった。
「小六、そなたの仕事が一段落しそれがよしとなればだ」
「その時は」
「この猿を助けるがいい」
そうせよというのだった。
「よいな、それで」
「有り難き御言葉、それでは」
「しかし。また思わぬ話じゃな」
信長はいぶかしむ顔も見せてまた語った。
「猿と小六か」
「全くですな」
村井も主と同じ顔になって述べた。
「まさかそうくるとは思いませんでした」
「吉兵衛、御主もか」
「ええ、この二人とは」
村井は主にも述べた。

第十三話　家臣達その十三

「これはかなり」
「そういえば猿は」
「確かに」
武井と松井は木下について語るのだった。
「頭が回りますし」
「妙に憎めないところがありますな」
「何かとひょうきんでありますし」
「左様でござるな」
「ふん、わしはどうもな」
柴田はその木下を見ながらどうにも面白くなさそうな言葉を出すのだった。
「この猿めは好かん」
「いや、それはどうしてですかな」
坂井がその柴田に対して尋ねた。
「権六殿の御気に召されぬ訳は」
「何か要領がよさそうでのう」
それでだと言う柴田だった。
「それでじゃ。わしはじゃ」
「好きになれぬと申されますか」
「そうじゃ。どうもな」
「まあそう仰らずに」
その彼を池田が宥める。池田恒興である。
「権六殿も家老でありますし。自重されるべきかと」
「そうじゃな。まあよいか」
柴田も彼の言葉に落ち着きを取り戻して話した。
「猿のことは」
「そうじゃ。権六よ」

「はい」
信長は柴田にも声をかけるのだった。柴田もそれに応える。
「御主もじゃぞ」
「それがしもでしたな」
「そうじゃ、政の役目はわかっておるな」
「開墾ですな」
「それの方はどうなのじゃ」
「ううむ、やっておるつもりですが」
戦の場と違ってだ。柴田はどうも困ったような顔を見せてきた。
その濃い髭が微妙なものになっている。
「しかし」
「しかしというか」
「あれでいいのかどうか」
「いえ、権六殿は充分やっておられますぞ」
「その通りです」
堀と前野がここで言うのだった。
「それがし達権六殿と共に働いておりますが」
「これがかなりのものでした」
「そうであろうな」
信長も彼等の言葉に納得して返すのだった。
「権六はこれで政もできるのじゃ」
「失礼ながら最初はまさかと思いました」
「しかしです」
堀と前野はここでまた話す。
「権六殿、田畑をよくわかっておられます」
「水のことも見られますし」
「その通りじゃ。権六は若い頃から父上と共に田畑を見てきたからのう」
「しかしそれがしは」
その柴田はここでも困った顔になっていた。

「どうも。政は」
「まあそう言うな権六よ」
信長は穏やかに笑ってみせて彼を宥めにかかった。
「御主は政もできる。自信を持ってよいのだぞ」
「左様でござるか」
「わしが言うのだから間違いない」
こうも言ってみせる信長だった。
「それはだ」
「殿がそう言われるのなら」
「慢心は駄目だが己を粗末に見るのもよくない」
「それもですか」
「己をよく知ることだ」
これが信長の言いたいことの核心であった。

第十三話　家臣達その十四

「よいな、権六」
「はっ、では」
「他の者もだ」
信長は己の言葉を他の家臣達にも告げた。
「己をよくわかることだ」
「己をですか」
「それを」
「そういうことじゃ。さて」
ここまで話してだ。信長は最後に言った。
「話はこれで終わりじゃ。そろそろ蝮も来る頃じゃな」
「はい、話は順調に進んでおります」
平手が主に答えた。
「それは御安心下さい」
「うむ、期待しておるぞ」
「その時ですが」
林も述べてきた。彼はいささか不安な顔になっている。
「やはり勘十郎様も」
「あ奴、やはりか」
「はい、どうも」
「怪しいままでございます」
弟の林通具も述べてきた。
「あの津々木という男が常に侍りです」
「妙なことを吹き込まれているようです」
「しかもです」
林兄弟以外に彼につけられている柴田も言ってきた。
「我等は遠ざけられております」
「見破られたか」

信長は彼等の言葉からこのことも察した。
「勘十郎、いやその津々木という者に」
「有り得るかと」
「それは」
林兄弟もそれは否定しなかった。
「あの者、素性は知れませぬが」
「切れ者であるのは間違いありません」
「そこもわからんしな」
信長は袖の中で腕を組みながら述べた。
「あの慎重な勘十郎が一見しただけの者を雇い入れるというのもだ」
「だからこそおかしいのです」
「何でも何かに魅入られたように用いたとか」
また林兄弟が話す。
「それから勘十郎様の御様子がですから」
「これはやはり」
「殿」
「ここはなのですが」
中川と蜂屋だった。
「その津々木という者をです」
「成敗しますか」
「それも手だが今は待て」
信長はここでは彼等を制止した。そのうえでの言葉だった。
「まだ様子を見たい」
「左様ですか」
「今は」
「とりあえずは泳がせる」
そうするというのである。
「その為に目付として新五郎達を付けているのだからな」
「ではここは」
「そうして」

「そうよ、勘十郎はわしにとっても必要な者」
信長はこの認識を強く持っていた。
「それを忘れるな」
「わかっております」
「ではここはまだですか」
「見るとしよう」
こう言ってまだ動かない信長だった。そのうえで道三を尾張に招くのだった。

第十三話　　完

２０１０・１０・１８

第十四話　美濃の蝮その一

第十四話　美濃の蝮

信長はだ。清洲の己の部屋において帰蝶と話していた。いささか無作法にだらしなく片膝を立てて座ってだ。そのうえで妻に対して言うのだった。

「いよいよじゃ」

「父上とですか」

「うむ、会う」

こう西瓜を食べながら話す。

「これからのう」

「そうですか。本当にいよいよですね」

「美濃の蝮の話は聞いておる」

妻に西瓜を勧めながら話す。

「どうじゃ」

「私も召し上がって宜しいのですか」

「美味いものを独り占めする趣味はない」

笑って妻に告げた。

「そんな趣味はな」

「左様ですか」

「さあ、食うがいい」

また妻に言ってみせる。

「共に食おうぞ」

「有り難うございます。それでは」

「うむ」

帰蝶がその西瓜を受け取ってかじる。信長はそれを見て楽しげに笑ってだ。そのうえでまた妻に対して言ってみせたのであった。

「悪党だの謀反人だの散々だな」

「私が生まれる前からの話ですね」

「所謂梟雄だな。それだな」
「はい、左様です」
「主をも追い出した。さて」
「さて？」
「わしはどうなるかな」
楽しげな笑みをそのままにしての言葉だった。
「わしも油断すればなのかのう」
「殿が油断されればですか」
「毒でももってな。例えば茶にだ」
そうしたことはこの時代では日常茶飯事である。信長の周りだけではない。この国のあちこちで普通に行われていることであった。だからだ。信長はあえてこう言ってみせたのである。
「入れてじゃ。それでわしは死ぬという訳よ」
「殿はその茶を飲まれますか？」
妻が問うたのはこのことだった。
「その毒の茶を」
「気付かぬうちに飲むかものう」
「それに気付かれないと」
「ははは、考えてみればそれはないな」
西瓜を食べながら大きく笑ってみせての言葉だった。
「わしはこれでも用心しておるからのう」
「ではそれはありませんね」
「しかし相手は蝮じゃぞ」
「殿も蛟龍ではありませんか」
「それを話に出すか」
「左様です」
帰蝶はここで微笑んできた。気の強そうな凛とした顔である。だがその微笑みは極めて穏やかで優しささえ見えるものであった。
その顔でだ。彼女は言うのだった。
「ですから恐れる必要もありませんね」

「実は恐れてはおらん」
「やはりそうではありませんか」
「むしろ楽しんでいる」
笑顔からだ。すぐにわかることだった。
「一体どうした者かとな」
「やはりそうですか」
「悪を行うにはそれなりの素養が必要だ」
「素養がですか」
「力かのう」
信長はこう言い換えた。
「城でも土台が必要じゃ」
「城に限らず何でもですね」
「ならばじゃ。悪を行うにもじゃ」
「その者にそれなりのものが備わっていなければというのですね」
「蝮にはそれがある」
断言だった。道三をわかっているからこその言葉だった。

第十四話　美濃の蝮その二

「確かにのう」
「そう見られているのですね」
「うむ、その通りよ」
こう妻に述べるのだった。
「それはどうだと思う」
「殿がそう思われているのならそうなのでありましょう」
「娘から見てはどうか」
「私も同じです」
帰蝶はだ。その切れ長の強い光を放つ目で答えた。琥珀色の輝きを放つその目はだ。強くそれでいて澄んだ輝きであった。夜の中に輝く宝玉を思わせるものだった。
「それは」
「成程のう、やはりな」
「そして殿は」
「わしはか」
「その父上と比べてもです」
今度は己の夫を見てであった。その粗野に見えて整っているその顔をだ。
「遜色はない。いえ」
「いえ？」
「さらに上を行かれるかも知れませぬな」
「ふふふ、そう思うか」
「御自身ではどう思われますか」
「さてな」
しかしだった。信長は不敵な笑みを浮かべてだ。こう言うだけだった。
「少なくともわしは尾張一国で終わるつもりはないがな」

「父上も同じことを仰っています」
「蝮もか」
「美濃だけではないと」
「では天下か」
「その為には尾張も手に入れておきたいと」
ここでまた、だった。帰蝶の目が光った。
「そう仰っていました」
「それは何時の話だ」
「私がこの家に入る前です」
その時だと。夫に対して話す。
「その時にです」
「面白いな、それはまた」
「面白いと仰いますか」
「左様、わしも同じことを考えているからだ」
茶を飲みながらだ。また不敵な笑みになる信長だった。ここでも酒は飲まない。信長と酒は妻の前でも縁のないものであるのだ。
「尾張だけではなくだ」
「美濃もですか」
「さしあたって伊勢もだ」
そこもだというのだった。
「伊勢と志摩も手に入れそのうえで都に向うつもりだ」
「その為に美濃をですか」
「この四国を合わせれば四万を超える兵が手に入る」
「そして豊かさもですね」
「尾張は元々豊かな国ぞ」
そのことでも有名であるのだ。そして信長はその豊かな尾張を己の政においてさらに豊かにしているのである。それが今なのだ。
「それだけではなく他の三国も入れればだ」
「今川なぞ恐れるに足りませんか」
「今川か」

その名前にだ。信長の目が光った。そのうえでの言葉だった。
「今川は今百万石だな」
「はい」
「この四国を合わせると百万石どころではないぞ」
「二百万国近いですね」
これは実高である。言われている石高と実際の石高はかなり違っていることが多いのである。
「いえ、達しているのかも」
「尾張も今検地をして国人達を完全に取り込み」
それにより実際の石高を確かめてだ。そうして国人達の領地も手中に入れて彼等を完全に臣下にしていっているのだ。これは寺社の領地にも及ぼうとしている。
「そのうえで実高も確かめているがだ」
「それを美濃や伊勢でもなのですね」
「わしの国になればそうしていく」
「そして都に」
「そのつもりだ。とにかく美濃は必要は」
これはだというのだった。

第十四話　美濃の蝮その三

「わしが治める」
「そうされますか」
「蝮も同じ考えだったとはな」
またこの話になった。すると今度は信長のその笑みは屈託のないものになった。その笑みでの言葉だった。
「面白いことよ」
「面白いですか」
「ではやがて戦になるか」
その笑みのまま出した言葉だった。
「そうなるか」
「では私はです」
「先程言ったな。織田に残るか」
「殿を見て決めました」
他ならぬ信長をだというのであった。
「この国に残りそのうえで」
「わしを見ていくのか」
「殿は面白い方です」
だからだというのだった。信長のその顔を見ながら。
「ですから。さらに」
「それでか」
「それでは駄目でしょうか」
「よいぞ」
信長は今度は楽しげな笑みになったのだった。そのうえでの言葉である。
「ならそうするがいい」
「宜しいのですね」
「わしは同じことは二度言わぬ。それにだ」

「それに」
「わしもそなたが面白い」
帰蝶のその顔を見てであった。その白く細い整った顔をだ。
「だからだ。この命ある限り見てみたい」
「だからなのですね」
「そういうことだ。さて」
ここまで話してだった。信長は足を胡坐にした。そのうえで妻にこう言ってきたのである。
「身体がなまるな。馬に乗ってくる」
「馬ですか」
「どうじゃ。そなたも共に来るか」
「殿がそう言われるなら」
従うというのであった。彼女もだ。
「御言葉に甘えさせてもらいます」
「そうするのだな」
「はい」
また答えた帰蝶だった。
「では今よりですね」
「うむ、行こうぞ」
「今日は負けませぬ故」
「これまた言うのう」
「貴方の妻ですから」
やはりだった。勝気な笑みを浮かべての言葉だった。
しかし信長は妻のその笑顔を受け入れてだ。二人でそれぞれの馬に乗り荒々しい駆け合いをするのだった。それが彼等だった。
木下は清洲においてまずは兵糧の帳簿をつけていた。これはだ。
ふと弟の木下秀長が除いてみると。既にだった。
彼は多くの帳簿を収めているところだった。弟はその兄を見て思わず言うのだった。
「兄上、まさか」

「ああ、来たか」
兄は驚く弟に対してこう言ってきた。
「早いな」
「早いのは兄上ではありませんか」
「わしがか」
「もう帳簿は」
「うむ、終わった」
にこりと笑っての言葉だった。
「今な」
「本来ならまだ半分もいっていない筈ですが」
「わしは文字はよくわからんが数字のことには強くてなあ」
「数字はですか」
「数字の文字は実によくわかるのじゃ」
そうだというのである。
「それでじゃ。もう終わった」
「計算もですか」
「全て終わった。間違いはないぞ」
「では数字の計算もですか」
木下秀長は兄にこのことも尋ねた。
「それも」
「うむ、それはわしも確かめたがのう」
「わしもやっていいでしょうか」
何しろあまりにも早いのだ。それで心配になってだ。兄にこう申し出ずにはいられなかったのだ。実際に申し出もしたのだ。
するとだ。木下は笑って弟にこう答えた。

第十四話　美濃の蝮その四

「やってくれるか」
「はい、是非」
兄に対してすぐに答えた。
「そうさせて下さい」
「自分でしたことは自分で確かめても限度があるからのう」
木下はここで少し苦い笑いを浮かべてこんなことも言った。
「それでは頼むぞ」
「では」
「さて、何はともあれ帳簿は終わった」
それはというのだった。
「それではじゃ」
「城壁ですね」
「それだがのう」
「かなり厄介な仕事だと思いますが」
弟は怪訝な顔になって兄に述べた。
「これはまた」
「そう思うか」
「何しろ清洲の城壁全てをです」
「そうじゃな。全てをじゃな」
「それを速くなおすとは。これはまた」
「何、考えはある」
だが、だった。木下は笑ってこう話すのだった。
「わしにな。考えがあるぞ」
「お考えがですか」
「まあ見ておれ。わしなりに考えてみた」
そうだというのである。
「それをやってみるからのう」

「わかりました。ではわしお後でそちらに向います」
「来てくれるか」
「当然です」
兄にすぐに答えた彼だった。
「わしは弟ではありませぬか」
「だからか」
「左様です。ですから」
「では頼りにさせてもらう」
木下は弟のその申し出に笑顔で返したのだった。そしてだ。
彼はだ。こう告げるのだった。
「これからもな」
「はい、それでは」
こうして帳簿を確かめるのは弟に任せてだ。彼は城壁のところに向かった。そこには既に蜂須賀がいた。彼はいぶかしむ顔で木下に言ってきた。
「おい、猿」
「おう小六早いのう」
「早いのではない」
彼はこう彼に返した。
「それを言えば御主はじゃ」
「わしか」
「今頃帳簿にかかりきりかと思っておったのだぞ」
「ほう、そうだったのか」
「わしは丁度ここで大学殿とお話をしておったのだ」
佐久間重盛のことだ。
「戦のことでな」
「そうだったのか」
「その話も終わってそれで御主を覗きに行こうと思っておったのじゃ」
こう木下に話すのだった。

「しかし。もうか」
「そうじゃ。終わったぞ」
「早いのう」
蜂須賀はいぶかしむ顔になっていた。
「これまた実に」
「数字には強いからのう」
「五郎左殿みたいじゃな」
「あの方や平手様はまた別格じゃがな」
織田家でそういったことについてはやはりこの二人だった。
「五郎左殿はまた何でもできる方じゃからのう」
「だから前から殿にどんどん引き立ててもらっておるな」
「そうじゃな」
「あの方ならばな。納得できる」
主に引き立てられていってもそれでも周りからの嫉妬を買わない、丹羽の人柄故のことである。彼は今や織田家において柴田と並ぶ人物となっていた。
「誰もがな」」
「しかしその五郎左殿の如き速さでしてしまったか」
「それで今から城壁なのじゃがな」
「早いのう、全く」
またこう言う小六だった。大柄なその身体で腕を組んでだ。そのうえで小柄な木下に対してこう言うのであった。

第十四話　美濃の蝮その五

「御主は」
「ははは、早くて確かであればいいではないか」
「まあそれはそうじゃがな」
「さて、壁じゃ」
「それでどうするのじゃ？」
「まずは人を集めるぞ」
こう言う木下だった。
「まずはじゃ」
「人をか」
「実際に普請をする者を集めるぞ」
「いきなりはじめるのではないのか」
「まあ見ておれ」
蜂須賀の突っ込みにこう返すのだった。
「これからやることはのう」
「これからか」
「左様、ではまず集めるぞ」
「うむ、わかった」
蜂須賀も一応彼の言葉に頷いた。そのうえで様子を見守るのだった。
そうしてだ。人を集めるとだ。木下は彼等にこう話すのだった。
「まずはそれぞれの組に分けさせてもらうぞ」
「組にですか」
「それにですか」
「そうじゃ、分けるぞ」
こう話すのであった。
「そしてそれぞれの受け持ちの場所を決める」
「全員で全部するのではないんですか？」

「そうじゃないんですか」
「そうじゃ。わしのやり方はちと違うのじゃ」
小柄な身体で集められたごつい人夫達を見上げてた。木下の話は続く。
「そうしてそれぞれで動いてもらう」
「動くんですけ、それぞれの組で」
「それでなんですか」
「そうじゃ。そしてじゃ」
木下はだ。彼等もこうも話した。
「一番最初に、しかもよくできた組にはじゃ」
「ええ、その組には」
「何かあるんですか」
「それで」
「その組には報酬が多くなるぞ」
こう話すのだった。
「そうなるぞ」
「えっ、そうなんですか」
「早くできればですか」
「そして上手くできればですか」
「報酬を弾んでくれるんですか」
「うむ、そうじゃ」
ここでだ。木下は満面の笑みを見せてきた。その笑みがだ。妙に人懐っこく見た者の心に残って仕方ない、そうした笑みだった。
その笑みでだ。彼は言うのであった。
「それでどうじゃ」
「はい、やらせて下さい」
「是非それで」
「御願いします」
人夫達は威勢をよくさせ一斉に言った。
「報酬が増えるんならです」

「もう言うことはありませんから」
「いえ、本当に」
「それぞれの仕事をする場所の割り当てはこっちでやっておく」
それは木下がというのだ。
「皆それについてくれるようにな」
「わかりました、それでは」
「決まり次第すぐに」
「やらせてもらいますから」
「頼んだぞ。それではじゃ」
こうしてだった。城壁の修復がはじまった。人夫達の頑張りでだ。
それは瞬く間に終わりしかもその仕事は見事なものだった。
蜂須賀はそれを最後まで見てだ。驚きそして呆れる顔で木下に言うのだった。
「おい、猿」
「うむ、何じゃ？」
「御主本当にやってしまったのか」
小柄な彼の顔を上から覗き込んでの言葉だった。

第十四話　美濃の蝮その六

「本当にか」
「見ての通りじゃが」
「それが信じられんのじゃ」
蜂須賀の驚いた顔はだ。そのまま変わらなかった。口調もだ。
それでだ。彼はこうも言うのだった。
「全くのう」
「そこまで言うか」
「言うわ。何という速さじゃ」
まずはその仕事の速さから話す。
「そしてどれも見事にできておるのう」
「うむ、よいことじゃ」
「ただ組に分けて場所を決めて報酬を弾んだだけなのにか」
だが、だった。蜂須賀はここで気付いたのだった。
「いや、待て」
「どうしたのじゃ？」
「それだけでも凄いことじゃな」
この事に気付いた彼だった。それでまた言うのだった。
「その三つのどれも。わしにはじゃ」
「どうだというのじゃ？」
「思いもつかんことじゃ」
腕を組んでだ。そうしての言葉だった。
「いや、全くじゃ」
「まあわしも少し考えてみた」
木下はその人懐っこいを笑みを蜂須賀にも見せた。蜂須賀もその笑顔にだ。妙に惹かれるものを感じていた。
それを感じながらだ。彼の話を聞くのであった。
「それでやってみたのじゃ」

「試しにか」
「左様、しかし上手くいったな」
「そうじゃな、しかしじゃ」
「しかし？」
「これはこれからもやっていくか」
こう言う木下だった。
「それではのう」
「わしもやっていいか？」
蜂須賀はここで木下に言ってきた。
「わしも。よいか？」
「わしの今のやり方をか」
「そうじゃ。やってよいか」
「こんなものやるなと言っても止められるものではあるまい」
これが木下の返事だった。
「違うか？」
「そういえばそうか」
「やり方だけだからのう。まあそれで織田家がよくなればそれでよい」
「御主の手柄でなくなってもか」
「手柄は人に譲って汗も人の為にかく」
ここでこんなことも言う木下だった。
「それでどうじゃ」
「一見御主が損をするように見えるがじゃ」
蜂須賀も馬鹿ではない。そうしたことをすればどうなるかはだ。
彼にもわかる。それでこう木下に対して言うのであった。
「御主の得になるのう、それだと」
「ははは、そうなのか」
「いや、御主それをわかっておるだろう」
「それは答えぬ」
木下の笑みは今度は思わせぶりなものだった。その笑みでの言葉

だった。
「答えても皆真似するじゃろ」
「まあそうじゃな」
実際蓮かもそのつもりである。だから今こう言ってみせたのだ。
「それはな」
「では答えぬ。それこそただでやるぞ」
「そうするのじゃな」
「まあそういうことじゃ。それではじゃ」
「うむ。それではじゃな」
「仕事が終わったことを殿に申し上げてだ」
これは必ずしなければならないことだった。さもなければ終わったことにはならない。木下達の間でもこれは常識の話しであった。

第十四話　美濃の蝮その七

「そしてじゃ」
「休むか」
「そうするとしよう。次の仕事までの間にな」
「いや、仕事は多いからのう」
蜂須賀は笑いながらこんなことも話した。
「その分尾張は凄いことになってきておるな」
「殿が一つにされてからな」
「うむ、悪い奴はおらんようになった」
治安を徹底させているのだ。信長は不埒者は何処までも追い徹底的に処罰しているのだ。だから治安はかなりいいのである。
「しかも田畑は開墾され町は整えられ」
「しかも水は治められじゃな」
「よいことじゃな」
「尾張はこれからどんどんよくなっていくぞ」
「よくなるか」
「殿がいてわし等はいるのだぞ」
だからだという木下だった。
「それでよくならない筈があるまい」
「確かに。人がえらく揃っておるのう」
蜂須賀は木下のその言葉に頷く。これもまたよく実感できることであった。何故ならばだ。
「わしもそうだしのう」
「確かに御主もな」
「自信はあるぞ」
「ただ腕っ節が強いだけではないからな」
木下は蜂須賀がそれだけの男ではないことを見抜いていた。それは信長とて同じだ。だからこそ今こうして織田家の家臣にいるのだ。

「忍の術も使えるし」
「うむ」
「そして水のことにも詳しい」
「川並はそれで生きておったからのう」
「おかげで政も戦もできるではないか」
蜂須賀のそうしたことを見ての今の言葉だった。
「どちらも充分にな」
「しかし町は詳しくはないぞ」
「それはこれから学べばいい」
「これからか」
「そうじゃ。学べばそれで得られるものじゃ」
「学問は好きではないが」
「まあそう言うな」
木下は学問と聞いて困った顔になった蜂須賀にこう述べた。そうしてそのうえで自分のことを話してみせる。これも彼の話術の一つである。
「わしはそもそも字はあまり読めん」
「そうらしいな」
「しかし話を聞くことはできる」
「それも学問のうちか」
「そういうことじゃ。御主は字を読めるな」
「うむ、読めるぞ」
確かな声で木下に返す。
「それはな」
「では学ぶことじゃな」
「町のこともか」
「町も治めてみると楽しいものぞ」
「そういえば柴田殿や川尻殿といった武辺も町にも駆り出されておるのう」
「殿は何でもさせてくれるぞ」

実際に信長はあらゆる政に家臣達をやっている。それは彼等に政を学ばせるという意味もあるのだ。無論彼もその中にいるのである。

木下はそれがわかっている。それでこう話すのだった。

「だから学ぶことじゃ」

「ではそうするか」

「おそらく尾張だけではあるまいしな」

「では他に国にもか」

「今伊勢に盛んに手をやっておるな」

「実はわしも行ったことがある」

彼は伊勢にも回されているのだ。調略もしているのだ。

「今は順調に国人達を味方につけておるぞ」

「それに北畠やそういった家にも手を回しているのだな」

「そうしておるぞ」

まさに木下の言う通りだった。

「皆でな」

「ではわしも伊勢に回されるかのう」

「すぐにそうなるだろうな」

「おそらく次の仕事はそれじゃな」

こう察しをつけた木下だった。

第十四話　美濃の蝮その八

「伊勢じゃな」
「そうなるか」
「伊勢は豊かな国じゃ。しかも多くの勢力に分かれておるしな」
「攻めるにはもってこいの国じゃな」
「しかし殿は兵はあえてあまり使われずにじゃ」
「調略によってじゃな」
「うむ、それで手に入れられるおつもりじゃ」
信長の考えをだ。実によくわかっている木下だった。
「そしてそのうえでじゃ」
「そのうえで」
「それからは美濃か大和か」
こう言っていくのだった。
「どちらにしても最後は都じゃな」
「そういえば殿も時々言っておられるな」
蜂須賀も信長の言葉は聞いている。その中でだ。彼が都について言っているを聞いたことが何度かあるのだ。そのことを今思い出して言うのであった。
「そうじゃったな」
「都までは今は遠いが」
「やがてはじゃな」
「そういうことじゃ。さて、今はじゃ」
木下はここまで話したうえで話題を変えてきた。
「殿のところに行こう」
「おお、そうだったな」
「仕事が終わればそのことを申し上げに行く」
木下はこのことを忘れてはいなかった。
「だからじゃ。行くぞ」

「そうだな。それではだ」
「終わったら茶じゃ」
このことも忘れていないのだった。
「それではじゃ」
「まずは殿のところにな」
「うむ」
こう話してだった。二人は信長のところに向かうのだった。
そして美濃ではだ。今道三が馬上から家臣達と話をしていた。道を進みながらだ。
「殿、それでなのですが」
「このまま尾張に行きです」
「あの男と会われるのですね」
「織田信長と」
「決まったことだからな」
だからだと答える道三だった。
「もう言うまでもないことだ」
「それはそうですが」
「しかし」
「自ら美濃に出向くのではなく」
「殿に尾張に来いとは」
「それは」
このことにだ。美濃の者達は不満なのだった。
そしてだ。こうも言うのだった。
「殿はあの御仁にとっては舅だというのに」
「それで自ら尾張に来いとは」
「失礼ではありませぬか」
「そう思いますが」
「何、構うことはない」
またこう返す道三だった。表情は平然としている。
「それはだ」

「そうなのですか？」
「よいのですか」
「それは」
「そうだ、よい」
あくまでこう言う道三だった。
「気にすることはない」
「殿がそう言われるのならいいのですが」
家臣達は一応はこう返しはした。しかしだった。
まだ不満な顔でだ。主の周りにいるのだった。
そしてだ。道三の隣にいる熊の様な髭の異様なまでに大きな男がだ。こう言ってきたのだった。
「父上」
「何じゃ、義龍」
「わしも来いというがだ」
「それがどうかしたのか」
「何故じゃ。何故わしまで尾張に出向く必要がある」
道三の嫡子である斉藤義龍はこう言ってだ。不満を露わにしていた。

第十四話　美濃の蝮その九

そのうえでだ。また言う彼だった。
「あのうつけと会う必要があるのか」
「久し振りに妹に会いたいとは思わぬのか」
「全く」
それはないという彼だった。
「思ったこともないわ」
「やれやれ、相変わらず仲が悪いのう」
「ふん、あ奴は昔からわしを馬鹿にしておる」
義龍は妹についてもだ。不満を見せていた。
そのうえでだ。帰蝶についても話した。
「何かと利発でじゃ。わしのことをな」
「それはそなたの気のせいだ」
道三は苦々しい顔になっている息子に対して話した。
「それは前から言っているな」
「そうは思えぬがな」
「しかしその通りだ。誰もそなたを馬鹿にしておらぬわ」
「父上もか」
きっとした顔になってだ。その道三を見てきたのだった。
「そう言えるのか」
「言えると言えばどうする」
「わしは父上の子ではないとも言われているがな」
「その話は気にするな」
顔は正面を向いたままだ。そのうえでの道三の今の言葉だった。
「全くな。気にするな」
「よく言えたものだな」
「言える。わかっているからだ」
「わしが父上の子ではないということがか」

道三は義龍の今の言葉にも顔を向けない。そのかわりだ。こう言うのだった。
「気にするな」
「またその言葉か」
「余計なことは考えなくていい」
「では余計なことを考えるとだ」
「何だ、それは」
「あのうつけに会いにわざわざ尾張とはな」
義龍はこのことにも忌々しげに話した。何かと彼にとって嫌な感情が常にその中に渦巻いているようである。そうした感じの言葉だった。
「尾張のうつけとな」
「うつけと思うか」
「それ以外の何だというのだ」
「さてな、若しかするとだ」
道三はだ。ここでも正面を見ながら話すのだった。
「うつけではなくだ」
「何だというのだ」
「大うつけかもな」
それだというのである。
「若しやな」
「大うつけなら余計に会う必要もないわ」
義龍は父の言葉にさらに忌々しげな口調になった。
「どうしてまた。物好きな」
「信玄や謙信も大うつけだったぞ」
道三は今度は彼等の名前を出してきた。
「違うか」
「では尾張のうつけもそれだというのか」
「かも知れぬ。まあ会ってみればわかる」
「わかるものか」

「人は会ってみぬとわからぬぞ」
「会わずともおおよその噂でわかるか」
「いや、わからぬ」
我が子にだ。今度は強く述べた道三だった。
「会ってもだ」
「会ってもか」
「それでも容易にわからぬ」
そういうものだというのである。
「中々な」
「人はそんなに難しいものなのか」
「難しいぞ。それがわからぬうちは駄目だ」
「そういえば殿」
ここでだ。周りの家臣の一人が道三に声をかけてきた。
「聞いた話によるとです」
「その大うつけのことじゃな」
「何でも多くの者をその下に集めているようですな」
「そうだな。かなりだというな」
「尾張の者達だけでなく」
それだけでなくというのだ。

第十四話　美濃の蝮その十

「他の国の者達もらしいな」
「伊勢やそうしたところからも集めてきております」
「何でもそうした者まで重く用いているというが」
「一体どうした者なのでしょうか」
この家臣は信長についてさらに話すのだった。
「織田信長というのは」
「それはこれからわかる」
「会ってからですか」
「そうだ。だからこうして行くのだ」
「では殿」
明智もいた。彼が道三に言ってきたのだ。
「若しもです」
「どうした、十兵衛」
「織田殿が大うつけだったならどうされますか」
「その場合はか」
「はい、その場合はどうされますか」
鋭い目になってだ。道三に問う明智だった。
「その場合はです」
「その場合は少し考えがある」
「お考えがですか」
「そうじゃ、ある」
明智にもだ。こう答えるのだった。
そしてだった。道三はここでその明智を見てだ。彼に声をかけた。
「しかし十兵衛よ」
「何でしょうか」
「そなたまたどうして今はここに来ておるのじゃ」
問うのはこのことだった。

「確かにかつては斉藤家にいたが今では幕府におるではないか」
「はい、その通りです」
「それでどうしてここにおるのじゃ」
また明智に対して問うた。
「公方様から何か言われたのか」
「それはその通りですが」
「しかしというのか」
「はい、その織田殿です」
彼が言うのは信長のことだった。
「公方様も興味を持っておられます」
「そうなのか。尾張の統一のことがか」
「都にも響いておりますので」
「ふむ。して公方様はあの者のことをどう見ておられるのじゃ」
「気に入っておられるようです」
明智の言葉は周りにとっては以外だった。それを聞いて皆怪訝な顔になるのがその証拠だった。
「どうやら」
「ほう、そうなのか」
ここでだ。道三はその足利将軍のことも思い出した。彼はだ。
「あの公方様もな」
「そうですな、あの方もかなり」
「変わっておられますから」
「左様ですな」
明智の他の者達がこう話すのだった。
「公方様でありながら自ら剣を持たれますし」
「それも天下に轟く腕です」
「まさか公方様御自らそこまでされるとは」
「風変わりにも程があるかと」
現在の将軍である足利義輝は剣豪で知られていた。そしてそれと共に数多くの名剣を集めている。このことでも知られているのであ

る。
　天下ではこの将軍はかなりの変わり者と言われている。それは将軍でありながらそこまで剣にのめり込んでいるからだ。だからである。
「その方があのうつけをですか」
「興味を持っておられるとなると」
「これは」
「ふん、変わり者同士だな」
　義龍は面白くなさそうにこう述べた。
「だからだな」
「確かにそうよのう」
　道三もだった。その二人がそれであるのは認めた。そのうえでの今の言葉だった。
「わしの娘婿もあの公方様も普通ではないのう」
「ですが」
　ここでだ。明智がまた言ってきた。
「公方様は決してです」
「暗愚ではあられぬか」
「むしろかなり聡明であられます」
　そうだというのである。

第十四話　美濃の蝮その十一

「弟殿の義秋様はいささか謀りを好まれますが」
「ふむ。聡明なのか」
「今の幕府におられるのが無念でなりません」
明智の言葉には辛いものまで見られた。
「かつての幕府ならば。より多くのことをされるのですが」
「仕方ないことじゃな」
道三はこのことには素っ気無く返した。
「今の幕府ではのう。何もできはせぬ」
「はい」
明智は道三のその言葉に仕方ないといった面持ちで頷いた。
「そのことが。これでは」
「天下は乱れるがままになるな」
「三好は信用できません」
明智は近畿を掌握するその家のことも話に出した。
「とりわけ松永はです」
「松永久秀だったな」
「はい、あの者はとりわけです」
「わしも言われるがあの者はさらにじゃったな」
道三は考える顔になってだ。述べるのだった。
「出自がはっきりせぬな」
「どういう者かわかりません」
明智もそうだと話すのだった。
「ですがそれでもです」
「その才はか」
「恐ろしいものです。戦においてもです」
まずは戦から話すのだった。
「謀により多くの勝ちを手に入れております」

「謀か」
「その謀はまさに蠍の如し」
「毒があるのじゃな」
「それもかなり強いものが」
「左様か。してじゃ」
道三は明智からその松永という男のことをさらに話すのだった。
「それで終わりではないな」
「政もできます。また多くの者を陥れてきてもおります」
「して三好の家の中で頭角を現しておるのじゃな」
「今では主家を凌がんばかりです」
そこまでだというのだ。
「大和の信貴山において拠を構えです」
「そこから。蠢いておるのか」
「あの者が今最も油断なりません」
明智の言葉は実際に危険なものが今目の前にあるような。そうしたものになっていた。
「どうにかしなければ」
「幕府におっても気の休まる間もないか」
「早くこの世を平穏にしたいのですが」
「それにあの大うつけが役立つか」
「公方様はとにかく織田殿を見てまいれと仰っていました」
「わかった。それではじゃ」
道三は明智の話をここまで聞いてだ。あらためてこう告げた。
「十兵衛よ」
「はい」
「共に見るのじゃ」
こう彼に告げたのである。
「その尾張の大うつけをな」
「わかりました」
明智は道三のその言葉に素直に頷いた。そうしてだった。

傍らにいる細川にだ。こう話すのだった。
「細川殿もそれで宜しいでござるか」
「はい」
細川は明智の言葉にすぐに頷いてきた。
「それがしも一度見てみたいと思っていましたので」
「それでこちらにでしたね」
「ですから」
こう明智に述べる彼だった。
「しかし。尾張というのは」
「尾張とは」
「いえ、ここは」
細川は尾張の周囲を見回していた。するとだ。
田畑はかなりのものだった。見渡す限り水田が続きそこで百姓達が平和に手入れをしている。畑でものどかに耕されている。細川はそれを見てこう言うのであった。
「これは」
「凄いものですな」
「はい、見事ですらあります」
細川はこうまで言うのだった。
「ここまで治めているとは」
「これは織田殿がしていることでしょうか」
明智は信長が治めているのではと思ったのだった。

第十四話　美濃の蝮その十二

「やはり」
「どうでしょうか、それは」
「一度調べてみる必要があるやも知れませぬな」
「そんな筈がない」
だがここで義龍が二人の言葉を否定した。
「あのうつけがここまでできるものか」
「では一体誰がなのでしょうか」
「ここまで治めているのは」
「家臣の誰かじゃ」
義龍はそれだというのである。
「織田の家臣は多いという。その者達がしておるのじゃ」
「ですがそれを命じているのはです」
「うつけというのか」
「そうではないでしょうか」
「ふん、まさかな」
あくまでだ。信長のことを認めようとしない義龍だった。
そのうえでだ。彼はまた言った。
「家臣の誰かが気を利かせてやっておるだけだ」
「それでここまでなのでしょうか」
細川はまた周囲のその水田や畑を見回した。そのうえでまた言うのだった。
「家臣達が勝手にやっているだけでここまで」
「何が言いたいのじゃ」
「これは家臣達が勝手にやってできるのではないのでは」
「ではうつけがだというのか」
「それがしはそう思います」
そうだと。細川は己の考えを述べた。

「違うでしょうか」
「違うな」
やはりこう言う義龍だった。
「どう考えてもあのうつけではないわ」
「ふむ」
しかしだった。ここで道三は考える顔になって細川の話を聞いていた。そしてそのうえで彼に顔を向けてそれで声をかけたのだった。
「細川殿はそう思われるな」
「そうですが。間違いでしょうか」
「だとするとだ」
道三は彼と話しながらだ。言うのだった。
「戦では瞬く間に尾張を一つにし」
「はい」
「そして政はこれだとするとだ」
そうならばだとだ。道三は一つのことを言った。
「もしや大うつけどころではないのかもな」
「といいますと」
「それもまた見たい」
こう家臣達に述べた。そしてだ。こんなことも言った。
「今ならまだ間に合うか」
「？何がですか」
「一体」
「美濃三人衆や半兵衛達も呼ぶか」
こう言ったのである。
「早馬で飛ばしてな」
「それでここに、ですか」
「そうじゃ。呼ぶとするか」
こう言ったのである。
「稲葉山からな。呼ぶか」
「それではです」

「今すぐにですね」
「そうするとしよう」
もう決めた。恐ろしいまでの即断だった。道三はその決断の早さでも知られているのだ。
「では行くがいい」
「はっ」
家臣の一人が応えた。そうしてだった。
後ろにいる一人の男に目配せした。するとだった。
男は姿を消した。道三はそれを見て静かに言った。
「これでよいな」
「そう思います」
「あの者達にも見せておきたい」
「織田信長をですね」
「もしやだ」
またこう言う彼だった。

第十四話　美濃の蝮その十三

「あの者、恐ろしい男かも知れぬ」
「だからなのですか」
「それで」
「だからこそじゃ。そしてじゃ」
言いながらだ。道三は前を見ていた。そして言うのだった。
「これからの美濃も考えておくか」
「美濃もですか」
「国のことも」
「わしは美濃一国で終わるつもりはない」
伊達に一代で国を奪い取ったわけではない。その野心は年老いた今も健在であった。そうした意味でも道三は油断のならない男だった。
そしてだ。目を鋭くさせてだ。彼は言った。
「そしてだ」
「そしてなのですね」
「尾張も」
「信濃は虎が居座った」
信玄のことだ。道三も彼のことはしかと見ていた。
「あれに勝つのは容易ではないぞ」
「そうですな。あの男は」
「とてもではありませんが」
「二十四将もいますし」
「だからだ。信濃はだ」
また言う道三だった。
「攻められはせぬ」
「近江も六角が強いですし」
「それならですね」

「これからは」
「まずはですね」
「そうだ、尾張に隙があらばだ」
こう言ってそれで目を光らせてだった。彼は言うのだった。
「この国をだ」
「その為にもですね」
「例え帰蝶様の婿であっても」
「隙があれば」
「それが戦国だ」
ここでの道三の言葉は醒めていた。何とでもないといった口調だった。
「そういうことだ」
「そうですね。それでは」
「織田殿に隙があれが」
「そこで」
「そういうことだ」
道三の言葉は醒めたままだった。そうしてだ。
そのまま馬を進めてだ。会見の場に赴くのだった。
それは信長も同じだ。彼は滝川から話を聞いていた。他の家臣達もいる。彼等も馬で道を進んでいた。
そこでだ。彼は話を聞きながら言うのであった。
「そうか、忍が稲葉山にか」
「左様です」
「では寺に着くまでにまた人が来るな」
「そう思われますか」
「おそらくは」
そしてだ。彼はその来る者も言ってみせた。
「美濃三人衆達だな」
「あの者達ですか」
「それにどうやら美濃で近頃義父殿に者がいたな」

こんなことも言うのだった。
「それだな」
「その者は。一体」
「名前は知らぬが」
それはというのだ。
「どうもかなりの切れ者らしいのじゃ」
「切れ者というと」
「軍師ですか」
「それですか」
「その様だな」
こう言う信長だった。
「どうやらな」
「そうした者があの蝮殿の下にいるとなると」
今言ったのは生駒だった。
「厄介というものではありませんな」
「そうだな。しかしだ」
ここで信長の言葉が変わった。そしてであった。こんなことを言った。
「それならばだ」
「それならば」
「どうされるというのですか」
「わしが義父殿より上になればいいことだ」
信長は不敵な笑みと共に言ったのだった。

第十四話　美濃の蝮その十四

「わしが義父殿を配下にすればいいのじゃ」
「まさか。それは」
「幾ら何でも」
家臣達の誰もが主の今の言葉には唖然となった。そして誰もがこう言うのだった。
「あの蝮殿を飼いならすというのはです」
「流石に無理では」
「あの御仁はそうした御仁でありません」
「寝首をかかれるやも知れません」
「ですからそれは」
「蝮は何じゃ」
ところがだった。信長は余裕のある顔でだ。家臣達に対して問うてきた。
「蝮は何じゃ」
「何だとは」
「どういう意味ですか」
「今の御言葉は」
「蝮と蛟どちらが上じゃ」
自身が言われていることをそのまま話に出したのだった。
「果たして。どちらがじゃ」
「それは言うまでもありません」
「そうです」
「その様なものは」
この問いにはだ。誰もがすぐに答えた。その返答は。
「蛟は龍になります」
「しかし蝮は蝮です」
「毒こそありますが」

「所詮龍には」
「そういうことよ。わしは蛟じゃ」
ここでだ。信長の笑みが確かなものになった。そのうえでの言葉だった。
「蝮に勝ってみせるとしよう」
「では戦ですか」
「そうされるのですか」
「戦？馬鹿を言え」
このことはすぐに否定した彼だった。
「今は会談に行くではないか」
「ですからその後で戦をされるのではないのですか」
「違うのですか、それは」
「そうはされないのですか」
「ははは、弓や槍を使う戦はせぬ」
大きく笑って言う信長だった。
「その様なものはじゃ」
「それはされぬというのですか」
「そうなのですか」
「そうじゃ。それはせぬ」
やはりこう言う彼だった。
「まあ。戦はするがな」
「というとつまりは」
「今からの会談がですか」
「それですか」
ここで彼等はわかった。ここでだった。
そのうえでだ。彼等はそれぞれ言うのだった。
「戦であるというのですね」
「蝮殿と」
「そういうことじゃ。何も刀や鉄砲ばかりが戦ではないぞ」
このことはだ。実によくわかっている信長だった。

「会うこともまたじゃ」
「戦ですね」
「確かに」
家臣達もその言葉に頷く。
「ではここは」
「この会うこともですか」
「真剣勝負ですね」
「まさに」
「命を賭けるぞ」
信長の顔が実際に鋭くなった。きっとだ。

第十四話　美濃の蝮その十五

「よいな」
「はい、それではです」
「我等もまた」
「命を賭しましょうぞ」
「言ったな」
信長は家臣達の今の言葉には満足した笑みを浮かべた。そうしてそのうえでその満足の理由も彼等に対して話すのであった。
「わしと共に。そうしてくれるのだな」
「二言はありません」
「それではいけませぬか」
「我等も。蝮殿と命のやり取りをすること」
「殿と共に」
見ればだ。誰もが同じ顔になっていた。普段は厳しい平手もである。留守役としてあえて残している信行以外の主だった者達が揃っている。その彼等が全て言うのであった。
「まあ命はです」
「そうだな」
山内と堀尾は飄々としながらもその目は真剣なものだった。
「賭ける時があるものですし」
「それが今ならば。喜んで」
「よし、それではだ」
信長は二人の言葉を受けてあらためて言った。その言葉はだ。
「芝居を打つぞ」
「芝居ですか」
「それをなのですか」
「皆傾け」
今度はこう告げた信長だった。

「よいな、傾け」
「傾けとは」
「まさか」
「あれですか」
「殿のあれを」
「それを皆でするのだ」
こう家臣達全てに言うのであった。
「慶次を手本としてじゃ」
「ははは、わしですか」
それを聞いた慶次はおかしそうに笑う。その右手を己の頭の後ろにやってだ。そのうえでの言葉であった。
「わしの様に傾けとは殿も仰いますな」
「それかわしじゃ。とにかく傾け」
そうしろというのだった。
「よいな」
「ううむ、傾くとなると」
「服ですか」
「それに髷も」
「変えよと」
「寺に入る時でよい」
信長は何時そうするかも話した。
「その時にじゃ。よいな」
「全く。何をされるかと思えば」
平手はここでも主の言葉に溜息から説教をはじめるのだった。
「まさかと思いますがそれで道三殿を驚かすというのではありますまいな」
「ははは、それはない」
「ありませぬか」
「義父殿はそうしたことで驚かれぬ方だ」
そうだとだ。信長は言うのだった。

「そしてじゃ。まあ義父殿はわかっておられても」
「違うというのですか」
「義父殿だけ来られてもおるまい」
信長はだ。ここでこう言うのであった。
「そうだな」
「はい、美濃の家臣の者達も来ております」
平手は彼等のことを話に出した。
「それは間違いありません」
「その者達をだ」
信長の目はまさに悪戯をする子供の目になっていた。その目での言葉だった。
「騙してみるのよ」
「蝮殿ではなくですか」
「あの者達をですか」
「そうだというのですね」
「国は一人でもつものではない」
信長はよくわかっていた。何故なら彼もまた己だけで尾張を治めているのではないからだ。多くの家臣達がいてこそだからだ。
それは美濃も同じだ。それがわかっていてだ。彼は言うのであった。
「だからだ。ここはだ」
「美濃の家臣達をですか」
「傾いてそのうえで」
「騙す」
「そうされますか」
「そうよ、騙すのだ」
まさにそれだというのであった。
「よいな、騙すぞ」
「蝮殿ではなくですか」
「家臣達を」

「義父殿も見る」
彼もだというのだった。
「わしを見るつもりでわしに見られておるのだ。面白いだろう」
「いささか意地の悪いことではありますな」
林通具が左手を己の口に当てて述べた。
「悪戯をしてそのうえで見定めるとは」
「だが面白かろう」
「はい、確かに」
森可成は信長のその考えをよしとした。そのうえで彼の意見を述べるのだった。
「今は騙される方が悪い世ですから」
「国と国の付き合いは騙し騙されるものよ」
信長はそのことについてはこう断言した。
「だからわしも騙すぞ」
「では我等も」
「それにです」
「我等の命を」
「騙すからには命懸けよ」
これもまた信長の考えだった。それを述べてみせるのだ。
「よいな、覚悟はしておるな」
「無論です。それでは」
「今より」
「戦に向かう」
これは戦だとそういうのだった。
「そして勝つぞ」
「勝ちますか」
「この戦いも」
「無論だ。戦うからには勝つ」
信長の言葉はここでは素っ気無い。しかしそれはであった。彼の確かな、そして強い決意もまた存在しているのがわかるものだった。

「必ずな」
「ではいざ蝮殿の御前に」
「参りましょう」
「その前に着替えておけ」
このことをまた言う信長だった。
「皆盛大にな」
「はっ、承知しております」
「それでは」
こうしてであった。彼等は道三との会見に赴くのだった。それはまさに戦であった。剣を持たない、だが激しい戦になるのであった。

第十四話　　完

２０１０・１０・２８

第十五話　異装その一

第十五話　異装

道三は今三人の男達と会っていた。まずは彼等であった。
厳しい顔の男がだ。まずは名乗った。
「稲葉通朝只今ここに」
「うむ」
続いて細面で口髭の男である。
「氏家直元」
「来たな」
三人目はだ。穏やかだが鋭い目を持つ男だった。
「安藤範俊」
「よし」
道三は彼等の顔を一人ずつ見ながら頷く。そうしてそのうえで言うのだった。
「美濃三人衆揃ったな」
「はい、ここに」
「参りました」
「急に呼んだのには訳がある」
道三は己の前に控える三人に話す。場所は小さな寺である。間も無く会見の場である正徳寺という場所にある寺だ。そこで三人と合流したのである。
その彼等にだ。道三は話すのだった。
「そなた達に見せたい者がおるのじゃ」
「尾張のですか」
「帰蝶様の婿殿」
「左様ですね」
「流石よのう。察しが早いな」
その通りだというのだった。

「そうよ、あの尾張の大うつけじゃ」
「その大うつけ殿に我等をですか」
「是非見せたいというのですね」
「だからこそ」
「来てもらった。無論」
既に己の前に控える大男にも告げた。
「不破光治」
「はい」
「御主にもだ」
その大男の名前も呼んでみせたのであった。彼もそれに応える。
「大うつけを見せたい」
「大うつけだからですか」
「そういうことじゃ。そなた達に見せたいのじゃ」
また言う道三であった。
「よいな」
「ううむ、大うつけ殿をと言われましても」
「これは」
「面妖な話でありますな」
三人衆はここでそれぞれ難しい顔になるのだった。そのうえでだった。自分達の主に対してその顔でこう問うのであった。そうせずにはいられなかった。
「我等に合わせたいとは」
「それがわかりません」
「何故でしょうか」
「知れたこと。大うつけだからよ」
それを理由だと言う道三だった。
「だからよ」
「大うつけだからですか」
「それで、なのですか」
「我等に」

「左様、そして」
道三はもう一人を見た。色は雪の様に白く女と見まごうばかりの整った美しい顔を持つ小姓を見てだ。その彼に対しても声をかけたのである。
「半兵衛」
「はい」
半兵衛と呼ばれた彼もまた主の言葉に応える。やはり女の様な声である。
「そなたにもじゃ」
「私にもですか」
「何故かわかるな」
「申し上げて宜しいでしょうか」
道三の言葉を受けて彼はこう主に申し出た。
「それは」
「いや、よい」
だが道三はそれを許さなかった。こう返すのだった。
「それはだ。よい」
「左様ですか」
「竹中重治」
今度はこの名前を呼んでみせる道三だった。
「そなたもまた見るのだ」
「織田信長殿を」
「孔明、いや張良か」
明が漢と呼ばれていた時代の伝説の軍師の名前までが出て来た。

第十五話　異装その二

「そこまでの智謀の御主にもだ」
「智謀か」
義龍も今の父の言葉には素直に顔を向けた。
「確かにな。半兵衛の頭は恐ろしいものがあるわ」
「そうですな。この者やがては」
「天下に名を轟かす軍師になりますな」
「必ず」
「左様、まさに美濃の宝よ」
道三は口々に言う家臣達に対して述べた。
「この者はな。それでだ」
「あの大うつけをですか」
「半兵衛に見せられるというのですか」
「それは」
「まあ見ておれ」
だが、だった。道三は自信に満ちた声でいぶかしむ家臣達に告げた。
「やがてわかる」
「やがてやがてというがだ」
義龍がまた父に対して言う。
「父上はまさかと思うがだ」
「まさかとは」
「あのうつけを高く買っておるのか？」
いぶかしむどころではなかった。明らかに疑う顔でだ。父を見てそのうえで言った言葉だった。
「あの大うつけを」
「大うつけだからこそだ」
「またそう言うがだ」

「まあ御主にはわからんかもな」
我が子に対しては冷たい言葉をかけたのだった。
「所詮はな」
「わかりたくもないわ」
息子もこう父に返す。
「そんなことはな」
「わからないというのか」
「そうよ」
まさにそうだと返す義龍だった。
「うつけのことなぞな」
「うつけとはじゃ」
ここでだ。道三はこうも言うのだった。
「わしも呼ばれていた名前じゃ」
「そうだったのか」
「そうじゃ。わしはかつてはそうだった」
こう言ってであった。彼はさらに話すのだった。
「面白いことよ」
「では尾張の織田殿も」
「そうだというのですか」
「では」
「いや、違う」
そうではないというのだった。道三はそれは否定した。
そのうえでだ。彼は言った。
「あの者。もしやだ」
「もしやですか」
「そうなのですか」
「そうだ。まあそれも見ていればわかることじゃ」
ここでも言葉を途中で止めてみせたのだった。
「おいおいじゃ」
「ふん、勿体ぶってくれるわ」

義龍は袖の下で腕を組んで言い捨てた。
「だからどうだというのじゃ」
「いや、これは」
「そうだな」
「もしや」
しかしであった。三人衆はここで顔を見合わせて話し合った。
「あの婿殿は」
「できるやもな」
「うつけではなく」
そしてだ。道三の顔を見る。そのうえでまた話すのだった。

第十五話　異装その三

「殿がそこまで仰るというのならな」
「それだけの者であるということ」
「そうなるな」
彼等は美濃の国人出身でありその実力だけでなく権勢もかなりのものだ。道三は彼自身のその力によって彼等を心服させているのである。
だからこそ彼等は道三という男をよく知っていた。その彼がここまで言うのならば、そう考えて当然のことであった。彼等にとってはだ。
そしてだ。不破もだ。密かに竹中に対して囁くのだった。
「のう、半兵衛」
「はい」
竹中も彼の言葉に応えて述べる。
「織田殿のことですね」
「どう思うか」
「私の聞くところ」
こう前置きしてからの言葉だった。道三には止められていたがおそらく不破とは気心の知れた仲なのだろう。彼は不破にこう話すのだった。
「まずその政はです」
「この尾張のか」
「見事です」
一言での評価だった。
「それはまさにです」
「見事か」
「尋常な政ではありません」
「そこまで凄いのか」

「ただ田畑を拡げ耕すだけではありません」
「町もか」
「そしてです」
その他にもだ。あるのだという。
「堤も万全で道まで整えております」
「そこまでなのか」
「はい、多くの家臣を使いこなしそこまでしています」
「ううむ、それは凄いな」
「しかも法は徹底させ罪ある者を決して許さず」
それもあるというのだ。
「民百姓は悪人に悩まされることもありません」
「そこまで聞けばだ」
「うつけには思えませぬか」
「わしとてそこまで愚かではないつもりだ」
これが不破の言葉だった。実際に彼は伊達に道三の重臣ではない。戦だけでなく政においてもそれなり以上の力を見せている。だからこそわかることだった。
「政は見事だ。これまでの道中でもそれはわかった」
「尾張に入られてからね」
「尾張の端だけだから確かなことは言えなかったがな」
それでもだというのだ。おおよそはわかっていたというのである。
「だが御主の今の話を聞いてだ」
「確信されましたか」
「その通りだ。そしてだ」
「戦ですね」
「尾張を一つにしたが」
不破は竹中とこのことも話すのだった。
「これもまた、だな」
「はい、容易にはです」
「できぬな」

「その通りです」
まさにそうだというのである。
「あれだけの時間で尾張を一つにするということはです」
「何でも織田の槍は相当長いらしいな」
不破は既にこのことを聞いていた。
「そうらしいな」
「それだけではなく、です」
「まだあるのか」
「鉄砲です」
竹中の目がここで光った。そのうえで言うのであった。
「織田殿は鉄砲を五百持っておられます」
「何っ、鉄砲を五百か」
「はい」
このこともだ。不破に話すのだった。

第十五話　異装その四

「その鉄砲を使われてです」
「鉄砲を五百とは。また金がかかったろうに」
「それでも織田殿は持たれています」
「そしてその五百の鉄砲をか」
「戦の場で使われてです」
「尾張を一つにしたか」
槍と鉄砲、不破はこの二つを心に刻んだのだった。
そのうえでだ。再度竹中に対して問うた。
「しかし尾張の兵はだ」
「弱いと言われるのですね」
「そうだ、尾張の兵は弱い」
兵の話もするのだった。
「今川も弱いというがだ。おそらく尾張の兵はだ」
「三好や北条、そして不破殿が仰ったその今川の兵とです」
「同じだけ弱いな」
「はい、弱いです」
竹中はこのこともよくわかっていたのだった。
「少なくとも美濃の兵よりは遥かにです」
「それはどうなのだ」
「これもです」
ここでまた言う竹中だった。
「織田殿はかなり鍛えておられるそうです」
「鍛えておるのか」
「しかも」
「しかも？」
「ただ鍛えているのではなく」
それだけではないというのだ。

「我々は百姓を足軽にしていますね」
「うむ、その通りだ」
これはどの国でも同じである。百姓の次男や三男を戦の時に駆り出しそのうえで槍を持たせているのである。それが足軽なのだ。
しかしだ。竹中はここでこう言うのだった。
「それがです」
「違うのか、尾張では」
「足軽はそのまま足軽です」
「百姓ではないのか」
「それとは分けられ。ただ戦をする為だけにいるのです」
「というとだ」
不破もその話を聞いてわかったのだった。
「あれか。刈り入れだからといってそれで帰るということはないのだな」
「そうです。その時も戦ができるのです。しかも」
「しかもか」
「常に鍛えられるのでそれなりに強くもあります」
「あの尾張の兵でもか」
「はい。ですから兵もです」
「それなりに強い」
不破もこれでわかった。
「そういうことか」
「はい、その通りです」
「まずいな、それは」
ここまで聞いてだった。不破の顔が曇った。
「では尾張は尋常ではない強さではないか」
「しかも兵は一万五千います」
「数も多いな」
「ですから。尋常な相手ではありませぬ」
「敵に回すと厄介だな」

「間違いなく先代よりも」
信秀のことである。彼にしても美濃にとっては厄介な相手であった。信長はその彼以上だというのだ。それが竹中の見たところである。
「殿もそれを御承知です」
「それで会談に赴くか」
「この会談」
また言う竹中だった。

第十五話　異装その五

「戦になります」
「戦か」
「殿と信長殿のです」
「話が戦になるとはな」
「いえ、話もまた戦です」
竹中の言葉は今度は鋭いものになった。
「国と国の運命を決めることもありますから」
「それでなのか」
「そうです。そしてその戦に勝つかどうかです」
「この会談で美濃の命運が決まるというのか」
不破はこのことには懐疑的だった。まさかそれはあるまいと思った。ただ会うだけのことだと。しかし竹中はだ。彼のところに来た三人衆にも話すのだった。
「はい、決まります」
「馬鹿な」
それをまず否定したのは稲葉だった。
「殿が娘婿殿に会われるだけだぞ」
「そう思われますか」
だが、だった。竹中はその稲葉の目を見た。そのうえで彼に問うたのだった。
「稲葉殿は本当にそう思われますか」
「見抜いておるか」
「とても。それだけとは思えませんので」
だからだと返すのだった。
「そして稲葉様もそれは当然」
「わかるわ。殿だからな」
「殿はただそれだけで人と会われはしません」

「うむ、その通りだ」
「だからこそです。殿も織田殿の器を計るというのでしょう」
「器か」
氏家が述べてきた。
「どうやらあの婿殿の器はだ」
「そうだな」
氏家の言葉に安藤が応える。
「わし等が思うにだ」
「殿と同じか」
「そうだな」
「いえ、若しかするとです」
しかし。竹中は言った。あえてであった。
「殿よりも」
「それ以上は言うでない」
安藤が彼のそれ以上の言葉をここでは止めた。
「殿が何も言われなくともだ」
「そうだな。誰が聞いているかわからぬ」
氏家もだった。竹中に告げた。
「何があってもおかしくはないぞ」
「申し訳ありません」
「まあそれはこれからよ」
安藤は竹中を宥めるようにして述べた。
「これから寺でわかることよ」
「さて、織田信長か」
稲葉がまた言う。
「どうも青が好きなようだな」
「そうだな」
不破も稲葉の言葉に頷いてみせた。
「軍は全て青らしいな」
「鎧も陣笠も旗も何もかもな」

「それは面白いな」
「全くだ」
氏家と安藤もこのことには興味を覚えていたのだ。それでこの話にも加わる。
「武田が赤で上杉が黒でな」
「北条が白で毛利が緑」
「そして織田が青か」
「軍が色によって分けられているな」
「そうですね」
竹中もその言葉に応える。また話に入るのだった。
「青は木で」
「五行思想か」
「それだな」
「他の色も入っているがな」
「はい。色はです」
竹中はこうしたことにも詳しかった。その色のことについても話すのだった。

第十五話　異装その六

「力でもありますから」
「それぞれのか」
「火や水のだな」
「そうだな」
「はい、西洋の伴天連の話では虹もまた光です」
今度は虹のことも話すのだった。
「光もまた力ですから」
「それぞれの色の家はか」
「力か」
「そう見ています」
竹中は述べたのだった。
「私はですが」
「御主が言うならだ」
「そうだな」
「そうであるのだろうな」
「やはりな」
三人衆だけでなく不破も述べたのだった。こうだ。
「しかし。どの家もそんなことは考えていないがな」
「それぞれ好きな色を選んでいるだけだが」
「それでもか」
「それが何かになるのか」
「そうではないかと」
竹中はその偶然の中にもだ。あるものを見ていたのだ。
そしてだ。また五行の話をした。
「青、赤、白、黒、そして木はです」
「この世のそれぞれの力だったな」
「それだったな」

「そのまま青が木、赤が火、白が金、黒が水になり」
こう話していく彼だった。
「黄色が土です」
「そうだったな」
「方角に季節も表わし」
「そうしてだったな」
「その通りです。次に虹ですが」
今度は虹の話をするのであった。
「赤、橙、黄、緑、青、藍、紫です」
「むっ、それはだ」
氏家がここまで聞いて言った。
「全てあるな」
「そうですね。赤がその武田です」
まずはそこだった。
「橙が島津です」
「そうだな」
「そして黄は今は今川の下にありますが松平で」
「緑が毛利でな」
「青が織田だ」
この二つは既に述べられていてだ。わかっていることだった。
そしてだ。残る二つだった。
「藍は近江の浅井だな」
「そして紫はだ」
「長宗我部」
「四国のだったな」
「これで全て揃います」
竹中の言葉はまた強くなった。
「色がです」
「五行に虹がか」
「全てだな」

「これで」
「それが何を意味するのかはです」
だが、だった。竹中の言葉が曇った。
「私にはわかりません」
「そこまではか」
「わからないか」
「まだそこまではか」
「それぞれの色はやがては潰し合うだけですし」
竹中はこの現実も話した。天下を一つにする家は一つだ。それならば他の家はである。これは最早自明の理であるとも言えた。

第十五話　異装その七

「何故全て揃うかとです」
「わからないのか」
「それはか」
「色を司る家が残るとも限りません」
このことも話す竹中だった。
「三好も朝倉も。そして我が斉藤もです」
「強いからな」
「色を持っていなくてもだ」
「ですからわかりません」
竹中は首を傾げさえさせた。
「それはです」
「どちらにしろそれぞれの家に色があるのは面白いな」
「そうだな」
「それはな」
「確かにな」
三人衆と不破はそれはいいとしたのだった。例え偶然にしてもだ。
「そして織田は青か」
「その青がだ」
「どうなっていくかだな」
「それを見ましょう」
竹中は落ち着いていた。それは最初から変わらないが今は特にであった。
斉藤方でも見る者は見ていた。そうしてだ。
当の信長はだ。己の前に控える家臣達の姿を見てだ。満足した顔であった。彼もいつもの茶筅髷に派手な上着の右半分を肩から脱いでだ。半袴に縄の帯にとだ。傾いた格好だった。
その主の姿を見てだ。能の翁の仮面と格好の平手が言うのだった。

「全く。殿は」
「爺、よく似合っておるぞ」
「好きでしておるのではありません」
怒った声で返す平手だった。無論他の者もそれぞれ奇抜な格好である。
「どうしてそう素っ頓狂なことを為さるのか」
「ここまでしてこそじゃ」
「そう仰るのですね」
「その通りじゃ。先程も申しておるだろうが」
「それでもです」
平手のいつもの小言は変わらない。
「殿の悪戯好きは。相変わらずですな」
「茶も好きだがそれも好きじゃ」
信長は例によって悪びれない。
「傾くのもな」
「それに能や狂言も」
「そうですな」
他の家臣達も言ってきた。見ればそれぞれその姿である。どう見ても大名とその家臣達には見えない。全くであった。
そしてだ。赤鬼の仮面の柴田が言ってきた。
「それがしは殿にどうしてもこれだと言われましたが」
「他にないでござろう」
「うむ、権六殿はやはり」
「鬼でござるからな」
「戦場の鬼でござる」
誰もが言うことであった。
「権六殿が赤鬼ならばです」
「佐久間殿が青鬼で」
その佐久間はだ。実際に青鬼であった。
「どちらも鬼ですな」

「実に相応しい」
「もっとも」
ここで皆笑いながら言うのだった。
「実際に一番怖いのは平手殿ですが」
「全くその剣幕たるや殿も敵わない」
「恐ろしい方です」
「わしはじゃ」
そう言われてだ。平手はバツの悪い顔になった。そのうえでの返答だった。
「皆の為を思って言っておるのじゃがな」
「厳し過ぎますから」
「とても」
「それは皆のことを考えてじゃ」
翁の面を付けたままだがそれでも表情は誰もがよくわかるものだった。
「わしはあえてじゃ」
「それでも厳しくて」
「まさに鬼です」
「織田家の闇魔大王ですな」
「全くです」
「誰が闇魔じゃ」
平手はその言葉にも反応する。耳はかなりいいのだ。
「わしの何処が闇魔じゃ」
「いや、一理あるな」
だがだった。ここで信長が言う。

第十五話　異装その八

「それは」
「殿までそう仰るのですか」
「爺は尾張で一番怖い人間ぞ」
信長の言葉は変わらない。
「閻魔に相応しいわ」
「全く。悪ふざけにも程があります」
「ははは、そう言うか」
「左様です。しかしこの格好で出てですか」
「そうじゃ。ただしじゃ」
ここでまた言う信長だった。
「一つ肝心なことがあるぞ」
「足軽達ですな」
「あの者達については」
「あの長柄槍を持たせる」
まずはそれだというのだ。
「そして鉄砲もじゃ」
「それもですね」
「持たせますか」
「無論鎧に陣笠、旗は青じゃ」
これを言うのも忘れない。
「それは忘れるでないぞ」
「はっ、わかっております」
「それにつきましては」
家臣達はそれぞれ彼の言葉に応えた。そうしてだった。
彼等も寺に向かう。それぞれ奇抜な格好をしたうえでだ。そうしてその姿を見ようとだ。道三はこんなことを言い出したのである。
「さて、それではだ」

「それではですか」
「何をされますか」
「寺に入る前に見ておこう」
こんなことを言い出したのである。
「少しな」
「といいますと」
「どうされるのですか」
「一体」
「織田の者達が通る道の小屋の中に入る」
信長がこう言うとだった。周りも言うのであった。
「小屋の中からですか」
「見るというのですね」
「つまりは」
「そうよ。そうしてみる」
また言う道三だった。
「誰か共にする者はおるか」
「わしはいい」
最初に言ったのは義龍だった。見るからに不機嫌な顔での言葉だった。
「もうあの男のことはわかっておるわ」
「そなたはいいのじゃな」
「行くものか」
声にも不機嫌なものが出ていた。
「そんな下らぬものにな」
「まあよい」
道三はその我が子を特に咎めることも止めることもしなかった。
どうでもいいといった口調でだ。こう我が子に対して告げるだけであった。
義龍はそのまま寺に向かう。しかしだった。
美濃三人衆に不破、それと竹中が残った。その他にはだった。

明智に細川もだった。この二人も残ったのだった。
そしてだ。明智が言うのであった。
「私達も宜しいでしょうか」
「御供させて欲しいのですが」
細川も言ってきた。
「その。織田殿をです」
「見たいのですが」
「ふむ」
道三はその彼等の申し出を受けてだ。まずは考える目を見せた。
そうしてそのうえで再び口を開いてその二人にこう言ったのである。
「そなた達も感じておるな」
「おそらく道三様と同じことをです」
「そうかと」
「そうじゃな。では共に見るがいい」
微笑んでそれを許したのだった。
「ではな」
「有り難き御言葉、それでは」
「是非共」
「どうやらそなた達もまた」
道三はまた考える顔になり述べた。

第十五話　異装その九

「我が婿に感じておるようじゃな」
「少なくともこれだけの政と瞬く間の尾張統一はです」
「尋常なものではありません」
それを既に見ての言葉であった。
「ですから。余計にです」
「見させてもらいます」
「織田信長、尾張の蛟龍ですが」
竹中も言う。
「その器量、見極められるでしょうか」
「そなたも言うか」
「はい」
主に対しても答えた彼だった。
「どこまで大きいのかわからなくなるかも知れません」
「わかろうと思えばだ」
「その時は」
「そなたは思うように動け」
これが道三の彼への言葉だった。
「よいな」
「思うようにとは」
「またわかる」
ここでもだった。多くは言わない彼だった。
「その時にな」
「左様ですか」
「さて、入るぞ」
「はい」
彼等はその小屋の中に入った。そのうえで信長達を待った。やがてだ。

五百人程の青い鎧の者達が来た。
足軽達だった。鎧だけでなく陣笠も槍の柄も旗も何もかもが青である。家門や永楽通貨のところは白になっていてそれが目立つようになっている。
その青を見てだ。まずは細川が言った。
「噂には聞いていたが」
「そうですな」
明智が彼の言葉に応える。
「本当に青いとは」
「しかもその青がです」
「ええ。実に奇麗です」
その青にだ。明智は自然と引き込まれるものを感じていたのだった。そのうえでの言葉だった。
そしてだ。彼はこう言うのであった。
「この青はです」
「この青は？」
「まさに五行の青です」
それだというのである。
「まさにそれです」
「そう仰いますか」
「はい、織田殿は青ですね」
明智は確かな声で言った。
「その青、見事です」
「それにです」
竹中がその明智に言ってきた。
「明智殿もお気付きですね」
「無論」
すぐにこうその竹中に答えたのだった。
「鎧もいい」
「はい、そして槍もです」

「長いな」
「三間半はあります」
そこまでの長さだったのである。その槍はだ。
「あれだけ長い槍はです」
「ううむ、見たことがない」
明智の言葉はここでは唸るものだった。
「流石にな」
「明智殿もあそこまでの長さはですか」
「ない」
こう答えたのだった。
「美濃の槍も長いがな」
「思い切ったことをするものだ」
「全くだ」
「あそこまで長くするか」
三人衆もその槍を見てそれぞれ言うのだった。
「しかし。あれだけ長いとな」
「中々近付けぬ」
「それに先に打たれてしまうわ」
その長い槍がどういった効果を持つのかもわかったのである。信長の卓見にだ。彼等もまた気付いたのであった。彼等もそれだけのものを持っているのだ。
そして不破はだ。あるものを見て言った。
「槍だけではないぞ」
「鉄砲ですね」
「それでござる」
こう明智に答えたのである。

第十五話　異装その十

「鉄砲の数は」
「五百だな」
道三が言った。
「多いな」
「鉄砲を五百も」
「そこまで持っているとは」
「この話真であったか」
三人衆がここでまた言う。
「槍と鉄砲を組み合わせて戦うのだな」
「それが織田の戦か」
「かなり厄介だな」
「どうやらこれは」
道三の目は鋭い。その鋭い目での言葉だった。
「父親以上の戦上手だな」
「あの弾正殿よりもですね」
「そうだ、それよりもさらに手強いな」
竹中に対して述べながらもその軍勢を見ている道三だった。
「戦うとなればだ」
「覚悟が必要ですね」
「間違いなくな」
こう話をしながら軍勢を見ていた。そしてだ。
やがて家臣達が見えてきた。どの者もだった。
「傾いておるのう」
「全くだ」
「そこまでするか」
「派手にも程があるぞ」
三人衆と不破がまず呆れた声を出した。

「赤鬼に青鬼もいるな」
「それに翁か」
「あれは能のだな」
「そうだな」
そのそれぞれの姿を見ての話だ。
「それにあれは」
「何だ、随分でかい男だな」
「しかも目立つな」
「本当にな」
慶次もいる。赤に黄とだ。呆れるばかり派手な服を着ている。それに大きな煙管まで持っている。その煙管はどうやら鉄のものだ。
しかもだ。彼はその手にやたらと大きな朱槍を持っている。それもまた実に目立つものだった。
「傾奇者の中でもあの人は」
「相当の者だな」
細川が竹中の言葉に応えた。
「あそこまでいくとな」
「はい、それにです」
「腕も立つか」
「あの人の腕、尋常なものではありません」
竹中はこのことも見抜いていた。
「どうやら」
「そうだな。あの者はな」
細川もだ。眼力はある。それで慶次のその腕に気付いたのだった。
「強いな」
「恐ろしいまでに」
「ただ傾いているだけではありませんね」
「そうだな、それは間違いない」
皆慶次のその強さも見抜いた。そしてだ。彼のこのことも見抜いた。

「ただ、な」
「兵は率いる者ではないな」
「そうだな」
まずは三人衆が言った。
「そうした者ではないな」
「ただの武辺者だな」
「元々興味がないようだが」
「その様だな」
不破も同じ見方だった。
「あの者はな」
「しかしです」
ところがである。明智がここでまた言うのであった。
「織田殿の家臣はどなたも傑物の様ですな」
「十兵衛、わかるか」
「はい」
道三の言葉にも答える。そのうえでまた言う。
「雰囲気といいますか。その放つもので」
「感じるか」
「どなたも秀でておられますな」
「そうだな。我が婿は人を見る目があるようだ」
「特にです」
明智は特に見ている者がいた。それは。

第十五話　異装その十一

猿の面を斜めに被って顔を出している男だ。毛皮を着てそのまま猿になりきっている。仕草も猿そのままにしているその男を見ていたのだ。

そのうえでだ。彼は言った。

「あの猿面冠者ですが」

「あの猿そっくりの者か」

「あの者、身体は小さいですが」

「腕は立つか」

「いえ、おそらく刀も槍も不得手です」

そのことはすぐに見抜いていたことだった。

「弓も鉄砲も間違いなく」

「下手だな」

「武芸そのものは不得手でしょう」

「そうですね」

竹中も明智のその言葉に頷く。

「実際馬に乗っていますがそれも」

「不自然だな」

不破は一言だった。

「どう見ても慣れてはおらんな」

「はい、間違いなく」

「武芸はできませぬ」

また言う明智であった。

「しかし。武芸だけではありませぬから」

「他のことがだな」

「かなりのものかと」

道三にも話す。

「あの者、これからかなりの者になるでしょう」

「その様な男も婿殿のところにはいるか」
「あくまで。家臣の一人として」
「ふふふ、面白いのう」
ここで楽しげに笑った道三だった。
「それではだ」
「はい」
「それでは」
「いよいよその婿殿だ」
他ならぬ信長について言う。
「来るぞ」
「そうですね。その織田殿ですが」
竹中が考える顔になって主に話す。
「どうした格好で来られるかは」
「わからぬか」
「どうも。読めませぬ」
こう言うのである。
「それについてはです」
「御主でもそうなのか」
「何か突拍子もないことは考えておられるでしょう」
それはわかるというのだ。
「ですが。具体的に何をしてこられるかといいますと」
「そうであろうな」
道三は竹中の言葉にまたしても楽しげな笑みを浮かべるのだった。
「それは」
「不思議ではありませんか」
「そうだ、不思議ではない」
「それはまた何故」
「これは知恵や知識でわかるものではない」
竹中のその深い智に満ちた目を見て話す。
「そうしたものではないのだ」

「といいますと」
「感じるものだ」
「感じるものですか」
「そうだ、それでわかるものだ」
その織田の家臣達の後ろを見ながらの言葉だった。
「それでな」
「感じる、ですか」
「知識や知恵も必要だがそれに加えてだ」
「感じることなのですか」
「それでわかる。我が婿殿がどういった格好で来るかはな。そして」
さらに言った。
「何を考えているのかもだ」
「それもですか」
「感じてわかるものなのだ」
「ううむ、それは」
「それも生きていればわかる」
まだ若い竹中を見て。道三は彼に告げたのだった。

第十五話　異装その十二

「経験を積めばだ」
「それによってですか」
「戦でも政でもだ。わかるものなのだ」
「では殿と同じく」
竹中は道三の今の言葉からだ。信長も見てそれで言う。
「織田殿も」
「そうよ、おそらくな」
「左様ですか」
「では。見るか」
いよいよだった。それでだ。
誰もが姿勢を正す。しかし道三だけはだ。
くつろいだ面持ちでだ。婿を待つのだった。そしてこうも言うのだった。
「帰蝶もだ」
「はい」
「帰蝶様が一体」
「どうやら婿殿に惚れたようだしな」
「あの帰蝶様がのう」
「気の強い方だが」
「気は確かに強い」
父である道三の言葉だ。
「しかし帰蝶はだ。あれで認めた相手にはだ」
「惚れられる」
「そうだというのですね」
「左様、それが帰蝶よ」
こう言うのである。
「認めればだがな。あれは気が強いだけでなく鼻っ柱も強いからの

う」
「一体どうした方に嫁がれるかと思ってましたが」
「尾張の織田殿でしたから」
「まさかと思いましたが」
「帰蝶様の婿に相応しい方のようですな」
「うむ」
三人衆と不破の言葉に頷く道三だった。
「実にな。して十兵衛」
「はい」
「そなた相変わらず妻は一人か」
「はい、そのままです」
それは変わらないというのだ。この時代少し地位があれば誰でも側室は持っていた。しかし明智はそうではないというのである。
「どうも。側室はです」
「好かぬか」
「一人いれば充分です」
そうであるというのだ。
「私には過ぎた妻ですし」
「だからか。それでよいのか」
「私だけでなく母のこともよく見てくれます」
「相変わらず親孝行なのだな」
「母はこの世で一人だけです」
明智は己の母については強く言うのであった。
「ですから。どうしても」
「よいことだ。親は大事にせよ」
「有り難き御言葉」
「この時代、親といえど中々大事にはできぬ」
道三はここで顔を曇らせた。
「だから余計にだ」
「大事にせよと仰るのですね」

「そういうことだ。そしてだ」
「そして？」
「細川殿もそうだが」
彼も見ての今の道三の言葉だった。
「幕府にいるよりもだ」
「はい」
「それよりもと仰いますか」
「他の家に仕えるべきではないのか」
こう言うのであった。二人を見ながらだ。
「今の公方様はいいにしてもだ」
「最早幕府には、というのですね」
「力は」
「力を取り戻すのは最早無理だ」
道三は言い切った。幕府にもう力はないとだ。
「朝廷と違いだ。盛り立ててもそれは至高のものではないからな」
「限度がある」
「そう仰いますか」
「そうだ」
まさにその通りだというのだ。
「だから他の家も考えておけ」
「そのことですが」
明智がここで言う。

第十五話　異装その十三

「私はこれまで斉藤家にいたこともありますし」
「朝倉のところにもいたな」
「はい。そして今は幕府にいますが」
「公方様にはよくしてもらっているか」
「素晴しい方です」
こう言うのである。
「非常に。ですから」
「義輝様だったな」
道三は今の将軍の名前を出した。
「文もさることながら武芸がだったな」
「剣では誰にも負けられぬ方です」
「それはいいことだな。しかしだ」
「しかしですか」
「公方様になれば己が剣を持たれることはないのだ」
これはその通りだった。大将が自ら剣を取るような戦はもう負け戦である。道三はこのことをよくわかっていた。それで言うのである。
「御趣味にしてもだ」
「度が過ぎているというのですね」
「話は聞いておる。腕だけでなくだ」
剣の腕だけではないというのである。義輝の剣は。
「天下の名剣を集めておるそうだな」
「何分お好きですので」
「それで」
「そこまでする必要はない」
また言う道三だった。
「そんなことをしても。いざとなれば逃げるしかない」

「では水練に馬術ですね」
「その二つですね」
「そういうことよ。この二つこそが大事なのだ」
こう言うとであった。竹中がまた信長のことを言うのだった。
「そういえば織田殿はどちらもかなりされているとか」
「それでいいのだ」
「では織田殿はそこでもですか」
「わかっておる」
信長についてはこう言うのであった。
「実にな」
「さて、その婿殿がです」
「遂に来られましたぞ」
「いよいよですな」
三人衆が言う。そしてだった。
彼等は信長を見たのだった。
信長は馬上で茶筅髷に上着を右だけ脱いでだ。そして縄の帯に大きな剣、それに半袴といった格好である。その格好で今寺に向かっているのだった。
その彼を見てだ。道三は言った。
「ふむ、これはだ」
「はい」
「何かありますか」
「面白いことになるな」
竹中達に楽しげな笑みで返すのだった。
「実にな」
「面白いですか」
「そうよ。では寺に向かうぞ」
道三は窓の方に踵を返した。
「よいな」
「では今より」

「すぐに戻りましょう」
「そうしてですね」
「そうだ。さて」
ここでだ。道三はまた笑うのだった。その笑みはというと。
何処かこれから悪戯をするような。子供の如き笑みであった。その笑みでの言葉だった。
「面白いわ、全くな」
「婿殿がですか」
「そうだというのですね」
「ここは」
「その通りよ。見ておるのだ」
こう彼等に告げるのだった。
「我が婿をな。そして」
「そして？」
「まだ何かありますか」
「わしの見たものが正しければだ」
こう前置きしての言葉だった。
「そなた達は皆婿殿の前に集うことになるな」
「といいますとそれは」
「まさかと思いますが」
「美濃がですか」
「そうなるやもな」
道三は笑っていた。明らかにだ。そのうえで今は寺に向かうのだった。

第十五話　異装その十四

そして信長はだ。傍らにいる丹羽に告げていた。丹羽もまた彼にしては珍しく傾いた格好をしている。青と紫のかなり派手な服である。

その彼にだ。信長は言うのであった。

「五郎左よ」

「何でしょうか」

「服は持って来ておるな」

「略装ですか」

「わかって言っておるであろう」

「いえいえ、滅相もない」

面白そうに笑ってだ。丹羽は言葉を返した。

「それは」

「真にそう言えるか？」

「今はそうでないとならぬかと」

これが丹羽の返答だった。

「違いますか、それは」

「言うのう、御主も」

「何かと慣れてきましたので」

だからだというのである。

「それは」

「慣れてきたか」

「はい」

笑みはそのままで信長に答える。

「殿と一緒にいますと」

「まあそなたはじゃ」

「それがしは？」

「何かと役に立つ男じゃ」

これが信長の丹羽への言葉だった。そしてだ。こう言うのであった。
「米じゃな」
「米ですか」
「そなたは米じゃ」
それだというのだ。
「米と同じじゃ。常に必要じゃ」
「有り難き御言葉」
「権六は掛かれで牛助は退きじゃ」
戦で主に働く二人はそれだというのだ。
「二郎は海老じゃな」
「それがしは海老ですか」
「海におるからよ」
海賊の姿になっている九鬼に対してだった。九鬼もまたいるのだ。
「まあさしづめそういうところじゃ」
「だからですか」
「新五郎と六郎は味噌かのう」
林兄弟は味噌であった。
「やはり必要じゃな」
「有り難き御言葉」
「何か食われてしまいそうですが」
この二人も仮装している。どちらもあえて白拍子の服になってだ。馬の上にいるのである。
「してそれは赤い味噌ですな」
「やはり」
「尾張の味噌はそれしかなかろう」
信長は二人に対して笑いながら話す。
「他の者達も麦だったり大根だったり鮒だったりじゃな」
「ではわしは鯉ですな」
前田が笑いながら言う。

「まさに」
「又左、そなたは鯉ではない」
「では何でござるか」
「大根よ」
それだというのだ。
「無闇にでかい。おまけに妙に癖がある」
「おやおや、何か妙なものでござるな」
「しかしわしは大根は好きじゃ。覚えておけ」
「ははは、それは何よりでござる」
「あと木綿はじゃ」
今度は木下を見る。そしてだった。
「猿かのう」
「おや、わしは木綿ですか」
「まあそんなところじゃ」
木下が振り向くと実際に彼にも告げた。
「木綿じゃな」
「左様ですか。では木綿の様に」
木下も主の言葉に応えて馬の上で何とか跳ねながら言う。やはり馬に乗るのにまだ慣れていない。それでもその軽い身体を巧みに動かしてだった。
「何でも役に立ってみせましょうぞ」
「猿、調子に乗ってだ」
その彼にだ。柴田が言ってきた。

第十五話　異装その十五

「馬から落ちるでないぞ」
「むむっ、猿も木から落ちるでござるな」
「馬から落ちる猿はいないわ」
こう言う柴田だった。
「だからよ。落ちるでないぞ」
「わかっております、それは」
「ならばよいがな。しかしじゃ」
「しかし？」
「そなた妻はおるのか」
柴田は木下に対して問うた。
「それはどうなのじゃ」
「残念ですが」
木下はここから答えたのだった。
「おりませぬ」
「ふむ、そうなのか」
「誰かおればいいのですが」
「それならじゃ」
横から前田が言ってきた。彼はいつもの傾いた格好である。
「おい猿」
「むっ、これは又左殿」
「わしが一人紹介してやろうか」
こう彼に言ってくるのだった。
「いい娘がおるぞ」
「左様でござるか」
「わしもこの前嫁を迎えたのだがな」
何気なくどころか露骨に自分のことも話す。
「いや、これの知り合いでな」

「確か又左殿の奥方といえば」
「むっ、知っておるのか」
「おまつ殿でござるな」
木下はこの名前を出してきたのだった。
「確か」
「その通りじゃ。御主も知っておるか」
「まだ若かったのでは？」
「十二じゃ」
前田は笑いながら話す。
「どうじゃ、若かろう」
「又左殿とお知り合いだったのでしたな」
「よく知っておるな」
「話を聞いていますので」
それで知っているというのである。
「それで」
「御主まさか耳は達者か」
「いえ、そうではないですが」
謙遜であった。実際のところ木下の耳はかなりいい。しかしそれはあえて隠して前田との話を潤滑に進めているというわけなのだ。
「それでもです」
「知っておるのか」
「そのおまつ殿のお知り合いですか」
「そうじゃ、名前は確か」
前田は思い出す顔になってからだ。木下に述べた。
「ねねといったのう」
「ねねですか」
「そうじゃ、ねねじゃ」
その名前を出すのだった。
「中々奇麗なおなごだったかのう」
「おお、それはまことでござるか」

奇麗と聞いてだ。木下の目の色が変わった。
やけに明るい目になってだ。彼は前田にさらに問う。馬上で身を乗り出して今にも落ちんばかりだ。しかしそれでも姿勢を崩さない。平衡感覚はいいようだ。
「奇麗なのですか」
「そうじゃ。尾張は奇麗なおなごが多いがな」
「それは何よりでござる」
その明るい目で言う木下だった。
「ではそのねね殿とです」
「会いたいか」
「是非共」
「わかった。それではまつに話しておこう」
「御願いします」
「うむ。しかし猿よ」
前田はあらためて木下を見て言ってきた。
「御主もあれじゃな」
「あれとは？」
「おなごに興味があるか」
「ええ、まあ」
木下もそれは否定しない。
「やはり。それは」
「そうか。それもかなりか」
「いえ、かなりとは」
「隠さずともよい。英雄は何とやらだ」
そこから先はあえて言わない前田だった。

第十五話　異装その十六

そしてだ。こんなことも言ったのだった。
「おなごもよいがじゃ」
「その他といいますと」
「男の方はどうなのじゃ」
この時代では至って普通である。実際にそうした話は幾らでも残っている。日本でそうした趣味で罪に問われた例は皆無である。
「そっちは」
「そっちは別に」
「興味はないか」
「というよりか又左殿まさかわしを」
「おいおい、馬鹿を申せ」
前田は木下の今の言葉には思わず吹き出してしまった。そしてすぐに言い返した。
「わしはかなり五月蝿いのだぞ」
「といいますと」
「御主には手は出さぬ」
それはないというのだ。
「絶対にな」
「左様ですか」
「ほっとしたか」
「ええ、まあ」
実際にいささか大袈裟な仕草でほっとしてみせている木下だった。
ここには芝居がけておどけたものも見せているのである。周りを笑わせる為だ。
「しかし又左殿も」
「それは普通じゃろう」
「まあわしはそっちの趣味はありませんが」

「やはりそうなのか」
「おなごだけで充分でござる」
はっきりと言い切ってみせたのだった。
「それで」
「ふむ。それでもおなごはとびきりか」
「駄目でしょうか」
「顔だけ見ればのう」
その猿そのままの顔を見るとどうしてもこう言ってしまうしかなかった。しかも背は低く体格も貧弱である。そうしたものを見ればとてもであった。
「しかしじゃ」
「しかしですか」
「御主は顔とか以外でもてるな」
そうだというのである。
「それもかなりな」
「だといいのですが」
「おなごだけでなく男にももてるぞ」
「ですからわしはそっちの趣味は」
「また違う意味じゃ」
すぐに言い返したのだった。
「それでわかるな」
「ああ、そういうことですか」
「そうじゃ。まあとにかくな」
「はい、とにかく」
「この会談が終わってからじゃ」
「それからですな」
「そのねねと会わせてやろうぞ」
前田は笑顔で木下に話す。二人は何時の間にか仲良くなっていた。
そしてそのうえでだ。木下は思わぬところから飛びきりのおなごを女房にしようとしていた。

第十五話　完

2010・11・6

第十六話　正装その一

第十六話　正装

美濃の者達は既に寺にいた。そしてだ。ここに来ようという信長のことを話していた。その中心にいるのは義龍であった。道三ではなかった。

「親父殿は何処か」

「まだです」

「まだ来られてません」

「まだというのか」

義龍は腹心達の言葉に顔を顰めさせた。

「何故だ、一体」

「あのまま帰蝶様の婿殿をです」

「見ていたというのか」

「はい」

そうだというのである。

「それでなのですが」

「馬鹿な話だ」

義龍はそれを聞いて一言で言い切った。

「あのうつけを見て何になるというのだ」

「ですが美濃三人衆に不破殿もです」

「あの方々も行っていますが」

「あの者達も今一つわからんところがあるからな」

義龍は彼等も行ったということには内心いささか不快なものを感じた。しかしそれは消してそのうえで家臣達に応じているのであった。

「どうもな」

「それに半兵衛もまた」

「行っていますし」

「明智殿に細川殿もです」
「行っていますので」
「何だというのだ」
これまでの顔触れを聞いてだ。義龍はさらに不快なものを感じた。
そのうえで顔を顰めさせてだ。言わずにはいられないのだった。
「あの者達がこぞってとは」
「好奇心からでしょうか」
「うつけを一目見たいと」
「一体どうしたうつけなのか」
「それで」
「そうであろうな」
義龍はここでは半ば自分に言い聞かせたのだった。そうした言葉だった。
「どう考えてもな」
「そうですな。それで、ですが」
「その殿も間も無く戻ります」
「他の面々も」
「左様か」
義龍の返事はここでは無愛想なものだった。不快なものが消えればそれになるのだった。
「ではよい」
「服はどちらを用意されるでしょうか」
「正装でしょうか。それとも略装でしょうか」
「どちらでもよかろう」
服についてはどうでもいいというのであった。
「それはな」
「いえ、折角の会見ですから」
「そうはいきますまい」
「ここはやはり」
「正装では」

「相手はうつけだ」
彼は信長を何処までもそう見ていた。そしてその考えから離れることはなかった。それも一寸たりともだ。全く離れることはなかった。
そのままでだ。彼はまた言うのだった。
「どんな服でも構わんだろう」
「略装でもですか」
「それでもですか」
「構わないと」
「そうだ、構わぬ」
今度は断言であった。
「どうせ碌な服で出て来ぬわ。確か奴の親父の葬儀の時だ」
「あの時ですか」
「確かあの時は」
「かなりの姿だったとか」
このことは美濃にも知れ渡っていた。そして他の国にもだ。こうした話は瞬く間に広まるものだ。噂は何よりも速く広まるものだからだ。しかもどんな壁もすり抜けてしまうのだ。

第十六話　正装その二

「茶船髷に半袴に」
「そして縄の帯に朱鞘の太刀だったとか」
「それは葬儀どころか」
「人の前に出る時の格好ではありませんな」
「全くです」
「そうした男だぞ」
義龍はそのことを指摘する。信長をそこから見ているのだ。
「所詮どんな服で出てもだ」
「問題はない」
「そういう相手なのですね」
「そうだ、どんな格好でも構わん」
このことをはっきりと言い切ってみせた。
「所詮うつけ。相手にするまでもない」
「ではここは」
「殿はどんな格好でもいい」
「相手がそうだからこそ」
「そういうことでござるか」
「誰が犬に人の礼をするか」
誰が犬で誰が人かは最早言うまでもなかった。
「そうであろう」
「確かに」
「それはその通りです」
「ではうつけにはうつけの礼を」
「そうされますか」
「左様、では親父殿を待つぞ」
義龍は如何にも面白くなさそうに述べた。そしてだった。
どっしりと胡坐をかきそのうえで父を待った。やがてその道三が

竹中や明智達と共に寺に入って来た。すぐに家臣達が彼を出迎えた。
「ようこそ、殿」
「お待ちしておりました」
「そしてです」
「すぐにお着替え下さい」
すぐに着替えを勧める。ここでだった。
義龍がだ。如何にも面白くなさそうな顔で父に問うた。
「して父上」
「何じゃ」
「どの服を着られる」
具体的な問いであった。
「一体。どの服を着られるのだ」
「略装だ」
それだというのだった。
「それにする」
「略装か」
「そうだ、そうする」
何故か笑っていた。思わせぶりな笑みである。その笑みでの言葉だった。
「わかったな」
「わかった」
息子は父のその笑みについて何も思わずだ。そのうえで応えた。
そしてそのうえでだ。彼は周りの家臣達に命じた。
「それではだ」
「はい」
「略装ですね」
「それにする」
こう言うのであった。
「よいな」
「しかし殿」

竹中はわかって主に問うてきた。
「それで宜しいのですか」
「どういうことじゃ、半兵衛」
「これは一国の主と主の会見です」
「そうじゃな」
「それでよいのですか？略装で」
怪訝な顔をわざと作っての言葉だった。
「それで」
「よい」
素っ気無く言葉を返してさらにであった。道三は言ってみせたのだ。
「あの様なうつけにはだ」
「略装でよいのですか」
「どうせ碌な服は着てこぬ」
道三もだった。あえてこう言ってみせたのだった。
「だからよ。それでよいのじゃ」
「略装で、ですね」
「そうじゃ。正装はいらぬ」
はっきりと言い切ってみせた。

第十六話　正装その三

「それはな」
「左様ですか」
「では略装を持って参れ」
正式に決めた言葉であった。
「よいな」
「はい、それでは」
「今より」
「ここでわかる」
道三は誰にも聞こえないようにして呟いてみせた。
「婿殿のことがな。存分によ」
楽しそうに笑って呟いたのであった。そして織田方も寺に着いていた。まずは家臣達がであった。その傾いた服から真面目な服に着替えていた。
彼等も大忙しだった。その中で森可成が言うのであった。
「さて、我等もとはな」
「殿も手が込んでおられる」
「全くですな」
村井と島田も同じだった。彼等もそれぞれ着替えている。広い部屋の中で全員である。結構急ぎながら着替えて話もしているのだ。
「我等もとは」
「しかも来ている者全員とは」
「来ておらぬといえば」
毛利が言った。当然彼も着替えている。
「信行様と信広様だけではないか」
「清洲で留守をされているな」
「御二方だけだな」
「他は全員ではないか」

「全くよ」
家臣達は話していく。そうしてであった。
その中でだ。ふと松井が述べた。
「しかし」
「しかし？」
「どうされました、松井殿」
その彼に堀と原田が問うた。
「やはり清洲ですか」
「その信行様ですか」
「権六殿と新五郎殿達はここにおられる」
信長が信行の目付けにつけたその者達はというのだ。信長はあえてここに連れて来たのだ。家老である彼等は外せないがそれ以上に思うところがあってである。
「信広様が今はおられるが」
「それで動くかどうか」
「それでござるか」
「どうやらそれはないか」
松井は考える顔でその堀と原田に述べた。
「信広様がおられると」
「信行様は兵は持っておられぬ」
佐々がこのことを指摘した。
「それではどうしようもあるまい」
「己は兵はおられぬ」
「そういうことだな」
「だからか」
「今は何もできぬか」
「しかし」
だが、ここで一つの事実が話される。それが問題だった。
「権六殿達がおられればか」
「何をされるやわからぬ」

「そういうことになるな」
「やはり」
「そうであろうな」
林が彼等の言葉に応えて述べてきた。彼も着替えている。
「わしに権六が兵を持っておるからな。わし等がいればじゃ」
「信行様は動かれる」
「必ずですな」
「その時は」
「だからじゃな」
林通具も言ってきた。
「信行様は今は動かれぬ」
「元々あの方は政の方」
中川はこのことを指摘した。
「兵は持っておられぬからな」
「それに野心もない方だった」
「殿にも忠実であられたし」
「しかしな。それが最近な」
「おかしいのう」
「そうよのう」
家臣達も感じ取っていたのである。信行のその異変をだ。そしてその異変の原因が何処にあるのかもおおよそ察していたのだ。

第十六話　正装その四

「あの者が来てからのう」
「津々木という者一体」
「あれは何者じゃ」
「出自が知れぬ」
「何処に生まれ何をしていたのか」
「さっぱりわからぬぞ」
誰もがだった。津々木の話をすると怪訝な顔になるのだった。とにかく誰も彼のことを一切知らない。まさに謎の男なのである。
それでだ。彼等は津々木に対して不気味なものを感じていく。そうしてだった。
坂井が言ってきた。やはり彼も怪訝な顔になっている。
「若しやだ」
「うむ、太善殿」
「貴殿は何と思われる」
「あの者は」
「他の国からの草ではないのか」
それではというのだ。草とは敵国に入り込みそこに根をはりそうしてそこで動き情報を流したり工作を行ったりする。所謂密偵である。坂井はそれではというのだ。
「若しや」
「それは否定できませんな」
生駒が坂井のその言葉に応えて述べた。
「やはり」
「そう思うか」
「何しろこの尾張においても普段何をしているのかわかりませぬ」
「家はあるがのう」
「家族もわからぬ」

とにかく何もかもがなのだった。
「あそこまで何もわからぬ者はおらぬな」
「全くじゃ」
「しかもあの服」
「あれものう」
「奇怪な話じゃ」6
今度は彼のその服についてであった。
「あの黒は一体」
「上杉の黒でもない」
「尋常な黒ではないな」
「左様ですな」
木下秀長もいた。彼もまた兄と共に信長の前に出られるようになったのである。彼はその裏方での才覚が認められたのである。信長はそうしたところも見ているのだ。
「強いて言えばあれは」
「あれは？」
「あの黒は何なのじゃ」
「何処かで見たのじゃがな」
「不気味な色じゃ」
「闇かと」
木下秀長はそれではと言うのだった。
「あの黒は」
「闇か」
「それか」
「あの黒は」
「何処かで見たかと思っていたが」
「闇だったか」
彼等もそれでわかったのだった。その津々木の服の黒が何かを。それは上杉の黒や墨の黒とはまた違っていた。そうした黒だったのである。

「それであったか」
「しかし」
ここでいぶかしんだのは山内だった。
「普通の者が闇の色なぞ身に着けるであろうか」
「ありませぬな」
長谷川が山内の疑念に応えた。
「黒はあっても闇は」
「尋常な趣味の者ではない。いや」
「そうだな」
大津が野々村の言葉に言う。
「何かよからぬものを感じるな」
「そうだな」
野々村も頷く。彼等はそれぞれその闇によからぬものを感じていた。

第十六話　正装その五

そんな話をしているうちにだ。皆着替え終わった。すると平手が彼等に対して告げた。

「よいか」

「はっ」

「それではですな」

「今から」

「殿をお待ちしようぞ」

平手はここでも信長を立てる。やはり彼はまず信長を見るのだった。

「会見の行われる間でな」

「左様ですな。今より」

「我等織田の格好を見せてやりましょうぞ」

「尾張の」

「うむ。しかし」

平手は慶次を見た。その彼はというと。

何と正装である。大柄なその身体を織田の青い正装で包んでである。その場に悠然と立っているのだった。

平手はその慶次に対して言うのだった。

「御主、ちゃんとした服も着られるのか」

「ははは、当然ではござらぬか」

大いに笑って言う慶次だった。

「わしもあれですぞ。正装も好き故」

「そうであったのか」

「正装もまた傾くにはいいものでござる」

「正装で傾く？」

「何をどうすればそんなことができるのか」

「慶次殿の御言葉はわからぬのう」

彼の今の言葉を聞いた矢部、福富、万見の言葉だ。
「正装は真面目に着るもの」
「傾く為のものではありますまい」
「そこでどうして傾くというのか」
「いやいや、これがなのじゃ」
慶次郎はそのいぶかしむ彼等に話すのだった。
「きちんと着る」
「はい、正装ですから」
「それは当然であります」
今度は菅屋だった。
「しかし。そこでなのですか」
「如何にして格好よく着るかよ」
慶次は得意そうに話す。
「それが正装での傾き方よ」
「ううむ、そういえばじゃ」
蜂須賀がその慶次の横に来て言ってきた。身体の大きさは同じ位である。しかしなのだった。
蜂須賀の着方がどうにも粗野で慣れていない感じなのに対して慶次のそれは実にぱりっとしている。まるで珠と瓦であった。それだけの違いがあった。
それを自分でもわかってだ。蜂須賀もぼやいた。
「やはりわしはこういう服は合わぬのう」
「まあそう言うな」
その蜂須賀を森可成が宥めてきた。
「服は着ていれば慣れるものよ」
「そうでござるか」
「そうじゃ。それでじゃ」
「はい」
「御主は目立つから前におるのじゃ」
「前で宜しいのですか？」

「その方がいいであろうな」
これが森可成の考えだった。
「黙って座っているという条件があるがのう」
「そのうえで、でござるか」
「そうじゃ。美濃の跡継ぎは相当大きいと聞く」
義龍のことである。
「何しろその母が六尺もあったそうだからのう」
「六尺でございますか」
それを聞いて驚いたのは家臣達の中で最も小柄な木下だった。誰がどう見てもである。彼のその身体はかなり小さいものだった。
「それがおなごの大きさでございますか」
「信じられぬか」
「はい、とても」
呆然としながら森可成の言葉に応える。

第十六話　正装その六

「それがおなごの背丈とは」
「まあそうじゃな」
それは森可成も頷くことだった。
「わしもそこまででかいおなごは見たことがない」
「やはり」
「甲斐の信玄殿は相当大きいと聞くがのう」
「それは権六殿や慶次殿よりもですか」
「そうらしいな」
織田家では慶次の他には柴田も大柄である。柴田はその大柄さと怪力もあり織田家きっての武勇の持ち主となっているのである。無論戦の指揮も得意である。
「どうやらな」
「甲斐の虎は化け物でござるか」
「少なくとも尋常な御仁ではないようだな」
このことは間違いないというのであった。
「その大柄さだけではないからのう」
「戦も政も双方できる」
「それが武田信玄」
「しかと聞いておりまする」
「さて、その虎も見るべきじゃが」
驚いた顔になる家臣達に告げてきたのはここでも平手であった。
やはり彼こそが家臣達の手綱を締める者である。
「まずは蝮よ」
「義父殿ですな」
「殿の」
「手強いぞ」
平手の言葉が強いものになった。

「わかっておるな」
「はい、それは」
「わかっているつもりです」
若い者達からの言葉だった。
「大殿が遂に勝つことのできなかった相手ですし」
「あの大殿が」
「戦だけではないのじゃ」
平手も道三とは戦場で何度も戦ってきた。だからこそわかっているのだ。
「あの蝮はのう」
「そうでござるからな」
ここで柴田も苦い顔で言う。
「わしも何度命を落としかけたか」
「権六殿もでござるからな」
「だからこそ余計に厄介ですな」
「あの蝮だけは」
「そうじゃ。用心するようにな」
彼も笑ってはいなかった。
「ここで暗殺ということも考えられるぞ」
「まさか・・・・・とは言えませんな」
丹羽は言いかけたところでその言葉を引っ込めた。
「どうにも」
「そうじゃな。相手は蝮じゃ」
滝川もだった。丹羽の言葉に応えて言う。
「ここでわし等共々ということをしてきてもな」
「だからこそなのじゃよ」
今度は佐久間の言葉だった。
「今寺の周りを兵達が囲んでおるな」
「はい、寺の中でも要所要所に詰めております」
「大勢の足軽達が」

「会見にしてはやけに連れて来る兵が多いと思いましたが」
「それでしたか」
「左様じゃ」
その通りだと述べる佐久間だった。
「蝮じゃぞ。何をしてくるかわからぬ」
「用心には用心を」
「牛助殿はそう考えられて殿に進言されたのですか」
「いや、わしはそうしておらぬ」
ところがだった。佐久間はそれはすぐに否定したのだった。
「全くな」
「では殿がですか」
「用心の為にですか」
「それがどうも用心の為ではないらしい」
ここで言ってきたのは佐久間盛重だった。
「殿は見せる為と言われておったわ」
「見せる為とは」
「足軽達をですか」
「そうじゃ。見せる為とな」
それでだというのである。

第十六話　正装その七

「言っておられた」
「というと槍と鉄砲を？」
「それかのう」
「織田の武器といえばな」
「弱い兵達じゃしのう」
「武器だけだしのう」
「あとは青い鎧とかだけじゃ」
家臣達もここでそれぞれ話すのだった。
「その二つを蝮に見せるか」
「それをはったりとするのか」
「はったりもあるが実際に誇示もするのであろうな」
今言ったのは金森だった。
「蝮に殿のことを見せる為にな」
「それでか」
「それであそこまで連れて来て持って来た」
「そういうことか」
「殿は何も考えなしでは動かぬ方だしな」
「そうであるか」
彼等もここで納得しだした。そうしてであった。
それぞれ会見の部屋に入る。まだ斉藤の者達は来ていない。青い正装の者達だけが整然と座る。そのうえでまずは信長を待つのだった。
その信長が来た。彼を見てだった。
「何とっ」
「そうされますか」
「これはまた」
「やられますか」

「ははは、驚いたか」
彼等の言葉にまずは笑う信長だった。
「御主達も」
「いえ、その服装とは」
「流石に思いませぬ」
「まさか」
「そうされますか」
「やるなら思い切ってよ」
また笑って言う信長だった。
「だからよ。それではだ」
「はい、それではですな」
「いよいよでござる」
「美濃の蝮」
「今こそ」
彼等はまさに戦の場にいた。鎧も剣もないがそれでもだった。その心に研ぎ澄ましたものを持ってだ。そのうえで相手を待つのだった。
その相手はだ。今部屋に向かっていた。そうしてであった。
「では殿」
「我等もですな」
「この格好で参ればいいのですな」
「これで」
「そうじゃ。わしが略装じゃぞ」
道三は己に続く家臣達に述べた。彼等も略装である。主がそれならば家臣達もそうであるのは当然のことであった。それでなのだ。
「してその方等が正装の筈があるまい」
「そうですな。それではです」
「今より部屋に入り」
「そのうえで」
「まあ面白いことになるだろう」

道三はここでも面白そうに笑うのだった。木の廊下の上を進み部屋に向かいながらだ。
「今度もな」
「？といいますと」
「一体何が」
「何か仕掛けでも」
「わしは何もしておらん」
彼はだというのだ。
「何もな」
「では刺客やそういったものもですか」
「ここにはですか」
「伏せていませんか」
「最初から連れても来ておらん」
そうだというのであった。

第十六話　正装その八

「無論毒もじゃ」
「含ませていないと」
「茶にも何にも」
「それはまた」
「わしとてそうした時もある」
その謀略でも知られる道三でもだというのであった。彼は美濃の主になるまで暗殺や讒言も使ってきたのだ。梟雄と言われる由縁である。
「それではじゃ」
「はい、婿殿といよいよ」
「ご対面ですな」
美濃の者達の多くは信長を侮っていた。やはりうつけだと思っていたのだ。それでだ。こんなことも言うのであった。やはり侮ってだ。
「さて、略装でも勿体無いかもな」
「家臣達もどうした格好でいるやら」
「ある意味見物よ」
「全くだ」
だがそんな彼等を明智や稲葉達は静かな目で見ていた。それで何も言わない。そうしてそのうえでだった。会見の場に入るのだった。
するとであった。そこにいたのは。
「何っ、これは」
「正装だというのか」
「しかも全員」
「婿殿までか」
皆これには唖然となった。織田の者達は全て正装でそこにいたのだ。

そして信長はだ。織田の青い見事な正装で家臣達を後ろに控えさせてだ。美濃の者達を見据えていた。座っているのに立っているが如き迫力だった。

その彼を見てだ。殆どの者が気圧されてしまった。

「うう・・・・・・」

「まさかな」

「略装もあるまいと思っていたが」

「それで正装だと」

「しかも全員か」

おまけにその色までだ。一つに統一されていたのだった。

織田の青にだ。彼等は完全に負けていた。

「まるで海だな」

「全くよ」

「海が我等に迫って来る様だ」

「まさに津波よ」

「さて、それではじゃ」

道三が慄く彼等に対して言ってきた。

「はじまるぞ」

「は、はい」

「そうですな」

「それではこれから」

「いよいよ」

彼等は主の言葉で我に返る。義龍が憮然とした顔のままである。

ただ明智に細川、三人衆と不破、それと竹中だけが落ち着いていた。

そしてであった。平手が信長に対して告げるのだった。彼の後ろにそっと寄ってだ。

「殿」

「うむ」

「斉藤殿でございます」

「で、あるか」

信長は彼の言葉に鷹揚に頷いた。
「ではこれより」
「そうじゃな」
また鷹揚に頷く信長だった。
「茶を出せ」
「はい」
こうしてあった。信長と道三は会見をはじめるのだった。
まずはだ。信長から言うのであった。
「道三殿」
「うむ」
義父をだ。殿と呼んでみせたのだった。対等、いや己を上に置いてだ。そのうえで言ってみせた言葉であった。明らかにそうであった。
「よく来られた」
「招かれて何より」
道三も彼に合わせるのだった。
「それで帰蝶は」
「達者でいる」
信長はここで微笑んでみせた。

第十六話　正装その九

「安心されよ」
「左様か」
「わしの妻であることは何があろうと変わりはせぬ」
「それを聞いて何より」
「安心召されたか」
「充分に」
道三は完全に信長の下になっていた。そのことを見てだった。
美濃の者達は呆然となっていた。彼等にとって道三とはだ。畏怖せざるを得ない絶対の存在だった。しかしそれがなのだった。
信長に完全にしてやられている。そのうつけにだ。これは彼等にとっては驚くより他にない、まさにそうした事柄だったのである。
その驚く彼等を尻目にだ。信長はさらに言うのであった。
「してだ。茶の後は」
「その後は」
「能を御覧になられよ」
それをだというのだった。
「用意してある。存分にな」
「馬鹿な、能をここで見たら」
「それこそよ」
美濃の者達はここで信長の開く能を見るということがどういうことなのかわかっていた。それでなのだった。
主が受ける筈がないと思っていた。しかしであった。
道三はだ。ここでもなのだった。
「かたじけない」
「見られるな」
「喜んで」
こう信長に対して言ったのである。

「そうさせてもらう」
「それは何より」
信長はにこりともせずに返した。それを見た美濃の者達は。
最早呆然としていた。何と言っていいかわからなかった。
その彼等をよそに話は続いていく。茶の後でだ。
能となった。その幽玄の世界はこの世にありながらこの世にはない
いものを見せていた。信長は己が主の座に座った上で道三を隣にし
てその能を見る。道三は何も言いはしなかった。
そして終わるとだ。また信長が言ってきたのだった。
「さて、それでは」
「今度は何だ」
「何をするつもりだ、一体」
「何をだ」
美濃の者達はまさに戦々恐々になっていた。その彼等をまたよそ
にしてだ。
信長は道三にあるものを出してきた。それは。
「持って行かれよ」
「茶器か」
「それを自ら渡すか」
「しかも上座で」
最後までなのだった。信長は道三を下に扱ってみせたのだった。
主賓としてだ。一見してそれは理に適っている。しかしなのだった。
今の彼は完全に勝者だった。そして敗者はなのだった。
「まさかな」
「殿も思い切ったことをされる」
「全くだ」
尾張の者達の言葉だった。
「まさかここまでとはな」
「略装に対して正装ではな」
「勝負にならん」

「言うまでもない」
まさにその通りであった。敗者は相手だった。
それがわかっているからこそだ。彼等もこう言うのであった。
「まあこれで美濃の者達に対して気が楽になったか」
「うむ、戦では勝てなかったがな」
「ここでは勝てたな」
「そうだな。それにだ」
「殿だな」
「そうだ、殿だ」
ここでまた信長を見つ彼等だった。
「やはり殿ならばこそだな」
「ああして蝮殿を出し抜けた」
「そういうことだな」
「つまりはだ」
そしてであった。ここで彼等は主をこう評したのであった。

第十六話　正装その十

「殿は蝮殿より上よ」
「うむ、それは間違いない」
「あの蝮殿より上の器を持っておられる」
「それを天下に知らしめることができたな」
こう口々に言うのだった。しかしであった。
当の信長はだ。落ち着いた顔でこう彼等に言うのだった。今は全く笑っていない。
「いや、それは違うな」
「といいますと」
「一体？」
「どういうことでござるか」
「違うというと」
「つまりじゃ。わしがあの様なことができたのはじゃ」
信長はその顔で家臣達に話すのだった。
「まずは御主等がいたからじゃ」
「というとここに来るまでのあの格好ですか」
「それでござるか」
「つまりは」
「そうじゃ。義父殿が見に来るのはわかっていた」
それを察してなのだった。信長はあえてああして家臣達に傾いた格好をさせたというのである。そういうことだった。
「それでそなた達がいたからこそじゃ」
「ああして傾けさせてですか」
「それから正装にして」
「そういうことでござったか」
「そういうことじゃ」
その通りだと話す信長だった。

「まずはそれじゃ。それにじゃ」
「道三殿が見られていたということですね」
生駒がそこを指摘した。
「それですな」
「そうじゃ。義父殿はわかっておったのじゃ」
信長は生駒の言葉に応えてこう述べた。
「それであああして略装で来られたのよ」
「というとあれは」
「道三殿はわかっていて殿に合わせられた」
「そういうことでござるか」
「その通りよ」
まさにそうだというのであった。
「これでわかったか」
「何と」
「殿だけではなかったとは」
「道三殿までとは」
「それはまた」
「しかしその通りじゃ」
信長はそれを実際のことだと言うのだった。
「だからこそああしたことができたのじゃよ」
「それは殿を認められたからこそですな」
「確かに。あの蝮殿は容易な方ではない」
「となるとだ」
「殿を認められたからこそ」
「だからこそ」
「そういうことよ」
また言う信長だった。
「これでわかったな」
「では認められたその時は」
「寺に入る時」

「あの時でござるな」
「だからそなた達あってのことだったというのじゃ」
それでだというのであった。
「そなた達がいたからあそこまでできたのじゃ」
「左様でござったか」
「成程」
「よくわかりました」
「そういうことであったのですな」
「そうじゃ。わしの言葉に従いそれで十二分の働きを見せてくれる家臣達が大勢いる」
これこそが主の最大の宝である。信長はそれだけの宝を持っている、道三はそれを見たのである。
そうしてだった。さらに話が為される。
「そうして槍と鉄砲も」
「それも見てですか」
「蝮殿は」
「最後に正装を見せたからのう」
それについても話すのだった。

第十六話　正装その十一

「そういうことじゃ」
「そうしたことが全て合わさって」
「そうしてそのうえで」
「ああしてでござったか」
「成程」
「深いですな」
「全くでござる」
家臣達は深く嘆息するしかなかった。
「どうやらこの会見は」
「殿にとってただの勝ち負けではなかったのでござるな」
「義父殿の御理解も得られた」
「そこまでの」
「有り難いことよ」
ここで満足した笑みを浮かべる信長だった。
「全く以ってな」
「これで美濃の方は大丈夫でござるな」
「向こうから攻めてくることはない」
「そうでござるな」
「最早」
「いや、より大きいであろうな」
こう返す信長だった。
「これは」
「といいますと？」
「これ以上大きなものが得られたのでござるか」
「今は」
「若しかするとだがな」
信長も流石に今は確証のない感じの言葉だった。

「わしは天下に向かう為の大きなものを得られたやも知れぬ」
「天下に向かう為の」
「といいますと」
「そなた達や帰蝶以外にじゃ」
「我等以外」
「しかも帰蝶様もというと」
「それは」
彼等は主の言葉を聞いてだ。それで考えてだ。それからこう口々に言うのだった。
「殿をわかっているということですか」
「つまりは」
「そういうことですか」
「そうよ。それが義父殿よ」
こう言うのであった。
「わしをな。理解してくれる者がじゃ」
「殿は得られたというのですか」
「つまりは」
「そうじゃ。これは大きい」
信長はまた言った。
「実は美濃もじゃ」
「手に入れられるおつもりでしたか」
「戦か略で」
「そうしたものによりで」
「そうじゃ。しかしその必要はなくなったようじゃ」
信長はそれが何故かも話した。
「義父殿がわしをわかってくれたからじゃ」
「では美濃はですか」
「やがて殿が譲られてですか」
「そしてお治めになられるようになると」
「そう仰るのですね」

「いや、そう上手くはいくまい」
信長はそれはないと言った。言い切っていた。
「義父殿も敵が多い故な」
「美濃の蝮殿に反感を持っている者達が動く」
「そういうことですな」
「やはりここは」
「その通りよ。そう上手くはいくまい」
また言う信長だった。
「やはりな」
「左様ですか、やはりは」
「しかし殿を解してくれる方がまた得られた」
「それは大きいですな」
「確かに」
「父上はわしのことをわかってくれていたがのう」
信長は実父信秀のことも話した。もう今はいないその父のことをだ。

第十六話　正装その十二

「だが母上がのう」
「ですから言っていたではありませぬか」
平手がここで主に言う。ここでもだった。
「お母上のところでは。真面目な格好でと」
「やれやれ、そんなことはのう」
「お嫌だと仰るのですね」
「そうじゃ。それはじゃ」
やはり嫌だというのだった。
「それで天女の姿で出たらじゃ。母上の怒られること怒られること」
「そんなお姿で出られれば当然では？」
「よく親子の縁を切られなかったものです」
「全く。傾くにも程があります」
「全くです」
これには家臣達の殆どが呆れてしまった。呆れていないのは桁外れの傾き者である慶次だけだ。他の者は皆そうであった。
そうしてだ。また言う彼等だった。
「それで信行様がああした方ですからなあ」
「比べられるのも道理です」
「殿らしいと言えばらしいですが」
「それでも」
「まあのう。それ以来じゃ」
信長の話は続く。
「母上はわしを見ると叱ってくれるのじゃ」
「それでなのですか」
「お母上には今も嫌われたままと」
「殿に問題があるとはいえ」
「厄介な話ですな」

「しかし義父殿は違った」
彼はだというのだった。
「わしを解してくれた」
「それでは今はそれを喜びですな」
「少なくとも美濃から攻められることを祝して」
「そうしますか」
「ここは」
「いや、出陣の用意じゃ」
ところがだった、信長はここでこう言うのだった。
「何時でもできるようにじゃ」
「むっ、それは何故ですか」
「一体」
「何かおありですか」
「美濃に」
「先程も言ったな。義父殿は敵が多い」
信長はまたこのことを話した。
「それでじゃ。すぐにでも異変が起こるぞ」
「それに備えてですか」
「兵の用意をですか」
「それをですか」
「そうじゃ。それでじゃ」
信長はさらに話す。それだけではないというのである。
「こうしてわし等が全てここに集まっておるとじゃ」
「あっ・・・・・・」
「確かに」
「そうなってはですね」
「あの方が」
「そういうことじゃ」
真剣な顔での。信長の今の言葉だった。
「わかったな」

「はい、それでは」
「今は」
家臣達も一斉に頷く。そうしてだった。
信長は清州に戻るとすぐに何時でも兵を出せるように準備を整えていた。会談の後ですぐにであった。彼はそう命じ備えさせたのである。
そして道三達もだ。帰路においてだった。
「ふん、何が正装じゃ」
「全くです」
「あの様な小癪なことをするとは」
「織田のあの若造、意外とせせこましいですな」
「まことに」
義龍の周りでこんな話が起こっていた。馬に乗りながらそれでだった。
「しかし。何故でしょうか」
「殿は妙に落ち着いておられる」
「それどころか顔が笑っておられる」
「あれは一体」
「何であろうか」
「知るものか」
義龍がここで忌々しげに言う。

第十六話　正装その十三

「そんなことはな」
「そうですか。ではここは気にせずにですな」
「美濃に帰る」
「そうされますか」
「そうよ。しかし」
ここでだ。義龍の顔に暗いものが宿った。そのうえで言うのであった。
「どうもな」
「はい、大殿はどうやら」
「あのうつけ殿を御気に召されたようです」
「それは間違いありませんな」
「どう見ても」
「そうじゃな」
義龍も言う。
「それは間違いないな」
「それにです。美濃にも」
「弟君達がおられます」
「うかうかしていてはです」
「殿にもよくありません」
「わかっている」
これが義龍の返答だった。
「ではだ。稲葉山に戻り機を窺いだ」
「やはりですか」
「そうされますか」
「動くなら早い方がいい」
既にであった。彼は決めていた。そうした顔と声だった。そのうえでの言葉だった。

そんな話をする彼等だった。だが道三は今はその彼等からは離れていた。そうしてそのうえで三人衆や不破に竹中、それと明智に細川を交えて話をしていた。

その他には道三に忠実な者達が集まっている。まずはその彼等の言葉を聞くのであった。

「やはり婿殿は」

「全くでござるな」

「うつけ殿でござる」

「そうとしか言いようがありませぬな」

「真に」

「ふむ」

その彼等の言葉を聞いてだ。道三は静かに言うのであった。

「そなた等はそう思うか」

「はい、あの服を見ればです」

「ここに来るまでのあの格好」

「あれはやはり」

「うつけ殿です」

「ではだ」

しかしであった。ここで三人衆達に顔を向ける。そのうえで彼等にも問うた。

「そなた等はどうか」

「殿と同じです」

「同じ考えです」

「我等は」

「そうだな。わしはこう思う」

こう前置きしてだ。彼は言った。

「わしの息子達も孫達もやがてな」

「やがて？」

「やがてといいますと」

「何かあるのですか」

「やがて婿殿の前で馬を揃えてつなげるな」
「なっ・・・・・・」
「それは」
今の道三の言葉が何を意味するのかはもう言うまでもなかった。
美濃が信長のものになる、それ以外のどんな意味でもないからだ。
それで彼等が戸惑っているとだ。彼はさらに話した。
「それはやがてわかる」
「ううむ、それは世辞ではありませぬな」
「違いますな、やはり」
「それは」
「わしは世辞は言わぬぞ」
これは確かだった。少なくとも道三はそうした人間ではない。世辞は言わないのだ。
それでだ。彼はさらに言うのであった。
「こうした場合にはまことのことしかよ」
「ではやはり」
「あの婿殿はですか」
「かなりの者だと」
「美濃を手中に収めるまでの」
「美濃だけではない」
道三の言葉はさらに大きいものになる。

第十六話　正装その十四

「さらによ」
「さらにとは」
「都まで辿り着かれるというのですか」
「まさか」
「そのまさかよ。蛟はさらに昇るぞ」
信長の通り名についても話す。尾張の蛟龍である。
「さらによ」
「ううむ、それではですか」
「この度の会談はそれを見極められた」
「それは大きいですか」
「やはり」
「大きいのう。それではじゃ」
ここでだ。己の前にいるその彼等にまた話した。
「わしに何かあればじゃ」
「はい」
「その時は一体」
「どうされよと」
「まさかと思いますが」
「あの婿殿に」
「いや、それはすぐには動くでない」
家臣達は止めた。しかしこうも話すのだった。
「すぐにはじゃ」
「それは何故ですか」
「一体」
「先程のお言葉とは違いますが」
「それはどうしてですか」
「そなた達もより見極めるのじゃ」

それでだというのである。
「それでじゃ。すぐには動くでない」
「婿殿にはすぐにはつかずにですか」
「我々もまたあの方を見極めろと」
「そういうことですか」
「左様、そなた等も見極めるのじゃ」
こう告げる道三だった。
「よくな」
「では我等」
「まずは婿殿を見させてもらいます」
「そしてそのうえでどうするか」
「それを決めさせてもらいます」
三人衆や不破、竹中ばかりではなかった。他の者達も言うのだった。
そうしてだ。さらにであった。竹中が言うのであった。
「今天下は次第に大きな勢力にまとまりだしています」
「それぞれでじゃな」
「はい。武田然り上杉然り」
こう道三にも話す。
「次第に力のある家に集まってきています」
「そして尾張もよ」
「あの婿殿に」
「そしてさらにじゃ」
尾張に止まらないとだ。ここでも話す道三だった。
「天下やもな」
「では我等はです」
「それを見させてもらいます」
「是非」
「そうしてくれ。それではじゃ」
こうした話をしていたのだった。道三達も何かが動こうとしてい

た。
そしてであった。信長は清洲に戻るとすぐに帰蝶のところに向かった。そうして会見のことを彼女に対して笑いながら話すのであった。
「とまあそういうことじゃ」
「左様ですか」
帰蝶は夫の言葉に静かに返すのだった。
「わかりました」
「何じゃ、それだけか」
「何かありますか？」
「いや、驚いたりはせぬのか」
彼が言うのはこのことだった。
「わしが傾いた後で正装で出てみせてじゃ。そのことは」
「考えられましたので」
ここでも静かに返す彼女だった。
「ですから」
「何とも思わぬのか」
「はい」
その通りだというのであった。

第十六話　正装その十五

「左様です」
「ううむ、わかっておったか」
「私もそうでありますし」
「義父殿もじゃな」
信長の方からの言葉だった。
「そうじゃな」
「殿もわかっておられるではありませんか」
「義父殿は全て承知でわしに合わせてくれたわ」
「おそらくそれはです」
「わかっておる。見ておったのじゃ」
そのこともだ。信長はわかっていたのであった。
「何もかもをな」
「だからこそ私を殿に嫁がせたのでしょうし」
「その頃は確かに思ってはいなかったようじゃがな」
「しかし今はです」
「確かだな」
「間違いなく」
こう夫に話す。
「そしてです」
「ははは、それはこれからじゃな」
ここからは笑ってだった。一端茶を飲んでそこから話す。ここでも酒は飲んではいない。
「これからよ」
「これからですか」
「うむ。さて、暫くは伊勢も種を蒔く時じゃしな」
「それはどうでしょうか」
しかしであった。帰蝶はここでその声を曇らせてきた。そうして

そのうえでなのだった。夫に対してこう言ってきたのであった。その声でだ。

「伊勢はそれでいいとして」

「勘十郎のことか」

「それもあります」

それが主ではないというのであった。

「おそらく駿河はまだ動かないにしてもです」

「美濃で何かあるか」

「兄上のことは御存知ですね」

道三の嫡子であるその義龍のことだ。彼は帰蝶から見れば兄になるのだ。

「あの方のことは」

「見たぞ」

返答は一言だった。妻の横で片膝を立てていつもの傾いた格好で右肩を出しながらだ。そのうえで述べた彼であった。やはり傾いているのは変えない。

「あのやたらとでかい男だな」

「はい」

「わしを嫌っておったわ」

「そして父上も」

「噂では義父殿の子ではないということだが」

このことは尾張でも噂になっていたのだ。彼の母はかつて美濃の守護の側室であり道三が譲り受けたのである。譲り受けてから暫くして義龍が生まれたのだ。

それならばだった。本当の父親がわからないのも道理であった。果たして彼が道三の子か守護である土岐頼芸の子であるのか。それは誰にもわからないことだったのだ。

「どうじゃろうな」

「いえ、兄上はです」

「義父殿の子か」

「私はそう確信しています」
そうだと言う帰蝶だった。
「あの方はあれで」
「鋭いか」
「油断なさらぬよう」
実際に鋭い目で話す彼女だった。

第十六話　正装その十六

「くれぐれも」
「そういえば決して愚かな目ではなかったな」
「そこからおわかりになられますね」
「目でわかる」
孟子にある言葉だった。
「人は目でおおよそな」
「そこに出るからですね」
「そうじゃ。無論それだけでわからぬ場合も多いがじゃ」
「目は確かに話しますから」
「だからよ。それはわかる」
また言う信長だった。
「あの目の光は強いものじゃった」
「父上の目と同じ色の光でしたね」
「どうもその強さもじゃ」
それについても話していくのだった。
「義父殿と同じだけの強さになっておったな」
「ですから。もしや美濃は近いうちに」
「戦乱か」
「御気をつけ下さい」
こう夫に告げるのだった。
「是非共」
「わかった。それではじゃ」
「はい」
「兵の備えは忘れぬ」
それはだというのであった。
「何があろうともな」
「そうされると何よりです」

「あの義父殿はとかく敵が多い」
信長もよくわかっていることだった。道三は美濃を一国を治めていてもだ。その出自や革新的な政策によってだ。土着勢力からの抵抗も多いのだ。それでなのだった。
「それが悪い方に転ぶこともな」
「考えられますので」
「そうじゃな。ではじゃ」
「はい」
「今は尾張の政を第一にし」
それは忘れないのだった。
「第二は美濃への調略」
「そして第三に」
「美濃、そうしていくとする」
「そうされると何よりです」
「伊勢と美濃じゃな」
信長はまた言った。
「そこがこれから大事じゃな」
「尾張で止まるもりはないですね」
「ああ、それはない」
「やはりそうですか」
「尾張だけで終わるものか」
次第に不敵な笑顔になってだ。妻に言うのであった。
「より上よ」
「天下をですね」
「蛟龍は潜み何時か天に昇るものではないか」
「はい、それは確かに」
「ならばよ。わしは昇るぞ」
茶を飲みだ。勢いよく話すのであった。
「その天にだ」
「そして天下を見下ろされますね」

「そうする。よいな」
「はい、それでは私も共に」
「頼むぞ」
こう話をする二人だった。義父道三との会見は成功だった。しかしであった。戦乱が再び信長の前に現れようとしていたのであった。

第十六話　　完

２０１０・１１・１７

第十七話　美濃の異変その一

第十七話　美濃の異変

「殿、美濃ですが」
「どうやら異変が起ころうとしております」
信長のところにだ。こう報告が届くようになってきていた。
「御子息の義龍殿がです」
「怪しい動きを見せておられます」
「これはどうやら」
「謀反じゃな」
信長もそれを聞いて述べた。
「それじゃな」
「そう思われますか」
佐久間盛重がここで主に問うた。
「殿は」
「そう考えるのが普通であろう」
「しかしです」
佐久間盛重はわかっていた。だがあえてだった。ここで再び主に対して問うたのである。
「それは」
「親子だからか」
「はい、親子の間で謀反なぞとは。ましてや義龍殿は既に家督を譲られておりますし」
「親子とても油断はできないのではありませぬか？」
今度は佐久間であった。叔父に対する形で言うのであった。
「今は戦国の世でござるぞ」
「それはそうだがな」
「甲斐でもそうだったではありませぬか」
信長は実はだ。信玄の話をここで出そうとした。しかしそれはだ。

主の心を思い計ってそれで佐久間があえて言ってみせたのであった。
これは彼の主への気遣いであった。
「信玄殿は御父上を追い出してござるな」
「それと同じか」
「そう思いますが」
「しかもあれですな」
金森であった。
「義龍殿は噂によると」４６
「土岐殿の子ということですな」
「あれはまことでしょうか」
「どうなのでござろうか」
「その話はわしも知っておる」
信長もだとだ。自分で言うのだった。
「それは本人もわかっておろう。そうしてこともあればじゃ」
「謀反になるのも道理」
「そういうことでござるか」
「そうよ。義父殿は義龍殿より弟殿達を可愛がっているともいうしのう」
このことも話す信長だった。
「そちらに家督がいくとも考えるな」
「ではそうしたこともありですが」
「美濃では何があってもおかしくはない」
「そうなりますか」
「さて、それではじゃ」
信長はあらためて言ってきた。
「何時でも兵を出せるようにしておけ」
「兵をですか」
「では何かあれば美濃に」
「すぐにでござるな」
「そうじゃ。義父殿を助けるぞ」

毅然としてだ。話すのであった。
「その時はじゃ。よいな」
「はい、それではその時は」
「すぐに兵を出してですね」
「道三殿を」
「さすれば美濃が我等の手に入りますな」
このことを話したのは生駒であった。彼は軍師として話すのだった。
「道三殿を助ければそれで」
「そうじゃな。だがそれはじゃ」
「それは？」
「それはといいますと」
「柿が落ちるのと同じよ」
いぶかしむ家臣達にだ。こう話してみせるのだった。

第十七話　美濃の異変その二

「尾張を手に入れ美濃も手中に収めるとじゃ」
「あとは美濃だけになり」
「さすればですか」
「おのずと殿の手に入られると」
「そうなる。しかし機を逃すのも愚よ」
このこともわかっているのだった。信長は機を見るにも敏だった。
そのうえで話すのであった。今は備えるだけであった。
その時にだった。信長はこんなことも言うのであった。
「して勘十郎じゃが」
「信行様ですか」
「そういえば今も御自身の城に篭っておられますか」
「最近常にでござるな」
「あの津々木とじゃな」
信長からこの名前を出した。
「何かを企んでおるな」
「兵を出しますか」
川尻が提案してきた。
「ここは」
「勘十郎とあの男を捕らえよというのじゃな」
「はい、悪い芽は今のうちに摘み取ってはどうでしょうか」
「そうじゃな。それは悪くないのう」
「では今すぐに。それがしが向かいます」
「いや、待て」
ところがなのだった。信長は川尻のその提案を退けたのだった。
そしてそのうえでだ。こう言ってきたのであった。
「それはまだよ。あ奴はまだ動かぬしな」
「動きませぬか」

「兵がない」
だからだというのである。兵がいなければ何もできはしない。兵はそのまま力である。力がなければどうしようもないことであるからだ。
それでなのだった。彼は今はいいというのであった。
「あ奴は一度動いてもらう」
「ではそれがし達が勘十郎様につき」
「そうしてでございますな」
「そのうえで」
柴田と林兄弟が申し出てきたのだった。信長から信行につきそのうえで目付をするように言われている彼等がなのだった。
「兵を手に入れられてから」
「動かれるかと」
「それを考えてよ」
信長も彼等に話す。
「そなた等にはかなりの兵を預けておるのだ」
「六千五百」
「そこまででござるな」
「これだけあれば動くであろう」
信長の目が光った。
「勘十郎も。後ろにおる者もな」
「後ろですか」
「あの者がいるのは」
「そこ以外に何処にいるというのだ」
信長の目がここで光を変えた。憎しみがそこにあった。
「違うか。勘十郎を操っているのであろう」
「はい、どうやら」
「あれは」
林兄弟が答える。
「そう思って間違いありませぬ」

「そうとしか言えませぬ」
「常に傍にいるそうじゃな」
信長は林兄弟の話を受けてからまた述べた。
「それではじゃ。後ろにおると言っても過言ではあるまい」
「それではです」
前野であった。
「津々木を除いてしまえばいいのでは」
「確かに。それならば」
「容易でござるな」
佐々と山内が前野のその言葉に頷いた。
「勘十郎様もそれで御自身を取り戻されます」
「それで万事解決でござるな」
「では殿」
丹羽が彼に言ってきた。

第十七話　美濃の異変その三

「それで如何でしょうか」
「五郎左もそれでよいと思うな」
「勘十郎様に落ち度はありませぬ」
これは誰もがわかっていた。信長でさえもだ。
「操られているだけですから。しかも得体の知れぬ術で」
「忍術にはそうしたものもあります」
忍の出の滝川の言葉だ。
「かなりの使い手でない限り使えませぬがそれでもです」
「ではあの者忍か」
「どの家の者だ？」
「今川か？」
まずは今川が疑われた。織田との関係を考えればこれは当然のことだった。
「若しくは斉藤義龍の手の者か」
「それとも伊勢の者の誰かか」
「一体誰だ」
「どうなのだ」
「待て」
信長は家臣達の話し合いはここでは止めた。そのうえでまた話すのであった。
「勘十郎に落ち度はないか」
「はい、そう思います」
「それは殿も考えておられるのではないのですか」
「それは違いますか」
「普通ならそう言う」
言う、と述べるのであった。
「普通ならばな」

「といいますと」
「今は違う」
「そう仰るのですか」
「そうよ、勘十郎はわしのすぐ下の弟ぞ」
このことが重要だった。彼の弟であるということがだ。
「一門の中で筆頭となる者だ」
「殿の片腕として」
「そうしてですね」
「あれは戦は上手くない」
これは認めるのだった。誰でも得手不得手があるが信行は戦はあまり得意ではなかった。馬も剣も弓も兄程できはしないのだ。
「しかし政はよい」
「確かに。何かとよく見られます」
「政なら何でもそつなくこなされます」
「そうした方でござるな」
「その勘十郎が得体の知れぬ者に操られたとあってはどうだ」
信長が家臣達に問うのはこのことだった。
「織田家にとってはどうだ」
「その威信に関わりますな」
「まさに」
「それは」
「そういうことだ」
これこそがだ。信長の言いたいことであった。
「まず勘十郎に落ち度自体はない」
「はい」
「さすれば御命はですか」
「取るつもりは最初からない」
信長もこれは考えていなかった。完全にだ。
「ましてやあ奴は織田家に必要な者だからのう」
「左様です、ですから」

「それだけはなりません」
「勘十郎様の御命だけはです」
「だからわかっておる」
またこのことを言う信長だった。
「それは絶対にないから安心せよ」
「むしろ津々木です」
「あの者は何があろうともです」
「討つべきです」
「今すぐにでも」
「確かにあ奴は討つ」
信長はこのことについても既に決めているのだった。だがその決めたことは信行に対するのとは全くの正反対であったのである。

第十七話　美濃の異変その四

「しかしそれはじゃ」
「それは」
「どうだというのですか」
「今ではない」
こう言うのであった。
「あ奴はまだ討たぬ」
「では信行様もあのままですか」
「今は」
「そうだというのですか」
「左様、その通りだ」
信長はここでもだった。断言してみせたのであった。
「泳がせておく。そして謀反を起こさせだ」
「その時に津々木をですな」
「討つ」
「そうされますか」
「その後で勘十郎は軽く処罰する」
それはするというのであった。
「それはな」
「しかし御命は、ですか」
「そこまでは」
「そうじゃ。軽くでよい」
また言う信長だった。
「それでな」
「何はともあれあの男は」
「何があろうともですな」
「その時が来れば」
「消す」

今度はこの言葉だった、
「よいな」
「ではその用意はあらかじめ」
「今からしておきましょう」
「あ奴に気付かれぬように」
「そうしておけ。ただしじゃ」
信長はその津々木についても決して侮ってはいなかった。相手が誰であろうと決して侮り見くびることはない、それが彼なのだ。
「あの者を馬鹿にはするな」
「慎重にですね」
「そしてそのうえで捕らえ」
「そして斬ると」
「そうする。わかったな」
「わかっております」
平手が家臣達を代表して応える。
「では。あの者はその時に始末するとしまして」
「今のことじゃが」
信長は話を変えた。
「義父殿よ」
「はい、蝮殿ですな」
「やはり危ういですか」
「このままでは」
「間違いないな」
信長ははっきりと言い切ったのだった。
「義父殿の敵は多い。それに対してじゃ」
「義龍殿が土岐氏の者と喧伝したならばですな」
「それだけで美濃のかなりの者がつく」
「そうなりますな」
「そうなれば義父殿は終わりよ」
信長の言葉は冷徹であった。しかしそこには道三を気遣うものも

あった。ただ現実だけを冷徹に見ているのではないのであった。
「どうにもならぬ」
「ではその時はですな」
「我等が動きそのうえで」
「蝮殿を助けますな」
「そうする。ではよいな」
「はっ」
家臣達はまずは一斉に応えた。
「備えあれば、ですな」
「何時でも出られるようにしておけば」
「何の憂いもありませぬ」
「それに」
しかもなのだった。織田には一つの強みがあった。

第十七話　美濃の異変その五

「兵と農は分けております」
「何時でも戦えます」
「そう、田の刈り入れの時でもです」
「問題はありません」
「そういうことよ。兵と農はじゃ」
信長もそのことについて述べるのだった。
「分けていけばよいのじゃ」
「百姓は戦に借り出される心配なく田畑に専念でき」
「兵は戦のことだけを考えて鍛え戦える」
「まさにそれですな」
「つまりは」
「左様、それでよいのじゃ」
これが信長の考えだった。兵と農を分けたのには多くの理由があったのである。
そしてだ。彼はこうも話した。
「とにかく尾張の兵はじゃ」
「弱いですな」
「それはどうにもなりません」
「兵が弱いといえばです」
織田の代名詞だった。とにかく尾張の兵は弱いのだった。
その他に弱い兵といえばだ。
「三好、北条、今川、毛利と並んでと言われますな」
「強いは上杉、武田、それに島津ですな」
「我等は薩摩隼人一人で住人はやられるとか」
「そこまでだとか」
「話にならんわ」
信長は苦笑いで言い捨てた。その弱い己の兵達をだ。

「全くのう」
「その通りでござる」
「しかし兵を戦に専念させ鍛えさせることによってですな」
「それが大きく変わる」
「左様ですな」
「うむ、そうじゃ」
頷いてみせる信長だった。
「これでかなり違うがのう」
「一万五千の兵が常に戦えるとなればですな」
「確かに全く違います」
「美濃にも向かえます」
「何時でも」
「そしてだ」
信長はここでまた言う。
「美濃への密偵は増やしておけ」
「はい、わかっております」
「それについては既にです」
「大勢向けておりますので」
「御安心を」
「今のところ武田は動くまい」
信長は彼等も見ていた。美濃の隣国信濃を領有している彼等をだ。
そのことは忘れてはいなかったのだ。常に頭の中にあった。
「その信濃を治めるので忙しいからのう」
「そういえば武田は攻めるのは速いですが」
「その土地への政は時間をかけますな」
「それもかなり」
「それが甲斐の虎よ」
信長はよくわかっていた。信玄のことをだ。
「武田は確かに戦に強い」
「しかしそれが真の目的ではない」

「そうなのですか」
「武田の最大の関心は政にある」
「手に入れた土地をどうして治めるか」
「それこそがなのですか」
「信玄殿の関心だと」
家臣達も信玄についてこう話すとだった。ふと自分達の主のことを思い出すのだった。今彼等の目の前にいるその彼をである。
「まずは政があり」
「その為の戦ですか」
「やはり戦が主ではないのですね」
「そうじゃ。武田はあくまで政よ」
信長はこのことを強調するのだった。

第十七話　美濃の異変その六

「戦はその後ということよ」
「では今はまだ動きませんか」
「信濃から」
「とりあえずは」
「上杉との戦いも一段落した。
川中島での死闘のことであるのは言うまでもない。
「さすればよ」
「そこから政に専念して信濃を治める」
「美濃は今はどうでもよいと」
「だからこそですか」
「そうよ、暫くは武田に美濃を襲われる不安はない」
信長はこのことは見抜いていた。しかとだった。
そしてだ。その見抜いた目でさらに話すのであった。
「そして武田以外の勢力は」
「飛騨の三木は問題ないですな」
「あの家については」
「何の心配もござらるな」
「あの家はどうでもよい」
信長も彼等については素っ気無い。
「気にすることはない」
「まず力がありませんな」
このことが指摘された。
「飛騨は貧しくそれで美濃を攻めるなぞとても」
「飛騨を守るだけで手が一杯でござる」
「それで攻めるなぞとても」
「有り得ませんな」
「しかもです」

三木の問題がただ力がないだけではないのだった。その他のことも指摘され述べられていくのであった。信長の家臣達も見ているのだった。

「飛騨はあまりにも険しい国です」

「外に出ることすら中々できませぬ」

「そうした国だからこそ」

「攻めてくる不安はありませぬな」

「さしあたってはどうでもいい場所だ」

信長もこれで終わらせる程だった。

「あそこはな」

「では飛騨はどうでもよい」

「摩ればここで問題となるのはです」

「あの国の者達ですな」

中川が鋭い顔で述べてきた。その国は。

「近江ですな」

「そうか。あの国か」

「浅井に六角」

「その二つですな」

「そういえば浅井では」

どうなのかとだ。木下が話してきた。

「家督が譲られたそうですな」

「久政殿ではなくなったと」

「では嫡男の長政殿が受け継いだか」

「そうなったか」

「その様でござる」

実際にこう述べる木下だった。

「どうも家督争いになりそれで」

「父を斬ったのじゃな」

「戦乱の世はいえ惨い話よ」

「全くよ」

「聞く話だが難儀なものよな」
「待て」
しかしだった。ここで彼等に信長が言ってきたのだった。
「久政殿よな」
「はい、そうです」
「あの方ですが」
「今は」
「死んだとは初耳よ」
あえてこう返す信長だった。
「久政殿は死んではいないと」
「殿はそう見ておられるのですか」
「ここは」
「生きておる」
断言であった。

第十七話　美濃の異変その七

「間違いなくな」
「では隠居させられて」
「そうしてですか」
「実験は長政殿が」
「そうなっておる。そして」
信長の言葉は続く。
「長政という者。面白いようじゃな」
「というと傾いておられるのですか」
「長政殿もまた」
「殿と同じような」
「あの者は傾いてはおらん」
ここでも否定する信長だった。彼は今はそれが多くなっていた。
「至って真面目な男よ」
「真面目ですか」
「では別の意味で、ですな」
「面白い方と」
「そう仰いますか」
「そういうことよ。できるぞ」
信長はまた言った。
「それもかなりよ」
「では美濃に攻め入ることもです」
「それも有り得ますな」
「やはり」
「いや、その前にだ」
信長はわざとだ。前置きしてみせた。
そのうえでだ。こんなことを話すのだった。
「食い合うぞ」

「食い合うといいますと」
「浅井がですか」
「美濃に攻め入る前に」
「これでわかるな」
にやりとさえしていた。それが今の信長だった。
「ここまで言えば」
「六角と争いますか」
「美濃に攻め入る前にまずお互いがでござるな」
「そうなりますな」
「そういうことよ。だから今はじゃ」
どうだという。そしてその先の言葉は。
「我等織田が美濃を手に入れる好機よ」
「ですな」
「今こそまさに」
「その時です」
「まあ無理はせぬ」
それはだというのであった。
「何よりも大事なのはじゃ」
「義父殿ですな」
「あの方の御命を」
「何よりもですな」
「そうじゃ、まずは義父殿よ」
その通りだと話す信長だった。
「義父殿を救えねば美濃を手に入れても何の意味もない」
「だからこそですな」
「ここは何としても」
「あの方を」
「そうだ。義父殿を助けられなければだ」
信長は決意を込めて語るのだった。
「美濃を手に入れる意味なぞない」

「では。必ず義父殿を」
「その時はお助けしましょう」
「そうだ。よいな」
「はい、それでは」
「その時はすぐに兵を」
織田の者達は何時でも動けるようにその態勢を整えていた。そしてであった。
美濃ではだ。信長の予想通り異変が起ころうとしていたのであった。
義龍がだ。己の周りに家臣達を集めそうして話すのだった。
「ではだ」
「はい、それではです」
「まずは弟君達をこの稲葉山に呼びましょう」
「そしてそのうえで」
「理由はもう考えておる」
義龍は確かな顔で述べた。
「わしは病を得た」
「そういうことですな」
「そうして家督を継がせるということで」
「そうされるのですね」
「その通りよ。そしてだ」
義龍の言葉はさらに続くのだった。

第十七話　美濃の異変その八

「父上はどうか」
「はい、今のところはいつも通り稲葉山から出られてです」
「御自身の居城におられます」
「変わりません」
「ではだ。その後でだ」
「はい、兵を挙げましょう」
「この稲葉山で」
家臣達も述べる。そしてなのだった。
彼等は今は息をこらしていた。そのうえで策を練っていた。しかしそれについてだ。道三は動く気配一つ見せてはいなかった。
その彼はだ。竹中達にこう言うのであった。
「義龍が動こうとしておるな」
「はい」
「どうやら」
「その様ですな」
三人衆がこう道三に応えた。不破もいる。
「御子息方を稲葉山に招かれようとしています」
「どうされますか、ここは」
「行かせますか」
「馬鹿を申せ」
それはないとだ。動産は断言した。
そしてだ。こう竹中達に告げるのだった。
「息子達は美濃から去らせよ」
「そうして御命をですね」
「助けられますか」
「そうする。むざむざ殺されるとわかって行かせる道理はない」
道三も人である。それならばだった。我が子をむざむざ死にに行

かせる筈がなかった。ましてやであった。
「それにだ」
「それに？」
「それにといいますと」
「あの者達を去らせると義龍もすぐに察する」
そうなるというのだった。
「そしてすぐに兵を起こすだろう」
「結果は同じですか」
「そうなりますか」
「必ずなる。さすればよ」
そうなればというのであった。
「むざむざ死なせることもあるまい」
「ではその向かわせられる先は」
「どちらでしょうか」
「無論尾張よ」
信長のいるそこだというのだった。
「婿殿に行かせるぞ」
「はい、わかりました」
「それでは」
「そしてじゃ」
息子達のことを話してだった。道三はさらに話すのであった。
「そなた達じゃが」
「はっ、それではです」
「何時でも兵を出せるようにしておきます」
「ことがあればその時は」
「すぐにでも」
実際に兵を持っている三人衆と不破が名乗りをあげてきた。
「では殿」
「稲葉山をですな」
「兵を挙げて囲みましょう」

「そして陥しましょう」
「いや、よい」
だが、だった。道三はここでこう言ったのであった。
そうしてだ。今度はこう言うのであった。
「兵を用意する必要はない」
「？殿」
「といいますと一体」
「それはどういうことですか」
「意味がわかりませんが」
「そうです」
四人だけでなく竹中も言ってきた。怪訝な顔になっている。
「義龍殿は相当な兵を稲葉山と御自身の周りの方々に備えさせています。それで兵を用意させないというのはです」
「危ういというのだな」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのであった。

第十七話　美濃の異変その九

「義龍殿は優に一万を超えるの兵を用意されますが」
「我等四人で八千です」
「そして殿が持たれている二千の兵を合わせて場勝負になります」
「それで」
「よいのだ」
また言う道三であった。とにかく兵を動かすなというのであった。
「わしだけで戦う」
「ですがそれでは」
「御命が」
「よい」
また言ったのだった。
「その時はよい。それよりもだ」
「婿殿をですか」
「見極めよと」
「そう仰るのですな」
「わしは止める」
信長をだというのだ。
「絶対にな。しかしだ」
「来られればですね」
竹中がここで言った。
「そうされたならば」
「まずは合格よ」
道三もそれでいいとだ。言うのであった。
「若しただの野心だけの者ならばだ」
「殿を見捨て敵を精々減らしたところで」
「そこで美濃に入り残った義龍様を討つ」
「そうされますな」

「しかし来たならばだ」
その場合についての話をするのであった。それも細かくだ。
「わしを見捨てることはなかったということよ」
「例え無駄だとわかっていても」
「殿のことを思いですな」
「だからこそ」
「芝居でもできるがあの婿殿はそれはせぬ」
これはもうわかっていたのだ。あの会見の時で信長のそこまで見抜いていたのである。
「何があろうともな」
「何かをされるなら極端にされる」
「あの方はそうした方でござるな」
「傾奇から正装に」
そこにこそ出ているのだった。信長はやるからには徹底的にやる、そのことが会見でわかったのである。あくまでわかる者だけにわかることであるがだ。
「ではその婿殿が来られるとなると」
「まずは合格ですな」
「美濃の主として」
「そしてさらに上に行かれる方として」
「左様」
こう竹中達に述べる道三であった。
「その通りよ。それでまずは及第よ」
「ですが。それだけではありませんな」
「婿殿への出題は」
「まだありますな」
「後は。尾張に必ず今川が来る」
道三は既にこのことを察していた。彼も今川の動きは注視していた。今川が武田、北条と手を結び後顧の憂いをなくしたのは何の為か、そしてその兵を何処に向けるのは。答えは出ていることだった。

「それを防ぎだ」
「そしてそこから生き残られた後で」
「さらにですな」
「そうじゃ、厳しくいく」
道三は楽しげに笑って話を続けるのだった。
「そしてそこからよ」
「伊勢ですな」
「婿殿は近頃伊勢及び志摩に随分と人を送られているとか」
「それでどうされるか」
「それも見てからですな」
「そうじゃ。決めよ」
彼等への言葉だった。
「そなた等がだ」
「婿殿を主とするかどうか」
「それをですな」
「それにあたってだ」
道三はここで懐から何かを出してきた。それは。

第十七話　美濃の異変その十

札だった。しかもそれは普通の札ではなかった。それは。
「おや、これは」
「勘合札でござるな」
「そう、それでござるな」
「明との貿易に使うあれですか」
「そうよ、それよ」
まさにそれだというのであった。
「これを一つずつそなた達にやろう」
「一方はそれぞれ我等が持ち」
「そしてもう一方は」
「そういうことでござるか」
「その通りよ。婿殿に渡しておく」
道三は彼等に静かに話していく。
「事情を話してな。だがそなた達の名は出さぬ」
「して我等が婿殿を完全によしとされた時に」
「婿殿の御前に札を持って現れて」
「そうされよと」
「そうよ、あくまでそなた等が決めよ」
これは強く言う道三であった。
「よいな」
「はっ、それでは」
「ではその様に」
「これでよし」
道三の言葉はここでさらに強いものになった。
「後はだ」
「戦われますか」
「最後の戦を」

「一花咲かせてみたくもなった」
道三はふと笑みも浮かべたのであった。
「この歳になってな」
「ははは、それではでござる」
「我等、その殿の最後の一花を見させてもらうでござる」
「是非共」
「そうさせてもらいます」
「済まぬな」
道三はここでもだった。笑って言うのであった。
「そなた達の考えを見ずにな」
「いえいえ、御覧になられたうえでのことですから」
「我等もそれで結構です」
「後は。見させてもらいます」
「殿を。そして」
そして、なのだった。次に言うのは。
「婿殿もまた」
「見させてもらいましょう」
「そうしてくれるか」
道三は最早思い残すことはなかった。そしてであった。我が子達を半ば強制的に尾張に送り届けさせたのであった。
彼等はすぐに清洲に預けられた。当然信長は彼等を匿った。しかしであった。
信長は彼等を匿ってすぐにであった。家臣達を集め告げるのであった。まずは平手にであった。
「爺、そなたがだ」
「留守をですな」
「清洲に残り守ってくれ」
こう彼に告げてからであった。他の者達を見回してであった。
「そして他の者はだ」
「はい、すぐに出陣ですな」

「それでは」
「ことは一刻を争う」
このことがわかっていた。だからこそなのだった。
「すぐに出陣するぞ」
「はっ、では今より」
「我等もまた」
「兵は一万じゃ」
兵の数も言う信長だった。
「それで出陣するぞ」
「残り五千で、ですね」
「尾張の守りを」
「そうじゃ、そうする」
まさにそうだと話す信長だった。
「その五千は爺に任せたぞ」
「では。尾張はお任せ下さい」
すぐに返す平手であった。
「この爺が命にかえましても」
「まあそこまで気張らずともよい」
信長は生真面目な平手に微笑んでこう告げた。

第十七話　美濃の異変その十一

「別に何処も攻めて来ることもないしのう」
「確かに。今川も今は備えているようですし」
「伊勢は国人同士でいがみ合っております」
「さすれば」
「五千もあれば充分よ。むしろ多い位じゃな」
「しかし五千ですか」
「それだけの兵を置いておくと」
「うむ、置いておく」
こう家臣達の言葉に述べる。またしてもであった。
「流石に一人もおらんのでは今川もすぐに攻めて来るからのう」
「それに勘十郎様もですな」
「動かれる恐れがある」
「そういったことを考えての五千じゃ」
そうだというのであった。信長はそこまで考えているのであった。今の尾張は決して安寧たる状況にはなかったのである。むしろその逆だった。
そうしたことを踏まえて彼は兵を置きそのうえで一万の兵で美濃に向かった。そしてその頃にはであった。
美濃では戦がはじまろうとしていた。稲葉山の義龍が動いたのである。
「弟達は尾張に逃げたか」
「逃がされたと言うべきでしょうか」
「大殿が」
周りの者達が彼にこう話してきた。
「どうやら察されたようです」
「殿が弟君達を誘い出し暗殺されようとしていたことを」
「どうやら」

「そうであろうな」
それは義龍もわかった。それも実によくだ。
「そうでなければよりによって尾張に行かせはさせぬ」
「それで弟君達はあのうつけ殿のところに身を寄せておられるようです」
「それで殿」
「どうされますか」
家臣達は義龍に尋ねた。
「ここは」
「刺客を放たれますか」
「いや、それはよい」
いいというのであった。
「今更あの者達を殺めたとしてもだ。何にもならぬ」
「左様ですか」
「それで」
「それに尾張にいてはだ」
ここで義龍の顔に忌々しげなものが宿った。
「手だしできぬ。尾張に放った密偵は近頃ことごとく姿を消しておるしな」
「どうやら織田の家臣に忍に強い者がいるようですな」
「どうやら」
「忌々しい話だ」
こう言う義龍だった。まさにその忌々しげな口調でだ。
「全く以ってな」
「織田は家臣はいいようですな」
「主はうつけ殿でも」
「それでも」
「そうだな。しかしだ」
それでもなのだった。義龍は信長についてはこの認識を変えなかった。ここでもだった。

「主があれだけのうつけ殿ではな」
「どうしようもありませんな」
「全く」
「そうよ。そしてじゃ」
義龍は話を元に戻してきた。
「弟達はもうよい」
「はっ、それでは」
「どうされますか、これから」
「最早こうなっては隠す道理もない」
信長や道三の読み通りだった。義龍は気付いてはいないがだ。
「兵を起こす。そしてよ」
「鷺山の大殿を攻め」
「そのうえで」
「滅ぼす。よいな」
「はっ、では今すぐに」
「兵を集めてですな」
「一万二千は集まるな」
兵の数もであった。道三の読み通りであった。

第十七話　美濃の異変その十二

「それに対して父上の兵は」
「二千足らず」
「勝負は見えていますな」
「最早」
「そうじゃな。しかしだ」
義龍はだ。既に勝利を確信している家臣達にだ。咎める声で話してきた。
「父上が相手ぞ」
「美濃の蝮と言われた方」
「その方が相手ならばですな」
「決して油断してはならない」
「そういうことですな」
「その通りよ」
まさにそうだとだ。義龍は言うのだった。
「よいな、最後の最後まで気を抜くな」
「大殿の首を見るまでは」
「決して」
「父上の首を取った者には思うがままの褒美をやる」
それを言うのも忘れてはいなかった。
「だからだ。よいな」
「はい、それでは」
「今より兵を集め」
「そして鷺山を」
「三人衆や不破はどうか」
彼等が道三に近い立場にいることは既に美濃の誰もが知っている。だからこそ義龍は彼等のことを聞いたのである。今後の戦略の為にだ。

「あの者達はどうか」
「動かぬようです」
「どうやら」
こう答える家臣達だった。
「そしてあの竹中もです」
「自身の城に入ったまま動きません」
「決して」
「左様か。ではあの者達はよいな」
「その兵も」
「案ずることはないと」
「見張ってはおけ」
このことを言うのも忘れない。義龍は何処までも慎重である。
「よいな」
「目を離さずですか」
「常に」
「そうだ、油断ならぬ」
しかしなのだった。ここでこうも言う義龍だった。
「しかしだ。あの者達はだ」
「三人衆と不破殿、そして」
「竹中もですか」
「その五人は」
「美濃にとって必要な者達だ」
その才をわかっているからこそだった。義龍は言うのであった。
「だからだ。ここでわしにつかずとも動かなければだ」
「用いられますか」
「そうされるというのですね」
「うむ、そうする」
まさにその通りだというのであった。
「わしが主となった後の美濃を治める為に必要な者達だ」
「だからこそ動きさえしなければ」

「用いられますね」
「そうされると」
「その通りよ。さて」
ここまで話してだった。また言う義龍だった。
「これからにかかっておるぞ」
「美濃は」
「どうなるかがですね」
「そういうことよ。では兵を起こす」
こうしてだった。義龍は挙兵した。その鬨の声は稲葉山城とは長良川を挟んで向こう側にある鷺山城にも届いたのだった。
それを聞いてだ。道三の周りの者達が彼に告げてきた。
「では殿」
「我等も今より」
「兵を」
「よいか」
道三は己の座に座ったまま述べるのだった。
「親や妻子のある者はだ」
「はい」
「どうされよと」
「無理にでも去らせよ」
こう周りに告げるのだった。

第十七話　美濃の異変その十三

「無論兄弟のおる者もだ」
「では。死んでも誰も悲しまない者だけで、ですか」
「この度の戦を行うと」
「そうされるのですね」
「そうよ、この戦い勝てるものではない」
そのことはもうわかっていることだった。誰でもだ。
「そしてわしの首は何があろうとも手に入れようとするであろう。さすればよ」
「親兄弟、妻子のいる者は」
「去らせてですか」
「その他にも去りたい者は去れ」
こうも告げるのだった。
「よいな、死んでもよい者だけが残れ」
「そうして戦えと」
「この鷺山城で」
「そうじゃ、これでわかったな」
「はい、ですがそれでは」
「兵は殆ど残りませんが」
「構わん」
また言う道三だった。毅然とさえしてだ。
「この戦は勝てるものではないからだ」
「死ぬ戦だからこそ」
「僅かな兵だけでもよい」
「左様ですか」
「身寄りがおらぬ者も命が惜しければ去れ」
またこのことを話す道三だった。
「わかったな」

「いえ、殿」
しかしだった。ここで一人の精悍な武者が出て来たのであった。
背は高くその右肩に笹の葉を刺している。背は高く顔には彫があり引き締まっている。その彼が道三の前に進み出て言うのだった。
「それがしも」
「そなたは確か」
「可児でござる」
こう名乗る男だった。
「可児才蔵でござる」
「そうだったな。確か御主も」
「親がいますが御気になされぬように」
「馬鹿を申せ」
すぐにそれは拒む道三だった。
「わしは今言ったな」
「ですがそれは」
「御主も駄目だ。ここは去れ」
「しかしです。それがしは」
「そなたが戦う場はここではない」
道三は可児に厳しい声を告げ続ける。
「そして使えるべき主もだ」
「大殿ではないと」
「丁度よい。そなたにだ」
「それがしにでござるか」
「頼みたいことがある」
己の前でその大柄な身体を平伏させる可児への言葉である。
「よいか」
「一体何でしょうか」
「そなたにこれを渡す」
懐からあるものを出した。それは。
「木の札でござるな」

「如何にも。これを持ってだ」
「はい、一体どうせよと」
「尾張に行け」
これが可児に命じたことだった。
「よいな、尾張に行くのだ」
「そしてどうされよと」
「そのまま婿殿の家臣となるのだ。わしの言葉をそのまま伝えてじゃ」
「ではそれがしはこれからは」
「織田の家臣になれ。よいな」
「そしてそこで戦をせよと」
「うむ、そなたの力存分に振るうがいい」
そしてだった。ほかの家臣達にも告げるのだった。
「御主等もだ」
「仕えるのならばですか」
「尾張の婿殿に」
「左様じゃ、して可児よ」
またしても可児に声をかけた。

第十七話　美濃の異変その十四

「その札は婿殿に必ず手渡す様にだ」
「そして時が来れば」
「左様、婿殿にとって大きな力となる故にじゃ」
「わかり申した」
ここで遂にであった。可児も頷くのであった。そしてであった。
彼はだ。今の主に対して述べた。
「では。今より尾張に」
「向かってくれ。よいな」
「はっ」
「もっとも。婿殿はじゃ」
道三はすっと笑ってまた述べた。
「既に出陣しておるだろうな」
「そしてここにですね」
「向かわれているというのですね」
「そうじゃ。しかし間に合わぬな」
道三はこのことも読んでいた。既にだ。
「そして婿殿もそれはわかっておる」
「それでもなのですか」
「出陣される」
「そうされるのですか」
「そうせずにはいられんからな」
「といいますと」
「それは何故でしょうか」
家臣達は今の主の言葉にはいぶかしむ。するとだった。道三はその問いにも答えたのだった。
「聞くがだ」
「はい」

「何でしょうか」
「そなた等は親が病で助からないとするぞ」
「その時はですか」
「どうするかというのですね」
「そうじゃ。そのまま見ているだけでおるか」
こう問うのであった。
「そのまま死ぬのを。見ているだけか」
「いえ、流石にそうなるとです」
「とてもそうはしていていられません」
「駄目とわかっていてもです」
彼等も答える。その時はどうするかをだ。
「医者を呼び祈祷をしてもらいです」
「傍にいて何とか手を尽くしてです」
「駄目なのがどうにかなるやも知れませんし」
「ですから」
「そういうことよ」
ここで道三はまた言ってみせた。
「だからよ。婿殿もそれは同じよ」
「そういうことなのですか」
「それで婿殿は今出陣される」
「だからですか」
「左様、だからこそ今出陣しておるのよ」
尾張にいる彼のことをだ。道三は見えていたのだ。その心でだ。
「そういうことよ」
「では大殿、ここはですか」
「その婿殿の為に」
「あえて」
「戦うぞ」
こう述べた。今は。
「よいな、それで」

「はい、では」
「戦う者だけを残し」
「そしてそのうえで」
「最後の最後まで戦いましょうぞ」
「思えばじゃ」
道三は立ち上がった。今度はそのうえでの言葉だった。
「一介の小坊主がここまで来た」
「美濃の主にですな」
「多くの戦いを経てきた」
これまでの生涯を思い起こしながら。今語るのだった。
「切って切られ。多くの戦を生き抜いてきたがじゃ」
「それも最後ですな」
「この戦で」
「最後の最後でよい息子を得られた」
頭の中に信長を思い浮かべてだった。彼は語っていた。

第十七話　美濃の異変その十五

「幸いなことじゃ」
「ではその御子息に」
「やがては美濃を」
「美濃だけではないな」
温かい声になっていた。まさに父の声だ。
「それより上じゃ」
「では天下の夢も」
「あの方に」
「授けることになるな。それではじゃ」
「では。今より」
「戦としましょう」
「我等の。最後の戦ですな」
家臣達は一斉にそれぞれの場に向かった。皆鎧を着、そして刀や槍を手にした。道三は遂に最後の戦いに向かうのであった。
そしてだ。信長はこの時一万の軍を率いて美濃に向かっていた。青い軍が一直線に美濃に向かう。彼はその中で言うのだった。
「急ぐのだ、よいな」
「はっ、無論です」
「できる限りの速さで美濃に向かっております」
「御安心を」
こう答える家臣達だった。しかしであった。
森可成がだ。ここで信長に言ってきたのであった。
「ですが殿」
「義父殿のことじゃな」
「はい、我等はこうして向かっていますが」
「わかっておる」
信長は正面を見てそのうえで静かに述べた。

「どうあがいてもじゃ」
「間に合いませんな」
「鷺山の兵は少ない。それに対して稲葉山の兵は多い」
「六倍の差があるかと」
「しかもじゃ」
道三が何をするか。信長はこのこともわかっていた。
それでだ。こう言うのだった。
「義父殿は命が惜しくない者だけを残される。家族を持っている者は最初から帰らせてな」
「ではその数は」
「相当少ないですな」
「千もいないでしょう」
「それで一万二千の大軍と向かうとなると」
「如何に蝮殿とはいえ」
「それでは」
「死ぬな」
ここでは一言だった。
「間違いなくな」
「ですがここは何としても急ぎです」
「道三殿をお救いしましょう」
「そうされますね」
「無論。諦めるつもりはない」
信長の今の言葉は強いものだった。
「何があろうともじゃ」
「では。意地でも美濃に向かい」
「そして道三殿をお助けしましょう」
「それで宜しいですな」
「うむ、そうするぞ」
また言う信長だった。
「いざ、美濃にだ」

「はい、それでは」
「今より」
こうしてだった。青い軍勢一万が美濃に向かうのだった。道三の最期の時が近付いていた。だがそれでも彼等は向かうのだった。あえて。

第十七話　完

２０１０・１１・２６

第十八話　道三の最期その一

第十八話　道三の最期

稲葉山城からだ。今一万二千の大軍が出陣した。
「進め！」
「まずは川を渡れ！」
「よいな！」
その大軍にだ。次々と指示と叱咤の声が届く。
「そして城を取り囲むぞ」
「そのうえでだ」
「斉藤道三の首を討て！」
あえてだった。大殿という尊称は用いられなかった。しかもだ。
彼等は口々にこう言うのだった。
「前守護様を追い出した謀反人を討て！」
「生きて帰すな！」
「決して逃すな！」
それを聞いてだ。足軽達はこう囁き合うのであった。
「ではやはり」
「義龍様は道三様の御子ではなかったのだな」
「前守護の頼芸様の」
「土岐様の方だったのだな」
このことが言われるとだった。美濃の軍勢の雰囲気が変わった。
そしてだった。
軍の中枢で指揮にあたる義龍に対してだ。こう声をあげるのであった。
「義龍様の為じゃ！」
「土岐様の為じゃ！」
「皆戦おうぞ！」
「そうしようぞ！」

それを聞いてだ。鎧の上に陣羽織を着ている義龍も満足した顔で言うのであった。
「士気があがってるな」
「はい、やはり殿が土岐様の方であるとわかればです」
「誰もが士気をあげます」
「そうなります」
「それだけ斉藤は嫌われておったか」
義龍はふとこう呟いた。
「ここまでということは」
「そうですな。確かに」
「我等はやはり土岐様に代々お仕えしてきましたから」
「どうしてもです」
「左様か、やはりそうなるか」
義龍も彼等のその言葉を聞いて述べた。
「土岐か」
「この美濃は土岐様の国です」
「ですから。義龍様が土岐様の血を引いておられるならです」
「我等もまたお仕えします」
「そういうことです」
「ではだ。わしはだ」
義龍もまた、だった。その彼等の言葉を受けて言った。
「土岐の者となりそのうえでだ」
「はい、そのうえで」
「大殿をですな」
「斉藤氏を」
「滅ぼす。馬を出せ」
こう命じた。するとだ。
すぐにその馬が来た。大柄な彼に相応しく途方もなく大きな馬だ。
その馬に乗りそのうえでだ。軍配を大きく上から下に振るい前を指し示した。

「全軍進撃！川を渡れ！」
「はっ！」
「では全軍で」
「敵の数は少ない！」
千もいないことはだ。彼も知っていた。だからこそこう言うのだった。
「敵のいる場所に弓や鉄砲を放ちだ」
「そしてそのうえで」
「川を」
「そうだ、一気に渡るのだ」
これが彼の命だった。
「そして敵は踏み潰せ」
「そのうえで鷺山城も」
「そこまで」
「そうだ、数を使って攻めよ」
これが彼の今の戦術だった。そしてだった。
彼自ら軍の指揮にあたりだ。戦うのだった。
義龍のその大軍が今一気に長良川に迫る。それに対して道三の千にも満たない軍は弓や鉄砲を放とうとする。しかしだった。
「撃て！」
「今だ！」
待ち構えていた義龍の兵達が逆に弓や鉄砲を放ちだ。彼等を退けるのだった。

第十八話　道三の最期その二

「数はこちらの方が圧倒している！」
義龍が馬上から叫ぶ。彼はその川を渡る軍のところにいる。
「だからよ。ここはだ」
「はい、まずは向こう岸の兵達を弓や鉄砲の嵐で散らし」
「そしてそこを一気に渡ります」
「そうするのですね」
「そうよ、そうするのだ」
これが義龍の作戦だった。
「わかったな」
「はい！」
「では！」
こうしてだった義龍の兵達は川を渡りにかかる。兵力において大きく劣る道三にはもうそれを防ぐ手立てはなかった。
その有様を見てだ。道三は思わず呟いた。
「やりおるわ」
「義龍様がですな」
「そうですな」
「そうだ、義龍だ」
その彼がだ。やるというのだった。そしてその彼を見てまた言うのだった。
「あれの大柄は母親譲りだがな」
「そうですな。あの方も大きな方でした」
「さすれば義龍様もまた」
「そして。本当にわからなくなってきたわ」
これが道三の言いたいことだった。
「あれは本当にわしの子やも知れぬな」
「大殿のご子息なのですか」

「土岐様ではなく」
「違うのではないかと本気で思った時もあった」
彼にしてもそうだったのだ。父親となっている彼でもだ。
「だが。あの戦い方はだ」
「理に適っていますな」
「しかも敵味方のことをよくわかっておられます」
「地のことも」
「見事だ」
道三もこう言った。そしてなのだった。彼はこう言うのだった。
「あれはやはりわしの」
「ですか」
「そうだと」
「少なくとも育てたのはわしだ」
「そうですな、それは」
「確かに」
家臣達も道三の今の言葉に頷く。
「ではやはり」
「義龍様もですね」
「大殿の」
「今わかった」
また言う道三だった。
「そのことがな」
「左様ですか、今ですか」
「それがおわかりになられたのは」
「ずっとわかっていなかった」
そうだったというのであった。
「子とは何かがな」
「しかしです」
「今の大殿のお顔ですが」
「申し上げて宜しいでしょうか」

家臣達は道三の顔を見てだ。そのうえで彼に言うのだった。
「それは」
「いいぞ」
これが道三の返事だった。
「何でもよい。言ってみよ」
「はい、何か嬉しそうなのですが」
「明るいです」
「それは何故ですか」
「一体」
「わかったからだ」
それでだと。道三はあその顔で話すのだった。
「そのことがだ」
「だからですか」
「それでなのですね」
「その明るいお顔は」
「そういうことだ。それでだが」
戦局を見る。見ればだった。
義龍の大軍はその数を使い彼等から見て川の向こう側にいる道三の軍を弓と鉄砲で倒していく。そのうえでだった。

第十八話　道三の最期その三

「川を渡ってきましたな」
「我等から反撃できるだけの力を削いだうえで」
「今から」
「そうじゃな。それではだ」
それを見てだ。道三も言うのだった。
「我等はだ」
「はい」
「ここはどうされますか」
「退く」
こうするというのだった。
「そして城に入りだ」
「最後の戦いですね」
「いよいよ」
「そこで」
「思う存分戦うとしよう」
道三はまた笑った。ここでもだった。
「わしの最後の晴れ舞台よ」
「その最後の晴れ舞台にです」
「我等もまた」
「お供させて頂きます」
こう言ってだった。彼等は退き鷺山城に入り立て篭もる。そこを枕にして最期の最期まで戦いそうして果てる決意をしたうえでだった。
そして義龍はだ。父の軍の撤退を見てだ。こう己の軍に指示を出すのだった。
「ではだ」
「鷺山城にですね」

「進撃しそうして囲み」
「そのうえで」
「滅ぼす」
一言だった。
「わかったな」
「はっ、それではです」
「今よりそうして」
「この美濃を」
「今より」
「わしは勝つ」
義龍は馬上で腕を組み言った。
「父上にな」
「父上に、そうですね」
「大殿に」
「そうされるのですね」
誰も意識では気付いていなかった。今の言葉にだ。
だが言葉には出ていたのだった。確かにだ。
「わしは今までだ」
「今までとは」
「何があったのですか」
「それは一体」
「父上に勝ったことがなかった」
子の言葉だった。だが彼は気付いてはいない。
「だがここでだ」
「遂にですね」
「大殿に勝たれる」
「ここで」
「そうだ、勝ちそして美濃を手に入れるのだ」
こう言ってだった。軍を進ませそうしてそのうえで川を渡ったのだった。

「行け！」
義龍もまた川を渡った。そうしてだった。
大軍が今城を囲んだ。最期の戦いがはじまった。
十重二十重に囲んだ我が子の軍を櫓から見てだ。道三は己の周りにいる自身の兵達も見回した。既にその数はかなり減ってしまっている。
その彼等を見てだ。満足して言うのだった。
「わしは幸せだったな」
「といいますと」
「一体」
「わしは一介の小坊主から身を起こし」
これまでの生涯を思い出してだ。そうして言うのだった。
「そのうえで美濃を手に入れそしてだ」
「そして」
「今もですね」
「そうよ、あれだけの婿殿も来てくれた」
信長のことも思い出してだ。そして話すのだった。

第十八話　道三の最期その四

「最期にも。これだけの晴れ舞台にいるのだからな」
「ではここは」
「御自身もまた」
「戦われますね」
「槍をもて」
こう傍にいる者の一人に告げた。
「蝮の槍、見せておこう」
「我等もです」
「この武辺、今ここで」
「思う存分に」
「行くぞ」
道三自ら槍を手に取りだった。そのうえで門に向かう。その後ろに兵達が続く。
その頃だ。信長率いる尾張の兵は。
美濃に入ろうとしていた。その先陣は。
滝川とだ。他にいるのは。
「ううむ、我等が先陣とはな」
「これまた何という名誉か」
前田と佐々だった。今回は彼等も先陣に加わっているのだ。
二人は意気揚々といよりは意気盛んといった様子で馬を進める。
そうしてそれぞれ左右に並んでそうして言い合っているのであった。
「しかしだ」
「どうした又左」
「わしが先陣なのはいい」
前田はまずはこう言うのであった。
「殿もそれだけわしに目をかけて下さっているということよ」
「いやいや、待つのだ」

佐々は前田の今の言葉に早速文句をつけた。
「それはわしもぞ」
「そうよ、何故貴様もいるのだ」
前田はその佐々に顔を向けて口を尖らせて告げた。
「内蔵助、御主もだ」
「だからわしも殿に目をかけられてもらっておるのだ」
「馬鹿を言え、それはわしだ」
「いいや、わしだ」
こう言い争うのだった。
「わしはな。それこそ黒母衣衆としてだな」
「何を言うか、それならわしも赤母衣衆ぞ」
お互い負けていない。
「だからこそ殿にもだ」
「いや、又左御主は所詮あれよ」
「あれとは何じゃ」
「槍と算盤だけの男ではないか」
「何、では御主には何がある」
「わしはそれだけではないのだぞ」
佐々は胸を張って前田に告げる。
「その他にもよ」
「何があるというのじゃ」
「何でもできるぞ。その二つ以外にもじゃ」
「ふん、ではそれを見せてみよ」
こんな有様だった。そしてだ。
その二人を見て先陣のもう一人の将である滝川が二人のところに来て言ってきた。
「気がはやるのはわかるがだ」
「むっ、久助殿か」
「どうされた」
「どうされたではない。仲間内で喧嘩をしてどうするか」

「別に喧嘩ではないが」
「左様だ」
これは二人共否定するのだった。
「我等は別にだ」
「その様なことはしておらんぞ」
「そうか？」
だが二人の言葉を聞いてもだ。滝川はいぶかしむ顔のままだった。
三人共馬に乗っているがその上でそうなっているのである。
「そうは見えぬがな」
「少なくとも又左の喧嘩となると」
佐々がその滝川に対して話す。
「それこそ殴り合いだからな」
「わしにとっては喧嘩はそれよ」
実際に誇らしげに言う前田だった。
「しかしその相手はだ」
「あれか。甥のか」
「そうよ、慶次よ」
前田はこう言って滝川に対してにやりと笑ってみせた。
「あ奴だけは殴らぬと中々気が済まぬ」
「そういえばこの出陣ではまだ喧嘩をしておらぬな」
「うむ、そういえばそうだな」
前田は今度は佐々の言葉に応えた。

第十八話　道三の最期その五

「あ奴は先陣におらぬしな」
「権六殿と共に第二陣におるな」
「そうよ。しかし権六殿が第二陣か」
前田は今度はこのことをいぶかしむのだった。
「それで久助殿か」
「不服か？」
こう返す滝川だった。
「わしが先陣で」
「いや、久助殿のことはわかっておる」
「わしもじゃ」
前田だけでなく佐々も言ってきた。
「まさに先陣に相応しい」
「攻めるのが上手いしな」
「だがな。あの権六殿が先陣で共にいないのは」
「これがいささか違和感があってなのじゃ」
「そうだな。それはわしもだ」
滝川自身もそうだというのだ。柴田が先陣にいないとどうにも落ち着かないというのであった。そして彼等はこんなことも話すのだった。
「何でも殿は先陣にされるおつもりだったそうだが」
「しかし権六殿は御自身から第二陣を願い出られた」
「して我等三人に任せてくれたが」
「そこにどういうお考えがあるかだな」
「しかも第二陣には」
「そうじゃな」
ここで三人は第二陣についても話す。
「五郎左殿もおられるな」

「今や権六殿に比肩する将になられておるがな」
「権六殿に牛助殿」
佐久間のことも忘れてはいなかった。むしろ忘れられる筈がなかった。
「そして五郎左殿に久助殿」
「戦でも殿が頼りにされるといえば」
前田と佐々が話していく。
「そうよのう」
「この四人じゃな」
「生憎わしは殿軍は不得手じゃ」
ここで滝川が自分のことを話した。
「どうも性に合わぬ」
「それで先陣はわかるが」
「権六殿がこの度先陣ではない」
「どういうことであろうかのう」
「権六殿の御考えは」
「それはあれでございますな」
ここで出て来たのは木下秀長だった。彼も先陣にいるのである。
「おそらく次を考えられてです」
「次というと」
「この戦の次か」
「はい、おそらく次の戦はです」
木下秀長のその目が光る。そうしての言葉だった。
「尾張で」
「勘十郎様か」
「あの方は」
「そうなるかと」
それだというのだった。
「あの方が動かれます、間違いなく」
「怪しいしのう」

「それこそ兵をお渡しすればだな」
前田と佐々もそれは読んでいた。近頃の信行の様子からだ。それでそのうえでだった。二人は言い争いを止めてそれ信行のことを話すのだった。
「今すぐにでもな」
「動かれるな」
「殿もじゃ」
滝川もここで言う。
「それは読んでおられるからよ」
「ではこの戦の後はか」
「権六殿や新五郎殿を信行様に付けられ」
兵を持っているその彼等をだというのだ。
「あえて動かせる」
「そうされるのか」
「しかしです」
木下秀長はここで一言加えてきた。

第十八話　道三の最期その六

「ここで大事なことはです」
「信行様はそもそも兵を持たれておらぬからな」
「兵は殿が持っておられる」
織田家では今は兵は信長がそのほぼ全てを持ち家臣達に預ける形となっている。柴田や林の兵はそうした意味で信長の兵になっているのである。
「だから動かれるには」
「兵を御自身」
「このままではです」
また言う木下秀長だった。
「我等織田家は家中に火種を抱えたままになります」
「よりによってそれが信行様だとな」
「不都合極まりないからのう」
「殿の弟君ぞ」
「一門衆の中でも重鎮ぞ」
「しかもじゃ」
滝川もだ。信行について話す。
「信行様は政においては織田家において殿の片腕となられる方ぞ」
「その方が怪しいのではな」
「話にもならんからな」
「その通りです。普段の信行様ならば」
「何の問題もないのだが」
「それが今は」
彼等は腕を組んで悩んでいた。織田家も今火種を抱えていたのだ。
そのうえで美濃に向かう。そこにだった。
一人の大柄な武者が来た。右肩に笹を刺した彼が来てだった。こう前田達に対して話すのだった。

「織田の軍だな」
「うむ、そうだが」
「その通りだ」
前田と佐々が彼の言葉に応える。しかしだった。
二人もその武者の右肩のその笹を見てだった。こう言うのだった。
「そういう御主はじゃ」
「その笹から見てじゃ」
「あの可児才蔵か」
「美濃で名うての武者の。そうじゃな」
「その通りよ」
その武者、可児も胸を張って答える。
「わしがその笹の才蔵よ」
「その御主が来るか」
「一人で来るところを見ると戦をしに来たのではないな」
「うむ、御主等にとって残念かも知れんがその通りよ」
可児は二人に対してまた述べた。
「わしは戦をしに来たのではない」
「では何故来たのじゃ」
「何用でだ」
「織田信長殿はおられるか」
真剣な顔で二人に問うたのだった。
「あの方は」
「殿に御会いしたいのか」
「では使者だな」
「そういうことだ。ではよいか」
「うむ、それではだ」
滝川が出て来て彼に応える。
「案内しよう。ついて参れ」
「うむ、それではな」
「しかし。あの笹の才蔵が来るか」

「美濃でも名の知られた武辺者が」
尾張でその武勇を知られた二人もだった。可児については一目置きそのうえで言うのだった。
「使者にしてもこれは」
「何かあるのう」
そのことを察して当然のことだった。そうしてそのうえで可児と彼を案内する滝川の後ろ姿を見送るのだった。こうしてだった。
可児は信長の本陣に案内された。彼は信長の前に跪きその姿勢で一礼してからだ。あらためて信長に対して言うのであった。
「おはつにお目にかかります」
「名前は聞いているぞ」
信長は早速こう彼に告げた。
「美濃の可児才蔵だな」
「はい」
その通りだと答える可児だった。
「笹の才蔵。よく来たな」
「有り難き御言葉。それでですが」
「うむ、来たのは何故だ」
そのことを問う信長だった。

第十八話　道三の最期その七

「義父殿に言われてか」
「はい、それでなのですが」
信長に応えてだ。可児はあるものを出してきた。それは。
「札じゃな」
「その通りです」
「勘合札ではないか」
これは信長も知っていた。
「貿易でもするつもりか」
「そう思われていますか」
「ははは、冗談よ」
それはすぐに否定する信長だった。口を大きく開けてそのうえで笑ってみせたのだった。
「それはな」
「左様ですな。しかしこの札は」
「どれも一方しかない。ということはじゃ」
信長はそれを見ただけで察した。そうして話すのだった。
「あれじゃな」
「その時が来ればとのことです」
「わかった。ではその札はわしが預かろう」
信長は真剣な顔になって可児に対して述べた。
「それではな」
「はい、それでは」
「うむ」
可児はその五枚の札をまずは周りにいる森長可に手渡した。その彼の手から信長に手渡されてだ。そのうえで信長の手に渡ったのだった。
その五枚の札を懐に収めてから。信長はまた話した。

「してじゃ。可児才蔵よ」
「次は何でしょうか」
「御主はどうするのじゃ」
こう彼に問うたのである。
「これからどうするのじゃ」
「実はです」
可児は態度をあらためて信長に話したのだった。
「大殿に言われました」
「ふむ、何とじゃ」
「若し信長殿がそれがしが仕えるに相応しい方ならば」
「仕えよと言われたのじゃな」
「左様です」
「そうか。可児吉長じゃったな」
ここでだった。信長はこの名前を出したのだった。
「そうじゃな」
「それがしの名、御存知だったのですか」
「才蔵だけでないことはわかるわ」
信長は驚く可児に対して微笑んで述べた。
「そして美濃の名のある者ならばよ」
「どうだというのですか」
「あらかた知っておるわ。その程度のことは調べておる」
「そうだったのですか」
「それで知っておるのじゃ」
こう彼に話すのだった。
「そういうことじゃ」
「左様でしたか」
「それでじゃ。才蔵よ」
そしてだった。彼をそちらの名前で呼んだのであった。
「よいな。これからじゃ」
「はい、これからは」

「どうするのじゃ、一体」
彼にまたこのことを問う。するとだった。
可児は態度をあらためてだ。信長に対して話した。
「では。これからは」
「うむ」
「今のことでわかりました。信長様のことが」
「ではじゃな」
「はい、御願いします」
頭を下げてだった。信長に話したのだった。
「これから。それがしを」
「わかった。では才蔵よ」
「はっ」
彼を召し抱えると決めたうえでだった。また可児に告げた。
「まずは鷺山に向かうぞ」
「ですが殿」
「間に合わせる」
返答は強いものだった。そしてそのうえで言った。

第十八話　道三の最期その八

「何としてもじゃ」
「そうされますか」
「急ぐよ。よいな」
「はっ、それでは」
「皆の者、よいな」
立ち上がった。そのうえでの言葉だった。
「我等は今よりこれまで以上にじゃ」
「急がれますか」
「鷺山に」
「義父殿、何としても救う」
本気だった。その目には燃えるものすらあった。
その目で鷺山城の方を見ながらだ。信長は話した。
「行くぞ」
「わかりました。それでは」
可児もだ。言うのだった。
「今よりそれがしも」
「才蔵、参るぞ」
「畏まりました」
信長の下にまた一人優れた者が加わったのだった。そしてそのうえでだった。織田の軍勢はあらためて鷺山に急ぐ。これまで以上の速さでだ。
そしてその時だった。その鷺山城は。
義龍の軍に完全に囲まれだった。激しい攻撃を受けていた。
「攻めよ！」
「敵の兵、僅かぞ！」
「負ける筈はない！」
「城を陥とせ！」

こう言ってだった。城壁に群がり矢や鉄砲を放つ。そうして守ろうとする道三の兵達を退け壁をよじ登ろうとする。それに対してだ。道三は自ら槍を手にしてだ。敵に向かうのだった。

「大殿覚悟！」

「御首頂戴！」

その彼には足軽達がとりわけ集まる。勇んで彼を討ち首を取ろうとする。しかしだった。

前から来た足軽の一人に槍を繰り出してだった。

突きでだ。その足軽を倒したのだった。

「うっ・・・・・・」

「隙だらけぞ」

横から叩いてそれで倒したのだ。そうしてその足軽を退けた。しかし今度は後ろからだった。もう一人の足軽が襲い掛かって来たのだった。

「貰った！」

「むん！」

しかしその足軽にもだった。槍を横薙ぎにし吹き飛ばす。刃には当たっていないので殺すことはできなかった。だが退けることはできた。

すぐに二人の足軽を倒してみせる。しかしだった。

「大殿はここぞ！」

「倒せ！」

「その首取れば恩賞は思いのままぞ！」

「ではそれがしが！」

次から次に来る。まさに雲霞の如しだ。だが道三はその彼等を次から次に薙ぎ倒していく。その槍を縦横に振るう。

前に突き出し横に振る。そうして義龍の兵達を次々に倒していく。しかしだった。

何処からかだ。矢が来てだった。道三の右肩を射抜いたのだった。

「ぐっ・・・・・・」

「よし、矢が当たったぞ！」
「今だ！」
「一斉にかかれ！」
「そしてその首を！」
「甘い！」
傷を負ってもだった。道三はそれでも気力を振り絞り槍を振り回した。それで兵達を寄せ付けないのだった。
そうした戦を続けてだった。何十人もの敵兵を倒した。しかしだった。
気付けば矢を受け刀や槍も受けだった。傷を増やしていた。だがそれでも彼は立っていた。
既に城壁は超えられ城内に敵兵が雪崩れ込んできている。最早その勢いはどうしようもなかった。
そしてだった。その傷を負っている道三もだった。遂に。
銃声が響いた。その直後にだ。
左足の腿を射抜かれた。それで動きを止めてしまった。
「くっ、抜かったわ・・・・・・」
「遂にだ！」
「動きが止まったぞ！」
「首を取るぞ！」
「いいな！」
敵兵達はまた一気に襲い掛かろうとする。道三の運命が遂に終わろうとしていた。
だが彼はまだ死ぬ運命になかった。そこにだった。
生き残った道三の兵達が来てだ。主に襲い掛かる兵達に一斉に攻撃を浴びせ退けたのであった。
「何っ、まだこれだけの兵がいたのか！」
「くっ、あらかた討った筈だが」
「まだいたのか」
これでだった。義龍方の兵達は道三を討ちそこねてしまった。

第十八話　道三の最期その九

道三の兵達は主を取り囲んで守ってだ。そのうえで彼に言うのだった。
「殿、こちらに参上しました」
「遅れて申し訳ありません」
「よい」
遅参への謝罪はいいとした道三だった。しかしその彼等にこう問うのだった。
「しかしだ」
「しかしとは」
「何が」
「残ったのはそなた達だけか」
道三が問うのはこのことだった。
「最早残っているのは」
「おそらく」
「これだけです」
「今残っているのは」
「そうか」
道三はここまで聞いて大きく頷いた。そのうえでだった。
「ならばそなた達はだ」
「はい」
「どうされよと」
「最早逃げ落ちることは叶わぬな」
城の至るところから火が出ていた。そして見えるのは義龍方の兵ばかりである。それでどうして逃げられようかというのであった。
「これではな」
「我等、ここで最後まで戦います」
「若しくは腹を切るか」

「わしと共に死ぬつもりか」
彼等の言葉を受けてだった。道三はこうも述べたのだった。
「そのつもりか」
「ですから残ったのではありませんか」
「それは違いますか」
「あの時にそう」
「誓いました故」
「そうだったな。それではだ」
彼等の心をそこまで知りだった。道三はあらためて話した。
「ではだ」
「大殿はどうされますか」
「戦われますか、それとも」
「腹を」
「戦うのもよいが」
道三はその選択肢もよしとした。しかしであった。
少し目を閉じてからだ。こう彼等に告げたのだった。
「この首渡すだけの者は見当たらぬ。それではじゃ」
「腹を切られますか」
「そうされるのですね」
「丁度よい場所がある」
見上げればそこにだった。櫓があった。それを見上げての言葉だった。
「あそこに入りそのうえでじゃ」
「腹を切られますか」
「あの場所で」
「そうするとしよう。そして腹を切りじゃ」
「櫓に火をかけ」
「その中で、ですか」
「この首を渡せるだけの者がおれば違ったが」
そうした者がいなかった。だからこその言葉だった。

「それではそうする。ではな」
「では。腹を切られるまではです」
「我等が時間を稼ぎます」
「その間に」
「頼んだぞ。それではだ」
こうして道三は櫓に入りその中でだった。正座して腹を開いた。
周りは既に紅蓮の炎に包まれようとしていた。まだ昼だというのに見えるのは炎と煙ばかりで夜の中に燃え盛っているかの如くだった。
その中でだ。彼は一人呟いたのだった。
「帰蝶よ、二人で達者でな」
娘に告げてだった。そのうえで。
腹に刃を突き立てた。それが美濃の蝮と言われた一代の梟雄斉藤道三の最期であった。腹を切り倒れ伏した直後にであった。

第十八話　道三の最期その十

櫓は完全に炎に包まれ全てを焼き尽くした。巨大な炎の柱となったのだった。

「大殿、お見事でした」

「では我等もです」

「お供します」

残った者達もそれぞれ敵の中に切り込み腹を切りだった。一人残らず果ててしまった。美濃での父子の戦いは紅蓮の中に幕を閉じたのであった。

道三の首は見つからなかった。亡骸もだ。櫓は完全に燃え落ち後には消し炭だけが残った。義龍は戦いの後でその燃え落ちた後を見ながら言うのだった。

「あれが父上の墓だったか」

「はい、大殿はあの櫓の中で腹を切られました」

「多くの者がその目で見ております」

「そうか」

それを聞いてだ。義龍は深く考える顔になった。そのうえでこう言うのだった。

「では。弔うとしよう」

「そうされますか」

「ここは」

「首を見ればそうはしなかった」

その場合はというのである。

「だが、だ。何一つ残さずではだ」

「お気持ちが変わられましたか」

「それで」

「そうだ、それではもうよい」

何処か長年のわだかまりが消えたような。そうした顔であった。

「弔うのだ。この戦で死んだ全ての者もだ」
「そうされよと」
「敵味方関係なく」
「どの者も見事に戦った」
このことは義龍もよくわかった。実際にその場にいたからだ。
「さすればだ。どの者もだ」
「弔うべきだと」
「そう仰いますか」
「そうせよ。よいな」
「はっ、それでは」
「後の始末が済み次第すぐに」
「そうします」
家臣達も応える。こうして道三を弔うことも決まったのだった。
この戦の顛末は斥候や密偵達によって知られていた。そうしてすぐに進撃する信長の下に伝えられたのであった。
信長はそれを聞いてだ。まずは瞑目した。それからだった。
「で、あるか」
まずはこう言ったのであった。
そしてだった。ここで可児が出て来て彼に言うのであった。
「実は」
「義父殿か」
「はい、こうなった時にお渡しするつもりだったものです」
こう言ってだった。信長にあるものを差し出してきた。それは。
「文じゃな」
「大殿からのものです」
それだというのである。
「読まれますか」
「無論な」
当然だと。こう返す信長だった。
「そうさせてもらう」

「わかりました。それでは」
こうして可児から文を受け取り読みだす。そこに書いてあったことは。
「ふむ」
「して殿」
「何と書いてありますか」
「蝮殿の文は」
「美濃をわしに譲るとある」
読んだことをそのままだ。家臣達に答えたのである。
「そうな。書いてある」
「美濃をですか」
「殿に譲られるとは」
「何と」
「帰蝶の婿にあるわしにじゃ」
血縁としてはそこからであった。
「是非譲るとある。それに」
「それに」
「それにといいますと」
「まだ何かありますか」
「わしにはその器量があるという」
最も重要なのはだ。それだとだ。文に書いてあったのである。

第十八話　道三の最期その十一

「美濃を、そしてさらに多くのものを手に入れ治められる器量がな」
「だからこそですか」
「美濃をですか」
「殿に」
「そうだとな。書いてあるわ」
こう家臣達に述べたのであった。
「しかとな」
「では殿」
柴田がすぐに彼に言ってきた。
「これから進撃を続け」
「そうですな、斉藤義龍をです」
「倒しそのうえで」
「美濃を手中に」
「いや、ここは帰る」
だが、であった。信長は今はそれをしないというのであった。
そのうえでだ。佐久間と丹羽を見てだ。二人に対して告げた。
「牛助、五郎左」
「はっ」
「何でしょうか、殿」
「殿軍を務めよ」
二人に告げたのはこのことだった。
「よいな。これより尾張に戻るぞ」
「ですが殿」
「それは」
今の信長の言葉にはだ。二人も難しい顔でいうのであった。
「早いのでは」
「そう思いますが」

「そうでござる」
ここでまた柴田が言ってきた。右手を拳にして振るいながらだ。
「ここは一気に美濃をですぞ」
「義龍の兵は一万二千」
信長はその柴田達に対して義龍の兵の数を述べた。
「少し失っていてもそれだけはあるぞ」
「それに対して我が軍は一万」
柴田がその数について述べてみせた。
「多少劣っていますがほぼ互角ですな」
「勝てる見込みは充分にあります」
「それでなのですか」
佐久間と丹羽も言う。
「退かれるのですか」
「この美濃から」
「うむ、そうじゃ」
強い言葉だった。決意そのものであった。
「ここはの」
「何故でございますか」
林も信長の今の考えがわからずだ。いぶかしむ顔で問うのだった。
「道三殿から譲られると言われ。大義も得ているというのに」
「そうです。それで退かれるのは」
「腑に落ちませぬが」
他の家臣達もそれぞれ言ってきた。しかしであった。
信長はその彼等にだ。こう話したのだった。
「一万二千の兵と戦えば勝っても傷が深いな」
「我等は一万」
「それで勝利を収めても」
「そう仰いますか」
「問題は勝った後だ」
信長はただ勝つことだけを考えていたのではなかった。そこから

もだった。
「傷だらけになった我等を今川が放っておくと思うか」
「あの家がありましたな」
「確かに」
「若し我等の傷が深ければ」
その時は一体どうなるか、信長が最も懸念しているのはこのことだったのである。
「そこで一気に襲い掛かって来るぞ」
「今川の兵は二万五千」
「それが一気にですか」
「今の一万五千でも劣勢は免れない」
言いながらだった。信長はあることを考えていた。その今川に対してどう立ち向かうか、必ず来るその時を見据えて考えていたのだ。だが今はそれについては何も言わずだ。家臣達に対してその表のことを述べるのだった。
「それで傷を受ければだ」
「ひとたまりもありませんな」
「その時は」
「それに今川だけではない」
信長は他の家についても言及した。

第十八話　道三の最期その十二

「美濃を手に入れたとする」
「はい、その時ですか」
「美濃を手に入れたならば」
「近江には浅井と六角がいる」
今度はこの二つの家であった。
「この度浅井の家督を奪い取った長政はかなりの傑物と聞く」
「僅か一万で二万の六角を破ったとか」
「しかも浅井だけの力で」
「それは聞いております」
「その浅井、それに六角じゃ」
この二つの家のことも念頭にあるのだった。
「そして一番恐ろしいのがおるな」
「武田信玄」
「信濃に居座るあの虎ですか」
「あの男ですか」
「今は信濃の政に専念しておる」
信玄はそもそもが政を好む男だ。手に入れた土地をどう治めていくか、戦よりもそちらの方に遥かに関心のある男なのである。
このことは信長も知っていた。だからこそ美濃を手に入れてもすぐには攻めては来ないと見ていた。しかしそれでもなのだった。
「しかし。あの男と境を接するだけでじゃ」
「恐ろしいものがありますね」
「充分な備えがなければ」
「とても」
「そういうことよ。今はできん」
また断言する信長だった。
「今はとてもな」

「そういうことですか」
「だからこそ今はなのですね」
「決戦はできない」
「義龍めと」
「そういうことじゃ」
こうしてであった。話は決まったのだった。
織田軍は即座に撤退をはじめた。やはり後詰はこの二人だった。
「それではですな」
「うむ、そうだな」
佐久間が丹羽の言葉に頷いている。信長の言葉通りやはりこの二人だった。
その二人がだ。こう話をするのだった。
「今のところ義龍の軍は来ておらんな」
「そうですな。しかし油断はできません」
「鷺山のことが終われば」
その時はなのだった。
「すぐに来るな」
「はい、ですから」
「油断はできん」
佐久間は険しい顔で述べた。その先を見ながらだ。織田軍はもう撤退に入っている。その先には幸いまだ何も見えてはいない。
「何時出て来てもな」
「そうですな。それでは用心して」
「下がろうぞ」
こうしてだった。彼等は尾張に退くのだった。結果として信長は大義名分を得てそのうえでの撤退であった。そうしてであった。
尾張に入りだ。信長は周りに問うたのであった。
「誰も死んではおらんな」
「はい、一兵の落伍者もおりません」
「今しがた牛助殿と五郎左殿も尾張に入られました」

「これで全軍尾張に入りました」
「義龍めは追っては来なかったか」
信長はそれを聞いてまた言った。
「その様だな」
「はい、左様です」
「それはありませんでした」
ここで信長の前にその佐久間と丹羽が来た。そのうえで彼に話してきたのだ。
「どうやら鷺山での戦が相当のものだったようで」
「その後始末にかかっているようです」
「そうか。義父殿の最後の戦いでだな」
信長はそこに感慨を見ていた。
「そうなったのだな」
「そうですな。蝮殿、最後まで戦われたのですね」
「お見事です」
「しかしだ」
だが、だった。ここで信長は暗い顔を見せた。そのうえでの言葉だった。

第十八話　道三の最期その十三

「退くように言ったがな」
「それでもですか」
「やはりご本心は」
「戦われたかったのですね」
「そうだ、そうするしかなかった」
こう無念の声で言うのだった。
「止むを得ない」
「そして道三殿ですが」
ここで、だった。滝川が来たのだった。
「自決されたようです」
「で、あるか」
「はい、お一人で燃え盛る櫓の中に入られ」
「そしてか」
「自ら腹を切られたとのことです」
「首は見つからなかったのだな」
「はい」
それもだというのだった。
「全ては炎に包まれです」
「見事だ」
そこまで聞いた信長の言葉だ。
「義父殿は最後まで義父殿であられたな」
「それではです。あの方から頂いたあのことですが」
「それはですか」
「その時が来れば」
「そうよ。まずはやることがある」
そのことは決して忘れていなかった。彼はここでそれを具体的に言うのだった。

「まずはだ」
「尾張ですか」
「それですね」
「最初は」
「国の中をまずは整える」
やはりそれであった。
「わかったな」
「ですな」
「まずは己の国を万全にし」
「全てはそれからですね」
「そしてだ」
信長の言葉は続く。次は、であった。
「来る者は退ける。よいな」
「来ますか、やはり」
「あの者達が」
「この尾張に」
「間違いなく来る。それの備えもするぞ」
「はっ、わかりました」
「それでは」
家臣達も頷いてであった。そのうえでだ。
信長は清洲に戻りだ。すぐに美濃に向けて兵を整えそのうえでだ。
次に対しての備えを忘れないのだった。それは既に行っていた。
その中でだった。可児が慶次に対して問うていた。今二人は清洲の城の中で互いに槍をぶつけ合っている。稽古をしているのだ。
石垣を背にしてだ。可児は慶次に問うたのだ。
「一つ聞きたいことがあるが」
「うむ、何だ？」
「また戦が起こるな」
可児が言うのはこのことだった。
「そうだな」

「そうだろうな」
慶次もそれを否定しなかった。化け物の如き槍を振るいながら言う。
「すぐに起こるぞ」
「やはりそうか」
「しかし誰も死なんよ」
ここでこうも言う慶次だった。
「次の戦はな」
「既に決まっておるのか」
「うむ、そうだ」
「それを知っておるのか」
「少なくとも殿はだ」
その信長についての話だった。
「信行様を殺しはされんよ」
「何があろうともか」
「信行様には何も落ち度はない」
「ないのか」
「そうだ、どう見てもない」
こう言うのである。
「おそらくあの男に操られておるな」
「津々木とかいうらしいな」
「かなり胡散臭い男だ」
慶次は槍を振るいながら述べる。その手の槍は縦横に動く。

第十八話　道三の最期その十四

そしてだった。可児もその槍を受けながら言葉を返す。
「それ程までか」
「御主、黒一色の服の男はどう思う」
「普通はそんな格好はせんだろう」
可児もまた槍を振るいながら言い返す。
「有り得ないではないか」
「傾いておってもな」
「傾きといよりは坊主か」
可児はそれではないかというのだった。
「しかし坊主でも白が入るぞ」
「だがそこに白も何もなく黒ばかりじゃ」
「そしてその顔もか」
「怪しいことこのうえない。妖気さえ漂っておる」
「妖気じゃと」
「そうした男が信行様の御傍におるのじゃ」
それでだというのだった。それがわかっているのはだ。
「わし以外にも危惧しておる」
「そういえば柴田殿と林殿達が信行様につかれるらしいな」
「何故かわかるな」
「うむ、あえて兵を与え」
それからだった。重要なのはだ。
「反乱を起こさせそうさせてだな」
「左様、その時に仕掛けてじゃ」
「終わらせるか」
「それが殿の御考えだ。そしてそのうえで」
「その津々木という者を成敗してじゃな」
「まあ信行様はあれじゃ」

慶次は彼がどうなるかも話すのだった。
「少し謹慎されて終わりじゃ」
「それで終わりか」
「軽い処罰で終わるのは何もない」
「何かあっさりとしておるのう」
「信行様は尾張に、織田家にとって必要な方じゃなからな」
だからだというのである。
「どうしてもな」
「そこまでの方は」
「わしにとっては困った方じゃ」
慶次はここで苦笑いになってこう言うのだった。
「どうにもな」
「それは何故じゃ」
「真面目だからじゃ」
それが理由だった。
「あの方は至極真面目な方なのじゃ。いつも服を正しておられる」
「殿と正反対じゃな」
「左様、性格もまるで違う」
「まさに水と油か」
「しかしだからこそ殿は信行様を必要とされておるのじゃ」
全くの正反対であってもだというのだった。だからこそだとだ。
「ご自身と全くの正反対の方だからじゃ」
「あの殿の正反対とすると」
「うむ」
「支えることが得意な方じゃな」
可児はそのことをすぐに察して述べた。
「主には向かぬが」
「そういう方じゃ。戦よりもまとめることや政の方が得意な方じゃ」
「平手殿もそうだというが」
「だからこそ信長様はお二人をお傍に置かれるのだ」

信長はそうしたこともわかっているのだ。家臣を見る目が確かであることはこのことについても実によく出ているのである。

それをだ。慶次も彼に話すのだった。

「あえてな」

「しかしその信行様がおられなければ」

「織田にとっては痛手よ」

まさにそれだというのだった。

「かなりのな」

「しかもその信行様が操られていたならば」

「信行様を操っている者を討たねばな」

「何にもならぬな」

「無論信行様にも落ち度はあるが」

それはわかっていてもだというのだった。この辺りが難しいところだった。

「それはな」

「何かと厄介なことになっておるのう」

「しかし何とかなる」

慶次はこのことは楽観していた。言葉にも出ている。

「このことはな」

「しかしそれからだな」

「そうよ。駿河よ」

国の名前での話しになっていた。

第十八話　道三の最期その十五

「今にも来るだろうな」
「今川義元じゃな」
「さて、その戦がどうなるか」
慶次の顔が笑顔になっていた。そのうえでの言葉になっていた。
「面白い戦になるぞ」
「首が欲しいか」
「いやいや、戦が空きなのだ」
その笑顔のまま可児に話す。
「わしはな」
「ふむ、それではだ」
「御主も同じじゃな」
「うむ、戦が好きじゃ」
可児も同じ笑みになって話す。
「そして倒した者にはじゃ」
「聞いておるぞ。笹じゃな」
「左様、笹を刺す」
こう慶次に話す。
「それがわしの流儀よ」
「風流よな。ではわしもそうするか」
「いや、それは止めておけ」
「駄目か」
「それはわしの専売特許よ」
これが可児の返答だった。
「だからよ。よいか」
「ううむ。そうだな」
慶次も結局それで頷くのだった。
「わしはわしのやり方でいくか」

「そうしろ。そなたの傾き方でな」
「わしのそれは凄いぞ」
慶次は傾くことになるとさらに楽しく話すのだった。
「わしの目指すものはだ」
「何だというのだ」
「天下一の傾奇者になることよ」
それだというのだ。
「それになることよ」
「随分と変わった夢だな」
「ははは、おかしいか」
「普通はそんな夢を持たぬぞ」
「だからいいのよ」
それだからこそとだ。慶次はここでも笑って言う。
「誰も持たぬような夢だからこそだ」
「御主が持つのか」
「そうする。傾くことにかけては誰にも負けたくはない」
「武勇はどうじゃ」
可児はそのことも尋ねた。二人は今も槍を競い合っている。それはどちらも優劣つけ難い、そうした一進一退の競い合いであった。
その中でだった。可児はそれを問うのだった。
「それは」
「ふむ、それか」
「そうじゃ。御主は武辺者だな」
「いやいや。武辺者ではないぞ」
「では何じゃ」
「ふべん者よ」
それだというのである。
「わしはふべん者じゃ。戦以外では生きられぬからな」
「それを言うならわしもじゃぞ」
「何じゃ、御主もか」

「知っておるのは戦のことだけ」
槍を振るいながら笑って話す可児だった。
「御主と同じくな」
「それでか」
「そうよ。まあ風流は好きじゃが」
ここも慶次と同じだった。だからこそだった。
「それでもじゃ。わしもじゃ」
「ふべん者か」
「御主と同じじゃな」
「そうか。だからわしはふべん者として傾く」
慶次は己のその決意を今語った。
「こう言うと平手殿や権六殿に叱られるがのう」
「それで怒られるのか」
「政もせよとな」
それでだというのだ。
「それで叱られるのよ」
「わしも政は知らぬがな」
知らない以前に興味がない。やはり槍一筋の可児だった。
「織田家ではそれが五月蝿いのか」
「ほぼ誰もが戦もすれば政もする」
「忙しいのう」
「せぬのはわし位じゃった」
「そしてわしもそこに加わるな」
「そうなるな。まあ才蔵よ」
「うむ」
二人で頷き合う。
「わしは傾く」
「わしは戦の場に笹を飾る」
「そうしていくとするか」
「その様にな」

「しようぞ」
　こう言い合う二人だった。可児は今一人の友を得た。そして織田家に己の居場所を見出そうとしていた。彼もまた信長の家臣となったのであった。

第十八話　　完

２０１０・１２・５

第十九話　夫婦その一

第十九話　　夫婦

道三は死んだ。信長は今は美濃を攻めることはせず相変わらず尾張の内政に周辺の国々の調査、それに伊勢志摩への調略に専念していた。静かと言えば静かであった。

しかしだ。その中においてもだった。彼は柴田に林兄弟を招いてだ。そうしてそのうえで彼等に対してかねてよりのことを話すのであった。

「して、だ」

「はい」

「それではですな」

「いよいよ」

「うむ、そなた等に六千の兵を与える」

それだけの兵をというのだ。

「そしてそのうえでだ」

「古渡の勘十郎様の下にですね」

「入られよと」

「これまでにもお話されていた通り」

「そうじゃ、それをするのは今を置いて他にはない」

時から話すことであった。

「だからよ」

「伊勢志摩への調略が身を結ぼうという前に」

「そして今川が来る前に」

「美濃を手に入れる前に」

織田家においてのさしあたっての懸念が話されていく。このことは信長だけでなく家臣達もよくわかっていることであった。

特に柴田と林兄弟は信長の家臣達の中でもかなりの高位の者達だ。とりわけ柴田に至っては平手に次いで次席家老とさえされている程

だ。

だからこそ主の言葉に頷いてだ。そのうえで言うのであった。

「そうされますか」

「勘十郎様のことを終わらせる」

「今で」

「わかったな」

また言う信長だった。

「では古渡に入るのじゃ」

「わかりました。ですが殿」

ここで言ってきたのは林の兄であった。彼は考える顔になって信長に話すのだった。

「我等が勘十郎様の下に入ってもです」

「勘十郎はそなた等を信じぬな」

「その通りです」

林兄が言うのはこのことであった。

「我等は間違いなく遠ざけられますが」

「それでも宜しいのですか」

「それで」

「構わん。あ奴に兵を渡すだけだ」

それだけだというのだった。

「そなた等はただ兵をあ奴に渡すだけでよい」

「ではその後は」

「戦の場においてはどうされよと」

「我等は殿と対することになりますが」

「よい、勘十郎の傍におれ」

信長は造作もないといった調子で述べた。

「それでよい」

「左様ですか、それでは」

「そうさせてもらいますが」

柴田達は信長の言葉に頷くしかなかった。主である彼が言うから

にはだった。
　そのうえで彼等のすることは決まった。信行の下にその六千の兵と共に入ることがだ。それが決まったのであった。
　彼等が信行の下に入る。それからであった。
　信長はこう残った家臣達に話すのであった。
「して次はじゃ」
「はい」
「何をされますか」
「美濃との境に兵を進める」
　そうするというのである。
「よいな」
「美濃との境にですか」
「そこに兵をですか」
「残る九千の兵をですか」
「左様、よいな」
　こう家臣達に話すのである。
「そうするぞ」
「そうして清洲を空にしたうえでなのですね」
「勘十郎様にあえて兵を挙げさせる」
「そうされると」
「左様、わかったな」
　これが信長の考えだった。策であった。
「そうしてじゃ。この話は早いうちに終わらせる」
「迅速に終わらせる」
「そうされると」
「さもなければ今川や斉藤に付け込まれる」
　だからだというのだ。中でのいざかいがどれだけ外にとって都合がいいのか、信長はこのことを熟知していた、だからこそだった。

第十九話　夫婦その二

「だからだ。すぐに終わらせるぞ」
「わかりました。それでは」
「すぐに九千の兵を」
「動かす。しかしじゃ」
さらに言う信長だった。
「すぐに終わらせるが謀反の芽は完全に潰す」
「完全にといいますと」
「やはり津々木はですか」
「そうされますか」
「斬る」
信長は言い切った。
「あの者は何としても斬る」
「そうですな。あの男を斬らねば」
「さもなければまた何をするかわかりませぬ」
「まして生きていればそれだけで厄介な男の様です」
「さすれば」
家臣達も信長のその言葉に頷く。それでなのだった。
津々木の件はこれで決まった。だが厄介ごとはまだあった。それもこのことにおいて最も厄介な話である。そのことについても話された。
そのことをだ。信長は自分から話すのだった。
「して勘十郎だが」
「決して殺されぬとは聞いておりますが」
「しかし処罰はせねばなりますまい」
「殿、そのことですが」
「一体どうされるのですか」
「勘十郎様については」

家臣達は口々に言う。そしてだった。
筆頭家老である平手がだ。主に対して言うのだった。
「殿、ここはです」
「爺はどう考えておるのじゃ」
「勘十郎様は織田家にとって欠かせぬ方」
これは彼もよく認識していることだった。織田家の誰もがだ。
「殿を十二分に助けて下さる方です」
「しかも明らかに津々木の妖しげなわざによって操られておるな」
「左様、勘十郎様に大きな落ち度はありませぬ」
平手はこのこともわかっていた。
「切腹は。何があろうとも」
「避けなければならぬな」
「左様です。ただ」
平手はだ。ここで顔を顰めさせてだ。こう話すのだった。
「処罰はせねばなりません」
「謀反を起こしたからにはな」
「はい、さもなければ家がまともにおさまりませぬ」
だからだというのである。
「ですから。最も厄介なのはどうした処罰にするかですが」
「そのことですな」
「確かに。どういった処罰にするのか」
「それが問題ですが」
「どうされますか、殿」
「ここは一体」
「案ずることはない」
信長は落ち着いた声で話すのだった。
「そのことはもう考えてある」
「左様ですか。ではその時はですか」
「殿にお任せしていればいい」
「では。その時はです」

「殿にお任せします」
「任せておけ。さすればじゃ」
また話す信長だった。
「権六達からの文も届くじゃろう。それも待つのじゃ」
「はい。間違いなく権六殿も新五郎殿も勘十郎様から遠ざけられますが」
「それでも中のことはわかる」
「だからこそですな」
「そういうことじゃ。賽は投げられた」
信長はこの言葉を出した。
「後はわし等がどう動くかじゃ」
「ですな。では残る九千の兵を動かし」
「そうして動かし」
「そのうえで、ですね」
こうしてだった。信長は信行の件についても着々と手を打っていた。そのうえで全てを動かし見ていたのであった。それが今の彼だった。

第十九話　夫婦その三

そしてだ。清洲の城においてだった。
帰蝶と二人にいる時にだ。彼女に声をかけられたのだった。
「あの」
「むっ、何じゃ」
「父上が亡くなられ」
帰蝶は珍しく曇った顔になっている。そのうえでの言葉だった。
「それで私ですが」
「そなたがどうしたのじゃ」
「よいのですか。ここにいて」
こう信長に対して問うのだった。
「尾張に」
「おかしなことを言うのう」
信長は帰蝶の今の言葉を聞いてだ。横にいる彼女の顔を見てだ。
そのうえで笑いながら彼に対して話すのであった。
「わしは何とも思っておらぬぞ」
「左様ですか」
「わしはいらぬ者は最初から傍に置いたり用いたりせぬ」
信長の信条はここでも述べられた。
「それは変わらぬぞ」
「では私は」
「誰か言っておるのか？」
信長の顔はここでは怪訝なものになった。
「その様なことを」
「いえ、それは」
「言う筈もない」
信長は笑って話した。
「何故ならそなたはだ」

「私は」
「わしの妻じゃ」
こうその帰蝶に話すのであった。
「だからじゃ。誰も言うことはない」
「そうなのですか」
「そなたも見てもじゃ」
その彼女自身を見てもだというのである。
「それはないわ」
「私自身をですか」
「そなたは完全に織田家の者となっただけではない」
それだけではないとだ。その帰蝶に話す。
「そなたの心を見てじゃ」
「私の心を」
「それも見てじゃ。そなたは認められておるのじゃ」
「そうなのですか」
「何ならじゃ。間も無く戦になる」
そうしてであった。信長はその帰蝶にこう話した。
「そなた、やれるか」
「きの清洲の守りを」
「そうじゃ、話がわかるな」
帰蝶の頭の回転の速さがここで出た。彼女のそれは信長と比べても全く遜色のない程だった。信長もそれを見て告げるのであった。
「わしはこれよりあえて清洲を空ける」
「主力を率いられて」
「その間清洲に殆ど兵は残らぬ」
「その清洲の守りをですね」
「そなたがやってみよ」
こう帰蝶に言う。
「それで家の者達にあらためて認めさせるというのはどうじゃ」
「私がですね」

「おなごでも戦うのが今じゃ」
戦国の世だからである。時に応じては女であろうとも鎧を着て薙刀を持ち戦う。それが戦国なのだ。
そしてであった。信長はそのことを踏まえて己の妻に話すのだった。
「そなたはじゃ」
「はい、私は」
「おなごだが馬にも見事に乗るし薙刀も使える」
「だからですか」
「それで軍略も見せてみよ。蝮の娘としてな」
「そして貴方様の妻として」
「やってみせよ」
帰蝶のその目を見てだ。そのうえでの言葉だった。
「よいな」
「わかりました」
帰蝶も夫のその言葉に頷く。そうしてであった。
信長はだ。ここで妻にこんなことを話してきた。
「さて、それでじゃが」
「今度は何でしょうか」
「とりあえず茶でも飲むか」
帰蝶への今度の言葉はこれであった。

第十九話　夫婦その四

「そうするか」
「茶ですか」
「茶室に入ってそのうえでな」
「最近特にお茶に凝っておられますね」
「うむ、茶はよい」
こう言って笑みさえ見せる信長だった。
「実にな」
「お菓子もあるからですね」
「そうよ。茶とくれば菓子よ」
この二つが一緒になるというのだ。これもまた信長の好みだった。
そしてだ。彼はこんなことも言うのであった。
「しかし菓子はどうにも高い」
「砂糖を使います故」
「そのせいじゃ。せめて砂糖が安く手に入ればもう」
「それは無理では」
「いや、できる筈じゃ」
信長はこのことについて希望を見ていた。そして見ているのは希望だけではなかった。
そしてだった。彼はさらに話すのであった。
「砂糖は琉球で採れるがじゃ」
「そこから買うのですか」
「貿易をしてな。それを考えておくか」
「それもですか」
「砂糖が多く手に入ればそれだけ菓子も多く作られるようになる」
「さすれば安くなる」
「そういうことじゃ。考えておく必要はあるな」
「そう仰るのですね」

帰蝶も信長のその考えを理解した。そうしてなのだった。こう言うのであった。

「では天下を統一すれば」

「左様、それを考えておこうぞ」

「殿はそこまで御考えですか」

「うむ。この尾張にしてもじゃ」

話は尾張についての話にもなった。そこにもなのだった。

「伊勢志摩との貿易を考えておかなければな」

「だからこそ伊勢志摩もまた」

「あの国を手に入れれば大きい」

ただ政をするだけではなかった。信長は貿易についても考えていたのだ。そうしてそのうえでだった。信長の言葉は続く。

「やがて天下にその貿易を広げていきたいのう」

「海のですか」

「陸だけでは詰まらんではないか」

「おや、下らないと」

「そうじゃ。海のことも考えて商いをするべきよ」

これが信長の考えであった。

「それで機会があればじゃ」

「どうされると」

「堺も見てみたいものじゃ」

「堺、あの町を」

「そうよ。近いうちに上様にお目通りをする」

足利将軍のことである。今の将軍は足利義輝である。剣豪として知られている将軍だ。

「その折にでもじゃ」

「畏まりました。それではその時は」

「言ってよいな」

「そうなされませ」

帰蝶は穏やかに笑って夫に話した。

「殿の望まれるように」
「わしが目指すのは天下統一だけではない」
それに留まらないというのだ。その見ているものは。
「この国を富ます」
「天下を」
「これまでにない以上にな。泰平と共にじゃ」
その夢も語るのだった。信長は今途方もないものを見ていたのであった。
道三死すとの報は天下に知れ渡った。それは当然ながら甲斐の武田信玄のところにも及んでいた。
信玄はそれを聞くとだ。まずはこう言った。
「天命よ」
「天命ですか」
「そう、天命だ」
己の前に控える家臣達に告げるのであった。
「斉藤道三の死はだ」
「死すべき時に死した」
「そういうことですか」
「つまりは」
「あの者は己の役を終えたのだ」
何処か達観的な、それが今の信玄の言葉だった。彼はその言葉をさらに続けるのだった。
「美濃を手に入れ。その地均しをしてだ」
「そしてその地均しが為された美濃は」
「色々と話がありますが息子の手に渡りましたな」
「どうやら」
「いや、それはわからん」
信玄は家臣達のその言葉は否定した。

第十九話　夫婦その五

「それはだ。わからんぞ」
「しかし美濃の主は息子の斉藤義龍のものになりました」
「それは最早間違いありません」
「それでもですか」
「そうだ、今は戦国の世だ」
その中心にいる者の一人だからこそ。彼が言えた言葉だった。
「ならばだ」
「その座も危うい」
「左様ですか」
「そうだ、そしてだ」
信玄の言葉は続く。
「その美濃を手に入れるのはだ」
「近江の浅井か六角か」
「どちらかでしょうか」
「いや、あの者達は互いに激しくいがみ合っている」
信玄は近江のことも知っていた。浅井と六角がまさに仇敵同士の関係にあることもだ。彼は実によく知っているのであった。彼の目は遠くまで見えるのである。
「美濃に攻め入る余裕はない」
「そして信濃にいる我等もまた」
「今はとてもですね」
「攻め入ることはできません」
「今は」
「まずは政よ」
信玄は言った。
「それをせねばならん」
「この信濃を万全に治める」

「まずはそれですね」
「戦で手に入れたあの地を」
「そうだ、治めるのだ」
やはり信玄であった。彼は戦よりも政を見ていた。幾多の激戦の末に手に入れた信濃をだ。万端の状態にすることを考えているのだった。
それを念頭に置いてだ。彼は今家臣達に語るのであった。
「わかっておるな」
「無論です」
「次に動くのはそれからですね」
「信濃をまとめてから」
「そのうえで」
「上杉もおる」
越後の上杉謙信のことも忘れていなかった。
「その為に海津に城を築いた」
「はい」
一際若く整った、誰もがその目を止めんばかりの美男が応えた。高坂である。
「そしてそれがしがあの城に入り」
「左様、あの地を抑え川中島で食い止める」
今いる甲斐からその川中島まで。信玄は頭の中で描いて語ってもいた。
「そうして信濃を治めていく」
「それが整ってからですな」
「我等がまた動くのは」
「では」
「それで、ですが」
山本がだ。信玄に問うてきた。
「殿、その美濃ですが」
「あの国は誰が手中に収めるのか」

「そのことでございますが」
「一人おる」
ここで信玄は言った。
「恐ろしい男がな」
「とうとやはり」
「あの男ですか」
「尾張の蛟龍」
その男の名前がだ。彼等の中から出るのだった。
「織田信長」
「あの青い軍の男ですな」
「そうよ。織田信長よ」
信玄もだ。彼だというのである。
「あの男こそが美濃を手に入れる。間違いなくな」
「そういえばです」
次に言ってきたのは穴山だった。
「織田は斉藤道三から美濃を譲り受けると文を貰ったとか」
「その様だな」
「ではそれを大義にして、ですな」
「それだけではない」
信玄はさらに話す。

第十九話　夫婦その六

「尾張は今急速に整いつつある」
「政が非常に整っているとか」
「田畑は開墾され治水も行き届き道は整され」
「町も発展しているとか」
「それでは」
「国の力もあがっておる」
それもだ。信玄は知っていた。尾張のそうしたことまで調べているのだった。
「そのうえどうやら伊勢志摩まで手中に収めるつもりのようだ」
「あの豊かな伊勢志摩まで手に入れるとなると」
「その力はかなりのものになりますな」
「そのうえで美濃を手中に収める」
「それがあの男の考えですか」
「しかしです」
内藤が言ってきた。
「そう上手にいくでしょうか」
「今川殿がいますな、そういえば」
「確かに」
「あの方がおられます」
「さすれば」
「勝てればいいがのう」
信玄はだ。手を結んでいる義元に対してだ。不安な感情を見せるのだった。
「無事な」
「では義元殿も危ういと」
「織田の前では」
「左様ですか」

「尾張には一万五千の兵がおる」
信玄はここではまずは兵から述べた。
「それが相手ではだ」
「今川殿の勝利はですね」
「それは難しいですか」
「二万五千の兵を以てしても」
「それでも」
「そうだ、難しい」
実際にそうだと話す信玄だった。
「二万五千の兵は勝ったとしてもだ」
「尋常な損害を受けませんね」
「間違い無く無傷では済まない」
「それは確かですね」
「義元殿はそう思ってはおらんがな」
信玄は同時にこのことも見抜いていた。義元のその油断をだ。
「だが雪斎殿は違うだろうな」
「あの方は織田を見抜いておられますか」
「そうなのですね」
「あの方はですね」
「織田信長もわかっている」
「それでは」
「しかしじゃ」
ここでまた言う信玄だった。
「あの御仁位か。義元殿に言える者でわかっておるのは」
「そこまでわかっているのはですか」
「少ないと」
「人に才を見せる者はおらん」
信玄はこのことも見抜いていたのだった。
「能があるならばな」
「敵に知られずしてこそ」

「だからですか」
「しかし織田はすぐにわかると思いますが」
「尾張を一つにしたことと」
まずはそれについて言うのだった。
「そして政を見れば」
「それでもなのですか」
「今川殿はおわかりになられぬと」
「義元殿の悪い癖だ」
ここでだ。信玄の顔が曇った。そのうえでの言葉であった。
「相手を侮られる」
「確かに。今川殿は強勢です」
まずはこのことがあるのだった。

第十九話　夫婦その七

「三国を手中に収められ」
「そして兵もある」
「その強さは確かです」
「それにです」
しかもなのだった。今川にはさらにあった。それは。
「今川家は名門です」
「将軍の継承権まで持っておられます」
「源氏の名家でありますな」
今川家はそういう家であった。他の戦国大名の家と比べてもだ。並ぶ者なぞいはしないそこまでの名門であるのであった。
信玄はこのこともわかっていた。そしてなのだった。
「それがかえってよくないのだ」
「名門故に他家を侮ってしまう」
「そういうことですね」
「つまりは」
「それで織田をですか」
「左様、織田家は斯波家の被官の出」
それは紛れも無い事実であった。
「神主の家だったな」
「左様です」
「同じ斯波殿の家臣の出でも朝倉家と比べると下です」
「越前の朝倉と比べると」
「そうだ、そしてあの蛟龍の家はその本流ではなかった」
今はどうかしれないといってもだった。その出はだというのだ。
「それではだ」
「今川殿に馬鹿にされるのも道理」
「そういうことですね」

「つまりは」
「そうだ、義元殿は何よりもあの男のそれを侮っておられるのだ」
信玄の顔がいよいよ曇る。
「それが悪くならなければよいがな」
「全くですな」
「とにかく今川殿に油断は許されませんな」
「それは確かに」
「なのだがな」
また苦い顔を見せる信玄だった。
「肝心の義元殿がのう」
「それが命取りにならなければよいのですが」
「今川殿にとっては」
「若しもじゃ」
信玄は今度は仮定を述べた。
「尾張に我等がおればじゃ」
「武田がですか」
「その場合はというのですな」
「さすればその場合は」
「どうなっていたと」
「義元殿も侮られぬ」
そうだという信玄だった。
「その場合はだ」
「それはあれですな」
馬場であった。彼が言ってきたのだった。
「我等が甲斐源氏の嫡流だからですな」
「そうよ。我が武田はだ」
信玄こそが誰よりもわかっていることだった。武田は甲斐源氏の名門である。その名門であるということが義元には大きいことなのである。
「だからこそよ」

「侮られない」
「それでなのですか」
「例えわしがうつけであっても」
信長がそう呼ばれていたことを踏まえての言葉だ。
「義元殿はあそこまで侮られはせん」
「家柄。重要ですな」
「戦国の世においても」
「それは確かですか」
「そうよ。家紋でどうにかなるといってもよ」
それでもだというのだった。
「それでもじゃ」
「名門であるかないか」
「大事ですか」
「やはり」
「左様」
信玄はまた答えた。

第十九話　夫婦その八

「それはやはり大事だ」
「今川殿はそれにあまりにもこだわっておられるのですな」
「名門であるが故に」
「だからこそ」
「そういうことよ。こだわり過ぎてはよくない」
信玄の顔も言葉も難しいものであった。
「何でもそうだがな」
「左様ですか」
「では我等もまた」
「そのことを肝に銘じておきます」
「これは戦でも政でも同じじゃ」
どちらについてもというのであった。信玄はだ。
「そのどちらでもじゃ」
「同じでございますか」
「こだわり過ぎては」
「弓矢にも騎馬にもこだわることはない」
信玄はその戦についても語る。
「鉄砲もこれからはどんどん手に入れたいものよ」
「左様ですな。高いですが」
「それでも」
鉄砲についてだ。武田もまた注目していた。それでこう家臣達がそれぞれ言うのであった。
「手に入れていきたいものです」
「是非共」
「そういうことよ。よいな」
信玄の言葉が決するものになった。
「鉄砲の数を増やせ」

「では堺にも人をやり」
「商人達を介して」
「できれば領内で作りたいものですが」
原がこんなことを言った。
「流石にそれは無理ですな」
「武田では」
「それは」
「その通りだ」
それは信玄も否定しないのだった。
「鉄砲は欲しい」
「できるなら我等の手で作りたい」
「しかしですな」
「それだけは我等でも」
「できませぬ」
「鉄砲を作る技は国友や薩摩に限られております」
武田信繁の言葉だ。
「ですから」
「我等は買うしかありませぬ」
「高い金を出して」
「都に出れば違うのだがな」
信玄はここで都と言った。
「さすればな」
「ではやはりやがては」
「その意味でもですな」
「都に」
「我等の旗を立てましょうぞ」
「その通りだ。わかっておるな」
信玄の声があらたまった。そのうえでの言葉になっていた。
「我等の目指すものはだ」
「はい、上洛です」

「都に上りそして」
「天下を」
「わしは将軍にはなれぬ」
これは家柄から考えてのことである。武田は確かに甲斐源氏嫡流の名門である。しかし将軍継承権は持っていないのだ。
「公方様を盛り立てようぞ」
「ですな。我等は」
「そうして天下を手に入れましょう」
「それが武田の採るべき道です」
二十四将の誰もが信玄が将軍になるとか幕府を簒奪するとかいったことは考えていなかった。信玄自身もそれは同じである。
彼等はあくまで幕府の中で考えているのだった。しかし確かに天下を手に入れんと考えている。このことは確かであるのだった。

第十九話　夫婦その九

そして信玄自身もまた言うのであった。
「その通りよ。では今はだ」
「都に上る為にも」
「力を蓄えましょう」
こうしてだった。武田は今は政により力を蓄えんとしていた。そしてである。
幸村は主君のその言葉に感激しながら今は故郷にいた。そこで鍛錬を積みながら言うのであった。
「流石御館様よ」
「殿、お帰りになられたら」
「すぐにそれですか」
「また甲斐で御館様に言って頂いたのですか？」
「今度は何ですか？」
上着の左半分をはだけさせそのうえで二本の槍を縦横に振るっている彼の周りに十勇士達が来た。そうしてそれぞれ主に対して問うのであった。
「またお褒めの言葉を頂きましたか」
「それがあまりにも嬉しくて」
「それで鍛錬に身が入りますか」
「左様ですか」
「いや、違う」
幸村は楽しげに笑ってそれは否定した。
「また違うのだ」
「おや、それでは」
「何でしょうか」
「一体」
「御館様のお褒めの言葉でないとすると」

「それは」
「御館様の夢を言って頂いたのだ」
それだというのである。
「それを言って頂いたのだ」
「御館様の夢」
「といいますと」
「天下ですか」
「そうだ、天下だ」
まさにそれだというのである。
「あの方の夢は大きい。都に上られだ」
「そして天下をですか」
「天下に号令をされると」
「そうではない」
それは違うというのだ。
「あの方は天下を治められるおつもりなのだ」
「この天下をですか」
「甲斐や信濃と同じく」
「こうした風に」
「見事に」
「あの方が治められれば」
槍を振るいながらだ。彼もまた夢を見ていた。その晴れやかな目にだ。
「天下は必ず素晴しいものになるぞ」
「それは間違いありませんな」
「この信濃も御館様のお陰で随分と変わりました」
十勇士達もそのことは実感しているのである。
「豊かになりました」
「それも見違えるまでに」
「その通りだ」
幸村の声も明るい。

「変わっていくのだ、何もかも」
「御館様により」
「左様ですな」
「天下全てが」
「そうだ。戦の世はもうすぐ終わる」
幸村は何時しか空を見上げていた。その青い空をだ。
「そしてわしはその天下でだ」
「何をされますか」
「それで」
「御館様の為、天下の領民達の為に働くぞ」
こう言うのだった。
「例えどうした仕事でも喜んでしよう」
「これが我等の殿だよな」
「そうよのう」
清海が猿飛の言葉に頷く。
「まことに無欲だ」
「素晴しい素質をお持ちだというのに」
彼等は自分達の若き主の力量がわかっていた。だからこそ今こうしてここにいるのだ。

第十九話　夫婦その十

「まさに天下を左右できる方だというのに」
「わしもそう思う」
霧隠もその己の主を見て述べる。
「以前は越前の宗滴様の下にいたのだが」
「おお、あの方か」
その名を聞いてだ。海野が問う。
「越前を支えられるご老公だな」
「そうだ。あの方は言っておられた」
懐かしい目になってだ。語る霧隠であった。
「わしに相応しい主を見つけよとな」
「それで出会ったな」
「我等の殿に」
「そうだな」
「そうだ。殿はまさに天下の英傑」
そうだというのだった。
「必ずや。大きなことをされるぞ」
「ははは、そんなことはどうでもいいのだ」
幸村は霧隠のその言葉に顔を崩して笑った。
「わしは天下に名を残そうとは思わぬ」
「では一国一城の主には」
「それとも位を極められるか」
望月と筧が問う。
「殿ならばです」
「どちらもできますか」
「だからどれも興味がないのだ」
こう言ってだ。幸村自身からこのことも話した。
「無論財にもだ。興味はないぞ」

「無欲ですなあ」
「全くです」
由利と伊三は驚嘆さえしている。
「では殿の夢は」
「やはり」
「そうよ、御館様に尽くすこと」
確かな笑みでだ。彼は言った。
「それこそがわしの夢よ」
「そして領民達を幸せにすることですな」
「それですな」
根津と穴山がこう問うた。
「そしてその為に」
「殿は精進を続けられますか」
「精進あるのみ」
今度の言葉は強かった。
「さもなければどうして御館様の為に動ける」
「それはその通りです」
「わしもそう思います」
「わしもです」
十勇士達もそのことを認める。
「そして領民達を護る為にも」
「やはりそれなりの力が必要です」
「その力を手に入れる為に」
「そういうことですな」
「その通りよ。わしはその為に己を磨く」
槍は振るい続けている。全身から滝の如く流れ出る汗が飛び散る。
それが白銀の光を放ち若武者を雄々しく照らし出すのであった。
「こうしてだ」
「さすれば殿」
「我等もです」

「お供させてもらいます」
十勇士達もだ。笑顔になり彼に告げたのだった。
「これから何処までも」
「殿と共に」
「歩いていきましょう」
「頼むぞ。それではだ」
幸村はだ。その彼等を見てだった。
鍛錬を続けながら。一言告げた。
「来るのだ」
「共に鍛錬をですな」
「さすれば」
「何時でも何処からでもかかって来るのだ」
槍の動きを止めた。そのうえで構えながらの言葉だった。

第十九話　夫婦その十一

「よいな」
「はい、それでは」
「今より」
「真田幸村、この命」
その命は何の為にあるのか。彼は言った。
「義の為にある」
「義に生きそして」
「義に死なれますか」
「さすれば本望だ」
こうだ。熱い言葉で言うのである。
「さすればどの様な試練も喜んで乗り越えようぞ」
「では今は」
「参ります」
「来い！」
十勇士達にだ。来るように告げた。
「いざ、天下の為に！」
「進みましょうぞ！」
十勇士達は主に一斉に襲い掛かる。幸村もその彼等を迎え撃つ。彼等の鍛錬はまさに実戦であった。その中で己を磨く彼等であった。
直江はだ。今は謙信と会っていた。
謙信は今道場にいる。毘の大文字が描かれた軸のあるその部屋でだ。謙信は居合いの構えでいた。そのうえで直江の話を聞いているのだった。
「左様ですか」
「はい」
直江はこう主に答える。
「美濃の蝮がです」

「死にましたか」
「息子である斉藤義龍に討たれ」
「息子ですか」
ここで謙信の言葉が動いた。構えを取ったままでだ。
「それについては言われていますね」
「はい、色々と」
「果たしてどちらが真実か」
謙信はにこりともせず言う。
「それはどうでもいいことです」
「どうでもいいことですか」
「大事なのはその者自身」
それだというのだ。
「斎藤義龍の出生はこの場合はどうでもいいことです」
「では大事なことは」
「彼がそれなり以上の力を持っていることです」
「そのことがなのですね」
「そうです。それが大事なのです」
こう話すのであった。
「彼は蝮を倒しました」
「その美濃の蝮を」
「それだけの力があります。紛れもなく」
「では殿」
直江は自分から主に対して問うた。
「その斎藤義龍ですが」
「はい」
「やはりそれなり以上の力を持っていますか」
「間違いありません。話を聞くと」
既にだ。彼は美濃での一部始終を聞いて知っていたのだ。それを話した者こそ直江その人である。他ならぬ彼が報告したのである。
「ただ戦に強いだけでなく」

「それだけでなくですか」
「人の心を掴むのも得意ですね」
「それもなのですね」
「だからです。彼はです」
「かなりの力を持っていると」
「少なくとも彼がいるうちはです」
どうなるか。謙信はこのことも話すのだった。
「美濃が攻められることはないでしょう」
「左様ですか」
「はい。ただ」
ここで謙信の言葉が動いた。
「一つ問題があります」
「問題とは」
「彼が死んだその時です」
謙信の目は遠くまで見ていた。そのうえで語るのであった。

第十九話　夫婦その十二

「その時はわかりません」
「その時はなのですね」
「斎藤義龍はいいです」
彼はだというのだ。これは他ならぬ彼自身が先に話した通りである。
「ですがその息子ですね」
「斎藤龍興ですね」
「あの者は駄目です」
一言でだ。謙信は否定してしまった。
「一国の主の器ではありません」
「一国の主のですか」
「おそらく一将としても務まりません」
それでもだというのだ。
「彼が跡を継げばその時はです」
「美濃は危ういですか」
「そうだと思います。やはり危ういです」
謙信はまた話した。
「その時はどうなるかわかりません」
「ではその時が来れば」
「織田が動きます」
謙信は見ていた。既に彼のことを。
「蛟龍は既に美濃を蝮より譲られると言われていますね」
「はい、文によれば」
「大義名分は既に得ています」
そうだというのであった。謙信はこのことも話すのだった。
「ですから。その時はです」
「攻めますか」

「美濃以前にです。伊勢志摩も狙うでしょうが」
その国もだというのである。
「尾張だけでなく伊勢志摩も手に入れれば」
「かなり大きいですね」
「合わせて三万五千の兵力に」
まずはその場合の兵力から話される。
「石高にして。百四十万国になるでしょうか」
「実高で、ですね」
「そうです。それだけの力を得れば暗愚な主のいる美濃はです」
「攻めるのは容易いですね」
「美濃は易々と手に入るでしょう」
その信長の手によるというのだ。そうだというのであった。
「合わせて二百万国、そして兵力にして五万です」
「五万ですか」
「美濃の実高はより多いでしょうし」
公に出ている石高と実高の違いがあった。無論実高が実際の国力であり頭の回る大名達は他の家のそれも既に調べているのである。
おおよそであってもだ。
「兵力も五万以上になるでしょう」
「ではそれだけの兵力を得れば」
「織田は天下随一の勢力となります」
「そしてそのうえで」
「おそらく彼は」
謙信は今も見ていた。その信長をだ。
「上洛し天下を手中に収めんとするでしょう」
「織田が天下を」
「ここで問題はなのです」
謙信の目が光った。白く眩い光であった。
「彼がどういった天下を目指すかです」
「その天下をなのですね」

「王道か。それとも覇業か」
言うものは二つであった。
「そのどちらか」
「果たしてどちらになるでしょうか」
「覇業でしょう」
「それですか」
「確かなことはわかりません」
それは言う。しかしなのだった。
「ですが。それでもです」
「感じられますか」
「彼は突き進む者です」
信長をだ。そこまでわかっていたのである。

第十九話　夫婦その十三

謙信の目はただこの世にあるものだけを見てはいなかった。それ以外のものもまた。その目に見ているのであった。

それを見ながらだ。彼は話すのであった。

「己が道をです」

「それが覇業だというのですね」

「その行くのを阻むものは」

謙信の言葉が続く。

「何があろうと倒していくでしょう」

「何があろうとですか」

「はい、それが彼です」

信長だというのである。

「ですから」

「だからこそですか」

「それが私や信玄殿であっても」

まずは彼等だった。

「寺社であろうともです」

「何と、寺社もですか」

「あの一向宗であっても」

謙信も彼等とは幾度も戦っている。北陸と近畿に確固たる勢力を築いている彼等はだ。戦国の世に隠然たる力を誇っているのだ。

その彼等もだとだ。謙信は話すのだった。

「倒すでしょう」

「それはかなり困難では」

一向宗と聞いてだ。直江のその整った顔が曇った。

「一向宗は容易ならざる相手です」

「それでもです」

「織田殿はそうされますか」

「間違いなく。そうされます」
そうだというのである。
「それが尾張の蛟龍です」
「左様ですか」
「そしてそれが私である場合」
彼だというのである。
「その場合はです」
「どうされますか」
「私は相手が誰であろうとも」
謙信の言葉が鋭く切れるまでになった。
「私は戦うからには」
「その時はですね」
「こうするのみです」
剣を抜いた。そのうえで横に一閃させる。するとだ。
風がだ。断ち切られたのである。それは直江も見た。
そうしてであった。謙信はまた言うのであった。
「甲斐の虎も尾張の蛟龍もどちらも」
「はい、それでは」
「行きましょう。そうして」
こう話してであった。謙信はだ。
剣を収めた。そのうえで直江に顔を見せての話であった。
「ではこれからはです」
「はい、これからは」
「尾張をよりよく見ていくことにしましょう」
これが謙信の今の言葉であった。
「そうしましょう」
「では尾張により多くの忍を送っておきます」
「そしてです」
謙信はここで話を変えてきた。その話は。
「都のことですが」

「都ですか」
「公方様は今はどうされているでしょうか」
「相変わらずの様です」
「左様ですか。やはり剣にですか」
「専念されています」
そうしているというのである。将軍はだ。
「各地から名剣も集められています」
「その腕を磨くことにも余念がありませんね」
「はい」
まさにその通りだった。それが彼なのである。
「将軍としての務めも果たされていますが」
「それ以上にですね」
「剣のことに夢中であります」
「困ったことですね」
謙信はそこまで聞いてその流麗な顔を暗くさせた。

第十九話　夫婦その十四

「剣は確かに必要ですが」
「それだけでは駄目だと」
「剣は一人を相手にするもの」
そうだというのである。謙信はだ。
「軍を相手にするものではありません」
「だからですね」
「その通りです。それがわかっておられないというのなら」
顔を曇らせての言葉だった。
「公方様にとってよくありませんが」
「その時はどうされましょうか」
「御護りします」
むべもない言葉であった。
「私は関東管領ですね」
「はい、その通りです」
「関東管領とは何か」
それこそがだ。今謙信が語る源だった。
「わかりますね」
「関東において公方様をお助けすることです」
「簡単に言えばそうです」
こう返す謙信であった。
「即ちです。私はです」
「公方様に何かがあれば」
「その時は動きます」
そうするとだ。心に剣を持ち語る。
「そうしてお助けします」
「その為の剣なのですね」
「我が剣は戦に勝つ剣にあらず」

違うとだ。それは否定してであった。
「悪を斬る剣なのですから」
「悪を」
「そう、悪をです」
言い切った。見事なまでにだ。
「斬る。ですから直江よ」
「はい」
「二十五将と貴方もです」
「無論です。我々はです」
「共に参りましょう」
姿勢を正してだ。その直江を見て微笑んでの言葉だった。
「よいですね。それで」
「参らせて下さい」
自分からこう告げた直江であった。
「是非共」
「是非にですか」
「そうです。謙信様のそのお心が目指すものを」
どうかとだ。直江は言った。
「見させて下さい」
「わかりました。それではです」
「共に」
「参りましょう。正しき道に」
「それでは」
彼等は誓い合っていた。そうしていたのであった。
それぞれの国も動いていた。その中でだ。英傑達も動いていたのだ。

第十九話　　完

2010・12・15

第二十話　信行謀叛その一

第二十話　信行謀叛

信長はだ。清洲において家臣達に命じていた。
「それではだ。よいな」
「はい、そうなのですね」
「今から美濃との境に」
「兵をですね」
「そうだ、そうするのだ」
こう家臣達に言う。既に誰もが青い具足を身に着けている。旗もだ。
旗も立ててだ。青い旗も連なっていた。
その青い旗もだ。信長は見ていた。そのうえでの言葉だった。
「さて、この青い旗を見ればだ」
「必ず動きますね」
「間違いなく」
「動かない筈がない」
信長の言葉は確信しているものだった。
「間違いなく動く」
「そしてその時にですね」
「我等もまた」
「真の動きをする」
「そういうことですな」
「その通りだ。今の動きは仮のものだ」
それだとだ。信長は言う。
「真の動きはその時にだ」
「わかっております」
平手が応える。彼もまた青い鎧に兜の出で立ちだ。陣羽織も織田の青だ。それを身に着けて信長の前に立っているのであった。

「それでは殿」
「うむ。しかし爺よ」
ここでだ。信長は少し笑顔になって述べたのであった。
「御主のその鎧の姿はのう」
「どうされました、それがしの鎧に何かありますかな」
「似合わぬのう」
笑顔は苦笑いであった。
「何時見てもな」
「似合わぬと。それがしの鎧兜の姿が」
「そうじゃ。何故か似合わぬ」
信長はまた言った。
「いつもの袴の方がずっと似合っておるぞ」
「いえいえ、これでもですぞ」
平手はだ。自分より遥かに若い主に対してだ。咎める口調になってこう返すのであった。この辺りはやはり平手であった。
「それがしは殿がお生まれになる前よりです」
「戦場にいたというのだな」
「戦場で戦うこと数十、百にも手が届くでしょうか」
この戦国の世では至って普通の数ではある。ましてや平手程長きに渡って織田家に仕えていればだ。それも当然のことであった。
「戦の場に出て。受けた傷もこれまた百にてが届くでしょうか」
「しぶといのう」
「何と、しぶといとですか」
「そこまでなってまだ生きておるのか」
信長は思わず吹き出しそうな顔になっていた。
「しかもそれでまだ似合わぬのか」
「ですから。似合う似合わぬの問題ではありませぬ」
平手はむっとした顔になっていた。
「ですからそれがしはです」
「まあまあ平手殿」

「殿のいつもの悪ふざけでありますぞ」
「そうそう怒ってはなりませぬ」
「怒れば怒る程ですぞ」
「しかしじゃ」
平手の小言は若き彼等にも向かう。これも常である。
「殿のこのお言葉。似合う似合わぬなどとは」
「わかったわかった」
信長は困った苦笑いになってこう言った。
「そなたが戦の場に長くいるのはわかった」
「はい」
「とにかくだ。今はだ」
信長はその顔を真剣なものに戻してそのうえで話を変えてきた。
「わかっておるな」
「はい、わかっております」
「敵は美濃にあらず」
言葉は真剣そのものだった。
「尾張にあるぞ」
「それでは」
「さすればまずは向かえ」
その美濃との境にというのだ。

第二十話　信行謀叛その二

「よいな」
「畏まりました」
「わしも行くしな」
見ればだ。信長も既に具足を身に着けている。無論織田の青い鎧だ。
「そしてそのうえでだ」
「信行様をあえて動き出させる」
「そうされますね」
「その為にも」
「しかし」
今言ったのはだ。生駒であった。
彼は怪訝な顔になってだ。こう信長に対して話すのであった。
「清洲の守りは帰蝶様だけですか」
「そうじゃ。あれに全て任せる」
信長の返答は素っ気無いまでにあっさりとしたものであった。
「ここはな」
「帰蝶様だけで大丈夫でしょうか」
「そうだな」
丹羽も不安な顔で生駒の言葉に同調してきた。
「我等のうち誰かが残るべきでは」
「そう思いますが」
「それでは動かぬぞ」
信長は鋭い声で短く指摘をした。
「信行はな。あれも操られているとはいえ馬鹿ではない」
「だからですか」
「名のある者はあらかた連れて行き」
「兵もほぼ全て出し」

「そうしてなのですね」
「しかもだ」
信長はだ。それで終わりではないというのである。それはだ。
「普通では間に合わぬ場所まで出てだ」
「そうして動かさせる」
「そうされると」
「そこまでせねば動かぬ」
あくまで冷静にだ。考えてそうして行っているのだった。それを今家臣達に話す。
「信行はな。しかし動けばだ」
「全てが決まる」
「左様ですな」
「その通りじゃ。ではよいな」
己の前に集まる家臣達を見回してだった。一歩前に出た。
「出陣じゃ」
「では」
「いよいよ」
こうしてだった。彼等は出陣するのだった。それを聞いてだった。
古渡城においてだ。津々木が信行に対して述べた。
「動かれましたぞ」
「そうだな。兄上がな」
信行も彼のその言葉に頷く。
「動かれたな」
「はい、それでは」
「こちらも動く」
それを言う信行だった。
「わかったな」
「では。その六千の兵で」
「そうだ、清洲を襲う」
そうするというのだった。

「わかったな」
「それでなのですが」
「権六達か」
「あの方々についてはどうされますか」
「後詰でよい」
素っ気無くだ。信行は述べた。
「あまり深く関わらせるな」
「左様ですな。それでは兵は」
「私とそなただ」
津々木に対しての言葉だった。
「二人で率いるぞ」
「わかりました。それでは」
「権六達は所詮兄上の家臣だ」
「だからですな」
「いらぬ。兵さえ手に入ればよい」
信行は言っていく。だが語るその目は何かがおかしかった。
得体の知れないだ。異様な光を放ってそしてあらぬ方を見てだ。
そのうえで語る、そうしたおかしな目をしているのであった。
その目を見てだ。津々木は特に何も言わない。その目については。
そしてであった。彼はさらに言うのであった。

第二十話　信行謀叛その三

「では殿。清洲を攻め取られ」
「この国全てをだ」
「殿のものにされますな」
「兄上には任せておけぬ」
その目での言葉だった。
「この尾張はだ」
「左様です。尾張を治められるに相応しい方は」
「私だ」
明らかにいつもの、これまでの信行の言葉ではなかった。
「兄上ではない」
「既に兵の用意は整っております」
「早いな」
「待っていましたので」
だからだというのだった。
「それで」
「流石だな。それではだ」
「挙兵を」
「うむ、それではな」
こうしてだった。彼等も挙兵する。それには柴田達も従う。しかしだった。
彼等は信行の言葉通り後詰だった。出陣するその後ろにいてだ。
柴田が首を傾げさせながら林兄弟に対してこう言うのだった。
「遂にだな」
「そうだな」
「挙兵されたな」
「まさかとは思った」
柴田はだ。馬上においてその厳しい顔をいぶかしめさせている。

「信行様が謀叛とはな」
「わしもだ」
「わしも同じだ」
林兄弟も柴田と同じ顔になっていた。
「最後の最後まで信じられなかったが」
「実際にそうされた」
「信行様の行動には思えぬ」
「やはりあれは」
「あの男だな」
柴田の顔が変わった。忌々しげなものにだ。
「津々木。やはりあの男よ」
「おそらく信行様は操られているな」
「そうとしか思えぬ」
林兄弟はそう見ていた。
「あの者をどうにかしなければ」
「話は終わらんな」
「そうだな。しかし今は無理か」
できればなのだった。柴田は今その男を始末したかった。だがそれが無理なのはだ。彼もよくわかっていることなのだった。
そえでだった。彼は言うのであった。
「信行様が我等を近付けられぬ」
「近付けられるのはあの男だけ」
「それではな」
「やはりこれもおかしいのだ」
柴田はここでまたこう言った。
「信行様は人の話を聞かれる方だ」
「だが今はだ」
「あの者だけだ」
林兄弟はここでも柴田の言葉に応える。
「我等を決して近付けず」

「こうして挙兵された」
「しかも我等三人は後詰だ」
柴田はこのことも指摘した。
「織田家においてわしを攻める時に後詰に置くなぞな」
「うむ、有り得ぬ」
「絶対にだ」
林兄弟は今度は自分達のことも話した。
「我等も本陣には置かぬ」
「それもない」
つまりだ。先鋒と目付達を置かないのだ。織田家きってのだ。
「あくまであの男だけ」
「やはり違う」
「何かがおかしいぞ」
「この戦、どう思うか」
柴田はここで二人にこのことを尋ねた。
「勝てると思うか」
「無理であろうな」
「おそらくな」
こう答える二人だった。
「あの津々木については知らぬ」
「しかし信行様はだ」
大将である彼はどうかというのであった。

第二十話　信行謀叛その四

「戦の経験は乏しい」
「明らかに殿に比べて落ちる」
「清洲を攻め落とせれば話は変わるが」
「それもどうか」
彼等は今その清洲に向かっている。その中で清洲について話すのだった。軍勢はやはり織田の青だ。しかし何かが違っていた。
兵達もだ。いぶしみながら小声で囁き合うのだった。
「信長様との戦か？」
「それはまことか」
「今から信長様と戦うのか」
「尾張の主と」
こう言ってだった。誰もが驚きを隠せなかった。
「信じられんが」
「信行様が謀叛だというのか」
「それはまことか」
「嘘ではないのか」
「こうして兵を実際に進めているぞ」
足軽の一人がこう仲間達に言う。
「わし等自身がな」
「では本当なのか」
「本当に信長様との戦か」
「信行様は何を考えておられるのだ」
「どういうことだ」
それがどうしてもなのだった。彼等にはわからなかった。それで今の事情がどうしてもわからずだ。こうそれぞれ言うのだった。
彼等は明らかにだった。浮き足立っていた。彼等の主はやはり信長であった。その彼と戦うということはどうしてもわからなかった。

それでだ。彼等の中にはこう囁く者もいた。
「我等の主は信長様だな」
「その信長様と戦えるか」
「討つなぞとんでもないぞ」
「そうだ、あの方はとても討てん」
こう言い合う。信長との戦いはどうしてもできないという者ばかりであった。
このことは信行の耳にも入った。彼は夜の陣においてだ。かがり火の中でこのことについて津々木と話をするのであった。
「兵達が浮き足だっておるな」
「左様ですか」
津々木の言葉は落ち着いたものだった。
「それではです」
「どうするのだ、一体」
「本来なら不貞の輩を始末しますが」
この言葉は実に素っ気無いものだった。まるで石を捨てるかの様な。
「しかし今ここで兵を失う訳にはいきません」
「そうじゃ、清洲を攻めねばならん」
「その通りです。ですからここは」
「うむ、どうするのだ」
「金を使いましょう」
それをだというのだ。
「それを兵達にばら撒きです」
「そのうえで心を掴むか」
「はい、それでどうでしょうか」
「そうだな。尾張が手に入れば金なぞどうともなる」
それを考えての言葉だった。
「ではそれではだ」
「はい、それで宜しいですね」

「うむ、頼んだぞ」
こうしてだった。彼等は兵達に金をばら撒くのだった。確かにそれで彼等は今は落ち着いた。しかしそれでもなのであった。
彼等はだ。ここでまた言うのであった。
「金は貰ったがな」
「それでもな。やはり信長様と戦うのは」
「今から清洲を攻めるそうだな」
「うむ、そうだ」
「そうらしいぞ」
今度はこのことを話すのだった。
「清洲か。とても攻められないぞ」
「信長様がおられないにしてもだ」
「信長様の住まれている城なぞとてもな」
「攻められはしない」
「わしもだ」
こう言ってであった。彼等は難色を示していた。しかしであった。
信行は進軍を命じる。このことは変わらなかった。兵達はあくまで金で、であった。
美濃に向かうふりをしている信長の耳にもこのことは入った。密偵を放ちそれで彼等の動きを調べていたのだ。そのうえであった。

第二十話　信行謀叛その五

彼はその話を聞いてだ。静かにこう言った。
「やはり勘十郎ではないな」
「左様ですな。平素のあの方はそうしたことはされません」
「金で人の心を掴もうとなぞはされません」
「ではやはり」
「あの男しかおらんわ」
信長は吐き捨てるようにして述べた。
「津々木、あ奴じゃ」
「そうとか考えられませんな」
「あの男に篭絡されているか」
「術に陥っているか」
「勘十郎を篭絡なぞできん」
信長はここでは言い切った。
「あの者はそこまで愚かではない。人の話を聞き分けられる男ぞ」
「では術ですか」
「どうした術かはわかりませんが」
「それを使いですか」
「そうして」
「兵達は狙うな」
信長は言った。
「そして勘十郎もじゃ。敵は別におる」
「津々木ですな」
「やはりあの男ですね」
「ではここはです」
「あの男ただ一人を狙い」
「そうして」
「わしが出る」

信長はまた言った。
「その時になればだ。わしが出る」
「そうしてですか」
「この戦を終わらせると」
「そうされますか」
「無駄に兵を失うことはない」
信長はだ。そのことを最も嫌っていた。
「大事な兵じゃ。この様な戦で一兵も失ってたまるものか」
「そして勘十郎様も」
「そうだというのですね」
「その通りじゃ。失ってはならぬ」
また言う信長だった。
「何があろうともじゃ。だからこそ勘十郎も死なせぬ」
「津々木だけを」
「そうして」
「そういうことじゃ。しかしあの男」
津々木のことをだ。忌々しげに言うのだった。
「素性もわからぬ。どれだけ調べてもな」
「どの国に生まれたか全くわかりませぬ」
「何時生まれたのかもです」
「そして生い立ちもです」
家臣達もだ。誰もがこう言う始末であった。
「何もかもがわからないとは」
「一体どういった者か」
「それが奇怪です」
「黒い闇の色の服か」
信長は今度は彼がいつも着ているその服の色について考えた。
「あれじゃな」
「あの服はどうしても」
「異様なものにしか思えません」

「あの様な服を常に着ているとは」
「そもそも何者なのか」
こう信長に言っていく家臣達だった。
「そうしたことも考えますと」
「あの男、このままにしておくのはです」
「あまりにも危険です」
「ですからやはり」
「成敗するしかない」
またこう言う信長だった。
「やはりな」
「そうですな。それでは」
「敵は津々木一人」
「奴の首だけを狙いましょう」
「そうしていく。それではだ」
今は美濃に向かうふりをする信長達だった。それを見て美濃の者達も動いた。しかし竹中はその両軍の動きを見比べて言うのだった。

第二十話　信行謀叛その六

「これは戦にはなりません」
「？どういうことだそれは」
「半兵衛、戦にならぬとは」
「どういうことだ」
義龍自ら兵を率いて出ている。三人衆や不破、竹中は道三に近かったことから彼に警戒されてだ。動かされることはなかったのだ。
今彼等は安藤の居城にいた。そうしてだ。竹中の話を聞くのだった。
「一方的な戦になる」
「そう言うのか？この戦」
「そうだと」
「いえ、そうではありません」
それは違うとだ。竹中は三人衆に対して答える。彼等は今茶室にいる。そこで五人だけになってだ。そのうえで話をしているのである。
竹中は茶が入った湯飲みを手にしながらだ。また述べた。
「戦が起こらないというのです」
「既に殿も兵を出しておられるぞ」
不破が厳しい顔で竹中に問うてきた。
「それでもか」
「はい、織田殿はどうやら」
「あの御仁がか」
「我等美濃との戦を考えてはおりませぬ」
そうだというのである。
「兵は動かしておりますが」
「陽動か」
稲葉が言った。

「それか」
「どうやら」
「ふむ。それではだ」
氏家がだ。袖の中で腕を組みながら述べた。
「そうして動かしておいて」
「何かを釣り出すか」
安藤も続く。
「尾張の中の不貞の輩を」
「そうかと」
その通りだとだ。竹中は答えたのだった。
そしてそのうえでだ。彼はこうも言った。
「殿もある程度は察しておられるようですが」
「用心の為だな」
「兵を動かさずにはいられぬ」
「そういうことだな」
「その通りです」
そうだとだ。竹中は四人に対して述べた。
「そしてそれこそが織田殿にとって好都合です」
「兵が動いたからこそか」
「美濃の兵もまた動いたからこそ」
「それでだな」
「そういうことです。それを見てです」
どうなるかと。竹中の話は続いていく。
「間違いなく尾張において三郎殿に叛意を持つ者は動くでしょう」
「そしてそこで軍を反転させてその者達に向かい」
「そのうえで討つ」
「そうするつもりか」
「その通りかと。ですから戦にはなりません」
だからだというのであった。
「この度は」

「そういうことか」
「ではだ。今はだ」
「我等もまた」
「動くことはない」
四人もだ。言うのであった。
「織田殿、まだ我等に見せてはおられぬ」
「我等が仕えるのに相応しい方かどうか」
「それはな。まだだ」
「それではだな」
「はい。まだ見る方がいいかと」
竹中もだ。今は信長を見ようとしないのであった。
そしてそのうえでだ。四人に対して確かな声で述べてきた。
「まだ。見極められてです」
「そしてそのうえで、だな」
「我等がどう動くか決める」
「確かなものを見てから」
「そのうえで」
「そうされるべきです。では今は」
竹中はまた彼等に告げた。

第二十話　信行謀叛その七

「見ていましょう」
「そうだな。それではだ」
「今は茶を飲み。そうして」
「見るとしよう」
「あの御仁を」
彼等も彼等が率いる兵達もだ。全く動かなかった。義龍は己が掌握する兵だけを連れて稲葉山城を出た。そのうえで尾張との境に向かう。その途中でだった。
「浅井がか」
「はい、どうやら」
「越前の朝倉の援けを受けてです」
「六角とまた対しようとしています」
「どうされますか、それについては」
「浅井はよい」
いいとだ。こう家臣達に告げるのだった。
「今はな。やはり織田だ」
「今攻めて来るとは」
「やはり油断できませんな」
彼等はだ。織田が実際に来ると思っていた。それぞれ馬上において険しい顔になっている。
その険しい顔でだ。こうも言うのであった。
「しかし来ればです」
「その時はです」
「容赦せずに討ち」
「そうして我等が逆に尾張を」
「その前にだ」
だがここでだ。義龍は言うのであった。

「小牧山の城を陥とさなければな」
「あの城がありますか」
「そういえばですな」
「尾張には」
「あの城は容易なことでは抜けん」
義龍はだ。このことがよくわかっていた。
「この程度の兵ではな」
「では今は」
「尾張にはですか」
「攻め入りませんか」
「織田が退けばそれでいい」
こう言うのであった。
「それだけでは」
「わかりました。それではです」
「我等はです」
「織田が退けばそれで」
「帰りましょう」
「あの男、うつけのようだが」
彼はまだ信長をそれであると思っていた。しかしなのだった。
ここでだ。彼はこうも言うのであった。
「周りが賢いのか」
「織田の家臣達がですか」
「そうだというのですね」
「かなりの数の者達がいるそうだな」
このことも既に知っている義龍だった。彼もまた愚かではない。
だからこそだ。そうしたことまで調べて知っているのである。
それを踏まえてだ。彼は今話すのだった。
「だからだ。今はだ」
「動かれませんか」
「そうされますか」

「今は」
「そうだ。動かない」
それを決めているというのである。今の彼は。
「攻め入れば戦うがな」
「退けばそれでよし」
「左様ですな」
「では。よいな」
義龍はあらためて己の家臣達に告げる。今の彼の下にある兵は一万である。その一万の兵でだ。信長の軍勢に向かうのであった。
「どうやらあ奴は父上から美濃を譲るとされたらしいがな」
「そう文で告げられたそうですね」
「それを大義名分にしています」
「そのうえでこの美濃を狙っています」
「厄介なことにです」
「大義か。それならわしにもある」
義龍はだ。無意識のうちに負け惜しみめいたものを含ませていた。しかしそれでもだった。彼はその言葉を出さずにはいられないのだった。

第二十話　信行謀叛その八

その彼がだ。また話すのだった。
「わしは土岐の者だ」
「だからこそ」
「この美濃を治める資格がある」
「主たりえますね」
「土岐だからこそ」
「それと共に斎藤道三の子でもある」
相反する二つのことがここでは一つになっていた。矛盾である。しかし義龍はその矛盾をだ。一つにしてそのうえで語っていたのだ。
その矛盾の中に身を置き。彼は話していく。
「そのわしに。何故尾張のうつけが異を唱える」
「左様ですな」
「尾張の若造は尾張に閉じこもっておけばいいのです」
「美濃は我等のものです」
彼等はそう思っているのだった。それぞれ思うところは違っていた。そのそれぞれの違いを考える者は少なかった。しかし考えられる者は確かにいた。
帰蝶もその一人であった。彼女のところにだ。報が届いた。
「そうですか。勘十郎殿がですか」
「はい、古渡より兵を出してきました」
「その数六千」
「全軍で来ました」
こうだ。報告が次々と届くのだった。
「どうされますか、ここは」
「今城にいる者は僅か」
「殿は美濃に向かわれています」
「その状況では」

「案ずることはありません」
帰蝶はだ。そうした報を受けてもだ。落ち着いていた。
そしてその落ち着きの中でだ。こう言うのであった。
「まずは戦える者を全て集めるのです」
「戦える者をですか」
「全てですか」
「おなごであっても弓や薙刀を使えるのならば」
戦国では女であろうともいざという時はそうして戦っていた。だからこそだ。帰蝶も今こうしてだ。平然として命じたのであった。
「戦うのです」
「城を出られないですか」
「あくまで篭城してですか」
「そのうえで」
「そうです。殿が戻って来られるまで」
座ったままだが威厳に満ちていた。その背には何かを背負っていた。紅蓮に燃え盛る炎をだ。その背に背負いながらの言葉であった。
「この城を守ります」
「わかりました。それでは」
「我等もまた」
「戦いましょう」
彼女の決意を受けてだ。誰もがこう応えた。
帰蝶はそれを見て内心満足していた。しかしそれはあえて表には出さずだ。彼等に対してだ。続いてこう命じもしたのであった。
「そしてです」
「そして」
「何でしょうか、今度は」
「私の具足を持って来るのです」
こう告げるのだった。
「そして薙刀と弓も。いいですね」
「何と、奥方様もですか」

「自ら戦われると」
「そう仰るのですか」
「はい、そうです」
まさにだ。その通りだというのである。
「私もまた。敵に向かいましょう」
「ですがそれは」
「奥方様は城の中におられてもです」
「構いませんが」
「そうはいきません」
強い言葉でだ。家臣達の言葉を否定するのであった。
「皆の者が戦うというのにどうして私だけがこの服でいられましょうか」
女の服でだというのだ。そう言うのであった。
「ですから。今すぐにです」
「具足と薙刀を」
「そう仰いますか」
「はい、私もまた戦います」
また言う帰蝶だった。

第二十話　信行謀叛その九

こうしてであった。帰蝶はすぐに着物を脱ぎだ。具足姿になった。そして陣羽織も羽織る。青い鎧と紅の陣羽織の姿になってだ。そのうえで言うのであった。

薙刀を手にしてだ。彼女は言った。

「ですから」

「それでは」

「すぐに」

「それではです」

「今よりですね」

「篭城してそのうえで」

「勘十郎様の軍と」

「そうです。そして」

こう告げてからだ。さらに話すのであった。

「権六殿達は何処に」

「はい、あの方々は後詰になっておられます」

「勘十郎殿の軍の」

このこともだ。帰蝶に対して告げられたのであった。

「そうしてそのうえで、です」

「こちらに向かっておられます」

「そうですか。やはり」

それを聞いてだ。帰蝶は静かにこう述べるのであった。

「勘十郎殿からは遠ざけられていますね」

「武の要である権六殿をです」

「そして智謀の士である新五郎殿と弟殿も」

「思えば妙なことであります」

「全くです」

「その通りですね。有り得ないことです」

そのことについては帰蝶も同意であった。そうしてだ。
彼女は考える顔になってだ。強い声でこう述べた。
「それではです」
「はい、それでは」
「どうされますか」
「おそらく勘十郎殿のお傍にはあの男がいます」
こう述べるのであった。
「津々木蔵人がです」
「あの者が」
「見たことはあります」
帰蝶の表情がまた変わった。今度は曇った顔になった。
その顔でだ。彼女はこうも言うのだった。
「妖しい男です」
「妖しいですか」
「そうだと」
「殿ならまず近付けません」
それは絶対にないというのだ。
「何があろうとも」
「そうですな。殿はそうしたものをよく見られます」
「ですから」
信長の人を見る目は間違いがない。このことは家臣達の誰もがよく知っていた。だからこそ誰もがここでこう言うのであった。
そしてそれと共にだ。信行についても話をするのだった。
「勘十郎様もですが」
「あの方も人を見る目は確かです」
「それでどうして」
「あの様な者を」
「どうやら」
ここでだ。帰蝶もまたこう言うのだった。
「術を使ったようですね」

「術をですか」
「それを使ってそうして」
「勘十郎様を」
「おそらく遠ざける前にかけられたのでしょう」
それでだというのだ。それが帰蝶の見方であった。
そのことを踏まえてだ。彼女はさらに話すのであった。
「従ってここはです」
「はい、ここは」
「どうされますか」
「その津々木を討ちます」
彼女もまたこう言うのだった。
「弓が必要ですね」
「そういえば帰蝶様は弓も使われますね」
「鉄砲もまた」
「鉄砲の方がいいでしょうか」
帰蝶は家臣の一人が鉄砲を話に出したのを受けてそちらにも考えを向けた。

第二十話　信行謀叛その十

「ここは」
「それはその時になればですが」
「しかしなのですね」
「やはりあの男を」
「討ちますか」
「この戦の元凶は間違いなくあの男です」
このことは確信だった。最早だ。
「ですからここは何としてもです」
「はい、それでは」
「あの男だけを狙い」
「そうしてですね」
こんな話をしてだった。帰蝶もまた備えるのであった。戦の刻は刻一刻と近付いてきていた。そうしてその上でなのだった。
清洲城は戦の用意に入っていた。そしてそこに信行の軍勢が迫る。信長にこの二つのことはまさに手に取る様に伝わっていた。
そしてだ。美濃の境に来た時にだ。彼は言うのだった。
「よし、それではだ」
「それではですか」
「いよいよですね」
「軍を反転させる」
実際にそうするとだ。彼は家臣達に述べた。
「よいな、いよいよだ」
「では殿」
「これよりですね」
「今すぐに」
前田に佐々、それに金森が言ってきた。
「軍を清洲に」

「そうして勘十郎様と」
「いよいよ」
「決しますか」
「雌雄を決するのではないがな」
それは笑って否定する信長だった。しかしであった。
信長はすぐにだ。こうも言うのであった。
「しかしだ。決めることは決めるぞ」
「はっ、それではです」
「今こそ」
「千程度の兵を小牧山の城に置く」
信長はそれだけの兵を置くとも述べた。
「それで斎藤を迂闊に進ませぬ」
「そうしてそのうえで」
「残る兵で清洲まで戻り」
「いよいよ」
「この騒動を終わらせる」
ここでは戦と呼ばない信長だった。
「それでじゃ」
「はい、それで」
「どうされますか」
「茶をくれ」
今はそれだというのであった。
「少し喉が渇いた。何か飲むとしよう」
「わかりました。それでは」
平手が応えた。そうしてであった。
「今より淹れさせてもらいます」
「いやいや、そこまでせずともよい」
信長は平手が自ら淹れようとするのは少し慌てて止めた。そうして言うのだった。
「これから大急ぎで清洲まで引き返すのだぞ」

「それ程悠長なことは言っておられぬというのですな」
「そうじゃ。そこまではよい」
「ではどうされますか」
「水でよい」
それを所望だというのである。
「水じゃ。それを貰おう」
「それで宜しいのですか」
「急ぎじゃ。時をかけてはおれぬ」
信長のその顔が確かなものにある。時の大事さをだ。わかっているからこそであった。
「ではだ。よいな」
「はい、それでは」
平手も彼のその言葉に頷いてだ。周りに対して言うのであった。
「皆もどうじゃ」
「はい、それでは」
「有り難く頂きます」
「平手殿が仰るのなら」
「今から大急ぎで戻るからのう」
平手もだった。ここでこのことを言うのであった。
「今のうちに水を飲んでおいてじゃ」
「気を養いますか」
「つまりはそれですな」
「それがよかろう。殿はどう思われますか」
「今言おうと思っておったところだ」
信長は微笑んで平手の今の言葉にこう返したのだった。

第二十話　信行謀叛その十一

「全く。爺に言葉を取られてしまったわ」
「これは失礼しました」
「しかしよい」
だがそれについてはだ。一切咎めないのであった。そうしてまた言う信長であった。
「全軍に伝えよ。水を飲めとな」
「はい、そして」
「水を飲んだ後は」
「大急ぎで清洲に戻す。よいな」
こう告げたのであった。
「道を走ってよ」
「駆けますか」
「まさに」
「そうよ。とにかく急ぐぞ」
強調していた。その急ぐことをだ。
「よいな」
「それでは。水を飲みすぐに」
「一気に参りましょう」
こうしてであった。信長は清洲に向かおうとする。しかしである。

木下が出て来てだ。こう言ってきたのである。
「殿、水はそれでいいのですが」
「むっ、猿か」
「はい」
信長の前に出て来て話してきた。
「飯もまた必要かと存じますが」
「ははは、それは無理だ」

信長は木下の今の言葉には顔を崩して笑った。そのうえでの言葉だった。
「流石に今飯は無理よ」
「さすればです」
木下はさらに言う。その言葉は。
「清洲に着いた時にです」
「その時にというのか」
「はい、そこにいる商人達に命じておいて飯を用意しておきましょう」
「ということはだ」
「はい、清洲に着けばすぐに飯を食えるように手配してはどうでしょうか」
これが彼の提案であった。
「どうでしょうか、それは」
「ふむ、そうだな」
それを聞いてだ。信長は頭の中で計算した。自分の考える速さで向かえばどれだけで尾張に着くのかをだ。それを頭の中で計ってから答えた。
「では今より早馬を出してだ」
「その陣の場所に飯を用意させましょう」
「わかった。ではそうするとしよう」
信長は木下の言葉を受けた。そのうえでだった。
周りにいる者達を目で見回してだ。こう告げたのであった。
「では今より一人向かえ」
「そうして手配をですね」
「そうよ。よいな」
「はっ、それでは」
早速小姓の一人が向かった。話がまた一つ動いた。
信長は命じた後でだ。あらためて木下を見てだ。こう言うのであった。

「猿、そなたどうやら中々頭が回るようだな」
「いえ、それがしはその様な」
「このことは覚えておく」
信長は謙遜する彼に対してまた告げた。
「よくな」
「有り難きお言葉」
「しかし。飯のことはわしも考えておらんかった」
実はだ。彼もそこまではなのだった。
「とりあえず清洲に着いてそこから攻めようと思っていたのだがな」
「わしはもう真っ先に敵を脅すつもりでしたが」
河尻が言ってきた。
「いや、まことに」
「鎮吉が普通じゃろうな、それは」
信長はここでは河尻がそれだと述べるのだった。
「しかし。その前に飯を食っておくと確かによいな」
「力が出ます」
今言ったのは坂井である。
「それだけで随分と」
「腹が減っては戦ができぬ」
信長はここでこの言葉を口にした。
「まことにそうよね」
「では。清洲に着きましたら」
「すぐに飯を食いですな」
「そのうえで」
「仕掛けるとしよう。よいな」
信長は最後にこう言ってであった。水を飲んだ。
それは家臣達も足軽達もだった。そうして。
信長は立ち上がった。一同を見回してから告げる。
「ではだ」
「はい」

「今より」
「全軍反転せよ」
こう命じたのであった。
「そして清洲に戻るぞ。大返しよ」
彼等はすぐに清洲に戻る。そうしてであった。また一つ困難を乗り越えるのであった。

第二十話　　完

２０１０・１２・２２

第二十一話　一喝その一

第二十一話　一喝

信行の軍は清洲に達した。そのうえですぐに城を囲みだ。そうして今にも攻めんとしていた。

しかしであった。足軽達の士気はであった。

「銭は貰ったけれどな」

「ああ。信長様と戦うのはな」

「どうもな」

「褒美は思いのままって言われてもな」

それでもだとだ。彼等は口々に言っていく。

「あっちの軍にはわしの従弟がいるぞ」

「わしなんか弟がいるぞ」

「わしもじゃ」

親戚同士、兄弟同士で敵味方に別れている者達も多かった。

「それで戦えと言われてもな」

「どうも気が引ける」

「あの城にしてもじゃ」

「そうじゃな」

今取り囲んでいる清洲城を見てもであった。

「信長様の奥方がおられたな」

「帰蝶様じゃな」

「あの方がおられるのにだ」

「攻めてよいものか」

「全くじゃ」

足軽達の士気が全く奮わない。しかもであった。

戦うべき将もだ。いないのであった。

柴田、林通勝、林通具の三人は後方にいたままだ。全く動かないのだった。

「信行様は相変わらずか」
「あのままか」
「その通りじゃ」
柴田が早し兄弟に対して述べる。三人共実に暗い顔である。
「我等をここに置いたまま」
「津々木だけを置きか」
「そうじゃ。わし等はここにおれということよ」
まさにそうだというのである。
「そうしておるわ」
「左様か。それではな」
「勝てる戦ではないな」
元よりそのつもりはなくともだ。こう言う彼等であった。
「清洲の城は堅い」
「普通に攻めては陥とせぬ」
それは彼等だからこそわかることだった。長い間戦の場において駆け回り清洲にもよく出入りしている彼等ならばこそである。しかしだ。
「だが。信行様はな」
「戦慣れしておられぬ」
やはりこのことが大きかった。
「それにじゃ」
「戦に慣れた者を誰も用いられぬとは」
「それではじゃ」
「勝てる筈がない」
「その通りよ。考えてみれば妙じゃ」
こう話す柴田であった。織田家で戦のこととなればやはり彼である。それで今こうして林兄弟に対して話すのである。その戦のことをだ。
「信行様は本来ならこうした場合はじゃ」
「そうじゃな。戦に慣れた者を用いられる」

「そしてその者達の話を聞く」
信行は人の話を聞きそれを聞き分けられる者である。その為に家中において平手と共にまとめ役として重用されているのである。
それがわかっているからこそだ。彼等は話すのであった。
「しかし今はじゃ」
「あの得体の知れぬ者の言葉じゃからのう」
「これではな」
「勝てる筈もない」
こう話してだった。彼等はであった。
軍の後ろでだ。ただいるだけであった。彼等は今はどうしようもなかった。
しかしであった。信行はだ。津々木だけを傍に置いてだ。二人で話すのであった。
彼等は本陣を敷きそこから清洲城を観ている。そうしてであった。
「さて、これからだな」
「はい、まずは清洲です」
津々木が信行に対して述べていた。青い織田軍の鎧の中でだ。彼のものだけが漆黒、闇の色をしている。
その彼がだ。信行に対して囁く様に言うのであった。
「そこからです」
「そうだな。清洲を奪いだ」
「そこを足がかりにしてです」
「尾張を全てわしのものとする」
信行も言っていく。しかしその言葉は何処か虚ろである。
目も何処か定まらずだ。言葉を出していくのであった。それは異様としか言いようのない姿であった。

第二十一話　一喝その二

周りにいる旗本達はいぶかしむ。だが何も言えなかった。言えばどうなるか、今の信行の目を見ればそれでわかることだからだ。

その信行が話していく。さらにであった。

「してだ」

「尾張を手に入れられ」

「そのうえでどうするかは」

「またお話しましょう」

津々木はそこからは話さないのであった。清洲のその見事な堀と石垣、それに壁や櫓を見ながらだ。信行に対して話すのであった。

「ではまずはですね」

「攻めるか」

「はい、それでは」

「皆に伝えよ」

信行はその空虚な声で述べた。

「よいな、今よりだ」

「城攻めですな」

「城には兵はほぼおらぬ」

このことは彼も知っていた。僅かな兵しか残っていないことをだ。

「そして兄上も戦える家臣も残っておらぬ」

「まさに攻めればそれだけで」

「攻め落とせる」

信行はこのことを確信していた。

「さすればだ。今からよ」

「この六千の兵で攻めそのうえで」

「陥とすとしようぞ」

こうして法螺貝が鳴り城攻めがはじまった。しかし。

足軽達の動きはだ。ここでも鈍かった。

のろのろと動きだ。中々前に進もうとしない。
「どうしてもか」
「嫌だのう」
「全くじゃ」
「城を攻めてもじゃ」
「何になるのじゃ」
こう言ってであった。進まない。
「信行様は何を考えておるのか」
「それもわからん」
「わからん戦じゃ」
「何故謀叛なのじゃ」
「信行様が」
信行は彼等の間でも信頼されていたのだ。信長のすぐ下の弟として、そして頼りになる補佐役としてである。信頼されていたのである。
その彼が謀叛というのがだ。どうしても信じられないのだった。彼等もだ。
しかし戦ははじまっていた。それは清洲の中からもわかることだった。
城に残っている僅かな者達が武器を手にし具足を身に着けていた。男達だけでなく女達もだ。今はその手に薙刀を手にしていた。
「敵の手にかかる位なら」
「私達もです」
彼女達は意を決した顔でこう言うのであった。
「薙刀を振るえばそれだけでかなりのもの」
「ですから」
「そうだな。我等一丸となりだ」
「殿が戻ってこられるまでだ」
男達もここで言うのであった。
「持ちこたえそうしてだ」

「守りきるぞ」
「よいな」
「では城壁を固め」
まずはそれであった。
「門は全て閉ざしています」
「後は何があろうとも」
「守りきりましょう」
彼等は何としても城を守るつもりだった。信長が戻って来るまでだ。そしてここでだ。帰蝶が彼等の前に青い具足と袴、それに白い陣羽織に鉢巻姿で来たのだった。
長い髪が今は垂らされている。それが艶やかな光沢を放っている。その髪をなびかせながらだ。彼女は右手に薙刀を持ちこう言うのであった。
「正門を開けるのです」
「正門をですか」
「そちらを」
「そうです。そしてです」
どうするかというのである。ここからが大事であった。

第二十一話　一喝その三

「私がそこから出ます」
「奥方様がですか」
「御一人で」
「はい、私一人で出ます」
まさにだ。彼女一人でだというのである。
「わかりましたね。今からです」
「そして勘十郎様と会われますか」
「津々木とも」
「それで見ましょう」
見るともだ。彼女は言った。
「この戦は一体何なのかを」
「それもですか」
「その為にもですか」
「あえて正門を」
「いいですね」
反論は許さない。そうした言葉だった。
「では今より」
「はい、それでは」
「開けましょう」
皆このことには従った。しかしであった。
同時にだ。こう彼女に告げるのであった。
「しかしです」
「御一人では駄目です」
「それはあまりにも危険です」
それはだというのだ。これが彼等の引けぬところであった。
「奥方様に何かあってはなりません」
「ですからここは」

「我等もまた」
「御供させて下さい」
今度は彼等が許さなかった。それを受けてだ。
帰蝶はだ。一旦その琥珀の如き瞳を閉じ再び開いてからだ。こう彼等に告げた。
「わかりました。それではです」
「有り難うございます。それでは」
「我々もまた」
「参りましょう」
一人で行くことはだ。それは諦めたのであった。
「正門に」
「では今より開けます」
「勘十郎様が率いられる主力はそこにあります」
「さすれば」
「丁度いいです。では」
こうしてであった。その正門が開かれる。その門が開かれたのを見てだ。信行の軍勢の足軽達がだ。いぶかしみながら声をあげるのであった。
「何だ、うって出るのか？」
「城にそんなに兵が残っていたか？」
「いや、そんな筈がないが」
「じゃあどうしてなんだ？」
「さてな」
彼等がいぶかしんでいるとであった。彼等にとって思わぬ者が出て来た。右手に薙刀を持ち立っているその姿を見てだった。
信行の足軽達はだ。その足を本当に止めてしまったのだった。
「なっ、奥方様！？」
「奥方様御自ら出てこられたぞ」
「これは大変だぞ」
「ああ、とんでもないことだ」

足を止めてだ。それぞれ顔を見合わせて言い合うのだった。
「奥方に弓を引くことなぞできるか」
「槍を向けることもだ」
「できる筈がない」
「そんなことはだ」
それは正門のところにいる者達だけではなくだ。信行の軍全てに及んでいた。帰蝶が出ただけでだ。彼等はその動きを止めてしまったのだ。
そして帰蝶はここでだ。こう言うのであった。彼女の左右達には旗本達がいる。
「勘十郎殿、おられますか」
「お呼びでしょうか」
すぐにだ。信行が出て来た。そのうえで彼女の言葉に応えるのだった。
「それで」
「はい。一度お顔を見たいと思っていました」
己の前に、堀をまたぐ橋を挟んで向かい側にいる信行を見てのだ。そのうえでの言葉だった。
「貴方の。今のお顔をです」
「私のですか」
「はい。思った通りです」
その顔を実際に見てだ。こう言ったのであった。
「やはり今の貴方は」
「仰る意味がわかりませんが」
「自分ではわからないことです」
そうだというのであった。

第二十一話　一喝その四

「何ごとも。そういうものですから」
「ですから何を」
しかし信行の言葉は変わらない。
「仰っているのか。私はあくまで」
「あくまで。何だというのですか」
「尾張の為にです」
こう言うのであった。
「こうしてあえて兵をおこし」
「尾張の為というのなら」
しかしだった。帰蝶はまだ彼に言うのであった。
「本来の貴方ならばです」
「私ならば」
「兵をおこすことなぞしません」
それはないというのだ。
「決してです」
「ですからあえてです」
「あくまでそう言うのですか」
「はい、何か私を疑っておられるようですが」
「疑いは晴れました」
「それは何よりです」
信行は帰蝶の今の言葉には微笑んだ。しかしであった。
帰蝶はだ。また彼に言ってきたのである。
「そう、今の貴方はやはり本来の貴方ではありません」
「それが疑いが晴れたと」
「そうです。そして」
そして、と言ってだった。帰蝶はだ。
薙刀を足元に置いてだ。弓を取り出してだ。

それをきりきりと引きだ。一気に放ったのであった。
放たれた矢は一直線に向かいだ。そして。
信行の横を通り抜けてだ。そのうえで。
彼の傍にいた男を貫いた。彼こそは。
「津々木、どうした」
「むう・・・・・・」
津々木はその右肩を貫かれていた。その肩から血が流れている。
しかし彼はまだ生きていた。その顔に苦悶の色を浮かべながらも。
その彼を見てだ。帰蝶は残念な顔で言うのであった。
「外しましたか。失態です」
「まさか私を」
「貴方ですね」
帰蝶は今度は津々木を見ていた。そのうえでの言葉だった。
「勘十郎殿を操っていたのは」
「!?操っていた!?」
急にだ。その信行がだ。
我に返ったような顔になってだ。そうして言うのだった。
「どういうことだ、それは」
「正気に戻られましたね」
「わからない、何故だ」
その信行はだ。帰蝶の言葉を聞きながら呆然となっていた。
その顔で周囲を見回しながらだ。こう言うのであった。
「何故私が清洲を攻めている。兄上に叛旗を翻して」
「それは後でお話しましょう。ですが」
帰蝶は今は信行よりもだ。彼を見ているのだった。
津々木を見てだ。そうして彼に告げるのだった。
「勘十郎殿を操っていましたね」
「くっ、まさかそのことに」
「次は外しません」
見据えていた。鷲に似た光を放っていた。

「何としてもです」
「ここは」
「覚悟するのです」
帰蝶は再び矢をつがえていた。そうしてまた放とうとする。
しかしそれよりも前にであった。津々木は。
突如として姿を消した。まるで煙に様に。
「消えた！？」
「まさか」
「一体何処に」
「行ってしまったというのだ」
帰蝶の周りの旗本達も信行の足軽達もだ。誰もが驚いた。
「あの者まさか」
「あやかしか」
「何だったというのだ」
誰もが浮き足立つ。しかしだった。

第二十一話　一喝その五

ここで柴田達が出て来てだ。そのうえで叫ぶのであった。
「ええい、落ち着け！」
「槍を収めよ！」
「弓から手を離せ！」
柴田と林強大はそれぞれ馬に乗って信行の軍に対して叫ぶ。
「殿に弓を引くことは許されん！」
「今すぐに城を攻めるのを止めよ！」
「ここはだ！」
「おお、権六様か」
「新五郎様達もおられるぞ」
足軽達は彼等の姿を見てだった。すぐに落ち着きを取り戻したのだった。
「あの方々が仰るのなら」
「ここはな」
「そうするか」
彼等は次第に静まろうとしていた。そしてだ。
その彼等の左手にだ。今大軍が来たのだ。
「おお、来られたな」
「やはり速いな」
「お流石と言うべきよの」
柴田と林兄弟はその軍が誰の軍なのかすぐに察した。そうしてそのうえで会心の笑みを浮かべてそれぞれ言うのであった。その笑みと共に。
「勘十郎！」
その軍の先頭に馬に乗る信長がいた。彼はいきなり大音声で弟の名を呼んだ。
「おるか！」

「そ、そのお言葉は」
我に返っていた信行は。唖然とした顔になってその左手を見た。
「兄上が。こちらに」
「おるなら返事せい！」
こうだ。弟に対して言うのである。
「おるのかおらぬのか！」
「は、はい」
いつもは冷静な信行もだ。術から醒めそのうえ急な兄の言葉にいささか狼狽していた。そのうえで兄のその言葉に応えるのであった。
「こちらに」
すぐに軍を出る。兄の前に出た。
しかしその弟にだ。信長はまた言うのであった。
「将の前にそれで出る奴があるか」
「あっ、確かに」
言われてだ。そのことに気付く信行だった。ここでも気付いたのである。
「それでは」
「馬に乗って来い」
信長は優しい笑顔になって弟に告げるのだった。
「まずはそれからよ」
「畏まりました。それでは」
こうして一旦陣に戻り己の馬に乗ってからであった。信行はまた兄の前に現れたのであった。
そのうえで下馬して一礼してからだ。兄に対するのであった。信長はここでも己から言うのであった。
「してだ」
「この度のことでございますか」
「話を聞こう」
また弟に告げた。
「よいな」

「わかりました。それでは」
「何故謀叛を起こした」
問う内容は実に単刀直入なものだった。
「それは何故だ」
「それは」
「言えぬか」
「言うことはできます」
戸惑いは一瞬だった。すぐにこう兄に返してみせた。
「ですが。どうもその時のことは」
「そなたもわからぬのだな」１２
「そんな筈がないのですが」
「しかしわからぬな」
「・・・・・はい」
兄に対してだ。項垂れた顔で答えた。
「その通りです」
「普通に聞けば嘘と疑う」
信長はその弟に対してまずはこう述べた。
「しかしよ。そなたが言えば誰もそうは思わぬ」
「私が言えばですか」
「そうだ。そなたが言えばな」
そうだというのである。

第二十一話　一喝その六

「疑う筈もない。そして」
「そして？」
「謀叛の元もわかっておる」
それ自体もだ。わかっていると話すのであった。
「あの男。今は何処におる」
「津々木のことでございますか」
「そうよ。何処におるのだ」
信長が弟に問うのはこのことであった。
「申してみよ。何処におる」
「それは」
信行はまた口ごもってしまった。必死に周りを見回す。しかしであった。それまでは常に傍にいたのにだ。今はなのだった。
「一体何処に」
「殿、探しましたが」
「何処にもおりません」
「軍の何処にもです」
ここでだった。柴田と林兄弟が出て来てだ。そのうえで信長に対して答えたのであった。
「あの男、何処にもです」
「まるで煙の様に消えました」
「どれだけ探してもです」
「そうか、やはりな」
信長は彼等の話を聞いてまた述べた。
「そうではないかと思っておったわ」
「権六達はそれでは」
「そうよ。あえてそなた、いやあの男を動かす為によ」
それが狙いだったというのである。

「それでよ」
「私につけたのですか」
「そなた自身は兵を持ってはおらん」
信行は確かに信長の弟であり政において辣腕を振るっている。しかし兵を持っているのは信長でありだ。彼は一兵も持ってはいないのである。
「だからよ。権六達に兵を授けそなたにつけたのだ」
「やはりそうでしたか」
「その程度は察しておったな」
「はい」
まさにその通りだというのであった。
「確かにあの男を常に傍に置いていましたが」
「わからぬ筈がないことよの」
信行ならばと。言外に述べていた。
「それでだな。権六達を後ろに置いたのは」
「あの男に言われてです」
それでだと。信長に話すのだった。
「思えばそれもです」
「断らなかったのが今思えば不思議であろう」
「全くです」
「何もかもがおかしなことよ」
信長の言葉がいぶかしむものになっていた。
「そなたは明らかにだ」
「操られていたというのですね」
「狐や狸どころではない」
俗に化かすと言われている生き物である。
「あの者。尋常ではないな」
「まさかです」
ここでだ。佐久間が出て来て話す。柴田達と共に織田家に古くから仕えている彼がだ。

「勘十郎様を狙うとは」
「思えば当然のことよ」
信長は佐久間のその言葉を受けてまた述べた。
「これもだ」
「当然ですか」
「謀叛は親族の中でこそ最もよく起こる」
これは戦国だけではない。古来よりである。それこそ天智帝、いや神話の頃からだ。そうした話は本朝においても枚挙に暇がなかった。
「だからよ。あ奴はそれでじゃ」
「勘十郎様に近付き」
「そのうえで」
佐久間だけでなく林も言う。
「仕組んできましたか」
「そういうことでしたか」
「あの者、捕らえよ」
信長の言葉は厳しいものになった。
「そのうえで首を刎ねよ」
「はっ、それでは」
「すぐに」
柴田と佐久間がすぐに応えた。
「尾張中を見張り」
「そうしてですね」
「本来なら罪人一人見つけるのはたやすい」
信長が言い切るのには根拠があった。尾張は信長が罪人は何処までも追いそのうえで処罰することを信条としておりだ。その治安は極めていいのである。

第二十一話　一喝その七

「だが。乱破、それか」
「それか？」
「他には」
「他のよからぬ者ならばだ」
信長は本能的にだ。その場合も考えていた。
「見つからぬやもな」
「まさか。それは」
「有り得ぬかと思いますが」
「殿、おそらくは」
柴田と佐久間は主のその言葉にいぶかしみだ。林通勝は常識的なことを述べてきた。
「斉藤か今川の手の者でしょう」
「そうですな。まずどちらかです」
兄の言葉に続いてだ。林通具もそうではないかというのだった。
「そうした術を使える者もいるでしょうし」
「だとすればよいのだがな」
信長の言葉に深刻なものが宿ってきていた。
「只の乱破の類ならばな」
「といいますと？」
「違うと仰るのですが」
「いや、わからん」
信長にしては珍しくだ。その言葉が濁った。
「あの者。これまでも氏素性が知れなんだ」
「はい、全くです」
「そういったものは何一つとして」
「わかっておりません」
「捕らえればそれを言わせる」

信長もそのつもりであった。
「謀叛の張本人としてな」
「首を刎ねますね」
「そうされるのは当然ですな」
「そのつもりよ。決して逃さぬ」
言葉の強いものが戻っていた。
「よいな、それではじゃ」
「はい、それでは」
「あの者。何としても」
「してじゃ。勘十郎よ」
信行に顔を戻した。ここまで話してだ。
「そなたのことじゃが」
「はっ、さすればどんな処罰も」
「処罰か」
「どの様なものでも」
信行は既に覚悟を決めていた。それは顔にも出ていた。
しかしである。信長はだ。その弟に対してこう告げるのであった。
「よい」
「よいとは」
「そなたは操られていただけだ」
これが弟への言葉だった。
「だからだ。処罰するつもりはない」
「しかしそれでは」
「何じゃ、どうしてもというのか」
「はい、そうでなければ示しがつきません」
生真面目な信行らしい言葉だった。それは自分自身に対してもであった。
「ですから。ここは」
「そうじゃな。それではじゃ」
ここまで言われてはだった。信長としても弟の言葉を受けないわ

けにはいかなかった。若しここで不問とすればだそれこそ自決しかねない、それを見抜いたのである。

しかしであった。ここで家臣達が一斉に出て来て言うのであった。

「殿、それはです」

「勘十郎様がおられなくては」

「殿の片腕がなくなります」

「それでもよいのです」

こう言ってだ。必死に信行の助命を求めるのだった。

「何とぞ。ここはです」

「慎重なご判断を」

「くれぐれも御願いします」

誰一人として信長に申し出ない者はいなかった。しかしそれを見てである。

信長は何かを見越している目であった。まるで彼等がそうするのをわかっていたかの様にだ。そしてそのうえでだ。こう話すのであった。

「そうだな、ここはだ」

「はい、ここは」

「どうされますか」

「勘十郎、頭を剃れ」

こう弟に命じるのだった。

第二十一話　一喝その八

「よいな、頭を剃るのじゃ」
「出家せよというのですか」
「とにかく頭を剃れ」
弟の問いに答えずまた言う彼だった。
「よいな。そしてじゃ」
「そしてとは」
「髪が生え剃ろうまでわしの前に出るな」
これが今弟に告げる言葉だった。
「よいな、それまでじゃ」
「蟄居ですか」
「そうじゃ。そうしておれ」
これが信長の弟に対する処罰であった。
「わかったな。それでどうじゃ」
「そうですな。それでよいのでは」
「頭を剃り蟄居」
「確かに勘十郎様は操られていました」
家臣達も信長の今の言葉に頷く。
「しかし。操られていたのは勘十郎様に隙があったとも見えます」
「それではですな」
「その隙を見せてしまったことを処罰するということで」
「その様にですね」
「そうじゃ。これでよいな」
信長もまた家臣達に述べる。
「では勘十郎よ」
「はい」
「清洲に戻れ」
今度は再び弟に告げたのだった。

「よいな、そのうえで話をするぞ」
「話をですか」
「これからのことを話す」
それでだというのである。
「わかったな。それではじゃ」
「はっ、では」
「爺、権六、新五郎」
同時にこの三人にも声をかけた。
「そなた等も来い」
「我等もですか」
「それに」
「そうじゃ。牛助は兵達をまとめよ」
信長の兵と信行の兵をだ。そうしろというのである。
「そのうえでこの下らぬ騒ぎを収めよ。よいな」
「わかりました」
佐久間は主の言葉に謹厳な面持ちで頷いた。そうしてだ。信長は他の家臣達にもこう告げた。
「他の者はその牛助に従い兵を収めよ。よいな」
「はっ、それでは」
「今より」
「全てはこれで終わりじゃ」
信長はまた話した。
「清洲に戻るぞ」
「結局一戦も交えませんでしたな」
「確かに」
山内と堀尾がここで言う。
「覚悟していましたが」
「それはありませんでしたな」
「戦はですな」
「ですが」

「ふむ、わかっておるな」
信長はその二人の言葉を聞いて面白そうな目をして述べた。
「そうよ。話はこれで終わりではない」
「といいますと」
「ここはまた」
「まあ見ておれ」
これ以上は言わない信長だった。ただしだ。
川尻に顔を向けてだ。まずは彼のその名を呼んだ。
「鎮吉」
「はっ」
「そなた、暫く清洲に詰めておれ」
「清洲にですな」
「そうよ。そなたにやってもらう」
鋭い目でだ。こう彼に話すのであった。
「やってもらうことはわかるな」
「既に」
わかっているとだ。川尻も答えてみせた。
「ではその時に」
「さて、それではじゃ」
「はい、清洲にですね」
「今から」
「皆戻るぞ。よいな」
こうしてであった。信行の謀叛は一先終わった。そうしてそのうえで信長は清洲に戻った。するとであった。そこにいたのは。
「おお、よくやってくれたのう」
「いえ、私は何も」
帰蝶はだ。微笑んで信長の言葉に応えるのだった。彼女はまだ具足と陣羽織を身に着けている。彼女はまだ清洲の正門のところにいたのだ。

第二十一話　一喝その九

そのうえで夫を出迎えていた。信長もその言葉に応えて話す。
「いやいや、そなたのお陰でじゃ」
「私のですか」
「そうじゃ。一兵も失わんで済んだ」
このことを帰蝶にも話すのだった。
「まことによいことじゃ」
「左様ですか」
「そうよ。その功見事じゃ」
また妻に話した。
「後で褒美を取らそうぞ」
「褒美をですか」
「そなたが欲しがっていたあの茶器じゃ」
「あれをですか」
「やろう。それでどうじゃ」
「有り難き幸せ」
帰蝶も笑顔で信長の言葉を受けた。こうして彼女は夫からその功を讃えられ褒美も受けたのだった。信長はそのまま清洲に入った。
彼はすぐに家臣達に具足を脱ぐように命じた。そしてであった。
「爺」
「はっ」
「権六」
「はい」
「新五郎」
「こちらに」
三人はそれぞれ信長の言葉に応える。そうしてであった。
信長はその三人にだ。こう告げたのであった。
「これよりあの場所に来るのじゃ」

「畏まりました」
「ではすぐに」
「してじゃ」
信長の言葉はさらに続く。
「無論あ奴もじゃ。よいな」
「あの方もですか。やはり」
「呼ばねば話にならん」
そうだとだ。こう林に述べるのだった。今弟はおらず兄がいるだけである。
「よいな。五人で話すぞ」
「わかりました。では」
林が応えてだった。そうしてだ。
まず信長がその場所に向かい次に平手達であった。彼等が入った場所は。
そこは茶室であった。そこに入ってだった。そのうえでまず信長が茶を淹れはじめた。そのうえで平手達三人に話すのだった。
「そろそろじゃな」
「あの方もですね」
「来られますね」
「まだ剃ってはおるまい」
信長は柴田に顔を向けて問うた。
「それはまだじゃな」
「はい、それはです」
「そうか。それはよいことじゃ」
信長は柴田のその返答を聞いてまずは満足した。
そのうえでだ。三人に茶を渡してだ。こう話すのであった。
「話はこれからじゃからな」
「これからですか」
「この話は」
「あの男、これで終わらぬな」

信長の顔が険しくなった。特に目がだ。
「必ずまた仕掛けて来るぞ」
「必ずですな」
「やはり」
「そうじゃ。一度で諦める男ではない」
これが信長の見たところだった。
「必ずじゃ。また仕掛けてくるぞ」
「勘十郎様にですな」
「そうしてきますか」
「一度で諦めては何にもならん」
そうだというのである。
「だからじゃ。またじゃ」
「そしてですか」
「また乱を起こしますか」
「あの者は」
「おそらくまだ尾張におる」
信長はそれも予測していた。彼は何処までも広く深く見ていた。
「探し出せればそれでよい」
「そしてそこで、ですな」
「あの者を」
「ただじゃ。奴の術には気をつけることじゃな」
そのことも忘れていない信長だった。

第二十一話　一喝その十

「よいな、それもじゃ」
「はい、それでは」
「それもまた」
「とにかくじゃ。あ奴は間も無くじゃな」
話をそこに戻した。
「そうじゃな」
「そうですな、そろそろです」
「来られます」
平手と林が応えたその時だった。彼が来た。
信行だった。彼は茶室の狭いその入り口から中に入ってだ。そのうえで兄の前に来て一礼してから言うのであった。彼も既に具足は外し普段の折り目正しい服になっている。
その服で入りだ。兄に応えるのであった。
「それでは。ここで、ですね」
「うむ、そうじゃ」
信長も弟に対して応える。
「それでは。よいな」
「はい、あの男のことですか」
「まだ行方はわからぬな」
「はい」
その通りだというのである。
「何処に消えたのか」
「案ずるな、あ奴はおる」
「この尾張に」
「そなたのすぐ傍にじゃ」
いるとだ。他ならぬ信行に対して言うのだった。
「もっとも今は流石におらぬがな」

「しかしなのですね」
「窺っておるのは間違いない」
「だから今ですか」
「そうよ。まだ奴が離れているうちにじゃ」
「こうして会い」
「話しておくのじゃ」
弟にだ。こう話すのであった。
「わかったのう」
「はい、それでは」
信行も頷く。こうしてであった。
五人で茶を飲みながらだ。話をしていく。その話はやはりこのことだった。
「してあの男、どうして」
「どうしておびき出しましょうか」
柴田と林がこう主に問う。
「勘十郎様に術をかけ乱を起こすなぞ」
「決して許せませぬ」
「わしがですぞ」
柴田は怒りを露わにさせて言うのであった。
「この手で。真っ二つにしてやりましょう」
「いやいや、それはわしがしよう」
林はだ。珍しく柴田に張り合って言ってきた。
「これでも剣の腕には自身があるぞ」
「いや、ここは織田家随一の武辺者であるわしがじゃ」
「ここはわしがじゃ」
「ああ、よいよい」
信長がはやる彼等を苦笑いと共に止めた。
「どっちでもよい。というよりかはじゃ」
「といいますと」
「それがし達のどちらでしょうか」

「既にもう鎮吉に告げておる」
二人にだ。このことを話すのだった。
「もうな。いざという時はあ奴が働く」
「ううむ、鎮吉ですか」
「あの者がですか」
その名前を聞いてだ。二人は難しい素振りを見せながらもそれでも納得して頷いてだ。そのうえで主に対してこう述べたのであった。
「確かに。あの者ならです」
「無事殿のご期待に添えましょう」
「そうじゃろう。あの者ならやってくれる」
信長もだ。そのことを確信していた。
「あの男の首を必ずじゃ」
「挙げますな」
「あの者の腕なら」
「既に二手も三手も先を考えておる」
これが信長だった。そのうえで動く。それが彼のやり方だった。
「わかったな。それではじゃ」
「わかりました。ここは鎮吉に任せまして」
「我等は大人しく見ておきます」
「そうせい。ここはな」
こう二人に言ったところでだった。平手が口を開いてきた。

第二十一話　一喝その十一

「それで宜しいですかな」
「うむ、本題じゃな」
「左様です」
その通りだとだ。こう主に告げるのであった。
「鎮吉を用意させたその策ですが」
「既に考えておるぞ」
すぐにその主からの返事が来た。
「もうな」
「そうでござるか」
「そうじゃ。だからこそ勘十郎を呼んだ」
信行を見ながら話すのだった。
「既にな」
「といいますとその策は」
「勘十郎、よいか」
弟を見たままでの言葉であった。
「そなたには再び謀叛を起こしてもらう」
「再びですか」
「そうじゃ。そなたはまずは古渡に戻れ」
そうしろというのである。
「してじゃ」
「それからですか」
「さすればやがてあ奴が戻って来る」
信長はここまで読んでいた。
「その時にじゃ。あ奴の言葉に乗れ」
「そうしてですか」
「そしてわしがこれから言うことに合わせよ」
「では」

「よいか。話すぞ」
信長は茶を置きそのうえで話していく。話し終えてからだ。弟の顔を見て問うのであった。
「わかったな」
「はっ、よく」
「くれぐれもじゃ。あ奴の術にはかかるな」
「術にはですか」
「術のかけ方に思うところはないか」
このことをだ。問うのであった。
「それについてじゃ」
「術のですか」
「何か特徴はあるか」
「そう言われますと」
信行はこれまでの津々木とのやり取りを思い出しながらだ。今茶室にいる者全てに話す。そのこととは。
「目でしょうか」
「目か」
「はい、目です」
それだというのである。
「どうも目を見ればそれで、です」
「術にかかってしまったというのか」
「面妖なことにです」
そうだというのである。
「目を見ればそれによって」
「ふむ、わかった」
ここまで聞いてだ。信長はまた頷いてみせた。
そのうえでだ。信行に対しても言うのであった。
「ではじゃ。勘十郎よ」
「目ですか」
「そうじゃ。目じゃ」

まさにそれだというのである。
「あ奴の目に気をつけよ」
「具体的には見るなというのですね」
「うむ」
こう答えて頷きもする。
「そういうことじゃ。よいな」
「わかりました。それでは」
「操られるふりをせよ」
信長が弟に授ける策であった。
「よいな、そのうえで合わせよ」
「では。その様に」
「後はこの策が実際に動くだけよ」
話すこと、用意することは全て済んだというのである。

第二十一話　一喝その十二

「それではじゃ。よいな」
「はっ、それでは」
「我等もまた」
「話はこれで終わりじゃ。それではじゃ」
平手や柴田達にも告げてだ。それから言うことは。
「さすれば茶を飲もうぞ」
「そうですな。茶の場ですし」
「それでは」
「この茶にしてもじゃ」
信長は茶についても話すのであった。
「こうしてわし等だけが嗜むのではなくじゃ」
「我等だけでなく」
「といいますと」
「民百姓の誰もが楽しめるものにせねばのう」
これがだ。茶に対する彼の考えであった。
「そうでなければ意味がない」
「しかし殿」
平手がいぶかしむ調子で主に言ってきた。
「前にも味噌や菓子でも言ってましたが」
「うむ、言ったぞ」
信長自身もそうだと認めるのだった。
「確かにな」
「ううむ、菓子といえば砂糖ですな」
平手はその砂糖についても考えるのだった。腕を組みそのうえでだ、眉を顰めさせてそのうえでまた主に対して言うのであった。その言葉は。
「琉球で手に入りますが」

「左様、琉球から買うぞ」
「そうして手に入れますか」
「そうじゃ、多量に買う」
そうするともいうのである。
「そうすれば安くなるからのう」
「そうされるのですか」
「味噌も茶もだ。多く作れば安くなる」
その二つも同じだというのである。
「そういうことじゃ」
「それで民百姓の誰もがそうしたものをですか」
「口にできるようにする」
信長は確かな声で言い切る。
「天下を泰平にしたうえでな」
「天下を泰平にして」
「そのうえでござるか」
柴田と林もここで言う。
「殿の目指されるものは何か」
「豊かさでござるか」
「そうじゃ、ただ泰平になっただけでは何にもならん」
信長は二人にも話した。
「豊かにならねばな」
「そうですな。ただ泰平だけでは意味がありませぬ」
「そこに豊かさがなければ」
二人もこう話してだった。そうしてであった。
ここでまた茶を飲んでだ。こうも言うのであった。
「無論酒もじゃ」
「いえ、兄上は」
今度は信行が兄に言った。
「酒は駄目ではありませぬか」
「そうですな、殿に酒と言われましても」

「いや、意味がわかりませぬ」
「それがしもでござる」
柴田、林だけでなくだ。平手もそうだというのだ。
「あの、酒は駄目でございますな」
「それでもなのですか」
「誰もが酒をですか」
「そうじゃ。楽しむ飲める世にする」
そしてであった。今いう言葉は。
「そうしてうっかり戸を閉めずとも夜でも平和な世にするのじゃ」
「そうしてそうした泰平や豊かさを保つものを築かれますな」
信行は生真面目な調子で兄に話した。
「左様ですな」
「そうよ、それも考えていく」
天下を治めるに相応しいものをというのだ。彼の考えは深かった。
そんな話をしながらだ。信長はその避けの話をするのだった。
「酒はのう。どうもな」
「兄上は昔からそれだけは駄目でございますな」
「うむ、飲めん」
実際にそうだとだ。弟に話す。どうにも腑に落ちない顔でだ。
「如何にも飲みそうだと言われてきておるがだ」
「それでもでございますな」
「それより甘いものがよい」
信長はこちらの方がというのである。
「柿なり蜜柑なりじゃ」
「無論そういうものもですね」
「うむ、今よりもずっと多く植えるぞ」
やはりそうしたものもなのだった。
「よいな、それは」
「とにかく誰もが様々なものを飲み食いできる世の中ですか」
「つまりは」

「そういうことじゃ。わし一人が美味いものを飲み食いして何が楽しい」
少なくとも信長はそうした人間ではない。そうした欲はないのだ。
「誰もが飲み食いしてこそではないか」
「では。その世の中を実際のものとする為に」
信行がまた兄に応える。
「あの男を」
「そうよ、放っておけん」
またその話に戻ったのだった。
「よいな、それではじゃ」
「はい、それでは」
「何としても次で」
「討ちましょう」
「そうするぞ。いいな」
こう話してであった。彼等は今は茶を飲むのであった。
信長は政や戦だけではなかった。謀もまた行うのだった。そしてその謀によってだ。今その敵をだ。討たんとするのだった。それが次であった。

第二十一話　完

２０１０・１２・３１

第二十二話　策には策でその一

第二十二話　策には策で

「嘘でございましょう」
「いやいや、嘘ではありませぬ」
信長はこの時床にあった。そうして枕元に立つ中年、いや初老になろうとしているがまだ充分に美しい着飾った女に話をしていた。
見ればその顔は流麗でとりわけ目元が整っている。眉の形もいい。顔立ち全体が凛としていて生気に満ちている。長い黒髪も艶やかであり美貌はまだまだ健在だ。
その女にだ。彼は今話していた。
「いやいや、私としたことがです」
「落馬したというのですか」
「左様です」
「そなたが落馬なぞ」
女はまだ彼に言うのであった。
「私は今まで見たことも聞いたこともありませぬ」
「おや、そうでしたか」
「幼い頃から馬を乱暴に乗り回し」
信長の馬の乗り方の荒々しさは終わり中で有名なことだった。
「それで落馬どころかよろめくことさえしない貴方がですか」
「しかし不覚を取りまして」
「それで落馬だと」
「左様です」
床の中からだ。如何にも面目なさそうに言うのであった。
「その通りです」
「私は信じません」
女の言葉はまだ厳しい。
「平手の爺や権六ならともかくとして」

「いや、母上がですか」
「そなたの母だからです」
だからだというのだ。この女こそだ。信長の生母である土田御前である。信長にとっては実に厳しい母として知られている女である。
「わかるのです」
「母上だからですか」
「そなたは滅多なことでは死にはしません」
まさにそうだというのである。
「どうせ落馬の傷で死にそうだというのでしょう」
「実はそうなのです」
「それを母が信じると思いますか」
見ればだ。御前の顔は怒ってさえいた。怒るその顔は母親だからであろうか。何処か信長が上気した時のその顔に似ているものがあった。
「果たして」
「信じていただけなければ困るのですが」
「困ると」
「はい、そうなのです」
さしもの信長もだ。母親にはいささか礼儀正しい。言葉遣いが違う。４４
「ここは是非共」
「どうやらそなた」
御前はだ。そんな信長の言葉を聞いてだ。まずは少し呆れた様な顔になった。
そうしてそのうえでだ。こう我が子に対して言うのであった。
「企んでいますね」
「さて、それは」
「そなたは私の子です」
今言うことはこのことだった。
「だからわかることです」

「そう言われますか」
「しかし」
それでもだと。ここで母の言葉が微妙にであるが変わってきた。
そうしてそのうえでだ。こう彼に告げた。
「しかしそなたの落馬はです」
「はい、それは」
「事実ですね」
我が子に合わせた。それにだ。
「そうですね」
「いやいや、全く油断しました」
「して。大丈夫なのですか」
「最早危ない状況です」
そしてであった。彼はこう母に返したのであった。
「一体どうなってしまうのか」
「では。どうされるのですか」
「跡を継ぐには。奇妙や茶筅はまだ幼いでござる」
彼の子供達だ。既に子が何人かいるのである。
「従ってここは」
「勘十郎ですね」
「あ奴しかおりませぬ」
母が自分に合わせてくれたのをよしとしてだ。こう言うのであった。

第二十二話　策には策でその二

「ですから。古渡からです」
「蟄居を命じていたのではないですか？頭を剃らせたうえで」
「いやいや、頭を剃るのはまだの筈です」
母も話を聞いていた。信長はそれがわかってさらに続ける。こうなるともう流れは自分のものだった。御前もそれはわかってやっていた。
「ですから今のうちにです」
「勘十郎をこの清洲に呼びですね」
「はい」
その通りだと。頷いてみせた。
「左様でございます」８２
「わかりました。それではです」
「勘十郎にお伝え下さい」
「それもすぐにですね」
「早馬がありますので」
もうそれを用意してあるというのである。
「何でしたら乱派でも」
「そこまでしなくていいでしょう。早馬で充分です」
「はい、さすれば」
「文を送ります。しかし」
ここで、だった。御前はまた呆れた顔になってだ。信長に言うのであった。
「吉法師、全くそなたは昔から」
「昔から。何でございましょうか」
「手のかかる子です」
我が子にだ。こう言うのである。
「何かとやんちゃで。勘十郎は素直で穏やかだというのに」

「いやいや、そうでなくては天下はです」
「天下を望むというのですね」
「無論です。まあ母上は見ておいて下さい」
「精々討ち死にしないことですね」
しかし母の言葉は厳しい。
「今の様に落馬なぞして」
「いやいや、それはきつい」
「きつくはありません。そなたは昔からやんちゃばかりして」
「甲斐や越後もそうですぞ」
「ああいったようになりたいのですか」
「いやいや、さらに上です」
不敵に笑ってだ。母にも話すのだった。
「あの者達よりもさらに上に行きます」
「やれやれ。また大きなことを」
「大きいですか」
「そうしていつもそんなことを言って」
母はここでも呆れて我が子に言うのだった。
「そなたは」
「私は本気ですよ」
「本気で天下を手に入れるというのですね」
「まあ見ていて下さい」
「尾張は確かに統一しましたが」
それは一応は認めるといった口調ではあった。
「しかし」
「それでもですか」
「見ておくことは見ておきます」
素直ではない。信長に対してはどうしてもそうなる母だった。
「ただ。勘十郎はです」
「殺すなというのですね」
「そなた、それはないですね」

「殺すのならもう先日のあの時にしております」
「ではやはり」
「母上もあの津々木という男は御存知ありませんな」
床の中から真剣な顔で問うた。
「やはり」
「知る筈もありません」
御前は我が子のその問いには首を横に振って述べた。
「怪しい者とは思いますが」
「やはり御存知ありませんか」
「何なのですか、あの男は」
御前の方からだ。信長に問うのだった。
「氏素性も全くわからないとは」
「そうですな。どうも気になり申す」
「そうした者が勘十郎に近付くとは」
「その辺りも調べておくのです。いいですね」
「わかっております」
それは信長が最もわかっていることだった。そしてだった。

第二十二話　策には策でその三

「あの男だけはです」
「殺すというのですね」
「誰が何と言おうとも」
「好きにするのです」
津々木については一行に構わないというのだ。御前も。
「あの男は織田家にとって放っておけばまた害になりかねません」
「はい、ですから」
「そうするのです」
御前も津々木については殺すことで一致した。そうしてであった。
信長が落馬して死線を彷徨っていると言う話はだ。すぐに信行の下にも届いたのであった。
「お母上からですか」
「そうだ」
彼は古渡の城にいる。そこで家臣達の言葉を受けていた。見れば彼はまだ頭は剃ってはいない。髷をそのままにしているのだった。
「何でも兄上がだ」
「殿がですか」
「何かあったのですか」
「落馬したとのことだ」
そうなったとだ。文を見ながら彼等に話すのだった。
「その傷で今にも亡くなられそうだとのことだ」
「まさか。あの殿がですか」
「落馬されたと」
「まさか」
信行の家臣達もそのことはすぐに疑った。まさかという顔だった。
「そんなことがあるのですか」
「いや、それはないでしょう」

「しかも亡くなられそうだとは」
「そうだ。まさかとは思うがな」
信行はだ。真剣な顔でこう彼等に返すのだった。
「しかし文にはそう書いてある」
「左様ですか」
「そうなのですか」
「そうだ、そしてだ」
文に書かれているのはそれだけではないというのだった。信行は文を手にしたままでそのうえでだ。彼等にこうも話すのだった。
「尾張の次の主にだ」
「勘十郎様がですか」
「そうなれというのですか」
「そうだ、そう書いている」
そうだというのであった。
「それですぐに清洲に来いとのことだ」
「ううむ、謀叛は終わりましたし」
「まだ蟄居をしていませんが」
「それでもですか」
「そうも言っていられぬ状況のようだ」
「確かに。お命が危ういとなれば」
「それもですな」
家臣達は信行の言葉に頷いた。言われてみれば確かにそうだった。頷いてからだった。そのうえでまた言うのだった。
「では。今すぐにです」
「清洲に向かいましょう」
「兄上の死に目に会えないというのも不孝です」
「それもありますし」
「うむ、わかっている」
こうしてだった。信行は清洲に向かうことになった。そのうえでだ。

己の家臣達にだ。命じたのだった。
「では用意をな」
「そうですね。それでは」
「我等もお供します」
「頼んだぞ。ではな」
彼等に馬の用意をさせる。そのうえで己の部屋に入った。するとだ。
何処からだ。声がしてきたのであった。
「信行様」
「誰だ」
「私です」
こう言ってきたのだった。あの声が。
「私ですが」
「まさかとは思うが」
「はい、私です」
いきなり目の前にだった。その男が出て来たのであった。

第二十二話　策には策でその四

津々木であった。信行の目を見てきた。しかしだ。
信行はここで兄との話を思い出してだ。咄嗟にこうしたのだった。
「むっ」
「どうしたのですか」
「いや、何か落とした」
こう言ってだ。下を見たのである。それで彼の目から己の目を逸らしたのだ。
「何なのか」
「はて。別に何も落としていないようですが」
「そうか」
「はい、ですから別に」
「ならいいがな」
「そしてなのですが」
津々木はさらに言ってきた。
「宜しいでしょうか」
「何だ、一体」
「はい、どうやらです」
津々木のその言葉がだ。暗く低いものになってきた。そうしての言葉だった。
「殿がです」
「兄上がか」
「勘十郎殿のお命をです」
こう囁いてきたのである。
「狙われているとか」
「それはまことか」
「どうやら」
彼が言う言葉はこれだった。

「して清洲に呼び出されておるのですな」
「そうだ」
信行はここでは芝居をしていた。既に目の前にいる男がどういった者かは把握している。そのうえでだった。彼は合わせているのだった。
そのうえでだ。彼はこう言うのであった。
「兄上が落馬されたとのことだ」
「殿がですか」
「さて、どうしたものか」
「行くべきです」
すぐに言う津々木だった。
「ここはです」
「そなたはそう思うか」
「そうしなければ勘十郎様は今度こそです」
「再び謀叛の嫌疑でだな」
ですから。ここはです」
「そうだな」
頷いてみせてであった。それで決まりだった。
信行は彼を連れて清洲に向かった。それを聞いてであった。
信長は床から起きていた。そこに座って川尻に言うのである。
「いよいよだぞ」
「来ましたか」
「うむ、信行もどうやら」
川尻に対してだ。笑みを浮かべながら話すのだった。
「役者のようじゃな」
「そうですな。勘十郎様もあれで」
「そういうことは不得手だと思っておった」
これが信長の見たところの信行であった。
「器用ではないからのう」
「勘十郎様は器用ではありませんか」

「真面目にこつこつやることは得意じゃ」
確かにその通りだった。信行はその生真面目で折り目正しい性格故にそうしたことは得意なのである。しかし機転となるとなのだ。
「あれに機転があれば鬼に金棒よ」
「戦でも強かったでしょうな」
「そうじゃ。あ奴は機転とかそういうことを持っておらんからのう」
「そこが難しいところですな」
「しかし演じることはできたな」
「はい」
それはだというのである。
「確かに」
「それはよいとしよう。それでじゃ」
「それがしはこのまま暫く引っ込んでいればいいのですね」
「うむ。狙うのはわかるな」
「はい、あの男の首でござる」
それが誰かはもう言うまでもないことだった。
「さすれば」
「必ず獲るがよい」
「そうして尾張の禍根を」
こう話してだった。川尻も備えに入るのだった。信長は再び床に入り弟達が来るのを待った。そうしてであった。
信行は津々木を連れて信長の寝室に向かう。そこで御前の応対を受けるのだった。

第二十二話　策には策でその五

「母上、お久しゅうございます」
「はい。そなたも元気そうで何よりです」
今は津々木は傍にはいない。彼は城の外に置いておいたのだ。彼こそが謀叛の張本であることは既に知られている。流石にその彼を城の中に入れるのは不自然だと判断してのことである。それどころか彼を連れてここに来ていることすらだ。内密であったのだ。
そうして今は一人で母と会ってだ。挨拶をするのだった。
「先のことは申し訳ありません」
「髪を剃るそうですね」
「はい」
「そうしてそれが伸びるまでは蟄居だとか」
「兄上のご沙汰で」
「いいでしょう」
御前はだ。このことにはここでは多くを言わなかった。そうしてだった。
我が子にだ。こう告げるのであった。
「ではです」
「兄上のところにですね」
「一刻を争います」
お互いわかっているが。こう告げるのだった。
「ですから。早いうちに」
「わかりました。それでは」
こうしてであった。信行はその信長のいる部屋に向かった。そうしてそこにいる信長の前に案内された。それからであった。
「よく来たな」
「遅れて申し訳ありません」
「いや、時間通りだ」

信長は床の中で布団を被り顔を見せない。そのうえで弟と話すのだった。
「何も問題はない」
「だといいのですか」
「してじゃ」
信長はここで本題に入ったかに見せた。
「よいか、勘十郎よ」
「して。何でしょうか」
「そなたに言っておくことがある」
こう彼に言うのである。
「そなたにじゃ」
「私に」
見ればだ。信長は布団の中から見ていた。信行の姿だけでなくだ。左右の蝋燭で枕元を照らすその部屋の中でだ。彼は見たのだった。
そしてだ。彼はやにわに布団から起き上がりだ。彼の名を呼んだ。
「鎮吉！」
こうだ。その名を呼びだ。
「影じゃ！」
また叫んだ。
「勘十郎の影じゃ！突け！」
「はっ！」
するとだ。信行の後ろの襖が開いてだ。刀を抜いた川尻が出て来た。彼は信長が言うままに信行の影をその剣で貫いたのだった。
刀を逆手で両手に持ちそのうえで畳ごと貫いた。するとだった。
不意に信行の影が蠢きだ。そこから何かが飛び出た。
「むっ、これは！」
「出たか！」
信長は寝着だったがその手には刀がある。構えを取りながら叫ぶのだった。
「ここで！」

「馬鹿な、そんな筈が」
影を貫かれた信行は何ともなかった。だが驚きを隠せぬ顔で言うのだった。川尻は畳から刀を抜き態勢を立て直して構えに戻っている。
「影に。あの男が」
「信じられぬか」
「城の外に置いていきました」
己の前に立つその男を見ながら兄に答える。信長と川尻は立ち上がっており構えを取りながら信行を囲むようにしてその左右に来ていた。
「それがどうして」
「御主、何者じゃ」
信長は強い顔で津々木に問うた。
「人か。それともあやかしか」
「ははは、それがしがあやかしでござるか」
津々木は二人に刃を向けられてもだ。平然としてそこに立っていた。そうしてそのうえでだ。口を大きく開いて笑いこう言ったのである。
「またそれは面白いことを」
「面白いというのか」
「それがしは紛れも無く人でございます」
口を閉じても笑みのままだった。その顔での言葉だった。

第二十二話　策には策でその六

「左様、ただ」
「ただ、何じゃ」
「少しばかり術が使えるだけでございます」
「そしてその術でか」
信行はここでようやく立ち上がった。そのうえで彼に問うのであった。
「それがしをか」
「その通りでございます。勘十郎様に謀叛を起こさせ」
実際にだ。彼自身の口から述べられていく。
「そうして尾張を乱すつもりでした」
「やはりそうであったか」
それを聞いてだ。頷く信長だった。そうしてそのうえでだ。
津々木を見据え今にも斬らんとする姿でだ。また彼に問うのだった。
「それではまた聞こう」
「今度は何でしょうか」
「何処から来た」
次に問うたのはこのことだった。
「そなた、どの手の者じゃ」
「それがしがどの大名の手の者かというのでしょうか」
「大名とは限るまい」
信長は他の勢力の可能性も頭の中に入れていた。国人や町衆、寺社、それに忍の里にとだ。戦国には様々な勢力があるからだ。
それでだ。彼は問うたのであった。
「他にもおるな」
「少なくともどの大名でもありませぬ」
「違うと申すか」

「左様。それがしはそうした場所にはおりませぬ」
「ではどの場所におる」
信長は彼にさらに問うた。
「それを言うがよい」
「さて、何処でございましょう」
「言うつもりはないか」
「多くを言うつもりはありませぬ」
こうだ。津々木は慇懃だが妙に陰のある声で述べるのだった。
「ですがこう申し上げておきましょう」
「何とじゃ」
「それがしは闇の中におります」
こう言うのであった。
「それは申し上げておきます」
「闇とな」
「その通りでございます。ですが」
「ですが。今度は何じゃ」
「残念です。勘十郎様もそれがしに気付かれたようで」
「危ないところであった」
信行も剣を抜いていた。そのうえで彼に対して言葉を返すのだった。
「一度は陥ったが二度はだ」
「ありませぬか」
「そういうことだ。そしてだ」
さらにだとだ。言ってであった。
津々木を斬ろうとする。しかしだった。
信長はだ。その弟を止めて言うのであった。
「待て」
「何故でしょうか」
「この男、尋常な者ではない」
それを見抜いての言葉であった。それでだった。

「迂闊に前に出ては危ないぞ」
「だからですか」
「そうじゃ。ここはじゃ」
「はい、それでは」
川尻が前に出た。そうして主達に話すのである。
「まずはそれがしが」
「鎮吉、そなたは左じゃ」
津々木を左から攻めよというのである。
「わしが右じゃ」
「ではそれがしは」
「勘十郎、そなたは真ん中を受け持て」
彼はそこだというのである。
「よいな、それではじゃ」
「はっ、それでは」
「一人で倒せずともだ」
そこまでわかっていた。この辺りは流石に信長だった。
「三人ならばどうじゃ」
「確かに。今の信長様達が相手ではです」
津々木もだ。不敵に笑って言うのだった。
「それがしでは相手にはなりますまい」
「ではどうする」
「観念するか」
信長と川尻が彼に問うた。その間にも摺り足で間合いを詰めている。

第二十二話　策には策でその七

「生憎だがここでだ」
「御主には死んでもらう」
「そうですな。それがしはどうしても討たねばなりますまい」
また自分から言う津々木だった。
「しかしです」
「逃げられると思うておるのか」
「普通では無理です」
信長にだ。笑みのまま返すのだった。
「それはやはり」
「では覚悟するのじゃな」
「ですがそれがしは普通ではござらんので」
「逃げられると申すか」
「はい」
その通りだとだ。臆面もなく返すのであった。
「それを今御覧に見せましょう」
「兄上、御気をつけを」
信行が兄を横目で見ながら告げる。彼も構えに入っている。
「この者の術は」
「わかっておる、目じゃな」
「はい、目を見てはなりませぬ」
そうだとだ。兄に話すのだった。川尻もそれを聞いていることをわかったうえでだ。そうしてこう兄に対してこのことを話したのである。
「決して」
「で、あるか」
「そうです。それで御願いします」
「そうじゃな。目に気をつけ」

「確かに目も使います」
津々木がここでも言う。
「しかしでございます」
「目だけではないというのか」
「左様。こうして」
この言葉と共にであった。不意に。
津々木の姿が消えた。まさに三人が気付いたその時にはだった。
「消えた!?」
「まさか」
「何処にだ」
「ははは、まさかです」
何処からともなくだ。彼の声だけが聞こえてきた。
「それがしがこうした術も使えるとは思いますまい」
「何処におる」
「既にここにはおりませぬ」
つまり声だけだというのである。
「それがし、これで尾張を去りまする」
「逃げるつもりじゃな」
「左様、最早尾張では策を弄することはできませぬ故」
それでだというのだ。
「信長様がそこまで警戒を持たれたならば」
「しかしよ」
だが、というのだった。信長はその声に己の鋭い声をぶつけていた。
「このこと、忘れはせぬ」
「忘れぬですか」
「そなたのこともよ。決して忘れぬ」
こう彼に告げるのである。
「してじゃ」
「そして?」

「その首何時か貰い受ける」
上を見上げていた。声がそこからしているからである。
「よいな、覚えておれ」
「そうですな。また機会があれば」
「わしの前に出ると申すか」
「そうさせてもらいます」
「してその時はじゃ」
信長からの言葉だった。
「覚えておくことじゃ」
「そうですな。その時を楽しみにしております」
こうしてだった。津々木は何処かへと姿を消した。その行方は探されたが何処にも見つからなかった。完全に消え失せてしまっていた。

第二十二話　策には策でその八

信長もこうなっては諦めるしかなかった。だが行方は引き続き捜されることになった。そして信行は頭を剃り伸びるまで蟄居となったのだった。

こうして信行の謀叛の話は区切りを迎えた。それが終わってからだった。

「都にじゃな」

「行かれますか」

「そちらへ」

「そうじゃ。そうする」

こうだ。野々村と大津に述べるのだった。

「尾張を手中に収めた。それでじゃ」

「尾張の守護にですね」

「正式にですな」

「そうよ。公方様に御会いして任じてもらう」

尾張を手中に収めた。後はであった。

「その為にじゃ」

「それはいいのですが」

「そうですな」

ここでだ。万見と矢部が言ってきた。多くの家臣達が信長の前に集まっていた。そうしてそのうえで彼に対して言っていくのだった。

「問題は美濃を通るならばです」

「斉藤が」

「それが問題ですな」

福富もそのことについて話した。

「美濃を通らずとも。道中に刺客を放ってくるでしょう」

「間違いなくそうしてきますな」

その通りだとだ。生駒も述べた。

「只でさえ我々は剣呑な間柄にあるのですから」
「ではここは頼りになる者を連れて行きましょう」
「是非共」
早速金森と中川が出て来た。
「それがしも御供して宜しいでしょうか」
「それがしも」
二人は早速信長にいってきた。そしてだった。森長可もであった。
「ではわしもまた」
「よいぞ。むしろじゃ」
ここでだ。信長は彼等にこう告げたのであった。
「残る者の方が少ない程じゃ」
「といいますと」
「誰が残るですか」
「一体」
家臣達がいぶかしんでいるとだった。信長はこう述べるのだった。
「まずは爺じゃ」
「それがしでございますか」
「やはり留守といえばじゃな」
ここでだ。信長は妙に楽しそうに話すのだった。
「爺が一番じゃ」
「何故それがしが留守には一番でしょうか」
「口煩い者は置いておくに限る」
ここでこんなことを言う信長だった。
「そういうことじゃ」
「それでは常に言っておきましょうか」
平手も負けてはいない。こう主に返す。
「殿のお傍にいる時は」
「それは困る。まああれじゃ」
本当のことをだ。ようやく話す彼だった。
「その仕切りの技故じゃ。やはり爺じゃ」

「確かに。平手殿がおられれば」
家臣達も信長の話を聞いて言うのであった。
「何かと安心できますな」
「出ても城におられれば安心できます」
「政も備えもして下さいますし」
「それならば」
こうしてだった。彼が留守に決まった。しかしであった。信長はまた言うのであった。
「もう一人置くぞ」
「といいますともう一人は一体」
「どなたでしょうか」
「勘十郎様はおられるにしても」
彼はだ。それ以前であった。
「今は蟄居されていますし」
「戻られるのは後になりますし」
「それでは一体」
「誰が」
「与三よ」
名を呼んだのはだ。森可成であった。彼の顔を見てだった。

第二十二話　策には策でその九

「そなたが残れ」
「それがしがでございますか」
「そなたならば斉藤や今川が今何かしてきてもだ」
対することができる。それでだというのだ。
「だからじゃ。よいな」
「わかりました。それでは」
「残すのはこの二人じゃ」
ここにいる家臣達ではというのであった。
「他の者はわしと共に上洛せよ」
「都ですか」
「我等が」
「都だけではない」
信長はだ。こうも言って笑ってみせてきたのだった。
「そこだけではないぞ」
「といいますと」
「他には」
「その時にわかる」
今ではない。だが確実にだというのである。
「道はもう決めてあるからのう」
「やれやれ、またでござるか」
「殿の悪い癖でございますな」
ここで苦笑いと共に言ったのは丹羽と滝川だった。
「そうしてここぞという時まで隠されて」
「我等を驚かせるのですな」
「そうでなくては何が面白いか」
それを堂々と認めて笑ってみせる信長であった。彼もわかっていた。

「違うか？それは」
「敵を欺くにはまずはですか」
「味方からだと仰るのですね」
「そういうことよ。まあ連れて行くからにはじゃ」
どうかというのであった。信長も家臣達はしかと見ていた。
「決して悪い場所には連れて行かぬ。むしろ」
「むしろ？」
「むしろでございますか」
「よい場所じゃ。これからのことも考えておる」
既に信長は尾張一国だけで終わるつもりはなかった。さらに先を見ているからこそだ。こう家臣達に対して述べるのであった。
「よくな」
「だからこそ我等をですか」
「共に」
「そういうことじゃ。わかったな」
池田と堀にも述べた。
「さすれば。用意ができ次第じゃ」
「都にでござるな」
「そこに」
「公方様も中々面白い方と聞く」
信長は将軍のことも話すのだった。足利義輝のことだ。
「剣の腕はかなりのものらしいな」
「はい、そうです」
「それはかなりのものとか」
今答えたのは佐久間重盛と蜂屋だった。
「免許皆伝にまで至っています」
「剣では天下に並ぶ者は五人といないとか」
「しかし」
ここでだった。山内が袖の中で腕を組んでこう言った。
「果たして公方様がそこまで剣を極められる理由があるのか」

「そうよのう、それは」
「確かにその通りじゃ」
山内の今の言葉に堀尾と中川が応えた。
「公方様ともなれば護る者がおるぞ」
「それも結構な数がな」
「しかしそれで剣をじゃと」
「幾ら乱世とはいえ」
村井と坂井も同じ考えだった。
「公方様ともなればそれよりも兵法の方がよいのではないか」
「そう思うが」
「わしもそう思うがな」
それは信長も同じ考えだというのであった。そしてこう言うのであった。
「身に着けるのならばだ」
「それならばですか」
「何がよいと言われますか、殿は」
「水練と馬術じゃな」
彼が言うのはこの二つであった。

第二十二話　策には策でその十

「どちらもじゃがな」
「水と馬ですか」
「その二つですか」
「人間逃げる時は身一つよ」
信長は撤退の時のことを考えて言うのであった。
「さすれば。幾ら剣を極めようともじゃ」
「逃げられはしない」
「だからですか」
「一人で百人を相手にできるものではない」
信長はこうも言った。
「さすれば逃げる時は逃げるしかあるまい」
「ううむ、わしならいけますが」
「わしもです」
ここで言ったのは慶次と可児であった。二人も連れて行くというのである。
「槍さえあればでござる」
「それこそ千人でも」
「その意気はよいが剣でできるものか」
信長は二人がそれぞれ槍の使い手であることから話した。
「槍を振り回すのとは訳が違うであろう」
「確かに。剣では限りがありもうす」
「それでは限度がありますな」
二人も剣ならばであった。槍ならばともかくというのだ。
「槍は振り回せばそれで斬らずとも叩くことができますが」
「それでもかなりの威力がありますが」
「剣はそうはいかぬ」
また言う信長だった。

「公方様も思うところがあられるのだろうがな」
「それでも解せぬものがある」
「そういうことでござるか」
「それも確かめておきたいものよ」
信長が考えているのはこのこともだった。考えていることは一つではなかった。
「じっくりとな」
「では都で見るものは多いでござるな」
「それもかなり」
「そうじゃ。しかも都だけではないぞ」
これも言う信長だった。
「よいな、それも申し伝えておくぞ」
「わかりました。では」
「いざ」
「それはそうとしてじゃ」
ここまで話してだ。信長はその顔を笑みに戻してこんなことを言うのだった。
「甘いものも食いたいのう」
「甘いものですか」
「それをでござるか」
「うむ、都は荒れ果てていると聞くが」
それは天下に知られていた。応仁の乱から都はそうなっているのだ。
「だが茶や菓子はあるというしのう」
「またですか」
「それでござるか」
林兄弟が呆れながら苦笑いで言葉を返してきた。
「全く。殿は昔から」
「その二つに目がないですから」
「酒は飲めぬがそれはですか」

「それは変わりませぬか」
「うむ、甘いものと茶はな」
信長もだ。それを笑いながら話すのだった。
「いいものだ」
「しかしですぞ」
平手の代わりにだ。柴田が言うのであった。
「殿、甘いものもいいですが」
「何じゃ権六」
「歯を磨くのは忘れてはなりませんぞ」
柴田がここで言うのはこのことであった。
「甘いものは歯に悪いですからな」
「むっ、では虫歯か」
「左様でござる。そうなってしまえばことですぞ」
「ううむ、わしも歯を抜くのはな」
信長もそれにはいい顔をしなかった。

第二十二話　策には策でその十一

「御免被る」
「だからでござる。それは御気をつけを」
「わかっておる。しかし」
「しかし？」
「権六、そなたも」
信長はここでは柴田に苦笑いを向けて言うのであった。
「爺と変わらんようになってきたのう」
「平手殿とですか」
「そうじゃ。小言が多くなってきたわ」
「これも殿のことを思えばこそ」
彼もまたこんなことを言うのであった。
「あえてでございます」
「そこじゃ。爺そのままではないか」
「いやいや、そうは言いますが」
「御主も置いていこうかのう」
その小言に耐えかねてだ。袖の中で腕を組んで言うのだった。
「折角爺を置いていく意味がないではないか」
「殿、まさか」
その言葉にだ。平手がすぐに反応してきた。
「それでそれがしよ」
「いやいや、流石にそれはないぞ」
「まことでござろうか」
平手のその目はあからさまに疑うものであった。
「どうもこういった場合の殿はですな」
「信用できぬというのか」
「ご幼少のみぎりより。何かあるとそれがしが説教臭いと」
「事実そうではないか」

「それも殿を思えばこそ」
「だから権六と同じことを言っておるぞ」
早速その言葉に突っ込みを入れるのであった。
「全く。よう似てきておるわ」
「左様でござるか」
「とにかくじゃ。爺もじゃ」
話を元に戻してきた。さもなければ収まりがつかないからだ。
「また今度じゃ」
「今度でござるか」
「都に向かうがよい」
そうせよというのであった。
「よいな、与三と共にじゃ」
「わかり申した。それでは」
「さて、これで話は終わりじゃ」
ここでようやくであった。
「では皆の者、よいな」
「はい、これより」
「都に」
「向かうとしましょう」
こうしてであった。彼等は都に上洛するのであった。信長の上洛の真意は何か、それはまだ彼以外には誰も知らないことであった。

第二十二話　完

２０１１・１・６

第二十三話　上洛その一

第二十三話　上洛

信長上洛の報は。すぐに美濃にも伝わった。
稲葉山城にいる義龍はだ。すぐにその目を厳しくさせて家臣達に言うのであった。
「連れている兵は」
「僅かです」
「百もおりません」
すぐにこう述べられるのだった。
「ただ。家臣達が多くいます」
「主だった家臣達の殆どがです」
「全て連れて行っています」
「ふむ。そのうえで上洛か」
そうしたことを聞いてだ。義龍が考える顔になった。そうしてであった。
彼はだ。すぐにこう言うのであった。
「それではだ」
「はい、それでは」
「どうされますか」
「刺客を送るとしよう」
これが義龍の決断であった。
「ここはな」
「刺客ですか」
「送りますか」
「それでことが果たせればそれでよい」
素っ気無い口調だった。だがあまり期待はしていない感じであった。
「それでな」

「それでなのですか」
「刺客を送りますか」
「ここは」
「若し成功すればだ」
その時のことも考慮に入れていた。既にだ。
「その時は尾張を一気に攻め取るぞ」
「主がいなくなればですね」
「すぐにでも」
「そうだ、そうなれば何に越したことはない」
そうは言ってもだった。彼の今の口調はあまり期待していない感じである。それを隠そうともしていない。何故かというとであった。
「あのうつけはともかくとしてだ」
「他の家臣達がですか」
「そうはいかないと」
「あの笹の才蔵もおる」
可児のことである。
「尾張には腕の立つ者も揃っていたな」
「あの鬼柴田もおりますし」
「近頃入った滝川一益もかなりのものとか」
「前田利家もおりますし」
「兵は弱いのですが」
それでもなのだった。信長の家臣達はそれとは別だというのである。
「家臣達はそれぞれかなりの強さです」
「やはり。刺客は」
「しかし送らぬより送る方がよい」
結局のところ義龍は今は刺客についてはこの程度の考えであった。
「よいな、それでだ」
「それで、ですか」
「刺客は」

「二だ」
数で述べるのだった。
「二度送る」
「二度ですか」
「そうしてですか」
「あのうつけ、できることなら消してしまいたい」
本音も見せる義龍であった。
「ここでな」
「だからこそですね。二度ですか」
「刺客を送るのは」
「そうよ。わかったな」
「はい、それでは」
「二度出しましょう」
家臣達も彼のその言葉に頷きだ。その方針が決定したのであった。
しかしそれを聞いた竹中はだ。稲葉達に対してこう話すのだった。
彼等は竹中の屋敷に集まっている。そこで話をするのだった。
「この刺客はです」
「うむ、義龍様が決められたあれだな」
「あれはどうなると見るのだ、御主は」
「一体」
それをだ。まずは三人衆が問うた。

第二十三話　上洛その二

「成功するか」
「そして信長殿は討たれるか」
「どうなるか」
「結論から言えば失敗します」
これが竹中の返答だった。
「間違いなくです」
「そうか、失敗するか」
今度は不破が言うのだった。
「その刺客はか」
「信長殿は鋭い方です」
竹中が最初に指摘するのはこのことだった。その鋭さがわかっているからこそだ。最初にこのことを挙げて話をするのであった。
「ですから。すぐに気付かれます」
「気付かれればそれでしまいだな」
「防がれてしまう」
「そうなるか」
「そうです。それにです」
何故失敗するか。その要因はまだあるのであった。
「信長殿の周りの家臣達もです」
「粒揃いだな」
「よくもあそこまでの者達がいるものだ」
「あれだけで」
三人衆はだ。彼等だけでどうなのかも話すのだった。
「武田や上杉の家臣達を凌ぐぞ」
「無論北条もな」
「その三家をして上にある」
そこまでだというのである。それが織田家の家臣達だというのだ。

「その者達が周りにいる限りはか」
「刺客達の手に負えるものではない」
「そういうことだな」
「一体どれだけおるのか」
不破もそれを言う。
「わからぬまでだ」
「だからです。その家臣達も常に警戒していますし」
その信長の周りでだというのだ。
「彼等も気付き防ぎますし」
「ではやはりじゃな」
安藤が言った。
「ここは失敗するか」
「成功すればそれまでか」
氏家はいささか突き放して述べた。
「それで終わりよ」
「我等が仕えるに足る方ではない」
稲葉も二人に続く。
「そういうことじゃな」
「はい、それもまたその通りです」
また三人に話す竹中だった。
「ですから。ここはです」
「我等は見てだな」
「そうしてそのうえで信長殿が我等に相応しい主か」
「それを見させてもらうか」
「是非な」
「では」
四人の言葉を受けてだ。また言う竹中であった。
「そういうことで」
「うむ、それではな」
「見させてもらおう、信長殿を」

「ここでもな」
「あの方は都に行かれるだけではありません」
竹中は既にそのことも見ていた。彼の目はそこまで見ていた。
「都に上られると共にです」
「他のものも見られるか」
「そうされるか」
「はい、堺に奈良に」
そうした場所をだというのだ。
「それに国友です」
「国友！？」
「そこもか」
「あの場所もか」
「信長殿は鉄砲をよく使われます」
それが信長の戦い方の一つだった。その鉄砲と長槍の二つを併せて使ってである。そのうえで瞬く間に尾張を一つにしたのだ。

第二十三話　上洛その三

それを見てだ。竹中は今話すのであった。
「ですからあの場所にもです」
「五百の鉄砲をさらに増やしたというがな」
「ここでな」
「尾張は今や」
その鉄砲の数も話されていく。
「どれだけの鉄砲があるのか」
「千はあるというが」
「それだけの鉄砲があるとなると」
「織田殿、やはり」
「尋常な方ではないか」
「若し国友に行かれるのなら」
竹中はその場合の話もする。
「信長殿はその鉄砲の力で、です」
「美濃をか」
「この国を手に入れられるか」
「それで」
「いえ、美濃だけではありません」
それより上のものをだと。彼は言うのであった。
「天下もまた。手に入れられるでしょう」
「ふむ。だとするとだ」
「我等の仕えるべき方は途方もない方だな」
「我等が思っていたよりも大器」
「そうした方か」
四人はそれぞれ言っていく。その器をあらためて感じ取ってだ。
「上洛される」
「ではただの上洛ではない」

「都で公方様に会われるだけではない」
考えは次々と出されそのうえでまとまっていく。
「さらにか」
「より多くのものを手に入れられると」
「都には確かに多くのものがあります」
そのこともまた言う竹中であった。
「しかし奈良もあれば堺もあります」
「他にも多くの勢力があるな」
「あの辺りには」
「はい、天下を狙うなら都も堺も無視できません」
竹中は今は信長の側に立って考えて述べていた。
「ですから」
「それも全て踏まえての上洛か」
「ではそれがどういったものか」
「見せてもらおう」
こうしてだった。彼等は信長のその上洛を見るのだった。彼の上洛は見る者にはわかっていた。その意義がどういったものかをである。
そしてその頃。越後でもであった。謙信が二十五将を集めて告げていた。
「では今よりです」
「都にですね」
「上洛を」
「はい、公方様に御会いします」
こうだ。彼等に告げる謙信であった。
「そしてそのうえで」
「関東管領に正式にですね」
「遂に」
「上杉の名はそれだけのものがあります」
その幕府の権威を元にしての言葉であった。

「ですから私は」
「はい、では我等も共に」
「都に」
「上洛しましょう。それでなのですが」
「はい、甲斐ですね」
まずは彼等であった。
「甲斐の虎ですね」
「今は大人しいですね」
「信濃に専念しています」
「治めています」
そうだとだ。二十五将がそれぞれ話すのだった。
「上野等にも手を伸ばそうとしているようですが」
「越後を窺ってはおりません」
「川中島からもです」
「ならばよしです」
それを聞いてだ。落ち着いた声で言う謙信であった。
「甲斐の虎とは今は戦いません」
「そして相模もです」
「あの国ですが」
今度は彼等であった。上杉の敵は一つだけではないのだ。

第二十三話　上洛その四

「関東に兵を出して勢力を拡げています」
「それは無視できませんが」
「罰するのは後でいいですね」
謙信は強い目になって述べた。
「幕府の権威をないがしろにするあの者達は」
「そうされますか」
「今は」
「上洛より戻ってからで構いません」
それが謙信の北条への今の考えであった。
「その時に一気にです」
「小田原より攻め入りですか」
「そのうえで懲罰を与えますか」
「そうします。一向一揆も今は静かです」
次には彼等であった。
「あの者達も厄介ですが」
「朝倉殿も手を焼いておられますね」
「越中にまで及んでいますし」
「全く。厄介な者達です」
「あの者達も静かならば」
三つの勢力を全て見てだ。そのうえでの謙信の判断であった。
「今こそ機です」
「それで殿」
直江もいた。彼がここで主に申し出たのであった。
「越後の留守ですが」
「それですね」
「後はお任せ下さい」
彼がだ。それを引き受けるというのである。

「ここは是非共」
「いえ、直江」
しかしであった。謙信は彼の申し出を受けてだ。戦場のそれとは想像もつかない穏やかな声でだ。彼にこう告げたのであった。
「それはなりません」
「といいますと」
「直江、貴方もです」
「それがしもですか」
「上洛するのです」
これが彼に告げた言葉であった。
「よいですね」
「それがしもですか」
「はい」
また言う謙信であった。
「そうするのです」
「しかし留守は」
「それはだ」
ここで名乗り出てきたのは。宇佐美であった。この老臣なのがだった。
「わしが残ろう」
「宇佐美殿がですか」
「殿、それで宜しいでしょうか」
宇佐美は主に対しても言ってきた。
「それがしで」
「そうですね。直江は必ず都を見なければなりません」
謙信も彼の言葉を受けてまた述べた。
「ですからここはそなたがです」
「はい、それでは」
「直江、貴方は何があろうと私と共に上洛するのです」
「はっ」

敬愛する主の言葉ならばだ。彼もであった。
「それでは」
「では。そうしなさい」
「わかりました」
こうして彼の上洛も決まった。そのうえでだった。上杉もまた上洛する。この時上洛するのは織田だけではないのであった。彼等もだった。
そしてだ。信長達はだ。今清洲を発つのだった。
信長は帰蝶の見送りを受けていた。そこでだった。
「ではな」
「はい、それでは」
帰蝶は夫に静かに言葉をかけた。
「行ってらっしゃいませ」
「留守はあの二人に任せておるからな」
「平手殿と森殿ですね」
「あの二人なら問題ない」
信長は二人への信頼を妻に話す。

第二十三話　上洛その五

「政も戦もな」
「左様ですね。憂いはありませんね」
「その様なものは残してはおらぬ」
信長は笑ってそれは否定した。そうした言葉だった。
「そなたもじゃ。よいな」
「わかっています」
「まあわしがいない間は寂しいだろうがな」
「それを待つのも妻の務め」
微笑んでこう返すその妻だった。
「御安心下さい」
「むしろそなたは」
「私は」
「わしのいない間に馬を荒く駆ったりしてじゃ」
そうすればどうなるか。信長の話は少し飛躍した。
「怪我なぞせぬようにな」
「御安心下さい、それはありませぬ」
「不覚は取らぬか」
「殿と同じでございます」
己の夫とだという。帰蝶の笑みはここでも健在であった。
「ですから」
「ううむ、口が減らぬのう」
「さもなければ殿の妻ではいられませぬ」
「全く。言いよるわ」
信長はついつい弱ったような顔を見せる。妻や親しい家臣達にだけしか見せぬ顔であった。その顔を出したうえでの言葉だった。
「しかしよい。それではじゃ」
「はい、では」

「行って来るぞ」
こうしてであった。信長は妻に別れの挨拶を告げ上洛の旅についた。その道中多くの家臣達も同行している。その中でだった。
慶次がだ。巨大な黒馬に乗りながら言うのであった。
「さて、心残りは」
「何だというのじゃ？」
「平手殿への選別がなかったことよ」
それだとだ。佐々に残念そうに語るのであった。
「それがなかったことじゃ」
「何じゃ？今度は何をするつもりだったのじゃ」
「うむ、平手殿の味噌にじゃ」
「それにか」
「唐辛子をたっぷりと仕込んでおこうと思っておったのじゃが」
こんなことを話すのだった。
「それをせぬまま。こうして発つとは」
「それが心残りか」
「いや、それを食べた平手殿がどれだけ怒るか」
そんなことをすればどうなるのか、彼は話を続ける。
「そこから逃げて上洛をはじめたかったのだがのう」
「傾くのう、相変わらず」
金森がそれを聞いて思わず言った。
「そうした悪戯もか」
「するぞ。それはわしの趣味じゃ」
悪戯がだというのだ。
「平手殿の様な方に仕掛けるのもじゃ」
「傾奇じゃな」
「左様、そうじゃ」
こう話すのである。
「それをせずままとは」
「すればそれこそ御前はじゃ」

前田が甥に呆れながら告げる。彼の横に己の馬をやってだ。
「平手殿にとことんまで殴られるぞ」
「あの拳でか」
「そうした時の平手殿は強い」
怒った場合の彼はだというのだ。
「滅法な」
「そうじゃな。わしでも負ける」
個人の武勇では織田家随一の慶次であってもだというのだ。
「一発一発が尋常ではないからのう」
「しかもその一発が無数に来るからのう」
「たまったものではない。しかしじゃ」
そこで終わらないのが慶次であった。

第二十三話　上洛その六

「それがいいのじゃ」
「殴られるのがよいのか」
「そうならないようにそこから逃げるのがいいじゃ」
笑いながら今度は可児に話す。
「怒った平手殿からのう」
「御主はそうした悪戯が好きなのじゃな」
「大好きじゃ」
実際にそうだというのであった。
「あの楽しさは幾ら味わっても足りぬ」
「まるで子供じゃな」
「そうじゃ、こ奴は身体は大きいがじゃ」
ここで柴田が出て来て話すのであった。
「頭の中は子供なのじゃ」
「その様でござるな」
可児もそれは感じ取った。慶次のそうした無邪気さをだ。
「ううむ、尾張一の傾奇者とはそうした者じゃったか」
「わしは常識なんぞには捉われぬ」
実際にその通りに生きている慶次であった。
「だからこそ傾奇者よ」
「そういうものか。さて、それでじゃ」
ここで可児は話を変えてきた。
「この道中色々ありそうじゃな」
「そうだというのか」
「おそらくはじゃ」
丹羽に対して話す彼だった。
「義龍殿もただ見ているだけではあるまい」
「そうじゃな、それはな」

丹羽もすぐに頷いて返すのだった。
「刺客の一度や二度はな」
「来るのじゃな」
「間違いなくな」
丹羽も言った。
「何時来るかが問題じゃが」
「それならばじゃ」
今度は滝川が出て来てだった。
「わしが働くか」
「わしもじゃ」
蜂須賀も出て来て言うのだった。
「忍びの者達を使ってな」
「そうした話は掴んでおくとしよう」
「そうしてもらえるか、ここは」
柴田が名乗り出た二人に述べた。今の家臣達の筆頭としての言葉だった。
「御主等でな」
「うむ、ここはな」
「そうさせてもらおう」
二人も柴田に対してその言葉を返した。
「そうしてだ」
「刺客達は封じておかねばな」
「その動きを掴めばそれでだ」
「全く違う」
敵の動きを知ることがどれだけ大事なのかだ。彼等はわかっていた。それは信長の家臣達全員がだ。そうでなれば信長に見出されたりはしない。
それがわかっているからこそだ。彼等も今言えるのであった。
「してそのうえで」
「その都度対処していくとしよう」

「いや、それもあるが」
ここで柴田は意気込む二人にこう告げた。
「殿にもお話しておくぞ」
「おっと、そうだったな」
「それを忘れてはならん」
二人も柴田の言葉を受けてすぐに気付いたのだった。
「殿にもな。是非な」
「お話しておこう」
「わしも行く」
柴田もだというのである。

第二十三話　上洛その七

「そのうえで三人で殿にお話しようぞ」
「では今より」
「殿の下に」
こうしてであった。三人でその刺客のことと自分達の名乗り出を信長に話した。信長は馬を進ませながら三人の話を黙って聞いていた。
そして聞き終わってからだ。こう彼等に話すのであった。
「それではじゃ」
「はい、それでは」
「どうされますか、ここは」
「情報は常にわしに知らせよ」
二人にまずはこう述べるのだった。
「よいな、そうせよ」
「奴等に動きがあればですね」
「常にですね」
「そうじゃ。それは必ずじゃ」
忘れるなとさえいうのである。それは絶対にという口調であった。
しかしここでだ。彼はこうも言うのだった。
「だが、じゃ」
「だがとは？」
「何をされるというのですか」
「奴等は暫く泳がせよ」
次にはこう言うのであった。
「よいな、そうせよ」
「泳がせるとは」
「ではまずはですか」
「何もしないと」

「そう仰るのですか」
「すぐに討っては面白くとも何ともない」
滝川と蜂須賀にだ。また話した信長だった。
「泳がせてそれでじゃ」
「それからですか」
「仕掛けるのは」
「そうする。まあ見ておれ」
信長は笑顔のまま二人に話してだ。ここで、であった。
丹羽を呼んだ。彼もであった。
丹羽が来るとだ。彼はすぐに話した。
「そなたも二人と共にじゃ」
「刺客の情報を細かくですね」
「そうじゃ、逐一わしに報告せよ」
丹羽にも告げるのだった。
「よいな、そなたと三人でじゃ」
「わかりました。それでは」
「我等三人で」
「そうしましょう」
「こうしたことにおいては」
信長は柴田の顔も見た。そうして彼にも話すのだった。
「権六よりも五郎左じゃ」
「わしでは駄目でござるか」
「情報を集めることはそなたより久助でじゃ」
まずは滝川だった。
「小六もよいがな」
「忍の者である故にでござるな」
「そういうことじゃ。そしてその情報を調べてまとめるのは五郎左じゃ」
それは丹羽だというのである。
「権六はのう。今一つ」

「わしは戦が何より好きな故」
「これで政ができんかったらここまで用いてはおらんぞ」
信長はその柴田に笑いながら話す。
「まあ権六も情報を集めることはできるがのう」
「やれることはやれるでござる」
それは柴田も言う。
「ですが。やはり」
「そうであろう。今は完璧でなければな」
流石にだった。刺客が相手ならばだ。信長も遊んでいてもそれでもそれは完璧でなければならなかった。そういうことであった。
それでだ。今は柴田はというのであった。
「まあそなたはまたな」
「余裕のある時にでござるな」
「そうせよ」
こう柴田に告げた。
「よいな」
「わかり申した。それでは」
「さて、この道中」
信長は話を一段落終えたところでまた述べた。

第二十三話　上洛その八

「面白いものになるだろうな」
「殿、刺客とやり合うだけではないのですな」
「それで済ませては面白くとも何ともない」
丹羽に対しての言葉だった。
「それだけではじゃ」
「だからでございますか」
「そういうことじゃ」
笑って丹羽に話すのだった。
「ここも派手にいくぞ」
「派手にいってばかりではないですが」
こんなことを言う丹羽だった。
「殿は」
「御主も言うのう」
「言わずにはいられません故」
丹羽も笑顔で話す。
「殿は」
「やれやれじゃな」
「しかし。刺客が来るとわかっていれば」
「やりやすいな」
「はい、全くです」
ここでは二人の意見は一致していた。
「実に」
「そういうことじゃ。わかっておればやることはじゃ」
「楽しまれますか」
「美濃の義龍めにも見せておく」
刺客を送ってくるのは彼だと。既にわかっているのであった。
「わしのやり方をな

「そして殿のお力も」
「見せられるものは何でも見せる」
そしてであった。同時にこうも言うのだった。
「見せぬものは絶対に見せぬがな」
「ではここは」
「見せる。そういうことじゃ」
「左様ですな。それでなのですが」
丹羽は主にさらに言ってきた。
「伊勢に行かれますな」
「美濃に入ることはできぬからのう」
その義龍の国にはである。流石にそれは無理だった。
従ってここではだった。伊勢から入るしかないのであった。
「これはこれでよい」
「ですな。確かに」
「それは」
丹羽以外の者達もここで笑いながら応える。
「伊勢での調略の成果も見られます」
「よもや今からしているとは思いますまいて」
「ならばです」
「ここはあえて」
「入るついでに色々と楔も打ち込んでおくとしよう」
入り見るだけではなかった。さらになのだった。
「伊勢全体にな」
「では。その様に」
「我等で」
「美濃の前に伊勢じゃな」
素っ気無くだがはっきりと述べた信長だった。
「まずはそこじゃ」
「伊勢ですか」
「そこでござるか」

「二郎」
九鬼もいる。彼に顔を向けての言葉だった。
「そなたは海からじゃ」
「わかっております」
当然といったように返す九鬼であった。
「既にはじめております」
「よいぞ。では伊勢に向かうとしよう」
こうしてだった。信長は伊勢から都に向かうのだった。そして伊勢に入るとだ。
伊勢の町や村を見回していく。そうしたものを見て信長はまた話すのだった。
「栄えておるがな」
「それでもですか」
「何かありますか」
「まとまってはおらぬ」
こう言うのだった。

第二十三話　上洛その九

「特に気になるのは」
「何でしょうか、それは」
「気になるものとは」
「長島じゃ」
そこだというのである。
「長島じゃな」
「あそこですか」
「そういえばあそこは」
「一向宗の根城ですな」
「伊勢の」
「わしは一向宗とはこれといって関わりが無い」
少なくとも今はだった。信長は一向宗とは縁がなかった。だがそれでもだった。その長島に入って見てだ。こう言うのだった。
「しかしな」
「あの一向宗の数ですか」
「それに物々しさも」
「わしの調略にも何も言ってはこぬが」
信長も彼等には手出しをしていない。国人や守護の家臣達への工作はしていてもだ。それでも一向宗には手出ししていないのだった。
「それでもじゃ。若し奴等とことを構えれば」
「その時はですか」
「厄介だと仰いますか」
「そうだな。長島は尾張にも近い」
それもまた問題だというのである。
「色々と考えておくべきじゃな」
「ううむ、坊主は厄介でござるからなあ」
「特に一向宗は」

「全くでござる」
それはだ。彼等もよく知っていた。今一向宗といえばだ。
「加賀のこともありますし」
「ああして一国を牛耳ってもいますし」
「越前から越後まで荒らし回っております」
「近畿でも力があり申す」
「敵に回せば何かと鬱陶しいかと」
「そうよの。しかしじゃ」
それでもだとだ。信長は顔を顰めさせたのだった。
そうしてだ。彼はこう言った。
「わしの天下への道に立ちはだかるならばじゃ」
「その時はですか」
「では」
「倒す」
そうするとだ。一言で言った。
「わしの前に立ちはだかるならばじゃ」
「言い換えれば相手が誰であっても」
「そうされるというのですか」
「倒されると」
「そういうことでもある」
信長もそれを否定しなかった。
「倒すぞ」
「わかりました。では」
「その時は」
「我等も」
家臣達もそれぞれ応える。言わぬ者は一人もいなかった。
「及ばずながら力を」
「そうさせてもらいます」
「ははは、共に楽しもうぞ」
これが信長の返答だった。

「その時はな」
「楽しむのですか」
「そうせよとですか」
「傾いて楽しんでこそじゃ」
まさに信長の言葉であった。彼のだ。
「面白いではないか」
「ううむ、そう言われますか」
「戦や一揆を前にしても」
「そう」
「何度も言うぞ。そして今じゃが」
その今の話もするのだった。
「伊勢から近江に入りそうして都じゃな」
「そうですな。伊賀は通られますか」
「そちらは」
「いや、伊賀は止めておこう」
そちらはだというのだった。信長は首を横に振って述べた。
「あの道は山道ばかりで進みにくい」
「だからでござるか」
「今は」
「そうじゃ。その道は通らぬ」
また言う信長だった。
「伊勢より近江に入るぞ」
「わかりました。では」
「その道で」
こうして信長達は都に向かうのであった。だが信長はただ都に向かうのではなかった。その胸の中にだ。ある考えを秘めているのであった。

第二十三話　完

2011・1・12

第二十四話　国友その一

第二十四話　国友

近江に入った一行はだ。近江の道を進んでいった。
そのうえで町や村を見る。その中でだ。
信長はだ。こう言うのだった。
「いい国じゃな」
「豊かだと仰るのですね」
「この近江が」
「そうじゃ。六角の政はそこそこといったところじゃが」
良くも悪くもないというのだ。
「しかしそれでもじゃ」
「国自体はいいですか」
「そうなのですな」
「うむ、北の浅井もよいというが」
近江には今大きく分けて二つの家があった。信長が今言った六角と北の浅井である。双方共かなり激しい対立関係にあるのである。
「しかしこの国はじゃ」
「それでもですな」
「確かにいい国ですな」
「しかもここを通ればすぐに都じゃ」
それも大きいという信長だった。
「ここを抑える六角はかなり有利な場所にあるな」
「琵琶湖もありますし」
「あの湖も」
「そうじゃな。琵琶湖もじゃ」
信長は話をそこにもやった。
「琵琶湖も非常に使える」
「あの湖といいますと」

「船ですな」
「それですな」
「そうじゃ。それも使える」
信長が見ているのはそこもなのだった。
「琵琶湖から淀川を使えば都にも近い。それに堺にもすぐじゃ」
「近江、実によい国ですな」
「そこまで考えますと余計に」
「さて、今日はじゃ」
信長はだ。ここでまた言うのであった。
「そろそろ休むか」
「宿でござるか」
「そこに」
「猿、聞いたところによるとじゃ」
信長はふと木下を呼んだ。すると小柄なその男が来たのであった。
「この辺りの寺にじゃったな」
「はい、今宵は宿にということで」
こう主に話す木下であった。
「手配しておきました」
「用意がいいな」
「その寺だけではありません」
木下はここでさらに言ってきた。
「このまま都までの道は既に決まっていますので」
「ではじゃ」
「はい、その通りです」
主にすぐに言葉を返す木下だった。
「その道中の全てにです」
「宿となる場所は用意したのか」
「過ぎたこととは思いましたが」
「いや、それでよい」
信長は木下のそれをよしとするのだった。笑顔でこう彼に告げた。

「それでな」
「宜しかったのですね」
「むしろそこまでするとは思わなかったわ」
信長はまた木下に話した。
「その日の宿を用意するだけではないのだからな」
「有り難きお言葉」
「しかしじゃ」
ところがだった。信長の言葉が変わってきた。
「少し寄るところがある」
「といいますと」
「国友に行くぞ」
そこだというのであった。
「公方様の御前に参上するまでに時もあるしのう」
「国友といえば」
それを聞いてだ。生駒が言ってきた。
「あれですか。鉄砲ですか」
「うむ、それじゃ」
まさにそれだとだ。信長は生駒に言葉を返した。

第二十四話　国友その二

「それのことでじゃ」
「それでございますか」
「先にも言ったと思うがな」
こうも言う信長だった。
「行くぞ。よいな」
「はっ、それでは」
こうしてだった。彼等はまず国友村に向かった。そこではだった。
至るところでだ。煙があがりだ。何かを打つ音が聞こえていた。
そうしたものを見聞きしてだ。信長は言うのであった。
「噂以上じゃな」
「そうですな。鉄砲がです」
「あちこちで生産されていますな」
家臣達もこう言う。
「これが国友村ですか」
「その」
「そうじゃ。ここを訪れてじゃ」
それでだというのであった。
「村の長に会おうぞ」
「それではまずはですな」
「馬から降りて」
こうしてだ。彼等は下馬をして馬を止めてだ。村の中に入った。
そうしてすぐに村人の一人に尋ねたのであった。
「済まぬが」
声をかけたのは木下秀長であった。
「村の長は何処だ」
「ああ、その人なら」
「うむ、何処だ」

「あちらです」
こう言ってだ。村の奥の一際大きな家を指差すのだった。屋敷と言ってもいい。そこを指差すのだった。
「あちらにいます」
「あそこか」
「はい、あそこです」
こう離してであった。それで、であった。
木下秀長はだ。すぐに信長に話すのだった。
「わかった。それではな」
「はい、それでは」
「今よりですね」
「あの屋敷に」
「行くとしよう。とはいってもじゃ」
信長はここで家臣達を見る。見ればかなりの数だ。
その数を見てだ。信長は言うのであった。
「この数でずかずかと乗り込んでもじゃ」
「なりませぬか」
「それは」
「うむ、止めた方がよいな」
それはだというのである。
「ではじゃ。ここは」
「はい、誰ですか」
「誰を行かせますか」
「あの屋敷に」
「わしは当然じゃ」
信長自身はというのだ。
「わしが行かずして誰が行く」
「確かに。殿がおられずしてですな」
「それは話にもなりません」
「それでは」

「そうじゃ。まずわしじゃ」
またこう言う信長であった。そしてそのうえでだった。
あらためて家臣達を見回してだ。まずは彼に声をかけた。
「吉兵衛よ」
「はっ」
村井であった。彼もすぐに応える。
「まずは彼じゃ」
「畏まりました」
「そして助直」
次は武井であった。
「そなたもじゃ」
「わかりもうした」
「さて、この二人でよいかのう」
信長は腕を組みながら述べた。
「まず問題はないか」
「そうですな。さしあたっては御二人でいいかと」
丹羽がここで主に言う。

第二十四話　国友その三

「吉兵衛殿と助直殿ならば無事殿を助けてくれましょう」
「よし、ではそなた等じゃ」
信長は意を決した顔で頷いた。
「では。それではじゃ」
「はい、参りましょう」
「今より」
こうしてであった。信長は村井と武井を連れてそのうえで屋敷に向かった。他の家臣達は柴田がこう命じたのであった。
「さて、我等はじゃ」
「ここで気楽に茶でも飲みますか」
慶次がわざとこう言うのだった。
「これから」
「馬鹿を申せ。そんなことをしている場合か」
柴田は彼の冗談にすぐに返した。
「そんなに茶が飲みたければ勝手に店でも行け」
「そんなのはありませぬが」
慶次はここでもわざとだった。目の上に手をかざして周囲を見回して言うのであった。
「この村には」
「では諦めよ」
「ううむ、では昼寝でも」
「本当にそうしたら馬で踏み潰すぞ」
また慶次に合わせる柴田であった。
「全く。御主は」
「いやいや、ほんの冗談でござる」
「冗談でも度が過ぎるわ」
柴田はまた慶次を叱った。

「してじゃ。半分はこの村々を見回るのじゃ」
「して鉄砲をですな」
「しかと見ると」
「そうじゃ。そして残り半分は屋敷の前に集まるのじゃ」
残り半分についても話すのだった。
「して殿に何かあればじゃ」
「その時にはでござるな」
「何が起こってもいいように」
「そこに侍ると」
「そうするぞ。よいな」
「はっ、それでは」
「その様に」
皆柴田の言葉に頷きだった。すぐに半分ずつに分かれてだ。半分が村を見て回り残り半分が村の長の屋敷の前に立った。そうしたのであった。
それを屋敷の門から見てだ。信長も感心して言うのであった。
「ふむ、権六じゃな」
「あれはでござるな」
「あの仕切りは」
「あれでよい。わかっておるわ」
こう村井と武井にも話すのだった。
「融通は利かぬが仕切りは見事じゃ」
「権六殿が言えば誰もが聞きます故」
「ああなりますな」
「慶次もあ奴の言うことは素直に聞く」
信長はこうも言った。
「又左にはすぐにあれこれ言ってやんちゃをするがのう」
「あの悪戯小僧も権六殿の前では」
「まさに子供ですな」
「そうじゃ。やはり権六は連れてきてよかった」

柴田に対する賞賛の言葉であった。
「今回な」
「左様ですか」
「ここにですか」
「不器用な男だがそれもまたいい」
柴田にだ。信長は明らかな愛情も見せていた。そうしてそのうえでだ。こうも言うのであった。
「かえってのう」
「確かに。実直ですから」
「それがああしたまとめることにも出ています」
「あれが権六のよいところよ」
満足した言葉も出すのだった。
「誰にもそれぞれのよいところがある」
「だからですか」
「権六殿もこの度の上洛に」
「本音を言えば爺達も連れて行きたかった」
平手達もだというのだ。
「しかしのう。留守番は置かなければならんからのう」
「そうです。斉藤がいますし」
「それに今川も」
「今川もそろそろ動くだろうな」
信長はここでこうも言った。

第二十四話　国友その四

「奴等の用意もできた」
「ではいよいよ」
「今川ともまた」
「決戦の時よ、間も無くな」
こう話してであった。そのうえでだ。あらためて村井と武井を見てだ。こう話した。
「では今はだ」
「はい、この村の長と会い」
「そうしてですね」
「鉄砲を手に入れる」
その為に他ならなかった。ここに来たのはだ・
「是非な」
「はい、それでは」
「今より」
こうしてだった。信長はその長の前に来た。見れば小柄な老人である。彼は茶室の中でだ。信長を出迎えてだ。彼の方から言ってきたのであった。
「ようこそこの村に」
「茶室か」
「織田様は茶がお好きと聞きましたので」
それでだというのだ。
「それで」
「ふむ。成程な」
まずは納得した顔で聞く信長だった。村井と武井は彼の後ろに控えて何も言わない。
「で、あるか」
「左様でございます」

「しかしそれだけではあるまい」
ここでだ。信長は不敵な笑みになってみせて言うのだった。
「そうだな」
「お気付きでしたか」
「わしも茶室はよく使っておる」
「ではやはり」
「そうよ。茶室はどんな話でもできる」
こう言うのであった。
「狭いうえに離れておるしな」
「おわかりでしたか。それも」
長は信長の言葉を聞いてだ。感嘆する言葉を述べた。
そうしてそのうえでだ。こう言うのであった。
「その通りでございます」
「そうじゃな」
「そこまでわかっておられる方とは」
「確かに茶は好きじゃ」
信長はそれは認める。しかしそれだけではないというのである。
「だが。政に使うともなればじゃ」
「そうしたこともでございますな」
「そういうことじゃ。それでじゃ」
「はい、それでは」
「話はわかっておるな」
信長は単刀直入に言ってみせた。
「この村に来たということはじゃ」
「鉄砲でございますな」
「まずは五百貰おう」
数から話した。
「それだけな」
「五百でございますか」
「そうじゃ、五百じゃ」

長に対してまた告げた。
「それからも常に買わせてもらおう」
「話はわかりました」
長は感情を顔には出さずにだ。こう返した。
しかしだ。声には僅かに動揺を見せてだ。こう言うのであった。
「しかし。五百とは」
「何か不服か？金も出すぞ」
「一度に五百も求めてこられた方ははじめてです」
「三好や六角もないか」
「はい、とても」
実際にそうだという。長のその目は嘘を言っているものではなかった。
「それだけの数とは」
「しかしあるな」
「それがしは嘘は言いませぬ」
こう言ってからだ。また信長に話した。
「あり申す」
「ではすぐに買おう」
「しかも五百で終わらぬとは」
「多ければ多いだけよい」
信長はこうも言った。

第二十四話　国友その五

「鉄砲はな」
「そしてその鉄砲で、ですか」
「そうじゃ。これは多くは言わぬぞ」
「ではそれがしもそれについては聞きませぬ」
言わずとも聞かずともわかることだった。そういうものだった。
「しかし。さすれば」
「わかったな。ではじゃ」
「わかり申した。では」
長は話を受けることにした。そうして話を次の段階に移すことにした。その話は。
「金はあると言われましたな」
「既に用意してある」
「五百ともなるとです」
長は袖の中で腕を組んでいる。そうしながらの言葉だった。
「かなりの値段になりますが」
「はい、それですが」
「既に我が家ではです」
ここでだ。村井と武井が出て来た。そうして長に話すのだった。
「これだけの額があります」
「如何でしょうか」
「むっ、その額は」
その額は既に紙に書かれていた。そのうえで長に見せられる。二人は信長と長が話をしている間にだ。書いていたのであった。
その額を見てだ。長は言うのだった。
「あまりに少ないのでは」
「そう思うか」
「五百ですから」

長はここでも鉄砲の数を話に出した。
「それでその額とは」
「五百だからこそだ」
しかしであった。信長はこう彼に返す。
「だからこそこれだけなのだ」
「だからとは」
「五百。多く作るな」
「はい」
それは言うまでもないことだった。長も頷いてみせる。
「左様でございます」
「だからこそじゃ」
「多く作ればそれだけ金がかかりますが」
「しかしまとめて作ればそれだけ手間が省けよう」
だが。信長はここでこう返した。
「違うか」
「それは」
「それも考えてのこと」
「この額は」
また村井と武井が話してきた。
「これで妥当と思うが」
「何なら計ってみることだ」
「ふむ」
長も三人からそう言われてはだ。考えざるを得なかった。まずは腕を組んで瞑目する。どうやらそのうえで頭の中で計っているらしい。
そして暫くしてからだ。こう答えたのであった。
「確かに」
「その額でよいな」
「十分だな」
「十分どころではありませぬ」

長は目を開いていた。そのうえでの言葉だった。
「仕入れる火薬や鉄、それに職人達への支払いの金、手間隙やそうしたことまで細かく考えてです」
「その額でだな」
「よいと」
「それでもまたおつりが来ます」
実際に計ってみるとだ。そうだったのだ。長はこう三人に話すのだった。
「それがしもこれで生きております」
「鉄砲を作りそれを売り」
「そのうえでだな」
「左様でござる。ならば計るのもまた身に着けております」
そうしなければ駄目だということであった。だからこそのこの村の長なのである。
「それで計ってみたところ」
「わしの言う通りであったであろう」
「驚いたという他ありませぬ」
誇らしげに笑う信長のその顔を見ての言葉だった。
「いや、織田様は」
「うむ」
「そこまで考えておられましたか」
「つりは取っておけ」
それはいいというのであった。

第二十四話　国友その六

「これからも贔屓にさせてもらう故にな」
「鉄砲をまだ頼まれると」
「言ったであろう。多ければ多いだけよいのだ」
だからだというのだ。
「そういうことよ」
「では。まずはこの五百を」
「でき次第尾張に届けてくれ」
信長はこのことも告げた。
「よいな」
「はっ、それでは」
「話はこれで終わりだな」
信長は話がまとまったと見てこう話した。
「さすればだ」
「では殿」
「ここは」
「折角じゃ。茶を飲むとしよう」
今村井と武井に返した言葉はこれであった。
「そうするとしようぞ」
「話もまとまり」
「ここで、ですな」
「そうよ。一服じゃ」
こう言うのであった。
「よいな」
「はっ、それでは」
「我等も共に」
「茶を飲む時は飲むものよ」
信長は笑みと共に話した。

「だからよ。楽しむとしよう」
「織田様は茶を好まれると聞きましたが」
長はだ。その信長を見ながら話す。今度は年齢を感じさせる深いものをたたえた顔になっていた。
「思った以上ですな」
「そう思うか」
「さすればです」
そしてだ。そのものを出してきた。
「堺に行かれたその時はです」
「堺か」
「一人。会われるべき方がおられます」
「千利休じゃな」
「御存知でしたか」
「話は聞いておる」
信長は微笑んで長に話した。
「堺で一の茶の者だそうじゃな」
「堺だけに止まりませぬ」
長の話はさらに上をいっていた。
「おそらくはこの天下で」
「一と申すか」
「はい、その通りでございます」
こう信長に話すのであった。
「あの方の茶は」
「ふむ。そこまでというのなら」
長の話を聞いてだ。信長は考える顔になった。そのうえでだ。
彼はその顔でだ。長に対して言ったのであった。
「堺に行ったその時にはだ」
「会われますか」
「是非共な。そうするとしよう」
「それがよいかと」

「優れた者とは誰であろうが会う」
信長は断言した。これ以上はないまでにはっきりとした口調でだ。
「それがわしじゃからな」
「そして利休殿ともですな」
「そういうことじゃ。さて」
長の淹れたその茶を飲んでだ。彼は言った。
「よい茶じゃな」
「有り難きお言葉」
「ではまた飲ませてもらおう」
こう言うのであった。
「堺でのう」
「こちらでは如何でしょうか」
長はすかさず言ってきた。
「この国友では」
「また次の機会にじゃな」
「次でございますか」
「また会おう」
笑顔で彼に告げる。

第二十四話　国友その七

「その時にじゃ」
「はい、それでは」
こう話してであった。信長は鉄砲の話をまとめたのであった。そして茶室を出てから長のその屋敷の庭を歩いている時にだ。村井に言われたのだった。
「上手くいきましたな」
「いや、こうなると思っておった」
「話は簡単にまとまるとですか」
「そうじゃ、そう思っておった」
信長はそうだというのである。
「最初からのう」
「いや、それは」
「どうでしょうか」
村井だけでなく武井も言ってきた。
「あの額であああもあっさりと頷くとは」
「流石にそれがしも」
「それがしもでござる」
「思いませぬでした」
「何、あれであちらに利が出るからよ」
しかし信長は二人に素っ気無く述べる。その緑の庭を歩きながらだ。質素だが広く見事な庭である。そこを三人で歩いて話をしているのだ。
「だから向こうもあれでじゃ」
「その通りですが」
「しかしあの額は最初見た時は」
「だから言うぞ」
信長は彼等にも話すのだった。

「多く作ればそれで手間や時間がかなり省けるのじゃ」
「だからですか」
「鉄砲もまた」
「同じよ。そうした意味では槍や弓を作るのと変わらぬ」
「そうしたものとですか」
「結果としてですか」
「何でも多く作ればそれだけ安くなる」
信長はまた言った。
「作る方も一度に多く作ればそれだけ手間も時間もかからぬのじゃ」
「それであの額になったのですな」
「御聞きしましたがその通りだとは」
「そういうことじゃ。さて」
ここで庭を出た。屋敷の外に出たのである。
信長は屋敷の門をくぐってからだ。こう二人に話した。
「では権六達のところに行こうぞ」
「はい、それでは」
「今より」
あらためて柴田達と合流する。するとであった。
彼等はだ。元気な顔でそこにいてだ。笑顔で信長を迎えるのであった。
「おお殿、帰られましたか」
「思ったより早かったですな」
「如何でござったか、首尾は」
「上手くいきもうしたか」
「上手くいったから早いのじゃ」
信長は明るい笑顔で彼等にこう話した。
「そういうことじゃ」
「確かに。左様でござるな」
「上手くいかねば話はどうしても長くなる」
「そういうことでござるな」

「鉄砲を五百」
信長は彼等にもこの数を話した。
「それだけのものが手に入ったぞ」
「何と、鉄砲を五百ですか」
「ここでさらに五百」
「それだけのものがまたですか」
「我等の手に」
「そうじゃ。これは大きいであろう」
満面の笑みで彼等に話す。
「それが手に入ったのじゃ」
「金はかかるにしてもそれが手に入ればですな」
「今川も斉藤も怖くはありませぬぞ」
「ましてや伊勢の国人なぞは」
当面の織田の敵達だ。どの勢力もそこまで鉄砲を持ってはいない。
織田だけが図抜けて多くの鉄砲を持っているのである。
「では。我等は都に上る前にそれだけのものを手に入れた」
「これは幸先がいい」
「いいことが続きますな」
「いや、それは違うぞ」
今言ったのは蜂須賀である。信長は彼に言うのであった。
「小六、よいことはじゃ」
「はい、どういうものでござろうか」
「続くのではなく続けるものじゃ」
こう言うのであった。

第二十四話　国友その八

「よいな、そういうものじゃ」
「続けるものでござるか」
「自分でそうするものじゃ」
「では偶然そうなるのではなく」
「そうじゃ。己の力でそうさせるのものよ」
これが信長の考えそのものであった。
「わかったな」
「ううむ、そうでござったか」
「今回もそうじゃ」
その鉄砲のこともだというのだ。
「己の力でじゃ。手に入れたものよ」
「そうですな。言われてみれば」
「わかったのう、これで」
「はい、確かに」
蜂須賀はその髭だらけの顔に納得するものを見せて頷いた。
「ではこれからはそれがしも」
「そうするがよい。では都に行くぞ」
「はい、ではいよいよ」
「都に」
「村を見回っておる者達も呼び集めよ」
信長は彼等のことも忘れていなかった。すぐにこうも告げた。
「よいな、そのうえでじゃ」
「はい、そうしてそのうえで」
「都に」
「さて、都はどうなっておるかのう」
信長は告げた後で期待するようにして言った。
「随分と荒れておるのは間違いないがのう」

「はっ、それは残念ながら」
早速林が言ってきた。
「かなりのものだとか」
「やはりそうか」
「応仁の乱よりですから」
また言う林であった。
「しかも比叡山が暴れましたので」
「あの坊主達はまことにやりたい放題だな」
信長は比叡山の話を聞くとだ。顔を顰めさせた。そのうえでの言葉だった。
「何とかならぬかのう」
「それは」
林通具が難しい顔で答える。
「法皇様でもどうにもならぬものでしたし」
「白河帝だな」
「はい、あの方でもです」
法皇としてその権勢を欲しいままにした彼でもなのだった。比叡山にさいころの賽の目に鴨川の流れはどうにもできなかったのだ。
特に比叡山であった。法皇ですら如何ともできずだ。幕府もであったのだ。
「鎌倉幕府も室町幕府もでしたから」
「僧兵共だろうが暴れさせては話にならぬがな」
「それはその通りですが」
「それでもです」
家臣達も今回ばかりはその言葉の歯切れが悪い。
「あの僧兵達だけはです」
「最近では本願寺もですが」
「どれだけ力を持っていてもです」
「それは」
「天下にああした者達を置いていてはならぬのだがな」‥

信長は明らかに嫌悪を見せていた。
「寺社はよい」
「それはよいですか」
「寺社自体は」
「そもそも織田家は神主の出じゃ」
信長もこのことはよくわかあっていた。知らない筈のないことだった。
「わしはあまり神や仏は信じぬがな」
「それでもですか」
「それは」
「そうじゃ、神社や寺はあってよいのじゃ」
その存在自体はいいというのである。
「むしろなければ人が困るものじゃ」
「しかし比叡山や本願寺はですか」
「なりませんか」
「あの者達は寺社を利用して力を蓄えやりたい放題しておるだけじゃ」
こう看破していたのだった。
「そうした者達を放っておいてはならん」
「ではどうされるのですか」
「比叡山や本願寺は」
「やがて手を打ちたいものじゃ」
実際にだ。信長はこう考えていたしそれを家臣達に話す。

第二十四話　国友その九

「天下の為にな」
「ああした僧兵達はなりませんか」
「やはり」
「そう御考えなのですね」
「そうじゃ。まあ今は尾張一国じゃからよいがな」
尾張には比叡山や本願寺程強い寺社の勢力はない。それは信長にとっては有り難いことだった。それを踏まえて話すのだった。
「しかしやがてはじゃ」
「近畿に出ればですな」
「やがてですな」
「嫌でも彼等と対します」
「その時は」
「そうじゃ。そうする」
こう話すのであった。話を聞く家臣達も真剣だ。そしてその真剣な面持ちでだ。彼等は話すのだった。
「天下泰平は何があっても果たさなければならぬものだからな」
こう話すのであった。そしてであった。
信長は家臣達を連れて国友村から都に向かう。彼等は順調に進んでいた。
信長が国友に行ったことは義龍の耳に入った。彼はそれを聞いてこう家臣達に話すのだった。
「鉄砲じゃな」
「それですか」
「織田が国友に入ったのはそれを手に入れる為なのですね」
「その為に」
「ふん、小賢しい」
義龍はその信長について忌々しげに述べた。

「わざわざ鉄砲をそうして手に入れるとはのう」
「しかし織田がここでまた鉄砲を手に入れては」
「何かと厄介ですな」
「全くです」
家臣達はそれを言うのだった。
「今のうちに何とかしたいですが」
「では殿、刺客達ですが」
「このままですね」
「そうだ、狙わせる」
他ならぬ信長の命をというのである。
「そして隙あらば」
「尾張自体をですね」
「狙われますか」
「ここは」
「そうじゃ。狙うぞ」
実際にだ。義龍はそれを考えていた。真剣に狙っていた。
「よいな。隙があればじゃ」
「では兵は何時でもですね」
「出せるようにしますか」
「まことに隙があれば」
「そうされますね」
「そうじゃ。そうする」
こう言ってであった。彼等は尾張を狙おうと考えていた。しかしだ。
尾張はだ。その隙がなかった。稲葉山にだ。家臣達が次々に戻って義龍に伝えるのだった。
「国境には兵が集まっております」
「そして隙を見せませぬ」
「蟻一匹は入られませぬ」
「留守は誰だったか」

義龍は尾張に残っている者が誰なのか考えて述べた。
「織田の家臣の間で誰が残っておる」
「はい、平手と森の二人です」
「あの二人の様です」
「厄介な者達じゃな」
義龍はその二人の名前を聞いてここでも忌々しげに述べた。
「平手は織田家においてよく知られおるしな」
「左様ですな。政は万全です」
「そして戦の森ですか」
「あ奴は最初我が家におった」
美濃の斉藤家にである。仕えていたのだ。
「しかし織田に流れてじゃ」
「そうして今に至る」
「左様ですか」
「そうじゃ。派手さはないが手堅い戦をする」
それが森の戦なのだった。義龍にとって厄介なことであった。
「ではとてもじゃ」
「攻められませぬか」
「とても」
「そうじゃ。それは諦める」
義龍は決断を下した。

第二十四話　国友その十

「そうするぞ」
「はっ、それでは」
「尾張に直接攻めるのは」
「それはですね」
「そうじゃ。それは止める」
また言う義龍だった。
「仕方ないがのう」
「ではやはりここは」
「刺客ですか」
「それをですね」
「尾張を攻められずともあのうつけは攻められる」
信長はだというのだ。彼はだ。
「所詮うつけよ。攻めるのはたやすい」
「確かに。尾張の統一も所詮は運故です」
「その程度ですので」
彼等の多くもだ。信長についてはそう見ているのだった。
そしてそのうえでだ。彼等も言う。
「では。あのうつけを討ちましょう」
「さすれば尾張の主はいなくなりますので」
「ですから」
「そうよ、あの森も平手も守る理由がなくなる」
そのことも狙っていた。義龍はただ信長憎しで動いているのではなかった。彼なりのしっかりとした戦略があってのことなのである。
そのうえで刺客を出すとしてだ。彼はまた言った。
「尾張を手に入れれば大きいからのう」
「一万五千の兵があり」
「しかも六十万石はあります」

「町もかなり発展しているとか」
発展させたのかは誰かまではだ。彼等は考えなかった。そうした意味で信長という男を完全に侮ってしまっているのだった。
しかもだ。そのうえで彼等はさらに話すのだった。
「その尾張を手に入れれば」
「最早今川も浅井も恐れることはありませぬ」
「武田ですらも」
「そうよ、武田もだ」
義龍もだ。隣国信濃を手中に収めた武田の脅威は感じていた。それもかなり強くだ。
だからこそだ。彼は尾張を狙っていたのである。
「武田は今は信濃を治めるのに専念しておる」
「上杉との戦もありますし」
「それもですね」
「その間足止めは受けておる」
そうなっているというのである。
「しかしじゃ」
「やがては動く」
「そうしてきますな」
「間違いなく」
「武田はあまりにも強い」
天下の誰もが知っていることだった。
「あの赤い軍勢は尋常ではないからのう」
「兵はあまりにも強く騎馬隊も揃っております」
「しかも将もです」
「あの二十四将は」
彼等の存在もだ。あまりにも大きいのだった。
「まさに鬼神です」
「おまけに真田家から一人とてつもない若武者が入ったとか」
「名前は確か」

その若武者とは誰かというとだった。
「真田幸村」
「あの男でしたな」
「智勇兼備の若武者だそうだな」
義龍も彼については聞いていた。それで言うのだった。
「そしてその若武者の下には」
「十人の忍がいるとか」
「真田十勇士」
「あの者達もかなりの豪傑揃いとか」
「武田には人が集まっております」
「だからこそ美濃一国の力では相手にはできぬ」
これも見抜いているのが義龍だった。やはり彼なりに見ているのである。
「それで尾張もじゃ」
「尾張を手に入れそうしてですな」
「続いて伊勢をですね」
「そして三国の力で」
「武田を封じる」
そうするというのだった。やはり武田なのだった。

第二十四話　国友その十一

「できれば上杉と永遠に争っていてもらいたいがのう」
「しかし上杉は上杉で」
「あれも恐ろしい家です」
「あの上杉謙信という男」
謙信自身がだ。恐ろしいというのであった。
「数多くの戦において負けなしであります」
「引き分けた者はその武田だけです」
「他は誰も勝ててはいません」
「北条ですら」
「その上杉だからこそ武田は動けぬ」
義龍はまた言った。
「そして政もしておるからのう」
「そういえば武田は政が好きですな」
「それもかなり」
「異様にこだわります」
そのことも知られていた。非常にだ。
「戦よりも政なのですな、武田は」
「まずはそれなのですね」
「どうやら」
「それは正しいかと」
家臣の一人が言った。
「政ありきですから」
「それが最初だというのだな」
「はい、国を富ませてこそ戦ができます」
こう義龍に話すのだった。
「金や米がなければ戦などできませぬし」
「それは確かにその通りよ」

義龍も頷くことだった。
「武田はそれがわかっておるのだな」
「はい、そう思います」
「そうよの」
「ただ。武田はその政になるとそれに専念しますな」
ここでこのことが指摘された。
「戦で攻め取った国を徹底的に治めております」
「それが楽しみであるかの様に」
「そこまでして」
「そういえば織田も」
信長もだと。一人が言った。
「動きませんな、尾張を一つにした後は」
「政に専念しておるのでしょうか」
「町も田畑も見事になっていますが」
「そうなると」
「ふん、あのうつけはそうではない」
こう言ってまた信長を否定する義龍だった。
「どうせ遊んでおるのよ」
「そうですな、やはり」
「あの者、茶にも入れ込んでおるようですし」
「舞もしておるとか」
「遊びばかりの様で」
「遊んでばかりで何ができるか」
何処までも信長を否定する義龍であった。
「そうした者には何があろうともよ」
「敗れはしませんな」
「決して」
「やがて破る」
義龍は言い切った。
「あのうつけに目にもの見せてくれるわ」

「はっ、それでは」
「今は刺客からの朗報を待ちましょう」
こうしてであった。彼等は今はそれを待つのであった。
しかしそれがどうなるかはだ。誰にもわからない。しかし彼等は知らなかった。その刺客のことを信長が既に知っていることにだ。
それを言うのはだ。駿河の雪斎であった。
「斉藤も小手先ではじゃ」
「駄目でございますか」
「うむ、それで織田は倒せぬ」
こうだ。彼は元康に話すのである。
「とてもな」
「信長殿は勘が非常に鋭い方です」
「それだけではないな」
雪斎は元康の言葉に己の言葉を続けた。

第二十四話　国友その十二

「頭の切れもじゃ」
「はい、それもです」
「かなりよいな」
「斉藤殿はそれがわかっておられぬようですが」
「それは斉藤だけではない」
雪斎の語るその顔が曇る。
「我が今川においてもじゃ」
「信長殿を侮っておられる方がですか」
「実に多い。殿ものう」
他ならぬ義元もだというのである。
「織田信長を軽く見ておられる」
「それは間違いありませんか」
「うむ、どう見てもじゃ」
その義元の師であるからこそだ。わかることであった。
それがわかったうえでだ。彼は言うのであった。
「このまま織田と戦ってもじゃ」
「敗れますか」
「それも今川を滅ぼす敗れ方かも知れぬ」
雪斎のその言葉はただの悲観ではなかった。彼はその危険は充分にあると見ていた。そのうえで今元康に対して語るのだった。
「そうならぬ為にはじゃ」
「どうされますか」
「今川の全てを注ぎ込んだ大軍で攻める」
まずはそうするというのである。
「そしてじゃ」
「そして」
「先陣はわしが務める」

他ならぬ彼がだというのだ。
「そして竹千代」
「はい」
「御主もじゃ」
己の前に控えるその元康に対しても言うのだった。
「御主も先陣を務めよ」
「私もですか」
「そなたならば織田と対せる」
だからだというのだ。真剣そのものの顔で元康に話していた。
「だからこそじゃ」
「左様ですか」
「そなたは織田におったことがあったのう」
「はい、暫しの間」
「織田信長と交わりがあったとしても今はじゃ」
「わかっております」
元康も己を押し殺してそのうえで師の言葉に応える。そのうえでの言葉だ。
「それは」
「うむ、そういうことじゃ」
師も弟子の言葉に納得した顔で頷く。そのうえでまた言うのだった。
「今川の為に戦ってもらう」
「そして殿を都に」
「殿は上洛され将軍になろうと考えておられる」
将軍継承権を持つ今川の主故にである。
「わし等はそれを実現するのみじゃ」
「その通りです。では」
「それとじゃ」
ここでだ。雪斎の言葉の調子が変わった。その声で元康に言う。
「御主そろそろじゃが」

「といいますと」
「妻を迎えてはどうじゃ」
こう弟子に話すのだった。
「殿もどうかと言っておられる」
「殿もですか」
「妻を迎えて子をもうけよ」
弟子に対してこうも話す。
「さすればさらによい」
「さらにですか」
「わしは僧じゃから妻や子はおらぬが」
そのことは守っているのであった。雪斎はそうした意味でも真面目な僧侶であった。だからこそそれはわからないと前置きするのだった。

第二十四話　国友その十三

そうしてだ。元康にさらに話すのであった。
「だが。妻や子を迎えてさらに大きくなってきた者は多く見てきた」
「だからこそなのですね」
「うむ、妻を迎えよ」
また元康に話した。
「わかったのう」
「わかりました。それでは」
「いい妻を探しておく」
ここで雪斎の顔が微笑みになった。
「そなたに相応しいのをのう」
「それがしが妻をですか」
「信じられぬか」
「はい、どうも」
「今はそうでも変わる」
また微笑みと共に語る雪斎だった。
「実際に迎えればな」
「ううむ、そうなのですか」
「まあ妻を入れて悪いことはない」
それは間違いないという言葉だった。
「わかったな。それではだ」
「果たして誰がそれがしの妻に」
「うむ。実は一人考えておる」
「どなたですか、それは」
「あれじゃ。関口のじゃ」
こう聞くとだった。元康はすぐにその名を出した。
「瀬名殿ですか」
「うむ、あれをと考えておる」

「それはまた」
瀬名とわかってだ。元康はここでまた驚くのだった。そのうえでの言葉だった。
「それがしとはかなり」
「歳が開いておるというのだな」
「はい、左様で」
「御主にはその方がいいと思ってじゃ」
「それで、でございますか」
「そうじゃ。御主はしっかりしておって我慢強い」
既に元康のそうした性格はわかっているのであった。
「しかし溜め込むからのう」
「それを何とかする為にですか」
「瀬名じゃ。あれは心優しいからのう」
「それも聞いておりますが」
「だからよ。そなたには瀬名じゃ」
雪斎はまた述べた。
「一番よい」
「では」
「話が決まればまた話す」
こう弟子に告げた。
「楽しみにしておれ」
「わかり申した」
「そしてじゃ」
雪斎の言葉が続けられていく。
「そろそろ用意しておくとするか」
「尾張へ攻め入る準備ですね」
「それを今から進めておく」
「殿にもお話をしてですね」
「ここは。そうじゃな」
ここでだ。雪斎は考える顔になって述べた。

「殿だけではなくじゃ」
「氏真様もですね」
「あの方にもご出陣願おう」
主だけでなく跡継ぎもだというのだ。
「そしてそのうえで兵の士気をあげねばのう」
「織田はそこまで強いと」
「そうじゃ。何度も言うが決して侮れぬ」
繰り返しているだけに。そこには雪斎の確信があった。そして元康もまたそれがわかった。師がどれだけ織田を恐れているのかもだ。
「だからこそじゃ」
「それがしもまた先陣で」
「そういうことじゃ。よいな」
「それでは」
駿河では見る者は見ていた。そうしてであった。
尾張とその近辺でも動きがあった。そしてそれはそれぞれの者達の運命を決めるものでもあった。だがそれを知る者はいないのだった。

第二十四話　完

２０１１・１・２１

第二十五話　堺へその一

第二十五話　堺へ

謙信もまた、だ。今春日山を発とうとしていた。

「では今よりです」

「はっ、それでは」

「都に」

「上洛です」

こうだ。己の周りにいる二十五将に言うのであった。

「宜しいですね」

「以前よりわかっていたとはいえ」

「それでもですね」

ここでだ。二十五将達はこう口々に言う。その顔には緊張が漂っている。

「都に上るとなると」

「やはり只ならぬものがありますね」

「全くです」

「それは私もです」

謙信もだと。静かに言うのだった。

「はじめての上洛ですし」

「そのうえで公方様に御会いする」

「そうですね」

「そうされますね」

「そして関東管領になります」

謙信は彼等にこのことも述べた。

「公方様に正式にです」

「任じられますな、遂に」

「その為の上洛ですし」

「だからこそ」

こう話してだ。彼等は出発した。そうしてそのうえでだ。彼等もまた都に向かう。謙信はその中で馬上においてだ。直江兼続に声をかけた。

「それでなのですが」

「はい、都のことですね」

「都は非常に荒れ果てていると聞いています」

「それは確かなようです」

実際にだ。都は荒廃しきっているというのだ。

それをだ。直江は憂いのある顔で話した。

「それは今はです」

「どうしようもありませんか」

「はい、我等が都まで手に入れれば違いますが」

「私は国など欲しくはありません」

実に謙信らしい言葉であった。謙信は土地を欲してはいないのだった。謙信が欲するのはあくまでもだ。大義のみであるのである。

その大義を欲してだ。謙信はこう言った。

「ですが。都の荒廃はです」

「何とかしたいのですね」

「それを思い多くの銭も持って来ていますが」

朝廷及び幕府への上納である。

「それではとてもですね」

「まずは都とその周辺の治安を回復し確固たる政を行わなくては」

「そうでなければ都の復興はありませんね」

「そこは政と同じです」

直江はここでは政を行う者として謙信に述べた。

「ですからやはりここは」

「だとすればです」

直江のその話を聞いてだ。謙信はこう言うのであった。

「私が都まで軍を率いて入り。公方様を補佐する立場になり」

「そのうえで政を執られるというのですね」

「それではどうでしょうか」
こう直江に問うのだった。
「そのやり方では」
「よいですね」
謙信は微笑んでこう応えたのだった。
「確かに。そのやり方ならば」
「大義が立ちます」
「形だけの大義は偽りです」
それは駄目だというのだった。謙信はここでは潔癖を見せた。
「真のものでなければなりません」
「はい、だからこそ」
「私は朝廷、そして幕府が再び力を持ちその秩序が回復することを望んでいます。
「その為に都に上られ」
「今はこうしてただ上洛するだけですが」
「やがては」
「その通りです」
また答える謙信だった。

第二十五話　堺へその二

「それを念頭に置いております」
「あくまで殿が求められるのは大義ですか」
「国は天下のものです」
謙信は国、即ち領地についてはこういった考えであった。だからこそ領地を拡大しようという他の大名の様な野心はないのである。
そしてだ。謙信は直江にこうも言うのだった。
「それを人が求めることは愚かです」
「そして名誉もですね」
「死ねば終わりのものです」
ここでは達観めいたものを見せるのだった。
「それを求めて何になりましょう」
「だからこそ大義をですか」
「大義は永遠に残り」
そしてというのである。
「そのうえ天下万民に多くのものを残します」
「成程、それは殿の目指されるものですか」
「その通りです。これでわかりましたね」
「はい、それではそれがしは」
「どうするのですか、そなたは」
「その殿と共に」
あらためてだ。謙信にこう言うのだった。
「天下の大義を求めさせてもらいます」
「大義の道は険しいです」
謙信の声はここで鋭いものになった。
「決して平坦なものではありません」
「はい、それは承知のうえです」
「それでもいいというのならです」

謙信は直江のその真っ直ぐな目を見ながら言葉を続けていく。その謙信の言葉もまた真っ直ぐなものである。それを言うのである。

「私と共に歩むのです」

「はい、そうさせて頂きます」

「この麻の如く乱れた天下を正し民の平穏を取り戻します」

これが謙信の夢だった。そしてその為には。

「朝廷、幕府の権威を取り戻しそれにより天下を治めるのです」

「上杉はその為にあるのですね」

「私もまたです」

その上杉の主である謙信自身もというのだ。他ならぬ。

「それは同じです」

「では殿」

「我等もまた」

ここでだ。二十五将達も来た。謙信に絶対の忠誠を誓い手足となって動いている彼等がだ。

「及ばずながらです」

「殿と共に」

「参りましょう」

謙信は彼等にも応えた。馬上で正面を見据えながら。

「その大義の道に」

「はい、それでは」

「今より」

こうしてであった。彼等は今大義の道を歩むのだった。それが謙信の道であり謙信を慕う者達の道であった。それは険しいが大きな道だった。

そして信長は。奈良においてその町並を見ていた。

「ふむ。奈良もだな」

「如何でしょうか、奈良は」

「この町は」

「手が行き届ききっておらぬ」

こう言うのであった。
「まだな」
「確かに。思った以上には」
「栄えておりませぬな」
「噂程では」
家臣達も信長のその言葉に頷く。
「寺社もあまりいいとは言えませんな」
「何処も」
「やはり大和自体が」
「そうじゃ。この国もややこしいことになっておる」
信長はここで大和のこと自体を話した。

第二十五話　堺へその三

「東大寺や興福寺の僧兵達もおる」
「比叡山のそれ程乱暴ではありませんが」
「ここにもですな」
「それに筒井に三好の勢力もあるからのう」
「厄介なのは三好ですな」
「やはり」
家臣達の顔がここで歪んだ。
「三好の松永久秀が来ております」
「信貴山に城を構えそのうえで」
「この大和を治めようとしております」
「それで争いが激しくなっているようです」
「まず寺社の僧兵達が消えるだろうな」
信長はここでこう予想を立てた。
「まずはな」
「筒井と松永久秀の争いの中で」
「そうなると」
「そうじゃ。そして御主等も言ったが」
それでもだというのである。
「やはり松永が最も厄介よのう」
「そうなりますか」
「あの男が」
「そもそも誰か知っておるか」
信長は家臣達全員に問うた。
「あの男は何処から来たのじゃ」
「それは」
「それがしは知りませぬ」
「それがしもです」

「そういえば」
「わしも知らん」
信長自身もだというのだ。松永の出自は知らないのだった。
「一体何者じゃ」
「急に三好家に来てそのうえで瞬く間にのしあがりです」
「ああなっていますが」
「今では主家さえ凌ぐ権勢です」
「力はありますがそれでもです」
「出自はです」
「全くわかりませぬ」
それがまさにその松永久秀という男だというのである。
家臣達のその言葉を聞いてだ。信長はまた言った。
「似ておるな」
「似ているといいますと」
「あの男ですか」
「そうだというのですね」
「そうだ、津々木よ」
話に出すのは彼であった。
「似ておるな。出自がわからぬというのは」
「確かに。言われてみれば」
「松永とあの男」
「何処か」
「妙な話ではあるな」
信長は怪訝な顔でこうも述べた。
「同じものがあるのではないかのう」
「同じものとは」
「それは」
「そこまではわからぬがそれでもじゃ」
これは信長の直感からだった。感じることだったのだ。
だがそれを確かに感じてだ。それで彼はまた言うのだった。

「同じかも知れぬのう」
「ううむ、だとすると松永という男」
「我等が思っているよりも厄介かも知れませぬな」
「それもかなり」
「厄介なのは間違いないであろうな」
信長はこのことは間違いないというのだった。それはだとだ。
「さもなければあそこまでなれぬ」
「天下第一の勢力である三好の執事まで」
「そこまでですな」
「それだけのものはあるということじゃ」
こう話すのだった。

第二十五話　堺へその四

「確実にな」
「では信貴山にも行かれますか」
「そこにも」
「いや、今はよい」
それはいいというのだった。
「今はじゃ」
「宜しいのですか、それは」
「信貴山に行かれるのはですか」
「そうじゃ、よい」
信長はまた述べた。
「他の場所を見ておきたい」
「大和の地をですか」
「それをですか」
「そうじゃ。信貴山以外にも見る場所は多い」
大和という国自体がそうだというのだ。
「だからこそじゃ」
「成程、奈良の町だけではなくですか」
「他の場所もまた」
「大和は様々な勢力がひしめきあっているだけではない」
それだけではなくだというのだ。まだあるというのだ。
「豊かな場所だしのう。何かと気になる場所だからじゃ」
「やがてこの国を手に入れその時にですな」
「無事治める為に」
「その為に」
「そういうことじゃ。わかったな」
こうしてであった。信長は大和を広く見回った。無論堺へ向かうついでであり寄り道等はしていない。しかしよく見回るのだった。

そしてだった。宿にしている寺でだ。家臣達と夕食を摂りながら話す。
「大和の酒は美味いか」
「はい、これが中々いけます」
「美味いものです」
「大和の酒は今一つと聞いていましたが」
それでも実際に飲むとだというのだ。
「いけますな」
「よいものです」
「ふむ、そうか」
酒を飲まない信長は茶を飲んでいる。そのうえで彼等の話を聞くのだった。
「ならばよい」
「摂津や河内の酒はもっとよいと聞いていますが」
「そちらの酒はさらに」
「酒はよいものじゃ」
酒は飲めずともだった。信長は言うのだった。
「実にのう」
「金になるからでございますか」
ここでこう問うたのは長谷川だった。
「だからでございますか」
「そうじゃ。酒だけでかなりの商いになる」
実際にそうだと答える信長だった。その通りだというのだ。
そしてだ。信長はさらにこんなことも言うのであった。
「そして酒からじゃ」
「酒からとは」
「まだありますか」
長谷川だけでなく大津も言ってきた。
「それは一体」
「酢じゃ」

信長が今話に出すのはこれだった。酢だというのだ。
「酒から酢を作るのう」
「それもまたよいと」
「そう仰いますか」
「酢は必要なものじゃ」
人の舌にだというのだ。人はただ米と水だけで生きているわけではないからだ。味覚を楽しむことも人には必要だというのである。
それがわかっているからこそだ。信長は言うのだった。
「だからこそじゃ」
「酒はいいものだというのですな」
今度は野々村だった。
「それに終わらぬからこそ」
「大和ではあれじゃ」
信長は大和の話もした。
「紙に墨もあればじゃ」
「食べるものには限りませんか」
「必要なものは」
「そうじゃ、そうしたものも必要じゃ」
信長は食べるものだけを見てはいなかった。その視野はさらに広かった。

第二十五話　堺へその五

「商いになりそれを作る者も売る者も栄えさせる」
「そしてそれはそのまま国を富ませる」
「そうだろいうのですね」
「そういうことじゃ。大和は他には茶もいけるしのう」
彼が今飲んでいるその茶もだというのだ。
「よい場所じゃ」
「ううむ。米だけでなく酒や酢、紙に茶ですか」
「そうしたものも増やしていきますか」
「そうじゃ。わかったな」
信長ははっきりした顔で家臣達に告げた。
「このことが」
「はい、よく」
「それもですな」
「これからは」
「米だけをやっていればいいと誰が決めたのじゃ」
信長はこんなことも言うのだった。
「確かに米は必要じゃ」
「それは欠かせません」
丹羽がすかさず言ってきた。
「やはり米がなくては何もできませぬ」
「しかしじゃ。米以外にもじゃ」
「作っていけばよいですな」
「その通りじゃ。何でもじゃ」
これが信長の考えであった。
「増やして誰もが豊かになればよい」
「その為にもですな」
「例えば尾張じゃ」

彼等の国に他ならない。その尾張の話をするのである。
「胡麻を植えさせておるな」
「はい、あれもいいですか」
「よい金になります」
「あれを入れると入れぬとでは食い物の味が違う」
味覚の話がここでも出た。
「だからあれはより多く作らせてじゃ」
「そのうえで売る」
「そうされますか」
「そうせよ。それとじゃ」
信長の話は続く。
「他には豆じゃな」
「豆ですか」
「大豆ですな」
「それも作らせるとよいのう」
それぞれの国の作物だけではない。豆もだというのである。
「あれから豆腐なり色々できるからのう」
「国によっては納豆というものを作りますな」
ここで言ったのは林通勝であった。
「豆を腐らせそのうえで作るとか」
「何じゃ、それは」
「随分奇怪なものでござるな」
「それが食いものでござるか」
それを聞いた多くの者が驚きの声をあげた。
「豆を腐らせそのうえで食らうとは」
「その様なものがあるとは」
「それはまた」
「まあその納豆だけに限らずじゃ」
しかしだ。信長は林のその話を聞いても特に驚かずにだ。落ち着いた声で述べていく。

「味噌なり湯葉なり醤油もできるからじゃ」
「豆からですな」
「それから」
「だから豆もどんどん作らせる」
そうするというのだった。
「麦なり野菜なり何なりじゃ。どんどん作らせよ」
「そこから税は」
それを問うたのは前田だった。
「取られますか」
「年貢だけでよい」
信長は前田の問いにはこれだけで返した。
「米からだけでのう」
「ではそうしたものからは取りませぬか」
「基本的にはのう。どんどん作らせてそれで金を動かしてくれればよい」
それだけでよいというのである。信長は考える顔で述べていく。
「金が動けばそれでこちらにも入るからのう」
「成程、税を取らぬのも豊かにするやり方でございますか」
佐々はそれを聞いてだ。驚いた顔で感銘を見せていた。

第二十五話　堺へその六

「いや、殿は見事でござる」
「何、これは武田もしておる」
その武田もだというのだ。
「あの男の政を見るとじゃ。色々学べる」
「武田ですか」
「あの者でございますか」
「武田は確かに戦に強い」
その強さをだ。信長は戦わないうちからよく知っていた。
「しかし本当に凄いのはじゃ」
「政ですか」
「それでございますか」
「そうじゃ。それが一番凄いのじゃ」
こう家臣達に話すのだった。
「甲斐だけではなく信濃まで見事に治めておる」
「信濃は元々様々な国人達がいましたが」
「それを武田の下に一つにしてですか」
「そのうえで」
「田畑も町も整えているだけではない」
それ以上のものをだ。信玄はしているというのだ。
「民の心も掴んでおる」
「それも信濃の民までもですね」
「その者達も」
「見事なまでに」
「恐ろしいまでに見事よ」
そこまでだというのである。
「武田は。これからさらに強くなるぞ」
「戦国最強のあの軍団がですか」

「さらに」
「今まで以上に」
「強い軍を支えるのはよい国よ」
言い換えればそれがあってこその強い軍だというのだ。
「今川にしろそうじゃ。あの公家眉は政は好きじゃな」
「戦はあまり聞きませぬが政は確かに」
「中々見事です」
「あの公家眉も政が好きですな」
義元のことに他ならない。彼が公家の格好をしていることからそうして呼んでいるのだ。
尚義元は手足が短く胴が長い。その為馬に乗ることが苦手でそれがそのまま彼を今一つ戦に対して弱いところを作り出しているのも知れない。
「今川の兵は弱いですが」
「それでも豊かな国があればですか」
「戦えると」
「左様じゃ」
また答える信長だった。
「そういうことじゃ」
「ううむ、政は軍も作る」
「そうなりますか」
「つまりあれですな」
慶次が明るい声で言ってきた。
「腹が減っては戦ができぬですな」
「おお、確かに」
木下が慶次の今の言葉に笑顔で頷く。
「飯がなくては戦どころではありませぬ」
「そうじゃ。猿殿もわかっておるではないか」
大柄な慶次が小柄な木下の横に来て言う。
「そういうことじゃ」

「確かに。まず食わなければ話になりませぬ」
「左様、それを考えるとじゃ」
「飯があれば兵は強くなる」
「その通りじゃからのう」
「それではですな」
木下は慶次に合わせながらさらに言ってみせた。
「常に飯を適度な場所に用意して進ませることもいけますな」
「適度な場所にか」
「左様でござる。兵が昼飯を食う場所にあらかじめ飯を用意しておく」
木下はここでこんなことを言うのであった。
「これは如何でしょうか」
「おい、猿」
それを聞いてだ。川尻が顔を顰めさせて彼に言ってきた。

第二十五話　堺へその七

「兵糧をあらかじめそこに用意しておくというのか」
「その通りでござる」
「ううむ、兵糧は運ばぬのか」
「無論国の外で戦う場合は別でござる」
その場合はというのである。
「しかし。中を進む場合は」
「そうするというのか」
「左様か」
他の家臣達も聞いてそれぞれ言う。
「そうした考えはなかったな」
「そうだな」
「これは如何でしょうか」
ここまで話す。するとだ。
それまで黙って話を聞いていた信長がだ。こう言うのであった。
「それは面白いな」
「そう思われますか」
「うむ、中々よい」
笑顔でこう話すのだった。
「兵糧は何かとかさばる」
「それも考えまして」
「随分と細かく考えておるのだな」
「いえいえ、単なる思い付きでございます」
「思い付きでもそこまで考えたのは事実ぞ」
信長は木下の謙遜をこう言って退けた。実は彼は木下のそれが思い付きではないと見抜いていた。だがそれについては言わずにだった。
そのうえでだ。木下にさらに話していく。

「そうであろう」
「はあ」
「だからじゃ。それでじゃ」
信長は言葉を続けていく。
「進む速さも考えそのうえで然るべき場所に飯を置いておく」
「そうされてはどうかと思います」
「それはこれからしておこう」
信長は確かな声で述べた。
「是非な」
「有り難きお言葉。それでは」
「猿、そなたのその考え採用する」
確かな笑みで頷いてみせての言葉だった。
「そうするぞ」
「いやあ、それで何よりでございます」
木下は信長が己の案を採用してくれたと聞いてこのうえなく喜んでいる仕草をしてみせる。ある程度は道化だがある程度は本気で、である。
そうして喜んでいた。だがここでだった。
弟の秀長が傍に来てだ。兄に囁いてきた。
「兄上、それまで」
「むっ、落ち着けというのか」
「左様でございます」
まさにそうだというのである。
「さもなければです」
「さもなければ。どうなるのじゃ？」
「後ろにこけて頭を打ちます」
そうなるというのだ。語るその顔は真面目そのものである。
「若しくは落馬です」
「ううむ、それではじゃ」
それを聞いてだ。木下も真剣な顔になって応える。

「わしも大人しくなるとしよう」
「それで御願いします」
「ふうむ。猿は弟には弱いようじゃな」
そんな木下を見てである。佐久間盛重が言うのであった。
「猿が調子に乗るのは弟が止めるのじゃな」
「いやいや、よくできた弟でござる」
佐久間盛重のその言葉にはだ。木下は真面目な顔で返した。
「それがしも頼りにしてもうす」
「いいことじゃ。それでは猿よ」
「はい」
「その弟大事にせよ」
こう彼に告げるのだった。
「よいな」
「大事にでございますな」
「そうじゃ。絶対に死なせるな」
戦国の世である。死ぬことなぞ日常茶飯事だ。だからこそ彼はこう木下に言うのであった。それは確かな忠告でもあった。
それを受けてだ。秀長も彼に言ってきた。

第二十五話　堺へその八

「それがし、何があってもそれはなりませぬ」
「うむ、そうせよ」
「しかし。大学殿もです」
彼はだ。真摯な顔でこう述べるのであった。
「それは決して」
「死ぬなというのじゃな、わしも」
「はい、例え何があろうとも」
「そうじゃな。傍にそなたがおれば大丈夫じゃな」
佐久間盛重は笑顔になって秀長に話した。
「それに猿がおれば万全じゃ」
「何と、それがしもですか」
「そうよ。そなたの知恵は役に立つ」
それを見ての言葉であるのだ。
「だからこそじゃ」
「ううむ、では大学殿が戦の場に立たれるその時はです」
木下は腕を組んでだ。こう言うのであった。
「それがしもお供します」
「そうしてくれるな」
「はい、そして何があろうとも生き残りましょうぞ」
「それがしもでございます」
秀長もであった。
「戦の時は。是非共」
「そなた等二人がいればそれでもうことはなるのう」
佐久間盛重は笑っていた。そうして二人の言葉に応えていた。
「無事な」
「そうじゃな。大学よ」
信長はここでも話を聞いていた。そのうえで彼に声をかけた。

「今度そなたが戦の場に出る時はじゃ」
「この二人もですな」
「そうじゃ。連れて行け」
こう彼に告げた。
「その時はな」
「わかりました。それでは」
彼も主のその言葉に頷いて答えた。
「そうしてですな」
「死ぬな」
その連れて行けという理由はこれに他ならなかった。
「絶対にじゃ。よいな」
「はっ、承知しております」
「死ぬ必要のない者が死ぬことはない」
信長の言葉はこれまで以上に澄み切ったものになっていた。
「そうした者は生きなければならぬ」
「左様ですか」
「そうだと」
「わしとて必要ならば殺す」
戦国に生きる者としてだ。これは当然の言葉だった。そうした時代だからだ。
「だが。別にそうではない場合は無闇に殺めることもない」
「確かに。それで勘十郎様もでしたし」
「だからこそですな」
「そうじゃ。大学も同じじゃ」
また彼を見ながらの言葉だった。
「下手に死んではならんぞ」
「わかり申した」
「他の者もじゃ」
ここで信長は他の面々にも同じ言葉を告げた。
「そう簡単に命を粗末にするでないぞ」

「わかり申した、では」
「その様に」
「民を害することとそれは決して許さぬ」
信長は善政でも知られている。確かに裁きは苛烈である。だがそれだけに悪人が必ず罰されしかも田畑も町もよく治め水も同じだ。これこそまさに善政である。
「織田がどれだけのものになろうともじゃ」
「して殿」
信長の話が一段落したところで滝川が言ってきた。
「そろそろ河内に入りますが」
「そこから和泉じゃな」
「はい、その堺のある和泉です」
まさにそこだというのである。

第二十五話　堺へその九

「その辺りで」
「そろそろ来るやも知れぬな」
信長もそれは読んでいるといった口調だった。
「若しくは都か帰り道でじゃ」
「そこで、でござるか」
「刺客共が来ますか」
「人ごみの中か油断したところにじゃ」
信長は刺客が一体どういった時に襲い掛かって来るかも考えていた。
「来るであろうな」
「では殿、堺では」
「我等が常に」
家臣達の目も光る。
「御護りしますので」
「御安心を」
「それがしがでござる」
特に柴田であった。彼はその巨体を揺らして出て来たのだった。
「常にお傍におります」
「権六、御主がか」
「左様で」
「目立つのう」
信長はその彼の巨体と髭だらけの雄々しいにも程がある顔を見て苦笑した。
「まことにのう」
「目立ってはいけませぬか」
「まあ御主の顔は上方では知られておらぬ」
信長はその柴田にこう述べた。

「それにわしの顔は刺客共も既に知っておるしな」
「さすれば」
「別によい。では頼むぞ」
「はっ、では」
「御主のその武勇は戦場以外でも役立つか」
「伊達に鍛えてはおりませぬ」
武骨そのものの声で答える柴田だった。
「刺客の十人や二十人この拳だけでも」
「退けそうだな、まさに」
「退けそうではござらぬ」
柴田は主の今の言葉は訂正にかかった。
「退けまする」
「左様か」
「はい、絶対にでござる」
こう言うのであった。
「さすれば。御安心を」
「わかった、それではな」
「いざという時はそれがしもおります」
今度は可児であった。
「それがしの槍があれば」
「御主もおるのう、そういえば」
「左様で。刺客共に笹を馳走させてやります」
「確かに御主の槍に適う者はそうはおらぬ」
その武辺ではだ。慶次に匹敵する程である。
「それこそ又左か慶次位よ、槍ならな」
「それがしもおりますので」
「それがしも」
今度は中川と蜂屋であった。
「赤母衣衆と黒母衣衆もです」
「しかとおりますぞ」

「そうよのう。そうしたことを思えば」
信長は彼等の言葉を受けても言うのであった。
「わしは何かと家臣が多いのう」
「武田や上杉より多いですな」
「今ここにいるだけでも」
「二十四や二十五ではわしは満足せん」
実際にそうだというのであった。信長本人もだ。
「より多くじゃ」
「となると百や二百でも足りませぬな」
ここで問うたのは坂井だった。
「それよりもさらに」
「天下を治めるのに百や二百ではまだ足りん」
天下をだ。やはり見ているのだった。
「到底のう」
「少しでも多くの才ある者を」
「そうされると」
「唐の太宗じゃったな」
名君として知られている。唐の基礎を築いた偉大な皇帝である。

第二十五話　堺へその十

「あの皇帝は二十やそこいらの臣下がおったな」
「二十四でしたな」
池田勝正が言ってきた。
「確か」
「ふむ。武田と同じ数か」
「武田では密かにそれを自慢しているとか」
「二十四。少ないわ」
信長はその数を少ないとして笑ってみせた。
「わしはそれより多いぞ」
「それだけ多くの臣を集める」
「そうされるというのですか」
「集める。違うな」
そうではないというのだ。信長はそれは否定した。
そしてそのうえでだ。彼はこう言った。
「見出すのよ」
「見出されるのですか」
「臣をですか」
「そうじゃ、優れた者達をな」
そうした者達を見出しそのうえで用いて臣にするというのだ。信長はそこまで話すのである。
「それで二十四とはあまりにも少ないわ」
「では。天下の優れた者達を全てですか」
「見出されそうして用いられる」
「そうされると」
「その通りじゃ。わしは見出した者を臣にする」
ここでだ。家臣達を見回しこう話した。
「そなた等と同じじゃ」

「我等とですか」
「それは同じだと」
「そうじゃ。そしてじゃ」
信長は言葉を続ける。
「用いれば死なぬ限りは手放さぬ」
「それもありませんか」
「手放されることも」
「わしのやり方や考えが気に入らぬなら去ってもよい」
それはいいというのだ。
「好きにせよ。去る者は追わぬ」
「左様ですか」
「それはよいのですか」
「裏切りは許さぬがな」
去るのはいいが裏切りはだというのだ。そのことについて語るとだ。信長の目の光が鋭いものになった。だが決して残忍なものではない。
「しかし戻ってきたければ何時でも戻ってよい」
「去ってもですか」
「それでもですか」
「来る者は拒まず去る者は追わずじゃ」
また方針を言う信長だった。
「優れた者は誰であろうと使う」
「では我等も」
「だからこそでございますか」
「殿は用いられるのですな」
「その通りよ。よいか」
信長はあらためて周りの家臣達に告げた。
「その太宗の二十四臣を超えよ」
「我等のすべきことはそれですね」
「あの者達を超える」

「それをですか」
「そうじゃ。わしも太宗を超える」
名君と言われているその皇帝をというのだ。彼は超えるというのである。
「より上を目指すぞ」
「はい、では我等も」
「そうします」
「その二十四臣を」
「数だけではない。質もじゃ」
信長はそれもだというのであった。
「わかっておると思うがな」
「無論です、それでは」
「そのこと誓いましょう」
「今ここで」
彼等も頷いた。そうしてであった。
信長は堺に向かう。その道中の寺でだ。こんな話をしていたのだった。
そしてだ。尾張ではだ。清洲の一室においてだ平手と森が顔を見合わせてだ。こんな話をしていた。
「左様でござるか、美濃との境は」
「はい、平穏でございます」
森がこう平手に述べていた。

第二十五話　堺へその十一

「一時は兵を動かしていましたが」
「しかしそこを引いてですな」
「はい、それ以降これといって動きませぬ」
そうだというのである。
「ただ、今川はです」
「あちらはですな」
「どうやら。やがて動くようです」
「ふむ」
それを聞いてだ。平手の目が鋭くなった。
「その全軍を以てですな」
「その兵はおそらく二万五千」
森は兵の数まで述べた。
「それだけの数で」
「二万五千ですか」
その数を聞いてだ。平手は神妙な顔になった。そのうえで、である。
森に対してだ。彼もまた数を話しに出すのだった。
「それに対して我々は一万五千でございます」
「数においては大きく差が開いています」
「一万もの差が」
「これは大きいですな」
「全くです」
二人共だ。それはよくわかっていた。一万もの差はだ。容易に覆せるものではない。
しかしだ。その容易でないことについてもだ。二人は話すのだった。
「しかし地の利はこちらにあります」

「はい、我等に」
それがその容易ではないものだった。まさにそれがだ。
「尾張は我等の地」
「隅から隅まで知っております」
このことがだ。実に大きいのだった。
「さすれば。一万の差もです」
「覆すことが可能ですな」
「例え多くの兵を失おうとも」
平手はこのことは覚悟していた。やはり数の差が大きかった。
「そうしましょうぞ」
「是非共」
「しかし」
だが、だった。平手はふと思ってだ。それでこんなことを話すのだった。
「殿は。果たしてそんな悠長なことを考えられるのか」
「それですな」
「はい、あの殿ですからな」
ある意味において己の主をよくわかっているからこその言葉だった。
「派手にいかれるやも」
「そして兵の数をできるだけ減らさぬようにされる」
「そうされるのでは」
「確かに」
平手の言葉にだ。森も頷くのだった。そして彼はこう言うのであった。
「殿は戦われるからには。損害はできるだけ少なくされますからな」
「そして敵の虚を衝かれます」
「だとすると」
「その今川の時もですな」
平手は真剣な面持ちで述べた。

「それを狙われるかと」
「ううむ、言葉ではたやすいですが」
慎重派の森はだ。平手の話を聞いて難しい顔で述べた。
「ですがそれを実際にするとなると」
「やはり困難ですな」
「困難どころでは済みませぬ」
楽観していなかった。彼は現実を見て述べているからこそだ。
「何しろです。今川にはあの太原雪斎がおります」
「あの今川の知恵袋が」
「今まで織田も煮え湯を飲まされております」
三河での戦いのことだ。そのことは彼等は決して忘れていないのだ。
そのことを念頭に置いてだ。二人は話すのであった。
「あの男がまずおります」
「あの者を出し抜くとなると」
「殿とて用意ではありませぬ」
森は確かな声で述べた。

第二十五話　堺へその十二

「しかもです。今川は近頃です」
「もう一人ですな」
「あの松平のです」
「かつて我等の人質であった」
「あの松平元康です」
その彼だというのだ。彼のことも既に織田の耳に入ってきているのだ。
「あの者もかなりだとか」
「では今の今川は」
「これまで以上に手強いかと」
優れた将が率いるならだ。それも当然のことであった。
「ですから。その今川相手に奇襲は」
「できませぬか」
「はい、そう思います」
「そうでありましょうな」
平手も森のその言葉に頷いて答える。
「やはり。そうは」
「普通はそう考えまする」
森は常識の範疇での考えて述べた。
「ただ。殿ですからなあ」
「左様ですな、殿でございまする」
「殿ならば若しくは」
「やられますかも知れませぬ」
二人の言葉と考えは奇妙なまでに一致した。
「そうした状況でも」
「もしや」
「それではでござるな」

「はい、それでは」
そしてだ。二人でお互いに言い合ってであった。そのうえでの言葉であった。
「殿のされることを」
「信じるとしましょう」
「それが尾張の、織田の為になるのなら」
「そうするべきですな」
こう話すのであった。そしてだ。平手が森に言ってきた。
「それでなのですが」
「はい、何でしょうか」
「今お暇ですかな」
微笑んでだ。森に言ってきたのである。
「今は。如何でござろう」
「はい、時間はあり申す」
素直にこう答えた森だった。
「さすればでござるか」
「茶はどうでしょうか」
それに誘ってきたのである。平手は尾張でも随一の茶好きで知られている。信長に茶のよさを教えたのも他ならぬ彼である。
その彼に誘われてだ。森も微笑んで言葉を返した。
「さすれば」
「では今から」
「いや、それがしも最近茶のよさがわかってきました」
「はい、あれはいいものでございます」
平手は同年輩同士であろうか。他の家臣達に対する厳しい顔はなかった。穏やかな顔でだ。森に対して話をしていた。そうしているのだ。
「落ち着きますし眠気も取れます」
「左様ですな。いや全く」
「では」

「はい、今から」
こうしてであった。二人は茶を楽しむのであった。
信長の上洛は続く。その中でそれぞれ動いていたのであった。

第二十五話　　完

２０１１・１・２７

第二十六話　堺その一

第二十六話　堺

遂にだ。信長達は堺に入った。
そこはまさに別世界であった。家臣達がそれぞれ驚いた顔で周りを見ながら言う。
「いや、噂以上ですな」
「ここまで大きな町とは」
「何と人の多い」
「しかも髪や目の色が違う者まで」
「ふむ。どうやら」
信長も驚きこそしていないが持ち前の好奇心で堺を見回している。
そうしてそのうえでこんなことを言うのだった。
「あれが南蛮人じゃな」
「西の方から来たという」
「その」
「そうじゃ。あの者達がのう」
やけに背が高く縮れた赤や茶、金色の髪に青や緑の目。それに肌は白く鼻が高い。髭が濃く彼等とは全く違う服を着ている。信長はその彼等を見て言うのであった。
「その南蛮人よ」
「明の者もいますが」
「あれですな」
彼等は確かに服装は違うが姿形はほぼ同じだった。だから彼等には特に何も思わないのだった。
「しかし。本当に南蛮人がいるとは」
「この賑やかな町の中で」
「とりわけ異彩ですな」
「いや、全く」

「しかし堺は」
その堺についてまた話される。
「建物も違いますな」
「とにかく町人が多いですな」
「しかも店が多い」
彼等の左右には多くの者達が行き交い店が立ち並んでいる。どの店も大きく門構えも立派である。そしてそこには潮の香りもした。
「この町、一体どれだけの富があるのか」
「それも気になりますな」
「何でも商人達が治めているとか」
「そうよ、ここはそうじゃ」
信長は商人達が治めている話にも述べた。
「そこも尾張とは全く違うのう」
「商人が治めるとは」
「それはまた面妖な」
「確かに」
家臣達はこのことにいぶかしむのであった。
「幾ら聞いてもわかりませぬ」
「そうしたことができるとは」
「いや、全く」
「誰でもそれはできるぞ」
しかしだ。信長はここでこう彼等に言うのであった。
「現に昔はじゃ」
「昔？」
「昔といいますと」
「公卿が政をしていたではないか」
信長が言うのはその頃の話だった。
「今も坊主が政をしたりしているではないか」
「そうだというのですか」
「それは」

「そうじゃ。要は政を知っているかどうかじゃ」
それだというのである。
「知っておればできるし知らねばできぬ」
「では武士でもでござるな」
「政を知らなければできぬ」
「左様でござるか」
「おお、そういえば」
ここで声をあげたのは慶次であった。それも実に楽しそうにだ。
「わしはそうしたことは嫌いで」
「わしもじゃ」
今度は可児であった。彼もなのだった。
「政のことはわからぬ。わしはあくまで槍だけよ」
「風流は好きだがのう」
慶次は笑いながら話す。
「しかし政なぞ。わしには全く合わぬ」
「そうよのう。政の話になると眠くなってしまうわ」
可児も笑っていた。実に楽しげにだ。
「それを考えればのう」
「そうじゃな。侍だからといって政ができるとは限らぬ」
「武芸にのみ生きる者もおるぞ」
「御主等は極端過ぎるわ」
林通勝が眉を顰めさせてその二人に告げた。家の長老格としての言葉だ。

第二十六話　堺その二

「少しは政も学べ。只でさえ人が足りぬのに」
「いやいや、政はもう人がおるではありませぬか」
「新五郎殿にしても」
だが、だった。二人にそうしたことを聞く気配は全くなかった。
見事なまでに。
「それがし達は戦の場で働きまする」
「それで宜しいではありませぬか」
「全く。困った奴等よ」
「まあ新五郎そう言うな」
口を尖らす林を信長が笑いながら止めた。
「この者達はこの者達で役立っておる」
「それはわかっておるのですが」
「少なくとも政は御主等がおる」
その林達がだというのだ。実際に彼等はその政の才覚と知識はかなりのものである。それで尾張はよくまとまっているのである。
「それにじゃ」
「それにといいますと」
「さっき言ったではないか。政をできる者はじゃ」
「武士だけに限らない」
「そうじゃ。そういうことじゃ」
信長が今話していたその話に戻った。
「政をわかる者は武士に限らぬ」
「そうなりますか」
「そこの猿もじゃ」
今度は木下を指し示して述べた。
「そもそも百姓ではないか」
「確かに」

そう言われるとだ。林も頷くのだった。
「猿は元々百姓でしたな」
「しかし政はできるな」
「はい、これで中々やります」
林も既にこのことがわかってきていた。実際に彼の働きを見てだ。
そのうえでのことなのだ。
「戦の場よりもそちらの方が役立ちますな」
「ふん、確かに猿だがのう」
柴田は木下にはいささか辛口であった。
「武芸は駄目じゃがな」
「いや、これは手厳しい」
木下はその様な柴田に平伏する様子で返した。
「確かに。武芸に関しては」
「しかし殿が見込まれただけはある」
柴田は一応木下を褒めもしてきた。
「すばっしこいうえに頭が回るわ」
「それはどうも」
「わしは小回りは利かぬからのう」
その大柄さ故にである。柴田にそうしたことを求めること自体が
無理なことであった。
「だから御主が羨ましくもある」
「権六が小回りが利けばそれはそれで不気味じゃのう」
また言う信長だった。
「御主は猪突猛進でよい」
「左様でございますか」
「戦でも政でもな。御主はそれでよいのじゃ」
柴田の特性をよく見極めての言葉だった。
「かえって小賢しいことは考えぬ方がよいな」
「それよりもですな」
「そなたはそれでよい。思う存分やるのじゃ」

柴田に対して暖かい目も向けている。まさに大器の目であった。
そんな話をしながら一行は港に向かう。堺の港は彼等がこれまで見てきた尾張の港とはだ。何もかもが全く違っていたのだった。
途方もなく巨大な波止場にだ。大きな船、しかも明や南蛮のものまでが何隻も停まり出たり入ったりしている。船乗り達の声があちこちから聞こえ縄が荷物が使われたり運ばれたりしている。その活気もまた、であった。彼等がこれまでに見たことのないものだった。
そうしたものを見てだ。信長は感嘆して言った。
「これよのう」
「これといいますと」
「殿、今度は一体何が」
「うむ、これが貿易よ」
こう家臣達に言うのである。
「まさにじゃ」
「これが貿易ですか」
「そうだと」
「そうよ。他の国と大々的に貿易する」
信長はこのことに感嘆しているのだ。

第二十六話　堺その三

「これよ。これもしなくてはな」
「堺はこの貿易により多くの利を得ております」
「さすればそれもですな」
「考えておられるのですか」
「そうじゃ。何時かは織田も貿易をするぞ」
そして彼は今言った。
「やがてはな」
「貿易をですか」
「我等もまた」
「それをするぞ」
こう家臣達にも述べる。
「よいな」
「ううむ、殿はそれもですか」
「貿易までですか」
「考えておられますか」
「国を富ますには何でもする」
そうだというのである。
「だからよ」
「田畑や町だけではない」
「そうなのですね」
「貿易もですか」
「特産品もですし」
「とにかく何でもすることじゃ」
信長は実際にこう述べた。
「金山や銀山もよいがじゃ」
「そういったものも含めて」
「とにかく何でもでございますか」

「やるというのですね」
「そうでもせんと国はよくならん」
こう言うのである。
「日本の中でもじゃ」
「日本の中でも貿易とは」
「それは一体」
「国と国の間の商人達の行き来を盛んなものにさせるのじゃ」
具体的にはそういうことだった。
「海でも陸でもな」
「では今尾張の道を整えているのは」
「それでございますか」
「そうじゃ。商人達が行き来しやすくなる」
それでだというのである。
「無論商人達だけではないがのう」
「といいますと」
「百姓達もですか」
「あの者達の行き来もまた、なのですか」
「百姓達も余裕があれば旅をする」
信長は今度は旅について述べた。
「旅は人が動くものじゃな」
「はい、それは」
「その通りでございます」
「人が動けば金も動く」
ここでも金だった。信長が言うのはだ。
「だからよ。道は旅をする者達の為でもあるのじゃ」
「ううむ、そうして人やものを行き来させまするか」
「そうなのでございますか」
「そうじゃ。日本の中とはそういう意味じゃ」
これもまた信長の考えだった。
「よいな。今は尾張の中だけじゃが」

「やがては日本中がですか」
「そうなると」
「そうじゃ。町と町を栄えさせ」
それはもうしていた。
「その町と町を道で結んでいくのじゃ」
「そして田畑と町もございますな」
今言ったのは中川だった。
「そうでございますな」
「無論じゃ。全てを結びつける」
まさにそうだというのである。
「そうしていくぞ。この堺もな」
「ううむ、殿の考えられることは大きい」
「全くですな」
「いやはやまことに」
家臣達はそんな信長の言葉を聞いて述べた。唸る様な口調だった。
「しかしこの堺」
「確かに。これはまた」
「見事です」
彼等はまた堺の港を見てだ。こう話すのだった。

第二十六話　堺その四

舟がとにかく多い。それも巨大な見事な船ばかりだ。そうした船達が次々に出入りしている。港は活気に満ちていた。それを見てであった。

そして宿に戻ってだ。彼等はあらためて話すのだった。

「この町にはどれだけの富があるのか」

「それだけでも途方もないものですな」

「いや、考えるだけでも」

「この富は手に入れるものではない」

また家臣達に言う信長だった。

「生み出させるものじゃ」

「生み出させるのですか」

「手に入れるものではなく」

「金自体がそうじゃ」

それは金そのものがだというのだった。

「生み出すものぞ」

「政によってですな」

「それで」

「堺も同じよ。生み出させる」

堺についての話に戻った。その堺にだ。

「よいな。そうするのじゃ」

「米と同じですな」

今言ったのは丹羽だった。彼は考える顔になっている。

「さすれば」

「ほう、気付いたか五郎左」

「はい、若しやですが」

「いや、そなたは気付いておる」

そうしたことはすぐに見抜く信長だった。相変わらずの鋭さであ

る。
「そのことにだ」
「左様ですか」
「そうじゃ。気付いておる」
信長は楽しげな笑顔になってまた彼に告げた。
「金も米も同じよ。手に入れるものではないのじゃ」
「生み出すものですな」
「米は田から生まれるものよ」
まずは米からだった。そこから話すのだった。
「百姓達が耕し育て」
「そして金は商人達が育てる」
話がつながった。
「そうしたものじゃ」
「ううむ、それがしは」
柴田がここでまた言う。
「これまで米も金も、作らせ収めさせるものと思っていましたが」
「違うとわかったな」
「はい、その通りでござる」
主にだ。彼は太い素直な声で述べた。
「百姓や商人達に」
「そなたは税は低いがそう考えておったのはわかっておった」
このことも見抜いている信長だった。
「既にな」
「左様でござったか」
「税はまあ軽い方がよい」
信長も税についてはそうした考えだった。
「民に過度に負担をかけても何もならぬ」
「かえって民の反感を買いその力も奪います」
「民に力が無くてどうする」
信長はこのことも話す。

「何にもならぬな」
「まさに」
「それは確かよ。しかしじゃ」
「生み出させるのですか」
柴田は主のその言葉を自分でも述べた。
「米と金は」
「何でもそうじゃ。収めさせるのではないということはわかっておることじゃ」
「はっ、それでは」
「今すぐにわからずともよいぞ」
信長もそこまでは求めなかった。
「少しずつでよい」
「左様でござるか」
「うむ。権六は素直よ」
柴田のそうしたよいところもだ。信長はよくわかっているのだった。
「その素直さがやがてわからせるからのう」
「そうであればよいのですが」
「また言うが少しずつでよいからな」
言葉は繰り返しになった。

第二十六話　堺その五

「よいな」
「はっ、では」
「さて。話はこれ位にしてじゃ」
信長は己のその話を止めてきた。そのうえで、であった。
あらためて港を見てだ。これからのことを考えるのだった。彼は海も見ていた。それはあくまで広く無限のものがあった。彼はそうしたものも見ていたのである。
それが終わって港から帰る時にだ。九鬼が彼に言ってきた。
「殿、宜しいでしょうか」
「やはり来たのう」
九鬼が来てだ。信長は笑みになるのだった。
「今か今かと待っておったぞ」
「そうだったのですか」
「海といえば御主よ」
だからだというのである。
「絶対に来ると思っておったわ」
「確かに。それがしもです」
「思うところがあるのだな」
「堺のある瀬戸内はです」
その海のことをだ。九鬼は信長に話す。
「三好のものですが」
「そうじゃな。この海は三好のものじゃ」
水軍によりそうさせているのだ。これは九鬼が最もよく知っていることである。しかし彼だけでなくだ。信長もそのことについて言うのである。
「そうである限りはじゃな」
「これから我等が大きくなれば」

「当然この和泉全体を治めることになる」
「そしてでござる」
九鬼はさらに言う。
「そこからさらに」
「四国じゃな」
「当然そこに向かうことも考えておられると思います」
「その通りじゃ。わしは天下統一を目指しておる」
ならばだというのである。
「さすれば。四国もな」
「では瀬戸内は」
「二郎」
九鬼のその幼名を告げての言葉であった。
「その時はそなたよ」
「それがしでございますな」
「そなたをただ尾張の海や川を動くだけの者にしておくつもりはない」
「さすれば」
「その時は思う存分に暴れるがよい」
確かな笑みを浮かべてだ。九鬼に告げる。
「よいな」
「はい、それでは」
「海も国よ」
信長は海についてもこう考えているのだった。
「さすればわしが治めるものよ」
「左様ですか」
「海もまた」
「そうじゃ。だからこそ尾張や伊勢の海賊達を手中に収めていっておるのじゃ」
実際に信長はそうしている。そのうえで己の水軍を拡充させていっているのだ。

「とりわけ伊勢じゃ」
「確かに。あの地の水軍は見事です」
「それは」
家臣達も彼等のことは知っていた。
「だからでございますか」
「今からあの者達を配下にしているのは」
「それで」
「今川は間も無く来るであろう」
信長は既に読んでいた。このこともだ。
「それを退けたら丁度よい頃じゃ」
「伊勢をですな」
「その時に」
「そうする。まずは伊勢を手に入れ」
そこからだった。信長は伊勢だけを見てはいなかった。
「そして美濃よ」
「美濃が先ではないですか？」
今問うたのは金森だった。

第二十六話　堺その六

「そうではないのですか」
「美濃はそう簡単には攻め落とせぬ」
これが金森に対する信長の返事だった。
「さすればよ」
「それをせずにでございますか」
「まずは伊勢を手中に収めその力を手に入れる」
伊勢一国をというのである。信長は先の先まで見ていた。そのうえでの言葉だった。
「美濃はそれからよ」
「斉藤義龍ですが」
彼について言ったのは川尻だった。
「決して侮れる男ではありませんな」
「そうじゃ。あの男はやるぞ」
こう川尻に返す信長だった。
「さすればじゃ。まずは伊勢よ」
「伊勢は豊かでございますし」
滝川も言ってきた。
「それに小さな国人達が多く守護に反発しております故」
「それであの者達に仕掛けておるのよ」
その調略をというのだ。
「今からのう」
「随分と早いですな」
「それはまた」
「何、早ければ早いだけよいのだ」
家臣達に笑って返すのだった。
「そうしたことはな」
「そうして伊勢を」

「我等の手に」
「守護の北畠じゃがな」
信長はその家についても言及した。
「伊勢にある家ではやはり一番力がある」
「はい、それは確かに」
「その通りでございます」
万見と大津が述べる。
「守護だけはあります」
「衰えたとはいえ」
「あの家には用心しておる」
信長の目に実際に慎重なものが宿っていた。
「しかし北畠を軍門に下さずしてじゃ」
「伊勢を手中には収められませんな」
「やはり」
今度は堀と矢部が述べた。
「あの家です」
「伊勢の要は」
「そうよ。あの家もまた手中に収める」
信長の言葉は変わらない。北畠に対しても。
「だからあの家にも調略を仕掛けておるのじゃ」
「ふむ。それではですな」
ここで言ったのは毛利だった。彼だった。
「それがし達を全て使って伊勢に仕掛けていたのは」
「そうよ。伊勢をそのまま攻めてはかえって駄目なのじゃ」
そうだというのである。
「国人共も抵抗しおるし北畠がここぞとばかりじゃ」
「国人をまとめますな」
今言ったのは前野だ。
「伊勢に攻め込んだ我等を追い出せと」
「そうなってはことよ。伊勢は攻めぬ方がよい」

「しかしですな」
菅屋である。
「伊勢は手中に収めなければならない」
「そうじゃ。伊勢を手に入れれば違うからのう」
信長は尾張だけに止まってはいなかった。既に彼の頭の中ではだ。どの様にして伊勢を手中に収めるか、そのこともあり既に動いているのであった。
「伊勢の兵を手に入れればどうじゃ」
「二万おりますな」
兵の数を言ったのは中川だった。
「伊勢と志摩で」
「二万じゃ。それと尾張の一万五千を合わせればじゃ」
信長は頭の中で三国の兵を合わせた。すると。
「三万五千じゃ。どうじゃ」
「殿、それだけの兵があれば」
前田が身を乗り出して言ってきた。

第二十六話　堺その七

「最早斉藤なぞ恐るに足りません」
「左様ですな、それでは」
蜂屋の声も強い。
「斉藤も併呑し。一気に天下に近付けまする」
「伊勢、やはり大きいですな」
坂井も腕を組んで感嘆の声を漏らす。
「我等の天下の為に」
「そういうことじゃ。それで伊勢なのじゃ」
信長が伊勢にこだわる理由はだ。まさにそこにあるのであった。
「美濃を押さえれば都への道が開ける」
「はい」
「確かに」
「しかし伊勢はその美濃を手に入れる為に必要なのじゃ」
話がつながっていた。見事なまでにだ。
「そういうことじゃ」
「左様ですな。して殿」
生駒であった。今度は。
「一つ宜しいでしょうか」
「うむ、あのことじゃな」
「はい、来ております」
生駒の言葉はいささか剣呑なものになってきていた。言葉も低くなっている。
「この堺に」
「先回りしておったな」
信長はまた顔を変えていた。察するものになっている。
「向こうもやりおるわ」
「如何されますか」

生駒はその剣呑な響きの言葉で主に問うた。
「ここは。我等から攻めますか」
「そうじゃな。そうしようぞ」
「さすれば」
生駒の目が動いた。そうしてであった。
彼はだ。主にこう述べるのだった。
「ここは小六殿で」
「おう、出番か」
蜂須賀が顔を崩して応えてきた。
「わしとその手の者で奴等をだな」
「御願いできますかな」
「望むところよ。ではじゃ」
「わしも行ってよいか」
滝川も鋭い目になって名乗り出た。
「そうしたことならだ。元よりしてきたことだしな」
「そうですな。久助殿も」
生駒は彼の言葉に応えて述べた。
「ここは」
「よし、さすればじゃな」
こうして二人とその手の者達が宿を出ようとする。手の者達の気配はしない。しかしそれでも動こうとしているのは確かなことだった。
そうなろうとしていた。しかしだった。
信長がだ。彼等に告げた。
「待て」
「待てとは？」
「殿、何か」
「御主等が密かに動くことはない」
こう告げるのだった。
「それはよい」

「？ですが殿」
蜂須賀が怪訝な顔になって信長に言葉を返した。
「相手は刺客ですぞ」
「わかっておるぞ」
「それならばです」
蜂須賀はその怪訝な顔のままで主にさらに言う。
「ここはわし等が向かい」
「消すのはたやすい」
それはだというのである。
「慶次なりを送れば済むからのう」
「実際にわしでしたら」
その慶次も応えてきた。
「幾らおっても一人で倒してみせますぞ」
「そうじゃな。だからそれはたやすいのじゃ」
「しかしそれはされぬのですな」
「そうじゃ」
また答える信長だった。
「だからそれはたやすい。しかしじゃ」
「しかしですか」
「それでもなのですか」
「ここは面白いことをしよう」
こんなことをだ。笑顔で言うのであった。

第二十六話　堺その八

そしてそれを聞いた前田が問うた。
「ではそれがしもですか」
「又左、無論御主も駄目じゃ」
「左様ですか。では供は」
「だからいらんのじゃ」
それはだというのである。
「いらん。わし一人で行く」
「あの、殿」
「それは」
流石にそう言われてはであった。彼に幼い頃から仕えている林兄弟が眉を顰めさせてだ。そのうえで主に言葉を告げるのだった。
「幾ら何でも危険です」
「そうです。危険に過ぎます」
「ははは、わしが返り討ちにあるというのか」
「左様です」
「そうなっては話になりません」
林兄弟が言うのはまさに正論であった。家臣の誰もが二人の言葉に頷く。
「刺客はどれだけいるのか」
「そして宿は」
「はい、十二人でございます」
生駒が述べてきた。その彼がだ。
「そして宿はです」
「ふむ」
信長は生駒から宿の名前と場所も聞いた。そこまで聞いてであった。
彼はだ。家臣達にあらためて告げた。

「やはりわし一人で充分じゃな」
「ですから十二人ですぞ」
「それをお一人とは」
林兄弟がまた反論する。
「それで何かあれば」
「お話になりませぬ」
「その通りでございます」
佐久間も二人の言葉に賛成してきた。
「殿、ここはせめて慶次か才蔵をお連れ下さい」
「わしなら百人おっても大丈夫じゃ」
「わしもじゃ」
ここぞとばかりに名乗り出る二人であった。
「さすれば殿」
「やはり我等が」
「だからよいと言っておるのだ」
しかしであった。信長の言葉は変わらない。あくまでこう言うのであった。
「わし一人で充分じゃ」
「ううむ、どうしてもでございますか」
「そうされますか」
林兄弟は信長がここでは絶対に引かないことを察した。しかしそれでもまだ言う。彼等にも家臣としての意地があるからである。
「御一人で」
「大丈夫だと」
「そうじゃ。見ておれ」
信長の言葉はここでは素っ気無いものだった。
「わし一人で充分じゃ」
「そうですか。それでは」
「行かれるとよいかと」
林兄弟が折れるとだ。他の面々もだった。こう言うのだった。

「全く。殿ときたら」
「妙にそうして楽しまれますから」
「困ったものです」
「そうしたところは変わりませんな」
「これも遊びのうちよ」
信長はこんなことも述べた。
「楽しんでくるわ」
「ということはですな」
木下がふとした感じで言ってきた。
「殿は絶対にうまくいくとですか」
「だからこその遊びよ」
木下への言葉もだ。同じ色のものだった。
「そういうことじゃ」
「成功すればいいですが」
「全くよのう」
佐久間だけでなく柴田もだ。今は流石に慎重派であった。
それでだ。彼もまた主に述べた。
「殿のその悪戯好きはまことに変わりませんな。それが」
「それが何じゃ、権六よ」
「慶次めによからぬ影響を与えております」
こう述べるのだった。

第二十六話　堺その九

「全く。この悪童は」
「悪童とはそれがしでござるか」
「そうよ。この前もじゃ」
柴田は怒った顔で慶次を見てだ。言葉を続ける。
「わしが寝ている間に髭に何をした」
「少し結んだだけでござるが」
「ほどくのが大変だったぞ」
そうした悪戯をだ。またしたというのだ。
「全く。いつもいつも」
「しかしでござる。権六殿はその後で」
慶次はその怒った顔の柴田に対して反論する。
「それがしをしこたま殴ったではござらぬか」
「殴っただけで済んでいいと思え」
こう返す柴田だった。
「本来ならば斬っておるぞ」
「むむっ、それがしの首をですか」
「そうじゃ。御主という奴は」
「それでは命拾いだったというのですか」
「今度やったら許さぬぞ」
実はこの言葉を毎度言っている柴田だった。何だかんだと言ってである。彼は慶次の悪戯を殴るだけで許しているのである。いつもそうしているのだ。
「よいな、それは」
「では今度は別のことをしますので」
「それがいかんというのだ、全く」
そんなやり取りをする二人だった。柴田は慶次に対して言ってから主に顔を戻してだ。そのうえで彼に再び話すのであった。「こう

いうことになっております」
「わしのせいか」
「殿の悪戯好きがこうした悪童を生んでおりまする」
「しかし権六、御主もその都度悪童をぶん殴っておるな」
柴田がだ。それをしない筈がなかった。信長もわかっている。
「そうじゃな」
「はい、それは当然として」
「ではよいではないか」
信長はだ。ここでこう述べたのだった。
「やり返しておるのでは」
「何と、それでよいと」
「そうじゃ。では悪戯をせん慶次は何じゃ」
逆にだ。柴田にこう問うのであった。
「そんな慶次は面白いか」
「慶次が悪戯をせぬと」
「そうじゃ。考えられるか」
「考えることが無理で申す」
そうだとだ。すぐに述べた柴田だった。
「この者が悪戯をせんとは」
「そうであろう。それはわしもじゃ」
「この悪童から傾奇と悪戯を抜いたらそれこそ」
「何かわからんぞ」
「いやいや、風流がありますぞ」
当人が笑いながらその二人に述べた。
「それがし。これでも風流が大好きでござる」
「それと槍じゃな」
可児が横から言った。
「それもじゃな」
「そうじゃな。わしには槍と松風もあるのう」
彼の乗る馬である。自慢の愛馬である。彼はその馬に乗り戦場を

駆け回る。そして今の旅にもだ。それに乗って動いているのである。まさにもう一人の彼である。

「何じゃ、結構あるではないか」

「しかしじゃ。傾いておらず悪戯をせん御主はじゃ」

「考えられるな」

信長と柴田が同時に言った。

「全く。これはこれで」

「難儀な奴じゃ」

「ふむ。確かにそれがしはふべん者でござる」

自分でこう言う慶次だった。

「政はできませぬ故。殿のお役に立てるのは槍以外にはありませぬ」

「政には興味がないのじゃな」

「はい、ありませぬ」

佐久間盛重の問いにもはっきりと答える。

「城や国を持とうとも思いませぬ。ただ傾きたいだけでござる」

「おかしな奴じゃ」

佐久間盛重はそれを聞いて首を傾げることしきりであった。他の者もである。

「土地を求めぬとは」

「食えればよく。後は気ままに傾いてでござる」

「ははは、慶次らしいわ」

それを横で聞いてだ。前田が笑って述べた。

「御主は昔からそう言うからのう」

「ややこしいことは叔父御がしてくれますからなあ」

彼もこう前田に返す。

「いや、それがしは気楽に悪戯ができ申す」

「全く。変わった奴じゃ」

「そういう性分でございますので」

「しかしじゃ」

ここまで話してだ。前田も柴田と同じ顔になって慶次に言ってき

た。
「御主の悪戯はじゃ」
「権六殿と同じことを言われますな」
「そうじゃ。実に性質が悪い」
慶次の予想通りだった。やはりこう言う前田だった。

第二十六話　堺その十

「全く。何を考えておるのじゃ」
「ですから悪戯を」
「それ程悪戯が好きか」
「その通りでござる」
慶次はここで胸を張って言い切った。
「それがそれがしの生きがいの一つであります故」
「呆れた奴じゃ。しかしじゃ」
「しかしといいますと」
「そういう。何というかな」
前田は袖の中で腕を組みだ。考える顔になって己と然程歳の離れていない甥に対して言う。傍から見ればまるで兄弟である。
「童心か」
「それがしの心がですか」
「そうじゃ。その童心がかえってよいのかのう」
「少なくともそれがしは下手な大人にはなり申さぬ」
「童心を忘れぬか」
「そうしたいものでありますな」
「それがそなたを武辺にしておるならよいか」
また甥に述べた。考える顔でだ。
「それならばのう」
「ですからそれがしは」
「ふべん者じゃというのだな」
「ぶへんではありませぬ」
またこう言う慶次だった。そこに妙なこだわりがある。
「身体も大きく飯も食います故」
「確かにな。よく食うわ」
叔父は甥のこのことも知っていた。それもかなりよくだ。

「馬の如くだからのう」
「松風と合わせて馬二匹分ですな」
「そうじゃな。まあ食うのはよい」
「よいのでございますか」
「悪戯に比べれば全く何ともない」
だからだというのである。
「だからよい。それはのう」
「また悪戯でござるか」
「この前もじゃ。わしが吸い物の蓋を開ければ」
寺での話だ。それを開ければどうだったかというのである。
「空だったしのう」
「いやあ、あまりにも美味くておかわりを」
「わしの拳骨の味はどうだった」
「たいそうなものでした」
しっかりと殴られたのである。前田のその拳を受ければ大抵の者はそれで伸されてしまうが慶次はそれを受けても平気なままであるのだ。
「いやいや、叔父御の御心を感じました」
「あの時は本気で怒ったぞ」
「それがよくわかりました」
「ありとあらゆる悪戯をありとあらゆる方法でするのう」
「それが悪戯の醍醐味でござる」
こんなことを言って悪びれない慶次であった。やはり彼は天性の悪戯者である。
その悪戯者を見ながらだ。また言う信長であった。
「ではわしも悪戯に励もうぞ」
「今から行かれますな」
「うむ、行って来る」
こう慶次達に告げる。
「暫し待っておれ」

「せめて共の一人でも連れられては」
佐久間が慎重案を述べてきた。
「最低でも」
「一人でもか」
「はい、それは如何でしょうか」
「そうじゃな。用心棒という訳じゃな」
「一人ではそれ程目立ちませぬし」
それでだという佐久間だった。
「ですから」
「ふむ。ではここはじゃ」
家臣達をざっと見回してだ。彼の名を呼んだ。
「内蔵助」
「はっ」
佐々だった。彼もすぐに応えた。
「そなた、共をせい」
「有り難き御言葉」
佐々はすぐに主の言葉に応えた。
「ではすぐに」
「そなたのその気迫を見てじゃ」
それで彼を選んだというのである。
「そいじょそこいらの雑魚ならばそなたがおるだけで怖気付くからのう」
「だからですか」
「そうじゃ。それでは行くぞ」
「はっ、それでは」
こうしてだった。信長は佐々を連れてだ。そのうえで刺客達のいる宿に向かうのだった。信長の悪戯がだ。ここで一つ為されるのだった。

第二十六話　完

2011・2・3

第二十七話　刺客への悪戯その一

第二十七話　刺客への悪戯

謙信はこの時北陸道からだ。都に向かっていた。

一行は馬で進んでいく。その時にふと謙信がこう言った。

「この馬ですが」

「馬ですか」

「馬に何か」

「甲斐の馬は見事です」

謙信の宿敵である武田の馬の話であった。その話をするのである。

「幾度戦ってもそれを思います」

「確かに。武田の馬は見事です」

「どの馬も」

「そして武田の騎馬隊もです」

武田といえばその騎馬隊が代名詞にさえなっていた。赤揃えの軍勢が馬に乗り一斉に突き進むその姿は周辺の国々を心底恐れさせている。

「信濃は名馬の産地です」

「その信濃の馬を手に入れです」

「前よりもさらに強くなっています」

「その通りです」

家臣達の言葉に頷く謙信だった。そしてだ。

謙信はだ。ここでさらにこんなことを話すのだった。

「我々も馬には恵まれています」

「はい、我等も優れた騎馬隊を持っています」

「そして多くの名馬もです」

「それこそ武田に引けを取りません」

「何があろうとも」

「若しもです」

しかしだった。謙信はさらに話すのだった。彼もまた多くの馬を持っている、その現実を置いてだ。彼はさらに話をするのだった。

「馬がなければ」

「その時にですか」

「その時にはどうするか」

「どう戦うかですか」

「そうです。どう戦うべきかわかりますか」

こう家臣達に問うのだった。馬を進めながら。

「馬を持たぬ時に。どう馬と戦うべきか」

「それは」

「そう言われますと」

なまじ馬を持っているだけにだ。彼等は返答に窮することになった。馬には馬で、これが彼等の戦い方でありそこから逸脱することがなかったのだ。

それで返答に困ってしまった。だがその彼等にだ。

謙信はだ。落ち着き払った声でこう話した。

「槍です」

「槍ですか」

「槍を使われるというのですか」

「そうです。足軽達が槍を前に幾段も出してです」

それでだというのである。

「馬が突き進んでくるのを防ぎ。そして」

「そしてですか」

「さらに」

「その穂先で叩き突き刺します」

槍の使い方であった。まさにそれである。

「そうして戦うのです」

「ううむ、足軽で馬を倒せるのですか」

「それが可能なのですか」

「槍を使えば」

「刀では無理です」
それはもう言うまでもなかった。馬に乗っている者に下から刀で斬りつけてもだ。何の意味もないことは考えるまでもないことだった。
それでそれは言うまでもなかった。そしてだ。謙信はさらに話すのだった。
「弓もです。射る前に突入されれば終わりです」
「そうですな。陣に入られればそれで」
「何もかもが終わりです」
「射抜けばそれでいいのですが」
それでもだった。弓は射るまでに時間がかかる。次を放つ間もだ。それが問題なのだった。
「守りが不安になり申すな」
「そこが厄介です」
「鉄砲も同じです」
謙信はそれは鉄砲もだというのである。
「撃ち、そして次を撃つ間に馬に入られれば終わりです」
「ですから槍ですか」
「それで馬を防ぐのですか」
「そして戦うと」
「その通りです。ただ」
またしてもだ。謙信の言葉が止まった。そのうえでまた言うのだった。

第二十七話　刺客への悪戯その二

「弓、そして鉄砲ですが」
「使えるというのですか」
「それでも」
「要は馬に入られなければいいのです」
そうであればいいというのである。あくまでだ。
それでだ。謙信は家臣達にこんなことを話した。
「川を挟むなりしてです」
「ああ、そうですな」
「川を挟めば馬も進めません」
「そうして戦えば確かに」
「馬に入られません」
家臣達もだ。謙信の今の言葉に大いに頷いた。
そしてだった。謙信はその彼等に対してだ。さらにこんなことを話してきたのだった。
「他には堀をもうけるというやり方もあります」
「川がなければですな」
「そうするのも手でござるか」
「それもまた」
「はい、そうです」
その通りだというのであった。
「堀を用意できるならばですが」
「ではです」
「堀を用意できなければ」
「その場合は」
「それでもやり方はあります」
謙信はその場合についても考えていた。謙信にとって戦いとは幾らでもやり方があるものだ。それは実際に言葉になっても出るもの

だった。
「柵です」
「柵ですか」
「それを用意すると」
「そうすればいいのですか」
「要は馬の足を止めればいいのです」
馬が何故脅威か、その速さと衝撃故である。それがわかっているからこそだった。謙信はその止め方についてさらに話すのだった。
「ですから。柵でもです」
「いいと」
「そうなのですか」
「それに川にしろ柵にしろです」
今度はこの二つを一つにしての話だった。
「それは兵を防ぐことにもなります」
「確かに。そうでございますね」
「堀や柵が前にあれば」
「それでは」
「そうです。馬が進めず兵を守ることにもなります」
それも踏まえてだった。だからこそ堀や柵はいいというのだ。
「馬に足軽で戦うにはそうしたやり方もあります」
「ふむ。馬といえど無敵ではない」
「対するやり方は幾らでもある」
「そういうことですな」
「左様です。しかし馬は大事なものです」
それは変わらないというのだった。
「馬をどう使うか、足軽をどう使うか」
「双方ですか」
「その二つが合わさってこそですか」
「そういうことでございますか」
「そうです。ただ」

ここでだ。謙信の言葉が少し変わった。彼について話すのだった。
「今川殿ですが」
「今川殿ですか」
「あの駿河の」
「あの御仁ですか」
「彼については少し気になります」
謙信の語るその顔もだ。微妙なものになっていた。
そしてそのうえでだ。こう話すのだった。
「今川殿はあまり馬には乗られぬと聞いています」
「どうやらその様で」
「その話は確かだそうです」
家臣達もだ。その話は聞いていた。そのうえでの言葉だった。
「今川殿には失礼ですが足が」
「かなり短いとか」
「そのせいでしょうか」
「それもあるでしょう」
謙信は義元の馬が不得手な理由はその足の短さにあるとだ。謙信もそう思っていた。しかしここで彼はこうも話すのだった。

第二十七話　刺客への悪戯その三

「ですが」
「それだけではないと」
「さらにですか」
「はい。例え足が短くともです」
それでもだとも話すのだった。
「馬に乗れないこともありません」
「ある程度は乗られますか」
「例えそうであっても」
「そうです。ですから今川殿の不得手な理由は」
それは何故か。謙信は話した。
「あの方は十八まで寺におられましたね」
「あっ、確かに」
「そうでした」
「最初は兄君が今川の主でしたが」
「それがでした」
「僧はあまり馬には乗らないものです」
馬に乗るのは武士だ。僧侶にしても公卿にしてもだ。馬に乗らないわけではないがそれでもなのだ。武士程頻繁には乗らないのだ。
それは義元もであった。彼は十八まで僧だった。だとすればだった。
「ですから。そのせいで」
「ううむ、だからですか」
「それであの方は馬に乗るのが不得手だと」
「そうなのですか」
「そうです。馬は武士にとって欠かせぬものです」
謙信の言葉が暗いものになった。
「それが今川殿にとってよからぬものにならなければいいのですが」

「そうですな。輿に乗っておられてもです」
「いざという時は一人で動くもの」
「だとすれば」
「前に進むこともあれば後ろに退くこともあります」
それが戦というものだ。謙信はそのことも話す。
「退く時は一人です」
「その時に馬に乗るのが不得手ならば」
「それだけで危ういものがありますな」
「馬はそうした意味でも大事なのですから」
「その通りです。今川殿には軍師として雪斎殿がおられます」
まさにだ。今川の柱となっている。彼は戦場においても法衣の上に鎧を着て自ら戦っている。只の僧侶ではなく英傑でもあるのだ。
その彼がいる。しかしなのだった。
「ですが雪斎殿がおられない場合は」
「今川殿は一人で動かれなくてはならない」
「そういえば今川殿御自身の武芸も」
「それも」
それについてもだった。彼は普段から蹴鞠や和歌に興じている。個人の武芸もなのだった。今一つはっきりしないものであるのだった。
「御子息の氏真殿は剣は長けておられるようですが」
「御本人はといいますと」
「どうやら」
「大事なのは馬と水です」
謙信はその二つこそが大事だというのである。その二つだとだ。
「動く時は一人なのですから」
「馬に乗ることと水を泳ぐこと」
「その二つですね」
「そうです。私もそれは徹底させていますね」
家臣達を見回す。己の手足である二十五将達だ。

「そうですね」
「はい、確かに」
「その通りです」
その二十五将達もすぐに答えを返してきた。
「殿はまずその二つだと仰いますね」
「馬と水」
「その二つだと」
「そうです、この二つです」
やはりだ。この返答だった。そして謙信はだ。彼のことを話した。
「甲斐の虎もまた」
「武田もそういえば」
「この二つにかなり励んでいるとか」
「あの者もですか」
「だからこそ虎になれたのです」
その虎にだ。なれたというのである。

第二十七話　刺客への悪戯その四

「そうしたことがわかっているからこそです」
「逆に言えばわかっていなければなれなかった」
「そういうことですね」
「そうです。やはり彼は稀代の傑物」
それは認める。何度も刃を交えた相手だからこそ。
「そして他の傑物達も」
「北条ですか」
「相模の獅子ですか」
「彼もまたそうです」
北条氏康もだ。その彼もだというのである。
「他にも安芸の毛利もそうですし土佐の長宗我部もまた」
「西国にも傑物はいますか」
「あの者達が」
「島津もそうだと聞いています」
謙信の目はだ。そこにまで及んでいたのだった。
それを述べながらだ。ここで一人の男の名前も出した。
「そして織田も」
「尾張のですか」
「あの青を好むというあの男もまたですか」
「彼は今上方にいると聞いています」
そのことは既に謙信の耳に入っていた。謙信はただ戦が強いだけではない。情報を手に入れることにもだ。非常に長けているのである。
その謙信の耳にだ。信長が既に上方にいることが伝わっているのだった。
そのことについてだ。謙信はさらに述べた。
「あの終わりの蛟龍もまた傑物です」

「世間の評判とは違いですか」
「英傑なのですか」
「私はそう見ています。何時か言ったと思いますが」
「はい、覚えています」
「そのことは」
家臣達はそれぞれ答える。実際に知っていたのだ。
その中の一人柿崎がだ。こう主に言った。
「尾張を瞬く間に統一し乱も抑えました」
「それもかなり迅速にだったな」
「左様、迅速でござった」
宇佐美にもこう答える柿崎だった。
「少なくとも戦は上手かと」
「いや、戦だけではないようだぞ」
「それもだ」
ここで他の家臣達が言ってきた。
「政も見事だという」
「尾張は非常にまとまっているようだ」
「政もかなりというと」
「やはり」
「蛟龍はやがて龍になるもの」
謙信は遠くを見る目で述べた。
「彼のこれからは注意しておくべきです」
「その織田殿はかなり馬と水が得意だとか」
「相当なものだとか」
「わかっている何よりの証です」
謙信はまた信長について話した。
「動く時は常に。一人なのです」
「その織田と我々は何時か戦うでしょうか」
「それはあるでしょうか」
「果たして」

「あるかも知れません」
謙信はその可能性を否定しなかった。そうしてだった。
その遠くを見る目でだ。こう話したのだった。
「その時は甲斐の虎や相模の獅子に匹敵する相手でしょう」
「そこまで強いですか」
「織田殿は」
「武田や北条と同じだけ」
「後はそれに相応しい力を備えるだけです」
力という言葉も出したのだった。
「そして力は」
「力は」
「どうだというのでしょうか」
「力は後からついてくるものです」
そうだというのだった。

第二十七話　刺客への悪戯その五

「それに相応しいだけの」
「ではやがて織田殿は」
「尾張一国だけでなくですか」
「さらに力をつけられる」
「今以上にと」
「そうです。その時にもしや」
もしやと。言葉にしてだった。
「私と蛟龍は戦うかも知れません」
こう言うのであった。彼はそんな話をしながら上洛していた。そして信長はだ。刺客達のいる宿の前にだ。佐々と共に来たのであった。
真夜中だ。しかし信長はその暗がりの中でだ。楽しげな笑みを浮かべて後ろにいる佐々に対して述べるのであった。
「さて、それではだ」
「今よりですな」
「行くぞ」
こう佐々に告げた。
「よいな」
「わかりました。では」
佐々もだ。不敵な笑みを浮かべて主に返した。
そしてそのうえでだ。二人は同時に前に出た。そのまま宿の中に入る。
それからだった。その部屋の前に来た。するとその中から話し声が聞こえてきた。
「それではだな」
「うむ、今夜だ」
「今夜いよいよだ」

「織田のうつけのところに行きだ」
「けりをつけようぞ」
こうした話がだ。聞こえてきていた。それを聞いてだ。
信長は小声でだ。こう佐々に言ったのだった。
「面白い位に聞こえてくるのう」
「部屋の前ですから当然ではございませぬか」
「それでも無用心じゃ」
見ればだ。信長は咎めるようになっていた。そうして言うのだった。
「こうした話は聞かれてはならぬもの」
「それではですか」
「そうじゃ。最低限の小声で話すものじゃ」
そうだというのである。
「それなのにあんな声で話すとは何じゃ」
「自分達で教えているのと同じですな」
「三流じゃな」
刺客達の位も述べたのだった。
「所詮はな」
「三流でござるか」
「より下かも知れん」
信長の評価は辛辣だった。
「これではのう」
「ううむ、そうした連中では」
「わしを討つことなぞ夢のまた夢じゃ」
また辛辣な言葉を出す信長だった。
「義龍めはこうしたことには長けておらぬようじゃな」
「蝮殿は違いましたが」
「暗殺も芸のうちぞ」
「芸のうちでございますか」
「時として必要な時もある」

信長もそうした謀の必要性はよく認識していた。だからこそ今も伊勢に対して用意周到な調略を仕掛け続けているのだ。平手や森もまたそれを担っているのだ。尾張に残している老臣二人もだ。

「刺客を選ぶのもそれぞ」

「左様ですか。刺客も大事なのですな」

「そういうことじゃ。さて」

佐々にここまで話してだ。信長は姿勢を一旦整えた。

そうしてそのうえでだ。襖を一気に開けたのだった。

がらりという音がした。部屋の中の刺客達がその音に一斉に反応する。

「何じゃ！？」

「誰じゃ！？」

「わしじゃ！」

こうだ。刺客達に対して叫んだ。

彼は襖を開けたまま仁王立ちになっている。後ろには佐々が控えている。

信長は驚く刺客達にだ。こうも言った。

「わしの顔は知っておろう」

「ま、まさか織田が」

「織田信長がここで出て来るというのか」

「我等の前にか」

「これはどういうことだ」

「ふん、わしとてただ手をこまねいているだけではない」

それはないというのであった。

第二十七話　刺客への悪戯その六

「どうじゃ。御主等の狙う者はここにおるぞ」
「くっ、それでは」
「どうする？」
「ここで討つか？」
「そうするか」
刺客達は戸惑いながらもそれぞれ顔を見合わせて話す。彼等は大きく俺を取ってしまっていた。それは否定のしようがなかった。
戸惑いながらも立ち上がろうとする。だが、だった。
信長はここでさらにだ。刺客達に対して言った。
「ほう、わしに向かって来るか」
その刀の柄に手をやっての言葉だった。
「ではやるか」
「うう・・・・・」
怯んだ。しかしすぐに気を取り直してこう話し合う彼等だった。
「相手は二人だ」
「我等は十二人」
「やれるか」
「大丈夫か？」
「数を頼めば」
「それで」
やれるのではないかと思った。それでもだった。
彼等は完全に流れを掴まれていた。信長の思うままに進められている。現に今も立ち上がることすらできない。全員戸惑ったままだ。
その彼等に剣を抜こうとする信長だった。
そしてだ。こう彼等にまた告げた。
「さあ、どうする」
「斬るか」

「さすれば褒美は思いのままだ」
「しかし。これでは」
「前に出ても」
「御主等を全て斬ることなぞ容易い」
信長は余裕の笑みでこうも告げた。
「わし一人でもな」
立ち上がろうとするとその間に斬られることは間違いなかった。
信長の全身から覇気が起こり彼等を圧倒している。最早どうしようもなかった。
それでだった。信長はここで止めを刺してきた。
「来ぬのか！」
「うっ！」
「来ぬのならこちらから行くぞ！」
こう叫ぶとだ。彼等は完全に固まってしまった。最早動くことはできなかった。
その彼等を見てだ。信長は勝ち誇った声で言った。
「ふん、一人も動けぬようじゃな」
「くっ、何という男だ」
「まさか我等の前に自分から現われるとは」
「何という肝の持ち主だ」
負け惜しみだった。それ以外の何者でもなかった。
だがそれを言わずにはいられずだ。彼等は窮してしまっていた。
信長は彼等が完全に動けなくなったのを確かめ。その彼等にこの言葉を告げたのであった。
「美濃の大男に伝えておけ」
「義龍様に」
「何と」
「御主等程度の刺客ではわしを倒せぬとな」
伝えろというのはこのことだった。
「それこそ飛び切りの刺客を出して来いとな」

「・・・・・・・・」
刺客達は項垂れ沈黙してしまった。信長の奇襲と気迫の前にだ。何もできなかった。こうして堺での刺客達は信長自身が退けたのだった。それも刀を抜くことなく。
刺客達は何も出来ず信長が悠々と帰るのを見届けるだけだった。そうして信長はだ。自分達の宿への帰り道でだ。こう佐々に話すのだった。
「これでよしじゃな」
「もう一度刺客が来るかも知れませんが」
「まあ来るじゃろうな」
それはもう読んでいるというのだった。
「しかしじゃ。今はこれで終わりじゃ」
「これで、ですか」
「そうじゃ。大したことはなかったのう」
「まさかと思いますから」
怪訝な顔でこう述べる佐々だった。

第二十七話　刺客への悪戯その七

「殿が。ああして自分達の前に出て来るとは」
「思わぬか」
「その通りでございます」
まさにそうだというのである。
「それがしも驚きました」
「だからこれは悪戯よ」
「それはもう聞いていますが」
「それをしたまでじゃ」
こう素っ気無く言う信長だった。
「それだけではないか」
「それだけでござるか」
「そうじゃ。それでじゃ」
「それでとは」
「後は。上洛じゃな」
いよいよそれだというのである。
「都にあがるか」
「遂に、ですな」
「はじめての都じゃな」
「はい」
佐々は信長のその言葉に頷いて返した。
「まさにです」
「そうじゃ。はじめてじゃ」
「して殿」
佐々はここでまた主に対して言う。
「都ですが」
「やはり荒れておるか」
「残念ですがそれは確かなようです」

こう話すのだった。
「それもかなり」
「応仁の乱から。延暦寺が暴れ続けてじゃな」
「都の周りでの戦も止みませんでしたし」
「しかしとりわけ延暦寺じゃな」
「あの者達の横暴は目に余るようです」
実際にだ。佐々は話しながらその顔を顰めさせていた。
「何かあると都に押し入り暴れ回ってです」
「都はその都度荒れじゃな」
「とにかくしたい放題だとか」
「平安の頃から変わらぬな」
そこまで聞いてだ。信長はその顔を顰めさせた。
「何一つとしてな」
「白河院もどうにもできなかったという」
「院や帝ですらな」
「鎌倉幕府も敗れています」
幕府もだった。彼等にしてもなのだ。
「そういう者達ですから」
「しかしじゃ」
「しかしとは」
「あのまま好き勝手にさせておく訳にはいかんな」
信長の顔が闇夜の中で険しいものになった。
「それでもじゃ」
「しかし。あの者達は」
「どうにもできんか」
「延暦寺です」
佐々が言う根拠はここにあった。
「あの寺に対しては。流石に」
「どうにもできぬというのじゃな」
「ですから。今まで」

「どうかのう。そう思っていてもじゃ」
「違うというのでございますか」
「世の中できんと思っていても実際はできることが多い」
そうだというのだった。
「だからじゃ。延暦寺にしてもじゃ」
「できるやもというのですか」
「いや、せめばならん」
言葉は強かった。さらにだ。
「是非共な」
「あの者達の横暴を止めると」
「それで困るのは誰じゃ」
信長が問うのはこのことだった。
「誰が困るのじゃ。言ってみよ」
「民でござる」
佐々は即答した。彼にしても尾張において政に携わっている。それで民の為に働いているからだ。だからこそ言えることであった。答えられることだった。

第二十七話　刺客への悪戯その八

「あの者達がです」
「では許せることかどうかわかるのう」
「許せませんな」
佐々はまた厳しい顔になって述べた。
「決して」
「そうじゃ。民の為じゃ」
また言う信長だった。
「あの者達は放ってはおけん」
「ではやがては」
「わしも好んで戦はせぬ」
必要だからこそする。それが信長の戦への考えだった。避けられぬならば避ける、それは信行の時にも見せた彼のやり方である。
「だからじゃ」
「それで、でございますか」
「そうじゃ。あくまであの者達次第じゃ」
その延暦寺の者達次第だというのである。
「それを決めるのはじゃ」
「行いをあらためれば」
「何もせぬ」
それは確かだというのであった。信長の言葉もぶれない。
「僧として然るべき行いをしていればじゃ」
「しかしそうでなければ」
「容赦はせぬ」
そういうことだった。
「決してな」
「ですがそれをすれば誰もが怯えますが」
「延暦寺とことを構えればか」

「はい、そうなろうともですね」
「それでもやらねばならなければやる」
断固とした口調だった。やはりぶれない。
「天下の為にはな」
「天下万民の為に」
「そういうことじゃ。さて」
ここまで話してだ。また言う信長だった。
「そろそろ宿じゃな」
「はい、そうですな」
「飲むのじゃな、また」
佐々にだ。酒を飲むのかと尋ねた。
「そうするか、今宵も」
「そのつもりでございますが」
「では飲むがいい。御主達はな」
「殿はいつも通りでございますか」
「うむ。わしは酒はよい」
それはだというのだった。相変わらず酒は飲めない信長だった。
そのうえでだ。佐々に対してさらに話すのだった。
「茶か水を飲むとしよう」
「茶でござるか」
「やはりあれはよい」
茶についてはだ。笑顔で話す信長だった。
「飲んでおると落ち着くしのう」
「それがしも茶ははじめておりますが」
「よいものであろう」
「はい、確かに」
こう答えるのだった。
「茶も。あれで」
「酒だけでは面白くあるまい」
「確かに。茶もあればさらによいですな」

「そういうことじゃ。さて」
信長は宿の門をくぐった。佐々もそれに続く。そうしながらまた話す。
「では。土産話でもな」
「しますか」
そんな話をしてだ。彼等は宿に帰ったのだった。
そうしてそのうえでだ。彼等は刺客達の話をする。その夜はそれで盛り上がった。
信長達にとってはいい話だった。しかしだ。
義龍にとってはそれは正反対だった。義龍は家臣達に怒気を見せていた。
そのうえでだ。家臣達に対して言うのだった。
「どういうことじゃ。それは」
「まさか。あれが失敗するとは」
「あっさりと見抜かれてしまったようです」
「あのうつけがわざわざ出向いて一喝したとは」
「予想外のことです」
「あのうつけ、たわけたことを」
義龍は不機嫌を露わにさせていた。そうしてさらにこう言うのであった。

第二十七話　刺客への悪戯その九

「しかしじゃ。そうもあろうかとじゃ」
「はい、もう一陣あります」
「その者達ならばです」
「必ずやってくれます」
「その言葉信じさせてもらうぞ」
義龍は厳しい顔のままで述べた。
「是非共な」
「いえ、殿」
だが、だった。ここで異議を呈する者がいた。
その者はだ。その場からこう主に話してきた。
「次もです。果たせぬでしょう」
「半兵衛か」
竹中だった。彼が言ったのだった。
「そなたは果たせぬというのか」
「はい、どうやら我等の動きは全て織田殿に見抜かれています」
「全てというか」
「はい、全てです」
まさにその通りだというのである。
「ですから次もです。間違いなく」
「ではそなたはじゃ」
義龍はその竹中に対して問うた。彼を見据えながら。
「どうすればよいというのじゃ」
「織田殿に小細工は通じませぬ」
「では止めよというのか」
「はい、それはしても無駄です」
また言う彼だった。
「ですからここはです」

「刺客達を戻せというのか」
「しても無駄なことはしないに限ります」
見切ったような言葉だった。まさにそういったものだった。
「ですから。今すぐにでもです」
「馬鹿な、次こそはいける」
「織田も刺客が二度も来るとは思っていまい」
「それならばじゃ」
「今度もいける筈じゃ」
だが、だった。義龍の周りの者達は口々にこう言うのだった。そしてそのうえでだ。竹中に対して咎める様な口調で言うのであった。
「そなたは織田を買い被り過ぎておる」
「あのうつけの何を見るのじゃ」
「そうじゃ、見誤っておるわ」
彼等のこうした言葉を受けてだ。義龍も言うのだった。
「そうじゃな」
「殿もそう思われますな」
「あの者はただのうつけ」
「今度はまぐれでございます」
「それならば」
「そうじゃ。今度はやれる」
義龍こそ美濃で最も信長を軽んじている者だった。それならばだ。こう言うのも道理だった。
その彼がだ。決めたことは。
「続ける」
「はっ、わかりました」
「それではこのまま」
「刺客達を向かわせましょう」
家臣達も頷いてだった。結局刺客達はそのまま放たれることになった。だがこの場には竹中だけでなく三人衆、それに不破もいた。
彼等は自分達の部屋に戻ってからだ。五人であらためて話をするの

だった。
「あの刺客達はだ」
「うむ、そうだな」
「成功せん」
「失敗するに決まっておる」
三人衆が不破のその言葉に応えて述べた。稲葉山の一室での話である。
「織田殿は既に刺客のことを読んでおるぞ」
「だから堺でしくじったのだ」
「それでまた送ったとしても」
「そうじゃな。しくじる」
不破は袖の中で腕を組み難しい顔で述べた。
「そうなるしかない」
「殿はそれがおわかりになられぬか」
「政や戦は中々のものだが」
「謀はか」
三人衆はそこに義龍の限界を見た。謀を不得手とするところにだ。

第二十七話　刺客への悪戯その十

「それでは。結局のところは」
「この美濃一国までか」
「それ位の方か」
こう見るのだった。しかもだ。
安藤がだ。こんなことも言った。
「しかも御子息はな」
「そうじゃな、龍興様はあれでは」
「話にならん」
稲葉と氏家も安藤のその言葉に頷く。無論不破もだ。
「あの方が美濃を継がれたら最早な」
「武田に獲られるか朝倉に獲られるか」
「若しくは六角か」
斉藤の敵は多い。これも事実だった。彼等の敵は織田だけではないのだ。
「どちらにしろ暗澹たるものだな」
「少なくとも我等が仕えるに相応しい方ではない」
「それは間違いないな」
「そうじゃな」
三人衆と不破、合わせて四人衆がそれぞれ話していく。
「しかし。あくまであのままだとだ」
「大きくなられてはわからんが」
「そうじゃな」
「まだ見るべきか」
「それではです」
これまで黙って四人の話を聞くだけだった。竹中がこの場ではじめて口を開いた。そうしてそのうえでだ。彼は四人に対してこう話したのだった。

「一度それがしがしてみせます」
「してみるとは」
「一体何をじゃ？」
「何をするつもりじゃ？」
「少し悪戯を」
まずはこう言うのであった。
「織田殿の様に」
「あの御仁の様にか」
「するというのか」
「はい、左様です」
その通りだとも言うのであった。
「どうもあの方のああしたところを真似てみたくなりました」
「刺客達のところにわざわざ顔を出したそうじゃしな」
氏家がそのことを話した。
「それで奴等を驚かせて退散させたとか」
「普通そうしたことはせんからな」
稲葉もそのことについて言及した。
「普通刺客の場所がわかれば手の者をやって始末する」
「左様、わしでもそうする」
それは氏家もだった。だからこその言葉だった。
「そうしてあっさりと終わらせるわ」
「そうじゃな。しかし織田殿は」
「あえてそうしたのう」
安藤も話す。そのことをだ。
「自分で顔を出して驚かせた」
「悪戯じゃが」
「かなりの胆力がないとできんぞ」
「そして自分がその場合殺められぬという読みがなければ」
「とてもできんな」
「全くじゃ」

三人衆にもだ。このことはよくわかった。自分ができるかと自問自答すればだ。誰もそれは無理だった。それがわかるからっこそだった。

「とてもな」

「できるものではない」

「わしもじゃ」

こう言うのだった。まさにその通りであった。

不破もだ。三人と同じであった。

「織田信長、わしの見た以上の者か」

「それがしもそう思います」

竹中はここでは真剣な顔であった。先程までの悪戯を話す顔ではなくなっていた。

「あの方はやはり」

「そうじゃな。間違いなくじゃ」

「ですが。まだ読みたいと思います」

竹中は冷静な声で述べた。

「もう暫しです」

「暫しか」

「もう少しか」

「あの御仁を見るのか」

「やがて今川も攻めてきます」

尾張にという意味である。

第二十七話　刺客への悪戯その十一

「それにどう対するかです」
「ふむ。今川に敗れれば」
「織田は終わりじゃな」
「それで」
三人衆は今の竹中の言葉に考える顔になった。そしてそのうえでまたそれぞれ言った。
「ではそれをどう凌ぐか」
「そして生き残るか」
「それを見届けてからか」
「そうするのじゃな」
「いえ、まだ先を見ようと思っています」
不破も含めた四人にだ。竹中はまた話した。
「まだ先をです」
「まだ見るというのか」
「今川との戦の後も」
「さらにか」
「はい、そうします」
竹中はその言葉に己の意志を入れていた。そのうえでの言葉だった。それをまた話すのだった。
「まだ先をです」
「では織田殿は今川には勝つか」
「そう見ておるのだな」
「おそらくは」
断定はしない。しかしそうだと答える竹中だった。
「勝たれるでしょう」
「今川は二万五千の兵がおる」
稲葉はその兵の数を述べた。

「天下でもかなりのものだが」
「そうじゃな。一口に二万五千といってもじゃ」
安藤もその数について言う。それがかなりの数であることは言うまでもない。
「それだけの数が一度に来るとのう」
「美濃でも危ういぞ」
氏家もだ。その数を甘く見てはいなかった。そのうえでの言葉だった。
「対する織田は一万五千」
「兵で劣るのは否めまい」
「しかし勝つか」
「そう言うのじゃな」
「確かに数は重要です」
竹中は四人にまた述べた。
「しかしそこに将の質や装備もあります故」
「鉄砲や槍か」
「それもか」
「そして地の利もあります」
それについてもだ。竹中は話した。
「少なくとも尾張での戦になればです」
「地の利は織田殿にある」
「そういうことじゃな」
「はい、勝機は充分にあります」
竹中は冷静に述べる。その口調から彼が決して信長を贔屓していないことがわかる。あくまで客観的に見てそのうえでの話なのだ。
「織田殿にも」
「だからその後も見るのか」
「今川に勝つことはそのうちの一つに過ぎん」
「そういうことじゃな」
「その通りでございます。我等が決める時は」

何時なのか。竹中はさらに話す。
「それは織田殿が天下を確実に収められる方と見極めた時でございます」
「それではじゃ」
不破が竹中の今の言葉に応えて述べた。
「その見極めはそなたに任せてよいな」
「そうさせてもらえるのですね」
「御主程の者が見極めればじゃ」
不破はまた言った。
「わしは異論はない」
「わしもじゃ」
「うむ、わしもだな」
「わしもそうさせてもらおう」
安藤、稲葉、氏家もそれでいいと答えた。
「是非共な」
「有り難うございます」
竹中はその三人に対して礼を述べた。それが何故かも話すのだった。
「それがしに任せて頂き」
「それだけの者だからじゃ」
こう答えたのは不破だった。
「御主がな」
「だからですか」
「そうじゃ。そうでなければじゃ」
「うむ、最初から言いはせぬ」
「決してな」
それを稲葉と氏家も話した。そして安藤もだった。
「信頼しておるということじゃ」
「それがしをですか」
「その通りじゃ。それにじゃ」

「うむ、織田殿は美濃から見ているだけでな」
「中々面白い御仁じゃ」
「見ていて飽きぬ」
こうだ。信長に対しても話した。語るその目は確かなものだ。
こう話す彼等であった。そしてだ。彼等をまとめて安藤が述べた。
「我等の配下も納得してくれるじゃろうな」
「そうじゃな。あの者達にも話しておこう」
「大殿のお言葉を述べてな」
「そうしてじゃな」
ここで道三の名前も出た。やはり彼の存在は大きかった。
「ついてくる者はよし、残る者はよし」
「そうしていこうぞ」
「左様じゃな」
こう話してだった。彼等はこれからのことを考えるのであった。
美濃でもだ。見ている者は見ていた。そうして考えていたのだった。

第二十七話　完

２０１１・２・１０

第二十八話　都にてその一

第二十八話　都にて

信長は遂に都に入った。その都はというと。

「ううむ、応仁の乱から結構経っていますが」

「その後の戦乱もありましたが」

「どうも荒れたままですな」

「全くです」

まずは家臣達がだ。怪訝な顔で話すのだった。都とはいってもあちこちが荒れたままになっている。粗末な家が多く壁も壊れている。商人の店もだ。どれも覇気がない。それを見て話す彼等だった。

「これではです」

「堺とは比べようもありません」

「奈良の方が栄えているのでは」

「いや、これでは」

今言ったのはだ。福富であった。彼が怪訝な顔で話すのであった。

「尾張の街の方が」

「確かに。この有様では」

「これが都でございますか」

「酷いものですな」

「そうじゃな」

信長もだ。ここで言うのであった。彼も家臣達と同じ顔になっている。

「やはり三好の家の中での争いと延暦寺が暴れておるせいじゃな」

「そのせいでございますか」

「それでここまで荒れているのでござるか」

「戦乱のせいで」

「そうだ。それにじゃ」

理由はまだあるとだ。信長は話した。

「治める確かな者もおらん」
「肝心の幕府があの有様でございますからな」
万見が難しい顔で述べた。
「かろうじて生き残っている様なものでございますからな」
「左様じゃ。公方様もな」
信長は将軍について言及した。
「己の剣の腕を磨いておられるが」
「そこに何があると」
「そうなのですか」
「そうじゃ。将軍を御護りする者はおる」
「はい、確かに」
「そういった者は必ずいます」
これは家臣達もよくわかった。
「我等もですし」
「殿を」
「そうじゃ。剣はそういった者達が持つものじゃ」
まさにそうだとだ。信長はまた話した。
「絶対似せねばならんのは馬と水練だけよ」
「その二つでございますか」
「馬と水だと」
奇しくもだ。謙信と同じ話になっていた。だが彼等はそのことは知らない。だが話すことは全く同じことであった。
「それでありますか」
「二つでございますか」
「人間いざという時は一人よ」
やはりだった。言うことは同じだった。
「逃げる時はな」
「将軍とて逃げなくてはならない」
「そうならばですか」
「剣よりも馬と水」

「その二つだと」
「そうじゃ。そして公方様御自ら剣を持たれてもそれを止められぬ」
このことも問題だというのだ。信長の見るものはやはり深い。
「そうした有様にこそじゃ」
「幕府の今がありますか」
「そのどうしようもない状況が」
「治める都ですらこうですし」
「それが」
「そういうことじゃ。残念じゃがな」
こう述べるのであった。そしてであった。
信長はだ。一旦宿に入った。そこである話を耳にしたのであった。
「越後からも来ておるか」
「はい、上杉がです」
「来ております」
家臣達がそれぞれ信長に話す。
「主の上杉謙信自らです」
「来ています」
「この都に」
「ふむ。上洛してきているとは聞いていたが」
それを聞いてだ。信長は考える顔になった。そのうえでの言葉だった。

第二十八話　都にてその二

「しかしじゃ」
「しかしでございますか」
「かち合うのはでございますな」
「考えておられませんでしたか」
「うむ、そうなるとは思っておらんかった」
実際にそうだとだ。信長は話すのだった。
「しかしこれもじゃ」
「これも？」
「これもといいますと」
「面白いのう」
見ればだ。信長の笑みは楽しげなものになっていた。
「それもまたな」
「越後の龍と会うことがですか」
「それがですか」
「面白いというのですか」
「そうじゃ、考えてみれば面白い」
また言う信長だった。
「どうした者かと思うとな」
「軍神と聞いております」
林通勝が述べた。
「今だかつて負けを知らぬという」
「あの武田とも引き分けております」
柴田も言う。
「まさに毘沙門天の化身かと」
「らしいのう」
「とにかく無類の強さを発揮します」
「武田と上杉じゃな」

信長は柴田の話が一旦途切れたところでこう述べた。
「この二つの家とはじゃ。いや」
「いや？」
「いやとは」
「武田信玄と上杉謙信じゃな」
家から人に話を移したのだった。具体的には両家の当主であるこの二人だ。言わずと知れた天下で最も恐れられている二人である。
「この二人にはじゃ」
「そうは勝てませぬ」
「関東を制している北条ですら正面から戦おうとはしませぬ」
「あの相模の獅子ですら」
「北条氏康はあの二人と互角に戦える」
信長は氏康はこう評した。かなり高い評価と言える。
「実際にこれまで双方とそれぞれ戦ってきておるな」
「そのうえで敗れていません」
「流石と言うべきです」
「伊達に河越で勝ってはおりませぬか」
「そうじゃ。北条氏康も傑物じゃ」
信長はまた氏康を高く評した。その言葉には何の歯切れの悪さもなかった。
「しかしその相模の獅子でもじゃ」
「あの二人には勝てはしない」
「そういうことですか」
「そうじゃ。勝つにはまだ足りぬ」
「足りぬといいますと」
木下が主の今の言葉を聞いてだ。すぐにこう言ったのであった。
「兵と将ですな」
「わかるようじゃな、猿は」
「後は。武田や上杉の騎馬にも勝るものが必要ですな」
「その通りじゃ。まずは兵の数と将の質で圧倒する」

それからだというのであった。
「兵はそれだけの数を集める」
「武田、上杉の強兵に対することができるだけの兵」
「それだけをでございますか」
「戦の多くは数じゃ」
信長は戦の基本をここで述べた。
「兵が多く油断しておらぬ方が勝つ」
「だからこそでございますか」
「まずは数」
「兵の数でござるか」
「そうじゃ。如何に強い兵とて一度に三人の相手はできぬ」
これはまさにその通りだった。そうした意味でも数であった。

第二十八話　都にてその三

その数についてだ。信長はさらに話していく。
「尾張の兵が弱くともじゃ」
「数があればですな」
「強兵にも対することができる」
「そういう意味もござるか」
「そうじゃ。何はともあれ数じゃ」
それが一番大事だというのであった。
「数は力じゃからな」
「ではこれからさらに力をつけ」
「数を増やし」
「そうして武田や上杉に対する」
「そういうことでござるか」
「左様じゃ。そしてじゃ」
兵の数の次はであった。
「将じゃが」
「あの武田信玄に上杉謙信」
「それに対するのですな」
「わしはやる」
今度はだった。信長はその覚悟を見せたのであった。
「あの二人よりさらに上になるぞ」
「あの二人を超えると」
「そう仰いますか」
「そうじゃ。蛟はやがて空に昇るものじゃ」
己の仇名をだ。自ら言ってみせたのだった。
「そしてそのうえでじゃ」
「将としても超える」
「そうされますか」

「そのつもりじゃ。してじゃ」
彼だけではなかった。さらに言うのであった。
「御主達もじゃ」
「我等もですか」
「超えよと」
「さらに上を目指せと仰るのですか」
「武田の二十四将も上杉の二十五将もじゃ」
どちらもだというのである。その両家の誇る将達をだというのだ。
「超えてもらう。そしてそなた等ならできる」
「我等ならと仰いますか」
「あの者達を超えられる」
「そう」
「そうじゃ。わしが見込んだ者じゃぞ」
彼等を見ての言葉だった。
「そこまでなれる、絶対にな」
「なれますか」
「我等も」
「そこまで」
「そうじゃ。なれる」
また話す信長だった。
「だから安心せよ」
「してですか」
「その兵と我等であの両家に向かう」
「その時はでござるな」
「そうじゃ。ただしそれでも足りん」
信長は先程の話の続きをした。
「両家の武器である馬もな」
「それもでございますか」
「馬をどう封じるか」
「それもでございますか」

「他にも足軽も止めねばならんがな」
まずはその馬だというのだった。

第二十八話　都にてその四

「とにかくじゃ。その策も用意してじゃ」
「そうして当たる」
「そのおつもりですか」
「あの両家を倒さなければ天下はない」
その織田の天下もだ。それもだというのだ。
「無論その前に相手にせねばならん家も多いがじゃ」
「とりわけ武田と上杉」
「その両家」
「そして虎と龍」
「その二つでござるか」
「最大の敵じゃな。大名としては」
ここでだ。信長は彼等を限定したのであった。
「大名ではこの二つじゃ」
「さて」
家臣達はその言葉を聞き逃されなかった。佐久間重盛がすぐに言ってきた。
「そこで大名と言われますか」
「大学、気付いたな」
「我等の敵は大名達だけではありませぬか」
「国一つを治めるにしても様々な者がおる」
信長はその国の中についても述べるのだった。
「国人もおれば商人もおるな」
「そうした者達が敵に回ればでござるか」
「厄介だと」
「そう仰るのですね」
「そうじゃ。奴等を敵に回さぬこと、回す時はどうするか」
その二つの場合を述べるのだった。

「それよ」
「国の中もでございますか」
「国人も商人もいれば」
「他には乱破もありますな」
「忍の者達も」
「他には海賊がいたりしますな」
「そうした様々な者達をじゃ」
家臣達がそれぞれ話したところでだ。信長はまた話した。
「どうするかじゃ」
「それでございますか」
「我等の相手はそうした者達もでございますか」
「尾張でもそうじゃったな」
具体的にだ。彼等のその国のことを話すのだった。
「国人や商人達をまとめるのはどうじゃった」
「いや、それは中々」
「かなり苦労しました」
「何かと我儘を言う連中ですし」
「全く。骨が折れました」
そのことを思い出してぼやく彼等の中でだ。蜂須賀がこう言った。
「それがしなどはその国人でござるが」
「そういえばそうじゃな」
「御主は殿にすぐについたが」
「そうした国人ばかりではないからのう」
「中々。奴等は」
「一筋縄ではいかぬ」
「そういうことじゃ。国人にしろそうじゃ」
その彼等のことをまた話す信長だった。
「わしの政に組み入れ検地により石高を完全に定めさらに組み入れておるがな」
「その為の検地でもありますからな」

「あれは」
ここに信長の政の妙があった。彼は検地により国の確かな石高を確かめると共にだ国人達の力を把握しそのうえで彼等を監視下に置きその政に完全に組み入れる、そうしてきているのだ。
それを話してだ。また話す信長だった。
「それで国人を抑え商人達はじゃ」
「楽市楽座で自由に商いをさせ」
「そのうえで街を栄えさせると共に」
やはりここでもなのだった。

第二十八話　都にてその五

「力のある豪商や座の力を削ぐ」
「そうしておりますから」
「それが全て国を栄えさせ織田の力も強めるのじゃ」
検地も楽市楽座もだ。そうした意味でまさに一石二鳥の政策だったのである。信長は尾張をそうして万全に治めているのである。
そしてそのうえでなのだった。
「開墾に治水に道に町作りでござるな」
「尾張はまさに見違えました」
「それは国人や商人も抑えたからこそ」
「だからでございますか」
「敵は外だけでなく中にもおる」
家臣の裏切りをさすことの多い言葉だがここでは意味が違っていた。
「そういうことじゃ」
「その為の政でもありましたか」
「成程、ただ政をして国を富ますだけではない」
「そうしたこともでござったか」
「そうじゃ。国の中はそうしていく」
治める国の中はというのであった。
これで信長の話が終わりかというとだ。そうではなかった。
ここでだ。彼はこれまで以上に顔を曇らせてだ。こんなことを言ったのであった。
「もしやな。一番厄介な相手やもな」
「一番といいますと」
「それは一体？」
「何者でございますか」
家臣達にはだ。これがわかりかねた。

「厄介とは」
「大名や国人よりもとは」
「その相手は」
「坊主じゃ」
それだというのであった。
「あの連中じゃ」
「では延暦寺や本願寺」
「ああした者達でございますか」
「僧兵達や一向宗だと」
「立ちはだからぬのならよい」
その場合はだ。いいというのであった。
「だが。立ちはだかるならばじゃ」
「その場合はでございますか」
「厄介だと」
「そう仰るのですか」
「そうじゃ。加賀を見よ」
守護が倒されだ。今では百姓の持ちたる国と言われている。その実態は一向宗の僧達のものとなっている。そうした国になっているのだ。
「その周りの越前にしてもじゃ」
「一向宗に散々にやられておりますな」
「あの上杉もてこずっておりますし」
「特にこの近畿は」
石山にその本願寺がある。彼等の勢力が最も強い場所でもあるのだ。
「本願寺に延暦寺」
「興福寺もありますな」
「寺が多くあります」
「その者達が相手になると厄介じゃ」
また言うのであった。

「坊主はな」
「僧兵だけではなくですか」
「一揆もですか」
「確かに考えていきますとですな」
「厄介な者達です」
「そうじゃ。だが必要とあらばじゃ」
どうかとだ。信長はさらに話していく。
「あの者達が相手でもじゃ」
「戦われますか」
「そうされるのですか」
「そうじゃ、わしはやるぞ」
信長はその決意も口にしてみせた。
「わしが天下の為に為すことに延暦寺や本願寺が立ちはだかるならばじゃ」
「その時はでございますか」
「あの者達とも戦われると」
「延暦寺であろうが本願寺であろうが」
彼等も信長の決意に目を鋭くさせる。そしてその中でだ。

第二十八話　都にてその六

佐久間がだ。ゆっくりと口を開いてだ。こう主に対して問うた。
「ですが殿」
「何じゃ牛助」
「延暦寺は護国の寺です」
まずはそこから話すのだった。
「伝教太師が開山しそれ以来長い歴史と多くの高僧を出している寺ですが」
「そうであるな」
「その寺をでございますか」
こう信長に問うのであった。
「いざとなれば」
「伝教太師の頃は確かに立派じゃった」
その佐久間に対してだ。信長はまずは静かに述べた。
「そして長い歴史があるのも確かじゃ」
「はい」
「そして多くの高僧を生み出しまた数え切れぬだけの宝もある」
「左様でございます」
「そなたの言うことも一理ある」
ここまで話した。佐久間の話を聞いたうえでだ。
そしてそのうえでだ。信長はあらためて言った。
「しかしじゃ。今はどうじゃ」
「今はでございますか」
「そなたは延暦寺の歴史は知っておるな」
「はい、多少は」
謙遜してこう述べるが実際には延暦寺のことはかなり知っていた。
佐久間は織田家においては博識ということでも知られているのである。

「ではじゃ。延暦寺が平安の頃より何をしてきたかも知っておるな」
「僧兵でございますか」
「そうじゃ。あの連中がどれだけのことをしてきた」
信長は佐久間に対して問うた。
「知っておろう」
「そして妻帯に肉食をでございますか」
「その延暦寺に徳があるか」
「そう言われますと」
「ないな」
佐久間の目を見て問うた。
「そうじゃな」
「否定できませぬ」
佐久間は顔を俯けさせた。そのうえでの言葉だった。
「それはやはり」
「そうじゃな。延暦寺が行いを正せばそれでよいがじゃ」
「そうでなければでございますか」
「そうじゃ。その場合は仕方がない」
「左様でございますか」
ここまで聞いてだ。頷く佐久間だった。
そうしてだった。彼はあらためて言ったのだった。
「延暦寺の徳は最早ありませぬか」
「残念なことにじゃ。坊主は潔白でなくてはならんが」
「しかしそうはいきませぬか」
「そうじゃ。それが現実じゃ」
「難しいものでございますな」
佐久間のその声が唸っていた。そうした声になっていた。
そんな話をしていた。その次の日であった。
信長達が将軍の元に向かっていた。その時だった。
一行の前にだ。僧兵達がいた。見れば神輿を担いでいる。佐久間がそれを見て言った。

「強訴をしておるな」
「そうでござるな」
「そうしてそのうえで要求を飲ませますか」
「平安の頃からですな」
「ああしているのは」
「昨日言ってすぐじゃな」
信長も馬上でだ。それを見て言った。
「いい時にと言うべきか」
「そうですな。しかし我等の進む先にいるとなると」
「どうされますか、それで」
「あの者達は」
「どうされますか？」
「知れたこと。このまま進む」
これが信長の返答だった。

第二十八話　都にてその七

「あの者達は相手にするな」
「向こうから来ればどうされますか」
「その場合は」
「こちらは」
「変わらん。このまま進む」
信長の言葉は変わらない。
「よけることはない」
「そうされますか」
「このままでござるか」
「進まれますか」
「そうじゃ。よいな」
また告げる信長だった。
「このまま進むぞ」
「では殿」
金森が鋭い目になって信長に問うてきた。
「あの者達が歯向かって来た場合は」
「その場合はか」
「あの通り。既に得物は持っております」
見れば彼等はそれぞれ薙刀なり金棒なりを持っている。その威力がどういったものかは見ただけでわかる。僧兵は得物もいいのだ。
「向こうはいざとなれば」
「その場合はわしも自ら剣を抜く」
信長もだった。その目が鋭いものになった。
「そうする」
「そこまでお覚悟を」
「何時でも何に対しても覚悟はしておくことじゃ」
実にだ。信長らしい言葉であった。

「今も同じじゃ」
「では」
「このままでございますな」
「進まれますか」
「そうじゃ。進むぞ」
言葉にも行動にもだ。何のぶれもなかった。
そしてそのまま進む。それを見てだ。
僧兵達もだ。覆面の奥の目を鋭くさせて言うのであった。
「あの者達は何じゃ？」
「やけに青い服じゃのう」
「青というとじゃ」
僧兵の中の一人がここで言った。
「織田かのう」
「織田というと尾張のか」
「あのおおうつけか」
「そういえば今この都に来ておるというが」
「あの織田か」
僧兵達は信長についてだ。あれこれと話をはじめた。
「それで我等を見てもそのまま進むのか」
「我等を延暦寺の僧兵と知らないのか？」
「いや、知ってだとするとだ」
「あの男、何処までうつけなのだ」
「まさにおおうつけなのか」
信長をそうとしか見ていなかった。そうしてそのうえでだ。
彼等はだ。また話をするのであった。
「どうする、それで」
「あのうつけとぶつかるか」
「そうするか」
「そしてぶつかれば」
その時はどうするのか。それも話すのだった。

「相手をしてやるか」
「そうだな。我等の力見せるとしようぞ」
「延暦寺の僧兵の力をな」
ただ仏の権威を背にしているだけではなかった。彼等はどれも大柄でしかも筋骨隆々としている。その力も腕もかなりのものなのだ。
「武蔵某弁慶を生んだのも延暦寺ぞ」
「その延暦寺の僧兵の力見せてやるか」
「我等には平家も鎌倉幕府もおいそれと手を出せなかったのじゃ」
「今の幕府もな」
とかくだ。都の傍に勢力を張りだ。時の権力者達を悩ませてきたのがこの延暦寺の僧兵達なのだ。それ故に彼等は自信に満ちている。その自信を確かめてだ。あらためてであった。
彼等は信長一行を見据える。そのうえで進もうとする。
いかしであった。その彼等のところにだった。

第二十八話　都にてその八

一人の僧兵が来てだ。こう彼等に告げるのであった。
「おお、そこにいたのか」
「むっ、何だ？」
「どうしたのだ？」
「すぐに寺に戻るぞ」
その僧兵が彼等に告げた言葉だった。
「よいな、すぐにだ」
「何があった？」
「寺で何かあったのか？」
「座主殿がだ。我等を集めだ」
そうしてだというのだ。
「三好や松永に備えるというのだ」
「三好に松永か」
「あの連中とか」
「そうだ、あの連中とだ」
彼等から見ればだった。大名達も連中であった。
「どうも最近あの連中の動きが不穏になってきたとかでな」
「そうか、わかった」
「それではな」
「では織田は放っておくことにするか」
まだ彼等の方に進んでくる信長を見ての言葉だ。
「所詮尾張の一大名だしな」
「そのうち今川にでもやられて滅びる」
「放っておくか」
「そうするか」
こう話してであった。彼等は信長から視線を離してだ。
その場を後にする。それでその場は何も起こらなかった。

去る僧兵達を見てだ。家臣達はそれぞれ話すのだった。
「去ったな」
「そうだな」
「逃げた訳ではないようだがな」
「何はともあれ衝突はなかったな」
「ふむ。おおかた何処かの大名や国人に備えてであろう」
信長は完璧ではないがそこまで見抜いていた。
「それだな」
「それでなのですか」
「僧兵達を寺に呼び戻した」
「それでなのですか」
「そういったところじゃな。もっともぶつかったその時はじゃ」
信長の目が光った。鋭い光だった。
「わしも相手をしておったがな」
「殿御自身がですか」
「剣を抜かれていましたか」
「その時は」
「そうしておった。弓もあるしのう」
鞍にあるその弓を見る。信長は刀よりも弓や槍の方を得意としておる。そういったものの方が剣よりも役に立つからである。身に着けたのだ。
「それで射抜いておったわ」
「戦う時は容赦しない」
「そういうことでもありますな」
「その通りだ。やるからには徹底的じゃ」
この辺りも信長らしい言葉であった。
「せねばのう」
「左様ですか。そうされていましたか」
「延暦寺と揉めても」
「そうしていましたか」

「ふん、僧兵共を多少切っても構わん」
僧兵達に対しての嫌悪も見せていた。
「その後で延暦寺と揉めてじゃ」
「それも構わなかった」
「そう仰いますか」
「あの延暦寺と揉めても」
「何、尾張と延暦寺では離れておる」
信長は今度は距離から話した。
「そう派手なことにはならん」
「離れていては延暦寺もそう手出しはできない」
「そういうことでございますか」
「延暦寺は所詮都にだけじゃ」
信長はその動く範囲も見切っていたのである。

第二十八話　都にてその九

「そうそう遠くまで出られぬし力も使えぬ」
「しかし都にいればですな」
ここで言ったのは村井であった。
「その場合は」
「やはりああしてですか」
「常に意識せねばなりませんか」
「そうじゃ。つまりじゃ」
その場合はだ。どうかというのである。
「天下を考えると都は欠かせぬな」
「はい、どうしてもですね」
「都はどうしても外せません」
「何があろうとも」
「そういうことじゃ。天下を考えると延暦寺はどうしても何とかせねばならん」
信長のその言葉が強くなる。
「わかったな、そのことが」
「寺社の問題もですか」
「それも外せませんか」
「どうしても」
「とにかくあらゆることを終わらせねばならんからな」
信長の言葉は強い。
「これまでの天下のあらゆるしがらみをじゃ」
「しがらみですか、終わらせるのは」
「それでございますか」
「それをわかっておくことじゃ」
こう話してだった。信長と家臣達はそのまま将軍の下に向かう。
そうして城に入るとだ。すぐにあの二人が出て来て応対するのであ

った。
「おお、御主達はあの時の」
「道三殿と会った時の」
すぐにだ。柴田と丹羽が言った。明智と細川が来たのだ。
そしてその二人がだ。笑顔で彼等の前に出て来てそうして言うのだった。
「お久し振りです」
「どなたもお元気そうで何よりです」
「うむ、御主達もな」
「御元気そうで何よりですな」
柴田と丹羽も笑顔で応える。その他の者達もだ。
それぞれ笑顔で二人の前に出る。そして信長もであった。
家臣達の最後に来てだ。二人に言うのであった。
「元気そうで何よりだな」
「織田殿もです」
明智はその笑顔で信長に応えた。
「ご活躍のことは聞いております」
「ほう、わしの悪戯のことをじゃな」
「いえいえ、それは」
「ふむ、それは聞いてはおらぬか」
「そうしたことは聞いてはいません」
こう正直に話すのだった。
「ですが」
「ですが。何じゃ？」
「尾張では見事な政を為されているそうで」
「そのことは聞き及んでおります」
明智だけでなく細川もそのことを話してきた。
「尾張は見違えるまでになったとか」
「我々が行った時よりも」
「ははは、そんなに変わってはおらんぞ」

信長は彼等のその言葉をまずはこう笑って受け流した。
「あまり長い時も経ってはおらぬしな」
「いえ、かなりのものだとか」
「そうだと聞いていますが」
「まあそこまで言うのならじゃ」
信長はその彼等の話を今度は受けたうえで返した。
「一度尾張に来てみるか」
「尾張にでございますか」
「再び」
「そうじゃ。来てみるか」
こう二人に声をかける。
「気が向けばな」
「左様ですな。時ができれば」
「その時にでも」
二人は真剣な面持ちで信長のその誘いに応えた。
「そうさせてもらいます」
「是非尾張に」
「待っておるぞ。それでじゃ」
信長の顔が引き締まった。そのうえでの言葉だった。

第二十八話　都にてその十

「都じゃが」
「都でございますか」
「この場所でございますか」
「うむ。わしも話には聞いていた」
今度は信長が言う番だった。
「しかし。聞くと見るとでは大違いじゃ」
「恥ずかしながら今は」
「幕府もとても」
「そうじゃな。それで公方様は如何されておる」
信長は二人にさらに問うた。
「何でも剣の道を極めんとされているそうじゃが」
「はい、左様です」
「その通りでございます」
こう答える二人だった。今彼等は将軍に会う前の待合の部屋にいる。そこにいてだ。そのうえで信長の家臣達も交えて話をしているのである。
「御自身を護られる為にはじめられましたが」
「今ではどうも」
「何か。剣に取り憑かれている様な」
「そうした有様です」
「いかんな」
そこまで聞いてだ。信長は眉を顰めさせて述べた。
「わしが思っていた以上じゃ。それはいかん」
「織田殿もそう思われますか」
「その様に」
「うむ、思わずにはいられん」
こう二人に話す。

「剣も大事じゃが公方様ともなればじゃ」
「それ以上にですね」
「極められるものがあると」
「これからじゃな」
ここでまた言う信長だった。
「わしが公方様に会うのは」
「はい、左様です」
「もう暫くすればです」
明智と細川はすぐに信長に答えた。
「公方様がこちらに来られます」
「ですからその時に」
「わかった。それではな」
信長は二人のその言葉に確かな声で頷いた。
「わしもお話させてもらおう」
「ですが今の上様は」
「どうにも」
二人の言葉が濁った。そのうえでまた言うのだった。
「誰のお話もです」
「聞かれぬところがあります」
「そうであろうな」
信長は二人の言葉を聞いて当然といったような口調で述べた。
「それも」
「気付かれていましたか」
「そのことも」
「御主達の話を聞けばわかる」
こう言うのであった。
「存分にな。左様か、剣か」
「それにとり憑かれているかの如くにです」
「今では」
「剣は時としてよくないものでもある」

信長はだ。その剣について述べた。
「わしは信じてはおらんがじゃ」
「それでもですか」
「何が。一体」
「言われるではないか。剣にはよからぬものも宿る」
ここで言うのはこのことであった。
「そういうものだからじゃ」
「あまり剣にのめり込むのもですか」
「よくはない」
「そう仰るのですね」
「織田殿も」
「そうじゃ。決していいものではない」
そのことは間違いないといった口調であった。
「さて、それではじゃ」
「そのことをですか」
「公方様にお話されますか」
「状況によるがな」
断言はしないのであった。

第二十八話　都にてその十一

「そうするやもな」
「左様ですか」
「ではその時は」
「任せよ。さて、それではじゃ」
話が一段落したところでだ。また言う信長だった。
「茶はあるか」
「茶ですか」
「それでございますか」
「そうじゃ。茶じゃ」
まさにそれだというのだ。信長は笑みを浮かべていた。
そうしてその笑みでだ。彼はさらに話した。
「御主等も茶は好きじゃな」
「嗜んではおります」
「それがしも」
明智も細川もだ。すぐに述べてみせた。
「茶道ですか」
「その茶でございますな」
「そうじゃ。しかし今はそうした堅苦しいものではなくじゃ」
見ればだ。信長の顔が砕けたものである。そうしてその砕けた笑みでだ。明智と細川に対してあらためてこう言うのであった。
「ただ茶を飲みたいのじゃがな」
「あの茶をですか」
「それをでございますか」
「そうじゃ。それを頼めるか」
信長は二人にまた言った。
「皆で飲もうぞ」
「いやいや、これは参りましたな」

「全くです」
信長にそう言われてだ。明智も細川も顔を崩してだ。そのうえでこんなことを言うのであった。
「これだけの大人数となると」
「淹れるのも一苦労でござるな」
「ははは、そうじゃな」
信長も顔を崩している。彼もであった。
「しかし皆で飲んでこそじゃ」
「茶も美味である」
「そうだというのですな」
「そうじゃ。それでじゃ」
また言う信長であった。
「皆の分もじゃ。頼めるか」
「はい、わかりました」
「それでは」
二人はだ。はっきりとした笑顔で答えた。
「全員で楽しみましょう」
「茶を」
「うむ、しかしじゃ」
ここで柴田がだ。明智の顔を見てこんなことを言うのであった。
「明智殿とは正徳寺でも御会いしたが」
「あの時のことですね」
「こうしてここでも会うとは縁であるのう」
「そうじゃな。これも何かの縁」
「全くでござるな」
前田や佐々も言うのであった。

第二十八話　都にてその十二

「それを考えていくと」
「どうやら我等の間には深い縁があるようですな」
「若しやこれは」
木下がだ。おどけた笑みでこんなことを言った。
「我等は何時か共に轡を並べて戦うやも知れませぬな」
「ははは、そうかも知れませぬな」
明智も笑って木下に返した。
「貴殿は確か」
「はい、木下秀吉でござる」
笑ったまま名乗った木下だった。
「以後お見知りおきを」
「こちらこそ。しかし貴殿は」
明智は木下のその顔を見てだ。こんなことを言うのであった。
「何かが違いますな」
「違うとは？」
「はい、その目の光から察しますに」
木下の目を見てだ。そうして話すのだった。
「頭で戦われる方ですな」
「いえいえ、それがしなぞはとても」
「いえ、どうやら貴殿は」
木下の謙遜を退ける形でだ。彼はさらに言った。
「かなりのものですな」
「そう思われますか」
「どなたも見事な方々ですな」
明智は他の家臣達も見て述べた。
「尾張一国に留まっておられる様な方々ではありませんな」
「ははは、わしなぞはそれこそ槍しかできぬがな」

ここで可児が明智に応える。
「しかしそれでもじゃ。槍ならばじゃ」
「槍ならばでございますか」
「うむ、慶次とは互角だが他の者には負けはせぬ」
こう言うのであった。
「この笹の才蔵はな」
「槍でございますか」
「生憎わしは頭が悪い」
このことは笑って言う可児であった。
「それで槍を選んだのよ」
「そうでございますか」
「まあそれでしか殿のお役には立てんがな」
「まあこういう者もおる」
信長はその可児を見ながら述べた。
「何かと賑やかじゃ」
「それがしの如き海賊もおりますしな」
九鬼もいた。彼もなのだった。
「いやはや、丘にあがるとどうも落ち着きませぬ」
「ぬかせ、堺では目を輝かせておったではないか」
「全くじゃ。川という川を見よる」
「御主は海だけではあるまい」
「川も好きではないか」
「ははは、そうかのう」
同僚達の突っ込みにだ。九鬼は豪快に笑って返すのだった。
「まあ水は全体的に好きだがのう」
「そうじゃろう。御主は河童よ」
「いや、水虎かもな」
「どちらにしろ水じゃな」
「そうじゃ、水があれば何処にでもじゃな」
「そうかも知れんな」

自分でもそれを認める九鬼であった。やはり顔を崩して笑っている。

そしてそんな彼等を見て明智も細川もだった。何処か魅かれるものを感じていた。

かくして茶が入りそれを飲み終わったその時にであった。時が来た。

「ではじゃ」

「はい、それでは」

「行くとしましょう」

信長は立ち上がりだ。そのうえで家臣達を連れ明智と細川の案内を受けてだ。将軍の間に向かうのであった。いよいよ武家の棟梁と会うのであった。

第二十八話　完

２０１１・２・１８

第二十九話　剣将軍その一

第二十九話　剣将軍

将軍のいる部屋は床であり半分が一段上になっている。そしてそこにであった。

そこに入り暫くするとだ。明智が告げた。

「上様のおなり」

その言葉と共にだ。信長が頭を下げた。そして家臣達もだ。そうして全員が平伏する間にだ。その彼が部屋の上座に来るのであった。

薄緑の武家の服と黒い冠を被った青年である。引き締まった顔に身体つきをしている。その者こそがであった。足利幕府、そして武家の棟梁たる。

「将軍足利義輝様にございます」

明智が信長に対して述べた。そしてだ。

信長は顔をあげる。無論家臣達もだ。そのうえで将軍の顔を見た。まずは貴相と言ってよかった。顔立ちも整い気品がある。しかしであった。

目の光がだ。妙なものだった。信長はそれがわかった。

だがそれについては何も言わずにだ。将軍の言葉を待つのであった。

将軍足利義輝はだ。こう言うのであった。

「織田上総介信長であるな」

「はい」

慎んだ態度でだ。義輝に応える。彼もこうした態度を取れるのだ。

「左様でございます」

「この度の尾張の平定」

義輝は言葉をさらに続ける。

「そして幕府への幾度に渡る献上金見事である」

信長は沈黙している。義輝の言葉を聞き続けている。

「そしてその功によりだ」
将軍としてだ。彼に告げた。
「尾張の守護に任ずる」
「有り難うございます」
「して」
ここでだ。義輝の目が動いた。
そうしてそのうえでだ。信長に対して問うのであった。
「して上総介よ」
「何でしょうか」
「御主、余に言いたいことがあるな」
こう信長に対して言うのだった。
「そうだな」
「そう思われますか」
「顔に書いてある」
それでわかるというのである。だがそこにあるのは読みではなかった。信長にもそれがわかった。
だがここでもあえて言わずにだ。将軍の言葉を聞き続ける。
「してだ。それは何だ」
「そのことですか」
「そうだ。何を言いたい」
また信長に問う義輝だった。
「一体だ。何を言いたい」
「それではです」
将軍の言葉を受ける形でだ。彼も口を開いた。
そうしてそのうえでだ。義輝にこう言うのであった。
「上様」
「うむ」
「上様は剣を学ばれてますね」
「武家として当然のことだ」
義輝はその目の光を妙なものにさせながら述べた。

「それの何処がおかしい」
「おかしくはありませぬ」
信長もそれは否定しない。
「決してです」
「そうだな。おかしくはないな」
「ですが」
待っていたかの様にだ。信長は言った。
「それだけではです」
「馬や水練もか」
「はい、それも」
「わかっておる。それは」
将軍はここで忌々しげに述べた。そうしてであった。
「だが、じゃ」
「だがといいますと」
「逃げて何になる」
こう信長に問うのだった。

第二十九話　剣将軍その二

「逃げて。何になるのじゃ」
「その身があれば何とでもなります」
「余の身があればか」
「そうです。御身さえあれば」
信長は将軍に対してさらに話す。
「幾らでも何とでもなります」
「そうかのう。逃げられぬ時もあるであろう」
「さすればその時は」
「死ぬまでか」
「それも手でございます。ただその前にです」
「その前にと申すか」
「はい、上様はです」
義輝を将軍としてだ。そのうえで話す言葉であった。
「何でございましょうか」
「余は何とな」
「はい、何でございましょうか」
「おかしなことを言う」
義輝は信長の今の言葉に目を顰めさせた。信長の家臣達も明智や細川もだ。彼の今の言葉はだ。どうしてもわかりかねるものだった。
義輝もだ。ここで言うのだった。
「余は将軍だ」
「はい、その通りです」
「幕府の将軍だ。ならば余がいればだ」
「幕府は成り立ちます」
「その余に何があってはか」
「剣が相手にできるのは一人です」
信長は剣についてこうも話した。

「所詮は一人です」
「確かに多くは相手にできぬな」
「馬は水は相手にする者はいませんが己の身を確実に護れます」
「ふむ。確かに」
「そしてです」
「そしてか」
「はい、多くを相手にするにはです」
その場合はどうするか。信長はそのことも話すのだった。
「剣ではなく書でするものです」
「書とな」
「兵法の書だけでありませぬ」
信長は今は笑っていない。真剣そのものの顔で義輝に対して話している。即ちだ。彼は心から義輝に対して話しているのだ。
「論語や老子、何でもです」
「何でもか」
「本朝の書もまた入ります」
信長の話の範囲は広かった。明の書だけではないのだった。
「色々とありますな」
「確かにな。数えきれぬまで」
「四鏡もそうでございますし今昔もでござる」
四鏡とは水鏡、増鏡、大鏡、そして今鏡のことだ。歴史書になる。今昔とは今昔物語集である。こちらは仏教的は説話集だ。どちらも我が国の古典である。
「源氏もまたいいものでございます」
「何じゃ、政とは離れた書も入れるのか」
「政とは人でございますな」
「うむ、その通りよ」
これは義輝も頷く。政とは人がするものだ。ならばその人であることは当然だった。
「人じゃ。土地や水も治めねばならんがやはり人じゃ」

「どの書からも人を学ぶことができます」
信長は言った。
「だからこそです」
「源氏もか」
「あれはいいものでございます」
源氏についてだ。信長は話していくのであった。
「人の心を見事なまで書いております」
「ううむ、人の心か」
「それを読み使われるのは」
義輝を見てだった。彼は告げた。
「公方様でございます」
「余か」
「若し読まれるというのならです」
信長はここで笑った。義輝に対して。

第二十九話　剣将軍その三

「多くの書を用意しておきます」
「余に献上するというのか」
「全ては公方様のお言葉次第」
彼は言った。
「何時でもそれがしに言って下されば」
「書か」
それについてはだ。義輝はまずは微妙な顔になった。
そしてそのうえでだ。信長に対してこう言うのであった。
「余も確かに書は読んできた」
「はい」
将軍としてだ。これは当然の嗜みである。将軍は政の為に必要な書は読んでおかなければならない。そうした意味で大名達と同じなのである。
「しかしそれよりもだった」
「剣でございますな」
「それにばかり気を取られていた」
そしてなのであった。
「名剣を集めていた。しかしそれよりもか」
「はい、書でございます」
「それを読み多くの者と対することこそ将軍か」
「全ては。公方様の思われるままにあります」
「わかった」
ここでだ。義輝は頷いた。頷いてから告げたのだった。
「ではだ。上総介よ」
「はっ」
「余は書を読む」
こう信長に告げた。

「そうさせてもらうぞ」
「畏まりました。ではすぐにこちらまで書を」
「頼んだぞ。そしてだ」
義輝から信長を見てだ。こう言うのであった。
「将軍に必要なものはだ」
「それは何と」
「器だな」
こう言ったのであった。信長に対して。
「それだな」
「左様でございます。器でございます」
「余は大器になろう」
「そしてこの天下を」
「治めてみせよう。しかしじゃ」
信長を見続けている。それは変わらない。
そして見続けながらだ。彼は信長に対して再び告げた。
「さすれば。いや、言うまい」
「そうされますか」
「今言ってはどうにもならぬ。しかしじゃ」
「はっ」
「そなたとまた会う時は来るな」
言葉を一旦引っ込めてだ。そのうえで出した言葉はこれであった。
「そうじゃな。またじゃな」
「一期一会、そして再会もまた人の生涯でござれば」
「ではその時を楽しみにしておこう」
確かな笑みを浮かべてだ。信長に告げたのだった。
「それまでは何があろうともだ」
「生きられますか」
「そうしよう。何をしてでもな」
しかしであった。ここでだ。義輝はこうも言ったのであった。
「将軍としての誇りを忘れずにな」

「誇りですな」
「それは決して忘れぬ」
「ではです」
信長は義輝の話を受けてまた問うた。
「誇りはあくまで、ございますか」
「それは駄目か」
「いえ、そうでなくてはいけないものでもあります」
「将軍はじゃな」
「左様です」
それが将軍だというのである。
「ですから」
「そうじゃな。誇りじゃな」
「御身と誇り、両方を立てられることです」
「両方をか」
「そして公方様には」
義輝にはだ。誰がいるかとも話す。

第二十九話　剣将軍その四

「家臣の者達がいます」
「家臣か」
「武家の棟梁です。ですから」
「それでか。余には」
「その者達を信じ用いられることです」
具体的にはそういうことだった。
「そうされることです」
「ではじゃ」
また信長を見てだった。義輝は話した。
「上総介よ」
「はい」
「そなたを頼りとしよう」
こうだ。微笑んで告げたのだった。
「そなたは大きなものを抱いておる、しかしそれは余もだ」
「だからでございますか」
「そなたに言われた通り大きくなり」
そしてだというのだ。
「そのうえでじゃ。そうしよう」
「左様でございますか」
「それでよいか」
信長を見続けている。そのうえでの言葉である。
「そなたを頼りにして」
「公方様が大きくなられるのでしたら」
「そうか。その時はな」
「共に」
こう話すのであった。そしてだ。
信長は義輝と言葉だけでなく他のものも交えさせた。そうしたの

であった。
　それが終わってからだ。信長は将軍の前から退室してだ。そのうえで。
　明智に対してだ。こう話した。
「公方様はじゃ」
「立派な方ですね」
「そうじゃな。筋は素晴しい方じゃ」
「ですがそれでもです」
「剣か」
「それにあまりにものめりこんでおられましたので」
「将軍はそうであってはならんのだ」
　信長の目が遠いものになっていた。
「だからじゃあ。ああしてじゃ」
「公方様にお話されたのですね」
「あの方は大きくなられる」
「そうなられますか」
「その大きくなられる方ならばじゃ」
　その時はだというのであった。
「わしは喜んであの方の為に働こう」
「そうして頂けますか」
「うむ、そうしよう」
　こう話してであった。彼は義輝の人物を見極め彼の力になろうと決意したのだ。
　しかしである。それでもなのだった。
　信長は己の宿にしている寺に入ってだ。そこでだった。
　家臣達にだ。こう話した。
「あの方のままであればいいのだが」
「義輝公から代わられるというのですか」
「将軍がですか」
「まさか。それでは」

「三好や松永が」
「公方様を」
「充分に考えられることじゃ」
信長もだ。それについて言及する。
「とりわけ。松永はじゃ」
「大和のあの者がですか」
「とりわけ危険ですか」
「そうだと」
「その策謀だけではない」
眉を顰めさせての言葉だった。

第二十九話　剣将軍その五

「あの男にはよからぬものを感じぬか」
「松永からですか」
「そうだというのですか」
「あの男は」
「話を聞くだけじゃが」
それでもだというのである。彼はだ。
「あの男には魔性を感じる」
「魔性をですか」
「それをですか」
「あの男に」
「似ておる」
今度はだ。こんなことを言う信長だった。
「津々木にじゃ」
「あの男にですか」
「松永は似ているのですか」
「では。そういう男ですから」
「危険ですか」
「幕府にとっても」
今室町幕府は実質三好家、そしてその執権になっている松永久秀に首根っこを抑えられている。そうした状況なのである。
だからこそだ。その将軍が彼等の意に反する行動を取ると。それは。
それがわかっているからだ。信長は話すのだった。
「その時に。わしが何とかできる立場にいればな」
「よいというのですね」
「そうだと」
「そう仰いますか」

「うむ。わしは幕府をどうにかするつもりはない」
天下を統一してもだ。彼はそうしたことは考えてはいないのだ。
それは幕府というものが最早権威も力も地に落ちているからだ。
彼にとっては確かに義輝の奮起と才能の開花は望ましい。しかし
それと共にだ。幕府が飾り以上のものには成り得ないこともわかっ
ていた。
それでだ。彼はこう話すのだった。
「幕府を支えることはしてもじゃ」
つまり飾りでしかないというのだ。ここでは言葉に表と裏があり
双方が絡み合っている。
「最早幕府はな」
「力を取り戻せはしない」
「それは最早ですか」
「決して」
「そうじゃ。精々山城一国じゃ」
そこまでの勢力に過ぎなくなっているというのである。
「それ以上はじゃ」
「力を持てない」
「そしてこのままですか」
「どうにもならないままだと」
「今の幕府はあれじゃ」
信長はここであるものを話に出した。
「神輿なのじゃ」
「祭りのですか」
「それでしかありませんか」
「そうじゃ。それでしかない」
達観した声でだ。信長は家臣達に対して述べた。
「最早な」
「しかしそれでもなのですね」
「そのうえで三好や松永に対さなければならない」

「どうしてもですね」
「わしは好きになった」
信長はだ。今度は微笑みになった。表情が非常によく変わるのはいつも通りである。
「公方様がな」
「今の公方様がですね」
「そうだと」
「見事な方じゃ。必ずよい将軍になられる」
そのことを確信したのだ。彼と会ってだ。
「剣だけでなくじゃ」
「将軍として必要なものを身に着けられる」
「そうだというのですね」
「そうじゃ。ただ危ういのは確かじゃ」
それは否定できなかった。やはり室町幕府が置かれているその状況は甘いものではない。それがわかっているからこそである。

第二十九話　剣将軍その六

「しかしわしはじゃ」
「公方様を御守りしますか」
「あくまで」
「それが織田の為にもなるしあの方の為にもなる」
将軍を立ててだ。そのうえでの言葉であった。
「それでよいな」
「それがしが思いますにです」
ここで信長に述べたのは島田であった。
「そうあるべきでございます」
「幕府を助けることがよいのじゃな」
「はい、権威は必要なものです」
そのことはだ。否定しないのであった。
「織田家の天下への大義名分にもなります」
「大義か」
「やはりそれは欠かせぬものでございますから」
「そうじゃな」
信長もだ。彼のその言葉に頷くのであった。
そしてであった。ここでこう話した。
「幕府と。さらに上のやんごとなきのう」
「朝廷ですね」
「帝もまた」
「そうじゃ。わしは一の人になるがそれでもじゃ」
「幕府や朝廷はですね」
「ないがしろにはできない」
「織田家は元々宮司の家じゃ」
そこからはじまったのである。織田家は本来武士ではないのだ。
宮司からはじまってだ。尾張の守護にまでなったのである。

「朝廷はどうしてものう」
「ないがしろにはできませんな」
「どうしても」
「神輿のままであるということは普遍じゃがな」
ここでも現実を入れて話す。信長は己の考えにだ。そうした現実も入れてだ。そのうえで話をするのであった。
「だがそれでもじゃ」
「朝廷は盛り立てる」
「そうされますか」
「今のあの無惨な都も御所も何とかせねばならん」
具体的な話に入った。
「栄えた街にして奇麗な御所にしなければならんからな」
「ではその為には」
「再びですね」
「上洛されますな」
「その時は」
「わしが天下に覇を唱える時じゃ」
まさにその時だとだ。信長は言い切った。
「その時なのじゃ」
「左様ですね。それではです」
「まずは尾張に戻り」
「そのうえで」
「力を蓄え上洛するぞ」
信長は既にそのことを視野に入れている。そのうえで動いているのだ。
そんな話をしてだ。最後にだった。
「ではじゃ。翌朝にじゃ」
「都を発ち」
「尾張に戻りますか」
「そうする。長い旅だったのう」

また笑顔になる。信長は落ち着いた笑顔であった。
「そして楽しいものじゃった」
「殿、近畿の川と海はわかりました」
九鬼が楽しげに話す。
「とりわけ堺は」
「わかったと申すか」
「はい、堺の海、瀬戸内は見事な海でございますな」
「その海もやがてはじゃ」
「わかっております。その時はです」
水軍の彼がだ。話すことは。
「存分に暴れてみせましょう」
「その暴れる姿、見せてもらうぞ」
「是非共」
そんな話をしてだった。彼等は今は休んだ。そうして翌朝彼等は尾張に向けて発つのだった。
その彼等をだ。闇の中から見る者達がいた。

第二十九話　剣将軍その七

彼等はだ。その闇の中でだ。くぐもった声で話していた。
「ふむ。将軍にか」
「そう言うとはな」
「これは想像していませんでしたね」
「全くです」
信長についての話であった。明らかに。
「それによりあの将軍は目覚めたようです」
「元より才のある人物」
「これは厄介な人物になりますかな」
「少なくともあの男と組ませてはなりませんな」
「全くですな」
「御飾りならともかく」
奇しくもだ。信長と同じ様な言葉が出た。しかしだった。
そこにあるものはだ。信長のそれとは違っていた。明確な、どす黒い悪意があった。
そしてその悪意がだ。闇をさらに暗くしていくのであった。
「下手に動いてもらうと」
「ましてあの男と組まれると」
「面倒ですな」
この言葉が出た。
「ではやはりですな」
「動きが目につくようならばです」
「消えてもらいますか」
「ここは」
こうしたことがだ。語られるのであった。
「ではどうして消しましょうか」
「毒はどうでしょうか」

まずはこのことが提案された。
「毒を酒か茶に仕込みますか」
「そうして消えてもらうと」
「それがいいというのですな」
「左様、それはどうでしょか」
毒が話されていく。それはどうかというのである。
「これならば急死ということで話が済みます故」
「確かに。いいものですな」
「理由にはもってこいです」
「我等の得意としているものの一つですし」
「それならばですな」
「毒で決まりでしょうか」
確かにそれで決まりかけた。毒はそれだけの力があり彼等もそれに自信を見せる。しかしなのだった。
ここでだ。闇の中央からこう声がした。
「いや、待て」
「待てとは」
「では毒は駄目だと」
「そう仰るのですか」
「将軍の傍にはあれでも切れ者が揃っておる」
その彼等の話をするのだった。
「明智光秀に細川藤孝よ」
「あの者達がいるからでござるか」
「それは果たせぬと」
「毒は」
「そうじゃ。見破られてしまう」
その二人によってだ。そうなってしまうというのである。
「そうなっては元も子もない」
「失敗すれば何にもならぬ」
「だからでございますか」

「そうじゃ。しくじれば何にもならぬ」
中央の声がだ。まさにそれだというのである。
「だからこそじゃ。やるからにはじゃ」
「確実に、ですか」
「この場合はでございますか」
「将軍まであの男になびいてはことじゃ」
それが理由だというのである。
「そうなるならばじゃ」
「何があろうともですね」
「将軍を葬る」
「必ず」
「しかし。毒が駄目ならです」
それを否定する。そのうえでの言葉だった。
「何を以て始末しますか」
「刺客では倒せませぬ」
これは論外というのであった。

第二十九話　剣将軍その八

「あの将軍の剣の腕は天下一品でございます」
「何人であろうが倒せばしませぬ」
「相当な手だれであろうとも」
そうした者でもだ。駄目だというのである。
「あの男は倒せませぬ」
「容易な相手はありませぬが」
「わかっている。ならば兵じゃ」
中央の男はだ。それだというのであった。
「兵を使う」
「兵をでございますか」
「まさか。軍勢を用いてですか」
「攻め滅ぼす」
「そうされますか」
「そうじゃ。それじゃ」
まさにだ。それだというのである。
「兵を用いてじゃ。攻め滅ぼす」
「足利将軍をでございますか」
「そうすると」
「そう御考えなのですか」
「おかしなことがあろうか」
中央の声はだ。いささか驚く周囲に対して平然と返していた。声だけでのやり取りである。しかしその感情の動きは闇の中に出ていた。
「嘉吉の変を見よ」
「あの時の将軍の様にですか」
「将軍も滅ぼすことができる」
「それでもよいと」

「そもそもあそこであの幕府の命運は尽きておる」
その変で六代将軍足利義教、暴虐を極め鬼の如くと言われたその将軍が赤松氏に討たれてだ。幕府の威信は完全に地に落ちたのだ。応仁の乱以前にだ。既に幕府の命運は決まっていたのである。
「だからじゃ」
「兵で滅ぼそうがですか」
「それでもよい」
「そう言われるのですね」
「幸い兵もある」
それもだ。あるというのである。
「あの者が持っておるな」
「確かに。あの男がです」
「我等が同族であるあの男が」
「しかも将軍を討てる場所にいる」
「それならばですね」
「使わずしてどうする」
それをだ。肯定する言葉だった。
「使えるものは使うべきだな」
「だからこそですか」
「あの男を動かす」
「そうされますか」
「あの男とて十二の一人」
こんな言葉も出た。
「それだけのことをしてもらわねばな」
「どうもあの男は近頃反抗的な様ですが」
「我等と距離を置きたがっているようですが」
「どうやら」
「それはできぬ」
明らかな、だ。否定の言葉だった。
「決してな」

「血族である限りはですか」
「我等からは離れられれはしない」
「そして裏切ることはできない」
「左様ですね」
「我等の血は絶対のものよ」
まさにそうだとだ。中央の声は話すのだった。
「それでどうして裏切られる。離れられる」
「できはしませぬな、それは」
「我等もそうですし」
「我等。闇の血脈の絆はです」
「まさに絶対のもの」
「左様ですから」
周りもこう話す。確かな声で。
「では。あの男にですね」
「いざという時は」
「動いてもらうと」
「そうしてもらう。それにしてもじゃ」
ここでだ。さらにであった。闇の中で話が為されるのであった。

第二十九話　剣将軍その九

「尾張のあの者だけではなくなってきたな」
「はい、武田や上杉もです」
「北条に毛利も」
「伊達に島津も。力をつけてきております」
「どうやら。天下はです」
「次第に一つになろうとしておりますな」
「まだじゃ。それはまださせてはならん」
その動きがだ。否定されるのであった。
「まだじゃ。わかるな」
「はい、まだ血を流してもらわなければなりません」
「天下の血は流れ足りません」
「我等が喉を潤すには足りません」
「腹は満ちてはおりません」
「その通りじゃ」
まただ。中央の声が言った。
「この程度ではのう」
「戦乱は確かに多くの血が流れますが」
「どうもこの国の戦乱は民はあまり巻き込まれませんので」
「特に今は」
「かえって人が増えているとか」
これはその通りであった。大名達はやがて己の民となる者達や土地にはこれといって手を出さない。その為か民も戦になればそれを観戦する程であった。
それではだ。血が流れるのは城や戦の場だけである。それではなのだった。
「南蛮の争いは壮絶なものがあるようですな」
「明よりもさらに」

「恐ろしいまでの血が流れるとか」
「それも戦がなくともです」
彼等の声にもだ。何かが宿っていた。それこそがなのだった。
「魔女狩りなどと称して無辜の者を捕らえいたぶり」
「そのうえで嬲り殺し多くの血が流れるとか」
「実によいものですな、南蛮とは」
「常に血が多く流れる」
「素晴しいことです」
「そうじゃな。南蛮じゃな」
南蛮についてだ。注目が為されるのだった。
「あの様に。この国も血生臭くなればのう」
「ではどうされますか」
「一向宗を動かしますか」
「そうされますか」
「それもあるな」
よいとされた。考えの一つとしてだ。
「それもな」
「そうですか。それもですか」
「血を多く流す為には」
「それもまた」
「加賀や越前だけでは足りぬと思っていましたし」
一向一揆は北陸を中心に暴れ回っていた。上杉とも戦っている。

第二十九話　剣将軍その十

「流石に越後の上杉には負け続けていますが」
「あの者は尋常な者ではありませぬ」
「まさに軍神です」
「そうよ、軍神よ」
謙信はだ。まさにそれだというのである。
「その軍神に対することもじゃ」
「大事でございますか」
「左様でございますか」
「色のある具足や兜の者達こそが厄介なのじゃ」
ここでだ。こんなことも話された。
「赤に黒、白に青、紺、緑に紫に橙にじゃ」
「武田、上杉、北条、織田、浅井、毛利、長宗我部、島津」
「あの者達ですな」
「我等は闇。闇は色とは違う」
「だからこそ色の家には」
「用心をですな」
「そうよ。特に青よ」
それだというのだ。その青こそがだとだ。
「織田よ。あの蛟、このままだとさらにじゃ」
「尾張一国に留まらず」
「伊勢も美濃も併呑し」
「やがては都を制し」
「天下までをも」
「全ての色もあの男の下に集まる」
そうなるともいうのだ。色もだとだ。
「そうして我等の闇を消さんとするだろうな」
「我等に気付き」

「そうしてでございますか」
「この我等を」
「あの男、尋常な勘ではない」
信長はただ頭が切れるだけではない。その勘もだ。恐ろしいまでに鋭いのだ。それもまた信長の武器となっているのである。
「我等に気付くやもな」
「だからこそ余計にでございますか」
「あの男は放ってはおけぬ」
「左様でございますか」
「そうよ。注意せよ」
また話されるのだった。
「尾張こそをな」
「では。尾張と結ぼうとする将軍をですな」
「まずは何とかしましょう」
「今は」
「そうせよ。よいな」
あらためてだ。義輝について話された。
そうしてだ。そのうえでだった。
「我が一族を。一度全て集めようぞ」
「十二の家をですな」
「一旦この闇の中に」
「そうされますか」
「そうだ、集める」
また言うのであった。
「では。よいな」
「御意、それでは」
「我等の他にも」
「集めましょう」
「この闇の中に」
「今より」

こう話してであった。彼等は闇の中で蠢くのだった。
信長はまだ彼等のことを知らない。しかしだった。彼等は確かにいた。そしてそのうえでだ。闇の中で蠢動を続けるのであった。

第二十九話　　完

２０１１・２・２４

第三十話　交差その一

第三十話　交差

信長は都を経つことになった。その朝だ。
彼は家臣達と共に朝食を食べながらだ。こんな話をした。
「どうも都の飯はいかんのう」
「そうですな。これは」
「どうも味が薄いでござる」
「どうにもこれでは」
「物足りませぬな」
「そうじゃな」
家臣達もであった。都の食事にだ。どうにも馴染めていないのであった。
「これが都の食事かのう」
「寺の飯ですからこうなのでしょうか」
「それで薄いと」
「そうも思えますが」
「そうであればよいのだがな」
汁を吸いながらだ。信長はいぶかしんで述べた。
「この薄さはどうにもな」
「尾張のあの濃い味が懐かしいですな」
「これでは。どうにも」
「食べた気がしませぬな」
「あまりにも薄くて」
家臣達も信長と同じであった。舌は誤魔化せない。彼等にとって都の食事はだ。どうにも馴染めない、そうしたものであった。
それを食べ終わってからであった。信長はまた話すのだった。
「まあ食ったしのう」
「それではですな」

「今より」
「うむ、発とう」
信長は家臣達に告げた。そうしてであった。
柴田がだ。ここで他の家臣達に述べた。
「尾張に帰ればじゃ。皆で少しくつろぐとするかのう」
「といいますと権六殿が茶会を開かれるとか」
「そうされるおつもりでしょうか」
「まさかとは思いますが」
「生憎だがわしはそこまで茶の道には深くない」
織田家きっての武闘派であり外見も大柄で厳しい。その為柴田は何かと武骨な印象を与える。しかし実際の彼はそうではなかった。戦だけでなく政もだ。それも得意なのだ。それに茶もだ。造詣がある。それが彼なのだった。しかしであった。
「平手殿の茶を馳走になろうではないか」
「おお、平手殿ですか」
「あの方の茶もそういえば」
「長い間飲んでいませんな」
「そうですな」
皆平手のその言葉にだ。気付いたのである。
「平手殿のお顔を見るのも久し振りですし」
「あの小言も思えば懐かしいですな」
「そうですな」
「そうじゃ。早く尾張に帰って平手殿の小言を聞こうではないか」
柴田は笑ってこう話すのであった。しかしだ。
信長はそれを聞いてだ。嫌そうな顔になってだ。そのうえでこう言うのだった。
「御主等、正気か？」
「正気ですが」
「ですから平手殿のお顔を見たいのですが」
「それはいけませんか」

「爺の顔を見るのはいい」
信長はそれはいいとした。
「しかし。あの小言を聞きたいのか？」
「懐かしくはありませぬか、あの御仁の小言も」
「久しく聞いていないと」
「そうなりはしませぬか？」
「なるものか」
信長ははっきりと述べた。
「わしは酒と爺の小言は大の苦手なのじゃ」
「まあ。平手殿の小言は殿に一番いきますからなあ
「始終言われますから」
「それを聞くとなればですな」
「確かに厄介ですな」
「全く。留守を任せて正解じゃった」
本来の意志はそこまでではない。しかしなのだった。ここではこう言うのであった。
「小言を聞かなくて済んだわ」
「しかし尾張に帰ればです」
「その小言が待っております」
「覚悟されて帰られるべきかと」
「やれやれじゃな。しかしじゃ」
わざと溜息を出してからだ。信長は表情をすぐに真剣なものにさせてだ。

第三十話　交差その二

そのうえでだ。こう話すのだった。
「尾張に戻ればじゃ」
「戻ればですか」
「どうなるか」
「今川でございますか」
今言ったのは佐久間だった。語るその目が鋭い。
「それとも斉藤でございますか」
「今川じゃ」
この家だというのである。
「今川が動くな」
「いよいよあの家がですか」
「動きますか」
「遂にでございますか」
「そうじゃ。尾張に戻ればすぐにじゃ」
今川とのだ。戦だというのだ。
「必ず勝つぞ」
「今川といえばですな」
ここで話したのは木下だった。
「軍師の雪斎殿にもう一人おられますな」
「そうじゃ。竹千代じゃ」
信長はすぐに述べた。今川のもう一人の将のことをだ。
「あ奴は。見事な者になっておるそうじゃな」
「雪斎殿の愛弟子だとか」
「そうじゃ。あの老僧も見る目がしっかりしておる」
信長は敵であろうともだ。確かな評価をする男だった。それを今も見せる。
「竹千代は天下の柱の一つにもなれる男じゃ」

「だからこそあの老僧もでございますか」
「己の弟子に選んだ」
「今川の為に」
「そういうことじゃ。よく見ておる」
信長は雪斎をこう評した。
「あの公家髷の傍におったら適わぬな」
「確かに。まさに今川の柱です」
「それがもう一本でございますか」
「これは辛いですな」
「確かに」
「傍におればな」
信長はだ。言葉を微妙に変えてきた。
そしてだ。そのうえでだった。
元康と雪斎についても義元についてもだ。話すのであった。
「あの二人が公家髷のところにおれば厄介じゃ」
「そこにいればでございますか」
「主の下にいればですか」
「厄介だと」
「そうじゃ。厄介じゃ」
また言う信長だった。
「その場合はな。しかしじゃ」
「しかし」
「しかしといいますと」
「今川では大事な戦で先陣をできる者は誰じゃ」
信長は家臣達に対して問うた。
「その者は誰じゃ」
「やはり。雪斎殿ですな」
「あの御仁を置いて他にはおりますまい」
「何といっても」
実際に彼は法衣の上に鎧を着てそのうえで自ら先陣を切ることが

多かった。彼は今川家において最も武勇の優れた者でもあるからだ。
「軍師であり先陣を切る将であります」
「あの御仁こそ今川家の柱でございます」
「戦の場においても」
「そうじゃ。戦でもじゃ」
雪斎は基本は政の者だ。内政においても外交においても非凡であり元々政の方を好み得手としている義元の相談役であるのだ。
そして戦場ではだ。馬に乗ることが不得手であり今一つ戦慣れしていない彼に代わってだ。実際に戦っているのだ。だからこそ先陣も務めるのだ。
「柱じゃ。あの者がな」
「だからこそ大事な戦においてはでございますか」
「先陣を務める」
「そうすると」
「そうじゃ。おそらくその時はじゃ」
また言う彼だった。

第三十話　交差その三

「尾張に攻め入る時にはじゃ」
「先陣を務める」
「間違いなくですか」
「そうしてくると」
「竹千代もじゃ」
元康もだというのだ。
「あの者もそうなるじゃろう」
「先陣になる」
「雪斎殿と松平殿がですか」
「二人で」
「どうやら竹千代は今川において随分と可愛がられておるようじゃ」
信長は笑いながら話す。元康に対して親しみを見せている笑みであった。
「あの老僧だけでなく今川の主家からものう」
「才がありそして人柄もいい」
「律儀な方ですし」
「それならばですね」
「好かれぬ筈がない」
「左様でございますか」
「そうじゃ。しかもその家臣達はまとまりがよく武辺者ばかりじゃ」
三河武士は強い。しかもまとまりもいい。その辺りは尾張者とは全く違う。正反対と言ってもいい程だ。隣同士であってもだ。
「そうした者ならどうする」
「手柄を立てさせる為にも」
「それに活躍も期待できます」
「ならばですな」
「あの方もですか」

「そうじゃ。先陣じゃ」
元康もだ。先陣だというのである。
「この二人は間違いなく先陣で出て来る」
「では公家髷殿の傍にいるのは」
「雪斎殿がおられぬ」
「そして松平殿もといいますと」
彼等は考える。そのことをだ。
「軍師がおりませぬな」
「そこそこの将は揃っていますが」
「それでもですな」
「そうじゃ。軍師がおらぬのじゃ」
信長の言葉が鋭いものになる。まさに刃であった。
「そこが問題なのじゃ」
「傍に軍師がいない」
「肝心の二人が先陣でございますか」
「そうじゃ。まあ今はこの話はこれで終わりじゃ」
信長は話をいささか強引に打ち切った。
「さて、では尾張に戻るとしよう」
「奈良に堺に都にと色々回りましたが」
「それも終わりですな」
家臣達は何処か寂しそうでそれでいて楽しげな顔になっていた。
そうしてその顔でだ。後ろを振り返ってからそうしてだ。尾張への帰路につくのであった。
その都を出る時にだ。前からであった。
黒い服の一団が来た。彼等は。
「むっ、あれは」
「黒というと」
「あれか。越後の」
「越後の龍か」
「その様じゃな」

信長もだ。彼等を見て言った。その黒い一団をだ。
黒といっても闇ではない。そこに美しさがあり見栄えのいい、そうした黒であった。その黒い一団の先頭にだ。白い、頭巾だけが白い流麗な顔立ちの者がいた。
その顔を見てだ。信長は面白げに笑って述べた。
「あれが龍じゃな」
「越後の龍でございますか」
「上杉謙信」
「あの男こそが」
「ふむ。あの甲斐の虎と引き分けたのじゃ」
信長はここでこのことを話した。川中島のことだ。
「さぞかし恐ろしい顔の男と思っておったが」
「どうも。違いますな」
「女の様な、いや」
「女でござるか？あれは」
「そうも見えますが」
「わからぬな。しかしじゃ」
信長は謙信のその中性的な流麗な顔を見てまた笑った。そのうえでこう言うのであった。

第三十話　交差その四

「あの顔は見事じゃな」
「まあ殿はそちらもでしたな」
「話には聞いておりますが」
「そうでしたな」
「その通りじゃ」
信長もその趣味を隠さない。この時代では普通のことだ。
「そういえばあの上杉謙信もそうであろう」
「はい、それは聞いております」
「武田信玄もです」
「あの者もです」
彼等もまた、だ。そうした趣味も持っているのだ。だからといって誰も批判したりはしない。それは当然のことであるからだ。だからこそだ。
「そうした趣味があります」
「まあ大した話ではありませんな」
「全くです」
「いやいや、それがなのじゃ」
ここでだ。周りに話すのは村井であった。
「あながちそうとも言えぬ。堺に伴天連がおったな」
「ああ、あの変わった寺を建てていた」
「あの頭を上だけ剃っていた」
「あの連中でございますか」
「そうじゃ、あの連中じゃ」
まさにだ。その彼等だというのだ。
「あの連中はそうしたことをえらく嫌っておる」
「そうだったのでござるか」
「何もおかしなところはないと思いますがな」

「いや、全くです」
「そうした趣味はなくとも」
とにかく彼等にはわからないことだった。これこそが文化の違いなのであるが彼等にはまだそうしたことは知らないことであった。
村井はだ。ここでさらに話す。
「この世から消さねばならんとまで言っておるぞ」
「極端ですな」
「いや、全く」
「それはまた」
彼等は村井のその話を聞いてまた述べた。
「この世からとは」
「男が男を愛することをこの世からでございますか」
「まことに極端ですな」
「それ程嫌っているのですか」
「それはまた異様ですな」
「全くでござる」
誰もがそう考えることだった。そしてだ。
信長もだ。腕を組んで考える顔になってだ。こう述べるのだった。
「幾ら何でもこの世からとまでは言うまい」
「それが言っておるからこそです」
「男も女もじゃ。それこそが懐の大きさではないか」
信長もまたあくまで本朝の考えの中にある。それは彼とて同じだ。
「そうした否定はのう。何にもならんが」
「伴天連は他にも神仏を攻撃しておりますし」
「伴天連の神も神ではないのか？」
「それが他の神や仏を信じません」
それが彼等だというのである。
「全くです。そしてそのうえで」
「攻撃するというのか」
「しかもかなり激しいです」

「日蓮宗みたいなものか？」
信長はその日蓮宗だ。だからその名前を出したのである。
「ああした感じなのか？それでは」
「いえ、口調や言っていることはさらに激しかったです」
「日蓮宗よりもか」
「それどころではありません」
日蓮宗よりだ。さらに上だというのだ。
「何時武器を持って襲い掛かるかわからぬ程です」
「ううむ、そこまでなのか」
「それを教会とかいいましたな」
この辺りはまだ完全にわかっていない村井だった。首を傾げさせながらの言葉になっている。
「その寺に出入りする者達にもそれを言いますし」
「まずいな、それは」
信長はそこまで聞いて目を光らせた。

第三十話　交差その五

「若し伴天連が力を持てばじゃ」
「比叡山と同じになりますか」
「いや、比叡山より危ういのう」
「比叡山よりもでございますか」
その言葉に驚いたのは川尻だった。真剣な顔である。
「あの比叡山よりも」
「本願寺よりもじゃな」
さらに言うのであった。
「危ういのう。力を持てば」
「延暦寺や本願寺までとは」
「延暦寺や本願寺が何の理由もなく他の寺社を襲うか」
信長が言うのはそこだった。
「揉めてもおらん相手にじゃ。そこまでするか」
「いえ、流石にそこまでは」
「あの本願寺といえど」
「延暦寺もですが」
川尻以外の他の家臣達もそれは言う。確かにだ。
「そこまではしません」
「揉めていなければ何もしません」
「流石にです」
「そうじゃ。吉兵衛の話を聞くとじゃ」
その村井に顔を向けての言葉である。
「理由がないのじゃな。襲うことに」
「はい、自分達とは信じる神仏が違うというだけで、でございます」
「そんなことは理由にはならんわ」
信長は今度は口を尖らせた。
「わしは基本的に僧兵とかは好きではないがじゃ」

「それでも。神仏が違うというだけでは」
「普通は何もしませぬな」
「流石に」
「あの日蓮上人とて口では言ったが拳は振るわなかったわ」
信長はこのことを指摘した。
「そんなことはしてはおらん」
「今で、すらですな」
「そこまでする者はおりませぬ」
「確かに。延暦寺や本願寺の比ではございませぬな」
「そうした連中は」
「伴天連は面白いことは面白い」
信長は彼等にも価値を見出している。それは確かだ。
「しかしじゃ」
「しかしでございますな」
「それでも。そうした動きは」
「捨ておけませんな」
「教えで戦うのが一番厄介じゃ」
信長はこんなことも言った。
「一向宗を見てもわかるな」
「そうですな。あれ以上に攻撃的だとしますと」
「まさに野獣ですな」
「それに近いですな」
「伴天連にはまだ何かと謎も多いな」
信長はこうも話した。
「だからじゃ。これからもじゃ」
「注意しておきますか」
「持て囃すだけでなく」
「それもまた」
「何でも持て囃してばかりでは駄目じゃ」
いささかだ。子供に話す様に言う信長だった。

「やはりじゃ。幾分か、いやそれ以上にじゃ」
「注意は必要ですか」
「そうでございますか」
「伴天連に対しては」
「中には怪しい者もおる」
ここでは断言であった。それを出したのだ。
「日本を己達のものにせんとしておる輩もおるな」
「伴天連もそれぞれですか」
「そうした者もいる」
「その辺りは何処でも同じなのですな」
「そうじゃな。伴天連も人間じゃ」
だからだというのだ。伴天連もまた人間だと話すのだ。ここではいい意味も悪い意味も含まれている。どちらもなのである。
「悪人もおるわ」
「そうした伴天連の動きは用心ですな」
「早いうちに堺等を押さえるべきでしょうか」
「とりあえずは」
「まあ急ぐな」
それはするなというのであった。焦ることはだ。

第三十話　交差その六

「急がずともよい。それについてはな」
「焦るとかえってよくはなくなる」
「だからですね」
「それは」
「そうじゃ。堺まで掌握するのはまだ先じゃ」
これも話す。信長はここでは焦っていなかった。決してだ。
何故焦ってはないかもだ。信長は話すのだった。
「伊勢や美濃を掌握してじゃ」
「そしてそのうえで上洛して」
「そうしてですか」
「そのうえで」
「それから堺じゃ」
それでだというのであった。
「わかったな」
「段階がありますか」
「堺に至るまでもですね」
「それがなのですか」
「そうじゃ。一足飛びも二足飛びもない」
信長は大胆なだけではない。物事を進めるにあたってはだ。実に慎重なのだ。そうした一面もあるのである。
「一歩ずつじゃ」
「一歩ずつ進める」
「そうしますか」
「急がずにですか」
「急がぬが確実に進める」
実際にだ。彼が尾張でしたことだった。まさにだ。
「よいな」

「わかりました。順調にですね」
「一歩ずつ確かに進めますか」
「そうじゃ。今もそうだしのう」６０
それはだ。今もだと話すのだった。
「都まで。一歩ずつだったではないか」
「そういえばですな」
「伊勢から奈良、堺」
「そして今の都でございます」
「まさに一歩ずつですな」
「確かに」
これは家臣達も気付くことだった。まさにだ。信長は今回の上洛もだ。一歩ずつ確実に進めていったのだ。そのことに気付いたのである。
そういうことだった。そしてだ。
その話をしてからだった。信長はだ。正面を見て話を戻すのであった。
「ではじゃ。越後の龍とじゃ」
「御話でもされますか？」
「それでは」
「上杉謙信と」
「ははは、話すあてはないぞ」
そのことは否定するのであった。笑いながらだ。
「わしから声をかけては何かおかしいしのう」
「おかしいでございますか」
「それは」
「そうじゃ。何か他人行儀じゃ」
妙にだ。ここでは謙虚で繊細なものを見せる信長だった。
「それはどうじゃ」
「何か殿らしくないですな」
「しかし妙に納得もできまする」

「いやいや、どうもこれは」
「面白いことでござるな」
「ははは、わしはこれでも照れ性でのう」
自分でだ。笑ってこう話す信長だった。
「見知らぬ相手にはどうしてもな」
「声をかけにくい」
「左様ですか」
「そういうことじゃ。向こうから声をかけてくるとも思えんしのう」
それもないというのだ。謙信がだ。自ら声をかけるかというとだ。
それも考えられないというのである。
「だからじゃ。ここは何もせずじゃ」
「擦れ違いですか」
「それだけですか」
「そうじゃ。それだけじゃ」
そうするというのだった。

第三十話　交差その七

「ではじゃ。帰るぞ」
「はい、わかり申した」
「それではですね」
「今から」
こうしてだった。信長達はあらためてだ。馬を進めていく。そうしてだった。
そのうえでだった。越後の黒い一団とだ。擦れ違うのだった。
青と黒が擦れ違う。その中でだ。
信長と謙信もだ。擦れ違った。二人はお互いを見ようとしない。前を見ているだけだった。しかしなのだった。
謙信はだ。信長が擦れ違ってからだ。こう二十五将達に話すのだった。
「あれが尾張の蛟龍ですね」
「はい、うつけと評判の」
「あの者がです」
「織田信長です」
「どうやら。間も無くですね」
謙信はだ。遠くを見る目でだ。彼等にこう話した。
「蛟が天に昇るのは」
「間も無くだというのですか」
「蛟が龍になるのは」
「そうだと」
「はい、間も無くです」
謙信のその言葉はだ。確かなものだった。
「その時が来ようとしています」
「あのうつけ殿がでござるか」
「殿と同じ龍に」

「それになられるのでござるか」
「左様です。蛟は龍になるもの」
「ううむ、左様ですか」
「凄い者になりますか」
二十五将達もだ。それがようやくわかってきた。
「そういえばあの男の目は」
「確かに。うつけの目ではない」
「甲斐の虎に似ておるか？」
一人がだ。信玄の名前を出した。
「あの男に」
「いえ、少し違いますね」
だが、だ。謙信がそれを否定した。
「甲斐の虎とは」
「違いますか」
「武田とはまた違う」
「左様ですか」
「そうです、何かまた別なのです」
信長はそうした男だというのである。
「大きい者になります」
「では殿」
「やがては我等とも」
「戦うことになる」
「その危険はあるでしょうか」
「ありますね」
謙信もそれは否定しなかった。その可能性をだ。
「その時は。用心すべきです」
「武田以上にですか」
「無論北条以上に」
「そこまでの男ですか」
「おそらく武は甲斐の虎の方が上です」

謙信は冷静に話す。
「しかし。尾張の蛟龍はです」
「それ以上のものを持っておりますか」
「それがあの男ですか」
「織田信長」
「はい、私もまた彼と戦う時は」
謙信の言葉に強いものが宿る。
「毘沙門天になりましょう」
「軍神になられそのうえで、ですね」
「戦われる」
「そうされますか」
「はい、軍神となり」
こう話していく。
「そのうえで戦いましょう」
「尾張の織田信長、確かに」
今度はだ。直江が言うのだった。

第三十話　交差その八

「これから。殿の大義の前に大きく立ちはだかるでしょう」
「彼は覇です」
謙信は今度はだ信長を漢字一字で表した。
「私の義に対してです」
「覇ですか」
「覇王になるでしょう」
「ではやはり殿とは」
「彼が生き残ればその時は」
やはりであった。謙信は否定しないのだった。
そしてだ。そのうえで、だった。
前を見る。その果てにあるものは。
「公方様に。御会いできますね」
「左様ですな。公方様はどうされておられるでしょうか」
「御元気だとのことですが」
謙信はまずは義輝のその身体のことを話した。
「剣の腕を極められ。実に健康だとか」
「しかしですな」
ここで言うのは宇佐美だった。
「公方様の剣は」
「公方様になると剣は別の剣であるべきです」
信長と似ている様でだ。違う言葉だった。
「その剣は」
「その剣は」
「一体何でしょうか」
「それでは」
「私です」
他ならぬだ。謙信自身だというのだ。

「私が公方様の剣となるべきなのです」
「幕府を御護りしその力となる剣に」
「それになられる」
「それが殿の御考えなのですね」
「はい、その通りです」
まさにだ。そうだというのである。
「私は関東管領なのですから」
「その責務としてもですね」
「公方様の剣となる」
「そう御考えですか」
「幕府の復興は。天下を治める為にです」
謙信はそこに絶対のものを見ていた。謙信にとってはだ。幕府はまさにだ。そうした存在に他ならず邪険になぞ決してできないのだ。
そこが信長と違う。だが謙信はそれに気付かないままだ。話していくのだった。
「幕府の剣となりましょう」
「では殿、これからです」
「その公方様の下に参りましょう」
こうしてだった。謙信もまた義輝の下に参上した。そうして彼と話をする。するとだ。義輝は確かな顔でだ。こう謙信に言うのであった。
「同じだな」
「同じといいますと」
「いや、何でもない」
将軍は言葉を消した。しかしだ。
謙信はその言葉にあるものを察した。しかしそれは口には出さずにだ。彼の言葉を聞き続けるのだった。そちらを選んだのである。
「そうか。そなたが剣にか」
「それはなりませんか」
「いや、喜んで受けたい」

こう謙信に返す。厳かにだ。
「そなた達の言葉、喜んで受けよう」
「有り難きお言葉」
このそなた達という言葉の意味もわかっていた。しかしであった。
ここでも謙信は言葉を出さずだ。将軍のその言葉を聞くのだった。
「それでは。これからは」
「上杉謙信よ」
将軍もだ。謙信に対して親しげに声をかける。
「宜しく頼むぞ」
「関東はお任せ下さい」
「そうだな。関東はそなただ」
そしてだというのであった。言葉の外にそれが出ていた。
だが自身はそれに気付かずだ。さらに言っていく。
「よいな」
「有り難きお言葉。それでは」
こうしてであった。謙信は将軍の願いを受けたのだった。
それが終わってからだ。将軍の前から下がる。それからだった。

第三十話　交差その九

宿にしている寺に戻る時にだ。また家臣達に話すのだった。
「公方様はどうやら」
「何かお言葉が妙でしたな」
「確かに」
ここで言ったのは宇佐美と北条だった。
「何か。もう一人頼りにしている様な者がいるような」
「そうしたお言葉でしたね」
「そうですね。そしてそれは誰か」
謙信はだ。それを自然に話していく。
「一人しかいません」
「三好や松永ではありませんな」
すぐにだ。山本寺が述べた。
「あの者達はむしろ」
「公方様にとって逆臣」
「それ以外の何でもない」
「そう、まさにそれだ」
山本寺は本庄と色部の話に述べた。
「あの者達はな」
「その通りです。三好、とりわけ松永はです」
謙信はその顔に嫌悪を見せていた。その整った顔に見せるそれは他の者の浮かべるそれよりもだ。さらに目立っていた。
「天下の逆臣です」
「公方様をないがしろにし専横を極める」
「まさに逆臣ですね」
「そうです。三好は管領細川殿の臣でした」
もっと言えばだ。松永久秀はさらにだ。その三好の家の執権なのだ。

「誰よりも公方様を盛り立てなければならないというのにです」
「それをせずにですね」
「公方様へのあの仕打ち」
「それはまさに」
「逆臣以外の何でもありません」
謙信の顔にまた嫌悪が宿った。
「その者達は。むしろ」
「討つべき者ですね」
「そうですね」
「その通りです。ですから彼等ではありません」
間違ってもだ。彼等ではないというのであった。
「そしてその一人とはです」
「誰ですか、それでは」
「その者とは」
「あの男です。蛟龍です」
まさにだ。彼だというのだった。
「尾張の。あの男です」
「そうですか。尾張のあの男ですか」
「織田信長」
「あの男ですか」
「あの男がです。私の他に公方様が頼りとする者です」
信長こそだ。まさにそれだというのだ。
そう話す。しかしであった。
謙信はそれと共にだ。眉を顰めさせてだ。こう話すのであった。
「ですが。あの者の敬意はです」
「織田のですか」
「あの男の敬意はですか」
「殿のそれとは違いますか」
「そう、違います」
はっきりとだ。こう話したのだった。

「私は幕府そのものに忠義を誓っています」
「それが違うと」
「そうなのですか」
「彼は。おそらくは」
謙信はその信長についてさらに話す。
「公方様御自身に対していい感情を持っているのです」
「では幕府に対しては」
「違いますか」
「重く見てはいないでしょう」
まさにだ。その通りだった。謙信はその超人的な勘でだ。そのことを見抜いていたのだ。一目見ただけのその相手のことをだ。
「形骸化した存在と見ていると思います」
「確かに。今の幕府は弱っていますが」
「幕府そのものには見切りをつけている」
「それがあの御仁の幕府への見方ですか」
「それは間違っています」
ぴしゃりとだ。謙信は信長のその見方は否定した。

第三十話　交差その十

「あってはならないことです」
「武家の者ならばですね」
「その棟梁である公方様は敬うのは当然として」
「幕府もまた」
「重く見なければ」
「そうです。彼はそれがわかっていません」
また言うのであった。
「そこが問題なのです」
「では。あの御仁に対して」
「殿はいい感情を持たれていませんか」
「左様ですか」
「その考えについてはそうです」
信長のだ。それはだというのだ。
「ですが。人としてはです」
「違いますか」
「お好きですか」
「あれだけ。己が道を突き進める者はいません」
謙信は微笑んでいた。語りながら。
「羨ましくもあります」
「羨ましいですか」
「自然と。そう思うのです」
見ればだ。謙信の顔が微笑んでいた。
「彼のことを思うとそれだけで」
「そういえば殿は」
「武田に対してもですね」
「甲斐の虎に対しても」
「確かにあの男も勝手な行動を取る男です」

謙信にとってはだ。彼の行動はそれなのである。
「ですが、それでもです」
「御嫌いではないのですね」
「嫌いではありません」
否定した。はっきりとだ。
「甲斐の虎は強敵です」
「強敵ですね、確かに」
「殿にとって」
「私にとってかけがえのない」
ここで、だった。信玄をこう評したのであった。
「『とも』なのです」
「強敵でありながらです」
「友人でもある」
「それがあの男ですか」
「互いに認め合い、知っている者は何か」
それが何か、謙信はこのことも語るのだった。
「それを『とも』と言うのではないのですか」
「言われてみれば。確かに」
「そうなりますね」
「まさにそれこそがです」
「そうです。それが『とも』なのです」
謙信の言葉が続けて出される。
「私にとって甲斐の虎はまさにそうなのです」
「そして尾張の蛟龍もですか」
「あの男もまた」
「殿にとってそうした存在になりますか」
「やがては」
「そうなるかも知れません」
謙信は楽しげに笑って家臣達のその言葉に応えた。
「そしてその時はです」

「毘沙門天の御加護を受け」
「そのうえで」
「毘沙門天は天下を守護するもの」
まさにそれだというのだ。謙信には私はない。あるのは義である。
その彼にとってはだ。毘沙門天はまさにそうした存在なのだ。
「その毘沙門天がです。尾張の蛟龍が天下を定めぬ存在となるならば」
「その時は織田を討つ」
「そうなりますか」
「そうです。私はその時に戦うでしょう」
謙信は言った。強く確かな声で。
「毘沙門天の剣となって」
「では我等は」
「その殿の手足となり」
「そのうえで殿と共に戦いましょう」
「頼みます。では明日にです」
謙信達もだった。明日にはだ。
「越後に発ちましょう」
「戻り。そしてですね」
「また国を治めましょう」
「戦もしましょう」
こう話すのであった。信長と謙信は都において擦れ違ったのであった。それが二人の最初の出会いであった。

第三十話　交差その十一

そして擦れ違った二人はそれでお互いを知った。それは彼等こそができることであった。その二匹の龍がだ。そうしたのである。

しかしだ。この時だ。東北においてだ。もう一匹の龍が出て来ていた。

右目に眼帯をしている。総髷に髪を結った精悍な顔立ちの若い男がだ。馬を駆っている。そのうえでだ。

周囲に対してだ。こう問うていた。

「今はどの辺りじゃ！」

「はい、今はです」

「芦名の領地との境辺りです」

後ろに続く家臣達が彼に答える。彼等は今は鎧を着てはいない。戦に向かう姿ではなかった。

「その辺りです」

「違うわ！そうではない！」

眼帯の男はだ。その家臣達にこう返すのだった。

「わしが問うておるのはわしが今どの辺りにおるかじゃ」

「それですか」

「そのことですか」

「越後に黒い龍がおるのう」

謙信のことだ。それは言うまでもない。

「天下随一の。あの軍神がのう」

「上杉謙信でございますか」

「あの男ですか」

「そして龍はもう一匹おるな」

その龍のこともだ。隻眼の男は言った。

「尾張のあの青い蛟龍よ」

「あのうつけと評判の」

「あの男でございますか」
「ははは、うつけか」
天下に知られるその呼び名にだ。男は笑って応えた。
「そうじゃな。確かにあれはうつけじゃ」
「うつけもうつけでございます」
「おおうつけだとか」
「いいのう。わしもそうじゃしな」
楽しげな笑みであった。それと共の言葉だった。
「わしも。みちのくのおおうつけじゃ」
「殿、それはです」
「言わぬ方がよいかと」
「何、まことのことじゃ」
ここでだ。男の顔に一抹の寂寥が宿った。一瞬だが確かにだ。
「この右目故に。母上に忌み嫌われ疎まれる。おおうつけじゃ」
「いえ、それは」
「その」
「東の方様にも御考えが」
「よいわ。事実じゃ」
馬を駆りながらだ。男は言うのだった。
「わしは片目のじゃ。おおうつけじゃ」
そしてだ。また言うのであった。
「しかし越後の龍もうつけだったそうじゃな」
「幼い頃はかなりの乱暴者だったとか」
「手がつけられないまでの」
「同じよ」
男はまた言った。
「わしもうつけじゃ。越後や尾張と同じな」
「同じだと」
「あの者達と」
「そしてじゃ。龍であることも同じじゃ」

それもだというのだ。同じだとだ。
「越後の黒い龍に尾張の青い蛟」
「そして殿は」
「何でしょうか」
「奥羽の独眼龍じゃ」
それだというのであった。
「色はまだないのう。それはこれから着けるか」
「色もですか」
「それもでございますか」
「そうじゃ。それはこれからじゃな」
こう話すのだった。その左目で前を見ながらだ。
「色についても考えておこうぞ」
「左様ですか」
「しかし。殿もまた」
「龍ですか」
「それであると」
「そう仰るのですね」
「そうじゃ」
まさにだ。その通りだというのである。
「この伊達政宗はそうじゃ」
「龍でございますか」
「若殿もまた」
「そうよ。龍は龍でも」
不敵な笑みと共にだ。その男伊達政宗は言う。
「独眼龍じゃ」
「それでございますか」
「あの二匹の龍に対して」
「若殿は独眼龍」
「そうだというのですね」
「その独眼龍は只の龍ではないぞ」

天を見上げた。蒼天をだ。その青い空を見上げながらだ。彼はまた言うのだった。

「天下を自由に飛ぶ龍じゃ」

こう言うのであった。

「二匹の龍も。虎も獅子も従えてじゃ」

「甲斐も相模もでございますか」

「そうされますか」

「そうじゃ。そうするぞ」

天下を見ていた。それを言った言葉だった。

「わしはこのみちのくで終わらぬ。天下を手中に収めるぞ」

「では我等も」

「若殿と共に」

「天下を」

「奥州？羽州？小さい小さい」

彼等が今その場所はだ。政宗は一笑で終わらせた。

「天下よ。天下に羽ばたくぞ」

こう言うのであった。そうしてであった。

奥羽でもだ。一人の英傑が出ていた。今天下に数多くの英傑達が生まれ出ていたのだった。

第三十話　　完

２０１１・３・３

第三十一話　尾張への帰り道その一

第三十一話　尾張への帰り道

尾張に戻る信長一行。その中でだ。
木下がだ。笑いながらこんなことを一同に話していた。
「いや、馬も何とか」
「慣れてきたか？」
「そうなってきたか？」
「うむ、何とかのう」
こう話すのであった。その一同に対してだ。
「最初はどんなものかと苦労しておったがのう」
「そういえば猿は生まれてからずっと馬に乗ってはおらんかったな」
山内が彼の傍に来て話す。彼の馬は中々上手い。
「そうじゃったな」
「左様じゃ。馬に乗ったのは将になってからじゃ」
こう山内に話すのだった。
「それまで。馬なぞとても」
「そうじゃな。馬に乗るとなるとな」
「大層な身分の方か。それか騎馬隊でもなければじゃ」
乗るようなものではなかった。馬は高価なものだからだ。
「わしみたいな身体の小さい者が騎馬隊にはのう」
「なれんな」
「それは絶対にな」
「なれるものではない」
「猿のその身体ではのう」
小柄なその身体ではだ。確かに騎馬隊は無理だった。木下の身体は小柄で痩せている。しかも足も長いというものではなかった。
「騎馬隊は無理じゃな」
「足軽じゃな」５６

「それしかないわ」
項垂れた顔を作ってみせてだ。木下は話すのだった。
「わしはのう」
「そうじゃな。猿はのう」
森長可もその木下に話す。
「馬はどう見ても合わんわ」
「馬と猿は相性がよかったとおもうがな」
今言ったのは蜂須賀だ。ここでもやや木下を庇う。
「それでもじゃ。実際はな」
「猿は猿でも随分と変わった猿だからのう」
森はここで笑った。そのうえで木下を見て話すのであった。
「どっちかというと馬や刀より頭を使う方が得意な猿だからのう」
「そうじゃな。猿は頭じゃな」
蜂須賀もそれはその通りだというのだった。
「どっちかというとまさにそうじゃな」
「弓も槍も使えぬしな」
実は木下はそうしたことはまるで駄目なのだ。刀でさえ下手なのだ。つまり武芸に関してはだ。褒められるところがないのである。
「しかし頭を使えばのう」
「これで小才があるからのう」
「頭があれば何でもできるぞ」
木下も誇らしげにそれを話す。
「あとは女房さえいればじゃ」
「おお、そういえば御主あれだったな」
前田がここで楽しそうに言ってきた。
「何でも住んでおる屋敷の」
「うむ、足軽大将になって何とか家を持てたぞ」
笑ってだ。前田にも応える木下だった。彼もようやく家を持てるようになったのである。足軽大将になってその俸禄によってだ。
「それでじゃ。向かいの」

「ねねじゃな」
「何じゃ、知っておるのか」
「まつの友達だからのう、そのねねが」
前田は笑いながら話していく。
「よう知っておるわ」
「そういえば又左もそろそろ」
「そうじゃ。尾張に帰れば結納じゃ」
そうなるというのである。つまり妻を迎えるということだ。
「ねねとのう」
「そうか。いよいよ又左も所帯を持つか」
「尾張でも名うての暴れ者がのう」
「遂にか」
「ははは、ねねは昔から知っておる者同士じゃ」
ここでまた笑って話す前田だった。そのことに対してである。彼は実に上機嫌なものを見せるのだった。それが顔にも出ている。

第三十一話　尾張への帰り道その二

「兄妹が夫婦になるようなものじゃな」
「そうじゃのう。ねね殿は強いしのう」
今度は慶次が出て来てだ。こんなことを言った。
「わしが叔父御にうんと塩辛い梅干を食わせて笑っておったら棒を投げられてそれが見事額に当たったことがあったわ」
「あれは御主が悪いわ」
前田はすぐに怒った顔になって歳の離れていない甥に言った。
「あんな塩辛い梅があるか」
「それがいいのではありませんか」
「よくないわっ」
前田の声は明らかに怒ったものだった。その声で甥に返す。
「わしを塩漬けにするつもりか」
「また大袈裟な」
「では御主が食ってみるか」
「いやいや。それがしは味噌の方がよいので」
笑ってそれはいいとい慶次であった。
「塩の方は」
「全く。この悪戯小僧が」
「いや、しかし小僧とはいっても」
木下がここで前田と慶次に対して言ってきた。
「又左殿と慶次殿の年齢は変わりはしませぬが」
「それでもじゃ。こ奴は悪戯小僧じゃ」
馬上でだ。慶次を見据えながら言う前田であった。
「全く。幾つになっても変わらぬわ」
「全くよの。わしもこいつは子供の頃から知っておるが」
佐々もだった。慶次を見ながら話すのだった。
「その頃から。悪戯ばかりしておったわ」

「それがしの趣味でござる」
「そんな趣味はいらんわ」
「全くじゃ」
前田と佐々は二人になって慶次に怒った声で告げる。
「幾つになっても変わらん男じゃ」
「どうしたものか」
「どうも慶次殿というのは」
木下秀長が兄の横で言う。
「童心を忘れぬ方の様ですな」
「童心か」
「それだというのか」
「はい、それでございます」
こう同僚達にも話す。
「そうした方の様ですな」
「つまりずっと悪戯小僧のままか」
前田は童心と聞いてそう考えたのだった。
「どうしようもない奴だというのじゃな」
「いや、どうしようもないかというとそうではありませぬ」
「違うのか、それは」
「はい。むしろいいことでございます」
こう前田の他の同僚達にも話していく。
「それは」
「よいのか？」
「悪戯ばかりしおるのに」
「それがよいというのか」
「童心もまた大切なものでございますよ」
木下秀長だけがだ。笑って言うのである。
「思わぬものを見ることもできますし」
「そういえば慶次は時として凄い閃きを見せるのう」
「うむ、特に戦の場でな」

家臣達も彼のその言葉を受けて考えていってだ。慶次を見ながらだ。

「それもまた童心か」

「では。この男のそうしたところもまた」

「力になるのじゃな」

「その通りじゃ。確かに慶次は不便者よ」

信長は家臣達の話が一段落したのを見届けてからだ。そのうえでこう口を開いて言うのだった。まずは不便者だとである。

「しかしじゃ。その悪戯の心がよいのじゃ」

「それが童心だからこそ」

「左様ですか」

「明の学者の言葉だったでしょうか」

ここで言ったのは林である。

第三十一話　尾張への帰り道その三

「確か」
「そうじゃったな。李とかいったな」
信長も林のその言葉に応えて話す。
「まああの国には李という名前が多いがのう」
「李卓吾だったでしょうか」
「そういう名前だったかのう。とにかくその者じゃったな」
「はい、童心の重要さを言ったのは」
この辺り林の学識が出ている。彼は織田家においてかなりの学識の持ち主として知られているのだ。それで信長の役にも立っているのだ。
「そうだったかと」
「そうじゃったな、とにかくその者じゃったな」
「はい、童心を説いたのは」
また話す林だった。
「それでその童心ですが」
「慶次にはあるのじゃ」
「そしてそれがですね」
「うむ、それがよいのじゃ」
信長は笑顔で話す。
「そのまま行けばいいのじゃ。慶次はのう」
「ではそれがしは不便者でいきまする」
「それで行くのじゃぞ」
また言う信長だった。
「よいな」
「遠慮なくそうさせてもらいます」
「それぞれよいところがあるのじゃ」
信長の今の言葉は家臣全員への言葉だった。

「だからこそわしも用いる」
「だからでございますか」
「我等を用いられるのは」
「それで」
「そうじゃ。用いぬのなら最初から用いぬ」
この考えは今も徹底していた。信長は用いない者は最初から用いない。しかし用いるとなればだ。最後まで用いる者なのである。
「そうするからのう」
「そうですな。殿がいつも言っておられる通り」
「用いぬならですな」
「最初から」
「そういうことじゃ。さて」
ここまで話してだ。そのうえでだ。
信長は自分から馬を前に進めてだ。そうして家臣達に言うのだった。
「では。足を速めるぞ」
「そうですな。その分速く尾張に戻り」
「ゆっくりとしますか」
「長旅になった。骨休めも必要じゃ」
だからだというのである。
「それでじゃが」
「それで？」
「それでといいますと」
「またわしに会いたい者がおるからのう」
こんなことも言うのだった。
「その者と会っておかねばな」
「刺客でございますな」
滝川がすぐに言った。
「あの者達が」
「もう一組おったな」

「はい、おりまする」
その通りだとだ。滝川は主に述べた。
「それは既にです」
「傍に来ておるか」
「どうされますか。それで」
滝川は鋭い声で主に問うた。
「今度は」
「そうだのう。今度はな」
「また訪問されますか」
「まさかとは思いますが」
「ははは、同じ手を続けてやるのは面白くない」
家臣達にだ。笑ってこう話すのだった。
「今度はじゃ」
「何を考えておられるやら」
「どうやら殿もこれは」
家臣達は信長をやれやれといった顔で見ながら話す。

第三十一話　尾張への帰り道その四

「悪戯小僧というか」
「童心というか」
「それをお持ちの様ですな」
「一度やったことは絶対に覚えられてしまう」
信長はこう彼等に返す。
「だからじゃ。同じことはせんことじゃ」
「策ですか」
「その意味もありますか」
「そうじゃ。確かに悪戯にもなるがのう」
それも忘れない。やはり彼は童心を持っている。
だがここで策も淹れる。その辺りが信長だった。
童心の中に策を入れながらだ。そのうえでまた話すのだった。
「まあ今から考えておる」
「左様ですか」
「既にでございますか」
「刺客の者達の場所じゃが」
信長は滝川に顔を向けた。その彼にだ。
「それはわかるか」
「はい、既に」
滝川はそこまで調べて把握していた。既にである。
そしてだ。その場所までだ。主に話すのだった。
「ここから二里先に行った宿にでございます」
「そこか」
「はい、そこにいます」
また話す滝川だった。
「そこにいますが。どうされますか」
「うむ、それではじゃ」

ここまで聞いてだ。すぐにであった。
信長はまた滝川に顔を向けてだ。そのうえでだ、彼に対して告げた。
「久助、それではじゃ」
「はい、それでは」
「そなた、すぐにその宿に向かえ」
こう彼に告げるのだった。
「そしてじゃ。わしの茶会に招くのじゃ」
「そうせよというのですか」
「これから実際にこの辺りで茶会を開く」
実際に開くというのだ。その茶会をだ。
「幸い粗末だが茶器は持って来ておるしな」
「何と、ここにもですか」
「持って来ておられたのですか」
「そうだったのですか」
「何時か開こうと思っておった」
ここで本音も出た。
「しかし。その機会がなくてのう」
「それでなのですか」
「茶器も持って来ておられたと」
「しかし今ここで役に立った」
「そうなりますな」
「うむ、茶会が開けて何よりじゃ」
信長はそのことを純粋に喜んでいた。茶は彼の愛するところである。野外での茶会もだ。彼は時折だが開いているのである。
そしてそこにだ。家臣達も招くのだ。時にはその傍に来た民百姓も大勢入れることもある。彼は茶を一人で楽しむ男ではないのだ。
それでだった。実際にであった。
「ではじゃ。久助よ」
「わかりました。刺客達も」

「茶に呼べ。共に飲もうぞな」
「はっ、それでは」
「殿、その悪戯ですが」
林通具がだ。いぶかしむ顔で主に言った。
「久助にとって危険なのでは」
「そう言うか」
「はい、これはです」
その顔でまた言う彼であった。
「久助一人で行けば。刺客達に」
「そうですな。先のはです」
佐々もだ。ここで信長に言う。

第三十一話　尾張への帰り道その五

「それがしもいましたので何とかなりましたが」
「久助一人となるとです」
林通具はさらに話す。
「やはり。流石に」
「危ういのでは」
「そう思うか」
だが、だった。信長はここで楽しげに笑ってだ。こう彼等に述べるのだった。
「一つ忘れておるな」
「一つとは」
「といいますと」
「久助の出は何じゃ」
彼がここで話すのはこのことだった。
「それは知っておろう」
「忍です」
「そうでございますが」
「そうじゃ。忍じゃ」
それをまた話す信長だった。
「そもそも刺客のことを調べたのはじゃ」
「忍の者達を使って」
「そうしたというのですね」
「つまりは」
「そうじゃ。それでこそじゃ」
そのことを話すのだった。つまりだ。
「久助は一人ではないのじゃ」
「では。一人で行かせてもですか」
「問題はない」

「そうなりますか」
「その通りじゃ。これでわかったな」
あらためて二人に話す。二人もだ。
納得した顔で頷いてだ。そのうえで主に話す。
「ですな。見落としておりました」
「久助が忍の者であることを」
「一つ一つ覚えておくのじゃ」
信長はその彼等に諭す様に話す。今度はそうしたのだ。
「そうしたこともな」
「そうですな。それは」
「うっかりしておりました」
「全く。それを忘れているとは」
「それがしもまだまだですな」
「まあ覚えればよい」
それでいいという信長だった。
「それはな。そしてじゃ」
「後は久助に任せて」
「そうしてですな」
「そうじゃ。後はここで茶会を開くぞ」
こうしてだった。彼はそのまま茶会を開きだ。実際に家臣達と共に茶を楽しむのであった。
そして暫くしてだ。その滝川が帰ってきた。信長は彼にすぐに気付きこう声をかけた。
「おお、速いのう」
「馬を飛ばしてきましたので」
「忍の足ではないのか」
「それは今は使いませんでした」
滝川は主に対してこう述べた。
「あくまで馬を」
「そうなのか。まあ必要な時以外は馬の方がよいな」

「はい。余分に疲れませぬ故」
「そうじゃ。そしてじゃ」
信長はだ。滝川に再度尋ねた。
「どうだったのじゃ、按配は」
「茶会に誘ったのですが」
「来なかったか」
「驚いて慌てて逃げ去ってしまいました」
そうなってしまったというのである。逃げたとだ。
「残念でしょうか」
「残念じゃな、確かに」
その通りだとだ。信長は真顔で述べた。茶をその手に持ってだ。
「わしとしては是非にと思ったのじゃがな」
「どうも殿に察せられているとわかって。それで逃げてしまいました」
「肝が小さいのう。命を狙うならじゃ」
どうすればいいのか。信長はそれをしかと言うのだった。
「こうした茶会に出ねばじゃ」
「そうしてそこで命を取れというのですね」
「そうしなくて何が刺客じゃ」
咎める様な声ですらあった。

第三十一話　尾張への帰り道その六

「そうは思わぬか、御主も」
「流石にそれは無理だと思いますが」
「覚悟ができぬか」
「到底。無理でございます」
滝川にしてもだ。それはだというのだった。
「やはり。こうしたことは気付かれずしてですから」
「だからだというのか」
「左様でございます」
「ふむ。気付かれてもあえてやる位でなければのう」
まだ言う信長だった。
「駄目なのじゃがな」
「ですからそれは」
「わかった。ならよい」
ここまで聞いてだ。そしてであった。
信長はあらためてだ。滝川にこう告げるのだった。
「してじゃ」
「してといいますと」
「久助、御主も飲め」
笑顔になってだ。それで滝川に茶を勧めるのだった。
「そうせよ。飲め」
「それがしもでございますか」
「そうじゃ。飲め」
また彼に告げる。
「そうせよ。よいな」
「わかりました」
滝川もだ。主の言葉に応えてだ。そのうえで茶を受け取るのだった。

信長自ら茶を淹れてだ。そうして飲ませるのだった。
飲むとだ。それで、であった。
茶の旨味が口の中を支配してだ。笑顔になって話すのだった。
「茶はいいですな」
「ほう、御主もそう言うのか」
「前から茶は好きでしたが」
それでもだというのだ。ここでだ。
「こうして一仕事終えた後、喉が渇いた時の茶はです」
「水以上によいな」
「はい、非常に」
滝川にしては珍しくだ。こう述べるのだった。
「美味でございます」
「ではもう一杯飲むがいい」
滝川にだ。もう一杯勧めるのであった。
「よいな」
「そうして宜しいですか」
「好きなだけ飲め」
信長もまた笑顔になってだ。信長に話す。
「よいな。そうせよ」
「はい、それでは」
こうしてだった。そのうえでだった。
彼等はそのまま飲む。そうしたのだ。
その茶会を楽しみだ。それが終わってからだ。
信長達はまた帰路に着くのだった。その中でだ。
金森がだ。こんなことを言うのであった。
「こうして野外で開くのもいいものですが」
「それでもだというのじゃな」
「左様です。平手殿はこうしたことにはまた怒られるかも知れませんな」
「爺は融通が利かぬからな」

それはだ。信長が最もわかっていることだった。
そのことを話すとだ。余計にであった。
「まあ爺に野外での茶会なぞはだ」
「怒らせる何よりの理由になりますな」
「うむ、茶は茶室、若しくは屋敷の中でするもの」
平手がそう考えていることはだ。実によくわかった。
「それではじゃ」
「やはり怒られますな、平手殿は」
「それはいいことでござるな」
しかしだ。ここで満面の笑顔で言う者がいた。
慶次だ。彼に他ならなかった。
「では。ここは是非」
「待て、この悪戯小僧」
その慶次にだ。すぐに柴田が告げた。

第三十一話　尾張への帰り道その七

「御主あえて平手殿の前でそれをするつもりか」
「なりませんか？」
「それもまた悪戯か」
「面白いと思いませぬか？それで怒られると思うと」
「全く。御主という男は」
柴田は呆れながらも慶次に言う。
「まことの悪戯小僧よのう」
「いや、褒めてもらうと照れまする」
「褒めているのではない」
それはすぐに否定された。全力でだ。
「怒っておるのだ。まあ悪戯小僧でない御主こと。まことにな」
「何なのかわからぬわ」
佐久間も首を傾げさせながら述べる。
「それが御主か」
「そうでござるな」
可児がここで出て来た。
「この者は。そうでなければ面白ろくありませぬな」
「面白いで済ませるのか」
「それがしはそうでございます」
可児は破顔で佐久間に言葉を返す。
「伊達と酔狂がそれがしの生き様でございますから」
「いくさ人という訳か」
「それを自負しておりまする」
「では命も惜しくないと申すか」
佐久間はふと可児のその顔を見てそれから問うた。
「そう申すか？」
「捨てても惜しくないと思う時はあり申した」

「そうか、そこまでか」
「生きるも死ぬも槍一本」
まさにいくさ人そのものの言葉だった。それを言ってであった。
彼は今度は不敵に笑ってだ。こう言うのであった。
「ですから。それはでございます」
「言うのう、全く」
佐久間の声もいささか呆れるものになっていた。しかし柴田のそれとは調子も相手も違う。柴田よりもその強さもいささか弱いのだ。
「傾くか」
「傾くのも嫌いではありませぬ」
「そうか。ではじゃ」
「はっ、それでは」
「また戦の時に頑張れ」
そうせよというのだった。
「遅かれ早かれ今川とは大きな戦になるからな」
「そうですな。その時は是非死ぬ様な場所に入り」
そうしてというのであった。
「どんどん首を獲る所存でございます」
「言うたな、今」
「はい、言いました」
佐久間にそのまま返す。
「御聞きになられたでしょうか」
「聞いたわ。では期待させてもらうぞ」
「はっ、有り難きお言葉」
「わしも聞いたぞ」
信長もだ。それを聞いたと言うのであった。
「しかとな」
「ではその時は是非それがしを危うい場所に」
「送るわ。安心せよ」
「はっ、それでは」

「そしてじゃな」
ここでだ。信長は考える顔になってだ。

第三十一話　尾張への帰り道その八

そのうえで己の傍らにいた丹羽に対してだ。こう告げたのであった。

「して五郎左よ」

「はっ、何でございましょうか」

「三河から清洲までの地はしかと調べておるか」

「それでございますか」

「そうじゃ。それはどうじゃ」

「はい、それは既に」

抜かりないとだ。こう述べるのだった。

「調べております」

「そうか。それではじゃ」

「はい、尾張に戻られれば」

「あの辺りのことはもう一度念入りに調べる」

さらにだ。そうするというのである。

「よいな、そうするぞ」

「わかりました、では尾張に帰られればですな」

「わしも自らあの場所に行く」

彼自身もだ。そうするというのである。

「そうするぞ」

「殿御自らとは」

「そこまでされるというのですか」

「あえて」

「そうじゃ。今川との戦いもまた大きなものとなる」

それを踏まえてだというのである。信長もだ。

「それならばじゃ。わしがこの目で見なければならん」

「それは我等がしますが」

「それでもなのですか」

「殿が御自身で」
「そうされますか」
「己の目で見ずしてどうするか」
実にだ。信長らしい言葉であった。
「そう思わぬか？」
「確かにそうですか」
「御自ら御覧になられて」
「そのうえで、ですか」
「今川と戦われる」
「これは覚えておくのじゃ」
信長の言葉が強くなる。
「まず今川の兵は我等より数が多い」
「そのことですか」
「まずは」
「そしてじゃ」
さらにあるというのだった。
「我等の敵は今川だけではない」
「美濃の斉藤」
「あの者達もですな」
「頭に入れておけと」
「そうじゃ。我等の相手は今川だけではない」
それもまた、だ。重要だというのである。
「そのことが大事じゃ」
「では。今川との戦は」
「長くかけてはならない」
「そう仰るのですか」
「長くかけては話にならんな」
まさにだ。その通りだというのである。
「若しそれで勝てたとしてもじゃ」
「我等が勝ったとしても」

「それでもでございますか」
「傷を深く負ってはどうにもならん」
一言でだ。それは駄目だとする信長だった。
そしてだ。そのうえでこのことも話したのだった。
「それから伊勢や美濃に攻め入るのにもじゃ」
「下手に兵を減らせませんか」
「その為には」
「傷が深い獣を仕留めるのは容易い」
信長はこうも言った。
「しかし無傷の獣は容易ではないな」
「では。ここは何としても」
「今川との戦は傷を浅くしてですか」
「そうして戦わなくてはならない」
「兵は減らせませぬか」
「戦は一つだけではない」
信長はこのことをよくわかっていた。だからこそ言うのだった。

第三十一話　尾張への帰り道その九

どうするのかをだ。それをさらに話す。
「その為にも今川が来る場所を念入りに調べておく」
「そうしてそのうえで」
「今川を迎え撃つ」
「そうされますか」
「そうじゃ。そうする」
また言う信長だった。
「戦の前に。よく調べておくぞ」
「はい、それでは」
「そうしましょう」
「まずはそれですな」
「今川との戦い、どうなるかじゃ」
信長はそのことにだ。かなりの重点を置いていた。
それでだ。今も話すのだった。
「勝つことは前提じゃ」
「勝たなければ終わりですな」
「それだけで」
「そうじゃ、まさに終わりじゃ」
これは最早絶対のことだった。やはり勝たなければ何にもならない。破れば滅びる、今の織田家はそうした状況にあった。
しかしだ。それに加えてなのだった。
「万全の勝ちでなければならんのじゃ」
「その勝ち方もまた」
「問題となりますか」
「わかっておくことじゃ」
信長はまた言うのだった。
「勝ち方もな」

「ううむ、今川との戦」
「尋常なものにはなりませぬな」
「一体どういった戦になるか」
「とんと見当がつきませぬ」
「とにかく今は尾張に戻る」
信長の言葉はここでは先決だった。
「そうするぞ」
「はい、それでは」
「今より」
こうしてだった。信長達は尾張に戻るのだった。その時駿河では。
今川氏真がだ。領民達に気さくにだ。あるものを渡していた。それは。
「これがなのじゃ」
「これがですか」
「馬の病に効く妙薬でごわいますか」
「これが」
「そうじゃ、これじゃ」
こう言ってだ。黒い丸薬を渡していた。そうしてだ。
紙も渡してだ。それについても話すのだった。
「これがこの薬の作り方じゃ」
「これを医者に渡せばですか」
「それでできるのですな」
「そうじゃ。存分に使うがよい」
気さくに笑ってこう話すのだった。
「よいな」
「ここまでのものを教えて下さるとは」
「若殿、宜しいのですか？」
「大事なことなのでは」
「ははは、こうした大事なことは皆が知らねばならん」
氏真はこう言ってだ。それはいいというのだった。

そしてだ。こうも話した。
「病気の馬が減ればそれだけ国がよくなるではないか」
「その通りですが」
「だからでございますか」
「それで我等にも」
「教えて下さいますか」
「そうじゃ。だからじゃ」
それでだというのである。
「だから気兼ねするでない」
「わかり申した。それでは」
「有り難く」
「他の者にも教えるのじゃぞ」
氏真はこう言うのも忘れなかった。そこまでだ。

第三十一話　尾張への帰り道その十

そうしてだ。馬の薬のことを教えだ。そうしてからだ。
駿府の城に戻り。そのうえで今度はだ。
剣を庭で振るう。そこに元康が来た。
彼はだ。氏真の姿を認めるとすぐに彼に声をかけた。
「ここにおられましたか」
「うむ、先程まで城の外に出ておったがな」
「探しておりました」
元康は氏真の前に控えて述べた。
「殿が御呼びでした」
「父上がか」
「はい、戦のことで」
話があるというのだ。
「それで御呼びしろと」
「戦のう」
戦と聞くとだ。今一つ浮かない顔になる氏真だった。
そのうえでだ。元康に対してこう話すのだった。
「わしは剣はともかくじゃ」
「戦はですか」
「どうも不得手じゃ」
それはだというのだ。浮かない顔で述べる。
「兵達を操るのが駄目じゃ」
「その為に我等がいますので」
「安心せよというのか」
「はい、それは」
こう慎んで述べる元康だった。
「ですから」
「頼むぞ。そしてじゃ」

「そして？」
「そなた奥方とは上手くやっておるか」
話を変えてきた。彼の妻について尋ねるのだ。
「それはどうじゃ」
「はい、婚姻したばかりですが」
「仲はよいか」
「何か。妻を迎えるというのは」
元康はそのことにだ。狐につままれた様な顔を見せた。
「不思議なものですな」
「そうそう、それは麿もじゃ」
「若殿もでございますか」
「うむ。それまで一人で自由にやっておったのにじゃ」
どうなるかというのである。
「そこに。おっかないのが来るのじゃぞ」
「奥方は怖いものでございますか」
「我が祖母殿を見るのじゃ」
氏真にとっては祖母であり義元にとっては母だ。その存在も話すのだった。
「いやあ、誰も勝てぬじゃろ」
「あの方ですか。確かに」
「そうじゃ。おなごは可愛いものじゃが」
それでもだと。元康に話す。
「怖いものでもある。忘れてはならんな」
「そうなのですか」
「そなたもそのうちわかる」
今でもなくともだ。それでもわかるというのである。
「では。何はともあれじゃ」
「はい、殿の下に参りましょう」
「そうじゃな。竹千代、おそらくはじゃ」
氏真はあらためてだ。元康を見て述べた。

「そなたが先陣じゃな」
「それがしがでございますか」
「そうじゃ。そなたとじゃ」
もう一人はというとだ。彼だった。
「和上じゃ」
「雪斎殿でございますか」
「正直なところ今川で先陣を任せられるのは二人しかおらん」
それは氏真が見ても言うことだった。何故かというとだ。
「今川は。戦はどうもな」
「不得手だというのですか」
「麿も戦は苦手じゃ」
それは認めるしかなかった。不本意ではあるがだ。
「そして実は父上ものう」
「そういえば殿は」
「馬に乗るのがあれじゃし」
このことはあまりにも有名になっていることだった。今川家でもだ。
「あえて多くは言わぬが」
「左様ですか」
実の父であり今川の主だ。それで言える筈がなかった。
しかしだ。これが今川にとっては痛いところだった。
だがそれでもだった。戦がだ。
はじまろうとしていた。そのことはだ。最早彼等の方でも止まらなかった。

第三十一話　完

２０１１・３・９

第三十二話　結納その一

第三十二話　結納

信長は尾張に戻るとだ。まずは。
信行を召し出してだ。そのうえで告げるのだった。
彼は既に髪が戻っている。剃っていた髪はもう髷になっている。
その彼を己の前に出して。そして告げるのだった。
「ではこれよりじゃ」
「はっ」
「蟄居を解く」
こう彼に告げた。
「よいな」
「有り難きお言葉」
「そなたには早速働いてもらう」
蟄居を解いてだ。すぐにだというのだ。
「清洲の町造りに励むのじゃ」
「それでございますか」
「他の場所にあらかた送ってしまった」
そして清洲にはだ。どうかというのだ。
「肝心の清洲はじゃ」
「それがしですか」
「だから頼むぞ」
信長は笑顔になっていた。そのうえでの言葉だった。
「この時を待っておったわ」
「しかしそれがしは」
「何、確かに反省はせねばならん」
忘れてはならない。それは言う。しかしだった。
信長は己の弟にだ。あくまで言うのだった。
「しかしそなたはわしの弟でありじゃ」

「弟であり」
「織田家にとって欠かせぬ者、その力は必要じゃ」
「だからこそすぐに」
「そうじゃ。働いてもらう」
そのことはだ。変わらないというのだ。
「一門もまとめてもらうぞ」
「わかりました。それでは」
「これから何かと忙しい」
信長は話を変えてきた。その変えてきた話は。
「尾張の政だけでなく伊勢への謀もある」
「そして今川ですな」
「そうじゃ。もう少ししたら来るぞ」
信長の目が光る。その目での言葉だった。
「大軍でのう」
「それに対して我が軍は」
「兵では劣る。まあ今回は兵の問題ではない」
「それではないと」
「正面から戦っては多くの兵を失う。それは避ける」
こう話すのだった。信行にもだ。
「考えはある。その時に仕掛ける」
「では今は」
「既に尾張の東と三河には人をやっておる」
既にだ。そうしているというのだ。
「もう調べておるわ」
「そうしてですか」
「戦は弓を放つ前からはじまっておる」
信長の考えがだ。ここで出た。そしてだ。
それを言ってだ。彼はだ。
信行に対してもだ。こう命じた。
「その時はそなたもじゃ」

「働かせてもらいますか」
「そなたのできることをしてもらう」
「それがしのできることを」
「そうじゃ。してもらう」
言葉が強くなる。
「頼むぞ。織田家の為に」
「はい、承知しております」
こうしてだった。信行が戻ってきたことはまず信長に笑顔で迎えられた。こうして織田家の主だった面々が全て戻った。そうしてであった。
彼等は今川に備えつづ尾張を治め密かに伊勢に策を仕掛けていた。しかし行われているのはそうしたことばかりではなかった。

第三十二話　結納その二

木下がだ。弟に対してだ。新しく己の屋敷になったその家の中でだ。小さくなって話していた。

広い床の部屋に二人だけだ。部屋の真ん中で二人だけで向かい合うと部屋が余計に広く思える。その中でだ。彼は弟に言うのだった。

「実はのう」

「ねね殿のことでございますな」

「むっ、わかるか」

弟の言葉にだ。兄ははっとした顔になった。

そしてそのうえでだ。小声でその弟に囁いた。

「そろそろ母上にもな」

「お話されますか」

「わしのこの口でな」

話すというのである。

「そうしておく」

「左様ですか。それではもう」

「しかしのう。ねねはじゃ」

ここでその妻のことを話す木下だった。難しい顔になってそのうえでだ。弟に対して神妙な調子になってそれを話すのであった。

「わしでよいのかのう」

「兄上で、でございますか」

「わしじゃぞ」

木下は自信のない顔で弟に話す。

「わしの様な。背は低く」

「そしてですか」

「しかも顔はこれじゃ」

その猿そのままの顔についてもだ。彼は言うのだった。

「身体は貧弱だしのう」

「それは関係ないのでは？」
「武芸もできん」
己にある劣等感を次々に話していく。
「身分も低い。字もあまり読めん。そんなわしに」
「いえ、身分は」
「言うことはないというのか？」
「そうです。兄上は今では足軽大将ではありませんか」
「それもかなり上だというのじゃな」
「殿の御前に出られる程の」
そこまでいくと重臣と言ってもいい。だから身分はだというのだ。
「それ程気にされることはありません」
「そうかのう」
「それに顔や背、武芸のことは」
「どうしようもないぞ、それは」
「他のことで充分補えまする」
だが、だった。木下秀長は兄にそれも大丈夫だというのだ。
そしてだ。その理由もだった。彼は今当の兄に語った。
「兄上のその頭で」
「わしのこれでか」
「殿もそれを買われたではありませんか」
「わしの頭をか」
ここで木下は己のその頭を右手でさすってみた。そのうえでの言葉だった。
「これか」
「はい、それがありますから」
また言う弟だった。
「大丈夫でございます」
「ねねと釣り合うか」
「むしろ」
「むしろ？」

「ねね殿でなければ駄目でしょう」
こう言うのであった。
「兄上に釣り合う方は」
「ねねでなければか」
「兄上の奥方は。ねね殿しかおりませぬ」
弟は尚も話す。
「それがしはそう思います」
「ううむ、わしが釣り合うのではなく」
「ねね殿がです。兄上に釣り合う方なのです」
「だといいがな」
「まあ結納は決まっております」
それはだ。既になのだった。

第三十二話　結納その三

「ですから。気にやまれることはありません」
「左様か」
「はい、そして」
「そして？」
「妻を迎えられるのは兄上だけではありませんな」
「そうじゃ。又左殿もじゃ」
彼の名前がここで出た。前田のことだ。
「あの御仁もな。おまつ殿と」
「よいことでございます」
「では二組じゃな」
「兄上と又左殿」
この二人だというのだ。
「そしてねね殿とまつ殿です」
「しかし又左殿とまつ殿は」
その二人はどうか。木下は項垂れた顔で話す。やはり表情が暗い。
「殿の覚えが目出度く」
「母衣衆でしたしな」
「そうじゃ。前田家は名門じゃしな」
織田家の家臣の中ではそうなのだ。
そしてだ。さらにであった。
「槍を使わせれば縦横無尽、しかも政もできるしのう」
「ですから。そういうことを言ってもです」
「仕方ないのじゃな」
「はい、兄上には兄上の武器があります」
そうだというのである。弟はこう言うのだ。
「それを使えばよいのです」
「頭か」

「はい、頭です」
「これを使ってやっていけというのか」
「政はできますな」
「ああいうことはのう」
実際にどうかとだ。木下もこれは答えられた。
「できる」
「では。問題はありませぬ」
「戦ばかりではないか」
「戦も頭を使われればいいではありませんか」
その戦についてもだ。そうすればいいというのだ。
そのうえでだ。再び兄に話した。
「力はなくとも頭があればです」
「やっていけるか」
「むしろその方がいいでしょう。力は一人を相手にするものですが」
しかしだ。頭はどうかというのである。木下秀長の言うことはそれだった。
「頭はです」
「万人を相手にできるか」
「そうです。それに」
「それに？」
「どうも兄上は」
その彼をあらためて見ての言葉だった。
「人に好かれる様ですし」
「人に？馬鹿を言え」
木下は弟の今の言葉は一笑に伏した。その理由も話す。
「わしの如き猿顔がか。人に好かれるか」
「顔ではありませぬ故」
「奇麗事じゃな」
「いえ、、違います」
弟の否定の言葉は強い。

「それは断じて」
「まことか？」
「確かに顔は大事です」
彼もそれは否定しない。
「人間まず顔が見られますから」
「そうじゃ。だからわしは」
「しかし人はそれだけではありません」
こうも言い加えるのだった。
「兄上の場合はです」
「わしはか」
「はい、何かえも言われぬものを感じます」
兄のその目を見ながらの言葉だ。

第三十二話　結納その四

「そうですな。人たらしといいますと」
「人たらしとな」
「そうです。そうしたものを感じます」
「では。わしは顔ではないのか」
木下も自分でそれを話す。
「左様か」
「ですから。先程から申し上げている通りです」
「顔だけではなく」
「そうです。少なくとも兄上は嫌われる性格ではありません」
今度はこのことを指摘してみせるのだった。
「嫌われた経験は。おありですか」
「むっ、言われてみれば」
そう問われるとだ。彼も気付いたのだった。
「今の織田家において」
「誰からも嫌われてはおりませんな」
「権六殿には時折言われるが」
「あの方はあれが普通です」
柴田についてはそうなのだというのだ。
「むしろあの方は本当にお嫌いなら」
「ああはされぬか」
「一切話されません」
本当に嫌いな相手にはそうする、それが柴田だというのである。
「そういう方ですから」
「そうじゃな。確かに」
「少なくとも柴田殿には嫌われておりません」
それは確かだというのだ。そのうえでだ。
彼はだ。さらに話すのだった。

「おなごにはどうですか」
「むっ、嫌われたことはないな」
そのねねをはじめとしてだというのだ。
「誰からもな」
「左様ですな。誰からもですな」
「ではわしは」
「はい、人たらしなのです」
そうだというのだ。木下はだ。
「それもかなりの」
「そうか。わしは顔は悪くとも」
「嫌われることはありません」
「そうか、ないのか」
「はい、ありません」
また話すのだった。
「ですから御安心下さい」
「そうか。ではわしは」
「ねね殿と。幸せになって下さい」
「よし、もっともっと凄くなるぞ」
弟の話をここまで聞いてだ。晴れやかな顔になった。
そしてそのうえでだ。彼はねねを妻に迎えたのだった。
穏やかな顔立ちでそれでいて明るいものを併せ持った。白い顔の女である。背は小柄だがそれでもだ。中々整った身体をしている。
その彼女を妻に迎えたのである。彼は得意満面だった。
そして前田もだ。見事な長い黒髪に細長い流麗な眉、それに小さな赤い唇、黒く大きな目を持っている背の高い女を前にしていた。
その女に言うのだった。
「ううむ、何かのう」
「どうされました？」
「妻に迎えた気がせんわ」
それがないというのだ。

「ずっと一緒におったしのう」
「ですね。私が前田家に来たのは」
「そなたが子供の頃じゃった」
その頃にだ。彼女は前田家に来たというのだ。
「そうじゃったしな」
「それから供にいましたから」
「そうじゃ。妻というよりは」
「いうよりは？」
「妹みたいじゃな」
こう話すのだった。
「どうもな」
「ではお嫌ですか？」
そのおなごはこう話すのだった。
「そうですか？」
「いやいや、まつよ」
前田は笑ってだ。彼女にこう話して述べたのだった。

第三十二話　結納その五

「それは違うぞ」
「違いますか」
「そなたと供にいるからよいのじゃ」
「ではこのままで」
「そうじゃ。供にいようぞ」
笑顔で話すのだった。
「これからもずっとな」
「はい、それでは」
「あの猿も妻を迎えたしのう」
ここで彼は木下の名前も出した。
「わし等もな」
「ですね。木下殿のそのお屋敷は」
「全く。どうしたものじゃ」
前田はさらに笑う。その笑顔での言葉だった。
「向かいにあるとはな」
「そうですね。そこにお屋敷を設けられるとは」
「しかしそれも縁なら」
「楽しまねば損じゃな」
「そういうことですね」
「さて、後は」
ここでだ。前田は考える顔になってこんなことを話した。
「何か腹が減ったのう」
「そうですね。それでは」
「今宵のおかずは何じゃ？」
「はい、魚です」
「それか」
「魚を濃く味付けしました。如何でしょうか」

「よいのう。魚は大好きじゃ」
笑顔で述べる前田だった。
「では。それをな」
「はい、それと大根も」
「二人で食おうぞ。よいな」
こう話してだった。二人で食べるのだった。
「それが美味いからな」
「そうですね。一人で食べるよりも」
「二人じゃ」
また言う前田だった。
「よいな、まつよ」
「そういうところは同じですね」
「変わらんか」
「はい、昔から」
「つまりわしが子供の頃からじゃな」
「そうです、まことに同じです」
「左様か、変わらんか」
子供の頃からと言われてだ。考える顔になる前田だった。
そのうえでだ。まつに対してこう言うのだった。
「では。わしはまだまだ子供だというのか」
「そうではありません」
「完全にそうではないのか」
「そうです。大人になられているところもあります」
「ならばよいのだがな」
「そしてです」
「してとか」
妻になるまつのだ。その言葉をさらに聞く。その言葉は。
「というとどういうことじゃ」
「そうした又左殿だからこそ私も」
「よいとでもいうのか？」

「そうです。だからこそです」
「まあわしでよいのならよいがのう」
「少なくとも私は」
その前田の精悍な顔を見ながら。まつは話していく。
「殿でなければ夫とする気はありませんでした」
「今もか」
「無論です。そしてこれからも」
「言うのう。しかしわしもじゃ」
「殿もでございますか」
「そうしたそなたでなければ嫌じゃな」
このことはだ。変わらないのだった。

第三十二話　結納その六

「そなたがな。妻でなければじゃ」
「左様ですか。私でなければ」
「だからじゃ。頼むぞ」
笑顔で妻に告げ続ける。
「これからものう」
「末永く」
こう言葉を交えさせてだ。新婚生活をはじめる二人であった。そしてだ。
信長はだ。清洲に帰ってすぐに帰蝶のところに来た。そのうえで茶を飲みながら都や奈良の話をしていく。
そしてだ。こんなことを言うのであった。
「色々観て回ったがのう」
「何かいいものはありましたか？」
「いいものは一杯あったぞ」
それはだというのだ。満面の笑みで。
「これからのことを考えるうえでな」
「それはいいことですね」
「うむ、有意義なものだった」
「楽しくもあり」
「そうじゃ、確かに楽しかった」
信長がまた言う。そしてだ。
ここで傍にあった果物を食べる。そのうえでまた帰蝶に話す。
「甘いものもじゃ」
「ありましたか」
「尾張以上にな。砂糖もあったぞ」
「砂糖もですか」
「うむ、あった」

それもだ。あったというのだ。
「あれは中々手に入らぬものじゃが」
「そうですね。まさにそれ自体が宝です」
「あれが簡単に手に入れば」
袖の中で腕を組んでだ。こう言うのであった。
「かなり違うのじゃが」
「しかしそれは無理ではないでしょうか」
「この国で砂糖はか」
「はい、無理ではないでしょうか」
また言う帰蝶だった。
「砂糖は。流石に」
「まあすぐには無理じゃな」
それは信長も認める。すぐにはだというのだ。
「しかし。やがてはじゃ」
「それができるようになると」
「甘いものをより食えるようにすることも大事じゃ」
そうしたことも言うのであった。
「砂糖もそうじゃし」
「果物もですね」
「その通りじゃ。果物の栽培をどんどんさけるのもいいな」
「蜜柑や葡萄を」
「梨もじゃな。果物といっても色々ある」
酒を飲めぬだけあってだ。信長のそちらへの話は深い。そして確かだった。
「そうしたものを栽培させてじゃ」
「それはいいですね。ただ食べるだけでなく」
「それがまた国を豊かにする」
そうしたことまで考えてのことであった。信長の政への思慮は深いのだ。
「だからこそな」

「そうですね。米だけではなくですね」
「米だけでは限度がある」
信長は米だけにこだわらない。それも彼の考えの特色だった。
そしてだ。さらにであった。
「実際。果物だけでなく」
「他のものもですね」
「茶にしろ紙にしろ。わしは飲めぬが酒もよい」
それもだというのだ。
「酒もどんどん造らせて売らせるのじゃ」
「さすれば。国は余計に」
「よくなる。今尾張でもやっておるがな」
「胡瓜や胡麻がそうですね」
「左様じゃ。とにかく米以外のものも作ればよい」
笑って妻に話すのだった。
「そして売っていけばのう」
「左様ですね。それは」
「堺もよかったしのう」
今度はだ。堺の話だった。

第三十二話　結納その七

「あの町は多くの国から人が来ておったわ」
「大層賑やかだとか」
「凄いぞ。目が青い者が実際におる」
「南蛮人ですね」
「そうじゃ。髪は赤かったり金色でのう」
「何か天狗の様ですね」
「そうじゃな。天狗じゃな」
信長は帰蝶の今の言葉で気付いた。そのことにだ。
「南蛮人は天狗に似ておる。鼻が高く顔が赤くてじゃ」
「まさに天狗ですね」
「それにその髪もじゃ」
「髪もですか」
「もじゃもじゃとしておる」
そうしたところまで見てだ。妻に話すのである。
「鬼にも似ておるのう」
「そうですね。顔も赤いとなると」
「ごついしのう。しかしじゃ」
「しかし？」
「思うのはじゃ」
ここでだ。信長は彼等について。こうしたことも話した。その話すことは。
「髭は濃く身体中毛だらけじゃ」
「毛深いのですか」
「あれでは夏は暑いであろうな」
このことを話すのである。
「随分とのう」
「そうですね。毛深いとどうしても」

「少なくともわしはああして毛深いとじゃ」
どうなのか。信長は自分に当てはめて述べる。
「夏が辛いので勘弁願いたいな」
「左様ですか」
「そうじゃ。そしてじゃ」
「そして？」
「おなごもおった」
今度はその話だった。話を急に変えたのである。
「よいおなごもおった」
「左様ですか」
「むっ、反応がないのか」
帰蝶が全く動じないのを見てだ。信長は少し拍子抜けした。
そのうえでだ。いぶかしみながらこう述べたのであった。
「もっと。こうじゃ」
「嫉妬せよと仰るのですか」
「少しはそうしたところを見せると思ったがのう」
「生憎そうしたことはありません」
本当に動じていない。平然とさえしている。
その平然とした顔でだ。帰蝶はさらに話す。
「そもそも妻が何人もいる話なぞ何処にでもあります故」
「だからか」
「はい、だからです」
まさにその通りだというのである。
「それで誰が一番よかったでしょうか」
「それがのう」
困った顔で首を傾げさせながらの今の言葉だった。
「おらんかった」
「いなかったとは」
「だからじゃ。そこそこのおなごは一杯おった」
「そこそこでございますか」

「そうじゃ。そこそこじゃ」
また話す信長だった。
「とびきりのおなごはおらんかった」
「都にも堺にもですか」
「うむ、おらんかった」
信長のその言葉は続く。
「一人もおらんかった」
「左様ですか」
「結局じゃ。御主程のおなごはおらんかった」
「私ですか」
「御主が一番よ」
笑いながらだ。信長は妻に話す。

第三十二話　結納その八

「天下一よ」
「またそんなことを」
そう言われてであった。不意にだ。
帰蝶の顔が赤くなった。紅に染まる。そしてその紅の顔で言うのである。
「からかうものではありません」
「むっ、からかいだと思うのか」
「それ以外の何だというのですか」
「本当のことを言ったまでじゃ」
信長はその帰蝶の顔を見ながら楽しげに話していく。
「御主程のおなごは誰もおらんかったわ」
「そうですか」
「そうじゃ。しかしじゃ」
「しかし？」
「御主、顔が赤いぞ」
このことをだ。本人に対しても話した。
「真っ赤になっておるぞ」
「それは気のせいです」
強引にだ。それを否定するのである。
「殿の目の錯覚です」
「そう申すか」
「はい、気のせいです」
まだこう言う帰蝶だった。
「それ以外の何でもありません」
「言うのう、実に」
「私は嘘は言っていません」
「しかし本当のことは隠しておるわ」

笑ってだ。その妻に話すのである。
「言葉にはじゃ」
「言葉にはとは」
「顔に出ておるぞ」
その真っ赤になってしまった顔にだというのだ。やはり信長の方が一枚上手だ。
その一枚上手の信長はだ。さらに話すのだった。
「目にもじゃ」
「目にもですか」
「そうじゃ、目にもじゃ」
そこにもだというのだ。目にもだ。
「目が泳いでおるぞ」
「それは」
「言葉ではどう言ってもそれでも顔や目にも出るのじゃ」
信長は話す。さらにだった。
「わかっておくことじゃ」
「それはわかっていましたが」
「とにかくじゃ。都にはそこまでのおなごはおらんかった」
それは強調してだ。また言うのだった。
「一人もじゃ」
「本当に。何を仰るかと思えば」
「本当のことじゃ。してじゃ」
「して？」
「茶を飲むか」
また話が変わった。今度はそれであった。
「喉が渇いたわ」
「そうですね。それでは」
「そういえばそなた酒は」
「はい、飲みません」
きっぱりとした口調で答えた帰蝶だった。

「というよりかはです」
「飲めぬか」
「どうも。身体が」
彼女もだ。そうだというのである。
「受け付けないので」
「そうか。そなたもか」
「そうした意味では殿と同じですね」
「ははは、それだけではないしな」
笑いながらだ。信長は帰蝶に話すのだった。
「わし等が似ているところはな」
「酒だけではありませんか」
「そうじゃ。他のところもじゃ」
似ていると。そう話すのである。
「似ておるわ」
「そうでしょうか」
「自分ではわからぬか」
「似ていないと思います」
首を傾げさせながらだ。帰蝶はこう返すのだった。

第三十二話　結納その九

「特に」
「わしも最初はそう思っておった」
信長もだ。実はそうだというのだ。
しかしだ。それと共にであった。こうも言う。
「今は違う」
「何故そう思われるようになったのでしょうか」
「そなたを見ておってじゃ」
それでだ。変わったというのである。
「どうもな。わしによく似ておるわ」
「酒が飲めないところ以外にでございますか」
「まず気が強い」
その気性がだというのだ。
「そして周りをよく見ておるな」
「確かに見る方です」
「そして馬も好きじゃな」
「申し上げますと武芸全般が」
「その辺りも似ておる」
また話す信長だった。
「しかも勘が鋭い」
「それはそうですね」
勘の鋭さはだ。帰蝶もなのだ。
彼女のその勘の鋭さはかなりのものだ。信長も鋭いがだ。彼女にしてもだ。その勘の鋭さはだ。相当なものなのである。
「しかしそれだけでは」
「違うというのじゃな」
「似ているというところまでは」
「いや、他にもあるぞ」

「他にもですか」
「食べるものの好みも」
それもだった。
「味噌は好きじゃな」
「はい」
「甘いものも」
「ついでに申し上げますと味は濃い方が」
「やはりわしに似ておる」
その味の好みだ。話されるのだった。
「そうしたところもな」
「味の好みもですか」
「そうじゃ。そうしたところを見ていってじゃ」
「似ていますか」
「夫婦だからかのう」
似ている理由をそれではないかと述べる。
「やはりな。それでか」
「どうでしょうか、それは」
「まあ似ておることはわかったな」
「そこまで御聞きしますと」
「意外なところであっさりしておるしのう」
「ついでに言えば嫉妬深い方ではありません」
「わしもじゃ」
嫉妬という感情はだ。二人にはなかった。
信長もだ。その嫉妬というものについて話すのだった。
「他人を羨ましいとは思わぬな」
「あくまでご自身はご自身ですね」
「他人を羨んで何になる」
これが信長の考えだった。それを実際に口に出すのである。
「何かを生み出すか？」
「いえ、何も」

「そうじゃな。羨んでも何にもならぬ」
また言う信長だった。
「よいものを取り入れるのならともかくじゃ」
「その通りですね。そうしたところも」
「似ておるのう、わし等は」
「これは最初からでした」
帰蝶のそうした嫉妬に縁がないところはだ。そうだというのだ。

第三十二話　結納その十

「嫉妬というものはどうも」
「感じぬか」
「幼い頃から。そうしたことは」
「わしもじゃ。では」
「夫婦になる前からでしょうか」
「わし等は似ておるのかのう」
こうだ。信長も話す。
「幼い頃からな」
「そうですね。考えてみれば」
「ははは、似た者同士だから一緒になったのかもな」
信長はここで笑った。そのうえでの言葉だった。
「縁があってな」
「そうかも知れませんね、それは」
「ではじゃ」
ここまで話してだ。信長はだ。
話題を変えてきた。その話題は。
「さて、では茶を飲んだ後でじゃ」
「その後で」
「何をしようかのう」
楽しげに笑ってだ。妻に問うのである。
「馬でも乗るか」
「宜しいのでは、それで」
「うむ、それではじゃ」
帰蝶の言葉にだ。信長は頷いた。
そうしてだ。まずは茶を飲んでだった。
「では行くとするか」
「はい、それでは」

「服を着替えるか」
「いえ、それには及びません」
「まさかと思うがその服で馬に乗るのか？」
信長は怪訝な顔になった。何故ならだ。
帰蝶の今の服はだ。奥方のその服である。その服で馬に乗ると思ってである。
「無理じゃろ、それは」
「いえ、着替えなぞはです」
「それは？」
「一瞬でできます」
こう話すのであった。
「その様なものは」
「一瞬か」
「はい、少なくとも然程時間は取りません」
「そこもじゃな」
ここでまた笑って言う信長だった。
「わしと同じじゃ」
「服を替えるのが早いところも」
「忍の者の様にのう」
彼等の着替えの早さについてはだ。もう言うまでもなかった。
「そうしたところもじゃ」
「同じだと」
「しかしよい。ではじゃ」
「はい、共に馬に乗りましょう」
「そうしようぞ」
こう話してであった。彼等は馬に乗りに言った。その乗り方もだ。
実によく似ていたのである。

第三十二話　完

2011・3・16

第三十三話　桶狭間の前にその一

第三十三話　桶狭間の前に

信長のところにである。平手が来て言う。
「駿河のことでございますが」
「うむ、何じゃ」
信長はまずは鷹揚に返した。そのうえで問うのである。
「動きがあったか」
「兵を集めておるようでございます」
平手はだ。こう主に話すのだった。
「そろそろかと」
「そうか、来るか」
「それでどうされますか」
ここからだった。本題である。
「尾張と三河の境に兵を集められますか」
「その場で決戦というのじゃな」
「はい、そうされますか」
問いながら主の顔を見る。とりわけその目をだ。
御互いに強い光をその目から放っている。そのうえでの言葉だった。
「そうして戦われますか」
「いや、それはせぬ」
「されぬと」
「そうだ、せぬ」
また言う信長だった。
「ただ。境の砦にはだ」
「兵を入れられますか」
「大学を向かわせよ」
佐久間盛重をだ。彼を向かわせるというのである。

「あの者と。そして」
「他には」
「猿を向かわせよ」
佐久間盛重以外にだ。木下をというのだ。
「その弟もな」
「あの兄弟は」
「あそこに行かせるべきではないというのだな」
「はい」
その通りだとだ。平手は主に対して答えた。
「おそらく。境は凄まじい戦になります」
「そうであろうな」
「その様な場所にあの猿は」
こう言ってだ。木下自体のことも話すのだった。
「槍も刀も下手です。弓なぞとても使えません」
「向いておらんな。激しい戦には」
「そう思います」
その通りだというのである。５４
「とても」
「その通りじゃ」
そしてだ。信長もである。
それをわかっているとしてだ。平然と答えるのだった。
「あの猿には武芸は無理じゃ」
「それでは何故」
「大学は確かに強い」
佐久間盛重のだ。その軍略も認めはする。
だが、であった。それに留まらないのだった。
「しかし。今度の戦は幾ら強くともじゃ」
「駄目でございますか」
「今川で最も強い者達と戦わねばならん」
「太源雪斎と」

「竹千代じゃ」
この二人だというのだ。
「しかも寡兵でじゃ。大学だけでは死んでしまうわ」
「大学を失うつもりはありませぬか」
「ない」
断言だった。全くないというのだ。
「捨石になぞするものか。大学であろうと誰であろうとじゃ」
「では大学なら止められるからこそでございますか」
「大学と。猿ならばじゃ」
木下のことをだ。ここでまた言うのであった。
「あの猿もおればじゃ。大学は死なずに済む」
「猿がおれば」
「その弟と。そうじゃな」
ここでもう一人の名前が出た。その者の名は。
「小六じゃ。あれも行かせようぞ」
「あの者もでございますか」
「そうじゃ。兵は千程しかつけられぬが」
それでもだというのである。信長は真剣に話す。

第三十三話　桶狭間の前にその二

「それでもじゃ。やってくれるであろうな」
「ではその千の兵で足止めされますか」
平手は今度は用兵全体について話をはじめた。
「そして。残りの全軍で援軍に向かいそのうえで今川を」
「爺、そなたはじゃ」
信長は平手の今の言葉に答えなかった。そのかわりにだ。
彼に対してだ。こう告げるのだった。
「一万二千の兵を率いじゃ」
「一万二千でございますか」
「美濃との境に向かえ」
こう告げるのである。それを聞いた平手はだ。
怪訝な顔になってだ。すぐに主に対して問い返した。
「殿、今何と」
「聞こえなかったか？よもやそこまで歳ではあるまい」
「聞こえてるからこそ問い返すのでございます」９８
こう返すのがやはり平手である。彼は主に対して咎める顔で話すのだった。
「ここで美濃でございますか」
「左様じゃ。美濃との境じゃ」
「まさかそのまま美濃に攻めよと」
「そうすると思うか？わしが」
「若しそう仰るなら」
どうするか。平手は本気で話す。
「今ここで殿に厳言を申し上げているところでございます」
「安心せい、幾ら何でもそれはないわ」
信長もだ。それは笑って否定した。
「今は今川じゃ。斉藤はその後じゃ」

「さすれば何故」
「普通にやっては多くの兵を失う」
ここでこう言う信長だった。
「そうじゃな」
「しかし元々こちらの方がです」
「兵が少ないというのじゃな」
「それで何故また」
しかしだ。言っているうちにだ。
平手は頭の中で考えてだ。こう述べたのだった。
「まさか。清洲に篭城し囲まれたところに兵を戻し」
「そう思うか」
「それしかありませぬ故」
兵法の常識で考えてだ。こう述べたのである。
「考えられるのは」
「ははは、確かにのう」
「むっ、これは」
平手は信長の今の笑いでだ。あることを察した。
そのうえでだ。やれやれといった顔になってだ。主に言うのであった。
「またですか」
「まただと思うか」
「全く。変わったことばかり考えられるのですから」
「普通にやってまずい場合は変わったことをすることじゃ」
信長は笑ったまま平手に返す。
「だからじゃ。今度もじゃ」
「そうされますか」
「左様じゃ。今川を出し抜く」
このことはだ。真面目な顔で話すのだった。
「そうして勝つぞ」
「そうされますか」

「さて、これから暫く忙しいぞ」
信長はこうも話した。
「何かとじゃ。わかるな」
「それは既に」
「爺にも色々とやってもらう」
「さすれば。まずは兵を美濃との境に送り」
「それが最初の一手じゃ」
最初だというのだ。そしてである。
さらにだとだ。信長はその言葉を続けていく。
「それからもどんどん手を打っていくぞ」
「相手を詰ませるのですな」
「ただし。詰みまでは気付かせぬ」
「王手を隠したうえで」
「詰みまでもっていく。よいな」
「そして織田の勝ちを」
「手に入れるぞ」
平手とだ。こうした話をした。そうしてだ。

第三十三話　桶狭間の前にその三

実際にだ。信長は彼に一万二千の兵を与え美濃との境に向かわせた。

そして一千の兵を佐久間盛重に預けそこに木下達を加えてだ。そのうえで彼等は三河との境に向かわせた。その動きを見てだ。

家臣達の多くはだ。こう言うのだった。

「ふむ、そう来るか」

「平手殿に兵を預けそのうえで」

「敵が清洲に来た時に」

「一気に」

誰もがだ。そう考えるのだった。

そしてだ。三河についてはこう思うのだった。

「敵を引きつけそのうえで」

「適度などころで退く」

「そういう御考えじゃな」

「殿らしいと言えるか」

信長らしい。そうした言葉も出る。

「相変わらず。変わったやり方を好まれる」

「しかしこのやり方だとな」

「今川に勝てるな」

「そうじゃな」

正面から戦うよりもだ。手堅い作戦だと思われたのだった。そしてだ。

ここでだ。こうした言葉も出た。

「正面から戦っても勝てるやもな」

「まあこちらは一万五千」

その彼等の兵の数が述べられる。

「対する今川は二万五千」

「兵はあちらが一万も多い」
「しかしじゃ」
それでもだというのである。
「今川の兵はかなり弱いからのう」
「織田の兵は弱いにしてもじゃ」
「こっちには鉄砲もあれば」
「長柄槍もある」
武器ではだ。負けていないというのだ。
「弓も鎧も手入れしてある」
「勝てるな」
「そうじゃな」
こう話されていく。
「敵の将もじゃ。充分以上に戦える者は少ない」
「三河の者と」
元康が率いる彼等とだ。他にはだというのだ。
「それとあの和上じゃな」
「太源雪斎」
「まあ他には朝比奈とかがいるがじゃ」
「大したものはそれ位」
「どうということはないな」
将の質についてはだ。今川は武田や北条と比べると無能ではないにしても小粒だと思われていた。実質雪斎が柱であるのだ。
「侮るつもりはないが」
「三河者とあの和上は恐ろしいが」
「後は特に」
「さすれば正面とぶつかっても」
「勝てるな」
「そうやもな」
ところがだ。ここでだ。
戦には秀でていないとされる信行がだ。こう言うのであった。

「しかし正面からぶつかっては勝てたとしてもじゃ」
「その場合はですか」
「まずいのですか」
「かなりの損害が出るぞ」
こう話すのである。
「織田にしてもかなりの兵を失うぞ」
「確かに。言われてみれば」
「正面からぶつかれば流石に」
「こちらも尋常ではいきませぬ」
「その通りですな」
誰もが信行の言葉に頷く。まさにその通りなのだ。
「では殿の今回のお考えは」
「正しいですな」
「正面からの戦いを避け」
そうしてだ。篭城しそれからだというのだ。

第三十三話　桶狭間の前にその四

「戦われるというのは」
「妥当ですな」
「しかし。何か違うやもな」
ここでだ。こうした言葉も出て来た。
「殿が普通に戦われるかのう」
「むっ、ではまた何か奇策を考えておられる」
「そうだというのか」
「この度も」
「そうやもな」
そしてだ。今言ったのはだ。
森である。彼は鋭い目でこう同僚達に話す。
「殿はこの戦では兵を失いたくないと言っておられたな」
「うむ、伊勢や美濃がまだある」
「だからとな」
こうだ。柴田と佐久間が頷く。織田家の武の二枚看板は清洲に留まっている。彼等以外にもだ。平手や佐久間盛重、そして木下兄弟や蜂須賀以外の殆どの面々はだ。清洲に留まったままだ。
「殿は先を見ておられる」
「それは間違いない」
「さすれば。ここで兵を失ってどうするか」
森が言うのはこのことだった。
「伊勢や美濃に何もできぬでは話にならんな」
「それどころか失う兵の数によってはじゃ」
「勝っても危うくなるな」
二人は考えを巡らせていってだ。そうしたことも述べていった。
「伊勢は国人が入り乱れて一つの力になっておらんがな」
「美濃は斉藤がおる」

その斉藤こそがだ。問題だというのだ。
「下手に兵を失えば」
「そこで攻め込んで来るぞ」
「そうじゃ。だから今川相手といえどもじゃ」
それでもだとだ。森の指摘が続く。
「今は兵を失えん」
「前もそんな話をしたが」
「殿はどう考えておられるかじゃな」
「突拍子もないことではないか」
森はだ。ふとこう察したのだった。
「またな。殿らしくな」
「ううむ、わからん」
「どうするか」
「少なくとも今は見ていることしかできまい」
森の今の結論はだ。これしかなかった。
しかしだ。結論を述べたうえでだ。彼はこうも話した。
「さすれども。三河と尾張の境や尾張の東をしきりに調べておられるな」
「うむ、今もな」
「熱心にされておる」
「ここに何があるかものう」
森は考える顔であった。そのうえで言葉を出していくのであった。
「そこからのう」
「そうじゃな。とにかくじゃ」
「この戦も勝たなくてはな」
彼等も今は主の考えを読みきれていなかった。それを知ってか知らずかである。信長の動きは呑気なものだった。まるで危機が迫っていないかの様にだ。
そしてだ。駿河ではだ。
義元がだ。主だった家臣達を集めて問うていた。

「備えはできたな」
「はい」
「今こそです」
家臣達はだ。満面の笑みで主に対して答える。
「出陣の時です」
「全軍を以て」
「そうじゃ。まず尾張を討つ」
義元は高らかに笑って述べた。
「そうするぞ」
「畏まりました。それでは」
家臣達の中で最も義元に近い場所に座している雪斎が言った。その向かい側には氏真がいる。そこに彼等の今川家での位置が出ていた。
「先鋒は拙僧が」
「和上が行くか」
「はい、そして」
そしてだった。雪斎はさらに言う。

第三十三話　桶狭間の前にその五

「もう一人先鋒が必要です」
「うむ、竹千代じゃな」
話はもうわかっているといった感じでだ。義元は満面の笑みで述べた。
「そうじゃ」
「左様です。では竹千代よ」
雪斎は家臣達の中で真ん中位にいる元康に顔を向けた。そのうえで彼に対して告げるのだった。
「そなたもじゃ。よいな」
「有り難き幸せ。それでは」
「武勲を期待しておるぞ」
義元はだ。その元康に優しげな笑みを浮かべてだ。こう声をかけた。
「和上が目をかけておるそなたの武、見せてもらうぞ」
「はい、それでは」
「まあ竹千代なら大丈夫あろうな」
氏真は元康を温かい目で見ながら述べた。
「ただ。血気に逸って死なぬようにな」
「わかりました。それは」
「死んでは元も子もない」
氏真の言葉もである。元康に対して親しげなものだった。
その親しげな言葉をだ。さらにかけるのだった。
「折角麿も出陣するのじゃしな」
「氏真様もですか」
「そなたを見ておるとじゃ」
こう元康に言うのである。
「轡を並べてみたくなったわ」

「だからでございますか」
「そうじゃ。だから出陣する」
氏真は親しい態度のまま再び述べた。
「父上もそれで宜しいでしょうか」
「ほほほ、よいよい」
義元は我が子の言葉に鷹揚に笑って返した。するとそのお歯黒で染めた黒い歯が見える。何処から見ても公家のものである。
「では共に都に向かおうぞ」
「それでは」
「さて、あの尾張を手に入れたらあのうつけはじゃ」
信長はだ。どうするかというのである。
「平伏させたうえで都への道案内をさせてやろう」
「そうされますか」
「首を取るのではなく」
「あのうつけが死にたいのならそれでよいがじゃ」
それでもだというのだ。義元は基本的にこう考えているのだった。
「そうでなければじゃ。命は助けてやる」
「そのうえで都までですな」
「道案内をさせると」
「麿は寛大よ」
余裕に満ちた言葉であった。
「命まで取りはせぬわ」
「ははは、そうですな」
「あのうつけの首を見ても面白くありませぬ」
「さすればですな」
「案内をさせますか」
家臣達も笑って話す。
「あのうつけもそれでほっとしましょう」
「命は取らぬというのですから」
「いや、殿も慈悲がおありで」

「ほっほっほ、麿は血を好まぬ」
公家趣味で風流を好む義元はだ。実際にそうであった。失態を犯した家臣がよい歌を詠んだということで許したこともある。
そうした彼だからだ。必要でないならばだった。
「だからじゃ。降参すればじゃ」
「そして謀反の気を見せねば」
「それでよしですな」
「そういうことじゃ。それでよい」
あらためて言う義元だった。
「そして都に上ればじゃ」
「幕府ですか」
「殿が将軍になられますね」
「今川家は将軍になれる家じゃ」
足利、吉良家に並んでだ。今川家はそうなのだ。源氏の名門である以上にだ。足利家の血縁でだ。将軍継承権を持っているのだ。

第三十三話　桶狭間の前にその六

無論義元もそのことを知っている。それで言うのである。
「麿がなって何の不都合がある」
「なにもありません」
「全くです」
「そういうことじゃ。幕府を開き」
そうしてだ。さらにだというのである。
「この世に太平をもたらすぞ」
「はい、では我等も」
「その為に」
「天下を駿河の如くにする」
駿河は天下の国の中で屈指の国になっている。まとまっているだけでなくだ。政も行き届きだ。実に豊かになっているのである。
義元はだ。その駿河の様にだ。天下をするというのだ。
こう話してだ。彼はだ。あらためて命じた。
「さすればじゃ」
「はい、それではです」
「いよいよですな」
「天下を治める為に」
「今から」
「出陣じゃ」
高らかにだ。こう言った。
「よいな。今からじゃ」
「では我等も」
「殿と共に」
「先陣は和上と竹千代じゃ」
元康をだ。その愛称で呼んでだった。
先陣を命じる。そしてだ。

嫡子の氏真にも顔を向けてだ。告げるのだった。
「そなたもじゃ」
「わかりました。それでは」
「麿が将軍になる姿を見るのじゃ」
温かい顔でだ。我が子に話すのだった。
「よいな。それでは共にじゃ」
「参らせて頂きます」
「この時の為にどれだけのことをしてきたか」
過去のことも振り返る。義元も愚かではない。さすればだ。
この度の戦、そして上洛の為にだ。多くのことをしてきたのだ。
そのしてきたことをだ。彼は話すのだった。
「織田と戦い三河を手に入れ」
これもだ。その為の準備だった。
「武田や北条とも手を組んだ」
「思えば長かったです」
「しかし。その長い間の仕込みもこれよりですね」
「そうじゃ。報われるのじゃ」
こう話すのであった。そうしてだった。
義元は立ち上がりだ。優雅に話すのだった。
「では麿も久し振りに鎧を着るとしよう」
「左様ですな。戦です」
「ですから」
家臣達も笑顔で話しだ。そうしてだった。
彼等は出陣に入った。それに対してだ。
尾張ではだ。慌しく動いていた。
佐久間盛重はだ。砦の中でだ。左右を見回しながら話すのだった。
「とりあえず。できるだけはしたがじゃ」
「それでもですか」
「足りませんか」
「うむ、足りん」

その通りだと述べるのである。
「兵の数も。備えもじゃ」
「どれもですか」
「足りませんか」
「二万五千じゃ」
彼はだ。その今川の兵の数を最初に話した。話すその顔は険しい。楽観していない、そのことの何よりの証であった。
「それに対してこちらは千じゃぞ。丸根と鷲津の二つを合わせてもじゃ」
「数は二十五倍ですな」
「確かに数は圧倒的です」
ここでだ。彼に木下兄弟が話してきた。彼等も佐久間盛重と共にいるのだ。
「ですがそれでもです」
「一度に相手をするのは二万五千ではありません」
「それはどういうことじゃ？」
佐久間盛重は怪訝な顔になって彼等に問うた。大柄な彼は二人を見下ろしている。それは彼等が小柄なせいもあるがそうなっていた。

第三十三話　桶狭間の前にその七

「二万五千を相手にせんというのか」
「はい、今川は縦に長く進んできます」
「駿河からです」
「では。我等が相手にするのは」
「そうです、そのうちの僅かです」
「二万五千のうちのです」
こう話すのだった。明るい声でだ。
「確かに敵の先陣は強いですが」
「それでも。二万五千を一度に相手にはしません」
「では。陥ちんというのか」
「工夫が必要ですが」
「大丈夫です」
「そうであればいいのだがな」
今一つだ。浮かない顔で返す彼だった。
「少ないといってもだ。我々より多いのだぞ」
「ですから工夫をします」
「それも色々とです」
「ふむ。では猿よ」
佐久間盛重は木下のその顔を見ながら問うた。彼のその猿そのものの数をだ。
「そなた一体どういう工夫するのじゃ」
「まず堀を深くし」
「さらにじゃな」
「そして壁を。二重にしまして」
「あれか。千早の城じゃな」
楠正成である。それではというのだ。
「それをするのか」

「左様です。落とし穴も掘っておき」
「して煮えたぎった油も用意しておくか」
「左様です。それに加えて」
さらにであった。
「肥溜めからもです」
「糞やら小便もか」
「はい、それもかけてやりましょう」
「とにかく何でも使うのじゃな」
「石を投げてもいいですし丸太もです」
「とにかく何でもじゃな」
「そうです。何でも使って防ぐべきです」
木下は話していく。とにかく何でも使って敵を防ぐというのだ。
そしてだ。それだけでなくだった。木下は今度は蜂須賀を見る。
彼もいるのだ。
「小六殿もまたです」
「わしか」
「その忍の力を使うのです」
彼が忍であることをだ。頭に入れての言葉だった。
「外に出て敵を撹乱するのです」
「そういえば駿河や三河には忍の者は少ないのう」
「だからです。あちらにない駒をこちらが使うのです」
「それはかなり大きいな」
「だからこそ。小六殿は大事です」
他ならぬ彼はというのである。
「戦は篭もってばかりするものではありませんから」
「では思う存分暴れてやるぞ」
「そうして下さい。そうすればです」
今度は木下秀長が話す。彼は今もいるのだ。
「敵は我等に引き付けられます」
「兵を向けて来るな」

「はい。ただ」
ここまで話してだった。木下秀長は首を傾げさせた。そうしてそのうえでだ。彼は蜂須賀、そして佐久間盛重に対してこう話す。
「それでも殿のお考えはわかりませぬ」
「わしもです」
兄の彼もだというのである。
「果たしてどう御考えなのか」
「それじゃな。わし等は今死地におる」
佐久間盛重が話す。彼が言うことはまさにその通りだった。

第三十三話　桶狭間の前にその八

「敵の攻撃を矢面に受けるのだからな」
「しかしわし等はです」
「殿に生きよと言われています」
「わからん話ですな」
木下兄弟と蜂須賀が言葉を返す。
「殿は死ねと仰る方ではありませんが」
「それでも。これは一体」
「どういうことか」
「普通に死ぬぞ」
また話す佐久間盛重だった。
「それでも生きよか」
「それでわし等もここに来るようにお話されました」
「生きる為にです」
「暴れて敵を引き付けよというのか」
佐久間盛重は腕を組みだ。難しい顔で話した。
「では引き付けている間に何をするか」
「それですな」
「一体」
「とにかくじゃ。わし等はここで戦い生きよというのじゃな」
それはわかった。はっきりとだ。
そうした話はだ。どうしても一つにまとまらなかった。
だが、だ。この話は別だった。
「だが戦ならばな」
「はい、生きましょう」
「絶対に」
このことは一つにまとまった。そうした話をしてだった。
彼等は戦の用意をしていく。木下兄弟の言う通りにであった。

戦の用意をしていく。そうしてであった。
堀を深くし簡単だが櫓も造っていく。その造り方も木下だった。
「先に完成させた者は生きた時には報酬は倍じゃ」
「よし、造るか」
「それならな」
こうしてだった。櫓も造られていく。確かに簡単だがすぐに造られていく。
無論堀もである。とにかく砦の守りはかなり堅固になっていた。
それは彼等が砦に入ったその時と比べて遥かによくなっていた。
そして蜂須賀はだ。砦の周りを調べていた。そのうえで己の部下達に話すのだった。
「山の中だけあって隠れることのできる場所が多いな」
「そうですな」
「非常に多いですな」
部下達もだ。彼のその子オt場に頷く。木々がありだ。確かに隠れる場所は多い。忍が仕掛けるには絶交の場所ばかりである。
それを見て回る。そうしてなのだった。
蜂須賀はだ。あらためて話した。
「ではじゃ」
「はい、それではです」
「今川の兵が来たならば」
「思う存分暴れてやろう。向こうには忍がおらんしな」
そのことが大きかった。実にだ。
そんな話をしながらだ。彼等も戦の用意をしていた。そうしたことが続いてである。
信長もだ。こんなことを言うのであった。
「東の百姓達に酒を用意させよ」
「酒をですか」
「それをですか」
「それを義元の軍に差し出させよ」

そうさせよと。家臣達に話すのである。
「よいな、わかったな」
「あの、敵に酒をですか」
「酒を贈れというのですか」
「そうされよと」
「そうじゃ、そうせよ」
こう話すのだった。そして実際にだった。
彼は尾張の東の百姓達にだ。酒を用意させた。そうしてそのうえでだ。今川の軍に酒を出させる用意もさせた。それもだというのだ。
だがそれはだ。家臣達にとってはだった。
「またわからないことです」
「どう考えなのですか」
「これは」
「またわかる」
またしてもだ。こう言うのであった。

第三十三話　桶狭間の前にその九

「その時になればじゃ」
「戦になればですか」
「その時にですか」
「そうじゃ、わかる」
その時にだと話してだ。そうしてなのだった。
やはり言わない。だが、だった。
戦の用意はさせていた。具足や馬はしっかりとだ。
清洲には兵が集う。家臣達も城を離れることは許さなかった。
彼等を集めたうえでだ。信長は言うのであった。
「さて、それではじゃ」
「茶をですか」
「飲まれるのですか」
「緊張してばかりではよくないからのう」
笑っての言葉だった。
「だからじゃ。御主等もどうじゃ」
「確かに。今川はまだです」
「まだ兵を出してすらいません」
出陣の用意を命じただけだ。駿河を発つのはまだこれからだ。そうしたことを考えればだ。織田には時間的な余裕が存在していた。
それでだ。家臣達も主に述べるのだった。
「では。是非」
「我等もまた」
「殿と共に茶を」
「そうせよ。さて、美味い茶を飲みじゃ」
それからだというのである。
「今はゆっくりしようぞ」
「そしてやがてはですな」

「今川と決着を」
こう言い合うのだった。織田家もまた緊張の中に入ろうとしていた。ところがだ。
当の信長はだ。こんな調子であった。
「ゆっくりとしていればよいのじゃ」
「今川が来るというのにですか」
「ゆっくりとは」
「流石にそれは」
「では今すぐ今川の軍がこの清洲に来るのか」
こう問い返すのだった。家臣達のいぶかしむ声にだ。
「二万五千の兵がじゃ。駿府から清洲にまで一気に来るのか」
「それは有り得ません」
「今川には妖術使いはおりません」
いささか滑稽だがそれでもだ。家臣達が答える。
「一気にこの駿府にというのは」
「それはありませんが」
「そうじゃな。では今ここで緊張しても何の意味もない」
これが信長の今の言葉だった。
「用意をしておればよいのじゃ」
「それだけですか」
「あくまでそれだけなのですか」
「その通りじゃ。では茶を飲もう」
「はい、それでは」
「そうさせてもらいます」
家臣達は信長のその余裕に危惧を覚えていた。だがそれでもだ。
これまでのことも踏まえてだ。主を信じることにした。そしてだった。
彼等もまた茶を飲む。そうしたのである。
その茶は美味かった。それを飲みながら信長はだった。
部屋の中を見回してだ。悠長に話をした。

「今度は外もいいのう」
「外で、ですか」
「茶をですか」
「雨が降っていなければ外で楽しむのも一興じゃ」
部屋の中には何もない。だがそれでもだ。その部屋の中を見回しながらの言葉だった。
「雨や雪が降れば廊下で飲むのもよいのう」
「廊下で、ですか」
「雨や雪を見ながら」
「桜や紅葉を見るのが一番よいが」
花鳥風月である。まさにそれだ。
「雨や雪を見るのもよいだろうな」
「そしてですか」
「酒ではなく茶を」
「上杉謙信は月を見ながら酒を飲むのが好きという」
謙信の酒好きはつとに知られている。陣中でも酒を欠かすことはない。その話をだ。信長も家臣達にしてみせたのである。
「ではわしは茶じゃ」
「茶をですか」
「花鳥風月と共に」
「そうする。確かに月を見ながらの茶は美味い」
それはもうしているというのである。
「では。さらにじゃ」
「雨や雪も」
「それもでございますか」
「楽しもう。機会があればな」
そんな話をしてだ。そのうえでだった。
信長は茶を飲む。そうして今は時間を過ごすのだった。悠長にである。

第三十三話　完

2011・3・21

第三十四話　今川出陣その一

第三十四話　今川出陣

今伊賀にだ。一人の男がいた。
背は普通位だ。引き締まった身体をしている。顔は面長で角があり頬がこけている。目の光は剣の様に鋭い。そして髷は総髷だ。
その彼がだ。今周りの話を聞いていた。
「どうやら間も無くです」
「駿河の今川殿が動きます」
「そしてそのうえで」
「尾張に負けるな」
男は周りの声を聞いてだ。一言で言った。
今彼は林の中にいる。頭の上まで木々に覆われている。人は一人もいない。しかしである。声達は男に対して確かに告げているのである。
「今川殿は」
「負けますか、今川殿が」
「そうなりますか」
「そうだ、負ける」
男はまた言った。
「間違いなくだ」
「何故そう思われますか」
「兵は今川殿の方が多いというのに」
「それでも負けるというのですか」
「確かに兵の数は大事だ」
男もそれは認めた。兵の大小はそのまま戦の勝ち負けに直結するものだ。このことは素人であってもすぐにわかることであるからだ。
だがそれを踏まえてもだ。男はこう言うのだった。
「しかしだ」

「織田殿にはですか」
「勝てるものがありますか」
「そもそも尾張は織田殿の地だ」
地の利であった。男がまず言うのはこのことだった。
「それがかなり大きい」
「今川殿にはそれがない」
「それですか」
「それにだ。織田殿の将はかなりいい」
今度はだ。将のことだった。
「武田や上杉と比べても遜色がない、いや」
「いや？」
「いやといいますと」
「それ以上か」
そこまでだとだ。男は言うのだ。
「武田二十四将や上杉二十五将よりも」
「上だと」
「彼等よりも」
「それぞれの質は互角」
将の質はだ。武田や上杉と五分だというのである。そしてさらにであった。
「しかも数は武田や上杉よりも多い」
「今川殿を圧倒している」
「左様ですか」
「確かに今川殿には雪斎殿がおられる」
今川の柱である彼の名前も出る。
「しかしだ。織田殿の将はだ」
「どれもですか」
「優れているというのですね」
「瞬く間に尾張を統一し」
そしてだというのだ。

「政も見事だな」
「それを御覧になられてですか」
「織田殿の将はなのですね」
「今川殿のそれよりも上だと」
「そうだ。おそらく織田殿の将は随一よ」
そこまでだというのだ。男の言葉は真剣だ。
「天下においてな」
「その天下一の将達にはですか」
「今川殿は劣る」
「そうなりますか」
「そして将の将もだ」
さらに上の話になったのだった。ここでだ。

第三十四話　今川出陣その二

「今川殿は戦はどうか」
「戦ですか」
「今川殿御自身のですか」
「それについてですか」
「そうだ。それはどうか」
このことをだ。周りに問うのである。
「今川義元殿は」
「御言葉ですが馬に乗るのも不得手ですし」
「戦になると雪斎殿が戦われています」
「それを見るとです」
「どうにも」
「そうじゃな。今川殿は政の方よ」
それもかなりだ。そちらに傾いているというのである。
「それが問題になる」
「それに対して織田信長殿は」
「どうかというとですか」
「そちらは」
「あの御仁はそちらも秀でておられる」
信長のその才も見抜いているというのである。
「戦もな」
「では今川殿はやはり」
「敗れるというのですか」
「兵の多さだけでは勝てはせぬ」
確かに重要でもだ。それだけでは駄目だというのである。
「その他で負けていればだ」
「敗れますか」
「そうなると」

「少なくともわしは負けると見ている」
男はだ。自信に満ちた声で述べた。
「そして問題はそれからよ」
「戦の後どうなるか」
「それがですか」
「問題というのですね」
「そうよ、織田殿が勝たれる」
それからなのだった。男が見ているのは。
彼は信長が勝ってそれで終わりとは見ていなかった。むしろである。
そこからだというのだ。信長が勝利を収めてから。そこからが問題だというのである。
「ただ今川殿に勝たれるだけではない」
「そこからですか」
「大事なのは」
「これにより織田殿の名が高まる」
そうなる、これも間違いないというのである。
「そしてそれが伊勢や美濃にも聞き及ぶ」
「無論それ以外の国にも」
「天下にもですな」
「それによりどうなるか。また敗れた今川殿はだ」
その今川はだ。どうなるか。それも話すのだった。
「おそらく。終わりだろう」
「今川殿がですか」
「あの百万石の今川殿が」
「終わってしまいますか」
「百万石も終わる時は終わる」
言葉には無常を見るものがあった。さながら祇園精舎の如く。
「人の築いたもので終わらぬものはない」
「だから今川殿もですか」

「百万石の大身であっても」
「そうよ、終わる時は終わる」
また言うのだった。
「そして終わった時にだ」
「その後にどうなりますか」
「今川殿の後は」
「一体」
「駿河は武田殿か北条殿のものになろう」
まずはだ。今川のその本拠地はそうなってしまうというのである。
「北条殿は関東への進出に忙しい。従ってだ」
「その際は武田殿ですか」
「武田殿が駿河を手に入れられる」
「そうなりますか」
「そうじゃ。これは武田殿にとっては大きい」
駿河を手に入れる、そのこと自体がだというのである。

第三十四話　今川出陣その三

「駿河は天下でも屈指の国だからな」
「その豊かさたるや凄いものだとか」
「米だけでなく蜜柑もありますし」
「どうやら茶もいけそうです」
「塩もありますな」
とにかくだ。様々な特産品があるというのだ。しかもであった。
「町も栄えておりますし」
「あの国を手に入れれば武田殿はかなり豊かになられますな」
「間違いなく」
「だからその際は武田殿が動く」
男は今は武田を念頭に置いていた。そのうえでの話だった。
「北条殿は関東をさらに攻められるからな」
「それで駿河は武田殿のものですな」
「そして遠江と三河ですが」
「その二国は」
「面白いことになろう」
その二国に対してはだ。言葉を変えてきたのだった。
「よりな」
「といいますと」
「その二国では何が起こるというのですか」
「一体」
「我等の主が出るやも知れぬ」
こう言うのであった。
「ひょっとするとな」
「我等のですか」
「仕えるべき主」
「その方が」

「そうじゃ。既に多くの大名がそれぞれの忍の者を抱えておる」
話はだ。ここからだった。
「そうじゃな」
「確かに。既にです」
「多くの忍がそれぞれの大名に仕えています」
「しかし我等はまだ」
「その家がありません」
「さすればよ」
男の言葉がここでさらに核心に入った。
「我等のその仕える家だ」
「それが何処だと」
「どの家だというのですか」
「一体」
「三河やもな」
男はだ。その国の名前を出したのだった。
「三河に行くべきか」
「三河!?」
「三河といいますと」
「今川殿ではないですか?」
「違いますか?」
「そうじゃ。違う」
違うというのだ。それはだ。
「今川殿ではない」
「では一体どの家ですか?」
「一体どの家だと」
「織田殿が勝たれるとなる」
声達はここで考えた。織田と今川が戦いそうして織田が勝利を収めるならばだ。三河はどの家のものになるか。彼等の答えはだ。
「三河は織田家のものとなりますか」
「それでは我等は今から」

「織田家にですか」
「仕えると」
「そうだというのですね」
「違うな」
こう言った。はっきりとだ。
「織田殿ではない」
「ではどの家ですか？」
「武田殿でしょうか」
この家の名前が再び出た。
「武田殿が駿河だけでなく三河までも手中に収められる」
「それで、でしょうか」
「しかしです」
ここで声の一人が男に述べた。

第三十四話　今川出陣その四

「武田殿には既に見事な忍の者達がいます」
「真田十勇士」
「あの者達は一人一人がまさに天下屈指の忍達ですが」
「あの者達と競り合われると」
「違うな」
そうではないというのである。武田ではないとだ。
「武田殿には行かん」
「では一体」
「どうされますか？」
「三河に行かれるとしても」
「どの家に仕えるというのですか」
「暫くすればわかる」
時が経てばだというのである。
「織田殿と今川殿の戦が終われればだ」
「そうすればですか」
「わかると」
「左様ですか」
「そうだ、今はだ」
男の言葉は繰り返しだ。それをあえてしてもいた。
「見ることだ」
「織田殿が勝たれるのをですね」
「そしてそれから」
「わかると」
「わかれば今は動かぬ」
それだけが間違いないというのである。
「わかったな」
「では今はまだこの伊賀に留まり」

「見るのですか」
そう話してだった。そのうえでだった。
男はだ。あらためてだった。
声達にだ。こう問うたのであった。
「では皆の者よ」
「はい」
「何でしょうか」
「わしについてくるな」
今問うのはだ。このことだった。
「この服部半蔵にだ。ついてくるな」
「はい、そうします」
「そうさせてもらいます」
声達はだ。誰もがこう答えるのだった。
「我等は半蔵様の臣です」
「だからこそ」
「今伊賀もおかしなことになっておるからな」
その男服部半蔵のその引き締まった顔が曇った。そのうえでの言葉だった。
「百地殿だがな」
「そうですな。どうも近頃」
「動きが怪しいです」
「一体何を考えておられるのか」
「それがわかりませぬ」
「元より腹の底が見えぬお人だった」
それはだ。元からだというのである。
しかしだ。ここでだった。服部はこうも言うのだった。
「だが近頃はな」
「怪しい動きが多過ぎます」
「何処の大名についているのでしょうか」
「何処かの家についているようですが」

「一体それはどの家か」
「気になりますが」
「果たして家なのか」
服部はそのこと自体に疑問を呈したのだった。
「家ではなく。寺社ではないのか」
「では本願寺でしょうか」
「あの寺についているのでしょうか」
「わからん。しかしだ」
即断を避けている。それが今の服部の言葉だった。
「わしは今の百地殿には只ならぬものを感じる」
「それは妖でしょうか」
声の一人が服部の今の言葉に問うた。

第三十四話　今川出陣その五

「それでしょうか」
「妖か」
「それだというのですか？」
「いや、よりどす黒い」
色で表した。その色はというと。
「闇じゃな」
「闇、ですか」
「それを感じる」
色はだ。それだというのだ。
「闇の色をな」
「今の百地殿はならば」
「迂闊に寄ってはいけませんな」
「どうやら」
「じゃから伊賀も離れる」
それも理由にあるというのだ。
「わかったな」
「はい、それでは」
「その三河にですね」
「暫くしたら向かおうぞ」
こう話してだ。服部は己が仕えるべき主を見るのであった。
伊賀でも動きがあった。そして尾張ではだ。信長は清洲において滝川と二人で話をしていた。信長の方から言うのだった。
「ふむ。左様か」
「はい、甲賀の者の多くがです」
「わしに従うというのじゃな」
「殿の兵になるとのことです」
こう話す滝川だった。

「忍の者として」
「よし、わかった」
話を聞いてだ。信長は確かな顔で頷いた。
そのうえでだ。彼は滝川にこうも話した。
「では甲賀者はだ」
「殿の忍にですな」
「忍の者も必要じゃ」
確かな顔でだ。言う信長だった。
「そなたの他には小六も忍の術を使えるがな」
「あの者が使えるのは少し意外です」
滝川は静かに述べた。
「多少騒がしいので」
「確かにのう。忍というよりはじゃ」
「海賊を思わせます」
そちらだというのである。
「しかしあれで忍としては」
「中々やりおるわ」
「左様です。それに慶次もです」
「あ奴もあれで器用じゃ」
慶次の意外な一面である。実は彼は忍の術にも長けているのだ。
大柄で派手好きな傾奇者だがそうしたこともできるのである。
「しかし今はじゃ」
「大学殿の砦に行かせなかったのは」
「それも考えておる」
慶次をそこに行かせなかったことについての言葉だった。
「しかとな」
「左様ですか。既にですか」
「うむ。とりあえず忍の者が加わった」
それをよしとしてだ。さらに話す信長だった。
「すぐに東海に放て」

「駿河からこの尾張まで」
「そうじゃ。道をくまなく見る」
忍の者を使ってだ。そうするというのである。
「今川の動きをな」
「それでは。その動きを見ながら」
「さて、それではじゃ」
滝川の言葉に最後まで答えなかった。それはあえてかどうかは滝川にはわからなかった。もっと言えばわからせなかった。
信長は滝川にさらに話した。
「既に尾張の東の地理はわかった」
「完璧にですね」
「その通りじゃ。全て頭の中に入れた」
そうしたというのである。

第三十四話　今川出陣その六

「少なくとも地の理はこちらにある」
「織田に」
「そうじゃ。ある」
また言う信長だった。
「さて、今川もそろそろじゃな」
「出陣ですね」
「出て来るぞ、そろそろな」
楽しそうにだ。こう話すのだった。
「駿河からのう」
「そして一路この尾張に迫る」
「してじゃ」
話がだ。また変わった。
「権六達はどうしておる」
「篭城の備えをしておられます」
それをしているというのである。
「権六殿だけでなく他の者達もです」
「御主もじゃな」
「はい」
滝川は他ならぬ自分自身もだ。そうしていうというのだった。
そのうえでだ。彼は主に対してこう述べた。
「やはり。この度はです」
「篭城しそのうえで」
「美濃との境におられる平手殿が率いられる主力を呼び寄せ」
「そのうえで清洲を取り囲む今川を打つ」
「そうされるのですね」
「さてな」
しかしであった。信長はだ。

悪戯を思わせる笑みでだ。こう言うのであった。
「どうしたものかな」
「といいますと」
「二郎、そなたもそう思うのじゃな」
「？」
滝川は信長の今の言葉に怪訝な顔になった。そしてだ。
主にだ。こう問い返すのだった。
「他にはないのでは？」
「この清洲に篭城しそして爺の軍勢と共に打つしかじゃな」
「それしかありません」
また言う滝川だった。
「今川に勝つには」
「ではそう思っていることじゃ」
ここでも答えない信長だった。
「是非な」
「ううむ、一体何を御考えなのか」
「ではこれからじゃ」
「これから？」
「馬に乗る」
あっけらかんとしてだ。それをするというのだ。
「これからな。だから話はこれで終わりじゃ」
「左様ですか」
「御苦労だった。下がっていいぞ」
こう滝川に告げたのだった。
「それではな」
「わかりました。それでは」
「そうか。誰もがそう思っておるか」
信長はふとだ。満足そうに呟いた。
「よい、これでな」
「？殿は何を考えておられるのか」

滝川もわかりかねていた。そして信長はそのことをよしとしていた。

彼がそうしている間にだ。遂にであった。

駿府城に大軍が集っていた。その数たるや。

「二万五千です」

まだ法衣のままの雪斎がだ。既に鎧と陣羽織を着ている義元に対して述べていた。

「今ここにです」

「今川の全軍が集っておるな」

「後は殿のお言葉があるだけです」

こう主に告げるのだった。

「では。どうされますか」

「決まっておる」

微笑んでだった。義元は言った。その頭にはまだ兜はない。烏帽子がある。それでその公家そのものの髷を覆っているのである。

第三十四話　今川出陣その七

彼の後ろには氏真や元康、そして他の家臣達もいる。主だった家臣達が勢揃いしている。その彼等を後ろに従えてである。

義元はだ。雪斎に満面の笑みを浮かべて話すのだった。

「それではじゃ」

「はい、それでは」

「出陣じゃ」

自身を感じさせる言葉だった。

「よいな、全軍でじゃ」

「はっ、それでは」

「先陣はじゃ」

最も重要なだ。そのことをすぐに話す義元だった。

それは誰か。一同注視した。誰もが義元の次の言葉を待つ。

義元はその視線を受け尚且つ楽しむ様にしてだ。ゆっくりと、だが確実に口を開けてだ。この名前を挙げた。

「竹千代」

「はい」

「そなたは先陣の右翼として三河衆を率いよ」

「わかりました」

「して左翼はじゃ」

彼の後ろにいた。元康に顔を向けて告げてからだ。さらにであった。

今度は傍らにいる雪斎に顔を向けてだ。彼にも告げたのだった。

「和上じゃ」

「わかりました」

「そなた達二人を先陣とする」

こう告げるとだ。今川の全軍からだ。

勝どきを思わせる歓声が上がった。その中でだった。

義元は嫡男である氏真にも顔を向けてだ。彼にも告げるのであった。
「そなたもじゃ。よいな」
「共に都へ」
「うむ、のぼろうぞ」
「それでは。それがしもまた」
「親子で都を見るとしよう」
義元は口を大きく開けて笑いながらこうも述べた。
「さて、公卿の方々から都のことは聞いておるが」
「大層荒れておるようですな」
「嘆かわしいことじゃ」
そのことについてはだ。義元は心から残念なものを感じていた。
そのうえでの言葉だった。
「その都を再び元の姿に戻すのが麿の役目じゃ」
「して天下も」
「うむ、元の通りにみらびやかなものにする」
政と雅を愛する義元に相応しい言葉であった。
「その為の上洛じゃ」
「さすれば我等も」
「御供します」
家臣達が一斉に言ってだ。そうしてだった。
今川軍二万五千は遂に上洛の途についたのだった。その先頭にはだ。
元康と雪斎がいる。二人は共に馬を並べている。雪斎は既にその法衣の上に鎧を身に着けている。彼が戦の場に赴く時の格好だ。
その姿でだ。己の隣にいる元康に声をかけてきた。
「して竹千代よ」
「はい、何でしょうか」
「そなたと織田上総介は幼馴染じゃったな」
「はい、左様です」

その通りだとだ。答える元康だった。
「まだ昨日のことの様に思い出せます」
「左様か。しかしじゃ」
「しかしでございますか」
「そなたに言うことではないと思うが言っておこう」
こうだ。雪斎は話すのだった。
「今は戦国の世じゃ」
「その世だからこそですね」
「その通りじゃ。例え肉親であろうとも時として争う世じゃ」
まさにだ。それこそが戦国だというのである。かく言う雪斎もであった。
「わしもそれを見てきた」
「和上もまた」
「それもこの今川の家でじゃ」
そのことをだ。見てきたというのだ。
「殿が今川の家督を継がれた時のことは聞いておるな」
「確かご自身の兄君と」
「母君こそ違えど父君は同じだった」
家督は長兄が継ぎだ。義元は最初僧籍にいた。そこで雪斎から学問を教わっていたのだ。だがその長兄が亡くなり正妻の子であった彼はだ。異母兄と家督を争うことになったのだ。その時に雪斎の力を借りてだ。彼は戦に勝ち今川の家督を継いだのである。

第三十四話　今川出陣その八

「その兄君と争ってきたのじゃ」
「そういうことがあったのですか」
「母君は違えど兄君だった」
雪斎はこのことを強く言った。
「殿は実は今でもそのことを苦しんでおられるのだ」
「争ったことを」
「そしてその方を自害にまで追い込んだことをだ」
そのこともだ。悔やんでいるというのである。
「だからじゃ。今もじゃ」
「殺生を好まれないのですか」
「殿は無駄な血を好まれぬ」
風雅の裏にはだ。そうしたものもあるのだった。義元の意外な一面である。
「だからこそ織田上総介もじゃ」
「殺されぬというのですね」
「殿は心優しい方なのじゃ」
「左様ですな。確かに」
「戦よりも政や文を好まれぬ」
実際にそれは出ていた。実は義元は戦の場にはあまり出ていない。それは大抵雪斎が務めてきていた。それが今川なのである。
「その殿は常にわしに先陣と軍師を頼まれてきた」
「ではそれがしは」
「そなたは殿に深く信頼されておる」
元康はだ。そうだというのだ。
「そなたを人質として見ていたか」
「いえ、それは」
「そういうことじゃ。無論わしも氏真様もそう見てはおらん」

彼はだ。今川家で辛い思いをしたことはなかった。主の義元も彼等もだ。元康に対しては親しく何かと面倒を見てくれた。義元に対しても悪い感情はないのだ。

「そなたは今川のこれからを担う者じゃ」

「今川のですね」

「ひいては天下をじゃ」

「天下をですか」

「そうじゃ、担う者じゃ」

「私はとても」

「今はそうではないやも知れぬ」

今ではなくともだというのである。

「そなたはやがてじゃ」

「そうなると言われますか」

「大器じゃ。天下を覆わんばかりのな」

「では。その器を」

「何に使うのじゃ。それでは」

「天下が泰平になり」

そうしてだというのだ。元康の目が少し上になっていた。

「そして民を安んじる為に使いましょう」

「治に使うか」

「いえ、戦にもです」

それにもだというのだった。

「戦にも使います」

「民を安んじる為に戦を使うか」

「戦といいますか武といいますか」

その二つをだ。同義語としての言葉だった。

「ただ。泰平になっただけでは話は収まりますまい」

「その通りじゃ」

雪斎は元康の今の言葉を聞いて頷いてみせた。

「それで話は収まらぬ」

「はい、その泰平を守るものが必要です」
「その為の武じゃな」
「戦にならぬ為に戦の備えをしておく」
「そうすれば戦はかえって起こらぬもの」
「だからです。それがしはです」
こう語るのであった。
「その為にも武をです」
「そうじゃ。よい心がけじゃ」
「そう言って下さいますか」
「武は何の為にあるか」
雪斎は元康の顔を見ながらだ。彼に言うのであった。
「どう思うか、そなたは」
「武はですか」
「そうじゃ。どう思うか」
「武はです」
その字そのものについての言葉であった。
「矛を止めると書きますが」
「ほう、そう来たか」
「はい、それこそが武だと思うのですが」
「その通りじゃ。よいぞ」
雪斎は元康の今の言葉に満足して答えた。
「武は本来そういったものじゃ」
「そう思うからこそ。武もまた身に着けていきたいです」
「文と共にな」
「はい」
ここでは治と文が一緒になっていた。同じ意味の言葉にだ。

第三十四話　今川出陣その九

「武もまた泰平になっても必要なのだ」
「文と武は常に必要ですね」
「今の戦国の世であっても文は必要ではないか」
雪斎は話を逆転させてみせた。
「違うか、それは」
「確かに。それは」
「どの国も確かな大名はそうしておる」
国を治めている、それはまさにその通りだった。
「我が今川もそうだし北条、何よりもじゃ」
「武田殿と」
「織田じゃ」
武田だけではなかった。雪斎は自ら織田の名を挙げたのである。
「両家の治は見事じゃ」
「武田殿ですが」
「金山に特産品に力を入れてじゃ」
信玄はむしろそちらの方に関心があるのだ。彼は戦において無類の軍略を見せるがそれ以上にだ。その戦で手に入れた領地を治める方が好きだし得意なのだ。
「田畑もよく開墾し手入れしておる」
「甲斐や信濃は田畑には乏しいと言われていますが」
「それでも開墾すれば違う」
こう元康に話すのだった。
「その証に武田殿はもう米には困っておらぬな」
「はい」
「田畑だけでなく堤も築いておるしな」
それもだというのだ。堤もなのだ。
「甲斐の堤はわしも一度見たがじゃ」

「どういったものでしょうか」
「あの堤がある限り甲斐は川の乱れに悩まされることはない」
つまり治水である。それをどうするかは明においては古代から為政者の最重要課題であった。だがそれは程度の差こそあれ日本も同じなのだ。
「しかも信濃までそれをされておるわ」
「あの国もですか」
「しかも道まで築いておる」
堤だけではなくだ。それもだというのだ。
「見事よ。甲斐も信濃もかつての貧しさはない」
「武田殿の治、そこまでなのですか」
「そうじゃ。してじゃ」
武田の話をして。次はだった。
「わかるな、わしの言うことが」
「織田殿でございますか」
「尾張は見たことはない」
こう前置きしての言葉であった。だが、だった。彼はしかしだというのである。
「それでもじゃ。聞く限りではじゃ」
「見事なものですか」
「尾張は元々豊かにしても」
石高が高いうえに商業が発展し港もある。そうした意味で確かに豊かな国である。
「それでも。甲斐や信濃よりもじゃ」
「さらにでございますか」
「治められておる」
そうだというのである。
「その様じゃな」
「六十万石でしたが」
「実際はそれよりまだ上であろう」

「六十万石以上でございますか」
「それだけの力があろう」
こう元康に話すのである。
「今の織田はな」
「それだけの文がありますか」
「うむ、ある」
まさにだ。あるというのである。
「それに武もじゃな」
「武も武田殿以上でございますか」
「そう見ておる。この戦」
そのだ。織田との戦の話にもなった。

第三十四話　今川出陣その十

「容易ではなかろう」
「激しい戦になりますか」
「激しいで済めばよいがな」
「済めば、ですか」
「この戦運命を決める戦ぞ」
雪斎の言葉がこれまで以上に深刻なものになった。
「今川の運命をな」
「そこまでなのですか」
「下手をすれば危うい」
今は極端な言葉を使わなかった。流石にだ。
「どうなるやわからぬわ」
「一刻も油断はなりませんか」
「上杉謙信は織田上総介を尾張の蛟龍と呼んでおるらしい」
「それは聞いています」
「聞いておるな、そなたも」
「私もこの耳でその通り名を聞いております」
既にだ。信長のその通り名は天下に広まりだしていたのだ。とはいってもまだ彼の実力を認めていない者がかなりいるが。義元も然りである。
「越後の龍に尾張の蛟龍ですか」
「龍よ、まさに」
「その龍と戦うとなると」
「竹千代、そなた上杉に勝てるか」
雪斎の顔が強張っている。
「どうじゃ。勝てるか」
「上杉にでございますか」
「同じ数の兵だとしても。勝てるか」

「いえ」
流石にだ。雪斎のその問いにはだ。
元康も首を横に振った。彼は己のことがわかっていた。
「上杉殿はとても」
「そうじゃな。あれは勝てぬわ」
「相手をできるのは武田殿か北条殿か」
「それか安芸の毛利か薩摩の島津位じゃ」
西国の大名達の名前も出る。
「長宗我部はどうかわからんがな」
「そうそう相手にはできないかと」
「しかし織田上総介は相手にできるであろう」
「同じ龍だからこそ」
「その龍と戦う。若し敗れれば」
その時はだというのだ。雪斎は全く笑ってはいない。
「終わりぞ。わかったな」
「それでは」
「まずは砦じゃな」
戦の話に戻った。それにだ。
「丸根と鷲津じゃ」
「その二つをですね」
「その二つを陥とさなければ話にならん」
まずはだ。その二つだというのである。
「せめてじゃ。その二つをじゃ」
「清洲はそれからですか」
「そこで戸惑っていては何にもならん」
雪斎の言葉は続く。
「よいな、くれぐれもじゃ」
「その二つを」
「守っておるのは佐久間大学だったな」
雪斎のその言葉が知っている相手に対するものになっていた。

「あれは手強い」
「確か織田家で屈指の猛将でしたね」
「そうじゃ。何度か戦ってきたが強い」
そうだというのである。
「それにじゃ。他にもおるな」
「木下秀吉とその弟でしたね」
「よく知らぬ者じゃ」
雪斎もだ。彼等のことは知らないのだった。それでだ。
二人について話す時はだ。どうしてもだった。
「百姓の出というがのう」
「詳しいことはですか」
「うむ、知らん」
どうしてもだ。そうだというのである。
「蜂須賀という者もおるようじゃが」
「その者は確か」
「忍の者だったな」
「そうですね。確か」
「ふむ。忍か」
考える顔で述べる。元康の話を聞きながら。

第三十四話　今川出陣その十一

「どうなのじゃろうな」
「わかっているのは佐久間大学だけですね」
「他は全くわからん」
また言うのであった。
「忍の者がいるのは厄介じゃな」
「そうですな。上総介殿の家臣は多彩なようですな」
「気になるのはじゃ」
雪斎の目が顰められている。
「あれじゃ。木下兄弟じゃ」
「その二人でございますか」
「織田の家臣は大抵調べておるがだ」
それは既にだった。まさに敵を知り、であった。
「その二人はよく知らぬ」
「武でしょうか文でしょうか」
「わからん。織田の家臣は実に多い」
そのことも信長の強みなのだ。彼には非常に優れた家臣達が多い。
その彼等を縦横に使っているからこその今の尾張なのである。
「その中で頭角を表している様じゃがな」
「果たしてどういった者かは」
「やはりわからん」
どうしてもだった。それはだ。
「それでもじゃ。この度の砦の戦はじゃ」
「その二人が気になりますか」
「普通に考えれば陥とせる」
その二つの砦をだというのだ。
「二万五千じゃ。それはできる」
「だが、と言われるのですね」

「気になるのう。やはり」
こうした話をしながらだ。二人は今川の先陣として先に進むのだった。
そして義元はだ。輿に乗りだ。そこから軍を見ていた。
その軍は長い隊列を組んでいる。何処までも続く様だ。
己のその軍を満足した顔で見てだ。周りにいる馬上の家臣達に話した。
「よいものじゃのう」
「はい、まことに」
「天下への出陣でございますな」
「さて、ここはじゃ」
ふとだ。義元は上機嫌のあまりこんなことを言った。
「馬に乗るとするか」
「父上、それはです」
しかしだ。それはであった。
すぐ後ろにいる氏真が話してきた。彼は馬に乗っている。
中々見事な馬術だ。そのうえで父に話すのだった。
「お止めになった方がです」
「よいというのか」
「はい、今は大切な時でございます」
その上洛のことを話すのだ。
「ですから。ここはご自重を」
「仕方がないのう。では止めておくか」
我が子に言われだ。義元も考えを翻した。
そしてだ。そのうえで半ば自嘲してこんなことを話した。
「麿はどうもじゃ」
「馬はですか」
「そうじゃ。どうも苦手じゃ」
こう話すのだった。
「上手く乗れんわ。武士の嗜みだというのにのう」

「だからこそです。余計にです」
「ここはじゃな」
「はい、ご自重を」
また告げる氏真だった。
「くれぐれもです」
「そうするとしよう。ところでじゃ」
我が子の言葉に頷いてからだ。そうしてだった。
義元はだ。あらためてこう周りに告げた。
「兵達に伝えよ」
「はい」
「何でしょうか」
「出陣の間馬鹿なことはするなとな。そのことをしかと伝えよ」
具体的には略奪やそういったことを禁じるというのである。
「よいな」
「わかりました。それはです」
「厳しく守らせます」
「麿は泰平の世を築く為に出陣するのじゃ」
それをわかっているからこそ。余計にだというのだ。
「だからじゃ。よいな」
「はい、兵達の狼藉はです」
「何があっても許しません」
「それを破った者は容赦せぬぞ」
厳しい罰を下すというのである。
「そのことは守らせよ」
「そしてそのうえで」
「都に」
こうした話をしながらだ。彼等は悠々と都に向かう。彼等は敗北なぞ考えもしていなかった。先陣を務める雪斎と元康以外は。

第三十四話　完

2011・3・28

第三十五話　奇妙な砦その一

第三十五話　奇妙な砦

今川出陣の報はすぐに伝わった。それは武田でも同じだった。
甲斐の己の館においてだ。信玄は唸る様に言った。
「危ういな」
「はい、確かに」
主の今の言葉に応えたのは山本であった。その片目の顔での言葉だった。
「今川殿は。あれでは」
「敗れるな」
こう言う信玄であった。
「できればだ。今はだ」
「攻めるべきではありませんでした」
「乗るかどうかはわからぬがだ」
信玄は言う。
「織田と争うには攻めては駄目だ」
「少なくとも尾張に入ってはなりませぬ」
「己の領地に引き込んでそのうえで地の利を活かして戦をするべきだが」
「自身から攻め入ってはです」
「罠の群の中に飛び込む様なものじゃ」
それが今の今川だというのだ。
「危ういな、まことに」
「して殿」
山本はここでだった。
己の主に対してだ。あることを尋ねた。その尋ねたこととは。
「どうされますか」
「駿河のことか」

「今川殿に何かあればその時は」
「氏真殿も出陣しておるな」
信玄は彼の出陣のことを山本に問うた。
「そうされておるな」
「はい、親子共々です」
「若し義元殿だけでなく氏真殿にも何かあれば」
その場合はどうするか。信玄は考えていた。
そしてその考えをだ。山本に対して述べたのであった。
「義信のことが生きるぞ」
「義信様の奥方は義元様の娘様であります故」
「それが生きるな。よいことじゃ」
「幸い北条殿は相変わらず関東にかかりきりです」
「気になるのは越後よ」
彼の宿敵上杉謙信である。この男のことは何があろうとも忘れられなかった。
「あの男が動いてはな」
「幸い高坂殿が守ってくれていますので」
「源五郎はやってくれておる」
その高坂のことをだ。信玄は強い信頼の言葉で語るのだった。
「海津をよく守ってくれておる」
「あれだけの兵があればおいそれとは陥ちませぬ」
「そうじゃな。しかしじゃ」
「油断はなりませぬか」
「駿河が空き城になればさして兵はいらぬ」
こう言うのであった。
「その場合は誰かに兵を預け入らせようぞ」
「問題は誰かですが」
「幸村はどうじゃろうかのう」
信玄はこの男の名前を出した。
「あの男に。さらに経験を積ませたいのだがな」

「幸村ですか」
「あれは凄い男になる」
信玄のその見事な目がだ。幸村のその素養を見抜いていた。既にだ。
「だからよ。どうじゃそれは」
「よいことですな」
山本もだ。主のその考えに賛成の言葉を述べた。
「今二十四将は迂闊に動けませぬ」
「駿河に出すこともどうもな」
「はい、斉藤が気になりますし」
武田は美濃も見ていた。美濃の斉藤は信濃と接しており彼等から見れば目を離すことのできない相手だったのである。

第三十五話　奇妙な砦その二

「上杉や北条殿の心配はなくともです」
「斉藤がおること自体が厄介じゃな」
「斉藤が動きそれと合わせて上杉が来ればです」
武田にとって最も恐れていることだった。精強を誇る武田も無敵ではないのだ。一度に複数の強敵を相手にしては戦えないのだ。
「流石に」
「だからじゃ。迂闊に多くの兵は出せぬ」
「信濃にそれなりの兵を置いておく必要があるかと」
「一万程度じゃな」
信玄はその数を言った。
「最低でもな」
「それだけを両家の備えとして置き」
「五千を甲斐に置き備えとする」
即ちだ。予備だというのだ。
「そして一万でじゃ」
「その場合駿河に入りますか」
「そうするとしよう」
「では殿と」
「幸村を連れていく」
彼をだというのだ。その彼をだ。
「そうするとしようぞ」
「御意。それでは」
「駿河を手に入れられれば大きい」
信玄は言う。駿河のその豊かさをだ。
「甲斐や信濃とは比べものにならぬ国じゃ」
「塩も取れますし」
「塩、さらに大きいのう」

信玄のその言葉にだ。渇望が宿っていた。
「米や蜜柑だけではないからのう、駿河は」
「そう、その塩です」
「甲斐は今まで塩がなかった」
山国だからだ。それは信濃も同じだ。
塩がないことはそのまま他の国に命を左右されることである。無敵とまで恐れられている武田にもそうした弱点が存在しているのだ。
「それが手に入るようになる」
「その機会が来ればやはり」
「駿河は手に入れる」
絶対といった口調だった。
「あくまで。時が来ればだがな」
「ではあらかじめその用意を」
「しておくとしよう」
こう山本と話す信玄だった。そしてだ。
彼は幸村を呼んだ。それを受けてすぐにだった。
幸村は甲斐に向かう。十勇士を連れてだ。
彼は馬に乗り十勇士達は徒歩だ。その中でだ。
霧隠がだ。主に尋ねてきた。
「殿、宜しいでしょうか」
「何だ、才蔵」
「この度殿が甲斐に呼ばれることは何だと思われますか」
「駿河のことだな」
それだとだ。幸村はすぐに答えた。
「駿河に攻め入るおつもりなのだ、御館様は」
「!?まさか」
それを聞いてだ。猿飛が驚きの声をあげた。
そうしてその声でだ。彼もまた主に尋ねた。しかし霧隠のそれとは全く違う問いだった。
「今川殿と戦ですか」

「いや、今川殿とは争わぬ」
「ですが駿河に攻め入るのですね」
「そうだ。それはその通りだ」
「ならば今川殿との戦ではありませんか」
駿河は今川のものである、その認識のまま話す言葉だった。
「違いますか、それは」
「佐助、今川殿がいなくなればどうだ」
幸村は強い声になってだ。こう佐助に問うのだった。今度は彼が問うたのだ。

第三十五話　奇妙な砦その三

「そうなれば駿河は何だ」
「空き家でございます」
それに他ならないとだ。猿飛も答える。
「まさにです。それでございます」
「空き家ならばどうだ」
「中に入っても問題はありませぬ」
「そういうことだ。御館様はその時に備えてだ」
どうかとだ。幸村はさらに話す。
「わしを呼んで下されたのだ」
「空き家となった駿河に攻め込む為ですか」
「最早駿河に兵はおらぬ」
それはもう既にだというのだ。今川の兵はだ。確かに出払っていた。
「しかし国人共がおるからな」
「その者達との戦を考え」
「して殿をですか」
三好兄弟だった。
「甲斐に呼ばれた」
「御館様はそうされたのですか」
「そうだ。おそらくわしはだ」
幸村はどうなるか。彼自身が話した。
「先陣の栄誉を頂く」
「先陣。それはいいですな」
海野がだ。先陣と聞いて嬉しそうな声を出した。
「では我等もまた」
「うむ、頼むぞ」
幸村はその十勇士達に対して述べた。

「そなた達が頼りだ」
「しかし殿もですな」
筧の言葉である。
「自ら槍を取られ」
「そうする。わしは戦の中で生きる男だ」
その手に今は槍はない。しかし確かな輝きがそこにある。
「自ら戦いだ」
「だからこそです」
望月である。
「我等も戦の場に向かうのです」
「わしが自ら戦うからか」
「その殿が好きだからです」
穴山の言葉だ。彼の顔は微笑んでいる。
「自ら果敢に戦われる殿がです」
「だからだというのか」
「そうでなければ」
由利も言う。
「誰が従いましょう」
「我等はこれまでそれぞれ各国を放浪してきました」
根津はそのことから話す。
「ですから。人を見る目はあるつもりです」
「殿は間違いなくです」
「天下一の方になられます」
「わしは天下なぞ望んではおらんぞ」
野心は全くない。それが幸村だ。彼は信玄に対して絶対の忠誠を持っておりそれに基づいて日々鍛錬を欠かさない。それが彼なのだ。
「それは御館様が目指されるものではないか」
「いえ、そういう意味ではありませぬ」
「違う意味です」
こう返す十勇士だった。

「この場合はです」
「天下の男の中で、です」
「殿が最も素晴らしい方となられるということです」
「わしがか」
幸村がこう問うとであった。十勇士達もであった。
確かな言葉でだ。彼に述べた。
「はい、左様です」
「殿ならばです」
「必ずなれます」
「どの者よりも素晴らしい方にです」
「なられます」
「ふむ。そうかのう」
そう言われてもだ。幸村は怪訝な顔になる。

第三十五話　奇妙な砦その四

そうしてその顔でだ。こう十勇士達に述べる。
「わしなぞがそうなれるのか」
「やがてわかります、それは」
「そして後の世に語られます」
また己の考えを述べる十勇士達だった。
「我等の目に狂いはありません」
「ましてや一人や二人が言っているのではありません」
「全員が言っていることです」
「我等十勇士全てがです」
彼等の言葉は変わらない。考えもだ。
そうした考えでだった。彼等はだ。
あらためてだ。幸村に対してこう話したのであった。
「だからです。駿河で戦になればです」
「殿は素晴らしい戦を見せられるでしょう」
「そのお心もです」
そうしたこともだ。全てだというのだ。
その話をしているうちにだ。馬と十勇士達は進む。やがてだ。
館が見えてきた。それを見て言う幸村だった。
「おお、もう見えてきたな」
「思ったより早いですな」
「もう見えてきましたか」
「うむ、馬に乗っているせいか」
幸村は早く着こうとしているのは馬のせいかと思った。しかしであった。
十勇士達を見る。彼等もであった。
そしてそこからだ。ある答えを出したのである。
「御主等、馬並に早く歩けるのか」

「これ位造作もないことです」
「忍ですから」
だからだというのである。
「何ならより速く歩けますが」
「普通にです」
「それが凄いわ」
まさにだ。そうだというのである。
「わしとて。歩いてはじゃ」
「いやいや、殿もです」
「かなりの速さですが」
「左様です、我等と変わらないまでです」
実際に幸村の歩く速さはかなりのものだ。その体力もだ。彼の武勇はそうしたところからも発揮されているのだ。それだけの身体を持っているのだ。
「武勇は我等以上です」
「忍の術も使えるではありませんか」
「忍の術はのう」
幸村は実際にその術も使える。武士の武芸だけではないのだ。
「十八般の一つだからのう」
「十八般は全て身に着けられると」
「そういう御考えなのですか」
「そうじゃ。極めるつもりじゃ」
こう言うのがだ。まさに幸村だった。
「身に着けるとはそういうことじゃ」
「それが殿なのです」
「だからなのです」
十勇士達はまた話す。
「歩くのもです」
「尋常なものではありませぬ」
「忍の術故じゃな」

そのせいで歩くことが速くなった。幸村は己で分析した。
「それでじゃな」
「はい、左様です」
「忍の術でも我等の棟梁たるに相応しい」
「全くです」
「ふむ。それではじゃ」
幸村は彼等の話からだ。こう結論を出したのだった。

第三十五話　奇妙な砦その五

「十八般を極めさらにじゃ」
「上を目指されますな」
「まさに天下一の漢になられますな」
「わしは目指すぞ」
まさにだ。そうするというのである。
「何があろうともな」
「ではその殿と共にです」
「我等もです」
「最後の最後までお供します」
「うむ、頼んだぞ」
こんな話をしてだ。そうしてだった。
彼等は信玄の下に馳せ参じた。そのうえで今は時を待つのだった。
武田が今川の行く末を見ていたその頃。北条ではだ。
主の氏康がだ。難しい顔で家臣達に話していた。
「危険じゃな」
「はい、全くです」
「今川殿は勝たれると思っておられるようですが」
「しかし。楽に勝てはしませんな」
「やはり」
「織田の兵も多いです」
北条の家臣達はだ。織田の兵の数から今川の苦戦を見ていた。
そしてだ。彼等はこう話すのだった。
「その織田と正面からぶつかれば」
「今川殿もただでは済みませんが」
「一捻りとはいきません」
それはないというのだ。
「とてもです」

「今川殿がどう思われているかはわかりませんが」
「織田を侮っておられるな」
そう見ている氏康だった。
「それが危うい」
「やはりですか」
「そうなりますか」
「そうじゃ。織田は侮れぬ」
信玄と同じことをだ。氏康も言うのであった。
その向こう傷のある、それでも整った顔に深刻なものを漂わせてだ。彼は家臣達に話していく。
「織田信長は傑物よ」
「うつけではありませぬか」
「そうではありませぬか」
「全く違う」
こうまで言うのであった。断言であった。
「うつけが父親の死後瞬く間に尾張を統一できるか」
「そういえば。本当にすぐにでしたな」
「兵を起こしすぐにでした」
「尾張を統一してしまいました」
家臣達も氏康の話でだ。そのことに気付いたのである。
「そして統一すれば見事に政をしているとか」
「尾張はかなりいい国になっているか」
「元々土地は肥え町もよい」
氏康は尾張についてだ。こう述べた。これは本当のことである。
「その尾張をじゃ。さらに見事にしておる」
「それが織田ですか」
「織田上総介だというのですか」
「そうじゃ。やはり傑物じゃ」
信長をだ。あくまでこう評する氏康だった。
「その者を侮ってはじゃ。痛い目に遭うのは今川殿じゃ」

「では。このままでは」
「今川殿は敗れますか」
「敗れるのはあちらなのですか」
「そう思えるな、わしには」
実際にそうだと述べる氏康だった。
「そして問題はその後じゃ」
「その後といいますと」
「今川殿が敗れ東海がどうなるか」
「そのことでございますか」
「そうじゃ、それじゃ」
まさにだ。それだと答える氏康だった。

第三十五話　奇妙な砦その六

そのうえでだ。彼は憂いのある顔でこんなことを話した。
「駿河が空くとなるとどうなる」
「すぐに武田殿が入られますな」
幻庵がここで述べた。
「それは火を見るより明らかです」
「叔父上もそう思われるか」
「はい、それに対して我が北条はです」
他ならぬ彼等自身だ。彼等はどうかというのだ。
「今は関東の各地に兵を出しまた政にも力を入れておりまする」
「そうじゃ。駿河には向かうことができぬ」
力には限りがある。それは北条とて同じなのだ。
だからだ。関東の制圧と経営に力を入れている彼等は今はだ。駿河が空こうともなのだ。そこに向かうことはできないのだ。そうした事情があった。
そしてさらにだ。氏康はこのことも話した。
「若し駿河に行けるとする。しかしそうなればじゃ」
「武田殿と衝突しますな」
「あの精強の武田軍と争うことになります」
「今我等は関東の制圧と上杉の相手をせねばならないというのに」
北条にとってはだ。ここでこれ以上の敵を抱える訳にはいかないのだ。ましてや精強をもって知られる武田を相手にするなぞだ。彼等には想像もできないことだった。
そうした事情が重なってだ。結局はであった。
「ではその際は我等は動きませぬか」
「駿河は放っておく」
「そうされますか」
「それしかない」

氏康はその結論を述べた。
「武田殿に任せるとしよう」
「わかりました。それでは」
「その際は我等は駿河を見ない」
「そうしましょう」
家臣達も言っていく。その中でだ。
大道寺がだ。こんなことを言ったのだった。
「では殿」
「うむ、何じゃ」
「今川殿の残りの国ですが」
今川の勢力圏は駿河だけではないのだ。遠江や三河もあるのだ。
彼が今ここで言うのは他ならぬその二国のことなのであった。
「そこはどうなりますか」
「一つ、独立するやもな」
「独立でございますか」
「三河には元々松平がおった」
元康の家である。
「あの家の者が生き残ればじゃ」
「三河に松平が復活する」
「そうなりますか」
「そうなるやも知れん」
氏康がこう言うとであった。
家臣達もだ。唸る様にして言うのであった。
「大きく変わるのですな、東海は」
「今川殿がなくなり武田殿が駿河に入られ」
「そして松平ですか」
「それはまたかなりのものですな」
「いや、それだけでは終わらぬぞ」
ここでまた言う氏康だった。
「一つ抜けておる、そなた達の話にはな」

「!?抜けておりますか」
「我等の話は」
「そうなっていますか」
「そうじゃ。織田が抜けておる」
今川の相手となるだ。その家のことがだというのだ。
「あの家のことがな」
「その織田ですか」
「今川殿に勝つだけではない」
「といいますと」
「さらに伸びますか」
「ただ今川殿を防ぐだけでは終わるまい」
氏康は見ているのだった。信長のそれからの動きをだ。その動きが一体どういったものになるのか。彼は話をしていくのであった。

第三十五話　奇妙な砦その七

「伊勢や美濃を飲み込むであろう」
「あの二国をですか」
「共に飲み込むとなると」
「そうなれば」
「そうよ。天下一の家となろう」
伊勢も美濃も共に大きな国だ。その二国を手中に収めればだというのだ。
「石高で二百万石を超えじゃ」
「二百万石」
「そこまでなのですか」
「そして兵は五万じゃ」
兵もだ。それだけの規模になるというのだ。
「それだけの家になるぞ」
「五万ですか」
「五万となるとです」
「そこまでの数となると」
彼等も言葉を失う。まさにその数はだ。
「どの家もそこまでの数の兵を集められませぬ」
「しかし織田はそれだけの兵を手に入れる」
「まさに天下第一の勢力になりますか」
「左様じゃ。してそれで終わりではない」
まだだ。さらにあるというのだ。
「織田信長、さらに昇るぞ」
「昇る？」
「昇るとは」
「あの男は蛟龍と呼ばれておる」
この名がだ。ここでも出るのだった。

信長は尾張の蛟龍だ。氏康が相模の獅子と呼ばれているのと同じくだ。彼はそう呼ばれてだ。天下に名を知られるようになっているのだ。

「知っておるな、蛟龍はただ水の中に潜んでいるだけではないな」

「はい、やがては天に昇りです」

「そして大きな存在になります」

「神龍へと」

「まさにあの男は蛟龍よ」

氏康の語るその目は鋭い。信長のことを話してだ。

「その蛟龍がよ。天を駆け巡るであろう」

「そして天下を見る」

「見据えていきますか」

「そうなる。二百万石と五万の兵で止まる男ではない」

そうした意味でだ。彼は蛟龍だというのだ。

「あの男の動きが我が家にも関わる」

「我が北条の」

「その動きにですか」

「わしは関東を手中に収める」

それが氏康の野望だった。彼は関東を己がものとすることを目指しているのだ。だからこそ二つの上杉家も里見家も倒し圧してきたのだ。

その彼の前にだ。織田が出て来るとなるとなのだった。

「だがその前に織田が来るなら」

「その時は」

「どうされますか」

「その時が問題となる」

袖の下で腕を組んでだ。そうして話す彼だった。

「織田と。どうするかな」

「では必要とあらばですか」

「我が北条も」

「織田と」
「まだそこまではわからんが」
それでもだというのだ。氏康は己の脳裏にこれからのことを見ながら話していく。
「若し来るならばだ」
「覚悟しますか」
「そうなれば」
「それも考えていかなければな」
彼もまた天下が大きく動くことを見ていた。そしてそのうえでだ。尾張に進む今川とそれを迎え撃つ織田の成り行きを見守っていたのだ。

第三十五話　奇妙な砦その八

だがその当の信長はだ。こんな有様だった。
今は胡瓜をだ。縁側で食っていた。そのうえでこう傍にいる帰蝶に話す。
「この胡瓜もよいな」
「胡瓜もお好きなのですか」
「うむ、大好きじゃ」
笑いながらこう話すのだった。
「甘いものだけでなくこうしたものもじゃ」
「左様ですか」
「それでどうじゃ」
答えてからだ。帰蝶に言ったのである。
「御主もな」
「その胡瓜をですか」
「そうじゃ。食うか？」
「はい」
帰蝶は微笑んで信長のその誘いに応じた。
そのうえで皿の上の胡瓜を一本手に取って口にする。一口食べ終えてからこう言うのだった。
「美味しいものですね」
「採りたてだからのう」
「それをそのままですか」
「水で洗ってそれをじゃ」
食べているというのである。
「野菜も果物も新鮮なのが一番じゃ」
「魚もですね」
「うむ。まあ干したものや燻製も嫌いではないがな」
酒以外はだ。どれもいける信長だった。

しかしここでだ。彼はこんなことを言った。
「じゃが。味はじゃ」
「味は？」
「わしは濃い方がいい」
こう言うのである。味に関してはだ。
「その方がしっくりとくるわ」
「そうですね。私もそれは」
「尾張や美濃は味付けが濃い」
そうした味なのだ。信長はとりわけ味噌が好きだ。その味噌の味もなのだ。
「それがよい」
「左様ですね。味はやはり濃い方が」
「今川じゃ」
彼の名前も出した。必然の様にだ。
「京風の味を好むそうじゃがな」
「駿府には都落ちした公卿の方が大勢おられるそうですね」
「その方々の影響でじゃ。そうらしい」
「京の味ですか」
「わしは好かん」
その京の味はというのだ。
「やはり濃い方がよい」
「味噌の味も随分違うとか」
「色まで違う」
味どころではないというのだ。それまでもというのだ。
「何もかもが違うのじゃ」
「色までなのですか」
「そうじゃ。尾張の味噌は赤いのう」
そうなっている。とにかく尾張の味噌は赤い。しかし京はというと。
「都の味噌は白いのじゃ」

「味噌が白いのですか」
「そうじゃ、白いのじゃ」
このことをだ。帰蝶に話す。
「面妖じゃろ」
「はい、確かにそれは」
「味噌は赤い方がよい」
信長はあくまで己の好みを述べる。
「白い味噌は口に合わぬ」
「では駿河には」
「何が悲しくて行くものか」
駿河、ひいては今川へのだ。他ならぬ意志表示であった。

第三十五話　奇妙な砦その九

「わしはやはり赤味噌よ」
「そうですね。それでは」
「さて、出羽がそろそろ戻ってくる」
築田のことである。
「面白い話をな」
「面白いですか」
「そうじゃ。面白い話を持って来る」
「では。それが来てから」
「さてな」
帰蝶の今の問いにはだった。
信長はとぼけてだ。こんなことを言うのであった。
「わしは今は動きたくないのう」
「では篭城ですか？」
「ふむ、どうしたものか」
今度もだ。はっきりとしない返事だった。
そうしたはっきりとしない返事を続けてだ。彼はだ。
のらりくらりとした調子でだ。こんなことも言った。
「とりあえずはこの胡瓜を食ってじゃ」
「食べて。そうしてですか」
「弓でも引こうか」
今はそれだというのだ。
「天気がよいしな」
「そうですか。今日は弓ですか」
「そうじゃ。どうじゃそれで」
「それはいいのですが」
今は流石にだ。帰蝶もだ。
信長のあまりもの余裕、今川が出陣したというのに見せるそれを

見てだ。
　不安を感じずにはいられなかった。それで彼に言うのだった。
「今はです」
「ははは、御主もそう言うか」
「申し訳ありませんが」
「そうじゃな。今はそういう時じゃ」
　それがだ。わかっているといった口調であった。
　しかしそれでもだった。信長の様子は全く変わらない。それでやはりなのだった。
「では。弓を引こう」
「そうされますか」
「うむ、そうするぞ」
　こうしてだった。彼は今は弓を引きに的の場所に向かうのだった。
彼だけが余裕の中にあった。周りはそんな彼をいぶかしんで見るだけだった。

第三十五話　完

２０１１・４・２

第三十六話　話を聞きその一

第三十六話　話を聞き

信長のところにだ。簗田が戻ってきた。そうしてだ。
主に対してだ。尾張の東のことを細かく話した。
それを聞いてだ。信長は確かな顔で頷いた。そのうえでの言葉だった。
「よし、それではじゃ」
「それではといいますと」
「桶狭間の辺りじゃな」
その場所を話に出すのだった。
「その辺りの百姓達に伝えておけ」
「何とですか？」
「酒を用意しておけとな」
前に話したことをだ。今も話すのだった。
「よいな。酒をじゃ」
「では。勝った暁には」
「違う、今川に飲ませる酒じゃ」
その為の酒だというのだ。
「桶狭間に来たその時にじゃ」
「今川に酒を献上せよというのですか」
「その通りじゃ。そうせよと伝えよ」
こう簗田に告げる。
「ふんだんにじゃ。馳走させよとな」
「あの、何故でしょうか」
簗田は主のその話を聞いてであった。
「敵に酒を飲ませるのですか」
「そうじゃ。飲ませるのじゃ」
また言う信長だった。

「ただ。このことは内密にしておくようにな」
「それがしだけが知っていよというのですか」
「わかったな。他言無用じゃ」
「殿がそう言われるのでしたら」
彼も納得はした。しかしであった。
主のそうした行動にはいぶかしむしかなかった。しかもだ。
信長の奇妙な行動は続く。美濃に向かわせた平手と一万二千の軍もだ。
そこから全く動かそうとはしない。ただそこに置いているのだ。
それを見てだ。家臣達はここでもいぶかしむのであった。
「今回ばかりはわからぬのう」
「流石に美濃には進ませぬが」
それでもだというのだ。
「かといっても清洲に呼び戻すでもなし」
「一体何を考えておられるのか」
「わからぬ」
「ううむ、まさか」
生駒はだ。こう予想を立てるのだった。
「殿は今川に清洲まで攻めさせ」
「そしてか」
「そのうえでじゃな」
「そうじゃ。この清洲をあえて取り囲ませ」
そのうえでだというのだ。生駒はその軍略で信長の考えを予想してみせた。語るその目は鋭く声も確かなものになっている。
「そこで平手殿の軍を呼び戻す」
「して城の内外から挟み撃ちにする」
「そうするというのか」
「そうじゃ。しかしそれは」
この策はだ。どうかというのだ。
「新五郎殿が言われていることじゃ」

「その通りじゃ」
その林がだ。生駒に対して答えた。
「それが一番妥当じゃからな」
「そうでございますな、やはり」
生駒もだ。林のその話に応える。
「今はそれが一番妥当でございます」
「しかし殿はどうもそう考えてはおられぬ」
林はこれ以上はないまでに怪訝な顔で語る。

第三十六話　話を聞きその二

「ではどう考えておられるのじゃ」
「奇矯なことを好まれる方だが」
「今度ばかりはのう」
「まことにどう考えておられるのか」
「全くわからぬ」
他の家臣達もだ。こう言うばかりだった。
山内もだ。それは同じでありこう同僚達に話す。
「さて。殿は今ものどかであられるが」
「あの方が大胆にしてもじゃ」
今度は九鬼が言う。
「幾ら何でも今はのう」
「左様、諦められたのであろうか」
山内はこんな考えもしたのだった。
「今川に降るとでも」
「まさか。それはないでござろう」
長谷川がだ。山内の今の話を否定した。
「殿に限って」
「それはないか」
「織田はそこまで弱くはなかろう」
長谷川が言う根拠はそこにあった。
「一万五千の兵がおり六十万石ぞ」
「今川には劣るが戦えるな」
万見ははっきりと言った。
「充分な」
「その通り。しかも殿が誰かに降るか」
長谷川はこのことも話した。
「とても考えられぬ」

「言われてみればそうじゃな」
山内もだ。そうした話を聞いてだ。
腕を組んでだ。考える顔になって己の考えを打ち消したのだった。
「それはないか」
「しかし。何故じゃ」
今度は堀尾が言う。
「殿の今の余裕は」
「わしもわからん」
今言ったのは彼等の中の首座と言ってもいい柴田であった。やはり彼は別格である。そうした意味で平手と並ぶ存在である。
「しかし。今織田は最大の危機じゃ」
「それは言うまでもないな」
「かなり危うい」
「果たしてどうなるか」
「わかったものではない」
他の家臣達もこう話す。柴田の言葉を聞いてだ。
「今川の数は多い」
「苦戦は免れんぞ」
「しかし誰か離れるつもりの者はおるか」
柴田は強い顔でだ。他の者達に問うのだった。
「ここには平手殿と大学殿、そして大学殿と同行する猿や小六達の他の主だった面々が集まっておる」
「そうじゃな」
森も柴田のその言葉に頷く。
「ここにじゃ。ほぼ皆集まっておる」
「今から全員目を閉じる」
柴田がまた言った。
「そして半刻経って目を開ける」
「その間に去りたい者は去れ」
「そう言うのでござるな」

「そうじゃ。そうするとしよう」
これが柴田の今の考えだった。つまり危機を前にして団結を見るというのだ。
「それでよいか」
「それでは。権六殿の言うように」
「今より全員で目を閉じ」
「半刻」
その間にだ。全てを決めるというのだ。そしてだ。
柴田はだ。同僚達にこうも話した。
「今去る者は一切咎められぬ。殿にもわしが話しておく」
「そのうえで選べと」
「そういうのでござるな」
「そうじゃ。ここで決めよ」
柴田の言葉は強い。何時になくだ。

第三十六話　話を聞きその三

「殿につくか去るか。それをな」
「ではじゃ。閉じようぞ」
森が最後に言ってだ。そうしてだった。
全員目を閉じたのであった。それから半刻だった。
ゆっくりと目を開ける。するとだ。
誰も去ってはいなかった。全員いた。それどころかだ。
慶次に至ってはだ。寝てしまっていた。今にもいびきをかきそうだ。
その彼を見てだ。柴田はだ。
すぐにだ。拳をその頭に見舞ったのであった。
「何をしておるか」
「痛っ、何でござるか」
「幾ら何でも寝る奴がおるか」
こう言ってだ。座ったまま胡坐をかいて寝ていた慶次を殴ったのである。
そのうえでだ。また言う柴田だった。
「去る去らない以前の話じゃ」
「いやいや、わしは最初から残るつもりでござるから」
それでだと話す慶次だった。
「寝ていたのでございます」
「それでだというのか」
「それならば、寝ておこうと思いまして」
「全く。いつもいつも御主は」
「しかし誰もおりませぬな」
慶次郎はここで部屋の中を見た。それでだ。
誰がいるかどうか確かめるとだ。一人も出てはいなかった。見事全員揃っている。

それを見てだ。彼はまたこう言うのであった。
「よいことですな」
「寝ていた者が言うのか」
「言ってもいいのではないですか？」
「まだ言うか、全く」
「しかしそれがし殿と共に戦いますぞ」
それは言う慶次だった。
「しかとです」
「ふん、御主はもう少し真面目にやるのじゃ」
「いつも真面目でござるが」
「真面目に見えるか。しかしじゃ」
柴田は何だかんだで慶次の話を聞いて周りを見る。するとだ。
確かにだ。誰もがいた。本当に誰も去ってはいなかった。
そしてだ。林もだ。こう言うのである。
「今更のう。違う主に仕えることなぞな」
「左様、我等の主は殿だけじゃ」
林通具も兄に続く。
「今川になぞ。仕えられぬわ」
「ならばじゃ」
島田もいる。本当に誰も去ってはいない。
「殿と最後の最後までいるだけよ」
「そういうことじゃな。それではじゃ」
柴田は彼等の言葉に満足した笑みを浮かべた。そしてであった。
同僚達にだ。また言ったのであった。
「よいぞ、では我等最後の最後までじゃ」
「殿と共に」
「生きて死ぬとしよう」
「わしもなのじゃ」
柴田はその満足した笑みで話す。
「正直殿以外に仕えるつもりはない」

「織田家以外に」
「誰一人としてですな」
「それを見たかったのじゃがな」
柴田は唸るようにして述べる。
「ううむ、まことに一人も去らぬとはのう」
「権六殿も驚かれたのですか」
「驚いたから言うのじゃ」
丹羽にもこう返す。
「全員とはのう」
「今更ですしな」
「その通りでござる」
佐々と金森も言う。
「殿と一緒にいれば色々とあります」
「今で去ってはそれこそ」
「それもあるのう。殿はまことに奇矯な方よ」
生真面目どころか糞真面目と言うに相応しい柴田が言うと余計にその通りだと思えることだった。そうした意味で彼は主とは違っている。

第三十六話　話を聞きその四

「何を考えておられるかわからんわ」
「その割に権六殿は殿がご幼少の頃よりお仕えしていますな」
「一度も見限られたことはありませぬな」
「わしも今更じゃ」
口を大きく笑って述べるのだった。
「殿といればこの程度はじゃ」
「そうでござるな。何をされるかわかりませぬ」
島田もこう言う。
「では最後の最後まで見させてもらうとしましょう」
「うむ、そうしようぞ」
柴田は最後に頷いたのだった。少なくとも彼等は誰一人として主を見限らなかった。そしてそれはだ。丸根と鷲津でも同じであった。
兵達は逃げない。あくまで砦に留まりだ。そのうえで敵を迎え撃つのであった。
その中でだ。佐久間盛重が木下に問うていた。既に砦は堀を深くし壁は二重にして簡単な櫓まで築いてだ。見違えるまでになっていた。
その櫓の上でだ。彼は木下に問うたのである。
「猿、よいか」
「はい、何でしょうか」
「ここまでしたがじゃ」
砦の備えをだというのだ。
「しかしこれでもじゃ」
「陥ちると申されますか」
「正直危ういであろう」
彼は顔を顰めさせて木下に問うのだった。
「我等は二つの砦を合わせても千ぞ」

「兵の数はですな」
「それに対して今川は二万五千」
その数を言うのだった。ここでもだ。
「確かに敵の先陣だけを相手にするがじゃ」
「それでも数が違いますな」
「そうじゃ。しかも先陣は三河武士じゃぞ」
三河武士がどういった者達かだ。彼は嫌になる程知っていた。
「あの強い者達じゃが」
「だからこれだけの備えをしたのです」
「油も糞も用意したな」
「左様です。とにかく用意できるものは用意しました」
「これで今川を完全に防げるか」
「長くかかって一週間です」
木下はここで時間を話した。
「一週間もちます」
「一週間しかもたぬのか」
「いえ、一週間かかればです」
どうかというのだ。それだけあればだ。
「充分です」
「充分だというのか」
「その間に殿が何かをされます」
目を鋭くさせてだ。そのうえでの言葉だった。
「わし等はそれまで待てばいいのです」
「ここで防げばいいのか」
「敵を引きつければさらにいいのです」
今度言ったのは木下秀長だった。
「それだけの飯や水はありますし」
「ふむ、では心配はいらぬというのか」
「左様です」
木下秀長も言うのだった。

「我等は一週間だけ耐えればいいのです」
「それだけでございます」
「ううむ、一週間か」
その日を聞いてだ。佐久間盛重は唸る様にして述べた。
「一週間なら耐えられるかのう」
「大学殿なら大丈夫です」
「それだけでしたら」
いけるとだ。二人は話すのだった。
「わし等も頑張ります」
「死力を尽くして戦いますので」
「頼むぞ。今は一人でも兵が欲しい」
佐久間盛重の言葉は切実である。
「よいな。必死に戦うぞ」
「わかっています」
「必死に戦わないと生きられない状況ですし」
「わしもおりますぞ」
ここで蜂須賀も出て来て言う。

第三十六話　話を聞きその五

「何としても生き残りましょう」
「猿達の案で砦をここまで固めた」
そのことにはだ。蜂須賀は素直に喜びの言葉を述べた。
「そして小六もおるのう」
「それがしは忍ですので」
「外で暴れてもらうと有り難いのう」
こうした状況での忍の使い方はわかっていた。それもよくだ。
「頼んだぞ」
「お任せあれ」
「今川にはこれといって強い忍がおらぬ」
これは今川の急所の一つだ。しかし義元はそのことを自覚していない。
「しかしこちらには小六がおる。心強いな」
「目一杯暴れてよいですな」
「むしろ暴れてくれ」
そうしてくれというのだ。
「よいな」
「それでは」
「一週間、生き残るぞ」
それをだ。佐久間盛重は三人に話したのだ。
「よいな。殿がその何かをされるまでな」
「ですな。話が決まったところで」
木下が笑いながら言ってきた。
「飯にしますか」
「もうそんな時間か」
「左様です。すぐに食いましょう」
「そうだな。それではな」

こうしてだ。彼等は昼食に入った。飯を炊いてそれを干し魚と共に食う。その中でだ。

木下がだ。こんなことを言うのであった。

「それがし実はです」

「うむ、どうしたのじゃ？」

蜂須賀が木下に問う。四人で櫓の中で車座になって座って食べているのだ。

「米が好きとかか？」

「握り飯が好きでござって」

こう言うのである。握り飯が好きだとだ。

そしてさらにだ。こんなことも話した。

「他には臼で潰したひき米も好きでございます」

「それもか」

「あれはいいものでございますな」

笑ってだ。それがいいというのだ。

「この戦が終われば女房と二人で楽しく食うとします」

「おお、そういえば御主妻を迎えたのじゃったな」

「はい」

佐久間盛重の問いにも笑顔で頷く。

「左様でございます」

「うむ。それでなのじゃがな」

「それで？」

「女房殿は大事にするようにな」

佐久間盛重がここで言うのはこのことだった。

「くれぐれもじゃ。大事に奉るのじゃ」

「左様ですな。いや、それがし実は」

自分はどうなのかとだ。木下は握り飯を口の中に入れながら話す。

口の周りに米が二粒三粒と付くがそれは取って口の中に入れる。

「この顔で。しかも背が小さいですから」

「女房は得られぬと思っておったのか」

「正直危ういと思っていました」
こう素直に話すのだった。
「しかしそれでもこうして」
「女房を迎えられたのじゃな」
「よくそれがしの様な者が迎えられました」
「いや、それは容易じゃろう」
佐久間盛重は己の幸せを心から喜ぶ木下にこう話した。
「御主だとな」
「秀長もそう言っていますが」
木下はこう言いながら己の弟を見た。無論彼も握り飯を食べている。

第三十六話　話を聞きその六

「しかし。本当にそうでしょうか」
「この言葉は月並みじゃが」
佐久間盛重はここでこう前置きしてまた述べた。
「あれじゃ。男は顔ではない」
「それがし背も低いですが」
「背でもない」
それも否定するのだった。
「もっと言えば腕っぷしでもない」
「それでもありませんか」
「そうじゃ。どれでもない」
こう言ってだ。そこから本題に入った。
「人を惹きつけるものじゃ」
「それでございますか」
「殿を見よ。何かこう共に邁進したくなるであろう」
話すのは信長のことだった。彼のことを言えばだ。
木下も少し頷くものを見た。そうしてこの様に述べた。
「そうですなあ。殿を見ていれば」
「そうじゃろう。共にいたくなるな」
「そして支えたくもなります」
「それじゃ。大事なのはそれじゃ」
あくまで木下にこのことを話す。
「猿、御主にはそれがあるのじゃ」
「人をですか」
「うむ。現にわしは御主が嫌いではない」
それも言うのだった。
「その話を聞きたくもなる」
「だといいのですが」

「とにかくじゃ。御主には人を惹きつけるものがある」
それは確かだというのだ。
「安心せよ。御主には必ずよい女房がつくに決まっておったのじゃ」
「ねねがでございますか」
「そうじゃ。しかし女房は大事にせよ」
それは絶対だというのだ。女房を大事ということはだ。
「よいな。粗末にすれば罰が当たるぞ」
「罰がでございますか」
「罰が当たってはどうにもならぬ」
そのこともだ。強く言うのである。
「女房を大事にせん男は所詮器が知れておるわ」
「母親もでございましょうか」
「そうじゃ。おなごは神様じゃ」
これは日本において古来から言われていることである。彼はそのことをそのまま木下に話したのである。
「粗末にするととんでもないしっぺ返しが来るぞ」
「言われてみれば」
そう言われるとなのだった。木下にしても思い当たるふしがあった。彼のその思い当たるふしはというとだ。
「母上は優しいでございますが」
「怒るとおっかないですな」
木下秀長も兄に続く。
「それを考えますと」
「おなごは怖いものでございますな」
「そういうことだ。おなごは敵に回すな」
佐久間盛重は強く言う。
「決してじゃ」
「ううむ、ではおなごというものは」
蜂須賀もここで話す。彼も話をじかと聞いているのである。
「まさに山の神でありますな」

「そうじゃ。山の神は怒ると怖い」
佐久間盛重はその蜂須賀に対しても話す。
「それをわかっておくことじゃ」
「よくわかりました」
頷く蜂須賀だった。そうした話をしてである。
彼等は今は備えを続けていた。そしてそれはかなりのものになっていた。
それを聞いてだ。雪斎は険しい顔になって述べるのだった。
「ううむ、二つの砦でそうなのか」
「その様です」
元康がその雪斎に述べた。二人は今も軍の先頭を進んでいる。そのうえで馬上において話をしているのだ。

第三十六話　話を聞きその七

「どうやら。これはです」
「最初から苦労しそうじゃな」
「そうかと。ここはです」
「まずは鷲津じゃな」
雪斎は最初に攻める場所を定めた。
「そこに敵将佐久間大学がおるのじゃな」
「はい、そこにです」
「手強い男じゃ」
将についてだ。雪斎は述べた。
「織田家の中でもかなりな」
「猛者と聞いております」
「うむ。その強さは尋常ではない」
「では。それを倒すのは」
「それだけでも容易ではない」
佐久間盛重だけでもだというのだ。
「ましてや。守りを固めているとなると」
「余計に」
「さらにそこに知恵者なりはしこい者がいると」
そうなればだとだ。雪斎の言葉は続く。
「陥とすのは。数日では無理であろうな」
「では一週間では」
「それで陥とせればよいのだがのう」
「一週間でもですか」
「どうも織田は違ってきた」
元康に話すその顔がだ。曇る一方である。
「先代の頃とは比べものにならぬ」
「尾張を一つにしただけではなく」

「一つにできたのは違ってきたからじゃ」
尾張の統一はだ。その一環に過ぎないというのだ。
「それが出ただけに過ぎぬ」
「では。今の織田は尾張を一つにした以上に」
「力があるのかもな。それがこの戦で出されれば」
「我等はどうなりますか」
「それが問題じゃ。我等とて敗れる訳にはいかん」
雪斎の言葉はここでも強い。
「何としてもじゃ」
「まずは二つの砦を陥としますか」
「必ずな。かける時間は短くじゃ」
短期決戦にするというのだ。戦においての常道の一つだ。戦いは長引かせない、孫子にも書かれている非常に重要なことである。
当然雪斎もそれを踏まえてだ。今元康に話すのだった。
「わかるな、竹千代よ」
「では。一週間以内に」
「それを目指すとしよう」
「わかりました」
そんな話をして、であった。彼等は兵を進めていた。しかしその元康のところにだ。
急にだ。後ろから使者が来てだ。こう彼に言ってきたのである。
「氏真様からか」
「はい、そうです」
氏真からだ。使者が来てである。そのうえで彼にこう伝えてきたというのだ。
「それなのですが」
「使者とは。何かあるのか」
「そちらは大丈夫かと」
こう尋ねてきたというのである。
「そう尋ねて来いとのことです」

「いや、それがしは常に大丈夫だと」
元康は少し苦笑いになってだ。そしてだ。
その使者にだ。こう述べたのであった。
「伝えてくれるか」
「はい、それでは」
「うむ。しかし氏真殿も」
元康はその氏真についてだ。こうも言うのであった。

第三十六話　話を聞きその八

「心配性じゃな」
「戦でございますから。何かあれば困るとのことです」
「わしが討たれたりすればか」
「はい、若しそうなればです」
「戦もまだだが」
それはこれからだ。しかし氏真はそれをもう心配していたのだ。
それでだ。先陣の彼にだ。あえて尋ねてきたというのである。
「それでもなのか」
「そろそろ敵に遭うのではないかとも仰っていました」
「いや、それもまだだ」
敵の先陣と遭うのもだ。まだなのだった。確かに二つの砦には近付いてきている。しかしそれでもまだ敵そのものには遭っていないのだ。
「まだなのじゃ」
「そうですな。ではそれもお伝えしておきます」
「うむ、頼むぞ」
「ああ、それとです」
使者は帰ろうとしたところでだ。ふと思い出した顔になってだ。
そのうえでだ。元康にこんなことを話してきた。
「氏真様からですが」
「うむ、他には何と仰ってたのだ」
「次の戦では轡を並べたいと」
そうしたいとだ。氏真が言っていたというのだ。
「そう仰っていました」
「何と、その様なことをか」
「はい、仰っていました」
そうだとだ。使者は話すのだった。

「その様にです」
「左様か。それではじゃ」
「はい、それでは」
「こう伝えてくれ」
元康はにこりと笑ってだ。そうしてだ。
その使者に対してだ。こう告げたのであった。
「それがしもそうしたいとな」
「今度の戦ではですね」
「うむ、そうじゃ」
まさにだ。そうだというのである。
「そうしたいとな」
「わかりました。それではその様に」
「頼むぞ。ではな」
「それでは」
使者は一礼してから元康の前を去り本隊のところに戻っていく。
その彼を見送ってからだ。元康と使者のやり取りを見ていた雪斎はこう述べたのだった。
「氏真様はのう」
「何かありますか？」
「お優しい方じゃ」
彼の人柄をだ。こう評したのである。
「下々の者に対してもそうじゃ。気さくな方じゃ」
「確かに。そうでございます」
「政も好まれるし文もされる」
治水や開墾、それに町の手入れが好きである。そして和歌についてはだ。それこそ嗜むというものではないのだ。それこそなのだ。
常に和歌を歌っているようなものなのだ。
「蹴鞠は絶妙、剣も免許皆伝じゃ」
「素晴らしい方です」
「しかしじゃ。今にはあまりにも優雅でお優し過ぎる」

雪斎の顔がだ。顰められた。
「一人を相手にはできても兵を率いるのは不得手な方じゃ」
「それはかなり」
「うむ、戦国の世には向いておらぬ方じゃ」
戦国大名という意味で、である。
「だからのう。危ういのじゃ」
「戦がなのですか」
「戦のできぬ方じゃ」
氏真の問題はだ。そこだというのだ。
「あまりにも公卿の方々の影響を受け過ぎた」
「よいことではないのですか」
「文を知るのはよい」
それ自体には何の問題もないというのだ。

第三十六話　話を聞きその九

「しかし。度を過ぎればじゃ」
「何ごとも過ぎたるはですか」
「そうじゃ。氏真様はまさにじゃ」
その過ぎたというのである。
「こう言っては何じゃが殿もな」
「殿もですか」
「うむ、当初から文を愛された」
義元にしてもだ。そうだというのだ。
「じゃが今川の主となられてから公卿の方々とよく共におられるようになり」
「それが余計に」
「なられてしまった。それが大事にならなければよいが」
「ではそれにつきましては」
「我等が果そう」
雪斎とだ。元康とでだというのだ。
「よいな、この戦でもじゃ」
「はい、それでは」
「竹千代、どうなろうとも」
雪斎は前を見てだ。元康に語った。
「生きよ」
「生きよと申されますか」
「そうじゃ。御主は生きなければならん」
切実な顔で彼を見据えての、そのうえでの言葉だった。
「よいな。何があろうともじゃ」
「またどうしてその様なことを」
「御主の才故じゃ」
彼がどれだけの才覚の持ち主かは師である雪斎が最もよくわかっ

ていた。だからこそ言うというのである。
そしてだ。さらに言うのであった。
「その才が若くして消えるのはあまりにも惜しい」
「だからでございますか」
「そうじゃ。それにわしは御主が好きじゃ」
人間としてもだ。そうだというのだ。
「その御主が死ぬのは耐えられぬわ」
「では」
「いざとなれば逃げよ」
それは決して恥ではなかった。戦国の世では戦に負けることも常だからだ。それで逃げるなというのはだ。愚か者の言うことだからだ。
「その為に水練も馬術も教えておいたのだからな」
「その二つをでございますか」
「いざとなれば逃げるのは一人じゃ」
誰が逃げるのでもない。逃げるのは自分自身だからだ。
「だからじゃ。よいな」
「馬術と水練を使い」
「そのうえで逃げよ」
また言う雪斎だった。
「よいな。そうせよ」
「そうして宜しいのですね」
「そうせよ。わかったな」
「はっ、ではその時は」
「さて。あと少しで尾張に入る」
雪斎は話を戦に戻した。その尾張のことにだ。
「すぐに二つの砦を攻めるか」
「そうしましょう」
「片方を重点的に攻める」
策についてもだ。話すのだった。

「その間片方は取り囲んだままにしておく」
「では一方に兵を集め」
元康は雪斎の考えがわかった。それで言うのだった。
「そのうえで集中的に攻めますか」
「そうじゃ。囲んだままの方に兵はそれ程度置かぬ」
そうするというのである。
「一方を陥とせばもう片方も自然に陥ちる」
「ではその様に」
「鷲津じゃな」
どちらを攻めるかとなるとだ。そちらだというのだった。
「そちらを先に攻めるか」
「そちらにしますか」
「そこに佐久間大学がおる」
それが大きいとだ。顔を鋭くさせて言うのであった。

第三十六話　話を聞きその十

「蛇を倒すにはまずは何処からじゃ」
「頭です」
元康の返事は迅速だった。まさにすぐに答えたのだった。
「頭を潰せばそれで終わりです」
「そういうことじゃ。鷲津を陥とせば丸根も陥ちる」
「将がいなくなればですね」
「そういうことじゃ。ではよいな」
「はい、それでは」
「とはいってもそこを陥とすのが辛いのじゃがな」
それはわかっていたのだった。
「大学だけではなかろう」
「織田の将は優れた者が数多いからこそ」
「そうじゃ。多い」
その話もまたするのだった。
「だからじゃ。大学の他にも砦にはおろう」
「蜂須賀という者がいるようですが」
元康は彼の名前を述べた。
「後は」
「特に名の知れた者はおらんな」
「はい、確か」
「しかし名を知られていないからといって安心はできん」
無名は即ち無能ではない。それもまた問題だというのだ。
「誰も最初は知られておらんからな」
「名は知られるようになると」
「功を挙げてな。そうなるのじゃ」
「ではこれから名を挙げる者がいるやも知れないと」
「それもある。では用心してな」

「はい、行きましょう」
こんな話をしてだった。彼等は先陣を進んでいた。そうしてであった。
尾張に入った。その報はすぐに義元に届けられた。
それをだ。義元は輿の上で聞いていた。そしてだ。
話を聞いてからだ。彼はこう言うのであった。
「これからじゃな」
「はい、そうです」
「これからです」
その通りだと述べる家臣達だった。
「織田がおります」
「奴等との戦です」
「そうじゃな。しかしじゃ」
ここで義元はだ。余裕そのものの顔で言うのであった。
「美濃との境に兵を置くとは面妖な」
「織田は斉藤ともことを構えております」
「だからでしょう」
家臣達は輿に座る義元の左右から馬上から話す。
「それで主力をそこに置かざるを得ないのでしょう」
「それでかと」
「外交を怠るからじゃ」
義元は信長のその状況を考えて侮蔑して述べた。
「戦の前には色々と備えをせねばならん」
「戦をする家以外とは矛を収める」
「それですな」
「そうじゃ。それをせずに戦をするのは愚かな話じゃ」
それはわかっているのだった。少なくとも義元は外交においても無能ではない。それは確かだ。実際に武田、北条と婚姻を結んでいるのが何よりの証だ。
「全くのうつけよのう」

「ですな。しかしです」
「それは我等にとって好機です」
「そうじゃ。清洲を取り囲みうつけを我が前で頭を垂れさせる」
そうするというのである。
「そのうえで麿の家臣にしてやろう」
「して竹千代と共にですな」
「殿がみっちりと教える」
「そうされますか」
「ほっほっほ、麿はああしたうつけを教えるのははじめてじゃ」
もうそのつもりだった。
「さて、どういった荒馬かのう」
「父上、荒馬でしたら」
氏真がその父に話す。

第三十六話　話を聞きその十一

「丹念な手入れが必要かと」
「そうじゃのう。今から楽しみじゃ」
「してそのうえで上洛もですな」
「それもまた」
「そうよ。都じゃ」
家臣達にまた応えるのだった。
「都を元の雅な場所にしようぞ」
「ですな。華やかな都に」
「そうしましょうか」
そんな話をしてだ。彼等は悠然と兵を進める。
彼等は既に勝っているつもりだった。しかしである。
その今川の進軍を聞いてだ。越後ではだ。
春日山城の主の間において謙信がだ。二十五将達に話すのだった。
「これは危ういです」
「織田がですか」
「尾張が」
「いえ、違います」
織田でないとだ。謙信は言い切った。
「今川殿がです」
「今川殿が危ういのですか」
「左様ですか」
「はい、あのままならばです」
どうかというのである。謙信のその言葉は真剣なものだ。
「敗れます」
「それは何故でしょうか」
本庄が主に対して問うた。
「何故今川殿が危ういのでしょうか」

「慢心です」
それによるというのである。
「慢心、戦において最もあってはならないことです」
「今川殿にはそれがある」
「だからですか」
「はい、戦においては慢心すれば必ず敗れます」
それは絶対だというのだ。戦の場に生きる謙信だから尚更だった。
今の言葉は何よりも強くそして説得力のあるものであった。
「例え多くの兵があろうとも。それでは」
「敗れるのは今川殿」
「ですか」
「左様です。今川殿はそれに気付いていません」
しかもだ。自分ではわかっていないというのだ。
そうしたことを踏まえてであった。謙信は言うのであった。
「それで敗れぬ筈がありません」
「そうなのですか」
「あの今川殿が敗れる」
「そうなりますか」
「そしてです」
今川が敗れてだ。それで終わりではないというのだ。

第三十六話　話を聞きその十二

「東海は大きく変わります」
「といいますと一体」
「どうなると」
「おそらく今川殿はこの一戦で潰えます」
謙信はそこまで読んでいた。謙信は全てをその直感で読んでいた。
そのうえでだ。今二十五将に話すのである。
「その後の駿河にはです」
「武田ですか」
「あの家が入りますか」
「甲斐の虎、必ず動きます」
謙信はここでも直感に基づいて話す。
「主のいなくなった駿河に入るでしょう」
「そうなれば」
「武田はかなりの力を手に入れますな」
「只でさえ強大だというのに」
今の時点でも天下屈指の勢力を誇る、それが武田なのだ。
そしてそこに駿河まで手に入れるとどうなるか。話はそこにあった。
「駿河の富までとは」
「最早殿か北条でなければ」
「相手になりませんな」
「いえ、武田よりもです」
それよりもだとだ。謙信はここで言った。
「織田です」
「その勝利を収めたですか」
「織田がなのですか」
「そうです。織田は間違いなく天に昇ります」

謙信の頭の中に青い龍があった。それこそがである。
「そしてそのうえで、です」
「その武田にも匹敵する力を手に入れる」
「そうなりますか」
「間違いなく。蛟龍は東海に留まりません」
信長のいるだ。そこに終わらないというのである。
「さらに上を目指すでしょう」
「左様ですか」
「ではこの度の戦は」
「かなり大事ですな」
「その通りです」
謙信はここでもだ。断言してみせるのだった。
そうした話をしてだ。そのうえでだった。
家臣達にだ。あらためてこう話すのだった。
「そして我等はです」
「はい、上杉は」
「どうされますか」
「越中は手に入れるつもりはありませんでしたが」
謙信はそれはというのだった。
「ですが。手に入ったからにはです」
「万全に治める」
「そうされますね」
「そのうえで一向一揆との戦を続けます」
謙信の敵は武田や北条だけではない。彼等も敵なのだ。
一向一揆との戦も激しいものになっている。しかし彼等に対してもだ。謙信は勝ち続けている。やはり軍神の名は伊達ではない。
「そうします」
「そして能登ですが」
「あの国は」
「畠山とはですが」

「上杉に対して反感を持っています」
それが問題だというのである。
「こちらから戦は求めませんが」
「それでもですね」
「あちらから来るならば」
「降りかかる火の粉は払わなければなりません」
戦国の世ならば当然のことだった。そうしなければ生き残ることはできない、戦国の世というのはそうした過酷な世なのである。
だからだ。謙信もだ。それならば戦わなくてはならないのだった。
そうした話をしてだ。謙信もだ。
織田と今川の戦の成り行きを見ているのだった。織田が勝利を収める、そう確信しているのはだ。謙信もまた然りなのだった。

第三十六話　完

２０１１・４・９

第三十七話　二つの砦その一

第三十七話　二つの砦

鷲津にだ。敵が尾張に入ったとの報が入った。
報を入れたのは蜂須賀の手の者達だった。黒装束の彼等が佐久間盛重達に述べるのだった。
「そうか、遂にか」
「はい、来ました」
こうだ。その忍の者達が佐久間盛重の言葉に答える。
「総勢二万五千です」
「話通りの数だな」
「そして先陣はです」
忍の者の言葉がさらに続く。
「松平元康、そしてです」
「太源雪斎じゃな」
「左様です」
まさにだ。その二人だというのだ。
「その二人が今この鷲津に迫っております」
「わかった」
佐久間盛重はそこまで聞いてだった。
強い顔でだ。こう頷いてから言うのだった。
「それでは全ての者でじゃ」
「この砦を守る」
「そうされますね」
「無論だ」
木下兄弟にだ。佐久間盛重は強い声で答えた。
「よいな、すぐにだ」
「はっ、それではです」
「我等も」

「さて、いよいよはじまるな」
佐久間盛重は既に具足でその身を包んでいる。青いその具足を着てだ。
そのうえで彼はだ。また言うのだった。
「最後の最後まで戦い抜くか」
「今殿に報は出しておきました」
木下が佐久間盛重に述べる。
「一週間も経たないでしょう」
「殿が動かれるのにはだな」
「はい、我等はその間思う存分戦いましょう」
木下は微笑んで述べた。
「武勲を挙げればそれだけ褒美が貰えますし」
「ははは、言うのう」
佐久間盛重は木下の今の言葉にだ。顔を崩して大笑いした。
そしてそのうえでだ。彼は言うのであった。
「そうじゃな。敵が多ければ多いだけだ」
「功を挙げることができます」
「そうじゃ。その通りじゃ」
佐久間盛重も頷くことだった。まさにだ。
「ではわしもじゃ」
「戦われますか」
「そうしよう。ではじゃ」
今の木下の言葉でだ。佐久間盛重は一層奮い立った。そしてだ。
砦にいる他の者達もだ。それぞれこう言うのだった。
「よし、それではじゃ」
「わし等もじゃ」
「敵の首をどんどん取るか」
「そして褒美を貰うのじゃ」
こう言いだ。士気をあげるのだった。鷲津の砦の者達の士気はだ。
これ以上はないまでにあがるのだった。そうしてである。

木下秀長がだ。ここでこんなことを言うのだった。
「では。今から」
「飯じゃな」
「そうです。飯です」
蜂須賀の問いにだ。笑顔で答えたのである。
「それにしましょう」
「そうじゃな。腹が減っては戦ができぬ」
蜂須賀は口を大きく開けたうえで笑って話してみせた。
「まずは食うことじゃ」
「はい、ですから」
「さて、では飯をたらふく食ってそれでじゃ」
蜂須賀はさらに話すのだった。
「大暴れしてやるか」
「小六、食うのはよいがじゃ」
しかしここでだ。佐久間盛重はだ。その蜂須賀に顔を向けてこう告げるのだった。

第三十七話　二つの砦その二

「御主はそれ程食うでないぞ」
「むっ、それはどうしてでござるか？」
「そなたとそなたの手の者達は忍じゃ」
それでだというのである。
「その御主が食い過ぎて動けぬのでは話にならぬ」
「だからでございますか」
「そうじゃ。腹一杯は食うな」
「それは残念でございますな」
蜂須賀はこの世の終わりの如き顔になって述べた。
「いや、ここで腹一杯食えぬとは」
「戦が終わってからでよいだろう」
その落ち込む彼にだ。木下が笑いながら話した。
「それからな」
「それからか」
「そうじゃ。勝ってその祝いにたらふく食うのじゃ」
また話す彼だった。
「よいな、そうするとよいではないか」
「ううむ、御主が言うとじゃ」
「聞けるか？」
「うむ、妙に頷ける」
そうだと言う蜂須賀だった。
「何でもないようでそれでいてじゃ」
「はて。わしは特に何も話に入れておらぬが」
「それでもじゃ。御主が言うと妙にそうなるのじゃ」
「あれじゃな」
佐久間盛重もここで木下に話す。
「人たらしというかのう」

「人たらしでございますか」
「猿、御主はそういうタチらしい」
「兄上はこれまで誰かに強烈に嫌われたことはありませんな」
「そういえばないのう」
弟にも言われるとだ。まさにその通りだった。
「そうしたことは」
「それです。兄上は昔から付き合う者に妙に好かれてきております」
「ではそれか」
「はい、それがです」
人たらしだというのである。まさにだ。
「兄上のよいところなのでしょう」
「そうなるのか」
「それでなのですが」
木下秀長はあらためて兄に話した。
「兄上はねね殿も迎えられたのでしょう」
「ううむ、わしの様な不細工な男が妻をのう」
「だから言っておるだろう。男は顔ではないのだ」
「ううむ、それでは」
「そうじゃ。まあ人たらしというか人を惹き付けるもので言うと」
そういうことになってもだ。やはり彼であった。
「殿は桁外れじゃがのう」
「確かに。我等が殿は」
「殿とは共にいたくなる」
信長はだ。そうした主だというのだ。これは彼等が共に感じていることだった。だからこそだ。彼等は尾張にいるのである。
「そして殿の目指す先についていきたくなるからのう」
「ですな。それは」
「はい、確かに」
木下兄弟が佐久間盛重の言葉に頷く。そうしてだ。
二人でだ。あらためて話すのだった。

「ではこの戦を生き残り」
「殿と共に」
「行くとするぞ」
こんなことを話してだ。彼等は敵を待っていた。今川の軍勢は尾張に入りさらに進撃を続けていた。だが信長はだ。それを聞いてもだ。
動かない。清洲にいるままだ。美濃との境にいる平手が率いる主力に対しても何も指示を出しはしない。全くであった。
それを見てだ。林が主に言うのであった。
「篭城ですかそれともうって出られるのか」
「ふむ。どちらにするかじゃな」
「何もしないのが一番いけません」
「何じゃ、新五郎よ」
信長は林の今の言葉を聞いてだ。目を丸くさせて言うのだった。
「御主爺になったのか」
「どういう意味でございますか」
「だからじゃ。その言い方がそのまま爺じゃ」
それでだというのだ。平手だとだ。
「似てきたのか」
「流石にあそこまで口煩くはありませんが」
林は眉を顰めさせて信長に返した。

第三十七話　二つの砦その三

「しかしです」
「しかしか」
「そうです。どちらにされますか」
「今川は尾張に入っておるな」
「鷲津と丸根に近付いております」
林の言葉はいよいよ切迫したものになっている。
「それでも何もされないのですか」
「まあ落ち着け」
信長は怒った様に言う林に平然として述べた。
「茶でも飲むか」
「今は茶はいりませぬ」
林はきっとした顔で主に言い返す。
「そんなものはです」
「いりませぬか」
「左様です。とにかくどうされるのですか」
「さてな。とりあえずはじゃ」
「とりあえずは？」
「落ち着くのじゃ」
またこう告げる信長だった。
「よいな、今はじゃ」
「あくまでそう言われますか」
「そうじゃ。茶でも飲んでじゃ」
こんなことを言ってだ。彼は動かない。林はその主に小言めいたことを言い並べたがやはり動かない信長だった。結局林はそのまま彼の前を退いた。
そのうえでだ。苦々しい顔で柴田に言うのであった。
「このままではじゃ」

「確かに。まずいですな」
「篭城するならするでよい」
林はそれは悪くないというのだった。
「外で戦をするのもそれでよい」
「どちらにしても悪い戦にはなりませぬな」
「殿はあれで戦上手じゃ」
そのことはだ。もう林も充分過ぎる程わかっていた。瞬く間に尾張を統一した信長の技量は傍で見ればさらにわかることだからだ。
しかしだ。それでもだった。今はだ。
「だが今川はそうはいかんぞ」
「先陣にあの太源雪斎」
「しかも松平元康じゃ」
この二人のことを言うのである。
「何もしないで勝てる相手か」
「まず無理でござろうな」
「殿は何を考えておられるかわからぬ時が多いが」
その腹の読めなさがだ。今林を余計に苛立たせていた。
それでだ。彼はこう言うのであった。
「このままでは。まことに」
「今川に敗れると」
「わしは殿以外に、織田家以外に仕えるつもりはないわ」
それは信長が幼い頃から変わらない。彼にしても忠義は絶対なのだ。
「だからこそじゃ。殿には今こそじゃ」
「殿が動かれれば」
「戦はそれで終わりじゃ」
信長がだ。勝つというのだ。
「だからこそ言うのじゃが」
「ううむ、ここは」
「待つしかないのう」

「それが我慢できんのじゃがな」
「しかし新五郎殿がじゃ」
「わしが。何じゃ？」
林は柴田の今の言葉に顔を向けた。
「何だというのじゃ」
「いや、その様なせっかちなことを言うのがどうもな」
「おかしいか」
「そういうことはわしや又左が言うのが常だからのう」
柴田は織田家きっての直情家である。それは己でもわかっているのだ。
しかしだ。今はなのだった。
「それを林殿が言われるとは」
「何しろ今はこれまでにない危機じゃ」
だからだというのである。
「それでなのじゃ」
「左様でござるか」
「わかっていても焦ってしまう」
実際にだ。言葉にそうした感情が出ていた。

第三十七話　二つの砦その四

「どうにもな」
「しかし焦っても仕方ありませんぞ」
「それはわかっているのだが」
それでもだというのだ。
「殿は動かれるのかどうか」
「動かない筈がありませんがな」
「そうじゃな。では今は焦らぬのが吉か」
「そうでござる。平手殿ならともかく」
信長に対して諫めを言うのなら彼だ。信長もその言葉にはどうも弱いのだ。
「新五郎殿がそれをされてもです」
「どうにもならないな」
「そうです。落ち着かれましょう」
「わかった。それではだ」
「それでは？」
「何か食べるとしよう」
林は少し落ち着いた赴きになってだ。こう話すのだった。
「今からな」
「では何を食われますかな」
「とりあえず城の外に出てじゃ」
そうしてだというのだ。まずは城の外に出てだ。
そのうえでだ。食べるといえばだ。
「酒を飲まれますか」
「どうじゃろうか、それで」
「酒といえば肴でございますが」
「豆を適当にかじるか」
それを肴にするというのである。

「それでどうじゃ」
「そうでござるな。ではそれで」
「二人で飲むとするか」
「いやいや、二人で飲むよりもでござる」
柴田は大きく笑いながら林に言うのであった。
「大勢で飲んだ方がいいですぞここは」
「大勢でか」
「そうでござる。他に誰か呼びますか」
「そうじゃな。誰も呼んでな」
「それでは」
「うむ。ただしだ」
ここでだ。林は一旦眉を曇らせてだ。そのうえでだ。
こんなこともだ。言うのだった。
「慶次が来たらじゃ」
「新五郎殿もあ奴には」
「そうじゃ。この前悪戯をされた」
林にもだ。そういうことをしっかりとする慶次だった。
「草履の裏に油を塗っておった」
「ではそれを履こうとして」
「つるっと滑ってこけてしまったわ」
実に慶次らしい悪戯だった。彼にとって悪戯は生きがいなのだ。
しかしそれをされた林はだ。怒ることしきりだった。
それでだ。こう言うのだった。
「一度しっかり怒っておくか」
「あ奴は懲りませぬなあ」
「全くじゃ。幾ら叱っても懲りはせぬ」
それが慶次なのだ。
「どういう奴なのじゃ」
「いやいや、わしにしてもござる」
「権六も大層怒っておるな」

「しかし聞きませぬ。おまけに近頃では」
ここでだ。もう一つ厄介なことが話されるのだった。
「才蔵もおりますし」
「あ奴か」
「あ奴は悪戯はこれといってしませんが」
「とにかく喧嘩が好きだからのう」
「強そうな奴にはすぐに喧嘩を売ります」
それもまただ。困ったことだというのだ。
「ごろつきを見つけたらすぐにでございますから」
「ごろつきなぞ放っておいてもよかろうに」
「どうも許せぬようで」
「殿は才ある者を集められるが」
「癖の強い者も多いでございますな」
「うむ。あの猿といい」
林はふとだ。木下の話を出したのだった。
「変わり者も多いな」
「あの猿は確かに」
柴田の顔がだ。木下の名前を聞いて微妙なものになった。
そうしてだ。彼はその顔でこんなことを言うのであった。

第三十七話　二つの砦その五

「背は低いし顔はまずい。しかも武芸は全く駄目ときております」
「しかし頭は回る」
「おまけに話しておると妙に憎めない」
「変わった奴じゃのう」
「わしは実は好きではありませぬ」
柴田はその木下への感情をありのまま林に話した。
「どうにも。ああした者は」
「しかし嫌いでもないというのじゃな」
「不思議とそこまではいきませぬ」
まさに竹を割ったかの如き性格の柴田もだ。そうだというのだ。
「あれはわからぬ者です」
「その猿が今鷲津におるが」
「どうなりますかな、一体」
こんな話をしてだった。林は柴田と共に城を出た。その際に多くの者を集め飲むのだった。その城ではだ。
信行がだ。旗本達の話を聞いていた。彼等もその不安を見せていた。
「今川が来ますが」
「果たしてどうなるでしょうか」
「殿は今だに動かれませんが」
「どうされるおつもりなのか」
「一体」
「何、焦ることはない」
しかしであった。信行はだ。
蟄居になる直前のままの冷静な様子でだ。こう彼等に言うのだった。
「極端なところこの清洲にまで来る」

「そして城を取り囲んでもですか」
「よいというのですね」
「それならそれでやり方があるからな」
そのやり方はだ。何かというとだ。
「何しろ美濃との境に平手の爺が率いている兵がおるではないか」
「我が織田家の主力のですか」
「あの者達が」
「そうよ、今ここで我等が何かを言っても仕方がない」
これが信行の彼等への言葉だった。
「全くな」
「では殿が動かれるその時をですか」
「待っていればいい」
「そう仰るのですか」
「では聞くがだ」
信行は己の前に集う彼等にだ。こう問うのだった。
彼からだった。問い返して言うのであった。
「ここで我等が騒いで何になる」
「それは」
「そう言われますと」
「新五郎が言っても全く動かなかったのだ」
その気配すらなかった。全くだ。
それではだ。彼等が言ってもだった。
「我等がここであれこれ話をしてもだ」
「何にもならない」
「そうなのですか」
「そういうことだ。そんなことを話す暇があればだ」
どうするべきか。信行はその話をするのだった。それは。
「英気を養うべきだ」
「然るべき時に備えて」
「そうしてですね」

「そういうことだ。美味いものを食べ」
そうしてだというのだ。
「剣を振り弓でも射ることだ」
「身体も鍛えよと」
「それも忘れるなというのですか」
「ここで騒いでも何にもならん」
これはだ。間違いないというのだ。
その言葉には。彼等も言うのだった。
「そうですな。そんなことを話すよりも」
「いっそのこと馬でも駆ればいいですな」
「それとも泳ぎますか」
「そうしますか」
「うむ、わしもここはじゃ」
信行自身もだ。どうするかというのであった。

第三十七話　二つの砦その六

彼は外を見た。丁度いい具合に晴れている。それならばだった。
「少し馬に乗ろうか」
「勘十郎様はそれですか」
「馬に乗られますか」
「そうされますか」
「うむ、そうする」
彼は馬だというのだった。そしてその馬についてこうも話した。
「兄上のあの荒い乗り方をしてみるか」
「勘十郎様がその乗り方をですか」
「それをされるというのですか」
「わしには合わぬかのう」
言ってすぐにだった。自分でこうも言うのだった。
「それは」
「そうですな。少し」
「勘十郎様はやはり馬もです。落ち着いて乗られるべきかと」
「走らせる時も」
「やはりそうなるか。わしには奔放な乗り方は合わぬか」
旗本達に言われてだ。信行も考えを変えた。
そのうえでだ。彼はこう言うのだった。
「では。いつも通り乗るとしよう」
「そうされた方がいいかと」
「それでは」
「うむ、ではそうして乗ろう」
こうしてだった。信行は彼に合った乗り方をするのだった。そうして彼も英気を養う。彼は兄にはあえて何も言わず時を過ごした。
清洲がそうした状況だった時にだ。鷲津にだ。
遂に敵が迫ってきた。その数は。

「五千か」
「それ位じゃ」
それだけの数だとだ。蜂須賀が佐久間盛重に話すのだった。
「それだけの敵が迫って来ておるぞ」
「それで将はあの二人じゃな」
「うむ、太源雪斎と松平元康じゃ」
まさにだ。その二人だというのだ。
「その二人と。それと三河衆じゃ」
「三河には武辺者が多い」
佐久間盛重はここでこう言った。
「しかも主の下に一つになる」
「だからこそ余計に強い」
「そうなのですね」
「そうじゃ。東海で随一じゃろうな」
その強さはだ。そこまでだというのだ。そう木下兄弟に話す。
そのうえでだ。佐久間盛重はこんなことも言ったのだった。
「今川の兵も弱いが織田の兵もまた弱い。それに対してじゃ」
「三河の兵は強い」
「兵も将もですか」
「そうじゃ。だから外に出てはいかん」
佐久間盛重はここで戦の仕方を決めたのだった。それは。
「やはりこれまでの話通りじゃ」
「篭城ですな」
「この鷲津に」
「そしてそのうえでじゃ」
木下兄弟に応えながらだ。そのうえでだった。
蜂須賀を見てだ。彼に告げた。
「首尾通り頼むぞ」
「うむ、暴れ回ってやるぞ」
蜂須賀は佐久間盛重の言葉に楽しげな笑みで返した。

「忍の技見せてやるわ」
「頼むぞ。ただじゃ」
「ただ？」
「松平には強い者が多い」
このことをだ。蜂須賀に念押しするのだった。
「十六の優れた臣がおりじゃ」
「そんなにおるのか」
「その中心に四人おる」
十六人の中にだ。さらに四人だというのだ。

第三十七話　二つの砦その七

「四天王というらしい」
「松平四天王ですか」
「その者達もいると」
「これまでは主の松平元康だけが注目されておった」
もっと言えばだ。松平家はそれだけ小さな存在でしかなかったのである。しかし今川家においてその名を知られるにつれてだ。彼等も知られるようになってきたというのだ。
「あの男も若いながら戦上手とのことだが」
「その家臣達もですか」
「戦に強いと」
「さて、戦い抜くのが楽しみになってきた」
佐久間盛重の顔は笑顔であった。
「どうしようかのう」
「ははは、思う存分戦ってやりましょうぞ」
木下がその口を大きく笑って言ってみせた。
「ここは是非」
「そうじゃな。ではやるとするか」
最後に佐久間盛重が言ってであった。そのうえでだ。
鷲津は戦う態勢に入った。遂に織田と今川の戦がはじまろうとしていた。
今川が尾張に入ったと聞いて一人笑っている男がいた。それは誰かというとだ。
越前の一乗谷館の場に彼はいた。公家風の格好をした頭の後ろがやけに出てだ。細い顔に頬、口髭に公家眉と髷の男だ。服も公家風で色は草色だ。この男がだ。
笑いながらだ。己の前に居並ぶ者達に言うのであった。
「これで織田も終わりじゃな」

「そうですな。あの織田も」
「これで」
「織田なぞ滅びてしまえばよいのじゃ」
その公家風の男は陽気に笑いながら言うのであった。
「所詮あの家は成り上がりの家よ」
「神主あがりのですな」
「守護の陪臣だった」
「そうじゃ。それに対して我が朝倉はじゃ」
どうなのかと。男は言うのである。
「代々名家としてこの越前において力を持ってきた」
「それに対して尾張一国を治めるまでになるとは」
「身の程を知れというものですな」
「左様、しかしこれで織田も終わる」
男のだ。いささか能天気な言葉はさらに続く。
「滅亡じゃ。今川がやってくれるわ」
「では我等をその有様をこの越前で見て」
「そうして楽しみますか」
「殿もそうされるのですな」
「その通りじゃ。この朝倉義景」
己の名前をだ。ここで言うのだった。
「あのおおうつけの滅びる姿を見届けようぞ」
「そうですな。それでは今よりです」
「飲まれますか、酒を」
「そうされますか」
「そうじゃな。酒にじゃ」
それだけではないとだ。この男朝倉義景は言うのである。
彼はだ。家臣達にこう命じた。
「舞楽じゃ」
「都のですな」
「それを楽しまれてですな」

「それと共に飲もうぞ」
酒だけでなくだ。そういったものも楽しむというのである。
「ここはじゃ」
「わかりました。それでは」
「今より」
「ははは、これで尾張の織田が滅ぶ」
義景はとにかくこのことをだ。心から喜んで話すのだった。
「善き哉善き哉」
家臣達の殆んども同じだった。彼等もそうなると見ていた。しかしである。
越前の中で一人だけ笑わない者がいた。それはだ。
朝倉宗滴だった。彼は難しい顔でこう己の信頼する家臣達に述べるのだった。
「織田が負けると言われているがだ」
「それは違う」
「そうなのですか」
「織田は勝つ」
断言だった。まさにだ。
「負ける筈がない」
「では殿の仰っていることは」
「当たらぬというのですか」
「残念だがそうだ」
やはりここでも断言で答える宗滴だった。

第三十七話　二つの砦その八

「そしてただ勝つだけではない」
「今川に勝つだけではですか」
「それに終わらぬと」
「それがはじまりとなろう」
信長は勝ちそれで終わる男ではないというのだ。彼はそのことも見抜いていた。
「瞬く間に力をつけ。そして」
「そして」
「そしてといいますと」
「天下を臨む男となるであろう」
そこまでの者だというのである。信長はだ。
「尾張から美濃を手に入れ近江まで手に入れればだ」
「まさに都は目の前」
「だからこそですか」
「そうだ、そこまで容易くする」
言葉に余計なものを入れていない。断言故のことである。
「そしてやがては」
「まさか。この越前にまでですか」
「迫ると」
「天下を狙うなら。そして殿がその織田に向かおうとされるならば」
「その織田と戦になる」
「そうなりますか」
「わしはだ」
宗滴はここで話を変えた。己の話にである。
「もう少し前に死ぬと思っていた」
「いえ、それは」
「その様なことは」

「言わずともよい。わしのことはわしが一番よくわかっている」
その高齢故にだ。最早彼はかつての頑健な身体ではなくなっていたのだ。
だからこそだ。わかっているのである。
「長くはない」
「しかし今こうして生きておられます」
「それは」
「こう考えるのだ」
遠い目になってだ。そのうえでの言葉だった。
「わしは織田信長と戦う為に生きているのではないかとな」
「あの男とですか」
「宗滴様が」
「そうだ。そして戦だ」
どうなるか。そのことも話すのだった。
「織田とのな」
「織田との戦ですか」
「一体どういう戦になるか」
「果たして」
「そこまではわからん。しかしだ」
それでもだというのだ。彼はだ。
「織田は強いだろう」
「弱兵と評判ですが」
「それでもですか」
「この言葉を知っているか」
宗滴は織田が弱兵ということにはだ。こう返すのだった。
「羊も狼が率いればだ」
「強くなる」
「そう仰るのですか」
「そうだ、最も大事なのは兵ではない」
兵も大事だがだ。それ以上にだという意味である。

「将なのだ」
「だからですか」
「織田は強い」
「そう仰いますか」
「そうだ。だから織田は強い」
これが宗滴の言うことだった。だから織田は強いというのだ。
「将がいい故にだ」
「そういえば柴田勝家に佐久間信盛」
「滝川一益に丹羽長秀」
「他にも大勢おりますな」
「だからよ。尾張を瞬く間に統一したのだ」
そしてだ。宗滴はその尾張のことも話した。
「尾張はそれまで幾つもの家に分かれていたな」
「はい、織田家同士で」
「大きく分けて二つでした」
「無論その下でも色々とありました」
「それを瞬く間にしたのだ」
それを見てだ。宗滴は信長について話すのだった。
「あの者の力量は尋常なものではない」
「その一つにした尾張を見事に治めていますし」
「田畑も町も港も見違えるまでとか」
「堤や道もです」
実にだ。細かいところまで政を行っていることもだ。見る者には見えていた。そうしてものを見ていくとだ。信長はどうしてもなのだ。

第三十七話　二つの砦その九

「ではやはりうつけ殿ではありませんか」
「宗滴殿が見られるだけの方なのですね」
「わしは長い間生きてきた」
この戦国の世をだ。それならばだというのだ。
「そのわしが見てじゃ」
「織田は尋常なものではない」
「そうなりますか」
「その織田と戦うことになるだろう」
そうなるとだ。確信して言うのだ。
「その頃に織田がどれだけ強くなっておるかだが」
「それ次第で我等は」
「どうなりましか」
「勝てぬかもな」
そうではないかとだ。宗滴はそのことをありのまま述べた。
「若しやな」
「左様ですか。その時の織田次第では」
「勝てませぬか」
「しかし戦わねばならぬ時ならばだ」
どうなるかというのだ。
「戦うしかないのだ」
「そして勝たねばならない」
「そうなりますか」
「ぞういうことじゃ。織田信長か」
今度はだ。彼のその名前を言ってみせた。
そしてそのうえでだ。彼のことをさらに考えて言うのであった。
「間も無く天に昇るな」
「尾張の蛟龍、それが」

「天に」
「そして龍になると」
「天下を飲み込まんばかりの龍か」
そこまでの巨大な龍が信長だというのだ。
「青い龍よ」
「むっ、青といえば」
ふとだ。一人がここでこんなことを言った。
「織田はその鎧や旗を青にしていますが」
「そうじゃな。青で統一しておる」
「武田は赤、上杉は黒でして」
「そして。他の家もか」
「はい、浅井殿は藍色にされましたな」
朝倉と同盟を結んでいるだ。その浅井がその色になったというのだ。
「その色に」
「藍色。そうじゃな」
「近頃家によって色を定めてきております」
戦国の流れの一つになってきていた。それは織田や武田だけではなくなってきていたのだ。彼等はそれぞれの色になってきているのだ。
「毛利の緑もそうですし」
「それぞれの色にか」
「ですが我が朝倉は」
「特に色を決めることはないとな」
宗滴はその者にだ。こう告げるのだった。
「殿が仰っておる」
「殿がですか」
「そう、殿がじゃ」
他ならぬだ。朝倉義景がだというのだ。
「そう仰ってだ。我等の色はない」

「そうなのですか」
「我等に色はありませぬか」
「必要ないとおおせられているのだ」
宗滴は義景の言葉を再び彼等に述べてみせた。
「その様にな」
「確かに。ただの飾りですから」
「色というものは」
「所詮は」
「で、あればよいのだが」
不意にだ。宗滴のその言葉が変わった。
そうしてそのうえでだ。急にこんなことを言うのであった。
「色はただの飾りであればな」
「？といいますと」
「色に何かあるのでしょうか」
「そう仰るのでしょうか」
「例えば武田の赤じゃ」
まず例えとしてだ。武田とその色であった。

第三十七話　二つの砦その十

「赤は火の色じゃな」
「はい、五行思想においての火です」
「それこそがまさに赤です」
「そうじゃ。織田にしてもじゃ」
そのだ。織田家についても話すのだった。
「青じゃな」
「はい、青です」
「木の色ですね」
「それですね」
「そうじゃ。青じゃ」
また話す宗滴だった。
「その青もある」
「そしてその他の色も」
「それもなのですか」
「何かあるのか」
彼は色についてだ。さらに話していくのだった。
それを考えていってだ。彼はだった。
「わからぬな。それを考えると」
「考えると？」
「といいますと」
「やはり我が家も色を備えるべきなのだろうか」
こう言うのだった。考える顔でだ。
「やはりな」
「我が朝倉も」
「それをしてみればというのですか」
「そうじゃ。どうじゃろうか」
宗滴は己の信じる家臣達に対して問うていく。

「それは」
「色は何の意味もないと思いますが」
「ただの格好付けにしか」
「それに傾奇にしか」
家臣達はだ。こう言うのだった。どうも賛成できないという感じだ。
その感じでだ。彼等は宗滴に言っていくのである。
「所詮そういうものではないですか？」
「やはり」
「そうかのう。傾奇か」
宗滴もその言葉に己の考えを止めた。
そのうえで腕を組んでだ。こう言うのだった。
「所詮はそれでしかないか」
「我が朝倉は傾奇には縁のない家でございます」
「そうしたものには」
「しかし色自体には意味がある」
またこのことについて話す宗滴だった。それはどうしてもだという感じでだ。
そのうえでだ。彼はまた話すのだった。
「しかしそれは我が家ではか」
「浅井殿はまだ興って新しいですし」
これはその通りだった。浅井はまだ三代だ。出自も朝倉と比べればよくはない。
だが、だった。ここでだ。家臣の一人がこんなことを言った。
「しかし武田殿、それに薩摩の話ですが」
「島津殿もですな」
「そうじゃ。その島津殿もじゃな」
島津はだ。どうかというのである。
「あの家も色が付いておるな」
「はい、あの家は橙ですな」

「その色になっております」
「どちらもかなり古い家じゃ」
武田に北条はそれこそ代々の守護大名だった。それは室町以前からの家でだ。かなり古くから存在している名門なのである。
そのことをだ。彼等は話すのだった。
「武田殿は甲斐源氏の名門ですし」
「島津殿はあの地に古来からおられますし」
「ですが両家共です」
「色を付けられています」
「では我が家もよいか」
宗滴はそちらに考えを戻した。揺れたと言ってもいい。
「色をか」
「どうしたものでしょうか」
「果たして」
「一度殿とお話してみようか」
宗滴は考える顔で述べた。
「そのことをな」
「そうされますか」
「ここは」
「そうするとしよう。少しな」
こんなことを話す彼等だった。そうしてなのだった。
彼等は織田とだ。色のことを考えていくのだった。織田は間違いなく大きくなる、宗滴はそのことをだ。確信しているのだった。

第三十七話　完

２０１１・４・１６

第三十八話　砦の攻防その一

第三十八話　砦の攻防

遂にだ。今川の先鋒がだ。
佐久間盛重達の守る鷲津の砦のある山に至った。そのことはだ。
鷲津の砦にだ。すぐに伝わったのだった。
「そうか、遂に来おったな」
「その数五千」
「今川のおよそ五分の一ですな」
木下兄弟がすぐに佐久間盛重に述べてきた。
「その殆んどで砦を攻めに来るでしょう」
「おそらく四千です」
「四千か」
四千と聞いてだ。佐久間盛重は腕を組んだ。そのうえでだ。
彼はだ。こう言うのだった。
「残り千で丸根を囲みか」
「そうしてその四千の全てでこの鷲津を陥落させんと来るでしょう」
「間違いなく」
「そうじゃな。来るな」
間違いなくと言う佐久間盛重だった。そしてだ。
彼はだ。こうも言うのだった。
「しかしじゃ」
「はい、我等は充分に戦えます」
「何の憂いもなくです」
いけるという彼等だった。そうしてだ。
彼等はだ。その敵を待ち受けるのだった。するとすぐにだ。
砦の四方八方からだ。彼等が来るのだった。
「攻めよ！」
「このまま陥とせ！」

こう言ってだ。その四千の軍で砦に襲い掛かるのだった。その指揮にあたるのは。

松平元康だった。彼は自ら馬を降り刀を抜いてだ。

指揮にあたりだ。こう言うのだった。

「よいか、四方から砦を取り囲みだ」

「そのうえで、ですな」

「あの砦を」

「陥とす」

まさにだ。そうするとだ。三河武士達に告げるのである。

「よいな、そうするぞ」

「わかりました。それでは」

「このまま取り囲み」

「そのうえで弓を放て」

城や砦を攻めるうえでの基本だった。

「よいな」

「火矢をですね」

「それを」

「左様、それを放て」

元康の指示は迅速だった。

「あの砦は木。やはり火がよい」

「そうですね。それでは」

「今より」

こうしてだった。まずは火矢が放たれようとしていた。

今川の兵達は砦にさらに迫る。それを見てだ。

木下がだ。砦のその簡易な櫓の上からそれを見て言うのだった。

「火矢ですな」

「それで来るか」

「はい、火攻めですな」

こう己の前に立つ佐久間盛重に話すのだった。

「それで来ます」

「ふむ。そうか」
「それでなのですが」
木下はだ。すぐに言うのだった。
「一つ考えがあります」
「火に対してじゃな」
「その為に置いておきましたので」
「水か」
「はい、井戸の水です」
それをだ。使うというのである。
「まず敵が火矢を放ってきます」
「それに対して井戸の水をどう使うのじゃ？」
「空いている布、何でもいいですがそれを水に点けて火矢が落ちた場所にかけます」
「そして火を消すか」
「随時そうしていきましょう」
「わかった。それではだ」
こう話してだった。そのうえでだ。

第三十八話　砦の攻防その二

彼等は今川、つまり元康の軍を待つ。するとだ。
すぐに四方八方を取り囲んでだ。そのうえで。
次々に火矢を放ってきた。瞬く間に何本も砦の中に入る。
だがそれに対してだ。織田方は。
すぐに布、水で濡らしたそれを火矢の上に被せてだ。消していくのだった。
「すぐにどけるでないぞ！」
木下はそうして火を消す足軽達に言って回る。
「完全に消えてからじゃ！」
「煙まででですか」
「それが消えてから」
「そうじゃ、火を侮るな」
火は消えたと思ってもすぐにまた気が出る。それがわかっていてのことだった。
「よいな、決して焦ることはない」
「焦らずともですか」
「よいのですか」
「そうじゃ。水はたっぷりとある」
鷲津には井戸がある。しかも木下はこの時に備えて水を多く用意していたのだ。しかもこの季節はどうかというとだ。
「今は湿っておるからのう」
「だから火はですか」
「それ程強くはならないと」
「そうじゃ。雨が多い季節だからのう」
それでだというのだ。
「ここにもじきに雨が降るぞ」
「では火はそれ程恐れなくてよい」

「左様ですか」
「そうじゃ、まずは焦るな」
木下が注意するのはだ、むしろそちらだった。
そのことを足軽達に強く命じつつだ。さらにだった。
「消した火矢は逆に打ち返せ」
「敵の矢をですな」
「そうせよと」
「そうじゃ。敵のものは敵に返してやるのじゃ」
笑いながら足軽達に言って回る。彼は言う時に立ち止まってはいない。砦の中を駆け回ってだ。そのうえで指示を出して回っているのだ。
「よいな、そうせよ」
「はい、それでは」
「その様に」
「うむ、まずは敵の火を防ぐのじゃ」
こうしてだ。火矢に対してはだ。かなり的確に防いでみせたのだった。
どれだけ火矢を打ち込まれてもだ。砦はだ。
一行に燃える気配はなかった。それを見てだ。
元康はだ。指示を変えた。こう左右の己の旗本達に命じた。
「次はじゃ」
「火矢は止めてですか」
「そのうえで、ですな」
「そうじゃ。矢は放ち続ける」
それはだと言ってであった。
「このままじゃ」
「そして砦の壁を登りますか」
「いよいよ」
「うむ、見たところ」
砦を見る。するとだ。

「壁は高いな」
「しかも壕は深く広いです」
「砦にしては」
「よくもあそこまでしたものじゃ」
元康にしても感心する程だった。砦の壁は高い。しかもだ。壕があるがそれもだ。実に深くしかも広かった。ちょっとした城程のものがある。
そういったものを見てだ。彼は言うのであった。
「これは容易には陥とせぬな」
「そうじゃのう」
ここでだ。この場ではじめて雪斎が声を出したのだった。
彼もまた元康と共に砦を見ながらだ。こう言うのだった。
「思った以上に堅い守りじゃ」
「左様ですな。ですが」
「何としても陥とすか」
「それが務めですので」
だからだと答える元康だった。
「そうさせてもらいます」
「よくぞ言うた」
雪斎は元康の今の言葉にだ。感心するように頷いた。

第三十八話　砦の攻防その三

そしてそのうえでだった。その元康に対してであった。
「では竹千代よ」
「はい」
「この砦陥としてみよ」
その引き締まった横顔を見ながらの言葉だった。
「よいな。そうせよ」
「無論そのつもりでございます」
「この鷲津、そして丸根を陥とせば清洲まで行ける」
「さすればそれから」
「そうじゃ。織田を屈せられるのじゃ」
「尾張を手に入れそして」
元康も言うのだった。
「都にですな」
「その為にもあの砦は陥とさねばならん」
それがだ。答えであった。
「わかったな。ではじゃ」
「はい、ここは何としても」
「鉄砲はあるか」
雪斎はここでだ。鉄砲も話に出すのだった。
「それは」
「鉄砲でございますか」
「それは幾つある」
鉄砲の数をだ。元康に問うのである。
「幾つあるか」
「数十程です」
「数十か」
「はい、数十です」

それだけだと答える元康だった。
「それだけあればどうでしょうか」
「先程の火矢にしてもじゃ」
雪斎は先程の元康の攻撃についても話した。
「普通の砦ならあれで陥ちた」
「あの火矢で」
「竹千代、見事である」
元康のその攻撃は褒めるのだった。
「あの場面はまさに火矢を使う場面じゃった」
「そう思い使いましたが」
「しかし。敵は思ったよりやる」
雪斎の眉が顰められる。そのうえでの言葉だった。
彼はだ。あらためてこう元康に言った。
「あの火矢も。前以て水を多く用意しておったな」
「それで消していますか」
「しかも。壕が思ったより広く深い」
このこともだ。火矢で攻めた時に影響しているというのだ。
「矢が思ったよりも届かん」
「それでなのですか」
「そうじゃ。こちらの攻撃は届かず」
そしてなのだった。こちらの弓矢は届かないというのだ。
しかもだ。それだけではなくだった。
「あちらの攻撃はよく届くわ」
「上から狙うからですな」
「うむ、丁寧に櫓まで築いておる」
それもまた大きかったのだ。織田方は櫓の上から次々に矢を放ってきている。それが今川方の兵達を容赦なく攻め立てているのだ。
今川の兵達は竹を束ねた盾でその弓矢を防ぎながら前に進んでいる。しかしそれとて用意ではなくだ。傷つく兵達が増えている。
それを見てだ。雪斎は言うのだった。

「これではじゃ」
「鉄砲を使うべきですか」
「あるものは何でも使うことじゃ」
戦のだ。まさに鉄則だった。
「それで攻めることじゃ」
「だからですね」
「その数十の鉄砲を使うのじゃ」
雪斎は言った。
「それで織田の者達を驚かせよ。よいな」
「はっ、それでは」
こう話してであった。元康はすぐに鉄砲を用意させ砦の壁の上や櫓から弓矢を放ち糞尿や煮えたぎった油をかける織田の兵達を狙い驚かそうとする。しかしそれを見てだ。

第三十八話　砦の攻防その四

「来ましたぞ」
「鉄砲じゃな」
「はい、来ました」
ここでもだった。木下が佐久間盛重に述べる。
「数は数十、五十程でしょうか」
「ふむ。五十か」
「ではどうされますか？」
あらためて佐久間盛重に問う木下だった。
「ここは」
「よし、向こうが鉄砲で来るならばじゃ」
「こちらもですな」
「うむ、使おうぞ」
まさにだ。その鉄砲をだというのだ。
「そうしようぞ」
「はい、それでは」
「さて、向こうはこれでまた驚くな」
佐久間盛重は木下に応えながら笑顔でいた。相手を驚かすのを楽しみにする子供の様なだ。その笑顔でいるのだった。
「肝が潰れるぞ」
「そうしてこその戦でござる」
木下はだ。その佐久間盛重よりも楽しそうに笑って言うのだった。
「ですから」
「戦は敵を驚かせることにあるのか」
「そう思いますが」
「そうじゃな。敵の思う通りのことをしては負けじゃ」
読まれている、それは致命的だ。だからだ。
「ではじゃな」

「はい、それでは」
「よし、鉄砲をありったけ出すのじゃ」
佐久間盛重は思いきった手を打った。そうするというのだ。
「よいな」
「そうして今川をですな」
「驚かせてやるわ」
こうしてであった。彼等はだ。
今川方が鉄砲を撃ちだしてきたのに対してだ。こちらもだ。
ありったけの鉄砲を出してだ。彼等に対して撃ったのである。８２
今川から見てだ。信じられない数の鉄砲が火を噴いた。それを見てだ。
「な、何っ！？」
「百！？いや、それ以上はあるぞ」
「我が方の優に倍以上はあるぞ」
「そこまでの鉄砲があるというのか」
今川の者達がだ。驚きの声をあげた。
実際に撃たれた者も出て傷を負っている。倒れている者もいる。
そしてそれだけではなくだ。その凄まじい音を聞いてだ。
「何と、あれだけの鉄砲があってな」
「容易には陥ちんぞ」
「うむ、この戦」
「尋常なものではないぞ」
士気にまで影響が出るのだった。
その鉄砲の数と兵達の士気を見てだ。元康も目を曇らせた。そうしてであった。
考える顔になってだ。こう言うのだった。
「ううむ、ここは」
「どうする、あそこまでの鉄砲があるとはのう」
雪斎もだ。その鉄砲の数は予想以上だった。それでこうした言葉を出してしまった。

「これではじゃ」
「いえ、攻める手はまだあります」
元康はだ。ここでその雪斎にこう答えた。
「まだあります」
「というとどうするのじゃ」
「まずはこのまま攻めます」
攻め続けるというのだ。
「ただ僅かな、選りすぐりの強い者達は休ませ」
「今の攻めに使わぬのか」
「夜です」
その時にだというのだ。
「夜に攻めます」
「夜襲か」
「それも真夜中にです」
「やるのう」
元康のその案を聞いてだ。雪斎は満足そうに笑ってみせた。
「そうじゃ。戦は昼だけではない」
「夜もですね」
「左様、戦は夜もある」
そしてだ。雪斎はこの戦のことを話に出した。

第三十八話　砦の攻防その五

「河越もじゃ」
「あの北条殿の」
「あの戦は見事じゃった」
唸る様にして出した言葉だった。
「まさに相模の獅子よ、北条殿は」
「十倍の敵に夜襲を仕掛けてでしたね」
「あの戦での勝ちがあるからこその今の北条殿じゃ」
そこまでの戦だったのだ。まさにだ。
「あれは敵を油断させたうえでの夜襲じゃったが」
「今度はです」
「まず先に思いきり攻め休んだと見せかけてじゃな」
「左様です、それではその様に」
「この砦は必ず陥とす」
そうするとだ。断言する雪斎だった。
「よいな。そしてじゃ」
「はい、清洲に」
「そうするとするぞ」
こうしてだ。鷲津の砦への夜襲が決まった。昼はそのまま攻められ暫く経ってからだ。真夜中になってからのことであった。
元康はだ。あからじめ声をかけていた精鋭達にだ。こう告げるのだった。
「よいな、それではじゃ」
「はい、今からですな」
「攻めますか」
「わしも共に行く」
元康自身もだ。自ら指揮にあたるというのだ。
実際にだ。彼は既に兜を被っている。鎧だけではない。その姿で

だ。
その精兵達に命じたのだ。こうしてであった。
彼等は砦に向かう。砦はすぐだった。
だが、だ。その左右からだ。
突如として何かが来た。それは。
「!?何だ!?」
「風!?いや、違う!」
「つっ!」
攻撃が当たった。血が流れるのがわかる。
そしてだ。その次にはだ。
上から次々に襲い掛かって来る。それは。
「忍か!」
「織田方の忍か!」
それだった。その忍達によってだ。
彼等は傷を負いだ。前に進めなくなった。そしてさらにだ。
彼等の陣の方からだ。火が起こったのだ。それを見てだ。元康はすぐに悟った。
「ぬかった、織田方の夜襲だ」
「奴等のですか」
「それですか」
「そうよ、ぬかったわ」
彼もだ。こう言うしかなかった。
「まさかだ。我等が攻められるとは」
「元康殿、ここはどうされますか」
今川の部将の一人が彼に問うた。松平の主である元康も今は今川の臣下なのだ。だから部将が共にいて不思議ではないのだ。
その部将がだ。彼に問うのである。
「前に進み砦を陥としますか、それとも」
「むう、ここは」
前に進めなくなった。さらにだ。

後ろの陣が燃えている。こうなってはだ。
「下がるしかあるまい」
「そして陣をですね」
「左様、火を消しさらなる夜襲に備える」
そうするというのだった。
「そうする」
「わかりました。それでは」
「すぐに」
「無念だ」
こう漏らす元康だった。しかしだ。
燃える陣を見てはだ。どうしようもなかった。こうしてだった。
彼等はすぐに陣に戻る。陣はかなり乱れていた。
足軽達が夜の闇の中を左右に動き回っている。その動きはだ。
ただ慌てふためいているだけだった。それを見てはだ。
元康は顔を顰めさせる他なかった。だがそれは一瞬でだ。
その足軽達にだ。叱咤を浴びせるのだった。

第三十八話　砦の攻防その六

「皆の者落ち着くのだ！」
「むっ、殿」
「殿ですか」
「そうだ、わしだ！」
あえて大きな声を出してだ。足軽達の目を自分に向けさせた。
そしてそのうえでだ。すぐにこう言った。
「よいか、ここはだ」
「はい、ここは」
「どうされますか？」
「まずは火を消すのだ」
そうせよというのだ。
「よいな、火をだ」
「は、はい」
「わかりました」
すぐに頷く彼等だった。そうしてだ。
陣の火には水がかけられだ。すぐに消えていく。しかしその中でもだ。
陣の左右からだ。何かと呻き声が聞こえてきた。それは。
断末魔の声だった。その声もだった。
「まさかこれも」
「竹千代、無事じゃったか」
元康が顔を顰めさせたところでだ。雪斎が来た。顔から汗を流している。どうやら彼も今まで混乱する陣を駆け回り事態の収束に尽力していたらしい。
その彼が元康のところに来てだ。声をかけたのである。
「それは何よりじゃ」
「和上も。ご無事でしたか」

「陣に火を点けられた」
まずはこう言う雪斎だった。
「そしてあちこちで織田の者達が足軽達を闇から襲っておる」
「忍ですな」
「間違いないな」
それだというのだ。忍だとだ。
「それで夜襲をかけて来たわ」
「忍で夜襲ですか」
「妥当じゃ。しかしじゃ」
「はい、それまで使えるとは」
「織田は思った以上にじゃ」
どうなのかとだ。雪斎は眉を曇らせて言うのだった。
「人材が多いわ」
「確かに。忍まででですから」
「やはり潰しておかねばな」
雪斎の結論だった。
「ここでじゃ」
「今川の為に」
「左様。織田を置いていては恐ろしい家になってしまう」
「しかしその織田を飲み込めば」
「そうじゃ。今川はさらに大きな家となる」
敵を併合すればだ。それによりというのだ。
そうした話をしながらだ。彼等はだ。
今の騒ぎを収めるのだった。火は消し敵襲は終わった。それは何とかだった。
だがその日はもう夜襲どころではなかった。そうしてだ。
朝になってだ。元康はこう将兵に言うのだった。
「今日はこのまま囲む」
「囲むと」
「そうされるというのですか」

「そして派手には攻めぬ」
昼も夜も攻めることに失敗してだ。それによってだ。
彼は一旦慎重策に入ることにしたのだ。そのうえでだ。
将兵にだ。こうも話すのだった。
「まずは様子を見る」
「そうしてですか」
「そのうえで」
「機を見てまた攻める」
様子を窺うというのだ。彼は諦めたわけではなかった。
それでだ。砦を何重にも囲みだ。そうしてであった。
今川の兵達は今は様子を窺うのだった。だがその囲みはかなり厳重でだ。
夜襲を終え砦に戻った蜂須賀はだ。こう佐久間盛重達に話すのだった。
「随分と厳重に囲まれておるのう」
「そうじゃな、これは」
木下秀長が彼の言葉に応える。二人は今櫓の上にあがっている。
そこから今川の兵達を見てだ。二人でこう話をするのだった。

第三十八話　砦の攻防その七

「かなりのものじゃな」
「迂闊に攻められんぞ」
「そして砦に何かあり血路を開くこともじゃ」
「それもできぬな」
「うむ、これではな」
できないとだ。木下秀長も話す。
「このままではじゃ」
「兵糧攻めにされたらことじゃな」
「ああ、それをされたらどうしようもない」
そうなればだ。終わりだというのだ。
「数は敵の方が圧倒的じゃしのう」
「砦の中の飯には限りがある」
「それではじゃ」
兵糧攻めこそがだ。最も恐ろしいということになった。
しかしだ。木下秀長は同時に蜂須賀にこうも話した。
「だが。それでもじゃ」
「それでもじゃと？」
「そこまで戦は長引くことはないじゃろうな」
「それはないか」
「うむ、この戦短い」
短期決戦で終わるというのだ。
「おそらくこちらの兵糧が尽きる前に戦は終わる」
「それよりも前にか」
「うむ、終わる」
そうだというのだ。木下秀長は確かな顔で話すのだった。
「だからそれは安心していいと思う」
「では飯はたっぷり食ってもよいのか」

蜂須賀は楽しげな顔になってだ。こう木下秀長に話すのだった。
「そうしてもよいな」
「いい。むしろたらふく食わねばじゃ」
「いかんか」
「腹が減っては戦ができん」
どの戦についても言えることだった。まずは食わねばなのだ。
「そういうことだからのう」
「その通り。しかし」
「しかし。一体何じゃ？」
「小六殿は忍であるな」
彼がここで言うのはだ。このことだった。
「そうであるな」
「うむ、その通りじゃ」
「忍がたらふく食ってもよいのか」
首を傾げさせながらだ。こう彼に尋ねるのだ。
「そうしてもよいのか」
「んっ？おかしいか？」
「たらふく食っては素早く動けまい」
彼が蜂須賀に言うのはこのことだった。
「それは大丈夫なのか」
「わしはいつもそうしておるが」
蜂須賀は何でもないといった顔で答える。
「だからじゃ。全くじゃ」
「平気なのじゃな」
「うむ、全く気にすることはない」
豪快な笑顔で言う彼だった。そのうえでだ。
蜂須賀はだ。その笑顔で木下秀長にこんなことを話した。
「大体わしはじゃ」
「小六殿は？」
「この身体だからのう」

大柄なだ。その身体を見せながらの言葉である。
「どうしてもじゃ。食わねばじゃ」
「ならないというのじゃな」
「そうじゃ。わしはたらふく食ってこそ素早く動けるのじゃ」
「そうか。ではよいのか」
「ではまた食おう」
豪快そのものの笑顔でまた話す彼であった。
「握り飯をな」
「小六殿はそれが好きじゃな」
「うむ、白米の握り飯は大好物じゃ」
実際にそうだというのである。
「さて、ではたらふく食ってじゃ」
「また動くのじゃな」
「そうするとしよう」
そんな話をしてだ。そのうえでだった。

第三十八話　砦の攻防その八

彼等は朝飯を食らうのだった。だがその間にだ。
蜂須賀の手の者の忍の一人が今川の囲みの目をかいくぐってだ。
そうしてなのだった。
清洲の信長のところにだ。今川の敵襲が伝えられた。それを聞いてだ。
すぐにだ。柴田が言うのであった。
「よし、平手殿の兵と合流しすぐに救援に向かうぞ！」
「あの、ですが」
「御気持ちはわかりますが」
「むう、殿じゃな」
柴田は周りにいる同僚達の言葉を聞いてだ。すぐに落ち着いた。
そしてそのうえでだ。袖の中で腕を組みこう言うのだった。
「しかしのう」
「その殿がですか」
「今は」
「まあうだうだ言うのは好まぬ」
豪放な柴田らしい言葉だった。
「ここは落ち着くべきか」
「はい、そこで救援に向かわれるというのは権六殿ならではですが」
生駒がここで柴田に言う。
「やはり今は」
「そういうことじゃな。まあ大学殿に小六がおる」
柴田が最初に挙げたのはこの二人だった。そしてそれからだった。
「あの猿とその弟もおるしな」
「そうそう陥ちません」
「当分はもちこたえるな」
柴田もだ。そう見るのだった。

「鉄砲もあるしのう」
「そういえばですな」
山内が言った。
「清洲には鉄砲はあまり置いてませぬな、今は」
「平手殿の軍と鷲津に持って行ったぞ」
金森がその山内に話した。
「かなりの数はだ」
「ううむ、それでは篭城には辛いですな」
山内は金森のその話を聞いてだ。首を捻って言った。
「弓や長柄の槍はあるにしても」
「そうじゃな。鉄砲があれば全く違うからな」
金森もだ。それはわかったいた。城から鉄砲を撃ちだ。攻めて来る敵を寄せ付けないのだ。これも戦い方の一つなのである。
だが今清洲城には鉄砲がない。これが問題だった。
「篭城するにしては心もとないか」
「鉄砲が少ないとのう」
「どうにも」
「何、鉄砲がなくとも戦うことはできるわ」
柴田はそれは大丈夫だというのだ。
「その弓や槍で充分じゃ」
「それでいけますか」
「やろうと思えばな。だが少しな」
柴田の口調が変わった。それでだ。
周りにいるだ。同僚達の名前を呼ぶのだった。
「浅井新八郎政貞」
「はい」
背が高く色の黒い男だ。
「真木与十郎」
「ここに」
すがめでだ。険しい顔の男だ。

「梶川門尉高秀」
「何でしょうか」
やや小柄で四角い顔の男だ。
「幸田彦右衛門」
「はい」
ひょろ長く胡瓜ににた顔の男だ。
「岡本平吉郎良勝」
「はっ」
こちらはだ。赤い顔である。
「生駒平左衛門」
「おります」
太い眉のいかつい男だ。柴田は彼等の名前を呼んだのだ。

第三十八話　砦の攻防その九

そのうえでだ。こう彼等に問うた。
「そなた等のことだが」
「はい、何でしょうか」
「一体」
「やはりあれじゃな」
彼等を見ながら話す柴田だった。
「もう仇名はもらったか」
「はい、それがしですが」
最初に答えたのは浅井である。
「新八郎です」
「与十です」
真木だ。
「門尉でございます」
梶川である。
「彦右になりました」
幸田だ。
「平吉郎に」
岡本が述べる。
「平左です」
最後にだ。生駒である。
「それがし達それぞれ」
「殿にこう呼ばれております」
「そうじゃったな。殿は名前で呼ばれることはない」
信長の特徴の一つだった。柴田自身がそう呼ばれているからわかるのだ。
「幼名で呼ばれるからな」
「それは何故でしょうか」

「他の大名もそうですが」
「殿はそれが特に多いですが」
「名前で呼ぶと妙に堅苦しいから好まれぬそうじゃ」
それでだというのだ。
「例えば平吉郎に彦右よ」
「はい」
「それがし達でございますか」
岡本と幸田がそれぞれ応える。
「その方等前からよく伊勢に行っておるな」
「権六殿と同じく」
「あの役目で」
「そうじゃな。殿に行きと帰りに報告する時じゃ」
まさにだ。その時にだというのだ。
「その幼名で呼ばれるじゃろ」
「その通りでございます」
「それは」
「殿はまず名前で呼ばれぬ」
これはだ。ほぼ絶対に言えることだった。
「そこが殿の癖じゃ」
「では名前で呼ばれることは」
「ありませぬな」
「うむ、ない」
彼が幼い頃より仕えている柴田にしてもだ。聞いたことがなく記憶にないことだった。
「まことに記憶にない」
「ううむ、殿のご気性でしょうか」
「それも」
「おそらくはそうじゃな。それが変わったらまず怖いのう」
こんなことも言う柴田だった。
「殿らしくないからのう」

「言い換えれば殿が我等の名を呼ばれると」
「危うい状況だというのですね」
「左様でございますか」
「想像できんからな」
だからだ。余計にだという柴田だった。
「それを考えていくとじゃ。今もじゃ」
「安心してよいですか」
「今川が攻めて来ているその状況も」
「実際にじゃ」
柴田は彼等の中からだ。岡本と幸田を見てだ。こう言うのであった。

第三十八話　砦の攻防その十

「御主等はまた伊勢に行くのじゃな」
「左様です」
「久助殿や二郎殿達と共に」
「その予定です」
「わしも行くしな」
他ならぬだ。柴田もだというのだ。
「伊勢には結構行っておる」
「そうされてますな、確かに」
「権六殿も」
「殿は伊勢を手に入れられるおつもりだ」
そのことはもう織田家ではよく知られていることだった。だが信長はこれまで伊勢には一兵も送っていない。彼等を送っていっているのだ。
その中には柴田もいる。それでこう話すのだった。
「だから我等を何度も送ってだ」
「それで各家を取り込むなり何なりして」
「そのうえで、ですな」
「伊勢を手に入れられる」
「そうした御考えなのですか」
「そうじゃ。わしはどちらかというとじゃ」
ここでは柴田のその気性が自身の口から話される。
「謀よりも戦じゃがな」
「そうですな。権六殿はそちらになりますな」
山内もそれはその通りだというのだった。
「戦の方がお好きですな」
「しかし謀もできん訳ではないからのう」
意外とだ。彼は器用なところもあるのだ。これで案外だ。

「だから任せてもらっておるが」
「やはりお得意ではありませんか」
「うむ、自分で言うのも何じゃが」
こう山内に答えて話すのである。
「そうしたことはやはりな」
「好きにはなれぬと」
「何度も言うがわしはやはり戦じゃ」
織田家きっての武勇がだ。それが出るというのだ。
「若しくは政じゃな」
「権六殿は政もされますな」
「よく殿に命じられておりますな」
「いや、むしろ政においては」
他の者達もだ。こう考えていき述べていくのだった。
「殆んどの者が命じられますな」
「それこそ慶次殿か才蔵殿以外は」
「殆んどの者ですな」
「あの二人はまた特別じゃ」
柴田の口調がいささか忌々しげなものになる。
「特に慶次はじゃ」
「そこでまたですか」
「慶次殿となりますか」
「全く。戦がなければ遊んでおるだけじゃ」
傾奇者健在というわけである。
「政もせねば策もせぬからのう」
「しかし。政や策をする慶次殿というのは」
「全く想像できませんが」
「才蔵殿と共に」
「それはどうしても」
誰もがだ。それはというのである。
「慶次殿はやはり戦ですな」

「戦の場で槍を持たれてこその慶次殿です」
「確かにな。あ奴はまあ嫌いではない」
柴田は何だかんだという調子で慶次について話す。
「暇があると悪戯を考えるがのう」
「してその場合は」
「悪戯を受けられた場合はですな」
「容赦なくでござるな」
「殴り飛ばしてやることにしておる」
実際にそれをするのが柴田だ。ある意味において信長以上に恐ろしいところがあるのだ。

第三十八話　砦の攻防その十一

「そういう場合は何の容赦もせぬ」
「ですな。しかし権六殿の拳ですか」
「それを受けて五体満足でいられるというのも」
「慶次殿だけですな」
「まさに武辺者ですな」
「ああ、そこが違うのじゃ」
柴田は梶川の今の言葉に対して言った。
「あれは武辺者ではないじゃろう」
「おっと、そうですな」
言われてだ。梶川も気付いた。そのうえでだ。
彼はだ。笑いながらこう言い変えたのだった。
「ふべん者ですな」
「左様、あ奴はそれじゃ」
「御自身で戦以外では役に立たぬと申され」
「それで大ふべん者なのじゃ」
柴田もその大きな口をさらに大きく開けて言うのである。
「実際にそれに徹するのが慶次殿ですな」
「全くですな」
岡本と真木もここで言う。
「しかし。それが慶次殿」
「あの御仁らしいですな」
「うむ、あ奴が政をしだしても恐ろしい」
柴田は信長と同じくだ。彼もそうだというのだ。
「想像できん」
「では慶次殿が寝ておられるうちはですな」
「安心してよいですな」
「そうじゃ。今あ奴は気持ちよく寝ておる」

今もだ。その気の赴くまま昼寝を楽しんでいるのだ。その大きな身体を縁側に横たえてだ。高いびきをかいているというわけである。
「それならそれでよい」
「では。今は」
「我等も」
「寝るとしますか」
最後に生駒平左が言った。
「そうされますか」
「そうじゃな。寝ておくか」
柴田もそれに傾く。
「今はな」
「はい、どうも長くなりそうですし」
「それでしたらです」
「今のうちに寝てです」
「英気を養いましょう」
他の者達もだ。こう言うのだった。
そしてだ。柴田もだ。こう返すのだった。
「そうじゃな。英気を養うのも大事じゃ」
「新五郎殿に仰った通りです」
「そういうことです」
「ははは、そうじゃそうじゃ」
言われて顔を崩して返す柴田だった。
「わしが言ったのじゃ」
「それで新五郎殿はどうされていますか?」
「今は」
「うむ、書を読まれておる」
林は読書家だ。それにより培った教養でだ。織田家の知恵袋となっているのだ。彼はどちらかというと文の人物なのである。
「明の古い書を読まれておるわ」
「おお、そうした書をですか」

「読まれていますか」
「新五郎殿らしいですな」
「あの御仁もあれじゃ。書を読まれぬと」
今度は彼の話が為された。慶次に続いてだ。
「何か違うからのう」
「全くですな。それは」
「何かがおかしいのではと思ってしまいます」
「どうしても」
「そうじゃな。わしにしてもじゃ」
最後は他ならぬだ。彼自身であった。
「どうも武張っておらんと駄目じゃな」
「そうですそうです、それは」
「真にです」
その通りだとだ。周りはこぞって彼に言う。
「そういうことですな」
「それぞれの個性がある」
「そしてそれが集っているのが」
「我が織田家ですな」
「そういうことになるのう。それでもどの家にも負けておらんな」
柴田は最後にこう言ってだ。そのうえでだ。
今は休むのだった。そのまま高いびきをかいてだ。慶次に負けない程眠ったのである。

第三十八話　完

２０１１・４・２３

第三十九話　なおざりな軍議その一

第三十九話　なおざりな軍議

鷲津で遂に戦がはじまった頃信長は。
数人の家臣達とだ。話し合いをしていた。
その彼等はだ。口々にこう話すのだった。
「伊勢の国人達の大抵は殿につくようです」
「どうにかここまでいきつけました」
「そして長野氏ですが」
この家の名前も出るのだった。
「跡継ぎがおりません」
「そこが狙い目かと」
「そうじゃな。あの家には跡継ぎがおらん」
信長もだ。そのことを言うのだった。
彼は腕を組んで考える顔になってだ。こう言うのである。
「跡継ぎがおらぬことはそのまま付け入る隙となるからのう」
「ですな。さすればです」
「我が家から出しますか」
「そうされますか」
「うむ、そうする」
まさにだ。その方法を執るというのである。
そのことを話してだ。さらにだった。
信長はだ。こんなことを言うのだった。
「長野氏を抱き込めば大きいな」
「はい、今抱え込むことになっている国人達だけでなくです」
「その他の旗色を明らかにしていない国人達もです」
「織田につきます」
「そうして伊勢の北の国人達は殆んどがです」
「そしてひいては」

北だけではなかった。さらにだった。
「伊勢の南もです」
「あちらもまた」
「我等のものにですな」
「そうじゃ。北では終わらぬ」
信長は伊勢の北だけを見てはいなかった。さらにだ。
伊勢の南も、即ち伊勢全体を見てだ。そのうえで考えていたのだ。
さらにだ。彼はこの国も見て言うのであった。
「無論志摩もな」
「伊勢と志摩。双方を」
「どちらの国も手に入れられますな」
「無論じゃ。二郎もおる」
九鬼のことだ。彼は水軍だけではないのだ。政やこうした策、とりわけ伊勢志摩に馴染みの深い彼をだ。今回は実によく使っているのだ。
その彼はだ。今丁度この場にいた。それでだった。
彼に対してだ。こう言うのであった。
「よいな。伊勢も志摩もじゃ」
「わかっております」
九鬼は不敵な笑みを浮かべて信長に答えた。
「ではこれからも」
「働いてもらう。さて」
ここまで話してだ。そうしてだ。
信長は額の広いはっきりした顔の男にだ。こう声をかけたのだ。
「右筆よ」
「はい」
その男は信長にすぐに応えた。
「明院良政ここに」
「御主も伊勢で働いておるが」
「次はでしょうか」

「美濃も調べるのじゃ」
その国もだというのだ。伊勢に留まらなかった。
「よいな」
「はい、それでは」
「左京よ」
そしてだ。さらにだ。
信長は佐久間によく似た彼よりは多少若い男をこう呼んでだった。
その彼にも言うのだった。
「そなたも美濃についてじゃ」
「調べよというのですね」
「そうじゃ。そうせよ」
「では。この佐久間信直も」
「頼んだぞ。伊勢だけではない」
美濃もだというのだ。信長はその国も見ているのだった。
そんな話をしていた。しかしだ。

第三十九話　なおざりな軍議その二

その彼のところに原田が来てだ。こう彼に上申してきた。
「殿、鷲津にです」
「ふむ。あの砦にか」
「はい、来ました」
こう信長に告げる原田だった。
「まずは先陣ですが」
「竹千代じゃな」
信長はすぐにだ。彼の名前を出してみせた。
「そして雪斎も共におるな」
「その通りです」
「あの二人しかおらん」
だからだとだ。信長は言うのである。
「さて、それで鷲津はどうなった」
「存分に戦っているとのことです」
原田は鷲津の奮戦も伝えた。
「一週間は充分にです」
「戦えるというのか」
「しかし。やはり数は多いです」
敵の数がだというのである。
「ですから。やがては」
「わかった」
ここまで聞いてだ。信長は頷いた。するとすぐにだ。
原田は話を変えてだ。こう主に告げるのだった。
「して、なのですが」
「軍議じゃな」
「それは。どうされますか」
「開かぬと言えばどうする」

信長は微笑みを浮かべて原田に問うてみせた。
「だとすれば」
「いやいや、それはないでござる」
原田は信長の今の言葉は笑ってないとした。
「幾ら何でもそれは」
「そう思うか」
「今川はもう尾張に入っております」
その現実を指摘しての彼の話である。
「だとすればです。とても」
「そうじゃな。普通で考えればな」
「はい、ありませぬ」
「ははは、しかしわしは普通とは限らんぞ」
信長も笑ってだ。こう言ってみせるのだった。
「さて、どうなるかのう」
「しかし軍議は」
「開くとはまだ言っておらぬぞ」
これがだ。現実だった。
信長は今回はだ。軍議を開くとは一度も言っていない。それどころかいつも通り政を行い馬に乗り泳ぎだ。全く何でもない様子だ。
その彼を見てだ。
原田も流石にだ。いぶかしむものを感じてこう言うのであった。
「まさかとは思いますが」
「軍議を開かぬではと思うておるな」
「はい、その通りです」
ありのまま主に答える彼だった。
「それはないでござるな」
「言うのう。そう思うか」
「違いますか」
「開かぬと言えばどうする」
また原田に言ってみせる信長であった。

「そうすればじゃ」
「いや、それは」
原田はそう言われてはだった。返答に窮した。そのうえでだ。
困惑した顔になる。しかしその彼にだった。信長はこう告げた。
「よし、それではじゃ」
「軍議をですか」
「皆を呼べ」
開くとは言わずだ。こう言ったのである。
「よいな。今清洲におる皆を呼べ」
「はっ、それでは」
原田はそれこそが軍議だと思った。そうしてだ。
家臣達が信長の前に集りだ。早速だった。
「やはりここは平手殿の軍と合流しだ」
「うむ、その通りじゃ」
「そしてそのうえで鷲津の救援に向かい」
「今川に決戦を挑む」
「そうするべきじゃな」
柴田や母衣衆あがりといっただ。血の気の多い面々の主張である。

第三十九話　なおざりな軍議その三

「ここは是非じゃ」
「そうして義元めの首を取る」
「うむ、そうしようぞ」
「そうして一気にけりをつけるのじゃ」
これが彼等の意見だった。それに対してだ。
林はだ。こう主張するのだった。
「しかしのう。敵の数は多いぞ」
「確かに。今川は二万五千」
「それに対して我等は一万五千」
「数が開いております」
「これは否定できませぬぞ」
林だけでなくだ。彼の弟や他のどちらかというと政に秀でている面々はだ。こう言うのであった。彼等の考えはというとである。
「鷲津や丸根の面々は何とか砦を出て清洲まで退く」
「大学殿ならそれができるからのう」
彼の武勇をだ。考えての話である。
「そのうえで清洲まで撤退しこの城に篭城する」
「それから平手殿の軍が城を取り囲む敵を外から討つ」
「これだと確実に勝てますな」
「うむ、間違いなく」
「そうなりまする」
彼等はこう主張するのであった。
「決戦では果たしてそこまでいけるのか」
「やはり相手が相手です」
「確実に手を打っていきましょう」
「勝てる手を」
「いや、それはどうでござろう」

佐久間は柴田の傍にいる。そうしてだった。
疑念の言葉でだ。林達に話すのだった。
「一気に攻めなければです。斉藤が動きますぞ」
「そうじゃ。斉藤がおるのじゃ」
柴田も彼等の話をする。
「だからここはじゃ。一気に攻めるべきじゃ」
「それで負ければどうなるのじゃ」
しかし林も言う。彼も彼の考えがあってだ。それで話すのだった。
「そうなれば元も子もないぞ」
「しかし篭城すれば斉藤が動く」
「それではどうしようもない」
「だからここはじゃ」
「やはり一気に攻めるべき」
「いや、篭城じゃ」
意見は真っ二つに分かれていた。そうなってしまっていた。
その彼等に対してだ。信長はというと。
主の座で腕を組んで座ってだ。一言も発しない。その彼に対してだ。
家臣達はだ。口々に問うのであった。
「して殿は」
「どの様にお考えでしょうか」
「一体」
彼等がこう問うとである。
信長はだ。静かに目を閉じてだ。それからこう言うのであった。
「ふむ。そうじゃな」
「はい、それではです」
「どちらでしょうか」
誰もがだ。身を乗り出さんばかりにしてだ。
主に対して問う。如何にするのかをだ。
「やはり出られますか」

「それとも篭城ですか」
「果たしてどちらですか」
「一体」
「遅いのう」
信長はだ。静かにこう言うのであった。
「もうな」
「遅いとは！？」
「殿、一体それは」
「どういう意味でございましょう」
彼等はその身をさらに乗り出さんばかりにしてだった。
再び主に問う。するとだ。

第三十九話　なおざりな軍議その四

信長はだ。その彼等に述べるのだった。
「夜遅い」
「えっ！？」
「夜遅いと」
「そう仰るのですか」
「そう」
「そうじゃ。もう真夜中ではないか」
実際に眠そうな顔を見せてだ。信長は話すのである。
「それで何じゃ。軍議か」
「ですから。今川がもう鷲津に来ております」
「そして砦を取り囲みですぞ」
「実際に攻めてきております」
「その数二万五千」
今川の数はだ。ここでも話される。
「天下でここまで数を出す家はそうはおりません」
「百万石の兵をあるだけ出してきました」
「それに対して我等は全て集めて一万五千」
鷲津や丸根の兵、そして平手が美濃との境に持って来ている兵全てを合わせてだ。それだけなのだ。だがそれに対してだというのだ。
「兵の数はこちらが少ないのです」
「それに対してどうするか」
「確かに数は少ないです」
それでもだった。彼等は諦めてはいなかった。何故ならだ。
「ですが我等の鎧も陣笠も立派なものです」
「槍も長いですし馬も弓矢も見事です」
「しかも鉄砲もあります」
「十分以上に戦えます」

こう読んでいるからこそだ。彼等は諦めていなかった。
そのうえでだ。主に問うているのだ。こうした様にだ。
「ですから今こそです」
「どうするべきか決めましょうぞ」
「鷲津まで向かいますか、それとも」
「この清洲で」
「だから夜遅いのう」
また言う信長だった。
「そうではないか？」
「あの、ですから殿」
「今はです」
「今川が来ております」
「そうした状況でございますが」
まだそんなことを言うと見てだ。彼等は少しきょとんとした口調で話すのだった。
「このまま何もしないのでは話になりませぬ」
「要はどうするかです」
「ですから攻めるのでございますか」
「それともこの清洲に」
「茶をもて」
信長の次の言葉はこれだった。左右の小姓達に言ったのである。
「茶をじゃ。よいな」
「むっ、では茶を飲まれたうえで」
「いよいよですな」
「どうされるか仰って頂けますか」
「今から」
「茶はよい」
信長はこの場ではじめて笑った。そうしての言葉だった。
笑いながらだ。こう話すのである。
「美味いし心が落ち着くわ」

「ですな。ではその茶を飲まれて」
「それからいよいよどうされるか」
「お決めになられますな」
「いよいよ」
「とにかく茶を飲むぞ」
家臣達にもだ。こう告げるのだった。
「よいな、そうせよ」
「はっ、それでは」
「そうさせてもらいます」
家臣達も納得した顔で頷いた。誰もそのことには異を唱えない。信長が必ず何かを決めると見ているからだ。その前の休止と思ったのだ。

第三十九話　なおざりな軍議その五

やがて程なくして茶が来てだった。そうしてだった。
その茶を信長だけでなく家臣達も全て飲む。茶を飲むとだ。
自然と心が落ち着く。そして今は家臣達の全てが気付いていないが目が冴える。心が落ち着くだけではなかったのである。
そうして一杯飲み終えるとであった。それまで昂ぶっていた気がかなり落ち着いてしまっていた。信長も茶を一杯飲み終えていた。
それからだ。
彼はだ。その落ち着いた顔で彼等に告げた。
「ではじゃ」
「はい、それではです」
「どうされますか」
「終わりじゃ」
こう言うのであった。
「今宵はこれで終わりじゃ」
「終わり！？」
「また仰いますが」
「それは一体です」
「どういう意味でござろうか」
またきょとんとした顔になってだ。問う彼等だった。
「ですから。どちらに」
「どちらにされますか」
「だから終わりじゃ」
信長はあくまでこう言うのである。
「終わりなのじゃ」
「ですから何が終わりなのでしょうか」
林がだ。彼に問うた。
「今は何が終わりなのでしょうか」

「皆休め」
信長は今度は具体的に述べた。
「よいな、そうせよ」
「お戯れを」
林はだ。今の主の言葉には笑ってこう返した。
「今ここでそれはありますまい」
「わしは本気じゃ」
「ではまことに」
「そうじゃ。休め」
信長の言葉は変わらない。
「よいな」
「あの、だからです」
林も言う。今度は本気であった。
「今はそうした状況ではありませんぞ」
「今川のことか」
「そうです。どうされるのですか」
そのことを言い続けるのだった。主に対してだ。
「このままではです」
「だから言っておるではないか」
「夜がですか」
「そうじゃ。遅いではないか」
あくまでだ。このことを言う信長であった。
「もうな」
「しかしです」
「何じゃ?まだ軍議をしたいのか」
「無論です。今はです」
林は食い下がる。彼とて退けなかった。
それでだ。主に対してさらに言った。
「それでどちらにされますか」
「それを今決めよというのじゃな」

「はい、どちらに」
「だから言うぞ」
また言う信長だった。結局こう言う彼だった。
「休め、よいな」
「あの、ですから」
「よいよい。皆休め」
もうそれ以上は言わせなかった。こうしてだった。
信長は去ってしまった。後に残ったのは呆然となる家臣達だった。
その中で信長に問うた林はだ。唖然とするしかない様子だった。

第三十九話　なおざりな軍議その六

その彼にだ。柴田が声をかけた。
「新五郎殿」
「うむ、何じゃ」
「不満に思われてますな」
「無論じゃ。これではじゃ」
「どうなるかわからないと」
「そうじゃ。とにかく攻めるにしても篭城するにしてもじゃ」
どちらにしてもだというのだ。
「決めねば何にもならんぞ」
「確かに。その通りですな」
「それで何もしないでどうするのじゃ」
また言う林だった。
「今の殿はわからん」
「ではどうされますか？」
「どうするかとは？」
「休まれますか？」
林に対して問う柴田だった。
「それでは」
「ううむ、殿はそう仰る」
そうならばだというのだ。林もだ。
憮然としているがそれでもだ。こう言うのだった。
「では今はじゃ」
「休まれますな」
「そうするしかない」
林も言った。
「仕方ないことじゃ」
「では。今宵は」

「全く。殿は何を考えておられるのか」
それがわからないといった顔のままの林だった。
「それがわからん」
「しかし殿のお言葉ならば」
「仕方ない」
何だかんだでだ。林は揺れ動いてはいなかった。考えは確かだった。
それでだ。今度はこう言うのだった。
「寝るとするか」
「また明日ですな」
「そうじゃな。では今は休むとしよう」
「はい、それでは」
柴田は林に笑顔で頷いてだ。そうしてだった。
彼だけでなく他の家臣達も休むのだった。こうして部屋には誰もいなくなった。しかしここで、であった。
可児はだ。何やら楽しむ顔でだ。部屋を後にする時にこう言うのだった。
「さて、これからが面白いかものう」
こう言ってその場を後にするのだった。だが彼と慶次以外の殆んどの面々はそうしたものを感じてはいなかった。本能的なものはだ。そこまで鋭くなかったのだ。
織田家の方針はこの夜は決まらなかった。少なくとも家臣達はそう思った。しかしであった。
織田家に戻ったばかりの信行はだ。己の部屋で静かに茶を飲みながらだ。こう小姓達に言うのであった。
「茶はよいのう」
「はい、ですが」
「また今宵は随分茶を飲まれますが」
「どうしてでしょうか」
「うむ、兄上のことだ」

兄である信長のことだとだ。彼は言ったのだ。
「話は聞いた」
「訳がわかりませぬ」
「全くです」
家臣達もだ。いぶかしみながら言うのだった。
「一体何を御考えなのか」
「どうして何も決められないのか」
「それがわかりませぬ」
「そうじゃな。実はわしもじゃ」
信行自身もだ。そうだというのである。
「わからん」
「勘十郎様もですか」
「そうなのですか」
「うむ。しかし茶を飲まれたと聞いてだ」
ここで彼が言うのは茶のことだった。その茶を彼自身も飲みながらだった。

第三十九話　なおざりな軍議その七

彼はだ。こう小姓達に話すのだった。
「こうして飲んでみるとじゃ」
「何かわかりましたか？」
「それで」
「目が冴える」
そうなるというのだ。
「これでは眠れぬな」
「それではよくないのでは？」
「そうです」
小姓達は信行の今の話を聞いてだ。それぞれ言った。
「殿は休めと言われたのです」
「それで眠れぬとは」
「それでは本末転倒では？」
「だからわからぬのだ」
また言う彼だった。
「兄上は何を考えておられるのか」
「ことは一刻を争いますが」
「それでこの行い」
「これは一体」
「わからぬことだらけだのう」
信行の言葉もだ。自然と歯切れが悪くなっていた。
「特に今は」
「しかしそれでもです」
「我等はここを離れるつもりはありません」
「何があろうとも」
「正直何を考えておられるかわからん」
信行はまたこのことを話す。しかしだった。

彼は同時にだ。こんなことも話すのだった。
「しかし兄上ならばだ」
「はい、殿ならば」
「必ずや」
「今川を倒してくれる。絶対にな」
信長への信頼はだ。揺るがないものだった。
それがあるからだ。信行は落ち着いてこう言うのであった。
「さて、この戦が終われればだ」
「かなり落ち着きますな」
「それで」
「いやいや、何を言う」
そこで気を抜こうとする小姓達にだ。釘を刺す形になった。
「そうはならんぞ」
「なりませんか」
「そうは」
「むしろ忙しくなろう」
そうなるというのだ。信行は笑ってはいるが調子は真剣なものだった。
「それからな」
「忙しくなりますか」
「そうなるのですか」
「戦だけではないのだ」
彼等がしなければならないことはだ。それだけではないというのだ。このことは信長を弟として補佐しているからこそだ。実によくわかることだった。
そのことだ。小姓達に話すのである。
「政もあるではないか」
「確かに。それもですね」
「あります」
「むしろその方が忙しいでしょうか」

「政の方が」
「そういうことよ。政があるのだ」
信行はまだ茶を飲みながら話していく。自分で淹れて小姓達にも勧めながらだ。そのうえで緑のその茶を飲みながらなのである。
「そして策もな」
「策も」
「それもでございますか」
「やらねばならんことは幾らでもある」
この現実が語られた。

第三十九話　なおざりな軍議その八

「尾張を守れば次は伊勢に出るだろうしな」
「ですな。それはもう」
「既に策を巡らしていますし」
「それでは」
「だからよ。今川との戦からさらに忙しくなるのよ」
政と策においてだ。そうなるというのだ。
「それがわかったな」
「はい、そちらですか」
「戦だけではありませぬか」
「兄上は戦も得意だ」
それもだというのだ。
「しかしそれ以上に」
「政がですか」
「得手とされていますか」
「その辺り武田や北条と同じか」
それぞれ戦国に大きな力を誇示している家であった。そしてその主達だ。
「毛利もそうか」
「安芸のあの」
「緑の」
「どの者も確かに戦に強い」
そのことでも定評があった。伊達に虎や獅子と呼ばれてはいない。
「しかしそれ以上に政よ」
「そういえば武田の政は見事ですな」
「家をまとめ。そして」
「田畑も町並みも見事にしております」
「堤や道も万全です」

戦で手に入れた領地を他者が唸るまで治めてみせる、それが武田なのだ。
「ああした家と同じですか」
「殿は」
「兄上は戦で勝てばそれでよしという方ではない」
まさにだ。信長の本質だった。
「むしろそこからだ」
「戦で手に入れたものをどうするか」
「それこそが大事なのですか」
「殿にとっては」
「わかったな。それがな」
小姓達を見据えながら話す信行だった。
「では。戦が終わってからがだ」
「まことに忙しくなる時」
「まさにですね」
「では。気を抜くことはするべきではない」
信行は真面目な顔で話した。
「よいな」
「わかりました。それでは」
「その様に」
「さて、わしの話は終わりだ」
信行はこれでだと話した。
「それではこの茶を飲めばだ」
「休まれますか」
「そうされるのですね」
「うむ。しかし茶を飲むと」
どうかというのである。茶を飲むとだ。
「妙に目が冴えるのう」
「確かに。それがしもです」
「それがしもでございます」

このことはだ。小姓達もだった。
そしてだ。彼等はその目をしばたかせてだ。それぞれ言うのである。
「これで夜眠れなければです」
「困りますな」
「全くです」
「うむ。そういえば兄上は」
その信長のことをだ。また話す信行だった。
「権六や新五郎達にも茶を飲ませたな」
「主だった家臣の方々全てに」
「そうされてます」
「無論殿自身もです」
「飲まれました」
誰もがだ。その茶を飲んだというのだ。このこともあるのだった。
「では。今宵は」
「眠られぬのでは？」
「誰もが」
「とにかく何が何もかもわからん」
信行はさらに考えてだ。それがまとまらなくなっていた。

第三十九話　なおざりな軍議その九

「兄上は酒は飲まれぬが」
「そうそう、今宵は誰も酒を飲むなともです」
「そうも仰っていました」
「兵に至るまでです」
「酒をか」
また考える顔になる信行だった。そのことを聞いてだ。
「兄上は酒は飲まれぬが」
「しかし他の者に飲むなとも仰いませんし」
「普段は」
「そうじゃな。やはり妙じゃな」
「茶は飲めと仰います」
「それについてはです」
「茶はよくとも酒は駄目か」
信行はまた首を傾げさせて述べた。
「わからんのう」
「茶を飲むのもいいですが」
「それでもやはり酒とは違います」
「飲んでも心は落ち着き目は冴えますが」
それでもだとだ。小姓達も話していく。
「ですがそれでもです」
「酒のあの気の晴れはないです」
「あれがよいというのに」
「それがないのは」
「まあ言っても仕方がない」
それは仕方ないと話してだった。信行はだ。
また茶を飲むのだった。そしてだ。
そのうえでだ。また小姓達に話した。

「しかし飲み過ぎてどうも目が冴えてきた」
「だからもう一杯ですか」
「飲まれますか」
「そうするとしよう。休むつもりだったが」
それでもだと話す彼等だった。そしてだ。
また茶を受け取りだ。それを飲みながら話すのだった。
「まあ今は飲むとしよう」
「今宵はそうされますか」
「茶を飲んで過ごされますか」
「権六達はどうしておる」
あらためてだ。柴田達の今の状況を尋ねた。
「もう寝ておるか」
「いえ、それがです」
「どの方も起きられてです」
「茶を飲まれています」
「時折用足しに出られて」
「左様か。誰もが起きておるか」
信行はそのことも聞いてだった。納得した顔で頷いた。そしてだ。
「茶を飲んでか」
「はい、勘十郎様と同じく」
「そうされています」
「ではわしもじゃ」
ここでまた言う信行だった。
「権六達のところに行くか」
「そうしてですか」
「茶を飲まれる」
「そうされますか」
「そうするとしようか」
信行はまた言った。
「人は多くある方が楽しい」

「茶を飲むこともですね」
「それもまた、ですね」
「そうだ。その辺りは兄上と同じだ」
こう話してだ。彼はだ。
柴田達のところに向かいだ。そのうえでだ。
彼等と共にまた茶を飲むのだった。今は誰もが起きていた。
そのうえで茶を飲んでいく。彼等は今は茶を飲んでいるだけだった。しかしそれでもだ。何かが起ころうとしていた。間違いなくである。

第三十九話　完

２０１１・４・２８

第四十話　桶狭間へ一

第四十話　桶狭間へ

信長は起きていた。そのうえで己の部屋にいた。

今部屋にいるのは彼一人だ。帰蝶もいなければ小姓達もいない。ただ一人そこにいてだ。座していた。

暫く座し時を過ごしているようだった。部屋の中には灯り一つない。真っ暗がリの中である。彼はその中でだ。一人で座していたのである。

しかし暫く経ってからだ。彼は立ち上がった。そしてだ。

顔を右に向けてだ。こう言ったのである。

「帰蝶、おるか」

「はい、こちらに」

すぐにであった。その帰蝶が来た。まるで影の様にだ。彼の側に来た。

そしてそのうえでだ。己の夫に問うのであった。

「何を為されますか？」

「何をすると思うか」

「舞われますね」

帰蝶は夫の前に控えて座ったままだ。こう答えた。

闇の中に二人の姿が浮かんでいる。その闇の中でだ。帰蝶は夫に言うのである。

「そうされますね」

「そうじゃ。舞う」

その通りだと答える信長だった。

「そしてそのうえでじゃ」

「御出陣ですね」

「そのつもりじゃ。今こそその時じゃ」

まさにそうだとだ。信長は言うのである。
「しかしその前にじゃ」
「あの舞をですね」
「わしが舞うものは一つしかない」
不敵な笑みを闇の中で浮かべての言葉だった。
「あれしかな」
「そうですね。それでは」
「では舞おう」
「鼓があります」
それは既にだ。帰蝶の手の中にあった。
そしてそれを手にだ。信長に話すのである。
「ではすぐに」
「舞うぞ。よいな」
「はい、それでは」
こうしてだった。信長は持っていたその扇を手にしてだ。そのうえでだった。
舞を舞いはじめる。帰蝶は鼓を鳴らす。その中で舞いだ。信長は詠うのだった。
「人間五十年」
まずはこの言葉からだった。そしてだ。
さらにだ。舞を続けながら詠っていく。
「下天のうちを比ぶれば」
敦盛だ。平家物語に出て来る若武者平敦盛を詠った舞をだ。舞いつつ詠っていくのだ。
「夢幻の如くなり」
この場所も詠う。さらに続ける。
「一度生を享け、滅せぬもののあるべきか」
この部分もだ。強く詠いだった。
さらに続けてだ。そうしてであった。
「これを菩提の種と思ひ定めざらんは」

それはだ。どうかというのだ。
「口惜しかりき次第ぞ」
こう詠いながら舞うのだった。そうしてだ。
舞を終えた。するとすぐにだ。
「具足はあるな」
「はい」
またしてもすぐに答える帰蝶だった。
「もうすぐ傍に」
「持って参れ」
信長は一言で済ませた。
「よいな」
「それでは」
こうしてだった。すぐにその具足が持って来られた。無論陣羽織もだ。織田家の青いそれをだ。信長は己で身に着けた。その動きは実に速かった。
帰蝶は彼が具足を身に着け陣羽織を着ている中でだ。その間にだ。飯を持って来た。湯もある。そして信長が具足も陣羽織も身に着け終わるとだ。
「湯づけ」
「こちらに」
それをすっと差し出す。信長はそれを受け取るとだ。
すぐに東南のだ。義元がいる方を向いてだ。
立ったままそれをかき込みだ。そのうえで帰蝶がこれまた用意していた勝ち栗と昆布も口の中に入れてだ。それから彼女に告げるのだった。

第四十話　桶狭間へ二

「ではじゃ」
「はい、法螺貝をですね」
「吹かせよ。よいな」
「それでは」
こうしてだった。法螺貝を吹かせるのだった。その間にだ。
信長はだ。単騎馬を飛ばした。そうしてだった。
法螺貝が鳴らされた。するとだ。
「な、何だ！？」
「法螺貝！？」
「出陣だと！？」
「まさか！」
家臣達はだ。一斉にだった。
それまで茶を飲みながだ。自分達の主がどういった考えなのかわからず憮然としたり考えたり項垂れたりしていたがだ。それでもだ。
その法螺貝の音を聞いてだ。すぐにだった。
顔をあげてだ。まずは周りを見回したのだった。
「何処に出陣じゃ！？」
「まさか今川とか」
「戦をするというのか！？」
「今からか」
「出陣するというのか！」
その彼等にだ。帰蝶が言うのだった。
「殿はもう出陣されました」
「なっ、もうでござるか！」
「もう出陣されたのですか！」
「そうです。お一人でです」
帰蝶は彼等にこうも話した。

「今しがた出陣されました」
「では一体どちらに！？」
「どちらに行かれたのですか」
「どの場所に向かわれたのでしょうか」
「熱田でしょう」
帰蝶は信長に向かう場所は教えられなかった。しかし夫の考えを読んでだ。そのうえでだった。彼女はこう彼等に話したのである。
「熱田に向かわれたのでしょう」
「熱田神宮でございますか」
「そちらにですか」
「そうです、おそらくは」
そこだとだ。また話す帰蝶だった。
「そこに向かわれたのです」
「熱田。それでは」
「戦勝祈願にですか」
「それでまずは熱田にでございますか」
「行かれたのですか」
「そのうえで今川殿の軍に向かわれるでしょう」
帰蝶は再びだ。信長の考えを読んだうえで話した。
「そうされるでしょう」
「ううむ、うって出られるとは」
「しかも一騎で！？」
「御自身だけで」
「ならん！」
柴田がだ。家臣達を代表して言うのだった。
そしてだ。周りの同僚達にだ。こう問うのだった。
「このまま殿を御一人で行かせるのか」
「いや、それは」
「殿御一人で今川の軍勢の相手なぞできん」
「そんなことは誰でも無理だ」

「一人であれだけの軍勢と勝敗をつけるなぞ有り得ん」
「それでは」
「わし等も出陣じゃ！」
柴田は即断した。まさにそれだった。
「よいな、我等全員でじゃ！」
「うむ、そうしようぞ！」
「この清洲の二千！」
「二千で出るぞ！」
「そうするぞ！」
こうしてだった。彼等もだった。
慌しく具足を着けてだ。そしてだった。

第四十話　桶狭間へ三

城にいる足軽達を全て連れてだ。熱田に向かうのだった。
「急げ！」
「殿だけではないぞ！」
「我等もだ！」
「すぐに行くぞ！」
「熱田までに合流するぞ！」
そしてだ。その彼等を見送るのはだ。
信行だった。彼は自身も出陣しようとしたところでだった。
そこでだ。帰蝶に呼び止められたのである。
「御待ち下さい」
「何か？」
「城の留守です」
そのことについてだ。信行に言ったのである。
「それはどうなりますか」
「そういえば今は」
既にだ。主だった家臣達は出てしまっていた。それではだった。
留守を出来る様な者はだ。一人しかいなかった。その者こそがだ。
「では私が」
「はい、それで御願いします」
こう信行に行ったのである。
「清洲の留守をです」
「わかりました」
信行は素直にだ。彼女のその言葉に頷いてだ。
そのうえで城に引っ込みだ。留守役になるのだった。そしてその中でだ。僅かに残る小姓達にだ。こんなことを話すのだった。
「思えばこれもじゃ」
「これもですか」

「御役目ですか」
「うむ、わしはこういうことをする役回りなのだろう」
こう彼等に話すのである。
「結局のところはな」
「そうした意味では平手様と同じですね」
「そうなりますね」
「ははは、そうだな」
小姓達のその言葉にだ。信行は顔は崩さなかったが陽気に笑って返した。
「そうして兄上を補佐するのだろうな」
「そうなるかと」
「ならそれでよい」
達観した言葉だった。
「わしはこれからも裏方に徹しよう」
「そうされますか」
「これからも」
「どうもわしは目立つのは得手ではない」
己のその個性もだ。わかっているのだった。
「そういうことよりもだ」
「裏方だと」
「そう仰いますか」
「しかもそれをするのが好きだ」
自分自身の好みもだ。そちらだというのである。
「裏方をするのがな」
「その辺りも平手様と同じでは？」
「確かに」
小姓達は信行の今の言葉を聞いてそれぞれ述べた。
「もっとも平手様はどちらかというとご意見番ですが」
「そうした方ですが」
「わしも必要とあらば兄上に申し上げるが」

信行にしてもだ。
「しかし爺の小言はまた別格じゃ」
「あれには殿も閉口されますからな」
「どうにも仕方がないと」
「実際そうしたご意見番も必要なのですか」
「そうじゃ、必要じゃ」
まさにそうだと述べるのだった。信行の表情も確かなものだ。
「爺とわしが留守を守り言わせてもらう役じゃな」
「織田家においてはですか」
「そうなりますか」
「うむ、ではだ」
ここまで話してだ。信行は声の調子を変えた。そうしてだった。

第四十話　桶狭間へ四

これまで以上にしっかりとした顔になってだ。彼は話した。
「この留守、しかと守るぞ」
「では。その様に」
「これより」
「兄上はすぐ戻られる」
信長の勝利は確信しているのだった。それは絶対だというのだ。
「そしてその時はだ」
「はい、その時はですね」
「祝いですか」
「酒に茶を用意しておこう」
茶もだというのだ。酒だけではなくだ。
「兄上は酒は駄目だからのう」
「あれがどうも不思議ですが」
「殿が飲まれぬというのは」
「意外です」
小姓達も信長の下戸にはだ。こう思っていた。
信長は一見すると飲みそうなのだ。しかもかなりの量をだ。しかし彼は酒を全く飲まない。茶を飲むだけなのだ。それが彼なのだ。
「しかし、それもまた殿だと思えます」
「酒を飲まれぬというのもまた殿ですな」
「そう思えるから不思議です」
「そうだな。確かに兄上だ」
酒を飲まないのが信長だとだ。信行は言うのだ。
「酒を飲まず茶を飲まれるのがな」
「では甘いものも用意しておきますか」
「祝いに」
「そうじゃ。何か用意しておこう」

信長は酒が駄目でだ。甘いものを好むのだ。これまた最初は驚くことだがそれでもだ。それが信長だと頷ける個性であるのだ。

こうしてだ。彼等は留守を守りながら祝いの用意もするのだった。戦はまだはじまってはいない。だがその勝ちは確信されていたのだ。

信長は一騎熱田に向かう。周りは真っ暗闇だがその中をだ。全力で馬を駆っている。

まるで周りに何もないかの様に疾駆していく。左右の木々に当たることはない。まさにそこに何もない道を進むが如しだった。

そしてその彼の後ろからだった。声がしてきたのだ。

「殿、申し訳ありません！」

「今参りました！」

家臣達のだ。その声がしてきたのだ。

彼等は既に具足を着けて陣羽織も羽織っている。その姿で信長の後ろに来てだ。そうしてそのうえで主に対して言うのである。

「遅れました」

「返す言葉もありません」

「ははは、そろそろだと思っていたぞ」

信長は自身の周りに来た彼等にだ。笑いながらこう告げた。

「丁度よい頃じゃな」

「熱田まで行かれるのですな」

「そうされるのですか」

「そうじゃ、まずは熱田じゃ」

信長はそこだとだ。その彼等に話す。

「そこで兵達を集めじゃ」

「そのうえで戦勝祈願ですか」

「そうされますか」

「まずはそれからじゃ」

信長は確かに神仏には縁遠い男である。しかしだった。

時にはこうして祈願をすることがある。そうした意味で神仏の類を全く信じていないとは言えない一面もあるのだ。この辺りは複雑

なところだ。
その彼はだ。熱田に行くと言ってであった。そのうえで周りに問うのだった。
「兵の数は幾らじゃ」
「はい、二千です」
丹羽が答えた。
「清洲の兵をあらかた連れて来ました」
「左様か」
「はい、それでよかったでしょうか」
「今城に残しても何の意味もない」
これが信長の返答だった。
「だからじゃ。それでよいのじゃ」
「左様でしたか」
「留守は誰じゃ」
今度は留守役のことを尋ねる信長だった。
「勘十郎か？姿が見えぬが」
「はい、その通りです」
今度は河尻が答える。

第四十話　桶狭間へ五

「勘十郎様が務めておられます」
「やはりな。こういう時はあ奴じゃ」
「勘十郎様ですか」
「あ奴か爺に留守を任せておけば問題はない」
信長の信頼がだ。言葉になって出ていた。
「だからじゃ。それでよい」
「それでは清洲はこのままで」
「勘十郎様にお任せしますか」
「鉄砲はどうなっておるか」
信長は今度は鉄砲について尋ねた。
「それはどうなっておるか」
「一応持って来ました」
答えたのは金森だった。
「やはり。必要かと思い」
「持って来たのはよい」
信長はそれはいいとした。しかしだ。
彼はその金森にだ。こう言うのだった。
「しかしこの戦ではじゃ」
「この戦では？」
「まず鉄砲は使わぬ」
それはないというのだ。
「そして長柄槍もじゃ」
「槍もですか」
「それも」
「そうじゃ。使わぬ」
鉄砲も長柄槍もだ。どちらも使わないという信長だった。そしてその言葉を聞いてだ。

家臣達の誰もがいぶかしんでだ。あらためて彼に尋ねるのだった。
「殿、それではです」
「織田の戦ではないのでは？」
「そうです」
こう言うのだった。彼等はだ。
「鉄砲と長柄槍の二つです」
「その二つで勝ってきたというのに」
「その二つを使わない」
「といいますと一体」
「もう一つ言おう」
信長は笑みを浮かべてそのいぶかしむ家臣達に話した。
「弓も使わぬだろうな」
「それもですか」
「使いませんか」
「そうじゃ。弓もじゃ」
使わないとだ。信長は断言するのだった。
そのことも聞いてだった。家臣達はさらにいぶかしんだ。
特にだ。生駒はこう言うのだった。
「その三つを使わぬとなると」
「わかったか？」
「若しや。ここは」
「さて、まずは熱田じゃ」
その生駒にだ。信長は考える時間を与えなかった。そしてだ。
彼はだ。あらためて周りの者達に話すのだった。
「よいな。そこで戦勝祈願じゃ」
「まずは神にですな」
「それを」
「それをしてからじゃ」
無論祈願だけではない。兵を集める目的もあった。
それをすると言ってである。信長はその熱田にだ。家臣達を引き

連れる形で向かうのだった。
そしてだ。熱田に着いた。広い庭を持つ大きな神社だ。そこにだ。織田の兵達が次々と来る。誰もがほうほうのていである。その彼等を見てだ。
信長はだ。こう言うのだった。
「さて、見たところじゃ」
「見たところ？」
「といいますと」
「二千じゃな」
言うのは数のことだった。
「二千。しっかりおるな」
「ではこの二千で」
「二千で以てですか」
「今より今川に対して」
「兵を向けますか」
「そうじゃ。出羽はおるな」
信長は今度は彼を呼んだ。

第四十話　桶狭間へ六

「来ておるな」
「はい」
すぐにだ。信長の言葉に応えてだ。梁田が来た。
「こちらに」
「今川の状況はわかるか」
「まず先陣は鷲津の砦にあり」
まずは先陣の話が為される。
「何重にも取り囲んでおります」
「丸根はどうなっておるか」
「そちらも囲まれております」
丸根もだとだ。梁田は信長に答えた。そのうえでだ。
彼はだ。今川の軍全体の陣についても話すのだった。
「その先陣が頭となりです」
「頭か」
「はい、蛇の頭です」
それだと話す梁田だった。今川の陣は蛇の頭だとだ。
「まさにです」
「蛇の頭じゃな」
「そうです、そして腹にです」
「今川の本陣があるか」
即ちだ。そここそがだ。
「蛇の心臓じゃな」
「桶狭間にあります」
そこだというのだ。心臓の位置はだ。
「そこで今川は陣を張っております」
「やはりあの場所か」
桶狭間と聞いてだ。信長はだ。

面白そうに笑ってだ。こう言うのだった。
「あそこは休みやすい場所じゃ」
「そうですね。山と山の間で窪みになっていますから」
「休むにはよい。しかしじゃ」
そうした場所だからこそというのだ。信長は楽しげな笑みを浮かべて話していく。
「あそこには多くの兵は置けぬ」
「そしてそこに」
「向かうとしよう。祈願の後でな」
それは忘れなかった。祈願はだ。
そしてそのうえでだった。彼はだ。
あらためてだ。梁田に話すのだった。
「出羽、御苦労だった」
「有り難き御言葉」
「あの場所に来ると思っておった」
またこう話す信長だった。その桶狭間についてだ。
「休むのあそこしかないからのう」
「では殿、祈願の後に桶狭間に」
「そちらに向かい」
「そうしてですか」
「今川の本陣をすぐに襲う」
そうするとだ。信長は家臣達に話すのだった。
「わかったな」
「だからですか」
「鉄砲も長柄槍もいらないと」
「そして弓も」
「一気に攻めて一気に勝つ」
信長は簡潔に述べた。
「そうするぞ」
「畏まりました」

「そして勝ちを」
「我等の手に」
「この戦はじゃ」
信長は家臣達に言う。
「必ず勝つ」
「勝てるのではなくですか」
「勝つのですね」
「負ける根拠がない」
こうまで言ってみせるのである。
「何一つとしてな。それではじゃ」
「今よりですな」
「熱田に祈願を」
こうしてであった。信長は家臣達と共に戦の勝ちを祈願するのだった。そして丁度その頃だ。遠く西の安芸においてだ。白い顎鬚を生やし緑の服を着た老人がだ。夜空を見上げて言うのであった。

第四十話　桶狭間へ七

「ふむ。これはじゃ」
「殿、一体何が」
「何が起こりましたか」
「将星が一つ大きく輝きだした」
こう周りの者に言うのである。周りも皆緑の服だ。
「それも一際な」
「といいますとどの星ですか？」
「それでは」
「あの星じゃ」
老人はその空のだ。青く強く輝く星を指差してみせた。その星だというのだ。見ればその星はだ。確かにかなり大きく見えるものだった。
その星を見てだ。老人の周りの者達も言うのだった。
「むう、あれは確かに」
「かなり強い光ですな」
「これまで見たこともないような」
「大きな星です」
「東の空に輝いておる」
見ればだ。まさにその通りだった。
その青い星は東の空で大きく輝いていた。そうしてだ。その周りにも無数の星達がある。どれも青い光を放っているのが見える。
その星達を見ながらだ。老人は話していくのだった。
「どうやら。勝つな」
「勝つというのですか」
「近々東で大きな動きがありだ」
それがだ。どうなるかというのだ。
「ここにも伝わるな」

「安芸にもですか」
「この国までにも」
「そうじゃ。近いうちに伝わる」
何処で何が起こってもだ。話は伝わって来る。戦国の情報の伝達もかなり速いのだ。それはまさに風の如しなのである。
「大きな話がな」
「左様ですか。大きなことがですか」
「東で起こりますか」
「そういえば」
ここで周りの者の一人が言った。
「あの星の色は青ですが」
「わかったな」
「はい、青といえば尾張です」
この者はこう言うのだった。
「織田です」
「そうじゃ。織田じゃ」
まさにだ。その織田だとだ。老人は言うのである。
「織田が大きな戦に勝つぞ」
「といいますと今川ですか」
「丁度今川が兵を起こしましたが」
「その今川に勝つ」
「そうなりますか」
「うむ、そうなるな」
また言う老人だった。
「それもただ勝つだけではない」
「そこから大きなものを得る」
「そうした戦になりますか」
「そうじゃ。なる」
まさにだ。信長は勝ちだ。そこから途方もないものを手に入れるというのだ。

こう話してだ。老人はだ。次にこんなことを言うのだった。
「我が毛利もだ」
「はい、我等も」
「我が家も」
「このわし。毛利元就もじゃ」
己の名もここで言うのだった。
「もう一つ大きな戦に勝つとするか」
「陶、大内の次は尼子」
「あの家ですな」
「出雲を手に入れる」
尼子の本拠地であるだ。その国をだというのだ。

第四十話　桶狭間へ八

そしてだ。元就はだ。その目に剣呑なものを宿らせてだった。家臣達に話した。

「その為に今まで手を打ってきたな」

「はい、新宮党を尼子自身に除かせ」

「そして国人達を味方に引き入れ」

「石見も陥としました」

「あの銀山も手に入れましたし」

石見の銀山だ。そこも手に入れたというのだ。

「尼子の力を弱めてきました」

「今やあの家には昔日の勢いはありません」

「さすれば今攻めれば」

「以前の様に苦戦はしませんな」

「まだ手は打っておくがな」

元就はその剣呑な光を放つ目で話すのだった。

「尼子の家臣達には刺客を放ちじゃ」

「毒もですな」

「それも盛っていって」

「戦をせずともだ」

ここからがだ。まさに元就だった。彼は戦よりもだ。謀の男なのだ。それにより安芸を手中に収め陶、大内を滅ぼし今尼子も追い詰めているのだ。その謀は天下随一とまで謳われている。

その彼がだ。言うのだった。

「謀を上手く使えばじゃ」

「それで多くのものが手に入りますな」

「戦わずとも」

「戦えば負けるやもしれぬ」

その可能性は常に皆無ではない。戦では何があるかわからない。

「だからじゃ。それはしないに越したことはない」
「それよりも謀」
「それですな」
「効く相手と効かぬ相手がおるがな」
そうしたこともだ。元就はわかっていた。そこまで見極められるというところがだ。彼が一代の謀略家と言われる由縁であった。
「陶や尼子には効く」
「これまでの様にですな」
「そして大内も」
「ああした者達には使えるのじゃ」
彼等にはだというのだ。
「しかしじゃ。織田にはどうか」
「うつけだと評判ですが」
「それでもですか」
「間違いなくうつけではない」
そのことはすぐに否定したのだった。元就にはわかることだった。
「あの男はじゃ」
「では、です」
「あの男は蛟龍ですか」
「そうなるのですね」
「そうじゃな。蛟龍じゃな」
まさにそうだというのだ。蛟龍だというのである。
「それじゃ」
「ではうつけというのは」
「その見方は誤りだと」
「殿は思われますか」
「すぐにその言葉はなくなる」
信長をうつけと評するその言葉はだというのだ。
「そしてそのうえでじゃ」
「織田の勢力の伸張を見る」

「そうなりますか」
「おそらく織田は」
どうなるか。元就の話が続く。
「今川を退けじゃ」
「さらにですか」
「そのうえで」
「左様、伊勢と美濃を手に入れる」
その二国をだというのである。
「そうなれば後は」
「上洛でしょうか」
「それになると」
「そして都の周りの国も全て」
どうなるかというのだ。その辺りの国々もだ。
「あの男のものとなるであろうな」
「では織田は天下を望むと」
「そこにまで至りますか」
「そこから先じゃな」
元就はここまでは読んでみせた。しかしだ。

第四十話　桶狭間へ九

それから先についてはだ。こう言うのであった。
「だが。問題はじゃ」
「それからですか」
「上洛して都とその近辺の国々まで手中に収め」
「それからですか」
「そこまで力を伸張させれば」
また言ってみせる元就だった。
「天下は手に入れられると思うな」
「はい、そう思います」
「おそらく兵は十万を優に越えますし」
「持っている力も尋常なものではなくなります」
「さすれば」
「力を手に入れてもじゃ」
それだけではない。そうした口調だった。
「それでもそれは武家の力じゃ」
「といいますと」
「朝廷ですか」
「そちらですか」
「朝廷についてはじゃ」
元就はその存在についてはだった。
あまり深刻なものを見ずにだ。己の家臣達に話した。
「織田はそれ程困らぬじゃろうな」
「あの木曾義仲が苦しめられた朝廷にはですか」
「大丈夫なのですか」
「織田家は前々より朝廷に寄進もしておる」
信長の父信秀の代からだ。何かあれば寄進をしているのだ。その為織田家は朝廷とは中々親密な関係にあるのである。いい意味でだ。

「そして朝廷のことも知っておる」
「そういえば織田家は最初は神主でしたな」
「それがはじまりだった」
そのことは元就も知っていた。織田家のはじまりもだ。
「神社は朝廷の縁じゃからな」
「ですな。朝廷はその元締め」
「それが皇室ですから」
「確かに朝廷の勝手は許さぬだろう」
この辺りは武門としてだった。鎌倉幕府や室町幕府と同じだった。
もっとも室町幕府は次第に朝廷、そして貴族達と同化していったが。
「だが。それでもだ」
「朝廷を知っており」
「そして親密でもある」
「さすればですか」
「朝廷には困りませんか」
「そうじゃ。ただしじゃ」
朝廷には安心できてもだ。それでもだというのだ。
「その他にもある」
「国人達でもないですな」
「織田家は国人もよく取り組んでいますし」
己の直臣としその領地も検地等で組み入れていっているのだ。信長はこの辺りも抜かりがなかった。
「では他はといいますと」
「それは」
「寺じゃ」
元就は言った。それだとだ。
「あの辺りには本願寺の寺が実に多い」
「ではその本願寺とですか」
「織田家は」
「揉めるやも知れぬ。そうなればじゃ」

元就の話がだ。変わってきた。
その本願寺についてはだ。彼はこう言うのだった。
「あの者達の力は何じゃ」
「門徒の数にその金の力」
「そしてそれで手に入れた武具」
「そういったものでしょうか」
「それだけではない」
元就はこう家臣達に返した。
「あの者達の力はそれだけではないのだ」
「門徒だけではないと」
「そして金だけではないと」
「では他には一体」
「何があるのでしょうか」
「念仏じゃ」
それだとだ。彼は言うのだ。

第四十話　桶狭間へ十

「念仏の力じゃ」
「念仏のですか」
「といいますとそれは」
「どういった力でしょうか」
「信仰になる」
念仏をだ。そう言い換えたのである。
「それだ」
「あの信仰の力ですか」
「それが一向宗の力の源」
「最大の力なのですね」
「あの力にどうするか」
それを強く話す元就だった。
「織田信長。どうするかだ」
「それが最大の関門になるのですか」
「織田信長にとって」
「まさにですね」
「そういうことになる。まだ双方が衝突するかどうかはわからぬ」
そこまではだ。元就にもだった。言い切れなかった。
「しかし織田の覇業に本願寺が邪魔となれば」
「若しくは本願寺が己の持っているものを脅かされると思えば」
「その時点で、ですね」
「双方は」
「殺し合う」
「その場合はかなり血生臭い戦になる」
元就はそれは絶対というのだ。
「間違いなくな」
「そういえば越前ではかなり恐ろしい戦になっていますね」

「朝倉との戦は」
そのことはだ。彼等も知っていた。それだけではなかった。
「近畿でも時折起こっていますし」
「越後でもまた」
「その近畿が問題だ」
そこがだというのだ。まさに近畿がだ。
「織田は間違いなく近畿も手中に収めようとするが」
「その近畿で本願寺とぶつかる恐れがありますか」
「あの場所で」
「石山もある」
元就はその地を指し示した。
「石山については知っておろう」
「はい、まさにその本願寺の本拠地です」
「城です」
「あの場所こそが」
「その近畿よ」
何度もだ。その近畿が話されるのだった。
「織田の天下がどうなるかはだ。本願寺次第だ」
「本願寺とぶつかればその天下が揺らぐ」
「そうなのですな」
「本願寺に比べれば武田も上杉もどうということはない」
今天下でその精強さを言われている両家ですらだというのだ。
「両家は確かに強く家臣達もまとまっているがだ」
「本願寺の様な念仏の力はない」
「左様ですね」
「信仰はありませんか」
「そういうことじゃ。この国にあるのは大名だけではない」
このことが大事なのだった。天下にあるのはだ。
大名だけでなく他にも様々な勢力があるのだ。そしてその中にはだ。信長を闇から狙う、そうした者達もいた。だが元就はその彼等

には気付いていない。しかしだった。
夜の空を見ながらだ。また言ったのである。
「夜の闇が妙じゃな」
「夜のですか」
「闇がですか」
「端の部分が蠢いておる」
こう言うのである。
「この様なことははじめてじゃ」
「闇が動く」
「妙ですな」
「今は動いてはおらぬな」
夜空を目をこらして見ながらの言葉だった。
「わしの気のせいかもな」
こう言ってだ。彼は己の城に帰った。家臣達もだ。
彼は信長の勝ちを読み取った。そしてそれからのことも。夜空の青い将星の輝きは確かに強くなっていた。だが同時にだ。闇も蠢いていたのだった。

第四十話　完

２０１１・５・４

第四十一話　奇襲その一

第四十一話　奇襲

鷲津ではだ。相変わらずであった。

砦に篭もる織田の者達は戦い抜いている。その強さは。

「強いのう」

「全くじゃ」

「何をしてもその都度返してきおる」

三河の兵達がだ。呆れながら言うのである。

彼等は砦を二重三重に取り囲んでいる。しかしだった。

砦は一向に陥ちる気配はなかった。全くだった。

「最初はすぐに陥ちると思ったがのう」

「これでは一週間は持ち堪えるぞ」

「いや、それ以上だろ」

「このままではな」

こうだ。彼等も話すのだった。

「この状況では中々陥ちんぞ」

「どうしたものか」

「その間に織田の援軍が来ればな」

「厄介なことになるぞ」

その危惧を感じていた。夜囲みながらだ。そしてだ。

それは元康も同じだった。彼は今は己の家臣達と共にいた。そのうえでだ。

夜の陣中でだ。彼は言うのだった。その顔を篝火が照らし出している。その炎の灯りを頼りにだ。彼は家臣達も見ているのである。

見ればどの顔も知っている。そしてしかと彼を見ている。どの目にも曇りはない。そこに松平家があると言ってもよかった。

その松平家の中でだ。彼は言うのである。

「鷲津は必ず陥とす」

「はい、そうですね」
「そうされなければです」
「我等松平の名が廃ります」
家臣達もだ。口々に言うのだった。そしてだ。
「殿、ここはです」
「砦の一方に集中的に攻撃を仕掛けです」
「そのうえで突破しましょう」
「そうしては如何でしょうか」
「いや、それはだ」
しかしだ。元康はだ。彼等のその言葉を容れなかった。
そしてだ。こう言うのだった。
「それをすれば兵達がだ」
「多く倒れる」
「そうなると」
「戦はこの砦だけではないのだ」
彼は先も見ていた。さらに先をだ。
「ここで無理をすべきではない」
「だからですか」
「ここはまだ一気には攻めない」
「左様ですか」
「都まで行くのだ」
元康は鷲津だけを見てはいなかった。そこから先も見ていた。
そしてその先を見据えながらだ。彼は己の家臣達に話したのである。
「だからだ」
「ここで損害を出す訳にはいかない」
「ではここは」
「どうされますか」
「こうして囲んでいればたがて兵糧が尽きる」
元康が言うのはこれだった。

「さすれば砦は自然と陥ちるな」
「はい、食うものがなくなればです」
「人は何もできませぬ」
「ではその様にですか」
「ここは」
「そうする」
また言う元康だった。
「待つことにしよう」
「ですが殿」
家臣の一人が元康に問うてきた。
「今川様がそれでは」
「御怒りになられるというのだな」
「はい、それは大丈夫でしょうか」
「安心するのだ。既に雪斎殿とは話をしてある」
もう一人の先陣にして他ならぬ義元の師のだ。彼にだというのだ。

第四十一話　奇襲その二

「そのことはな」
「では、です」
「そうだ。このまま兵糧攻めにしてよい」
「畏まりました。それでは」
「このまま囲んで。そうして兵糧が尽きるのを待ちましょうぞ」
こうしてだった。元康は鷲津を兵糧攻めにすることにしたのだった。
しかしだ。その中でだった。彼はこうも思うのだった。
「だが。気になるのはだ」
「気になるといいますと」
「それは一体」
「何がでしょうか」
「やはり。織田殿だ」
他ならぬだ。信長だというのである。
「あの方が何をされるかだ」
「そのことがですか」
「やはり。清洲に篭もったままではないと」
「何か仕掛けてくるというのですね」
「殿はそう思われていますか」
「うむ、織田殿が篭城されるとは思えぬ」
いぶかしむ顔での言葉だった。
「だから。きっとだ」
「では美濃との境にいる主力を呼び戻し」
「そのうえで、ですね」
「我等と戦う」
「そうしてきますね」
「それが妥当か」

元康もだ。そう考えているのだった。
「一万を優に超える数になるからな」
「それだけの数があればですね」
「それなり以上に戦えます」
「この大軍とも」
「さすればですね」
「そう思うがな。果たしてどうされるか」
元康はさらに述べる。
「それが気になるな」
「うつけ殿とも言われてますが」
家臣の一人がよく言われていることを話した。
「そうした方では」
「違う」
それはだ。元康は断言した。絶対にそうではないとだ。
「織田殿はうつけではない」
「断じてですか」
「左様。間違ってもそうではない」
うつけではないとだ。話すのである。
「あの方は底知れぬ方ぞ」
「ではその織田殿がこのままではないと」
「そして何かをしてくると」
「その何がわからないというのですね」
家臣達も話していく。そしてだった。
そうした話をしてからだ。元康は言うのだった。
「さて、夜も遅い」
「それではですね」
「これで、ですか」
「話を終えるとしよう」
実際にこう話す元康だった。
「今はな」

「はい、ではまた明日に」
「集りましょうぞ」
「そうするぞ」
こう告げてだった。元康も家臣達もそれぞれの場に戻り休むのだった。元康はこの時にだ。己の小姓達を見てふと思うのだった。
「三河の者達は頼りになる」
「有り難きお言葉」
すぐに小姓達が応える。謹厳そのものの態度で控えている。
「そなた達がいてこそじゃ」
「我等がですか」
「いてこそなのですか」
「そうじゃ。わしがあるのだ」
こう話すのである。
「今のわしがな。だが」
「だが？」
「だがといいますと」
「忍も欲しい」
難しい顔での言葉だった。

第四十一話　奇襲その三

「忍の者も欲しいのだがな」
「忍の者もですか」
「配下にですか」
「うむ、誰かおらぬものか」
また言う元康だった。
「織田殿には既に忍がおる」
「あの鷲津にいるですか」
「あの者ですか」
「他にもおる」
滝川のことに他ならない。彼は今や織田家でも屈指の者になっているのだ。
「それが織田殿の力の一つでもあるのだ」
「その尾張のですか」
「今我等が戦っている」
「その織田殿ですか」
「そうじゃ。忍がいるといないでは全く違う」
元康はまた言った。
「だからわしも」
「忍もまたですか」
「左様。欲しい」
その望みを口にする。
「是非共な」
「しかしです」
「この三河には」
忍の里はない。三河には武士はいても忍はいないのだ。
だからこそ余計にであった。元康は望むのだった。
「誰か来ればだ」

「雇われますか」
「忍ならば」
「無論その質にもよる」
それを求めるのは忘れていなかった。松平の臣はただ団結があり忠誠心が篤いだけではないのだ。その質もだ。かなりのものなのだ。
元康はその彼等の主としてだ。それで話すのだった。
「それなりの忍でなくてはならない」
「我が松平に相応しい」
「それだけの忍をですな」
「何処かにいればいいのだがな」
こうも言う元康だった。
「若しくは。探すか」
「ですが探すとなるとです」
「今川殿の目がありますので」
流石に今川の下にいてみだりに家臣を抱えるのははばかれる。いぶかしまれることは言うまでもない。だからそれはというのである。
「それはです」
「残念ですが」
「わかっておる」
元康もだ。それはわかっていた。
それでだ。こう述べるのだった。
「では。待つしかないか」
「その時が来るのをですか」
「忍を雇える時を」
「その時は来るだろう」
その時までだ。どうするかというのだ。
「待つ。暫くな」
「左様ですか。そのこともまた」
「待たれますか」
「そうするとしよう」

彼は今は待つのだった。戦のこともこれからのこともだ。待ちそのうえでだ。時期を待つのだった。彼が動けるその時をだ。

織田軍は熱田でだ。戦勝の祈願をした。信長が先頭に立ち祈りを捧げる。彼の後ろに二千の青い鎧と兜の兵達が集っている。

信長の祈りは深く強いものだった。頭を深く垂れている。それが終わってからだ。

彼はだ。頭を上げた。それからだ。

己の兵達に身体を向けてだ。こう言うのだった。

「ではだ」

「はい、それでは」

「今より」

「今川を討つ」

まさにだ。そうするというのである。

「そうする」

「わかりました。それでは」

「こちらから攻めて」

「そうだ。今から一気に討つ」

信長はまた兵達に告げた。

第四十一話　奇襲その四

「この戦、一瞬で決まるぞ」
「一瞬ですか」
「それで」
「狙うは一つぞ」
あえて二万五千の大軍については言わなかった。
「敵の総大将義元の首一つぞ」
「その首を討ち」
「そのうえで」
「討てば恩賞は思いのままだ」
戦の功において当然のことだった。敵の総大将の首を取る、これ以上の功はない。それを挙げればだというのである。
「よいな、その場合はだ」
「では是非共」
「今川殿の首を」
「この手で」
「それで殿」
ここで、だった。不意にだ。
可児がだ。信長にこんなことを話してきたのだった。
「今川殿の首を取れは褒美は思いのままですね」
「そうじゃ。何でも好きなものを与えるぞ」
まさにそうだというのだ。その信長にだ。可児はさらに言ってきた。
「ではです」
「では。何じゃ」
「生け捕りにしてはどうでしょうか」
こう言うのであった。
「今川義元殿をです」

「何っ、生け捕りにか」
「義元殿を生け捕りにすれば。首を取るより大きいのでは」
「それができればな」
そのことを前提にしてだ。信長も応えた。
「さすれば今川の軍をその場で降伏させられる」
「左様です。さすれば」
「しかし容易ではない」
信長はぴしゃりとした口調で可児に返した。
「敵を生け捕りにするのがどれだけ難しいかはそなたもわかっておろう」
「確かに。首を手に入れるのは容易いものです」
可児にとってはそうだった。伊達に笹の才蔵と呼ばれている訳ではない。彼は己が取った首に自分の功を示す為にその首の口に笹を入れるのだ。だから笹の才蔵と呼ばれているのだ。
「生け捕るのはそうはいきませぬ」
「しかしあえてそれを言うか」
「無論、無理なら首を取るべきです」
彼もその場合はというのだ。
「しかし。狙えるならばです」
「生け捕りをすべきと申すのだな」
「さすればどうでしょうか」
「できる者がおればやってみよ」
信長は可児のその言葉にこう返した。
「できるならばだ」
「あくまでその場合は」
「左様。まあできるとすれば我が家でもそうはおらぬな」
いないとは言わなかった。できそうな者がいることはだ。信長はすぐに察した。
しかしその名を挙げればその者が功を焦ると見てだ。彼は彼等の名前をここでは出さなかった。そうしてそのうえでまた話すのだっ

た。
「では義元を生け捕りにすればだ」
「はっ」
「その時は」
「望むままのものを与える」
こう言うのであった。
「その者の望むままのものをだ」
「それをですか」
「下さいますか」
「できればだ。わかったな」
「はっ、それでは」
「是非共」
「何度も言うが無理をするな」
このことは念を押す信長だった。
「決してだ。少しでも無理と思えばだ」
「首を取る」
「そうせよというのですね」
「そうじゃな。義元の他にはじゃ」
生け捕りにするのはだ。誰かというのだ。

第四十一話　奇襲その五

「嫡男の氏真じゃな」
「その二人ですか」
「捕らえるべきは」
「他は気にせず首を取れ」
二人以外の主だった将はそうせよというのだ。
「よいな」
「嫡男の氏真殿もですか」
「生け捕りにせよ、ですか」
「余裕があれば」
「当主だけでなく嫡男もおるとはな」
それがだ。どうかというのだ。
「両方捕まえればそれで終わりじゃ」
「今川がですな」
「それにより」
「うむ、確かに家にはまだ跡を継げる者がおる」
今川家にも人がいる。しかしだというのだ。
「だが。それでもじゃ」
「当主と嫡男の双方に何かあれば家はですか」
「危うくなりますか」
「そうじゃ。一度に何かあれば」
どうかと話すのだ。信長はそこまで見ていた。
「それで混乱が生じる」
「そしてその隙にですか」
「他の家に攻められる」
「そうなりますか」
「攻められるだけではない」
それだけではないというのだ。

「家の中でも騒動が起こるのだ」
「どちらにしてもですか」
「家には騒動が起こりますか」
「双方を失えば」
「当主と嫡男に」
「若し今川の双方がそうなれば」
捕らえられるか首を取られるか、そうなってしまえばというのだ。
「おそらく武田が来る」
「武田家がですか」
「あの家が甲斐から来ます」
「そうなりますか」
「武田の嫡男である義信殿の正妻はあれではないか」
信長は話す。政の話をだ。
「義元の娘じゃな」
「ではそれを口実にですか」
「駿河に攻め入る」
「そうしてきますか」
「うむ、そうなる」
信長はそこまで読んでいた。彼の目はまさに千里眼だった。
「実質主のいなくなった駿河にな」
「では今川殿を倒せば周りが動きますか」
「それもありますか」
「そうじゃ。そして我等もじゃ」
織田家もだというのだ。
「大きく動くぞ」
「では。その動く為に」
「今よりですね」
「行きますか」
「戦の場に」
「うむ、出羽よ」

ここで梁田を呼ぶ。彼に声をかけたのだ。
「今川の本陣は何処にある」
「桶狭間です」
そこにあるとだ。梁田はすぐに答えた。
「あの場所に陣を張っております」
「ははは、やはりあそこか」
桶狭間と聞いてだった。信長は顔を崩して笑った。そしてそのうえでだ。彼はその笑顔でだ。こう言うのだった。
「あそこに本陣を張ったか」
「桶狭間といえば」
「あの山の間にあるですか」
「あの狭い場所ですな」
「そうじゃ。あの場所だろうと思っておった」
そのだ。桶狭間だというのだ。
「あそこしかないからのう」
「確かに。あの場所はあの辺りでは休むのに好都合です」
「あそこ以外にはこれといって休むのに相応しい場所はありません」
「では。あそこにですか」
「今川殿は入りましたか」
「そうじゃ。あそこに入ればだ」
どうなのか。それも話す信長だった。

第四十一話　奇襲その六

「一気に攻められるぞ」
「はい、確かに」
「あの場所に入ればです」
「一気に攻めてそのうえで」
「倒すことができます」
「今川の軍勢は縦に長く伸びております」
梁田がまた言ってきた。
「本陣にいるのはです」
「五千程度じゃな」
信長はその数まで述べた。
「多くてもな」
「二千と五千」
「やはり数はかなりですが」
「それでもここはですな」
「攻められますな」
「うむ、奇襲を仕掛ければ何ということはない」
こう言うのである。
「そうすればな」
「しかし気付かれればです」
ここで言うのは林通具だった。
「それで終わりですが」
「奇襲を仕掛けるにはじゃな」
「はい、それは注意せねばならぬかと」
「わかっておる」
信長は彼のその言葉にあっさりと返した。
「無論気付かれるつもりはない」
「確かに。気付かれれば終わりです」

林通具は生真面目な言葉で返した。
「ですが敵も愚かではありませんから」
「そうじゃな。既に道はじゃ」
「わしが知っております」
ここでも出て来る梁田だった。
「今川の軍に見つからぬ道は」
「ではそこを通りじゃな」
「はい、それにです」
さらにだとだ。梁田は言うのであった。
「それだけではありませぬ」
「そろそろか」
「そろそろでございます」
これはだ。二人だけの話だった。
しかしそれをしてだった。信長はだ。
あらためてだ。家臣達にこう話すのだった。
「それではじゃ」
「今からですか」
「その道を通り」
「そのうえで今川の本陣まで一気に」
「決まりじゃ。勝敗は一瞬で終わる」
信長は毅然とした声で答える。
「我等の勝ちじゃ」
こう言ってであった。信長が真っ先に馬を駆りだ。
そのうえで梁田が案内するその道を通る。それが尾張の者でもそうは知らない道だった。その道をあえて通りであった。
桶狭間に向かう。その桶狭間では。
義元が氏真や本陣にいる家臣達と共に陣を張っていた。その中で、であった。
彼は主の座に座しそのうえで家臣達に問うのだった。
「鷲津は囲んだままじゃな」

「はい、左様です」
「その通りです」
こうそれぞれ答える家臣達だった。義元も家臣達もそれぞれ鎧に陣羽織だ。幕には円に二つの線の今川の家紋が描かれている。
その中にいてだ。彼等は兜を着けずだ。烏帽子だけでいて話すのだった。
「雪斎殿と松平殿は二つの砦を囲みです」
「そのまま兵糧攻めにしております」
「ふむ。そうなのか」
話を聞いてだ。義元は満足した顔で応えた。

第四十一話　奇襲その七

そしてそのうえでだ。家臣達にこう言うのであった。
「焦ることはない」
「ではこのままですか」
「砦は囲んだままにして、ですか」
「兵糧攻めを続けますか」
「それでよい。そこに若し織田の主力が来れば」
その時はだ。どうするかも言う彼だった。
「その織田の軍と戦うまでよ」
「織田は一万五千」
「それに対して我等は二万五千」
「数は我等が優位です」
「負けはしませんな」
「ははは、負ける筈がない」
義元はその口を大きく笑って話した。
「織田を破りそのうえでじゃ」
「あのたわけを殿の御前に引き出し」
「そのうえで臣下にしますか」
「麿の寛容を見せてやるのじゃ」
あえて殺さずだ。それを見せて信長を圧倒しようというのだ。
そのことを狙ってだ。彼は話すのだった。
「そして尾張一国をじゃ」
「手に入れますな」
「そうしてそのうえで」
「そうじゃ。美濃も攻め取る」
その国もだというのだ。義元の狙いは尾張だけではなかった。
美濃まで手に入れだ。そして遂にはだった。
「さすれば最早都は見えるのう」

「はい、尾張と美濃の兵も手に入れております」
「それならば」
「まず尾張の兵を入れて四万となる」
本来の今川の兵二万五千と合わせてである。
「それで美濃に攻め込めるのう」
「はい、斉藤は二万」
「二倍の戦力です」
「それならば織田よりも対するのは容易いです」
「簡単な足し算じゃ。そして斉藤も入れて六万となる」
義元の中でだ。兵の数が合わさっていく。それは彼の中では決まっていることだった。
そしてだ。彼はこうも言うのだった。
「しかし竹千代じゃが」
「松平殿ですか」
「あの御仁は」
「予想以上じゃな」
そうだとだ。満足した顔で言うのであった。
「あそこまで見事な将じゃとな」
「和上が仰っていた通りですな」
「今川を支える柱の一つとなります」
「まだ若いというのに」
「和上は確かに頼りになる」
義元は彼には絶対の信頼を置いていた。彼にとって雪斎は師であり後見人である。そうした意味で絶対の存在と言っていいのだ。
それに加えてだった。元康もだというのだ。
「そこに加えて竹千代ともなれば」
「今川は磐石となりますな」
「都を手に入れ六万以上の兵も手中に収める」
「さすればその我等には」
「最早敵はいませんな」

「そうじゃ。麿は将軍となり」
将軍の継承権を持っている。それならばだというのだ。
「天下を治めるぞ」
「はい、それでは」
「今より」
こう話してであった。彼はこれからのことを上機嫌で考えていた。
その彼にだ。嫡男の氏真が言ってきた。
「して父上」
「うむ、何じゃ」
「この辺りの百姓達がです」
彼等がだ。どうしてきたかというのだ。
「酒を持って来ました」
「ほう、酒をか」
「是非飲んで欲しいとのことで」
「ほほほ、麿が新しい主になるからじゃな」
それでだ。酒を持って来たというのだ。

第四十一話　奇襲その八

「それで機嫌を取りにじゃな」
「その様です」
「その様なことをせずともじゃ」
義元は上機嫌なまま話していく。
「麿は寛容じゃがのう」
「そうですな。父上は民に関しては」
「大事にせねばいかん」
元々戦よりも政の者だ。それならばだった。
「民を粗末にする者に国を治める資格はない」
「はい、そうですね」
「それは守らねばならん」
「ですな。確かに」
「そなたもわかっておるな」
我が子への言葉だった。
「そのことは」
「はい、それは」
「それがわからぬ者は天下に何かをしてはならぬ」
また言うのだった。
「ましてや天下を治めるなぞはじゃ」
「なりませぬな」
「六代の将軍であったあの方を思い出すのじゃ」
足利義教だ。暴虐の人物と言われている。
「あまりにも苛烈で無慈悲であったのう」
「あの方ですな」
「そうじゃ。公方様ではあるが」
本来は言うことも憚れるがだ。それでもあえてだというのだ。
「あの方の暴虐はあまりじゃったのう」

「左様ですな。あれは無体にも程があるかと」
「ああしたことをしてはじゃ」
どうかというのだ。その将軍の様なことをしてはだ。
「やがて家臣からも民からも見放される」
「そうなるのは必定でございますな」
「うむ、第一に天からも見放される」
「そうなればしまいですな」
「何もかものう。だからよ」
「国の主は民を大事に扱うべきと」
将軍義教の暴虐は守護や直臣、寺社や女房達に及ぶものだった。しかしそれがあまりに酷くだ。民も彼を至極恐れていたのである。
そうなってはならぬとだ。義元は話すのである。氏真もそれを聞いている。
「そのことを肝に銘じて」
「何ごともしておくのじゃ」
「わかりました」
「さて、では今はじゃ」
どうするかというのであった。義元は真面目な顔から明るい顔になってだ。そうしてそのうえでこう周りに話した。
「ではよいな」
「はい、それでは」
「今より酒をですな」
「飲みますか」
「勝ちの前祝いじゃ」
それでだ。飲むというのである。
「よいな。楽しくやろうぞ」
「では和歌も歌い」
「連歌もされますか」
「よいのう」
和歌や連歌と聞いてだ。余計にだった。

義元は機嫌をよくさせた。彼は京文化が好きでだ。和歌や連歌といったものは大好きなのだ。無論他のものもかなり愛好している。
そのうえでだ。彼はこう周りに話した。
「では連歌をやろうぞ」
「飲みながらですな」
「そのうえで」
「そうじゃ。歌えなかった者は罰としてそこで杯を空ける」
連歌の遊びでの罰をだ。そのまま入れているのだ。
「そうするぞ」
「ではそのうえで」
「酒を楽しみつつ連歌としますか」
「これより」
「そうするとしよう。さて、織田を従えさせたならば」
その場合についてだ。義元は機嫌のいいまま話していく。
「あの家は茶をよくしておるというが」
「そうですな。あのおおうつけはかなり茶に凝っておる様です」
「その様です」
「では清洲に入れば茶を楽しむとしよう」
まさにだ。その茶をだというのだ。

第四十一話　奇襲その九

「してあのうつけに茶を淹れさそう」
「茶器はどうされますか」
「そちらは」
次第に茶器も刀や馬の様にその価値が認められてきていた。中には一国に匹敵する価値があると言われている茶器さえあるのだ。
その茶器についてだ。今川の家臣達は主に問うのだった。
「やはりそれもですか」
「召し上げられますか」
「そうされますか」
「そうじゃのう。命は助けるのじゃしのう」
それならばだというのだ。義元はその黒く染めた歯を見せながら話す。
「それ位はよいじゃろうな」
「織田の茶器を殿のものに」
「そうされますか」
「それも楽しみになってきた」
もう既に杯は手にしている。家臣達もだ。そのうえでの言葉だった。
「では。その時はじゃ」
「織田の茶器も殿のものに」
「そうなりますか」
「ははは、よいことじゃ」
また言う義元だった。
「天は麿を導いておるのう」
「左様ですな。まさに」
「幕府を継がれますし」
血縁だった。とにかく今川家は足利将軍家の縁戚であり将軍の継

承権まである。そのことが義元の誇りの源にもなっているのだ。
その誇りのままにだ。彼は言うのであった。
「そうじゃ。麿こそが天下を治めるに相応しい者ぞ」
「ですな。この乱れた世を収め」
「戦を終わらせられる方です」
「その通りじゃ。では飲もうぞ」
ここでだ。義元は本格的に飲もうとした。しかしだ。
その時にだ。不意にだった。
「むっ、これは」
「雨？」
「そうだな、雨だな」
「これは」
急にだ。上からぱらぱらときだした。今川の者達はそれを見てまた言う。
「ここで雨とは」
「また急ですな」
「全く以て」
「よいではないか」
義元の上機嫌は雨が降っても変わらない。
彼は杯を手にしたままだ。こう家臣達に言うのであった。

第四十一話　奇襲その十

「雨は恵みの雨ではないか」
「だからでございますか」
「この雨もいい」
「左様ですか」
「その通りじゃ。それにじゃ」
言葉をさらに加える。その言葉は。
「雨の中の酒宴もよいではないか」
「それもですか」
「よいですか」
「風流ではないか」
こう家臣達に話すのである。
「雨の中の酒もじゃ」
「そうですな。言われてみればです」
「確かに雨の中で酒というのも」
「またいいものです」
家臣達も主の言葉に頷く。そしてだった。
氏真がだ。ここでこんなことを話すのであった。
「暑かったことじゃ。雨で一気に涼しくなるぞ」
「それもありますな」
「若殿の仰る通りです」
家臣達はまた笑顔になってだ。そうしてだった。
その笑顔でだ。彼の言葉に頷くのだった。
「涼の中での酒は格別」
「それならばですな」
「戦の前祝いのこの酒」
「楽しみましょうぞ」
「さて、ではよいな」

ここでまた言う義元だった。
「麿から。歌うぞ」
「畏まりました。それでは」
「殿の歌を御願いします」
「歌はよい」
まさにだ。和歌をこよなく愛する義元らしい言葉だった。
そのうえでだ。彼は歌うのであった。
そのうえで義元は歌い酒を楽しんでいく。彼は今上機嫌であった。
だがそれでもだ。その時だ。
信長はその雨を見てだ。こう家臣達に話すのだった。
「これこそ天啓じゃ」
「天啓ですか」
「それですか」
「大雨じゃ」
見れば信長が話すそばからだった。雨はだ。
すぐに強くなりだ。そうして土砂降りとなった。
その雨の中でだ。彼は家臣達に話すのだった。
「この雨じゃ。前も碌に見えんな」
「確かに。見えなくなりました」
「これは今川からもですな」
「そうじゃ。見えなくなったわ」
まさにだ。それだというのだ。
「そしてそのうえでじゃ」
「そのうえで」
「といいますと」
「音もどうじゃ」
今度は音についての話だった。
雨は激しくなり雨音も凄まじくなっている。地面を泥にし池にさえなっている。その池にさらに降り注ぎだ。凄まじい音を放っていたのだ。

信長はその雨音の中でだ。家臣達に話すのだ。
「この音では気付かれぬな」
「左様ですな。この音では」
「到底見つかりません」
「ではこの雨がですか」
「我等の戦を助けてくれますか」
「だからこそ天啓じゃ」
まさにそうだというのだった。
「この雨は天啓じゃ」
「我等を勝利に導く」
「その天啓ですか」
「降ると思っておった」
雨の中でだ。信長は不敵に笑う。そのうえでの言葉だった。
彼はだ。言うのだった。
「この雨はな」
「降るとですか」
「思われていたのですか」
「殿は」
「左様じゃ」
信長は不敵な笑みのままで家臣達にさらに話していく。
「この季節の今の刻は雨が多いな」
「確かに。この辺りはです」
「とりわけそうです」
「だからじゃ。それであえてこの刻にした」
攻めるというのだった。信長はだ。
「出羽の調べを受けてな」
「かたじけない御言葉」
その梁田が応える。彼は土地勘だけでなくだ。そうした雨のことまで調べていたのだ。
「その通りになった。ではじゃ」

「はい、それでは」
「今よりですな」
「一気にですね」
「今川の本陣に」
「うむ、行くぞ」
信長は言った。そうしてであった。
織田軍二千は今川五千の本陣に向かう。一気にだった。
今まさに運命の戦がはじまった。信長は勝利を掴もうとしていた。
そしてそれがもたらすものもだ。手に入れようとしていたのであった。

第四十一話　完

２０１１・５・１１

第四十二話　雨の中の戦その一

第四十二話　雨の中の戦

信長率いる織田軍二千はだ。まさに一気にであった。

今川の本陣に突き進む。彼等のその姿は雨の中で見えない。しかも突き進んでいてもだ。

豪雨の音でだ。彼等の馬や足の音も聞こえない。何もかもがだった。

その中でだ。信長の声だけが聞こえる。彼は軍の先頭にいる。

「よいな、これよりじゃ」

「今川の本陣に入り」

「そのうえで、ですね」

「そうじゃ。勝つ」

今はだ。一言だった。

「よいな。そうするぞ」

「そして今川殿はですね」

「首を取る。そして狙えれば」

「生け捕りにですね」

「また言うが少しでも余裕がなければ諦めよ」

生け捕りにするというのはだ。そうしろというのだ。

「よいな。少しでもじゃ」

「わかりました。それではです」

「今川殿はそうします」

「そのうえで、ですね」

「まずは勝つことを考えよ」

それがだ。至上の命題だというのだ。信長はその勝ちを見てだ。

義元を生け捕りにすることも首を取ることも話したのである。

「一度もじゃ」

「ではそうします」

「何があろうともまずはです」
「勝ちを手に入れましょう」
「そういうことじゃ」
こう話したうえで、であった。信長はさらに突き進んでいく。そして遂にだった。
本陣が見えた。白い幕が雨で濡れて今にも崩れ落ちそうである。守っている兵達もだ。やけに少なかった。
「数が少ないですな」
「殆んどおりませぬな」
「雨を避けておるな」
「はい、どうやら」
「その様で」
「好都合じゃ」
それを見てだ。信長は言った。
そのまま駆ける。そうしてだ。
刀を手に。こう叫んだ。
「勝ちは我等のものぞ！」
「はっ、それでは！」
「今こそ！」
「今川を！」
「法螺貝を鳴らす必要はない！」
信長はそれはいいとした。
「よいな。我等の鎧兜は青ぞ」
「そして旗も」
「槍もですな」
「青くない者だけを狙え」
それが即ちだ。今川の者というのだ。
それを言ってだ。信長はさらにであった。
「そして。目指すはじゃ」
「今川義元殿」

「あの御仁を」
「そこまでわかっていればよい」
信長は確かな声で述べた。
「さすればじゃ」
「畏まりました」
「では」
こうしてであった。織田二千騎は一直線に今川の本陣に切り入った。まずはその白い陣幕が破られ倒されていく。それを見てだ。
今川の者達がだ。今更ながらに言う。
「むっ、何じゃ！？」
「何があった？」
「兵達が暴れておるのか」
中にはだ。こうした呑気な言葉も出て来た。

第四十二話　雨の中の戦その二

「全く。飲むなとは言わぬが」
「飲み過ぎるなというのに」
「今は仮にも戦をしておるのだぞ」
「それで暴れては」
というようにだ。彼等は呑気なものだった。
「仕方ないのう。止めるか」
「そして叱っておくか」
「そうじゃな。そうしよう」
「仕方のない奴等じゃ」
こう話してだ。声のする方に向かう。しかしだ。
そこにだ。豪雨の中からだ。
青い軍勢が来た。それは瞬く間に彼等を蹴散らしていく。
「な、何じゃ！？」
「何ごとじゃ！？」
「何が起こった！」
こうだ。今川の者達が驚きの声をあげる。
その彼等は青い軍勢に弾き飛ばされた。まさに為す術もなくだった。
そのうえで泥の上に尻餅をつきながらだ。呆然として言うのだった。
「な、何なのじゃ」
「青、青というとじゃ」
「織田か」
誰かが言った。
「織田なのか」
「馬鹿な、織田がどうしてここに来る」
「この桶狭間に」

「来る筈がない」
こうだ。彼等はそのこと自体を信じようとしなかった。
「まさか。この様な」
「主力は美濃との境にいる筈だ」
「それが何故瞬時にここに来る」
「いや」
ここでだ。尻餅をついている者の一人が言うのだった。
「まさか。清洲からこの桶狭間まで」
「何っ、二千でか」
「僅か二千で来たというのか」
「二万五千の我等と戦いに」
「この桶狭間に来たというのか」
「しかしあれは青い」
その青こそがだった。
「青は織田の色ぞ」
「ではあれば間違いなくか」
「織田の者」
「織田の軍か」
「そうじゃ。どう見てもじゃ」
そのことが確かめられる。しかしだ。
彼等は追おうにもだ。最早腰が抜けてしまっていてだ。動けなくなってしまっていた。最早本陣に向かって突き進む馬蹄の音を聞くだけであった。
しかしだ。その彼等に気付いてだ。
何とか迎え撃とうとする者もいた。彼等はその二千の軍の前に立とうとする。しかしだった。
その彼等にだ。織田の軍は。
「ええい、どけ！」
「邪魔だ！」
槍を振るいだ。左右に吹き飛ばすのだった。

それで彼等を退けていく。今川の者達は個々に向かうだけでだ。力にはなっていなかった。

だが騒ぎにだ。本陣も遂に気付いたのだった。

「むっ、まさか」

「あの声は」

「敵か！？」

「織田か！？」

それを察するとだ。すぐにであった。

「いかん、迎え撃つぞ！」

「殿に兜を！」

「兜をここに！」

義元の兜が持って来られた。八龍の五枚兜だ。黒に金の煌きを放つそれが持って来られだ。

義元に被せられる。そのうえでだった。

「殿、織田が来た様です」

「織田の軍がです」

「ううむ、信じられん」

立ち上がった義元は唸る様にして述べた。最早酔いは完全に醒めている。

第四十二話　雨の中の戦その三

「まさかここでか」
「はい、それでは」
「殿はここからお逃げ下さい」
「この場は我等が引き受けます」
「ですから一時」
「何を言うか」
義元はだ。逃げよという家臣達の言葉を一蹴した。そのうえでだった。
「麿とて武門の家の者ぞ。さすればじゃ」
「戦われますか」
「この場で」
「当然じゃ」
こう言うのであった。
「麿も戦うぞ」
「左様ですか。さすればです」
「我等もまた」
「殿と共に」
「ここで」
「では父上」
そしてだ。氏真もだった。
彼自身刀を抜き兜を被っている。そのうえで自身の父に言うのである。
「それがしもまた」
「御主も戦うというのじゃな」
「この剣の腕お見せ致す」
こう言うのである。
「免許皆伝のこの腕を」

「剣は一人を相手にするもの」
義元は戦うという我が子にだ。こんなことを言った。
「麿は弓の方がよいと言ったな」
「弓ですな」
「麿は東海一の弓取りと呼ばれておる」
その通り名がだ。そのまま義元の誇りになっている。
その誇りをあえて己で言ってからだ。義元はあらためてであった。
「だからそなたにも弓を勧めたがのう」
「ですがそれがしは」
「しかしこの雨ではじゃ」
弓はとても使えない。そういうことだった。
「ではじゃ。氏真よ」
「はい」
「その剣好きなだけ振るえ」
そうせよとだ。息子に告げた。
「よいな。そうせよ」
「畏まりました」
「さて。麿もじゃ」
義元自身もだ。どうするかというのだ。
見れば彼も刀を抜いている。そのうえで戦に向かうのだった。
織田の軍は遂に本陣の最後の幕を突き破った。そのうえでそれぞれ叫ぶのだった。
「義元殿は何処！」
「いざ尋常に勝負！」
「殿を御護りしろ！」
「何としてもこ防げ！」
織田軍の声とだ。今川軍の声が交差する。
そしてそのうえでだ。彼等は互いに剣を交える。
今川の将兵達は果敢に戦う。しかしであった。
織田の軍は強かった。少なくともこの二千の軍はだ。

誰もが勝ちだけを見ていた。最早それ以外には何も見ていなかった。

馬上からだ。徒歩のままでしかもつい先程まで酒を楽しんでいた今川の者達とは全く違っていた。まさに全員全てを賭けていた。

その中でだ。彼等は戦いだ。今川の者達をだ。

「どけ！」

「御主等に用はない！」

こう叫んでだ。彼等をその刀や槍で次々に弾き飛ばす。倒れ伏すのは今川の者達だけだ。

織田の軍勢の中には前田や佐々といっただ。母衣衆あがりの猛者達も多かった。彼等の活躍はとりわけ凄まじいものがあった。

前田は馬上から槍を左右に振るいだ。今川の兵達を薙ぎ倒していく。

槍が振るわれる度にだ。多くの兵達が叩かれ飛ばされていく。雨の中でその姿はだ。まさに鬼神の如くだった。

第四十二話　雨の中の戦その四

だが彼は己のその戦に酔ってはいなかった。今川の兵達を吹き飛ばしながらだ。目指すものを探していた。

「義元殿は何処だ！この槍の又左が御相手致そう！」

「いや、待て又左！」

柴田が来た。一際大きな槍を縦横に振るいだ。前田以上の強さを見せている。

その彼がだ。前田に言うのだ。

「義元殿の相手はわしぞ！」

「権六殿でござるか」

「そうじゃ。織田家きっての武の者であるわしがだ！」

その誇りを言葉にそのまま出してだった。

「このわしが相手をしようぞ！」

「いやいや、わしが！」

しかしだ。前田も負けずにだ。柴田に言い返す。

「わしが義元殿の相手を！」

「何を、わしが！」

「ではわしがじゃ」

「わしでよいな」

二人が言い合っているところにだ。今度はだ。

河尻と佐々が来てであった。それで二人に言うのであった。

「わしが義元殿の御相手を致そう」

「それでよいな」

「何っ、功を奪うつもりか」

「それはずるいぞ」

前田と柴田はその河尻と佐々に言い返すのだった。

「一番の功はこの槍の又左がするのじゃ」

「この掛かれ柴田以外の誰がするのじゃ」

「だからわしがじゃ」
河尻と佐々は同時に言った。するとだ。
お互いに顔を見合わせてだ。今度は二人で言い合うのだった。
「内蔵助、御主抜け駆けをする気か」
「そう言う鎮吉こそじゃ。ずるいぞ」
「いや、御主はそうした抜け目のない者だったのか」
「それはわしの台詞じゃ。まさか御主は」
「ははは、四人共手が止まっていますぞ」
四人が四人でだ。言い合っているとだ。
そこに万見が来てだ。笑いながら話すのだった。
「それではかえって功を奪われますぞ」
「むう、言われてみれば」
「言い合うよりもまずは動く」
「そうじゃな」
「左様。ではそれがしも」
そのだ。万見もだというのだ。
「義元殿の御相手に」
「ぬう、それではじゃ」
「わしもじゃ」
こうしてだ。彼等は言い合いを止めてだった。
それぞれ義元を探す。その中でだ。
氏真はその刀でだ。迫る織田の兵達を切っていた。
その動きは雨の中とはいえ素早く流れる様だ。その剣技の前にだ。
織田の兵達は次々と斬られていく。
「な、何じゃ！？」
「今川の若殿は公家ではなかったのか」
「蹴鞠や和歌ばかりしているのではなかったのか」
「それがどうしてじゃ」
「ここまで強いのか」
「麿とてもむのふよ」

氏真はその刀を構えて話すのだった。
「こうしてじゃ。刀も修めておるわ」
「氏真殿は確か」
ここでだ。若い男の声が聞こえてきた。
「塚原卜伝氏が師でしたな」
「左様」
氏真はその声に対して答えた。
「その通りじゃ」
「流石に尋常な者では御相手できませんな」
その声はまた言う。
「さすれば」
「貴殿が相手を務めてくれるか」
「そうさせて頂きます」
若武者だった。その者は。
青い鎧と陣羽織の精悍なその者を見てだ。氏真は問うた。

第四十二話　雨の中の戦その五

「ではそなたの名を聞こう」
「それがしの名ですな」
「うむ。何という」
己の前でだ。馬から降りたその者に問うのだった。若武者は馬に乗っていない氏真に合わせてわざわざ下馬してきた。そのうえで対等の勝負を挑むのは明らかだった。
「その名は」
「森勝三郎長可」
若武者は名乗った。
「それがそれがしの名でござる」
「ふむ。では得物は」
「これでござる」
その手にしている十字槍を構えてみせる。まさにこれがだというのだ。
「この槍で御相手致します」
「見事な槍じゃな」
氏真はその十字槍の輝きを見てだ。すぐにそのことを見抜いた。そのうえでだ。彼も刀を両手に持ち構えてであった。
そうしてだ。森長可に対して述べた。
「では。これより」
「勝負をはじめましょう」
こうしてであった。両者は闘いに入った。刀と槍がぶつかり合いだ。雨の中で銀の煌きは弾け飛ぶ。
両者が闘うそのすぐ近くではだ。義元が。
織田の足軽達に囲まれていた。しかしだ。
彼もまた刀を振るいだ。彼等を寄せ付けない。そのうえでこう言うのであった。

「麿を誰だと思うておる」
こう言うのである。
「今川の主今川義元なるぞ。そうおいそれとは討てぬぞ」
「むう、思った以上にしぶといな」
「馬に乗るのが下手だというから造作もないと思っていたが」
「これが中々」
「強いではないか」
「うむ、手強いぞ」
足軽達もだ。そのことを認めるしかなかった。
とにかく義元は強かった。それは彼等の予想以上だった。
彼等の槍もことごとく払い寄せ付けない。しかしだ。
それならばだとだ。彼等は刀を抜いている。だが義元はそうなっても彼等を引き付けさせない。彼もまたそれなりの強さがあった。
その義元を見てだ。足軽達は話すのだった。
「そういえば蹴鞠の達人と言うが」
「身体は動かしておるのか」
「そうなのか」
「麿とても武の者ぞ」
彼等にもこう言う義元だった。
「刀は使うわ」
「ううむ、これではだ」
「思うようにはいかぬな」
「折角こうして取り囲んだというのに」
「これでは手柄が」
「ほっほっほ、手柄は諦めよ」
義元もだ。焦る彼等に笑ってみせた。
そのうえでだ。こう言うのであった。
「麿の首は安くはないぞ」
「左様ですな」
彼のその言葉に応える形で、であった。

毛利秀高が来た。そのうえでだ。
義元の前に来てだ。こう名乗るのであった。
「織田家の臣、毛利新助秀高でござる」
「毛利と申すのか」
「そうです。宜しければお見知りおきを」
「そなたが麿の相手をするというのか」
「それがしで宜しいでしょうか」
「足軽達より遥かに腕が立つようじゃな」
その身のこなしを見てだ。義元はすぐにそのことを察した。
そのうえでだ。毛利にこうも話した。
「よいじゃろう。それでは麿もじゃ」
「御相手して頂けますか」
「さて、麿の首取れるものなら取ってみよ」
悠然とした構えを取ってだ。義元は言った。

第四十二話　雨の中の戦その六

「そうしてみるのじゃ」
「それでは」
「参るぞ」
まずはだ。義元の方からだった。
雨でぬかるんだ、いや最早池となっている場をだ。すり足で動いてだった。
毛利に迫る。そのうえで上から彼を斬ろうとする。
しかしだった。その剣撃はだ。
毛利の剣により防がれた。毛利の動きもまた速かった。
「むっ、今のをか」
「どうやら思った以上の腕の方ですな」
毛利もだ。義元のその剣の腕を見抜いたのだった。
「公卿の剣ではありませぬ」
「何度も言うが麿も武門じゃ」
麿という一人称を使っていてもだ。
「刀は嗜みじゃ」
「左様ですな。確かに」
こうだ。両者は鍔迫り合いをしながら話す。
「それはその通りです」
「さすればじゃ」
ここでまた言う義元だった。
彼は一旦飛び退いた。やはり動きは速い。その鈍重そうな体格からは想像できないまでに俊敏だ。その動きで間合いを離してであった。
義元は右に動いた。そのうえでだ。
毛利の脇に入ろうとする。毛利もそれを見て言う。
「成程、次はそうして」

「さて。今度はどうするのじゃ？」
「無論。お受けします」
毛利も話してだ。義元に顔を向けてだ。
正面に対峙してだ。そしてであった。
今度は毛利がだ。先に動いた。
彼は身体を屈めだ。狼の様に突き進んで来たのだ。
「むっ！？」
「さて、これはどうされますか」
こう言ってだ。義元に突っ込むのだ。
身体は腰の高さ程もなくなっている。その高さで両手に刀を持ちだ。
毛利は義元に突き進みだ。それでだった。
その両手に持っている刀を下から上にだ。思い切り突き上げた。
「なっ、下から上にじゃと」
義元はその下から来る刀の動きにだ。思わず目を丸くさせた。
「刀が」
「さあ、お覚悟を」
毛利は刀を突き出しながら言う。そしてだった。
刀がだ。義元を打った。
下からの一撃はかなりの衝撃だった。義元はそれを胸で受けた。
鎧はだ。貫かれなかった。かなりの業物であり毛利の一撃さえ防いだ。
だが衝撃までは防げずだ。それでだった。
背中から倒れる。刀は手から離れた。その義元を見てだ。
毛利は会心の笑みを浮かべてだ。こう言うのだった。
「勝負ありですな」
「む、無念・・・・・・」
今はだ。義元もこう言うしかなかった。
「まさかそう来るとは」
「では義元殿」

「覚悟はできておる」
実際にだ。観念している言葉だった。
「麿の首を討て」
「その首をですな」
「そうじゃ。そして手柄にするのじゃ」
毛利に対して告げる。
「さすれば褒美は思いのままぞ」
「左様、褒美は貰い受けまする」
それはだ。毛利も狙っていた。
しかしその褒美についてだ。彼は笑って義元に話した。
「ただ。それは」
「それは。何じゃ」
「義元殿の首でありませぬ」
それではないというのだ。

第四十二話　雨の中の戦その七

「義元殿御自身を」
「麿をというのか」
「虜にさせてもらいます」
「麿を捕まえるというのか」
「左様。勝負に勝ったのでそれで宜しいですな」
「好きにするがいい」
それをだ。いいという義元だった。
「麿は敗れた。それではな」
「では」
毛利は義元の言葉を受けたうえでだ・あらためてだ。
己の周りにいる足軽達にだ。こう命じたのだった。
「では縄でじゃ」
「はい、それでは」
「今より」
こうしてだった。足軽達がだ。
義元を起き上がらさせそのうえで縄で縛ってだ。彼を虜としたのだった。そしてその頃氏真もだった。彼もまた、であった。
森長可のだ。その槍を受けた。その槍に刀を出した。
槍は防いだ。しかしだった。
その刀は吹き飛ばされだ。得物がなくなった。
そこに十字槍がさらに来た。その喉元に突きつけられた。
「うっ・・・・・・」
「勝負ありですな」
十字槍を突きつけた森長可の言葉だ。両手にその槍を持ちだ。彼に問うたのだ。
「これで」
「止むを得ん」

無念の声でだ。言う氏真だった。
「好きにするといい」
「では。このままです」
「槍で一息にか」
「虜とさせてもらいます」
彼もだ。こう言うのだった。
「そうさせてもらいます」
「命は助けるというのか」
「どうされますか」
氏真にあらためて問う。
「下られますか。それとも」
「最早得物は持ってはおらん」
刀は派手に旋回して弧を描きだ。彼の後ろに突き刺さっている。
そうなってしまってはもうどうしようもない。そうした状況ではだ。
彼はだ。こう言うしかなかったのだった。
「ではじゃ。下ろう」
「下られますか」
「それしかない」
だからだというのだ。
「ではじゃ」
「はい、それでは」
こうしてだった。氏真も下るのだった。そしてだ。
今川の当主と嫡男が虜になったことをだ。織田は大声で叫ぶのだった。
「義元殿捕らえたり！」
「氏真殿下られたり！」
このことがだ。叫ばれるとだ。
今川の兵達は動揺を覚えた。それは忽ちのうちに。
恐慌状態になった。彼等はそのままだった。
「く、下れ！」

「いや、殿をお救いしろ！」
「若殿を！」
「しかし何処におられる！」
話はだ。混乱を極めていた。
「殿は一体何処におられる！」
「まさか若殿まで捕らえられるとは」
「どうすればいいのだ、一体」
「果たして！」
そしてだ。やがてだ。
雨の中でだ。彼等は戦意を失っていった。何しろ総大将とその嫡子は捕らえられているのだ。こうなってしまってはだった。
「仕方ないな」
「そうじゃな。最早な」
「去ろう」
「帰ろう」
こうした話がだ。自然に出た。

第四十二話　雨の中の戦その八

そしてだ。彼等の多くはそのまま遠江や駿河に逃げ去っていくのだった。

戦は終わった。終わるとすぐにだ。

雨が止んだ。空が瞬く間に晴れていく。

その中でだ。その空を見上げてだった。信長は馬上から言うのだった。

「勝ったな」

「はい、義元殿は捕らえました」

「嫡男の氏真殿もです」

「そしてです」

さらにあった。家臣達は話していく。

「今川の将兵の多くも下りました」

「完全な勝ちです」

「これ以上はないまでの」

「その通りじゃ」

まさにそうだとだ。信長も満面の笑みで話す。

「わし等は勝ったのじゃ」

「ではこれよりですな」

「勝鬨をあげますか」

「今ここで」

「うむ、そうする」

まさにだ。そうするというのだ。

そうしてあらためてだ。信長は。

己の将兵達にだ。こう告げた。

「では皆の者」

「はい」

「それではですね」

「これより勝ち鬨をあげる」
まさにだ。それをだというのだ。
「よいな。そのうえで清洲に帰るぞ」
「わかりました。それではです」
「我等も力の限り叫びましょう」
「勝ち鬨を」
「そうせよ」
まさにだ。それをせよとだ。皆に告げるのだった。
それを告げてからだ。彼からだった。
「では。今からじゃ」
「はい、天に向かって叫びましょうぞ」
「我等の勝ちを」
「勝ち鬨を挙げよ！」
信長は遂に言った。
「我等の勝ちぞ！」
「我等の勝ちぞ！」
家臣達も足軽達も叫ぶ。そしてあの言葉が出た。
「えいえいおーーーーーーーーーーっ！！」
「えいえいおーーーーーーーーーっ！！」
この声を挙げてだ。彼等の勝利を祝うのだった。そうしてだった。
信長は己の勝利を確かめるのだった。彼は誰もが思いも寄らぬ奇襲によってだ。今川の大軍を破り義元とその嫡男氏真を虜としたのだった。
このことはすぐに全国に伝わった。それはだ。
表にだけ広まってはいなかった。裏にもだった。
闇の中でもだ。話す者達がいた。彼等はだ。
その闇の中で蠢きながらだ。信長の桶狭間での勝利について話すのだった。
「勝つとは思っていたにしても」
「それにしても」

「あそこまで鮮やかな勝ちとは」
「思いも寄りませんでした」
「全くです」
こうだ。彼等は話していくのであった。その中でだ。
彼等はだ。こうも話すのだった。
「しかも今川義元を捕らえるとは」
「首を取らなかったとは」
「死ねばそれまでなのですが」
「生きて虜とした」
「それも今川義元だけではありません」
彼だけではないこともだ。彼等は知っているのだった。
そのことも話すのだった。

第四十二話　雨の中の戦その九

「嫡男の今川氏真も捕らえた」
「これにより今川家は今は主も跡継ぎもいない」
「つまり駿河は空」
「駿河だけでなく遠江も三河も」
「さすればこの三国は」
どうなってしまうのか。その話も為される。
「まず駿河は武田が来ますな」
「それは間違いありませんな」
「今川の主がいないとなればそこはまさに草刈場」
「それならば攻め入っても何も言われる道理はありません」
何も気兼ねすることなくだ。攻め入ることができるというのだ。
武田だけでなくどの者にとってもだ。こんな都合のいい話はないのだった。
「丁度武田には大義名分もありますしな」
「嫡男の武田義信の妻は今川義元の娘」
「さすれば今川の縁者として攻め入っても何の問題はない」
「そういうことですな」
「さすれば駿河は」
どうなるかというのであった。その駿河がだ。
「武田がそのまま手中に収める」
「北条は関東を攻めることと治めることに忙殺されています」
「さすればあの国は全て武田のものとなる」
「あの見事な国が」
「武田にとっては非常に大きなこと」
只でさえ強大な武田がだ。さらに力をつけるというのだ。
そのことはだ。まさにそのままだった。
「武田は天下を目指すだけの力を得る」

「そうですな」
「そうなります」
こう話すのだった。彼等はだ。
その話をしてだった。さらにだった。
「遠江もかなりの部分が武田のものとなりましょう」
「問題はその残りと三河ですが」
「さて、どうなるか」
「それも気になりますな」
「そして最も気になるのは」
ここでだ。彼等の話が変わった。
「やはり」
「そうじゃのう。尾張じゃ」
「その勝利を収めた織田」
「あの者ですね」
こう話されていくのであった。
「予想外の勝利でした」
「あれだけ見事だと波に乗ります」
「さすれば。尾張一国からさらに」
「さらに伸びますな」
「まずは」
最初はだ。どうかというのだった。
「伊勢ですな」
「あの国は国人が多く小さな勢力に分かれています」
「さすれば策を仕掛け手中に収めるのは容易い」
「まさに目の前に転がっている餌です」
そうしたものでしかないというのだ。伊勢はだ。
「織田信長という蛟の餌です」
「それを喰らいいよいよですな」
「天に昇る力を得ていく」
「そうなっていきますか」

「やはり」
「暫くはその勢いは止まらぬ」
一人が言った。
「伊勢も美濃も手中に収め」
「さらにですか」
「それからも」
「上洛だ」
それだというのだ。上洛だとだ。

第四十二話　雨の中の戦その十

「そしてさらに多くの国を手に入れ」
「織田の力は相当なものになる」
「そうなりますな」
「あの男の好きな様にさせておく」
そのだ。信長にだというのだ。
「しかしやがてその勢いも止まるか弱まる」
「さすればその時に」
「我等は」
「その時まで待つ」
闇の中の声が言う。
「しかしだ。その間もだ」
「仕掛けてはいきますか」
「そうされますか」
「それは忘れない」
こうも言うのであった。闇の中の何者かが。
「仕掛ける状況であればだ」
「その際はですね」
「常に用意しておく」
「そして実行に移す」
「そうされますか」
「そうだ」
まさにだ。その通りだというのだ。
「見るとは言っても指を咥えて見ているつもりはない」
「だからですね」
「織田に隙があれば仕掛ける」
「仕掛ける状況であればそうする」
「そうされますか」

「その通りだ。もっともあの男に隙はない」
信長にはだ。それはないというのだ。
しかしだ。それでもだとだ。闇の中にいる者達は話していく。
「しかし中にそれはなくともだ」
「外にはですね」
「それがあるかも知れない」
「そういうことですか」
「弟に仕掛けてそれで失敗するとは思わなかった」
闇の中心からだ。こうした言葉が出るとだ。
その次にだ。こう言う者が出て来た。
「申し訳ありません」
こう言うのだった。その者は。
闇の中においてだ。その者はこう中心にいる者に話すのだった。
「それがしが及びませんでした」
「よい」
「よいと」
「そうだ。あれは余も上手くいくと思っていた」
そうだったというのだ。その中心の者はだ。
「しかし。あの男は予想を超えた」
「織田信長はですね」
「そうだったのですか」
「あの男は既に龍だった」
蛟龍をだ。既に超えていたというのだ。
「水に潜んでいてもだ。巨龍だったのだ」
「ではあの策ではですか」
「あの男を防げなかった」
「そうだと仰るのですか」
「今にして思えばな」
今だからこそ。そのことが過去になったからこそわかることだというのだ。

第四十二話　雨の中の戦その十一

それを話してだ。その中央にいる者は話すのだった。
「あの程度では駄目だった」
「では今度は余計にですか」
「込んだ策を仕掛ける」
「そうされるのですね」
「仕掛ける時はだ」
その時がだ。来たらというのだ。
「そうする」
「そしてあわよくばあの男を始末する」
「そういうことですね」
「その通りだ」
中央の声が言った。
「まさにだ」
「左様ですか」
「その都度仕掛けてそのうえで」
「あの男を常に害していく」
「そうされるのですね」
「あの男、織田信長はだ」
彼はどうかというのだ。彼等は闇の中から彼を見ていた。その青の者をだ。
「必ずや我等の害となる」
「闇をも滅ぼしますか」
「そうしますね、確かに」
「あの男は」
「あの男の青は木の青だけではない」
青といっても様々だというのだ。五行の木だけではないというのだ。

「あれは蒼天でもあるのだ」
「蒼天の青ですか」
「あの青はそれでもあるのですか」
「まさにそれですか」
「天の青ですか」
「蒼天、即ちだ」
その天が何かも話されていく。
「大輪だ」
「日ですか」
「即ち光ですか」
「どの家も天下を手中に収めれば我等の害となる」
それはだ。絶対だというのだ。
「それは武田であっても上杉であったも同じだ」
「色を司る家はですね」
「それぞれ我等の害となります」
「闇と色は相容れないもの」
お互いにだ。闇と色、即ち光はというのだ。
闇と光は対立するものだ。そしてその中でもだというのだ。
「あの男は日輪だ」
「闇を消し去る日輪ですね」
「まさにそれですね」
「あの男は」
「だからこそだ」
日輪であるならばだった。闇の中で話されることは。
「あの男はとりわけ何とかしなければならない」
「我等闇の為に」
「我等が栄えこの国を動かす為に」
「そしてこの戦乱を続けさせる為に」
「その為にですね」
「左様、あの男は邪魔だ」

信長は彼等にとってはだ。まさにそれなのだった。
「機会があれば消す」
「その然るべき策の前にも」
「その前にもですね」
「そうだ。あの男は消す」
信長はだというのだ。
「何としてもだ」
「畏まりました。それではです」
「我々もまた」
「そうさせて頂きます」
「話は決まりだな」
ここで、であった。
「では。今はだ」
「隙を見つつ様子を見てですね」
「闇に潜む」
「暫しの間」
こんな話をしてだった。彼等はその闇の中に潜むのだった。
桶狭間の勝利は信長に多くのものをもたらすものだった。だがその全てが何かをだ。信長は知ることはできなかった。彼といえどもだ。

第四十二話　完

２０１１・５・１８

第四十三話　清洲に帰りその一

第四十三話　清洲に帰り

桶狭間でのことはだ。当然清洲にも伝わった。それもすぐにだ。
信長は勝ち鬨をあげるほぼ同じ刻にその知らせを清洲に知らせた。
するとだ。
話を聞いた留守役の信行はだ。すぐに笑みを浮かべた。そのうえで周りに言うのであった。
「皆も聞いたな」
「はい、確かに」
「聞かせて頂きました」
「我等の勝ちです」
「それも大勝利です」
「そうだ。一点の曇りもない勝ちだ」
まさにそれだとだ。信行は言うのであった。
「今川の当主義元殿と嫡男氏真殿を虜にもした」
「そして他にも多くの虜を手に入れましたな」
「挙げた首も多数」
「まさに一点の曇りもありませんな」
「大学殿や木下殿も生き残りましたし」
「全く以て完璧です」
「そうだな。しかし猿か」
信行は木下の名前を聞いてだ。そのうえで彼のことも話した。
「あの猿は死なぬと思っていた」
「そうだったのですか、木下殿は」
「そう思われていたのですか」
「そうだ、どうもな」
これが信行の木下への評だった。
「案の定生き残ったわ」

「大学殿だけならばわかりませんでしたか」
「しかしあの御仁もいればですか」
「生き残れた」
「そうだったのですね」
「あの猿は大きい」
こうも言う信行だった。
「身体は小さいが持っているものは大きいな」
「そうなのですか、あの御仁は」
「一見するとまことに猿なのですが」
「只の猿ではない」
「左様ですか」
「あの男が鷲津にいて大学と共に今川の先陣を足止めした」
これはだ。今川にとってはまさに予想外のことだった。しかしそれでもなのだ。
「今川はそれ以上進めずに目もそちらに向いていた」
「殿はその隙を衝かれたのですね」
「そうされたのですね」
「それに加えてだ」
さらにあるというのだ。信長の勝因はだ。
「前より出羽に命じてあの辺りを調べておられたしな」
「では雨が降ったともいいますがそれもですか」
「事前に念入りに調べておられた」
「それで勝たれたというのですか」
「兄上は只の方ではない」
それ以上の者だというのだ。
「おそらく今川が来ることを読まれてだ」
「それで地形も天気のこともですか」
「事前に調べられそのうえで戦に出られた」
「それで勝たれましたか」
「最初からな。そのつもりであられたのだ」

信行がこう話すとだった。
家臣達もだ。思わず唸って言うのだった。
「殿はやはり尋常な方ではなかったのですね」
「そこまでの深謀遠慮を持っておられるとは」
「そうして今川の大軍に勝たれるとは」
「恐ろしい方です」
「まことにだ。兄上は尋常な方ではない」
信行もだ。そのことがあらためてわかったのだ。
そしてだ。そのことを話してからだ。家臣達にこんなことも話した。
「それでだが」
「はい、戦に勝ちました」
「さすればですな」
「これからすることは」
「兄上達が戻られる前にだ」
その前にだというのだ。
「わかっておるな」
「はい、宴ですね」
「それの用意をですな」
「そうだ。今すぐにかかる」
まさにだ。それだというのだ。

第四十三話　清洲に帰りその二

「わかったな。兄上が戻られるまでに時間がないぞ」
「わかりました。それではです」
「今よりかかります」
「そうさせてもらいます」
「うむ、ではかかろう」
信行がだ。その一切を取り仕切るというのだ。留守役としての役目である。
「酒に馳走を用意してじゃ」
「そして茶もですな」
「殿にはそれを」
「兄上は酒が飲めぬ」
飲まないのではなかった。そちらなのだ。
「だからだ。ここはじゃ」
「茶も用意してそのうえで」
「殿にお出しする」
「そうしようぞ。それではな」
「はい、それでは」
「今より」
こうそれぞれ信行に応えてだ。そのうえでだった。
留守を守っている彼等は宴の用意にかかった。留守の者達も忙しい状況になってきた。ただしそれは喜ぶべき状況であった。
信長は意気揚々と清洲への帰路についていた。その途中で話を聞くのだった。
「今川の兵達の多くは算を乱して遠江や駿河に去っております」
「鷲津の囲みも解かれました」
「今川の者達は全て尾張から去ろうとしております」
「そうなっております」

「ふむ。ではその後詰はじゃ」
その壊走状態の今川でも後詰はいる。それが誰なのかをだ。信長は報告してくる家臣達に尋ねた。
「誰じゃ」
「松平元康」
この名前がだ。すぐに出た。
「あの者がです」
「それになりそうです」
「左様か。やはりな」
その名前を聞いてだ。信長は。
納得した顔を見せてだ。こう話すのだった。
「あ奴じゃろうな」
「そう思われていたのですか」
「松平だと」
「あ奴か太源雪斎しかおらん」
その二人だというのだ。
「どちらかしかのう」
「それでなのですか」
「松平だというのですか」
「後詰は」
「後詰を出せただけでも凄いことじゃ」
それだけでもだとだ。信長は話すのだった。
「何しろ今川は主も跡継ぎもおらんからのう」
「我等が捕らえたことによりですね」
「そのうえで」
「そうじゃ。それで後詰が出せるとすれば」
それができるのはだ。誰かというとであった。
「その太源雪斎だけじゃ」
「あの和上のみですか」
「それができるのは」

「あの和上はまた特別じゃ」
信長は雪斎についても話す。しかもその評価はかなり高いものだった。
「実質今川を取り仕切っておるからのう」
「戦だけでなく政も」
「それについてもですな」
「そうじゃ。その和上だからこそ」
どうかというのだ。
「後詰を出せるのじゃ。じゃがここで問題なのは」
「自分は後詰にはなれぬ」
「そういうことですな」
「己が後詰になってどうするか」
信長はそのことを問題にして話す。

第四十三話　清洲に帰りその三

「それでは軍の指揮は取れぬな」
「確かに。それではです」
「大将が後詰になれば指揮に限りが出ます」
「さすればですか」
「だからあの和上は後詰にはなれぬ」
そういうことだった。今の今川で全軍の指揮を執れるのは雪斎しかいない。その彼が後詰になってはどうにもならない。そういうことだった。
そのことを話してだった。信長は指摘するのだった。
「だから竹千代しかおらぬ」
「今の今川ので後詰ができるのは」
「松平だけですか」
「そういうことじゃ。しかし太源雪斎もじゃ」
そのだ。雪斎の話にもなる。
「他の今川の重臣達も果たして駿河に戻っても」
「駿河に戻っても」
「どうなると」
「そこに場所があるかのう」
こう言うのであった。
「果たしてな」
「では武田がですか」
「今にも動くと」
「そう仰るのですか」
「武田は虎じゃ」
俗に言われていることをだ。信長も言った。
「野心に満ちた虎じゃ」
「だから駿河もですか」

「手中に収めると」
「隙あらばそうするのが戦国の習い。そしてその隙ができたのじゃ」
さすればだった。答えはもう出ていた。
「今すぐにも動くぞ」
「では今川は完全にですな」
「これで終わったと」
「そういうことですか」
「竹千代も後詰をして尾張から出ればじゃ」
そうなればだ。どうするかというのだ。
「すぐにでも独立するじゃろう」
「そういえば松平家は元々三河の者ですし」
「今川にも仕えておりませんでした」
「さすればそうしますか」
「独立ですか」
「間違いなくそうする」
元康のその動きもだ。信長は読んでいた。
「最もこちらは今すぐに独立とはいかぬがな」
「独立の為の用意が必要だと」
「そういうのですか」
「そうじゃ。そして今川の撤退も」
雪斎が指揮を執るその撤退もだ。どうかというのだ。
「あれは兵達を駿河や遠江に送る為の撤退じゃ」
「再起の撤退ではない」
「駿河が奪われるからこそ」
「そして今川の臣の多くは家を失う」
その家であるだ。駿河を奪われるからだ。
「それでどうするかじゃ」
「武田に従う者も出るでしょうな」
ここで言ったのは林だった。
「駿河を手に入れたあの家に」

「そして松平につく者もおりますな」
今度言ったのは生駒だった。
「そうして二つになりますな」
「いや、三つじゃ」
三つだとだ。信長はここで言った。
「武田につき松平につきじゃ」
「では残る一つは一体」
「何処なのでしょうか」
「うちじゃ」
信長は一言で言ってみせた。

第四十三話　清洲に帰りその四

「織田じゃ。こちらにも大勢来るぞ」
「我等の方にも今川の者達が来ますか」
「そうなりますか」
「王がこちらにあるのじゃ」
将棋の駒に例えての言葉だった。
「来る者も出て来るわ」
「別に人質にはされませぬな」
村井がそのことを主に確める。
「そうしたことは」
「それはせぬ」
今度もだ。一言で答えた信長だった。
「あの親子を手に入れて今川が滅びることは決まったのじゃ。それで人質にして何がある」
「左様ですな。それでは」
「する必要のないことはせぬ」
まさにだ。信長の行動原理であった。
「そういうことじゃ」
「ではこのままですか」
「我等は伊勢に対して策を仕掛ける」
「それをしていきますか」
「それも違ってくるな」
今度は伊勢の話になりだ。応える信長だった。
「これからはのう」
「桶狭間で勝ったことにより」
「それによってですね」
「そうじゃ。この勝ちは織田にとって実に大きい」
そのことがよくわかっているからこその言葉だった。

「伊勢の小さな国人達は多く織田につくであろうな」
「小さな国人達がですか」
「多くが」
「そうじゃ。多くがつく」
こう話すのである。
「そしてそのうえでじゃ。伊勢の三つの家じゃ」
「長野、神戸、そして北畠」
今言ったのは伊勢に縁のある滝川だった。
「その三つの家ですな」
「あの三つの家がそれぞれ伊勢では大きい」
北畠はその中でも伊勢の守護の家柄だ。だが伊勢は多くの国人達に分かれている状況だ。所謂割拠となっているのが伊勢なのだ。
その伊勢のことを踏まえてだ。信長は話すのであった。
「まずは小さな国人達が我等につく」
「そうしてそのうえでその三つの家をですか」
「どうするかですね」
「一つの家がつけばまた一つの家がつく」
信長は話していく。
「そして我等は次第に大きくなりだ」
「伊勢を手中に収めていきますか」
「そうなりますか」
「その為の調略を進めていく」
これが信長の伊勢へのやり方だった。そのやり方についてだ。
信長はだ。こんなことも話した。
「安芸の毛利に従ったのじゃがな」
「あの謀に秀でた老人のですか」
「あの毛利の」
「あの者のやり方がはびこるならば天下は廃れる」
謀略により勢力を伸ばしていっているのが毛利なのだ。それにより安芸を統一し陶を滅ぼし尼子を弱めているといっても過言ではな

い。無論戦も経ているがそれ以上になのだ。毛利は謀を用いて大きくなってきているのだ。

その毛利についてはだ。信長も好まないという。しかしそれでもなのだった。

「しかし見るべきものも多い」

「見るべきものもですか」

「それも多いのですか」

「そうじゃ。一兵も使わずに多くのものを手に入れられる」

彼は言った。

第四十三話　清洲に帰りその五

「人を失わずに済むのならそれでよい」
「だから伊勢も一兵を使わずに手中に収めると」
「そう仰ったのですか」
「戦に勝つことだけがやることではない」
信長はそのこともわきまえていた。それもよくだ。
「時には謀を使うことも要じゃ」
「必要だというのですか」
「そういうことじゃ。それとわしは伊勢や美濃は手に入れる」
その二国はだというのだ。
「無論志摩もじゃ」
「その三国はですか」
「手中に収められますか」
「しかし三河や駿河には向かわぬ」
それはないというのだ。
「三河は竹千代のものじゃ」
「その松平のですか」
「あの家のですか」
「そうじゃ。あ奴のものじゃ」
三河についてはだ。信長は至って淡白であった。まさに何の興味もないといった感じであった。
そしてだ。彼は駿河についても話した。
「あそこは武田が入る」
「では武田のものでよい」
「そういうことですか」
「下手に武田とことを構えてはならぬ」
信長の言葉が険しいものになった。武田のことを話すとだ。
「武田の強さは尋常なものではない」

「確かに」
佐久間がだ。真剣な顔で主の言葉に答えた。
「まさに虎です。虎の群です」
「赤い虎ですな」
松井は彼等をこう表現した。その赤備えからの言葉だ。
「その集まりですな」
「尋常なことでは勝てん」
信長はこれまでにない真剣さで話していく。
「だからじゃ。今はことを構えぬ」
「それが宜しいかと」
ここで言ったのは山内だった。
「あの家は尋常ではござらぬ」
「それに上杉もじゃ」
信長はさらにだ。この家の名前も出した。
「あの家もじゃ」
「確かに。あの家の強さもです」
「尋常なものではありません」
織田の誰もがだ。このことをわかっていた。彼等とは直接槍を交えてはいない。しかしそれでもなのだ。上杉、そして武田の強さは天下に鳴り響いていた。
そのことを話してだ。彼等もまた信長と同じ顔になっていた。
「あの家は黒い龍」
「軍神が率いる軍です」
「武田と上杉は別じゃ」
信長もよくわかっていた。そのことがだ。
「例え三河と遠江を手に入れてもじゃ」
「武田とは戦えませんか」
「それは」
「そういうことじゃ。それに無理をして三河と遠江を手に入れても政ができぬ」

信長の話がこのことに移った。政のことにだ。
「それでは何の意味もない」
「確かに。急いで攻め取り駿河で武田とことを構えるとなると」
「三河や遠江を治めるどころではありませんな」
「そこまで力を向けられませぬ」
「それでは」
「そうじゃ。東に向かうのは愚じゃ」
それでだ。そちらには向かわないというのだ。
「決してじゃ」
「それよりも伊勢に志摩ですか」
「そして美濃ですか」
「まずは伊勢じゃ」
何につけてもだ。その国だというのだ。

第四十三話　清洲に帰りその六

「そこを手に入れいよいよじゃ」
「美濃ですな」
「あの国を手に入れると」
「手順を踏む」
信長は焦ってはいなかった。決してだ。
「確実に進めていくぞ」
「それでまずは伊勢ですか」
「伊勢を手に入れれば織田は百万石を優に超える」
伊勢はそれだけ大きいのだ。織田は今の尾張だけで六十万石程である。伊勢と志摩は合わせて八十万石、しかも多くの港があるのだ。これが非常に大きいのだ。
「兵にして三万を超える」
「それだけで武田や上杉にも匹敵しますな」
「それだけの力が手に入ると」
「そうじゃ。確かに今川の領国全てを手に入れれば百万石を超える」
今川は百万石だった。三国合わせてだ。
「しかし武田と戦うことを考えればじゃ」
「伊勢の方が宜しいですな」
「やはり」
「左様、伊勢と志摩じゃ」
そして美濃だというのだ。信長の戦略の一段階はこう決まっていた。
そのことを話しながらだ。信長は清洲に戻った。するとすぐにだ。信行が戻って来た者達を笑顔で出迎えだ。こう言うのだった。
「御見事でした」
「うむ、勝ったぞ」
満面に笑みを浮かべてだ。信長も応える。

「今川にな」
「はい。それではですね」
「宴じゃな」
その話になった。
「それじゃな」
「既に酒は用意しております」
酒を話に出してだ。それからだった。
そのうえでだ。信行はこれを話に出した。
「茶も」
「ほう、わかっておるのう」
「兄上はそちらですから」
「そうじゃ。わしは酒はよい」
飲めないのは相変わらずだった。信行もそのことはよくわかっている。
「やはり茶じゃ」
「ですから。茶もまた」
「では戦に勝った祝いの茶を飲もう」
「そして飲める者は祝いの酒を」
「皆で飲むとしようぞ」
こう話してだ。織田の者達は酒、若しくは茶を楽しむのだった。
信長は当然茶だ。それを飲みながらだ。家臣達に話すのであった。
「捕らえた者達じゃが」
「今川殿ですね」
「そして氏真殿ですね」
「そうじゃ。他の今川の者達にもちゃんと食わしてやれ」
それは忘れるなというのだ。
「それと飲みもののもじゃ」
「はい、それは無論」
丹羽がすぐに答えてきた。
「しております」

「ふむ、早いな」
「人は飯を食い水を飲まねば死んでしまいます」
正論だった。まさにだ。
「だからです。それはもう」
「うむ。それではよい」
それでいいとだ。信長も話した。
「飲み食いさせておるのならな」
「虜にはしていますが」
それでもだ。そうしたことは忘れないというのだ。
「それでもしかとです」
「少なくとも首を刎ねるつもりはない」
信長は殺さないというのだ。
「暫くは虜にしておれ」
「暫しですか」
「まあ少し経てばその虜も終わる」
そうなるというのだ。

第四十三話　清洲に帰りその七

「よく見ておれ」
「わかりました。それでは」
丹羽も主のその言葉に頷く。そうした話をしてだ。
そのうえでだ。信長はまた茶を飲んだ。満足した顔であった。
その彼にである。今度は原田が言ってきた。
「しかし。真に鮮やかに勝つことができました」
「驚いたか」
「正直に申し上げて宜しいでしょうか」
ここでだ。原田はこう信長に言ってきた。
「それがしの考えを」
「言ってみよ」
そうしろとだ。信長も応える。それを受けてだ。
原田も真剣な顔で頷いてだ。そうして話すのであった。
「まさかここまで完全に勝てるとは思いませんでした」
「やはりそう言うか」
「今川は二万五千」
それに対してだというのだ。
「我等は二千。これではです」
「普通は篭城じゃな」
「はい」
殆んどの面々が考えることだった。
「美濃との境に配している平手殿の一万二千の兵が援軍に来てです」
「兵法の常道ではそうじゃな」
「若しくは兵を集めそのうえで決戦を挑む」
この常道もまただ。原田は話した。
「その二つのうちどちらかしかなかったですが」
「しかしそれでは損害が大きい」

信長は言った。
「戦が長引くやも知れぬ。そうなれば斉藤が出て来る」
「美濃の斉藤」
「あの家がですね」
「その通りじゃ」
信長の脳裏からこの家のことは一刻も離れてはいなかった。彼は今川だけでなくだ。斉藤も含めて戦のことを考えていたのである。
「それで早く終わらせたかったのじゃ」
「して織田の名を挙げる為にも」
今度は池田が言った。
「鮮やかに勝つことをですな」
「この戦はそこまでせねばならなかったのじゃ」
まさにだ。そうした戦だったというのだ。
「それが上手くできた。しかし
「しかし」
「しかしといいますと」
「二度はせぬ」
しないというのだ。決してだ。
「この戦い方はじゃ」
「二度とされませぬか」
「そうだというのですか」
「確かに考え抜いてした」
それは事実だ。だがそれでもだというのだ。
「しかしそれでもじゃ」
「何故二度とされぬのですか？」
池田がまた問うた。
「それはまた」
「戦は本来ああして奇襲で勝つものではない」
それはだ。違うというのだ。
「確かに敵の虚は衝くものだ」

「それでもですか」
「ああしたことは二度としない」
「そうだというのですか」
「そうじゃ。少ない兵での奇襲は確かに鮮やかじゃ」
その鮮やかさはいいというのだ。
「しかし多くの相手に少ない兵で挑めば一歩間違えればじゃ」
「無惨に敗れますな」
「そうなるますな」
「左様、それよりもじゃ」
どうかというのだ。

第四十三話　清洲に帰りその八

「敵より多くの兵と武器で圧倒して勝つことじゃ」
「それが大事なのですか」
「では。その為にも」
「政を整えているのは何故じゃ」
そうした話にもなる。政のだ。
「国を富まし民を安らかにすることが第一じゃが」
「それだけではなく兵も」
「それを集める為にも」
「国が乱れておれば兵を呼んでも集らん」
そもそもだ。乱れている国には人が来ない。逃げていくものだ。
「百姓を兵に駆り出しても大して強くはない」
「だから政を整えるのですか」
「政にはそうした意味もあったのですか」
「そういうことじゃ。政あっての兵であり戦じゃ」
信長は話す。
「政を整え多くの兵を集め武具で身を固めてじゃ」
「そのうえで敵より多くの数と立派な武具で戦をし勝つ」
「それが正道なのですか」
「武田にしても北条にしてもじゃ」
挙げるのは両家であった。
「確かに奇襲はするな」
「はい、河越ですな」
今言ったのは蜂屋だった。
「あれは見事でした」
「しかしそれ以外の北条はどうじゃ」
北条のだ。河越以外での戦のことを問うのだ。
「どういう戦をしておる」

「常に敵より多くの兵で戦をしております」
「そうしております」
「武田もまた」
ひいてはだ。武田もだった。
「では。戦の常道は敵より多くの兵を集めてからですか」
「そのうえで戦をすることですか」
「こちらは奇襲に気をつける」
信長はこのことも忘れなかった。こちらの方が多くなれば今度はこちらが奇襲を受ける危険がある。そのことも頭に入れているのだ。
「しかしやはり第一にはじゃ」
「敵より多くの兵ですか」
「まずはそれが第一ですか」
「そういうことじゃ。だからあれは二度はせぬ」
話が戻った。そこにだ。
「桶狭間は二度とせぬ」
「では我等はこれからはですか」
「勢力を大きくしその兵で戦をする」
「多くの兵で」
「その為にも伊勢、そして美濃じゃ」
豊かなその二国をだというのだ。
「そうするのじゃ」
「畏まりました。それではです」
「まずは伊勢を」
「あの国を」
「それで二郎」
九鬼に声をかけた。彼もここにいるのだ。
「わかっておるな」
「はい、それがしは」
「海からじゃ」
そこからだというのだ。

「仕掛けておるな」
「既に」
それはだ。もうしているというのだった。
「とりわけ志摩に」
「わかっておるようじゃな」
「海のことならば」
不敵な笑みを浮かべてだ。九鬼は信長に述べた。

第四十三話　清洲に帰りその九

「それがしにとっては遊び場ですので」
「それでじゃな。さすればじゃ」
「海のことはお任せを」
「陸だけではなく海もまた大事じゃ」
信長は言っていく。
「何しろ尾張と伊勢は海でもつながっておるからのう」
「それではです」
ここで言ったのは明院だった。
「海の商人達もですか」
「無論あの者達にも商いをさせる」
信長は明院にもすぐに述べた。
「そのうえで船を行き来させる」
「陸だけではなく」
「海もとは」
「陸だけの富は限られておる」
こうも言うのだった。
「そして漁もさせる」
「おお、それでも豊かになりますか」
「漁でも」
「国を豊かにさせる方法は多い」
ただ田畑を開墾し町を栄えさせるだけではないというのだ。
「海もある。では伊勢じゃ」
「はっ、畏まりました」
「ではその伊勢を手中に収め」
「そのうえで」
「駒を進めていくぞ」
こうした話をしてだった。信長は宴での茶を楽しむのだった。

織田は戦に勝った。しかしそれに浮かれてはいなかった。むしろこれがはじまりだった。

実際にだ。伊勢にはだ。彼が送った者達が盛んに国人達の間を行き来してだ。彼等を一つずつ、だが確かに引き入れていっていた。その中でだ。平手率いる織田の主力も清洲に戻った。平手は信長に拝謁してからすぐにこう言った。

「まずはおめでとうございます」

「言うのかそれだけか？」

「他にはありませぬ」

謹厳そのものの言葉であった。

「何故ならです」

「わかっておるわ。一つ勝った位でじゃな」

「左様、浮かれてはなりませぬ」

こうだ。実に平手らしく言うのであった。

「くれぐれもこれに慢心なされませぬよう」

「わかっておる。よいか爺」

「はっ」

「わしは既に手を打っておる」

こう平手に対して話す。

「伊勢にな」

「左様ですな。それは聞いておりまする」

「伊勢に志摩じゃな。それとじゃ」

「虜としている今川の者達ですな」

「主と跡継ぎもな」

義元と氏真のことに他ならない。

「来るぞ、他にも」

「来るとは」

「主を心配して今川の者達がここに来る」

そうなるというのだ。信長は平手に対して先を読んでいるかの如き言葉で話していく。実際にその目は先まで洞察しているものだっ

た。
「その者達は最早居場所がないのう」
「お話は聞いておりまする。駿河は武田のものになりますか」
「今頃兵を出す用意をしておるわ」
まるで甲斐、その国に実際にいるかの如きであった。信長は武田の動きもだ。完全に読み取ってそのうえで平手に話しているのだ。
そのうえでだ。彼はこうも話した。
「駿河は空じゃ。今川の国自体がじゃ」
「さすればまさに草刈場」
「草を刈ってそれを籠に入れるだけじゃ」
まさにだ。それだけになっているというのだ。
「実に容易な話じゃ。武田にとっては」
「では今川の家臣は武田につきますか」
「そうする者もおるじゃろうな」
「しかしそれだけではなく」
「その通りじゃ。してその者達こそが大事なのじゃ」
「今川につかぬとなれば」
「他は北条じゃな」
信長は相模のその家の名前も出した。

第四十三話　清洲に帰りその十

「元々今川の縁者じゃしな、北条は」
「そのうえ嫡男氏政殿の奥方は今川義元の娘」
「さすればそこに向かう者もおるじゃろう」
「ではそのどちらかに」
「それに加えてじゃ」
ここからがなのだった。今信長が言いたいことであった。
「主と跡継ぎが尾張におるな」
「では。義元殿にあくまで忠誠を誓う者達は」
「この国に来る」
まさにだ。彼等の国にだというのだ。
「そうなるわ」
「左様ですか」
「さて、今川の臣にも優れた者は多い」
信長の話が核心に入る。彼が今この場でまさに言いたいことにだ。
「その者達も欲しいのう」
「しかしその者達は」
「しかしその者達は」
「ははは、首を討ってはそれはできんかった」
その話もする信長だった。
「状況が状況じゃったから虜にできぬとあれば首を討てと言ったがな」
「しかし虜としたならば」
「政じゃ。外への政を行う」
そうするというのだ。政は内にだけ向けられるものではないのだ。
「その際はじゃ」
「お待ち下さい」
信長の話をここまで聞いてであった。平手は彼に問うた。
「外への政と仰いましたが」

「それをするのじゃが」
「しかし今川は滅びます」
そうなるというのだ。国が空の今武田が入るとだ。必然的にそうなってしまう。これは考えずとも容易にわかるようなことであった。
「その今川とですか」
「そうじゃ。まあ見ておれ」
「殿が為されることですか」
「こちらに来る今川の者達は虜にしておる者達も含めてわしの家臣とする」
笑みさえ浮かべてだ。信長は言った。
「全てのう」
「そうされると仰るのですか」
「左様じゃ。だがそれは時が来てからじゃ」
「それからですか」
「伊勢じゃ。伊勢の国人共は間も無く次から次にこちらに来るぞ」
織田、即ち彼自身にだというのだ。
「一つが来ればまた一つ、次から次に来るわ」
「そうなると仰るのですか」
「してじゃ。爺にも動いてもらうが」
「その伊勢にでございますか」
「左様。爺には北畠の家を頼もうか」
「守護を務めるあの家の」
「頃合いを見てあの家に向かえ」
そのだ。伊勢の守護である北畠家にだというのだ。
「大河内の城までな」
「して。あの家も取り込むと」
「あの家には跡継ぎがおらん」
戦国においては最大の泣き所となるものであった。それを避ける為にどの家も娘婿を入れたり養子を迎えたりしている。血が絶えてはそれで何もかも終わりだからだ。

そして信長もそれをよくわかってだ。今平手に話すのである。
「さすれば。跡継ぎを出してやってじゃ」
「あの家を手中に収めますか」
「長野も神戸も同じじゃ」
その二つの家もだ。事情はほぼ同じだった。
「弱い国人達は放っておいても最初に来る者が出ればそこから次から次に来る。三つの家の周りの国人達もな」
「しかしその三つの家は」
「織田の力を感じたところでこちらから話を出す」
跡継ぎの話をだ。その跡継ぎのいない三つの家にだというのだ。
「そうして三つの家を取り込みじゃ」
「伊勢もまた」
「取り込んでからじゃ。伊勢も志摩も万全に治める」
信長は手中に収めることだけを見てはいなかった。むしろそれから何をどうするのかをだ。彼は考えそのうえで見ているのである。

第四十三話　清洲に帰りその十一

そのことをだ。平手に話してであった。
「そうするからのう」
「それを聞いて安心しました」
「安心したか」
「それでこそ殿です」
そのだ。信長だというのだ。
「国を手に入れられるだけではなくですから」
「国を手に入れるだけならばまだ容易い」
「容易いですか」
「しかし問題はその後じゃ」
信長から言うのだった。
「政じゃ。それが大事ではないか」
「その通りです。だからこそ伊勢と志摩もまた」
「治める。治めずして何故国を手に入れるのじゃ」
こうまで言うのである。
「治めぬ国、治めぬ天下なぞ手に入れても何の意味もないわ」
「ですな。国も天下も手に入れてこそ」
「それに伊勢と志摩はじゃ」
「その二国はですか」
「実に治めがいのある国じゃ」
それを楽しみにさえしているのだった。信長はそうした意味で信玄と同じだった。信玄もまたなのだ。治めることを念頭に置いているのだ。
「土地は肥えしかもよい町も多い」
「しかも伊勢神宮もありますな」
「あそこも見所じゃな。旅人も呼べる」
「まことによいこと尽くしの場所ですな」

「しかしじゃ」
信長はだ。ここでだ。顔を曇らせてだ。こう話すのだった。
「伊勢には本願寺もおるからのう」
「本願寺ですか」
「そうじゃ。爺はどう思うか」
平手の目を見ての問いだった。
「あの坊主達については」
「そうですな。我等は今のところあの寺とは何もありませんが」
「それでもじゃな」
「恐ろしい者達です」
平手もだ。彼等については剣呑な顔で述べるのだった。
「一度敵に回せばそれこそ」
「朝倉じゃな」
「はい、あの家は身動きが取れなくなっております」
「加賀から来てその領国である越前でも一向宗が暴れておる」
一向一揆の者達が暴れてだ。それでどうしようもなくなっているのだ。
「朝倉宗滴がいるからどうにかなっておるがな」
「若しあの者がいなければですな」
「まず終わりじゃ」
そうなるというのだ。朝倉はだ。
「朝倉はそこまでやられておる」
「北陸にかなりの力を持ち」
「近畿もじゃ」
本願寺は北陸の加賀に拠点を持つが近畿にもいるのだ。むしろ近畿こそ彼等の力が最も強い。大坂の石山にだ。総本山があるのだ。
その総本山があるからだ。近畿にはなのだった。
「近畿に入れば至るところに本願寺の寺がありじゃ」
「そして門徒がおりますな」
「あの者達をどうするかじゃな」

「あの者達についてはです」
どうするべきか。平手は常識から話した。
「やはり。対決するのはです」
「避けるべきじゃな」
「その数が違います」
門徒の数がだというのだ。
「老若男女全てが立ち上がりますから」
「しかもあの者達は死ねば極楽浄土に行ける、浄土宗の教えをそのまま信じて戦う彼等がだ。死ぬことを恐れる筈もなかった。
そのことをわかっているからだ。平手は信長に話すのだった。
「おまけに鉄砲も多く持っておりますし」
「それではとてもじゃな」
「今川や斉藤の比ではありませぬ」
平手は本気で信長に話す。

第四十三話　清洲に帰りその十二

「あの者達だけはです」
「そうじゃな。わしもじゃ」
「本願寺と揉めることはですな」
「避ける。出来るだけな」
そう考えていた。本気でだ。
それでもだ。彼はここでこうも話すのだった。
「しかしそれでもじゃ」
「それでもですか」
「わしの天下統一への妨げになるのならばじゃ」
「戦われますか」
「そのつもりじゃ」
こうだ。確かな顔と声で話すのだった。
「本願寺といえどもな」
「無謀でございます」
平手はすぐにこう返した。
「幾ら何でもです」
「そうじゃな。わしとてあの者達と戦はしたくない」
「それでもなのですか」
「天下の為にはどの様な者といえどもじゃ」
「本願寺と戦をするならば」
どうなるか。平手は言わずにはいられなかった。
「我等は朝倉の様になりかねませんが」
「あの様な泥沼になるな」
「そうなってもですか」
「うむ、戦う」
「あくまでなのですか」
「そうしなければならぬならばそうする」

信長はまた言う。
「徹底的にじゃ」
「やられるからにはですか」
「確かに門徒は多い」
そのことは信長も認める。
「しかしじゃ。それでもじゃ」
「それでもとは」
「門徒達もじゃ。本願寺がよいかわしがよいか」
「殿がよいかですか」
「そのことを選ばさせてみよう」
信長の顔が笑みになった。不敵な笑みにだ。
そしてその不敵な笑みでだ。彼は今平手に話すのだった。
「その為にも政をするぞ」
「善政ですな」
「わしの政は誠の意味で民の為、天下の為になる政じゃ」
そこに己は入れないのだった。信長の政はそうしたものだった。
「その政を見せてじゃ。あの者達はどうするかじゃ」
「つまり民の心を掴むと」
「民の心は即ち天下の心じゃ」
民があるからこそ天下がある、そうだともだ。言葉の中に入れていた。
「それを掴めずしてどうして天下を掴めるか」
「ですか。では殿」
「うむ」
「この爺、殿が本願寺と戦をすることになろうとも」
「ついてくるか」
「無論です。しかし」
ここで平手の言葉が変わった。こう言うのだった。
「あの時切腹しなかったのはよかったです」
「何じゃ、本気で腹を切るつもりじゃったか」

「まさか。大殿の位牌に灰を投げ付けられるなぞ」
そのことをだ。ここであらためて話すのである。
「思いも寄りません」
「ははは、爺も驚いたか」
「呆れました。これは駄目だと思いました」
「しかしあれでわしを侮る連中が一斉に焙り出されたな」
「そしてそれをでしたな」
「そうじゃ。すぐに片っ端から叩き潰した」
尾張統一の時だ。信長が今に至る大事な節目の話である。
「あれはあえてああしたからのう」
「敵を欺くには、だったのですな」
「というよりかわしの家臣であれで呆れたのは爺だけぞ」
信長は苦笑いをしながら平手に話す。

第四十三話　清洲に帰りその十三

「全く。どういうことじゃ」
「他の者達がまたおかしいのでござる」
平手はこう言うのであった。
「あの権六や新五郎もでしたから」
「あの二人はもう既にわかっておったからのう」
「殿のそうしたところがですか」
「そうじゃ。あの二人にしろ他の者もわしから離れることはないと思っておった」
そのことは確信してだ。それであしたというのである。
「読み通りじゃったな」
「それがしが腹を切るのは」
「まあそれもな。実際に考えておったか」
「左様でございます」
「全く。爺は真面目過ぎるわ」
これが信長の平手への言葉であり考えであった。
「もう少し遊び心が欲しいのう」
「それは茶に向けておりますので」
「茶か」
「和歌や能にも」
「そうしたものも確かによいがのう」
「それにです。それがしが小言を言わねばどう思われますか」
「病かと思うぞ」
そうなればそうなったで、だった。まさにだ。
「そんな爺なぞ爺ではない」
「そういうことですな」
「わしにだけ言うのではないしのう」
「ははは、特に慶次にはですな」

笑いながらだ。その男はというのだ。
「あのやんちゃ小僧は放ってはおけませぬ」
「あ奴には容赦なく殴るな」
「あの者は殴らなくてはわかりませぬ」
そうした男だというのだ。慶次はだ。
「もっとも。殴ったところで」
「傾くのを止める者ではないぞ」
「あれは織田家きっての悪童です」
平手から見ればだ。慶次まさにそれだった。永遠の悪童なのだ。
「甘い顔をしてはなりませぬ」
「若し甘い顔をすれば」
「氷風呂です」
実際に平手は彼に氷風呂に入れられたことがある。他にも様々な悪戯を受けている。そしてその度に彼を容赦なく叱り殴っているのだ。
「ああした者ですから」
「しかしその慶次は嫌いではないな」
「嫌いではありませぬ」
そのことははっきりと言い切った。言い切れた。
「困った者ですが」
「それでもじゃな」
「どうにも憎めませぬ」
そうだというのだ。
「それは確かでございます」
「そうじゃな。むしろ爺は今の織田に嫌いな者はおるか」
「これはといっておりませぬ」
「そうじゃな。わしは人柄まで見てはおらんがじゃ」
「それでもでございますか」
「流石に極端に心根の悪い奴は用いぬ」
それはしないというのだ。

「世の中にはどの様な悪さをしても全く平気な奴もおる」
「どの様な嘘をついても」
「そうした奴は能力以前の問題じゃ」
「人としても信用できませぬか」
「論外じゃ」
こうまで言うのである。
「使えぬわ。絶対にな」
「若し使えば」
「必ず災いとなるわ」
断言であった。そうならない筈がないというのだ。
「それを考えると心根も大事じゃな」
「はい。信用できぬ者は使えませぬ」
「そういうことじゃな。少なくとも織田に信用できぬ者は入れぬ」
信長はそのことは強く話す。
「心根の極端に悪い者はな」
「それが宜しいかと」
「では。これからじゃ」
どうするかと話す信長だった。
「爺には小言を期待するか」
「遠慮はしませぬぞ」
「少しは遠慮して欲しいものじゃがな」
こんな話をしてだった。信長は戻って来た平手とも話すのだった。
そしてその他にもだ。清洲に戻る者達はいたのであった。

第四十三話　完

２０１１・５・２５

第四十四話　元康の決断その一

第四十四話　元康の決断

義元と氏真が虜となり今川の軍が雪崩を打って駿河に戻ろうとする中でだ。先陣だった雪斎と元康はだ。こんなことを話していた。

「こうなっては仕方がない」

「退きますか」

「殿も若殿も捕らえられたのじゃ」

それならばだというのだ。雪斎の顔は土色にさえなっている。

「ここで戦をすればどうなる」

「殿も若殿も」

「向こうにそのつもりはなくともそうせざるを得なくなる」

だからだ。この場合は戦えないというのだ。

「どうしてもな」

「ではここは」

「後詰は御主に任せる」

雪斎は元康に告げた。

「わしは軍勢全体を預からせてもらう」

「そしてそのうえで」

「そうじゃ。兵達を駿河に戻す」

その為にだ。兵を率いるというのだ。

「そうするからじゃ。後詰はじゃ」

「だからこそそれがしが」

「三河まで戻れ」

言った国は駿河ではなかった。

「後はわしがしておく」

「和上がですか」

「三河まで入ればじゃ」

それからどうするかもだ。元康に話すのだった。

「そなたの思うようにせよ」
「それがしのですか」
「もう今川はなくなる」
雪斎は苦渋に満ちた声で述べた。
「大殿と若殿のお二人が虜になってはな」
「そうなってはですか」
「そうじゃ。駿河もじゃ」
そのだ。今川の国もだというのだ。
「あの国も武田に取られてしまうわ」
「では駿河に戻られても」
「わし等はともかく兵達はそうはいかん」
「兵達はですか」
「そうじゃ。あの者達は故郷に返さなくてならん」
それでだというのだ。彼等を故郷に無事戻すというのだ。
そのことを話してからだ。雪斎は元康に再び話した。
「そしてそれが終わってからじゃ」
「兵達を無事戻してからですか」
「わしは大殿と若殿のところに向かうとする」
「織田の虜になっておられるですか」
「そうじゃ。わしは今川の臣じゃ」
それならばだというのだ。雪斎は今川への確かな忠誠があった。
その忠誠のうえでだ。元康に対して確かな言葉で話すのだった。
「それならばじゃ。殿のお傍におらねばならん」
「左様ですか」
「しかし竹千代よ」
元康を見て話す。ここでもだ。
「そなたは違う」
「それがしは」
「三河に戻り好きにするのじゃ」
元々三河の者であり駿河の者でも遠江の者でもない元康にはだ。

そうせよというのだ。
「よいな。そうせよ」
「そうして宜しいのですか」
「うむ、よい」
またいいというのだ。
「そなたはこのまま今川の臣として今川を支えてもらいたかったがな」
「それでもですか」
「そうじゃ。もうその今川がないならばじゃ」
それならばだった。答えは出ていた。
「そなたの好きにせよ」
「では。これからは」
「達者でな」
元康を見てだ。微笑んでの言葉だった。

第四十四話　元康の決断その二

「縁があればまた会おうぞ」
「はい、それでは」
こうしてだった。雪斎と元康は別れたのだった。
元康は後詰を務めながら三河に戻る。そして雪斎はだ。
今川の兵をまとめてそのうえで駿河まで兵を戻していくのだった。
こうして今川の者達は尾張から完全に姿を消したのであった。
それを見届けてからだ。佐久間盛重はこう周りの者達に話した。
「ではここは最低限の兵を置きだ」
「そしてそのうえで、ですな」
「我等はこれより」
「うむ、清洲に戻る」
こうだ。木下兄弟に話すのだった。
「これよりな」
「いや、無事生き延びましたな」
蜂須賀が笑って佐久間盛重に話した。
「あれだけの兵に囲まれながらも」
「殿が勝たれたわ」
満足している声だった。
「見事な」
「桶狭間ですな」
木下が明るく笑いながら話した。
「殿はあの場所で勝たれました」
「桶狭間か」
「おそらく今川はあの場所に陣を敷きました。本陣をです」
「そしてその本陣にか」
「はい、奇襲を仕掛けられたのです」
そうしたというのだ。木下は鷲津にいながらだ。そのことを察し

てみせたのだ。
そのうえでだ。彼は話すのだった。
「御見事です」
「うむ。まことにな」
佐久間盛重も木下のその言葉ニ頷いた。そうしてであった。
彼もまた満足した笑顔で話してだった。
「わしはてっきり篭城されると思っていた」
「清洲にですね」
「そこじゃ」
こう話すのだった。
「そう思っておったのだがのう」
「しかしあれでしたな」
蜂須賀は今はいささか真面目な顔で話した。
「奇襲とは」
「小六はどう思っておったのじゃ？」
木下が彼がどう思っていたのかを問うた。
「殿はどうされると思っておった」
「わしは決戦を挑まれると思っておった」
「平手殿の率いられる主力と合流してか」
「そう思っておったのだがのう」
「しかし殿は違っておられた」
木下秀長も言う。
「篭城でも決戦でもなく奇襲を執られた」
「それでよかったのじゃろうな」
木下は弟の言葉を受けて話した。
「兵も失わんし勝ち方も鮮やかじゃ」
「では殿はそうしたことも考えられて」
「織田の敵は今川だけではないからのう」
木下は弟に対してだ。考える顔を見せながら話した。
「斉藤もおるしのう」

「ここで兵を失うわけにはいかなかったのですか」
「そういうことじゃ。だからじゃな」
それでだというのだ。
「思いきったことをされたのじゃ」
「そしてそれをされるだけのものが備わっておられると」
「それが我等の殿じゃな」
「殿はどうやらじゃ」
佐久間盛重は退いていく今川の兵を見ながら話す。
「わし等が思っておった以上の方じゃな」
「そうですな」
木下は彼のその言葉に会心の笑みで返した。

第四十四話　元康の決断その三

「これだけのことをされるとは」
「城に帰ればじゃ」
その清洲にだというのだ。
「楽しみじゃな」
「祝いですな」
「それですな」
「祝うべきものは祝う」
佐久間盛重ははっきりと述べた。
「そうしなければ駄目じゃしな」
「殿はそうしたこともわかっておられますな」
「そうしたメリハリも」
「まことにな。では楽しみにしてじゃ」
そうしてだというのだった。
「清洲に戻ろうぞ」
「さて、その前にですな」
蜂須賀がここでこう言った。
「飯を食いますか」
「飯か」
「派手に戦いましたからな」
それでだと。豪快に笑いながら佐久間達に話すのだった。
「腹が減りました」
「では。全員で食うとしよう」
兵達もである。そうしてなのだった。
彼等は飯をたらふく食ってから清洲に帰るのだった。そうして城でだ。盛大に迎えられるのだった。
信長が桶狭間で鮮やかな勝利を収めたことは天下に知れ渡った。それは幕府でも同じでだ。細川と明智はそのことを話すのだった。

「思った以上ですな」
「そう思われますか」
「はい、織田殿が勝つだろうとは思っていました」
細川は腕を組んで明智に話す。二人は今二条城の一室にいる。そこで話をしているのだ。
「しかしです」
「あそこまでの勝ちはですか」
「流石に思ってはいませんでした」
そうだったというのだ。
「いや、あれだけ見事に勝たれるとは」
「私はです」
「十兵衛殿はどう思われていました」
「ああなると思っていました」
明智はその目の光を強くさせて答えた。
「織田殿は見事に勝たれると思っていました」
「そうだったのですか」
「地の利がありましたから」
戦う場所は織田の本拠地である尾張だ。このことはかなり大きいのは言うまでもない。
「それに今川殿は油断されていました」
「勝つと確信していたと」
「それが慢心になっていました」
明智が指摘するのはこのことだった。
「戦を先陣に任せ過ぎていましたし」
「雪斎殿とあの三河の」
「松平元康殿です」
明智はこの名前を出した。すぐにだ。
「確かに御二人はかなりの方ですが」
「その松平元康という者はそこまでなのですか」
「かなりの人物です」

その元康のことをだ。明智はかなり高く評価していた。そのうえでの話だった。

「あの三河武士の棟梁に相応しいだけの武辺者です」

「あの強い三河武士の」

「剣に馬に水練だけでなく兵法もです」

「全てに秀でていますか」

「それだけの人物です」

「ではその二人が先陣を務めていて」

それが為にだ。義元は二人に戦を任せていたというのだ。

第四十四話　元康の決断その四

「陣は縦に伸びていましたが今川殿は周りへの物見も緩やかだったようです」
「戦を先陣だけに任せていてですな」
「行軍を続けていれば陣は伸びます」
それならばだというのだ。
「それなのに物見をあまり出さなかったならば。横を衝かれるのは必定です」
「しかもそれが敵の国ならば」
「それならばああなるのは見えていました」
明智はここまでの話を淡々と話した。
「全てはその結果です」
「左様でござるか」
「そうです。ただ」
「ただ？」
「それがしも予想しなかったことがあります」
それが何か。明智は考える顔で話した。
「まさか。義元殿と嫡男の氏真殿が共に虜になるとは」
「あのことですな」
「このことはかなり大きいです」
明智の言葉が強くなる。
「今川は今家を治める者がいません」
「隙ができますな」
「そしてその隙を衝きです」
どうなるかというのだ。それは。
「駿河と遠江に武田殿が来られるでしょう」
「あの甲斐のですか」
「はい、武田殿の嫡男義信殿の奥方は今川殿の娘御」

この縁戚を口実にしてだ。武田は駿河に入るというのだ。主がいなくなれば縁戚の者がその代わりに入る、戦国でも常識のことである。

このことを指摘してだ。明智はさらに話した。

「それにより駿河と遠江の大半が武田殿のものとなります」

「あの駿河が」

「遠江も大半がそうなってしまうでしょう」

「武田殿にとっては奇貨ですな」

「はい、武田殿は甲斐、信濃に加えてそうした国々を手に入れられます」

「天下で屈指の勢力になられますな」

「そうです。そしてです」

明智はここで話を変えだ。こう話すのだった。

「織田殿もです」

「その織田殿も」

「最早織田殿をうつけなどという者はおりません」

「そうですな。織田殿の名声はかなりのものになりました」

「それは天下に知れ渡りました」

このこと自体が非常に大きいというのだ。

「それは無論伊勢や美濃にもです」

「その二国にも」

「まず伊勢です」

その国だというのだ。尾張の西にあるその国だ。

「あの国の国人達は織田殿に次々とつくでしょう」

「そうして伊勢は」

「瞬く間に織田殿のものとなります」

そうなるとだ。明智は読んでいるのだった。

「さすればです」

「伊勢の次は」

「美濃です」

その国だというのだ。
「そこになります」
「明智殿所縁のあの国ですか」
「そうですね。私の所縁になりますね」
美濃について話すとだ。自然にだった。
明智はその顔を綻ばさせてだ。こう細川に話すのだった。
「思えば懐かしいです」
「そうでしょう。故郷なのですから」
「今はこうして公方様にお仕えしていますが」
「朝倉家にも仕えていましたな」
明智も各家を転々としているのだ。この時代ではよくあることだ。

第四十四話　元康の決断その五

その中で明智は朝倉家に仕えていたこともあるのだ。彼は細川に対してその頃のことも話した。

「時期は短いものでした」

「確か斉藤家からここに来られるまでの僅かな間でしたな」

「はい、お仕えすることは許されましたが」

それでもだとだ。明智は今一つ優れない表情で話していく。

「ですが」

「しかしなのですか」

「私は朝倉の当主義景様に好かれなかった様で」

「重く用いられなかった」

「はい、そうでした」

まさにだ。その通りだというのだ。

「残念なことにです」

「そうですか。主殿にですか」

「どうやら朝倉は家臣に家柄を強く求める家の様で」

「そうですね。あの家はですね」

「そうした国ですね」

「だからです」

それでだとだ。明智は彼自身がどうしたかを話すのだった。

「私は宗滴殿に言われまして」

「そうしてここにですか」

「私の仕えるべき主を見つけよと」

「それが公方様だったのですね」

「少なくとも今の公方様につきましては」

当代の将軍であるだ。義輝についてはどうかというのだ。

「私はお仕えさせて頂いています」

「そうですね。ただです」

「ただ、ですか」
「はい。義輝様の弟君や御親族の義栄様は」
「そうですね。どなたも」
「義輝様だけです」
あくまでだ。彼だけだというのだ。
「私がお仕えしたいのはです」
「私も。義輝様がおられなければ」
「幕府を去られますか」
「少なくとも幕府を壟断せんとしている三好につくつもりはありません」
近畿のかなりの部分は三好が治めている。彼等は都にも力を伸ばしておりそこにいる幕府にもだ。何かと介入していきているのだ。
そのことを嫌ってだ。彼等は話すのだった。それは細川も同じだ。
「どうしてもです」
「そうですね。私も幕府にはいたいのですが」
「義輝様の後ですね」
「その方が義輝様の御子ならばよいのですが」
「若しそうでなくあの方々でしたら」
「考えさせてもらいます」
「私もですね」
そうした話をしてからだ。あらためてだ。明智は信長について話すのだった。
「それで織田殿が美濃まで手に入れられます」
「そうなるとかなりの勢力になっていますね」
「まず尾張です」
他ならぬだ。織田の本拠地だ。まずはこの国からだった。
「そしてそこに伊勢、志摩、美濃」
「あとは」
「飛騨もでしょう」
その国もだというのだ。美濃の北にある。

「飛騨の三木殿はそこまで力を伸ばされた織田殿につかれるでしょうから」
「ではそれで五国ですね」
「そして六万近い兵を手に入れられます」
その六万に及ぶ兵を支える国力もだ。明智は話した。
「二百五十万石に近いまでの」
「あの五国を合わせたらそれだけになりますね」
「それだけの力を持つ家となると天下にはほぼおりません」
そこまでの家になるというのだ。織田が。
「そしてその兵で」
「織田殿はどうされるでしょうか」
「そこからが見るべきものになると思います」
信長が美濃まで手に入れるのはもう読んでいた。だが問題はそこからだというのだ。明智は先の先まで読んでいるのだった。

第四十四話　元康の決断その六

「織田殿はおそらくです」
「武田殿や上杉殿に比肩しますか」
「それだけの方ですから」
「ではその織田殿なら」
何をするのか。今度は細川から話した。
「この乱れた天下も」
「おそらくは」
明智はその可能性を否定しなかった。
「果たせるでしょう。現にです」
「既にもう動いておられるのでしたな」
「はい、伊勢にしきりに人をやっていますし」
「では間も無くですか」
「伊勢はその全てが織田殿のものとなるでしょう」
そうなるというのだ。
「流石に今すぐではありませんが」
「左様ですか。夢の様な話ですね」
細川もだ。信長の今について感心してだ。そうして話すのだった。
「うつけと言われていた織田殿が」
「傾いておられたのでしょう」
「傾いてですか」
「あの方はそうされているのです」
今もだ。信長は傾いているというのだ。
その傾きが理解されずだ。それでだというのだ。
「うつけだと思われていたのです」
「しかし実は違っていたと」
「奇矯な方ではあるでしょうがうつけではありません」
「ではその傾いた方がですか」

「必ずや大きなことをされます」
二人は都でだ。こうした話をしていた。そしてその渦中の人物信長はだ。木下達の帰還も迎えてそのうえでだ。彼は言うのであった。
「さて、そろそろじゃな」
「そろそろといいますと」
「今度は一体」
「武田じゃ」
この家の名前を出すのだった。ここでもだ。
「おそらくもう攻め入る準備をしておろう」
「駿河にですな」
「あの国に」
「駿河は程なく武田の手に入る」
それは決まっているとだ。こう述べるのだった。
「武田は確実に駿河を手に入れる。しかし遠江はある程度で止まる」
「あの国はですか」
「途中でなのですか」
「信玄は慎重な者じゃ」
このことも天下によく知られていた。ただ戦に強いだけではないのだ。信玄はそうした慎重さも兼ね備えている。そうした意味で真の名将なのだ。
「駿河だけで充分でしかも遠江の半分程度も手に入れるとじゃ」
「後の政のことを考えてですな」
木下がすぐに言った。
「それで動きを止めますな」
「そうじゃ。そうしてそこまで手に入れた地の政に専念する」
そう読んでいるのだった。間違いなくそうなるとだ。
「まあかなりの力はつけるがな」
「しかし。武田が動きますか」
林はこのこと自体に怪訝なものを見せて述べた。
「二十四将が」

「しかも最近出て来ておるな」
信長は二十四将以外にもだ。もう一人の名を挙げるのだった。
「真田幸村という者じゃ」
「真田ですか」
「左様、真田じゃ」
「あの家の者で。それは」
林は主の話を聞きながらだ。ある者に行き着いた。その者は。
「確か次男ですか」
「左様、あの家のな」
「その者が出て来ておるのですか」
「その智勇は比類なきだそうじゃ」
何故か信長はだ。彼のことを楽しげに話すのだった。
「信玄からも目をかけられておるらしい。高坂弾正と並ぶ武田の柱になる者としてな」
「あの者とですか」
それを聞いてだ。目を光らせたのは佐久間だった。

第四十四話　元康の決断その七

「それはまた相当な者の様ですな」
「まだ若いがのう」
「この場合若さは関係ありますまい」
こう述べたのは信行だった。
「その者の資質かと」
「そうじゃのう。そしてその真田の次男がじゃ」
「どうなるというのでしょうか」
「一体」
家臣達が問うとだ。信長はこう答えた。
「先陣じゃな」
「その駿河攻めの先陣ですか」
「それをその真田の次男が務めるというのですか」
「真田幸村という者が」
「見物じゃな。武田二十四将にさらにもう一人強者が入るか」
信長はここでも楽しげに話す。
「そうなるのかのう」
「しかしですぞ」
村井がだ。楽しげな主にあえて話すのだった。
「只でさえ強大な武田にもう一人そうした者が加わればです」
「手に負えんか」
「恐ろしい相手になりますが」
「そうじゃのう。しかしじゃ」
「しかしとは？」
「武田にもう一人将が入ってもじゃ」
それでもだとだ。ここで信長の言葉が変わった。
そしてだ。彼は家臣達に話すのだった。
「二十五人。それに対して我等はじゃ」

「違うと」
「そう仰るのですか」
「御主達がおる」
「我等が、ですか」
「そう言って頂けますか」
「ははは、世辞じゃ」
笑ってだ。こうした冗談も言ってみせる。無論家臣達の信長のその世辞という言葉が冗談なのはわかる。本心が何処にあるのかもわかっている。
その本心をだ。信長は話すのだった。
「御主達ならば武田も上杉も恐れぬ」
「その二つの家もですか」
「越後までも」
「その代わりやってもらうことはやってもらう」
笑ってだ。信長はこうも言った。
「働いてもらうぞ。存分にな」
「ではまず伊勢ですな」
松井が言った。
「何はともあれあの国ですな」
「今からどう治めるか調べておくことじゃ」
「わかりました」
松井はだ。信長の言葉にすぐに頷く。そうしてこう話すのだった。
「既に幾らか考えております」
「ほう、速いな」
「殿はせっかちですから」
信長のその早急な性格によるものだとだ。松井も笑って話すのだった。
「ですから」
「それでもう考えておったというのじゃな」
「御言葉だったでしょうか」

「よい。何事も速いのが一番じゃ」
「さすればですな」
「それでよい。そして美濃もじゃ」
続いてだ。この国もだった。
「あの国は一つ考えがあるからのう」
「といいますと」
「何でしょうか」
「川じゃな」
それだというのだ。
「一度じっくりと見てみるが川になるじゃろうな」
「堤でしょうか」
丹羽が言った。

第四十四話　元康の決断その八

「それを築かれるのでしょうか」
「考えておるのじゃ」
まさにだ。その堤だというのだ。川といえば堤だ。治水についてはだ。その国を治める者として何としても万全にしなければならない、信長はこのこともよくわかっていた。
それでだ。彼はこう話すのだった。
「長良等をどうするかじゃ」
「川といえばです」
生駒がだ。今度は言ってきた。
「美濃を攻める時にですか」
「川を使えというのじゃな」
「はい」
「そうか。川か」
「前にもこうした話があったと思いますが」
「うむ、そうじゃったな」
ここで信長は九鬼を見ながら答えた。
「二郎の水軍を使ってな」
「水軍は海だけではありませぬ」6
「川もじゃな」
「水のある場所ならばです」
何処でもだ。水軍は使えるというのだ。
「さすれば。美濃でもまた」
「使えるな。ではじゃ」
九鬼をまた見てだ。そうして言うのだった。
「二郎よ」
「はい、では美濃を攻める時は」
「そなたの力。思う存分使わせてもらうぞ」

「川でも暴れられますな。確かに」
九鬼もだ。話を聞いてそのことがわかった。
そうしてなのだった。美濃を攻める時にはだ。川を使うことにもしたのだった。
そんな話をしながらだった。信長はこれからのことを考えるのだった。その中でだ。万見がだ。主にこのことを話すのだった。
「今川の軍勢の動きですが」
「竹千代を後詰にしてじゃな」
「はい、太源雪斎が軍全体を率いて駿河に戻っています」
「左様か。やはりじゃな」
それを聞いてだ。信長も納得して話す。
「竹千代が後詰で雪斎が軍を率いてじゃな」
「そうなっております」
「わかった。しかしじゃ」
「しかしですか」
「それが二人の今川での最後の仕事になるであろうな」
主のいない家のことを考えての言葉だった。
「あの和上にとっては残念なことであろうがな」
「そうですな。今川の家は終わりですし」
「さすればですな」
「そうじゃ。して今川の家臣達の今後じゃが」
それがどうなるかもだ。信長は話した。
「まず三河の者達は竹千代につく」
「では殿」
明院が主に問う。
「松平は独立しますか」
「元に戻る」
「そうですな。松平は元々三河で独自の勢力を持っていました」
明院は主の言葉を受けてそのうえで述べた。
「さすればそれが元に戻ると」

「そうじゃ。そして三河の者はじゃ」
そのだ。元康につくというのだ。元々三河は彼の家が治めていた。
そしてその家臣団の忠誠と結束はだ。天下随一のものだったのだ。
その家が元に戻ると聞いてだ。織田の家臣達も話す。
「では三河に一つの家ができますか」
「前と同じく松平が三河を治める」
「そうなりますか」
「そうじゃ。三河の者達は三河に戻る」
また話す信長だった。
「そして今川の者達で国人達はじゃ」
「その者達はですか」
「武田につく」
「左様ですな」
「そうじゃ。その者達はその住んでいる地こそが全てだからじゃ」
だからこそ国人なのだ。彼等はその土地に代々生きそこが全てだ。
その彼等が武田が駿河に入るなら武田に従うのも当然のことだった。

第四十四話　元康の決断その九

「武田に逆らうことはない」
「国人達はですか」
「そうなりますか」
「国人達のそうしたところは当然じゃが問題じゃ」
信長はその国人についても話すのだった。
「完全に我が家に入れねばな」
「それで検地もされていますか」
「完全に家臣団に入れておられるのですね」
「その通りじゃ。検地に完全な組み入れじゃ」
独立した存在は放置せずにだ。完全に枠組みの中に入れて治める。
それが信長の治め方だった。
その政のことも話してからだ。信長は続けた。
「今川直参の者達はじゃ」
「その彼等ですか」
「どうするのかですか」
「それが問題ですが」
「どうするつもりでしょうか」
「ここに来る」
信長は言った。
「この国にじゃ。来るぞ」
「この尾張にですか」
「来るというのですか」
「駿河ではなくですか」
「この国にですか」
「主はこの尾張におる」
それでだというのだ。信長はそのことも読んでいるのだった。彼の読みは広くだ。そして深い。その独特の読みがここでも発揮され

たのだ。
「ではじゃ」
「兵達を戻してからですか」
「この国に来ますか」
「尾張に」
「それでどうするかじゃ」
信長はさらに言うのだった。
「言っておくが今川の家臣達も虜にしておる今川父子もじゃ」
どちらもだというのだ。
「命を取るつもりはない」
「ではどうされるのですか」
「命を取らぬなら」
「それでは一体」
「どういった処遇を」
「奇貨じゃ」
信長はここでこう言った。
「奇貨は目の前にあればどうする」
「手に入れます」
そうするとだ。真木が答えた。
「それがあれば迷わず」
「そうじゃな。手に入れるな」
「それではですか」
「その通りよ。これから多くの人手が必要じゃ」
さし当たってだ。伊勢、志摩、美濃を手に入れ治める。それについてだった。
「さすれば今川の家臣達もじゃ」
「組み入れられる」
「そうされますか」
「土地があり兵がおる」
信長はその欠かせぬ二つのものをまず話してだった。

そのうえでだ。こうも話すのだった。
「そして家臣達じゃ」
「我等ですか」
「その我等も」
「多くの優れた者が必要なのじゃ」
「だからこそですか」
「今川の者達もまた」
「必要じゃ」
まさにそうだというのだ。
「わしは優れた者なら誰でも用いる」
「敵だった者でも」
「そうされますか」
「昨日の敵は今日の友というな」
信長はここでこの言葉も出した。

第四十四話　元康の決断その十

「この場合は今日の家臣じゃな」
「その家臣をですか」
「敵であった者でも」
「そうじゃ。何の関係もない」
やはりだ。何ともないというのだ。
そうした話をしてだった。信長は己の決意を話すのだった。
「天下の為に働いてもらうだけじゃ」
「しかしです」
ここで怪訝な声をあげたのは佐々だった。
「そうした者は謀反を起こすのでは」
「謀反か」
「はい、かつて敵であった者はです」
裏切るのではないかというのだ。これは当然の危惧だった。
佐々にしてもだ。そのことは危惧して信長に話すのだった。
「やはり裏切りが」
「それは誰でもじゃ」
「誰でもですか」
「そうじゃ。誰でも謀反を起こすわ」
こう言ってだ。信長はここで顔を曇らせてだった。さらに話した。
「あの津々木の如き者がおればな」
「あの者ですか」
その名前を聞いてだ。信行もその顔を曇らせた。
それでだ。今度は彼が言うのだった。
「確かに。ああした者がおれば」
「誰でも謀反を起こすな」
「迂闊でした」
信行のその顔に悔恨が浮かび上がった。

「まさか。操られるとは」
「御主が操られるのじゃ。誰でも操られる」
そうなってしまうというのだ。信長はそれだけ津々木という男を警戒していた。
そのうえでだ。彼はさらに話す。
「本人にその気がなくともじゃ」
「あの妖しい術で操られていく」
「あの男はそれだけ危険ですか」
「次に見つければ斬る」
鋭い顔で言う信長だった。
「このわしの手でじゃ」
「そうされますか」
「殿御自身であの者を斬られますか」
「そうされると」
「そうでなければ気が済まぬ」
信長のだ。偽らざる本音だった。
「あの者はじゃ」
「一体どの国に逃げたのか」
「尾張にはいないようですし」
「まさに煙の様に消えてしまいましたな」
「まるで妖術です」
「妖術。わしは信じておらんかった」
信長はそうした類の話を信じない性格だ。しかしそれでもだった。
津々木を見てだ。その考えがどうなったか述べるのであった。
「しかしあの術はどう考てもじゃ」
「妖術ですな」
「あれはまさにそれですな」
「普通の術ではありませぬ」
「忍術にしても異様じゃ」
それでもないというのだ。

「やはり。あれは妖術じゃ」
「その妖術で人を惑わしですな」
「世を乱す」
「それがあの者ですな」
「用心せねばな」
信長は津々木についてもそんなことを話してだ。彼の行方を捜し続けてもいた。そうしてそんな話をしながらだ。彼はこれからの流れを見つつだった。
伊勢への調略を進めていきだった。次の手を着々と打っていた。それからだった。
その伊勢でだ。次第にその効き目が出て来ていた。
国人達がだ。次第にだった。
尾張から来た者達にだ。こう答えていた。

第四十四話　元康の決断その十一

「わかりました。それではです」
「我が家はこれより織田様に従います」
「是非そうさせてもらいます」
こうそれぞれ言ってだ。信長についていくのだった。
そして三河ではだ。元康はまずは岡崎に入った。その彼のところにだった。思わぬ報が入りだ。彼は目を見開いて言うのであった。
「何と、瀬名に竹千代がか」
「はい、駿府からです」
「来られています」
そうなっているとだ。元康の家臣達が彼に話すのだった。
「そしてもうおられます」
「この岡崎に」
「またどうしてじゃ」
その話を聞いてだ。元康はまずは首を捻った。
だがすぐに気付いてだ。こう言うのだった。
「雪斎殿が手を回してくれたのか」
「はい、そうです」
「その通りです」
家臣達がまた元康に話す。
「そうしてです」
「岡崎に送られたのです」
「そうしてくれたか。ではじゃ」
そこまで聞いてだった。元康は言うのだった。
「わしはここに留まる」
「岡崎にですか」
「この城に」
「そして三河を治める」

そうするというのだ。
「では独立ですか」
「そうされますか」
「今川様から」
「義元様と氏真様がおられなければ」
どうなるかというとだ。最早言うまでもなかった。
「今川は仕舞いじゃ。ではじゃ」
「我等は再びこの三河においてですな」
「己で立つと」
「うむ、立つぞ」
まさにだ。そうするというのだ。
「まことにな」
「まさかこうなるとは思いませんでしたな」
「確かに」
こうした声も出て来ていた。
「今川殿の下で生きていくと思いましたが」
「それが大きく変わりですか」
「独立ですか」
「独立はよい」
元康はそれ自体はいいとした。
しかいだ。彼はここでこうも話すのだった。
「だが。それで終わりではない」
「今川殿がいなくなろうともですか」
「敵はおりますな」
「武田よ」
語る元康の顔が曇る。
「あの家が来る」
「あの武田がですか」
「天下随一と言われているあの武田騎馬隊がですか」
「しかも率いるはあの信玄に二十四将」

「恐ろしい相手ですな」
「容易には勝てぬ」
元康はまた言った。
「敵は精強なだけでなく兵も多い」
「我等はです」
ここで言うのは痩せた顔の中年の男だった。
「三河、そして遠江の半分を手に入れてもです」
「むっ、本多殿か」
「本多正信殿ではござらぬか」
元康の知恵袋の一人だ。その彼が同僚達の言葉を受けながら主に話すのだった。
「一万です」
「一万か」
「はい、それに対して武田はです」
どうなのか。本多はそのことを話すのだった。
「今でさえ三万です」
「そこにか」
「間違いなく駿河も手に入れます」
そうなるとだ。本多も読んでいるのだ。

第四十四話　元康の決断その十二

「そして上野にも進出するでしょうし」
「かなりじゃな」
「しかも遠江も半分程手に入れるでしょう」
その国もだというのだ。
「五万になるかと」
「何と、五万」
「では二百万石か」
「そこまで至りますか、武田は」
「あの武田が二百万石で五万とは」
「洒落にならぬぞ」
勇猛な三河者達もだ。これには驚きを隠せなかった。
しかしだ。本多はここでこう主に話すのだった。
「我等では到底相手にはなりませぬが」
「それでもか」
「手はあります」
こう話すのだった。
「東に武田があればです。西には」
「織田か」
「あの家か」
「あの家がだというのか」
三河者達は次々に言った。
「まさかあの家と手を組む」
「そうせよと仰るのですか」
「左様」
本多はまず同僚達に述べた。しっかりとした声でだ。
「これならば武田にも対することができます。何故なら」
「何故なら？」

「何故かというと」
「織田殿は尾張だけでは終わることはありませぬ」
だからだというのだ。
「伊勢に志摩、それに美濃を瞬く間に手に入れられるでしょう」
「その三国に尾張もとなると」
「優に二百万石を超えますな」
「かなりの力になる」
「ではそれだけあれば武田にも」
「対することができます。ただ」
本多はまた言い加えた。
「それはあくまで我等が我等だけでも武田と戦うという気概があってこそです」
「そうだな」
元康は本多の今の言葉にすぐに頷いた。
そしてそのうえでだ。こう言うのだった。
「我等が戦わなければだ。その気概がなければ」
「織田殿には織田殿の事情があります」
本多はそこも見ていたのだ。それで話すのだった。

第四十四話　元康の決断その十三

「ですから。我等が織田殿にとって益のある相手でなければ」
「手を結ぶ筈もない」
「その通りです」
「わかった。それではじゃ」
どうするか。元康は言った。
「まずは三河を手中に収める」
「完全にですか」
「そしてそのうえで、ですか」
「遠江にも」
「兵を進める」
やはりだ。その国にもだというのだ。
しかもだ。それだけでなくというのだった。
元康はだ。さらに述べた。
「武田と国を接しても臆するな」
「武田の軍勢が前にいてもですか」
「決してですか」
「そうじゃ。決して退くな」
こうだ。家臣達に強く言うのである。
「戦になろうともな」
「それでも退かずですか」
「相手を見据える」
「そうされよと」
「必要とあらば戦もせよ」
元康はだ。こうまで言った。
「よいな。そうせよ」
「何と、戦もですか」
「その武田と」

「それも厭うなというのですか」
「起こっても小競り合いじゃ」
元康もだ。読みを見せた。
「武田も駿河と遠江の半分を手に入れるまでが精一杯じゃ」
「とても我等と本格的に戦をする余力はない」
「今はですか」
「だからよ。果敢に出よ」
ならばだというのだ。
「無論平時からそうじゃがな」
「平時からもですか」
「武田に対して強気でいよと」
「そう仰いますか」
「強気に出ねば飲まれる」
そうなるというのだ。
「今の世はな」
「はい、その通りです」
やや年配のだ。皺の多い顔の男が言ってきた。
「殿、やはり今はです」
「小平次か」
酒井忠次だ。元康の腹心の一人である。その彼も言うのであった。
「舐められてはなりません」
「武田に。そして」
「織田殿にもです」
そのだ。手を結ぶべきという織田にもだというのだ。
「相手は見ていますので」
「だからだな」
「今の世は舐められては終わりです」
酒井の言葉は強い。それは絶対だという口調であった。
その口調でだ。彼は主に話すのだった。
「ですから」

「わかっておる。だからこそじゃ」
元康もあらためて言うのであった。
「皆の者、よいな」
「はい」
「それではですか」
「そうじゃ。我等松平はこれより三河武士の気概を見せる」
そのだ。勇敢な三河武士のそれをだというのだ。
「よいな」
「はい、それでは」
こうしてだった。元康は決意を固めたのだった。そしてその決意を以てだ。彼は三河に再びだ。松平の旗を立てたのであった。

第四十四話　　完

2011・6・2

第四十五話　幸村先陣その一

第四十五話　幸村先陣

武田はだ。早速であった。

桶狭間での今川の敗戦により駿河に主がいなくなったと聞いてだ。すぐにであった。

家臣達を集めてだ。こう言うのであった。

「それでは駿河にじゃ」

「出陣ですな」

「今より」

「その通りじゃ」

まさにだ。それをするというのであった。

それを告げてだ。まずは己のすぐ傍にいる嫡男の義信に問うのであった。

「若し今川家があれば御主も不快に思ったであろう」

「はい」

その通りだとだ。義信は答えた。父に似ているが細面のだ。爽やかな顔の青年である。その彼が父の問いに毅然として答えたのだ。

「それはその通りです」

「そうであろうな。しかしじゃ」

「今駿河には今川家はありませぬ」

自身の妻の実家がだ。最早ないというのだ。それであれば義信としてもだ。駿河に入ることに何の気兼ねもなかった。むしろだった。

「父上、残された今川家の者達をです」

「そうじゃ。助けねばならん」

安易にだ。大義名分もできたのだった。

「だからこそじゃ」

「是非共駿河に」

「上杉への備えは海津に置いておく」

信玄は伝えた。やはり上杉謙信のことは忘れてはいなかった。
そしてだもう一つの相手についても話すのだった。
「して美濃じゃが」
「殿、その美濃ですが」
山本がすぐに彼に言ってきた。
「状況が変わりました」
「何かあったか」
「主の斉藤義龍が病に伏せっております」
「ふむ。あの男がか」
「はい、どうやら重い病の様で」
こう主に話す山本だった。
「最早長くはないかと」
「そうか。最早か」
「はい。その子の義興はどうやら父程の器はない様です」
山本はこのことも話した。
「確かに兵は多いですが信濃に攻め入ることはないかと」
「では最低限の備えでよいな」
「はい、そう思います」
これが山本の読みであった。
「ですから今はです」
「駿河、そして遠江じゃな」
「そして上野です」
山本はこの国も話に出した。
「駿河の次はです」
「無理はせぬ」
慎重な信玄らしい言葉も出た。
「まる駿河は全て手に入れる」
「あの国はですか」
「そうされますか」
「しかし遠江は半分でよい」

信長や元康の読み通りの言葉だった。
「半分でじゃ」
「半分で宜しいのですか」
「遠江は」
「何度も言うが無理はせぬ」
だからだというのだ。
「その後の政の方が大事じゃ」
「成程、だからですな」
「政を重んじる為に」
「流石は殿です」
「そういうことじゃ。わしは戦に勝ちじゃ」
そしてだというのだ。信玄の真の関心はそこにあった。
「その国を治めることこそがじゃ」
「天下を治めること」
「そうですな」
「天下は必ず手に入れる」
その望みもだ。信玄は話すのだった。

第四十五話　幸村先陣その二

「その為には武田にはより多くの力が必要じゃ」
「だからこその駿河ですな」
「その力の為の」
「そして駿河を治め民達を楽にする」
何故政を行うのか。信玄はそのこともわきまえていた。そうしたことが全てわかったうえでだ。彼は戦いそして国を治めているのである。
「それもよいな」
「承知しております」
「戦は天下統一の為」
「そして天下統一はです」
「民の為ですから」
「民を護れぬ者は国を治められぬ」
信玄は厳格な声で言った。
「無論天下もじゃ」
「それを為せるのは殿ですな」
「天下で果たせられるのは殿だけ」
「まさにそうですな」
「自負はしておる」
それはあるとだ。信玄自身も言う。
言うその言葉は確かな自信に依って出されている。そしてその言葉であった。
彼はだ。さらに言うのであった。
「わし以外にはおらぬ」
「では。その殿が」
「天下を治められるその中の一歩として」
「それでなのですね」

「駿河に」
「そうよ。出陣じゃ」
ここまで話してだ。信玄はだった。
出陣を命じた。そしてその中でだ。
幸村を見てだ。こう彼に告げるのだった。
「先陣は御主じゃ」
「それがしですか！？」
「そうじゃ。御主に任せよう」
幸村に対して信頼している笑みも向かせる。そうしてだった。
そのうえでだ。信玄は幸村にさらに話した。
「見事駿府まで陥としてみせよ」
「そうさせてもらいます」
「有り難き御言葉」
幸村のその言葉にだ。幸村も喜びを隠せない。そのうえでの言葉だった。
彼はだ。平伏し信玄に述べるのだった。
「それでは。見事先陣を務めさせてもらいます」
「そうせよ。そういえば御主にはじゃ」
「それがしにはですか」
「そうじゃ。見事な家臣達がおったな」
信玄が今話すのはこのことだった。
「十人程じゃったか」
「はい、十勇士といいます」
「ふむ。十勇士か」
「非常に素晴しい者達です」
幸村は彼等のことを話す時だ。完全に信頼している笑みを浮かべる。
その笑みでだ。こうも言うのである。
「それがしには過ぎた者達です」
「過ぎたというか」

「はい、それがしなぞには」
彼は実際にそう思っていた。しかしだった。
信玄はだ。その幸村にこう言うのだった。
「それは違うな」
「違うというのですか」
「人はその器に相応しい人に仕えるものだ」
「相応しいですか」
「小器に大器は入るか」
具体的にはだ。こういうことだった。
「入らぬな」
「はい。だからですか」
「そうじゃ。御主にその十勇士が仕えておるのもだ」
「それがしが。あの者達は仕えるに相応しい者だからですか」
「そういうことじゃ。それではじゃ」
ここまで話してだった。信玄はだ。
幸村にだ。こうも話した。
「その十勇士も率いて先陣を務めるがよい」
「わかりました。ではあの者達も」
「十勇士か。頼もしい者達だな」
信玄はその十勇士達についてもだ。頼もしい笑みを浮かべて話す。
「その者達も天下に必要じゃな」
「この天下にですか」
「その通りじゃ。二十四将も御主もじゃ」
彼等と同じくだというのだ。十勇士達も必要だというのだ。

第四十五話　幸村先陣その三

信玄はこんなことを話してからだ。十勇士達も先陣に加えることを決めたのだった。その話が決まってだ。一旦一同主の前から去ることとなった。

幸村はそのまま一人館を出ようとした。しかしその彼にだ。

一度見たら忘れられぬ、そこまでの流麗な顔立ちの男が隣に来てだ。こう言ってきたのだった。

「よいか」

「源五郎殿」

幸村はその美麗な男の名前を言った。この美麗な男こそ高坂昌信だ。武田二十四将の中でもとりわけ秀でた者の一人とされるだ。智勇兼備の者である。人格温和なことでも知られている。

その彼がだ。優美な微笑みを浮かべてだ。幸村に話すのであった。

「緊張しているか」

「はい」

その通りだとだ。幸村も高坂に答える。今二人は館の門のところにいる。

その場においてだ。幸村は答えたのだった。

「それは否定できませぬ」

「そうだな。それがしも初陣とはじめての先陣の時はそうだった」

「源五郎殿もですか」

「誰もが同じだ」

こうだ。高坂は幸村に話す。

「それはな。どうしてもそうなるものだ」

「緊張してしまいますか」

「そうだ。しかし安心するのだ」

「安心してよいのですか」

「御館様の人を見る目は確かだ」

彼等の主信玄のその目はだ。間違いないというのだ。
だからこそだというのだった。幸村に対して。
「その場、その時に相応しい者を選ばれる」
「ではそれがしは」
「そうだ。まさにだ」
先陣に相応しい者だというのだ。
「必ずや果たしてくれる」
「そう仰るのなら」
「励むことだ」
穏やかな笑みを浮かべて幸村に告げる。
「御主は必ず大きな者になる」
「なるでしょうか」
「それがしが思うだけではない」
やはりだ。ここでも主の話が出たのだった。
「他の方々もだし何よりもだ」
「御館様がですか」
「御館様は御主をこのうえなく見込んでおられる」
信玄のその目がだ。幸村を見込んでそのうえで任せているというのだ。
その話をしてだった。彼等は門を出た。そうして館の外を出てだった。
まただ。高坂が言うのだった。
「だからこそじゃ」
「その為の先陣ですか」
「御期待に応えたいな」
「無論です」
幸村は熱い声で高坂に応えた。
「そうせずにいられません」
「それでよい。どうやら御主は」
「それがしは？」

「大事を為す者だな」
幸村をだ。こう評するのだった。
「それもとてつもなくな」
「大事をですか」
「天下は御館様が治められる」
彼等にしてみればそれ以外は考えられなかった。天下を治めるのは彼等の主である信玄だ。彼以外にそれは果たせぬと確信しているのだ。
それでだ。幸村が何をするかというとだ。高坂はそのことについてはこう言うのだった。
「天下一の侍になるか」
「天下一の侍といいますと」
「うむ、武勇だけでなくだ」
それだけではないというのだ。侍を侍たらしめているそれだけではとだ。
「智略、そして人格もだ」
「それがしがそうした者になると」
「なるであろう。御主に比肩できるのは」
それは誰か。高坂はそのことも話した。

第四十五話　幸村先陣その四

「越後の直江兼続、そして尾張の前田慶次」
「直江殿と。あの天衣無縫の傾奇者でございますか」
「前田慶次のことは聞いておろう」
「はい、槍を手に縦横に暴れしかも風流を解するとか」
「そして尾張一の悪戯者でもある」
笑いながらだ。高坂は話した。
「それと出雲の山中鹿ノ介か。九州には立花宗茂という者もおるそうだな」
「五人ですか」
「御主はその五人の中に入っておる」
「そうであればいいのですが」
「無論ここに入ってそれで天狗になるようでは天下一の侍にはなれぬ」
「それがし。天狗は好きではありませぬ」
そのことは真面目に返す幸村だった。この辺り彼は実に生真面目だ。
その生真面目さでだ。彼は言うのだった。
「ですから」
「ははは、天狗は嫌いか」
「上には上がおるものです」
ここでも生真面目に言う幸村だった。
「己の力に胡坐をかくなぞもっての他でございます」
「そうだな。その通りだ」
「それがし。あくまで己を磨き」
「より高みを目指すか」
「御館様が天下を取られるなら」
それならばというのだ。何処までも生真面目な幸村である。

「それがしはその御館様の手足となりましょう」
「十勇士といったな」
幸村の言葉をここまで聞いたうえで、である。
高坂は微笑んでだ。彼にこう告げたのであった。
「主を見る目は確かなようだな」
「それがしを主に選んだことが」
「左様。御館様が天下を治められ」
「御主はその御館様の手足となるか」
「そうして天下を安楽にしたいと思っております」
「その意気だ。御主は常に上を目指せ」
幸村のその澄み切った目を見て告げるのである。
「天下一の侍を目指すのだ」
「ではその為にも」
「先陣よ。駿河攻めの先陣見事に果たすのだ」
「はい、そうします」
幸村の言葉は何処までも毅然としていた。その声でだ。
彼は天下を目指すと話すのだった。その目指すものはあくまで遠いがそれでもだった。彼は今高坂に、そして天下に誓ったのだった。
程なくして駿河攻めの兵が集められ出陣となった。先陣はやはり幸村である。
武田の赤い鎧兜、そして真田の六文銭の旗もあるその中で赤い馬に乗った彼に対して。彼の周りに控える十勇士達が話すのだった。
「では殿、今からです」
「戦ですな」
「まさか殿が先陣を務められるとは」
「我等も感激でござる」
「よいか」
幸村は感激しているその十勇士達に話す。
「我等の敵は鎧兜に身を包み刀や弓矢を持つ者達ぞ」
「民には刃を向けぬ」

「そうですな」
「そして奪わぬ」
それもしないというのだ。
「卑怯未練なことはするな。それはわしが決して許さぬ」
「わかっております。我等もです」
「これから天下に名を残す十勇士です」
「それならば」
誇らしげに笑ってだ。馬上の幸村に話すのである。
「真田十勇士として相応しい戦をです」
「させてもらいます」
「頼むぞ。わしは御館様、天下の為に戦う」
「御武運は宜しいのですか？」
十勇士のまとめ役である海野が幸村に問うた。
「それは」
「そんなものはどうでもよい」
幸村はありのまま述べた。彼にはそうした欲はない。あるのはだった。

第四十五話　幸村先陣その五

「今言ったまでだ。わしは御館様と天下の為に戦うのみだ」
「御見事です。その殿だからこそです」
そうだとだ。霧隠が言う。
「我等もお傍にいたくなります」
「その通りですな。殿は危ういところもありますが」
それでもだとだ。三好清海が話す。
「そのまっすぐなことがよいのです」
「一途。いえ純粋ですな」
それだと話したのは根津である。
「殿は何処までもそうでござる」
「この戦国の世。それこそ松永弾正や宇喜多直家の如き者がおります」
穴山は彼等のことを忌々しげな口調で述べた。
「ですが殿はその知略も純粋でござる」
「正しきところに使っておられます」
そうだとだ。話したのは望月だ。
「武勇もそうでございますし」
「乱れた世を正すのは何か」
筧はそのことについて話す。
「それは正しき心にございます」
「殿程それがおありの方はおられませぬ」
三好伊佐の言葉だ。
「我等とて人は選びますぞ」
「左様、殿でなければ」
由利もだった。
「真田家だからです」
「我等、殿が大好きでござる」

最後に言ったのは猿跳びだった。
「どうして共におれましょうか」
「好きというのか」
「左様、やはり殿でなければ」
「我等も信濃におれませぬし」
「他の国に行っておりましたぞ」
「わしは人気があるのか」
自分ではだ。自覚していない言葉だった。
「そうなのか」
「そのことは保障します」
「殿を嫌う者はそうはおりませんぞ」
「我等だけではありませぬ」
十勇士達は話すのだった。幸村を本当に慕っているのがわかる。
こうした話をしながらだ。出陣し駿河に攻め込む。その武田軍の前に立ちはだかるのは。
殆んどいなかった。兵の殆んどを尾張に向けていてだ。残っている者は殆んどいなかった。義元の侵攻がここでは仇になった。
信玄はそれを見てだ。冷静に話すのだった。
「今川の兵は駿河に戻ってきておるな」
「はい、雪斎殿が戻してきておられます」
「確かにです」
高坂と山本が信玄に話す。今彼等は本陣にいる。そこで地図を開きながら話すのだった。
「ですがその足は速くはありませぬ」
「織田との戦で敗れたことが大きいかと」
「大きいであろうな」
それもその通りだとだ。信玄も話す。
「やはりあれだけの敗北となるとな」
「兵をまとめるだけでもですか」
「厄介になっていると」

二十四将達もここで言う。彼等は今本陣に詰めているのだ。
その中でだ。細面に強い顔立ちの男、山県が信玄に言う。
「御館様、それではです」
「そうじゃ。幸村を駿府まで向かわせよ」
そのだ。先陣の彼をだというのだ。
「駿府に兵はおるか」
「ほぼおりませぬ」
山本が答える。
「辿り着けばそれで、です」
「陥ちるな」
「はい、陥ちます」
「では陥としてからじゃ」
さらにだというのだ。信玄の頭の中で今兵が動いていた。
その彼等の動きを把握しながらだ。山本に話すのだった。
「遠江との境にまで進めと伝えよ」
「遠江との境までですか」
「相模との境までにも兵を出す」
そちらにもだ兵を出すことを忘れない。

第四十五話　幸村先陣その六

そしてだ。次はだった。

「遠江の北と東も占領するぞ」

「あの国もですか」

「これより」

「そうじゃ。今川の軍が戻るまでにじゃ」

そうするというのだ。信玄は慎重だが確実だった。

その話をしてだった。信玄は幸村達先陣を駿府に向かわせてだ。

二十四将達をそれぞれ向かわせてだ。今川の領土だった場所を占領していくのだった。国人達は雪崩を打って武田についていく。やはり主がいなくなったことが大きかった。

速かった。次から次に土地を己のものとしていく。まさに無人の野を行くが如しだった。

幸村もだ。駿府に突き進む。今川にあくまでも忠誠を誓う国人達が彼等に向かう。だがそれでもだった。

幸村はその彼等に突き進んでだ。両手の槍で馬から叩き落し倒していく。その強さはまさに鬼神であった。

「今のわしを止めることは誰にもできん！」

こうだ。軍の先頭を突き進みながら言うのである。

「止めたくば止めてみよ！わしは逃げも隠れもせん！」

「では我等もです！」

「共に！」

「いざ駿府へ！」

十勇士達も突き進みだ。そうしてだった。

彼等は瞬く間に駿府城を占領した。まさに瞬く間であった。

そしてだ。それからだった。

一気に西に向かい遠江との境まで到達した。そしてそこからだ。

遠江に入り込む。そこまでも一気にであった。

武田は僅かの間に駿河と遠江の半分まで占拠した。しかしここでだった。

雪斎率いる今川の軍がだ。彼等と鉢合わせしたのだ。それを受けてだ。

幸村はいぶかしむ顔になった。彼等を前にしてだ。

「雪斎殿は闘うつもりはないか」

「はい、そうです」

「そう仰っています」

十勇士達がそうだと話すのだった。

「ただ。兵達をです」

「国に帰して欲しいとのことです」

「左様か。ではこの話をだ」

どうするかというのだった。

「御館様にお伝えしよう」

「そうですね。それではすぐにです」

「御館様にお伝えしましょう」

雪斎のことはすぐに信玄にも伝えられた。それを受けてだ。

信玄もだ。こう言うのであった。

「ではじゃ。会おう」

「雪斎殿とですか」

「会われますか」

「兵達のことで」

「戦をせぬというのだな」

二十四将達にこのことを問う。

「そうだな」

「はい、先陣からの報告によりますと」

「そう言っています」

「戦はもうせぬと」

「ただ。兵を国に帰したいと」

「そう言っております」

「ならばよい」
それを聞いてだ。また言う信玄だった。
「その話受けよう」
「では。駿府においてですね」
「あの城で話されますか」
「そうされますか」
「うむ、そうする」
まさにそうすると話してだ。こうして話は決まった。
信玄は雪斎と駿府において会うことになった。そうして兵達の話をするのであった。
雪斎はだ。信玄にすぐにこう言うのであった。
「最早今川はありませぬ」
「滅んだということだな」
「左様でございます」
毅然としているがだ。敗北を認めている言葉に他ならない。
「義元様と氏真様が」
「残念なことじゃな」
信玄は雪斎が述べる前に話した。
「ああなってしまってはな」
「はい」
まただ。こくりと頷く雪斎だった。そのうえでの言葉だった。
「最早どうしようもありませぬ」
「では何故じゃ」
信玄は雪斎に問うた。

第四十五話　幸村先陣その七

「何故兵達をここまで連れて来た」
「先程も申し上げましたが戦の為ではございませぬ」
そのことはだ。また否定するのだった。
否定してからだ。彼は信玄にあらためて話した。
「しかし兵達には帰る場所があります」
「駿河、そして遠江だな」
「左様です。兵達を国に帰す為に」
「今ここにおるか」
「左様でございます。兵達は武田殿にお渡しします」
「して。それぞれの町や村に帰せというか」
「そのことを御願い申す」
雪斎は信玄の目を見据えて。願いを述べた。
「それが拙僧の願いであります」
「わかった」
信玄はまずだ。こう雪斎に述べた。
「ではじゃ。その兵達受け取ろう」
「有り難き御言葉」
「何、武田にとってもよいことじゃ」
信玄は不敵に笑ってだ。雪斎に返した。
雪斎もその言葉を受けてだ。そうして応えるのだった。
「その兵達が武田のものになるのじゃからな」
「くれぐれも故郷に」
「わかっておる。兵は民よ」
そうだというのだ。兵はだ。そのまま民だというのだ。
「その民を粗末にする者は天から報いを受けるわ」
「では」
「今川殿の宝確かに受け取った」

毅然とした声だった。そこには一点の曇りもない。
そしてその曇りのない声でだ。信玄はさらに述べた。
「粗末に扱うことはない」
「有り難うございます」
「してじゃ」
今度はだ信玄から言うのだった。
雪斎を見据えてだ。こう言ってみせたのだ。
「雪斎殿、御主はこれからどうされる」
「拙僧ですか」
「武田に来るつもりはあるまい」
それはだ。絶対にないというのだ。
「そうじゃな」
「失礼ながら」
「ははは、それはよい」
武田の臣にならないのはだ。いいというのだ。
「御主には御主の考えがある。わしはそのことについて言うつもりはない」
「左様ですか」
「では今川に行くか」
「そうさせてもらいます」
こう言うのである。
「尾張にいる義元様と氏真様の下へ」
「捉われの主の下にか」
「捉われになろうとも悔いはありませぬ」
雪斎の言葉はあくまで澄んでいる。そこには一点の曇りもない。
その曇りのない言葉でだ。彼は信玄に話すのだった。
「ですから」
「見事じゃ」
信玄はその彼を褒め称える言葉さえ出してみせた。
「その心、見事じゃ」

「見事ですか」
「では行くのじゃ」
「尾張に」
「わしは御主達のその背を見送らせてもらおう」
決してだ。手出しはしないというのだ。
話がまた決まった。そのうでだ。
信玄も雪斎もあることについて話そうとした。しかしここでだ。
二人のところにだ。一人の白髪の臣が来た。信玄の重臣の一人でもあり姉婿でもある穴山梅雪だ。その彼が急に来て言うのであった。
「御館様、尾張からです」
「織田からか」
「はい、織田殿からです」
その名を聞いてだ。雪斎の目が動いた。

第四十五話　幸村先陣その八

だが今はあえて何も言わずだ。信玄と穴山の話を聞くのであった。
信玄はだ。己の前に平伏する穴山にだ。こう問うのだった。
「織田は何と言っておるのじゃ」
「はい、義元殿の母上であられる寿桂尼様のことで」
「むっ」
その名を聞いてだ。信玄も雪斎もだった。
「これは面白い」
まずはだ。信玄が神妙な顔で述べた。
「丁度今言おうと思っておったところじゃ」
「拙僧もです」
そしてそれはだ。雪斎もだった。
彼もだ。信玄と同じく神妙な顔でだ。こう言うのだった。
「今お話しようとしていたのですが」
「しかし織田がそれについて言って来るとはのう」
「思わぬことです」
「まさかと思うが」
信玄は言うのだった。
「寿桂尼殿を」
「織田が」
「尾張で。面倒を見させてもらいたいとのことです」
こうだ。信長は言ってきたというのだ。
「屋敷や人は用意するからとです」
「ううむ、信じられんな」
「織田がそう言って来るとは」
このことはだ。信玄も雪斎もだった。
やはり信じられない。しかし同時にこうも言った。
「だがここでこう言うとは」

「織田信長、そうしたところまで目がいきますか」
「ただ。桶狭間で勝っただけではないか」
「心も向けますか」
「してどうされますか」
穴山はあらためて信玄に問うた。その顔を彼に向けてだ。
「ここは」
「織田がそう言ってくるならだ」
信玄は穴山の問いにすぐに答えた。
「わしとしてはだ」
「受けられますか」
「雪斎殿に任せようと思っておった」
「左様でしたか」
「しかし織田から話が来た」
信玄はまたこのことについて話した。
「自分でとはのう」
「それで織田にですな」
「うむ」
信玄はここでは頷く。
そしてだ。こう雪斎と穴山に話すのだった。
「どうやらただ戦や政にだけ秀でているようではないな」
「その他のものもですか」
「併せ持っておりますか」
「織田信長、容易な者ではあるまい」
信長をだ。こうまで評する。
「して雪斎殿」
「はい」
「ここはそうされるべきじゃ」
寿桂尼をだ。信長に任せるべきだというのだ。
「織田に任せられよ」
「してそれがしは」

「尾張に向かわれよ」
つまりだ。信長のいるその国にだというのだ。向かえと言うのだ。敵の国にだ。
そしてだ。信玄はこんなことも述べた。
「貴殿等を決して悪くはせぬ」
「そうですな。どうやら織田信長という者」
雪斎もだ。確かな顔で言った。
「人というものがわかっているようです」
「人がわかっている者は無体なことはせぬ」
信玄もわかっていることだった。伊達に武田の主ではない。
「義元殿、氏真殿だけでなくじゃ」
「寿桂尼様にも」
「そして貴殿等もじゃ」
雪斎達に対してもだ。そうだというのだ。
「だからじゃ。安心して尾張に行かれよ」
「さすればです」
話が決まったとしてだ。今度は雪斎から話してきた。

第四十五話　幸村先陣その九

「寿桂尼様はです」
「貴殿等が尾張までお送りするか」
「そうさせて頂きたい」
まさにだ。そうしたいというのだ。
「それで宜しいでしょうか」
「是非そうされるべきであろう」
信玄もだ。それがいいというのだった。
「やはりここは」
「左様ですな。それでは」
「では駿河は我等武田が治めさせてもらう」
あらためてだ。政の話も戻った。そのうえでの言葉だった。
「遠江の半分も然り」
「わかり申した。では民と兵のこと、くれぐれも御願い申す」
「国と民は何の為のものか」
そのこともだ。信玄は忘れていなかった。そのうえでの言葉だった。
「天下のものである」
「公のものでござるな」
「左様、我等はそれを預からせてもらう」
これが彼等の考えだった。国は自分のものではないのだ。天下のもの、それがわかっているからこそだ。万全に治めるというのだ。
これは信玄然り信長然りである。わかったうえで動いている彼等なのだ。
だからこそこう言えるのだ。その信玄の言葉であった。
「万全に治めさせて頂く」
「さすれば」
こうしてだった。雪斎は兵達を信玄に預け寿桂尼を引き取ったう

えでだ。己と共に義元の下に向かう今川の家臣達を連れてだ。今度は尾張に向かうのだった。

輿に乗る老齢ながら美麗さを見せている尼の服の女がだ。こう雪斎に問うてきた。

「和上、宜しいでしょうか」

「はい、何でしょうか」

「今川のことですか」

年老いた尼僧は今川の家のことを問う。彼女こそその寿桂尼である。義元の母にして今川家の賢母と言われるだ。その彼女なのだ。

その彼女がだ。暗い顔で雪斎に問うのである。

「最早」

「残念ですが」

雪斎もだ。寿桂尼に無念の声で答える。

「今川は国を失くしてしまいました」

「左様ですか」

「そして主たる義元様、御嫡男氏真様は」

「尾張にですね」

「我等が今向かう国におります」

そこにだというのだ。

「御無事だとのことです」

「左様ですか。ならよいのですが」

「織田は義元様と氏真様を生け捕りにしました」

馬を進めつつだ。雪斎は話すのだった。

「首を取られると思ったのですが」

「生け捕りですか」

「織田の家臣には相当な腕の者が幾人も折るようです」

「織田の兵は弱いと聞いていましたが」

「はい、兵は弱いです」

それは間違いないとだ。雪斎も言えた。ただし今川の兵も弱いこともだ。彼はよくわかっていたがそのことは今は言わずに話を進め

るのだった。
「ですが将はです」
「強いですか」
「そしてそうした豪の者もおります」
「織田には人が揃っていますね」
「確かに」
その通りだとだ。雪斎はまた述べた。
「織田の人材は相当なものです」
「だからこそ我等に勝ったのですか」
「そうなのでしょう。してやられました」
「まさか。今川が」
敗れたとだ。寿桂尼もまた無念の顔で話す。

第四十五話　幸村先陣その十

「そして私も驚いているのですが」
「織田家から。話が来たことですね」
「まことに思いも寄りませんでした」
寿桂尼もだ。それは想像もしていなかった。
「織田信長殿はうつけ殿ではなかったのですね」
「うつけ殿どころかです」
「恐ろしい方だったのですか」
「だからこそ敗れたのでしょう」
雪斎はまた厳しい顔で話した。
「今川は」
「左様ですか」
「そして織田信長ですが」
雪斎はさらに話すのだった。信長のことをだ。
「寿桂尼様のことをです」
「私を。引き取ってですね」
「その全てを賭けて御護りすると言っています」
「私の命なぞ惜しくはありませんが」
「いえ、それは」
「偽りは言葉に出しません」
寿桂尼の言葉はだ。強いものだった。
「私とて今川の者なのですから」
「だからですか」
「義元殿と氏真殿の御命は私が」
「救われますか」
「その為にも向かいましょう」
そのだ。尾張にだというのである。
「是非。信長殿にと思っています」

「尾張の蛟龍と言われています」
信長のこの通り名についてはだ。雪斎も知っていた。
ここでその名を出して寿桂尼にだ。信長の資質を話すのだった。
「恐るべき者です」
「うつけ殿ではなかったのですか」
「間違いなく」
こう話してだ。寿桂尼に注意を促すのだった。
「ですからお話されるにしてもくれぐれも」
「わかっています。まさに命をです」
「おかけになられたうえで、ですか」
「はい、信長と会いましょう」
「拙僧も御供させて頂きたいのですが」
雪斎はこう願い出た。ここでだ。
「そうさせて頂いて宜しいでしょうか」
「和上もですか」
「はい。宜しければですが」
「わかりました」
寿桂尼も答えた。それでいいとだ。
こう述べてからだ。彼女はこうしたことも話した。
「和上は信長殿にはですね」
「やはり。只ならぬものを感じています」
まさにだ。そうだというのだった。
「ですから。尾張では何としても」
「義元殿と氏真殿をですね」
「この身にかえてもです」
その為に尾張に行く。その気概も見せての言葉だった。
「そうさせて頂きます」
「わかりました。それでは」
「その様に御願いします」
「はい。それにしても今川が滅びるとは」

寿桂尼はこのことにはだった。何度もだった。
嘆息してだ。そうして言うのだった。
「思いも寄りませんでした」
「栄枯盛衰は世の常とはいえ」
「駿河が武田殿のものになりました」
「はい」
「では。これからは武田殿でしょうか」
寿桂尼は豊かな駿河を手に入れたことにより武田が今後天下において覇を唱えていくようになるのではないか思ったのである。
しかしだ。ここでだった。

第四十五話　幸村先陣その十一

雪斎はだ。こう彼女に話すのだった。
「いえ、織田でしょう」
「織田殿ですか」
「ただ我等を破っただけではない」
「そうなのです。おそらくですが」
「おそらく？」
「尾張に留まらずです」
一国にだ。終わらないというのだ。さすればだった。
「多くの国を手に入れていくでしょう」
「尾張以外に」
「そしてその全ての国を見事に治めるでしょう」
「政にも長けているというのですか」
「それは尾張に入れば見ることになるでしょう」
彼等は今遠江を西に進んでいく。そしてだった。
さらに三河に入ろうとしている。その中で話すのだった。
「尾張と。織田信長という者をです」
「さすれば」
「その全てを見ましょう」
こうした話をしてだ。彼等はだ。
尾張に向かうのだった。国を失くしてしまったがだ。彼等は尾張に向かいだ。彼等の戦いに入ろうとしていた。今川の為の戦いにだ。
その頃その尾張ではだ。信長は。
清洲の城において茶器を見ながらだ。池田にこんなことを話していた。
「見事じゃな」
「その茶器がですか」
「うむ。よい茶器じゃ」

満足した顔でだ。彼は池田に話す。
「これは何処の茶器じゃったかな」
「瀬戸です」
そこだとだ。池田は話した。
「瀬戸で焼かれた茶器です」
「瀬戸、そうかあそこか」
尾張にある。信長は尾張の地のことは全て頭の中に入れている。
それでだ。瀬戸の場所もすぐに把握してだ。池田にまた話すのだった。
「ではじゃ」
「どうされますか、一体」
「瀬戸の者達に伝えよ」
こう話すのだった。
「こうした茶器を次々と作れとな」
「これまで以上にですか」
「そうじゃ。田畑を耕し町を整える」
信長が常に進めていることだ。彼はまず政をする男なのだ。
「堤や道を築くことや特産品を作らせる以外にもじゃ」
「そうした茶器もですか」
「あと刀に槍もじゃ」
戦のこともだ。信長は忘れていなかった。
「やがて国友やそういった場所も手に入れじゃ」
「鉄砲もですか」
「造るぞ。しかしまずはじゃ」
「そうした茶器をですか」
「そうよ。茶器は売れる。売れてじゃ」
「国を富ましますな」
「だからじゃ。どんどん造らせよ」
また話すのだった。
「必ずじゃ。豊かになるぞ」

「わかりました。さすれば」
こうしてだった。今度は茶器であった。信長はそうしたものでも国を富まそうとしていた。彼の関心はあらゆるものに向けられていたのだ。
その中でだ。また話す彼だった。
「別に酒を入れるものを造ってもよい」
「茶器だけではありませんか」
「酒は飲めぬが他の者がどれだけ飲んでもよい」
こうだ。笑って話すのだった。
「好きなだけじゃ」
「だからですか」
「そうじゃ。茶も酒もじゃ」
どちらもだというのだ。

第四十五話　幸村先陣その十二

「その器をどんどん造るのじゃ」
「して売ると」
「それもじゃ」
「考えられますな。そうしたところまでとは」
「先に言った通り関所も廃しておるから人の往来も多くなってるしのう」
「余計にですか」
「ものを売るには人が多い方がよい」
信長はこんなことも言った。
「やはりな」
「だから関も廃されたのですか」
「無論不埒者も入る」
そのこともだ。信長はわかっていた。
そのうえでだ。こう池田に話すのだった。
「それに対してはじゃ」
「今の様に治安を徹底させますか」
「そうじゃ。どのみち悪党は捨てはおけぬ」
実際に罪を犯した者は尾張では徹底的に追われ罰せられる。そのことはだ。信長は既に行っている。だから尾張の治安はかなりいいのだ。
それもだ。彼は言うのだった。
「そうしておるからじゃ」
「して不埒者にはですか」
「国に入った時に容赦せぬ。それにじゃ」
「それに？」
「真に怪しい者には関も通じぬ」
この様なこともだ。信長は言うのだった。

「現にあの津々木じゃ」
「あ奴でございますか」
「そうじゃ。あの頃はまだ尾張に関はあったな」
「廃している最中でしたが」
「それでもあったな」
「はい、ありました」
しかしそれでもだというのだ。信長はその津々木から話を進めるのだった。
「そうじゃな。あったな」
「しかしそれでもあの男は入って来た」
「だからですか」
「関は案外役には立たぬ」
信長の目でだ。密偵やそうした者に対してはというのだ。
「忍の者は山道でも何でも入りおるわ」
「それに化けますし」
「左様じゃな。それを見分けるのは容易ではない」
忍の者達についても話が為されていく。
「現に久助や小六達じゃ」
「確かに。滝川殿は」
「見分けられまい、あれの手の者達が化けると」
「はい、確かに」
「忍に関は無意味じゃ」
こうまで言うのであった。
「だからじゃ。関は廃する」
「そうして人の往来を盛んにさせておられるのですか」
「入って来た者は国の中で悪さをさせぬ」
その為の治安であった。まさにそうであった。
「そういうことじゃ」
「そうでしたか。殿はそこまで考えておられたのですか」
「関も必要なら設けるがな」

こうした殉難さも併せ持っている信長だった。そうしたことも忘れてはいない。

そうした話をしてだった。彼等はだ。

信長は池田にだ。こう言うのであった。話が変わった。

「さて、それではじゃ」

「それでは？」

「馬に乗って来る」

笑ってだ。それだというのだ。

「馬にな」

「馬ですか」

「そうじゃ。馬じゃ」

笑顔のままの言葉であった。

「身体を動かしたくなったわ」

「では御供を」

「そうじゃな。他の者も呼ぶか」

池田だけでなくだ。他の者もだというのだ。

「馬に乗るのなら多い方がよい」

「だからこそですか」

「そうじゃ。他に誰がおる」

「今は」

池田は少し記憶を辿ってからだ。こう主に話した。

第四十五話　幸村先陣その十三

「何人かおりまして」
「ふむ。どういった面々じゃ」
「新助殿に勝三殿、それに菊千代殿です」
「また血の気の多い面々じゃな」
「だからこそいいのでは？」
「荒い乗り方ができるのう」
信長の笑みが変わった。楽しげなものにだ。
その笑みでだ。彼は立ち上がってまた述べた。
「では思う存分荒乗りをするぞ」
「はっ、それでは今より」
池田も応えてだ。そのうえでだった。主と共に部屋を出てだ。馬に乗りに行くのだった。
そうした面々とひとしきり馬に乗りだ。それからだ。
清洲に帰るとだ。信長に野々村が言ってきた。
「殿、駿河からです」
「ほう、あのことへの返事じゃな」
「おそらくは」
野々村は落ち着いた口調で信長に返す。
「それでなのですが」
「うむ。あちらは何と言ってきておる」
「了です」
つまりだ。いいというのだ。
「それで今駿河からこの尾張に向かっておられるとのことです」
「では太原雪斎もじゃな」
信長は野々村に言われる前にだ。この名前を出したのだった。
「他の今川の家臣達もじゃな」
「かなりの数がです」

「ふむ。来ておるか」
「はい、この尾張に向かってきております」
「左様か。そうなっておるか」
「して。会われますか」
野々村は静かな口調のままでだ。信長に問うた。
「寿桂尼様と」
「そのつもりで文を送った。それにじゃ」
「それにですか」
「雪斎も来たか」
この名前を再び出してだ。信長は思わせぶりな笑みを浮かべた。
その笑みでだ。こう野々村に話した。
「よいことじゃ」
「まさか。あの和上まで来るとは」
「いや、来るとは思っていた」
「そうだったのですか」
「今あの者達の主は尾張におる」
他ならぬ義元達だ。彼等を捉えていることがだ。ここで今川の者達に対して大きな効を見せていた。これは信長にとってはかなりよいものだった。
そしてそのよいものについてだ。信長は話すのだった。
「だからこそじゃ」
「そうですな。それは確かに」
「元よりそのつもりで文を送ったがのう」
「そうだからこそですな」
「会う。では清洲においてじゃ」
「この城において」
「会うとしようぞ」
こう話してであった。
信長はその寿桂尼、そして雪斎と会うことになった。それもまた、だった。信長にとっては大きな運命の会見になるのであった。

第四十五話　完

2011・6・10

第四十六話　寿桂尼その一

第四十六話　　寿桂尼

信長が清洲において寿桂尼との会見の場を設けることはだ。すぐに松平の耳にも入った。

そのことについてだ。元康は岡崎においてこう言うのであった。

「ううむ、これはまたな」

「考えられませんでしたね」

「少し」

こうだ。家臣達も言うのだった。見ればだ。

彼等の服は黄色になっている。服だけでなく脇差の柄もである。

また元康も黄色の服を着ている。松平の色は黄色になろうとしていた。

その黄色の中でだ。元康は言うのであった。

「迂闊だったが寿桂尼様のことは忘れていた」

「我等が独自に立つことに夢中で」

「ここ数日そのことばかりでしたから」

「そうじゃ。とても考えられなかった」

まさにそうだとだ。元康は家臣達に話すのである。

「そこまではな」

「そうですね。まことに」

「最初は武田殿が引き受けられるつもりだったようですが」

「織田殿が言われたそうで」

「そこがわからん」

元康は袖の下で腕を組みだ。いぶかしむ顔で首を捻る。

そのうえでだ。彼はこう家臣達に述べた。

「織田殿に何か利があるのか」

「それもわかりません」

「織田殿には何があるのか」

「寿桂尼様と御会いされて」
「何を考えておられるのか」
「織田殿は昔から思わぬことをされるのを好まれる」
元康は幼い頃のことを思い出して話した。
「その中にはじゃ」
「こうしたこともですか」
「ありますか」
「桶狭間でもそうだった」
元康は桶狭間のことも話に出した。
「あれはどう思っておった」
「はい、まさかあの様なことをされるとは」
「雨の中にいきなりですから」
「ああしたことをされるとは」
「それではですか」
「そうじゃ。あれを見てもじゃ」
こうだ。元康は話していく。
「織田殿は何をされるかわからんところがのう」
「では今度もですか」
「その思わぬことをですか」
「されているのですか」
「そしてじゃ」
言葉が付け加えられる。しかもだというのだ。
「それが必ず大きなことになる」
「大きなことにですか」
「それになっていく」
「桶狭間と同じくですか」
「そうなっていきますか」
「そうじゃ。そうなるのじゃ」
元康は強い顔になっていた。そのうえでの言葉だった。
「だから今度もじゃ」

「今度もですか」
「何かを考えておられますか」
「織田殿は」
「それが何かもわからん」
また言う元康だった。
「しかし今度も。大きなことを考えておられるだろう」
「そういえばです」
ここで言ったのは本多だった。彼であった。
「織田殿には今は」
「義元様と氏真殿だな」
「はい、御二人がおられます」
本多が言うことはこのことだった。
「ですから」
「人質にはなっているがそれは狙いではないな」
元康は読みはじめた。信長のその真意をだ。

第四十六話　寿桂尼その二

そうして話す言葉はだ。次第に強くなってきていた。
「そうじゃな」
「はい、そうだと思います」
「では」
元康は考えながら話していく。
「あれか。人か」
「おそらくは」
「そうじゃな。織田殿は多くの優れた家臣達を求めておられる」
元康は考えながら言葉を出していく。その読みをだ。
「さすれば。今川の多くの家臣もまた」
「とりわけ雪斎殿をですな」
本多が話した。
「あの方を望まれておられるかと」
「しかし強要はされぬ」
信長は無理強いしてまでだ。家臣を求めはしないというのだ。元康はこのこともだ。彼が幼い頃の付き合いからだ。信長のことを考え話すのだった。
「決してな」
「無理強いはされずともですな」
「そうじゃ。それはせぬ」
こう言うのである。
「無理強いをしても何にもならぬからじゃ」
「だからですな」
「そう。それでじゃ」
「その者が織田殿に完全に惚れ込んだならですな」
「そうした者が一番よく働く」
人の心についてはだ。元康もわかっていた。それでだった。

彼はだ。強く話すのだった。
「だからこそ。織田殿は」
「そうされますか」
「しかしそれは」
「かなり難しいのですが」
「そう思いますが」
本多以外の家臣達がここでこう話した。
「雪斎殿も他の方々もです」
「今川家への忠誠は無比です」
「そうした方々が宿敵であった織田に入るか」
「それは無理では」
「わしもそう思う」
元康自身もだ。そうだというのだ。
「そうおいそれとできるものではない」
「しかしですか」
「織田殿は」
「あの方は尋常ではない」
元康は唸る様にして述べる。
「それをされるだろう」
「では織田殿は今川殿の家臣団も加えられ」
「余計にですか」
「強くなられると」
「そのうえで」
「伊勢も志摩も手に入れられ」
そしてだ。さらにだというのだ。
「すぐに美濃もだ」
「まさか。美濃も」
「あの国もですか」
「織田殿は手に入れられますか」
「そうじゃ。織田殿は急激に大きくなられるぞ」

こう家臣達にも話す元康だった。
「まさにな」
「ううむ、左様ですか」
「織田殿はそこまでの方ですか
「秀でている方なのですか」
「伊勢に美濃を手に入れると」
どうなるかというのである。
「最早織田殿は天下一の勢力となられる」
「尾張に伊勢、美濃は土地は豊かですし」
「多くの港も持っております」
「しかも町も栄えています」
「それではですか」
「五万を超える兵も手に入れられる」
天下で今それだけの兵力を持っている家は近畿の三好だけだ。しかもその三好も今は三好三人衆と松永久秀の間で分かれている。つまりであった。
「織田殿はまさに天下一の家となられますか」
「間も無く」
「うむ。わしはそう見ておる」
まさにそうだと。元康はまた話す。

第四十六話　寿桂尼その三

そうしてだった。彼は言うのであった。
「その織田殿と手を結ぶべきだ」
「我が松平はですか」
「そうするべきですか」
「我等だけではだ」
どうかというのだ。その松平だけではだ。
「武田に勝てるか」
「いえ、それは」
「とても」
彼等もだ。そう問われるとであった。
暗い顔になり口篭りだ。こう言うしかなかった。
「こちらはこれから遠江の半分を手に入れてもです」
「五十万石が精々です」
「それに対して武田は二百万石を超えようとしております」
「それでは」
「しかもじゃ」
さらにだとだ。元康は言い加える。
「あの精兵と二十四将じゃな」
「敵としてはあまりにも手強いです」
「武田に競り合えるには我等は」
「無念ですが」
「しかし無念ではない」
そこは違うとだ。元康は言い加えた。
「それはまた違う」
「違いますか」
「そうなのですか」
「敵を知り、己を知る」

ここで言ったのはこのことだった。
「それは兵法の基本じゃ」
「だからですか」
「今は無念ではない」
「左様ですか」
「うむ、そうじゃ」
また言う元康だった。
「武田は強い。我が松平より遙かにじゃ」
「そしてそれに対するにはですな」
「織田殿と手を結ぶべき」
「そうあるべきですな」
「しかもじゃ」
さらにだというのだ。元康の言う言葉は多い。
「その織田殿にも舐められてはならぬ」
「対等の相手として手を結ぶ」
「そう御考えですか」
「誇りを見せるのじゃ」
それもだ。あえてだというのだ。
「松平の誇りをじゃ。それにしても」
「それにしても？」
「殿、といいますと」
「一体何が」
「この松平という名じゃ」
この名前についてだ。元康は話をはじめたのだった。
「これはただの地の名じゃからな」
「今後受領等に差し障りが出ますな」
「このままでは」
「わしは三河を治める」
既に実質的に治めようとしている。だがそれだけではなくというのだ。

「しかし名実共になる為にはじゃ」
「松平の名のままでは不都合」
「左様ですな」
「それを何とかしようぞ」
名の話にもなるのだった。元康も今度のことを考えていた。
そして信長もだ。今度は信行からだ。こう言われていた。
城中の茶室において茶を飲みながらだ。信行は兄に言うのであった。
「しかし。桶狭間で驚いたばかりだというのに」
「また驚いたというのか」
「左様です。寿桂尼殿とですか」
「うむ、会う」
そうするとだ。信長は弟にも話す。
「それは知っておろう」
「はい、既に」
知っていると答える信行だった。そのうえでまた話すのだった。

第四十六話　寿桂尼その四

「ですがそれでもです」
「言わずにはおれぬか？」
「はい。それで何を話されるおつもりですか」
「何、あれじゃ」
「あれとは？」
「窮鳥が懐に入ればじゃ」
信長は茶を飲みながら話すのだった。無論信行もそうしている。
二人で茶を飲みながらだ。そのうえで寿桂尼の話をするのだった。
「そうなればじゃ」
「救わずにはいられないというのですか」
「それもある」
「それだけではないともいうのですね」
信行は兄の言葉に即座に問い返した。
「左様ですね」
「言うのが早いのう」
「何となくわかりましたので」
信行も兄であり主である彼に返す。
「ですから」
「御主勘はよくなかったがのう」
「兄上に鍛えられました故」
「そう来たか」
「はい。とにかくです」
「うむ、その窮鳥使わせてもらおう」
政としてもだ。信長は話すのだった。
「あちらと話をしてから決めるが」
「しかし腹はおおよそ決められていますか」
「そうしておる」

信長は茶を飲みながら話す。
「しかしそれを確かにするのはじゃ」
「まだですか」
「うむ、それはあくまで話し合いからじゃ」
それからだというのである。それはあくまでなのだった。
「そこから確かにする」
「わかり申した。それでは」
「上手くいけば東の心配がなくなるだけでなくじゃ」
「他にもですか」
「頼りになる者達がわしの家臣になる」
楽しげな笑みになる。その笑みで弟に話すのである。
「あくまで上手くいけばじゃがな」
「上手くですか」
「わしは尾張一国では満足しておらぬ」
信行にだ。この場でもこう語るのだった。
「天下じゃ」
「あくまでそれを目指されますか」
「目指す。そしてじゃ」
「治められますな」
「天下を何の為に手に入れるか」
「天下も万人も無事に治める為」
信長の目指すものはもうわかっていた。信行も伊達に長い間彼の弟として傍にいる訳ではない。さすればわかることであるのだ。
そのわかることをだ。信長にあえて話すのだった。
「その為に」
「その通りじゃ。確かにわしには野心がある」
野心があることもだ。彼は隠さなかった。
「しかしそれでもじゃ」
「それでも。その野心は」
「野心といっても色々じゃ。様々な野心がある」

「そうですな。兄上の野心は」
「天下を無事に治める野心よ」
不敵な、それでいて涼やかな笑みだ。その笑みで茶を前にして話すのである。
「その野心よ」
「そうなりますな」
「そしてその野心の為にじゃ」
茶には今は手を付けず。弟に話す。
「勘十郎、そなたも」
「はい」
「他の者達もじゃ。力を貸してもらうぞ」
「及ばずながら」
「わしは弟達も多い」
妹達もだ。彼の弟達や妹達はかなりの数になるのだ。

第四十六話　寿桂尼その五

「そのどれもがわしの力になってくれるからのう」
「それがしだけではなくですか」
「それもまた有り難い。それではじゃ」
「この度のことも」
「力を貸してもらうぞ」
「はい、それでは」
信行は一礼して信長の言葉に応えた。そうした話をしてだった。
彼等は茶を飲んだ。茶室で行われるべきそれに戻ったのだ。そしてそれから数日後。清洲の城内において。
信長は寿桂尼と会った。信長は平手を、寿桂尼は雪斎をそれぞれ傍に置いてだ。そのうえで互いに対して会談をはじめるのだった。
まずはだ。寿桂尼からだった。信長に対して手をついて一礼する。信長もその礼に応える。そのやり取りが終わってからだ。こう述べるのだった。
「まずはです」
「うむ」
「義元殿、氏真殿のことです」
毅然として信長を見据えての言葉である。少なくとも彼女は敗者ではない。
「有り難うございます」
「礼を述べられるか」
「その御命を今もお救い下されていることにです」
礼を述べたというのである。
「そういうことです」
「左様でござるか」
「そしてです」
礼を述べてから。さらにだった。

「その義元殿と氏真殿ですが」
「安心されよ」
信長も寿桂尼と対してだ。正面から言うのだった。
「その命を取るつもりはない」
「そう仰るのですね」
「捕らえて首を刎ねるのならその場でそうしておる」
だから。今はだというのだ。
「それをするつもりはない」
「わかりました。それでは」
「して」
義元と氏真の安全を確かだとしてだ。それからだった。
信長の方からだ。こう話すのであった。
「貴殿のことだが」
「私ですか」
「ここに御呼びしたのは他でもない」
信長の方から話すのはそのままだ。彼が話し寿桂尼が受ける。そうした流れになっていた。
そしてそのうえでだ。信長が寿桂尼に話すことは。
「尾張に寺を用意してある」
「寺ですか」
「そこで暮らされるがいい」
こう話すのである。
「貴殿さえよければ」
「私を人質に取られるというのですね」
あえてだ。言いにくいこのことをだ。信長に言ってみせるのだった。
「左様ですね」
「そう思われるか」
「違うというのでしょうか」
「そう思われるなら結構」

そしてだ。信長もだった。寿桂尼のそのあえて言ってみせた言葉を正面から受けそのうえでだ。これまた正面から返したのだった。
「しかし」
「しかしですか」
「貴殿がここにいようと」
尾張にだ。彼の国にだというのだ。
「そして他の国に行かれるのもまた」
「いいというのですね」
「貴殿の好きにされよ」
「左様ですか」
「しかし」
だが、だとだ。信長はここで毅然として寿桂尼に話してきた。
「だからといって義元殿、氏真殿に何かをするということはない」
「人質にはせぬと」
「貴殿に対してはしない」
こう言うのである。

第四十六話　寿桂尼その六

「それは約束しよう」
「その言葉信じて宜しいのですね」
「わしも言ったことは守る」
この場合はだ。信長にも意地がある。だからこそだ。
「それは何があろうともせぬ」
「ですか」
「うむ。して」
「私がどうするのか」
「貴殿の好きな様にされよ」
あくまで彼女自身に任せるというのだ。しかしだ。
信長はこう言ったうえでだ。再び寿桂尼に話した。
「しかし貴殿が尾張に住まわれるなら」
「その場合は」
「住む場所を用意してある」
まずはこれであった。住からだった。
「尼寺を。貴殿に相応しい場所を」
「その寺に入られよと」
「尾張に入るなら」
それならばだとだ。やはり信長は寿桂尼にその決断を委ねていた。
そのことについてだ。信長はあえて何も言わないというのである。
信長の言葉と考えを聞いてそのうえで、であった。寿桂尼は一旦雪斎に顔を向けた。そうして彼に対して尋ねたのである。
「ここはどうするべきだと思いますか」
「尾張に留まられるか若しくは」
「他の国に行くべきか」
「他の国に行くならばです」
まずはその場合から話す雪斎だった。

「都が宜しいでしょう」
「京の都ですか」
「はい、寿桂尼様の御実家もありますし」
彼女は元々公卿の家の娘だ。その家から今川の力を頼りに縁組を勧められそのうえで今川に嫁ぎ今に至るというわけなのだ。
その彼女が実家に戻るのなら道理が通るというのである。雪斎はまずはそこから話すのだった。
そしてさらにだ。雪斎はこうも話した。
「ただ」
「都のことですね」
「そうです。やはり今の都は」
「危ういですね」
「ですから」
都は進められない。これが雪斎の考えだった。
そのうえでだ。雪斎はさらに話すのだった。
「かといっても他の国もです」
「勧めないというのですね」
「そうです。相模もありますが」
盟友北条の国だ。その国もあるにはあるというのだ。
「ですが。どうも北条もです」
「私が行こうともですか」
「厄介になるしかないでしょう」
北条家にとってだ。そうでしかなくなるというのだ。
「どうも。拙僧には勧められません」
「厄介になるだけならば」
「拙僧は寿桂様には安楽に」
最初の願いはそれだった。
「かつ幸せに過ごして頂きたいのです」
「厄介になるだけならば」
「それは決して幸せではありません」

「だからですか」
「はい、それに相模よりもです」
その北条よりもと前置きしてからだ。雪斎が言う相手は。
「やはりです」
「織田殿ですね」
「そうです。織田殿です」
今彼等がいてそして目の前にいるだ。その相手だというのである。
「織田殿の好意を受けるのが最もよいかと」
「それはやはり」
「義元様と氏真様がおられます」
それが大きいというのだ。
「そして我等もです」
「和上達も」
「今川の者達は寿桂尼様と共にいます」
そのだ。彼女と共にだというのだ。

第四十六話　寿桂尼その七

「ですから」
「私だけでもない」
「何があろうと。御護りします」
そうするというのだ。忠誠心は健在だった。
「ですから」
「それではですね」
「はい、お任せ下さい」
「では私はです」
どうするかとだ。寿桂尼は意を決した顔になるのだった。
そうした話をしてだ。彼等はあらためて信長に向き直りそのうえでだった。
信長に対してだ。寿桂尼が話した。
「それではです」
「どうされるか」
「御願いします」
一礼してからだ。信長に話すのである。
「信長殿の好意を」
「そうして頂けるか」
「はい、それでは」
「うむ。では何の憂いもなく過ごされよ」
信長もだ。満足して応えるのだった。
「この国で」
「そうさせてもらいます」
こうしてだった。寿桂尼は尾張の中でも名のある名刹に入りそのうえで穏やかに過ごすことになった。その近くにある寺にだ。
義元と氏真も移されてだ。そこに雪斎達が向かうことも許された。
雪斎は晴れて主と再会することができた。見ればその姿は。

「殿、お元気そうで何よりです」
「うむ、確かに捕らえられておる」
それは確かだと答える義元だった。しかしだ。
服もいいものを着ており髷も眉も整えている。無論髭も丁寧に剃られており歯黒も塗られている。いつもの義元がそこにいた。
無論氏真もだ。何の乱れもない。まるで駿府にいる様な姿でだ。
雪斎達の前にいた。
そしてであった。彼等は義元にさらに話すのだった。
「しかし。あの織田信長という男」
「思ったよりも礼節を弁えているのでしょうか」
「無作法なうつけ者と思っていましたが」
「違いましたか」
「うむ、麿もじゃ」
その義元もだ。こう言うのだった。
「実際にそう思っておった」
「あの者がうつけ殿だと」
「そうですな。あれではです」
「そうとしか思えません」
「それは天下に知られていました」
それだけだ。信長の傾奇者ぶり、それを知らぬ者からはうつけぶりは知られていたのだ。雅を尊ぶ今川家では傾奇は知られていなかったのだ。
その為にだ。彼等は信長を見誤っていた。そのことをだ。雪斎が言うのだった。
「殿、尾張に入って気付いたのですが」
「奇妙な身なりの者が多いのう」
「はい、かなり」
こう言うのである。
「どうやらあれはです」
「何でも傾奇者というらしいのう」

「はい、左様です」
「妙な連中じゃ」
義元は首を捻りながらその彼等のことを話す。
「何じゃ？尾張だけかあの連中は」
「どうやら他の国にも。都にも近頃は」
「おるのか」
「しかし尾張程多い国はありますまい」
雪斎も首を捻りながら言う。
「特に前田慶次という者ですが」
「あの者か」
「はい、あの大男です」
慶次のその大柄さも話される。
「とにかく何から何まで派手で」
「あんな者は駿河にはおらんかった」
「遠江にも三河にもです」
「麿は風流や雅が好きじゃ」
とにかくだ。そうした世界こそが義元の世界だ。元々駿河は都落ちした公卿達が集ってきていた。それで駿府は小京都とさえ呼ばれているのだ。

第四十六話　寿桂尼その八

だからこそだ。彼は言うのだった。
「あの様な者達はまことに」
「ですが殿」
「それでもじゃな」
「はい、そのせいで」
「織田を見誤っておったか」
「外見だけではありませんでした」
今川では雪斎だけが気付いていたことだ。今となっては言っても遅いがだ。
「まことの力を持っているのかも知れませぬ」
「そういえば尾張じゃが」
氏真もここで言うのだった。
「実によく治められておるのう」
「清洲に来るまで見てきました」
「田畑も町も」
他の家臣達もここで話す。
「どれも見事です」
「百姓達も町人達も明るく過ごしております」
「しかも人の行き交いも多いです」
何から何までだ、充実しているというのである。
「堤も道も整っておりますし」
「これが尾張ですか」
「尾張の治でしょうか」
「正直なところじゃ」
また話す義元だった。
「駿河よりもよく治められておるわ」
「確かに。あの駿河よりもです」

「この尾張は治められています」
「まことに見事です」
「ここまでとは」
「戦よりも政じゃ」
義元もだ。こうした考えだった。彼は戦よりも政の方を得手としている。その彼が見てもだ。信長の政はどうかというのである。
「ううむ。織田信長という男」
「かなりの男ですか」
「うつけではありませんか」
「最早麿は国の主ではない」
そしてだ。義元は今度はこう言うのであった。
「虜になっておる。さすればじゃ」
「さすればですか」
「どうされるというのでしょうか」
「出家する」
そうするというのだった。
「元々僧じゃった。昔に戻るとするか」
「では我等は」
「どうせよと」
「最早仕える家はないのじゃ」
そのだ。今川家はだというのだ。
「では。わかるな」
「織田に仕えよと」
「そう仰るのですか」
「御主等が選ぶのじゃ」
決断はだ。彼等に任せるというのだ。
「その場合はな」
「我等が織田を認めればですか」
「そうせよというのですか」
「織田に仕えよと」

「そうなのですね」
「うむ、選ぶがいい」
義元はまた告げた。
「御主等がな」
「殿、では」
雪斎が真摯な顔で義元に問う。
「我等に新しい主の下で」
「生きるのじゃ。御主等が浪人になり路頭に迷うのを見たくはない」
義元の本音だった。偽らざる。
「碌を育み。戦に政に生きるのじゃ」
「国を失くした我等にそう言って頂けるのですか」
「国を失くしたのは麿じゃ」
雪斎達ではない。こうも告げるのだった。

第四十六話　寿桂尼その九

「だからじゃ。生きよ」
「新たな主の下で」
「この織田で」
「織田が。御主等が仕えるに相応しい者ならばじゃ」
その場合はだとだ。あくまでこう限定はするのだった。
「そうするのじゃ」
「暫し考えても宜しいでしょうか」
雪斎は言った。その真摯な顔のままで。
「このことは」
「織田を見極めたいか」
「はい、これまで我等の主は殿でした」
義元への忠誠心、これは絶対のものである。だからこそのこの言葉なのだ。
「二君に仕えずという言葉もあります」
「それがしもです」
「無論それがしも」
他の者もだ。雪斎に続く。
「確かに。我等はこのままでは浪人です」
「ですがそれでも」
「だからじゃ」
あくまで引かない彼等にだ。義元は主として穏やかに話す。
「そなた等が織田信長を見てじゃ」
「そうしてですか」
「そのうえで」
「それで決めるがよい」
あらためて己の家臣達に話すのである。
「よいな。それにじゃ」

「それに？」
「それにといいますと」
「最早今川は滅んでおるぞ」
このことを告げるのもだ。忘れてはいなかった。
「駿河も遠江も失ったではないか」
「しかし殿はおられます」
「今ここに」
「いいや、麿は最早大名ではない」
無表情になり首を横に振ってだ。義元は答えるのだった。
「国を失くせば最早じゃ」
「だからだというのですか」
「国を失くせば最早殿ではない」
「そう仰いますか」
「そうじゃ。何故大名かじゃ」
義元はそのことから定義付けて話すのだった。
「その土地を治め家臣達に土地を与えられるからじゃな」
「はい、左様です」
「その通りです」
これは鎌倉の頃から変わりない。家臣達とて霞を食べて生きている訳ではない。土地とそこから得られるものを手に入れてだ。そうして生きているのだ。
無論義元もこのことはよくわかっている。そのうえでの話だった。
「しかし麿は最早一石も持ってはおらぬ」
「だからですか」
「我等の殿ではない」
「そう仰いますか」
「その通りじゃ。その麿が言うことはじゃ」
かつての主の言葉、まさにそれになっていた。
そのかつての主としてだ。義元は彼等に話す。
「新しい主に仕えよ」

「織田に」
「織田が我等が仕えるに足る者ならばですか」
「そうじゃ。そうするのじゃ」
彼等を見渡しながらの言葉であった。
「よいな。麿が最も嫌なのはじゃ」
「我等がこのまま浪人として野垂れ死ぬ」
「そのことですね」
「その通りじゃ。それだけはしてくれるな」
くれぐれもといった口調で。義元は告げる。
「そなた等が野垂れ死ぬのだけは嫌じゃからな」
「だからこそ他の大名に仕えるべき」
「左様ですか」
「御主等ならどの家でも用いてくれる」
彼等の力はだ。主であった彼が最もよくわかっていることだ。
「武田でもよかったのじゃが」
「武田殿にお仕えするのなら最初から駿河に残っています」
「そして今すぐここを去ります」
武田については彼等は毅然として述べた。
「実際に武田殿に仕えることを選んだ者も大勢おります」
「しかし我等はです」
あくまで義元を慕って来た。そしてその義元の言葉を受けたうえで話しているのである。

第四十六話　寿桂尼その十

「今更武田殿のところに参るのも」
「それに元々あの家の水は合わぬと思いましたから」
「だからこそです」
「ではじゃ。尚更じゃ」
彼等がそう言うのを聞いてだ。また告げる義元だった。
「織田を見極めるのじゃ」
「ううむ。傾奇者をですな」
「あの御仁を」
「少なくとも麿を破っておるぞ」
海道一の弓取りと言われた彼をというのだ。
「やはりそれなりの資質はあろう」
「拙僧はそう思います」
雪斎はこう言って信長の資質について言及した。
「ただ。それでもです」
「和上は織田にどれだけのものを求めておるのじゃ？」
「あの御仁何かと天下を言います」
雪斎がここで言及するのはこのことだった。信長が常に天下を見てそのことを語っていることは彼の耳にも入っている。さすればというのだ。
「それならばです」
「天下を手に入れ治められる程の者かどうかか」
「それができるならばです」
仕える。こう言うのである。
「拙僧、殿の御言葉通りに致します」
「左様か。流石和上じゃ」
雪斎のその確かな言葉を聞いてだ。義元は思わず唸った。
そしてそのうえで他の家臣だった者達を見回しだ。彼等にも問う

のだった。
「して御主達はどうするのじゃ」
「我等は雪斎殿と同じです」
「左様です」
つまりだ。雪斎の目に頼るというのである。
「雪斎殿の御目に狂いはありませぬ」
「さすればです」
「その目に従わさせてもらいます」
「そうじゃな。それがよいな」
義元もだ。彼等の雪斎の目を信じることをよしとした。
「和上の目ならば問題はないからのう」
「有り難き御言葉」
「では和上」
あらためて雪斎に告げる。
「織田信長、よく見ることじゃ」
「はっ、さすれば」
「しかし。天下を目指すか」
義元は信長がそう考えていると聞いてだ。そのうえで腕を組み考える顔になりだ。こう述べたのだった。
「前ならばおおうつけと笑っておったが」
「今は違いますか」
「それも」
「うむ、笑えなくなったわ」
しみじみとした口調になっている。信長のことを知りだしてだ。
「麿は見誤っておったな」
「織田信長という男」
「あの御仁を」
「うつけではなかった」
悔恨の言葉だった。
「そしてじゃ。その言葉もじゃ」

「天下を狙うというですか」
「その言葉もまた」
「おそらく身の程知らずなものではあるまい」
そのこともだ。わかってきたといった言葉だった。
「だからじゃ。麿は思う」
「我等が織田の家臣になると」
「うむ。そうな」
そしてだ。さらに話すことは。
「そして。織田も御主等を粗末に扱うまい」
「外様でしかもかつて敵であった我等をですか」
「粗末に扱わないと」
「そう思われますか」
「織田の家臣は多い」
その多さと質のよさもだ。ようやく天下に知られてきているのだ。
それもこれも桶狭間で勝ってからだ。あの戦は織田家の家臣達のことも知らしめたのである。

第四十六話　寿桂尼その十一

「そして様々な出自の者がおる」
「この国の者だけではないですか」
「尾張者だけでは」
「伊勢や美濃、果ては百姓だった者もおるな」
「そして傾奇者も」
「雑多な者達が」
「雑多でも優れた者なら誰でも取り立てる」
これは今川にはないことだった。名門であるが故に家臣達はある程度定まってしまっていたのだ。このことは今更ながら気付いたことである。
「そうした家じゃな」
「では我等も働けばですか」
「織田において厚遇される」
「そうだというのですか」
「うむ、そうなるであろう」
義元はここでも確かな声だった。その声で告げたのである。
「安心せよ。織田におれば悪くはならぬ」
「だからこそ。織田に」
「この尾張に」
「何度も言うがよく考えるてじゃ」
このことを言うのは忘れない。しかしこれでおおよそのことは話されたのだった。
義元は家臣達に話し終えた。そして次は嫡子である氏真に顔を向けて問うのだった。
「御主はどうする」
「これからのことですな」
「そうじゃ。まさか駿河に戻るとは言うまい」

「ははは、それはありませぬ」
氏真自身もだ。そのことについては笑ってないと述べた。
「今更。それは」
「ではどうするのじゃ」
「そうですな。三河に行きますか」
「三河にか」
「室と共に竹千代のところに行きます」
正室と共にだ。そうするというのである。
「そしてそこで蹴鞠に和歌等して過ごします」
「そうするというのじゃな」
「最早駿河も遠江も失いましたし」
それならばだというのだ。氏真は随分と割り切っていた。
「さすればです」
「左様か。そなたはそれでよいのじゃな」
「はい。何の未練も思うところもありません」
「まあ竹千代もそなたを邪険にはせん」
氏真と元康はそれこそお互いに幼い頃からの付き合いだ。氏真は人質に来た元康を何かにつけ可愛がっていたのだ。氏真は少なくとも心根の悪い男ではない。
だからだ。義元も今こう言うのであった。
「では三河に行くがいい」
「はっ、それでは」
「では麿はじゃ」
義元自身はどうするか。このことをあらためて話すのだった。
「髪を剃り僧侶に戻るか」
「では殿もまた」
「都に上りそこで暮らす」
無論だ。僧侶としてである。
「織田殿にもそう言っておこう」
「ではもう二度と」

「還俗もせぬ」
俗世に戻ることもだ。ないというのだ。
「そういうことじゃ」
「御決意はやはり」
「もう決めた」
彼自身のことについてもだ。迷いなく言うのだった。
「その様にな」
「わかり申した。それでは」
「殿、お元気で」
「達者でな」
話はだ。何時しか別れのやり取りになっていた。
そうした話をしてだ。遂にであった。
義元は再び出家して都に向かうのだった。信長もその彼を清洲において見送った。
そしてそれが終わってからだ。彼は城の中で家臣達の言葉を受けていた。
「伊勢と志摩は間も無くです」
「整いそうです」
「左様か。ではじゃ」
今回は伊勢と志摩だけでなくだ。さらに続けるのだった。

第四十六話　寿桂尼その十二

「近江はどうじゃ」
「はい、そのことですが」
丹羽が信長に対して話す。
「順調に進んでおります」
「そうか。あちらも乗り気か」
「左様です。あちらにしても少しでも頼りになる盟友が欲しいようで」
「そうじゃろうな。越前の朝倉はな」
この家の名が出て来た。織田にとっては同じ土岐家の家臣筋同士の間柄である。だが家柄は朝倉の方が高くそれが両家の間を微妙なものにもさせている。
その朝倉の名を出しだ。信長は表情を曇らせていた。
そしてその曇らせてしまった顔でだ。こう言うのであった。
「主が頼りないからのう」
「義景殿は相変わらずの様です」
坂井がこう述べる。
「やはり和歌や舞曲に興じてばかりで」
「戦や政はとんとじゃな」
「実質宗滴殿が取り仕切っておられます」
「それではいかんな」
信長は坂井の話を聞いて一言で述べた。
「宗滴殿も高齢じゃ。それで何時までもそうしておるとじゃ」
「朝倉も傾く」
「そうなりますか」
「只でさえ一向一揆に悩まされておる」
越前の北に加賀がある。加賀は石山、長島と並ぶ一向宗の拠点なのだ。そこに隣接する朝倉が一向宗の攻撃を受けない筈がない。実

際に彼等は一向宗に散々苦しめられてきているのだ。信長もこのことを話に出したのである。
「それでそんな有様ではじゃ」
「宗滴殿がいなくなれば」
「まさに終わりですな」
「心もとないのう」
信長は今は朝倉、とりわけ宗滴の立場になって考えて述べた。こうして立ち位置を変えて考えてみてだ。信長は策を練ったりするのだ。
その宗滴の目からだ。信長はまた言った。
「朝倉には力もある」
「石高にしておよそ八十万石」
「兵は二万を動かせます」
「そして都にも近い」
このことも指摘した。
「天下を取ろうと思えば取れぬこともない」
「しかし当主の義景殿は動かれない」
「どうもやる気がない様です」
「やはり都の文化ばかり追い求めておられる様です」
「そんなものは都に入ってからじゃ」
信長は都のそれについては一言で終わらせた。
「しかも溺れては駄目じゃ」
「義景殿は溺れておられる」
「左様ですか」
「そうなっておる」
まさにそうだと話す信長だった。
「何ごとも溺れては駄目じゃ」
「ですな。これでは朝倉も」
「危ういですな」
「しかし力はある」

朝倉のその力のことも忘れてはいなかった。
「敵に回せば侮れぬぞ。とりわけじゃ」
「宗滴殿ですな」
柴田もまた、だ。彼の名を出した。
「あの御仁が」
「前からわしを高く買っているそうじゃが」
「ほう、殿をですか」
「わしの何処がいいのか」
笑いながらだ。柴田に話すのである。
「この様ないい加減な者をのう」
「我等と同じなのでしょう」
佐久間はそれだとだ。主に話す。
「あの御仁も殿に見たのでしょう」
「わしにか」
「確かに殿はいい加減というか何を考えておられるかわかりませぬ」
信長の奇矯なところをだ。佐久間は指摘するのだ。
「しかしそれがです」
「それがか」
「大きなことになっているのです」
「まあわしは興味のあることは何でも己で身に着ける」
これは馬にしろ水練にしろ鉄砲にしろ兵学にしろだ。ひいては舞や古典に関してもだ。信長はとにかく興味のあるものは己で身に着けないと気が済まない性分なのだ。
そのことも己でわかっている。彼は今このことを言うのだった。
「それはあるが」
「それです」
「これがか」
「それは確かに突拍子もないことです」
何でも興味のあるものは身に着ける。確かにそれは突拍子もない。
しかしそれで培われるもの、佐久間はそれを言うのである。

「ですが何でも身に着けられるからです」
「わしは大きくなるか」
「その殿だからこそ」
それでだという佐久間だった。
「我等も仕えておるのです」
「左様か。あの老人もか」
ここで何気なく平手を見る。彼のことはこう言う。
「尾張の年寄りは格別口喧しいが越前の年寄りもそうなのかのう」
「殿、何を言われますか」
早速だ。平手は小言で返した。
「その様ないい加減なことではです。何時どうなるか」
「わかったわかった、やはり爺の小言は天下一じゃ」
苦笑いでその平手に応える信長だった。いつもの流れになる。
「全く。おなごや若いおのこだけでなく年寄りにも好かれるのか」
「殿、おふざけも大概にです」
「わかっておるわ」
こうして平手の小言から何とか逃れようとするのだった。そうした話の中でだ。彼は伊勢、志摩への動きを確かにしていくのだった。

第四十六話　完

２０１１・６・１８

第四十七話　伊勢併呑その一

第四十七話　伊勢併呑

信長の前にだ。雪斎がいた。その彼が信長に対して言うのである。
「殿はです」
「出家するというのか」
「はい、そうされるとのことです」
このことをだ。信長に話すのである。
「そのことをお伝えに参りました」
「左様か」
「そして。我等は」
見れば彼の後ろには今川の家臣達が揃っている。いないのは嫡男の氏真だけだ。彼は既に元康を頼って三河に落ち延びているのだ。
その雪斎が今川の者達を代表してだ。信長に言うのだった。
「殿に言われました」
「何とじゃ？」
「織田殿を見極めよと」
このことをだ。あえてそのまま言うのだった。
「殿はそう仰いました」
「左様か」
「そうです。そしてです」
「見極めてからだというのじゃな」
信長は話の先を読んだ。そのうえで話すのだった。
「御主等の身の振り方をじゃな」
「その通りです。そのこともです」
「わかった。では見るのじゃ」
信長は鷹揚に笑って雪斎に返した。
「わしも隠さぬ」
「隠されませんか」

「うむ、隠さぬ」
その鷹揚な笑顔での言葉だ。
「最初から隠すつもりはない」
「では。我等もです」
「見るか。それではな」
こうした話をしたのだった。実際に雪斎は信長を見るのだった。
信長の一挙手一投足を見ていた。その中でだ。
彼等はだ。こう信長について話す。
「あまり寝てはおられぬな」
「しかも始終身体を動かしておられるか書を読まれるか遊ばれるか」
「政をしておられる」
「かといって休まれぬ訳でもない」
身体を休めることもしているというのだ。
「よく横になってうとうととされておられる」
「そして茶をよく飲まれるな」
「ですな。それもかなり」
「とにかく茶がお好きです」
「確かにのう」
彼等の中にいる雪斎もだ。その通りだというのだった。
そして彼はだ。信長についてこんなことも話した。
「茶はよく飲まれるがじゃ」
「茶を」
「しかしと言われますか」
「うむ。あの方は酒は飲まれぬな」
彼が今言うのはこのことだった。
「それも全くじゃ」
「そういえば酒を飲まれるとは聞いていませんな」
「酒のことは一切話にも出ない」
「甘いものを好まれるが酒はありませぬな」
「それも全く」

「乱れられることはないか」
酒乱の気はだ。信長にはないというのだ。
「ただ。舞やそういったものはお好きな様じゃな」
「とりわけ相撲ですな」
「御自身もよくやられているし」
「それがお好きな様ですな」
「それと鷹狩りに馬に水練」
そういったものも挙げられていく。

第四十七話　伊勢併呑その二

「鍛錬になるものがじゃな」
「ですな。それを考えますとあの御仁はです」
「酒で乱れず身体を動かすことを好まれる」
「そうした方でございますか」
「如何にも酒を飲まれそうですが」
一人が先入観から話す。信長のうつけという噂からだ。さぞかし大酒を飲むかと思っていたのだ。だがその見方は裏切られたのである。
雪斎はだ。信長と酒についてこう彼等に話した。
「いささか話には聞いていたが」
「織田殿が酒を飲まれぬこと」
「そのことをでございますか」
「うむ。聞いてはおった」
そのことを今考えている顔で話すのだ。
「しかし。あそこまでとはのう」
「全く飲まれませんな」
「茶を飲み書を読まれます」
「それもかなりの量の書を」
「やはりうつけ殿ではない」
雪斎は今では確信していた。
「むしろじゃ」
「かなりの方ですか」
「やはり」
「そう思う。しかしじゃ」
それでもだとだ。ここで雪斎は言葉を変えてきた。
「まだじゃな」
「左様ですな。決めるのはまだです」

「これからです」
「織田殿はまだ尾張一国じゃ」
これが現実だった。信長はまだ尾張一国に過ぎない。しかも桶狭間で勝ってからこれといって動いていないのだ。これではだった。
「それで。決めるのはじゃ」
「早計ですな」
「もう少し見てから」
「まあ伊勢じゃな」
雪斎の目が光ってだ。その国だというのだ。
「あの国をどうするかじゃ」
「伊勢を手中に収めればですか」
「かなりのものでございますが」
「兵で取ろうと思えば時間がかかる」
雪斎はこの現実を述べた。伊勢は広く多くの国人に別れている。それでは手中に収めるのに時間がかかるのも一目瞭然のことなのだ。
そのことを述べだ。さらにだった。
「手間取っていては斉藤も動く」
「織田殿にとってはまさに仇敵のあの家も」
「油断なりませんな」
「しかし。近頃」
その斉藤がだ。どうかというのだ。
「動きがありませんな」
「左様、当主の義龍殿が病と聞いていますが」
「かなり重い病なのか」
「そうなのか」
「おそらく」
雪斎がまた言う。その目の光を強くさせて。
「義龍殿は死に至る病であろう」
「死病でござるか」
「その病ですか」

「そうじゃ。それ故にじゃ」
斉藤は動けぬというのだ。肝心の主の病故にだ。
「そうなっておるのじゃろう」
「織田殿はそれを承知なのでしょうか」
「斉藤のことを」
「承知しておられるだろうな」
雪斎はそのことも察して言った。

第四十七話　伊勢併呑その三

「そして伊勢じゃ」
「あの国ですな」
「果たしてどうするか」
「伊勢だけで足りぬか」
まだあるというのだ。雪斎はさらに話す。
「もう一つか二つあれば決めてもよいか」
「一つか二つですか」
「織田殿のその器量を確めると」
「そうじゃ。まず内はよい」
尾張の国のことだ。それはいいというのだ。
「このことはもうおのおの方も見ておられると思うが」
「確かに。尾張の政はまことによいものです」
「国は豊かで民は安穏と暮らしておりまする」
「兵達もまた」
その兵達の話も為される。所謂足軽達だ。
「まさか兵と百姓を分け何時でも戦ができるようにするとは」
「そして鎧兜もよいものですし」
織田の兵達の弱さについてはあえて言わないのだった。兵の弱さにおいては今川もかなりのものだったからだ。少なくとも武田や上杉とは比較にならない。
そのことはあえて言わずにだ。さらに話していく彼等だった。
「政はとにかくよい」
「それだけを見てもうつけ殿ではない」
「それは確かです」
うつけかどうかはその国の政を見ればわかる、そういうことだった。
「しかしそれだけではなく」

「外にはどうなのか」
「それですな」
「そうじゃ。それを見たい」
雪斎は真剣な目であった。その目での言葉なのだ。
「今は内を治めているだけでは駄目じゃ」
「国を外に拡げることも大事故」
「それ故にですね」
「ましてじゃ」
さらにだとだ。雪斎は付け加えるのだった。
「織田殿は天下を目指されておる」
「それならば余計にですな」
「外も肝心になる」
「そうなりますか」
「そういうことじゃ。さて」
ここまで話してだ。雪斎はその言葉を一旦区切った。
そしてそのうえでだ。こう言うのである。
「見させてもらおう」
「織田殿の器」
「じっくりと」
こうして彼等は信長の動きを見るのだった。見れば伊勢の国人達はだ。
次から次に信長の下に参じている。そうなっていた。
その中でだ。信長は清洲城の庭において二人の家臣と話していた。
一人は佐久間によく似た彼よりはやや年配の男だ。彼の弟で佐久間信直という。
もう一人は四角い顔の力士の様な男だ。こちらは水野帯刀という。
信長はだ。その彼等の話を聞いていた。
「ふむ。また二つじゃな」
「はい、国人の家をです」
「我等それぞれ引き込めました」

「見事じゃ」
その話を聞いてだ。信長は満足している顔で頷いた。
そのうえでだ。彼等の名を呼ぶのだった。
「左京」
「はい」
まずは佐久間の弟だった。
「左衛門」
「はい」
次は水野だった。彼等の名前を呼んでだ。
そのうえでだ。こう彼等に言うのであった。
「後で褒美を与える。楽しみにしておれ」
「有り難き御言葉」
二人は同時に信長に応えた。その彼等にだ。

第四十七話　伊勢併呑その四

信長はさらにだ。こう話してきた。
「これであの三つの家の周りがかなり埋まったな」
「そうですな。長野に神戸、そして北畠」
「その三つが」
「まずは長野じゃ」
その家をだ。どうするかというのだ。
「そうじゃな。ここはじゃ」
「ここは」
「どうされますか」
「吉兵衛を呼べ」
村井をだというのだ。
「あの者に話す」
「はい、それでは」
「今から」
長野と佐久間信直は信長の言葉を受けて下がってだ。そのうえでだった。
村井を呼んできた。今度は村井が信長の前に来たのだ。
その彼にだ。信長はすぐに告げた。
「長野家に行くのじゃ」
「はい、そうしてですか」
「三十郎を入れる」
「信包様を」
信長の弟の一人だ。彼の弟は信行や信広だけではないのだ。二人の他にもだ。実に多くの弟や妹達がいるのだ。信長は彼等の長兄でもあるのだ。
その弟の一人をだ。長野家に入れるというのだ。
「幸い長野家には跡継ぎがおらんしな」

「それは神戸や北畠もですね」
「あの家も」
「もっとも跡継ぎがおっても無理に入れておる」
この辺りは戦国ならではだ。強引にしてもというのだ。
「だが。跡継ぎがおらんからにはじゃ」
「話は容易ですな」
「あちらも既に揺らいでおるわ」
心がという意味の言葉だ。伊勢及び志摩は小さな国人達が次々と信長の下に入り三つの家を囲んできているのだ。そうなればなのだ。
「ではじゃ」
「ここで跡継ぎの話をすれば」
「すぐじゃ。時は来た」
「それでは。今より」
「向こうも断らぬ。しかし油断することなく果たすのじゃ」
「わかっておりまする」
村井は一礼してからだ。すぐにその伊勢の長野氏のところに向かうのだった。そして彼が帰るとだ。吉報も共に来たのだった。
長野氏は信長の弟である信包を家に入れ跡継ぎにすることを受け入れた。伊勢の大家のうちの一つがこれで織田に下った。
信長はそれを受けてだ。今度はだ。
武井を呼びだ。こう命じるのだった。
「今度は神戸じゃ」
「あの家もまたですか」
「そうじゃ。養子としてじゃ」
「今度はどなたを」
「三七じゃ」
この名を出すのだった。信長の三男だ。信長はまだ若いが既に何人か子がいるのだ。この時代においてはこのこともまた普通のことだ。
「あれを入れよう」

「では最後の北畠には」
「ははは、わかるか」
武井の言葉に笑う。そうしての言葉だった。
「そうじゃ。茶筅丸じゃ」
「あの方をですか」
「これで伊勢はあらかたわしのものとなる」
その三つの家を組み入れてだ。そうなるというのだ。
「言ったな。一度も戦をすることなく伊勢を手に入れるとな」
「はい、確かに」
「それが今実際のものとなるのじゃ」
「まさかと思いました」
織田家の中でも政務に優れており知恵者でもある武井もだ。今は唸っている。
その唸る言葉でだ。己の主にさらに話すのだった。
「まことに一度も戦をされぬとは」
「戦をせずとも国は手に入れられるのじゃ」
「毛利の様にですな」
「あれはかなり悪辣ではあるがのう」
完全に取り入れることはしないというのだ。それはだ。

第四十七話　伊勢併呑その五

「じゃがわしはあそこまではせぬしまたせんで済んだ」
「それが今の伊勢と志摩ですな」
「そうじゃ。これでよい」
こう言うのである。
「して最後はじゃ」
「北畠」
「あの家ですな」
「左様。伊勢守護は最後の最後で取り込む」
そうするとだ。信長は武井に話すのだった。
「そしてそれは新五郎に任せよう」
「それは宜しいかと」
「いいというのじゃな」
「はい、新五郎殿ならです」
武井も林の力量はわかっている。彼は戦よりも政の者でだ。そうした取り込みもまた得意としているのだ。だからこそ頷くのだった。
「必ずやです」
「やってくれるな」
「そう思います」
「では。次は新五郎じゃ」
あらためて言う信長だった。
「そうするぞ」
「では。御呼びします」
「そして御主はすぐに神戸の家に向かえ」
「わかりました」
そうした話をしてだった。武井は林を呼ぶと共に神戸の家に向かった。
すぐにだ。林が来てだった。信長に言うのだった。

「では今より」
「察しておるか」
「そう思っておりました」
彼もだ。読んでいたというのだ。
「ですから」
「流石じゃ。それではじゃ」
「はい、今より」
「送り込むのは茶筅じゃ」
「茶船丸様をですか」
「それでよいと思うが」
そう問われるとだ。林は少し考える顔になって言うのだった。
「では長野家は信包様ですね」
「そうじゃ」
「そして神戸の家は」
「わかるな」
「三七様ですな」
「うむ。全てわかっておるならじゃ」
信長も満足してだ。そのうえでだった。
林も向かわせる。そうしてから暫くしてだ。
三つの朗報が入って来た。それは。
「うむ。上手くいったな」
「はい、伊勢も志摩もです」
「我等のものになりました」
こうだ。家臣達が信長に述べていた。
「一度の戦もせずです」
「それを果たすことができました」
「狙い通りじゃな」
そのことにだ。満足した面持ちで応えて言う信長だった。
その彼にだ。島田が言ってきた。
「ですが。長島だけはです」

「あそこか」
「はい、あそこはそのままです」
残っているというのである。
「本願寺の勢力がそのまま残っています」
「仕方ないのう」
信長もだ。そのことについてはだ。
諦める様な声でだ。こう言うのだった。
「本願寺だけはどうにもならんわ」
「ここで下手に手を出してもです」
「厄介なことになるからのう」
信長は袖の中で腕を組みだ。考える顔で述べた。
「それこそ朝倉と同じじゃ」
「はい、一向一揆が敵になります」
「あの者達が」
「相手にすると厄介じゃ」
信長は今度は難しい顔になって言うのだった。

第四十七話　伊勢併呑その六

「数は多く士気は高い」
「しかも鉄砲まで持っております」
「厄介なことこのうえありません」
「あの連中を敵に回すとそれこそ」
「そうじゃ。その通りじゃ」
まさにそうだとだ。信長はまた言った。
「これからもできればじゃ」
「敵に回したくはない」
「そうですな」
「本願寺とことを構えるとなると」
どうなるか。信長は既にそのことを考えていた。それはどうなるかというと。
「果てしない戦になるな」
「ただひたすら殺し合う」
「そうした戦にですな」
「そんな戦には何の利もない」
信長の口調はここでは忌まわしげなものになった。
「しないに越したことはない」
「しかしです」
ここで信長に問うたのは野々村だった。彼が問うたのだ。
「こちらから手出ししない場合はいいのですが」
「向こうじゃな」
「はい、若し本願寺が我等を敵とみなし」
そうしてだというのだ。
「攻めてきたならばどうされますか」
「その時は仕方がないわ」
即答だった。信長の中ではもう決まっていることだった。

「戦をする」
「そうされますか」
「攻められ何もせぬというのは論外じゃ」
信長にとってはだ。まさにそういうことだった。彼は戦となれば徹底的にやる。この考えは全く変わることのないものなのである。
「あくまでその場合じゃが」
「戦ですか」
「本願寺であれ誰であれじゃ」
彼等だけではないというのだ。その本願寺だけでは。
「退く訳にはいかぬ」
「天下統一の為」
「その為にですな」
「左様。まあ長島についてはよい」
そこのことはだ。これで終わらせるのだった。
「放っておけ」
「では。あのまま」
「放置ですか」
「あの場所だけは」
「伊勢も志摩も他の場所は手に入れた」
だからだというのだ。
「長島にこだわることもない」
「では。その様に」
「長島は」
「一向宗か。敵に回すつもりはない」
信長にしてもだ。それは絶対に避けるというのだ。
「御互いに上手にやっていきたいものじゃ」
「左様ですな。それが賢明です」
「織田にとっても」
「しかし。妙なことじゃ」
ここで信長はいぶかしむ顔になりこんなことも言った。

「あの宗派には人が多過ぎるのう」
「人が多いですか」
「多過ぎますか」
「長島だけでどれだけおるのじゃ」
その話に挙がっているだ。長島もどうだというのだ。
「あそこだけで二万か三万はおるな」
「はい、そして寺とその周りを固めております」
「その老若男女で」
「そうしております」
「そして伊勢の至る場所にもおり三河にもおる」
元康が治めはじめているだ。その国にも一向宗はいるのだ。元康にとっては絶対に頭に入れておかねばならないことの一つだ。

第四十七話　伊勢併呑その七

「そして越前に加賀に和泉に紀伊じゃ」
「そこを中心とし至る国におります」
「それが一向宗です」
「それぞれの国の中でも異様に多いと思える」
信長のいぶかしむ顔での言葉は続く。
「尾張でもおるがわしは六十万石を持っておる」
「そして尾張の一向宗は十万石、いえ二十万石程度の力がです」
「それだけの力を伊勢との境に持っております」
「長島に接して」
「して長島にそれだけじゃ」
老若男女で二万か三万だというのだ。
「伊勢と志摩全土を合わせて五万はおるのう」
「ううむ、尾張にどれだけの者がおるのかは把握してきていますが」
「そこから外れて妙に多いですな」
「思えばこれは」
「奇妙なことでございますな」
家臣達もだ。信長のその言葉で気付いたのだった。
「何故それだけの者が治める外におるのでしょう」
「伊勢でもそうですし」
「一向宗とは一体」
「何者でございましょう」
「そのはじまりや成り立ちはわかっておる」
それは既に把握している信長だった。彼は本願寺、ひいては一向宗のことをその開祖親鸞のことから学び知っているのである。
「確かに大きいが不可思議なまでに大きい」
「乱世に信仰を集めているとはいえ」
「それでもでござるな」

「まさかとは思うが」
どうかとだ。信長はさらに話した。
「まつろわぬ者達も混ざっておるのか」
「まつろわぬですか」
「そうした者達も」
「記紀におるな」
古事記と日本書紀だ。この国における神話の原典が書かれている
と言ってもよい二つの書だ。織田家は元々神主の出なので信長はと
りわけそれに詳しい。
その中からだ。信長は話すのである。
「神武帝や大和武尊命に倒されていった者達を」
「はい、実に多くおりました」
「そうした者が」
「山の中やそうした場所にですな」
「鬼や土蜘蛛の類ですね」
「ああした者達ですか」
「あれが一向宗の中に混ざっているというのですか」
家臣達がいぶかしみながら言うとだ。
信長も殻と同じ顔になってだ。そうしてまた言うのであった。
「元々一向宗は門が広いしのう」
「ではそうした者達が入ってもですか」
「おかしくはない」
「それ故に」
「まつろわぬ者達の多くはじゃ」
彼等についてだ。信長の話は続く。
「ただ朝廷に逆らっただけじゃが」
「そうしたのではない者達もいる」
「ではその者達とは一体」
「何者でしょうか」
「あれではないのか」

あれといってだ。そうして話に出したのは。
「津々木の如き者達ではないのか」
「あのですか」
「あの津々木の如き者がですか」
「本願寺に大勢入り込んでいる」
「そうだというのですか」
「確かなことは言えぬ」
それはだ。信長も今は断言できない。しかしそれでも可能性としてはだ。有り得ると話すのである。
「しかしそれでもじゃ」
「怪しいですか」
「殿はそう思われますか」
「うむ。どうにもな」
信長の顔はいぶかしむままである。そのうえでだ。

第四十七話　伊勢併呑その八

本願寺についてこうも話した。
「調べてみる必要があるかもな」
「左様ですか。本願寺に対して」
「そうされますか」
「うむ、そうしよう」
本願寺について調べることになった。今敵でなくとも調べておく。信長は慎重だった。そうした話をして伊勢と志摩の話を終えるのだった。
それからだ。彼は今度は柴田を呼びだった。こうした話をするのだった。
「これで兵は三万五千じゃ」
「かなりのものになりましたな」
柴田はこのことに満足して述べた。
「これで美濃の斉藤とも有利に戦えます」
「うむ。しかしじゃ」
「しかし？」
「もう一つ手を打っておきたい」
ここでこう言うのだった。
「もう一つじゃ」
「といいますと」
「近江じゃ」
まずは国から話される。
「そこにじゃ。あれを送りたい」
「あれとは？」
「市じゃ」
笑ってだ。この名前を出すのだった。
「市を近江の浅井に嫁がせたい」

「市様をですか」
そう言われてだ。柴田はだ。
目を丸くさせて驚いた顔になりだ。主に言うのだった。
「あの、それは」
「まあ待て権六」
焦る柴田にも顔を向けてだ。信長は笑って話す。
「そなたは昔から市を可愛がっておるからのう」
「じじと呼ばれてきました」
市が幼い頃だ。彼女によく懐かれていたのである。実は柴田は意外と子供好きなのだ。尾張の子供達にも妙に人気があるのだ。
「よく一緒に遊ばせてもらいましたし」
「だから別れは悲しいか」
「いや、それはありませぬ」
別れについてはだ。毅然として言うのだった。
「姫様はやがて嫁がれるものですから」
「そうじゃな。必ず誰かとな」
「しかし。浅井家ですか」
浅井との婚姻についてだ。柴田は唸るのだった。
「それはまた」
「意外か」
「浅井殿と手を結ばれるということは」
柴田はここで考えた。彼とて織田家の重臣だ。武においては佐久間と並ぶ者であり信長からも一目置かれている。彼も中々の頭の持ち主なのだ。
その彼がだ。こう言うのである。
「やはり美濃を。そしてですな」
「そうじゃ。わかるな」
「美濃を攻め取り都に行く途中も」
「六角への牽制にもなるからのう」
近江南部に勢力を張る家だ。本来近江は六角家が治めているのだ

が北部は彼等から独立した浅井が治めているのだ。それで六角と浅井は犬猿の仲でもある。

信長はだ。このことを柴田に話す。そして柴田もそのことがわかっていた。

そのうえでだ。柴田は言うのであった。

「確かに。今後を考えますとこの話は宜しいですな」

「そうじゃな。ではじゃ」

「近江の若き主長政殿とですな」

「そういうことじゃ。では話を進めるとしよう」

「それはよいのですが」

「よいとは？」

「長政殿はです」

彼についてはだ。柴田はいいというのだ。

第四十七話　伊勢併呑その九

だがそれと共にだ。顔を曇らせてこうも言うのだった。
「ですが。浅井の家は」
「長政の父親じゃな」
「はい、あの方がおられますので」
「主が二人おるようなものじゃな」
「尚且つです」
柴田は話を続ける。彼は武勇だけで織田家にいるのではない。政やこうした情報を集め分析する資質もしっかりと備えているのである。
だからこそだ。彼はここで信長に話すのだった。
「長政殿はお父上を大事にされています」
「その言葉を無視できるな」
「そこが気になりますが」
「長政は優れた者じゃ」
信長も認める。そのことはだ。
「しかし親孝行じゃからな」
「何かあれば父君の言葉に流されまする」
「そうじゃな。確かにその危惧はあるのう」
「それが気になりますが」
「だが大丈夫じゃろ。その浅井久政もそれ程無体でも愚かでもない」
「派手さはありませぬがそれでもですな」
「普通じゃ。ではそれ程妙な動きはせぬじゃろう」
こうだ。長政の父久政についてはこう述べるのだった。
「まあ気にせずともよいな」
「そう仰いますか」
「では長政と市の話し合いを進めよ」
柴田に命じるのだった。

「何なら与力もつける」
「そうしてこの話を万全に」
「進めよ。よいな」
「わかりました」
柴田は一礼して信長に応えた。この話も進められる。
そして尚且つだ。今度はだ。
川尻を呼びだ。こう命じるのだった。
「そなたは三河に向かえ」
「三河にですか」
「そうじゃ。そこに向かいじゃ」
「松平殿と結ばれますか」
「伊勢を手に入れた今こそじゃ」
あちらに話をするだ。そういう時だというのだ。
「だからじゃ。よいな」
「伊勢を手に入れ近江に市様を嫁がせられ」
「次は三河じゃ」
そのだ。松平とだというのだ。
「手は次々に打っておく」
「美濃を手に入れてからも見据えられて」
「東には武田がおるな」
「既に駿河の全てと遠江の半分をも手に入れております」
「その武田のことも考えるとじゃ」
信長の目が強いものになる。そのうえでの言葉だった。
「竹千代とは手を結びたい。それにじゃ」
「それにとは」
「あ奴が共におると何かと心強い」
笑ってだ。元康への信頼も述べるのだった。
「だからこそじゃ」
「確かに。元康殿は今川でも武辺者でしたし」
「武だけではないぞ」

「それに留まりませんか」
「見ておれ。あ奴は出来た奴じゃ」
笑顔のままで話す信長だった。
「共にいて悪いことはない」
「さすれば。これより」
「三河に行き話をつけよ」
こう川尻に命じるのだった。
「よいな」
「畏まりました」
こうしてだった。三河にも人が向かうのだった。そうして一連の動きを見届けてだ。
雪斎は同僚達にだ。こう言うのだった。

第四十七話　伊勢併呑その十

「ここまで見てどう思われるか」
「ううむ、一戦も交えずして伊勢を手に入れるとは」
「しかも血もまるで流れてはおらぬ」
「しかし伊勢も志摩も手に入れた」
「凄いことですな」
「しかもまた別の動きがあるようです」
「どうやら」
ここでだ。さらになのだった。
「近江と三河にも人が向かっています」
「これは一体」
「ふむ」
その話を聞いてだ。雪斎は。
考える顔になりそれからだ。こう同僚達に話した。
「そのことが上手にいけばですな」
「その時ですか」
「我等も」
「決めるべきです。しかし」
雪斎は感心する様にしてだ。言うのであった。
「織田殿、これはまことに」
「外の政もですか」
「まことに秀でていると」
「内だけではなく」
「そのどちらも秀でておるようですな」
そうだというのだ。信長はだ。
「いや、伊勢でもです」
「あの広く多くの国人に分かれている伊勢を戦一つせず手中に収めておりますから」

「あれは安芸の毛利殿に倣ったのでしょうか」
「そうなのでしょうか」
「そうなのでしょうな」
おそらくそうだとだ。雪斎も言う。
「ただ。あの様に手段を選ばぬというものではないようです」
「毛利殿はどうもですか」
「謀ごとがあまりにもえげつないようです」
「暗殺を得手とし」
「主に家臣を殺させることもしております」
「とにかく手段を選ばぬ御仁です」
毛利元就の天下での評価はこうしたものもあるのだ。確かに彼は一代にして大きな勢力を築いている。しかも無駄な血を流さずにだ。だがその手段を選ばぬ謀ごとはだ。快く思われていないのだ。
そしてそのことはだ。雪斎も同じなのだった。
「拙僧もあそこまでは」
「できませんな」
「とても」
「あれが出来るのは毛利殿だけです」
そのだ。元就だけだというのだ。
「敵に回ると恐ろしいものがありますな」
「しかし織田殿はそこまではされなかった」
「国人達を取り込み養子を送って己の配下とした」
「それだけですな」
「左様、これはよいことです」
信長のそうしたことを素直に認めるのだった。
「これだけでかなりのものです」
「しかしさらにですか」
「見るのですな」
「そうです。これではまだ美濃を制するには決め手になっておりません」

政においてだというのだ。戦で全てを決める前に政がある。その政をどれだけ整えているのか。要はそこであった。

それを言ってだ。雪斎はさらにだった。

「もう二つ必要なのでござる」

「それは近江と三河」

「その二国ですか」

「それで整えれば尾張は無事美濃を攻められます」

「そこまで整えれば勝てますか」

「斉藤に」

「確実に勝てます」

それはだ。大丈夫だというのだ。雪斎も太鼓判を押す。

第四十七話　伊勢併呑その十一

「そこまですればです」
「斉藤が如何に強くとも」
「それでもですか」
「三満五千の兵が前にいて」
対する斉藤は二万だ。兵力差は織田にかなり有利になったのだ。
「そしてですか」
「ここで織田殿は外も決めれば」
「斉藤としても打つ手がない」
「そうですか」
「そうです。織田殿は万全の状況で戦ができます」
それで後は戦をするだけだというのだ。確かに信長に有利となる。
そうして整えてからだというのであった。
「勝つ戦がです」
「ううむ、では今暫くですな」
「我等は見させてもらいますか」
「そうすべきですな」
「そういうことです。では」
ここまで話してだ。雪斎はだ。
同僚達にだ。あるものを勧めたのであった。それは。
「茶でも如何でしょうか」
「茶ですか」
「それをですな」
「はい、如何でしょうか」
こう言ってまた勧める雪斎だった。
「近頃茶を飲んでいませんし」
「そういえばそうですな。近頃茶をです」
「飲んではいませんでしたな」

「これはどうも」
言われて気付いたのだった。このことにだ。
それでだ。彼等は口々にこう雪斎に話した。
「では。お茶をですな」
「飲みますか」
「では拙僧が淹れまする」
雪斎は茶道にも堪能であるのだ。元々茶は禅寺からはじまっている。雪斎は他ならぬその禅宗の僧なのだ。それならばであるのだ。
その彼がだ。また同僚達に話す。
「それで宜しいでしょうか」
「おお、和上のですか」
「和上御自ら茶を淹れて頂けるのですか」
「そうされるのですか」
「では」
そしてだ。彼等はだ。
雪斎のその話に乗った。それでだった。
「宜しく御願いします」
「久方ぶりの和上の茶をです」
「淹れて下さい」
こうしてだった。彼等は雪斎のその茶を飲むのだった。彼等も久し振りに落ち着いた時間を過ごし楽しむ為の時間を過ごせたのだった。
尾張では大きく動こうとしていた。その頃三河ではだ。元康がこう家臣達に尋ねていた。
「どうも松平のままではよくないようじゃな」
「はい、只の地名ですから」
「源平藤橘のどちらでもありません」
「これでは守護や官位等を頂くのに問題が出ます」
「三河を治めるのにも不都合が出ます」
「そうじゃな」

その通りだとだ。元康も考える顔で言う。
「これからは三河の確かな主になるというのにそれではのう」
「大義名分もありませんし」
「ですからここは」
「どの家になるかのう」
源平藤橘のだ。どれかにだというのだ。日本の家は全てこの四つから派生されているとされる。だからその四つのうちどれかというのだ。
しかしだ。いざ何処にするかというとだった。元康も家臣達も悩むのだった。
「それでどの家にするか」
「果たしてどの家がいいか」
「それが厄介ですな」
「全くです」
家臣達も元康もそれぞれ考える。だがその中でだ。
不意にだ。松平家の食客になった氏真がだ。こんなことを言うのだった。
「ふむ。それではじゃ」
「それでは？」
「それではといいますと」
「というか氏真殿おられたのですか」
「いや、さっきまで百姓の子供達に蹴鞠を教えておったのじゃが」
こうした気さくなところは今も変わらない氏真だった。彼は民達にとっては気さくで親しみ易い若殿として知られている。公達にも間違えられる。

第四十七話　伊勢併呑その十二

「それが終わって城に入ったらじゃ」
「我等が話をしていて」
「それを聞かれたと」
「そういうことじゃ。政とかそういう話なら去っておった」
最早食客に過ぎぬからだ。そういうことは弁えている氏真だった。
だが、だ。ここで彼はこう言うのだった。
「しかし竹千代の姓じゃな」
「はい、それです」
まさにそれだとだ。元康も答える。
「どうしたものがよいかと思いまして」
「なら一つよい家があるぞ」
「よい家とは」
「新田氏の家臣にじゃ」
新田義貞のことだ。南北朝の頃の武将の一人である。
「徳川氏というのがおった」
「徳川！？」
「そんな家があったのですか」
「そうじゃ。源氏の流れを汲む家でじゃ」
氏真は元康とその家臣達にさらに話す。
「断絶しておったがそこの縁者ということにすればどうじゃ」
「家系図は適当にですか」
「そうされよと」
「家系図はどうでもいいじゃろ」
この辺りは実際にいい加減な家も多い。今川家は源氏の名門であるがそれでもこのことはいいとしてそのうえで話をするのだった。
「どうとでもなるしのう」
「そこは適当にですか」

「してもよいと」
「実際源氏の血は流れておるじゃろ」
氏真はまた言う。そのまた言った言葉もこうしたものだった。
「だからよいじゃろ」
「そういうことですか」
「では適当にですか」
「家系図については」
「大事なのはあれじゃ」
何がだ。大事かというとだ。
「その家の末裔だと認めてもらうことじゃ」
「その徳川家ですか」
「あの家の」
「そうじゃ。まああれじゃのう」
どうかとだ。氏真の話は続く。
「朝廷の方々に認めてもらうことじゃ」
「朝廷ですか」
「朝廷にその徳川家とですか」
「認めてもらうことですか
「近衛殿辺りがよいじゃろう」
五摂家の一つのだ。その家がいいというのだ。
こう話してだ。そのうえでだった。
「源氏なら麿の親戚になるのう」
「あの、どれだけ遠い親戚なのですか？」
「左様です」
そのことにはすぐに突っ込みを入れた松平の家臣達だった。
「同じ源氏といっても。今川殿とその徳川家では」
「最早親戚とは呼べないのでは」
「まあそうじゃな」
言われてだ。納得して頷く氏真だった。
そしてそのうえでだ。彼はまた話した、

「してじゃ。よいか」
「はい、それではですね」
「その徳川家ということをですね」
「朝廷に認めてもらうのですか」
「そうするといい。では麿はじゃ」
気軽にだ。氏真は今度はこんなことを話すのだった。
「今から和歌じゃ」
「今度は和歌ですか」
「それを楽しまれますか」
「身体を動かした後で和歌をやるとよいのじゃ」
「そういったものですか」
「頭を動かすのは身体を動かしてからですか」
「これが中々よいのじゃ」
そうだとだ。氏真は話してだった。
自分の話を終えてだ。彼は本当に和歌をしに部屋を後にした。しかしだ。

第四十七話　伊勢併呑その十三

彼が残していった話は大きかった。まさにそれであった。

「徳川かあ」

「その徳川家ということにして」

「そうしていけばいいのか」

「成程のう」

「してどうされますか」

家臣達は元康にあらためて尋ねた。

「殿としましては」

「やはりその徳川とですか」

「名乗られますか」

「うむ、そうするか」

元康もだ。それに乗ろうと考えるのだった。こんな話をしてであった。

「少し考えてからじゃ」

「徳川とされるかどうされるか」

「決められますか」

「うむ。しかし氏真殿は」

その食客の彼がだ。どうかというのだ。

「あれで言われるな」

「はい、意外とですな」

「見ておられますし言われます」

「鋭いところもありますな」

「幼い頃からじゃった」

人質として駿河にいていたからこそだ。このことはよく知っているのだった。

「そうした方じゃった」

「確かに。あれで妙にです」

「色々なことを見ておられますし」
「悪い心は持っておられませぬし」
「よい方ですな」
「嫌いではない」
それはだ。元康もだというのだ。
「むしろ人質のわしに和上と共によくしてくれた方じゃ」
「何かと遊んで下さいましたな」
「そうしたこともしてくれましたし」
「だから三河にいてもじゃ」
別にだ。どうということはないというのだ。
「よいと思っておったが」
「ここでその徳川の名を出されるとはです」
「まことに意外でした」
「しかしこれはですな」
「我等としては」
「乗るべきだというのじゃな」
元康は家臣達の言葉を聞いてだ。静かに言うのだった。
「徳川にじゃな」
「では徳川元康ですな」
「そうした名になりますな」
「ううむ、徳川元康か」
家臣達にその名前を言われてだ。
元康は袖の中で腕を組みだ。どうもという感じでこう言うのだった。
「それでは少し違うのう」
「名前がよくありませんか」
「どうも」
「松平ならよいのじゃが」
姓がそれで名が元康ならばいいというのだ。しかしだ。
徳川ならばどうかとなりだ。彼は言うのであった。

「徳川だとしっくりいかぬのではないか？」
「そうなりましょうか」
「確かに。言われてみれば何か違う様な気もしますな」
「しっくりいかぬというか」
「そうした感じに」
「他の名にすべきか」
また言う元康だった。
「どうした名前がよいかのう」
「では殿」
ここで言ったのはにこやかな顔の男だった。彼の名を石川数正という。本田、酒井と並ぶ松平家の重臣の一人である。

第四十七話　伊勢併呑その十四

その石川がだ。主にこう言うのだった。
「家を入れられてはどうでしょうか」
「家をか」
「はい、元に代わって家です」
そこを変えてはどうかというのだ。
「それでどうでしょうか」
「では家康じゃな」
「そうなります」
「ふむ。徳川の家を康んじるじゃな」
元康は考える顔で石川の言葉を反芻して述べた。
「そうなるのう」
「そうです。これでどうでしょうか」
「悪くない。いや」
「いや？」
「むしろかなりよい」
こうだ。石川の言葉を受け入れて言うのだった。
「ではそれでじゃ」
「いかれますか」
「徳川の家になればすぐに変える」
下の名前もだ。そうするというのだ。
「わしは徳川家康になろうぞ」
「してこの三河の国をですな」
「治められますな」
「三河に遠江の半分、合わせて五十万石じゃ」
大名としては上の方である。五十万石ともなればだ。流石に武田や急激に大きくなった織田と比べればかなり落ちるがそれでもだ。
その五十万石としてだ。元康は言うのだった。

「わしもこれからじゃ」
「五十万石で終わりではなく」
「さらにですな」
「石高で大きくなれずとも別のことで大きくなろうぞ」
つまりだ。力だけではないというのだ。
「これまで低く見られていた我等が天下にじゃ」
「その名を轟かせる」
「そうされますね」
「そうするぞ。よいな」
「はい、それでは」
「そうなりましょうぞ」
松平の家臣達も笑顔で応え。そうしてだった。
彼等は一つにまとまる。その中心にいる元康がまた話す。
「御主等と共にいればできるな」
「天下に名を轟かせることがですか」
「できますか」
「できる。例えどんな状況でもじゃ」
どうするか。具体的な話にもなる。
「背を見せず。三河の武辺を見せようぞ」
「天下に思う存分ですな」
「見せるとしますか」
そうした話をしてだった。彼等もだ。
松平から徳川になりだ。大きく羽ばたこうとしていた。雄飛するのは信長だけではなかった。ここにもう一人だ。その者がいたのである。

第四十七話　完

2011·6·26

第四十八話　市の婿その一

第四十八話　市の婿

信長は妹である市を前にしてだ。こう問うていた。
「御主はどういった者が好きじゃ」
「それは殿方のことでしょうか」
「そうじゃ。どういった男が好きじゃ」
このことをだ。市に直接尋ねるのだった。
「言うてみよ。どうした者が好きじゃ」
「強い方でしょうか」
「強い者とな」
「はい、兄上を前にしても臆することのない様な」
そうした者をだ。市は好きだというのである。
「例え対峙しても一歩も引かぬ様なです」
「しかし退かねばならぬ時もあるぞ」
「その時も怯えてではなく悠然としてです」
「わしに対してか」
「退ける様な方です」
まさにだ。そうだというのである。
「そうした方ならばです」
「言うのう。そうした者か」
「そうした方ならばです」
是非にとだ。市は微笑んで言うのであった。
「私も嫁に入りたいです」
「ほほう。そう言うか」
市が笑顔で言うとだ。信長もだ。
にこやかに笑いだ。こう妹に話した。
「気付いておったか」
「少しは」

「少しでも気付くことは大きい」
それ自体がだと。信長は妹に話す。
「実にな。ではじゃ」
「近江ですね」
「そこの浅井長政の嫁に入るか」
市の目を見て問う。その目は真剣だ。
「そうするか」
「その前にです」
ここでだ。市は兄にこう言ってきた。
「御願いしたいことがあるのですが」
「その長政を知りたいか」
「はい。果たして兄上が共におられるのに相応しい方かどうか」
「そして御主の夫に相応しい者か」
「見たいと思いますが」
「それでこそわしの妹じゃ」
それでいいというのである。信長はその顔を笑みに戻して答えた。
「まず相手を知ってからじゃな」
「見極めてからです」
「そのうえで嫁に入るか」
「そうして宜しいでしょうか」
「うむ、よい」
信長は妹のその言葉をよしとした。そしてそのうえでだ。
彼女にだ。こんなことも言った。
「ではまずはじゃ」
「長政様のその評判を知りたいのですが」
「悪くはない」
まずはこう言う信長だった。
「二倍の六角を自ら先陣に立って防いだことがある」
「勇敢な方なのですね」
「しかも戦上手じゃ」

「戦にお強いのですか」
「そして。まああの大人しめの父親の助けもあるが」
ここで彼の父親の話も出た。
「政もよくやっておるな」
「近江の北をよく治めておられますか」
「近江は琵琶湖があり元々豊かじゃが」
「それにさらにですね」
「近江をさらに豊かにしておる」
まさにだ。そうしているというのだ。

第四十八話　市の婿その二

「浅井の近江の北は六角の南よりも豊からしい」
「石高の問題ではなく」
「町も栄えよいそうじゃな」
「左様ですか。それではまずは」
「近江の国を実際に見るか」
「そうさせて下さい」
近江がどれだけ栄えているか見たいというのだ。まさに百聞は一見にしかずということだ。そういうことであった。
「では」
「そうじゃな。では権六と久助の手の者達をつけよう」
「権六様ですか」
「駄目か？このことはあ奴に任せておるのじゃが」
「権六様はとてもお優しくしかも頼りになる方ですが」
それでもだとだ。市は難しい顔になって話すのだった。
「ですがそれでも」
「密かに行くのにあ奴は向かんな」
「どうしても目立ってしまいます」
大柄でしかも髭だらけの厳しい顔である。戦国の世でも目立って仕方がない。戦場でも彼の姿は敵味方どちらもすぐにわかる程である。
その彼だからだとだ。市は言うのだった。
「ですから」
「そうじゃな。では権六にはこのまま話を進めさせてじゃ」
「他の方をつけて頂けますか」
「又左や慶次も駄目じゃな」
「御二人は傾いておられますので」
とかく奇抜な格好を好む彼等だ。それではというのだ。

「やはり」
「うむ。特に慶次に至っては」
「あちこちで悪戯をされて権六様よりも目立ってしまいます」
「問題外じゃな」
「残念ですが」
「まああの二人、特に慶次はわかる」
またこんなことを言う信長だった。
「問題外じゃ」
「ではどなたをなのですか？」
「目立たぬ奴か」
「うちの家は目立つ方ばかりですから」
「全くじゃ。よくもあれだけ目立つ奴ばかりいるものじゃ」
主の自分のことも含めて言う信長だった。
「それで目立たぬ奴は」
「本当におわれませんか？」
「思い当たらぬな」
首を傾げさせてだ。妹に答えるのであった。
「これが。まあ猿の様にじゃ」
「猿の様に？」
「隅っこに隠れられる器用な奴がおればいいのじゃが」
「うちの家にはあまりいない様な人ですね」
「猿のう。猿」
信長はこの動物の名前をやたらと言いはじめた。
「猿じゃ」
「猿ですか」
「猿、ふむ」
ここでだ。ふと気付いた信長だった。
いぶかしむ顔を急に晴れやかな顔にさせてだ。市に言った。
「おったぞ、一人」
「おられますか」

「そうじゃ、猿じゃ」
ここでまたこの呼び名だ。
「猿がおったぞ」
「本物の猿ではございませんね」
「無論違うがそっくりじゃ」
信長は笑いながら話していく。
「猿がおったわ」
「兄上の家臣の方々の中にですか」
「そうじゃ。木下秀吉というてじゃ」
「木下？」
「侍大将におるのじゃが知らぬか」
「どうも」
市は困った顔になって兄に答えた。

第四十八話　市の婿その三

「そうした方もおられるのですね」
「小さいが随分と頭の回る奴でじゃ」
「頭がですか」
「まあ力はない」
それは駄目だというのだ。力とかそうしたことについてはだ。
「ついでに言えば馬に乗るのも下手じゃ」
「それで兄上の家臣の方ですか」
「確かに武芸は駄目じゃが頭はよい」
「左様ですか」
「色々と機転が利く。中々頼りになる者じゃ」
こう市に話す。
「それを連れて行け」
「はい、それでは」
「少なくとも権六よりは目立たぬ」
「権六様はまた目立ち過ぎですし」
「それを言うな。言うと出て来るぞ」
信長が笑いながら言うとだ。早速だった。
その柴田が部屋に入って来てだ。こう信長に話すのだった。
「殿、それでなのですが」
「おお、言った傍から」
「来られるとは」
「またわしのことを言っていたのでござるな」
そのことを察してだ。柴田は困った顔になって信長だけでなく市にも話した。
「どうせ顔が怖いだの鬼だの」
「そこまでは言っておらんがな」
「まあそこは」

「やれやれ。全くわしは色々言われますな」
「御主は目立つからじゃ」
一応彼自身にもこのことを話す。
「どうしても話に出るのじゃ」
「そういうことですか」
「そうじゃ。ところでじゃ」
信長はここで話を変えた。その話は。
「近江のことじゃが」
「はい、今度あの国に向かいます」
「美濃は通れぬ。伊賀から行くとよい」
道についても言う信長だった。
「そうじゃ。久助も同行させるとしよう」
「あの辺りの道に詳しいからでございますな」
「そうする。久助は交渉もできるしな」
「ですな。あの者戦だけではありませぬ」
「政もできる。頼りになる奴じゃ」
織田の家臣は大抵戦だけでなく政にも長けている。慶次や可児といった極端な武辺者以外はそちらにも長けているのである。
そのことを踏まえてだ。信長は話すのだった。
「では二人でじゃ」
「はい、行って参ります」
こうしてだ。柴田は滝川と共に近江で浅井と婚姻の話をまとめることになった。この話はかなり順調に進みはした。しかしそれだけではなかった。
尾張から近江に向かう一団がいた。その戦闘にいるのは。
木下だった。その彼がここでこう言うのだった。
「いや、近江とはのう」
「木下殿が行かれるのははじめてでしたね」
「確か」
「うむ、近江ははじめてじゃ」

実際にそうだと話す木下だった。
「近江の北はな」
「六角殿の治めておられる場所は通られましたな」
「そこは」
「殿が都に上られた時にな」
その時にだというのだ。しかし北の浅井の治める場所はどうかというとだ。
「しかし。北はじゃ」
「やはりありませんな」
「左様ですな」
「うむ。果たしてどうした場所かのう」
木下は首を傾げさせながら言う。その中でだ。
自分の後ろにいる市をちらりと見てだ。こんなことも言うのであった。
「まあそれでもよいか」
「よいとは」
「市様がおられるからですわ」
こうだ。ガニ股で歩きつつひょうきんに話すのである。

第四十八話　市の婿その四

「だからいいですわ」
「私がいるから？」
「市様の様な奇麗な方が一緒だと。いや、奇麗なのはうちのものですが」
何だかんだ言ってだ。ねねのことは決して忘れないのだった。
「しかし。市様もそれはそれは」
「私が奇麗ですか」
「それは鏡を御覧になられれば」
それでわかるというのである。
「よくおわかりかと」
「そうなのですか？」
「まあわしにはねねがいます」
あくまでねねが第一の木下だった。
「ですが。長政様も別嬪な方を嫁に迎えられますな」
「その長政様ですけれど」
市が尋ねるのは彼のことだった。
「果たしてどういう方かですね」
「それを見極められる為にですね」
「あえて御自身が近江に行かれるのですね」
「はい。果たして織田が手を組むに足りる方か」
市の目がやや強いものになる。
「それを見る為に」
「そしてそれに足りる方ならば」
木下はここでまた言った。
「市様の夫にも足りますな」
「そうなりますか」
「はい、ただ定規は大きいですぞ」

木下の顔はやや真剣なものになる。
「それは確かです」
「大きいですか」
「我が織田も信用できる者と手を結びます」
それは絶対だというのである。
「ですから」
「まずは信ですか」
「はい、そしてです」
さらにであった。
「その資質もです」
「戦と政ですね」
「大体国を見ればわかります」
その国をだ。見ればというのだ。
「政はどうなのか」
「それがそのまま出るからですね」
「左様です」
まさにそうだと答える木下だった。
「政ははっきりと出ます」
「国に」
「尾張がそうです」
「私達の国がですか」
「殿の政がよいからこそ」
この言葉はゴマすりではない。木下の本心からの言葉だ。
その本心の言葉をだ。市に見せるのである。
「ああして豊かになっているのです」
「では。近江の北もまた」
「同じです」
木下はまた言った。
「どの国もそれは同じです」
「では田畑や町や堤を見ればですね」

「おおよそのことはわかります」
「では近江では」
「よく御覧下さい」
「そうしてですね」
市もだ。納得した顔で木下に応える。
「決めよと」
「左様です。近江は元々豊かですが」
「それに加えて」
「さらに豊かになっていればよしです」
逆に言えば貧しくなっていれば駄目だというのだ。木下の言葉は一面において厳しいものもあった。それを含んでの市への言葉なのだ。

第四十八話　市の婿その五

そうしてだ。彼は言うのだった。
「まあよく見られて」
「ですね。ところで」
市は納得した言葉を出してだ。そのうえでだ。
木下達にだ。こんなことを言ってきた。
「喉が渇いたというかお腹が空きましたので」
「そうですな。それでは」
「干し飯でも食べますか？」
「それもいいですがここは名物を食するとしましょう」
木下は陽気に笑って市に応えそうしてだった。
「近江の名物といえば」
「それは？」
「鮒寿司です」
それだというのだ。
「それを食しましょう」
「鮒寿司とは？」
市は怪訝な顔になり首を左に傾げさせた。彼女の知らない食べ物だからだ。
「それは一体」
「ああ、市様は御存知ないですか」
「寿司というと」
この時代の寿司はだ。どうかというとだ。
「あれですか。魚の中に飯を入れて置いておいたものですね」
「左様、あれを鮒でしたものです」
「それが鮒寿司ですか」４２
「この近江の名物です」
「ではそれを」

「はい、皆で召し上がりましょう」
こうした話をしてだ。実際に一行は鮒寿司を買ってそれを外、川辺に座って食べてみる。それを食べてから市はこう木下に言った。
「ふむ。これが鮒寿司ですか」
「如何ですかな」
「変わった味ですね」
その極端に小さくなった鮒の身を食べながらの言葉だ。
「これはまた」
「左様、珍味です」
「尾張にはない味ですね」
市はこうも言う。
「これはまた」
「尾張以外にも国はあり」
「そうしてですか」
「その国にそれぞれの料理があり味があるのです」
木下は市にこんなことも話す。無論彼も鮒寿司を食べている。その独特の味のする小さくなったものを食べながら話をしているのだ。
「そう、それぞれに」
「では。天下が一つになれば」
「はい、往来が盛んになり」
「こうしたものも今よりも食べられるようになるのですね」
「簡単に言えば」
そうだと。木下は話す。
「そうなります」
「まずはこの天下をですか」
「戦ばかりしていては美味いものも食えません」
「確かに。では戦は」
「なくなるに越したことはありません。しかし」
「それをなくす為にあえてですね」
市はもうわかっていた。この辺り流石は信長の妹であった。兄の

様にやたらと行動的ではないがそれでも似ているところは似ていた。
「戦をするのですね」
「そうです。あえてです」
「戦を終わらせる為の戦ですか」
「殿はあれですぞ」
信長のことも話される。その彼のことだ。
「戦はお嫌いです」
「そういえば思ったより」
「戦はされていませんな」
「そうですね」
市は己の記憶を辿りながら述べた。実は信長はここぞという時以外はこれといって戦っていないのだ。このことに気付いたのである。
「他の家よりは遥かに」
「無駄な戦をされないのです」
「無駄な」
「そう、必要な戦だけです」
そしてだ。その戦をだというのだ。

第四十八話　市の婿その六

「勝つ戦をです」
「戦をするからには勝たねば」
「負ければ多くの者が無駄死にしますし」
「無駄死にですか」
「戦で無駄に死ぬなぞ」
木下の顔に嫌悪が宿る。それはだというのだ。
「それ程馬鹿らしいものもありませぬ」
「戦をするからには勝つ」
「はい、必ずです」
また言うのである。
「そうしなければならないのです」
「勝つ戦ですか。兄上のは」
「殿はそこも見極められておられます」
「何時勝つ戦をするのかも」
「本当に。無駄な戦はせぬことです」
「人が死ぬだけだから」
市の顔が曇る。木下の横顔が苦くなっていたからだ。
普段は陽気な猿面だがこうした時はだ。流石に曇るのだ。彼も。
「ですね。確かに」
「そして浅井殿ともです」
「無駄な戦をせぬ為に」
「はい、市様に見合う相手であれば」
木下は市に話していく。
「そうであればです。もっとも」
「もっとも？」
「いや、それだけのお顔ですと」
市の顔立ちを見ての言葉だ。尚彼が今見ているのは顔立ちだけで

はない。兄に似たその長身もだ。共に見てそれで言っているのである。

「釣り合う相手を探すのが大変ですな」

「私の様な者は幾らでもいるでしょうに」

「いや、これがおりませぬ」

いつものひょうきんな仕草も交えてだ。市に話すのである。

「これはまことですぞ」

「またその様な」

「それがし嘘は言っておりませぬぞ」

「私があれだというのですね」

市は笑ってだ。その木下にこう言うのである。

「美人だと」

「左様、その通りでござる」

「それが嘘であります」

そのこと自体を信じていない市だった。自分自身のそのことをだ。

「私はその様に整ってはおりませぬ」

「そう思われますか？」

「兄上達ならともかく」

信長だけでなく信行や信広といった面々もその顔立ちは非常に整っている。このことは市も幼い頃よりよく知っていることなのだ。

だが自分はどうかというと。これがなのだ。

「私はそんなことはありませぬ」

「まあそう言われるのなら」

謙遜ではないことも見てだ。木下は話を変えた。

そのうえでだ。彼はあらためて市に話すのだった。こう。

「周りの言葉を聞かれるべきです」

「周りもそんなことは」

「まあ何にしろ」

「何にしろ？」

「周りの話や言葉を聞くのはよいことです」

「そのことはですか」
話がそこに至る。これは秀吉の話術である。
その話術によってだ。市にこう話すのである。
「そこから多くのものがわかりますので」
「人の話は確かに」
そう言われるとだ。市もだ。
わかるところがあった。そのうえで木下に応える。
「勉強になりますね」
「そうですな。だからこそです」
「では人の話はとかく」
「聞かれるといいです。そうして学ばれるとよいかと」
「左様ですか」
「いや、それがし実は学問は苦手でござる」
木下の顔が苦笑いになる。彼は文字はあまり読めないのだ。それで学問もだ。お世辞にも得意とは言えないのだ。そこが彼の弱みでもある。

第四十八話　市の婿その七

「ですが人の話を聞いていると」
「それも学問ですね」
「学問は書で学ぶだけでなくです」
「人の話からも」
「そう思いますが」
「そういえば兄上は」
市はまた信長のことを考えた。彼はどうかというとだ。
「何かと人のお話も」
「殿もそうされていますね」
「だから私もですか」
「そうされるとよいかと」
木下の顔はここでは屈託のない笑顔に戻った。
「さすれば多くのものを得られます」
「人としてですね」
「左様です。それでなのですが」
ここまで話して木下は言葉を一旦止めた。そしてそのうえでだ。
周囲を見回しだ。供の者達に尋ねた。
「小谷城までどれ位じゃな」
「はい、それは」
「あと三日進めば見られます」
「堅固な山城と聞く」
木下の顔が変わった。武将のそれにだ。
「さて。何処まで堅固なのやら」
「あの稲葉山城に匹敵すると聞いております」
「観音寺城にも」
近江の六角の城だ。この城も堅固で有名である。
「山をそのまま城にしております」

「そして幾つにも分かれております」
「本丸や二の丸だけでなく」
木下はさらに考えていく。そのまだ見ぬ小谷の城のことをだ。
「幾つもか」
「そうした城ですから」
「登るだけでも苦労するとのことです」
「わかった。戦をするのに向いた城じゃな」
木下は小谷城のことをこう評した。
「しかし政にはいささか苦労しそうじゃな」
「政にはですか」
「左様ですか」
「山城より平城の方が政をしやすいところがある。まあそれでも稲葉山は政もしやすい城じゃが」
稲葉山城はそうだというのだ。政をしやすいというのだ。
「場所も関係があるからのう」
「では小谷は」
「あの城は」
「少し外れた場所にあるしやはり政には向かぬかもな」
また言う。小谷城はそうであるとだ。
「そこが問題になるかのう」
「政に向く城もありますか」
「左様なのですか」
「戦に向く城があるのと同じじゃ」
そうした意味で戦と政は同じだというのだ。木下はこう考えているのだった。
「一番よいのはどっちにも向いておる城じゃな」
「戦にも政にも」
「そのどちらにも」
「ちと贅沢な話であるが」
それでもだ。最もよいというのだ。そうした城が。

「何処かに築けば。織田も安泰じゃろう」
「ううむ。それはまた凄い城ですな」
「戦も政もできる城とは」
「そうした城とは」
「まあ築くのは確かに難しい」
このことは木下もわかっていた。どちらもできる城というのはだ。
「じゃが。築けば」
「築けばそれで」
「織田は」
「天下を治められる」
その城からだというのだ。

第四十八話　市の婿その八

「そうなりますか」
「そうした城を築くと」
「我が家は」
「場所を選ぶがのう」
何処に城を築くか、やはりそれもであった。
そのことについてだ。木下はどういった場所がいいか話すのだった。
「水が近い場所がよいか」
「水ですか」
「水が近い場所でございますか」
「うむ。水は守りにも使えるし移動にも使える」
ここでも兵と政であった。
「だからよいじゃろうな」
「ううむ、水ですか」
「まずはそれですか」
「そうじゃ。水じゃ」
またそれだと話す木下だった。
「それがある場所じゃな」
「といいますと」
「水といいますと」
「そうなりますと」
彼等は木下の話を聞いてだ。すぐにこう思うのだった。
彼等がこれから入る近江はだ。どうかというのだ。
「近江の琵琶湖なぞは」
「あれはかなり使えるのでは」
「如何でしょうか」
「おお、確かにそうじゃ」

その通りだとだ。木下は彼等に言われて気付いたのだった。
「そうじゃそうじゃ。あの湖はのう」
「かなり使えますな」
「水ですから」
「うむ。それに川や海もじゃ」
こうしたものもだというのだ。
「あの二つもよい」
「川に海」
「それもですか」
「まあそれはこれからじゃな」
そうした城のことはだ。とりあえずは置いておくというのだ。
そんな話をしながら一行は近江の奥深くに入る。そして。
小谷城の城下町でだ。彼等は喧騒を見るのだった。
「あれは」
「ふむ、よくありませんな」
木下は市に応えて顔を曇らせるのだった。
「喧嘩です」
「そうですね。あれは武家で」
「もう一方は町人ですな」
見れば若い武家と年老いた町人の組み合わせだ。武家は威勢よく兆人の胸倉を掴んでだ。そのうえでこんなことを言っていた。
「わしの馬をぶっておいてどういうつもりだ」
「そんな。不意に触れただけで」
「いや、ぶったではないか」
こうだ。老人に言い掛かりをつけていた。
「これは許せぬぞ」
「許せぬとは」
「そこになおれ」
老人に対して言う。
「手打ちにしてくれるわ」

「えっ、これは」
手打ちという言葉を聞いてだ。
市がだ。すぐにその美麗な顔を曇らせて言った。
「尋常ではありませぬ」
「そうですな。しかも」
木下は眉を顰めさせている。
「あの武家の者どう見てもです」
「言い掛かりをつけていますね」
「そうとしか思えませぬ」
まさにそうだとだ。市にまた話した。
「これはいけませぬ」
「ではここは」
市はすっと前に出た。そのうえでだ。

第四十八話　市の婿その九

「私が」
「なっ、幾ら何でもそれは」
「なりませぬ」
「お止め下さい」
だがそれはだ。即座にだった。
供の者達がだ。止めに入ってきた。
「あまりにも危のうございます」
「相手は刀を抜いておりますぞ」
「若しものことがあれば」
見ればその武家の者はもう刀を抜いていた。剣呑なことこのうえない。
しかもだ。さらにである。
「ですからここはです」
「どうか御自重を」
「ですか。薙刀も持っていませんし」
市はそれが使えるのだ。この辺りは帰蝶と同じである。
「ですからここはですね」
「はい、くれぐれも」
「御自重を」
「わかりました。しかしです」
それでもだとだ。市は喧騒を見ながら言うのだった。
「ここは何とかしなければならないですが」
「ああ、それならです」
出て来たのは木下だった。
「それがしにお任せを」
「藤吉郎殿がですか」
「騒ぎを静められますか」

「どうということはない」
木下はこう供の者達に話す。これは彼にとってはという意味である。
そのうえでだ。彼はこう市達に話すのだった。
「要は空気を変えれば」
「空気を」
「それを」
「あの剣呑な雰囲気を変えることでござる」
大事なのはそれだというのだ。
「そうすればよいのです」
「ではここは一体」
「どうすれば」
「さて、それでは」
木下は早速だった。芸人、それもやけに明るい服を着た如何にも陽気そうなそれになってだ。そのうえで彼は前に出ようとするのだった。
「では」
「芸で雰囲気をですか」
「変えられるのですか」
「左様、そうすればよい」
こう言うのである。
「さすれば今より」
「では御願いします」
「そうして」
こうしてだ。木下は彼のやり方で老人を救おうと出た。ところがだ。
芸人より前にだ。ある若い武者が出て来てだ。
そのうえでだ。こう彼に言った。
「まあ待て」
「何だ御主は」

「御老人は謝っておられるではないか」
こうだ。その武者に対して言うのである。
「さすればだ。ここはだ」
「どうせよというのだ」
「刀を収められよ」
穏やかな口調で。武者に対して言う。
「よいな。今はだ」
「無礼を働いた者を見過ごせというのか」
「御老人はわざとやったのではないようだが」
「それでもだ」
「許せぬというのか」
「馬は武士にとって命よ」
そうだとだ。この武者は怒って彼に言った。

第四十八話　市の婿その十

「その馬をはたかれたとなれば」
「武士の顔もはたかれたも同じと」
「それでどうして許せようか」
こう言うのである。
「違うか、それは」
「うむ、それはわかった」
彼はだ。武者の言葉を一旦受けて応える。
「それはな」
「ではそこから離れられよ」
「しかしそうもいかん」
「離れぬというのか」
「少なくとも今はな」
彼の返事が強いものになっていく。その彼を見てだ。
木下は足を止めてだ。こう市に言うのだった。
「あの騒ぎを止めている若い武者ですか」
「あの方ですね」
「よく御覧になって下さい」
こう言うのである。
「宜しいでしょうか」
「よくですか」
「大層な者です。流石ですな」
「流石とは？」
市は今の木下の言葉にだ。すぐに問い返した。
「木下様はあの方を御存知なのでしょうか」
「あっ、いや」
己の言葉に気付いてだ。咄嗟にだ。
木下は己の言葉を打ち消してだ。市にあらためて話した。

「どうやらこれで、です」
「これで？」
「この騒ぎは終わります」
そうなるというのである。
「血は流れませぬ」
「そうなればいいのですか」
「まあ見ていて下され」
木下は確信している口調でだ。市に述べた。
そしてそのうえでだ。足を止めてじっとだ。目の前のやり取りを見るのだった。
喧嘩を止める若い男はだ。武者にまた言っていた。
「どうだろうか。ここは」
「だからできぬ」
武者の言葉も変わらない。頑迷ですらある、
「この者、どうしても」
「手打ちにするというのか」
「左様、わかったらどかれよ」
男に対して強い声で告げる。
「貴殿には関わりのないことの筈だ」
「いや、そうはならぬ」
「関わりがあるというのか、この年寄りと」
「あると言えばある」
はっきりと言わずにだ。そうだというのだ。
「それはな」
「よくわからぬことを言うのう」
「とにかくじゃ」
また、だ。彼は言うのであった。
「ここはじゃ。何とかじゃ」
「退かぬと言えば？」
「ふん、切るまでよ」

その通りだと言ってだ。武者は。
刀を両手で構えなおしてだ。そのうえで男に言うのだった。
「さあ、わかったらじゃ」
「どけというのだな」
「そうじゃ。そうせよ」
男に対しても言うのだった。
「よいな」
「いや、それはせぬ」
どかぬとだ。男も言った。
「御老人を救わなければならぬからな」
「ぬう、何としてもそう言うのか」
「わかったなら下がるのじゃ」
また言う男だった。

第四十八話　市の婿その十一

「ここはな」
「くっ、では仕方がない」
武者の顔に鋭いものが宿った。
そのうえでだ。
「御主もじゃ」
「では」
男は彼の言葉を受けてだ。それでだった。
「そこまで言うのならじゃ」
「刀を抜くのじゃ」
「抜くきはせぬ」
「何っ！？」
「わしはそんなことはせぬ」
こうだ。男は言い切ってきた。
「決してな」
「何故抜かぬ」
「ここは抜くべき時ではない」
だからだというのだ。
「だからだ。決してじゃ」
「いいのか？このままだと」
「来い。来たくばな」
強い声だった。それの声を受けてだ。
武者もだ。遂にであった。
刀を収めだ。こう言うのだった。
「よいわ」
「刀を収めるか」
「そうする」
憮然としながらだ。武者も言う。

「御主に免じてじゃ」
「そうか。そうしてくれるか」
「ではな」
こうして騒ぎは終わった。そこまで見てだ。
木下は唸る顔でだ。こう言うのであった。
「うむ、見事」
「確かに。あの者はかなりですな」
「若いというのに」
「あれでこそじゃな」
供の者に応えてだ。木下はまた言った。
「いやはや、これはようござるな」
「あの、木下殿」
「どうされたのですか？」
供の者達はここで木下の態度が違うことに気付いた。
そのうえでだ。彼に問うのだった。
「どうも感心しておられるようですが
「先程の者に」
「あれだけでなければとな」
木下はもう姿が見えなくなった彼のことをさらに話すのだった。
「そう思ったからじゃ」
「はて。といいますと」
「一体何が」
「まあ。これで決まりじゃ」
あえて誰かは言わずにだ。彼は供の者達にこう述べた。
そのうえでだ。市に対しても言うのであった。
「市様、さすれば」
「さすれば？」
「わかりましたし後は近江を旅しますか」
「この国をですか」
「後は細かい場所まで見ます」

そうするというのである。
「そうしてです」
「長政様が私の夫に相応しいかどうか見極めるのですね」
「さらにです」
「さらに？」
「そう、さらにでござる」
笑いながらだ。こう答える木下であった。
「そうするとしましょう」
「はて」
市もだ。彼の今の言葉にだ。
首を傾げさせ。わからぬといった顔になるのだった。

第四十八話　市の婿その十二

「御言葉の意味が判りませんが」
「ははは、いずれおわかりになられます」
「いずれですか」
「何はともあれ」
「何はともあれ？」
「近江はいいところでございますな」
その猿面を破顔させたままの言葉だった。
「それも実に」
「それはわかりますが」
「とにかく。それではです」
木下の調子で話を進めてであった。
「近江を見て尾張に戻り」
「そのうえで、ですね」
「話をしかと決めましょうぞ」
こんなことを話してだ。市は近江を見回りだ。そのうえで尾張に戻って兄に対してだ。笑顔で話すのだった。
「近江はとてもよいところです」
「気に入ったか」
「はい、とても」
笑顔でこう話すのである。
「田畑も町もです」
「整っておるな」
「賑やかなものでした」
「ならばよい」
信長もだ。笑顔で市に応えた。
「御主は浅井に嫁に行け」
「はい、わかりました」

「さてさて、浅井長政は果報者じゃ」
その笑顔のままでだ。こんなことも言う信長だった。
「これだけのおなごを嫁にするからのう。いや」
「いや？」
「むしろ市が幸せか」
「私がですか」
「そうじゃ。あの者は間違いなく出来者じゃ」
そうだというのだ。
「その者を夫にするのじゃからな」
「そう仰って頂けますか」
「これがあの朝倉義景ならば」
どうするかというのだ。何気に織田と朝倉の中の悪さも話に出す。
「絶対に嫁にやらん」
「朝倉殿には」
「あの様な鈍い者はやがて国を滅ぼす」
「そうなりますか」
「動くべき時に動かず都の文化で遊んでおるだけじゃ」
「都の文化といえば」
「ああ、今川とはまた違う」
同じく都の文化に耽溺していてもだ。そこは大きく違うものがあるというのだ。
「今川は節度を持って遊んでおったが」
「朝倉殿は」
「溺れておるのじゃ」
「溺れているのですか」
「何でも溺れては駄目じゃ」
信長の言葉がやや強いものになる。
「そこは弁えねばな」
「駄目なのですね」
「そういうことじゃ。では市」

あらためてだ。妹に話す。
「後は権六が話をまとめてくれる」
「そうして私は」
「晴れて浅井の家に入る」
そうなるというのだ。
「後は浅井の家でじゃ」
「はい、あの家の妻になります」
「そうせよ。しかし御主は」
妹を見てだ。そのうえでの言葉だった。
「わしに最も似ておるかのう」
「兄上に」
「弟達や妹達の中でもじゃ」
自身にだ。最も似ているというのだ。
「気質や勘は似ておるか」
「まさか。それは」
「いや、やはりそうじゃろう」
似ていると言うのだ。市と自分は。
そう話してだ。さらにだった。
信長は市にだ。このことを問うた。

第四十八話　市の婿その十三

「酒は飲むか」
「酒をですか」
「そうじゃ。それはどうじゃ」
「それはいいです」
酒はだ。いいと返す市だった。
そのうえでだ。彼女は笑って兄にこう返した。
「その辺りは兄上と同じです」
「左様か。飲めぬか」
「はい、飲めませぬ」
そうだというのだ。
「それはどうも」
「同じか、それは」
「どうも。お酒は飲みますと」
「頭が痛くなるな」
「はい、一口飲んだだけで」
「わしもじゃ。酒はな」
「飲めませぬ」
こうしたところは全く同じだった。とにかく信長も市も酒は飲めぬのだ。
それでだ。市は兄にあらためて話した。
「ですからここは」
「茶か」
「それと何か甘いものを」
「そうじゃな。果物を用意してある」
それもだというのである。
「ではな。それを食しながらな」
「ゆっくりとお話を」

「ではな。そうしてじゃ」
こうしてだった。二人は兄妹で話そうとする。しかしここでだ。
信行と信広が部屋に来てだ。こう市に言うのだった。
「ふむ、もう帰って来ていたか」
「早いのう」
「勘十郎兄様達、どうしてここに」
「いや、我等も兄上にお話したいことがあってな」
「それで来たのだ」
そうだとだ。二人の兄は市に話しながら信長の前に来た。
そのうえでだ。彼に一礼してから述べるのだった。
「三十郎の件ですが」
「全て終わりました」
「そうか。長野家に完全に入ったか」
「はい、これで長野家は織田家の分家」
「完全にそうなりました」
つまりだ。信包が長野家の主に名実共になったというのだ。伊勢で有数の家が完全に織田家の手に落ちたというのだ。これでだ。
そしてだ。続いてであった。
「茶筅も三七もです」
「今伊勢に向かっております故」
「左様か。伊勢は完全にじゃな」
自身の手中に収まったことをだ。信長は実感するのだった。
そしてであった。信長はそれを述べに来た二人の弟達にもだ。あれを勧めるのだった。
「してどうじゃ。これから」
「茶ですか」
「それをですね」
「そうじゃ。市も飲む」
そうしてだ。彼等もどうかというのだ。
それを受けてだ。二人もこう返した。

「では。我等も」
「ご相伴に」
「茶もあれじゃ。一人で飲むよりじゃ」
大勢で飲む方がいい。そうだというのだ。
そうして実際に兄妹で茶を飲みながらだ。彼等はあらためて話すのだった。
信長は信行に自分が淹れた茶を差し出してからだ。彼に告げた。
「そなたはじゃ」
「はい。それがしは」
「清洲を守れ」
そうせよとだ。彼に話すのだった。
「よいな。そうせよ」
「わかりました。それでは」
信行は兄の言葉に静かに応える。そして次は。

第四十八話　市の婿その十四

信長は信広にも茶を差し出し。彼にも話した。
「御主は勘十郎を助けよ」
「武においてですな」
「そうじゃ。勘十郎は文」
そして彼は武だというのだ。
「そなた達二人で尾張を守れ」
「して兄上は美濃に」
「あの地に入られますか」
「そのつもりじゃ」
こう話すのである。
「美濃の稲葉山に入る」
「美濃を手中に収めればあの城をですか」
「我等の拠点にすると」
「そう考えている」
それは何故かも話す信長だった。
「都に近いからのう」
「その為ですか」
「あの城に入られますか」
「それにあの城は堅固じゃ」
それであまりにも有名な城である。まさに難攻不落なのだ。
「それにあの城におれば」
「あの城にいれば」
「どうだと」
「武田に対して動きやすい」
そうだというのだ。彼は今は武田を見ていた。
そしてだ。弟達に対して真剣な顔でだ。武田のことを話すのだった。

「我が家が美濃を手中に収めれば二百二十万石」
「武田はそれに対しておよそ二百万石」
「互角ですな」
「臣下もじゃ。我が織田に次ぐ」
これは信長が冷静に見ての評価だ。織田には優秀な家臣が数多い。
このことは彼もよくわかっているのだ。だがしかしだ。
武田の家臣の質がいいのもだ。これもその通りであった。
それもわかっているからこそだ。彼は今真剣な顔で話すのだった。
「だからじゃ」
「気をつけるべきですな」
「あの家は」
「婚姻の手筈はした」
武田にもだ。それをしたというのだ。
「しかし。それでもじゃ」
「あの家はどうしてもですか」
「油断できぬと」
「虎じゃ」
それだというのだ。まさにだ。
「天下を狙う虎じゃ」
「ではやがては我等と戦う」
「そうなりますか」
「なる。やがてはな」
信長は弟達に言い切ってみせた。
「だからじゃ。何があろうともすぐに対応できるようにじゃ」
「あの城に移られますか」
「稲葉山に」
「あの城は確かに簡単には陥ちぬ」
しかもだった。
「治めやすいしな」
「治めやすくもある」

「あの城はですか」
「うむ。山城じゃが場所がいい」
その場所故にだというのだ。治めやすいというのだ。
「だからあの城じゃ。あの城に入る」
「尾張から離れ」
「そうしてですな」
そうした話をしてだった。信長はこれからのことも頭に入れていた。そのうえで天下を考えているのだった。それは今茶を飲んでもだった。
それでだ。彼はまた市に話した。
「御主もじゃ」
「私もですか」
「天下のことは考えておくことじゃ」
「おなごであってもですか」
「この場合おのこもおなごもない」
どちらでもだというのだ。男でも女でもだ。
「天下にはおのこもおなごもおるからな」
「だからなのですね」
「そうじゃ。書を読みそして考えよ」
「兄上と同じくですね」
「そして浅井に嫁いでも」
それからもだというのだ。
「わかったな」
「はい、それでは」
「では飲もうぞ」
こうしてだった。市の婚礼の話も順調にまとまった。そうしてだった。織田は美濃を攻める用意を、そしてそれからのこともだ。着々と手を打つのだった。

第四十八話　完

2011・7・5

第四十九話　認めるその一

第四十九話　認める

雪斎は信長のここまでの動きを見てだ。
今川家に仕えていた同僚達にだ。こう話すのだった。
「これまでのところは」
「信長殿は見所がある」
「そうだというのですね」
「うむ、ある」
その通りだというのである。
「伊勢と志摩を無血で手に入れ」
「そして浅井殿との縁談ですね」
「それもまとめましたね」
「しかも武田殿とも同盟の話を進めておられる」
「武田殿に関しては」
雪斎は織田と武田のことを踏まえて話した。
「同盟を結ぼうともやがては刃を交えることになろう」
「しかしそれでもですな」
「織田殿は外の政も見事だと」
「そうでござるな」
「左様。見事でござる」
その通りだと言う雪斎だった。
「ここはです」
「織田殿の家臣となる」
「そうなられますか」
「いや、まだかと」
それはだ。今もだというのだ。
「ここで一つ思うのですが」
「思うとは」

「ではその思うことは一体」
「何なのでしょうか」
「はい、伊勢と志摩に行きたいと思います」
その国にだというのだ。信長が新たに手に入れたその国にだ。
「そのうえであの国の政を見たいと思います」
「伊勢と志摩をどう治めているのか」
「あらたに手に入れたあの二国をですな」
「織田殿が」
「尾張だけを贔屓しては何にもなりませぬ」
雪斎はそこまでも見ているのだった。
「だからです」
「成程、伊勢と志摩ですか」
「その織田殿が手に入れられた二国」
「その国々も無事に治めておられるか」
「それを見てからですな」
「若し無事に治めておられれば」
それならばというのだ。雪斎のその言葉も真剣なものになっている。
「その時にです」
「我等は織田殿の臣になる」
「左様ですね」
「そう御考えなのですね」
「回りくどいですが」
しかしそれでもだというのだ。あえてそうするというのだ。
「そうしましょう」
「では。我等は雪斎殿にです」
「全てお任せしていますので」
「そうさせてもらいます」
「その様に」
彼等も雪斎にこう言う。今川きっての知恵者である彼を信頼して

いるからこその言葉だ。こうしてであった。雪斎は一旦伊勢と志摩に向かうのだった。

それを聞いた信長は。報告する森可成にだ。

不敵な笑みを浮かべてだ。こう言った。

「よいことじゃ」

「今の伊勢と志摩を見ることはですか」

「まだはじめたばかりじゃがな」

それでもだというのだ。いいことだとだ。

「伊勢と志摩も同じじゃ」

「治められますな」

「治めそして豊かにする」

信長もこうした意味では信玄と同じだった。まずは内の政なのだ。

「それを見てもらうとしよう」

「そしてですな」

「太源雪斎じゃな」

彼の名をだ。信長は口にした。

「そして他の今川の者達もじゃ」

「殿の家臣になるのですな」

「家臣は多いに越したことはない」

これが信長の考えだった。彼はとかく家臣を集め使う男なのだ。

第四十九話　認めるその二

だからこそだ。今こう言うのであった。
「あの者達も使わせてもらおう」
「わかりました」
「無論そなた達もじゃ」
森にだ。顔を向けての言葉だった。
「存分に働いてもらうぞ」
「それはもう十二分に」
わかっていると。こう返す森だった。
「しかしじゃ」
「しかしとは」
「こうも言っておく」
ここで信長は笑顔になる。いつもの屈託のない、それでいて自信にも満ちた笑みでだ。森に対してこんなことも言うのであった。
「働いてもらうが命は粗末にするな」
「死ぬなと仰るのですか」
「容易にな。簡単には死ぬな」
これが信長の森に言う言葉だった。
「それはよいな」
「死ぬなと言われましても」
「難しいというか」
「武士ですから」
だからだというのだ。そしてそれに加えてであった。
「しかも戦国の世ですし」
「それでもじゃ。命は粗末にするな」
「ではなるべく生きよと」
「そういうことじゃ。簡単に死ぬことはわしが許さぬ」
このことは何度でも言うといった感じであった。

「よいな。生きるのじゃ」
「殿がそう仰るのでしたら」
「死んでは元も子もない。生きてこそじゃ」
「しかし殿のその御言葉と御考え」
それはどうなのかとだ。森はこう彼に返した。
「戦国の世ではかなり変わっておりますな」
「そうか？誰でもそうであろう」
「生きたいというのですね」
「本音はそうじゃろう。人は確かに必ず死ぬ」
それからは誰からも逃れられない。少なくとも信長は不老不死やそういったものには何一つとして関心がないことは間違いない。
「そして生き恥を晒すのもよくないがじゃ」
「それでもですな」
「死に急ぐことも命を粗末にすることも駄目じゃ」
「ではどういう時に死ねと」
「できればまっとうせよ」
その命をというのだ。
「そうあるべきじゃ。そして生き残れば」
「生き残る限りですか」
「恥を晒さぬ様にしてな」
「わかりました。ではそれがしも」
「御主はまあ。爺や権六と同じで糞真面目じゃがな」
森の生真面目で実直な性格はだ。褒めながらも苦笑いだった。
「御主や権六はともかくとしてのう」
「平手殿ですか」
「ははは、爺の頑固さは昔からじゃ」
まさにだ。信長が幼い頃からだった。
「あれには参っておるわ」
「ですがそれでも殿は」
「爺は爺でおらぬと困る」

平手についてだ。信長は何時になく率直に述べた。
「あれはわしに色々と教えてくれる」
「あの謹言で、ですな」
「そうじゃ。かつて唐の太宗がじゃ」
中国の歴史においても名君として知られている。軍事的にも卓越していただけでなく政治家としてもだ。その功績は比類なきものがある。その人物がだというのだ。

第四十九話　認めるその三

「魏徴という家臣を大事にしておったがな」
「その者が平手殿ですか」
「そういうところじゃ。やはり誰か諫める者がいなくてはな」
「だからこそ平手殿は必要ですか」
「そうじゃ。それにおらぬと」
「おられぬとなると？」
「あれ程寂しい者はおらんだろう」
平手はそうした者だというのだ。
「おると大層口煩いがのう」
「確かに。あの方はおられぬと」
「寂しいな」
「そう思うと不思議な方です」
「正直思う」
ここでまた言う信長だった。
「爺と勘十郎がおらぬとわしは中々じゃ」
「上手くいかれぬと」
「そうじゃ。二人共戦は不得手じゃが」
「しかし政は」
「文が見事じゃからな。だから頼りにしておる」
「文ですか」
森もだ。文について考えた。
そのうえでだ。信長に幾分申し訳なさそうな顔になってこう述べたのだった。
「それがしはどうも文は」
「何を言う、わしの言ったことは常にこなしておるな」
「ですがそれ以上ではありませぬ」
「そなたは武もある。武ではかなりのものではないか」

「では」
「御主はそれでよい」
こう森に対して言うのである。
「充分じゃ」
「有り難き御言葉」
「だからじゃ。今後も頼むぞ」
「はっ、畏まりました」
こうした話をしてだ。信長は報を受けたのだった。
そしてその雪斎は伊勢や志摩においてだ。見たのだった。
まずだ。田畑は。
「ふむ。これは」
「見事でございますな」
「実にのう」
こうだ。供をしている小僧に言うのだった。彼の弟子である。
彼は馬上において田畑を見ながらだ。思わず唸ったのである。そのうえで馬の口を引いている小僧にだ。こうも言ったのである。
「尾張も見事じゃったが」
「伊勢もそれに近付いておりますか」
「手中に収めてすぐに政にかかるか」
雪斎はそのことについても考えて述べた。
「普通は少し時を置くがじゃ」
「織田殿は動きが速いですな」
「速いだけではない」
それに留まらないというのだ。
「さらに的確じゃ」
「的確ですか」
「田畑の広さも一つ一つの割り当てもじゃ」
そうしたことまで見て言うのだった。
「それに堤も整えておるしな」
「そういえば川も」

そこにはもう堤が築かれようとしていた。それも行われていたのだ。しかもその川にはだ。見事な橋までかけられているのだった。

そうしたところまで見てだ。雪斎は唸った。

「よいのう」

「堤を築いておりますな」

「見事じゃ」

それがだ。見事だというのだ。

「尾張だけではないか」

「こうして伊勢や志摩も」

「この国々も豊かになる」

雪斎はまた言った。

第四十九話　認めるその四

「それも非常にじゃ」
「では織田殿はさらにですか」
「強くなる。これでは」
「これでは？」
「美濃は自然に手に入る」
そうなるというのだ。その美濃もだというのだ。
「織田殿ではじゃ」
「美濃もそうしてですか」
「最早それは止まらん」
こうまで言うのであった。
「尾張にこの伊勢、志摩にじゃ」
「美濃まで手中に収められれば最早」
「石高にして二百万石を超え」
天下でも屈指のものであるのは最早言うまでもない。
「そして兵は五万をさらにじゃ」
「ううむ、天下随一ですな」
「そうなれば敵はおらん」
「では織田殿は」
「決まりじゃな」
雪斎の声が確かなものになった。
「我等はこれからは」
「織田殿に」
「うむ。もう少し見るつもりじゃったが」
それには及ばないというのだ。伊勢と志摩を見てはだ。
それでだ。雪斎は小僧に言うのだった。
「ではこれで帰るか」
「そうされますか」

「うむ、そうする」
こう言うのだ。
「すぐに戻るぞ」
「では」
こうしてだった。彼はすぐに伊勢から尾張に戻るのだった。そうしてだ。
今川の者達を連れてだ。すぐにだった。
彼等にだ。こう話した。
「伊勢はよいところでござった」
「左様ですか」
「では志摩は」
「同じく」
その国も見た。そうして言えることは。
「やはりよい国でござった」
「では織田殿にですか」
「つかれますか」
「そうするのがよい」
まさにそうだというのだった。
「伊勢は町も田畑も」
「非常に整っている」
「そうなのですか」
「それだけでなく」
雪斎は己が見たことをだ。彼等にそのまま話した。
「道や堤もです」
「そうしたものも整えているのですか」
「既に」
「左様、既にでございます」
そこまで聞いてだ。彼等は言うのだった。
「予想外ですな」
「織田殿は既にそこまで政を進めておられるとは」

「どうやらこれは」
「かなりの」
「左様、志摩の港もです」
そこもだ。どうかというのだ。
「整えられ多くの船が行き交い」
「賑わっておりますか」
「そうなのですか」
「あれだけの港だとは思いませんでした」
また本音を話す雪斎だった。
「さすればです」
「織田殿は我等の主となられるべきお方」
「義元様が仰る様に」
「そう見ます」
雪斎の今の言葉は断言だった。

第四十九話　認めるその五

「では。宜しいですな」
「はい、それではです」
「我等もまたです」
「織田殿にです1
「仕えましょう」
こうしてだった。彼等は信長の前に馳せ参じ頭を垂れるのであった。信長が彼等を迎え入れたのは言うまでもない。信長にとっては非常に大きなことだった。
伊勢、志摩の兵と今川の家臣達も組み入れた信長はそれに喜んではいなかった。彼はすぐにだ。兵達を集め訓練を行った。
そしてその中でだ。兵の動きを見て言うのだった。
「幾度やってもじゃ」
「といいますと」
「何かありますか」
「弱いのう」
己の兵を見ての言葉だ。
「織田の兵は弱いわ」
「あの、殿それは」
「仰っては」
「弱いことは確かじゃ」
家臣の止める言葉をここでは遮った。そうして言うのだ。
「事実じゃ」
「しかしそれを言えばです」
「兵の士気に関わりますし」
「敵が聞いていれば」
「よい」
だが、だ。信長はこう返してだ。それどころかさらに言うのだっ

た。
「弱いことがわかればじゃ」
「それでもよいのですか」
「我等の兵が弱いことがわかっても」
「弱くともよいのじゃ」
こんなことも言うのである。
「それでもよいのじゃ」
「それはまたどうしてですか」
「弱くともいいとは」
「それはまた」
「弱い兵でもちゃんとした武器を持ち鎧を着ておれば戦える」
まずは装備からだった。
「飯もたんと食ってな」
「飯もですか」
「確かにそれもですな」
「外せませんな」
「飯を食わぬと死ぬ」
信長は簡潔にだ。この真理を言った。
「武器に鎧に飯があればじゃ」
「それで戦ができますか」
「その三つで」
「左様、兵はそれぞれの強さだけではないのじゃ」
このことをわかってだ。信長は言うのである。
「そうしたものも全てあってじゃ」
「では兵の強さよりもですな」
「そうしたものを充実させていきますか」
「あとは数じゃ」
信長の言葉はここで強くなる。
「数があればじゃ」
「戦は数ですな」

「まさにそれですな」
「数で押す」
信長はまた言う。
「どんな相手にもそれじゃ」
「ううむ、では兵は弱くともですか」
「別によいのですか」
「特に」
「ではよいな」
ここまで話してだった。信長は。
その弱い兵をよしとしてだ。今彼等を見ていた。
青い具足と陣笠の者達は確かに弱かった。しかしだった。
槍は長く具足もよい。それにだ。
鉄砲がだ。さらに増えていた。その数は。

第四十九話　認めるその六

「また増えましたな」
「倍になっておりますが」
五百からだ。倍というと。
「千ですか」
「千も揃えましたか」
「鉄砲も多いに越したことはない」
また言う信長だった。
「言うたな。戦は数じゃと」
「だから鉄砲もですか」
「必要ですか、多く」
「何でもとにかく数じゃ」
そうだというのだ。
「斉藤にもその数で向かうが」
「向かうが？」
「まだありますか」
「戦に入る前に。あの稲葉山の城を攻める前にじゃ」
稲葉山城を攻め落とせば勝ちである。しかしなのだ。
その前に色々とすることがあるとだ。彼は言うのである。
「まだやることがある」
「といいますと？」
「伊勢と志摩を手に入れ浅井殿と同盟を結び」
「そして徳川殿とも手を結ぶ」
「それだけではありませんか」
「まだありますか」
「そうじゃ。今度は美濃の中じゃ」
そこだというのだ。仕掛けるのは。
「美濃の主の斉藤義龍はどうなっておる」

「はっ、その義龍殿ですが」
ここで滝川がだ。信長に述べる。
「最早幾許もないかと」
「そうか。間も無くか」
「病は思ったよりも重いです」
そのだ。義龍の病はだというのだ。
「そしてその後ですが」
「息子の斉藤龍興じゃな」
「龍興殿はどうにもならない様です」
滝川はその龍興についてはこう話す。
「そうした方の様です」
「だからじゃ。義龍が死ねばじゃ」
「攻めるのではありませんな」
「それはまだですな」
「うむ、まだじゃ」
攻めはしないというのだ。それは。
「あちらから来れば退けるがな」
「こちらからは攻めはしない」
「では」
「伊勢や志摩と同じじゃ」
こう言うのである。
「そういうことじゃ」
「では、ですか」
「あの時と同じ様にですね」
「謀で、ですか」
「斉藤の中を切り崩しますか」
「そう考えておる」
実際にそうだとだ。信長は話す。
「まあそれはあの国の主が代わってからじゃ」
「義龍殿は手強い」

「だからこそ」
「賢い者には下手な謀は打てん」
これもまた事実だった。信長は義龍は決して侮ってはいなかった。どういう者か知っているからこそだ。彼は今は慎重なのである。それでだった。今は仕掛けないとしてだ。時を待つのだった。
その間にだった。市がだ。
近江に入った。そこでだ。
目の前にいた長政はというと。
「あっ・・・・・・」
「これは」
お互いにだ。声を出してしまった。市は。
その若い毅然とした顔立ちの若い男の顔を見てだ。こう言うのだった。

第四十九話　認めるその七

「あの時の町の」
「むっ、というと」
そう言われてだ。その若い男、長政も笑みになりだ。市に応える。
「それがしのあの時のことを」
「実は」
「ははは、御覧になられていたか」
何故見ていたかはあえて問わずにだ。長政は笑って言うのだった。
「左様、あの時はたまたま城の外に出ておった」
「それでだったのですね」
「うむ。あの騒ぎを収めた」
そうしたというのだ。
「老人に無体なことがあってはならぬからな」
「それでだったのですね」
「そういうことだ。しかし」
「しかし？」
「見ておるとはのう」
このことをだ。長政は笑いながら話すのである。
「いや、これは恥ずかしい」
「覗き見するつもりはありませんでした」
「そうじゃな。おそらくは」
長政も予想してみせる。
「あれじゃな。わしや近江がどういった感じなのかを確かめる為にあえて近江に入ってじゃな」
「おわかりですか」
「おおよそじゃがな」
わかったというのだ。
「成程、考えたものじゃ」

「それでなのですが」
「そこまで見てから決めようとするとは」
長政からの言葉だ。
「いや、見事」
「見事ですか」
「そこまでして決める者はそうはおらん」
嫁に入れてそれで終わらせる家が多いからだ。しかし信長はそこであえてそうしたのだ。そしてそれは市も同じだったからだ。
長政はだ。それを言うのだった。
「そこまでする者ならばよし」
「よし、ですか」
「わしの妻に、そして」
そして。さらにだった。
「手を結ぶに相応しい」
「では」
「それだけではないしな」
市のだ。その顔を見ての今度の言葉だった。
「いや、これ程までの美人とはのう」
「私は別に」
「まことに整っておる者程そう言う」
美貌を自覚せずともよいまでのものだからだというのだ。
「そういうことじゃ」
「はあ。そうなのですか」
「尚よい。ではじゃ」
「それではですね」
「宜しく頼むぞ」
「はい、こちらこそ」
こうしてだった。市は近江に入り浅井長政の妻となった。このことにより織田と浅井の同盟が成立したのである。
それを聞いてだ。美濃では。

国人達の間でだ。次第にだった。
「織田殿は三万五千の兵を持っておる」
「兵を見ると我等よりもずっと多いではないか」
「こちらは二万」
「いきなり差が開いておるぞ」
こう話す彼等だった。
「しかも近江の浅井殿と手を結んだ」
「下手をすると近江からも攻められる」
「唯でさえ東に武田がおるというのに」
「これでは」
動揺の雰囲気が漂いだしていたのだ。それで、だった。
国人達は次第に不安を感じだ。それでなのだった。
「織田殿につくか」
「そうするべきか」
「最早斉藤殿は駄目ではないのか」
「義龍様も幾許もないようだし」
「このままでは」
こうだ。不穏な雰囲気が漂いだしていたのだ。

第四十九話　認めるその八

それでだ。次第にだ。
織田に誼を通じる国人達も出て来ていた。尾張との境にいる国人の中には迷わずに織田に従う者達も出て来ていた。それを見てだ。
義龍は言った。彼は病を得て床の中にいる。そこにいてだ。
彼はだ。こう彼の腹心達に言うのである。
「そうか。境ではか」
「はい、出ております」
「織田につく国人達がです」
「僅かですがそれでも」
「出ております」
「厄介なことだ」
話を聞いてだ。彼は言うのだった。
「やはり織田と浅井が手を組んだことはか」
「はい、そうです」
「国人達の間で不穏な空気が漂っています」
「このままではです」
「危ういことになります」
「わかっている」
それはだ。わかっていると返す義龍だった。
だがそれでもだ。彼は起き上がれずにだ。こう彼等に言うだけだった。
「ではその者達に兵を送れ」
「そうしてですね」
「滅ぼせと」
「そうせよ。謀反は許さん」
そうだというのである。
「兵を送れ」

「はい、ですが」
「そのことですが」
「三人衆に不破か」
義龍は家臣達が口ごもるのを見てだ。すぐに察して述べた。
「あの者達が動かぬか」
「はい、それに竹中もです」
「この者達とそれに連なる国人達がです」
「全く動きませぬ」
「左様か
それを聞いてだ。義龍は。
床の中で考える顔になってだ。こう言うのだった。
「ではじゃな」
「国人達を討つ兵はです」
「殿が御自ら動かされるしかありません」
「さすれば集ります」
「因果なことじゃ」
また床の中で言うのだった。そこから出ることは最早できなかった。
「わしは最早幾許もない」
「ではあとは」
「龍興様が」
「あれしかおらぬが」
義龍の子は彼しかいない。だから次の美濃の主は必然的に彼になる。だがそれはどうかとだ。義龍は病でやつれた顔で言う。かつては大柄で顔付きも厳しかったが今ではだ。見る影もなくなっている。
その顔でだ。彼は言った。
「駄目じゃな」
「駄目とは」
「といいますと」
「龍興では駄目じゃ」

これが彼の今の言葉だった。
「到底な」
「ですが美濃の主はです」
「あの方しかおられません」
「ですから」
「だから余計に駄目じゃ」
その龍興しかいないという現実がさらにだというのだ。
「あれは。美濃を支えられん」
「ではこのままでは」
「織田がですか」
「この国をですか」
「攻め取りますか」
「そうなるやもな」
そしてだ。さらにだった。
義龍はだ。かつて父が言ったことをだ。ここで話すのだった。

第四十九話　認めるその九

「あの時父上は我等が織田の軍門に下ると仰った」
「あの御言葉ですか」
「大殿の」
「左様、あの言葉が現実になるやもな」
こう言うのである。
「このままだとな」
「まさかとは思いますが」
「織田信長、あの男はうつけではありませんか」
「そうではないですか」
「それが今になってわかった」
信長のその資質をだ。義龍もわかったというのだ。
「うつけがあそこまでできるか」
「尾張を統一し今川を退けですね」
「そして伊勢と志摩を手に入れ」
「浅井と手を結ぶ」
「さらには三河の徳川と手を結ぶとか」
このこともだ。彼等は察しているのだった。既にだ。
「ここまでする者はですか」
「やはり只者ではない」
「そういうことですか」
「うむ、手強いぞ」
まさにそうだというのだ。
「尋常な者ではない」
「政も見事だといいますし」
「尾張はかなり豊かになっているとか」
「しかもそれが伊勢と志摩にまで及んでいるとか」
「わしにはあそこまでできん」

自分では無理だとだ。義龍は言い切った。
「とてもな」
「しかしそれを果たす織田信長」
「あの者はどうなのか」
「それを突き詰めて考えていくとですか」
「わしなぞ足下にも及ばん」
またこうしたことを言うのだった。
「見誤ったわ」
「しかし今まで美濃に攻め入ってきていません」
「これは一体どうしてでしょうか」
「確実に攻め落とせるようになってからじゃ」
それからだというのだ。
「織田が動くのはな」
「この美濃を確実にですか」
「手中に収められるようになってから」
「それから動いてくる」
「そうなると」
「それは間も無くじゃ」
そのだ。信長が美濃に攻め入って来る時も近いというのだ。今の義龍にはこのこともわかるのだった。
それを読んだうえでだ。彼はさらに話す。
「まずは足掛かりを築く」
「足掛かりといいますと」
「この稲葉山を攻める為のですか」
「それを築きますか」
「左様。そうしてからじゃ」
さらにだというのだ。それからだとだ。
「本格的に来るであろうな。既に」
「国人達がですな」
「徐々に斉藤から織田に加わっております」

「それは織田のそういうところも読んで、ですか」
「今より」
「そういうことじゃ。あの者達は滅ぼさねばならん」
美濃の主としてだ。それはわかっていることだった。さおなければこの流れがさらに大きくなり斉藤の崩壊につながる。だからこそだ。
しかしそれができるのかどうか。それはというと。
「最早手遅れか」
「あの者達を抑えることは」
「そのことが」
「うむ、わしは最早幾許もない」
これが大きな理由だった。義龍から見てのことだ。

第四十九話　認めるその十

「ならばじゃ」
「このまま。国人達は織田につき」
「織田は戦をせずに己の力を強くしていく」
「そしてこれが続けば」
「我等は」
「そうなる。そして龍興はそうしたことがわからん」
それもだ。全くだというのだ。
「これではどうしようもない」
「この斉藤が滅びますか」
「ここで」
「それも時が選んだことか」
義龍は上の天井を見上げながら呟いた。
「それもな」
「時がですか」
「斉藤ではなく織田を選んでいる」
「この美濃の主に」
「そうやもな。してじゃ」
どうなるか。義龍はさらに話した。
「織田がこの美濃を手に入れる」
「さすればこの美濃の八十万石、二万の兵がですな」
「織田のものになる」
「そうなります」
「織田は二百万石を超え兵も五万に達する」
義龍はこのことも話す。
「天下随一の家となる」
「そこまでなりますな」
「あの織田がそこまでの力を持ちますか」

「後は思うがままじゃ」
こんなことも言う義龍だった。
「美濃は都にも近いしのう」
「では都も抑え」
「そのうえで」
「天下も夢ではない」
ここまで言うのだった。
「美濃まで抑えればな」
「尾張、伊勢に志摩に加えて」
「美濃もなると」
「土地としてもな」
美濃の重要さは義龍もよくわかっていた。伊達にこの国の主ではない。そのことはわかっていた。だからこそここで言うのだ。
「この地を手に入れればじゃ」
「織田はそこから雄飛しますか」
「尾張の一大名から」
「父上の目は確かだった」
臨終の間際だからこそ言えた。このことが。
「あの者のことをよくわかっていた」
「織田信長のことを」
「あの者のことを」
「わしはわかっていなかった」
彼はだ。今まではなのだった。
「しかし。今になってわかった」
「斉藤は織田に従いますか」
「その下につきますか」
「なる。最早な」
こう話してだった。その数日後だ。
義龍は遂にだ。こと切れた。その前にだった。
側近達にだ。この言葉を告げた。

「帰蝶にじゃ」
「帰蝶様にですか」
「あの方に」
「伝えよ」
こうだ。彼等にだけ話すのである。
「そなたの亭主と共に何時までも楽しく過ごせとな」
「はい、それでは」
「その様に」
「それだけじゃ。ではな」
ここまで言ってだ。そうしてだった。
義龍は息を引き取った。こうして信長の宿敵と言えた彼は信長に屈することはなかったが病に屈してだ。退場したのであった。
このことはすぐにだ。尾張にも伝わった。それを聞いてだ。
信長は一旦目を閉じてだ。それからだ。
再び目を開き。傍らにいる帰蝶に話した。

第四十九話　認めるその十一

「聞いたな」
「はい」
その通りだとだ。帰蝶も頷いて答える。
「兄上が」
「そうじゃ。去った」
去ったと、この表現で妻に告げた。
「そうなったわ」
「敵味方に別れましたがそれでも」
「兄だったな」
「そうでした」
「では。伝えておく言葉はあるか」
妹してだ。それはあるかというのだ。
「今ならすぐに伝えられるが」
「兄上は私に楽しく過ごせと仰ったそうですが」
帰蝶が今言うのはこのことだった。
「そうですね」
「うむ。わしと共にな」
「では」
そこまで聞いてだった。
帰蝶は一呼吸置いてからだ。こう信長に話した。
「御冥福をお祈りしますと」
「それが伝えておくことか」
「そうです。あちらの世で楽しく」
兄が己に告げた言葉をだ。それを返す形になっていた。
「そうお伝えして頂ければ」
「左様か。それではな」
「はい、お伝え下さい」

「その様にな」
こうした話をしてだった。そのうえでだ。
実際にだ。帰蝶の言葉は信長を通して美濃にまで伝えられたのだった。それを聞いてだ。
心ある者達はだ。こう言った。
「やはり血を分けた兄妹じゃな」
「敵味方に別れていても」
「やはりそれは離れられん」
「決してな」
このことは信濃にも伝わっていた。幸村が言うのだった。
「戦国の世といえどな」
「血は否定できませんか」
「それは」
「血。絆と言うか」
それだとだ。十勇士達に話すのである。彼は今は両手にそれぞれ槍を持ちそのうえで稽古をしている。十勇士達がその相手だ。
嵐の如き攻撃を防ぎ逆に槍を繰り出し駆け回りながらだ。彼は言うのである。
「それは濃いものよ」
「血より濃いものはない」
「そういうことですな」
「左様、しかしじゃ」
ここで幸村の言葉が少し変わった。駆けながら言うのである。
「血より濃いとはいってもじゃ」
「それでもですか」
「まだありますか」
「それは親子や兄弟だけではない」
「といいますと」
「それは一体」
十勇士達も問う。稽古の中で。

「それがわかりませんが」
「血は親子や兄弟だけのものではないのですか」
「我等は既にだ」
そのだ。彼と十勇士達のことだ。
「その血を互いに重ね合わせたな」
「あれですか」
「あのことですか」
「我等は既に兄弟よ」
義兄弟であるがだ。そうなっているというのだ。
「そうした意味でだ」
「我等にも血より濃い絆ができている」
「そうだというのですか」
「そういうことよ。我等は」
四方八方から来る手裏剣をだ。その両手の槍を振り回し。
それで全て叩き落す。そのうえでだ。
跳びだ。そこで。
襲いかかって来た十勇士達にだ。槍を繰り出す。

第四十九話　認めるその十二

空中で激しい攻防が行われる。そしてそれは。
着地してもだ。尚も続いていた。
その激しいやり取りの中でだ。幸村はまた言った。
「こうして共にいるな」
「はい、常に」
「我等十人常に幸村様と共にいます」
「我等の主と共に」
「これこそがその証」
共にいる、このこと自体がだというのだ。
「我等の絆はこの中で出来上がっているものよ」
「我等主従互いに切磋琢磨し合い」
「そのうえで絆も深めていく」
「そうした仲ですな」
「我等は生まれた時と場所は違う」
幸村は十勇士達と戦いながらさらに話す。
「しかしそれでもだ」
「死す時は同じ」
「その場所もまた」
「そうだ。同じだ」
まただ。そうだという幸村だった。
そしてそのうえでだ。修業を続けだ。
最後に双槍を大きく振るいだ。十勇士達を退けてから言った。
「我等の絆はそうしたものぞ」
「はっ、必ずや死す時と場所は」
「同じくしましょうぞ」
「そして次の世でもだ」
どうかというのだ。この生の次の生はだ。

「我等は友ぞ」
これが彼等の絆だった。彼等は主従であり義兄弟であるがそれと共に友であった。その絆を確かめ合いながらだ。今こうして修業を積んでいた。
そしてそれが終わってからだ。彼等は。
川で汗を流してからだ。井戸で冷やしておいた梨を喰らいながらだ。今度はこんな話をするのだった。
「いや、やはり修業の後の果物は別格ですな」
「全くでござる」
穴山と由利がその梨を食べながら話す。
「こうして殿と共に梨を喰らうのもです」
「またいいものですな」
「梨だけではないぞ」
その梨だけではないとだ。幸村もまたその梨を食しながら応える。
「西瓜や葡萄もじゃ」
「ああしたものもですな」
「我等と共に食するとですか」
「美味と」
「そう仰いますか」
「その通りよ。美味いものは一人で喰うより皆で喰う方がよい」
こうだ。幸村は満面の笑顔で話す。
「そうじゃ。確かに暑い時に冷やした果物は美味じゃ」
「しかし一人で食してもその美味は限られている」
「左様ですな」
「その通りじゃ」
まさにそうだとだ。幸村は霧隠と根津に応える。
「やはり皆で食してこそじゃ」
「いや、全くです」
「その通りでございますな」
三好兄弟も梨を食っている。兄は豪快に、弟は礼儀正しくだ。そ

れぞれ食している。
そして今度はだ。望月と海野が話す。
「では殿、今日の修業はここまでにして」
「後は学問ですな」
「そうじゃ。御館様にお仕えするにが武だけではならん」
この辺りが生真面目かつ熱い幸村らしかった。
「文もじゃ。わしは文でも至高を目指すぞ」
「我等は文までは無理ですが」
「殿はそれも目指されますか」
「あらゆることにおいて頂点を目指す」
幸村は曇りのない目で覚と猿飛にも話した。
「御館様の為に」
「ならば我等は最高の忍を目指し」
「その力量で殿と共に生き」
「殿と共に死にましょう」
「うむ。必ずそうしようぞ」
そうした話をしてだった。彼等は今は梨を楽しむ。そしてそれを食べ終わり身体を拭いてからだ。幸村は学問にも励む。まさに文武両道の漢だった。

第四十九話　完

２０１１・７・１３

第五十話　徳川家康その一

第五十話　徳川家康

氏真は三河においてもう気楽にその日々を楽しんでいた。まずは蹴鞠だ。

百姓の子供達を集めてだ。その妙技を見せるのだった。

鞠を軽やかにかつ大胆に蹴って遊んでみせてだ。そのうえで言うのである。

「さて、御主等はまだここまではできない」

「そんなのとてもできませんよ」

「そうですよ」

これが子供達の言葉だった。

「氏真様凄過ぎますよ」

「よくそんなことができますね」

「おいら達にはとても」

「無理ですよ」

「誰でも最初は無理じゃ」

そうだとだ。氏真は子供達に笑って話すのである。

「麿にしてもじゃ」

「最初はできなかったんですか？」

「そうだったんですか」

「誰でも最初はできん」

こう子供達に話すのである。

「しかし毎日少しずつでもやっていけばじゃ」

「できるようになるんですか？」

「そんな感じで」

「そうじゃ。なれる」

笑顔でだ。彼は子供達に話す。

「何時かはな」

「そうですか。じゃあおいらは」
「おいらもです」
「毎日していきます」
「そうすればいいんですね」
「蹴鞠だけではないぞ」
それに留まらないとだ。氏真はこのことも話した。
「他のこともじゃ」
「他っていうと？」
「文字とかもですか」
「ああしたこともなんですか」
「文字もあれじゃ。毎日書いていけばじゃ」
どうなるかというのだ。
「覚えるからのう」
「おいらあれ苦手ですけれど」
「それでもなんですか？毎日書いていればですか」
「覚えていくんですか」
「左様。毎日少しずつでもじゃ」
またこう話す氏真だった。
「身に着くのじゃよ」
「そうなんですか。それじゃあ」
「とりあえずやってみますね」
「そうしますね」
「そうするのじゃぞ」
こんな話をだ。百姓の子供達に気さくに話してだ。己の屋敷に戻る彼だった。そして何処か茶室を思わせる屋敷においてであった。
彼はだ。供の者から話を聞くのだった。
「松平殿ですが」
「どうやらです」
「ほう、早いのう」
こうした言葉だけでだ。氏真は事情を察して述べた。

「もう決まったのか」
「はい、近衛様も働かれて」
「そのうえで、です」
「決まりました」
そうだとだ。氏真の供の者達も話すのだった。
「徳川という姓になりました」
「そして御名前もですが」
「そちらもあらためられるとのことです」
「ふむ。では何もかもが変わるのじゃな」
氏真は自分で茶を淹れてそれを飲みながらだ。彼等の話を聞いて述べた。
「まことにな」
「そうです。最早松平殿ではありません」
「徳川になられます」
「では徳川何というのじゃ？」
氏真は姓を覚えたうえでその名はどうなるか尋ねた。

第五十話　徳川家康その二

「元康から変わるのじゃな」
「はい、左様です」
「そちらも全て変えられたうえであらたに歩まれるとか」
「その為にもとのことです」
「それで名前を変えてじゃな」
氏真もその事情はわかった。そのうえでだ。
再びだ。供の者達に尋ねた。
「ではそのじゃ。竹千代殿の新しい名は何じゃ」
「家康というそうです」
「それがあの方の新しいお名前とのことです」
「徳川家康じゃな」
氏真はこの名前を口にしてだ。そして覚えるのだった。
そうしてだ。その名前自体についても言及した。
「よい名じゃのう」
「前の松平よりもですか」
「さらによいと言われるのですね」
「うむ。何か今までよりも大きくなるようなな」
そうした名前だというのだ。
「よい名じゃ」
「では。この度の改名はですか」
「あの方にとってもよいことだろ」
「そう仰るのですね」
「よい。どうやらもう竹千代と言ってよくはないな」
今度はこんなことも言う氏真だった。そう言ってだ。
あらためてだ。供の者達にこう話した。
「してじゃ」
「そして？」

「そしてといいますと」
「茶はどうじゃ？」
言いながらだ。茶を早速淹れてだ。
そうしてだ。その茶を彼等に差し出したうえでこう言うのであった。
「ささ、飲むのじゃ」
「あの、茶をですか」
「馳走して頂けるのですか」
「何でも堺に千利休という者がおるらしい」
この名前が出た。ここで。
「その者は茶に身分はないと言っておるそうじゃ」
「茶に身分はない」
「それはまた変わった話ですな」
「そうした考えがあるのですか」
「それはまた」
「そうらしいのじゃ」
いぶかしむ彼等にだ。氏真はまた話した。
「それで茶室への入り口はあえて狭くし」
「まず入り口をですか」
「そうして」
「さらに。刀は置いて入る」
そのだ。武士の命と言えるそれをだというのだ。
「そのうえでこれまたあえて狭くした茶室で茶を飲むらしい」
「誰でもですか」
「そうするのですか」
「左様じゃ。とにかく茶の前には誰もが同じだそうじゃ」
それがだ。茶だというのだ。
「だからじゃ。御主達もじゃ」
「ご一緒させて頂いて宜しいのですね」
「だからこそ」

「うむ、共に飲もうぞ」
「では。お言葉に甘えまして」
「そうさせてもらいます」
こうしてだ。供の者達も氏真の淹れたその茶を飲むのだった。彼等がこうして茶を楽しんでいる時にだ。その松平、徳川はどうかというと。
まずはその名前を変えた徳川家康がだ。家臣達に述べていた。

第五十話　徳川家康その三

「これでまずはよしじゃな」
「はい、晴れて徳川となりました」
「三河の守護にもなりました」
「まずはよしですな」
「まことに」
「そう。まずはじゃ」
よいとだ。家康も言う。
「しかし遠江の守護はじゃ」
「それは武田殿が手に入れられましたな」
「残念なことに」
「仕方ないがのう」
このことは諦める口調の家康だった。その口調でこうも言うのであった。
「相手は甲斐源氏の直系じゃしな」
「はい、名家です」
「残念ですが家として格が違います」
「強さだけではありませんから」
「そういうことじゃ。武田殿が相手ではじゃ」
遠江の守護の座を争ってもだ。答えは出ているというのである。
「どうにもならんわ」
「ですな。しかしこのことは仕方ないにしてもです」
「何かあればです」
「その時は」
「そうじゃな。腹を括るしかない」
それしかないとだ。家康も言うのだった。
そのうえでだ。ここでだ。
酒井と共にいる三人を見るのだった。その彼等は。

一人は精悍な顔立ちをした背の高い若武者だ。その目の黒さは青く見えるまでに澄んでおりしかもその光は強い。その彼の次にいるのは。

その男より少し年配のだ。苦み走った顔の男だ。背は若い男よりは幾分か低いがそれでも周囲を圧するには充分なものがある。その男がいた。

三番目は一番若い。背は四人の中で最も小さいがまるで相撲をしている者の様にがっしりとした身体つきをしていて目は細い。その三人だ。

彼等を見てだ。家康は言うのであった。

「本多忠勝、榊原康政、井伊直政。これでじゃな」

「はい、我等徳川四天王」

「今ここに参上しました」

「殿の御前に」

こうだ。三人も家康に対して応えた。

そのうえで一礼してからだ。彼等は家康に対して言うのである。

「例え武田が来ようと北条が来ようともです」

「我等四天王、この身を粉にして戦い」

「殿を御護り致します」

「そう言ってくれるか。実はじゃ」

ここでだ。家康は言うのだった。

「わし一人ではどうにもならん」

「どうにもならないとは」

「どういうことでありましょうか」

「わし一人で戦に勝てるとは限らん。しかしじゃ」

四天王を見てだ。そのうえでの言葉は。

「御主等がいれば負ける気はせぬ」

「そう言って頂けますか」

「我等がいればですか」

「それで」

「そうじゃ。御主等の他に」
他の家臣達も見てだ。そのうえでの言葉は。
「これだけの家臣達がおる。わしは決して負けぬ」
「そしてこれからはですな」
「三河の主として生きていく」
「そうされますな」
「左様じゃ。この三河を守り」
そしてだというのだ。
「徳川はさらに大きな家になろうぞ」
「さらにとは」
「今よりも大きくですか」
「そうした家になるというのですか」
「これからは」
四天王だけでなくだ。他の家臣達も言うのだった。

第五十話　徳川家康その四

「今川殿から自立して五十万石に至りました」
「しかしそれに留まらずですか」
「百万石じゃ」
家康は言った。これだけの力を。
「わしは百万石の大家を目指すぞ」
「何と、百万石ですか」
「かつての今川殿と同じくですか」
「それだけの家になられるというのですか」
「そこまで目指されますか」
「そうじゃ。五十万石では留まらん」
また言う家康だった。
「百万石じゃ。そこまで目指すぞ」
「大きいですな」
家康のその話を聞いてだ。本多は唸る様にして述べた。
「百万石とは」
「大きいと申すか」
「はい、大きいです」
本多もだ。それは否定しなかった。
「百万石となると。今もそうは」
「天下にはおらんな」
「三好に武田、上杉、北条に毛利」
「そて織田殿じゃ」
「それだけでございます」
天下にもだ。百万石を超える家はこれだけしかない。実に数多くの国人や大名達がいてもだ。そこまでの家になるとそれだけだった。
「やはり少のうございます」
「それで百万石を目指すとなると」

「大望でございますな」
「そうじゃな。しかしわしはじゃ」
己の考えはどうかとだ。家康はここで話した。
「欲を張っているつもりはない」
「それはないと仰るのですか」
「そうじゃ、ない」
そうだというのだ。欲はないというのだ。
「むしろ謙遜しておるつもりだ」
「謙遜、でございますか」
「そうなのですか」
「そうじゃ。まずわしは百万石で満足じゃ」
それだけあればだ。充分だというのだ。
「それ以上は求めん」
「百万石よりはですか」
「それで終わりだというのですな」
「そうじゃ。二百万石、武田や北条とまではいかん」
まさに天下で屈指のだ。彼等程のものは目指さないというのだ。
「天下も求めぬしな」
「それで百万石で止まる」
「そうなのですか」
「人は欲をかくものではない」
このことをだ。家康は常に意識するようになっていた。それは何故かというと。
「義元公も尾張に攻め入らなければじゃ」
「ああはならなかった」
「そういうことですか」
「確かにあの戦はまさかと思った」
家康にしても織田が勝つとは思っていなかった。少なくともあそこまであっという間にはだ。あちらが勝つとは思っていなかったのだ。

だがそれでも今川が敗れていることは確かだ。だからこそ言うのだ。
「しかし。天下を目指され欲を出されてじゃ」
「大名としては滅んだ」
「だからですか」
「殿は」
「うむ、多くは求めぬ」
そうだというのだ。つまりは慎重にいくというのだ。
「百万石、天下は決して求めぬ」
「わかりました。そういうことですか」
「欲は出さぬということですな」
「百万石で十分であるしな」
今度はだ。足りるを知るというのだ。
「だからじゃ。そこまでじゃ」
「では我等もです」
「欲を出さずにいきます」
「そうさせてもらいます」
「うむ、それで頼むぞ」
こうした話をしてで、であった。家康は徳川家のこれからの方針も決めるのだった。そうしてだ。

第五十話　徳川家康その五

その彼等のところに来た川尻に対してだ。家康はまずはこう告げた。

「おお、鎮吉殿よく来られた」

「お久し振りです」

川尻も頭を下げてからだ。家康に対して応えた。彼の周りには徳川の家臣達が控えている。その彼等が川尻に視線を集中させている。

その中でだ。彼は言うのだった。

「それがしがここに来た理由ですが」

「うむ、何でござるかな」

「他でもありません」

こう言うのである。

「我が織田と徳川殿がです」

「手を結ぶべきだというのですな」

「左様です」

家康のその顔を見ながら答える。その目の光は強い。

その目でだ。彼を見ながら話すのだった。

「その結び付きとしてです」

「何でありましょうか」

「織田家の姫五徳様と徳川殿の御嫡男竹千代様がです」

「婚姻を結ぶと」

「それでどうでしょうか」

こうだ。家康に対して話した。

「これが我が殿からの申し出でございます」

「ふむ。よい話でありますな」

家康は話を聞き終えてからだ。こう答えた。

そしてそのうえでだ。こうも言うのだった。

「しかしでござる」

「しかしとは」
「いや、それがし実は」
笑みを浮かべてだ。川尻に告げる。
「それは宜しいのですが」
「では。同盟を結んで下さるのですな」
「その前にでござる」
楽しみな笑みになってだ。川尻に話を続ける。
「尾張にお邪魔したいと思っております」
「尾張にですか」
「左様、尾張にです」
こうだ。川尻に対して話すのである。
「そうしたいのですが」
「わかりました。それではです」
川尻は表情には出すものを出さずにだ。そのうえでだった。
家康に対してだ。言葉を返したのである。
「我が殿にお話しておきます」
「吉報を待っておりますぞ」
家康は今度は屈託の長い笑みで述べた。
「さすれば」
「はい、さすれば」
こうしてであった。家康は川尻に信長と尾張で会いたいと告げたのだった。
そしてその話をしてからだ。にこやかに笑って家臣達に話すのだった。
「これでよい」
「宜しいですか」
「あれで」
「実は同盟を結ぶことはじゃ」
それはだ。どうかというのだ。
「既に決めてあるのじゃ」

「ということは」
「やはり」
「そうじゃ。同盟は結ぶ」
そのことは既に決めているというのだ。家臣達にもそれを話す。
「必ずのう」
「そうですな。織田殿との同盟はです」
「我等にとって悪いことはありませぬ」
「西からの脅威がなくなるだけでなく」
つまりだ。武田に専念できるというのだ。
徳川は今は東に武田、そして西に織田を抱えている。それならばだというのだ。

第五十話　徳川家康その六

西の織田の脅威がなくなる、しかもそれだけではなかった。
「織田殿との同盟でその援軍も期待できますし」
「これは非常に大きい」
「まさにです」
「断る理由はありませぬ」
「それではですな」
「そうじゃ。断ることは決してしない」
絶対にだと。家康も言う。
その話をしてからだ。さらにだった。
家康はその尾張に行く理由もだ。家臣達に話した。
「それで尾張に行く理由はじゃ」
「それですな」
「ここでよしと言われてもよかったですが」
「しかしあえて尾張に行かれてですか」
「それを決められますか」
「その理由は」
家臣達もそのことを問うた。そしてその理由をだ。
家康はだ。一呼吸置いてからだ。そうして述べるのだった。
「一度信長殿と会ってみたいのじゃ」
「その織田殿とですか」
「御会いしたい」
「それでなのですか」
「そうじゃ。信長殿が今どうなのか」
それを見たいというのだ。
「だからこそじゃ。あえてじゃ」
「尾張に行かれそのうえで」
「織田殿の器量を御覧になられ」

「そうして」
「この目で見なければわからぬではないか」
家康はこうも言った。
「ならばです」
「それならばですか」
「あえて会われそのうえで」
「確かに決められる」
「左様ですか」
「幼い頃の織田殿はそれは愉快な方だった」
幼い頃の思い出もだ。それも話すのだった。
「今はどうであろうか」
「つまり傾いておられた」
「それは今はどうなのか」
「それですか」
「そうじゃ。今も傾いておられれば」
よいというのだ。実は信長の資質についてはもう家康も見極めていた。
だがそれでも足りない。家康が言うのはこのことだった。
「それでよい」
「傾いておられればですか」
「それでなのですか」
「手を結ばれますか」
「見ての通りわしはじゃ」
他ならぬだ。家康自身はどうかというのだ。
「傾くということには縁がない」
「三河者自体がですな」
「どうしてもそうしたことはです」
「疎いですな」
「確かに縁がありませぬ」
見れば彼等の中に一人もだった。そうした感じの者がいない。誰

もが奇麗にまとまった感じである。如何にも真面目といった趣だ。
その彼等がだ主と話すのだ。
「傾くにも向き不向きがありますな」
「そうですな。あれもどうやら」
「誰もができるというものではないようです」
「ならばそれでよい」
家康は真面目でいいとした。

第五十話　徳川家康その七

「我等は我等の色でやっていく」
「色ですか」
「そういえば我等もですな」
「色を決めるという話がありましたな」
「それもまた」
その話も出たが今はだった。家康はその傾くことについて話をしていく。
「とにかくじゃ。我等このままいきじゃ」
「しかし織田殿にはでむか」
「傾いたままであって欲しい」
「そうなのですか」
「そうじゃ。堅物に堅物ではどうもいかん」
こうした話をするのである。
「やはり。堅物にじゃ」
「破天荒な御仁をですな」
「隣に置かれる」
「それでこそですか」
「そうじゃ。しっくりいく」
まさにだ。そうだというのだ。
「堅物の我等と傾奇者の我等でな」
「だからこそ織田殿がそうであるか」
「それを御覧になられる為に」
「あえて尾張にですか」
「殿御自ら」
「そういうことじゃ。では日をあらためてじゃ」
家康が軸になって話を進める。こうしてだった。
家康は彼の家臣達を引き連れ尾張に向かうことになった。それを

聞いてだ。
信長は清洲城においてだ。川尻を前にして高らかに笑う。
左右には家臣達もいる。その彼等にも言うのだった。
「ははは、竹千代らしいわ」
「松平、いえ徳川殿でしたな」
中川がすぐに言い換えて述べた。
「あの方らしいですか」
「そうじゃ。あ奴は昔から慎重な奴じゃ」
その家康の気質から話すことだった。
「その目で見たことをじゃ」
「信じられる方ですか」
「では殿と同じでは？」
「そうですな。殿もそうですし」
「それでは」
「ははは、わしはあそこまで慎重ではない」
あえてこう言ってであった。
「あ奴はわかっていてもそうしてあえて見ようとするのじゃ」
「つまり。何度も確められる」
「そうした方でございますか」
「そうじゃ。石橋があれば」
その橋をどうするかというのだ。
「叩いて確めてからじゃ」
「そのうえで渡らせますか」
「その石の橋を」
「そうする奴じゃ。だからわしの話も聞いてじゃ」
そのうえだというのだ。さらにだ。
「そのうえでわしをその目で確かめてじゃ」
「盟約を結ぶかどうか決められる」
「そうされますか」
「そうする。ではわしはじゃ」

信長はどうするのか。それは。
「応じよう」
「会われますか、徳川殿と」
「この清洲で」
「うむ、会う」
家臣達にだ。不敵な笑みを浮かべて答えた。
そしてそのうえでだ。彼は言うのだった。
「それからじゃ」
「盟約を結ばれますか」
「徳川殿と」
「わしは既にそのつもりじゃ」
彼はもう決めていたのだ。家康と手を結ぶことをだ。
だがここはあえてだ。家康に乗るというのだ。
「浅井、そして徳川と手を結びじゃ」
「憂いをなくしたうえで、ですな」
「美濃の斉藤を攻める」
「そうされますか」
「美濃は必ず手に入れる」
このことは最早絶対のことだった。信長はこのことも既に決めていた。

第五十話　徳川家康その八

「その為にもじゃ。そして」
「そして？」
「そしてといいますと」
「美濃で終わりではない」
それから先のこともだ。見据えているのだった。
「そこからさらにじゃ」
「天下を」
「それを手に入れられる」
「そうされますな」
「そうじゃ。わしが天下を手に入れ治める為に」
その為にだった。
「浅井と徳川はじゃ」
「必要ですか」
「だからこそ今からですか」
「盟約を結ぶ。どちらの家も頼りになるぞ」
こう話してだった。信長は。
今己の前にいる報告をした川尻に対してだ。こう継げた。
「して鎮吉よ」
「はい」
「御苦労だった」
穏やかな笑みを浮かべてだ。労いの言葉をかけた。
そしてだ。彼にだった。
「褒美を取らそう」
「有り難き幸せ」
「これじゃ」
そしてだ。己のすぐ傍にあっただ。
あるものを差し出した。それは。

「茶器！？」
「そうじゃ。茶器じゃ」
誇らしげに笑ってだ。川尻に対して言った。
「それをやろう」
「これは」
「どうじゃ。見事な碗じゃろう」
その陶器のだ。黒い碗を見せて話すのである。
「そう思うな」
「はあ。しかし」
「茶器であることに不満か」
信長は驚きを隠せない顔のままの川尻に対して尋ねた。
「そうじゃな」
「いえ、それは」
「こう思っておるな」
川尻の心を見抜いてだ。そのうえでの言葉だ。
「茶器に何の価値があるのかと」
「正直に申し上げて宜しいでしょうか」
川尻もここである意味覚悟を決めてだ。そのうえでだ。
信長の問いにだ。こう答えたのだった。
「それがし、確かに」
「茶器に価値はないと思うておったな」
「はい、刀や領地と比べると」
如何程のものがあろうか。彼は実際にこう考えていた。
そのうえでだ。信長に対して述べたのだった。
「どうにも」
「ははは、やはりそう思っておったか」
「申し訳ありません」
「謝ることはない」
その必要はないというのだった。謝罪することはだ。
「確かにそう思うのも無理はない」

「どうにも」
「しかしじゃ。この茶器がじゃ」
どうだというのだ。その茶器がだ。
「昨今都や駿河、それに周防といった国でじゃ」
「都等で、ですか」
「そうじゃ。そうした場所で茶が流行っておってな」
信長もよくしているだ。その茶がだというのだ。
「茶器も質のいいものが尊ばれておるのじゃ」
「そういえば」
ここでだ。川尻もふと気付いた。
そしてそのうえでだ。こう己の主に述べた。
「何でも三好の重臣である松永殿は」
「聞いておるな」
「大層な茶器を持っておられるとか」
「堺にも多くの茶器がある」
「ああ、あの堺にも」
川尻はかつて信長と共に訪れたあの町のことも思い出した。堺はただ栄えているだけではなかった、このことに気付いてのことだった。

第五十話　徳川家康その九

「そうだったのですか」
「商人達が多く持っておるのじゃ」
「あの堺の商人達が」
「特に千とか言う者が凄いそうじゃ」
ここでこの名前が出た。
「茶にかけては右に出る者がないという」
「そして茶器も」
「随分と目利きでな。何でも茶器によっては」
「茶器によっては」
「国一個分の価値があるそうじゃ」
このことを聞いてだ。川尻だけでなく。
他の家臣達、ここに居合わせている彼等の多くもだ。驚きの声をあげた。
「国一つだと」
「茶器にそこまでの価値があるとは」
「それでは名刀や名馬と同じ」
「書や画とも」
「同じではござらぬか」
「そうじゃ。同じじゃ」
その通りだとだ。信長も述べた。
「茶器にはそれだけの価値があるのじゃ」
「そうでしたか。そういえば雪斎殿も」
ここで今川から加わった彼の名前が出て来た。だが今はこの場にはいない。
「かなりよい茶器を持っておられるとか」
「では茶器はやはり」
「それだけのものがあると」

「左様。茶器は宝じゃ」
それ程のものだとだ。信長は言い切った。
そのうえであらためて川尻に対してだ。こう言ったのである。
「その碗にしてもじゃ」
「この黒い碗が」
「国一個とまではとてもいかんが何千貫もの値がある」
「何千でございますか」
「そうじゃ。それだけの茶器じゃ」
その価値ある碗をだというのだ。
「そなたにやろう」
「これが褒美でございましたか」
「どうじゃ。今の気持ちは」
川尻の上ずった顔を見ながら問うたのだった。
「不服か？」
「いえ」
すぐに応える川尻だった。
その黒い碗を手に取りまじまじと見ながら。こう信長に答えた。
「有り難き幸せ」
「ははは、言ったな」
「この碗、大事にさせてもらいます」
「そうせよ。してじゃ」
ここでさらに言う信長だった。
「他の者もじゃ。よいな」
「我等にもですな」
「褒美として茶器を頂ける」
「功を挙げれば」
「その通りじゃ。場合によってはじゃ」
どうかとだ。信長はここで会心の笑みになった。
そしてそのうえでだ。こう彼等に述べた。
「国一つ分の茶器をじゃ」

「頂けますか」
「相応しい功を挙げたなら」
「その時は」
「やるぞ。楽しみにしておれ」
信長は満面の笑みで話した。
「よいな」
「はい、それでは」
「これからも励まさせてもらいます」
「是非共」
こうしてだった。茶器もまた褒美の中に入ったのだった。
川尻に茶器を褒美として与えた後でだ。信長は。

第五十話　徳川家康その十

平手、信行、そして弟の一人である長益、信長を明るくさせた様な顔の彼と四人で茶室の中で茶を飲みながら。こんな話をしていた。

「茶器ものう」

「その価値ですな」

「そのことですね」

「そうじゃ。尾張ではよく知られておらんな」

先の川尻との話を思い出しながら話すのだった。

「どうもな」

「やはり。茶がまだ深くなっておりませぬ故」

そのせいだとだ。茶に造詣のある平手が答えた。

「それは仕方ないかと」

「そうなるか」

「それもこれからです」

平手は信長にまた話した。

「茶器のことをわかるのも」

「茶が深くなりじゃな」

「はい、それからです」

あくまでだ。それからだというのだ。

「ですから今はああしてお話され」

「そうして茶もしていってじゃな」

「そうすると宜しいかと」

「戦ばかりでは心が荒む」

ここでこんなことも話す信長だった。

「舞や蹴鞠や和歌もよいがじゃ」

「その他にですな」

「うむ。そうした公家のものの他に」

そのだ。茶をだというのだ。

「武家のものとして確立もさせたいしのう」
「茶器もですな」
「茶器を渡せばじゃ」
それでどうかというのだ。茶器を褒美として渡すことはだ。
「よい褒美になる」
「確かに。領地ばかり与えては」
そうしていくとどうなるか。信行がこのことを話した。
「そのうち領地はなくなりますな」
「それも困ることじゃ」
そのこともだ。信長は頭の中に入れていた。
そしてそのうえでだ。彼はこう話すのだった。
「褒美は領地だけではなくじゃ」
「茶器もですね」
「その他に宝もあるがじゃ」
信行に対して話していく。
「その宝の一つとしてじゃ」
「茶器もですか」
「その通りじゃ。実際に茶器は価値がある」
価値があるからこそだ。褒美とするというのだ。
「後はその価値を教えてやるだけじゃ」
「左様ですか。それにしても」
信行は今自分が手にしている茶器を見た。それは。
茶せんだ。それを見て言うのだった。
「この茶せんもまた」
「わかるか？その価値が」
「少しは」
こう答える信行だった。
「兄上と爺に常に教えてもらっているので」
「そうじゃ。茶器はその茶せんもじゃ」
「価値があるというのですね」

「釜にしろじゃ」
今度は茶を作るだ。それの話をするのだった。
「何でも松永久秀は相当な釜を持っておるらしい」
「あれですな」
その話を聞いてだ。すぐにだった。
平手が応えてだ。その釜の名前を言ってきた。
「平蜘蛛ですな」
「そんな名じゃったか」
「あれこそまさに天下の名器とか」
そこまでの茶器だというのだ。

第五十話　徳川家康その十一

「あれ一つで一国の価値、いえそれ以上のものだとのことです」
「そこまでというのじゃな」
「あの松永弾正が何よりも大事にしているとか」
「釜もか」
信行もその話を聞いてだった。まずは唸りだ。
そうしてだ。こう答えたのだった。
「それだけの価値があるのか」
「そうよ。それが茶器よ」
ここでまた弟に話す信長だった。
「茶器なのじゃ」
「恐ろしい話ですな」
「恐ろしいか」
「一見すると只の釜です」
実際にだ。今茶室の中にある。その黒い鉄の釜を見てだ。信行は話す。
「しかしその釜がですか」
「左様、一国の価値じゃ」
「そこまではわかりませぬ」
「ははは、すぐにわかるようになる」
「すぐにですか」
「茶をしておればな」
そこからわかるというのだ。信長はいぶかしむ顔になっているその信行に話した。
そしてそのうえでだ。これまで黙って茶を飲み茶器を隅々まで見回している長益に対してだ。こう声をかけて尋ねたのであった。
「して御主はじゃ」
「はい、それがしですか」

「どうも近頃はこればかりじゃな」
「茶ばかりだと」
「そうではないのか？」
こう問うのである。
「朝から晩まで時間があればじゃ」
「いや、どうも」
長益本人もだ。兄の言葉に応えて話す。
「最初は茶を飲みその味を楽しむだけでしたが」
「それが変わってきたな」
「茶。茶の道ですな」
茶にも道があると。こう言ってであった。
「その道を歩いてみたいと思いまして」
「それでか」
「茶器もです」
その茶器の話もするのだった。
「そのどれもまた」
「気に入ったか」
「この茶室そのものが天下であるような」
まるで何かそこにある様にだ。熱い口調で長兄に話していく。
「そして茶器も素晴しい宝の山だとわかり」
「そうしてじゃな」
「茶から離れられなくなりました」
こう兄に言うのである。
「いや、茶はいいものでございますな」
「それはわかるが」
信行はその長益にだ。顔を顰めさせて小言を述べはじめた。
「御主は少しじゃ」
「過ぎるというのですな」
「自分でわかっておるな。そうじゃ」
まさにだ。その通りだというのだ。

「御主はちと茶にのめり込み過ぎておるぞ」
「これでも連枝衆のすべきことはしていますが」
「それはそうだがだ」
信行も引かない。彼も織田家の御意見番として言わねばならなかった。
時として兄であり家の棟梁でもある信長にも意見を言うのだ。ならば弟である長益に対してもだ。やはり言うのだった。言わねばならなかった。
その彼がだ。長益に話す。
「全く。茶三昧でじゃ」
「酒も賭けもおなごもしませぬぞ」
「そこまでのめり込んでは同じよ」
そしてだ。信行はこうも言った。
「何でも過ぎたるは及ばざるが如しだ。忘れるな」
「やれやれ、勘十郎兄上は相変わらず厳しいですな」
「それもそなたを思ってのこと」
やはり厳しい。口調もまた。
「それもわかれ」
「わかれと仰いますか」
「左様じゃ。本当に誰に似たのやら」
「わしじゃな」
ここで信長が信行に言った。
「こ奴はわしに似たのじゃろう」
「兄上にでございますか」
「顔立ちだけでなくな」
見れば見る程似ていた。しかし似ているのはそれだけではないというのだ。
「奇矯なところはよく似ておるわ」
「兄上の奇矯とはまた違うのでは？」
「そうかのう」

「はい、違います」
こう信長に話すのだった。
「そこはです」
「茶にのめり込んでおるのは似ておると思うが」
「兄上の奇矯は天下の奇矯です」
そうしたものだとだ。信行は話した。
「この者の奇矯は茶の奇矯ですから」
「わしの奇矯は随分と大きいのう」
「まさに天下の奇矯です」
また言うのであった。
「しかも大きくなっております」
「ははは、ではこのまま大きくなってじゃ」
どうするか。信長は笑いながら話した。
「天下を奇矯で覆おうぞ」
「そう思うことこそが奇矯でございます」
信行はやや呆れた笑みで兄に話した。そしてそのうえでだ。立派な茶器を手にしてそのうえで。彼もまた茶を楽しむのだった。

第五十話　完

２０１１・７・２０

第五十一話　堅物のことその一

第五十一話　堅物のこと

信長は城の己の部屋において帰蝶にだ。こんなことを言われていた。

「竹千代がどうした者か知りたいと申すか」

「はい」

その通りだとだ。帰蝶も答える。

「一体どの様な方でしょうか」

「桶狭間の時は会ってはおらんが」

それでも今の彼は知らないというのだ。直接にはだ。

だが佐久間大学や木下兄弟の話を聞いたうえでだ。こう話すのだった。

「中々戦上手じゃな」

「戦にお強いのですね」

「あの時は砦を攻めて随分と悩まされた」

そうだとだ。その砦の戦いのことを話すのである。

「何とか持ち堪えたがな」

「それでもやはり」

「うむ、わしの知っている竹千代とはそこが大きく違う」

「殿のご承知といいますと」

「聞いておろう。あ奴はかつて尾張に人質に来ておった」

話すのはこのことだった。

「あの時はわしも幼かったがじゃ」

「幼い頃の思い出ですね。ご幼少だった時の」

「そうじゃ。その時じゃが」

「はい」

「素直で大人しかったのう」

彼の記憶にある家康はだった。まさにそうした感じだったのだ。

その時のことを思い出しながらだ。帰蝶にさらに話す。
「人としての筋はよかった」
「人としてですか」
「あのまま伸びておれば」
どうかというのだ。今の家康は。
「きっと大きな者になっておるな」
「では殿と同じ様に」
「竹千代は堅物じゃがそれでもだ」
「人としての器は」
「わしと同じだけ大きくなっておろう」８６
そこまでだというのだ。信長は家康については話し続ける。
「さすれば手を結ぶに足る」
「殿と比べてもそれだけの方になっておられますか」
「きっとな。しかしじゃ」
「しかしといいますと」
「堅物であって欲しい」
こうだ。信長は首を少し捻って述べたのだった。
「是非な」
「堅物であってですか。家康殿は」
「そうでなければよくない」
「それはどうしてでしょうか」
「わしがこうして傾いておるからじゃ」
それでだというのだ。
「竹千代はその分堅物であってもらいたいのじゃ」
「傾奇と堅物ですね」
「傾いておるだけでもいかんし堅いだけでもいかん」
それぞれだ。片方だけではだというのだ。
「やはり。それに加えてじゃ」
「もう片方があるべきですね」
「それでよい。釣り合いが取れる」

信長は脳裏に天秤を描きながらそのうえで帰蝶に話す。
「それでこそじゃ」
「そこまでお考えでなのですか」
「そうなのじゃ。だからこそ竹千代は」
「必要ですね」
「堅物のあ奴がのう」
「堅物といえば」
ここで帰蝶は彼等のことを思い出して言った。
「平手殿や柴田殿」
「そして勘十郎じゃな」
「そうした方々もですね」
「爺が一番じゃな」
織田家きっても堅物という意味においてということだ。
「あの頑固さには昔から参っておる」
「では勘十郎殿は」
「あれは案外話がわかる」
弟だけあってだ。信長は彼のこともよくわかっている。

第五十一話　堅物のことその二

「確かに生真面目じゃがいいところで融通が利く」
「そういえばですね」
「公平でな。爺も公平じゃがとかく小言が過ぎる」
平手の小言は主にだけ向けられるものではないのだ。それこそ他の家臣達にとっては実に厄介なものであり続けているのだ。
「その勘十郎じゃが戦は弱いがじゃ」
「そうしたことで、ですね」
「政もできるしな。あれでよい」
「では最後の」
「うむ、権六じゃな」
そのだ。柴田はどうかというのだ。
「あれはのう」
「御困りですか？」
「ある意味爺以上に頑固じゃからのう」
「そう聞いていますが」
「左様じゃ。よくそれで慶次も叱っておるがな」
「あの慶次殿をですか」
「あ奴が悪戯をする」
慶次の常だ。彼は戦でなければとかく悪戯をするのだ。その生来の悪戯好きが柴田にも向けられるのだ。そうしてなのだ。
「権六はその都度怒りぶん殴る」
「それも繰り返しですね」
「慶次も慶次じゃが権六も権六だ」
「御困りですか」
「いやいや、楽しんでおる」
そうしているとだ、信長は帰蝶に笑いながら話す。
「権六は誰であろうが全力で向かう」

「どんな悪戯にもですね」
「そうじゃ。だからよいのじゃ」
そうだというのだ。
「それが権六じゃ」
「だからいいのですね」
「うむ。我が家の堅物も必要じゃが」
「盟友としての堅物もですね」
「竹千代がよい堅物であればよいのう」
こんなことも言う信長だった。
「さすればわしもやりがいがある」
「色々とですね」
「そうじゃ」
こうした話をしていた。そしてだ。
ここでだ。侍女が来てだ。信長に対してこう言ってきた。
「林様が来られました」
「ほう、新五郎がか」
「はい、そうです」
兄の方がだ。来たというのだ。
「それでどうされますか」
「会わぬ筈がない」
信長の選択肢は一つしかなかった。これだ。
「では行こう」
「わかりました」
こうした話をして、であった。信長は席を立ち林の前に出た。するとだ。
林はだ。この話を信長にしたのだった。
「殿のお言葉通り」
「都や大和のことを調べたか」
「はい、それでなのですが」
「何か面白いことがわかったか」

「物騒なことになろうとしております」
そうだとだ。林は曇った顔で述べた。
「三好家の主三好長慶がなくなりましたが」
「では家中でややこしいことになったな」
「はい、三好三人衆と大和の松永久秀がです」
「一族の者と執権がか」
「争いをはじめようとしております」
そうなっているというのだ。都の周りでは。
「このままでは近いうちに」
「大きな戦が起こるか」
「そうなるかと」
「わかった」
ここまで聞いてだ。信長は頷いた。
そしてそのうえでだ。林にあらためて尋ねた。

第五十一話　堅物のことその三

「しかしそれだけではないな」
「三好の中だけで終わらぬと」
「公方様はどうされておる」
そのこともだ。林に問うのだった。
「今は」
「危ういかと」
そうだとだ。すぐに答えた林だった。
「公方様は三好とも松永とも関係がよくありませんので」
「そうじゃな。そしてじゃ」
「敵の敵は、ですか」
「味方じゃ」
言いながらだ。信長は己の顔を剣呑なものにさせた。
そしてそのうえでだ。また林に話した。
「確かに三好三人衆と松永はいがみ合っておる」
「しかし双方共公方様と、となると」
「まず。邪魔になるとしてじゃ」
「ううむ、まさかとは思いますが」
林は信長の話からあることを考えた。しかしすぐに腕を組みいぶかしむ顔になってだ。信長に対して己の考えを述べたのだった。
「公方様を攻めると」
「まさかと言うたな」
「はい。それは幾ら何でも」
「しかし前にもあったではないか」
「義教様ですか」
「そうじゃ。既にそうしたことがあった」
六代将軍足利義教のことだ。何かにつけて苛烈というよりは狂暴、獰悪と言っていいこの将軍は己が粛清されると恐れた赤松氏によっ

て逆に殺されているのだ。これを嘉吉の乱という。
その乱のことを話してだ。信長はまた言うのだった。
「それではじゃ」
「今の公方様も」
「なきにしもあらずじゃ。もっとも今の公方様は義教公の様な方ではないがな」
「義教様はあれはまた」
「獰悪に過ぎた」
戦国の者から見てもだ。彼はそうなのだった。
「それ故にじゃ」
「ああなってしまわれたのでしたな」
「そうじゃ。今の公方様は義教様とは違う」
それは確かだった。確かに剣は好きだがだ。決して獰悪ではないのだ。
しかしだ。それでもだった。
「だが前例はある」
「そのことがですね」
「左様、前例があると何にしてもやりやすい」
「では」
「ましてや松永弾正。あの者は」
信長がここで注視するのは彼だった。その大和のだ。
「剣呑な者じゃな」
「そういえば主家の三好では」
「不穏な死が相次いでおったな」
「主三好長慶の弟や側近、そして跡継ぎまでもが」
「次々に急に死んでおるな」
「ではやはりあれは」
どうかとだ。林が言うとだ。
信長もだ。一呼吸置いてから話した。
「新五郎の思う通りであろうな」

「やはりそうですか」
「そう思ってよい」
暗殺、それだった。あえて言葉には出さない。
だがそれに違いないとだ。信長は言うのだった。
「主の三好長慶はどうかわからんがな」
「まさか主も」
「あれはおそらく気落ちしての病じゃ」
信長はそれだと見て話す。
「しかしあの者が主家をそうして傾けさせているのは事実」
「その目的は」
「何じゃと思う」
「お家乗っ取りですな」
林もだ。すぐに察して答えた。
「それしかありませんな」
「そうじゃ。それしかない」
また言う信長だった。

第五十一話　堅物のことその四

「わしも同じ考えじゃ」
「ですな。あの者はどうも出自がはっきりしませんが」
「しかしそうした者だからこそじゃ」
「家を乗っ取る」
「そうして上を目指すのであろう」
信長は今はそう見ているのだった。松永という男をだ。
そしてだ。その松永についてだ。彼はこうも話した。
「蠍じゃな」
「あの毒を持つという虫ですね」
「明や天竺におるというな。それじゃ」
「毒蛇と同じだけ剣呑と聞いておりますが」
「大和の蠍じゃ」
信長はまた話した。
「それじゃろうな」
「ではその蠍は」
「一度見てみたいものじゃな」
「なっ！？」
ここでだ。林は松永を取り除くべきと言おうとした。しかしだ。
信長はこう言った。主のこの言葉にだ。
驚きを隠せずにだ。こう返したのだった。
「また突拍子もないことを」
「ははは、驚いたか」
「今回もですな」
己の主に対して驚いたことは一度や二度ではない。そうした意味では慣れてはいた。
だがそれでもだ。彼は今も驚かざるを得なかった。そしてこう言った。

「突拍子もない」
「蠍を殺さずに会うことがか」
「そうです。その様な危険なもの」
「会って確かめずにはおれん」
これが信長の考えだった。
「是非な」
「ううむ、それがしは」
「賛同できんか」
「左様です。若し殿に何かあれば」
「何、前には蝮と会っておる」
ここで話したのは道三だった。彼の義父である彼のことだ。
「ではじゃ。蠍と会うのもじゃ」
「よいと言われますか」
「面白そうじゃ。それもな」
「殿らしいですな」
林は信長のその言葉を聞いてだ。今度はこんなことを言った。
「そうしたところがまた」
「ははは、そうじゃろう」
「納得はしております」
何だかんだでだ。主の突拍子のないことを理解してのことだ。
だがそれでもだとだ。彼はまた言うのだった。
「しかし。それでもです」
「賛同はできんか」
「できるものではありません」
そうだとだ。難しい顔ではっきりと話した。
「真に。何かがあれば」
「蠍には刺されなければよいのじゃ」
これが信長の言うことだった。
「蝮には噛まれずにじゃ」
「では。刺されぬようにして」

「見てみたい」
また言う信長だった。
「是非な」
「左様ですか。しかし松永めはまことに」
「それは非常に危うい」
また将軍のことについての話になった。それにだ。
「何時どうなるかわかったものではない」
「ではどうされますか」
「人をやるか」
信長はこう林に話した。
「何かあれば都を出てじゃ」
「そのうえで、ですな」
「我が家が御護りしよう」
そうするというのだ。

第五十一話　堅物のことその五

「是非な」
「左様ですな。そうすればよいですね」
「そうじゃ。わしはあの方はよいと思っている」
そうだというのだ。義輝はだ。
「公方様に相応しい」
「だからですか」
「御会いしてわかった。あの方はよい方じゃ」
信長はそのことをよく見ていた。そしてなのだ。
林にだ。こう言うのだった。
「だからこそ。何かあれば」
「その時は何としても」
「お救いしたいな」
「左様ですな。それでは」
「うむ、手筈は整えておけ」
「はい」
林が応えてだった。このことも決められるのであった。
信長は美濃だけを見てはいなかった。天下全体を見てだ。そのうえで考え動いていた。
そしてだ。林が去るとだ。今度は池田恒興だった。
彼はだ。信長にこのことを話したのだった。
「四国ですが」
「土佐からじゃな」
「はい、長宗我部です」
この家がだというのだ。
「紫の鎧や旗で飾りです」
「土佐を一つにしてじゃな」
「三好の讃岐や阿波を窺っております」

「ふむ。四国はこれまでのところ」
どうだったかと。信長は話すのだった。
「三好が讃岐と阿波を治めてじゃ」
「土佐や伊予は多くの国人に分かれていました」
「そうじゃった。しかしあの家が出てじゃ」
「それが一気に変わったというのだ。その家こそが。
「長宗我部家が出てからです」
「その通りじゃ。しかも今の主」
その主がだ。誰かというと。
「元親といったな」
「はい、その者です」
「鬼若子というが」
「かつては姫若子と呼ばれていました」
「そうじゃったな」
このこともだ、信長は知っていた。多くの国のことを調べている故にだ。
「初陣まではとても弱々しく頼りなかったと聞くが」
「しかし初陣で、です」
「槍を手に縦横に暴れたそうじゃが」
「その強さは鬼の如きだったとか」
「それで忽ち姫が鬼になったのじゃな」
「その通りです」
「わからぬものじゃ」
信長はここまで聞いて静かに述べた。
「人は急に化けることもある」
「それは長宗我部殿も同じだったというのですね」
「そうじゃ。まさにその通りじゃ」
「それでその元親殿ですが」
池田は彼の話をさらにしていく。その話の中身は。
「阿波、讃岐を手中に収めれば」

「後は伊予だけじゃな」
「四国を手中に収めることになります」
「それで終わりではないじゃろうな」
信長は池田にこう話した。
「それからもじゃ」
「では。四国から」
「そうじゃ。都を狙う」
長宗我部もだ。それを狙っているというのだ。
そのことをだ。信長は池田に話すのだった。
「間違いなくじゃ」
「ううむ、ではあの者は」
「よい。特に始末することはない」
それはいいというのだ。

第五十一話　堅物のことその六

「放っておけばよい」
「長宗我部はですか」
「そうして宜しいですか」
「今は」
「あの者達を相手にするにはじゃ」
その場合にだ。どうするかというのだ。
「まずは近畿を完全に押さえてじゃ」
「そしてですな」
「四国に攻め入った時じゃ。その時こそじゃ」
「ううむ、それはまた」
池田は信長の話をここまで聞いてだ。そのうえでだった。
唸り様にだ。こう主に述べたのだった。
「既にそこまで考えておられるとは」
「そのことがか」
「驚きます」
そうなっていた。実際にだ。
「殿は美濃を手中に収めて終わりではないですか
「それははじまりじゃ」
「美濃はですか」
「終わりではない。天下を治めるはじまりじゃ」
そうだというのだ。信長にとってはだ。
「美濃から天下を治めることをはじめるのじゃ」
「美濃にはそこまでのものがありますか」
「二万の兵に豊かな国」
まずはこのことを話に挙げてだった。
「これだけのものがあればじゃ」
「都に入るなり何なりですね」

「その通りじゃ。かなりのことができる」
「だからこそですか」
「そうじゃ。それに美濃は都にも近い」
地理的にもだ。いいというのだ。
「だからこそじゃ。美濃からじゃ」
「全てをあらためてはじめられますか」
「そのつもりじゃ。それでその方達もじゃ」
池田からだ。他の家臣達も見て話す彼だった。
「その時にこそはじゃ」
「はっ、我等全て」
実際にだ。こう返す池田だった。
生真面目な彼らしくだ。信長に言った。その言葉は。
「殿にさらに忠誠を尽くします」
「頼むぞ。何かとな」
「はい、それでは」
こうした話をだ。家臣達とする信長だった。だがそれで終わりではなくだ。
今度は雪斎が来てだ。信長に尋ねるのだった。
「一つ宜しいでしょうか」
「ふむ。何じゃ」
「家臣の方々とのことですが」
そのことについてだ。彼は信長に尋ねずにはいられなかったのだ。
そして今実際にだ。彼にその話を聞こうとしているのだった。
「どうも身近ですな」
「そう思うか」
「違うと申されるのでしょうか」
「いや、違わん」
その通りだと答える信長だった。
「まさにその通りじゃ」
「垣根といいますか」

今度はこう話す雪斎だった。
「それがありませんな」
「誰でもわしに言えるからのう」
「左様、それを許されておられるのですな」
「どんな話でも聞きたい」
そうだと話す信長だった。
「それがよいものならじゃ」
「取り入れそのうえで」
「使う。そうする」
「成程。そうなのですか」
「その通りじゃ。どんな者でも喋らせてじゃ」
そこからだ。信長ははじめているのだ。
「よい意見があればじゃ」
「それを入れて」
「役に立たさせてもらう。戦でも政でもじゃ」
「そのどちらでも」
「ではじゃ」
そうした話をしてだった。信長はだ。

第五十一話　堅物のことその七

雪斎にだ。こう問うのだった。
「このやり方は問題があるか」
「問題ですか」
「うむ。何か厄介なことはあるか？あると思うなら申してみよ」
「さしあたってはないかと」
雪斎は信長のその顔を見て答えた。
「むしろです」
「よいというのじゃな」
「はい。そうしたやり方があるとは思いませんでした」
信長にこうも言う。
「今川では。拙僧が義元様に申し上げることが多かったです」
「御主をそこまで頼りにしておったのじゃな」
「それは有り難かったです。ですが」
「言うのは御主だけだったな」
「他の者も言っていましたが」
やはり雪斎の言葉が大きかった。それは紛れもない事実だった。
そのことを振り返りだ。それで信長に話すのである。
「織田家程はです」
「誰にでも得手があり不得手がある」
信長はこのこともよくわかっていた。人というものがだ。
「そしてどんな者でも時としてじゃ」
「いいことを言うと」
「そういうものじゃ。わしはそれを聞く為にじゃ」
誰にも話させるというのだ。家臣達に。
実際にだ。彼の名前も出した。
「ほれ、才蔵じゃが」
「可児殿ですか」

「そうじゃ。あの者は政は全くできん」
そもそも可児は政には興味がないのだ。この辺りは慶次と同じだ。
「そして戦でも兵を率いることはせぬ」
「あくまで槍で戦われ」
「そうした者じゃ。武辺者じゃ」
「しかしその可児殿が時には」
「政でも戦でもよいことを言う時があるのじゃ。例えば」
さらに具体的にだ。信長は話していく。
「橋をかけるべきだとかな。ひょんな感じでじゃ」
「言われると」
「そしてそれを入れる」
政の案としてだ。そうするというのだ。
「そうしておるのじゃよ」
「ふうむ。そうなのですか」
「これがわしのやり方じゃ」
信長は今度は笑っていた。
「よいか悪いかは別にしてじゃ」
「では。拙僧がです」
「無論何でも話せ」
信長はその笑みのまま雪斎に告げる。
「面白い話ならどんどん入れるぞ」
「面白いですか」
「そうじゃ。面白ければじゃ」
そうするというのがだ。信長の言葉だ。そして実際にだ。
雪斎や今川の家臣だった者達が言ってもだ。彼はだ。
見るべきものがあれば入れる。それを見てだ。
今川にいた者達はだ。驚きと共に言うのであった。
「いや、信長様はどうも」
「ああしたことを為されるとは」
「破天荒ですがしかし」

「かなり凄いですな」
「よいやり方です」
「全くです」
「左様でござるな」
ここで一人の顔の細長い男がいった。今川の重臣の一人だった朝比奈泰朝だ。
その彼がだ。こう言うのだった。

第五十一話　堅物のことその八

「信長様はかなりの」
「はい、それこそです」
「確かにすぐにかっとなるところがありますが」
「それでも屈託がなく我等の話でもすぐに入れられます」
「譜代も外様も隔てなく」
「力があれば入れて下さいますな」
「思った以上の方ですな」
朝比奈は手放しなまでに話す。
「しかも面白い方です」
「そうそう、一見して突拍子もないですが」
「その中にはです」
「確かなものがあります」
「では」
大事を為せる。そう言うのだ。
彼等もそのことを見ていた。信長の器をだ。
その彼等は今茶を飲んでいる。その茶についてもだった。
「あれで茶器を見られますし」
「茶器を御覧になられるのも確かです」
「他の絵や書もまた」
「そうしたことにも造詣が深いですし」
最初は誰もが想像しないことだ。何しろ信長といえばうつけだったからだ。今そう見ている者は天下に殆んどいなくなってはいるがだ。
「美を見る素養もありますか」
「明や本朝の古典にも明るいですし」
「一体何時ああしたことを備えられたのか」
「実に不思議な方です」

彼等にとってはそのことも不思議だった。信長はいつも馬に乗り泳いでいる。政も執っている。それでどうして学ぶ時があるかというのだ。

だが信長にとってみればだ。それは。

今実際にだ。書を読んでいた。その書は。

「韓非子ですな」

「うむ、そうじゃ」

それをだ。読みながらだ。

村井に対してだ。こう言うのだった。

「何度も読んでおるがじゃ」

「その都度ですね」

「学ぶべきところが多いのう」

「韓非子は苛烈なところがありますが」

「苛烈に過ぎるところはどける」

「つまり全てをそのまま取り入れぬと」

「書を完全に鵜呑みにして盲信する位ならじゃ」

どうかとだ。信長は言うのだ。

「最初から読まぬ方がよい」

「それは確か」

「孟子じゃったな」

論語も読んでいるのだった。信長は様々な書を読んでいるのだ。

そしてだ。その知識を元にだ。今村井と話しているのだ。

「そこに書いてあったな」

「そうでしたな。では韓非子にしろ」

「その孟子にしてもじゃ」

「どけるべきものはどけますか」

「流石にわしもじゃ」

信長はだ。どうかというのだ。そのどうかということとは。

「わしが病になったとする」

「はい。その時は」

「わしの快癒を願い民が祈ったとする」
「その時はですな」
「罰として鎧を出せとは言わぬ」
韓非子に実際に書かれていることだ。秦王がそうさせたのだ。
何故そうさせたかというとだ。民がその仕事を怠ったことを罰するのとだ。王が己が情にほだされないようにする為のだ。幾つかの理由があった。
それでだ。そうしたのだ。しかし信長はというと。
「わしはその場合は素直に喜ぶ」
「そうされますな」
「あれはわしから見ればあまりにも訳がわからん」
信長はその韓非子を見ながら話す。とはいっても今そこを読んではいない。
しかしだ。ここであえて言うのだった。
「確かに情に溺れるのは政としてよくはないが民の仕事をそれ程怠った訳ではあるまい」
「そうですな。やはり」
「それでそこまでするのはじゃ」
どうかとだ。信長はまた言った。

第五十一話　堅物のことその九

「わしはわからぬ。わからぬことはせぬ」
「その他の書についてもですな」
「そうじゃ。まあ他にも色々な書を読んでおるがのう」
「そういえばこの前は」
「老子を読んだ」
所謂老荘思想だ。それも読んだというのだ。
「あれも中々面白かった。自然じゃな」
「自然ですな」
「孫子があるが」
今度は兵法書の話になる。信長は当然ながらこの書も読んでいる。
それでだった。信長の言うことは。
「あの書は老子の影響を受けておるな」
「実はそれがしも」
ここで言う村井だった。
「老子は読んだことがあります」
「そして孫子もじゃな」
「はい。どちらも」
あると答える彼だった。
「そのうえで、ですが」
「似ておるな」
「そう思います」
「兵法は自然にか」
「その時と場合に応じて変えていってですな」
「やはりそれがよいな」
信長は言った。
「型にはめたやり方では限度がある」
「ではこれからは」

「うむ、わしの戦は一つではない」
ではだ。どうかというと。
「その都度変えていくぞ。しかし基礎としてじゃ」
「その土台となるのは」
「数じゃ」
まずはそれだった。兵の数だというのだ。
「それに飯や具足、刀に槍もじゃ」
「質のよいものを充分に揃え」
「そうして戦っていく。戦は数に飯じゃ」
その二つこそが大事だというのだ。
「そうしたことが万全ならばじゃ」
「どういった戦にも勝てますか」
「こちらが油断せぬ限りはな」
この辺りは桶狭間のことを念頭に置いていた。勝った彼にとってももあの戦ははだ。非常に学ぶべきことの多い戦だったのだ。
「勝てるのじゃ」
「では尾張兵でも」
「尾張の者は確かに弱い」
その弱さは天下に知られている。尚尾張だけでなく上方や安芸、それに駿河や相模といった辺りの兵達もお世辞にも強いとは言われていない。
「しかし数さえあればじゃ」
「勝てますな」
「それに今は兵と百姓を分けておる」
それはかなり早い段階から進めている。そして今は。
「完全に兵の者達が三万五千じゃな」
「はい。今は」
「この三万五千は何時でも戦ができる」
そのことがだ。どうかというのだ。
「そう、田の刈り入れの時でもじゃ」

「ではその時を狙い」
「それも考えておる」
話す信長のその目が光った。そのうえでの言葉だった。
「攻めるには格好の時じゃからな」
「では。今度の美濃攻めは」
「その時じゃ」
まさにだ。その田の刈り入れ時にだというのだ。
「攻めるぞ。よいな」
「はっ、それでは」
「とはいっても。一気に稲葉山には無理じゃな」
信長はこうも言ったのだった。
「流石にな」
「あの城まですぐにはですな」
「うむ。まずはあの城を攻める足掛かりを築く」
言いながらだ。信長は頭の中で尾張と美濃の地図を描いていた。
そこに彼が今いる清洲の城もあれば斉藤の稲葉山の城もある。そしてその間のだ。

第五十一話　堅物のことその十

ある場所を頭の中に見てだ。村井に話した。
「墨俣じゃな」
「その地ですか」
「あそこがよいかもな」
「うむ、あの場所まで進めたい」
まずはだ。そこだというのだ。
「そしてそのうえでじゃ」
「墨俣に足がかりを築き」
「稲葉山を攻めるとしよう」
「ふむ。しかしです」
それはだ。ないというのだ。
「なければ築くまでじゃ」
「そうされますか」
「そうする。ではじゃ」
ここでだ。また村井に話した。
「まずは攻める用意を進めておこう」
「もうですか」
「話は早いに限る。それで龍興じゃが」
そのだ。斉藤の主だ。彼がどうかというと。
「まだ若いというのに酒色に溺れているそうじゃな」
「どうやらその様で」
村井もだ。その通りだと答える。その龍興については。
「常に女をはべらし酒を飲み」
「それでは政もままならぬな」

「しかも家臣達を侮り」
悪い話がさらに続く。
「その忠誠も揺らいでいるとか」
「ふむ。では攻めやすいな」
「ですな。それでは家臣達に対しても」
「調略を進める」
それもするというのだ。
「何時でも攻められる様にな」
「そうしてですな」
「進めていく。よいな」
「はい、それでは」
こうした話をだ。村井にしたのだった。そうしてだった。
信長は家康を待ちながら既に斉藤を攻める用意をしていた。そしてそれは着々と進んでいた。彼は今は静かに動いていたのだ。
そんな彼を見てだ。
相模の北条氏康は小田原においてだ。こんなことを言った。
「尾張の蛟がまた大きくなるわ」
「織田信長がですか」
「さらにですか」
「そうじゃ。今度は美濃じゃ」
その国をだと。どうかというのだ。
「手に入れるであろうな」
「ううむ、うつけと思っていたのに」
「忽ちのうちに尾張を手中にし」
「今川殿を破り」
「返す刀で伊勢と志摩を手に入れてですか」
それだけではなかった。信長の動きは。
「そして次は美濃」
「止まるところを知りませんな」
「まさに天に昇っておるわ」

氏康は蛟がどうしたものかということから話す。蛟は龍になるものだ。水の底から出てそうして昇ってだ。そうなるものなのだ。

そしてだ。信長はそれだというのである。

「一気にな」

「これでは武田殿や上杉と同じですな」

「天下でも屈指の大名になりますか」

「美濃も手に入れ」

「そしてじゃ」

さらにだと。氏康は家臣達に話す。

「都も近畿も手中に収めるであろう」

「では天下随一の家になる」

「そうなりますか」

「なるな。間違いなく」

氏康は遠い相模からそのことをもう見ていた。

第五十一話　堅物のことその十一

「織田信長。恐ろしい男よ」
「しかしその尾張の蛟龍といえどもです」
「我が家は倒せませんな」
「それだけはできませぬ」
彼等が確信を持って言える根拠、それはというと。
「この小田原城は陥せるものではありませぬ」
「幾ら攻められてもです」
「陥とせる城ではありませぬ」
「誰が来ようとも」
「その通りじゃ。この小田原城はまさに難攻不落」
主の氏康もだ。このことを確信していた。
「誰にも攻め落とせるものではない」
「そして領内に置いている城達」
「これだけの護りがありますから」
「例えどれだけの大軍が来ようともです」
「この小田原城だけはです」
陥ちぬ、そうだとういうのだ。
「それでどうして織田が我等に勝てましょう」
「この小田原城は天下一の城です」
その自負がだ。確かにあった。
「誰が何をしようとも。どうした神であろうとも」
「御仏であろうとも」
この場合は明王のことだ。憤怒の顔で仏敵を調伏する者達だ。
「この小田原は無理です」
「織田信長がどれだけ強くとも」
「できるものではありませんな」
「その通りじゃ」

また答える氏康だった。
「この小田原城がある限りわしは誰にも負けぬ。それにじゃ」
「それに」
「それにといいますと」
「わしもおる」
城だけでなくだ。彼もいるとだ。
氏康はその目の光を強くさせて述べた。
「このわしもじゃ。相模の獅子がのう」
「そして我等も」
「いますな」
「わしと北条二十八将がおる」
北条はこれだけだ。武田や上杉よりも多い。
「それで何故負けようか」
「ですな。何があろうとも」
「我等は敗れませぬ」
「決して」
「もっともここまで来られればの話じゃ」
氏康は言葉を一旦狭めてみせた。
「この小田原までな」
「それまでに武田殿とあの上杉がいる」
「左様ですな」
「それでは」
「その二つを破ってもじゃ」
そのだ武田と上杉をだ。
「わしを破ることは適わぬわ」
「そして小田原も」
「この城もまた」
「わしは決して敵に背は向けぬ」
絶対にだった。それは。
「傷は何じゃ」

「はい、向こう傷ばかりです」
「そうです」
そうだとだ。話す彼等だった。
「殿は全て向こう傷です」
「その受けられている傷は」
「それはあの男に対しても同じ」
そのだ。織田信長とだというのだ。
「わしのところに来れば相手をしてやろう」
「はい、それでは」
「その時は」
「そうする。さて」
ここまで話してだった。氏康は。

第五十一話　堅物のことその十二

家臣達にだ。こう命じた。
「ではじゃ。これからじゃが」
「はい、今ですな」
「下総にですな」
「兵を進める。里見を倒す」
北条の宿敵の一つのだ。その家をだというのだ。
「そして関東を完全に手中に収めるぞ」
「ではその様に」
「そうしましょう」
それが彼等が今目指していることだった。彼等はあくまで関東を見ているのだった。
しかし信長はだ。その尾張においてだ。
家臣達にだ。その北条の話をしていた。
「どうも北条はじゃ」
「あの相模のですか」
「小田原にいるですな」
「あの家のことですか」
「そうじゃ。あの家は天下を目指してはおらんな」
北条のそのことをだ。看破しているのだった。
「関東を手中に収めることを考えておる」
「しかし天下はですか」
「天下は目指してはいない」
「そうなのですか」
「それは毛利と同じじゃな」
ここでこの家の名前も出す信長だった。
「毛利元就は中国は手中に収めてもじゃ」
「天下は目指してはいませんな」

「そのことを常に公言していますね」
「そうだと」
「そうじゃ。同じじゃ」
北条はだ。そうした意味で毛利と同じだというのだ。
こう話してだった。さらにだった。
「わしと見ているものは違うな」
「殿とはですか」
「天下を目指す殿とはですか」
「そこが」
「うむ、違う」
また言う彼だった。
「わしと同じなのは武田に」
「あの家ですな」
「まずは」
「そして伊達じゃ」
この家の名前も出したのだった。
「伊達政宗じゃが」
「伊達政宗ですか」
「名前は聞いていますが」
「確か奥州のですな」
「独眼龍と言われていますな」
「ふむ。皆知ってるな」
そのことを確めてだ。まずはよしとする信長だった。
そのうえでだ。こうも言う彼だった。
「ここで知らぬと言えばじゃ」
「その時はですか」
「我等はどうなっていたでしょうか」
「それすら知らぬ様な者は最初から使わぬ」
そこまでの資質はあるとだ。信長は既に見抜いているのだった。
そのうえでだった。用いているというのだ。

このことをだ。ここで話してだった。
信長はその政宗のことも話した。
「あの男の野心は信玄以上じゃ」
「あの甲斐の虎の」
「それ以上ですか」
「野心に満ちておる。あの地から天下を狙っておる」
信長は鋭い顔になって話す。
「そのうえで戦っておるわ」
「しかし。奥州からですか」
「天下をですか」
「それはかなりです」
「無理があるのでは」
「そう思いますが」
このことについてはだ。誰もがだった。

第五十一話　堅物のことその十三

いぶかしむ顔になりだ。こう言うのだった。
「都からあまりにも離れております」
「それではです」
「やはり無理では」
「そう思いますが」
「確かに難しい」
このことはだ。信長もだった。
こう言う。しかしそれと共にだった。
「だが。あの者にそれなりの資質があればじゃ」
「天下を狙える」
「奥州からでもですか」
「あの男は今暴れだそうとしておるわ」
政宗の今はだ。そうだというのだ。
「そして奥州を手中に収めたならばじゃ」
「関東、東海、そしてですな」
「都にまで」
「一気に来る」
まさにだ。そうしてくるというのだ。
「奥州を手に入れ力をつけたならじゃ」
「ううむ、左様ですか」
「一気にですか」
「都まで」
「それを狙っておる」
信長は政宗の野心をだ。ここまで把握していた。
しかしだった。ここでこんなことも言ったのだった。
「しかし関東には北条がおるな」
「それに上杉もですね」

「武田も」
「進むのは容易ではない」
こう言うのだった。
「大きな勢力は伊達だけではないからのう」
「では伊達が例え今の時点で奥州を手中に収めてもですか」
「それでも彼等を倒さぬ限りは」
「上洛はできませぬか」
「伊達は」
「うむ、それにじゃ」
ここでだ。さらに言う信長だった。
「わしがおる」
「殿がですか」
「伊達にはですか」
「伊達がどう頑張ってもわしがおる」
だからだとだ。不敵に笑って言う信長だった。
「それでどうして天下を取れようか。伊達はじゃ」
「その伊達は」
「どうだというのでしょうか」
「武田も上杉も北条も毛利もじゃが」
その四つの家と同じくだというのだ。
「わしの軍門に下ることになるわ」
「では殿は伊達をですか」
「そして他の家もですか」
「全て」
「そうじゃ。全てわしの家臣とする」
信長は天下と共にだ。大きな野心を見せた。
人も集める、彼は堂々と言ったのである。
「天下を治める人材となってもらう」
「我等と同じくですか」
「そうされますか」

「武田や上杉も」
「そして伊達も」
「虎が虎でおる、龍が龍でおる」
信玄、そして謙信のことであるのは言うまでもなかった。彼等が言われている神獣だ。その神獣達がどうかというのである。今は。

第五十一話　堅物のことその十四

「それはそれでよい。しかしじゃ」
「その虎も龍もですな」
「殿は」
「その手中に収めてくれよう。そして天下をじゃ」
「治められる」
「そうされますか」
「虎や龍の力は戦の為だけにあるのではない」
ここでもだ。戦以外のものも見て言う信長だった。
「天下を治める為にもあるのじゃ」
「その力で、ですな」
「天下を」
「左様じゃ。その為にある」
信長はまた言う。
「天下を手中に収めるよりもその天下を治める方が難しい」
「それがですね」
「さらにですね」
「難しいと」
「そうじゃ。だからこそ御主達にしても」
そのだ。今の家臣達もだというのだ。
「天下を手中に収めて終わりではないぞ」
「はい、それからもですね」
「やるべきことはある」
「そうですな」
「存分に働いてもらう」
このことはまさに念押しであった。
「それはわかっておろう」
「はい、それは」

「既に」
「わしは一度用いた者は決して放り捨てたりはせぬ」
それ位なら最初から用いないのが信長の考えだ。だが、だった。
それと共にだ。信長はこうした考えも併せ持っているのである。
「しかし最後まで働いてもらう」
「死ぬまでですな」
「最後とは」
「そうじゃ。まあ隠居したくなればそれでよい」
それは許すというのだ。
「わしもそこまでは言わぬ。しかしじゃ」
「はい、さすればです」
「我等死ぬまで殿と共に」
「働かせてもらいます」
「頼むぞ。ではさしあたってはじゃ」
早速だ。信長は人遣いの荒い風に見せてきた。
「三河じゃ。間も無く竹千代が来るぞ」
「そうですな。徳川殿が来られます」
「して。この清洲においてて」
「盟約を」
「我等は青でいく」
そのだ。織田の色だ。
「よいな。全てを青でいくぞ」
「はい、織田の色で迎えましょうぞ」
「徳川殿を」
彼等は意気もよく盟約の場を整えに入るのだった。家康との再会の時は確実に近付いていたのだった。

第五十一話　　完

2011・7・28

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3944o/

戦国異伝

2011年11月19日03時11分発行